

---

# 来る世界（とこ）間違えてね？

元・配達人

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

来る世界間<sup>と</sup>違えてね？

### 【Nコード】

N3640K

### 【作者名】

元・配達人

### 【あらすじ】

例によって天使のミスで死んでしまった主人公 鬼島 政成  
そしてテンプレ通りに転生？することにしかし向かった世界は・・・

この話しは

ハーレム

ご都合主義

原作うる覚え

オリ主

チート？になるのかな？

などの最低要素で出来ていますその上に更新はかなり不定期で遅くなると思われれますそれでも見てやるか？と思った優しいお方どうか胃薬的な物を片手に御覧下さい。

それが無理という方は戻るをした方がよろしいかと思えます。

あつ後多分コメディーに・・・なつたらいいなあとか思っています。

ご意見やご感想などもあればヨロシク願います、それでは

## プロローグっぽい感じ！（前書き）

前書き

やってしまった・・・なんて事を・・・

あっ！どうも書いてる人です！

この話しはかなりのネタです、しかも書いてる人は原作がかなりうる覚えだったりします

更に1人称の練習だったりもします、

更に更にならご都合だったりハーレムだったり

ボクの考えた（以下略）だったりします

それでもよろしければ見てやって下さい

アッ！石投げないで！

プロローグっぽい感じ！

疲れてるんだよ俺、きつとそうさ！だってアレだもんなあ寝る前にジジイと派手にケンカしたもんなあだからこんな夢みてんだようん！

あっ！俺？俺の名前は、鬼島 政成ってんだ、ん？どんな夢を見てるか？

それは・・・

「スンマセンでしたアアア！！」

うんなんか背中から羽をはやした女性まあ一人は女性っていうか少女？いや幼じ「それは失礼だと思っ德斯！！」黙れ！んっん失礼、そんな感じの奴らに土下座されてんだわ

考えても見てみ？いくら夢ってったつてさあ羽生やした女

「せめて女性といいましよっそこは！」

煩い黙れ！と幼じ

「だからそれはヒドイと思っ德斯！」

だから黙れ夢なんだから少しは思い通りになれオマエら！

んっん、に土下座されてるとかってどんな夢なんだっつう話しだよな？

いやまあ夢なんだから目茶苦茶なのは当たり前前なんだけどさ！

けど・・・ないわアコレはないわア、いくら夢だから

「あの・・・スイマセン夢じゃないんです本当に」

ええい黙れ！いくら夢とはいえ、さつきから人の思考を読むな！

「だから夢じゃないんです！とにかく話しを聞いて下さい！」

ちっ！しゃあない話してなんぞ？羽女（大）

「羽女！！しかも（大）！？」

「それじゃあワタシは（小）なのデスかね？」

いんやオマエは（幼）だろ？

「それはヒドイと思うデス！」

いや幼女じゃんオマエ、どうひいき目にみても幼女じゃん？まじっことなき幼女じゃん？

「3連打！！ひどいデスう！こう見えても来年には初等科を卒業するデスよお」

ハイハイ寝言は寝てから言いましょうね〜夢だけど、っとで羽女（大）話してなんぞ？

「ううこの人かなり毒舌デス〜もうワタシの心はボロボロ、デス〜」

いいからホラ（大）はよ話しせんね

「もはや（大）のみ！！私は羽女（大）なんていう名前ではありません！エレナです」

エレナねえ、んでソツチは

「グスツグスツ幼女じゃないデス、子供じゃないデスう」

ヤベツ！めっちゃ泣いてる！ああ悪かった悪かった！

俺はグスグスと泣いてる羽女（幼）の頭をグシャグシャと撫でてなんとか泣きやまそうとする

それが好をそうしたのか羽女（幼）は今だ涙目ながらもなんとか泣きやみ

「幼女じゃないデスカ？子供じゃないデスカ？ワタシ大人デスカ？」

「悪い！それは無理だわ

「ウエ〜ン！ヤツパリひどいデス〜！」

あつ！ヤベツ！ああそくだ少女！なら少女でどうだ？ホラコレなら大丈夫だろ？

「ううそれで妥協するデス〜」

妥協したのはコツチだわ！なんとか落ち着いた羽女（幼改め少）に一息つく

「そろそろ話しをしても宜しいですか？」

あっ！エレナん事、忘れてたわ！悪い悪いで話してなんぞ？

「えつとですね・・・非常に申し訳ないんですけど・・・あなた・・・死にました」

へえ〜・・・ん？今コイツ何だった？俺が死んだとか言わなかったか？オイオイ夢にしてもアレだぞオイ

「いえ残念ながら夢ではありません、あなたは死んでしまいました」

オイオイ、ジヨニー「エレナです！」ンっん、冗談きついで、こっつ見えても俺はアレだぞ？体の頑丈さと身体能力に関しては

完全に常識ブチやぶって人外どころの騒ぎじゃないんだぞ？

具体的にはアレだぞ車に引かれるどころかジェット機に跳ねられてもピンピンしてるくらいに超合金なんだぞオイ

そう簡単には死なんぞ？というか死ねんぞマジで！

「それは知っています、ですがあなたは死んでしまったんです、本当にスイマセンでしたコチラのミスです・・・ホラ、アイナあなたも謝りなさい！！」

「ううごめんなさいデスう」

そう言って深々と頭を下げる、エレナとアイナ、なんかかなりマジの空気だ



マジか？マジにマジか？

「ハイ・・・スイマセンでした」

マジかい！享年16！で死因は！なんで死んだんだ俺！さっきも言ったがちよつとやそつとじゃ死なんぞ俺！「全部ワタシが悪いんです」

ホウ？オマエが原因か？で何をしたコラ！と言いながら俺はアイナの頭をガシリと掴み持ち上げる

「痛いデスゝ痛いデスゝ割れちゃう割れちゃいますデス！！」

煩いキリキリ吐かんかい！

「言いますデス！言いますデスから離して下さいデスゝ！！」

ちっ！しゃあない、ホレ！キリキリ吐け何をした？

俺はしかたなしにアイナの頭を離してやる

「うきゅゝゝ」

ん？強く掴みすぎたか？目を回してやがるしかたないならばもう一度！

「わわ！私から話しますから！落ち着いて下さい！」

ちっ！惜しい！でこのアイナは何しでかしたんだエレナ？

「・・・実は、アイナは天使の卵でして、今日は人間の寿命に関しての授業でした」

なぬ？天使？道理で羽が生えてると・・・趣味じゃなかったんだな、つか授業ってなんだ学校みたいなんがあるのか？

「ええ大体そのようなものですね、それで今日はその授業の一環として人間の寿命が保管されている場所に見学に・・・」

は？ちょい待ち！なんだ寿命が保管されてる場所って！アレかよ  
くあるロウソクがみたいんがあるのか！！

「そうです！まさに今あなたが言ったようにロウソクがあります！  
解るなんて凄いですね」

「冗談半分に言った事が当たっちゃまったぞオイ！つかなんじゃそら  
！そんなもんギャグの世界だぞオイ

「しかたないじゃないですか！昔からこうなんですから！」

まっ・・・まあいい、で続きは？

「ソツうん・・・それですね私とアイナはあなたのロウソクがある  
保管室に入ったんですけど・・・あつちなみに生徒一人につき先  
生は一人なんですよ！最近では天使になるうって子が少なくてイヤな  
世の中ですよねえ？」

へえ・・・ってどうでもいいわアアア！

なんか関係ない情報を持ち出してきたエレナにイラツときたので

アイナと同様にガシリと頭を掴む

「スツスススイマセン！つい話しが！続き話します話しますから手を！」

ちっ！しゃあない！

俺が手を離すとエレナはホツとした感じで息を吐き続きを話しました

「えつと・・・どこまで話しました『ガシ』あああ思いだしました！思い出しました！『パツ』それであなたのロウソクがある保管室に入ったんですけど・・・」

アイナ視点

ふえ〜！ココが人の寿命がある保管室なん德斯ねえ、凄い德斯〜

あつこのロウソクの人凄い！なんか一人だけ凄く大きい德斯〜、  
ふんふん キジマ・マサナリ さん德斯かあ

ワタシは思わずそのロウソクの前で立ち止まってそのロウソクの人の名前を確認していた德斯

「ん？アイナ？どうしました？」

そんなワタシにエレナ先生がどうしたのかと声をかけてきた德斯

「エレナ先生〜なんでこの人のロウソクだけこんなに大きい德斯かあ？」

ワタシは疑問に思った事をエレナ先生に聞いてみたデス、そして  
らエレナ先生は

「ああそれはですね、その人の生命力や能力が並外れて強いからで  
す、ホラよく見て見ると他の人口ウソクの大きさも一つ一つ違っ  
てしょう?」

と答えてくれたデス、ワタシはエレナ先生が言ったみたいに他の  
人の口ウソクを見て見ました、そして先生が言っていた見たいに  
一つ一つ違ったデス

けどヤツパリこの人のだけ別格に大きいデス

「それにしても・・・こんなに大きい口ウソクなんて私も初めて見  
ました、気になりますね、キジマ・マサナリさんですか・・・少し  
調べて見ましよう」

エレナ先生はそういうと資料と小さいテレビを出して何やら調べ  
始めてしまいましたデス

「ふう、それにしてもココは熱いデス、喉が渴いてしまったデスね」

ワタシはそう独り言を言いちらつとエレナ先生のほうを見たデス

「このクソジジイイイ!!」

「黙らっしやいこのバカ孫がアアア!!」

「わっ!わっ!凄い!アクション映画もビックリな戦い!」

なんかエレナ先生は楽しそうにテレビに夢中になってるデス

なんか更に部屋の温度が上がった気がしたデス、もう駄目デス！  
我慢できないデス！

ワタシはそう考えると同時にアル飲み物を取り出してフタを開けたデス

けどワタシの手は部屋の熱さで汗をかいてしまっていたデス

だから・・・

『ツルツ！』

ああ！手が滑ったデス〜！

『バシヤア！ジユ〜！』

「アアアっ！」

「ふう〜凄い戦いでした〜、ん？どうしたんですかアイナ急に大声をだし・・・」

「アアアアア！！！！」

ワタシが手を滑らした飲み物がロウソクの火を消してしまったデス、そして消えたロウソクの名前は・・・

俺の名前だったと・・・

「はい私が目を離れたすきに本当にスイマセンでした！」

「ごめんなさいデス〜！」

そう言って再び深々と頭を下げるエレナとアイナに俺は

「ふっふっふっ・・・ふざけんなアアア！バカかオマエ！つかバカだろオマエ！アレだぞ？普通そんな場所で飲み物と飲もうとするか！ありえないだろゴラアアア！」

キレたね！いやさキレざるえなかったね！だってアレだろ？普通に考えてホラ・・・アレだろ！？なあ解るだろ？ん？何げに俺ある意味初台詞？

イヤイヤ今はそれはいいとにかくこのチビツ子に制裁を加えねば、と俺は再びアイナの頭をガシリと掴む、今度は頭蓋骨を変形させてやる！

「痛いデス〜！痛いデス〜」

何やらアイナが喚いているが知った事か

「このチビツ子！オマエの頭はカラか？帽子を乗せる台なのかゴラアアア？」

ギリギリと力を強めていく、横ではエレナがオロオロと止めようとしているが、そう簡単に止まると思っなよ！

「だって・・・だってエエ！」

アイナはアイナで何やら必死に言い訳をしようとしている

「なんだ？言ってみろい？」

とりあえずは聞いてやるか！オマエの頭をナスビみたいにするのはそれからだ

「だって……だって……ワタシ……ワタシ……凄く……凄く……」

アン？

「ミ○ミ○が飲みたかったんデスもん！！」

「な……ん……だと……」

その一言に俺の力が一気に抜けるのを感じその手を離す

横ではエレナがアイナに向かって

「アイナ……あなたの頭がたとえナスビみたいであっても私はあなたの先生ですからね……」

と涙を流しながら言っ「ていやがる

「ええエレナ先生え！だってミ○ミ○、デスよ！乳酸菌デスよお！」

アイナはアイナでエレナに向かって必死でミ○ミ○の良さを語っ「ていやがる

くっ！コッコイツ・・・コイツ！！

そんなアイナに俺は再び手を伸ばす

「ヒウー！！」

ビクリとしているアイナとある意味冥福をいのる気持ちなのだろうエレナ

しかし俺の手が掴んだのは

「ふえ？へっ？へっ？」

アイナの頭ではなくて手だ！

「オイ！チビツ子！いや・・・アイナ！オマエわかってんじゃねえか！」

そう言っただ俺はアイナの手を力強く、されど優しさも込めてグッと握る

「えっえっ・・・まさか・・・まさかあなたも！」

アイナはそんな俺に対して昔からの友を見つけた見たいな顔を向けてきた、なんだこうして見るとコイツ可愛いじゃねえか！

「ああ！朝、昼、晩の3ミミミは当たり前！つねにカバンと心の中にはミミミミミだぜ！」

俺の言葉にアイナは更に目を見開く！ちいなんだよ可愛いじゃね



えか！つたく！

「ああさつきは悪かったな！痛かったろ？」

そんなアイナの可愛さに俺は先程の仕打ちを思いかえし労るように頭を撫でてやる

「うにゃ〜大丈夫デスう！悪いのはワタシ、デスから〜」

アイナは俺に撫でられながらも悪かったのは自分だと言ってる、  
つたく何言ってるやがんだ！ミ〇ミ〇の魅力に抗うなんて簡単にできるかよ！

俺はそんな思いを抱きながら更にアイナの頭を優しくなでるアイナはさつきから「うにゃ〜」とネコみたいな声を出している

ふっ可愛い奴め！ん？俺の態度が違い過ぎるって？

何言ってるやがる、ミ〇ミ〇好きに悪い奴はいねえんだよ！大体ジジイとケンカしてた原因も俺が冷やしていたミ〇ミ〇をジジイが勝手に飲みやがったからだしな！

あつ後、俺はロリコンじゃねえよ？多分・・・きつと・・・メイ  
ビー・・・

と俺とアイナがミ〇ミ〇仲間としての絆を深めているとエレナが何か言いたそうにと言つか完全にアレな人を見る目でコチラを見ている

「ん？どうした？つかなんだその頭が残念な人を見る目は？なんぞ

文句でもあるんかい？」

その目にイラツときたのでついどこぞの因縁つける『ヤクマル』みたいな口調になってしまった

「えつと・・・あのいいんですか？というか何故に加害者と仲良くなつて？というかさっきまでとアイナの扱い違いすぎませんか？」

「フツ・・・仕方ないだろうミ〇ミ〇が好き（以下略）だ」

もはや俺はアイナの事は不問にしているがエレナはまたもやアノ目を向けながら

「いやいやいや！えつ？アレ？そんな理由で？おかしくないですか！アレですよあなたの事が事件となってニュースで報道されたら、『加害者 アイナ』 『凶器 ミ〇ミ〇』ですよ！いいんですかそれで！」

なんだろ？少し悲しくなった・・・

「ううごめんなさいデスうコレ最後の一本デスう」

そんな俺の気持ち察してかさっきまでウニヤウニヤ言っていたアイナが今はまたもは悲しくそうな顔で謝りながらミ〇ミ〇を差し出してきた

クツ！イカンイカン！俺ともあろうものが同じミ〇ミ〇仲間になんな顔をさせるとは  
しかも最後の一本だと！！

なんと言う誠意!! やっぱりコイツはいいやつだ!

本音を言えば凄く飲みてえ!

しかし俺も漢だ! コレを受け取るわけにはいかないんだ!

「フツ・・・気にするな! さっ、その一本はアイナがお飲み・・・俺にはその気持ちだけで十分さ!」

俺は涙を堪えてミ〇ミ〇をアイナに返す

「~~~~~!?!」

するとアイナは感動したのか、俺にギュツと抱き着いてきた

フツ可愛いやつめ! あっ! ロリじゃないよ? 妹とか小動物とかに感じる可愛さだから!

多分・・・きつと・・・メイビー・・・

だからまずは telefon から手を離そう

「なんででしょう? この三文芝居・・・というか私の今までの天使生間違っていたんでしょうか? というか通報したほうがいいのでしょうか? 教えて下さい神さまアア!」

なんかエレナが叫んでる、イカン通報される!!

慌ててアイナを引きはがしました

。

「でコレから俺はどうなるんだ？大霊界的な場所に行くのか？」

アレからなんとかエレナを落ち着かせ（後少し指が動いていたらやばかった）コレからどうなるのかと聞いてみる

「いえ・・・本来ならあなたはまだ死ぬ運命ではありませんでした、完全にコチラのミスです、ですのであなたには生き返えてもらいます」

「生き返れるんかい！だったらさっきコチャコチャやんなくてもよかったんじゃない？つうか俺がコッチに来なくてもよくね？」

エレナの言葉に俺が疑問を返すとエレナはクビを横に振り

「いえ・・・実は生き返れるとは言いましたがあなたが今まで生きてきた世界で生き返らす事はできないのです」

なんでWhy？

俺がそんな顔をしているのを察したのかエレナは更に説明を続ける

「スイマセン・・・あなたの世界は魔法や超化学などの技術はありませんでしたよね？そんな世界では死者蘇生などをしてはいけなない決まりになっているんです」

「いや俺のジジイ普通に気が使えるぞ？二段ジャンプとかするし？」

マジである、俺も大概人外だがあのジジイは更にとんでもない

「そつそう言えばあなたとお爺さんが戦ってた時にビームみたいな放ってたような……でも……」

見てたんかい！

ちなみに俺は撃てないよ？

肉弾オンリーです二段ジャンプはできるけどね！！

「で？俺って元のところで生き返えられるのか？」

なんかブツブツ言ってるエレナにそう聞いてみる

「いや……でも……決まりですし……」

なんか迷ってる、まあぶっちゃけ俺はどっちでもいいっちゃいいんだがな！

出来れば元の世界がいいかなって？ぐらいだミ〇ミ〇があるかわからんし

そんな感じでウンウン唸っているエレナとホケーとその様子を見ている俺

そこへ今まで黙っていたアイナが俺に

「別世界で生きて下さいデス！ミ〇ミ〇は私が定期的送るようにしますデスから！」

と俺の説得に入った、結構グラついた

「いやそれは助かるんだけどな、つかなんで俺をそんなに別世界に行かせたいんだよ？」

そんなアイナの言葉に俺がそう言つとアイナは力強い眼差しで

「そうしないとコノ話し（小説）が進まないからデス！！」

と高らかに言い放つた！

グツと来た！

心にいや魂にまでグツと来た！

「わあつた！それならしゃないわな！オイ、エレナ！別世界つてやつで生き返らせてもらつていいぜ！！」

アイナの説得で心が決まった俺はエレナにその事を伝える、アイナは説得が成功したのが嬉しいのか満足気な顔だ

可愛い奴め！撫でてやる！

「アレ？そんな事で納得しちゃうんですか？というか私の葛藤はなんだつたんですか？というか通報したほうがいいんでしょうか？教えて下さい神さまアアア！！」

またエレナが叫んでいやがる

とイカンイカン！通報される！

すぐにアイナを開放した。

「またもやエレナを落ち着かせ（この時に電話が既に繋がっていたので電話を『そーいー！』しといた）話しの続きを聞く」

「えっと・・・あなたを生き返らせる世界についてですが、その世界はあなたの世界というマンガやアニメまたはゲームなどの創作物の世界になります」

「マジか？というかマジか？」

「はい！まあ色々とありますが説明がめんどくさ・・・ゲフンゲフン！都合というものがありますので」

「また考えを読まれた！つうかなんかコイツ適当になってきてないか？やっぱ電話『そーいー！』したのがマズかったか？」

「怒ってませんよ？本当ですよ？」

「また読まれた！まあ今更だけどな！」

「ンっうん！・・・ですすね、まだどの世界に送るかは決めてませんが、場所によっては危険がともなうのであなたに力を与えたいと思います！まあようするにチートですすね！」

「成る程ねえ、アレか？よく二次創作とかであるアレか？」

「あつ！ちなみに俺はそれなりにその道も詳しいぞ！まあそれなりだけ」

けど力ねえ？ふむ

「どうしました？一応大概の事は出来ますよ？」

なんかエレナがそう言ってるけど今更つつつか、なんつつか

「なあ俺って今の時点で十分チートじゃね？つか寧ろバグじゃね？」

と俺は思うわけよ

「つつ！そう言えば・・・でもアレですよ今なら特典で金髪赤目とか銀髪オツドアイとか出来ますよ！！！」

ムカツとききました

「アアン！それはアレか？俺がブツサイクだと言いたいわけかコラ！泣くぞコラ！いい年こいた男が啜り泣くぞコラアアア！」

吠えたね！とりあえず吠えたね！

一応俺としてはそんなに不細工じゃないと思う、ちなみに黒髪で目は赤茶だ！

身長だつて179センチあるんだぞ！

クソウ後1センチが遠い・・・

なんか落ち込んできた・・・

「マサナリさんはかつこいいデスよ？元気だして下さいデス！」



キユンときた

「ありがとな？アイナ〜？オマエは本当に優しいなあ」

思わず、なでなでした、癒される！

「アレ？なんでしよう？私だけ悪者？」

なんかエレナがそんな事を言っているがキサマみたいな失礼なやつは知らん！

アイナを見習えアイナを！

あつ！アイナを撫でてたら一つ思い浮かんだ！

「なあー応思いついたぞ！」

「うう・・・なんでしよう私が悪いんでしょうか？いや確かにさっきのは失礼でしたけどでもたいていの人は喜ぶのに・・・」

聞いちゃいねえし、つうかめっさ落ち込んでるし

しゃあねえな

「アイナ？ちょっと耳を塞いでてな？」

「ふえ？こつデスか？」

俺はアイナに耳を塞いでいるように言つとスウと息を吸い込み

「オウラアアアア！！！」

吠えた！かなりデカイ声でな！隣街まで響くぞマジで！

「ヒヤウ！なつなんですか！今の敵襲？敵襲？」

イカン！錯乱した！というかオマエは何と戦っていたんだエレナよ？

「それで決めた能力つてなんですか？王の財宝？不老不死？あらゆる魔法を使う力？」

あれから少しだけコチャコチャやってたが何とかエレナが落ち着いたので話しを進めエレナがどんな能力にするのかと聞いてきた

「限界突破って出来るか？」

それで俺は先程思い浮かんだ能力が出来るか聞いてみるとエレナは

「限界突破？ですか？というと？」

ふむハテナ顔だな、しゃあない説明するか

「まあアレだ、ほらいくら鍛えてたって強さとか限界あんだろ？それを取っ払えねえかなあと？」

そう俺が考えていたのはコレである、ん？だったら最初から最強にしてもらえだつて？

フツ・・・わかってないただでさえ人外ボディーなんだから更

に鍛えたらどうなるかって思わんか？そうか思わんか・・・

だが俺は思うって事で！最初からバグ気味な俺が言うのもアレだがやっぱ鍛えて強くなりたいじゃん？

フツ・・・これでジジイにも勝てる！

あつ！俺死んでんじゃん！？

「えつと一応出来ますけど・・・いいんですかそれで？不老不死と便利ですよ？」

考え事してたらなんかエレナが本当にそれでいいのかと確認してきた

けど不老不死ねえ？

「いや不老不死とかだったらアレじゃん仲良くなった奴らとかが先に死んだら凹むじゃん？まあそれはまだしも下手したら最期は孤独死だぞ？まあ死なないだろうけど・・・つつわけでせいぜい長生きくらいでいいわ」

まあ人それぞれってやつだな

「はあ・・・それではその能力でいいですね？」

なんか納得してないっぽいなあ？つとそうだ聞いとかないといけない事があったわ

「なあ俺が生き返っても記憶とかは俺のままなんだよな？後、俺の

体って今まだ元の世界か？」

と気になっていた事を聞くとエレナは

「えっ！ハイそれは勿論大丈夫です、後、体の方は一応コチラで保管していますあなたが生き返る時のベースになるので」

なら良し！

「それでは今からあなたに能力を与えます！『パチン！』ハイ終わり」

「はやっ！適当じゃね？」

「チートとは言えかなり楽な部類でしたから・・・それでは私は今からあなたを生き返えらせた上で送る世界の選定をしてきますので少しだけ待っていて下さいアイナはどうします？」

「あっ！ワタシはマサナリさんと待ってるデス！」

とエレナはアイナを残してどこかへと飛びさっていった

しかし待ってる間は暇になる訳で・・・

「なあアイナ？ここで修業しても生き返った時に反映されんのか？」

とりあえずは鍛える事にしようと思う！

「ハイ！大丈夫だと思うデスよ！あっ！修業するんでしたらワタシが場所を提供するデス！」

俺の質問にアイナが答えるとアイナは指を『パチン』と鳴らした  
だっ広い空間を創り出した

流石は見習いとは言え天使だな

「おお！凄えなアイナ！そんじゃあなんか今の俺でもなんとかなる  
くらいのやつとか呼び出したりできるか？」

アイナの頭を撫でつつもう一つ頼みごとをするとアイナは

「大丈夫デスよ！『パチン！』じゃマサナリさん頑張ってくださいデ  
ス！」

もう一度指をならしなんか鉄で出来た巨人を召喚した

うん！デカイ！つか・・・うんデカイ！

「なあアイナ？コレマジで大丈夫か？」

その余りのデカさに思わず聞く俺にアイナは

「大丈夫デス！マサナリさんにはワタシとミ〇ミ〇がついてるデス  
！」

なんとという力強い声援！

これで引いたら漢がすたる！

「かかってこいやアアア！鉄クズがアアア！！！」

と俺の修業が始まったのだった。

「マサさ〜ん！エレナ先生が戻ってきたデスよお！」

「おっ！わあった！」

鍛え始めてからかなりの時間がたったような気がする

その間にアイナと更に仲良くなった俺はマサとあだ名で呼ばす事にした、

ちなみにコノ場所はよくゆう不思議空間で外と中の（以下略）ってやつらしい

後、俺はかなり強くなったと思うぞ

具体的には

頑丈さは某煩惱霊能少年の如く生身で大気圏突破しても余裕だぜ！だし

腕力的には某ノ〇マキ博士ん家のメガネっ子ロボの如く『チタマ』割りができるしな！！

魔砲少女（なのは？）でも、魔法幼女（エヴァ？）でもゴジラでも何でもかかってこんかい！！

フハハハハ！！

うん！やり過ぎた！！限界ってやつぱり必要だったんだね？

「マサさん？どうしたデスか？」

そんな自分にちよっぴり肩を落としていたらアイナが心配そうな顔をしてしまった

イカンイカン！

「大丈夫！気にすんな！エレナん所に戻るうや！」

俺がアイナにそう言うとアイナはコクリと頷き『パチン』と指を鳴らし元の場所まで戻った

「スイマセン遅くなってしまっただあなたを送る世界が決まりました」

外に戻るとエレナが早速そう言うてくる

けどそこに行く前にちよつとやりたい事があるんだよなあ俺

つつわけで

「なあエレナ？その世界に行く前にジジイに会えねえか？」

まあなんやかんや言っても育ててもらった恩もあるしな、挨拶くらいはしとかんとな

「？えつとそれは大丈夫ですよ？あなたのお爺さんの夢の中に入れば・・・ホラ夢枕に立つって言うでしょ？そんな感じで」

おっ！出来るんだな！ヨシヤんじゃ頼むわ

「ハイ解りました！それじゃああなたをお爺さんの夢に送りますね？」

「いってらっしゃいデス、マサさん！」

「おう！チラッとアイサツしてくらあ！」

『パチン』エレナが指を鳴らし体が引つ張られるような感じをうけ俺はジジイの夢の中へと入っていった

ニヤツ！ついでにジジイをブチのめそう！ミ〇ミ〇の怨みはまだ続いているぞジジイ！

と言っ思いを抱きながら・・・

と言っ訳でジジイの夢の中に来た！むっ！ジジイ発見！ニヤリ！

「ウオラアアア！くたばれクソジジイ！！」

鍛えに鍛えあげた人外パワーで強襲した！

「ッー！」

『ズドオオオンー！！』

「ふうむ・・・成る程のう？まさかオマエまでとはのう・・・」

んで今！俺は今の俺の状態？状況？まあそう言った感じの事を説明してる

ん？勝負？どうなったかって？



フツ……負けました……

マジありえねえ！

「ただけブツ飛んでんだこのジジイ！みたいな事を言ったらジジイは

「なんせワシ、転生チートオリ主じゃからな！！」

とか言いやがった！ジジイ言わく

トラックにドーン！！ スンマセンでした チート頂戴 ワシ転生！ オラオラ 今は隠居じゃ！らしい

んで俺が最初からバグ気味だったのも

ムツ？死にそうな赤子があるな（俺は拾われっ子なのだ） 回復アレカ与えすぎた？って事だ

大概にしろと言いたい！

まあそれはいいか？よくはないが

「つつ訳で俺は死んだからじゃあ【逝く】ぞ？」

ジジイに別れのアイサツを言っとジジイは

「フム……ワシにとっては少しばかり早い一人立ちみたいなもんじゃ！【行って】こいバカ孫！」

ッ！このジジイ・・・たまに核心的な事を言いやがんだよなあ

「おう！【行って】くらあ長生きしろよクソジジイ！！」

「死人に言われたくないわいバカ孫め！！」

俺とジジイの頬がチラッと濡れてたのは秘密だ

「ぐすッ・・・ぐすッ・・・おがえりなざいデズう・・・」

「うッ・・・うッ・・・お別れはずみまじだか？」

戻ってきたらアイナとエレナが泣いてた、見ていたらしい、

つつか当事者ならまだしもよくアレで泣けるなと思うが、それはいいとして

「エレナ？そのDVDはなんぞ？」

さっきまで持ってなかったよなエレナ？

「あっ！コレはあなたとお爺さまの戦いを録画してたんですよ！いやあ凄かったですねえ手に汗握りました！」

どうやら格闘？戦闘？ケンカ？（俺的にはコレ）まあどっちでもいいや、の観戦が好きらしい軽くヒクわ！

というか立ち直り早いなオイ！

「マザさん〜ごめんざないデスう」

それに比べてアイナの可愛い事！

「ああ気にすんなって！なっ？」

ナデナデしたね！もはや一流のナデっぷりだね！

あっロリじゃ（以下略）

「それじゃあまずはあなたを生き返せますね！」

軽く一悶着あったがエレナが俺を生き返せてくれるらしい

「おう頼むわ！」

俺がそれに返事をする<sup>と</sup>エレナの雰囲気が一変した、おお！正直  
以外な程にキリツとする

俺が軽くそんな事を考えている間にも俺を生き返せる呪文的なも  
のが進んでいきそれは佳境へと入っていく

「ゴクリ」

その雰囲気<sup>に</sup>俺とアイナは息を飲み込んだそして

「……この者の御霊をあるべき器へと……」

エレナがそう呪文的なものを唱えながら懐に手を入れ

『バサアア』翼をはためかせて空へと舞い上がり

「戻れエエエ!!!」

『カチツ！ボウ！』

なんだろうなんかシヨボイ・・・

「フウ〜終わりました！」

エレナが額を拭いながら降りてきた

「なあ俺ってもう生き返ったのか？つうか『カチ』って音は何だったんだ？」

そんなエレナに俺がそう質問するとエレナは

「ええあなたはもう生き返りましたよ！それと『カチツ』という音はコレです」

どうやら生き返ったらしい、死んだ実感もなかったが生き返った実感までないとは・・・

軽くそう思いながらエレナが手に持つてる物を見てみる

チャツ○マンだった・・・まごう事なきチャツ○マンだった・・・

「オイイイイ！何故に？つうか何でそんなんで生き返れるんだ？呪文の意味わアア!!!」

ツッコまざるえなかつたね！うん！絶叫しながらツッコム俺にエ  
レナは

「これはアレです！あなたのロウソクにもう一度火を点けたからで  
すね！いやあちょっと目を離れた間にあなたのロウソクこんなに大  
きくなってるんですもん驚きました！」

どうやら柱だと思っていたのが俺のロウソクだったらしい！

つつか驚いたのは俺だわアアア！

「まっまあそれはいいとして、で！呪文の意味は！」

「仕様です！」

何故か納得した

「それでは続いてあなたを別世界に送りますね！」

「おっ！！」

．  
．  
とつとつ別世界へと送るらしい．．．かなり長かった気がするが．

「マサさん！ミミミ送りますデスからねえ」

助かる！けどちとばかり淋しいか？

いやいやロリ（以下略）

「それでは行ってらっしゃい『パチン!』『パカ!』」

んっ?

「穴・・・ね・・・まあいいけどね」

っっそういや俺ってどんな世界に行くんだ?

落下する直前に俺がそう考えてるとエレナが、

「あなたが行く世界は【TO LOVEる】です!!」

と教えてくれた、フムフム、TO LOVEるねえTO LOVEるついたらアレだろ宇宙人の王女と純情少年とのラブコメだろ?

ヤベエなあ、あんまし内容覚えてねえよ・・・まっなるようになるだろ?

・・・  
しっかし・・・TO LOVEるねえ・・・TO LOVEる・・・

鍛えた意味無くな?

プロローグっぽい感じ！（後書き）

後書き

長！！プロローグかなり長くなってしまいました・・・

スンマセンです、次回からは多分コレの半分以下になると思われます、多分・・・

完結・・・出来るかなあ？

頑張ります！

## 第一話っぽい感じ！（前書き）

前書き

またまたやってしまった・・・本当にスンマセン！

キャラの口調や設定とか矛盾やらなんやらかんやらがかなり出てきています

ソレでもいいよ！！という方、胃薬的な物を用意して注意しながららどござ



## 第一話っぽい感じ！

エレナ視点

「行きましたね・・・」

私は別世界へと行ったあの人を見送りそう呟く

あの人が要求した能力が少し拍子抜けするような事もあって余り危険がない場所にする事にしたのだけど・・・

チラつとあの人の口ウソクを見る

うん！危険な場所でもよかったかもしれないと思った

後、ひそかにあの人に特典を付けて上げたそれはある意味、主人公の必須スキルともいえる物だ

そう！数ある主人公の伝統芸！！

『ん？風邪か？』

だ！フフ・・・この力を活かして頑張ってくださいね！！

「エレナ先生・・・ソレはどうかと思うデスよ？」

何故かアイナに呆れられてしまいました。

マサ視点

俺ただ今落下中！

ん？地面が見えてきたな？

「よいしょオオオ！つと！」

『ズドオオン！！』

ウム！なんか公園っぽい場所に着地成功つと！さてさてコレからどうしようかね？

というか今気付いたが住む所も金もねえよ俺！ヤベエどうしょ？

「適当に歩き回ってケンカ売ってきた奴から経験値とゴールドでもゲットするか？」

とイカンイカン！なんか思考がバイオレンスだぞ俺！

クツ！生身の体になった事で体がミ〇ミ〇を欲してるのか！

なんか俺がそんな事を考えているとポケットに何かが入ってるの  
に気付いた

「なんだ？手紙？」

【マサさん！別世界に到着したデスか？その世界は確かに【T〇  
LOVEる】の世界デスがアル意味では別世界でもあるデス！だからマサさんが思うように生きるデス！原作がどうかは余り気にしないデスよ？

アイナより

PS・マサさん手紙の入ったポケットと反対のポケットを見る  
デス！！頑張って下さいデス！！】

ほうほう！まあぶつちやけ細かい事は覚えてないから助かるわな！

で反対のポケットと

「ッ！！」

ミ○ミ○が入っていた！！

クツ・・・アイナのやつ！！

生涯の友となる事を誓った！！

俺！回復！！流石はミ○ミ○さっきまで荒んでいた俺の心が落ち  
着きを取り戻す。

しかし実際問題、状況はあんまり変わっていねえんだよなあ

テクテクと歩きながらどうしようか考えていると少し離れた場所  
になんかラ○トセイバー的な剣をもったコスプレ男がいた

よく見るとアホ毛が特徴的な女の子とその手を引いている少年  
もセットでいる・・・

なあんかどっかで見た事があるような・・・

と言う事で少し近付いてみるか？

リト視点

チクシヨー！なんで俺がこんな目に！

今、俺はララの手を引いて必死に逃げてる  
何故かって？

「待てえ！キサマアア！」

「追つてこないでよ！ザスティン！」

なんか変な剣を振り回した奴が追いかけて来てるからだよ！！

というかそもそも原因はコイツなのに！！

そう思いながらチラリと俺が手を引いてる少女ララを見る

なんでも無理矢理結婚されそうになったからって逃げてきたって  
いう宇宙人のお姫様らしい、けど俺にとってはトラブルの種だ

「チクシヨー！なんで俺が〜！！」

とにかく逃げる！ひたすら逃げる！

『ズドオオオン！！』

ん？なんだ今の音？

って、いつの間にか人気のない場所まで来ちゃった！

「フッフッフ・・・やっと追いつきましたぞララ様！さあその小僧から離れて・・・帰りましょう！お父上もわかってくれるはずです」

マズイ！追い付かれた！！

「帰ってよ！私はリトと結婚するんだからアー！！」

ララはザステイン（なんでもララを護衛する親衛隊の隊長らしい）に向かってそんな事を叫びだす

「ッて！ちよつと待て！俺は！！！」

俺には好きな人がいるんだ！そんな事を言われても困る！

俺がそう続けようとしたら

『ブオン！！』

「ヒィ〜〜！！」

いきなりザステインの奴が切りかかってきやがった！

「ララ様をたぶらかしたな！小僧オオ！！」

「ちよつと待て！！！」

ヤバイ！目が血走ってる！というか迷惑被ってるのは俺だ！

「問答無用!!」

ヤバイヤバイ! 聞く耳持つてねえー!

もうダメだあ!

目の前に迫る剣の恐怖に思わず目をつぶる

「ザステインのバカアアア!!」

『ズドオン!』

「グハアー!」

ん? ララが助けてくれたのか? でもそれにしては声が男みたいだったけど・・・

俺が恐る恐る目を開けるとそこには

「ヨオ! 少年? 大丈夫か?」

と見知らぬ、なんか悪ガキをそのまま大きくしたような男が立っていた

「誰?」

俺がそいつにそう聞くとそいつはニカツと笑いながら

「通りすがりの・・・生き返り男だ!! あっ! 語呂わるッ!」

変な奴だと思った俺は悪くない・・・

## マサ視点

ついつい手が出てしまった！正確には足だけどね！

つうか確か、こいつ等ってアレだよな？主人公の確か・・・リトだったか？

とヒロインのララだったよなあ？フルネームは思い出せんが、でさっきのがザステインと、さっきララが言ってたから間違いない・・・はず

でももし違ってたら恥ずいぞ俺！さっきおもくそ名前叫びながら跳び蹴りしちまったし

大体なんだ『生き返り男』って語呂が悪いにも程があんだろ！俺！！

「クツ・・・オマエ・・・何者だ！！」

なんか俺が一人脳内でコチャコチャやってたらザステインのやつが起き上がった

「鬼島 政成・・・通りすがりの・・・生き返り・・・いやコレ語呂悪いし・・・えっと・・・生還者？うんコレで行こう！通りすがりの生還者だ！！」

今度はビシッと自己紹介！！

「いやグダグダだったと思うぞ？」

「アハハ！へくん！！」

訂正、事故紹介だったようだチクシヨウ

「わけのわからん事を！ハッ！！キサマまさかララ様を狙って送りこまれた刺客か！？」

アレ？なんかザステインさん勘違いしてね？というかつツッコミは？

「なあなあアイツっていつもこんな感じなのか？」

俺が隣にいたララにそう聞くとララは

「うんうん！ザステインは心配性すぎるんだよ〜！えっとキジマだっけ？」

「マサナリが名前だぜ？マサでいいぞ！」

「わかったマサって呼ぶね！私はララだよ」

どうやらこうらしいな・・・ついでにララに自己紹介(三回目)  
後、名前を教えてもらった、知ってるけどな！

「ってオイ！鬼島！まえまえ！」

ん？なんかリトが言ってんな、つつか

「いやマサでいっつうの！オマエはリトだよな？」



「わっわかったマサだな！ってなんで俺の名前を！？」

「いやララが言ってたじゃん！デカイ声でリトと結婚するってさ」

まあ知ってたけどね！うる覚えだけど

「そっそうか・・・ってそれ所じゃない！マサ！まえまえ〜！」

アン？だから何だったつうんだよ？つうか寧ろそこは、「志〇後ろ！後ろ〜」だろ！

とかアホな事を考えながら前を見ている

「私を無視するなアア！！」

『ブオン！』

あつ！ザステイン怒っとる！つうかめっさラ〇トセ〇バーもどきを振り下ろしてる

けどなあ・・・

『ガキン！！』

「なっ何！！」

ぶっっちゃけ遅すぎ！こんなだったら爪楊枝を装備したジジイの方が80倍くらい強いぞ？

「おっおい！マサ！おまつ！素手で！！」

ん？なんかリトが驚いてるし、そらそうか？

「バグキャラだからな！カッチカチやぞ！！」

とりあえずザブングルしといた

「わあ〜マサ凄〜い！」

ララは普通にはしゃいでんな？

ちなみに『ガキン』って音は手の平で受け止めた音ね？人体が発する音じゃねえけど

そこはアレだ・・・バグだからな！！

「クッ！」

ザステインは俺に素手でラ〇トセ〇バー

もど、めんどくさいな剣でいいや！剣を止められた事に驚いていたようだが、すぐに距離をとろうとしてるみたいだ

けど残念！させませ〜ん！

「フッ！」

『グシヤ！！』

俺はそのまま手に力をいれ、剣を握り潰した！鍛えた成果は伊達じゃねえぜ！！

鍛える前から多分出来たけどね!!

「なっバカな!!」

おお驚いてる驚いてる!!

んじゃとりあえずは黙らせますかね？

『ヒュッ!』

俺は一瞬でザステインの背後にまわりガシリと腰をホールド!!

「なっ!いつの間にクツ離せ!」

なんかザステインがバタバタ暴れてるが甘い甘い!そのくらいで  
は外れんよ!

喰らえいい!

「カ〇ル・ゴ〇チ!!」

「ぬわぁ!」

『ドゴン!』

「ぐはぁ!」

グッタリしているザステインを見ながら俺は我ながら見事なジャーマンだったと一人頷きつつ

「ありがとうゴ○チ先生!!」

夜空に向かってプロレスの神に敬礼した

「ありがとうマサ〜!ザステインしつこくて困ってたんだあ」

そんな俺に向かって、ララはお礼を言ってくる

おかしい・・・ここはツツコム所のような・・・

「いやつつかやり過ぎだと思っぞ?」

安心した!リトの言葉に安心した!

?

ツツコミいないとアレだからな俺がやってもいいけどさ

そんな事を思いながらも

「さてさてリト君ララ君、何があったんだね?」

ぶっちゃけ大まかな設定?以外曖昧な俺は二人から事情を聞こうとそう尋ねてみた、するとララが事情を話し始めた

「えっとね・・・」

ララの話しによると

結婚しろ（ララ親父） いやー（ララ） 逃亡 リトと遭遇 私  
この人と結婚する  
いけませんララ様<sup>ザステイン</sup> リトと逃亡 現在！！

らしい！ああそついやそつだったなあ？

ん？確かリトって別の奴が好きとかだったような？アレ？別のマ  
ンガだったか？まあいいや！

「んじゃあザステインを起こしてソレを言ったらどうだ？リトも言  
いたい事があるだろ？」

うんうん！平和的なプランだな！さっきジャーマンしておきなが  
ら何だけどさ！！

「ええ〜！起きたらまた絶対、私を連れて帰ろうとするよ！」

俺の提案にララは否定的みたいだな

「リトは？」

とりあえずリトにも聞いてみる

「別にいいけど・・・でもまた斬りかかってきたら・・・」

ふむ、なるほど、リトはまたザステインが襲い掛かってくんのが  
心配だと、でもまあ

「そんな時はアレだ俺がこっくビのあたりを叩きゃっど?」

「ならいいよー!」

「いやダメだろう!」

リト、ナイスツツコミ! ララ、オマエはバイオレンス!!

「軽いジョークだ! せいぜいアイアンクローくらいだな」

俺がリトにそう言つとリトは

「まあそれなら」

と納得してくれた、ララはなんか不満そうだが

まあ実はアイアンクローつっても俺の人外握力なら人の頭なんざ、『パーン!』だけどな!! 加減はするけど

・・・

つづつとで

「んじゃあ起こすぞ?」

俺はザステインの背後に回り

「ソイヤ!」

グツと気合い注入!!なんかちよつと『ゴリッ!』って香ばしい音がしたけど大丈夫だろう?ギャグだし

「ンツ・・・うん・・・」

ホラね!

「おお起きたか?」

俺がザステインにそう確認するとザステインは

「ツ!!きさまは!!」

案の定暴れだそうとしだす、しかしここは平和的に!

スツとクビに腕を絡ませ

「後、少し腕を動かせば・・・わかるな?」

よし!大人しくなった!!

「でララ?話しがあんだろ?リトも?ホレ今んうちに話さんね!」

ザステインが大人しくなったので二人にそう声をかける

ちなみに今だ俺の腕はザステインのクビに絡まっていたりする

「いやマサ?離してやれよ?ソイツ顔が真っ青だぞ?」

ふむ、まあソレはそうだな

「つつわけでとりあえず離すぞ？リトに感謝するように、んで二人の話を聞いてやれ、暴れんなよ？暴れたら頭『パーン』するからな？」

俺がザステインにそう言つとザステインはコクコクと頷きながら

「わっわかった」

と了承してくれた、うむうむ！んじゃ開放しますか

俺が手を離すとララが

「私はデビルーク星には帰らない！パパが決めた婚約者なんて絶え  
く対にイヤ！私はリトと結婚するの！！」

断固帰還拒否の姿勢だ！

ここでリトに向かって「ヒドイ！俺との事は遊びだったんだね！」  
とか言いたい衝動にかられたがグツと堪えた

しかし俺ってこんな性格だったか？フとそんな事がよぎったが、  
気にしない事にした

「しかしララ様、ソレでは父上が・・・！」

「イーヤー！ー！！」

なんかリトがおいてきぼりだな



「なあリト？ララン奴あんな事言ってるけど実際どうなん？」

俺の質問にリトは

「結婚って言われても・・・俺には別に好きな奴がいるし・・・」

おっ！やっぱり当たってたか？

ララ残念！ん？アレ？ララってなんでリトに惚れてたんだっけ？  
思い出せん！

まあいいや！しかしリトの奴、なんかハッキリしなそうな奴だな？

多分、ララには別に好きな奴がいるって言ってないんだろっな？

うむ！早期発見の方がキズも浅かるう！ここは俺が心を鬼にして

「オ〜イ！ララ、リトには別に惚れてる奴がいるんだと！」

とララに暴露った

「オイ！おまつ！ちよっ！」

なんかリトがあわわあわわしているがそんなリトに俺は

「ごういうこたあ早めに言った方がいんだって！ソレでララがどう  
するかってのはララ次第だろ？」

と思っわけよ

したらララは

「じゃあマサと結婚する!!」

はっ?えっ?はっ?幻聴?オマエ、リトに惚れてんじゃねえの?  
やっぱ幻聴?

「ララ?リピートプリーズ?ちょっと耳の調子が」

俺は耳をガリガリとほじりながら、ララが何と言ったかもう一度  
確認してみる

「じゃあマサと結婚する!!デビルーク星には絶対に帰らない!!」

アレエ?

「いやいやいや!ちよとまたんかい!ミーとユー初対面!!つつか  
じゃあって何!じゃあって!その目当ての商品がなかったから妥協  
しました!みたいな感じは!?

ってコラ引っ付くな!後リトあからさまに開放されてラッキーみ  
たいな顔すんな!!」

ツッコミ所満載なんだけど!つつかアレエ?どゆこと??

つつかザステイン、ララの暴走を止めんかい

そんな思いを抱きながらザステインを見てみると

「……確かに私を簡単に退ける程の力……ララ様には相応しいかも……」

裏目ったアアア！ザステイン黙らせたんが裏目ったアアア！

ザステイイイン！正気に戻れエエ！

「マサナリ様……ララ様をお頼みます……」

アレ？うそ？アレ？

「うん！私！マサと幸せになるね！！」

えっ？オマエが答えるの？

「マサ……おめでとぅって言ったらいいのかな？」

オイ、リト？オマエはツッコミじゃなかったのか？

というか……というか……

「ちったあ俺の話しを聞かんかいバカタレ共がアアア！！」

『ガッン！！』

「イタッ！？」

『ゴッン！！』

「ぐあっ！！？」

『ドガッ!!!』

「アダッ!?!」

ゲンコツ3連して黙らせ

「オマエら正座!!!」

「ハッハイ!!!」

三人を正座させる、ララあたりが逆らいそうな気がしたが大人しく従ってくれた

それと大声を出したおかげか俺の方も少しは冷静になれ、頭もちっとだけ回るようになる

つつわけで

「まずララ!!!」

「えっ なっ 何?」

ビシッとララを指注しながら

「オマエ、アレだろ?えっと・・・確かデビルーク星だったか?に帰りたくねえから、んな事を言ったんだろ?」

「うっ!!!」

俺の指摘にララはギクリとなった感じで声をつまらせる、この様子だと凶星だな・

大体、俺がモテるとかはありえねえつつうの、不細工ではないと思うが一目見た時から!!

って言われる程ではねえし・・・あっなんか自分で言ってる悲しい・・・

「ララ様!!どう言う事ですか!!」

っとイカンイカン!まずはコイツ等だ

「落ち着けつつうの!あのなあ確かにララが言った事あどうかと思うが、正直気持ちもわからんでもねえ」

俺はザステインに落ち着くようにいいながら今は少しシュンとしているララの頭にポンポンと手を置く

「しっしかし!!」

しかしザステインは納得出来ないといった感じだ

「んじゃあオマエ、あの空き缶と結婚しろって言われたら結婚すんのか?」

「はっ?ソレとコレとは」

俺が近くに落ちてた空き缶を指差しながらそう言いザステインは反論しようとしているが

「一緒だつつつの！まあ空き缶は極端すぎだとは思っけどよ・・・  
それに確かララはデビルーク星の姫さんだったか？」

「えっうんそうだけど・・・」

俺がララに話しをふるとララはそうだと頷く

「そっか・・・けどララが姫さんである前にララは一人の女の子で  
ララなんだよな、ぶっちゃけ俺の価値観押し付けるみたいで何だ  
けど」

どこの姫さんとかなんてもんはソイツ自身の最後に付いてくり  
やあいんだよ！

どこの姫様だから結婚しなきゃいけねえ？ふざけんな！！んじ  
やララはどこにいったつつつの！！」

俺の言葉にザステインとララの二人は下を向いて黙っている

「まあアレだララが本当に惚れた奴が出来るまで待つてやれや・・・  
なっ？いくらララの親父だからってそんなくらの甲斐性くらいはあ  
んだろ？オマエもさ？」

それでも待てねえとか言い出すようなアホ親父だつてんなら・・・  
ララには悪いが・・・

俺が・・・鬼島政成がブっ飛ばすつっつとけ！！」

ああなんか慣れねえ説教なんてしちまったぞ俺！はあ〜ジジイの  
影響つけたか？

あつリト忘れてた

「最後にリト!!」

「あつああ」

「特にねえ!!」

「ないのかよ!!」

慣れない事をしちまったなあと思いつつながら俺はリトで遊んでいると

「・・・する」

ん?なんかララが言ってんな?何だろ?

「どうしたララ?」

俺がララに聞いてみたらララは

「する!!」

はっ?何を?

「私マサと結婚する!ううんマサと結婚したい!!」

はっ?

「ハアアア?いやいやいや待て待て待て!ハッ何で?いや何で?と  
いうか・・・何が?」

アレ？『する』と『したい』アレ？レベル上がったね？

「私！最初はマサが言っただけに帰りに帰りたくないからってリトと結婚するって言ったりマサと結婚するって言ったりした

けどマサはそんな私の事をお姫様としてじゃなくてちゃんと私として見てくれた！！

私を私として見てくれた！こんな気持ち初めて！私マサの事、本当に好きになっちゃった！だからマサと結婚したい！！」

裏目ったあアアア！！慣れない説教が裏目ったあアアア！！

まて落ち着けザステインが止めるは

「このザステイン・・・感動しました・・・私は親衛隊長としてララ様の本当のお気持ちなど考えていなかった・・・それをマサナリ様は気付かせてくれた・・・

ララ様！！不肖このザステイン全力で支援させていただきます！

この方こそララ様に相応しい！」

「うん！ありがとうザステイン！」

アレ？走り出した？何かこの二人走りだしちゃった？

何？なんなの？デビルーク星には暴走する奴しかいないの？



「マサ・・・頑張れ？」

リトその温かい目は・・・売られていく子牛を見る優しいく冷たい眼差しはやめて！

待て！落ち着け俺！まずは説得だ！！そうさ人間誠心誠意話せばわかってくれるさ！

「えっと・・・ララ？いえララさん？あのですね・・・いきなり結婚とか言われたましても私非常に困ってしまうのですが？」

低姿勢なのは気にするな！頼むから

「え〜！まさかマサ恋人がいるの？ソレとも好きな人がいるの？」

「いねえよ！！齡16年！生まれてこのかた彼女なんざ出来た事はねえ！好きな人も・・・」

一瞬だけ三〇三〇仲間の顔が浮かんだがアレは仲間的にというか妹分的な好きだからベクトルが違う気がする

「いるの？」

俺が途中で言葉を切った為かララは少し不安そうな顔をしながらそう聞いてくる

「いねえッス・・・チクショウ・・・いい若い者が何コレ？ジジイか俺は・・・」

ちよっぴり泣けてきた

「じゃあいいよね！結婚しよう？」

「よくねえ！結婚なんてもんはお互いが惚れてこそ成立するもんだ！オマエはどうかしらんが少なくとも俺はその気はねえ！！ソレに俺はまだ結婚できる年齢じゃねえ」

まあ政略結婚とかもあるだろうけどアレは俺は気にいらねえんで

「うーん！あつ！だったらマサが私の事を好きになってくれたら結婚してくれるんだね ヨシ！頑張つてマサに好きになってもらつぞ」

イカンこの子止まる様子がない・・・しかもあながち間違つた事を言っていないから恐ろしい・・・

「ララ様～その意気です！」

ザステインはなんか変な旗を取り出して応援してる

ダメだこいつら早く（以下略）

そしてリト我関せずといった感じで暢気にお茶なんざ飲んでんじやねえ！

本来ならこの位置オマエ！！

「マサ～～～！」

なんか俺がパニツてるとララが飛び付いてくる

しかし甘い！

「リトガード！！」

一瞬でリトを捕まえララの前に差し出す、えっ？違っよ？暢気に茶を飲んでたリトにイラッときたからじゃねえよ？ホントだよ？

「わぷっ！おまっちょマサ！ってララ離せ俺はマサじゃねえ！」

フッそんな事をいいながらも役得だと思ってるんだろリト君！なあに男なら当然さ！

「ん？ア~~~~~！マサじゃない！なんで避けるの！！」

ムッ！イカン！気付かれた！しかしここは毅然とした態度で

「何となくだ！」

「何となくで俺を巻き込むな！！！」

「マサ~~~~~」

「ララ様〜頑張ってください〜」

しばらくの間、俺達はコチャコチャやっていた

で、結局は

「わあっただわあっただ！俺がオマエに惚れたら考えてやる！けどハッキリ言つて、オマエに惚れるかもわからんし、別の奴に惚れるかもしらんぞ！」

「ソレでもいいもん！絶対、私を好きになつてもらんうだから！」

と何処の色男なんだと言いたくなるような結論になった、

まあアレだ・・・ララ、ソレは一過性の風邪みたいなもんだから熱が冷めたら気付いてくれるさ

とか考えてたがな！

大体、俺みたいなものに本気で惚れるとかありえねえもんな【ん？風邪か発動中】

アレ？今なんか変な言葉が頭を過ぎつたような・・・イカンイカンなんか深く考えてはダメな気がする

とそうだった

「なあリト、頼みがあんだけどさ？」

すっかり忘れてたが俺つてば住む所ないんだよな、金もないし、野宿してもいいけどちようどこうしてリトに知り会えた訳だし

ちなみにザステインは何処かにいなくなつてる

「頼みって?」

「悪い!オマエん家、泊めてくれ!」

かなり図々しい気がするが仕方ないじゃないか!ツテもなんもないんだからよ

ソレに何故かそうしないといけない気がするし、こつ宇宙(書いてる人)意志的に!

アレ?また変な電波が・・・ツとイカンイカン!

「ねえ〜リト〜いいじゃんマサ泊めてあげようよ!そしたら私もマサと一緒にいれるし!」

おつ!ララは俺の味方をしてくれるみたいだ、そついやララってリトん所で世話になってたんだつたな

「ちよつララ!つてマサなんでだ?家は?」

ララに詰め寄られて焦りながらもリトが理由を聞いてきた、そついや言つてなかったよな

「いや実はな、カクカクシカジカつて訳でさ住む所も金もツテもナイ尽くしなんだわ」

とりあえず俺の事情を話す、ちなみにマンガの世界がどうたら部分分は別世界と言つて置いた、なんかそうしると宇宙(以下略)からだ

「ハイ？別世界？いやそれはまだしもマサー一回死んだって！！」

あつ別世界ん所は別にいいんだ、まあ目の前に宇宙っ子いるしな

「最初に言つたる？生き返り男つて？」

やっぱ語呂悪いな・・・生還者つて言い直そ

『ドガッ！』

「うお！つてどうしたララ？」

俺が言い直そうとしたらララが突然抱き着いてきて

「マサー死んじゃったの？大丈夫なの？悲しくないの？」

と俺に言ってきた、目には涙を浮かべている

ああコイツいい奴だわ！

リトの方も見てみるとリトも悲しそうな顔をしていた

俺はララの頭にポンと手を置きながら

「問題ねえよ、コッチ来る前にジジイには挨拶してきたしな、ジジイ言わく少し早い一人立ちだと、だから二人は気にすんな、んな顔されると、ちと困る」

と二人に言つてやる

「そっか・・・いいお爺ちゃんだね!!」

「ああわかった!」

すると二人とも納得したのか笑顔になったつむつむ!

しかしララよあのジジイは絶対に『いいお爺ちゃん』なんてもんじゃねえぞ!マジで

まあ多少は尊敬してやらんことも無きにしてもあらずのよつな気がせん事もないような気がするが

とッ!そついやまだ交渉の途中だったな

「でリト、泊めてくれんか?」

もう一度リトに頼むとリトは

「ああ!別にいいぞ、マサにはさっき助けてもらったしな  
と了承してくれた!

「よっしゃ!サンキューリト!オマエいいやつ!」

「やったねマサ!」

俺が喜んでいるとララが抱き着いてくる、しかし甘い!

「リトガード!」

「またかよ!!」

「ヒドイよ! 避けないでよマサ!」

それからまた少しの間、三人でコチャコチャやっていたが、俺はなんとか住む場所を確保するのに成功したのだった・・・

オマケ的な蛇足

??? ? 視点

ん? なんだコレは? あっエレナ

「エレナ、この死体はなんだい?」

「あっコレはですねカクカクシカジカと言うわけでした」

ボクがエレナから事情を聞くとエレナが事情を教え、エレナは用事があると出ていった

ふむふむ、なるほどね・・・しかしこの少年も運がないというか  
なんというか

「フム・・・そうだ!!」



ボクがこの運がない少年の体に少しでも加護を与えてやるう

さて……どうしようか……ウムあれだな!!

『パチン!!』

よしよし!生き返ったら頑張るんだよ少年……

ん?ボクがどんな加護を与えたかって、それは

【イベントメイカー(小)】さ!

これはアレだ、色々な事に巻き込まれたり異性とのフラグが立ちやすくなったりする便利な力さ

まあそこからどうなるかはその人しただけどね?

けどこの加護は少しでも副作用があったような……

フム……逃げよう!!

すまない少年!!

第一話っぱい感じ！（後書き）

後書き

こんなハズでは・・・

なんでこんな事に・・・

どうも書いてる人です、なんかこんな感じになってしまいました

本当にスンマセンです、コレからも多々こんな感じになるかもしれないのでご注意ください・・・

最後にリト・・・スマン！！

## 第二話っぱい感じ！（前書き）

前書き

原作ファンの皆さんスンマセン！

特に美柑ファンの方・・・もはや別人ですと言っか登場キャラの全員が別人です

口調とかも違うと思います

それでも見ていただけるといいう方・・・本当に気をつけて下さい、胸ヤケとかおこすやも・・・

ではどうぞ・・・

## 第二話っぱい感じ！

アレから俺達はリトと家へと到着した、途中、何度かララが抱き着いてきたがその度に『リトガード』しといた

「ついたぞ！」

「ただいま〜！」

リトが家のドアを開け中へと入りララも続いて中へと入る

最後に俺が

「おじやましやくす！いや寧ろただいまー！」

と中へと入った

「リト、ララさんお帰り！ん？その人は？」

すると中から出迎えてくれる女の子がいた、っとそうだったそうだった確かリトの妹の・・・えつと・・・

「ただいま美柑！」

そうそう美柑だ美柑！

「えつと後ろの奴は・・・」

ツとイカンイカン！リトが俺の事を紹介しちまう、ここは自らキ

ツチリと自己紹介するべきだな

「どうも！今日からお世話になるリトの婚約者の 鬼島 政成だ、マサって呼んでくれ！ちなみに性別は男だぞ！ヨロシクな！」

ニカツと笑いサムズアップしながら事故紹介！誤字じゃないよ？すると美柑は

「・・・お兄ちゃん・・・えつと・・・お幸せに？」

うむ！いい感じで錯乱してるようだ

「まさかりトがライバルだったなんて！リトには負けない！！」

うむうむ！ララはララで快走してるな

「ちょ！マサ、おまっ何言ってるの！つか美柑信じるな！ってか何故に今だけ お兄ちゃんと！！後ララも信じるな！」

流石はリト！ビシバシとツッコんでるぜ！

そんなリトの肩に手を置きながら俺は

「奇をてらってみた！！」

「てらうなアアア！」

リトの叫び声が響いた・・・

「改めまして、こんばんわ、鬼島 政成だ、さっきも言ったがマサって呼んでくれい」

アレから何とか落ち着いた美柑に改めて自己紹介し美柑も俺に

「えつとリトの妹で結城 美柑です、それじゃあマサさんって呼ばせてもらいます」

とシツカリした自己紹介、あらあら出来た妹さんですこと

「リト、美柑くれ！」

「何言ってるんマサ！」

「いやあんまりにもデキた妹さんだからつい？」

ジョークだけどね！本当だよロリ（以下略）

「マサ！私は私は！！！」

「アホな子は間に合ってます」

まあララの事は嫌いじゃないけどね、ぶっちゃけ好きに属してるよ（人間的な意味で）

「なんか変この人」

「俺もそう思う」

コラそこの結城兄妹！失礼だぞ！自覚はあるけど

「ヒドイよマサ！私アホの子じゃないもん」

「ララ・・・ヤツらはみんなそう言うんだ」

うむ！リトもそうだがララもからかい甲斐があるな！

「やっぱ変」

「俺もそう思う」

コラ結城兄妹！（以下略）

とイカンイカン事情説明するはずが大分それた、けどその前に

「なありト、美柑ってララが宇宙人だって知ってたんだよな？」

小声でリトに確認しとく

まあアレだ、いきなり俺、別世界から来ましたしかも一回死にま  
したって言ったら耐性のない人には

アレ？この人アレ？とりあえず救急車？って事になりかねんし

あっちなみに原作知識はもう完全にダメだわ

「ん？ああ一応知ってるけど・・・話すのか？」

おっとリト君が答えてくれたぞ！成る程ララの事を知ってたっ  
たらまあ大丈夫だろ多分

「まあな、別に隠すような事でもねえし、俺が心配だったのは頭の調子を疑われて救急車のな物と呼ばれる事だったからな」

俺がそつりトに言うつとりトはアレな人を見る目で

「いやマサはかなり変だと思っぞ?」

って言われてしまった、自覚はある、しかしハッキリ言われると凹む

「・・・じゃあ話すから・・・チクソウ」

ちよつとだけ肩を落としながら美柑の方を見ると美柑はなんかラと

「ねえララさん、マサさんって本当にりトの婚約者じゃないの?さつきからりトとこそこそ怪しいんだけど・・・」

「そんな事ないよ!マサは私と結婚するんだもん!」

「アレ?ララさんってりトと結婚するって言っでなかった?」

「えつとね・・・それには事情が・・・」

ってガールズトークってた

並のやつならばここで尻込みして会話に入れない所だが、この鬼島 政成、生憎と並ではない!



マサ突貫する！

「あの～すいません、えっと私の話を聞いてもらっても良いでしょうか？」

かなり低姿勢になったのは気にしないでくれるとありがたい

「えっあっ！ごめんなさい！ちょっと話しが盛り上がって」

「ゴメンねマサ」

よし！うまくいったぞ！さて俺の事情を話すとしますか！でもその前に

「美柑よ！さっき言ったりトの婚約者ってのは冗談だからな！後ララ！今ん所はその気はねえからな！」

この事はハッキリ言つとかねば自分が蒔いた種だけどな！

「そっそつですよね！アハハ～」

俺の言葉に美柑は愛想笑いしララはぶうと頬を膨らませながら

「いいもん！いつか絶対好きになってもらうもん！」

だとさ、早く気付けソレは一過性の（以下略）

「ってそつだ！ララさん！ララさんってリトと結婚するって言っくなかった？」

「ああ、その事も含めて俺ん事情ってやつを話すからちつと聞いてくれ」

困惑気味の美柑に俺は事情を話す事にした  
（俺説明中）

「つつ訳で何をトチ狂ったかララは俺に気があるんだと」

事情を説明し、俺は最後にそうしめる、ちなみに俺が一度死んだ  
つつた時に美柑も悲しそうな顔してた

美柑もいい奴だった

思わずリトに

「リトやっぱり美柑くれ！」

って言つといた、やっぱりダメだったまあジョークだけどね！

「本気だもん！私はマサと結婚するんだもん」

「ピー、エラーです！その語彙は理解できません！ピーエラーです  
！その語彙は理解できません！」

ララしつこい！

「やっぱり変」

「俺もそう思つ」

結城兄妹しつこい

まあ俺も変だとは思っ、というか俺ってこんなボケ気質だったか？  
どちらかというとツツコミ寄りだったはずだが

「まあアレだ生前（一回目の死の前）と生後（生き返りの意味で）  
は少しくらいは人生観変わるって事で」

「まさか自分の死までネタにするとは・・・」

リトに呆れられた悲しい

「えっと・・・そう言えばマサさんっその前の世界？で何してたんですか？」

微妙に空気を呼んで美柑が俺に質問してきた

「あっ！私も気になる！」

「そう言えば聞いてなかったな、マサって何してたんだ？」

どうやらリトララの二人も興味があるらしい、けどなあ、ハツキ  
リ言っ普通だぞ

「普通に高校生だったぞ、まあぶっちゃけジジイのせいであんま行  
ってねえけど、ちなみに一年な」

俺がそう答えたら、リトが

「俺と同じ？ってそう言えば16って言ってたもんな」

ちょっと意外そうにそう言う美柑は美柑で

「リトと同じ年・・・けどマサさんが高校生って・・・意外と普通ですね?」

何を期待していたんだ美柑君、にしても美柑なんか堅苦しいつかかなんつか

「美柑、堅い!もっところうらかな感じで話してくれい」

シツカリしてんのはいいけど気になるんだよな

「えっ?あっはい・・・わかり・・・わかった、それじゃラクに話すね」

うむうむ!

「ねえねえマサ、学校に全然行ってないって言ってたけど何してたの?」

おやララさん、それを聞きますか?聞いちゃいますか?

クツ・・・思い出すだけでこうジジイに対しての恨みが・・・

「マッマサ?どっとうした?なんかこう黒いのが出てるぞ!」

おっとイカンイカン、つい

「悪い悪い!学校行かないで何してたかっつたらアレだなジジイのどばっちりを受けてたな」

リトに謝りつつ俺がそう言つと美柑が

「マサさんのお爺さん？」

とクビを傾げて聞いてくる、ちょっと可愛いと思つた

「美柑？ナデナデしていい？」

ロリじゃ（以下略）

「はい？なっ！えっ？いきなりなんで？」

あつビックリしとる、しかし何故つて言われてもな？

「んなもん、可愛いからに決まってるじゃん！」

俺は普通に可愛い奴には可愛いって言うぞ？

「ッ！？」

あつ照れた！

「マサ、私は私は私！」

「可愛いぞ？」

何を今更言つてんだコイツは？

「ホント？ホント？じゃあ結婚しよ？」

「それとコレとは別問題だ」

可愛いから結婚ってのは正直どうかと思うぞララ？いや確かに嫁さんが可愛いと嬉しいけどね

「マサ・・・オマエ凄えよ・・・」

なんかリトに呆れと尊敬が混じった声でそう言われた

「そうか？つとそっぴや俺が学校行かないで何してたかって話したな？」

とりあえず脱線した話しを戻す事にした、俺のせいだけどね！

「えっ！あっうん！」

俺がそう言つと美柑は話しを聞く体制にはいった、なんか動きが小動物チックでやっぱり可愛かった

美柑ってこんなキャラだったか？思わず不安になったが気にしないでくれると嬉しい

とイカンイカンまた反れた

「俺のジジイってなんつうか頭んネジがゴツソリ抜けててさ・・・それを象徴するようなエピソードがあるんだが聞く？」

俺がある出来事を思い出しながら三人にそう聞くと三人は

「「うん!」「」

と頷いた、ふむ、ならば話すかね・・・

「俺ってジジイと二人暮らしだったんだけどな?メシは大概、俺が作ってたんだよ」

俺がそう話したすとララが

「アレ?マサのパパとママは?」

って聞いてきた、そついや言っただけじゃなかったな

「さあ?俺あ拾われっ子だからな、生きてんのか死んでんのかもわからん?」

俺がララにそう言つとララは

「「うっ!ごめん!ごめんねマサ!」

って半泣きで謝ってきた、リトも美柑も似たような表情になっちゃまってる

けど、俺は全然気にしてねえんだけどな?気にしてたらこうして話さんし、それに

「気にすんなって!大体、俺がその事を知った時なんて居間でバラエティー番組見てる時に

『おおそうじゃったそうじゃった!マサ!オマエ、ワシが拾った子

じゃから!』

ってなんの脈絡もなく言われたんだぞ?その後

『そう言う大事な事アアもつと空気読んで言えやクソジジイイイ  
!』

って殴りかかったらカウンターで寸勁ブチかましてきて小学生だ  
った俺ん肋骨を叩きわるといふオマケ付きで!？」

ああ何たるクソジジイ・・・

ロクデナシすぎる

「うっうわ〜」

「マサの爺さんって・・・」

「マサ!負けちゃダメだよ?」

三人を見てみると結城兄妹はドン引きし  
ララにはなんか励まされた

なんかもうこの話で十分のような気がするが一応は

「続き聞かか?」

と確認してみる、するとリトは

「いっいや十分だ・・・うん」



お腹一杯みたいだ、で美柑は

「うーん、聞きたいような聞きたくないような・・・でも続き気になるし」

悩んでるな、どうやら美柑の方がハートが強いみたいだな

んでララは案の定というかやはり

「聞きたい！聞きたい！」

と先を聞きがっている、流石はバイオレンス・ララ、ハートがあるな！

「賛成票多数の為に続きを話す事にしますつうことで続き話すぞ？  
いいか？リト？」

美柑もどちらかというと聞きたそうな感じだしな

「うっ・・・どうぞ・・・」

渋々って感じだな、それに比べて

「早く早く!!」

と身を乗り出して続きを促すララ

おっ？美柑もひそかに乗り出してんな

じゃ続きつと

「えつとどこまで話したっけ・・・そうそう俺がメシを作ってるって所までだったな」

俺がそう話すと美柑が

「マサさんのお爺さんって料理できなかったの？」

って聞いてきた

「うんにゃジジイは作れねえ訳じゃないんだよ、なんかめんどくさいつつて家事は基本的に俺の仕事なんだわ」

んでそのクセにたまにメシ作ると俺よか遥かに美味しいもんを作るんだわ

でさひそかに俺はそのたまに作るジジイのメシが楽しみだったりしたわけよ！」

あの頃はまだ俺も青かったよ、うん

「それでそれで！！」

ちょっとその頃の事を思い出していたらララが先を促してくる

「んでな、アレは俺が中学になったばっかの時だったな・・・」

ジジイが俺が中学生になった祝いだ！つつて珍しくメシ作ってくれたんだわ！

で俺はなんだかんだ言いつつも嬉しくてな、ジジイが作ったメシをガッツ食いしたんだわ……

いや美味かった！マジで美味かった！

で俺は珍しくジジイに素直に感謝の言葉を言おうとしたんだわ

でジジイの所を見ようとした瞬間……

「ゴクリ」

リトが生唾を飲み込んでいる、つうかリトよ怪談話しじゃねえぞコレ？ある意味ホラーだが、それに比べて

「で！それから！？」

ララと美柑は仲良く身を乗り出して続きを促してんな

うむでは続きを

「急激な眠気に襲われてな……ジジイン方を見たらジジイはニヤリって笑ってやがった、で俺は嵌められた！って思ったら次の瞬間意識がプツンだ……

で目が覚めたらジャングルだった……」

「えっとそれってまさかご飯に……」

美柑が軽く引いた顔でそう聞いてくる

「ああ！あのクソジジイ、メシに麻酔薬を仕込んでやがった！しか

も0・01グラムとかで象を動けなくするような強力なやつを1グラムもな！」

ありえなさ過ぎる！まああの頃でも0・01くらいじゃ効かなかっただろうけどね！

ああ人外バンザイ！

「そつそれは・・・流石に・・・」

リト、ドン引きだな！

「で！ジャングルで目を覚ましてどうなったの！」

ララは強すぎ！まあいいか続きだな

「んで目を覚ましたら隣に手紙がある訳よ見てみたら案の定ジジイの字で

『いや〜随分前にジャングルに取り残された若者が何とか帰ってくるって映画を見ての？

フとソレを思い出したのでマサでどうなるか試してみたくなったのじゃ

頑張って帰ってくるんじゃぞ？

爺ちゃんより』

って書いてあった・・・ありえんだろ？けどねソレ俺のジジイなんだ・・・チクシヨウ・・・マジありえねえんですけど！！

クソジジイイイ！いつかぜってえブツ飛ばしてやるからなアア  
ア！」

「落ち着いて！マサさん！大丈夫大丈夫だから！！」

あの時の怒りが再び込み上げてつい興奮してしまった、そんな俺  
を美柑が優しく宥めてくれた

やっぱりいい子だね美柑！

「サンクス美柑！落ち着いた！」

つついなでなで、アイナで撫で癖ついたか？

「ッーーーー！！！」

おやまあ照れちゃって可愛いね、あっ口（以下略）

「ぶっ！私も私も！」

ララまで要求してきた、まあ別にいいけど

「ホレ！」

な〜でなで！っつと

「エへ〜！〜！」

嬉しそうにしちゃって、けどかなり癒された！

「マツマサさん・・・あの続きって？」

まだちょっと赤いな美柑、つつか撫でられなれてないのか？リト？あんまり撫でてないのか？

俺ならこんな可愛い生き物一日30回ペースで撫でるぞ？

つとまた反れた

「何とか帰れたぞ？途中でアナコンダやら武装ゲリラやらが襲ってきたがな！

で家に帰って早速ジジイにケンカ吹っ掛けて返り討ち、5番と6番を持ってかれた」

ジジイ強すぎだっつうの！今ならジジイが強かった理由も頷けるけどな！

「とまあこんなクソジジイのせいで俺はあんまし学校に行けなかったわけだ」

俺が最後にジジイエピソードをそうしめると

「マサのお爺ちゃん凄い・・・私のパパより無茶苦茶かも・・・」

かもってなんだ？かもって、確実に俺のジジイの方がブツ飛んでるぞ！

「いや寧ろ、ソレに耐えたマサが凄いと思うぞ」

「私もそう思う」

俺もそう思う、よく耐えられたな俺？いやマジでバグでよかった、人外バンザイ！！

「でマサってコレからどうするんだ？」

おっ？意外とリトの立ち直りが早え、ちょっと関心した

にしても確かにコレからどうすんかねえ？やっぱり適当に働くか？  
つう訳でリトにアテがないか聞くか

俺がリトにそう聞こうとしたら横からララが

「ねえマサ！だったら学校行こうよ！私も行くし、ねっ？」

って言うてくれた、けどなあ

「いや無理じゃね？金ねえし、戸籍もねえよ？まあ金さえありゃ戸籍はどうにかなんだろっけど」

つう訳で無理だわな、けどララは

「ええ〜行こうよ〜リトもいるし楽しいよ、前はあんまり行けなかつたんでしょっ？」

って誘ってくる正直嬉しいけどな、いや勉強は嫌いっつうか苦手だけど確かに楽しそうなんだよな

「マサさん、いいんじゃない？ララさんだって行くみたいだし」

美柑もそう言ってくれる、そういやララも通えるんだから行けるかもな？

アレ？ララってなんで通えるようになったんだったけ？

俺がそう考えていたらリトが

「ララ、いつの間にそんな事になったんだよ？」

ってララに聞いてる、知らなかったんかい！！

「えっと前にリトの学校に行った時に校長先生？に会って、私も学校行きたいって言ったら可愛いからよし！って言われたよ」

ああそんな感じだったな確か

「なっなんだそれ？何考えてんだろ校長・・・」

リトが呆れてんな、まあそら呆れるわな

けどそんな理由だったら

「やっぱり無理じゃね？俺、可愛さなんて1ミクロンもねえぞ？」

まあ可愛いなんて言われたら気持ち悪いがな！

「つつ訳で、無理！正直、行きたいちゃ行きたいけどな」

俺、残念！



「ええ〜」

ララは不満気だけど仕方ないんだよ

「確かにそんな理由だったらマサさん無理かも、マサさん可愛いっ  
ていうよりカツコイイ系だし・・・」

褒められた！つつかマジか？いや不細工じゃないと思うよ？けど  
マジか？

「うんうん！マサ、カツコイイよ！」

ララまでもが！！

「確かに、変なやつだけど普通にカツコイイよなマサって」

リトきゅん・・・ヤダ惚れちゃう！

いや待て！落ち着け、アレじゃないのか？俺が生き返った時に  
顔を弄られたかもしれんぞ俺！

つつわけで

「リト鏡ある？」

「ハイ？どうした急に？」

確認だ！

「あつ私持つてる、ハイ、マサさん！」

ナイス美柑！流石は女の子！

というわけで美柑から鏡を借りていざ確認！

.....

「なっ何じゃこりゃー！ー！！」

「わっ！どっどっしたの 마사さん!?!」

「何時も通りじゃねえかアアアー！！」

うん何時も通りでした、悪いね、大声出して

「マサさん?」

おっと美柑君が目丸くして不思議顔だ、可愛いね

「いや悪い、ちょっと生き返せて貰う前に天使先生が美形にしてやるぞ?とかってほざきやがったんだよ、で顔弄られちまったのかと思ってるな」

ナデナデしつつ理由を言う

「私も!」

「ハイハイ!」

ついでにララも、なぐでなでつと！癒される！

「まあ生まれてこのかたこの顔で生きてきたからな、やっぱり愛着あるんだわ、それに不細工ではないはず」

俺がそう理由を話すと再びララが

「マサはカッコイイよ！」

って言ってくれた、嬉しいね、あんま顔褒められたことねえし

「だから結婚しょ？」

「だからの意味がわかりません」

結局そこかい！だからララよそれは一過性（以下略）

「で何の話してたっけ？ってそうだったマサさんの学校の話しだ」

俺がララをあしらってたら美柑が話しを戻してくれた

「マサととりあえず明日、聞くだけ聞いてみようよ？私も一緒に頼むから！それから決めてもいいでしょ？」

そう言ってくれるララに俺は確かにそうだな、バイトとかはヒマ見つけてやりやいいしって気分になってくる

「そうだね・・・そうしなよマサさん」

おっ美柑も後押し

「マサ、聞くだけ聞いてみるよ？ダメだったらその時はその時って事でさ？多分、校長だったらララが頼めば良いっていいような気がするし」

確かになんかそんな気がしてきたな、それに

「わあっただ！んじゃ明日、行ってみるわリトの惚れてる子の事も気になるしな」

ニツと笑いながらリトに言つとリトはあわわあわわしながら

「ちょマサ！いきなり何を！」

って慌てだす、フツ・・・純情少年め

「マサさんリトに好きな人いるの知ってたんだ？」

およ？美柑も知ってたんだっけ？イカンやつぱ知識アテにならん

「おう！リトとララに会った時に聞いたし、ちなみにララに暴露ったのも俺！」

「うん！そうだよ、マサが私にリトは別に好きな人がいるって教えてくれたんだよ」

まあ、そのせいでララが俺に興味持ちまっただけだな

「と言う訳で！この三人でリトの恋を成就させる為に頑張ろうではないか！」

リトはいい奴だしな！

「マサと私は？」

「だから今ん所、その気はねえつつつの！」

「ララもいい奴だけどそれとコレとは別でござる！それにララよそれ（以下略）」

「ララさんも大変だね？リトと違ってマサさんかなりガード堅そうだし・・・まあそれはそれとしてリトの恋の成就ね・・・私もその話しに乗る！面白そうだし！」

美柑が仲間に加わった！

「ううう！けどリトの応援か？マサがするなら私もする！」

「ララも仲間に加わった！」

「よし！ならばリトの恋成就隊！チーム『リト恋』結成だ！」

「「オーーーーー！！！」」

こうして俺とララ、美柑によってリトの恋を支援する事になったのだった

「あっありがたいけど、ありがたくねーーーー！！！」

「やっぱりリトは叫んでいたが・・・」

フツ・・・明日が楽しみになってきたな

## 第二話っぽい感じ！（後書き）

後書き

あっ！やめて石を・・・いや岩を投げないで！

本当スンマセンでしたアア！

コレからもこんな感じでグツチャグツチャになると思いますが

どうぞおヒマな時にでも見てやって下さい

出来れば感想などあったら・・・いえ何でもないです。

## 第三話っぽい感じ！（前書き）

前書き

危うくりトヘンド！

物語キャラ共にますます崩壊が進んでいます、マサを含めて！

それでもいいよと言う方は胃薬的な物をお持ちになってお読み下さいますようにお願いします！



### 第三話っぽい感じ！

美柑視点

「んっんー！ー！」

朝だ、目を覚ました私はグツと伸びをする

「それにしても昨日は変な日だったな」

正確には昨日もだけど・・・フと昨日の事を思いだして独り言、昨日リトが一人の男の人を連れてきた、その人の名前は鬼島 政成さん、マサさんって呼んでる

マサさんは変な人だ、ララさんもそうだけどそれ以上に何か変な人だった

なにせいきなりリトの婚約者とかって言い出したりリトに、えっと・・・その・・・わっ・・・私をくれとか言い出したり、いきなり頭を撫でたり

最近撫でてもらう事なんてなかったから少しだけ嬉しかったのは秘密だ・・・

とつとにかく変な人だ

マサさんが言うにはマサさんは一度死んでしまい別の世界からきたらしい

私はその話しを聞いた時にマサさんは悲しくないのかな?と思う  
たがマサさんは意外な程に、あっけらかんとしていた

強い人だなと思った

変な人で強い人

それにしても私つてもつところ初対面の人は警戒するタイプだっ  
ただけどな・・・

何故かマサさんにはあんまり警戒心を持たなかった、きっとマサ  
さんは誰とでも直ぐに仲良くなれる人なんだろうな

現にリトやララさんとのやり取りも昔からの知り合いみたいに自  
然で私もそれに自然と入っていったから

マサさん自体はやっぱり変だけどね

「そろそろ朝ご飯作らないと」

昨日の事を思い出しながら軽く身嗜みを整えてると

いい時間になっていたので、私は朝ご飯を作る為に部屋から出る

『ジュージュー』

「アレ?」

私が部屋から出たら良い匂いと何かを焼く音がした

私が台所まで行くと

「美柑、おはようさん！あつ勝手に朝メシ作ってんぞ、ついでに弁当も！」

ってマサさんが朝ご飯を作ってる所だった

「おはようマサさん早いね」

私がマサさんにそう聞くとマサさんは

「何時もこんくらいにはジジイと朝ゲンカしてんからな、それに世話んなってる身だからこんくらいわな？」

ニカツと笑いながら、私にそう言う、私もついっられてクスツと笑いながら

「気にしなくてもいいのに・・・あつ、私も手伝うから」

って朝ご飯を作るのを手伝おうとしたら

「ム〜ム〜!!」

って変な声が聞こえ、その方を見ると

「ム〜ム〜!!」

何か布団に包まれてるミノムシがいた

「マサさん？アレってもしかしてララさん？」

聞き覚えがある声に私がマサさんにそう聞くとマサさんは

「美柑君、正確！いや朝起きたらララン奴が俺ん隣で、スープで寝てやがってな？」

イラッときたので巻いといた！女の子なら慎みを持ちなさい！基本男は皆ウルフマンなんだぞ？って事でな」

剛毅な人だと思いつつ

「えっと・・・マサさんは？」

って聞いたらマサさんは

「残念ながらマサさんは普通ではないのだよ美柑君！」

非常に納得した

マサ視点

朝起きたら、隣にララがいたスープで！！とりあえず巻いといた

しかしおかしい？コレはいい若い者のリアクションではない気がする

リトだったら間違いなく絶叫物だろう、何故に？って思ったが気にしない事した

ちなみに俺は布団を借りて居間で寝てたぞ？

「さ〜て、何時もならこのへんでジジイが襲撃してくんだけど・・・  
今日から、んな心配は無いわけか・・・」

ちよつとだけ淋しいって思ったが、それ以上に平穏な朝に喜びを感じた

まあララが隣にいたが・・・

「朝メシでも作るか？世話んなる訳だし」

うむ！それがいい

「ム〜！ム〜！」

おっララが起きたか？しかし

「ララ君、暫く反省してなさい！」

俺やリトじゃなかったら牡丹がポトリだぞオマエ？

「ム〜！ム〜！」

いくらム〜ム〜言おうが朝メシが出来る迄は解く気はねえ

さて朝メシをとつと！

「アン？昨日こんなんあったか？」

俺が朝メシを作ろうと台所に向かおうとしたら、俺の布団の隣に  
ボストンバッグがあった

よく見ると見覚えがある、

「コレ俺のバッグじゃね？」

とにかく確認してみるか？

〜俺確認中〜

やっぱり俺のバッグだった、中には俺の服やら財布やらが入ってた、  
ちなみに前の学校の制服も入ってた

「？アイナか？もしくはジジイ？」

どっちもありえる、ん？

「手紙だな・・・」

バッグの一番下の所に手紙を発見！早速見てみる

『マサさん！住む所が決まったみたいでよかったです？安心したデ  
スよ

マサさんの服や私物を送るデス！無いと困りますデスもんね？

ソレでは頑張るデスよ〜！

アイナより

PS 冷蔵庫デス！後この世界にもあるデスよ！」

『ダッ！』

直ぐさま冷蔵庫に向かった！

流石はアイナ！我が生涯の友！！

「さてと朝メシを作るとしますか！」

朝ミ〇ミ〇した俺は上機嫌のままに朝メシ作りを始める、ついでだから弁当も作るか

『ジュージュー』

「一本でもニ〇ジンっと！」

鼻歌まじりにタマゴ焼きをひっくり返す、歌のチヨイスはほっといてくれ

って誰か起きて来たな？アレは美柑か

「美柑、おはようさん！あっ勝手に朝メシ作ってんぞ、ついでに弁当も！」

俺は美柑に挨拶しつつそうつと美柑は別に気にしていないとい  
つつ

朝メシを作るのを手伝ってくれるって言うてくれた

やっぱりいい子だね美柑！

美柑が手伝ってくれる前にやはりというかなんというかララン事を聞いてきて最後に俺が

「残念ながらマサさんは普通ではないのだよ美柑君！」

って言ったら非常に納得した顔をされた  
ちよつと悲しかった

で今は二人で朝メシと弁当を作ってる

「マサさん手際いいね？」

美柑にそう言われたが寧ろ俺としては

「年期があるからな、それよか美柑の方が凄えと思っぞ？俺がそんなくらいん時はそこまで手際は良くなかったぞ？」

ホントに出来た子ですこと！

「そつそつかな？」

おや照れた？褒められなれてねえんかな？つうか何、この可愛い生き物？おっさんキュンつてしちゃうじゃないか！

クツ・・・両手が空いてたら撫でてるのに！



ん？口（以下略）

俺が手を動かしながらそんな事を考えてたら

「ふぁ〜！おはよう美柑、マサ！」

ってリトが起きてきた、やはりここは聞くべきだな

「おは！リト美柑くれ！」

『ガシャン！』

美柑が手をすべらした、どうした？

「朝一から何言ってたんだマサ！」

それとやっぱダメだった

「ム〜ム〜！！」

ララがム〜ム〜言ってるな、ふむ

「まずは服を着る所から始める、文明人への第一歩はそこからだ！」

マサさんは結婚するなら文明人がいいのです

「……やっぱり変」

「俺もそう思う、って美柑、顔赤いぞ？」

「うるさいリトー！」

毎度お馴染み結城兄妹でした！

ちょっと美柑の反応が昨日と違ったけど

で俺達がコチャコチャやってる間にボチボチ朝メシが出来そうだな

さて、そろそろララを開放しますか、いや待てよここは

「リト、アレを解いて来てくれ」

「ムッ！ムッ！」

ムームー言ってるミノムシ・ララを指注しながらリトにそう頼む

そっちの方が面白そうだしな、決して決断して美柑をくれないからじゃないよ？ホントだよ？

「ん？ってアレってララか？どうしたんだよ？」

「ん？アレはな『グルグル・マキマス』と言って、ララン星に伝わる伝統的な遊びなんだと」

サラッと嘘をつきました

「なんだよそれ・・・」

おやリト君が呆れてるな、どっちに？俺かララか？まあいい

「とにかく頼むわリト？もうすぐ朝メシできっからホレホレ逝って  
こい！」

俺がリトにそう言つと、リトは

「あっああ・・・わかった」

つてララを開放しに逝つてくれた、ちなみに誤字ではないぞ？

リトがララを開放しに逝つたのを確認しつつ頷いていたら美柑が

「ねえマサさん、今ララさんって裸じゃないの？なんでリトに？」

つて聞いてきたのでニヤリと笑いながら

「そっちの方が面白そうじゃね？」

ついたら美柑も、ニヤつと笑いながら

「確かに！」

つて言ってくれた、うむうむ！美柑も解ってるな！

おっそろそろ解けそうだな

「ツと・・・ララだいじよ・・・ぎっぎゃーーーー！！！」

結城家にリトの絶叫が響き渡った・・・

うむうむ今日もリト君絶好調！

「マサーー！ヒドイよ！苦しかったんだから！」

開放されたララは早速、俺にそう詰め寄ってきた怒ってますな

つつか今だにスツパだし、とりあえず

「ララ君、悪い事は言わんから服を着なさい、リトが今だに固まってる」

そう言っといた、で

「むー！ペケツ！」

ってララが頬を膨らましながらもそう言っ

「ハイ！ララ様」

って声がして

『シユルシユル！』

ララの髪飾りが変化し、一瞬で服になったそういやそんなもあつたな

俺がそんな事を考えてたらララが

「マサ！私怒ってるんだよ！」

って言ってくる、そんなララに俺は

「うんうん！ちゃんと服を着ましたね〜エライな〜ララは」

そう言いながら頭を、な〜でなでつと

「エへ〜そうかな？」

そしたらララは一気に上機嫌に、簡単な奴め・・・

「マサさん手慣れてるし・・・」

なんか美柑が呆れてるがそんな美柑に俺は小声で

「出来たら褒める躰の基本だぞ？」

って言ったら美柑は納得顔で

「なるほど・・・今度リトで試してみよう・・・」

リト躰られとる！でも気持ちはわかる

とっ朝メシ完成です！

「お〜いリト、何時まで固まってんだ朝メシ出来たぞ」

今だに固まってるリトに声をかけたら

「マサ！オマエ、なんでララが裸だった事言わなかったんだよ！」

やっぱりリト君が怒り出した、全くカルシウムが足りんな、ミ○ミ○を飲めミ○ミ○を！

とか思いつつ美柑にアイコンタクト！

「面白そうだから！それに目の保養になったる？」

そこですかさず美柑が

「リト・・・」

よし！気付いてくれたな流石は美柑、ナイス冷たい眼差し！

「俺が悪いのか？俺が悪いのか!？」

結城さん家のリト君は今日も元気です・・・

それからコチャコチャ言ってくるリトをあしらいつつ、せっかくの朝メシが冷めてちまうという事で朝メシに

「ハイ！皆さん手を合わせて下さい！」

俺が号令をかけると皆、ちゃんと手を合わせてくれた、うむうむ！  
で続けて俺は

「全ての命に感謝と愛とか・・・先が思いつかん！という事で、  
いただきます！」

「「ダア〜!？」」

「ん？」

しっかりコケてくれた結城兄妹に愛を感じました

ララは解らなかつたみたいでキョトンとしてた、その顔はちょっと可愛いかった・・・

「うまつ！みそ汁うまつ！」

美柑が作ったみそ汁を飲みつつ思わず吠えた！いやマジ美味しい！

「そっそう？あつマサさんのタマゴ焼きも美味しいよ？」

「うんうん！美味しい〜！」

俺が美柑印のみそ汁の感想を言ったら美柑とララの二人が俺作のタマゴ焼きを褒めてくれた

「マジか？いや嬉しいねえ！ジジイは俺が作ったメシ、文句ばっかいいやがるからな」

「いやマジで美味いつて！」

リトきゅん・・・ヤダ惚れちゃう！

そんな感じで朝メシは過ぎました！

あつ！みそ汁はオカワリしました！タマゴ焼きはオカワリありませんでした！

ララが不満気だったが

「弁当に入れといたからガマンしろい！」

つつたら引き下がってくれた、まあそこまで気にいってくれたら嬉しいけどな！

っとそつだ聞いとかんといけん事があつたわ

「なあリト、この家の財布握ってんのつてやっぱ美柑か？」

俺の質問にリトは

「ああ、そつだけど？どうした？」

つて頷いきつつもそつ聞いてきた

「いや知り合いん子供天使が服やら財布やら送ってくれたんで食費くらいは出そつと思つた訳よ」

子供天使とは言わずもがなアイナの事です

「はあ・・・だつてさ美柑？」

リトは美柑に話しをふると美柑は

「別にいいのに・・・」

つて言つてくれたが、そついう訳にはいかんのですよ、

「いやいや美柑さんや折角なので受け取つて下さいな・・・つうわ



「けでほい！」

俺は美柑にそういいながら財布から諭吉さんを20人程出して渡す

「ちょ！マサさん多い！コレ多い！」

あつ！なんか美柑があわわあわわしてんなうむ！可愛い！

「まあアレだ・・・ララの分も纏めてつつう事で！まだ財布には10人程諭吉がいるしな！」

俺が美柑にそう言ったらララが

「私の分も？ありがとうマサー」

って飛び付いてきた、しかし甘い、毎度お馴染み

「リトガード！」

「なんでー！」

リトが叫んでるが、そこはアレだ

「仕様だ！」

つつといた

「マサさん・・・やっぱり多いよコレ？」

ううむ、美柑は強情だな、しかしぶっちゃん俺は暫くつつうか年

単位でこの家に住み着こうとか考えてる訳で・・・

ん？図々しいだと！仕方ないじゃねえか！めっさ居心地がいいんだぞ！

リトは面白いし、美柑は可愛いし、ララは面白可愛いし

そう簡単に離れられません

つつ訳で

「いやゝ暫くやつかいになろうかなあと居心地がすこぶるいいんで・・・ダメか？」

って言ったら

「うゝんわかった・・・じゃあ預かっておくから・・・後、好きなだけ居てくれていいよ」

って言ってくれた

ヒヤッホーイ！美柑いい奴！すかさず俺はリトに

「リト！頼む美柑くれ！」

って聞いたといた、したらやっぱり一悶着、この流れも仕様です！

それから、皆さんそれぞれ学校に行く準備を始める  
ちなみにララも制服を持ってた、校長に貰ったんだと

何考えてんでしょうね？大丈夫かリトの学校は？

　　っとうだ俺も一応、前の学校の制服着とくか？したら学校でうるついても転入生とか思われて怪しまれんだろ？

　　つう訳で着替えようかね？

「マサー！お待たせー！どう似合う？可愛い？」

俺がそう考えてたらララ登場！制服を見せびらかすようにそう言うてきた

「おお！似合っとする似合っとする可愛いぞ？」

「ホント？やったー！」

正直に言ってみたらララはピョンピョン跳びはねながら喜んだ

　　こついつ所は素直に可愛いねえ、いやはや微笑ましいですな！

「マサ！悪い待たせたー！」

　　続いてリト登場！

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・聞けよ！」

「いや何がー！」

　　勿論似合うかって事だ！流れる的に聞きなさいよそこは！

まあ聞いてきたら聞いたきたでアレだがな！

で最後に美柑！

「似合うぞ〜美柑！」

「へっ？はっへっ？」

先手を討つてみたら、混乱した、ちなみに美柑は制服じゃないぞ？

で皆がそろった所で学校に！でもその前に

「リト！俺も制服に着替えっからまあ前の学校んだけど」

つって居間から出る、その場で着替えてもよかったが美柑と逆の意味でララの教育に悪いので止めといた

出ていく前に

「覗いちゃや〜よ？特にリトとララ！美柑監視よろ〜」

と言っておくの忘れません

「覗くか！〜！」

「ええ〜！〜！」

「うん！わかった！」

上から順にリト、ララ、美柑です！

く俺着替え中く

装着！制服装着！ちなみにガ克蘭です、しかも特注の！

ん？何故特注とな？ジジイ関連だと言っておこう！

まあ俺も気に入ってるけどね！

そいでもって最後に髪を後ろで結べばアラ不思議！立派なカラス小僧の完成です！

ちなみに俺ん髪の長さはクビの根本くらいで髪型は上半分だけのちよんまげ後は下ろしとるツス！

はい！どうでもいいですね

でもね、この髪型が好きなんです！【主に書いてる人が】

ん？またなんか変なんが頭をよぎったぞ？まあいいや、気にしないでくれや！

っとさて、リト達待たせてるし居間に戻りますか！

「俺！参上！」

俺がそう言いながら居間に入ったらそれぞれ

「マサ！似合う！カツコイイ！」

「うんうん！似合ってるよマサさん！」

「なんでガクラン？って前の学校の制服って言ってたな、にしても確かに異常な程にガクラン似合ってるな」

って皆が言ってくれた

「どうも生前（一回目のという意味で）生後（生き返りの意味で）共にガクランの似合う男、鬼島 政成です！」

思わず一礼しながらそんな事を言ってしまった、いやはや嬉しいです

「そのアイサツはどうかと思っぞマサ？」

リトに呆れられた、チクソウ・・・

イカン！なんか知らんが俺、段々と愉快な性格になってきてる気がする・・・まあ別にいいっちゃいいんだが

「そこん所どうよ？ララ？」

「ん？いいと思っよ！」

いいらしい・・・んじゃいいか？

「何が？ねえ何が？」「さあ？」

そんな俺とララにクビを捻る結城兄妹だった・・・

そんなこんなでボチボチ学校に向かう時間になってきた

「そろそろ出ようぜ？」

リトがそつ言い居間から出ようとするが、ちつと待て！

「弁当忘れんなゴラァ！、俺と美柑の合作スペシャルだつつのに  
」！

全く！会心の出来栄えだぞ！ちなみに弁当箱は都合よく全員分あ  
つたぞ

「あつ！悪い！」

「つたくオマエはアレか？新婚のリーマンなんかか？俺にあなた  
く弁当忘れてるわよ」って玄関先まで持って来てもらいたいのか、  
オウコラ？」

つわ自分で言っておいてアレだが、ないわぁ、コレはない！マジ  
でない！

「気持ち悪いこと言つな！」

「いや悪い反省してる！ついリト（ツッコミ）を見るとポケたくな  
つて」

「リトと書いてツッコミと読んだ！」

異世界ギャグだ！小説だからできること

「うっ、リト羨ましい・・・まさかホントにリトがライバル？」

「ララさんそれはないと思うよ多分？」

イカンイカン！このままではリトエンドになってしまっ  
リトはあくまで相方だぞ

「一応言っておくが俺にその手の趣味はないからな？」

「「だよね」」

ララと美柑は納得してくれたようだ、いや良かった良かった  
自分が蒔いた種だけどね！

んじゃ今度こそ！っのその前に冷蔵庫からミ〇ミ〇回収！ポスト  
ンバッグに入ってたスポーツバッグに入れていざ出陣！

しかしバッグからバッグって結構シユールだな

「じゃそろそろ行こうや！」

三人に声をかけてやっところさ学校に出発と相成りました！

「「「行つてきます！」」」  
皆揃ってアイサツ、連帯感があるな！

それからテクテクと学校に向かう俺達、途中で美柑が

「じゃあ私こっちだから、リト、二人をお願いね？主にマサさん！」

と離脱宣言、後なんか心配された何故に？とは言わない、けど悲



しい

「ああ気をつけてな美柑！」

それにリトが返事を返してララと俺も

「行ってきまゝす！じゃあまたね美柑！」

「美柑？何か変な人が襲ってきたら俺を呼べよ？直ぐに血達磨にしてやるからな！」

って返事を返す、美柑はそれに

「マサさん過激だね、それにマサさん以上に変な人はいないと思うけど・・・でもわかった何かあったらよろしくね、ララさんもまたね！」

って自分の学校に向かっていった、しかし俺ってそんなに変な奴だと思われてんのか？

「なありト、俺ってそんなに変か？」

「うん変だ！今までで俺が会った人の中で1番変だと思っぞ？」

だってさ！チクソウ、自覚はあるがそこまで言われたらマジに凹む

ガツクリと俺が肩を落としてたらララが

「マサ！元気出して！大丈夫、私はマサがちょっとくらい変でも好きだよ？」

つつて言ってくれた！ちょっとだけキュンとした、惚れはしないがな！

けどララさん・・・変な人なのは認めるんですね？チクソウ宇宙人にまで変人の烙印を押された・・・

「行くか・・・」

俺はそう言つとトボトボと歩きだす

「アレ？なんでマサ、ますます落ち込んだじゃったんだろっ？」

「それやそうだろ？俺や美柑ならともかくララにまで変人認定されたんだから」

リト解説どうも

「ゴメンねマサー！」

「リトガード！」

「落ち込んででもそこはシツカリすんのかよ！」

ララ抱き着いてくる俺リトを差し出すリト、ツッコミの流れでした

仕様です！

そんな感じでコチャコチャしながら学校に向かっていたらポツポツと制服を着た人が見え始めた

しかしなんだからかなりジロジロと見られてる何故？

「ってそらそうか、俺だけガクランだものなちなみにリトララの制服はブレザーです」

「なあ？やっぱ俺ってアレか？他校の生徒が力手込みにきたと思われてんのかな？」

俺が軽くボケつつ（半分くらいはマジだがな！）そう聞いたら

「マサがカツコイイから皆見てるんだよきつと！」

「ただガクランだから珍しいだけだつて！発想が怖いわ！」

それぞれそう答えてくれた

「リト君正解！ララ眼科に行きなさい！」

ララさんや流石にそれはないと思うのですよマサさんは不細工ではない！不細工ではないですよ

「もう！マサはわかってないよ！マサ、カツコイイのに！」

「いえケフィアです！」

「話し繋がってねえ！！」

仕方ないじゃないか！いくら俺だつてそこまで言われたら流石に照れるっつうの！

「アレ〜？マサ？照れてる？照れてる？マサ可愛い〜！」

ギクリ！ばれた！つうかララさん男に向かって可愛いは失礼です！

クツ・・・かくなるうえは・・・

「そお〜い〜！」

『バチン』

「イデッ〜！」

とりあえずリトにデコピンしといた、加減はした、スマン、リト・・・仕方がなかったんだ俺には・・・俺には・・・こんなことしか出来ない・・・」

「意味わかんねえよ！」

どうやら途中で声に出てたらしい

そうこうしてる間にも学校に到着した、ふむふむ・・・彩南高校ねえ・・・さいなんってオマエ・・・不吉だなおい！

「リト？不吉じゃね？この高校ナマエが不吉じゃね？」

「言つな！それは思っても言っちゃいけない決まりなんだ！それに縮めれば彩高だから！」

なるほど！彩高、さいこう、ですか・・・なるほど・・・なるほ

ど・・・

「ララさ〜んリトの座布団持ってっちゃって！」

「べっ別につまりいこと言おうと思ってないから！ホントだぞ！」

嘘つけ吃ってんぞ！

「ん〜マサ？リト座布団持ってないよ？」

しまったララには難易度が高かった！

「日本人の様式美だから気にするな悪いのは全部アイタタ〜な事をいったリトだから！」

とりあえずそう言っといた

「チクショー・・・さっきまでの俺を殴りてえ〜」

リトが凹った気持ちは解る！

「アレ？リトどうしたの？」

「コラ見ちゃいけません！」

「ひど過ぎるー！」

とイカンイカン！注目を集めとる

「リト君やそろそろ行きまっしょい！スター気分になってしまっ！」

寧ろ殆どの皆さんがアレな奴を見る目だな！

フツ……もうなれたわ……嘘です悲しいです！

「マサのせいだろ？いや半分くらいは俺も悪いけどさ……じゃ校長室に行くか？ララもついてこいよ？」

「ハ〜イ！」

で俺達は校長室へと移動を始める、するとそこへ

「おはよう結城君！ララさん！アレ？その違う制服着てる人は？」

と声をかけてくる女の子、むっ？むむむ……この子もどっかで……どっかで……クソウ、知識役に立たねえなオイ！

「おはよーハルナ！えっとねこの人はマサだよー！」

そうそう！春菜だ春菜！リトが惚れてる子だったか？だよな？多分確か……！

「ッ！おっ……おはよう、はっ……西連寺！」

おっ正解！リト君？この様子だとやっぱり惚れてますな！つつか途中までナマエ言いかけて言い直すなよな

「??？」

そしてララよその説明では解らんと思うぞ？

まあとりあえずは

「リトララ、カモン！悪い春菜はちっと待っていてくれ！」

そう春菜に言っつて、俺はリトララを連れて打ち合わせ！

春菜は俺の言葉に

「えっ？あっうん！」

つって素直に従ってくれた、うむうむ素直な良い子ですな！

「ふえ？何マサ？急にどうしたの？」

「そうだぞ、それにいきなり春菜ちゃんの事を名前で呼びすてって・  
・」

俺が二人を春菜から少し離れた場所に連れてつたら、二人はそう  
聞いてくる

しかしリト君や、さっきは西連寺っつて言っつてなかつたかね？

まあいいさね

「リトや？オマエが惚れてる奴っつて春菜だろ？」

「ええ〜！そうなの？」

「なっなんでわかつた！」

フツ・・・もはやアテにはできんくらいに薄くなった知識だ！まあそれは言わないが

「わからいでか！でだリト、オマエなんで春菜ん事を西連寺って苗字で呼んでんだ？今は春菜ちゃんって言ってるくせに？」

俺がリトにそう聞いたらリトはもごもごしながら

「いや・・・だって・・・その・・・」

とかなってる、うぐむ、純情ですな

「なあリト？オマエと春菜ってこの高校からの知り合いか？それとも中学？」

「いや・・・中学からだけど・・・でも中学ん時はあんまり話さなかったし」

ふーむ！そうだったか・・・中学からの付き合いねえ・・・

そついやさつき春菜って自分からリトに声かけてきたよな？つうことはアレか？少なくとも嫌われてはいないと

まあリトみたいな奴を嫌いになる奴はいないと思うが

よし！とりあえずは

「ララ！チーム『リト恋』の初ミッションだ！まあ美柑はいねえけど」

「ふえ？何々？何するの？アツわかった！ハルナにリトが好きだっ



て教えてあげるんだね！オーイ、ハルナ〜！」

イカン！ララが暴走モード！つうか流石にそれはマズイ！色んな意味で終わってしまう！

「落ち着けララ！そうじゃねえ！そうじゃねえから！見るリトがあわわあわわ、してんだろ？それにこついうんはリトの口から言わすべきだ！」

慌ててララを止めました！ん？何？オマエがそれを言つとな？ほっとけ！宇宙意志だ

ちなみに春菜には気にせんといてとも言っておいた

「アッ！そくだよね？ゴメンねリト？」

ララもわかってくれたようでリトに謝ってる、うむうむ！

「ハア〜心臓止まるかと思った」

オマエ、どんだけグラスハートなんだ？いやまあ解らんでもないが

「でっで？何するのマサ？」

おっとララがミッション内容を聞いてきたな

「まずはお互いに名前呼び合おうって事でリトに春菜の事を名前で呼んでもらう！むろん春菜にもリトの事を名前でな！」

単純な事だけどなんかそっちの方が仲良くなれそうだしな

俺が基本的に下の名前で呼んでるのもそれが理由だったような気がするし……

嘘です性格です！

「え？それだけ？」

ララは俺の考えになんか拍子抜けしてるが

「まあ小さな一歩から始めようって事で？それにリト見てみ？」

「あわわ！はっ春菜ちゃんになっ名前で……プップシュー！」

頭から煙り出してるし、どんだけ純情なんですかりト君？

「つつわけでコレ以上は酷だ！」

「えっうんわかった！でどうするのハルナにリトを名前で呼んでって言うの？」

ふむ、そこなんだよな、さてどうしたもんか……強引に切り込むか？

「まっマサ……別にいいよ俺……」

俺が悩んでたらリトがそんな弱気な事を言ってきたのでそんなリトに俺は気合い一閃

「リトのバカアアア！！！」

『ズバン!』

「グハァー!」

虎さんの必殺技スリークォーター・アッパーのスマッシュを打ったとききました!

加減はしたよ!

「なつ何すんだよマサ!」

中々に早い回復!リトが俺に文句を言ってくるがそんなリトに

「リト?春菜ってのはアレか?下の名前で呼んだくらいで怒り出すような心の狭い奴なのか?」

少々搦手で攻める事にした、俺がそう言つとリトは

「なつ!んなことない!春菜ちゃんはそんな子じゃない!」

うむうむ!怒ってる怒ってる!よしよし

「なら名前で呼ぶくらいいいじゃん?そっちのが仲良くなれると思っぞ?なあアラ?」

「うんうん!そうだね私もマサもハルナって呼ぶよ?だからいいじゃん!」

うむうむ!だからの意味はよくわからんがアレだな皆で渡れば怖くない理論だな!

中々にやるなララ！まあそこまで考えてねえと思うが

「そつ・・・そつかな？」

よしよし！リトもそんな気になってきたな！

「それにアレだ？少なくとも春菜はリトのことを嫌ってはいねえはずだ、俺だったら嫌いな奴には自分から話しかけたりしねえ」

「そつかな？そつかな！？」

大分その気になってきたな、後一押し！

「おうさ！それにリトはいい奴だぞ？オマエみたいな奴を嫌う奴なんていねえって！なっララ？」

「そつだね！リトは優しいし！」

俺とララとのダブルアタック！まあ本音だけどね！

リトはいい奴だぞ？面白いし！

「うっうん！わっわかった！俺！春菜ちゃんのことを西連寺って呼ばないで春菜ちゃんと呼ぶよ！」

そつ言っつて覚悟を決めるリト！うむうむ！まさか春菜と呼ばすだけどここまで労力を使うとは・・・

けどリトにとっては一大決心でもあるんだよな？

さて後はキツカケだけつと

ん！そうだ！

「後はキツカケだけだが、リト春菜って弁当か？」

「えっうん確かそうだったと思うけど」

よしよし！

「なら今日は春菜を昼メシに誘うぞ！、そんな時に俺がそれとなく言ってみる！

一緒にメシを食ってたら自然と仲間意識みたいなんが強まるからな！

したら自然と名前を呼び合つくらいな事はできる気がする！リトいいか？」

うむうむ！我ながらなんかいける気がするぞ！

「おお！すげえマサ！なんかそれなら俺でも大丈夫な気がする！」

「うんうん！すごいマサ！頭いい〜！」

よせやい照れらあ！

「よし！なら春菜を昼メシに誘うぞ、ララ援護よろしく！リトも出

来ればでいいから援護してくれ！では行くぞ！」

「わかった！」

「ああ！」

いざ出陣！

という事でまずは春菜に自己紹介しねえとな！

「いやあ悪い悪い！春菜でよかったよな？俺は鬼島 政成ってんだヨロシクな！」

「えっあつうん、よろしく鬼島君だね？」

うむ！中々に好感触！しかし鬼島って言われてもピンとこねえな我が名前ながら

「マサでいいぞ？」

「えっ？わっわかったマサ君って呼ぶね？」

うつりトの視線が・・・スマン、リト！どうしても気になるんだ！

キミには昼メシん時に名前でもらえるようにするから我慢してくれ！

「えっと結城君の知り合いなの？それに制服が・・・ララさんも制服着てるし？」

さてなんと答えるか？つうか春菜ってララが宇宙人だって知ってたか？

いや知らなかったはず？どっちだ？とりあえず無難に答えるか

「ちょっと事情があつてなりトん所で居候させてもらってんだわ！ララは今日からここに通うから制服着んだよな？」

「うん！私、今日からここに通うんだ！マサもだよ！今から校長先生の所に行く所だったの！」

まあ俺が通えるかは解らないんだけどな！

「そうなんだ、だから制服がちがったんだね？」

おつうまい具合に転入生とかつて思ってくれたな

「そゆこと！まだ制服ないんだわ！」

とりあえずはそう言っておこう！

「でさ俺ら今日は弁当なんだけど春菜も弁当か？」

先ずは確認！

「えっうんそうだけど？」

よしリトの情報の通りだな！ララいけ！すかさずララにアイコンタクト！

「ホント？だったらハルナも一緒に食べよう！皆で食べたら美味しいよ！」

「ナイス！いいぞララ！」

「えっ？いいの？」

「むむ？なんか遠慮してるっばいな？もうちつと強引に攻めるか？」

「そうしようや！実は俺らん弁当は特別製でな？一緒に食べる人が増えるとなんと10%づつ美味さが増すんだ！」

「まあ実際は皆で食べたらの弁当でも美味さは増すんだけどな？少なくとも俺は」

「はっ・・・西連寺もいつ一緒に食べようぜ？」

「おっ！ここでリトの援護射撃！いいぞリトちつと吃ってるけどよく頑張った！」

「えっ？うっうん、わかった！それじゃお昼休みに一緒に食べようね？あっ！それじゃ私、先に行くね？今日、日直だから」

「春菜はそう言う就先に教室に向かって小走りで走っていった、そして俺とララは」

「「イエーイー！！」」

「パン！」



って思わずハイタッチ！

「きつ緊張した〜！」

リトはかなり緊張してたみたいだな、しっかし

「いやー！よくやったリト！頑張ったな！」

「うんうん！やったねリト？」

俺とララがリトと背中をバンバンと叩きながらそう言っているとリトは

「ゲホツゲホツ・・・痛つてー！叩きすぎだ！」

って咳込みながら言っていたが続けて

「サンキューなマサ？ララ？」

ってお礼を言ってくれた、いや寧ろこちらこそだっつもの！

リトの頑張りに感動したわ！

「まあ後は昼メシん時だな？」

俺はリトにそう言ったらリトは力強く頷いた、うむうむ！コレなら大丈夫っばいな！

ってそうだった！大事な事忘れてた

「なあ俺ってこの高校通えんのかな？」

「「あつー!!」「」

オマエらも忘れとっ たんかい!

「とっとにかく校長室に行くぞマサ!そろそろ時間もマズイし!」

で俺達は急いで校長室に向かったのだった・・・

大丈夫か?俺?

### 第三話っぱい感じ！（後書き）

後書き

こんなのボク的美柑タンじゃないやい！  
と思われたかた！

書いてる人もそう思います・・・ゆっ許して！

とっとりあえずはここで一旦きります！  
もうなんかどの辺で切ればいいのか解らない・・・チクソウ・・・

## 第四話っぱい感じ！（前書き）

前書き

人数が増えらるとうまく書き分けができません・・・

チクシヨウ、うまく書き分けできる人がうらましいッス・・・

何時も通りに胃薬的なものを片手にどっぞぞ

## 第四話 っぽい感じ！

「ここが校長室だから」

リトの案内で校長室までやってきました！さて俺は彩南高校に通えるのか？

「次回！マサと学校と不思議な校長室でお会いしましょう！  
キミは真実を見つけられるか！」

「意味がわかんねえよ！つうか始まったばかりだから！」

うむ！ついつい・・・けど掴みとしては弱かったな

「とりあえず入るぞ！」

俺が軽く反省してたらリトがそついいながらドアを開けてくれた

『ガチャ！』

「ゴクリ・・・こっこいつはすげえや・・・」

「マサどうしたの？」

いやいやいやララさんや！だってオマエ、アレですよ！いや確かに確かに、こんな奴でしたよ？

けどおまつ！生はすげえって！マジやばいって！どの角度から見ても変質者に見えんぞ！

「こうなんつつか思わず通報しないといけないような気持ちにさせる！」

はっ！なんかエライ事に気付いた！

「なつなありト・・・この際だ俺が変なのは認めよう！自覚はある・・・けど俺ってアレよか変なのか？」

コレだけはコレだけははつきりさせておかなければ！

俺が校長？を指差しながらリトにそう聞いたらリトは

「・・・うつくん・・・方向性の違い・・・かな？」

悩みながらもそんな事を言いました・・・

つつかなんだそのバンド解散した理由みたいな返しは・・・チク

ソウ鬱だ・・・

「ちよつと俺、電車に引かれてくる・・・ハハ・・・今なら逝ける気がするわ・・・」

「わあ～！落ち着けマサーー！ララ止めるー」

「えっくん！エイ！」

リトがララそう言ったらララが俺に抱き着いてきました

『ギョッ！』

「えっアレ？いつもだったらリトになってるのに？」

俺にアツサリ抱き着けた事に驚くアラ

へへッ……『リトガード』する気力もねえよ……

「あわわわわ、マサ！悪かったホント悪かった！マサはアレだ違うから！マサはアレとは違うから」

流石のリトも事の重大さに気付いたらしい必死に校長？を指差しながらそう言ってくるが

「……解んのかよ……オマエに……オマエにアレよか変人って言われた俺の気持ち解んのかよオオオオ！」

魂の叫びだった！

「あ……ワシ……泣いていい？」

アレからなんとか落ち着きを取り戻しました

危なかった、ミ○ミ○がなかったら俺は間違いなく二回目の死を迎えてた

流石はミ○ミ○、俺に勇氣と希望を与えてくれるぜ！

っつそうだったそうだったとりあえずはアイサツせんとな

「どうも鬼島政成です、いやー、さっきはスンマセン、なんかア  
ンタと同じくらいの変人って思われたらつい死にたくなっちゃって  
」！

「チミ失礼だね？」

なんか俺のアイサツが気に入らなかつたみたいだ、でも妥当じゃね？

つとそつだ俺をこの学校に通えるように頼まねば！

俺がその事を思い出して、交渉に入ろうとしたら先にララが

「校長せんせ、あのねマサも学校に来たいんだって！でね、私とマサもリトと同じクラスにして欲しいの！」

つて校長に頼んでくれた、いや助かるけどララさんや、その頼み方は強引じゃね？

「ええよ！」

いいんかい！いやてつきり、俺が男だからダメとか言い出すかと思つたん・・・

「ララたんがチューーしてくれたらアアア！」

「デメエは机とキスしてろ！！！」

『ガシツ！』『ドゴン！！』

いきなりララに飛び掛かってきたのでとりあえず頭を掴んで沈めときました

「よおーし！言質は取つた行こうぜい！」



俺が二人にその声をかけたらリトが

「いっいやマサ？やり過ぎじゃないか？校長、机に刺さってるぞ？」

つってきたがリト君はわかってませんな

「いんだよ、あの手のタイプは例えICBMの直撃うけても、次の日にはケロツとしてやがるから」

つつといた！でララは

「やったねマサー！」

「いま復活のリトガード！」

「やっぱりかよ！」

フツ・・・ララよ、復活したマサさんに隙はないのだよ！

ちなみにさつき校長を沈めたのはアレですよ嫉妬とかではないです

というかアレを見逃すような奴はダメだと思う、何をやってるでしょうね警察は？

まあそれはともかく

「リト君や次は職員室かね？」

次に行く場所をリトに聞くとリトは頷きつつも案内してくれた

で職員室到着！

「たのもー！ー！」

今度は俺がドアを開けました！

ってうおう！注目の的！やっぱり「たのもー」はマズかったか？

「ねえねえマサ？今の何？今の何？」

俺がそんな事を考えてたらララがさっきの俺の入り方にそう聞いてきた

「日本人的な様式美だ！こういう時に気合いを入れる為に使うのだ  
！」

「へえ〜！じゃあ私も、たのもー！」

おう！信じた！ララは素直な良い子です！

「いつの時代の人間だ！ララも真似すんな！」

うむうむ！流石はリト君ナイスなツツコミですな！

「えっと・・・キミ達は？」

リトに関心してたら先生さんに声をかけられた

ふむ、チラリとララにアイコンタクトついて来れるかララ！

「今日からこの学校で世話になります転入生Aです！」

「えっと・・・あっ！転入生Bです！」

おっ！気付いた！やるなララ、ん？なんか褒めて褒めてオーラが出てるな！

「よしよし！成長したなララ〜エライぞ〜」

な〜でなでつと！

「エへ〜！」

うむうむ！嬉しそうにしちゃってまあ、可愛い奴め！

出来たら褒める躰の基本だぞ！

「ダメだコイツら早く何とかしないと・・・」

なんかリトが呆れてるな、おい！リトサボるな、オマエがツッコミしないでする！

「ほらリト！頑張れええ頑張れ！」

「何が！あっ！ツッコミか？ツッコミなのか！？何で俺が！？つつかマサが原因だろうが！」

なんののかんと文句を言いつつもツッコミしてくれるリト君に愛を感じました！

流石はリトだね！

「ふむ・・・誰かと思ったら結城君かね？」

「おや、なんか爺ちゃん先生が声をかけてきましたぞ？リトの担任か？」

「しかしなんつうかアレだな・・・安心する・・・こうジジイとは全く違う癒しのオーラが出とります、この爺ちゃん先生！」

「あつ！骨川先生！」

「骨川とな！いや特に反応した意味はないけどね！」

「どうもツス！リトんクラスん担任の先生ツスか？」

「一応は確認しとかないとな！」

「ふむ、そうじゃが？」

「よし正解つと！」

「今日から骨川先生んクラスで世話んなる事になった、鬼島 政成と」

「ララ・サタリン・デビルークです！よろしくねお爺ちゃん先生！」

「今度は一応ちゃんと説明しときました！」

「しかしララのフルネームそなんだったとは！」

「ふむ・・・わかった、むっ？鬼島君だったかの？キミはこの学校の制服ではないの？予備があるから着替えなさい」

「およ？意外とアツサリしてんな？つうか予備があんのかい！」

「うーッス！わか「いけません！骨川先生！」」

「およ？返事しようとしたら阻まれた！つうかそらそうだよな？いきなりすぎなものな」

「まあ一応校長（変態）の許可は取ってるからその事を言えば」

「こんなにこんなにガ克蘭が似合ってるっていうのにブレザーを着せるなどもつての他です！」

「そっちかい！」

「むっ！教頭先生？」

「しかも教頭！」

「全く！骨川先生は何を考えてるんですか！こんなにもこんなにもガ克蘭が似合う生徒なんて私見た事がございません！」

「アア〜教師生活苦節ウン十年・・・続けてきてよかった〜！ありがとうございます神様〜！」

「ヤベエこの人もヤベエ」

「なありト？この学校はアレか？偉くなっていくと変態になってく」

のか？」

「いや何て言うか・・・俺も驚いてる・・・」

流石のリト君も言葉がないようです、そして爺ちゃん先生ほったらかしだし

「鬼島君といいましたね！あなたは特別ガクランでの登校を許可します！他の先生方もよろしいですね！異論は認めません！」

いやすげえわこの人、流石の俺も軽く引くわ！

「やったねマサ！マサその恰好似合ってるもんね！」

おいララ落ち着け！取り込まれるぞ！

「えっと・・・爺ちゃん先生・・・そろそろ行かねッスか？」

「とりあえずは逃亡だ！早くここから離れるのだ！」

「うっうむ、では行くのか？」

で俺達が職員室から出ようとしたら教頭に肩を掴まれ

「お待ちなさいな！写真！写真撮ってよろしいですか！？」

つつて写真をパシャパシャやられました

「あっ！教頭せんせ！私も欲し〜！」

ララも教頭から写真貰ってました

美柑・・・この学校は怖かところとです・・・この学校には魔物(変態)が住んでいるとです・・・

【マサさん！元気だして大丈夫だから、ねっ？】

心の中の美柑に励まされた！優しい美柑に元気が出た！

【マサさんも負けてないから、あつマサさんは変人か？】

心の中の美柑に凹まされた、厳しくもあつたチクソウ・・・

「マサ？マッサッ！どうしたの？ボーとして？」

ハッ！イカンイカン！

「大丈夫！大丈夫だ、俺の魂は今だ折れちゃいねえぜ！」

「？よくわかんないけど元気出た？ならよかった！」

おう！ララさんも優しいねえ、しかしアレだなツッコミはどつしたんだろ？

「なあララ、リト(ツッコミ)は？」

「リトなら先に教室に行ったよ、マサにも声かけてのに」

むむ？気付かなんだわ・・・しかしリトよララにもリトと書いてツッコミで通じたぞ？

「ふむ……ついたの……ではワシが呼ぶまで少しだけ待ってなさい」

脳内コチャコチャしてたら教室に到着しました

『ガラッ!』

「」「」「おはようございます!」「」「」

うむうむ、元気なクラスですな!良いことです

「楽しみだなララ!オラわくわくしてきたぞ!」

「そうだねマサ!エへへ」

うむうむ!ララも楽しみみたいだ!

うむうむ……ツッコミが欲しいです……

「はい、おはよう……では……えっと……ふむ……なんじやったかの?」

「」「」「さあ?」「」「」

マジかい!イカンこのままでは放置プレイ!

『ガラッ!』

「忘れんなアアア!」



侮れねエ！爺ちゃん先生、侮れねえよ！

「ギクリ！うつ！！」

『ドサツ』

アレ？大声出しすぎた？えっ嘘？マジで

「アレ？お爺ちゃん先生倒れてる？それにお爺ちゃん先生の後ろにもう一人のお爺ちゃん先生がいる！」

俺も見える、あつなんか切符買ってやがんな……  
……ハッ！

「爺ちゃん先生ソレ買っちゃイカアアアン！ソレ片道イイイイ！」

「ハッ！」

何とか爺ちゃん先生は意識を取り戻しました

危なかった……危うく転入初日に担任ティーチャーを黄泉送りにするところだった

しかし大丈夫か爺ちゃん先生？なんか油断したらまたヌルリともう一人の爺ちゃん先生が出そうで怖えんだけど

「ふっ……ふむ、今日からこのクラスに二人転入生がきます……では自己紹介を」

だっ大丈夫っばいな？

よし、んじゃ自己紹介をば！

「どーも！今日からこの学校に通う事になった鬼島 政成です！マサって呼んでやって下さいな！

後、ガクランなのは気にせんで下さい、理由は教頭とだけ言ってきます！次ララ！」

まあ無難にこなしましたな！

「えっ！あっうん！えっとララ・サタリン・デビルークです！私も今日からここに通う事になったからヨロシクね！」

おっ！ララも意外と普通に自己紹介したな？

おう！なんかクラスメイツがざわついてんな、まあ急だったしな！

しかも一回で二人だものな！

「うわ、あの人ガクラン異常に似合ってるし、それに結構カッコイイかも・・・」

「そう？微妙じゃない？」

「うわっ！あの子メツチャ可愛い！お近づきになりて〜！」

なんか盛り上がっとりますな！まあとりあえず席に

「後！マサは私の旦那さんになる人で〜す！」

なんかララがエライ事言いやがったよ！

しかし想定内の出来事さ！

ここは冷静に冷静に

「じゃあ俺はリトの嫁って事で！」

ボケろ！

「やっぱりリトがライバルだったんだ！リトには絶対に負けない！」

うむ！流石はララ！今日もランナーしてんな！

「えっ？うそっマジ？結城ってそんな人だったんだ……」

「危ない三角関係？」

「結城君……」

うむうむ！クラスメイツもいい感じ！

「オイイイ！マサアアア！昨日に引き続き何言ってくれちゃってんのオオ！つうかララも皆も信じるなアアア！」

おう！怒ってますな！リト君すっごくいい感じ！

しかしアレだな、うん流石にちょっとマズイよな……謝っとく

か？

「悪いリト！二度ネタだったわ！」

「謝るところが違いエエ！！」

リトの叫び声が教室に響き渡った

結城さん家のリト君はとても元気です・・・

でアレから自分で蒔いた種を刈り取って空いてる席につきました、  
ララも俺の隣になった・・・スマン生徒Dオマエの犠牲は忘れない  
よ・・・

後、なんか一人の女子生徒が

「転入生と結城・・・アリかも・・・」

とか言っていたが俺には何の事だか解らんかった・・・ただ・・・  
なんかその爛々と輝く目が恐ろしかったです・・・

で只今授業中！

「ふむ・・・さっぱり解らん！」

俺には難易度が高すぎる！こんなんだったら、ねえちょっと面白い  
事言っつて！って言われた方がまだ何とかなる！

嘘です・・・そつちのが厳しいです・・・

『キンコンカン〜コ〜ン！』

おう！脳内コチャコチャしてたらいつの間にやら休み時間に

「ララ〜！俺ももう無理ッス・・・頭がパーンてなりそうだ・・・」  
勉強は苦手です！

「マサ〜！元気出して！エイッ！」

「リトガード！」

「うわっ！結構離れてたのに！」

もはや条件反射なのです・・・

「なあリト〜学校に授業っていらなくね？必要じゃなくね？」

「それじゃ学校の意味ないじゃん！」

わかってねえ！わかってねえよ！全く何を言ってるのやら・・・  
リト君は・・・

ん？なんだ？アレ？めっさ人だかりが出来とるし！

ってアレ？ララが消えた！

「ララがアブダクションされた！」

「いきなり何言ってるんだ？ララはホラあっちの人だかりにいるぞ？」

あつ！やっぱり？つうか俺にはねえんでござえますか？

「ねえねえ鬼島だっけ？」

おつ？

「待ってましたー！後マサでいいぜい！」

わあーい！俺にも来たぞ嬉しいね！

「さあーこい！質問こーい！ジャンジャンバリバリ答えてくぞー！」

張り切って行ってみよう！

「マサ？実は淋しかったんだな・・・」

そつそそそんなことないわアア！べっべ別にララが羨ましかった訳じゃないよホントだよ？

「うわゝ強烈かもこの人・・・」

ぬあつイカン！質問女子がドン引きしとるがな！

構わん！進め！

「で？ユーはだれぞ？」

「私？私は初岡 里沙、よろしく！じゃあマサマサって呼ぶから？」

マサマサとな！

まあいいさね！なんかフサフサみたいでアレだけど

「で里沙君は何を聞きたいのかね？答えててくよ！さあさあさあ！  
ドーンとこい！」

さあこい！やれこい！べっ別に質問に来てくれたのが嬉しかった  
わけじゃないからね！

勘違いしないでよね………キモいなコレ？我  
ながら……

「いやそんなに構えられても困るんだけど？つとそうだ！春菜と未  
央もきなよ！マサマサ新種のオモチヤみたいで面白いよ！」

こいつ失礼じゃね？新種のオモチヤとかって言い過ぎじゃね？

ん？アレ？今、春菜って言わんかったか里沙んやつ？もしか友達？

「ちょっと里沙、いくらなんでも失礼だよ？ゴメンねマサ君？」

「そつだよ里沙！」

おう！やっぱり！

「ういつす春菜！朝ぶり！たつた今、里沙に新種のオモチヤ扱いさ  
れてとつても悲しいマサさん事、鬼島 政成です……後ろん子、  
確か未央でよかったか？」

まあ実はそこまで悲しんではないがな！もう開き直ったわ！

「あはは・・・マサ君ってそんな性格だったんだ・・・」

おう！春菜が呆れてます！

「ねっ？新種のオモチャみたいでしょ？って春菜ってマサマサと知り合いだったの？」

「えっ？うゝん？今朝校門で会ったばかりだけど？どうなんだろう？」

「へえ、会ったばかりなのにマサ君ね」

イカン！なんかガールズトークに突入した！

マズイマズイぞ！ん？アレ？さっきからリトが静かだなオイ・・・  
ってリト！オマエ何そ〜っと離脱しようとしてやがんだゴラァ！

「逃がさん！俺をあの戦場に一人にするな！」

『ガシッ！』

リト捕獲！

「ちよっ離せマサ！頼む頼むから！」

離さねえよん！つつかりト、オマエ、春菜がいるから逃げよう



したろ？

今朝の勇氣はどこいった！

とりあえずはリトを無理矢理に引きずり込んで、なんかこつち見てビツクリしてる春菜達のところに

「いや〜スンマセンねえこいつシャイなアンチクショウなもんで！ほらリト！皆に挨拶なさい！母さんリトをそんな子に育てた覚えないよー！」

「育てられた覚えねえよ！つうかオマエみたいな母さんイヤだわ！」

「もうこの子ったら・・・ホントごめんなさいね？難しい年頃だから・・・でも根はいい子なんですよ？仲良くしてやって下さいね？」

ホントにリトはいい奴ですよ？つうかこのキャラ、キモいな？って俺が考えてたら

「いえいえ！お宅の息子さんはとってもよく出来た子ですよ？だから安心して下さい奥さん」

おう！里沙がのってきた！ノリいいなこいつ！

「いい加減離せマサ！つうかオマエ転入初日だろ！なんで転入初日の奴に紹介されないといけないんだ！後、糸岡もノルな！」

つむつむ！流石はリトですな！いや安心感があるね！ツッコミが

「結城君って結構喋る人だったんだ……」

「うん私も驚いた……て言うか里沙もなんでのつたんだろ？」

ふうむ、こんクラスじゃリトってあんまり喋るキャラじゃないみたいだな？

こんなにツッコミうまいのに……もったいない

「で何の話ししてっただけ俺らって？」

すっかり脱線しまくっていたので話しを戻す事にした

「いきなり素に戻ったねマサマサ！」

「切り替えの早さに定評があるからな！」

じゃねえと、やってられんですよジジイの相手はな！

「疲れる……すげえ疲れる……」

なんかリトがグツタリしてんな？まだまだ序ノ口だぞ？

「えっと大丈夫？結城君？」

そんなリトを春菜が気遣ってんな、よかったなリト！

「うっ！あっああ大丈夫！ありがとう西連寺！」

ふうむ、リトの態度がまだちつと堅いねえ？まあそれは昼メシん

時だな

「ってそうそう絶賛質問受け付け中って話しだったんじゃね？」

いやはやどうも脱線しすぎて困るね

「そうだったそうだった！ねえマサマサってララちーと付き合ってるの？」

こいつはいきなり何を言ってるんだ？

「あつソレ私も気になる！どうなの？」

未央までかい！春菜はなんかオロオロしてんな

「いんえ当方にはそんな事実のごぜえませんが？まあ仲が良いんは認める！ララはいい奴だかな！」

とりあえずは正直に答えとくます

「ふうん、じゃあ結城と？」

「えっ嘘！結城君？」

里沙さんや、さっきも言ったがそれはネタだったつうのに！しかも  
その顔、わかってて聞いてやがんな

後、春菜は驚きすぎ！リトの顔色がエライ事になっとりますかな！

「それこそありえん！リトは相方です！ツッコミないと収集がつかなくなるからな、まあ俺がやってもいいんだけど」

一瞬ボケようか悩んだが流石にやめときました

「ふうん？結城はツッコミキャラだったと・・・まあ結城の事は冗談として、ほら自己紹介の時にララちーがマサマサは旦那さんです！とか言ってたじゃん？どゆこと？」

ふむ・・・どう言ったものか・・・ん？コレだな！

「ララはどこぞのお嬢様で、ララの親父が決めた婚約者がいやだったって逃げてたんだわ

んでララを捕まえる為にララン親父が部下を放つたらしくてな？昨日たまたま俺がソレに出くわして

で俺がその部下を、そおゝい、したらなんかララに気に入られた、ちなみにリトにもそんな時に初遭遇！なつリト？」

まあ大分はしよてるがこんな感じだろ？

つつか昨日の出来事だったんだねえ、いやはや既にかなり前の出来事みたいだわ

「まっ・・・まあそんな感じだな？ってそついやマサって会ったのって昨日なんだよなあ？実感ないな」

おやリト君もそう思ったみたいだな

「へえゝ！なんかマサマサってララちーの王子様・・・ないわ・・・

自分で言ってるけどマサマサは王子様って感じではない」

「こいつはつきり言いやがりますね！まあ事実だけどね！本人もそう思ってるしね！」

「そこんどこどうよ春菜さんや？」

「えっ私？えっと・・・うん？ない・・・かな？」

「やっぱりらしい」

「つつわけで俺に王子キャラはない春菜にも太鼓判を押されたしな  
「！」

「あっ！「つつ「つつ「めん！」

ん？何で春菜んやつは、あわわしてんでしょうね？

「気にする事はないのに、なあリト？」

「そっそっただぜ西連寺？マサもあんま気にしてないみたいだしさ」

「はい！リト君、ナイスフォロー！小さな事から徐々に慣れていき  
ましよう」

「えっつつうん！わかった！」

よしよし！全く、春菜は気遣いできる子なのはいいけどちいどだ  
け気にしすぎる傾向にあるな

「まあマサマサは王子キャラではないっていうのはわかったけど、ララちいとは付き合わないの？ララちい明らかにマサマサに気があるっばいよ？」

未央までマサマサとな！まあいいけど、にしても付き合っねえ、んな事言われてもなあ

「今ん所その気はねえよ？」

まあ先ん事はわからんけど、俺がそう答えたら今度は里沙が

「ええ〜！勿体ない！ララちい可愛いのに、マサマサはララちいの事キライなの？」

って聞いてくる、しかしなあ？

「確かにララは可愛いやな！まあこっからは俺ん持論だけど、だからって付き合っとか結婚とかってなんか違くない？」

いや確かに彼女や嫁さんが可愛いけりや嬉しいけどさ？

でもそれだけでつつものもな？俺なら可愛いからってだけじゃなくって、『そいつ』だからってのがいいわけよ？

あっ後ララン事は好きだぞ？人間的意味で？」

まあ人それぞれだろうけどな！

ん？この気配！

「マサーー！ホント？ねえホント？エツへへマサ~~~~~！」

「やっぱりララかい！つうか聞こえてたのかよ！まあここは何時も通りに」

「リトガード！」

「ぬあっ！~！」

「リトを差し出す！しかしララは学習したらしい」

「へっへん！甘いよマサ！エイ！」

『ダン！』

「なっなにい！上だと！」

「つうかララさんやスカートで跳ぶのは止めなさいパンツ見えとるよ？」

「もらったー！」

「どうやらララ、既に勝利を確信してるらしい、しかし残念相手が悪かった！」

「甘え！サトウキビより甘え！」

「ひょいっ」と

「わきざ〜！」

あつ！こんままじゃ床と顔面ごつつんだな？流石にそれは可哀相か？

じゃないねえ！

『シユパ！』

俺は既に床直前まで来てたララに向かって足を延ばしてララを支える

「よいしょと！」

んでそのままララを引き起こしてやる

まあ手でやってもよかったんだが、足ん方が近かったしな、でここから更に

「ちったあ考えて動かんかいこのバカチンがあ！」

『ゴツン！』

「イダッ！うっっ」

ゲンコツへと繋がります、なんかララが涙目なってるな

アン？何だと？オマエが言うとな？そこはサラツと流せ！それが大人と言うものですよ

「ララさんや、んな短いスカート履いときながら大ジャンプはやめれ？たいていの男はエロスの固まりなんだぞ？」



見てみる？男子連中の殆どがギンギラギンのアイウォンチュベイ  
ベーになってんじゃねえか？どうしてくれんの？」

とりあえずこの事は言つとかねばな

「うううでもマサが避けるから」

「それは条件反射だからしゃあねえべさ？大阪の人に『バーン！』  
つてやったら『ううう！』つてやってくれるみたいな？」

参考資料、秘〇のケ〇ミンショーより出展でござえます！

「でもでも、マサが私の事、好きだつて言ってくれたから」

はあ、ララもしつこいお人ですなあ

「それはあくまで人間的つてこつた！まあダチとしては好きだぞ？  
けど残念ながら女の子として惚れてるかと言われればクビを捻らぎ  
るえねえ」

男心は複雑なのだよ

「むゝ！いいもん！絶対！ぜゝつたいマサに好きになつてもらふん  
だから！」

もはやムキになってんなララさんや全くそれは（以下略）だとい  
つ気付くのやら？

まあとりあえずは

「まあ頑張れや？つとリトく起きろく朝だぞく」

「ラランパンチラ？いやむしろパンモロ？で意識飛ばしたリト君を  
起こしますかね？」

「いやはや純情だねリト君は・・・」

「はあくマサマサはかなり手強いみたいね、ララちい大変だなく、  
にしても女の子のパンチラ見てほぼノーリアクションって・・・マ  
サマサ枯れてる？」

「こら里沙！失礼だぞ！俺は枯れてはいない・・・はず？なんか自  
分でも怪しいな？」

「マサさんは、たいていの男からは外れているのつつ事ここは一  
つ！」

「もういいよ！俺は変人さ！」

「確かにマサ君は普通じゃないかも？」

「うんうん！今の所、私の変人ランキングぶつちぎり第一位だね！」

「ぶつちぎりとな！いやそこは待て！」

「変人ではあるよ？認めるよ？けど少なくともこの校長よかは変  
人じゃねえ！」

「コレだけは言っとかないとな？」

「いや校長は変態じゃん？ベクトルが違うし？」

「それならよし！」

「「いいんだ！？」」

なるほどなるほど！里沙もいい所に気付いたね！それなら俺も納得できます

まあなんか春菜と未央の二人は驚いてたけど

『キンコンカンコーン』

おっとここでタイムアウト！休み時間終了です！

「ハッ！」

やっとリトも正気に戻った事だし

「んじゃまた後でな？ララ〜席に戻るぞ〜！」

「ハ〜イ！じゃあハルナまた後でね！」

うんうん！素直な良い返事です！こういう所は素直に可愛いんだけどねえ

俺はそんな事を考えつつ自分の席に戻ったのだった

ハッ！そついや俺っていつの間に教科書とか手に入れたんだろ？

今更ながらエライ事に気付いたが、ふれてはいけない気がしたの  
で、そのままスルーしました。

#### 第四話っぱい感じ！（後書き）

後書き

とりあえずはここで切ります！

かなり苦戦しました・・・そのわりには変なできに・・・ホント  
難しいです・・・

後、マサをガクラン仕様にしたのは書いてる人の趣味です！

隠れ設定として教頭がガクラン好きってのは生徒の殆どは知って  
るとかあります

しかしマサの変人化が進んでるな、なんでこうなった？

## 第五話っぱい感じ！（前書き）

前書き

体調を崩しました・・・後、ネタが弱い・・・なんかマサの勢いが・・・

後、何時も通りにキャラは崩壊してますよ？

それでもよいという強きお方は、毎度の事ながら胃薬的なものを片手にどうぞ！

## 第五話っぽい感じ！

ララ視点

ララだよー！えっと・・・私は今、地球の学校っていう所に通ってます

隣の席にはマサもいます、マサは授業が始まったらすぐに

「無理ツス・・・無理無理・・・昔のエライ人はいいました、数学の出来ない人は既に算数の時点で見失っていると」

とかブツブツ言い出して、頭からなんかケムリを出してグツタリしちゃった

勉強苦手なのかな？

「大丈夫？マサ？」

私がマサにそう言ったらマサは

「へへッ・・・とつつあん・・・やるよ・・・俺あ・・・まだやるよ・・・なあに目が覚めたら氷の世界だったアノ日にくらべりゃあ・・・」

とつつあんって何だろう？よくわかんない、それに氷の世界？またお爺ちゃん関連かな？

そうそう！マサのお爺ちゃんはとっても無茶苦茶な人みたい

私のパパも魔王って言われてて、凄い人だけどマサのお爺ちゃんには敵わないと思う

マサはそのお爺ちゃんのことをえっと・・・ちよつと汚い言葉だけど『くそじじい』って言ってるけどホントはそんなにキライじゃないと思う

だってマサがお爺ちゃんの話をしてる時って怒ってるんだけど、とっても楽しそうだったもん！

それにマサ自身もちよつと変わってるし？

私はもう一度マサの方を見てみるとマサは

「ギバープツ？・・・NONO・NONO・NONO・NONO・NONO・NONO・NONO・NONO・NONO・NONO!」

って言ってた・・・

うーん？やつぱり変？

そんなマサをみながら私はフと思い出す

マサと出会ったのは昨日の夜だったな

私は実は宇宙人なの！それでデビルーク星って言う星のお姫様なんだけど私はその暮らしが窮屈で飽き飽きしてた



そんなある日、パパが決めた婚約者候補と結婚しろ！って言うてきて、私はそれがイヤだったから地球に逃げてきたの

そこでリトと出会って、そうだ！私にはもう結婚したい相手がいる！って言えばデビルーク星に帰らなくとすむって思っ

リトと結婚する！って言い出した、うゝん今、思えばリトには悪いことしちゃったな

リトには他に好きな人がいたみたい、それはハルナの事なんだけど、その事を教えてくれたのがマサだった

私とリトはザステインから逃げてたんだけど、とうとう追い付かれちゃって、リトが斬られちゃう！危ない！って助けに入ろうとしたら

いつの間にかマサがザステインを蹴っ飛ばしちゃってた

その後、またすぐに斬りかかってきたザステインをあつという間にやつつけちゃった

ザステイン、デビルーク星で最強の剣士って言われてたのに、マサには全然相手にならなかったからビックリしちゃった！

ソレでその後に、ザステインを起こしてちゃんと話す事になったんだけど、その時にリトに好きな人がいるって知って

思わず、じゃあマサと結婚する！って言ったらザステインも認めしてくれそうだったから、やった！コレで帰らなくてすむ！

ってはいしゃいでたらマサに怒られちゃったソレでマサに私の本音がバレちゃったんだけど

マサはザステインに

「ララは一人の女の子でララなんだ！」

って言うてくれて、私は凄く嬉しくなった私の事をお姫様なんかじゃなくてララとして見てくれてるって思ったから

その後も

「ララが惚れた相手ができるまで待つててやれ？」

って言うてくれて最後にはパパもブツ飛ばす！って言うてくれた！

本当に嬉しかった！それで私は一気にマサの事が好きになっちゃった！

それで私はマサに結婚したい！って言ったんだけどマサはずっとダメって頷いてくれない

結局、マサが私の事を好きになったら考えるって事になったんだけど………ハア〜

中々うまくいかないなあ〜

でも絶対にマサに好きになってもらおうんだ！

私は頭からケムリを出してるマサをチラッと見て、そう決意した・

・

けどなんだろう？コレからドンドン、ライバルが増えてきそような  
気をがする

ちょっとだけそんな予感が頭によぎった

マサ視点

『キンコーンカンコーン』

辛い戦いだった・・・もはや気力のみだったぜ・・・

何度、スイミング学習しようと思ったことが、まあ初日だから頑  
張って耐えたけどな

にしてもララは楽しそうに授業受けてたな、実は頭いい？

チラッとララを見てみるとララン所にまたもや黒山の人だかりが  
出来てる

頑張れララ！それも転入生の宿命ってやつだな！

さて俺はどうしましょうかねえ

「マサ、助けて〜！」

なんかララが助け求めていますな、どうしましょう？

しゃあない、いきますか！

マサ突貫する！

「はいはい！ゴメンなさいよっと！」

グイツと人波を掻き分けてララン所まで行きララを手荷物感覚で小わきに抱え

「要救助確保！現場を離脱！」

つって人波から離れるララはなんか

「わぁーい！ありがとうマサーー！」

何が楽しいのか、きゃっきゃっ！はしゃいでますな

うむ中々に可愛いです！

したらなんか、ララを囲んでた男子生徒の何人かが

「おい！転入生！せっかくララさんが俺らと話してたのに何すんだよ？」

「そつだぞー！」

とかつて騒ぎだしました、つうかアレだなこいつらもうなんつうかアレだわ

こつ下心がこつ体の至る所から垂れ流しなんですけど？

「なあララ？あんな事を言ってますがまたアツチに戻りたいか？」

一応確認！

「ヤダーー！」

即答ですな！残念無念

「つつわけでまたのご来店をお待ちしております！」

中々に丁寧な対応だな！紳士だぞ俺！

「ふざけんな！生意気だぞ転入生！」

「ていうかララさんを抱っこって羨ましいい！」

おう！俺の対応が気に入らなかったらしい！なんか怒つとる！

全く最近の若者はキレやすくていけないねえ、まあ人の事は言えんけど

しかしここはガマンだ！ここを乗り越えてこそ一流の紳士となる事ができるのだ！

「ハツハツハツ・・・まあまあ落ち着けよ！二度と足腰立たんようにしたるか？クソボケどもが！！！」

よし！紳士だぞ俺！コレからはジェントル・マサと名乗ろう！

「ざけんな！やっちまえ！」

「「おおお！」

何故に！あんなにジエントルだったのに！

「マサ・・・アレは火に油だって・・・」

いつの間にやらリト君が現れて、そう教えてくれました

「ねえマサどうするの？」

どうしようかね？ブツ飛ばしてもいいんだが、転入初日から停学にはなりたくねえしなあ

つつわけで！

「リトパス！」

「えっうわ！ちょマサ！！」

「きゃっ！」

ララをリトに預けてつと

「春菜、窓開けてちょ！」

窓に向かって走る俺！

「えっ！あっうん！」

『ガラッ！』

「サンキュー！春菜！あ〜らよつと〜！」

んでそのまま窓からジャンプする

「窓から逃げたぞ！追え〜！」

男子生徒の皆さんは俺を追って教室から飛び出していった

フッフ・・・甘い甘い！

「えっ！嘘！？ここ三階！まっまままマサ君！どどどどどうしよう？」

およ春菜が驚いてますな！まあそらそうか？

つつかビビリ過ぎッス！心配してくれんのは嬉しいですけどね？

「だっ大丈夫だっって西連寺？だっってマサだぞ？」

「そうそう！ハルナそんなに心配しなくても大丈夫大丈夫！」

リト君、ナイスフォロー！徐々に喋れるようになってきましたよー！

ララも俺って奴がわかってきてますな！

「でっでも〜！」

う〜む、春菜にはちっと刺激が強すぎたかね？

まあこのまま心配させるのも何だしそろそろ出ますか！

『バツ！』

「ハイ！ただいま〜！いや悪いね心配させちゃって！」

俺はそう言いながら窓から登場！

「えっえ！！なっなんで？」

ふむ！何でとな？ならば説明しよう！

「だって俺！窓から出たけど下までは降りてねえもん！飛んだと見せ掛けて下ん所に捕まっただけ！」

単純だけど意外と騙されるんだよねコレって！

俺がそう説明したら春菜はへなへなと座りこみ

「ビツビツクリした〜！もう落ちちゃったかと思ったじゃない！」

つつて怒られた、いや〜悪い事したかね？つつてもこんぐらいの高さ程度だったら俺からすれやあ階段を下りる感覚でいけんだけどな？」

「マサ・・・そんな奴はマサだけだから・・・」

むっ！なんかリトに心読まれた！

「声出てたよ？」



出てたらしい

「ぬかったわ！で春菜さんや？大丈夫ですか？」

今だに座りこんでる春菜に声をかけると春菜は

「うっうん何とか・・・アレ？嘘？立ってない・・・」

マジで！！腰抜けちゃった？

どうすんべえ？むっ！ここはリトの出番だな

「リト！ちよいと後ろ向いてくれい！」

俺がリトにそう言ったらリトはブツブツ言いながらも素直に後ろを向いてくれた

よしよし！んで春菜を

「ちよいと失礼！」

「えっ？きやつ！」

ひょいっと持ち上げ

「ライド・オン！」

リトの背中に乗せてやる！うむ完璧！

「リト〜！春菜、保健室まで案内しろ〜」

最後にリトにそう言ってやる、ちと強引だけどな

「えっ？まままままさか・・・」

したらリトはなんかめっさテンパリながらもゆっくりと背中をみる

春菜、真っ赤になりながら申し訳なさそうにリトに頭下げてんな？

うむつむ！春菜もリトの事を嫌ってないようですよかったですわい！

「ツーーーーー！？」

アレ？リト君？

「ねえマサ？リト動かなくなっちゃった」

あちゃ〜！まだレベルが足りんかったか？やっぱまだ無理だったか？

しゃあないですな

「悪い春菜！リトん電源落ちちった！ちいと我慢してな？」

ひょいっと

「えっ？きゃっ！」

結局は俺が運ぶ事になりました、んで俺は右手に春菜を抱え、左

手にリトって感じで何故か背中に

「私もー！ー！」

つってララを装備して

「ちよっくら保健室まで搬送してくる！」

俺がそう言ったら

「はいは〜い！マサマサ、春菜頼んだよ〜」

「ていうか三人も人抱えて平然としてるマサマサって・・・」

里沙と未央の二人がそう言っで見送ってくれた

しかし未央君よ、ぶっちゃけ俺は三人どころか、この学校の生徒全員でも余裕でいけるぞ？

とか思いながらも

「バグだからね！」

つって教室を出ました

んでスタスタと保健室を目指して移動し始め

「えっと・・・マサ君？あの・・・えっと・・・おっ重くないの？・・・」

って春菜が言い出したが

「全然！全くこれっぽっちも！バグキャラですから」

つっといた、まあ俺が原因だしね

「そ・・・そう・・・うつゝ恥ずかしい・・・」

春菜さんは照れ屋さんですなあ、それに比べてララは

「エへへゝGOGOMサー！」

めっさはしゃいどるし、無邪気なことって

ってそついや俺、保健室ん場所知らんのですけど！

「春菜ゝナビよろゝ！」

「えっ！あつうん！保健室の場所でいいんだよね？」

中々に察しがよくて助かりますわい！

で春菜の案内で保健室へ

ゝ俺移動中ゝ

はい到着！移動中、春菜が

「うつゝ恥ずかしいゝ早くゝ早くついてゝ」

つつてたが、聞かなかった事にしといたぞそれが優しささ！

『ガラッ！』

「急患二丁お届けにあがりました！」

手が塞がったので足でドアを開けながらそう言っって保健室ん中へと入る

「は〜い、誰かしら？」

で現れてたのはなんか肉感的な女の保健医さん、いたね、そういやこつという人も

「どうも〜今日からここに通う事になった転入生一号の鬼島政成です！」

そう思いながらも軽く自己紹介、続いてララが俺の背中からひよこつと顔を出して

「二号のララです！」

と自己紹介！うむうむエライぞララ！後で撫でちやる！

「ああ！君達がウワサの？私は養護教員の御門 涼子よ、で急患つて鬼島君が両手に抱えてる、その子達？」

むっ！意外とできるぞこの人！俺とララの紹介をあっさり受け流しおった！

「やりますな養護教員殿！」

「いえいえそれほどでも」

「なにいい！コレまでもが！クツ・・・コレが大人の余裕というものか！」

「しかしまだまだ終わらんよ！」

「あつ・・・あの・・・そろそろ下ろして・・・」

「あつ！春菜ん事忘れてた！」

「悪いな春菜！」

「軽く謝りつつ、ベッドに、よいさと座らせる」

「ほいリトもつとー！」

「んでリトは隣のベッドに横にする、しかしまだ目が覚めませんか？」

「で鬼島君？何があったの？」

「保健さんがそう聞いてきたので事情説明つと」

「カクカクシカジカって訳でして、なんかこうスパツと回復魔法的な事できねッスか？」

「かつ・・・回復魔法つて・・・さ・・・流石に・・・どうだろう」

「？」

春菜に呆れられたね、しかしリトがいないとツッコミが、つうか  
ララさんはいつまで背中に引っ付いてんでしょ？

まあ重くはねえけどって脳内コチャコチャしてたら

「あるわよ？」

なんですと！

「「あるんだ！！」」

「うそよ？」

アンタはこのマスターだと言いたくなかったが、やっぱりしないら  
しいー！

クツ・・・イカン！ペースが乱される手強い！

「ララ・・・下りるんだ・・・全力を出す！」

負けねえ！こんな所で負けてたまるかアア！

「今まで全力じゃなかったんだ・・・というか何の勝負？」

俺にもわからん？けど負けられんのだよ春菜君！

「マサ〜頑張れ〜」

フツ・・・期待には答えよう！

いくぞ養護教諭！絶対に負けられない闘いがここにはある・・・

次回死闘の果てに・・・でお会いしましょう！

二度ネタでしたね？

ん？結果どうなったかって？どうもこうもないですわ、いくらボケようが、さらりと流されるわ、上に被せられるわでヒドイもんですよ

けど一つだけよい事が判明したぞ？ん？それは何だと？

それは春菜は鍛えれば中々にいいツツコミになるってことぞ！

まあその間に中々に打ち解ける事ができたので

「ガ克蘭君、コーヒーのおかわりいる？」

「飲みまゝす！スンマセンねえ保健さん」

ぐらいな感じになった

「あっという間に仲良くなってるね？既にあだ名で呼び合ってる・・・」



「ちよつと羨ましい」

「フツ・・・拳を合わせた仲だからな？拳じゃねえけどニュアンス的にはそんな感じ」

「はいコーヒーっと！それにしてもガ克蘭君って変わってるわね？今まで生きてきてアナタみたいなタイプは見た事ないわ」

「さつきの休み時間に、ぶつちぎりナンバー1の称号を貰ったツスからね」

「まあ俺から言わしやあ保健さんも充分にかわってんだけどね？」

「認めちゃってるし・・・しかも誇らしげだし・・・」

「よしよし！春菜よその調子その調子！頑張れば中々の使い手になるぞ！」

「マサは変だもんね？」

「あつそれは意外とポデーにきます！こつスタマツクのあたりに」

「ぶ〜ん？ねえガ克蘭君？ちよつと解剖してみたい？」

「いやザンス！つうかなんスかそのちよつとシャー芯貸して？みたいな軽い言い方は？」

「急におつとろしい事をいいますなこの人は！」

「マサ君ならそれくらい大丈夫のような気がするんだけど・・・」

「うんうんマサなら大丈夫だよ！」

この子達は何言っちゃっててくれたの？流石のマサさんでも解剖は無理よ？

「どう？二人もこう言ってる事だし期待に応えるのも男の子ってものよ？」

保健さん？目が怖えんだけど？なんかこうモルモットの的なものを見る目なんですけど？

「断固NO！絶対NO！ダメ解剖！」

当たり前です！

「アラ残念」

なんやかんやで解剖を回避！まあ俺がガチで力入れたらメスだろうがレーザーだろう切れねえけどな！

「まあ俺の解剖なんてのは置いといて、それよかりトを改造しねッスか？どうもリトん奴、耐久性に問題が」

とりあえず話しを変えるためにリトの改造を試みようと思う！都合よく寝てるし

「ふむ結城君の改造ね？面白そうね？何から始める？」

俺の提案にのってきました保健さん、やっぱり白衣着てる人つてのはマッドつてのは相場が決まってるんですな！

「んじゃ先ずはロケットパンチあたりから？」

「寧ろドリルでしょ？」「コ」は？」

「それ採用！！」

そんな感じでリトの改造計画を練っていく俺と保健さん途中でララも参加して

「それじゃあ私は目からビームがいい！」

「「それ採用！！」」「」

つって中々によいリトにていうか寧ろ

『RITTO』になりそうな予感！オラ、わくわくしてきたぞ！

「起きて〜結城君〜改造されちゃーうー！」

慌てて春菜がリトを起こしました、全く春菜さんは素直ですね〜

「「冗談なのに〜！！」」「」

俺と保健さんはそう春菜に言ってるがララは

「えっ？しないの改造？」

つってました、いや流石にしねえよ？面白そうだけど

「お願い起きて〜結城君〜私の手にはおえない〜!」

どうやら春菜のキャパシティを越えたらしい、春菜涙目だな?

ちょっと可愛いぞ?

「うっ……うん?ん?あっ!春菜ちゃん?夢?夢だよな〜じやあいいか?」

おっ?リトが起きたな?つつか相当に寝ぼけてるな、春菜ちゃん  
って言ってるし?

「えっあの結城君?」

春菜困惑してますな、さてどうなるここから!つつか、じゃあいいか?ってなんぞ?

「春菜ちゃん!」

『ギョツ!』

あっ!抱き着いた!

「ツーーーー!!!キ……キャアア!」

『ズバーン!!!』

「おふう!」

うむ！見事な右ショートアップー！つつかいつの間に腰治ったんでしょ？

『ドサリ』

あつリト君再びダウン！

「カウント必要ですかね？」

「いらないわよ？見事にジョーを捉えてたもの？アレは立てないわ」

俺もそう思う

「ハルナの勝ちー！」

という事でリトVS春菜in保健室は春菜のKO勝ちで決着しました！

「あつ！ごごごめん！結城君！結城君ー！」

春菜の謝罪声が保健室に響いた……

まあ寝ぼけてたとはいえリトの自業自得って事で！元を辿れば悪いのは俺だけどね！

『キンコーンカンコーン！』

あつ！チャイムなつとる？まあいいか

「保健さーん、リトが目え覚ますまでつてのは建前でコレ以上勉強

したらパーンってなるんでここ居ていいツスカあ？」

ん？初日だから頑張る？知らんがな！体育とかなら出るけどね！

「一応、私は教員なんだけど？まあ別にいいわよ？暇だし」

流星は保健さん！話しがわかりますな！

「つつわけで春菜さんララさん？次の授業はサボタージユという事になりました！」

俺が二人にそう言うと二人はそれぞれ

「つつ……何で私まで……」

「はい！」

とこんな感じ、しかし春菜は真面目さんだねえ、近年稀にみる良  
い子さんですな

「んじゃ！今度は俺がコーヒー入れまーす！」

フツ……バリスタ・マサの力を見せてやるぜい！

「お願いねガクラン君？あつ後そこにお茶菓子があるからそれもお  
願い。」

「あいあゝい！」

授業をサボってお茶会と相成りました

あつ！今さらだが俺、コーヒーも好きだぞ？ミ〇ミ〇の方が遙かに好きだけど

「この情況に疑問を感じてないこの人達って・・・もしかして私の方がおかしいのかな？」

春菜がなんか葛藤してるな？もっと楽に考えよう！

「ホレ春菜！シュークリームだぞ！甘いぞ！美味しいぞ！」

とりあえずは釣ってみよう

「えっ！うっうん！いただきます」

フィッシャーシュ！！女の子だね！

「ほいほい！ララもこっち来て食べんしゃい、コーヒーは甘くしていたかな？春菜も甘めがよかる？保健さんはブラックで」

それぞれのイメージで勝手に決めただけだね？ちなみに俺もブラック

「意外と手際いいわね？それに・・・うん美味しい！コレからもちよくちよく頼もつかしら？」

「本当・・・美味しい・・・」

「うんうん！ありがとうマサ！」

概ね好評ですな！

「意外と器用な男！鬼島 政成です！コレからもどろどろひいきに」  
ペコリと一礼しときました！

「じゃあ遠慮なく利用させてもらおうかしら？」

おう！ミステイク！まっ別にいいけどね？

それからはリトが起きる及び授業が終わるちよい前まで「チャコ  
チャしてました

途中で何度か保健さんに

「ねえやっぱり解剖していい？」

とかって言われましたが全て拒否つといた  
NO解剖！



第五話っぽい感じ！（後書き）

後書き

口調が〜口調がああ！

もう何が何やらわからんことになっておりますがお暇ならまた見て  
やっして下さい！

感想などありません……いえなんでもありません

## 第六話っぽい感じ！（前書き）

前書き

マサの行動は矛盾で出来てます

何時も通りにキャラはアレな事になっていますので、傷薬的な物をお持ちになりお進み下さい。

## 第六話っぽい感じ！

「おーい！リト？起きろ！流石に寝過ぎだぞ！夜寝れなくなっちまうぞ〜？」

授業が終わりそうになっても起きなかったので俺が起こす事にさっきみたいに春菜に抱き着いたらマズイからな！

「おうあ！えっ！アレ？さっきまで世界戦の舞台に立ってたような？」

よほどいい角度で入ったらしいな、つつか春菜に抱き着いた事は都合よくブツ飛んでるっぽいし

それならなかった事にしてやるのが優しさってもんだよな！

「春菜？さっきのリトのやった事は忘れてくれ、頼む！そんなん知ったらリト、ショック死してしまう！ララも保健さんも頼みます！」

リトに聞こえんように三人に頼んでみる

「えっと・・・つつ・・・うんわかった・・・けど私がやった事もできればナイショに」

「ういっうい！交渉成立って事で！」

まあそれを言っちゃまったなら何でKOされたのかまで言わんといけなくなるしな

「うん！マサが言うならいいよ！」

うむうむ！ララは素直ですな、はい、なぐでなでっど！

「エへへ〜」

うむ！なんか犬っぽいなララって？

「喋ったら面白くなりそうなんだけど……まあしょうがないわね？いいわよ」

俺も実はそう思ってますがガマンして下さい！

「ジーーーー」

うん？保健さん？何スかその期待に満ちた目は？まさか撫でて欲しいのか？

まあ別にいいけど

「んじゃ失礼して」

なぐでなで！

「むっ！……コレは中々……やるわねガ克蘭君！」

お褒めに預かり恐悦至極

「ワクワク！」

春菜さん何期待してんですか？声出てますよ？なんかキャラ違くな？保健さんもだけど・・・

けど撫でてえなあ？リトには悪いが撫でたいのです！  
なんか春菜も犬チツクだしさ！こうチワワ的な感じの？

スマン、リト！俺は正直に生きる！

「ホレ！なでりなでりっ」と

「ッ！！！」

結局、撫でました！というか春菜や照れるくらいなら、させんきやいいのに、マサさんは基本ガンガンいこうぜ！なんだぞ？

「クワッ！」

あっ！リトの目が怖い！なんか瞳孔がエライ事になつとる

しかしなんつつかこう、最近、なでなですんのが癖になってきたな？

でもわかっていただきたい！こうなんつつか犬とか猫とかいたら撫でたくなるだろ？

なるよね？俺はなる！だから仕方ないんだよ！

ナデナデ王に俺はなる！

羅針盤なんていらんぜ！

『キンコーンカンコーン』

あっ！三限目が終わっちった！

「なあ次の授業って何だった？」

とりあえずは目が覚めたばかりのリトに聞いてみる

「ん？次は確か・・・三時限目か？」

「んにゃ四時限目」

「んじゃ体育だな！」

都合よく寝てた理由は聞かなかつたな、うむ良かった！にしても次は体育ですか・・・体育だと！イカン！参加せねば！

「行くぞ！体育だ！体育！ここで頑張らねばいつ頑張る！ホラ！ハリハリアップ！」

体育は大好きです！

「わかった！わかったから！落ち着けマサ！」

むう・・・興奮しすぎた、しかし体育だからな・・・合法的に暴れても大丈夫な時間だしな

「私も準備しないと、着替えないといけないから先に行くね？それじゃあ御門先生、失礼しました！ララさん行こ！」

「うん！それじゃあ後でねマサ、リト！ミカド先生もありがとう」  
「さいました」

『ガラッ！』

俺がコチャコチャ考えてる間に春菜とララン二人は先に出ていった

「俺らも行こうぜい！んじゃあ保健さん！またコーヒー飲みにきや  
くす！」

「どうも失礼しました！」

俺らも保健さんに挨拶すると保健さんは

「はいはい行ってらっしゃい」

つって手をヒラヒラさせながら見送ってくれた

く俺移動中

はい教室到着！

「なあリト？更衣室ってあんのか？」

「ああ一応あるぞ？他の人達は先に行つたみたいだな」

なるほどなるほど、俺ん前の学校には無かったからな

「ほいじゃあ行こうや？」

「ああ体操着取ってくる」

あつ！ちなみに俺もあるぞ？前んやつだけど、ん？何故あるかは聞くなよ、都合つてもんがありますねん

（移動&着替え中）

いや空いてましたな、スタートが甘かったかね？

つうよかここの体操着って思いの他、ピッチピチの短パンだなオイ

リトの体操着姿を見つつそう思う

「いくらワンパクなマサさんでも流石にその短パンは無理ッス！」

「ほっとけ！」

ちなみに俺は下はジャージだぜい！まあその中にも膝くらいの長さのハーフパンツですがね

ではいざ校庭へと！

「あつ！転入生！やっと出てきやがったな！」

「そういやいたね君達？忘れてたよ、うんスマン！とりあえずは謝  
つとこ」

「まあまあ落ち着きなされ？そんなに怒ったら短パンが更にピッチピチになっちまうぞ？」



「余計なお世話だ！！やっちなえ」

「『オオオオ！』」

何故に！凄い親切だったのに、それ以上ピッチピチになったらって純粹に心配しただけなのに！

「マサ・・・ちょっとは考えて喋れよ？普通は怒るぞ？」

リトに注意された、もう一応は考えてますよ？こつみえても

しっかしこの短パン軍団どうしますかねえ？メンドイなあブツ飛ばしちやおつかなあ？けどなあ？

よしアレだ！勢いでごまかすんだ！

「待て待て待て！落ち着け諸君！俺としてもここで一暴れしてもいいじゃないんだが、んな事して初日から停学になったら目もあてられん！」

しかし君達はそれでは収まりがつくまい？ならばどうするか？はいその短パンB！」

向かってきた軍団の一人を指差しながら俺がそう言つと短パンBは

「誰が短パンBだ！オラアア！」

つって殴りかかってくる！全く、名前わかんないんだからしゃあないじゃないか

「短パンAガード！」

『ゴス！』

「おふっ！」

とりあえず、そこいらの短パンを引つつかまえて盾にしました、  
ん？『リトガード』はどうしたとな？

んな事には『リトガード』は使いませんよ？アレはある意味、ラ  
ラ専用技だからな！

まあ今はとりあえず尊い犠牲となって散った短パンAに

「た・・・短パンA・・・おっ・・・オマエ・・・俺を庇う為に・・・  
クツ・・・オマエって奴は・・・」

つつたらAは

「い・・・いやオマエが盾に」

もう喋るな！

「ジンチュウ！！」『ゴス！』

「うっ！ガク」

「短・・・パンA・・・短パンA！オイ！嘘だろ！目を覚ませよ

！Aーーーーー！」

「いや止めさせたのってオマエだから」

クツ！人のせいにするとは、俺はただちよと口と鼻の間の急所を  
押しただけなのに！

「許さん！許さんぞBー！この外道がアアア！」

「なんでだアアア！」

フツ・・・なんでと聞くかね？ならば回りを見てみる！

「」「」「Bが悪い！」「」「」

「なんで結束してんだオマエら！さっきまで仲間だっただろ！」

Aの犠牲が彼等の熱き漢魂オトコソウルに火をつけたのだよ！（都合よく『ジ  
ンチュウ』は見てなかったからな！）

それすらわからないオマエは漢とは足りえない！

「俺のクラスの奴らっていったい・・・」

結束した俺とB以外の短パン軍団をみながら何故かリトが溜息を  
ついた

「俺だけ悪者かよー！」

そしてBの叫び声が青空に響いた・・・

あつ？Aは死んでないよ？ただちよつと記憶があやふやになって  
Bに対して敵対意識みたいんが芽生えてたけど

まあ何はともわれ平和的に解決してよかったな！勢いって大事だね

『キンコーンカンコーン』

おっと、時間です！ん？およ？そついや

「なありト？何で男子だけなんさ？」

何故か集まってるのが男連中だけなんすよね？

「ああ女子はホラあっち！今日は女子は100メートルのタイム計  
る日にだから」

ほう！なるほどねえ

「なあ男子はやらんの？頑張るよ俺？2秒フラットで駆け抜けるぞ  
？」

まあ更に本気を出しゃあ1秒きるけどね！フハハハ！バクキャラ  
万歳！

「男子はもうやったから、それよかマサ、それは止める！マサなら  
まあいいか？ってなるかしんないけど流石にやり過ぎ！」

ですよねー？やっぱダメだよねえ？けど意外と大丈夫な気がすん  
だけどなあ？

「んじゃあ俺らは何すんのん？応援？シュウ○ウばりの応援？」

「鬱陶しいから止めとけって、俺達はまあ適当にサッカーとか？他の奴らも既にボール出しててるし」

サッカーか・・・よしなら頑張るぜい！

「俺の守るゴールは誰にも割らさん！」

キーパーです！キーパーやりまーす！

、S・G・G・Kマサ（スーパー・グレート・ゴール・キーパー）の力を見せてやるぜ！

とその前に！

「オーイビーーこっちきて一緒にサッカーやろうぜえ！」

なんかさつきから一人でションボリ体育座りしてるBに声をかける、そしたらAが

「なんだよ？アイツはほつとけよ？」

とか言やがりました、他の奴らもそれに頷いている、それが聞こえたのかB再びションボリ

「俺の目も曇ったか・・・Aよ、何時まで過去の事にこだわっていは真の漢とは言えん！」

それを包み込むような度量があるのを漢と呼ぶのだ！

俺はオマエが！いやオマエら全員がそれが出来る漢であると信じてる！」

いやまあ俺が原因なんですけどね？まあちよつとはBに悪いと思つた訳よ？

さっき気付いたけどこいつらつてこのノリ好きそうだからノつてくれそうだし

そう思いながらチラつとA及び軍団を見てみると案の定

「！！そつ．．．そうだったな．．．すまないそれでこそ漢つてもんだよな．．．気付かせて貰つたよ．．．転入せ．．．いやマサ！みんな！俺はBを誘おうと思う！いいか！」

ほらね？

「ああ！もちろんだ！A！」

「あつたりまえだろ！俺らは漢だぜ！」

ほらね？ほらね？んでここで介入

「フツ．．．オマエら漢だぜ！さあBを呼んでやろつ！」

「」「Bー一緒にサッカーやろつぜ」「」

つむつむ！これでよし！

「・・・いいのか・・・俺も一緒で？」

フツ何を今更

「もちろんだ！俺らは仲間だろ？B？さっき迄の事は水に流そうじやないか！」

「デカイ・・・なんで器のでかさ・・・転入生！いやマサーー！」

「「「マーサナリ！マーサナリ！！」「」」

よせやい照れらあ！

「ちよい前までクラスの殆どの男子と敵対してたのに今は頂点に立ってるマサっていったい・・・」

リト君やこれが人心掌握と言うものなのだよ！

まあこいつらのノリが良かったってのもあるけどな！

んで適当にチーム分け、俺とリトは同じチームになりました、AとBは敵チームです

さて始めますかい！けどけどけどその前に  
「なありト？ララって全力で走って大丈夫なのか？下手したら軽く10秒きつちまうかもしらんぞ？」

一応は確認を、まあ俺ならマサだから！ですみそっただけどララは  
なんかマズイ気がするしな？

「あつ！ヤバイ！ヤバイヤバイ！加減するように言わないと！」

あつやっぱヤバイんだ？

「んじゃ俺が言ってくるわ！悪いクラスメイツ諸君ちつとララにア  
ドバイスの事をしてくるわ！」

そう言つて女子ん所へ、なんかコチャコチャ言われるかとも思っ  
たが、無駄に漢メーカーが振り切れたAとBが

「流石はマサ・・・自分が走る訳でもないのに・・・」

「デカイな・・・あれが漢の背中つてやつなんだな・・・」

とかつて言つて見送つてくれた、うんそうだね？やり過ぎた・・・

流石に反省、けど後悔はしていない！

つつかマジで大丈夫かこのクラス？つつか学校？こんな奴らばっ  
かなんじゃねえだろうな？まあ面白いからいいけどさ

とコチャコチャ考えてる間にも到着です！

「いや〜やっぱマサマサは面白いわ！見てて飽きない！」

到着直後に里沙にそんな事を言われました、つつか見てたんかい！

「楽しんでいただけてなによりでござえます！」

とりあえずはそう返してララを探してつと発見！



「ララ、ララ！ちよいちよい！」

んでララを手招きで呼びよせる、したらララはワンコの如く、近寄ってきました

「何々マサ？どうしたの？」

うゝむ？お手ってしてゝ！けど流石に自重！まあそのうちにするけどね！

「ララ？まだタイム計ってねえよな？」

小声でララに確認をとる

「うん！まだだよ？頑張るから応援してね！」

グツとガッツポーズしながら笑顔で言うララ、グツ・・・今から手を抜けて言いつれえ、けど仕方ないんだスマン、ララ！

「悪いララ手加減して走ってくれ！マジスマン！ララが本気出すのはマズイらしい！頼む！」

自分の事は棚に上げました！いや俺はもう変人として認識されてっからいいけど、

ララまで変人扱いは可哀相だしな、まあ既に多少変わってるくらいには思われてるだろうけど、あくまで多少だからな

「ええゝ・・・ううゝわかったよ・・・せっかくマサにいいとこ見せようと思ったのに・・・」

ああ、なんかものっそい落ち込んだる！  
痛い痛い！胸が痛い！こうなんかグツサリ刺さるー！

「悪いララー！」

なぐでなでっ！

「ん！撫でてくれたからいいよ！けど応援はしてね！」

ララは優しい子ですな

「おう！アツチでゴールを死守しつつ応援しちやる！んじゃなララ  
！」

俺はそう言ってその場から移動しました

「悪い！待たせた！では始めようぞ」

んで俺達は試合開始っ！

ここからは音声を中心に送ります

「もらったー！ー！」

「甘え！」

ガツチリキャッチです！

「おっ！ララが走る番だな！ララ頑張れ！」

「うん！頑張るから見ててね！」

「スキアーリ！」

「ねえよ！」

ガツチリキャッチです！

「えっと今のタイムは・・・10秒9です」

「」「ええー！」「」

「よし！ララよくやった！」

「エヘヘ！マサ〜！ブイ！」

「今度こそいただきー！」

「悪い！見えてるわ！」

ガツチリキャッチです！

『ピッピ』

はい終了！試合の結果は2-0で俺らん勝ち！

我ながら鉄壁の守りでごさった、後ひそかにリトが一点入れてたぞー！やるなりトー！

えっ？手抜きとか言うな！凹むだろ！

「クッ・・・流石だったぜマサ」

「けど次こそはゴールを奪ってみせる！」

おっとAとBがそんな事を言うてきましたぞ、うむ！そう言われ  
たら

「フッ・・・楽しみにしてるぜ！」

こう返せ！様式美だ！しかしAとBなんかセットで動き始めたな？

「ララよか先にマサをどうにかすべきだった・・・」

後リトよ？そんなん言わんといて！悲しいじゃないか

にしてもララ10秒9か・・・俺的には全然セーフなんだけど一  
般人的に考えたらやっぱりアウトじゃね？

「なありト？10秒9ってアウト？」

「アウト」

ララ・・・アウトでした！けど回りもあんまし気にしてないから  
セーフって事でここは一っ！

「マサー！マサもタイム計るんだってー！」

おう？コチャコチャ考えてたらララに呼ばれました、どうやら俺も計るみたいね

「マサ？わかってると思うけど加減はしろよ？ララのも充分マズイけど、それよか、ちょい速いくらいならいいから、2秒とかは絶対ダメだからな！」

んで俺が向かう前にリトにそう釘刺されました

「おう！わかった！氣いつける」

そう言っつて再び俺は女子組んどこへ

「マサ！頑張つてね！」

ララに応援されました、そんなララに軽く片手を上げつつ

「あいよ〜！」

と言っつておく、後、春菜に

「マサ君・・・無茶しないでね？」

とも言われた、きつとやり過ぎるな的な意味だと思っつ、そんな春菜に

「大丈夫大丈夫！リトにも言われたし、せいぜいララよかちょい速い程度だから！」

つっておいた

「はい、タイム測定始めるからねスタート位置について」

「ういーッス！」

んでタイム測定へと入ります

『パン！』

スタートの合図が鳴った・・・・・・・・・・・・・・・・  
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・  
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

はい終わり！タイムは

「じゅ・・・・・・・・10秒フラットです」

うむうむ！コレならリトも怒るまい！

つておよ？いつの間にやらリトが近くまで来てんな！

「リト？コレならよかる？ちゃんとララよかちよい速い程度に抑えたぞー！」

ん？アレ？リト君？

「・・・・・・・・うん・・・・・・・・そうだなマサ・・・・・・・・10秒フラットの時点で既におかしいけどマサにしては抑えたんだろうな・・・・・・・・」

ララよりちょい速い程度ならいいって言ったの俺だしな……  
それは認める……けどさ……けどさ……

なんでバク転で行ってんだアアア！」

リトに怒られた……はい実はバク転で

100メートルを駆け抜けました！

だってスタート直前に里沙が

「マサマサ！期待してるよ〜！」

って言うからなんかしねえといけないって思ったんだもの！

そんなん言われたらやるしかないじゃん！

「アツハハハハ！スツゴい！流石マサマサ！バク転で100メートルを10秒フラットって〜ププツ！ヒィ〜！面白いすぎ！！お腹痛いお腹痛い！！」

ホラ受けてんじゃない！やったかいましたな！

「マサ！カッコよかったよー！」

「サンキューララ！里沙も面白かったべ？」

ララにそういいつつ今だに笑い転げてる里沙にそう聞いたら里沙は

「マツマサマサ最高！」

グッと親指立てられながら褒められました！

「マサ君・・・無茶しちゃダメって言ったのに・・・」

スマン春菜！体が勝手に回ってしまったのだ！許せ！

「里沙・・・笑いすぎ・・・マサマサはやり過ぎ・・・」

未央もどちらかと言つとツッコミ寄りなんだな！うむ頑張れ！

「すげえ・・・なんて漢だ・・・」

「俺はあの背中を追いつづけるぜ！」

A & Bには結構好評でした！後、他の男子も喜んでくれたぞ？

「ダメだ・・・こいつら早く（以下略）」

あつ！リトが疲れた

「頑張つて結城君！結城君が頑張らないと私じゃ無理だから！」

そんなリトを春菜が元気づけてますな、というかその言い方は完全にアレじゃね？

なんかこう危険物の処理をお願いするみたいな感じじゃね？  
こうなんつつかモヤモヤした感じになるんですけど？

「あつああ！がっ頑張るよ俺！」



それでも元気になるリトって・・・

「ねえマサ？なんで泣いてるの？どこか痛いのか？」

「ああ痛え・・・友の生き様に胸が痛えよ・・・」

悲しい生き物だよな漢って奴はさ・・・

『キンコーンカンコーン！』

チャイムの音までもが胸に痛いぜ・・・

第六話っぱい感じ！（後書き）

後書き

100メートルタイム

ララ 10秒9（超手抜き）

マサ 10秒0（バク転）

ララに自重しろと言っておきながら自分は全く自重しないマサでした。

大丈夫でしょうかコレ？

後、春菜どうしよう？リトがなあ

感想などありましたらどうぞヨロシクお願いします。

## 第七話っぱい感じ！（前書き）

前書き

やり過ぎました・・・もう無茶苦茶しすぎました。

なっ・・・何て事を・・・

それでもよろしいという方は、見てやって下さい、今回は頭痛薬的な物を持ちつつ！

## 第七話っぽい感じ！

はい！昼メシです！なんやかんやで昼メシタイム！

いやあ長かった・・・本当ならもうちょい早い段階で突入する予定だったのに・・・

ハッ！イカンイカン！ちよくら受信してしまったわい！

「弁当と言えば屋上だと思えます！ということで屋上行こうや！」

朝約束した面子にそう声をかけると、了承と返事をいただきました！

保険さん所でもよかったっちゃよかったんだけどもな

ちなみに里沙と未央は弁当ではないとの事で不参加です

『ガチャ！』

「いやあ弁当日和！まさに弁当日和！お天道様ありがとー！！」

体育ん時から気付いてたけどついつい感謝してしまうねえ

「おてんとさまアリガトー！」

よくわかってないだろうけどララも感謝しとりますな！っむっむ！

「」「ジーーーー！」「」

で春菜の方を期待の目で見てみました

「えっ……い……言わないとダメなのかな？」

「言わなくてもいいよ西連寺」

チッおいしい！リトに止められた！

まあいいさね！

「んじゃあ適当な所で食うとしようや！」

メシ！メシメシメーシー！

「えっうんいいけど……えっとそのまま下に座るの？」

「私は別にいいよー」

おっ！そういやそうじゃなか！女の子だものな？ララは気にして  
ねえみただけんど

しかし安心したまえ！

「テロリロリン！レジャ〜シ〜ト〜！」

あの声でスポーツバックから取り出しました！

「すげえ似てるし……ていつかなんで持ってんだよマサ？」

むっ？何でとな！わかってませんなリト君や

「紳士だからね！来年には紳士試験一級があるからね！備えあれば憂いなし！」

「・・・そっか頑張ってるマサ君？それじゃあれジャーシート敷こうっか？」

アレ？流された？春菜さん疲れた？流石に疲れてしまいましたか？

「マサ！頑張ってるね！」

えっ？何を試験？ねえよそんなん？っつか聞いた事ねえし

「じゃあ俺が敷くから！」

リト君？構ってくんないの？マサはツッコミがないと死んじゃうんだよ？力尽きちゃっつんだよ？

悲しいです・・・僅か半日でこの対応・・・

まあいいさね！弁当弁当！モリモリ食べるぜ！

「はい！皆さん準備はできましたかな？では手を合わせて下さい！」

「」「はい！」「」

っむっむ！なんやかんやで素直に聞いてくれんだな？

「ではいただきます！」

「いただきます！」

ネタは挟みませんでした、正直思い付かなかったからね！  
で弁当を食べ始める俺達

「流石は美柑印ミニハンバーグ！美味しい！実に美味しい！」

いやもうマジ美味しいわ！俺ん好みにど真ん中！うまうま！

「私はやっぱりマサのタマゴ焼き！うん、おいしい〜」

ララは俺印のタマゴ焼きが好みみたいだな？いやはや朝もだったけどやっぱり嬉しいですな！

「ああ確かに美味しいよな？朝もそうだったけどさ」

うむうむ！リトにも好評！

「アレ三人のお弁当ってマサ君が作ったの？」

春菜、なんか意外そうですか？まあ確かに俺は料理できそうに見えんけど

「まあな？正確には美柑、あつ！リトの妹な？との合作だけかな？ほら俺ってリトん所で世話になってるって言ったろ？俺あ結構、朝早えからヒマだったし朝メシんついでにな？」

まあ世話になってるお礼ってのもあんですけどね？

「そう言えば朝に言ってたもんね？ってアレ？なんでララさんも？」

あっ！どうしよ？春菜ってララもリトん家に住んでるって知ってるのかね？やっぱ隠した方がいいのか？この場合？リトに確認して・

「私もリトのお家に住んでるもん！」

言っちゃった！ララさん言っちゃった！

「ブーーーー！！」

わぁ綺麗！虹ですね！やるなりト

「えっ・・・そっ・・・そうなんだ・・・」

春菜、そこそこに動揺してますな、しゃあない軽くフォローを

「ほら？俺がララん親父の部下、そおーいしたつつつたる？でその後になんやかんやあって

その部下と話してな？で部下がララん親父説得するまでの間、ララを泊めてくれってリトに頼んでな？

んでお人よしのリト君は断る事が出来んとそれを引き受けたってわけ！

別にやましい事とかねえから、そこは安心してくれや？」



即効ででっちあげました！でもまあ似たようなもんだろ？きつとで最後にリトララに話し合わせるといった感じの視線を送りつつ「なっ？リト、ララ？」

と言つて置く

「ふえ？あっ！うん、そうそう！

「そっそう！そつなんだよ西連寺！」

ララはちいと危なかつたけど、話し合わせてくれたな、リトはなんか必死だな？目が血走つとるがな！

「そつなんだ？結城君優しいね？」

おっ？災い転じてか？なんかリトの好感度上昇中！

「い・・・いや・・・そんなことないけど・・・」

何をおっしやるリト君や？オマエかなりお人よしだと思うぞ？

つつ訳で更に畳み掛ける！

「謙遜すんなつつうの！オマエが、んな奴じゃなかつたら俺あ今頃、ダンボールハウスの住人だぜ？感謝してんよマジでさ？」

いやもう本当助かりましたよ、ええ！

「マサも言い過ぎだつて！」

流石に照れたようですな！しかし春菜の好感度はうなぎ登りのはず……

「マツマサ君……ダツ……ダンボールハウス……つて……」

アレ？そこに引つかかんの？、やっぱ説明せなダメ？

「いやコツチに来たんわいいけど手違いで住む所なくつてな？前いた所は事情があつて帰れなくなつてな？

んでリトララの二人に会つて、リトに俺も泊めてくれえつて、世話なつてるつて訳！」

まあ大体、こんな感じでよかる？

「そうなんだ？それで結城君のお家に……」

うむ！なんやかんやで納得してくれましたな！

「あ……！！！」

つてうおう！どうしたのララさん！急に大声出してからに？

「最後のタマゴ焼き……落ちちゃった……」

あつ！ホントだ、落ちとる、しかもいい感じにレジャーシートの外まで転がつとる

「・・・マサのタマゴ焼き・・・うう」

あつ！なんか泣きそう、全くしゃあないですなあ。ララさんは

「ホレ、ララ！あゝん！」

可哀相なんで俺んタマゴ焼きをやる事にしました

「ふえ？あつあゝん！」

なんか雛トリにエサやつてる親トリの心境がよくわかん？

「ありがとうマサ！」

うむ！ナイススマイル！中々の可愛いさよ！

「次からは気をつけましょう！んじゃ落ちた奴は俺が」

ふーふーして食いました！5秒ルールだ！

「マサ君・・・落ちたの食べちゃった」

「俺の胃袋は特殊加工されてるからな！ちつとやそつとじゃ壊れませんよ！それに勿体ないじゃん？」

まあ流石に女の子にはさせる気はねえけどね？

「エへへ〜！」

「にしても、ララン奴、美味そうに食うねえ？いやはや上げたかいがありますわい！」

もきゅもきゅと幸せそうにタマゴ焼きを頼張るララを見てると「うちまで嬉しくなっちまうわなあ！」

「クスツ・・・タマゴ焼きのせいだけじゃないと思うけどね？」

はて？他に理由でもあんのかしら？

まあいいさね！

「はい！」「つつあん！さ〜て食後のミ〇ミ〇タイム！」

スポーツバツクからミ〇ミ〇取り出してつと飲みま〜す！

いやあ美味い！と言うか美味いとかじゃもはやないな！もう最高すぎるわい！

「すげえ幸せそうだな、マサの奴？」

「ホントすっごい笑顔だね？」

当たり前だ！コレ飲んでる時が最高に幸せな時なんだぞ！

「ねえねえマサ？ソレってそんなに美味しいの？」

おう？ララ飲んだ事がないとな！ってそらそうか？大宇宙から来たんだものな？

しかしコレが最後の一本だしな・・・けどミ〇ミ〇飲んだ事がないなんてのは人生の半分くらいは損してると思うぞ俺的には

そんなララをほっておく事は是か？・・・否！否否否！ここは譲ってやるのが漢という奴だ！

そうだろ？アイナ（盟友）？

【それでこそマサさんデス〜！】

心の中のアイナ（盟友）がグツとサムズアップでそう言ってくれた気がした！

脳内会議終了！よってララにミニミニをやることに決まりました

つつわけでララに渡そうとララン方みたら

「あっ！コレおいし〜！」

「既に飲んどる〜！」

アレ？俺の飲んだミニミニ　ララの飲んでるミニミニに？

いつの間に〜！まっまさか！？

《ゴゴゴゴゴゴ》

「クツ・・・こっこれは何者かのスタード攻撃を受けた可能性が！」

具体的にはキングとかスターとかの！

「無いから！無駄にイイ顔で何言ってるんだマサ？マサがなんか葛藤してる間を取っただけだから」

うん知ってる！ちょっと不思議な冒険しなくなっただけ

「まあ別に元からやるつもりだったからいいけどね？どうよララ？美味かる？」

「うん！」

うむうむ！ならよし！ミ〇ミ〇好きに悪い奴はいないので！

「て言うかララさん間接……」

あっそういやそうじゃん！

「ふえ？ホントだ！エへへ！マサと間接キス！」

何を喜んでるのやら？しかしマサさんは

「別に気にするような事でもねえべ？直接スキューン！ってなったなら別だけだよ？」

と思うわけですよ？小学生じゃあ、あるめえし？

「そ……そうなんだ？」

そつなのですよ

「複雑だよ……」

何故に落ち込むララ？やっぱイヤだったか？

「マ……マサ恐るべし……」

いや何故に？というか何が？

つつか何？この微妙な空気？俺が悪いのか！俺が悪いみたいな感じになってんの？

「それでも俺はやってない！！」

「……何が！」「……」

わからん！わからんが言わないといけない気がした！

しかし中々に揃ったツツコミでしたな？

仲良しなのはいいことです！

ん？あつ！そうだった！仲良しで思い出したぞな！

春菜、昼メシに誘ったのってリトと下の名前で呼ばすとかいう目的の為じゃん！

イカンイカン！しかしどう切り込むかねえ？

よしここはさりげなくさりげなく

「……しかし今日はいい天気だよなあ？ホントこうなんつつつかアレだ

ね？こう天气がいいと思わず、下の名前で呼び合いたくなっちゃうね！」

アン？さりげなくなるとな？うっさい！思い付かなかったんじゃ！さてリトの様子は？

「ブフーーー！！」

わあ綺麗！虹ですね！やるなりト！

「えっと・・・マサ君もう下の名前で呼んでるよっな・・・って大丈夫、結城君？」

うん！そうなんだけどね？けど俺が言ってるのはユーとリトの事でござえますよ？

今も結城君だったしな

「いんや俺ん事ではござらぬよ春菜殿？俺が言ってるのは春菜とリトん事

コレから更に仲良くしていきたいと思ってるマサさんにとっては二人がそんな感じで苗字で呼び合ってるのが気になったりするわけよ？」

まあコレは俺の本音でもあるけどな

「えっあっ・・・そっそうなの？」

そうなんです！つつかりト大丈夫か？

「げっゲホゲホ！いっいきなりすぎるぞマサ！..」



オマエには朝に言っただろくに？今更、何をおっしゃいますやら？

「まあいきなりすぎたんは悪かったけどな？それにこれは俺のわがままだし？けどやっぱし仲良しの基本はお互いに下ん名前で呼び合う事なのさ！そうだろララ君や？」

これも本音、リトを応援するってのもあるけど、ダチ同士が仲良いとやっぱ嬉しいもんな？

「そうだね！ハルナもリトも友達だもん！だったら二人にも仲良くしてもらいたいし！」

ララも俺と同じ考えみたいですな？

うんうん！人類皆友達さ！ゴメン嘘ついた

俺、気にならない奴は基本ブツ飛ばすタイプです！

ってイカンがな！今はリトと春菜の事ですわい！

「でどうよ？コレを機に？二人は仲悪いってわけじゃなかる？」

二人にもう一度そう進めてみる、つつかりト！オマエから動かない！朝に覚悟決めてただろうよ！

「じゃ・・・じゃあコレから、西連寺のことを、はっ・・・春菜ちゃんって呼んでいいかな？」

願いが通じたあ！よくやったリト！で春菜はどうよ？

「あっ・・・うっうん・・・じゃあ私はリト君って呼ぶね？」

おっしやあああ！！

いやあ良かった良かった！嬉しいねえ！

つうかりトん奴、真っ赤だなオイ？大丈夫かよ？

「プシューー」

『バタリ』

あっ！電源落ちた！

「えっ？アレ？リ・・・リト君？」

「ああ体育ん時の疲れが今きたんだな？よつと！俺が保健室まで運んどくから二人はゆっくりしててな？」

電源落ちたりトを抱えつつ二人にそう言ったら春菜が

「えっとついて行くっか？」

って言うてきたが、まだちつと厳しいっぽいんで、素早くララに目配せ、気付けよ？

「えっと・・・ハルナ、ハルナ！リトはマサに任せてれば大丈夫だから私とお話ししてよ？ねっ？」

うむ！気付いた！リトの頭、冷やすにはちよつと春菜いたら都合悪そうだからな

「えっ？うっうんわかった、それじゃあ、お願いねマサ君？」

うむ、引き下がってくれたか、スマンな春菜

「あいよ！んじゃあまた後でな？」

俺はそう言い残して屋上から離れます、んでテクテク歩きながら

「しっかしリト、頑張ったねえ？いやはや、おっさんは嬉しいですよ、な？リト」

俺がリトに向かってそう言つと

「すげえ緊張した〜、けどマサさんおかげだぜ、サンキューなマサ？あっ！後マサも」

つって返事をする、実はリト君、屋上出たらすぐに目を覚ましてたんですなあ

「それはマサに直接言いなさい、それに八割以上は俺の本音だったしな？マサもだろっけどさ？っつか直ぐに気絶はよろしくねえぞ？ちったあ耐性つけんとな？」

「うっうだつて春菜ちゃんに下の名前で呼ばれたって思ったらさ・・」

純情BOYめ！

「ぼちぼち慣れる、でそろそろ離してもいいかね？」

今だにリトを小脇に抱えています、重くはねえけどな！

「あっああ！大丈夫大丈夫！」

んじゃ離すぞい！

「つとと！」

うむ！多少のふらつきはあるが問題無・・・ハッ！ここはアレを言うチャンス！

「リトが・・・リトが立った！」

「それや立つだろよ！」

そらそうですわな？元気にツッコむリト君うむうむ！コレなら問題あるまい

つつわけで

「これなら保健室に行かなくてもいいな？リト俺は今から、ひとつなぎの大秘宝を手に入れるというSランクの任務にでる！ではサラバだ！ニンニン！」

『シヨバツ！』

無駄に高い身体能力使って忍者気味にその場を離脱！

「混ぜてる！なんか二つ程混ぜてるから！..」

混ぜてみたのだ！

・  
・  
・  
・

んで今俺はひとつなぎの大秘宝を探して校内をウロウロしております

ん？あつご存知の通りにひとつなぎの大秘宝ってミ〇ミ〇の事ね？

むっ！売店発見！さて置いてあるかな？

「すみませ〜んミ〇ミ〇ってあるツスか？」

「あるよ」

おう！マスター？ここにも居たんですか？けど保健さん時とは違ってちゃんとありましたかね！

うむうむ！とりあえず10本程買ったとききました！

なぬ？もつと買ってあげとかな？わかってませんが、他に買いたい人がいたらどうするんだね？ミ〇ミ〇は皆のミ〇ミ〇なんだぞ

まあそう言いながら10本も買ってあげどって脳内コチャコチャしながら歩いていたら

「ちよとそこのアナタ！待ちなさい！」

と呼ばれ止められました、はて？何故に？

「なんざんしょ?」

俺がそう言いながらも振り返ると、なんかまたもや見覚えある人がいた、ううむ……えっと……

「アナタ!何でウチの制服じゃないの!」

おう!とうとう突っ込まれた!まあ俺んクラスの奴らは知ってるけど

つつか話しかけるから考えが飛んじまったじゃないかい!チクソウ!まあ本人に聞けばいいやな

「理由は簡単ですな教頭だ!でさっきからぷりぷり怒ったお顔のユ―はどちらさんで?」

あつと!人に名前を聞く前は自分からだわな、俺ん名前は鬼島政成な?マサって呼んでやってくれや」

一瞬、ガクラン デスゾウと言おうかと思っただけど止めときました、言っただけで面白そうだったけどな

「教頭先生が……何を考えて……って誰が怒った顔よ!」

なんか眉間押さながら溜息ついたと思っただけなら直ぐに怒りだしたな急がしいお人ですわ

そんな急がし女子(仮名)を指差しながら

「ユ―が!ほれほれ眉間にシワが寄ってますぞ?」

と言ったとききました、つうか名前がわからん？けど解る事もいくつかはある、ツンデレ科、委員長目、風紀種ってことと確かにこんな人居たってことだな！

「ムグツ・・・わっ・・・私ってそんなに怒った顔してるの・・・」

おや？何やら考え始めたな、急がし女子（仮名）けど急がし女子（仮名）よ？そろそろ名前を答えなさいって事で

「でユーの名前は？早く答えねば、急がし女子に決定しちまうぞ？」

「だっ誰が急がし女子よ！私はそんな変な名前じゃない！古手川唯よ！」

そっついやそんな名前だったね？うんうんスッキリですわい！

「ういうい！唯な？でその古手川さん家の唯君は何故にそんなに怒ってらっしゃいますか？」

もうね？眉間にシワ寄りまくってますねん唯さんは？まあ俺も目つきはよろしくねえけど生れつきだからなあ

けど唯ん場合はなんつうか後天的にこうなっただて感じ？

「いきなり下の名前呼び捨て！！って私は別に怒ってないわよ！」

「怒つとりますがな？現在進行系で？後、下の名前呼び捨てなんは気にするな！俺はたいていの人にはこんなだから」

まあ完全目上の人とかには敬称つけるけどな流石に

「ムグッ・・・なっ何かやりづらいわねアナタ」

まあ変人呼ばわりされてますからな、つつか

「唯さんや？俺はアナなんつつ名前ではござえませんか？」

とりあえずはそこを指摘しときます

「鬼島君でよかつたかしら！？」

微妙に怒り口調なんが気になるがもつと気になる所がござえます

「マサでいっての！最初に言ったべさ？」

「鬼島君」

「ノンノン！マサ！マ・サ！」

「むっ・・・わかつたわかつたわよ！マサ君ねこれでいいんでしょ？」

うむうむ！それでよし！中々に手強い相手でござった。

「ハア〜ホントやりにくいわね・・・」

満足気に頷いてたら、唯が溜息吐きながらそう言いなすった

「頑張れ唯！負けるな唯！大丈夫！唯ならやれるさ！」



とりあえず励ましてみた！

「アナタのせいでしょうが！！」

やっぱり怒られた！しかし唯君、中々にイイ物持ってんな！コレからもバシバシ、ツツコンでくれそうだ！

「期待してるぞ！唯君！」

「何がよーーーーー！！！」

唯の叫びが響き渡りました……

うむ！期待の新星ゲットだぜ！

「で俺達注目的になってるけどいいのか？」

気付いたらギャラリーが沢山いました、まああんなだけ騒いでたらそうなるわな

「ツーーーーー！！！」

一瞬で赤に染まりましたな！これは赤い！イイ赤です！

「では離脱する！失礼！唯君」

唯を小脇に抱えて

「ニン！」

『シュバツ!』

NINJAしました!ほっといてもよかったけど、流石にやり過ぎたかなと思ったしな!

・  
・  
・  
・  
「いついいいきなり何するのよ!ハツハレンチだわ!」

人が少ない所まで移動して唯を離れたら怒られた、良かれと思っ  
てしたつつうのに

つつか、ハレンチってオマエ・・・

「そんな言われたの16年生きてきて初めてです」

正確には死んでからもだけど、いやあ中々言われないよハレンチ  
って、貴重な体験をしたな、うむ、生き返えってみるもんだな!

「私だって今まで生きてきて小脇に抱えられるなんて初めてよ!と  
いうかマサ君みたいな人に出会ったのが初めてよ!」

そらそうだろ、自分で言うのも何だが俺みたいなのがごろごろ居  
たら洒落にならん事になるぞ?

「ランキングぶつちぎり一位の漢だからな!」

「私の中でも一位になったわ・・・」

唯の中でも一位になったぜい！やつほーい！

「まあランキングの話は置いて・・・  
唯って一年か？俺とは別クラスっぽいけど？」

確か、覚えてる感じじゃアリトと同じクラスだったつうイメージがあつただけど、まあ知識アテにならんしな、ウ〇キで確認してくれるえだし（書いてる人が）

「一年よ・・・クラスは違うみたいだけど  
一緒だつたらと思うとゾツとするわ」

やつぱ学年は同じみたいね、つうかゾツとするって言い過ぎじゃね？何、寒気を感じてやがりますか？悲しいだろ！

「俺は一緒のクラスがよかったなあ、唯、面白いし？どう引越してこねえ？校長か教頭に頼めば多分イケるぞ？」

「思い付きながら！コレはいいアイデアではなかるつか？唯、可愛いから校長なんざ即落ちだろうし」

「教頭は・・・またパシャパシャやられんだろうけど何とかなる気がする」

「・・・そんなこと言われたのは初めてなんだけど・・・全然喜べないわ・・・というか引越して・・・何、無茶苦茶なことを・・・」

「フツ・・・無茶苦茶すんのはジジイの特権だが、マサさんも無茶苦茶する時はするんですよ唯君！」

「行くぞ唯!!」

『バツ』

「ハツ? ってまた~~~~?」

再び小脇に抱えて

「ニン!!」

『シヨバツ!!』

N I N J A !

「はっハレンチだわア~~~~!!」

二度目のハレンチいただきましたあ!・

・  
・  
・

ハイ到着!職員室です!最初は校長に頼もつかと思ったけど多分、  
まだ机に刺さってるしな!

つつわけで

『ガラッ!』

「スンマセン!教頭センサー!頼みがあるんすけど」

早速交渉タイム！

「あら鬼島君じゃないですか？どうしたんですか？また撮影させてもらえるんですか！？」

いやあ濃いなやっぱ、けど負けるな！

「いいツスよ？けど条件として古手川 唯って子、まあ俺が抱えてる子なんすけど俺んクラスに引越しさせてくれないツスかね？

したら撮影OK、どうツスか？イケます？」

自分で言っただけで置きながらかなり無茶苦茶言っただけな俺

「アナタね・・・いくらなんでも無茶苦茶すぎるわよ？出来る訳ないでしょ？それより、そろそろ下ろして！..！」

いや悪いね唯君んじや下ろします、そして唯君そのセリフは、ある意味成功への布石だぞ？

こつ最後の手段に巨大化して倒される怪人の如く、なんか違うか？でもニュアンス的にはそんな感じ

「ええ！許可します、手続きは直ぐに出来るので次の授業から古手川さんは鬼島君と同じクラスですよ..！」

ほらね？

「そつそんな・・・理不尽だわ・・・」

あつ唯なんかガツクリしてるし

「落ち込みなさんな、楽しいぞ俺クラスは？なっ頑張っていきましょー！」

「アナタのせいでしょうー！！」

唯の叫びが職員室に響き渡った……………

……………  
で、その後、唯はブツブツ言いながらも前居たクラスにまで自分の荷物を取りにいき

……………  
俺はというと昼休み終了ギリギリまでパシャパシャやられました

……………  
その後、教室に戻る途中で春菜に遭遇して、なんかものっそい優しい目で

「マサ君……………大変だったんだね？」

って言われた、どうやらララが『ジジイ・エピソード』ジャングル編』を話したらしい

その優しい眼差しが何故か俺には痛かった……………

第七話っぱい感じ！（後書き）

後書き

はい！ハレンチさんでした！

そして再び登場の教頭さんでした便利キャラです

ホントスンマセンでしたー！石は石わああ！

でも感想とかがありましたらよろしくお願いします。

第八話っぽい感じ！（前書き）

前書き

マサはかなり自己中です！というか書いてる人がかもしれませんが・・・

それでも良いよというかた、痛み止めを片手にどうぞ・・・



## 第八話っぱい感じ！

「とっ……となりのクラスからきました古手川 唯です……よ……よろしくお願いします」

うむ！いい自己紹介ですな！というか声が震えてるな？緊張してんのか？

うん！ホントは気付いてるよ？怒りですね完全に、ものっさいコッチ睨んでますもん！なんという目力！焦げてしまう

「なんで隣のクラスから？」

やっぱりそこが気になるよね？クラスメイツよ！

ふむ、ならばここは俺から説明しよう！

「俺がスカウトしたからだ！いや中々の逸材と思ってな？唯程の猛者<sup>「ミ</sup>を在野の兵にしておくような不覚をこのマサともあるうものがするわけがあるまい？」

気分的にはそんな感じ？

「アナタに話しかけた事が私にとっては一生の不覚よ！」

うむ！流石だな

「見たかね諸君！素晴らしいツッコミ力だろ？」

「戻りたい・・・時間を巻き戻してマサ君に話しかける前に戻りたい・・・」

なんか激しく後悔してるな唯君！だが諦めたまえ！

「プツククク・・・隣のクラスでも堅物で有名な古手川さんが・・・プププ・・・やっぱマサマサ最高！」

机をバンバン叩きながら笑っている里沙君うむ！喜んでいただけ何よりだよ！

「・・・これでちょっとは楽できるかも？」

意外と冷たいなりト？

「ねえねえマサ？唯と友達になれるかな？」

「ああなれるともさ！」

無邪気ですなララは、いや正直こういう所はホントに癒される可愛さだわ

「あつ！唯の席は俺んすぐ後ろだから！」

「最悪だわ・・・」

頭を抱えながらそう呟く唯、そんな事おっしやらずに仲良くしようぜい！

「マサ君って絶対お爺さんの影響受けてると思う……無茶苦茶す  
ぎ……」

春菜さんや、いくらなんでもそこまでではないぞ！もう俺なんて  
あのジジイに比べりゃあチワワみたいなもんだぞ！

「すげえなマサは……」

「俺達には出来ない事を平然とやってのける」

「そこに痺れる・憧れるウウウ！！」

もうなんか抜群のコンビネーションだな

A & Bよ？

まあ何はともわれ

「歓迎するぜい唯！」

俺の後ろに座った唯の方を見つつナイススマイルでそう言ったら  
唯は

「何故かしら……普通は喜ぶべき言葉なのに全然全くこれっぽ  
ちも嬉しくないわ……」

つつて机に突っ伏してしまいました、はて？何が悪かったのかし  
ら？

「マサマサに関わったのが運の尽きだったね古手川さん……」

未央・・・いくらマサさんでもそれは結構キツイス・・・

でそれから直ぐに授業開始、例によって俺ダウン

『パシン』

「しっかり授業聞いてなさい！」

唯に頭叩かれましたいや頑張ってるんですがね？もう起きてるだけで奇跡でござえますよ？それに比べて

「ララは楽しそうですな？羨ましいわい」

ニコニコと楽しそうに授業を聞いてるララを見ながらそう言つとララは

「うん！楽しいよ！でも字がまだ難しい」

そう言つてノートを見せる、いやはや、なんつうか楽しいノート？って感じ？けど一生懸命さは伝わります

「ララはエライなあ」

思わず、な〜でなで

「エへへ〜」

ナイススマイル！俺まで元気がでちまうね  
「授業中に何やってるの！ハレンチだわ」

いやハレンチって言われてもな唯さんや

「褒めたくらね？頑張ってる子見ると褒めなくなるだろ？故に褒めます！マサさんは、そんなタイプでござえますよ？」

「ムグツ・・・きつ気持ちはわかるけど授業中はやめときなさい」

一瞬声を詰まらせるも、唯の中での落とし所が見つかったみたいですか？まあなるたけ気いつけますよ

つつわけで政治家的に

「前向きに検討したいと思えますってことでここは一つ！」

つつといた

「ハア〜ホントにやりにくいわ」

そのうち慣れますよ頑張りんさい

・  
・  
・  
・  
『キーンコンカーンコン』

「もう・・・授業は体育と家庭科だけでいいよ・・・あつ後、美術、音楽も可」

意外と多いな好きな授業？まあ家庭科は好きというよか得意が正

解だけんどもな

「我慢なさい、何のために学校来てるの」

ん？唯さん何のためとな？そんなもん決まってますがな

「ダチを作るためでごぜえますが何か？つつか学校つてのはアレだろ、ダチと遊んだり喧嘩したりするための場所じゃねえの？」

俺的にはそんな場所だと思つとります、あつ後、たまに勉強したり？

「勉強よ！勉強！」

「あつ？唯はそつちがメインなん？」

そういう人もいるけどね？ん？なんだと普通は勉強がメインとな？残念、俺は普通ではねえんですよ

「ララはどつちよ？」

ララにも聞いてみよう、はたしてララは何と答えるかね

「ん？私？どつちも！友達と遊ぶのも楽しいし勉強も楽しいもん！」

こつこやつ！

「唯さんや我らの負けでござるな・・・」

「何の勝負よ！けど・・・どつちも楽しいか・・・私には言えない

言葉よね・・・」

何を言ってるのやら？このクラスに来て、というか俺と関わって  
楽しまない学校生活などありえんですぜい！

というところで！

「ララ、唯アイサツなさい？今日からお友達だよ？」

何となくお年寄りの口調になったが気にするな！

「え？うん！よろしくね唯、私はララだよ」

ナイススマイル！いいねララ！

「えっ？はっ？ちよっ！いきなり意味がわかんないわよ！」

なんか戸惑ってますなしかし意味などないのだよ唯君！

「考えるな感じろ！」

頭で考えるのではない魂で感じるのだ！それが友達への近道さ！

「余計に意味が・・・」

「唯・・・ララとダチになるんがいやか？ララはいい奴だぞ？オマ  
エもいい奴っぽいし？ホラやったね！二倍二倍！」

自分でもよくわからん理屈だなコレ？まあ二人にとうよか、俺  
ンダチ同士は仲良くしてもらいたい訳ですよ、完全に俺の自己満足  
でござえますが

「ねえ唯、私とお友達はイヤ？」

「わかったわかったわよ！そんな泣きそうな顔しないでよ！」

俺の屁理屈なんかよりララン泣きそうな顔のほうがよっぽどきつ  
かったらしいな

気持ちはわかる！俺だってあんな顔で言われたらたいいていの事に  
は頷くね

けど結婚はカンベンな！

「わあーい！それじゃよろしくね唯！」

「ええ、私はララさんって呼ばしてもらおうね？」

コチャコチャ考える、あいだにも二人は仲良しさんですな

うむララ、ナイススマイル！

そして唯よ、中々にいい笑顔してんじやないのさ

「ララも唯も、その調子で学校生活を楽しんでいきましょう！」

「うん！」



「ララ、いい返事ですな！」

「マサ君は勉強の方も力を入れなさい」

「俺は常に全力でござる！」

今を精一杯走ってますぞマサさんは！

「方向性が間違えてるのよアナタの場合は！」

中々にうまい切り返しだな、うむ、やはり俺の目に狂いはなかった！

「その調子で励め、唯よ！ほら向こうの席にセンパイがいるからな？彼を参考にすると良いぞ？」

リトん方を指注しながら唯にそう言ってる

「センパイって・・・あの人、あからさまに目を逸らしたわよ？」

何故に？アレかもうツツコミは完全に唯任せにしようとか考えてんのかリトんやつ

フツ・・・そうはいかん！

「ララ君！リトを捕獲！直ちに俺の前まで引っ張ってくるのだ！」

GOララ！まあ自らやってもいいけどこじはあえてララの出番や！

「うんわかった！リトーーー」

そこは出来れば「ハッ了解しました！」みたいな感じで答えてもらいたかった

「わっ！ララ！ちよっ離せ頼む！俺は俺はそろそろ休みたいんだアアア」

休みたいってどゆこと？アレかそんなに俺の相手って体力を消耗しますか？

「なあ唯？俺って疲れる？」

不安になったので唯に聞いてみた

「ものすツツツツツツツツく！」

って言われた、ヒドイ！そんなに小さい『ツ』をつけまくることはないのに！

「マサー連れてきたよ、ってアレ？マサどうしたの？」

どうも「うもないですがな

」思いの他、小さい『ツ』が多かったでござる…」

「意味わかんねえよ！」

何のかんのいいながらもツツコミしてくれるリト君！流石だ！

「見たか！コレがリトの力だ！」

「なんでマサ君が誇らしげ！？」

わからん！わからんがなんか誇らしくなったのだ！

もう凹んだ気持ちも一気に上向きます！

「えっと・・・確か古手川って言ったか？

コレからよろしく頼む・・・マサを！」

「イヤよ！アナタがやりなさいよ！」

ってコレそこ！何、俺の押し付けあいをしてやがりますか？

しかしもはやコレくらいで凹むマサさんではないわ！

「ブツブー！ソレを捨てるなんてとんでもない！リトと唯の二人はマサを捨てる事が出来なかった！」

某有名ゲーム風に二人にそう言ってやったわ！

「大事なモノ扱いか！」

「寧ろアナタは呪われたアイテムよ！」

ナイス切り返し！二人とも知ってたんだ？有名だもんな？アレって

「ジーーーーッ」

おっとララン事、忘れてたこうなんつつか、お使いできた褒めて褒めて！って感じで俺ん方見てるし

うむ！ならば、なぐでなでっ！

「エへ〜」

うむうむ！なんかますます犬っぽくなってきたなララ？

可愛いです！ハッ！そうだ今こそアレをするのだ！

「ララ？お手！」

「アナタ！ララさんに何させようとしてるの！..！」

『スパン』

唯、怒られた

「いやっ！？こうララが犬チックで可愛いかったから？」

「どんな理由よ！..ってララさん本当にしようとしな！..！」

凄いな唯！俺にツッコミつつ、そーっと俺に手を乗せようとしてたララまでツッコム

「だってマサが可愛いって言うてくれたから嬉しくってっい？」

「それでもダメ！風紀的に減点です！」

「ララ減点されちった？つうか俺も減点されてんのかな？」

「なあ唯、俺も減点か？」

「アナタは最初からマイナスよ！」

「マイナススタートとな！フツ・・・上等だ漢、政成、そんな逆境など乗り越えてみせるさ！」

「楽だ・・・すげえ楽だわ・・・」

「後、先程から黙っていたリト君？なんやかんやで休憩してますね？」

「ニヤリ！フツ・・・休ませると思ったか！人数増えると捌くのが大変だが致し方あるまい！」

「対リト最終兵器！」

「春菜召喚！」

「シャバ！」

「それは拉致だと思っよ・・・マサ君？」

「意外と冷静ですね春菜さん？慣れてきた？」

「アツ・・・アナタ！また・・・ハレンチだわ！」

あつ！やっぱし怒りますか唯さん？つうかコレのどの辺がハレンチ？ただ小脇に抱えてるだけですが？

「えつと古手川さん？私は別に気にしてないから、っていうかマサ君そろそろ下ろして」

うむスマンな！急ぎ春菜を下ろしましたって今更だが唯にリトと春菜んことを紹介したっけ？

リトに関しては触れたような気がせんでもないが・・・

ええい考えるな感じる！

「では紹介いたす！そのシャイなアンチクショウが結城 リトだ！かなりのツツコミ力をもつ素晴らしいき好青年だ！

でコツチがえつと・・・「西連寺だよ？」うむ！スマンな？西連寺 春菜！なんかそろそろ俺に対してのスルー技能を身につけつつあるこれまた素晴らしい女の子だ！」

途中で春菜ん苗字がわからんで春菜に教えられたが概ねこんな感じ？

「私は私は？」

「オマエは自分でしたじゃん？」

「ぶつぶう！そっちなじゃないもん！」

「いやそつちってどつち？わからんぞ？ララ君？」

「まあいいや」

「まあこの二人とも仲良くしてやってくれ？頼むぞ唯君？」

「とりあえずは唯にそう言うておく、ホントは里沙と未央の二人も紹介しようかとも思ったけど」

「多分、主に行動するんがこのメンツになりそうだったしな？こつちの流れ的に？」

「ハア、わかつたわよ、授業前にも言っただけど古手川、唯よ、よろしく」

「何故に溜息まじり？」

「よろしくね？古手川さん？」

「よろしく古手川」

「うむう！気になる！やはり気になる！でもリトには早いか？俺ならまだしもリトに初対面の女の子いきなり下ん名前で呼べつたって無理クサイ」

「ララはまあ別としても、春菜ん時ですら相当に覚悟が要ったようだしな」

「けど春菜は違つよね？女の子同士だしつうわけで」

「ノンノン！春菜？唯！ゆ・い！はい」

「えっ？へっ？」

うつむわかってないっばいな？ではもう一度！

「ゆ・い！はい！」

「えっ？あつても、いいの？」

あつ！そらそうか？唯にも確認せなダメやん！迂闊！

「唯？いいか？リトはまだしも春菜はよかる？女の子同士だし気安くいこうぜい？」

唯に確認とつてみたら唯は

「アナタは気安すぎよ！けど別に構わないわよ？私も春菜さんって呼ばせてもらうから、どうせマサ君もそう考えてたんでしょ？後、アナタは結城君でいいわね？」

と中々の洞察力ですな！うむ！やりおるわ！まあリトん場合は追いついて事で

「えっ？うん！改めてよろしくね？唯さん」

はい！いい返事ですな春菜さん！

「ああ俺は古手川って呼ばさしてもらっつから」



まあリトはそうでしょうな？つつか下手したらずっと古手川のま  
まの可能性もある気がするが

まあいいさね、とにかく

「目指せ！友達100万人計画！」

グツとサムズしながらナイススマイル！

「100万って・・・多過ぎでしょう」

「けどなんかマサ君ならホントにやりそう・・・」

「俺もそんな気がする・・・」

「私も目指すー！ー！」

上から順に唯、春菜、リト、ララでした  
まあ100万は正直無理だけどね？つつか  
捌ききれねえッス！

『キーンコンカーンコン』

お？休み時間終了でございますな

「では苦行に戻りますか皆さん・・・」

「急に元気なくなったわね？」

うん・・・勉強は苦手なんすよ・・・けどララを見習って頑張るよ・・・今日は！」

すでに一回サボってるけどね！

そして明日以降はわからないけどね！

・  
・  
・  
・

『キンコーンカーンコン』

はい！終わりー！いや意外と最後の授業は面白かった！

歴史の授業だったのだが、こつ脇道にそれんのが楽しかった！  
こつという授業なら好きになれるでござる！  
それはともかく！

「放課後でござえます！放課後でござえますぞー！」

まさに今からが本番！さて何すんべえか？ってアレ？ララは？  
またもやララが消えた！

「今度こそアブダクション？」

「ララさんなら廊下にいるわよ？ほら」

あつ！ホントだ！つうか誰だあのイケメン君は？

「なあ唯？あのイケメン君って誰？」

「私も詳しくは知らないけど確か・・・野球部のエースで名前は・・・  
・弄光先輩だったかしら？」

弄光ねえ？こんな居たっけか？つうかなんかこう全身のあらゆる毛穴から下心が流れ出てんですけどあの人？

最初ん時のクラスメイツ（男子）の比じゃねえくらいに？

「どれ様子を見に行つてきますかね？」

気になったので現場へGO！

「俺と付き合わないか？」

「ん？断るよ！」

現場についたらイケメン君、ララにズンバラりさせとりました、まさに一刀両断ですな！

けどイケメン君、中々に諦め悪いな？なんかララん手を握って更にアタックを敢行してる

つうかコイツ、ララんことをアクセサリーかなんかだと思ってるのか？

「俺くらいになるとキミくらいに可愛い子じゃないと釣り合わない」

とかなんとか・・・イラっときた！

「んっん！こほん！そのイケメン君に告ぐ、直ちに人質を解放し

て投降しなさい！  
直ちに人質を解放して投降しなさい！」

流石にあのままではララが可哀相でござるからな！

「あっ！マサーー！」

うむ！なんか飼い主みつけて飛び付いてくる犬っぽいな？ララ？

しかしやはりここは

「毎度おなじみリトガード！」

『シユバ！』

「なっ！なんであの位置から一瞬でそれができんだマサ！」

結構離れてたが俺にとっては造作もねえこととごせえますからな！

「ぶっ！またリトになってる！」

そして頬つぺた膨らますララさん、スマンね、なんつつつか癖みた  
いなもんですねん

「なんだオマエ邪魔をするな！」

おっとイケメン君の事を忘れとりました  
つつか邪魔とか言わてもねえ

「ララ？俺邪魔だったか？」

「うっん！全然！あんな人より全然マサがいいもん！」

いやアレと比べられるんもちよとイヤなんだが、いや確かにイケメンではあるけどなあいつ

「とうわけで、邪魔ではないらしいぞ？イケメン君よ？寧ろ俺は人質救助をしたのだよ？わかるかね？」

若干挑発的な言い方になっちまいました、けど気にいらねんだよなアイツ、イケメンだったのは置いておいてこう何となく？

「フツ・・・いきなり出てきて何を言うかと思えば・・・彼女みたいに可愛い子は俺にこそ相応しいというのに」

イカンこいつアレだ・・・なんつうかアレなタイプだ・・・これはキツイ・・・

「イケメン君・・・悪い事は言わん医者に行く事をオススメする・・・大丈夫まだ若い・・・きつと・・・きつとやり直せるさ！」

思いがあれば誰だってやり直せる事ができるんだ！

「マサは手遅れっばいけどな・・・」

ヒドイぞ！リト君！

「けど私はマサが好きだよ？」

俺も好きですよ？人間的意味で

「ッ！俺のことを馬鹿にしてんのか！」

「いえ純粹に心配してるだけですが？頭の」

半分くらいは嘘です！後の半分は単純に気にいらなだけでえす！

「クツ・・・いいだろう！生意気な口をききやがって、ララを賭けて勝負だ！」

はっ？何故に？つつかララを景品みたいに扱っなつつの！

けど売られた喧嘩は買いますよいつと

『ヒュ！ドゴン！』

「ヒッ！なっ！いきなり何をする！」

「何ってちょいつと壁に穴をあけただけです？軽い威嚇じゃないか？つつか勝負って言い出したのオマエじゃん？」

ってやべコレ直すの俺か？まあいいや気にしない気にしない！

「マサ落ち着け！流石にマズイって！」

むう！しゃあないですねえ

「いやよかったねイケメン君？リトがいなかったらオマエ、今頃モザイクだらけでしたよ？」

いや俺も丸くなったもんでござえますな  
さて放課後何して過ごそうか？  
やっぱバイト探し？

「まっまで！」

アン？何でござえますかイケメン君

「勝負は勝負でも喧嘩じゃなく正々堂々野球で勝負だ！」

あれま諦めるてなかったんですな？意外とガッツあんのな？

つうかオマエさんって野球部のエースじゃねえの？それを野球で  
って正々堂々じゃなくね？微妙に違くない？

まあ俺もバグキャラですけどねえ、つうことで

「いいぜい！売られた喧嘩は買いますよい！」

とこうして俺VSイケメン君の野球対決が始まりましたとさ・

・  
・  
・

はい！ということとで決戦会場に到着です！

「マサ！かつ飛ばせー！」

いつの間にやらA&Bが応援に駆け付けてくれました！

それに

「「弄光センパイ！頑張ってー」」

とイケメン君に黄色い声援を送る、女の子達もおります  
つうか確かにコイツイケメンだけど、どこがいいんだ？

「俺的にはあんなんよかりトの方が数十倍イイ男だと思うんだがそ  
こんとこどうよ？」

「確かに・・・ちよつとアレは自信家すぎるわね・・・ってマサ君、  
大丈夫なの？それと壁は後で直しておくように！」

唯もなんだかんだで様子を見に来てくれた、まあ俺がやり過ぎん  
ようにらしいが

後、壁はやっぱ俺が直すことになりそうです

「マサ！頑張れ〜〜！」

「ララも勿論いるぞ！期待には答えよう！」

「マサ・・・程々にな・・・」

リトは唯と同じ意味で心配みたいですな、まあ流石にグロ映像は  
しませんよ安心なさいな

けど、普通にやっても面白くねえよなあ？ハッ！アレでいこう！

「フツ・・・準備はいいか！俺が勝ったらララは俺が貰う！」

オマエは準備万端だなおい！ユニフォームまでつけてからに、っ



うか

「それは俺やオマエが決めるこつちやないだろうに？ ララは物じゃねんだぞ？ ララはララだけのもんだつづつの！」

どっかで聞いたセリフだけどな？

「ウオオオオオオ！ 漢だアアア！ 漢すぎるぞマサアアア！」

なんかA & Bのツボに入つたみてえ、一気にテンション上がったるし

「それ私を無理矢理引越しさせたマサ君が言うことじゃないような気もするけど・・・まあその通りよね？」

そこはスンマセン！ だって逸材だったんだもの！ 見逃せなかったんだもの！

「マサ・・・」

ララはなんかいつもと違って大人しいな？ なんか顔赤けえし？  
【ん？ 風邪か以下略】

まあいいやとりあえずは始めるかね！ 俺バッターボックスへ！

そしてあの武人なロボット乗りっぽく

「我が名は政成！ 鬼島 政成！ 悪を断つ刃なり！」

まあ悪つづつかただ気にいらぬ奴だけどね！

「誰が悪だ！散々待たせやがって！！喰らえ弄光ボール！！」

『ビュウ』

なんかイケメン君、怒つとるな？つつか弄光ボールて・・・

まあいいや！

俺はストライクゾーンにせまるボールに向けバットを振るう

『シュバン！！』

「一刀・・・」

『ズズッ』

「両断！！」

『パカッ！！』

フツ・・・見たか！あの武人の力を

「我に断てぬもの無し！！」

で決めセリフ！！

「なつななな！バットでボールを斬るなんて・・・」

ガックリ膝から崩れ落ちるイケメン君！

「すっすげえぜ！流石だマサーー！」

「まさかあのアノ技をこの目で実際にみれるなんて！マサーー！」

「「「マサーナリ！マサーナリ！」」」

A & Bを中心に野次馬にきた男連中は興奮の坩堝ですな！

「ひつ……非常識だわ……」

流石の唯さんも口あんぐりしてますな？

「俺が予想してたよりはまだまだましかな？」

リト、オマエは俺を何だと思ってやがんだ？

「マサ……」

ララは相変わらず、顔を赤くして大人しいまんまだし？どうしたんだ？いつちゃん、はしゃぐと思ったんだが？【ん？以下略】

まっ何はともあれ

「俺ん勝ちって事で？また勝負したくなったらきなさい、いつでもブツた斬ってやんぜい？」

もはや野球じゃない気がするがそこはノリって事で

「・・・って待て！オマエ打ってないじゃないか！こんな納得で  
きるか！」

あっ！気付いた？満更バカでもねえんですな？  
けどけどけど

「別に続けてもいいけど、その場合学校中にある野球ボールが真  
っ二つになりますか？」

ついたらイケメン君以外の野球部の人達が

「「「「参りましたー！」「」」」」

って土下座で謝りなされた、流石にそれは勘弁してもらいたい  
らしい

「つうわけで俺の勝ちって事で？まあ精進しなさい」

勝負終了つと！まあイケメン君は納得してなかったみたいで暴れ  
てたけど近くに転がってたボール、ブン投げて頼つぺた掠らせた  
ら大人しくなった

こうしてなんやかんやで、野球対決

俺VSイケメンは俺の勝利で決着がついたのだった！

もう一度だけ言うが正直野球ではない気がするけどな！！

## 第八話っぽい感じ！（後書き）

後書き

ハレンチさんはかなり丸くなってます、というかマサがアレ過ぎるのでその影響からか、ある程度、寛容になってます

他のキャラにも言えますが・・・

もうキャラ崩壊がエライ事になってきたなあ・・・

けど頑張っていますので、これからもどうかよろしく願います

感想などありましたこちらもぜひ。

## 第九話っぱい感じ！（前書き）

前書き

またまたやっちまいました・・・美柑ファンの皆様！今回は本当  
スンマセン！

それでもいいよというかたは、やはり薬的な物をお持ちになって  
どうぞ

## 第九話つばい感じ！

「たっただいまー！」

アレから軽く食材を買ってきて帰宅しました、ん？バイトはどうしたとな？安心したまえ抜かりはねえぜ！

実はアノ後に唯に言われたように壁を修復してたらなんか用務員のおっちゃんのとまって、何かあった時ように雇われたんでござるよ！要するに臨時用務員だ！

ん？そんな技術をいつ手に入れたとな？

うむ、前ん世界でよく学校やら家やらその他の建物を壊してたからな・・・主にジジイが！

で何故か直すのが俺！まあ俺もたまに壊してましたけですけどね？ええ

ちなみに用務員のおっちゃんが何故に俺を雇う権力があるのかは謎でござるー！

しかし学生謙臨時用務員ってどうよ？

まあ気にせんでいきましよう！

「疲れた・・・たった一日なのにすげえ疲れた・・・」

おいリト？どうした？なぜにそんなにグツタリしてやがりますか？

うん、わかってる！原因は俺ですね！

「まあ元気を出しなさいな！本日は俺とララの入学祝いと俺のバイト決定祝いとリトと春菜の下の名前呼び合い祝いとその他色々な祝いでご馳走にするのだぞ！」

なんか混ざりまくってるが気にするでないぞ！

「わぁーい！ねえタマゴ焼きも！タマゴ焼きも！」

フツ・・・無邪気さんめ！タマゴ焼きて・・・ものっそい可愛いな、おい！そんなに気にいったんか？

「・・・ありがたいようなそうじゃないような・・・」

何だと！っっておよ？口ではそう言っておきながら微妙に笑顔ではござらぬか？全くツンデレは唯の仕事だぞー！リト君！

「おかえり！」

おっ！美柑、なんかすげえ久々な気がするし！ってそうだった！美柑に謝罪と報告をせねば！

「たっだいま〜！そしてスマン！美柑！チーム『リト恋』の初ミッション、美柑抜きでやってしまった！悪い！」

頭を下げる俺、しかしそこは流石は美柑

「いいよ別に？あっ！それで色々買い込んできたんだ？」



快く許してくれました！しかも買い出しの理由まで見抜くとは！  
まあ全てではないがそれでも素晴らしき眼力！

「リト！美柑くれ！」

久々に言ってみた！朝にも言ってたがな！

「またかよ！懲りろよ！」

フツ・・・俺に諦めの文字はねえ！嘘ですあります！勉強とか勉強とかね！

「ねえねえ私は私は！」

「ララに言ったら次の瞬間にタキシードを着せられそうなのでやめときます！」

早く気付くのだ！それは（以下略）

「ララさんも大変だね・・・けどマサさんのタキシード・・・微妙に似合うかも」

「確かに・・・ん？美柑、顔赤いぞ？」

「うるさいリト！」

仲良しな結城兄妹でした！

けどタキシードは似合んと思うぞ？俺はどごぞの美形とは違っただ！

「マサのタキシード・・・着よ！マサ着よ！今着よう！」

「イヤでござる！あんなカッコリしたの着れるかい！つつか絶対似合んわ！」

何故かララが興奮しだした、宿めるのに時間が掛かった

・  
・  
・  
・

で・・・結局・・・

「ううむ・・・マフィア？」

「似合うけど・・・ちょっと違うような・・・」

着てみました・・・完全にパーティー仕様のマフィアになっとりました・・・チクソウ、だからイヤだったんだ！

つつかどっから調達してきたコレ！

「マサ！カッコイイ！！」

ララだけはなんか喜んでくれたのが救いです

「着替えてくるよ・・・ほら・・・アレだろ？家の中にマフィアいたらイヤだろ？チクソウ」

そう言い残して部屋から出ました

「アレ？マサ落ち込んだじゃった？なんで」

「そつとしいてやれララ・・・けど、普通にガクランとかは似合  
うのに何故にマフィアになるんだマサ？」

「アレはアレで・・・ありかも・・・」

上からララ、リト、美柑の順でした

俺も謎だよ！チクソウ！

「ハイ！復活！俺復活！もうマフィアなんて言わせないぜ！」

適当な部屋着に着替えて俺登場！

「上がり下がりが激しいよなマサって？」

うむ！自覚はある！まあ人生山あり谷あり色々あんですよ

まあいいでござる！

「美柑！鉄人タイムだ！究極の料理を作るのだ！」

「気合い入ってるね、うん！私も頑張る！」

うむ！美柑も頑張ってくれらしい！

今こそジジイのメシの味を越える時！！

「わあ楽しみにしてるねマサ！」

フツ・・・楽しみにしていたまえララ君！

「俺も楽しみだな美柑もマサも料理上手いからな」

リトよ！期待には応えよう！

「ではいざ！勝負！」

「マサさん勝負じゃないから！」

気分ですよ気分！

つうわけで料理開始

・  
・  
・  
・

はい完成！

「つ・・・作りすぎたかな？」

「うっうむ！なんかお互いに歯止めがきかなかったな・・・」

目の前には凄まじい量の料理の山です、なんか作ってるうちに俺も美柑もテンションが上がってしまったでござる

いや俺はともかくまさか美柑までとは不覚でござえました

「まあこんくらいなら普通に食いきるけどね？俺！..」

「嘘！マサさんこんなに食べれるの！」

「意外と大食いでごぜえますよマサさんは？まあ普段はそんなでもねえけど」

必要とあらば食ってあげる！

「そうなんだ・・・でもマサさんだからアリか？」

アリですよ！

「ではそろそろリトララを呼びますか？」

「そっだね？」

で晩メシタイム！

「わあ！沢山あるね！」

「マサ・・・作りすぎ・・・美柑も止めようよ」

やっぱりツッコまれた！しかしリトよ

「美柑は悪くない！悪いのはアノ時の俺のテンションだ！」

つつといた！美柑は被害者です！俺の！

「私も悪ノリしすぎたからマサさんだけのせいじゃないよ？」

クツ・・・美柑・・・優しい子！

くらえ！撫でる！

「ッ！！」

効果は高いようだ！うむ可愛い！

「マサわた」

ララが言い切る前にララもなーでなでっ

「エへへ」

うむ！可愛いです！

っとイカンイカン！癒されてる場合ではない！せっかくのメシが冷めっちまう！

「とりあえず食おうぜい！」

つつてみんな揃っていただきますして食べ始める

「うむ！美味しい！しかし・・・クツ・・・ジジイの壁は高いぜお！」

かなり美味しいんですよ！美柑との合作なものも手伝って、かなり美味いんです！しかしジジイには一歩及ばねえ・・・

「自分で言うのも何だけど会心の出来だと思ったんだけど・・・マサさんのお爺さんのご飯ってそんなに美味しいの？」

「そつだぜマサ？めっちゃ美味いぞ？」

「そつだよ！美味しいのに」

うむ！確かに美味い！つうか俺が作った中で最高の出来ではある  
何度も言つが美柑との合作だからね！

「ふむ・・・ジジイのメシがどんくらい美味いかつうとアレだな  
・  
・

ほら、俺が麻酔薬入りのメシ食わされた話ししたろ？」

「「「うん！」「」」

中々に揃った返事ですな！

「普通はさそんなんがあつたらジジイが作った物は口にしなくなる  
よな？」

けどよジジイのメシの恐ろしい所はたとえ盛られてたとしてもま  
た食つちまうとこなんだよ！

ああ！わかつてる、わかつてんだ！畏つてわかつてんのに何故に  
食う俺！あそこで我慢してれば、砂漠だったり雪山だったりで目を  
覚ます事もなかったのに！

バカ！俺のバカアアア！！」

チクシヨウオオオ！思い出しただけで自分が悔しい！不甲斐ない  
自分が悔しいぞ！

「マサさん！落ち着いて！大丈夫大丈夫だから！ねっ？」

はっ！またもは興奮で我を忘れてたしまった！

そこをやっぱり美柑に優しく宥められました

「サンクス美柑・・・落ち着いた」

美柑は心の清涼剤です、なでりなでりっ

「あう・・・」

うむ可愛い癒される！

あっ！勿論、ララもなでなでしといたぞ、ダブル癒しだ！効果も二倍さ！

「ごんだけ美味いんだよ・・・マサの爺さんの料理って」

リト君がジジイのメシに興味が出たようだけどオススメはしない！盛られるぞ！

まあもう食うこともねえけどな・・・

「マサさん？」

「どづしたのマサ？」

っといカンイカン！つい浸ってしまってたらララと美柑に心配されてしもうた！む？リトもか？



「ホントにいい奴らだわ」

「なあにいずれはジジイのメシを越えてやるつもりで思ってたな？ 決意を固めてたところさね、美柑君、協力してもらっぞ！」

ニカツと笑いながら美柑にそう言ったら美柑は

「うん！ 頑張ろうねマサさん！」

って笑顔で言ってくれた

「楽しみにしてるよ！ マサ！」

「ララもそう言ってくれました、頑張るぜい」

「楽しみだけど・・・逆に怖え」

何故にとは言わん！ つうか流石に俺は盛らないっつうの！！  
多分・・・少なくとも、ララと美柑のには・・・

「なんかすげえイヤな予感がしたんだけど！」

むっ！ 意外と鋭いなリト！

「安心しろリト！ 盛るとしてもリトだけだ！」

「なら私達は大丈夫だね！ ララさん」

「うん！」

「俺は安心できねえええ！つうか盛んなアアア！」

そう言われたら盛らないといけない気分になりますな

これぞダチ〇ウの法則と呼ぶ！みんな覚えたかな？テストに出るぞ！

と俺が脳内コチャコチャしてる間にも食事再開中

俺も再びむしゃむしゃ食べます！うまうま

「そういえばマサさん、リトのアレって何したの？」

アレとは？あっ！『リト恋』のことが

「うむ！お互いに下の名前で呼び合う事になったぞ？」

「嘘！リトが！？」

すげえ驚いてんな、美柑まあわからんでもねえけど

「リト頑張ったもんね？」

うむうむ！確かにな、リトかなり緊張してたしな、しかも春菜に名前呼ばれたら直ぐに電源落ちてたし

「・・・ホントに？だってアレだよ？」

美柑がリトを指注したらリト君

「ッーーーー！！！」

って赤くなつとりました、つうか思い出しただけでフリーズすんなつづの！

「俺もコレ見たら不安になるがマジでござえますよ、なつララ？」

「うん！ホントだよ？」

「ホントなんだ・・・へえ〜リトがねえ」

そうなんですよ

「リト頑張ったね！」

「あっああサンキュー美柑」

フツ・・・美柑もなんやかんや言いつつも喜んでますな、いや仲  
良し兄妹ですわ

「それでマサさんとララさんは学校どうだった？」

ん？今度は俺とララの事ですか？うむ、まあアレですな

「楽しかった！友達もできたよ！」

「俺も楽しみましたよ？授業は頭パーンってなるかと思ったけど」

という事です

「そっかララさんよかったね？マサさんは・・・リト？マサさん大丈夫だった？」

アレ？美柑さん、なんで俺に関してはリトに確認とってんでござえますか？

「マサは無茶苦茶してたぞ、おかげですげえ気疲れした・・・」

それはないんでないかいリト君？そこまで無茶苦茶した覚えは・

「無いとは言い切れねえ自分にビックリだ！」

「マサさんいつたい学校で何したの・・・」

「えっと・・・カクカクシカジカって感じかな？」

美柑に今日学校であった事を順に話したら美柑は

「リト？今度、ビデオカメラ渡すからマサさんの学校生活撮影してきてね？へたな映画より絶対面白いと思う」

つってリトに撮影を頼んでました

そうきたか美柑！ハートが強いぜ！

「カンベンしてくれ」

そんな美柑にガツクリ肩を落とすリト君でありました

そうこうしてる間にも、料理の山は減っていきいつの間にも綺麗に無くなりもつた

まあ殆ど俺が食ったんですけどね！美味かったです！

で、みんな揃って「ちそうさましてミ〇ミ〇タイム！

勿論、全員分ありますよ！ミ〇ミ〇はみんなのミ〇ミ〇なので  
す！

「すげえ幸せそうだなやっぱ」

幸せですからね！

「マサさん可愛いかも」

「うんうん！コレ飲んでる時のマサって可愛いよね？」

それはさっきまでマフィアだった俺に言っセリフでは「ぢらぬよ  
？つつか

「可愛いのは君達だとマサさんは思っぞっ」

つつたら

「ッ！！なっなれない・・・」

美柑が照れました、そろそろ慣れましようつつか照れてる顔も可  
愛いぞ美柑君！

「エへへ〜マサに可愛いって言われたエへへ〜」

ララは普通に喜んでますな、つつか結構言ってる気がするが、け

どナイススマイル！

「やっぱすげえよマサ・・・」

いや何が？つうかどの辺が？

まあいいさね！さて後片付けいたしますかね！

「はい！食器洗いますので各自持ってくるように！」

つって席を立つ

「あっ！私も手伝う！」

続いて美柑も立ち上がって食器を流し台へ

「あっ私も私も！」

ララも手伝ってくれるみたいだね、うむ！良い子さんだね！

「んじゃ俺は食器持ったらお風呂用意しとくから」

リトはお風呂の準備！

つう感じでみんなで家事をこなしました

まあ食器洗ってる時にララが

「あっ！」

『ガシャン』

って何度かしてたけど、美柑は笑って許していた

なんつうかこう頑張ってる感じがすげえ可愛かったしな

なので食器洗い終わった後に、なぐでなでしといた

ララは皿を割ったのに何でって顔してたけどなんやかんやで嬉しそうでした

むろん美柑も撫でたぞ！

「えっわっ私も！！」

つつて驚いてたけど、当然です！撫でずにいられるか！  
殆ど無意識で撫でてたわ！！

・  
・  
・  
・

でなんやかんやで風呂ん時間でござえます

「俺は最後でいいぜい！！」

一応、客ですからね！そんならいは考えてますよ・・・明日以降はわからんけどな！

「じゃあ私も最後にマサと入る！」

おいララ！それは待て！流石に待て！

「美柑・・・ララと先に入っちゃって！」

「うんわかった！行こララさん」

「ええ何で〜〜」

「いやキミね？小学生とかじゃあるまいしつか倫理的にアウトだろ！」

「結城家の風呂は混浴ではござえません！つか女の子なら慎みを持ちなさい！！」

「コレ言つの三回目！！見ろリトを自分が入るわけでもねえのにフリーズしてんだろ！」

すっかり固まってますよ、つか何でオマエが固まってんですか？

「ぶっ！わかったよ〜行こう美柑」

「はいはい、それじゃあマサさん先に入るからリトをお願いね」

不満気なララに苦笑しながら美柑はそう言って風呂へ、いやはやどっちが年上やら

で待ってる間に俺はリトを解凍しましたどうやらリト、ララと出会った日の事を思い出してフリーズしたもよう

「俺が風呂に入ってたら湯舟に裸のララが・・・」

との事でした！そんなんだっただんですな？そらリトならフリーズするわ



ぶつちやけ俺ならノーリアクションで風呂から上がる気がするが

それはそれでマズイ気がするが・・・  
まっいつか？

どれ！待ってる間ヒマですな！つつわけで

「リト、ゲームあるか？あったら対戦しようぜい！」

「ああ、いいぞ、取ってくる」

結構ゲームは好きさ！

で女の子組が風呂に入ってる間

俺VSリトのゲーム対決が始まりました！

・  
・  
・  
・

「マサーー上がったよー！ー！」

「ちよっ！ララさん服！ふく！」

上がったようですね・・・へへッ

「マサどうしたの？」

「服を着なさい、リトが固まってる」

コレだけ言うのがやっとだぜ・・・チクソウ・・・

でコチャコチャあり、リトのフリーズがとけてリトが事情説明

「待ってる間にマサとゲームしてたんだけどさ・・・いやマサ下手すぎ・・・」

ええ全敗しました、つうか俺は下手じゃねえ

「リトが強えただけだ！俺は弱くない！リトが強いの！」

何たる強さ！きつと日本でも上から数えたほうが遥かに早いに違いないええ！

きつとそうさ！そうに決まってる！

「私あんまりゲームしないけどリトよりは上手いよ？」

なんですとー！マジか美柑！いやブラフだこれはブラフに違いない！

美柑が嘘つくような子には思えんがブラフであってくれ！

「美柑・・・コントローラーを握りたまえ・・・勝負だ！」

「えっ？うん別にいいけど？」

俺VS美柑！ファイト！！

・  
・  
・

「ばっ……馬鹿な……」

「えっと……ごめんねマサさん」

「あやまらんとして！謝られたら逆に悲しいから……！」

ボロ負けしましたチクソウ……

「私もしたい！」

服を着たララも、そう言ってきました

「ララ？ゲームやったことある？」

一応確認！一応な！したらララはクビを横に振り

「ないよ！でも面白いそう！」

フム……無いとな！ニヤリ

「よしララ勝負だ！このマサさんがドンと胸を貸してやろう！」

初心者な勝てるきつと勝てるぞ……！！

「マサ必死だな……」

「なんか可愛いかも……」

うるさい結城兄妹！つつか可愛いのは美柑です！

「コントローラーはこう持つんだぞ？」

「……？」

まずはコントローラーの持ち方から入ります、フッフ……初心者だな、可愛い奴め

さていざ尋常に勝負

俺VSララ！ファイト！！

・  
・  
・  
・

「うわぁーん！チクショーー！！」

俺逃走！ララがいつちゃん強かったです

「アレ、マサまだ途中だよ？」

うるさいうるさい！何だオマエら強すぎだっつもの！

「マサ……ゲーム苦手なんだな」

「やっぱり可愛い」

苦手じゃないやい！オマエらが強いんじゃない！決して、決して弱いわけじゃないんだ！

後、美柑、可愛いのはアナタですよ!!

でその後、リトが風呂に入ってる間ずっと美柑に慰められました・  
・チクソウ、俺んが年上なのにけど嬉しかったです

後、ララはゲームにはまり何度かボコにされました悲しかったです

チクソウ!今に見てろよ!!

「では俺は風呂に入りますぞ!覗くなよ?  
リトララ!美柑監視よろ」

切り替えの早さが自慢です!で朝みたく三人にそう言って風呂に

GO!

「だから覗くか!」

「ええ〜!」

「わかった!マサさんゆっくり入ってね」

上から順にリト、ララ、美柑です!

「風呂!風呂風呂!」

『ガチャ』

脱衣所到着!ポイポイツと!サクツと脱いで、サクツと体洗って  
湯舟に浸かる

「はあ〜！やっぱり風呂はいいですねあ」

思わず独り言っちまいました、風呂は大好きです！温泉とか最高だね！

で暫くの間、極楽気分を味わい風呂を上がりました

いや気持ちよかったねえっておろ？

「イカン！シャツ忘れた！」

気付いてみたらシャツが無かったでござる不覚！まあ下は履いてるからいいやね

つつわけで脱衣所を出ま〜す！って待て！このまま出たらララの教育に悪くねえか？

ララがマネしたらまずくね？

ポクポクポク・・・

脳内会議の結果、女の子なら慎みを持ちなさいという結論により女の子ではないマサさんは可！となりました！

つつわけで、居間にGO！ん？俺ん荷物は居間にあるんですよ今更だけどな！

『ガチャ！』

「いやあ気持ちよい風呂でござったー！」

小さめのタオルで頭を拭きながら俺参上！

「うわぁ！うわぁ！！」

およ？美柑君、どうしたのかね？真つ赤ですぞ？そんなに珍しいもんでもなかるうに

つてやつぱ教育に悪いか？でもスッパってわけじゃねえし

「マサ！筋肉すごおい！」

恐悦至極にごぜえます！意外とあるよ筋肉！ゴリマッチョではねえけど

「体育の時は気付かなかつたけど傷凄いなマサ？」

「八割方はジジイとの喧嘩でついたもんだ！」

もうオマエは何処の激戦地帯を突破したと言わんばかりに古傷だらけでもあります

つと何時までもこのままはアレなんでつと荷物をあさりシャツを取り出し

「着用！！」

いやすいませんね見苦しいもの見せちゃって

「あつ・・・」

「むづ・・・」

俺がシャツ着たとたん何故か美柑とララが残念そうな声を出しました、いやララならわからなくてもないが美柑までとは

「コレ以上は有料ですが？」

冗談混じりにそう二人に言ったら

「・・・サイフ取ってくる！」

「あっ！美柑、私も貸して！」

ってなりました・・・

「マジか？いや冗談だからな？本気にすんなよ？」

慌ててそう言ったら美柑は

「えっ？あっアハハ・・・うんわかってるよ？いやだなマサさん」

つつてたがめっさ目が泳いどりました、もうバターフライばりに！

「ええ〜冗談なの〜」

「当たり前だわ！つつか金払ってまで見る程じゃねえだろ！！！」

ビビるわ！流石のマサさんもツッコミに回るぞ！

「え〜そんなことないよ、ねえ美柑？」



「うんうん!」

「どうやら二人にはその価値があるようです。つうか君達、リトにものっせい目で見られてるんだけどいいの？」

「こつなんつうか悲しいつうか切ないつうかそんな目で

とりあえずは

「はいはい!今日は店じまいだよ!また明日になさい」

「って言ったら

「マサそれは止め」

「リトは黙ってて!」

「ヒイ!すいません!」

「でリトがそれはやめろと言おうとしたんだろうね、けどララと美柑がものっせい目でリトを睨みつけて黙らせてました」

「俺も怖かったです、つうかやっぱり止めとこ・・・」

「明日はカメラがいるね!」

「あつ!美柑だったら私がスツゴい綺麗に撮れるの作るよ!」

「ララさん頼りになる〜!」

ヤベえ・・・コレ・・・ヤベえ・・・

今更ながらに自分がおかした失敗に気付きました・・・

「明日が楽しみだねララさん！」

「うん！今日は徹夜で作業するぞ〜」

気付くのが遅すぎたよ・・・俺のバカ！！

教訓・・・シャツはちゃんと脱衣所まで持っていきましよう。

第九話っぽい感じ！（後書き）

後書き

本当スンマセンでした！

前書きから引き続きスンマセンでした！

どうか許してやって下さい。

そしてお暇ならまた見て下さいませ

感想などありましたら是非！



## 第十話 っぽい感じ！

『今日も冷蔵庫デス！』

アイナより』

流石だアイナ！けどアイナ小遣いとか大丈夫か？

朝三〇三〇しながらも、ちょっとだけそんな事が気になりました

アイナ・・・無理すんなよ！俺あちゃんと買う金はあるからな！

『わかったデス！ホントはちょっとだけ厳しかったデス・・・けど一日一本は送るデスよ！』

なんか通じました！うむうむ！流石は生涯の友だな！

あつ今日はララは潜り込んでこなかったぞつつかマジに徹夜ったのかララン奴？

否定は出来んが一応、寝ないと美容的にマズイぞと言っておいたのでちゃんと寝たと思いたい！

まあそれはさておき朝メシ&弁当作りつつつつか昨日、晩メシ全部食わないで弁当用にときゃよかったねえ

まっ今更だけどな！

美柑視点

「ふあ〜！」

目が覚めると同時に軽く欠伸して目をこする

「ララさんちゃんと寝たかな？」

昨日、随分とララさん張り切ってたからな？ちよつと心配になった

でもマサさんがちゃんと寝ろって言ったからちゃんと寝たよね？

「それにしても凄かったなマサさんの体」

昨日のマサさんの上半身裸の姿を思い出して頭に血が昇るのを感じる

リトのも何度か見た事があったけどマサさんのはリトとは全然違ってた

こつ何て言うかまるでマンガや映画とかで見るような凄く鍛えられた感じでカッコ良かった

傷も沢山あったけどソレはマサさんのお爺さんと喧嘩してついた傷だとも言ってた

私にはその傷もカッコ良く見えた

それで私は思わずララさんと一緒にはしゃいでしまったけど

冷静になって考えてみたら・・・

「ううう、恥ずかしい・・・」

顔が熱い！絶対真っ赤になってるよ私

でもララさんが作るカメラを楽しみにしてる私もいる

どうもマサさんといると調子が狂うんだよね？

けどそれ以上に楽しいって思いが強い、きっとマサさんは学校でもそんな感じなんだろうな？

ちょっとだけマサさんと一緒に学校に行ってみたいなって思った

でも、お家で会えるからいいよね？

コレも本音！マサさんと居ると楽しいし、それに撫でてくれるし・

「ッ！...！」

フと撫でてくれた時の事を思い出して頭をブンブンと振る

ううう、やっぱり調子が狂うな〜！

私ってもっと冷静だったのに・・・

「でもいいや！楽しいものは楽しいー！」

そんなマサさんっぽい考えに自分でもちよつとだけ笑ってしまった影響されてるな

さて！朝ご飯作らないと！

マサ視点

うむ！今日も中々に良い出来栄え！ジジイ越えは近いぞ！

美柑がいれば！！

『ガチャ』

「噂をすれば美柑！おはようさん！悪い既に朝メシ作っちゃったい  
！」

「おはようマサさん、そつか・・・朝ご飯もつ作っちゃってたか・・・  
ありがとうマサさん！」

美柑にお礼言われました、けど微妙に残念そう

「仕事取っちゃったか俺？」

思わず美柑にそう聞いたら美柑は

「ううん！大丈夫、ただちよつと一緒に作りたかったかなあって？」

との事でした！クツ・・・今日も今日とて可愛いんですけど！



撫でたいんですけどコレ！

「んツ！！」

撫でてるんですけど俺！

「気付いた時には既に撫でとりました！でもさ可愛いんだもの！それや撫でるわ！」

「マサさん・・・声出てる・・・」

はっ！しまった！って美柑真つ赤！すげえ赤！けど可愛いです！

暫くの間、美柑に癒されました！

それからリトが起きてきてララもちちゃんと起きてきたした

「ララ寝たかちゃんと？」

一応確認したら

「うん！大丈夫！ちょっとカメラ改造しただけだから！」

との事でした、予定を変更して結城家にあつたカメラを改造したみたいですが、うむうむ、ちゃんと寝たようですね！つうかやっぱ撮影するんですね？

「なあ撮影無しってのは」

「ダメー!!」

・  
ララと美柑にものっそい勢いで却下されました、怖かったツス・

・  
「まあ自業自得だなマサ」

リト君、冷たいよ！止めようよ？うん無理だよね？めっさ怖いもんね！昨日リト、マジビビりしてたもんな、俺もだけど！

とつとにかく！朝メシだ！

「「「「いただきます!」」」」

・  
・  
・  
・  
「「「「ごちそうさま!」」」」

やっぱ美柑との合作のが美味えな？明日からはそうしょ

朝メシ食べ終えてそう思いました

で準備！既に三人は済んでいたの俺だけけど！

「覗いちゃやゝよ！特にララ美柑！覗いた場合は撮影は無しになります！リト監視よろしく！」

釘は刺しときます

「ええ〜！」

「ララさん我慢しないと！カメラが無駄になる！せつかく改造したんでしょ！私も欲しいし！」

「ちょマサ！置いてかないで！怖いんだよなんかこの二人怖いから！」

上から、ララ、美柑、リトの順でした！

スマン！リト頑張ってくれ！

つつか美柑、オマエに何があった！！

そんな子じゃなかったらうに！

美柑の変わりりっぷりにマサさん驚きを隠せません！

〜俺着替え中〜

流石に覗かれませんでした！つつかアレだろ普通は逆じゃね？何で俺が覗かれる心配？

イヤ女の子の着替えを覗こうとは思わんが

と脳内コチャコチャしながらも

「ガ克蘭モードの俺参上！！！」

居間に到着！弁当良し！ミ〇ミ〇良し！

「では出発すつか？」

との合図を出してみんな揃って

「「「行つてきまゝす!」「」」

「それじゃあまた家でね?」

で美柑は自分の学校へ

「ああ気をつけてな美柑!」

「気をつけてな?何かあつたら駆け付けるぜい!」

「それじゃあね美柑!お家に帰つてきたら写真撮ろうね!」

俺達もそんな美柑にそれぞれ挨拶を返す

撮影やっぱするんですね・・・美柑もごっつ頷いてるしチクソウ・・・

「諦めるマサ・・・」

リトに慰められた、ちよっぴり泣けた・・・止めて欲しかったけど・・・無理なのはわかってたから・・・

とコチャコチャしつつも学校に到着です!おっと校門におわすは唯ではないか

「おはようさん唯!今日も元気に行きましょう!」

「おはよう！マサ君は少し抑えなさい！」

むっ！抑えろと言われてもなあ？無理でござるよ！

「あっ！唯おはよー！」

「おはようララさん、結城君もおはよう」

「ああ、おはよう古手川」

リトララの二人もご挨拶！うむ！中々に仲良くなってるっぽい感じ！

唯も昨日会ったばかりの時に比べれば幾分か表情が柔らかくなってるしな！

「おっ！いいとこに来たな！マサ坊！ちよっくら手伝ってくれ！」

おっ？用務のおっちゃん、早速仕事か？

「あいよ！悪い！行ってくるわ！んじゃな！」

三人にそう言い残して俺は用務のおっちゃんの所に

「生徒兼用務員ってどういう状態なのかしらね？」

唯、俺にもわからん！

「頑張っつてねマサーー！」

仕事に手抜きはねえぜ！それが職人つてもんですよ！

「頑張れよマサ」

リトも応援あんがとさん！

と三人それぞれそんな感じで見送ってくれました

・  
・  
・  
・

はい終了！今回の仕事は校舎裏の壁の補修でござえました

つつかおっちゃん、コレ一人でやるつもりだったんか？結構シン

ドイぞ？俺以外なら

既に授業始まってるし

「おう！助かったぜマサ坊！ホレ」

おっと！つておる？日当か？

「おっちゃんいいんか？つつか多くね？万券だぞ？」

思わず聞きかえしたら、おっちゃんは笑いながら

「いってことよ！どうせ俺一人だったら一日掛かりだったしな！  
授業も俺から言っておくから安心しろや」

だとさ、いや、おっちゃん助かるわ

「サンキュー！おっちゃん！んじゃ俺はこのまま適当に一時限目はサボらしてもらっわ！」

「おう！じゃあまた頼むぞマサ坊！」

いつでもどうぞ！いや気持ちのいいお人だわ！

つつことで俺は残りの時間を

「保険さ〜ん！ヒマ潰しに来たツス！」

保険さんの所で過ごす事にしました

「あらガクラン君？調度良かったわ、コーヒーお願いね？」

相変わらず手強いな保険さん！まあ別にいいけどね

「あいあい！俺も飲むツス！」

とコーヒーを二人分入れました！バリスタ・マサ再び！！

「うん！やっぱり美味しいわね・・・ってガクラン君授業は？」

「さっきまで臨時用務の仕事してたツスからね？時間もハンパだからサボりでござえます！」

今更ながらそう説明、そしたら保険さんに

「ああ、そういえばガクラン君、臨時用務員になったんだっけ？コーヒーは美味しいし学校の補修もできる多芸ねえガクラン君」

とのお言葉をいただきました！多芸が売りです！

「一家に一台、鬼島 政成！鬼島 政成をよろしくお願いします！」

つついネタに走ってしまった、しかし保険さんに

「あら、買おうかしら？おいくら？」

って返されました！

「冗談ツス・・・」

「残念ね」

チクソウ手強い！

でその後も保険さんと適当に喋りながら一時限目を過ぎることに  
で話しん中で

保険さん100メートル、バク転、10秒フラットの事を知って  
いて

「私ガ克蘭君のこと解剖したいな」

って可愛い感じにおっとりしい事を言われましたが

「可愛いけどダメツス！NO解剖！」

つつといた！けど可愛いって言われたのが意外だったのかちよつ  
と顔が赤かったでござる！俺、初勝利！！



「どうやら保険さん、綺麗だとかは言われなれてるっぽいけど、あまり可愛いとは言われなれてねえらしい」

「結構可愛いツスよこの人？綺麗でもあるけど」

「クツ・・・やるわねガクラン君！」

「敗北後の保険さんのセリフでした。」

『キンコーンカンコーン』

「おっ！終わりですな！」

「じゃ保険さん、俺教室に行きますわ」

「はいはい、またコーヒーお願いねガクラン君？」

「それくらいならいつでもどうぞ！って感じで俺は保険室を出た」

「俺移動中」

『ガラッ！』

「おはようさん！おっくれましたけど半分は仕事だったんで許してね？」

「もう半分はサボりだけだね！」

「ってアレ？唯さん？なんかコメカミがヒクヒクしてね？もしかし

て怒ってらっしやる？

「マサ君・・・作業は一時限目の途中には終わったって用務員さんが言ってたけど？」

「どう言うことかしら？」

ぬあ！おっちゃん！イカンがな！1番バレちゃイカン奴にバレとるがな！！

しかし漢マサ！負けるもんかい！

「スンマセンでした！ついこう・・・なんか・・・アレが・・・えっと・・・スンマセンでしたアアア！！」

うん！めっさ謝った！だって悪いの俺だしね！だって怖えしね！

「ハア〜！次からはサボらないようになさい」

おっ！なんやかんやで許してもらえた！

「うい！なるだけ気をつけますわ！」

しかし俺、絶対サボらないとも言いきれないので軽く濁しながらそう言いました

「なるだけ、じゃ無くて絶対よ！」

「絶対は無理でござる！」

ちよっとの間、唯との言い合いは続きました

「ハアハアハア・・・まだ一時限目が終わったばかりなのに凄く疲れたわ・・・」

最後は唯の体力切れで決着がつかしました！

「マサー！おつかれさま」

おっララ？どっちに？仕事？唯との言い合い？まあ仕事だろうねえ

「フツ・・・前の学校じゃあ学校の、つつか街の破壊（主にジジイたまに俺）と再生（こっちは俺だけ）を司る漢として有名だったからな！こんくれえはわけねえですよ」

何故か賃金も発生してたし

「もっと別の方向にいかしなさいよ・・・」

唯君、そんなこと言われても困りますがな、つつか結構、役に立ってたと思うぞ？

同時に騒動も起こしてたけど、ジジイが後俺も！

「アハハ・・・疲れてるね唯さん・・・おはようマサ君」

微妙に唯を気遣いつつ春菜が声をかけてきました

「そのうちに慣れるべ？おは春菜！今日も元気か？」

「ソレをアナタが言う！！そしてアナタは元気すぎ自重しなさい！」

自重と言われてもなあ、ふむ・・・

「じゃあ逆にキミ達三人に聞こう！もし今から俺がジーと黙ったら耐えられるかね？」

少なくとも俺は無理！で三人はというと

「アハハ・・・ちょっと想像できないかも？」

「うん？私は楽しいのがいい！」

「・・・無理ね・・・私も想像できないわ・・・」

とのことですよ、ふむ、ララは楽しいマサさんがいいようですな！

春菜と唯は想像すらできんとな！

フツ・・・ならばマサ・ダンマリモードだ！

「・・・」

ダンマリです！

「ねえマサどうしたの？」

「別に・・・」

更にクールを装います！そして無表情！

「えっ？マサ君？」

「どうした春菜？」

我慢だ俺・・・ひたすらにクール&無表情

「なっなんか怖いわよ？」

「そうか？」

フツ・・・ひたすらにクール&無表情&最小限のセリフ！

「ねえマサ！どうしちゃったの！ねえ！ねえってば！」

「どうもねえよララ？」

まだまだクール&無表情モード！クツ・・・シンドイなコレ？けど我慢だ！耐える・・・耐え・・・ピキツ！

「NOオオオ！顔つったアアア！顔つったアアア！！

イダダダ！やっぱ無理だったアアア！無表情キヤラは無謀なチャレンジだったアアア！」

バタバタともがく俺！

「マサ！いつものマサだ！うんうん！やっぱりマサはそっちのほうがいい！」

おいララ！ちょっとでいいホントちょっとでいいから心配しよう！例え自爆だとしてもマサさんのことを心配してあげよう！

「アハハ・・・マサ君大丈夫？」

春菜！流石は春菜！心配してくれて嬉しいです！けど目がなんか可哀相な奴を見る目なんですけど！

「ハア！私と春菜さんに言われたから黙ってみたと・・・ソレでこの結果ね・・・少しは懲りなさい」

懲りません！俺に懲りるといふ文字はねえんですよ！唯さんや！ホントはあるけど！  
撮影とか撮影とかねー！

クツ・・・っと何とか痛みがおさまりました

「ふう！俺を倒せるのは俺だけとはよく言ったもんだぜ・・・」  
額を拭いつつ、ソレっばい事を言ってみました

類似語に、俺を越えられんのは俺だけだ！もあるぞ！

「ただの自爆でしょ？」

唯さん、ザックリ刺しますね？もう刺した後には手首まで捻ってますよ？

まあいいさね！結論！

「無表情とかクールとかは無理！俺には耐えられん！そんなんすらくらいなら、フル装備の原子力空母を単独で沈没させる方が遥かに簡単だわ！」

「発想が怖いよ！マサ君！？」

春菜よ実は経験済みだったりします、むろん公にはなってますが、まあ若気の致りって奴？

「・・・まさか・・・ねえ・・・」

微妙に黙ってたなら（クールモードではなく）唯が冷や汗混じりに  
眩きなさった、感じいた？

「ねえマサ？原子力空母って何？やったことあるの？」

「バカデツカイ船でな？こつ軍事用の戦艦だな、やったかどうかは  
・・・ニヤリ」

俺も詳しくは知らんのですよ？つつか書いてる人だけどな！  
そして実際にやったかは濁しときました、一応な！

「おつ恐ろしいわね・・・ホントにやってそうだわ・・・」

唯君！やってますからね！まあ言わんけど

『キンコーンカンコーン』

うむ！いい具合にチャイムですな

「さあて席に戻ろうや！楽しい楽しい授業の時間ですよ」

「マサ君、そんなグツタリした顔で言われても説得力が・・・」

だって勉強は苦手なんだもの・・・そらグツタリなりますわい

「マサ頑張っているーっ！」

クツ・・・眩しいすぎるぜララ！

「まあ詳細はさておき授業は授業よね！ほらシャキッとなさい！」  
唯さんは厳しいですな！

まあとりあえず当面の目標は寝ない事ですな！頑張っただけで起きるぞ俺！

・  
・  
・  
『キンコーンカンコーン』

起きてたぜ！つうか歴史だったから全然余裕でした！

いややっぱり脱線すんのが面白えよな！

「マサ君、昨日もだったけど歴史の授業は楽しそうに聞いているわね？」

微妙に関心してるっぽい感じの唯さん

「面白えからな？つうか歴史先生ん脱線話が面白えんだよ？こつワキの知識がすげえ！」

まあ確実にテストとかじゃあ出なそうだけど、そういうのは好物なのです！



「マサ、授業中すつごく楽しそうだったもんね？」

「ララも俺の授業中ん様子を見てたらしく、そう言うが」

「いえいえララさんには敵いませんよ？なあ唯？」

「そうね？楽しそうだし真剣だったわね？マサ君の場合は真剣さが微妙だけど」

「おう！何をおっしゃいますやら、俺はかなり真剣だったぞ？脱線話ん時は！」

「エへへそうかな？」

「およろララ？唯が言ったことに照れとるな？随分とまあ嬉しそうな顔しちゃって」

「フフ・・・」

「唯もそんなララン様子に自然と笑みが漏れてるし、すっかり二人は仲良しさんってか？いやはや癒されるねコノ空間」

「って、そーいやリトは？って、む？さっきの休み時間もそうだったがサボってんな？仕事は唯任せかコラ！そうはさせん！」

「と俺がコチャコチャ考えていたらなんかリトいつの間にかララと話し、しとりました、つうか、もう一人ん奴はダレ？こんなん居るか？」

よし確認だな！

「リトや、その男子生徒Sはダレだ？もしや・・・ヒドイ！俺を捨てると申すか！もはやツッコミ疲れて、俺は唯任せにすればいいやと言っ事か！！」

「なっ！ちよつと結城君！私一人にマサ君を押し付ける気！！」

何故か唯まで参加しました、つつか唯さんやもう完全に俺をアレな感じな扱いですよね？

けど、セリフから一応は面倒見てくれるっばいよなツッコミ的な意味で

「ちよつ！落ち着け！マサ意味わかんねえから！後、古手川！俺は家でも一緒なんだぞ！

ちよつとは休ませてくれてもいいだろ！俺は休みたいんだアアア！！」

切実ですネリト君・・・ていうかちよつと悲しいんですけど？流石の俺も泣きそうなんですけど？

「マサどうしたの？どこか痛いのか？」

もう泣いてるんですけど

「いいんだ・・・俺みたいなもんはアレなんだ・・・アレな奴扱いで救急車の物に運ばれて一生入院してればいいんだ・・・チクソウ・・・」

へへッ・・・

「ちよっ！結城君どうにかしなさいよ！」

「いやこんなに落ち込むとは思わなかったんだよ！古手川が頑張れ  
って！」

へへッ・・・そこでも押し付けあいですかい・・・チクソウ・・・

「ちよっくら解剖されてくる・・・今なら  
解剖されてもいいわ・・・」

保険さんこんな俺でも最期にアンタの役に立てそうだけ

「「わあー！ララ（さん）止めてー」「」

「えっ？うっうん！エイ！」

『ギョッ』

「わっ！また成功！」

いいよ好きなだけ抱き着けばいいさ・・・

「悪かった！ホント悪かった！マサ必要！マジ必要だから！」

「そうよ！マサ君！アナタは必要な人だから！」

で必死に二人は励ましてくれました・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・ニヤリ!!

「楽しんでいただけたかな？」

「「へッ?」「」

うん!演技ですよ?このマサともあるつものがあのくらいで凹むかい!いや嘘!

ホントは結構キツかったよ?

しかし中々の演技っぷりだったな、考えまで演技つてたもんな、『リトガード』すらも封印したし

つつわけで、今だに固まってる二人に

「いやスマン!ぶっちゃけそこまで凹んでねえっス!いや凹んだことは凹んだけどね?」

とネタばらし

っておや?なんかプルプルしてらっしやるなお二方?

「言い過ぎた手前・・・怒るに怒りきれない・・・」

「俺もだ・・・この怒りどころに・・・」

悔しそうですなお二人さん!それも狙いでごぜえますよ!

「ククク・・・フハハ・・・ハアハツハツハツハツハ!!」

思わず悪役三段笑いまで出ちゃいますな！  
『トントン』

ん？ダレかね？この絶対勝者マサさんの肩を叩くのは

「は〜い！ガクラン君？解剖させてくれるんだって？」

保険・・・さん？えっ？嘘？はっ？マジで！

「いやいやいや！アレはアレだから演技だから！！無理無理無理！  
解剖は無理！」

ってアレ？ララさん、さっきまで俺に引っ付いてたのに何故に距離をとっていますか？

「またまた〜！ホントは解剖されたいんでしょう？さっ行きましょっか？」

ちよっ！何その輝かんばかりに素晴らしい笑顔は可愛いんですけど！！けどそれ以上におつとろしいんですけど！！

「ちよっ！助けてリト、唯！」

マサさんを助けよう！さあ今こそ我がクラスの誇るツツコミの力を見せる時だ！！

さあ早くツツコミで！！ほら早く！！

「アナタは一度くらい解剖された方がいいわよ、御門先生よろしく  
お願いします」

ちよ！唯？素敵な笑顔で見捨てんといて

「マサ！グットラック！」

リトオオ！そのサムズを止めるオ！フライト前じゃないだぞ！あの意味フライトだけど！！

クツクラスメイツ！クラスメイツは！

『ザッ！！』

敬礼しとるうう！男子生徒S以外一人残らず敬礼しとるうう！春菜も里沙も未央もA&Bまでもがアアア！

ガクリ・・・

「大人しくなつたわね？」

クラスの団結っぷりに抵抗する気力もねえツス・・・

『ズルズル』

「ド○・ド○・ド○～○～ド○～○」

保険さんに引きずられる俺は売られてく子牛の歌を歌うくらいしかできなかつた・・・チクソウ・・・

悪ノリは程々に・・・マサでした。

第十話っぽい感じ！（後書き）

後書き

ハレンチさんかなり丸くなってます・・・  
そして書き分けが！書き分けがアアア

それでもお暇ならまた見てやって下さい  
感想なども是非に！！

番外っばい感じ！（前書き）

前書き

これはかなり危険です、しかもセリフと擬音のみでお送りします

ある意味、酒の勢いだったり・・・

余りにもマズイようでしたら教えて下さい、消極しますので

まあ今までのもヒドイですが！

それでもいいやという方のみどうぞ



番外っぽい感じ！

くもしもネギま世界だったらく

・

・

・

その1

「エクスキュシヨナーソード！（断罪の剣）」

『ガキン』

「コラ！刃物振り回しちゃダメだろ！もう母さんそんな子に育てた覚えはないよ！」

「育てられた覚えはないわアアア！というか私はキサマよりも年上だぞ！というか  
エクスキュシヨナーソード（断罪の剣）を素手で受けるなアアア！」

「もうコノ子ったらケンケン言っただけに！父さんから言っただけに！  
ささい？」

「マスター、刃物はダメですよ？」

「何で言う事を聞いてるんだ茶々丸ウウウ！」

・  
エヴァとの出会いと闘いでした。

・  
・  
・  
その2

「勝負アル！」

「いいぜい売られた喧嘩は買いますよい？」

「ハアアア！」

『ゴキーン』

「痛いアル〜痛いアル〜！堅すぎアルよ〜アナタ何で出来てるアルかアアア？」

「バグだからね！つうか大丈夫か？」

「うう〜勝負にすらならなかったアル・・・アナタ強いアル！私強い人好きネ！アナタ私の婿になるアル！」

「ハアアアア！いきなり何言ってるのキノチャイナ娘！！意味わかんねえぞ！つうかさんなんで一生の伴侶決めていいのか！」

「もっと考えよう！ジツクリと自分を見つめ直そう！今ならまだ引き返せるから！」

「もっと自分を大切にしなさい！」

「ワタシ、チャイナ娘じゃないアル！クーフェイアル！」

「あっこれや」丁寧、クーでいいか？あっ俺は 鬼島 政成な？  
マサでいいぜ」「

「マサルな？わかたアル！マサはワタシの婿ネ？」

「だが断る！」

クーに結婚を申し込まれました

・  
・  
・  
・

その3

「数学？算数の時点で見失なってるぞ俺？  
通分って何？全っ然、意味わかんねえんだけど？」

「アンタよくそれで先生なんてやってられるわね？」

「いや俺も何をどげんしてこげなことになっとうかさっぱりわからんことになっとうでこぜえますよ！」

「アンタどこの出身よ！」

「宇宙船、地球号ですが何か問題でも？」

「範囲が広いわよ！」

「広い世界をみるんだアスナ！」

「意味わかんないわよオオ！」

ある日のアスナ（ツツ）ミ（）との会話より・

・

・

・

その4

『バサア』

「見ての通りに私は化け物なのです、私は  
私は……」

「マサよりは全然まともだと思うけど？」

「それもそうですね！アノ人に比べれば  
羽根くらい普通ですね」

「そういう事は本人前にして言うこっちゃんえとマサさんは思っ  
んですが？」

名シーンが台なし

その5

「オラアア！どうしたどうしたアアア！  
大鬼神さんよオオオ！」

『ズドン！スガン！ズドン！』

「グオオ・・・」

「スクナ・・・泣いてるわね？」

「泣いてますね？相手が悪すぎましたね」

「打つべし！打つべえし！」

「モウ、マジカンベンシテ・・・」

「「スクナが喋ったアアア！」」

マサVSスクナでした・

・  
・  
・

その6

「フツ・・・私が来るまでの間、時間をかせげ」

「もう終わってますよ？スクナは最後泣きながら、還って逝きました」

「なあにいいい！何故！どいう事だ！私の見せ場だろうっココは！」

「いえ・・・そんな事を言われてもマサさんが・・・」

「またアイツかアアア！」

エヴァ出番を奪われる

・  
・  
・  
・  
その7

「全く！キサマはいつたい何なのだ！普通、素手でスクナを倒すとかありえんぞ！」

「こつもつとあるだろ！凄い魔法とか！凄い技とか！」

「それをただのゲンコツつて！グーつて！魔法使い舐めてるのか！」

「なあに言ってますかエヴァさんよ、男の否！漢の信じる最高の武器つてなあ古来より己の拳つて決まってるですよ？」

「流石ですマサさん！マスター、マサさんに謝って下さい」

「ちょ！茶々丸？なんで私が悪いみたいになっているのだ！」

「というかオマエは私の従者だろ！何でマサナリの隣をキープしているんだ！戻ってこんかアアア！」

「お断りします」

「茶々丸、んな事言ってるやんなってエヴァはホラ、淋しがってたんだよ？まだこんなになっちゃうんだぜ？可哀相だろ？」

「流石はマサさん、お優しいですねでは戻ります」

「子供扱いは止めるオオオ！！私はオマエより数十倍長く生きてるんだぞオオ！」

「うんうん！わかってるわかってるさ背伸び・・・したいんだよな？俺はちゃんとなんとわかってるからな？」

「頼む頼むから少しくらいは話を聞けエエエ！」

茶々丸はエヴァのことをマスターと、マサのことはグランド（偉大な）マスターと認識しています

故にエヴァ＜マサです

・  
・  
・  
・

その8

「ハッ！」

『ズバアア』

「ガハッ！！」

「なっ！エツエヴァアアアアア！」

「フツ・・・この場は引かせてもら」

『ズギヤゴガアア』

「ガフツ！」

『バシユウ』

「フウフウ！！エヴァ！？エヴァ？」

「フツ・・・あの程度で取り乱すな、私は  
真祖の吸血鬼だぞ？腹に穴が開いた程度では死には・・・ってマサ  
ナリ？」

「エグ・・・ウグ・・・よがっだア！よがっだエヴァ生きでだアよ  
がっだア・・・」

「・・・まさか・・・泣き出すとは・・・  
しかし悪い気分では無いな・・・」

「よがっだよお〜〜」

エヴァの無事にマサ号泣なんやかんやで  
エヴァのことを大切に思っています（友人として）

・  
・  
・  
・  
その9

「・・・マサナリ？どうしたんだ？」



「なんでもねえですよ？」

「昨晚、泣いてしまったことで照れているようです」

「ちょ！茶々丸！なんて言っちゃうの！！」

ものっそい恥ずかしいだろうが！」

「ニヤニヤ」

「笑うなエヴァー！高い高いされてえかゴラ！」

「マサさん可愛いです」

その次の日の話・

・  
・  
・

くもしもリリカル世界だったらすく

その1

「死になさい！」

『ギャリバリバリズドオオン』

「ハッ！静電気ごときで俺は死なねえぜい  
いや寧ろ肩コリが解消されたわ」

『ガクガク』

「アナタ・・・足にきてるわよ？」

「そっそそそんな事ないわアアア！」

登場場所がプレシア邸で戦いになったマサちなみにホントは効いてません！

・  
・  
・  
・

その2

「プレシアさんよ？いいのかなあ？このままもしアリシアが生き返ったらきつとこつ言うだろうなあ

私の妹にイジワルするお母さんなんで大っ嫌いってさあ」

「なっ！わわわ私はどどどつすねば！」

「うむ知りたいか？」

「教えなさい！今すぐに！」

「ん〜？頼む方がなあ？もうちょっとあんだろ？プレシアさんよあ」

「おっ・・・教えて下さい」

「まっよかるう！まずはフェイトにウンと優しくしなさい！娘としてな？」

んでフェイトとアリシアン二人にちゃんと事情を話しなさい

二人ともいい子っぽいからな、きつと許してくれんべ?」

「で・・・でも!」

「おいおい! 考えてもみてみ? そうして二人の信頼を勝ち取ったらどうなるか?」

そう

「お母さん! 大好き!」(アリシヤの声マネ)「

「母さん大好き!」(フェイトの声マネ)「

となる! 二倍だぞ! 二倍! あんな可愛いのが倍率ドンだぞ!」

「ブフーーーー! あああ! 最高だわ最高すぎるわ!

アリシヤアアア、フェイトオオオ!」!

マサの洗脳的な話術によりプレシヤがエライ事になります

後、マサは幽霊が見れます触れます、一回死んでるからだと思いますが、マサだからという説もあります

・  
・  
・  
・

その3

「ジュエル・シードって今何個あんだ？」

「5つよ」

「んじゃ足りんじゃね？アリシアン靈魂はココにいるし、後は体に入れるだけだべ？」

「はい？えっ？ちょ！え？アナタ今、何て？」

「だからあ！アリシアの以下略だっつうの！

だから体に入れる分で1個！固定する分で1個まあその間を繋ぐパイプみたいなもんは俺がするわ

多分一回死んでるから繋ぎやしいと思うしな

んで後ん1個かな？アンタの体治さねえとな？」

「むっ・・・無茶苦茶ね？私の体も知ってるなんて」

「まあ無茶苦茶すんのはジジイン特権だけどな？マサさんもするんですよい！

つつわけでフェイト連れてこい、話しもしろよっ？」

「ええ・・・わかったわ」

・  
・  
・  
「さあて！始めますかねえ！まずはプレシア！そお〜い！」

『カツ！』

「・・・そんな変な掛け声でちゃんと制御できるのが信じられないわ、ホントに治ってるし」

「まあバグだからね？よかったなフェイト？今からアリシアも生き返らせるぜい？」

「あっありがとマサお兄さん」

「ニッ！まだ早いぜい！全部終わったら頭撫でるからな？」

「さって！やりますかい！」

『カツ！バリバリ』

「ん・・・アリシアよいはよはよ体に入らんね？あっ俺ん体を経由してな？」

「え！うん！エイ！」

『シュポッ！』

「グッ・・・ギッ・・・」

『ポタポタ・・・』

「マサお兄さん！目から血が鼻からも！マサお兄さん！」

「問題ねえ・・・でござえます！ちょっと昨日ピーナッツ食いすぎただけ」

「アナタ・・・」

「んっ・・・早く早く！マサお兄ちゃんが！早く！」

『ギユバツ！カッ！』

「よしやあ！後は仕上げエエエ！ラスーじゃい！」

『カッ！』

「・・・マサお兄ちゃん？お母さん？フェイト？」

「アリシア！」

「姉さん！」

「うんうん！感動の体面だな！いやよかったよかった・・・ってアレ？アレレ？」

『ドサッ！！...！』

「アツアナタ!!」

「マサお兄ちゃん!!」

「マサお兄さん!!」

穴だらけの矛盾だらけ、そしてマサは限界越えて倒れました  
アレ? そういえばアルフ・・・まあいつか?・

その4

「マサお兄さん大丈夫かな?」

「大丈夫だよ! マサお兄ちゃんだもん」

「そうね? あの子には借りがあるわ、このまま借りっぱなしは嫌よ」

「別に気にすることはないとマサさんは思うぞプレシア?

アレは『俺が』やりてからやったんだかな?

後フェイトとアリシア撫でていい?」

「マサナリ!!」

「マサお兄さん!?!」

「マサお兄ちゃん!」

「ええみんなのマサさんですが? つつか撫でていい? もう撫でてよ? つつか撫でてるよ?」

『ナデナデ』

「・・・何で私?」

「ブウ! お母さんばかりズルイ!」

「えっと・・・私も撫でてほしいな・・・」

この後、撫で回しました、いやイヤらしい意味じゃなく

・・・

その5

「そついやいたねオマエ?」

「うるさいねえ! 私だってちゃんと絡みたかったよ!」

アルフ涙目

・・・

終わりです



番外っぽい感じ！（後書き）

後書き

何故かどちらも主役のセリフというか存在感がない！

ホントにやってまいりました・・・

ホント、マズイようでしたら教えてください

ホントスンマセンでしたアアア！

## 第十一話っぱい感じ！（前書き）

前書き

番外意外と大丈夫だったみたいで安心しました

それと早めの投稿となりました、またまたキャラがマズイ事になっていきますので、

頭痛薬を片手にお進み下さい。

## 第十一話っぱい感じ！

「あっ！もう一杯いいかしらガ克蘭君？」

「いいツスよ？」

アレからどうなったかって？うむ！解剖されてねえよ？されてたら今頃はこうしてコーヒー飲んでねえし

実はアレは保険さんの演技だったらしい保険さん言わく

「今朝のし・か・え・し・よ？」

だとき、根に持つタイプなのね？けど直ぐに

「そういう所が可愛いんすけどねえ」

つつたら本気で解剖されそうになりました、けど顔がちよっと赤くなっとなりました

で今はまた授業中！またもやサボりです  
体育だったら出てるけどね

しかしアレだな、ちっと小腹が空いてきたな・・・

ん？およ？アレはカセットコンロではござらぬか！しかもフライパンまであるぞな！

ソレに・・・ふむ！コレだけありゃイケるな

「保険さん？腹減ってきちゃったんでアレ使っていいツスカ？」

俺が保険さんにそう聞いたら保険さんは

「ええいいわよ、私のもお願いね？」

と快く許可してくれました、後何故にコレらがあるかと聞いたら

「私は殆ど一日中ここに居るから、ヒマな時やお腹空いた時に作ったりしてるのよ」

との事でした、まあ急に体調崩して来る生徒とかもいるから保険室から離れられんわな

俺は例外だけどな！

『ジュージュー』

つとコチャコチャ考えてる間にも中々にいい焼き具合！

後は皿に移してバターとシロップをトッピングしたらば

ほい完成！ホットケーキでござえます！

「どうぞ〜！」

「あら？美味しそうね？」

俺的には中々の出来栄え！保険さんのにも見た目は合格らしいですな！

「まっ食べてみて下さいな！つうか俺も食うツスけどね！」

で食べてみました、うむ！美味しい！我ながらイイでき！

「美味しいわねえ、お店で出せる味だわ・・・ホントに多芸ねガクラン君？」

恐悦至極！いやはや嬉しいですな！まあ美柑の方がもっと美味いん作る気がするけど・・・今度作ってもらうか？

とコチャコチャ考えてる間にも保険さん食い終わったようですよはや美味そうに食べてくれましたな、うむうむ！

「ジーーーーー」

って！何故に俺のホットケーキ見つめていますか？いやホントはわかってるけど

でも俺も腹減ってんでござえますよ！

まだ一口しか食ってねえしね！つうわけで残りを・・・

「ジーーーーー！！！」

くっ・・・食いずれえええ！ものっそい食べ辛いんだけど！！

「わあった！わあったツスよ！どうぞ」

俺の分を泣く泣く保険さんに渡しました

「あらいいの？悪いわね？それじゃ遠慮なく」

ぜってえ悪いとか思ってねえツスよね？

めっさ笑顔だものね！・・・チクソウ！

けど美味そうに食ってくれたのでそこは嬉しかったです

後、笑顔でホットケーキをパクつく保険さんが可愛いかったです

！・

・

・

『キンコーンカンコーン』

「ほいじゃあ戻りま〜す！」

休み時間に入ったので教室に戻ります、つうか普通は逆じゃね？

今日だけで二回サボっとるぞ？

「また来なさいね？ガ克蘭君？」

まっ保険さんが歓迎してくれるっばいからいいやね

コーヒーとか軽食目当てっばいけどな！

〜俺移動中〜

『ガラッ！』

「クラスメイツよ！私は還ってきたアアア」

「どごそのロボット乗りの名ゼリフをパクりつつ俺参上！」

「よく無事だったわね？」

唯さんやソレは見捨てたアナタが言うことではねえですよ？

「解剖されていないからね！つつかされてたまるかい！コーヒー飲みながらダラダラして・・・」

あっ！しもた、余計なこと言った気が・・・

「へえ〜授業またサボって・・・へえ〜」

「うつつむ・・・怒ってらっしゃいますね？なんか口元がヒクヒクしてますね？」

「フツ・・・ここはアレだな、伝説の技を使う時だな！食らえ！」

「プルプル・・・ボク悪いマサナリじゃないよ？」

「極悪よオオオー！！」

「ものっそい怒られました・・・しかし唯よ極悪はひどくね？極めて悪いってひどくね？」

「そついや男子生徒Sの正体が謎のままだったな、リト、そいつダレよっ」

アレから唯の体力切れにて決着はつきました！

そいで今はさっきの休み時間ん時に聞きそびれてた事をリトに確認中

「ああコイツは俺の中学からの友達で猿山っていうんだ」

ほう猿山ねえ、いたかこんなやつ？やっぱ思いだせんな？

つつかコイツもなんかアレだな？下心がヤバイ感じだな？

まあいいさね

「エテ山な・・・俺は鬼島 政成、マサでいいぜい」

何となくそんなあだ名をつけました、だって佇まいからして、猿っぽいんだもの！

しかも発情期の！

「ちょおい！エテ山ってなんだよ！エテ山って！」

やっぱり引つ掛かりますかエテ山君、ふむならば

「んじゃジロー？」

有名なアノ猿さんの名前です！

「もはや原型ないだろ！俺は、猿山！猿山 ケンイチだ！」



そんな名前だったんだね？つうか原型はないかもしれんがニユア  
ンス的にはピッタリだと思うんだが

それに・・・基本俺は下の名前で呼ぶタイプだけどなんかコイツ  
は違う気がする！

つうことで！

「1エテ山 2 ジロー 3は・・・思いつかん？ 1と2さあ  
どっち！」

さあさあさあどっちだ！

「おい！意味がわかんねえよ！」

うっせえですなあ、キミはこんな立位置になってんだから騒ぐん  
じゃありませんよ

「猿山・・・諦める？」

そうそうリト君の言う通りですぜ

「うーん、私は1がいい！」

そして何故にララが答えてんだ？けどいいやね

「はいララさんの推薦によりエテ山に決定しました！おめでとうエ  
テ山！」

「なっとなっなんでだアアア！」

なんでと言われてもねえ？

「まあそんなに叫ぶなよ？ほら？よく自分ん名前思い出しみ？深く深く深く……」

俺がエテ山に諭すような感じでそう言ったらエテ山は

「えっ……あっ……」

とだんだん虚ろな目になってまいりましたっむっむ！

「ほら……思い出してきたろ……さあオマエの名前を言うてみるんだ？」

そしてここで声をかける

「……エ……さ……猿山……」

ふむ！効いてきたな！もう一押し

「違うだろっ？ほら……もう一度……オマエの名前は？」

「さ……さる……違う……エテ……エテ山……」

ニヤリ！

「そうオマエは……」

『バチン』

「クラスメイトを洗脳しない!!」

チツ！惜しい！唯に阻まれた！もうちょいだったのに！

「はっ！おつ俺はいつたい!!」

「ハハ・・・大丈夫か猿山？」

正気に戻ったエテ山にリトが苦笑いというか引いた笑いをしつつ声をかけてますな！

「なに言ってるんだ？俺はエテ山だぞ」

「「えっ!!」」

フツ・・・どうやら成功したようだな！

「ちょ！猿山！？おいマサ！オマエが呼ぶだけならまだしも本人までそう認識させるとかやり過ぎだろオオオ！」

元に戻れ猿山アアア！」

うむ！リト君の言う通りやり過ぎた気がするな

「おいおい、さっきから猿山猿山って、俺はエテ山だぜ？何勘違いしてんだよ？」

うん！コレはやり過ぎたな・・・まさかここまで効くとは・・・

自分でも予想外でござるよ

「マサ君どうにかしなさいよ！アナタのせいでしょうが！！」

どうにかって言われてもねえ、ふむ・・・シヨック療法だな！

「エテ山？ジャンケンホイ！」

「へっ？あつホイ！」

俺グー、エテ山チヨキ！俺の勝ち！でここから

「あっちむいて~~~~~~~~~~~~」

俺が指を向けるとジッとその指を見るエテ山！

そして

「そお~~~~~い！！」

『ゴリキ！！』

「グエツ！」

秘技！『あっち向いてそお~~~~い！！』だ！

いきなりジャンケンをつって相手の油断を誘い、そこから『あっち向いてホイ！！』

と見せかけてクビ筋のあたりをゴキリとすると・・・

「アナタ何やってるのオオオオ！」

おいおい唯君、まだ説明の途中だつつうのに

「猿山！猿山！？」

「アレ？動かなくなっちゃったね？」

なあに安心しろい目が覚めたらエテ山としての記憶は無くしているさ！

「つつ・・・ん・・・」

ほれ、目が覚めたみたいですよ！

「猿山？大丈夫か猿山？」

目を覚ましたエテ山にリトが心配そうに声をかけてますな！つつうか大丈夫だつつうのに俺に抜かりは・・・

「OH! No problem!! My name is SARUYAMA!! Thank you! HAHHAH!!」

アレ？

「ちょ！おい！猿山？なんで英語！？」

「No problem!! No problem!! HAHHAH A!!」

マズイでござる・・・

「ちょっとお！コレどつするのよオオオ！」

うむ、早く何とかせねば、書いてる人もピンチだ！英語全くできんからな！

「HAHAHAHAAAー！！！」

・  
・  
・  
・  
・  
でアレから三回程、『あっち向いてそお〜い！』したら何とか元に戻りました

いやナメ〇ク語を喋り出した時はマジで焦ったぜ！

ちなみにその様子を見てた春菜や未央はかなりドン引きしてたが

里沙だけは

「マツ・・・マサマサ・・・ホント最高！！！」

つってサムズしてくれました、つつか笑い過ぎです！チアノーゼおこしかけとったし

「でエテ山よ？オマエ昨日いたっけ？」

「昨日は休んでたからさ、けど休んでなかったら一日早くララさんと知り合いに慣れたのに!!」

結局、俺はエテ山と呼び続けることにしました

つつかエテ山、マジで目がヤバイわ、もうアレだわ・・・校長（  
犯罪者）三歩手前って感じか？もう一回くらいイツとくか？

「やめとけてマサ？ホント疲れるから」

なんかリトに読まれた！チツ・・・リトに感謝したまえ！

あっ！かつ・・・勘違いしないでよね!!べっ・・・別にしっ・・・嫉妬とかじゃないんだからね!?

うわ！やっぱキモいわ！

「うん！やっぱコレは唯の仕事だな？」

「はい？意味わからないわよ!!」

ツンデレですよい？

「ねえねえララさんは付き合ってる人とかいるの？」

なんか俺がコチャコチャ考えてる間にも

エテ山がララにそんな質問をしとります

そして案の定というべきかララは

「ううんいないよ？でも旦那さんになる人ならいるよー！ソレはね・

・マサだよ〜」

と言いながら抱き着いてくる

「リトガード！」

そしてやっぱりリトガード！

「ちょ！なんでいつも！」

だから仕様だっつうの！

「ちよとマサ君？どういうこと？学生の身分で結婚って？」

あっ！そっぴや唯は知らんのだけ？それにエテ山も呆然としとるし

しゃあねえですな

「うむ実はなカクカクシカジカというわけなんでござえますよ、まあ俺はその気は今ん所は無えですがね」

と昨日春菜達にもした話しをしたらララが

「むう！いいもん！絶対にマサと結婚するんだから！」

といつものようにムキになりなされた、そんなララに俺は

「俺がオマエに惚れたらの話しだけどなあ？」

つっといた



「頑張るもん！」

はよ気付けそれは一過性の（以下略）だと

「あつと一応言つとくが『惚れて』はいねえが『好き』ではあるぞ？まあコレありトや唯にも言えるこつたけどな？

後クラスメイツも、エテ山は微妙だけんど」

むろん美柑に保険さんもな！みんな、いい奴だし、面白いしな

『キンコーンカンコーン』

おつと終わるか？ってアレ？何コノ空気？

「マサ君・・・真顔で凄いこと言つわね？」

あい？そうか？つうか唯、微妙に顔赤くね？照れてんのか？

「ホントだよな・・・マサ凄えよ」

いや何が？つうかどの辺？

「うーん！もつと好きになつてもらえるように頑張る！」

いや今でも好きですよ？人間的意味で

「マサ君のそう言う所はホントに凄いな」

春菜やソレは他がダメつつう事かオイ！

いやわからんでもないけど！

でもホラー！ここ一番に強いから！

「マサマサ！カッコイイこと言っじゃん」

「そう言うことを普通に言うのが変わってると思っけどね〜」

いや普通だろ！つつかカッコイイのか？  
わからん？

「マサ・・・凄い漢だな・・・」

「ああ俺達もいつかは・・・」

なんかショーウィンドーに飾られてるトランプペットを見る瞳はやめれA&B

「なんで俺だけ・・・」

いやそう言われても困るがなクリリ・・・ゲフンゲフン！エテ山  
よ・・・

で授業が始まるまでなんか微妙な空気でした・

・  
・  
・  
『キンコーンカンコーン』

やっ・・・やっとな終わったぜ・・・何度なく諦めかけたよ・・・

けどそのたびに唯励まされて耐えることができた・・・

いや嘘！落ちかけるたびに

「ダメよ！」

とか

「シャンとなさい！」

とかつて後頭部をペシペシ叩かれて阻止された、いや全然痛くは無えですよ？バグだからさ

けどなんか逆らえんかったんです、恐るべし唯！これが委員長スキルというやつか！

「そんな唯に流石のマサさんもタジタジだぜ！」

「いきなり訳のわかんない事を言わないでよ！」

ガキ大将とクラス委員長です！わかる人にはわかるんですよ。

とそれはさておき！

「ザッツ昼メシ！！お弁当タイム！今日は中庭です！つうわけで唯も一緒に食おうぜい？今ならリトララと更には春菜もついてくるぞ！」

別に春菜とは約束してるわけではござらぬがな！

「えっ？別にいいわよ？」

よしゃ！OK！

「お弁当〜 お弁当〜 マサのタツマゴ焼き〜」

ララよなんだ？その歌は？いや楽しそうだけどね！

そして可愛いけどね！

「春菜〜一緒に食おうぜい！今日は中庭で！メンバーは昨日のメンツ+唯だ！」

今更ながらに春菜に確認！

「えっうんいいよ？中庭だね？」

あっさりOK！

「ハア〜最初に聞いておきなさいよソレは？」

そして唯からきつちりダメ出し！まあいいではござえませんか、OKだったんだからよ！

「リトも行くぜい！」

「ああわかった！フウ〜春菜ちゃん春菜ちゃんっ」と

リトにも確認、なんか小声で春菜ちゃん、春菜ちゃんって練習し

とるし、ちいとばかし怖えぞ？つつか今更だべさ？

まあいいさね！では行きますかい！

〈俺達移動中〉

うむ！中々に日当たりがいい場所ですな！芝生もイイ感じ！

そしてやはりここぞ

「テロリロリン！レジャ〜シ〜ト〜！」

しときました！リトや春菜は知っていたが唯は初だったので

「ソックリね？しかも旧のほう」

つってくれました、うむ！実は旧のほうだったんです

後、ララはアノ声つつか元ネタを知らないので昨日に引き続き特  
に気にしてはいませんでした

でみんなでいただきますして食べます、唯は若干戸惑ってました  
がね！

むしやむしや！う〜む

「やっぱりアレだな、俺だけで作った分、昨日のよか微妙に劣るな  
」？」

「そうか？充分美味いけどな？」

「そつだよ！美味しいよ？」

リトララの二人はそう言ってくれるんだが昨日ジジイ越えを誓った身としては妥協はできませんですよ！

むっ！そつだ春菜と唯にも食べてもらい感想を聞いてみるのだ！

つづのは半分建前ね？昨日もだったけど春菜はどんな味だろうって顔してるし

唯も似たような表情だしな

つづわけで

「春菜？唯食ってみるか？」

と弁当箱を差し出したら何故かララが

「タマゴ焼き〜！」

と俺のタマゴ焼きを強奪！

「コラ！何でオマエが食ってるの！欲しいならちゃんと欲しいって言えっつづの〜！」

一応注意はしときました！

で春菜と唯はそれぞれ

「えっとそれじゃあコレいいかな？」

「私はコレを貰っていい？」

と一品づつチョイスしてパクリ！

「美味しい〜！」

「ホント！コレってホントにアナタが作ったの？」

との言葉をいただきました！つつか唯さんやソレはないんでないかい？

まあわかるけどね！

「お口に合ったようですね？しかしまだまだでござえますよ！美柑との合作はコレよか美味いし！」

俺んジジイは更にソレよか美味い！」

何れは越えるけどね！美柑がいれば！単独ではまだまだ遠いぜい

「私のより美味しいのに・・・」

「何かしらこう・・・凄くモヤモヤするわ」

うお！なんか落ち込んでもうた！何故に？いや何となくわかるけど

「はっ春菜ちゃん、そんなに気にすることないって！ほらマサだから」

そんな春菜をリトが元気付けようとしとります！

ってマサだからつつ慰めは如何なもんかと

「そつそつだよねリト君、マサ君だもんね？不思議はないよね？」

それで立ち直るんかい！つつか春菜ん中では俺ってどんな存在！？

「結城君のセリフ凄く説得力あるわね」

唯もかい！

「キミらの中のマサさんって何さ！」

思わずそう聞いてみました、まあ予想はつくがな！

「変人！」

「へ〜ん！」

「えっと・・・変わった人かな？」

「無茶苦茶な人ね後、変人！」

上から順にリト、ララ、春菜、唯でした！やっぱりね！そつです  
よね！けどねえ

「いや確かに俺は変人ではあるけどね？そこはもうちよい捻ったほ  
うがいいと思つぞ？こつ笑いの？」

「」「引つ掛かるのそこ！」「」「」



「??？」

中々に揃ったツツコミをいただきました、ララはちいっと難しかったようだ

「他のどこに引っ掛かれと？」

って逆に俺が聞いたら、

「そう言われたら・・・無いな」

「無いね？」

「無いわね」

「????」

無いとの事でした！けどやっぱりララはわかってなかったけどな！

・  
・  
・  
・

でその後は弁当食い終って食ミ〇〇（食後のミ〇ミ〇〇）して適当にコチャコチャしながら過ごしました

後、唯にも俺とララがリトん家に世話んなってることは話したいぞ、まあ

「なっ！一緒の屋根の下だなんてハッハレンチだわ！」

つってましたが

「いや、んなハレンチって言われてもな？

リトはそんな奴じゃねえし、それに俺だぞ？一般人とは違うのですよ！一般人とは！」

ついたら何故か妙に納得されました、リトには微妙に引っ掛かっていたが、それも納得してくれました。

それとミ〇ミ〇飲んでる時は

「うっ……可愛い……」

「うん……可愛いかも」

「でしょ？でしょ？」

って唯、春菜、ララに言われました、つつか可愛いって言うな！可愛いのはキミらです！

更にその時のリトの目はやっぱりちょっと怖かったです。

『キンコーンカンコーン』

さて次ん授業は何だったかねえ？

## 第十一話つばい感じ！（後書き）

後書き

ハイ！書いてる人は英語が凄く苦手です、アノ部分だけで30分くらいかかるくらいに！

そんな残念な書いてる人ですが、頑張っていきますので、またお暇なら読んでやって下さい

感想などありましたらよろしくお願いします。

アレなんかワンパターンに・・・

## 第十二話 っぽい感じ！ (前書き)

前書き

今回も割と早めに出来たのでGOです

けどデキの方は・・・

勿論、薬的なものをお持ちになってどうぞ

## 第十二話っぱい感じ！

自習でしごける！自習でしごった！

というわけで自習です、つうか何をすればいいんだ？さっぱりわからん！

「なあララ？自習って何をすりゃあいんだ？」

「わかんない」

まあそれやそうだな、よしならば頼りになる唯だ！

「唯、自習って何をすりゃあいんだ？腕立て？腹筋？もしくはケ  
ーキ作り？」

「アナタは大人しくしてなさい！ほらプリント上げるから」

マサはプリントを買った！やったぜい！

ふむふむ・・・なるほどね・・・ここをこうして更にはこうだな！  
よしできた！

「飛べ！俺の魂！」

『スィー』

「紙飛行機にしない！そして飛ばさない！全く・・・ハイ！今度は問題を解きなさい！」

チクソウ、俺の魂が解体されてしまった！めっさ飛んだのに！！

しかし諦めてたまるか！何度でもトラ

「次やったら本っ気で怒るわよ！」

既に怒ってるじゃねえですか！めっさ怖いんですけど！いやはや流石の 마사さんも委員（以下略）

つつわけで頑張って問題に挑戦！

「……何コレ？つつか何コノ記号？

イヤ待て落ち着け！コレはアレだきつと財宝の在りかを示した徳川的なアレだ！

そうに違えねえ！きつとそうさ！じゃないとこんな意味わかんねえ記号、使かわんもんな」

「そんなわけないでしょ！元素記号よ！ほら見せてみなさい教えて上げるから！ララさんは大丈夫？」

「うーん！一緒にやる！そっちの方が楽しいもん！」

ということでは自習中は唯先生の特別授業となりました

・  
・  
・  
・

で最後に唯の作った問題で小テスト！

「ララさんは・・・凄いわね満点だわ、けどもつ少し字の練習をしたほうがいいわね」

「うん！頑張る！」

むっ！やはりララは頭がいいらしいな！そして唯、結構ハマリ役だな？

「でマサ君は・・・」

ん？どうした唯よ！全力を尽くしたぞ！もうマサさんは頑張りましたよ？

「32点・・・最初に比べれば成長したほうがしら・・・けど」  
「は・・・」

おう！マジか！つつかマジか！何で唯が悲しい目で見てるかは知らんがマジにか

「すげえ・・・俺すげえ！やべえって！寧ろ唯がすげえ！初の30点台！！よしゃああ！サンキューな唯！」

いやマジすげえ！ヒヤッホーイ！

「い・・・言えない・・・とてもじゃないけど低すぎとは言えない・・・」

なんか唯が泣きそつな顔で何か言っていた気がするが関係あるかい！

「マサ嬉しそうだね？」

「嬉しいからな！快拳だからな！もう唯先生様々だな！よし拝んどこうー！」

『パンパン』

「やめて・・・なんかいたたまれなくなるから！ホントに泣けてくるから！」

唯の悲痛な声が教室に響いた

後、何故かクラスメイツ全員にすげえ優しい目で見られました

何故か悲しかったです。・

・  
・  
・

唯視点

疲れる・・・凄くつかれるわ・・・

私は何故か昨日からクラスメイトになって『しまった』前の席の男子生徒、鬼島 政成、まあ私はマサ君と呼んでいる、を見つめため息がでそうになる

そもそもあの時にマサ君に注意をしようとしたのが間違えだったわ

私は規則や風紀を乱す人が好きになれないハッキリと言ってしまえば嫌いなんだけど



その性格が災いしたってどうか

それにそんな性格もあってか私は余り人付き合いが上手い方ではない、だから友達って呼べる人も殆どいなかった

けど私はそれでも別に気にしてなかった、私はそういう性格だったから

けど、チラッとマサ君の方を見てみる、マサ君は今、私がつた小テストを必死になって解いてる所だった

何故かマサ君に声をかけた、あの時から私の環境がガラッと変わった

その変化を昨日の午前中までの、私だったら凄くイヤがっていただろうと思う

こんな無茶苦茶な人なんて大っ嫌いだったしね、まあ今は正直に言ってしまうは嫌いではないけど

あっべっ別にだからと言って好きってわけじゃないからね！ホントよー！

って何かしら今なんかマサ君に

「それでこそ唯だ！」

って言われた気がしたわ・・・

まっまあ気にしない方がいいわよね？

深く気にしたらいけない気がするわ！

それと私に友達も出来た、それは今、マサ君の隣で一生懸命に問題を解いているララさんっていう子

とても明るくてよく笑う人、私とは正反対かな？

こういう人も苦手だったんだけどな？

今はそんな苦手意識すらない

自分が変わっていったらという自覚はあるけどその変化が私はイヤではないと思う

そのキツカケを作った人物、もう一度マサ君の方をみて私は少しだけ笑いが出してしまった

そしてその顔をマサ君に見られていたみたいで

「うむうむ！眉間のシワ減ったじゃねえか？引っ越してきて良かったべ？」

って言われた、瞬間、顔が血が上るのを感じ、つい

「アナタに話しかけたことが一生の不覚よ！」

って言ってしまった、しかしマサ君はニカツと笑いながら

「安心したまえ唯君！俺は良かったと思っておるわ」

だつて・・・

「ハア〜・・・アナタのことじゃないわよ」

今度こそため息が出た、けど本当はちょっとだけ、ホントにちょっとだけけど

良かったかもって思ってるのよね・・・

マサ君は変わってる人だけど、回りの人もそれにつられて変わっていくのかしら？

ホントにマサ君は『変人』だわ・・・

そしてその後、二人の採点をしたらララさんは満点だった、ララさん頭良かったのね？

でマサ君は・・・凄く低かったんだけど

「嬉しいからな！快拳だからな！もう唯先生様々だな！よし拝んどこうー！」

とか言つて私を拝みだす程に喜んでた、とてもいたたまれない気持ちになった、そして流石に低すぎるとは言えなかった・・・

マサ視点

『キーンコンカーンコン!』

「終わったアアア! 長き冬(授業)が終わり! とつとつ俺は自由を手にした!」

アン? 6時間目はどうしたって? もう終わったぞ?

いや思いつかなかったわけではないからな! ホントだから!

つておよ? 唯が消えた! つうかりトもいねえし! 春菜までもが!

「きつと今度こそアブダクション!」

もうコレ使いすぎだよな? ちょっと反省です!

「マサ? リト達を探してるの?」

何故にわかった? あっ! 使い過ぎだからですね

つと、それは置いておいて

「おう! どこに行ったかしらんかララ?」

「えつとね、ハルナが部活の先生に呼び出されて、それをリトが追い掛けて、そのリトを唯が追い掛けてた」

おう? えつと・・・よつするに・・・春菜の様子を心配してリトが様子を見に行つて

リトの心配する様子が唯から見たら不審人物のソレと変わらなか

ったのでそんなリトを唯が追い掛けたって感じか？

リト哀れな奴め・・・

けど気になりますね・・・よし！

「俺達も行ってみようぜい！」

「えっ？うん！わかったー！」

うむうむ！良い返事ですなララ君！

では行きましょう！

唯が誤解してリトを血祭りにする前に！！

・  
・  
・  
・

リト視点

「春菜ちゃん大丈夫かな？」

俺は体育倉庫に入って行った春菜ちゃんと佐清の事が気にかかり、  
思わず独り言を呟いた

佐清っていうのは春菜ちゃんの部活の顧問で女子からも人気が高い先生だ、そのこともあって心配してついてきちゃったけど・・・

だっ大丈夫だよな？確かに佐清はカッコイイけど、でも倉庫なんか二人で入っていったし・・・

ってダメだダメだ！春菜ちゃんはそんな子じゃない！きっと無理に頼まれたに決まってる、それに佐清の様子がおかしかったし

よし！ちよつとだけ倉庫を覗いてみよう！

そう思っただけ俺が意を決して倉庫に近付こうとしたら

「ちよつと結城君！さっきからコソコソと春菜さんを付け回してどういうつもり！」

「のわ！って古手川かぁ？」

急に後ろから声をかけて振り返ってみたら古手川だった、ってなんか怒ってないか？

「黙ってないでなんとか言いなさい！」

俺が少しだけ考え事をしていたら古手川がそう言ってきたがチラッやっぱり春菜ちゃんが気になる

「古手川！頼む見逃してくれ！なんか様子がおかしいんだよ！」

俺が両手を合わせて古手川に頼んでみても古手川は

「おかしいのはアナタの方でしょ！凄く怪しかったわよ！」

って言って聞いてくれない

「だから！俺は春菜ちゃんが心配」

「キヤアアアア！！！」

「「！！！」」

突然、倉庫の中から悲鳴が聞こえてきた  
クソこうしちやいられない！

「春菜さんの悲鳴！どういうこと！」

「わかんねえよ！俺は行くから！」

俺は倉庫の中に入った！動揺していた古手川も遅れて入ってくる

「なっなによコレ……」

古手川の震えるような眩きが聞こえる、何故ならそこには何か触  
手のような物に掴まった春菜ちゃんと……佐清ではなく……ト  
カゲの様な怪物がいたからだ……

まさか……

「宇宙人か？」

可能性として考えた事がそのまま口に出る俺の眩きが聞こえたの  
かソイツは

「ハハハ！人質は一人でよかつたんだがなあ！俺様はギブ・リー！  
オマエが言うように宇宙人だ」

やっぱり宇宙人！けど人質ってなんだ？イヤそんな事はいい

「春菜ちゃんを離せ！！」

ギブ・リーに向かってそう俺が言つと古手川も

「そつそうよ！はつ春菜さんを離しなさい！」

つて言ってくれた、声は震えていたが凄い勇気だと思う、こんな化け物みたいな姿をしたやつを前にしてるのに

「はっ！イヤだね！コイツは人質だからオマエらも人質になってもらうがなギャハハハ」

俺達の言葉を聞いてもギブ・リーはムカつく笑いをしながらもまた人質と言ってきた

「人質って何！何が目的で春菜さんを！」

唯がギブ・リーにそう聞くとギブ・リーは

「ララと結婚することだ！宇宙の姫であるララと結婚して俺様は宇宙の王になるんだ！」

それを・・・ララの奴め急に現れた地球人に惚れたとかほざいたらしいじゃないか！

そいつにララから手を引いて貰おうと思ってなあ」

なっ！コイツが言ってる奴ってマサの事か！

「その地球人、どんな奴か知らないが、どうせたいしたことのない



クズなんだろう？ララに相応しいのは俺様さ！そして宇宙の王もこのギブ・リー様こそが相応しいんだ！」

クツ・・・コイツ！！マサのことをたいしたことないって言いやがった！バカにしゃかった！

アイツは無茶苦茶な奴だけどいいやつなんだ！

まだ知り合って三日しかたってないけど親友なんだ！！それを！

怒りで頭に血がのぼる！春菜ちゃんを人質にしたのが許せない！

俺の親友をバカにしたのも許せない！

横を見てみたら古手川も怒っていた、古手川の奴も俺と同じような気持ちなのかもしれない

俺はアイツを殴る！絶対に！ブン殴ってやる！

俺はそう決めてギブ・リーの方を見てみたそしたら春菜ちゃんがいなくなっていた！

どこに！焦りつつも回りを見渡すと

「たいしたことないクズで悪うござえましたな？この爬虫類モドキが！！」

あつと春菜は返してもらっぜい！」

そこには春菜ちゃんを抱えた親友クサの姿があった・・・

こんな時だけど．．．．春菜ちゃんをお姫様抱っこしてつらやま  
しいぞマサアアア！

．  
．  
．  
．

マサ視点

いやはや、こんなことあったか？もう知識役たたないにも程があ  
んだろ！

もう主要人物の検索くらいにしか役に立たんなコレ？

ってイカンイカン！なんか知らんがリトにもものっそい目で見られ  
てる！

いやまあ春菜んことだろうけど．．．

ん？いつの間に春菜を奪還したとな？、そんなもんアノ爬虫類モド  
キがペラペラ喋ってるあいだにN I N J Aしたに決まってんべさ？

ってイカンイカン！説明しとる場合じゃねえですな、ますますリ  
トの目が、というか唯まで目が釣り上がるつとります

何故にとは言わん！何を隠そう春菜は何故か服装乱れまくって半  
裸状態だからね？

つつわけで早めに

「リト？春菜よろ〜」

とあえてリト！

「えっあっああ！ってツーーーーー！！！」

うむ！リト君予想通りだな！カッチコチだぜ！

「結城君！ハレンチだわ！マサ君も！なんで結城君に！私がいるでしょ！私が！」

「リトの心のアルバムに記録させたら面白いかなあと？」

違うからね！今夜の撮影を止めてくれないリト君に仕返ししようと思ったわけじゃないから！ホントだから！

「アッ・・・アナタはアアア！ハレンチだわアアア！」

ハレンチいただきましたあ！

「キサマ！俺様の事を忘れるな！」

アン？ってそういやいたね爬虫類モドキ？

「いやスツカリ忘れてたわ！ことう意的に？」

「意図的につて！まあ私も忘れてたけど・・・」

唯は仕事シゴトしてたからな、仕方ないべさ

俺？いやいやこんな駄キャラわざわざ覚える必要性が見当たらんし

「キサマ！まあいい！人質はいなくなつたが俺様、自ら相手してやる！」

『メキメキメキ』

おう！戸〇呂？いや寧ろ鈴〇？爆肉〇体？

「フハハハ！どうだ！恐ろしいだろ！しかし俺様は優しいからな！このままキサマがララから手を引いたら見逃してやってもいいぞ？」

コイツ何言つてんだ？アレな奴なのかつつか見逃す？見逃すねえ・

・

「オマエ勘違いしてね？何上から物言つてんだ？オマエが『見逃す』なんて上等な口聞ける立場だと思つてんのか？俺んダチに手え出しておいてよお？」

ソレにララ自身を見ねえでお姫様のオプシヨン扱いしやがって、言つんだつたら『見逃して下さい』だらうが？」

まあ見逃す気はねえけどな・・・意図的に忘れようとしたけど

「マサ君怒つてるわね？まあ私も腹が立つてるけど！」

でしょうね？またシワが寄ってるもの、しかし唯、度胸ありますなあ、エース（ツツコミの）座は近いぞ！危うしリト！

「クツ・・・キツキサマ！生意気な口を！」

いいのか俺様はすすす凄く強いんだぞ！キサマなんて直ぐに殺せ

るんだぞ！」

ん？なんかコイツおかしいな・・・もしやビビってね？よし、ちよつと試してみるべ

「わっ！！」

少し大きめの声を出してみました

『ビクッ！』

やっぱりか・・・ビビりまくってんじゃん、ふむ！路線変更！死ぬ程ボコにしようと思ったが、死ぬ程ビビらす！いややっぱりボコにもする！

『ゴキゴキン！』

両の指を鳴らしながらゆっくり近づきます

「い・・・いいのか！死ぬぞキサマ！俺様が本気を出せば」

「御託はいいんだよ？やるんだろ俺とよ？

安心しろや？テメエの死体から皮あ剥いで新しいサイフにしてやっからさ、あつ肉はそこいらの魚のエサにすんべか？」

うむ！中々に有効活用だな！

「マサ君？ちよつと甘くないかしら？」

おっ？どうやら古手川もアイツがただのヘタレと気付いたみてえ

ですな！

上手く煽ってくれとるわい！

「いいんだよ？簡単には死なねえように調整すつから、さっき言つた作業を1週間かけてそれまでは死なないようにすつからな

爬虫類だから生命力もソレなりにあんだろ？」

うむ！我ながらかなりグロいな！まあホントはボコにするくれえですが

「ヒッ・・・」

おつおつ！完全にビビつとりますな？

『ジャリジャリ』

ニヤリと悪役笑いしながら一歩ずつ近付きます

さあて残りは僅かだぜい？

「ヒッヒーーーー！ゴッゴメンなさい！お願いだから殺さないで！」

『ズザー』

ほう！見事な土下座、けどお

「悪い！俺、宇宙語習ってねえんだわ？何言ってるかわかんねえ」

つって手を伸ばす、したら爬虫類モドキ君

「ヒューブクブクブク」

『ボウン！』

気絶しちゃいましたね、つうかなんだコイツ、タヌキ？爬虫類じやなくてタヌキ？

化けてたってことか？

「ああ！マサいた！ってアレ？ギブ・リー？」

およろラさん登場？って逸れたんは俺のせいじゃねえべさ？

とんな事より

「このクソダヌキンこと知ってんのか？」

俺がララにそう聞いてみたらララは

「えっとバルケ星人って言って、ホントは凄く弱いんだけど変化が使えるから、強そうな姿に変化するっていう宇宙人んだけど

ギブ・リー私と結婚するとか言い寄ってきてたんだけど、私はイヤだったから断ってたの、でもしつこく言い寄ってきてて」

ふうん、成る程ねえ

「ようするにストーカーですかい？人質取るのはストーカーだわ、やっぱサイフに……いや狸汁か？」

「やめときなさいお腹壊すわよ？それにしても宇宙人っていたのね？ララさんも宇宙人だったなんて」

おう！今更ながら唯にバレもうした！しかし

「唯さんや意外と冷静ですな？」

「昨日から変わった人と知り合いになったせいね？でアナタは何星人なの？」

俺のせいですか？つうか何星人とな！俺、宇宙の彼方からやってきたと思われとるがな！

「マサは地球人だよ？」

そうですね！ララさんの言う通り！太陽系第3惑星の地球人ですぞ！しかも日本人です！

まあ別世界んだけど！

「ウソ！！信じられないわ！！」

って唯さん？何故に宇宙人がいる事より俺が地球人であることの驚きが遥かにデカインでありますか？

「信じれって！まあ別世界ん地球だけどしかも一回死んでるけど」

とりあえず軽くそう説明してみました、したら唯さん

「何故かしら普通はそっちの方が信じられないのにアナタの場合は



そっちの方が納得できるわ・・・でも一回死んでるって・・・」

妙に納得されました！流石だぜ此処までに築き上げてきた経験は伊達ではないってことだな！

つつか唯も一回死んだって所は悲しい顔になるのな？

「少し早い独り立ちなんだって、マサのお爺ちゃんがコッチに来る前にそうマサに言ったんだって」

ララさんのフォローが入りました

「そう？立派なお爺さんね？」

そして唯が勘違いしました、立派ではねえよ！

ふむ、勘違いさせたままではアレだな

「ジジイは俺なんぞ足元にも及ばないくらいとんでもねえ奴だぞ？」

ん？自分で言うとな？気にするな唯にわかりやすくジジイのブツ飛び具合を伝えるためだ！

「ア・・・アナタより・・・そつソレは想像したくないわね・・・」

どうやら唯さん考えるのもイヤらしい、うむうむ！唯の中での俺の立場は相当らしいな・・・アレな奴としてだが！

「マサのお爺ちゃん凄いいもんね？またマサのお爺ちゃんのお話聞きたいなあ」

「それはまたの機会にしてください」

ララはやっぱり強いハートをお持ちのようだな

っとそうだったそうだった

「このクソダヌキをどうする？」

スツカリ忘れてたがクソダヌキの処理をしねえとな

「うーん！あつ！だったらいいのがあるよ！じゃーん！』じゃーじやーワープ君』」

おいおいララ！ソコはアレだろテロリロリン！だろ！いやまあ無理な話しだけど！

つつかコレって・・・

「トイレじゃね？完全にトイレだよな？」

うん洋式のトイレでござる！

「・・・そうね？トイレよね？」

唯も懐疑的な視線をララに送っておりますな

「ぶう！コレは凄いだよ！あのねコレに入れてスイッチを押したら『じゃー』って流れて宇宙のどこかにワープするんだから！」

いやトイレだろ？つつか・・・ソレだったら

「寧ろ、俺が強肩を発揮して生身で音と大気の壁を突破させて宇宙にポイするべか？」

まあきつと、宇宙に辿りつく前に燃え尽きるだろつけど」

そんならいやっても罰は当たらんだろ？

「ええせつかく作ったのに！」

あつコレ、ララが作ったんか？

「ねえ二人ともアレ」

ララとコチャコチャ言い合っていたら、唯がそう言って、『じゃーじゃーワープ君』の方を指注した

「ん？」「」

で俺とララがそつちを見てみたら

「そんな目に合わされるくらいならコツチの方がまだマシだ！」

『ポチ！』

「あつ！」「」

『ジャーーーー！！！』

あつあの野郎！

「どうやらマサ君の方法がよっぽど怖かったみたいね、自らアレに入ってスイッチ押すくらいだし」

チツ！自慢の強肩を披露しようと思ったのに！

「わぁーい！私の勝ちー！」

何故かララが勝ち誇つとります、つつか

「勝負じゃねえから！マサさんは別に勝負なんてしていません！

つつか寧ろコレ俺の勝ちじゃね？クソダヌキは俺にビビってララのアレを使ったんだろ？

だったら俺の勝ちじゃん！」

「でも私の発明品を使ったもん！だから私の勝ちー！」

クツ・・・ああ言えばこう言いますね！しかし負けるかい！

「いいえ俺にビビってララのアレに逃げたんで俺の勝ちですウウ！」

「違うもん！私の発明品使ったから私の勝ちだもん！」

「俺だつつつの！」

「私いい！」

「勝負じゃないでしょー！いつまでやってるの！ほら春菜さんも結城

君そのままだし！」

ハッ！いつの間にか勝負になつてた！

唯が止めてくれなんだから明日までやってたかもしらん！

まあ俺の勝ちだけどね！・

・  
・  
・

でアレからリトと春菜を起こして春菜に事情説明！

黙っててもよかったが、ソレはちいと俺の気分が悪いからな

あつ後、ちゃんと服は着直してるぞ？唯がやってくれたのだ

まあその時に何故か微妙に勘違いした春菜が

「えっキヤアアア！」

『ズバーン』

「なっなんでええ！」

とリトを打ち上げていたがな！哀れリト！

とイカンイカン！話しが逸れた！

「カクカクシカジカつてわけでな、スマンかった！リトと唯もスマン」

事情を話して頭を下げる、巻き込んだのは事実だ

けど三人は

「いいよ、マサ君のせいじゃないから」

「そうだぜマサ！」

「悪いのは全部、アノ宇宙人よ」

って言うてくれた、いい奴らだよなホント

そしてララはララで

「私のせいで巻き込んだじゃったんだよね・・・ごめんね・・・ごめんさい」

つって泣きそうになっていた、つたくラランせいじゃねえだろうに！

「ララは気にすんな？オマエはただ普通に女の子だったただけだろうに、よし！俺も気にしねえ！

悪いんは全部クソダヌキだ！決定！」

ホントはちいだけ気にしてたんだが、俺が気にしてたらララも引きずりそうだしな

「えっ・・・でも・・・」

むっ、まだ気にしとりますなララさんめ

「そうだよララさん！ララさんは悪くないよ」

そんなララに春菜がそう言い、唯も

「そうよ！気にすることないわ！マサ君は開き直りすぎだけど」

ララにそういい、チラッと俺に目配せ、いや唯も優しいねえ

「うむ！それが俺だ！なあに次にまた変な奴がきたら即、星にしてやんぜい！」

で俺が冗談っぽく、いや八割マジだが、そう続けて

「マサならやるな！つつかソレで済んだら寧ろラッキーだな」

ってリトもそう言ってララを慰める、つつかリト！目がマジですよ？いや俺も八割はマジだけど！

けどそれが好をそうしたのかララは

「うん！ありがとう！みんなエへへ」

っていつもの笑顔になった、うむうむ！  
それでこそララ！

な〜でなでっ！

「ふえ？エへへ！マサ〜」

「しかしリトガード！」

「そこは空気読めよマサ！」

読んだ上での『リトガード』だ！

・  
・  
・  
・

で暫くコチャコチャしてましたら春菜に

「それでマサ君は何星人なの？」

って言われました

「春菜もかい！俺！地球出身！しかもガッツリ日本人！」

「ええええええ！！ウソオオ！」

春菜にも俺の事情説明しときました・・・やっぱりアノ下りで悲しい顔でしたが・・・「独り立ち」って言ったら、「らしいなあ」って言ってた

そついや春菜は『ジジイ・エピソード』聞いてたね？

で、その春菜から唯が『ジジイエピソード』ジャングル編』を聞き

「とつとんでもないわね・・・マサ君がこうなったのもわかる気がするわ」



と言われました！俺はジジイよりは、まともだ！

多分きつとメイビー・・・

「さあじっじさあじっじさあじっじだ」と思ひぞっ。

心を読まんといっしりっ！

## 第十二話つばい感じ！（後書き）

後書き

意外と理解がありました唯と春菜でした、いえマサという変人が  
いましたので多少は耐性が出来ていたという事にして下さい

そしてリトすまん！ホントにすまん！何故かこんな扱いに・・・

段々と前書き後書きに何を書けばいいかわからなくなってきた書  
いてる人でした。

最後に感想などもありましたら是非に！

第十三話 っぽい感じ！ (前書き)

前書き

いじものおじいさんがおじいさんのおじいさんとおじいさん。

## 第十三話 っぽい感じ！

ああとうとうきてしまった・・・

やあみんな！マサさんだよ！ん？何がきたのかった？

うむ！中々にいい質問だね？ソレは昨日と今朝の事を思いだして  
みたらわかるはずさ！

うん！流石だな！そう

「ララさんララさん早く早く！」

「待つて美柑！えっと・・・よし！大丈夫！カメラ完璧！」

撮影会です・・・

撮影会場、結城家居間にて問い合わせはコチラから

・・・

ねえよ！あつてたまるか！つつかなんでこんなことに！

いや俺のせいだけどね！でもさこんなことになるなんて思わない  
じゃん？普通は思わないよね？そんな不思議有り得ないじゃん！

でも実際は有り得たんだよ！

『この世には不思議な事なんて何一つないんだよ関○君……』

って言ってた京○堂さんの言葉は真実でしたよ関○君！

ちなみにリト君、なんか二人の纏う空気に恐怖して先に自室に避難しやがりました

けど俺はリトを責めることは出来ません

俺だって逃げたいもの！ホントはものっそい逃げたいもの！

でもいつか報復はします！ソレとコレは別問題じゃい！

「マサ〜準備出来たよ〜」

キタか！覚悟を決める！もう後には引けないんだ！つつか引いた方が怖い目に合いそうなんだ！

では

『ガチャ』

．．．．．  
終わり．．．ました．．．かなりパシャパシャされました．．．

で今、ララと美柑は

「ララさん？コレって引き伸ばしできない？」

「出来るよ！あつ美柑？コッチとかえっこしよっ？」

とか言っつて写真みながらきゃっきゃしとります

っつかトレーディングカードかい！

『赤茶目の変人漢（ ノーマル・アイズ・マサナリ・ヘンジン）

攻撃力・ヤバイ

防御力・カタイ』

レアカードだぜ・・・言ってる場合か！

「あつああ君達？その写真を処分するわけには」

「ダメ！！」

ものっそい勢いで拒否られた・・・チクソウ

・・・

でアレから二人が落ち着きを取り戻し、その気配を察知したのか  
リトが居間に下りてきました

で俺が軽く文句を言ったら

「・・・マサだつて逆の立場だつたら逃げたはずだ！」

って返されました、否定はできんとです！音速越えるぜ！！

っとソレはさておき！

「第一回！明日は休みだ何すんべ？会議を行います！」

はい！実は明日は休みなのです！

「いきなりだなマサ？」

たった今、思い付いたからな！

「それがマサさんだもんね？」

そついう事だ美柑君！大分わかってきたな！

「そんな美柑君にはミ〇ミ〇が送られます！」

「えっ？あつありがとうマサさん」

やったな美柑！

「あつ私も私も！」

「はいはい！ほれ」

やっぱりララも欲しがりました、勿論上げます！ミ〇ミ〇はみんなのミ〇ミ〇だからな！

「リトも飲むか？」

「えっいいいのか？」

「当然だ！」

「でみんなでミ〇ミ〇しました！いや実に有意義・・・」

「って違うがな！今は明日は休みだ何すんべ？訳して、明日への扉！会議中やがな！」

「恐るべしミ〇ミ〇！」

「全然訳してないから！つつか明日への扉って意味わかんないから！」

「うむ！俺にもよくわからんが気にするな！」

「とにかく明日を何して過ごすかを考える！コレがこの会議の目的である！諸君ドンドン意見を出してくれたまえ！」

「さもないとヒマという理由で俺が何するかわからんぞ！」

「どんな脅し文句だ！」

「うるさい！撮影会によって若干、荒さんでいるんですよマサさんは！ミ〇ミ〇で大分癒されたが！」

「マサさん落ち着いて？えっと・・・マサさんとララさんコッチに来たばかりだったよね？」



だったら街の案内とかはどうかな？」

おっと美柑君！中々にナイスな意見ではござらぬか！

「私も色々見たい！マサ？そうしようよ？」

ララも賛成みたいですな！うむならば

「美柑君の意見を採用という形でよいかな？」

「ああ、下手にマサを解き放つたらマズイ事になりそうだもんな」

おいリト！俺を何だと思ってんだ！つうか解き放つて！危険生物扱いかい！

まあいいけどね！

「リトも賛成したんで明日はみんなで街に繰り出そうぞ！」

「「「おおー」「」」

なんやかんや言いつつもリトもノツてくれました！

で明日の予定は決まりましたが、今から何するかね？

メシは食べたし風呂も入った・・・ゲーム？

いやまたボコられるのはイヤだ！えっ？違つよ俺は弱くねえよ？

コイツらがめっさ強いだけだから！

しかしゲームは無しとなると・・・ぶゝむ？

「ねえねえマサ！マサのお爺ちゃんのお話聞かせて？」

む？そついや放課後にそんな話ししとりましたな？

「別にいいが・・・ってリト逃げるな！」

「いや俺は遠慮しようかと」

別に怪談話じゃねえつうのに！

「あつ！私もちよつと聞きたいかも？」

それに比べて美柑の強いこと、リト君見習いなさい

つと、さてどの話しをするべかなと俺が考えていたら、チラっとテレビが目に入り、画面の中では空を飛んだり手からビーム撃つたりと超常バトルが繰り広げられていた

うむ！コレだな！

「今、テレビでやってるアニメがあるべ？」

話しの入りとしてテレビを指差しながら三人にそう言うと三人はテレビをみて

「ああ結構人気のアニメだよな」

「そうなんだ？けどソレがどうしたの？」

「ジーー！」

と言ったりアクションを返す、つうかララさんテレビに見ハマるとるかな

「ララ？テレビ終わってからにするか？」

そんなララに俺がそう聞いたらララに

「えっ？ううん！聞きたいって言ったな私だもん！続き話して」

と話しの続きを促されました、ふむでは続きな

「俺が中二の時だったかねえ？調度、今みたいにこんな感じのアニメがテレビでやってたんだわ

で意外と面白かったから俺も見ててな？でアニメで主人公が手からビーム撃ってるシーンになってな

したらジジイが急に

『ワシもコレ撃てるぞ？』

とかってほざきやがったんだわ」

あの時は流石にジジイを哀れに思ったもんだぜ

ちいとだけアノ時の事を思い出しました

つとララと美柑の二人の目が早く早くと言っとります

リトは「まさかなあ」とか呟いていたが  
つと続き続き

「で俺は思わずジジイに

『孫が中二になったと同時に中二病でも患ったかモウロクジジイ』

ついたらジジイの奴

『誰がモウロクジジイじゃ！見させバカ孫がアアア！』

つって青白い光線ブツ放しやがった！」

マジで恐ろしいすぎるぞクソジジイ！

「やっやっぱり」

そしてリトある程度読めてたらしいな！けど当たる訳がないと思  
つてたみたいだが

「マサのお爺ちゃん地球人でしょ？凄いなマサのお爺ちゃん！」

地球人かもしれないが、転生チートオリ主らしいからな！アノ時は  
わからなかったが

「えっと・・・マサさん大丈夫だったの？」

美柑！俺のことを心配してくれんですね！流石は美柑！なんと優  
しい子か！

「リト！美」

「やらないって！」

チィ！早い！まあいい！

「その頃からかなり頑丈だったから大丈夫は大丈夫だったぞ？家は半壊したがな！そして直したのは俺だがな！

ちなみにソノ後からジジイがケンカで光線を使い出すようになったんだよなあ」

もう青白いビームがバンバン飛んできましたよ！

普通の人なら死んでるからね！ああ人外バンザイ！

「おっ恐ろしいな・・・」

だろ？けど実体験してみ？逆に楽しくなってくんぞ？

「マサさんもデキそうだけど・・・」

美柑はそう言っています

「俺は撃てん！しかし何れは撃ちたいと思います！手からビームは全ての漢の夢だからな！」

先にジジイが習得してんのが腹立つが！

「マサならデキるよ！頑張ろー！」

うむ！ありがとうララ！きつと撃ってみせるぜい！

「マサならホントにやりそうだから怖え」

『やりそう』ではない『やる』んだ！リトよ！オマエも漢ならわかるだろうに！

とこんな感じで夜は『ジジイ・エピソード』手からビーム編』を語って過ぎていきました。

．  
．  
．  
そして夜が明けて朝になりました！今日も今日とて朝〇〇〇〇！  
うむ最高である！

「ム〜ム〜」

で今日もスツパで潜り込んできたララさんは巻いておきました！

「ララ？コノさいだ潜り込むなどは言わん！いや潜り込むのも普通はアウトだが、ある程度は妥協しよう」

しかし服は着なさい！女の子なら慎みを持ちなさいって言ってるでしょう！コレ言うの四回目くらい！わあったかララ？」

「ム〜ム〜！」

うむ！微妙にわかってるっばいかな？なんかピコピコ縦に揺れてるし、ってなに？潜り込むのはいいのかって？さっきも言ったが妥

協だ！って今はララだな

「よし！ならば解放してやるう・・・リトが起きたら！」

「ム~~~~~！」

今度は横にピコピコしてます、中々面白いなコレ？

けどリトが起きるまでは解放しません！というかりとに解放させる予定だからな！

しかし今度はどうやってリトに頼もう（騙そう）か・・・まあ美柑が起きてきたら美柑に相談だな！

『ガチャ！』

「おはようマサさん」

やはりウワサをすれば美柑だな、とか思いながらも

「おはようさん美柑！」

と俺もあいさつ！したら美柑、ララの方をチラッ見て

「また・・・なんだ？」

と事情把握！流石だな！

「そうなんですわい！潜り込みまでは許してやらんこともねえよつな気がするけど、せめて服くらい着ろっつうのー！」

ちいとばかりグチってまいりました

「服を着たらいいの？」

おう！引つ掛かるのやつぱソコかね美柑君

「正直微妙だがな？多分言っても聞かんだろララン奴は？だから半分くれえは妥協でござえますよ」

とある意味三度目のセリフでござる！したら美柑君

「そっか・・・服を着てたらいいんだ・・・」

とか何やら神妙な面持ちで考え込んでりました！

いやまさか・・・いやいや、無い！無い無い！流石に無いよな？

っと今はその事よりもどうやってリトに頼むか（騙すか）だ！

「美柑君？」

「ふえ！えっ何？」

どうやらまだ考えてたらしい何をかは予想は付くがきつと違つと思いたいという不安以上に

ビックリ顔が可愛いです！

ナデナデ



「へっ？なっなんで？」

「可愛いからだー!!」

「ッ!!あっありがとう」

まだ慣れきつてはいないようだが慣れてきてはいますな!うむ!  
可愛いです!

凄く癒されました!って違うかな!

「今日もリトにララ救出の任務を頼もうと思うんだがどうやって頼めばいいと思う?」

そうコレが目的でございます!

「えっ?うくん・・・あっ!ララさん私の部屋で寝たことにして、布団を干してって言えば?」

おお!やるな美柑!けど

「ララが動いたらバレるんじゃないね?」

とマサさんは思うのです!そしたら美柑は

「大丈夫まかせて!」

と言うとミノムシ・ララに近寄り

「ボシヨボシヨ・・・って訳だからお願いねララさん!」

と小声で何やら交渉してララは

「ムー！ムー！」

と縦にピコピコ！どうやら了承したらしい

「コレで大丈夫！さっ朝ご飯作っろかマサさん？」

で美柑は満足顔で俺にそう言いなりました、つうか美柑

「ララに何言っただ？」

最後の部分しか聞こえなかったのです！聞こうと思えば出来たかもしれないがアノ時は何故かそう思わなかったのだ！

けど今になって気になってきたのでごせえます！

で美柑の応えは

「ん？な〜いしょ！」

との事でした！クソ！可愛いじゃねえか！シツカリ人差し指を口に持っていきやがってからに！

勿論撫でました！悪いか！

・  
・  
・  
・

で朝メシ作り中！流石は美柑だな！今日の朝メシも美味くなりそ  
うだ！

『ガチャ』

「ふぁ！おはよう」

むっ！リト登場！よし

「おはようさん！リト？今日は晴れるみてえだから布団干してくんね？」

牽制のジャブ！

「えっ？いいけど・・・はっ！騙されないぞ！またララがいるんだろ！丸くなってる！」

チッ！上手く避けたな！しかしサツとアイコンタクトGO美柑！

「ララさんなら私と一緒に寝たよ？布団は邪魔だったから丸めたんだって」

流石だぜ！布団が丸い理由もバツチリフォロー！

「あっ？そうなのか？それじゃ大丈夫だな？」

うむ！なんたる素直さ！しかし罪悪感はねえ！昨日の怨み今ここに・・・

「ん？また結んでるんだな・・・っと・・・うっ！うわぁー！ー！」

はらさん・・・

リト成敗!!

「プハアー！苦しかった！美柑アノこと約束だからね」

そして自由になったララは美柑との密約の確認、つつか何を約束した、いやそれよりも

「ララさんや?」

「あつ！えつとペケ！」

『シユルル』

うむ！最後まで言わなくてもわかった所は褒めてやろう！

はい、なぐでなでつと！

「エへへ〜」

ナイススマイル！

「ララさん？アノ話はマサさんには内緒だからね？」

そして密約に対して念を押す美柑君！何を約束したんですがしょ？

「うんわかってるよ!」

それにシツカリ頷くララ、気にはなったが深く知ってはいけない

という直感によりスルーすることにしました

ヘタレではない！聞いたらシャレにならないくらいにマズイ気がしただけだ！わかっていただきたい！断じてヘタレではないぞ！

それに今は朝メシ作りが優先だしな！そういうことにしといて下さい！マサさんからのお願い！

・  
・  
・  
・

はい完成！

「リト起きろ！」

でリトを起こして

「マサーー！それに美柑まで！」

やっぱり怒り出すリト君！けどこっちは

「じゃあ昨日、リトがかわりにパシャパシャやってくれたのか？」

と話題転換の術を使いました！ニンニン！

「うっ！そっ・・・それは・・・」

見事に術にかかったでござるな！

「リトのを撮ってもな」

「やっぱりマサのがいいよねえ美柑？」

うわ・・・ざっくりです・・・コレはヒドイぞララ君、美柑君、  
つつか俺のもカンベンしてもらいたいんですが

ってリト？

「あんまりだ・・・」

OTLってなってます・・・そらそうなりますわ！つつか凄ま  
じいまでの悲愴感が漂ってきてますぞ

「ほらリト？ミ〇ミ〇やるから元気だせってな？」

「ああ・・・サンキューなマサ」

流石に慰めました・・・たとえ始まりは俺だとしても！

そして加害者である美柑とララは

「言い過ぎたかな？」

「でもマサがよかったんだもん」

「それはそうだけど」

と美柑は微妙に反省してたがララはあんまりしとりませんでした

世知辛え・・・

・  
・  
「」「」「ちそうさま！」「」「」

でその後リトが何とか立ち直ったので朝メシ食いました、うむ！  
やはり美柑との合作は美味しいな！昨日の晩メシもだったけどな！

さて出かけるまでは時間あるな・・・

「リト！ゲーム機貸してくれ！」

「えっいいけどまた対戦するのか？」

昨日の夜は避けていたが、漢 政成！このままでは終わらんよ！

「いんや出かける時間まで修行！」

けど今はまだ時期ではない！えっ違うよ？ほら、やっぱり鍛えて  
勝つてのがジ○ンプの基本じゃん？決してビビったわけじゃねえ  
から！

ジ○ンプ精神にのっとして行動してるだけだからな！

と俺がやる気を出していたらなんかリトに優しい目で

「・・・マサ？そうとう悔しかったんだな？」

って言われた！そんなん違いますう！アレだから別にそういう感  
じじゃないからね！

ただのゲームじゃん？

そんなことくらいでこのマサさんが・・・

「ええそうですよ！悪いかこんにやろう！覚えてるよ！もつめっさ強くなつてボッコボコにしてやるからな！！」

ああそつともさ！悔しかったんでござえますよ！

「マサさん可愛い」

可愛いのは美柑だつて言ってるでしょ！

「マサ！マサ！だったら私と勝負！」

ララ！それはちいとばかりお待ち下さい！強くなつたらするから！だから今はカンベン！

で結局は

「チツクシヨオオオオ！！」

「あつ！マサ？まだ途中なのに・・・」

ララに凹にされました・・・なんたる強さ

「マサさん可愛い・・・」

可愛いのは美柑だよ！つつか美柑も俺を凹つてたよね？こうコレでもかつて程に！

「マサほら元気だせつてな？」



でリト君にミニミニ貰いました、どつやら買って来てたらしい、  
まあリトにも凹されたけどね！でも許す！ミニミニくれたから！

・  
・  
・

最近、縦の点々 コレね？を使い過ぎかなって思はなくもないが  
気にしないでくれるとありがたい！コレからも多用しますが

つとメタ的な発言はコレまでにしてそろそろお出かけのお時間で  
す！

で

「覗いた場合は写真、燃やし尽くしますんでそこそこよろしく」

とララと美柑に釘を刺して着替えます

（俺着替え中）

はい完了！ガクランじゃありませんからそこそこはあしからず

そして着替え完了し、俺が着替えてる間にリトと美柑も着替えを  
したらしく、ララ以外の全員がお出かけ用の服になりました

でララも出会った時と同じ服に、まあ家にいる時はだいたいその  
服だけ

ちなみに俺の服は黒系を中心に赤も少々って感じ

ええ、どうでもいいですね！

つつわけで！

「とりあえず出かけましょう！いざ街へと繰り出さん！リト美柑案内よろしく！」

と全員に声をかけて

「「「「「いつてきまゝす」「」「」

出発です！

で家から出て暫くしてからあることに気付きました

「なんかすげえ注目的でござえますね？」

ということですよ！いやまあ原因はわかつとるんですけどね？

「ああ・・・慣れてたからスツカリ忘れてたよ」

リトもわかってなさったようだ

「ララさんだね・・・」

美柑君、正解！ええそうですララです、いや正確にいうとララの服装ですな、もうコスプレだもの完全にコスプレだものなあ

「?????」

そしてララは気付いてないものな、いや俺達も気付くの遅かったけど！

「あの女の子レイヤーか？」

「すげえ可愛い」

「ちょっと行ってみようぜ」

っとイカン！なんかめっさ人が集まってきおった！

しかも熱苦しい感じの奴らが！

「どつするリト？ブツ飛ばすか？」

「やめろって！とにかく離れようぜ」

リトとの相談の結果、現場を離脱することに

では

「よつと！ララは背中な？」

「えっ？マサさん？」

「うわっマサ？」

リトを右に美柑を左に抱えて

「わぁーい！おんぶー」

背中にララを装備！そして

「ララ、シツカリつかまってるい！ニン」

『シュバ！』

N I N J A！いやコレ使いやすんだよね？

で人通りが少ない近場の路地裏に

「ビツビツクリしたぁ一瞬だったよ今」

フツ！それがアノ技の特徴だからな！と思いつつ美柑を下ろす

「あっ……」

何故に残念そうな顔？意外と楽しかったのかしら？

「絶対、アッチは騒ぎになってるよな……」

気にするではないリト君！とリトも下ろす

「……ララ？下りなさい」

「ええ〜」

「いいから下りんさい！また今度やっただげるから」

「むづゝわかった！絶対だよ！」

「多少ララが渋ったがララは下りてくれました

でララに

「なあララ？今もあの変身髪飾りえっと・・・確かペケだったか？  
つけてんのか？」

と確認、いやよく覚えてたな俺！

「うんそうだよ！」

つけてるらしい！では

「んじゃあんまし目立たない感じの服に変わってもらうべさ！」

と提案！

「そうだね、そうしたほうがいいよララさん」

美柑もララにそう進言、リトもその言葉に頷きます

「うゝん、わかった！じゃあペケ！」

『はいララ様』

『カツ！』

久々に喋ったなペケよ！とか一瞬思ったけど気にするな俺！

でララは

「コレは？」

「ダメでござえます！」

フリ○ザー味のスイーツだったり

「それじゃあコレは？」

「ララさん流石にそれは・・・」

どこで覚えたのかバニースーツだったり

「じゃあコレ！」

「いや確かに街の人参考にしろって言ったけど！ダメだろ！」

婦警さんだったりガンガン、ズレた解答をしてくれましたが結局は

「コレならコレならいいでしょ？」

「うむ！バッチリでござる！」

「そうだね！」

「だな！」

とまともな服になってくれました！

うむむむ！似合います！どんなんかは各自コミックを参照のこと！

俺（書いてる人も）は持ってないけどね！

っとゲフンゲフン！ちいとマズイことを口走ったが気にしてくれ  
るな！

と俺がコチャコチャ考えてたらララが

「マサ！可愛い？コレ可愛い？」

と聞いてきなさった、どうやらララ、OKをいただいた事で改め  
て聞いてみたくなったらしい

「可愛いぞ？ララが！」

と言ってみた、いや服も可愛いよ？けどそれ以上にニコニコとナ  
イスマイルなララ  
が可愛いのです！

「えっ！！」

おっ？珍しく照れなすった、赤っ！

「ジーーーー！」

ん？美柑がこちらを見ている

どうしますか？

「美柑も可愛いぞ?」

むろん可愛いといえます! 何度も言うのが可愛いと思ったら可愛いといえますよ!

「ッ!! あっありがとう・・・」

やっぱり照れました! 赤いです!

「マサ・・・すげえわ」

それでもねえですよ? ただ思ったことを言っただけでござえますから

っとそろそろ街の探索に戻りましょうかね?

「ぼちぼち行こうぜい!」

と三人に声をかけ探索再開です!

まあララと美柑の反応が若干鈍かったがな!

・  
・  
・  
・

で街を探索中は

「あっマサさんあのお店はニンジンが安いよ?」





ってペケに文句を言ってる場合ではないな！いや実際には言っ  
ねえけど！

このままではララが街中でスツパになってまうがな！

『バツ！』

上着を脱いでララに巻きます！

「とりあえずコレ着ておけ！」

「うっうん！」

で更にララを抱えます、いや流石におんぶはマズイ気がしたので！

あっ！一応言っておくが俺上着二枚つけてたからな！

ってコレもどうでもいいな！

「美柑！背中に乗ってくれい！で、どっか服売ってる所までナビ！」

「えっ！うっうん！」

美柑を背中に乗せて

「リトは……どっか適当に捕まってくれ！」

「ああわかった」

でリトも装着して普通に走って移動開始！NINJAでは早過ぎ  
て美柑が店を確認できんだ！

『ダダダダ！』

で三人を抱えつつ街中を走る俺！流石に注目的になっていたが  
気にしてられるかい！

「あつ！あつた！マサさんあそこ！」

つと美柑が発見したようだ！

「おっしゃー今だ！ニン！」

『シュバ！』

店の場所さえわかればNINJAは可能でござる！

「いらつしゃいましたー！！！」

で俺達は店内へ突入いたしました。

つてオイこら美柑さんや！ココって……

「らんじえりいしょつぶではねえですかい」

「あつアハハ……一番近い所がココだったから……あつ！私は  
ララさんの服買ってくるから」

微妙な笑いをしながら美柑が離脱しようとしとります

ってまたんかい！

「美柑！」

俺が美柑を呼び止めたらビクリとして止まりました

「えっと・・・しめ」

「ホレ！コレから買ってきてくれ！あつ美柑もなんか欲しい服があったら、買ってきていいからな？」

「えっ？」

どうやら美柑怒られると思ったようですな？

なんかキョトンとしとるし、つうかマサさんは、んなことくれえで怒りませんよ？

「ホレ！早めによろしくな？」

で今だにキョトンとしてる美柑を一撫でしつつ軍資金を渡します

まあその時にララが

「私も」

つつたので、なぐでなでっとききました

美柑はというと

「えっと私のもいいの？」

とか言っていたが

「遠慮するねい！買ってきんさい！遠慮されたら逆にマサさんは悲しいぞ？」

ついたら

「ん！わかった！ありがとうマサさん！ララさんとリトよろしくね」

って笑顔で服の調達に行きなさりました

うむ！今の笑顔は満点です！

ってそついやリトは

「ぶしゅー」

煙り出てますね？耐久性低！

まあいいさね！

「ララ？美柑が服を調達してくんまで適当に下着選んで試着室で待ってなさい」

とにかく今はララに指示出し、そしたらララさん

「うん！わかったー！えっとコレとコレと……」

と数着の下着を選んで試着室に入っていました！

うむ！素直な良い子ですな！

と俺が一人頷いていたら

「マサ・・・君？」

聞き覚えがある声に呼ばれました、この声は

「春菜か？こんな所で会うとは奇遇でござえますな？」

「ふ・・・普通はココで男の子に会うことは無いと思うよ？」

もっともでござえます！

「ちいと色々とありましてな？それに俺だし？」

「色々って所よりマサ君だからって所の方が妙に説得力がある気がする・・・」

でしょうね？

「アレ？リト君もいるの？」

おう！リトにも気付きましたか！まあまだ電源OFF中だが、ふむ・・・仕方ねえですな

「リトに関しては・・・あんまり大きな声では言えんが・・・リトの趣味だ・・・」

「えっ！ウソ・・・リト君・・・」

軽く悲しい顔しながら春菜に言ったら春菜信じかけとります

しかしすかさずリト

「人聞き悪いこと言うな！」

よし！スイッチON！流石はリトだな！

「違うからね春菜ちゃん！俺はそんな趣味ないからな」

リト必死だな！うむ！すっごくイイ感じ！

「アハハ・・・うん・・・わかってたよ・・・うん・・・」

そして春菜、微妙に目が泳いでるな！俺が言ったこととは言え微妙に信じかけてたしな！

「リトの趣味ってのは冗談だからな？」

一応はフォロー

「いやだなあ 마사君！わかってたよ 마사君も人が悪いなあ」

春菜も必死だな！中々面白いぞ！

とリトと春菜で遊んでいたら

『シャッ』

「ねえマサ！どうコレ？似合う？」

と下着姿でララが試着室から飛び出してきました

いや似合うけどそれ以前にララさん

「下着姿で店内を歩くのは止めれ他のお客さんビックリします  
がな、そしてリトが固まっとなるがな！春菜さんやララ試着室まで連  
行！！」

ララに注意しつつ春菜にララの事を頼む

「マサ君リアクション薄いね・・・流石だよ・・・ほらララさん行  
く」

何が流石なのかはわからんがちゃんと連行してくれました

まあララが

「似合う〜〜〜？」

と最後まで言っていたので

「はいはい似合いますとも！だからはよ行け！春菜ハリーアップ！」

と言っておきました！

で待ってる間に



「はいリト起きね〜でないと春菜に無いこと無いこと吹き込むぞ〜」

「全部無いことかよ!」

とリトを起こしました、しかしまたもや

ララが

『シヤッ』

「じゃ〜ん!コレは〜?」

「ちよっとララさん!私も着替えてるのに!」

と今度は春菜も巻き添いにして試着室のカーテンをオープン

「はいはい似合ってるからはよ閉めれ!春菜も似合ってるぞ〜」

で俺は二人にそう言ったとききました、そしてカーテンを閉める間に  
春菜

「うう〜下着姿見られた・・・けどリアクション薄い・・・」

といった感じで微妙にショック受けとりました、つうかりトみたく

「プシュー」

と固まってもらいたかったんか?

残念ながらマサさんにソレを求められても困るぞ?・・・でその後  
後は

『シャッ!』

「マサ!コレ!」

「何度もすな!大人しく美柑来るまで待ってなさい!けど似合つとるぞ!春菜も!」

「あっありがとう・・・やっぱりアクション薄いよマサ君・・・」

といった流れが数回続いた、その度にリトは

ONとOFFを繰り返していました。

ララ!何度もすんなつったのに!!

今度叱つときます。

第十三話つばい感じ！（後書き）

後書き

ううむ・・・なんといいですか・・・ダレこの人みたいな感じになつてきました特に美柑が！

それでも頑張つていきたいと思いますのでお暇なればまたみてやって下さい。

感想などもありましたら是非！

## 第十四話っぽい感じ！（前書き）

前書き

かなり苦戦しました・・・でもデキは・・・

それでも見て下さる方はやはり薬的なものをお持ちになってどうぞ！

## 第十四話 っぽい感じ！

「マサさん買ってきたよ！」

おう！美柑到着！

「よし！では美柑君、アッチの試着室にララがいるから持ってたげてくれ、あつ後、春菜がいる！」

「うん、わかった」

うむ素直！後で撫でます・・・って

「待て美柑！その、せくしいらんじえは置いてきなさい！まだ早い！」

なんか試着室に向かう途中で美柑がかなり際どい下着を手にとつて入っていきこうとしたので止めました

「えっ？アハハ・・・いつの間に・・・」

「いつの間にはねえでしょうに・・・ほれはよ行ってきてくれい」

「はーい！」

全く！美柑も中々に油断なりませんな！

つてそっぴい美柑つて春菜んこと知ってたんか？

まあいいか？

「おういリトー！」

とりあえずはリトを起こすか？流石にもう一度はね・・・

『シャツ！』

「こっ・・・コレならー！」

「なんで春菜やねん！！つか何が！ってコラ！美柑君！ひそかに持ってたんかい！美柑にはまだ早い！けど春菜とララは似合います！」

まさかまさかの春菜でした！そしていつの間にもやら美柑、せくしいらんじえを装備しました

「やっぱり・・・ダメだったよ・・・ぐすん」

「春菜さん・・・元気だして・・・ぐすん・・・」

「マサ〜待っててね〜」

はいはい！ったく春菜も美柑も油断ならねえでござえますな、つか何故に涙目？

「プシュー」

こうなるのがお望みなのか？無理だぞ？俺にも何故かはわからんが

あつ後、美柑、春菜んことを知っていたようです

・  
・  
・  
・  
「お待たせ」

「おう！ララ、似合っとするぞ！美柑グツチヨイ！」

え？下着ちゃうよ？今度はちゃんと服着てますぜい

「ホント？エへへ」

フツ・・・可愛いですなララさんは、つつか春菜と美柑

「キミ達は何故にガックリとなっておられるか？」

さっきからこの二人OTLってなってるんですわ

「マサ君のせいだよ・・・」

「あそこはまでリアクション薄いなんて・・・」

だからそんな言われても困りますがな！リトに言えリトに！

何回ON・OFF繰り返したと思ってんだ！もうスイッチがバカになっちまうでしょうが！

今もOFFだし！もう一度ONしねえといけんだろつに、っとその前に

「美柑君のせくしいらんじえはボツシ〇ートです！十年早え」

「十年！？せめて三年！！」

「妥協で五年だ！」

「うう・・・わかったよマサさん・・・シクシク・・・」

泣いてもダメです！五年でも大分、妥協だぞ！

で美柑が所持してた、せくしいらんじえをボツ〇ユートした後にリトを起こしました

あつ後、ララと春菜の下着の代金は美柑に渡した金の余りで出しました

まあその時に

「マサ！ありがとー！」

と素直にお礼を言ったララに対して

「男の子に下着を奢ってもらったのなんて人生で初めてだよ・・・」

って春菜が言っていたので

「安心しろい！俺も初めてでござえますからな！やったね！滅多に体験できないぞ！ララは気にすんな！なんせ兼業生徒だかな！」



つつといた、そしてその隙について美柑がまたもや、せくしいら  
んじえに手をかけてたので

「後五年つつたでしょ！メツ！返してきなさい！」

ってしました！まあ美柑は

「アハハ・・・やだなマサさん！冗談だよ冗談！」

つつてたが、完全に目がバタフライしてたがな！

つつかりト？ツツコミはキミの仕事でしょうが！

場所が場所だから仕方がねえですけど、よしリトにチャンスをや  
ろっ

『ヒラヒラ』

「・・・なんでチケットを俺の前でヒラヒラさせてるんだマサ？」

チィ！おいしい！

「そこはアレだろ！なんで下着を買った景品が水族館のチケットな  
んだアアア！だろうが！どうしたリト！オマエの力はその程度じゃ  
ねえだろ！！」

「知るかアアア！」

らんじえしよっぱにリトの叫びが響きました・・・それでこそリ

ト！

しかしなんで水族館のチケットなんでしょうね？ 実に謎ですわい

まっ！ ラッキー程度に思っときゃあいいやね

つつわけで！

「みなで水族館に行きましょう！ むろん春菜も！」

「えっ？ 私も？」

当然です！ つつか何でビックリしてんだ？ ある意味、キミの景品でもあんでしょうが！

遠慮すんなあ違えますぞ春菜さんや、つつわけで

「春菜さんも一緒にいいと思う人！」

「はい！」

「そっそっだな春菜ちゃんも行くっぜ」

うむ！ 完全に賛成多数だな！ ララも美柑もよい返事です！

リトは大分慣れてきましたな！ よしよし！

「賛成多数により決定であります！ つと、もしやなんか予定があったか？」

最初にそこ確認せんとダメやる俺！ 内心でセルフツッコミしつつ

春菜に聞いてみたらば

「えっううんないよ！それじゃ私も参加させてもらうね！」

と参加を表明！

「春菜が仲間になった！やったぜ！っとそろそろ出るべさ？」

ええ実はまだ、らんじゃしよっぷ内だったんでござえますよ

「すごい見られてるし……」

そらそうだろ？美柑君あんなだけ騒がしけりゃそら見るわい

「うう恥ずかしい……」

それは自ら試着室のカーテンを『シャッ』した春菜のセリフでは  
「いざらぬよ

「早く！水族館早く行く」

ララは相も変わらず無邪気さんですな！うむ可愛いです

「マサ……早く出よう……肩身が狭すぎる……」

俺はそうでもねえですが、流石にリトはキツイようだ

「じゃ出ますか！」

っと俺達はらんじえしよっぷを後にしたのでした。・

・ ・ ・  
でやってまいりました、水族館！まさに水族館！水族館丸出しです！

「釣り人マサ！マグロの一本釣りにチャレンジ！」

「やめろ！水族館だから！釣り堀でもなければ大海原でもないから！」

わあってますよ！水族館にきたら言うっておかねえとアレだろ？

「マサ君ならホントにやりそうだし」

「うーん、多分それは・・・ない・・・かな？」

春菜、美柑流石にやらんで！そこまで松〇じゃねえから！しかしそこまで言うのなら

「ちよっくら釣竿買ってくらあ！今夜の晩メシにしてやんよ魚類共！」

「やめて！マジでやめてほら、受け付けの人にすげえ睨まれてるかー！」

ですね！さつきから俺もかなり熱い眼差しビンビン感じとりますもん焦げそうです！

「ねえねえまだ中に入らないの？」

「ララさんは早く入りたいようですか？」

「まあ確かに入り口ですつとコチャコチャやっとなるわけにもイカンわな

「んじゃ入りましょ！すんませ〜ん」

チケットを受け付けの人に持ってきましたしたら受け付けの人

「館内での釣りはご遠慮いただきますのでその辺りの事はシツカリと守って下さいね？お客様！！」

「って言われました！ネタやがな！魚だけに・・・キツイな・・・聞かなかつた事にしといて下さい」

「どづしたのマサ？」

脳内で反省してたらララに心配されました

「いや学校初日のリトの気持ちは今なら手に取るようにわかると思つてな・・・」

「ええ彩高、さいごうの下りです、あの時はすまんかつたリト・・・」

「つと！イカンイカン！さっきから全然進んでねえではござらぬか！

「魚を見に行こう！水族館に来たのに俺達まだ魚見てねえよ！」

「さあいざ魚類共の群れへ！」

「ってアリ？みなさん？」

いねえ！さっきまでいたはずのララすらいねえ！

どういうことだ！いったい何が！

いやわかってるけど、よく知ってる四人が魚の居るエリアに向かって歩いているのがココからでも確認できるしね！

「待て〜待て〜」

なんか浜辺で追いかけてこするアレみたいな感じを出しながら追いかけてました、後なぜか走っていたら目から水が流れました・・・  
何ででしょうね？

「1万2千飛んで24匹だな！」

「無駄に高性能だよなマサって？」

無駄とか言うな！ん？何の数がかって小魚の群れの数ですよ！

ララが

「いっぱいいるね！どのくらいいるのかな？」

って言ってたので数えてみたのだ！

「凄いっばいいるんだね！じゃあアレは？」

ふむ……

「凄いんだけど……何か違うような……でも楽しそう！」

「そうですね、あっ！私も聞いてみよう！」

楽しいからな！おっ！美柑も合流か！

って、おりよ？微妙に春菜が離れた位置だな……ふむ……「こ」は

「チーム『リト恋！』全員揃つての初任務だな！」

スツカリ俺も忘れてたけどね！

「ふえ？何々？何するの？」

「そっか……春菜さんも居るし調度いいね！」

うむ！二人はスツカリ乗り気だな！

「えっ……いやいいって！」

それに比べてリトときたら、ったく

「よくありません！そろそろ活動しとかないと結成した意味がねえ  
ぐさー！」

まあ応援だけでござえますがな、成就するかは二人次第です！書

いてる人も迷ってるらしいし

っとイカンイカン！また変なん受信した！  
とりあえず思い付いた案を出します

「チーム『リト恋』メンバーは大物コーナーに行ってくるんでリトと春菜は適当にこの辺回ってゆっくり話してもしといってくれ！」

ただコレだけだけどな！他に特に思いつかんですわ！

「はっ？ちよっ春菜ちゃんと二人つきりって」

「自叙に慣れる！春菜には適当に言っといってくれ！ではコレにて」

『バツ！』

「わっ！マサさんまた？」

「わあ〜い」

二人を抱えつつ

「ニン」

『シュバ』

•  
•  
•  
NINJA!!!



## 春菜視点

今、私は水族館に来ている、それはさつき・・・えっと・・・私は下着を買いに来てただけど、その時にチケットをもらったからそれにしても・・・

「ううゝ何で私あんなこと・・・」

思い出すのはランジェリーショップでのこと

そこでマサ君達に会ったんだけど・・・最初はララさんが試着室から下着のまま飛び出しちゃって

私はちょっと慌てただけど、マサ君はかなり冷静っていうかりアクションが薄いなあっていう感じだったな

それで私はマサ君に頼まれて試着室にララさんを連れて行って、ついでだからって私も試着したら

『シャツ』

「マサ！コレは？」

って私がまだ着替えてるのにララさんが試着室のカーテンを開けちやて・・・

普通なら悲鳴を上げる所だけど

「はいはい似合ってるからはよ閉めれ！春菜も似合ってるぞ」

ってマサ君のリアクションが余りに薄くってついそのタイミングを逃しちゃった

それで、その後も何度かララさんがカーテンを開けたんだけどマサ君は

「はいはい似合ってる似合ってるはよ閉めれ、あつ春菜似合つとるぞ〜」

って感じだった、なんていうか女の子として負けた気分になつて、こう悔しくなってきたやつ

それで、最後にリト君の妹さん、美柑ちゃんがララさんの服を持ってきた時に、ソレまでよりちょっとだけ・・・えっと・・・大人っぽい感じの下着をつけて

美柑ちゃんも、似たような下着をつけて、それで

『シャツ!』

「こっコレなら!」

って自分からカーテンを開けちゃったんだけど・・・

「なんで春菜やねん!! つうか何が! ってコラ! 美柑君! ひそかに持ってたんかい! 美柑にはまだ早い! けど春菜とララは似合います!」

と結果は惨敗・・・救いっていうかなんていうか似合つてるとは

言われてたけど、私も美柑ちゃんもガツクリ肩を落としちゃった

でもそのせいか美柑ちゃんとは一気に仲良くなれた気がする、それまでは美柑さんって呼んでたし

けど・・・今になって思ったら凄く恥ずかしいことしちゃったよ私・・・

ううゝ、でもあの時は引くに引けなかったというか・・・女の子としての・・・こう何が・・・わかる人にはわかるよね？

あっ、それとその時の下着の代金はマサ君に出してもらった

ホントは遠慮するべきだったんだけど、少し悔しかったから結局出してもらうことにしたのは秘密

コホン！で今はみんなで小魚がいるコーナーを見てただけど

いつの間にかマサ君とララさん美柑ちゃんが居なくなってた、それで私はリト君に

「えつとマサ君達は？」

って聞いたらリト君は

「えつ！あつなんか大物コーナーに行くってララと美柑を抱えて居なくなっちゃった」

とのことみたいだ、唐突だな、けど

「クスッ、マサ君らしいかも、リト君は行かなかったの?」

「えっ俺は、春菜ちゃん一人にしとくのはってマサが言ってたから」

そっか・・・と私が考えていたらリト君が

「あっ!えっとマサが戻って来るまでこの辺りを見とかないかな?」

って提案してきた、うん、イイ機会かも、リト君のことを知るようになったのは中学生の時たまたまりト君がクラスの鉢植えの手入れをしている時

私は優しい人だなんて思って、ゆっくり話してみたかったから

「うん!いいよ」

私はリト君の提案に頷いた、そして色々な話をした

最初は

「えっと・・・その」

ってお互いちょっとぎこちなかったけど話題の中心がマサ君の「  
とになったら

「マサには参るよな」

「フフ・・・確かにマサ君は無茶苦茶だもんね?」

「あっ!そうそう昨日聞いたんだけど・・・」

「ウソ！マサ君のお爺さん、凄い・・・」

って凄く盛り上がった

私は引っ込み思案だから、ほんの少し前まではリト君とこうしてゆっくり話すなんてことが出来なかったのにな？

それを繋いでくれたのがマサ君

凄いなマサ君は・・・例えこの場になくてもこうして繋いでくれるんだもん

リト君やララさん唯さん美柑ちゃんとも仲良くなれたし

普段は無茶苦茶で何するかわからないけど・・・

『ヒュー』

「クアークア！」

「待てや！何でペンギンが飛んでんだゴラアアア！オマエは飛ばないタイプのトリじゃろがい！」

『タタタタ』

「今・・・ペンギンだよな・・・」

「マサ君もいたね・・・」

ほら・・・ね？

・  
・  
・  
・

マサ視点

俺達はただ今大物コーナーにきております！

「うわぁ大きいね？」

「確かに大きい！コレってえつと何て名前だったかな？」

ふむ！微妙に名前が出てこぬようだな！美柑君まかせろ

「ジンベエザメでござる！テングザメ目ジンベエザメ科の世界最大の魚類だな！」

「凄いマサ！」

「ホント！そこまで詳しいなんて」

フツ・・・マサさんをナメるなよ

「ホレ書いてんじゃん」

「だあ〜」

ええ実は書いてるの読んだだけでござえますよ

あつ名前は知つとつたぞ？

「ねえねえコレって何のこと？」

むっ！ララさん早速ジンベエザメの紹介してるところから質問してきなすつた！

ふむ・・・えつと濾過摂食ねえ・・・

「マサさん？知ってる？」

おや美柑君？確かにさっきは紹介文みただけど実は知ってるぞ

「うんプランクトンってわかるか？」

「わかるよ！」

「うん知ってる」

ふむ、なら後は楽だな

「ほらデカイ口してんだろ？コレをガアーと広げてプランクトンを食いまくるような奴らんことだ」

「海水も一緒に？」

ふむ、ララ君よい質問だ！

「えつと確か一緒に飲み込みつつ横のエラ？から吐き出すみたいな感じだったはず？」

そんな時にこうプランクトンをコシとるみたいなのが濾過って作業に似てるから濾過摂食つうらしい

確か・・・マンタとかヒゲクジラとかも同じだったか？」

確かそんな感じだったはず？

「「へえ」」

うお！なんか関心した感じて見られとるな！

なんかそんな視線で見られると自信がなくなってくる、よし念のために

「この情報はあやふやな場合がありますので間違えていても当方は一切の責任を持ちません！」

ララと美柑だけに言ってるわけではござらぬよ？わかったかな？

「微妙に逃げ道を残したねマサさん？」

美柑君、痛いところかんといて！俺以上に書いてる人が不安なんだから！そつとしとたげて！

「あつ！ねえねえアッチにいっぱい人が集まってるよ！」

ナイスララ！

「おお、それは気になるでござえますな！どれ行ってみるとしますかね？」



「あからさまにホツとしたねマサさん？」

ほつといたげて！

・  
・  
・

で人だかりが出来てる場所に行ってみたらそこはペンギンコーナーでございました！

「うわぁ可愛いね！」

うむ確かにあのヨチヨチ歩きは心にくるな！

しかしよお見るとコイツら

「サボってね？コイツらなんかテンション低くね？」

「サボってるって・・・うゝんでも確かに元気がないね？」

そうなんですよね、なんかものっそいダルイ空気を出してんですよ、このペンギン達

「コレはアレだな、放課後に余力残してんな、間違えねえよ、俺らが帰ったらテンション一気に上がってはしゃぎだすんだな」

「授業中のマサみたい！」

おつ！ララさん！中々言うね？けど言われてみれば

「否定はできんな！けどアレだぞ俺は俺なりに頑張ってたぞ？」  
通常に自分と戦ってたぞ？

でもコイツらアレじゃん？なんかアレじゃん？ほら完全にアレだ  
ろ？」

「マサさん何もペンギンと張り合わなくても・・・でも可愛い」

美柑に呆れられながらも可愛いって言われました、ペンギンだよ  
ね？なんか俺の方見てるけどペンギンだよね？

仮に俺だとしても可愛いのは美柑とララとペンギンだったの！

いつも言ってるでしょ！いや言ってるか？アレ？どっちだったけ？

と脳内コチャコチャしていたら

「ねえマサさんアレ！」

美柑が何やらララの方を指差しとります、はてどうしたのでござ  
えますか？

「コレで元気にー！じゃーん」『びんびん元気くん！』「エイ！」

『トポトポトポ』

おい！アレ？

「今何かしらの液体を入れなかったかララんやつ？」

美柑君に確認！一応な！

「入れてたね・・・何か健康ドリンクみたいなの・・・」

うっ・・・うむ、やっぱりそうだよな、見間違いではござらぬか！

ララに何入れたかを確認せねば！

「ララ君ララ君ちょっときなさい」

チヨイチヨイつとララを手招き

「ん！なに？マサ？」

うむ犬っばい！しかし今はそこではござらぬ！

「ペンギン達に何を与えたんだね？」

そう、ココが重要でござる！

「えっとねコレ！『びんびん元気くん』私が作った発明で、とっても元気になれる飲みものだよ！」

なるほどなるほど！

「容器のビンと、びんびんと掛けてるわけですね！やるなララ！」

な〜でなでっしました！

「エへへ！褒められちゃった！」

うむナイススマイル！ハツハツハ可愛い奴め！

「マサさん・・・現実を見よう」

和んでいたら美柑に引き戻されました

ええただ今

「うわあ〜ペンギンが！」

「キヤー」

「また一羽逃げたぞ〜」

ペンギンコーナーはエライこっちゃになります。

「あつアレ強力すぎたかな？」

ララさんや気付くの遅せえございますよ

「これはもう元気を通りこして100%スパ○キングじゃねえではねえかい！」

かなりハジケてんぞペンギン達！

「どつするのマサさん？」

どつもどつもあらんがな！

「俺がペンギン共を捕らえてくらあ！ララと美柑は危ねえから避難してろい！」

「コレしかござらんない！」

「でっでも私のせいだし……」

「おやまあララ結構責任感じてんのか？」

「気にするねい！ララはペンギン達んことを思ってやったんだろ？悪気があつたわけじゃなかるうに、まあ後でゲンコだけどな！」

「ソレにマサさんは運動は大好きなんですよい！じゃ美柑、ララを頼まあ！」

『シャバ！』

「行っちゃった……」

「マサさんは優しいね？けどゲンコツは痛そう、ほらララさん避難してよ？」

「別に優しくかねえよ美柑君！ゲンコツは痛えけどな！」

「つと今はペンギン共を捕らえねば！」

「はい！一羽！オラ二羽アアア！次タイイイイ！」

「ハッハア！なんか楽しくなってきた！つておい！」

『ヒュー』

「クアークア！」

「待てや！何でペンギンが飛んでんだゴラアアア！オマエは飛ばないタイプのトリじゃろがい！」

俺だって飛べねえんだぞ！空を走れるけどね！

こつ空気の壁？音の壁か？そんな感じのを蹴る感じで！二段ジャンプの応用だ！みんなもチャレンジしてみよう！

って言ってる場合かい！

ん？今なんかリトと春菜とすれ違ったような

まあいいさね！

「オラアアア！ゲットオオオ！」

「クアークア！」

・  
・  
・  
・

「ほい！お疲れ〜いやあ楽しかったわい！」

で何とか全部のペンギン捕らえました！そしてその中のボスっばいやつと魂の会話、あっあの飛んでたやつね？

「クア！クアー！」

「おう！じゃあ今日は大人しくしてくれや！ララも悪気があったわけじゃねえんだ許してやってくれや、な？」

「クア！」

こんな感じのをした結果、交渉は成立し、今日は大人しくしてくれるっばいようです

アン何でそんなんが出来るかっつて、きつと！奴が漢だからだ！

まあリト達は

「何でわかるんだマサのやつ・・・」

「マサさんだもん」

「マサだからだよ！」

「マサ君だし・・・」

とか言ってたがな！一応言っておくが完全に内容がわかったわけじゃねえから！

ニュアンスだから！こっつ外国人との会話的な感じだと思ってくれい！

ちなみに俺は外国人と日本語で会話するタイプだぞ！

意外と何とかなります！ってこの下り長えな！

でララに

『ゴツン！』

「イダッ！」

「まあ一応な？悪気はねえんでコレでカンベンしちやる！」

ゲンコツしました！まあしなくてもよかったんだが、逆に何もねえと引きずりそうだしな

ちなみにリトと春菜は

「マサじゃなかったんだな」

「私もてつきりマサ君だと・・・」

とかほぎきやがりましたので

「おのぞみならクレてやりますが？」

ついたら

「結構です！！」「」

と仲良くクビを横に振りました



でその後、俺は少しだけ残って館内の後始末を手伝い壊れた場所の補修作業をしたりした結果、水族館の館長さんに

「ありがとう助かったよキミの手際のよさ、コレ少ないけど」

って臨時収入が入りそうになったが

「いや悪いんはコッチツスから、けど何かくれるんだったらアレ貰っていいツスか？」

とイルカのぬいぐるみ3を三つ貰いましたけど

「うーん！それじゃあそのぬいぐるみを引いて半分だけは受け取ってくれないかな？」

と半分、けど万券をゲット、どうやら館長さんいわく、元々補修しようとしていた部分が多くて、俺がソレをしたことで大分資金が浮いたとのことらしい

災い転じてって奴でござるな！

で外で待っていたリト達と合流、結構ガラスとかも飛び散ってて危ねえので待っててもらったのだ！

そして俺はぬいぐるみ三つを

「貰ったのでララ君、美柑君、春菜君に進呈しよう！リトにはないが、まあ後でなんか奢っちゃうから今はカンベンな？」

とそれぞれ三人に渡しました

「うわぁ〜ありがとうーマサ！」

「ありがとうマサさん！」

「もこもこ・・・マサ君ありがとうー！」

うむ！ナイススマイル！

「うむ！気に入っていただきましたな！では、ぼちぼち帰んべさ」

そして俺、帰宅宣言！結構イイ時間だしなで春菜を送ってから帰り道で

「なあマサ、ホントにいいのか？」

「よいよい！臨時収入あったしな、ソレにみんなでもできるべ？」

とゲームソフトを買い、街案内は終了しました。

## 第十四話っばい感じ！（後書き）

後書き

後半がかなりグズグズになった気がします、もう最後はご都合としか言えませんし・・・

コレからもこんな感じですがどうぞヨロシクお願いします。

第十五話つばい感じ！（前書き）

前書き

またもや無茶苦茶展開！これはビドイです・・・

けど後には引けないんです・・・

今回は何時もより多めに薬を持っておすすめみ下さい。

## 第十五話 っぽい感じ！

今日も休みだぜい！

けど俺珍しくロンリーぼつちで街をブラブラ！

ん？何故一人とな？では今朝のことを思い出してみよう！

回想スタート！ほわわ〜ん！

・  
・  
・  
・

「バカ・・・な・・・」

まさかまさかの展開でござるぞー！いや、なんとなく、そんな気はしてたよ？けどさ無いと思うじゃん？思うよね？でも有ったんだよ・・・

アレ？コレー昨日の夜も似たようなことを言ってたような・・・  
よしじゃあ今度は

『有り得ない？有り得ない・・・それこそ有り得ない！』

流石だぜ湯〇教授！

さて！現実を見るか・・・

左にララーうむ、ちゃんと服は着ているな！そこは褒めてやらん  
こともねえ！

で右は・・・

「なんで美柑やねん！」

何処の王宮暮らし？何この状況？マ○ラジャ？

「まっいいけどね！」

うん！実はさほど気にしてねえでござる！ちいと一昨日のアレみたいな感じで遊びたかっただけ！

まあララはともかく美柑は子供ですからねえそういうこともあらあな！

「ピキッ！」

何故か俺がそう考えた瞬間に美柑のコメカミに怒り的なマーク？あるいはパ○サーが浮かんだが気にするな！小○！

とりあえずは朝ミ○ミ○しますかねえ

『ヒラッ』

ん？手紙？アイナ？ミ○ミ○数変更報告以来だな、どれ

『おはようございますデス！マサさんにコレを送るデス！ホントは最初にするべきでしたデスが遅くなってゴメンなさいデス！では頑張って下さいデス』

アイナより

PS・危うくエレナ先生が通報するところでしたデス！けどマサさんに教えてもらったアレで乗り切ったデスよ！」

やるなアイナ！流石だぜ！ん？アレとはなんぞやとな？想像に任せるぜ！みんながパツと思ひ浮かんだフィニッシュ技！それがアレだ！

っとソレよか何を送ってきたんだ？む？封筒？ふむふむ

「戸籍やん！しかも現住所が結城家やん！やるなアイナ！」

思わず独り言だぜ！いや助かるぞアイナよ！流石は天使だな！

俺だったら血生臭いことになる所だったぜ・・・いやウソよ？そこまでデンジャーちゃいますよ？信じれ！

っとまあソレはともかく戸籍を手に入れたぜい！

けどチラッとララのを見て、フと思っただけがありもつす

「ココって・・・そこまで戸籍重要じゃなくね？」

身も蓋も無えですけどね！

「ん・・・ん〜」

むっ！脳内コチャコチャしてたら美柑がそろそろ起きそうですな！

「ふあ……」

うむ！起きた！中々に可愛いアクビでござえます！

「おはようさん！さて美柑君、なんでユーがミーの布団で寝てるのかね？」

気にはしてないが気になるのだよ！アレ？なんかこの言い方は微妙じゃね？どつちだアアア！つてなるよな？

ふむ……

別に布団にいたこと自体は問題ではござらぬが、なんで俺の布団に？といった疑問があるということではここは一つ

「えっと……なんとなく？」

なんとなくとな！

「なら仕方ねえですな！なんとなくなら仕方ねえよ、うんうん」

そういうことってあるものな？『リトガード』が生まれたキッカケもなんとなくだもんな

「それで納得しちゃうんだ？あつ！えと、おはようマサさん」

「二度めだがおはようさん！それで納得するんですよマサさんは！まあもしスツパとか下着姿とかだったら問答無用巻いてたがな！」



まあ美柑だからなソレはねえよな？

「アハハ・・・まさかあ？」

おい！美柑君微妙に目が泳いでるぞ、平泳ぎくらいだが

まあいいさね

「朝メシ作るか？」

「うん！」

で朝メシ作りを開始

その後にはララを起こす

「巻かれてない！巻かれてないよ！」

なんで巻かれてないことにそこまで驚愕してんでござえますか？

「昨日言ったべさ？服着てたら巻かないってよ？」

「あつ！そういえばそうだったかも？よしならコレからも服着て潜り込む！」

うむ！コレでスツパで行動するクセが抜ければよいな！

昨日の風呂上がりもスツパで居間を駆け回ってたし

しかし・・・普通に潜り込むんは容認した感じになってね？まあ

いんだけんども

でその後リトも起きてきたので朝メシを食って

「さて今日も休みだマサさんと遊ぼう！のコーナーです！」  
をブチ上げたのだがララと美柑は

「えっと私とララさんはちょっと写真を整理するから」

「ゴメンねマサ？」

とのことにより不参加を表明！写真ってアレだよな・・・

とか思いつつも聡明たる俺は言及をさけた！ヘタレではないぞ！  
ただ赤信号を渡らなかつただけだ！常識だろう！

でリトと昨日購入したゲームで対戦、その結果

「そんな優しさ辛いだけだアアア！チツクシヨオオオー！！」

と家を飛び出してきたのでござるよ！  
いや違うよアレだから確かに押されぎみだったけどそこまではな  
いから

ホントだから！せいぜい四分六シフロクつてくらいだから・・・

スンマセン見えを張りました・・・1・9です、完全にボッコに

されました、最後なんか手加減されたもの、それが逆に悲しかったので飛び出してきたんです

「まあたまには一人でブラつくのもよかるって！つとそつだ！」

独り言りつつも中々に名案を思い付きもつした！

「京都に・・・ゲフンゲフン！」

危なかった迂闊な発言だぞ！今はツツコミ不在なんだぞ！落ち着けマサ！

「携帯を買いに行こう！」

うむ！コレが本題だ！現代人の必須アイテムだからな！

つつわけで！

「携帯シヨップへGOだ！」

『スッタラスツタラ』・・・ん？N I N J Aは使わないのかな？

たまにはゆっくり歩くのもイイもんですよ？

「ワールドサ〇ドの〜つと」

うむうむ春陽気に思わず歌まで飛び出しますわい、ちなみに歌ってるのは某カラス映画のオープニング曲でござえます

結構好きなんですよ！

つとおよ？あそこにいるやつはザスティンさんではねえですかい？

かなり久々だな？つうかアノコスプレどうにかならんのか？どれ  
アイサツがてら注意してやろう

「よおザスティン！久々だな元気か？」

「ハッ！これはマサナリ様お久しぶりです」

堅いなあコイツ？

「堅いぞザスティン君？敬語とコスプレをやめなさい」

あんまし堅い口調は好きじゃねえんですよ俺は

「むっ……しかしなにぶん性分ですって……それに何れはアナタ  
様に仕える身となる者、余り気安い態度では……」

コイツも相変わらず走ってんなオイ！

「だからその気は今ん所は無えつつてんべさ？後、喋り方がそうなの  
は性分だからってことで納得できるが、その恰好はやめれ？さっ  
きも言ったがコスプレ丸出したぞ？」

喋り方に関しては諦めもつくがコスプレがキツイ！イイ歳した大  
人でしょうに？ほらまた隣の奥さんに笑われたじゃない！

「むう……しかしいつララ様やマサナリ様が狙われるともわから  
ない状況！常に戦える態勢でいなければ！それに既に一度、襲撃を

受けているというではないですか！」

「まったくコイツはアレか？騎士かいや侍？むしろSAMURAI？  
うむ、コッチがシックリくるな？」

「ソレに襲撃つてアレだろあのクソダヌキだろ？あんな程度んやつ  
がいくらきても問題ねえぞ？」

「けど・・・前みてえに人質とかふざけたことされたらなあ・・・  
ふむ！」

「ならザステイン？オマエにしたらララは言うまでもねえたあ思う  
けど」

「それ以外にも俺が世話になってる人達・・・つうとアレだな？ま  
あようするに回りん人達んことを気にかけてくんね？」

「わかりました！しかしマサナリ様は？」

「うむ、了承してくれましたな、コイツもいい奴だよな？俺んこと  
まで気にしてっし」

「俺か？問題ねえぜい、バグキャラナメンなよ？こちとら生まれて  
コノ方ジジイ以外にやあケンカで負けたこたあねえんだ」

「それに俺に売ってきたケンカを俺が買うのはあたりめえだろうに  
？」

「ニカツと笑いでザステインにそう言う！漢は常に七人の敵がある  
のですよ！」

まあ俺は七人程度じゃきかねえですが

っっておろザスティン君？何をプルプル震えてらっしゃいますか？

「流石は！流石はマサナリ様！このザスティン感服いたしました！やはりアナタ様こそララ様に相応しい！」

アレ？やっちった？なんかザスティン君の漢スイッチ押しちゃった？

まっまあいいや・・・気にするな突っ走れザスティン！オマエはソレで行け！

「ソレでは私は言われたとおりマサナリ様の周囲の方々に注意をはらっておきます！」

あつ、ソレとララ様の婚約者候補の一人が何やら凄腕の殺し屋を雇ったとのこと充分に気をつけて下さい、では・・・」

殺し屋ねえ・・・何回目だっけか？結構久々だよな？

ん？何がとな？殺し屋的なやつに狙われる経験がござえますよ！7割は身に覚えのねえジジイのとばっちりだけだな！

残りの3割は身に覚えがあります・・・

「まあ気いつけるわ！じゃあなザスティン！」

「はっ！」

アレ？今のやりとりってなんかアレだったような、なんつうか命  
令下す水戸〇門とソレを受けた弥〇みたいな・・・

深くは気にせんとこ・・・

っておよ？向こうになぁんか見覚えのあるとつかなんといつか

・

確かにこんな奴もいたような？

まっいいか？つうか何してんだ謎の少女Yさっきから屋台の前を  
ウロウロと？

どれ話しかけてみるか？

・  
・  
・  
・

ヤミ視点

『鬼島政成はララを騙し、デビルーク星乗っ取りを企てる残虐非道  
な極悪人この者を始末せよ』

コレが今回、私が受けた仕事（殺し）の内容・・・

「コレが・・・鬼島・・・政成・・・ですか・・・」

送られてきたターゲットの写真を確認するどつちから目つきの悪い  
男のようです

しかし確かに目つきは悪いようですが、そこまでの悪人には見えませんが……

いえ……関係ありません私は仕事をこなすだけです

クビを一つ振り、そう思いを決めると私はターゲットの住んでいるという街に向かうことにしました

そして街を歩いていると何処からかいい匂いが漂ってきました

私はその匂いの場所に向かうことにしました

いえ違います……ターゲットの情報が得られるとの私の勘によつて行動しているだけです

決して匂いにつられた訳ではありません、私は一流の殺し屋です、くれぐれも勘違いなどされないようお願いします

「食いてえのか？」

むっ？私そのいい匂いをする場所にて情報を集めようとしていたら急に話しかけられました

いえ違います情報収集です、決してこのいい匂いの食べ物が気になつたわけでは

「食いてえんだな？ふむ、俺も小腹空いたしな、どれちいと待ってるい！今ならセットで三〇三〇もついてくんぜい！」

むっ……考え事をしていたら話しかけてきた人物はそのいい匂いのする食べ物が売っている所に行つてしまいました



しかし今の男・・・もしやターゲットの  
いえ今はあの食べ物の方が優先ですね

ミ○ミ○という物も気になりますし

いえ違います調査です、ターゲットのことをよく知ることとも一流  
の殺し屋としては大切なことですから

決してあの食べ物が食べたいとかそういうことではありませんの  
で勘違いしないようにお願いします。

・  
・  
・  
・

マサ視点

「おっちゃん10個ばっかくれい！」

「あいよ！ひのふの・・・とおっと！ホレ！」

「サンキューおっちゃん！」

うむ、見た限りではしっぱまでアンコが詰まっとりますな！中々  
美味そうですね！そうですねタイヤキでござる！

いやついあの謎の少女Yのタイヤキ食いてえつうオーラに買って  
買ったが中々によい買い物ではないだろうか？

しかしやっぱあの謎の少女Y見たことがあんだよなあ？

なんだったかなあ？まっいいか？つうか何してたんだろね？タイヤキ目的？微妙に正解で微妙に外れっぽい感じがすんが

まっとりあえず

「ホレ！タイヤキでござえます！更にミ〇ミ〇！やったね！」

と謎の少女Yにタイヤキとミ〇ミ〇を渡す、すると謎の少女Yは

「どうも・・・ですが何故コレを私に？」

と微妙に疑問顔でござえます、まあそろそうですわな、よく知らんやつに急にタイヤキ奢られとる訳ですもんな

けども

「めっさ食いたそうにしとったがな？まあ俺も腹減ってたしな、一人タイヤキより二人タイヤキの方が美味く感じられるのだよ！そしてミ〇ミ〇はみんなのミ〇ミ〇だからだ！」

弁当の法則と同じ理論だな！ミ〇ミ〇に関してはもはや常識だな！

「そういつものですか・・・では遠慮なくいただきます」

うむ！中々に素直ですな！

それになんつつが無表情っぽいけど微妙に美味そうに食ってる感じが可愛いぞコレ？

こつ擬音にすると、はむはむって感じか？

「美味かる？」

思わず確認！

「中々ですね・・・このミ〇ミ〇という飲み物も・・・」

うむ！口に合ったようで、っとそうだった

「オマエさんタイヤキ屋の前でアッチ行ったりコッチ行ったりしよつたけど、何してたんだ？タイヤキ目的か？」

気になってたことの確認です！

「人を探していました」

あつ、そうなの？人探しねえ？どれ袖触れ合うも多生の縁ってか？

「なら手伝つたるか？ヒマだしな？」

「いえ・・・大丈夫です、探していた人は見つかりましたから」

あつそうなの？ん？さっきまで探していた・・・俺が話しかけた時には見つかった・・・

ハッ！犯人はこの中に居る！って違うがなつつか、わかっちまいましたよ流石の俺でもさ

「もしや・・・俺？」

「当たり前です！」

『ヒュッ!』

おう! 凄いな? なんか手が刃物になっとりますよ? つうかコイツ  
って

『ガキン!』

「○ヴ?」

刃物を素手バリアーしつつ聞いてみました、けどなんか違つよう  
な? つうか漫画からして違つような?

「違います! 『金色の闇』私はそう呼ばれています」

『ヒュバババ!』

『ガキンガキンガキン!』

あつそつちね? 通称ヤミさんでござったか? あつちなみに今もヤ  
ミの連撃を素手バリア中です!

そついやザステインが言つてたやつつてヤミンことか?

そんな設定だつたなあ?

「クツ・・・この・・・硬い!」

『ガキンガキンガキン!』

えつと確か今みたいに体を武器にすることができるとつう宇宙でも有数の殺し屋だっただけか？

「ターゲットは・・・普通の人間と聞いていましたが・・・!!」

『ガキングアキングアキーン!』

さっきからずっと素手バリア中です! つうか必死ですねヤミさんや? しかし残念ながら

「マサさんは普通の人間ではねえんでござえますよ?」

いろんな意味でね! どちらかってえと人外バグボディですしね! カッチカチやぞ!

「ハアハアハア・・・強いですねここまで追い込まれるとは思いませんでした」

「いや別に戦ってねえがな! つうかただのスタミナ切れじゃね? 俺特に何もしとらんぞ?」

しいて言えば素手バリアくらいです!

「まさかここまで激しい戦いになるとは思ってもいませんでした・・・ですが私も一流の殺し屋、このまま引くわけにはいきません」

「見事にスルーしたな?」

意外と負けず嫌いなのか? ん? オマエが言うとな? ほっといて!

「いきますー！」

『ガキンガキンガキン！』

「はいは〜い頑張れ頑張れ〜」

なん可愛いですなヤミさんこう気分的には駄々っ子パンチを受けてる感じ？

まあ手とか髪とかが刃物になってますが  
むっ！イカンな！

「ヤミっ子よ？タイヤキが冷めるからまずはタイヤキ食わね？冷めても美味いが熱いうちがもっと美味えし」

まだタイヤキ食ってる途中だったんスよね？

「む！仕方ありませんね・・・そこまで言うのなら一時休戦です」

あれまアツサリしてまんね？根は素直さんみたいね？

「んじゃアツちんベンチにいきこうや？立ち食いや歩き食いもいいがのんびり座って食うのもまた美味いぞ！」

「ええわかりました」

で俺達はベンチへGO！

「美味えな〜！タイヤキとミ〇ミ〇中タイイ組み合わせだと思わんかね？」

「悪くはありませんね・・・」

意外とイケる組み合わせだぜ！みんなも試してみよう！

「わかりませんね・・・鬼島 政成、アナタは極悪人と聞きました  
が・・・話しに聞いていた程の悪人とは思えません」

ん？なんじゃそら？

「極悪人にねえ？まあ悪人云々はどっちでもいいわ、いやでも上に  
極つてのはなあ？悪人程度ならまだしも極まつてるってのはなあ？」

自分で自分のことは善人ではないと思うしな？結構自分勝手だし、  
一応自覚はあんですよ？

まあ簡単には直らんでしょうがね！

「まあ変人とは言われるけどな悪人とかよりもシツクリくらあな？」  
自分で言うのも何だがコレが一番シツクリくんですよ、認めるこ  
とが大事ってこつたな？

「変人・・・ですか？確かに悪人というよりも鬼島 政成にはそれ  
が合っている気がします」

わぁーい！ヤミのお墨付きも貰ったぜい！

「だろ？つうか一タフルネームで呼ぶのはやめれ、マサでいい」

気になるんですわい！

「マサ・・・ですか？何故？」

何故つわれてもね？

「たいていはそう呼ばれてっからだな？シツクリくんだわ、そう呼ばた方がな？別にマサナリでもいいけど？」

「マサナリですか・・・ではマサナリと呼びます」

あっ？そっちにしたんだ？まっいいけど

っと話しながらタイヤキ食ってたらばいつの間やらタイヤキフィニッシュです！

「美味かったな？で続きやんの？ぶっちゃけ俺あやる気ねえぞ？」

話ししてたらヤミっ子、結構いい奴っぽいしな？それになんかキナ臭えんだよな？

「私も仕事ですから・・・しかしどうも引っかかります・・・マサナリは本当にデビルーク星のプリンセスを騙してるのですか？」

はあ！！

「なんじゃそれや？どっいっつっちゃ？」

「知らないと？」



知らんがな！初イヤーだつっうの！

「鬼島政成はデビルーク星のプリンセスを騙してデビルーク星の乗っ取りを企てている極悪人、なのでこの者を始末しろ・・・私が受けた依頼です」

あつ・・・なんだろ？ムカついてきた・・・

「へえくなるほどねえ、いやあナメられたもんだわ・・・いやはや・・・ああなんだろな？

こつ・・・ヤミっ子よお？オマエさんに依頼したやつってどんなやつよ？」

ナメてますね？完全に俺をナメてますよね？ああ気にいらねえ

「やはり・・・マサナリは知らなかったようですね・・・」

あつ、ヤミも騙されてんだわなソイツに？

「知らねえよ、そらぁララとはダチだぜ？けどよそんなクソ下らねえことん為にダチになったわけじゃねえよ！

アイツがいい奴でただのララとしてダチになったんだ！

そツれおツ！！気にいらねえ・・・ああ気にいらねえ！！」

つつかデビルーク星ってのが欲しかったら直接乗り込むわ！！いやしねえけど！！

「ッー！！ヤミー！！」

『ガシツ！バツ！』

「ッ！イキナリ何を！」

『ガシヤア！』

咄嗟にヤミを抱えつつバツクステップ、悪いね！ヤミっ子？気付いてなかつぽいんでついな？

「どつやら自らご出陣ですな？」

「たくベンチ粉々ですがな、やっぱコレ俺が直すんかね？」

「つつか何だコイツ？派手なご登場のわりには」

「シヨボイな？ドングリチビ、オマエが乗ってるデカガエルの方がまだ華があるわ」

「毒舌ですね？それと助かりました下ろしてください」

「おっとまだヤミっ子抱えたまんまでしたな」

「悪いな？あのドングリ星人が依頼人か？」

「ヤミを下ろしがてら確認」

「ボクたんはドングリ星人なんかじゃない！ボクたんはガーマ星の王子ラコス様だぞ！」

「ボクたんってオマエ・・・ボクたんって・・・つつかがマだった」

んだ、だからデカガエルをね・・・いやそれよか

「いつ俺がテメエに話しかけた？俺あヤミに聞いてたんだぜ？勝手にしゃしゃり出てくんばカエルさんよ？」

「繋げましたね？えっと確かにアレが私の依頼人ですが」

やっぱりねえ？なんか企てそうなツラしてんもんな？

「しかし何故私ごと攻撃してきたのでしょうか」

アレま気付いてねえと？

「ムギギギ・・・宇宙有数の殺し屋と聞いて嘘の情報で雇ったでふのに、中々上手くいかないでふし嘘情報もバレてしまったでふからね

その生意気な地球人と一緒に始末しようと思ったでふよ！ララたんはボクたんと結婚するんでふ！」

というこつてすよ？つうかまた勝手に喋りやがったな？つうかコイツもストーカーの類かよ？ララの婚約者候補ってこんなんばっかか？

シツカリせいよララの親父・・・

「やはり・・・私は騙されていたわけですか・・・許しません」

つておよ？ヤミさん怒つとります？まあそら怒るわな？こんなしよつもないやつに利用されたらダレでもキレらあな

「ふん！騙されるほうがバカなんでふよ！いけガマたん！」

「ニヤアアア！！！」

ガマなのに何故にネコっぽい声やねん

『ピューー！！』

「うっ……ヌルヌルが……ヌルヌルはいやです……」

そついやそんなもあつたねヤミっ子？グルグル目のグロッキーです……っておい！なんか服溶けてね？

「フフフ……ガマたんの液は特別製で生き物の服だけを溶かすでふよ！」

何その限定的なセクハラ能力？コイツはストーカーの上に変態なのか？キツ！

つとこのままじゃヤミ、スッパになってまうな？そろそろ手を出しますかね？

『バツ！』

「ホレ、コレ着てるい？コレも俺同様に頑丈だからそう簡単に溶けませんよい」

「助かります……マサナリはどうするんですか？」

紳士ですから！で昨日のララみたく上着を巻いたらヤミにそう聞

かれました

「いや最初はヤミに騙されたカリを返さそうと思ったけどな？見た感じヤミってアノ手のタイプ苦手そうじゃん？つうわけで強制介入です！

それに元は俺ん客だしな、あつ安心しろちゃんとヤミン分は残し  
といてやつから」

『ゴキゴキン！』

クビを回しつつ指を鳴らします、さあてブチのめしますかね

「やっぱり生意気でぶ、いけガマたぐん！」

「ニヤアアア！」

『ベローン』

流石に男相手にゃセクハラ液は使わんみたいね？まっそらそうか

『ガシッ！』

延ばされた舌をガツチリ掴みます！多少滑るけど人外握力には問題なし！

「ニヤニヤ！」

おう！ビックリしてんな？普通は滑って掴めるとは思わんもんな？

摩擦？知らんがな！

「よいしょオオっと！」

『グイッ！』

引っ張り引き付け・・・

「まあ死なない程度にゃあ加減してやらあ？オラよツツ！！」

『メギイゴギヤアアア！！！！』

ゲンコ気味に殴りつける！！

「ニヤガ・・・ピクピク・・・」

「ってアレおかしいな？カエルって殴ったら『メメタア』じゃねえの？」

まっいつか？とりあえず生きてるし・・・さあてと

「バツバカな・・・ボクたんのガマたんが・・・」

バカエルにヤキ入れんな？ちいとばかり俺も怒ってんだぜい？

そだ！デカガエルも潰したしヤミっ子も参加させるか

「おついやミっ子？あのデカガエルは苦手っぽかったけどコイツなら平気だべ？こんぶざけたバカエルにちいとばっかし教育してやん

ね？」

ケンカ売った相手がダレだったかってことをな！

「苦手なのはあの大きいカエルではなくてヌルヌルです・・・  
ですがマサナリの案は中々、良い案です、協力しましょう」

うむ！一見無表情っぽいけど微妙に口元が緩んでるな！

まあ俺も悪つい顔してんだろっけど・・・

「ヒッ！ボクたんはガーマ星の王子だぞ！こんなことしていいと！」

「思ってたんぜ？」

「思っていますか？」

意気ピツタリでしたな？ヤミさんや？

「ヒッ・・・ギツギヤアアアア！！」

『ゴキヤ！メキ！グシャ！ズバア！』

死ぬ程ボコしました！！あつ一応は生きてるぞ？

最後は自力で自分の星に帰えったし、まあ帰る前に

「次はこんなもんじゃねえからな？」

つつて脅しゲフンゲフン・・・説得したからもう来ねえだろ？

ってアレ？なんか余計なこと言った気が……こう再来フラグみたいなの……まあいつか？

「ヤミっ子よ依頼はこうなったわけだがコレからどうすんだ？」

今はヤミっ子のことだな

「そうですね……マサナリには借りがありません、それに嘘情報で受けた依頼とはいえ、私がターゲットを殺し損ねたことは有りません

ですのでしばらくは地球に居ようと思います」

ふうん、ようするにまだ俺の命を狙うってことか？まあ俺あやる気はねえけど

「さやか？で済む場所のアテはあんのか？」

「有りません、ですがどうにかなるでしょう」

意外とポジティブ！つつかやっぱ無いのかよ？

リトん家に誘うか？まあリトや美柑だったら了承してくれんだろ、それにそうしろって宇宙意思（書いてる人）が言ってるし

アレまた電（以下略）

まっとにかく

「んじゃ俺が世話になってる家に来るか？みんないい奴だから大丈夫だと思っぜい？」



とヤミを誘ってみます、したらヤミ

「私はマサナリの命を狙ってるんですが？」

だと、まあ今更だし

「同じ家に住んでたほうが狙いやすいべき？あつ俺以外は狙うなよ？」

ほっとくんもアレだしな、それと一応は釘刺し

「当然です！私はターゲット意外の命は狙いません・・・しかしマサナリは変わっていますね？」

うむ！コレなら大丈夫つと！

「まあ変人ですから！じゃあ行くべさ！」

「はい！」

とこうして俺はヤミっ子を結城家に招いたのでした。

・  
・  
・  
・

あつ！携帯買っつのを忘れた！

## 第十五話つばい感じ！（後書き）

後書き

みんな大好きヤマさんでした、時系列？もう無茶苦茶！

許して下さい。コレからもかなりイベント前後あります

後、ラコスポ？コイツも口調わかんなかったんで勝手にこんな感じにしました

ホントすんません、コレからもこんな感じな話ですがお暇なればまた見てやって下さい

感想などもありましたら是非！

第十六話つばい感じ！（前書き）

前書き

今回も大苦戦しました・・・でもやっぱりデキは・・・

キャラ崩壊もますます進んでおりますがそれでも良いよという方は薬を片手にどうぞ

## 第十六話つばい感じ！

「たっだいま！」

ヤミを引き連れつつ結城家に到着！

「おかえりマサ、どこ行ってたんだ？ってん？その子は？」

ふむ！やはり気になるようですなリト君よ

「まあその話しはララと美柑も揃ってからってことで！つつわけで二人を呼んできてくれい」

「あつ・・・ああわかった！」

リトに二人の呼び出すを頼みます！素直だなリト君！ん？いや違うよ？アレの整理とやらをしてる二人が怖いからとかそういう訳じゃないから

信じれ！

・  
・  
・  
はい全員揃いましたな！では

「リト、美柑頼みがある！コイツ、しばらく泊めてやってくれんか？」

サクツと本題！

「「はい？」」

む！いきなりすぎたか？構わん！畳み込む！

「コイツはな『金色の闇』通称ヤミさんつつてな？聞くも涙、語るも涙の事情があんだよ・・・」

何となくソレっぽい感じを出しつつ語りだします俺！

「「「どういこと？」」」

やはりそうなるか！

『クイクイ』

む？なんか袖を引かれてんな

「「どういことですか？」」

ってオマエもかいヤミっ子！ええい！構わん！進め！

「うむ！実はな、このヤミっ子も宇宙の彼方から地球に仕事でやってきたんだがな

実はその仕事、悪っい（性格が）宇宙人に騙された偽情報の仕事だったんだ・・・」

大筋はあつてる！嘘は言ってねえぞ？

「えと・・・どんな仕事なの？」

美柑君、やはりそこが気になるか、つつか言って大丈夫なもんじやろか？まっ今は、ほかすと・・・

「マサナリの殺害です」

あっ！言っちゃったよ

「おいおいヤミっ子？折角マサさんがその辺りをフワフワっとうまい感じにしようと思ったのに台なしじゃんかようっ？」

全く！もうちょい後、具体的には夕食の後くらいにこうサラッと言おっかなあとか思ってたのに

「ですが事実です」

「だからその辺は追い追いだな・・・」

もっと空気読んでこうぜ！まっ俺が言えることじゃない気もしますけどね！

「ちょっとマサ！どっいっことだよ！..」

「そっだよマサさん詳しく話して！..」

「マサ！もしかしてまた婚約者候補が！？」

うおう！すげえ勢い！怖っ！でもまあ俺んことを心配してのこと

なんだろうねえ

いい奴らだよな？やっぱ・・・とイカンイカン！浸ってる場合ではない

「ヤミっ子！依頼内容の説明！」

ヤミに説明を頼みます！

「鬼島政成はデビルーク星のプリンセスを騙し乗っ取りを企てる残酷非道な極悪人この者を始末せよ、コレが私の受けた依頼の内容です、依頼人はガーマ星の王子ラコスポでした」

はいよくできました！そっぴやアイツってそんな名前だったなあっちゅう間に忘れてたわ・・・っと

「んで、そっから先はカクカクシカジカというわけでヤミさんには住むとこがねえんでござえますよ？頼む！どうにかならんか？」

そっから先の説明は俺がしてその後には頭を下げます！ってコラ！ヤミ！

「オマエも下げるの！！」

『グイッ！』

「むっ・・・マサナリ痛いです」

「違うでしょ！お願いしますでしようが！」

全く！ヤミっ子は天然か！

「お願いします・・・マサナリ」

「マサさんに言ってどうすんの！つうかなんか語尾みたいになってるし！リトと美柑に言いなさいっての！」

天然め！

「ヤミちゃんは騙されてたんでしょ？このままじゃ可哀相だよ？ねえリト、美柑？」

おつとララの援護射撃！優しい子だねララは

で結城兄妹は

「だな？なんか・・・大丈夫そうだし？」

「うん、既に仲良さそうだもんね？」

と理解があつて非常に助かるぞ結城兄妹！  
やっぱり、いい奴ですわい！

「じゃあ？」

「ああ、いいぞ？」

「うん！歓迎するよヤミさん」



おっしや！！流石だぜい！

「やったなヤミっ子！！」

撫でます！ええ実はずっと撫でたかつたんです！我慢してたのさ！

「何故、私より喜んで？それと何故頭を撫でてるのですか？子供扱いはやめてほしいのですが」

フツ！子供扱いだと・・・

「子供扱いではないぞヤミっ子よ！子供だから撫でるのではない！可愛いから撫でるのだ！！」

ナメるなよ！可愛いものは撫でたいんじゃない！

「ハア？そういうものですか？」

そういうもんですよ！特に俺は！

「マサ」

わぁっとります！ララも、なぐでなでっ！むろん美柑も！

「えと・・・なんで？」

「連帯責任だ！！」

なんか微妙に違うが気分的にはそんな感じでござえます！

となんやかんやありつつも『ヤミっ子の結城家に住みましよう作戦!』訳して、『書いてる人の趣味!』は成功に終わったのだった。

・  
・  
・  
・

いやまだ続くよ? 流石に短すぎるんで

とちよつくら余計な電波を受信したが肝心なことをやっておらんではないか!

「ンッン! 今更だが紹介をせねばな! まあヤミっ子は俺ん事は既に知ってんだろから省くとして・・・」

まずはリトだな

「こっちは結城リト、この家のツッコミ担当で、すぐぶるいい奴だ!」

「ツッコミ担当ってなんだ! いやいい奴って言うてくれんのは嬉しいけど! っていうかマサのせいだろ!」

うむ流石だ!

「結城リトですね、ツッコミ担当・・・」

うむうむ! ヤミさんリトをツッコミとして認識! それでよし!

「でこっちが美柑、リトの妹で料理が上手の癒し担当、これまたす

「こぶるいい子だな！」

まあ最近はなんか微妙な方向に転がってるけどな！言わんけど

「これからヨロシクね？ヤミさん」

「美柑ですね・・・わかりました」

うむ！なんかこの二人って相性よさそうだな？そっぴや原作でも仲良かったっけ？まっ原作なんざどっちでもいつか？

「でララ！こっちはヤミも知ってるか？まあこの家での無邪気さんと暴走担当だな！これまたすこぶるいい奴だ！」

実はフルネームが浮かばなかったのは内緒だ！

「デビルーク星のプリンセスですね？ではプリンセスと」

む？アレ？普通ならひっかかるんだけどな？こっララはララだぞみたいなの？なんでやる？

あつヤミにとっては愛称みたいなもんだからかね？

「ヨロシクねヤミちゃん！」

うむララも気にしとらんし大丈夫ってことで！

「マサナリは何を担当してるのでしょうか？変人ですか？」

む？俺か？

「変人であつてるが後は料理だな！」

開き直れば楽になるのだ！

「料理ですか……」

むっ？どうやら俺の腕前を信じてねえですな？ふむ・・調度昼時だし

「では今日は気合い入れて昼メシを作るぞ！目にももの見せてくれるわ・・・あつ美柑手伝ってね？」

「うん！」

と昼メシ作りだ！

・  
・  
・  
・

で完成&試食タイム！あつ今回は加減したツス

「中々ですね・・・特にこのタマゴが」

フツ！勝利！どうやらヤミっ子もタマゴ焼きが好みらしい

「でしょでしょ？マサのタマゴ焼き美味しいよね？」

そして何故か誇らしげなララさんでした、まあ嬉しいですけどね！

でメシ食ってる時に

「そついえばヤミさんってなんで地球に残ることに？」

と美柑がヤミっ子に質問、その辺りは話してねえでしたな

「私は今まで請け負った仕事は全てこなしてきました、しかし嘘の情報での依頼とはいえ依頼を完遂できなかったのは初めてです、ですのでマサナリを仕留めるまでは残ろうと」

まあやる気は無えけどね？

「ブフツーー！って事は今もマサの命を狙ってるって事か！」

わあ綺麗！久々の虹ですね？

「ええまあそういう事になります」

それに対して淡々と返すヤミさんです！

「マサさんそうなの？って大丈夫なの？」

大丈夫とな？ふむ美柑君、愚問だぞ？

「その上でヤミっ子を誘ったからな？それにだ・・・一番ジジと一緒に生活する！」

2番凄腕の殺し屋に命を狙われる！さてどっちが危険だと思う？」

サービス問題だぞ！さあみんなで考えよう！

チツクタ

「1番」

「1番だね？」

「いち〜！」

お早い解答で・・・流石はサービス問題だな！

「はい正解！それに比べりゃあ命を狙われるくれえは問題ねえってこった！それにそっちのほうが生活にハリが出るってもんですよ？」

多少は物騒だがな！それにヤミンことは気にいったし

「やっぱりマサナリは変わっていますね？」

「変人ですから！」

「変人だもんな？」

「マサさん変人だもんね？」

「マサは変人！」

わぁーい！全員（俺含む）からの太鼓判だぜい！

でその後は

「はい！マサさんと遊ぼうのコーナー再びですー！」

ゲーム機セーッと！いざ尋常に勝負！ヤミ！

「コレは何ですか？」

フツ・・・やはり知らないようだな！勝機！

「ゲーム機だ！ヤミよコレで勝負！」

「別に構いませんがやり方がわかりません」

ふむ・・・

「美柑教えてやってくれい！」

ヤミのサポートに美柑を付けました！

「えっと・・・まずはコントローラーこう持って、それで画面のキャラクターを・・・」

「ふむふむ・・・なるほど理解しました、それでは始めましょう」

中々に物覚えがよさそうだなヤミよ！しかし所詮は初心者よ！

で俺VSヤミのゲーム対決が始まりました、ここからは徐々に音声中心にお送りします。

「フハハハ！甘い甘いぞヤミっ子オオ！」

「今のは卑怯です！」

「卑怯じゃありません〜戦略ですう」

「クツ・・・ならば！」

「あつ！テメそつちこそ汚ねえぞ！」

「汚くなどありません戦略です」

と一進一退の戦いを繰り広げた結果・・・

「ちい・・・引き分けか・・・」

「いえ今のはどちらかというと私の方が優性でしょう」

このヤミっ子は折角マサさんが大人な対応したつつつのに！そつちがそうくるなら

「いやいやアレだよね？ヤミさん？今のアレだよね？完全に俺が押ししてたじゃん？」

でも優しいマサさんはあえて引き分けて事にしたんだぜ？そこから辺のことがわかってねえよな？」

負けてられるか！

「いえ今のは最後で後数秒あれば私の勝ちでした、そこから考えても私の勝ちでしょう」

負けず嫌いめ！だがな！俺も負けず嫌いなんだよ！



「俺だ！」

「私ですね」

お互い譲らずに一進一退の攻防の結果

「それじゃ私と勝負しよ？」

とララ大魔神が現れて

「次は勝とうな・・・」

「ええ・・・そうですね・・・」

二人揃って凹にされました。

でリトには

「どっちもどっちだよな？」

とか言われたので

「ヤミ？俺右な？」

「では私は左を」

とダブル腕ひしぎの刑に処しました！

「イダダダダ！ギブギブ！」

で兄の悲惨な姿を眺めてた美柑には

「仲良しだね？二人とも？それに可愛い」

とか言われました、可愛いのは美柑とララとヤミです！

つつかリトを助けねえんでござえますか？

ん？そっぴや俺ってコッチに来てから勝つことは疎か引き分け初めてなのでは？

いやいや！違うから俺もヤミもそこそこ強いよ？ホントだから！  
いやまあヤミは初心者だったけど！でも強いから！

マジだから！信じれ！

・  
・  
・  
・

後もうちよい続きます！

とまたもや電波キャッチしつつも、その後は

「ヤミさんヤミさん！ちょっと手伝って欲しいことが」

「あっヤミちゃんにも手伝ってもらったの？じゃっぴいこヤミちゃん！」

と美柑とララがヤミを連れて部屋へと向かいなされた、まだやっ  
てたんだな・・・

で俺とリトは

「しばらく二階には上がらないほうがよさそうだな」

「うむ！あつなら携帯買に行くん付き合ってくんね？」

「いいぞ？あつと・・・ついでになんかDVDでも借りてみようかな？」

携帯シャップへGOでござる！リトはついでにDVDも借りるみたいだな！俺もなんかカンフー映画借りよ！後食材とミ◯ミ◯も買うとしますかい！

と結城家を出たのであります。

アン？何度も言ってるだる赤信号は渡っちゃダメ！

・  
・  
・  
・

ヤミ視点

美柑とプリンセスに手伝いを頼まれた私は美柑の部屋の前まで来ています

しかし何でしょうこうこの部屋に入ってしまったては後戻りが出来なくなってしまうという予感がします

いえ大丈夫です、私は宇宙でも屈指の殺し屋、金色の闇、このくらいでは怯みません

『ガチャ』

「ヤミさんコレ見て？」

むっ？なんでしょうが写真？

こっコレは！

「まさに戦士の体ですね・・・流石はマサナリです、私を追い込むだけのことはあります」

む？なんですか？アレは戦いではないと？素人にはそう見えますが一流の殺し屋から見ればわかります

「ねえヤミちゃん？コレ欲しい？欲しい？」

プリンセス？欲しいかですか・・・

「欲しいです！」

むっ？なんですか？えっちいのは嫌いではなかったのかと？

いえ違います、コレはそういうものではありません、調査です！敵を知るのもまた一流の条件です

「ヤミさんわかってるね！それじゃえっと・・・」

ソレからの時間は美柑とプリンセスと三人でマサナリの写真の整理などをして過ごしました

とても有意義な時間でした・・・やはりこの家に来たのは正解でしたね

むっ？いえ違います！あくまで私はマサナリを倒すためにこの家に来たのです

決して決つして、食事が美味しくてよかったとか、この写真が手に入ってよかったなどは考えていませんので勘違いされないようお願いします。

マサ視点

「なんだろう？ヤミっ子が手遅れになった気がする」

「マサもか？俺もそんな気がした」

携帯シャップに向かう道中、フとそんな気がしました、リトも感じたようでごぜます

まあ何となく俺もリトもわかってんですけどね、口には出しませんが・・・

だって辛いから！いろんな意味で辛いから！

そんな辛さを振り切つて俺達は携帯シャップへと足を踏み入れたのだ！

で

「ありがとうございます」

アツサリ購入！別段変わったことなどありません！あつと、契約とかそういう突っ込んだことは聞かんといて！

大人のマナーだ！大人じゃない人もできればお願いします、マサさんからのお願い！

ちなみに機種は頑丈さ優先で選びました！結構暴れるんでな！

まあ後で改造してさらにガツチガチにしたるけどな！違法？知らんがなスルーしといて！

「それじゃ次はレンタルショップ行くか？」

むっ？脳内コチャコチャしてたらリトがそう言ってきました

でレンタルビデオショップに！

俺は言ってた通りにカンフー映画を借りました！

リトもアクション計画を借りとつたな！中々イイチョイスだ！

で最後に食材とミ〇ミ〇を買いにスーパーへ！

とその途中で再びザステインと遭遇！なんかザステイン慌てた様子で

「マサナリ様！ご無事でしたか！あつコレは結城殿、お久しぶりで

す

「無事も無事だが？つうか何でそんなに慌ててんだ？」

とりあえずそう聞いたところザステイン

「私が入れた情報によりますと、マサナリ様を狙っているのは宇宙でも屈指の殺し屋、かの金色の闇というではありませんか！」

なるほどね？

「有名なんだなヤミの奴って？」

「みたいね？結構いい奴だと思っけどな？」

慌てザステインに対して俺達は結構冷えた反応です、ザステインには悪いんですが知ってるしね！

「マサナリ様？何故そんなに冷静なのですか？」

ふむ、ザステインにも言っとくか

「カクカクシカジカつつうわけで今日から一緒に暮らすことになったのだよザステイン君、わあったかな？」

と説明！したらザステイン

「なっ！いけません！そんな危険な人物をうんぬんかんぬん・・・」

むっ！やっぱそうなるか？ザステイン堅えもんな、しかしここは

ノリと勢いだ！

「馬鹿者オオオ！」

『ズバアン！』

「グハアアア」

ライトフック！！加減はした！！

「おいマサ？いかなり何を？」

「そうですマサナリ様！」

フツ・・・

「ヤミは確か殺し屋かもしれんがな！殺し屋と仲良くしてはイカンと誰が決めた！」

少なくとも俺の辞書にはなあい！

「しっしかし狙われているのはマサナリ様では・・・」

くどい！

「そんなくらいん事くらい飲み込めんで何が漢だ！つうかヤミっ子自身は悪い奴じゃねえんだ！んな事くれえで一々目くじら立てんな！」

前半建前、後本音です、まあ建前も半分くれえは本音ですがね？



「ハッ！なんたるなんたる器！このザステインまたも学ばさせてもらいました！」

コイツもノリがクラスメイツ（男子）特にA&Bに近いもんがあるよな？

「俺の回りこんなやつばかりかよ・・・」

コラ、リトそんなこと言わない！つと今はザステインだな

「うむ！ではザステイン君、ヤミのことは任せてくれたまえ、じゃ俺あ食材買いに行く途中だったか？じゃな？行くべリト！」

「ん、ああじゃあなザステイン」

とそう言い残してスーパーに向かいます！なんか背後で

「やはりあの方こそララ様に相応しい！このザステイン感服いたしました」

とか言いながらザステイン君が頭を下げつづけていたがな！

頑張れザステイン！負けるなザステイン！面白いから！

・  
・  
・

「はいただきます！」

「ただいまっ」と

あの後には特に何もなく、買い物終了、帰宅の流れです！

「あっおかえり晩ご飯の材料買ってきたんだ？」

「どうやらアレの整理は終わったみたいね？美柑が出迎えです」

「まあな！晩メシも気合い入れていきましよう！リト風呂よろこ」

「すっかりリトは風呂当番に認定！」

「ああわかった！じゃあ準備してくるから」

「うむうむ！リト君素直ですな！」

「あつ！今はちよつとマズイかも？」

「なんか美柑がヤバって顔なさつとります、けど微妙に口元が笑ってますが？」

「ふむ察するに」

「ララかヤミが入ってるのか？」

「マサさん当たり！今は・・・」

『ガシヤア！』

「結城リト許しません！」

「ちょ！わざとじゃないわざとじゃないんだ！」

「どつちやらヤミっ子だったようですな、つつか電源落ちんのな？やっぱヤミが子供体型だか・・・」

『シユバ！』

『ガキン！』

「マサナリ！不穏な気配を感じました！」

「あらま鋭いね？つつか」

「服着ねえの？」

「ツーーーーー！！えっちいのは嫌いです！」

『ズバババ！』

『ガキンガキンガキン！』

「アレ？今のつて俺が悪いの？俺のせいじゃなくね？いやどつちだ？」

「たっ・・・助かった・・・」

「ヤミの怒りの矛先が俺に向かったことでリトは助かりましたとさ」

「ヤミさん・・・仲良くなれそう・・・」

「そして何故かヤミに対して親近感を持った美柑でありました」

「えっちいのは嫌いです!！」

だったらよ服着れつつの!

第十六話つばい感じ！（後書き）

後書き

これはひどい・・・けど一生懸命な結果です、あつ石は！

コレからもこんな感じでグツチャグチャになりますが一よろしければまた見てやって下さい。

感想などありましたら是非！

## 番外っばい感じ！その2（前書き）

前書き

またまたやつちやいました！つい思い浮かんでしまいました・・・

またもや音声と擬音中心でお送りしますがどうか温い目で見てあげて下さい。

## 番外っぽい感じ！その2

くもしもエヴァ世界だったら

その1

『キキイー！』

「シンジ君！それとそっちのキミも乗って！」

「いやぶっちゃけ走った方が早えんで俺は遠慮しまあす！シンジは？」

「えっと僕はマサさんについていきます」

「うむ！ならばシンジを右手に！ッ！」

「ちよつと何を言っつて！ッ！」

『ガシヤア！』

「おお危なかったでござえますな？んじゃこのまま俺が走りまあす！ナビよろ〜」

「へ？はっ？ちよつと！」

「今！疾風かせとなれ！」

『ズダダダダ！』

「うわ！ちょはや！嘘でしょオオオ〜」

ミサト驚愕のスピードです！ひそかにシンジはブラックアウトしてたりします

・  
・  
・  
・

その2

『カツ！』

「なっコッコレは・・・」

「おお！カックイイ！けど俺的はもっとゴツイ感じのが好きなんだが、その辺どうにかならんのか？」

「いちゃもんつけるな！」

「いやすんません！ついつい！っておよっ」

『カツカツカツ』

「シンジこれに乗れ！」

「とっ・・・父さん！」

「司令！」



「えっシンジの親父？うわキツ！アイタタタ！うわキツツいなコレ？えっ何？司令だからグラサンつけてんの？うわぁ・・・意識した感じ？アイタタタ・・・」

「父さん・・・」

「司令・・・」

「なっ！違う違うぞ！そんな目で見るなアアア！」

ゲンドウさんマサの洗礼を受けました、そしてこの時を境にゲンドウの求心力が低下していきます、ちなみにマサあんまりエヴァ知識ありません！

・  
・  
・

その3

『ガラッ！ドシャア』

「ふひゆう〜大丈夫？」

「アナタは？」

「ん俺？鬼島 政成、マサって呼んでくれや？つとユーは暫く休んでなさいな？こういう荒事はマサさんの担当ですよい？」

「マサ・・・スウ・・・スウ・・・」

「うむ！ゆっくり休みねい！つとじゃあチラつとあのデカブツ、ブツ飛ばしてくらあ！」

「マサさん！待って下さい！僕が・・・僕が行きます！」

「およ？シンジ？ふむ・・・んじゃシンジはあのロボットできなさいな！俺あ先に行って軽くナデでといてやつから！」

「ちよつと待ちなさい！今外に出たら危険よ！」

『ニカツ！』

「危険は好物なもんで？じゃその女の子んことよろ〜」

『シュバ！』

「ここでもNINJAしました！」

・  
・  
・  
・  
その4

「オラアアア！どうしたデカブツウウ！」

『ズドズガンズドン！』

「嘘・・・でしょ・・・使徒を相手に素手で・・・」

「オラオラオラ！泣いちゃいますか？泣いて謝っちゃいますかアア

ア!？」

『ズガンズドンギヤドン!』

「……ガギャガガガガ!」

『ズドオーン!』

「使徒……消滅しました……」

「俺!勝~~~~利!っあ!しもたシンジ……」

「僕……出番ありませんでした……」

マサにA・Tフィールドは効きません、心の壁?知らんがな!と  
いった感じでブチ抜きます、まあA・Tフィールドがちゃんと発動  
しててもブチ抜きますが

そして出番無しとなったシンジがっかりです……

・  
・  
・

その5

「アナタ、いったい何者よ?」

「鬼島 政成だつつつの!でもしいう言っならバグキャラ?」

「バグって……でもピッタリだわ……」

「でがしょ？つとシンジ！いやぁ悪いな出番取っちゃった！いや思ってたよかあのデカブツ、シヨボかったもんで？」

「どれだけ無茶苦茶なんですかマサさんは・・・」

「フツ・・・俺もまだまだですけどね？つとそだ！シンジ！出番は取っちゃまったけどよ・・・オマエが自分が行くつつった時はカッコ良かったぜい！」

「えっあつ・・・ありがとうございます」

「あっ！敬語はやめれ？苦手でござる！」

「えっあつ・・・は・・・うん！わかった！」

「うむうむ！」

「ハアゝなんか問い詰める気も失せるわね？」

なんかシンジにフラグが立ったような危険な匂いがしますが全力で無視して下さい！

書いてる人のお願い！

そしてミサトさん、そんな二人を見て気が抜けました

・  
・  
・  
・

その6

「鬼島君って言ったわね？私は赤木 リツコあのロボットの開発者よ・・・まあ今回は無駄に終わったけど・・・」

「いやすみませんハツスルしすぎもうした！あっ後、マサでいいッスよ・・・それと・・・ちと言いくいんスけど・・・」

「ん？何かしら？」

「えと眉毛染まってねえッスよ？」

「解剖するわよ！」

リツコとの出会いと会話でした、ちょっと遅めの登場です、そしてやはりマサを解剖したがります

・  
・  
・  
・

その7

『ウイーン』

「よっ！ケガは大丈夫か？」

「アナタはマサ？」

「そそ！でユーは？レイでよかったか？」

「ええ・・・あっ使徒は？」

「うむーぼてくりこかしたぞっ」

「ぼてくりっ？」

「ああ〜〜ようするにブッ飛ばしたってこったー！」

「そう・・・エヴァアで？」

「うんにゃ、グーで！」

「そう・・・グーー!!」

「うむグーー!こつやって!」

『ヒュボツ!!』

「・・・・・・・・ッ!.....!!」

余りの理不尽っぷりに流石のレイさんもあんどぐりです

・  
・  
・  
・  
その8

「エヴァ無号機!発進!」

「すんませ〜ん!ミサツさ〜ん、無号機ってコレ、アレなんだけど  
ただ俺ん服ガクランの背中に無って貼ってるだけなんスけど？」

しかも縫い付けじゃなくて両面で貼っつけてるだけなんすけど？」

「だから『無』号機なんじゃない？」

「おお！上手なこと言いますな！流石はミサツさん！それなら納得でござるー！」

「だあしよ〜う？じゃ頑張つてねえ〜」

「あいあ〜い！あつ今日は中華の予定なんで！」

「おっ！ビールが進みそ〜じゃちゃっちやと倒してね〜？」

『シャバ！』

「ノリ軽すぎだよマサさん・・・」

「でもそれがマサだから・・・」

「ミサト？私もお邪魔してもいいかしら？」

「リツコ？ええいいわよ？マサの料理美味しいわよ〜」

『ギヤドオオンー！』

「使徒消滅しました！」

「はいお疲れ〜！しっかし以外と両面強えな？ガツチリついてんじやんー！」

「使徒を倒した後の感想が両面（ツヤメン）の考察って・・・」

「それがマサだから・・・」

もはやネルフは緩ってるい感じになってます、シリアス？えっ？おいしいの？みたいなの？

そしてマサ、エヴァ無号機になりました！けど生身です！

その9

「アンタがマサナリね！私は二号機のパイロットのアスカよ！」

「うむ！アスカな！俺は知ってる通り無号機のパイロットをしてる鬼島 政成でござる！マサでいいぜい！」

「無号機のパイロットって・・・アンタ生身でやってんじゃないの！どこのあたりがパイロットよオオオ！」

「むっ！こっこれは！ナイスツツコミだ！

やったぞ！とうとうツツコミらしいツツコミゲットだ！」

「誰がツツコミだアアア！」

アスカです！完全にツツコミ役となりますエヴァ編は以上です。



くもしもF a t a世界だったらす

その1

「アンタが私のサーヴァント？クラスは？」

「ん？俺か俺は復讐者アヴェンジャーのサーヴァントだ！いやでもなあ実際さあ？  
復讐つってもなあアレだよ？」

ジジイにケンカで勝ちたいだけだからなあコレ大丈夫なのか？こんな軽い感じのアレで復讐者アヴェンジャーって？そこんとこどうよ？」

「いきなりグチ！それにイレギュラークラス？ああもうセイバーが来るはずだったのに！」

「いやそんな俺に言われてもアレだろ？マジ困るんですけど？  
あつ後、クラスは復讐者アヴェンジャーってなってるけど真名だっけ？は鬼島  
政成な？マサって呼んでくれや？」

アヴェンジャー  
いや復讐者アヴェンジャーって一々、ウに濁点つけるのタルイから」

「そんな理由であつさり真名を教える普通！！いや私マスターだけ  
ど！もつとこうなんかあるでしょ！なんかこうほら！私が聞いて  
アンタが一度拒否って、だけど紆余曲折あつてみたいな！！」

「そんなこと言われててもなあ、アレだぞ俺は打ち合わせもリハも  
してねえでいきなりドン！俺参上だぞ？」

無理無理無理！普通はなんか事前情報とか入るらしいけどなんか担当は休みだったみてえで、いきなり、代わりん人があつ！アミキミ復讐者だから！だぞ？エンジャー

マジ困るわああ」

「何よそれ！雑誌かなんかの編集かアアア！何でこんな奴が私のサーヴァントなのよオオ！ああアア最悪だわ！私の聖杯戦争がたった今、終結したわ！」

こんな感じの始まりになります、あつ後、マサは生きてます生身です、服装はガ克蘭！

・  
・  
・  
・  
その2

「ブルーレンジャー！」

「誰がブルーレンジャーだ！ランサーだ俺は！」

「いや悪いこう思いの他、青かったから？でブルーランサー、で何すんの？喧嘩？」

「混ぜるなアアア！」

『ガキンガキンガキンガキン』

「全く最近の若い者んは短期でいけねえでござえますな？」

「何でアンタはアレだけの攻撃受けて、平然とグチってんのよ!!」

「バグだからね!カッチカチやぞ!」

「理不尽だアアア!」

マサ思いの堅いです!ランサー涙目、稟は驚愕!

・  
・  
・  
・

その3

「!!」

『ズガアーン』

「コラ!街中でそんなものを振り回しちゃダメでしょ!!全く図体ばっかり大きくなって!」

母さんね!また隣の奥さんに笑われたんだよ!もう母さんホント恥ずかしくて表歩けない!」

「(母さんゴメンよオオオ)」

「凄いな遠坂のサーヴァント、バーサーカーが土下座して謝ってるぞ」

「ええまさかこのような結末になるとは思いませんでした」

「は……恥ずかしいのは私の方よオオオ！」

マサVSバーサーカー、何故かこんな事に……あと黒四角が  
出  
ま  
せ  
ん

その4

『タタタタッ』

「はあ……はあ……はあ……なっなんだよアレは……」

「ハッハッハ綾子いきみだな！ほら早く逃げないと死んじゃうぜ  
？」

「クツ……慎二！」

「おお怖い怖い！ライダーいけ」

『ヒュッ！』

「ッ！！」

『ガキン！』

「えっ……」

「呼ばれてねえけど俺参上つと！大丈夫？」

「あつアンタは・・・確か遠坂といた？」

「うむ！俺は鬼島 政成な！マサって呼んでやってくれ！」

「マサ？」

「そそ！つと服ビリビリでまいっちな感じがになってるけど着る？」

「えっ・・・きつきゃああ！はっ早く貸してくれ！」

「あいよ！ほれ！」

『バツ！』

「あつありがとう！」

「お気になさらず！」

「オマエ！いきなりなんだ！邪魔するな！」

「あつ！忘れてたつつか普通は邪魔すんだろ？性犯罪者め！」

「誰が性犯罪者だ！」

「どう見てもオマエ！な？」

「確かに！」

「クツ！コノいけライダー！！！」

『ヒュバ！シャリン』

『ガキンガキンガキン！』

「あれま！えっ何？オマエが来ないの？つつか目隠しされてんぞ？ライダーさんとやら？どれ！」

『バツ！』

「おっ！なんだ普通に目開いてんじゃん！はい目の検査で〜す！コレは何本？」

「えっ？何故石にならずに？」

「いや知らんがな！ってコレは何本！」

「アノ！えと・・・2本です」

「はい正解！なでなでしてやるっ！」

「えっあっ・・・」

「なっ何やってるんだライダー！早くそいつを殺」

「つつせえですよ性犯罪者！」

『ドロン！』

「ぎゃっ！」

『ドサ』

「ん？何コレ本？」

「その本は所有しているアナタが今は私のマスターです」

「えっ？ああライダーってサーヴァントなん？んじゃコレからよろ  
く！」

「ええよろしくお願いします」

「っとそういや、そのえっと名前なんだっけ？」

「綾子でいいよ・・・マサ助かったよ・・・でもそいつ大丈夫なの  
かよ？それにサーヴァントって何なんだ」

「うん？ライダーか大丈夫じゃね？目え見たけど結構可愛い目して  
たぞ？サーヴァントってのはカクシカジカってわけだ！」

「はあ・・・ってそんなこと私に教えてよかったのか？いや確かに  
聞いたの私だけど！」

「さあ？いんじゃね？アレでもヤベエかもどつちだ？まっとりあえ  
ずは俺についてきてちょ！専門家の指示を扇ごう！んじゃ行くベラ  
イダー！綾子！」

「ああって慎二はどうすんだ？」

「あっ！忘れてたな・・・よし性犯罪者に相応しい刑を執行しよう！パンツ一丁にして逆さ吊りだ！」

「妥当だな！」

『ブーラブラー！』

「コレでよし！ってさっきからライダー黙ってっけどどうしたん？」

「可愛い・・・私が・・・しかも目が・・・でも・・・いえ・・・しかし・・・可愛い・・・ああ慎二と手を切つてよかった・・・最高のマスターと出会いました・・・」

「・・・行くべ？綾子！ライダーもついてきてね？」

「あっああ・・・」

「はいどこまでも！..！」

気付いたらライダーが落ちました！なんたるご都合主義！

・  
・  
・  
・

終わりです！



## 番外っぽい感じ！その2（後書き）

後書き

もはや原作の名前とキャラを使った悪ふざけでした

ホントすみませんでした！

つい・・・こう思い浮かんでしまい・・・大丈夫でしょうか？  
コレ？ヤバイ気がします・・・今度こそ！

えと次回は本編となります・・・

第十七話っぱい感じ！（前書き）

前書き

さて今回もアレがアレでキャラ崩壊です！  
今回は胃薬を持っておすすめみ下さい。

## 第十七話つばい感じ！

『ヒュババババ！』

「すうばあらしい朝がきた 刃物が迫るうう 斬撃を避けなあがら  
それ1・2・3」

はいどうも！今日は朝つばらからヤミっ子の攻撃を受けておりま  
あす！

つつか避けております！ルールは簡単死んだら負けよ？ってな！  
後は自分が書いた円の中から出ないことね！

「クツ・・・頑丈なだけではないとは」

「まったまには避けることもしないとな！」

以外と避ける技能もありますねん！まっジジイとのケンカの賜物  
ですな！

ん？ぼちぼち朝メシ作る時間やね？

「はい終了！朝メシ作るんで今日は終わりな？」

「仕方ありませんね、そこまでいうのなら引きましょう」

負けず嫌いめ！

ちなみに今日もララと美柑が潜り込んでました、更には何故かヤ

ミっ子も

なんでやねん！まあやっぱ子供だから・・・

『シユバツ！』

『ガキン！』

「不穏な気配を感じました」

いやなんでよ？子供扱いが嫌いなんか？

まっいいさね

「んっん〜おはようマサさん、ヤミさん」

美柑も起きたこったし朝メシと弁当作りましょうかねえ

・  
・  
・  
・

はい終わり！

朝メシタ〜イム！うまうま！つとそだ

「ヤミっ子、俺ら学校だけどその間はどうすんだ？一応、ヤミの分の弁当はあっけど？」

今日は学校なのだ！

「マサナリについていきますが？」

あそ？学校までついてくんの？

「ヤミちゃんも学校通うの？」

「いえ通うわけではありませんがマサナリについていくだけです」

それじゃ完全に部外者ですがな？けどあん学校なら以外と大丈夫  
そっだよな？保健さんとこに預けるか？

うむそうしよ！

「じゃ俺らが授業の間は保健さんここで待ってなさいな、保健さん  
なら許してくれんべ？」

「保健さん……ですか？」

むっ？小首を傾げるな！可愛いだろう！撫でるぞ！

「何故、頭を？」

「可愛いからだ！！」

その後、ララと美柑も撫でました！

「とうかヤミが学校に行くこと自体には疑問を持つやつはいない  
んだな？」

・  
リトが持ってんだったらいんじゃないね？

・  
・  
・  
はい学校到着！

「ヤミっ子、ついてきんさい、リトララは先ん行っててくれや」

で早速、ヤミを保健さんのところにご案内

「わかりました」

「うん！わかったマサ教室でね！」

「ああ」

うむ！じゃ保健さんとこに行きますか

〈移動中〉

『ガラッ！』

「すんませ〜ん！保健さあん！ちいとばかり頼みがあんすけど？」

久々の表現を使いつつ中へと入ります、ん？そっぴや朝一から居るもんなのか？まっ細けえこたあいいやね

「あら？ガクラン君？頼みって何かしら？解剖？」

そんな頼みをするためにわざわざ来ねえっつの！どんだけ解剖したいの？

「NO解剖で！頼みつつのは授業ん間コイツを預かってもらえんかなあと？ほれヤミ？」

とりあえず解剖拒否しつつ、ヤミっ子の中についておよ？

「・・・ドクター・・・ミカド？」

知り合い？知り合いなん？

「あら？アナタは・・・金色の闇・・・だったかしら？」

やっぱ知り合いなんだ？つてこたあ

「保健さんも大宇宙からお越しなんスか？」

「ええ、そうよ？ほら？」

むっ？微妙に耳がとがつとるな？やっぱ宇宙人だったんか、そう言われてみりゃあなんかそんな設定もあったような、なかったような・・・まっいいいさね！

「んじゃ話しは早いつて事でヤミンことを預かってくださいな？」

再び頼みまする！したら保健さん、結構以外な顔で

「驚かないの？つまらないわねえ、まっいいわよ？そのかわり・・・  
コーヒー入れてね？」

ですとー！ういっ！そんならお安いごようつてね？

「ヤミも飲むだろ？」

「ええいただきます」

うむ！じゃ三人分ですな！バリスタ・マサ！えと・・・何度目だっけか？まっいいや

で朝のコーヒータイム！

「相変わらず美味しいわね？」

「そいつぁどうも！ヤミは？」

「苦いです・・・」

だったら無理してブラックにすんなっつもの！自分からブラックが  
いいっつたくせに、しゃあねえですな！

「そあ〜い！」

砂糖やらミルクやらを加えました！入れる側としちゃあ美味しく  
飲んでもらいたいですよ

「むっ・・・マサナリ何をするんですか？」

オマエが苦いって言うからでしょ！まっここは機転をきかせて

「手が滑った！すまんヤミっ子？」



つつときます、したらヤミ

「それなら仕方がないですね・・・仕方がないのでこのまま飲みます」

だとよ、負けず嫌いめ！つつか微妙に口元が緩んどるがな！

「フフ・・・仲がいいわね？」

でがしょ？まつ保健さんとも仲が良いつもりでござるがな！

「そんなことはありません」

それはヒドイぞヤミっ子！しかしマサさんはその程度ではめげんけどね！

「そういえばガ克蘭君は、ヤミさん・・・あっヤミさんて呼ばせてもらっわよ？」

「かまいません」

「ヤミさんとはどういう知り合いなのかしら？」

ふむ・・・どういう知り合いっつわれたらアレだな

「ダチ？」

うむ！やっぱダチですよな！

「マサナリは私の依頼のターゲットです、まあ元ですが、今は個人

的に狙っています」

ヤミさん冷たいぞ！チクソウ・・・

「？宇宙でも屈指の殺し屋に狙われるってガ克蘭君何したの？ララさんが関係してるのかしら？」

む？何したつわれても特には何もしとらんのですけど、つうか保健さん

「ラランこと知っとりました？」

「ええ知ってるわよ？デビルーク星のお姫様でしょ？」

やっぱり知ってたんだ？なら大丈夫だな

「えとカクカクシカジカつつわけです」

昨日の出来事を説明いたしました！したら保健さんとヤミに

「やっぱり変わってるわねガ克蘭君？解剖されない？」

「確かにマサナリは変わっています」

つわれました！変わってるのは認めますが

「解剖はNO！」

ダメ解剖！

『キーンコンカーンコン』

おつ予鈴でござるな！正直一時限目はサボりてえが、唯が怖いので一応行きますか

「じゃ俺あ教室に行きますわ！保健さんヤミンことよろ〜！」

と声をかけて教室へ、したら保健室を出る直前に保健さんに

「そついえば用務員さんに会ったんだけど、用務員さんが休み時間の時にでも顔を出してくれって言ってたわよ？」

と教えてくれました

「ういーす！じゃまた〜！暇を見つけたら来るからなヤミンっ子？」

『ガラッ！』

・  
・  
・  
・  
『ガラッ！』

「はいおはようさん！今日も元気が諸君？」

アン？普通だと？特にネタがなかったのだ！そう毎度毎度、出てくるかい！

「何か下らないことを考えてるわね？」

むっ？下らないとか言うなや唯さんや？ある意味、死活問題なんだぞ？つつか

「朝はおはようだ唯！常識だぞ？」

「ムグツ・・・おっ・・・おはよう・・・マサ君・・・まっまさかマサ君に常識を説かれるなんて・・・」

フツ・・・勝った！けどなんか虚しい・・・

でその後は何故かクラスメイツ全員が血相変えて

「おはようマサ君！」

「おはようマサマサ！」

「マサおはよう！」

とアイサツしてくれました・・・そんなに俺に常識説かれんのがイヤかい・・・ちよっぴり心の汗が出そうになりました

けど負けない！俺は強い子だから！

つとあっさり気持ちを切り替えつつ、リトララの二人にヤミのこ  
とを報告

「ヤミちゃん大丈夫だったんだね？よかったね？」

フツ・・・ララはいい奴どすなあ？ナイススマイルだ！なぐでな  
でしといた！

まありトは

「やっぱりウチの学校って・・・」

とかなってたがな！つうか今さらだろうに？トップからしてアレだぞ？

ナンバー2もアレ？みたいな感じだしな！けどナンバー2の方は結構頼りになります！（便利キヤラの意味で！by書いてる人）

ん？また微妙な電波を？何時ものことさね！流石に慣れたわい！

『キンコーンカーンコン』

おっと授業開始です！

・  
・  
・  
・

『キンコーンカーンコン！』

そして授業終了！唯に頭叩かれまくった以外は取り立てて言うこととはねえでございます！

っとそだった！

「ララ、唯、俺あちよくら用務んおっちゃんに呼ばれてっから、多分仕事だから次ん授業はいない可能性が高いんで、そこんところよろしくー」

隣のララと後ろの唯（委員長的な意味も含めて）にその声をかけ  
とききました、

「うん！わかった頑張ってねマサ！」

ララはこんな感じで

「仕事が終わったらす・ぐ・に、戻ってきなさいよ？」

唯はこんな感じ、そんな二人に俺は

「おうララ！頑張りますわい！そして唯・・・前向きに検討いたし  
ます！では！」

『ガラッ！』

そう言い残して教室を出たでござる、微妙に教室で唯がなんか怒  
ってたが全力で気にしないことにした！

今を生きる！

「愛！あ〇たと二〇〇　夢！あな〇と〇人　ふうた〇のた〇〇世  
〇はあ〇の〇と」

鼻歌歌いつつスタッラスツタラ歩きます、つうかアレだな？伏せ  
〇が多いな・・・けど怖いしな、色々と！

けどわかる人にはきつとわかるはず！そうだろ？みんな！

つとコチャコチャ考えてる間にも用務員室到着です！

『ガラッ！』

「おっちゃん！きたぞ！」

「おう！悪いなマサ坊！早速なんだが手伝ってくれや！」

「あいよー！」

やっぱり仕事でござりました！つとそだ！

「おっちゃん！もう一人知り合い呼んでいいか？多分ヒマしてんだろ？からさ、給料は俺んやつから半分に割るって感じでいいからさ？」

との俺の突然の頼みにおっちゃんはあっさりと

「おう！呼んでこい呼んでこい！人手はあるにこしたこたあないわ、ケチくさいこた言わん、マサ坊たあ別に給料出すわい」

だとさ！

「おっちゃん話せるう！じゃ連れてくるわ！」

いやホント気持ちのいいお人だわ！

で早速、俺はヒマしててであろう奴の所へ！ええそうです、みなさんもお分かりの通りに

『ガラッ！』

「ヤミっ子！用務ん仕事手伝え！ヒマしてんべ？」

そうヤミでした！

「用務の手伝いですか？何故？」

むっ？何故とな？ふむ・・・

「手伝ったら給料が出るからだ！給料出たらタイヤキも○○○○も買えるぞ？」

軽く釣ってみます！したらヤミっ子

「しかし・・・私は一流の殺し屋です・・・そのような仕事は・・・」

とか言って微妙に渋りやがりました、むっ仕方あるまい

「手伝ったあかつきにはマサさん特製のタイヤキもついてきますが？」

そっち系の菓子は自信があるぞ！コレに関しては美柑にも負けん！洋菓子は負けるがな！

さあどうだ！

「一流として色々な仕事を経験しておくのも必要ですね・・・わかりました手伝いましょう」



フイーッシュ!

「あら私も手伝おうかしら?」

二匹目が来たあ! って保健さんや

「後でホットケーキ作ったげるからガマンして!」

「仕方ないわね」

何が仕方ないねん! ちっさくガッツしてんの見えとるよ?

ってヤミ?

「ドクター・ミカドだけずるいです」

めっ……めんどくせえ〜! ああもう

「わあっ! ヤミにも作ったげるから! タイヤキとは別で!」

「そこまでいうのであれば……では行きましょう」

なんで上から目線やねん!

まっまあいさね……とりあえずは労働力ゲット!

けどアレだよな? 寧ろ俺の手間が増えたような……いや気にすんな! 気にしたら負けだ!

「何をしてるんですかマサナリ? 早く行きましょう」

「あいよー！」

「行ってらっしゅーい」

保健さんに見送られつつ臨時用務の仕事へと向かいました

後、何故かヤミが先頭でありました、どんだけやる気出してんのヤミっ子！

・  
・  
・  
・

「お疲れマサ坊！ヤミ嬢！ほれ日当！」

仕事が終わり、おっちゃんに日当を貰いました！今回も万券！

「サンキューおっちゃん！」

「マサナリ、早くホットケーキとやらを作ってください」

ヤミっ子め！

「ちゃんとおっちゃんに礼を言わんかい！」

『グイッ！』

無理矢理、頭を下げさしました！

「痛いです・・・」

「違うだろ！あ・り・が・と・う！だ！」

昨日も言ったでしょうに！この子はホントに！そんなヤミの事を  
おっちゃんは

「ガハハ！いいってことよマサ坊、ほれヤミ嬢にホットケーキを作  
ってやんだろ？はやく作ってやんな！」

つつて笑って許してくれました、いやホントどこまでも気持ちの  
いいお人だわ！おっちゃんカツケエわ！

「おっちゃん悪い！じゃまた呼んでくれよ？」

そんなおっちゃんに頭を下げつつ、ヤミを小わきに抱えて、保健  
さん所に、まあヤミも最後に

「ありがとうございます」

つつて礼を言ってた、とりあえず撫でといた、まあヤミは

「何故ですか？」

とかわかってない様子だったので

「ちゃんとお礼を言ったからだ、次からは言われる前にするように  
な？」

つつといた

「おう！授業ん方は俺から言っとくからな」

助かりますわい！アレ？でも、前ん時は唯にバレてたような・・・  
まっ大丈夫やる？

あっ、今さらだけど既に二時限目の授業は始まつとります

今さらですね！

「マサナリ下ろしてください自分で歩けます」

おう！そっいや今だにヤミを小わきにしとつたな

「ほらよ」

ヤミを下ろしました、でスツタラスツタラ

『ガラッ！』

「お疲れです！」

保健さんここに到着！したら保健さん、既に材料やらなんやらを  
きっちり揃えてお出迎え、しかも結構多めに！

「お疲れガクラン君、待ってたわよ、さっ！よろしく！」

素敵な笑顔をしてからに、まあ可愛いのでよしとしよう！

「マサナリ、早くして下さい」

ヤミっ子め！でも目がなんか輝いていて可愛いので許します！

では作りますかね？

『ジュージュー』

はい完成！サクツと盛りつけ！ちなみに二人前づつあります！

前回の経験をいかしたのだ！

「ほい保健さん！ヤミっ子も！」

「フフ・・・やっぱり美味しそうね？」

「ええまあそうですね」

そいつあよござんした、っとじゃ食いますかね！

「はいいただきます！うむ！今回も中々のデキ！」

一口パクリ！保健さんもヤミも

「美味しいわね」

「中々です」

パクリ！うむ、結構好評！ヤミの中々は美味しいと同じだということを見切っておるわ！

さてもう一口！っと手をのばしたら

「あつガ克蘭君？コーヒー入れてもらいたいんだけどいいかしら？」

「あつ私もお願いします」

二人にコーヒーを頼まれました

「あいあい！」

でコーヒーを入れます！あらかじめヤミン奴には砂糖とミルクで味調整つと！

ん？そっぴやいつの間に飲んだんだ二人とも？俺はまだ結構残ってるのに・・・

まっいいさね

「ほい保健さん！コッチはヤミン？」

「ありがとうガ克蘭君」

「ありがとうございますマサナリ」

うむうむ！二人にコーヒーを渡してさて俺んホットケーキを・・・

『カキン！カキン！』

うん！ない！アレ？俺まだ一口した食ってなんですけど？

「コーヒーとアナタの分のホットケーキあり・り・が・と・う！」

マジか！なんの為に二人前作ったと思ってるの！

「隙をみせましたねマサナリ・・・マサナリのホットケーキはいただきます、あ・り・が・と・うございます」

ああ素直に礼を言ったと思ったらそういうことねヤミっ子・・・

二人して嬉しそうにしゃがってからにチクソウ・・・

そんな顔されたら怒るに怒れねえではござえませんか！

「次からは三人前にしますわ・・・」

俺が言えることはせいぜいそれくらいしかありませんでした。

それから後は授業終了のチャイムまで適当に過ごしつつ鐘がなったので教室へ

「マサ君・・・用務の仕事は、途中で終わってたって聞いたけど？」

やはり唯にバレてました、おっちゃん頼むぜ・・・しかしここは胸をはれ

「用務の後は執事兼料理人としての仕事が待っていたんですよ」

アレもある意味では仕事なのだ！報酬は保健さんとヤミの嬉しそうな顔！十分に報酬さ！

「ようするに御門先生にコキつかわれたと・・・まっそれなら仕方

ないわね」

納得してくれて嬉しいが

「唯、その言い方はやめて！考えたくなかったから！」

あくまで俺は執事兼料理人だ！

「切実ね・・・わかったわよ」

わかってくれて何よりです

「マサ！ずるいずるい！用務のおじさんに聞いたよ！ヤミちゃんとミカド先生にホットケーキ作ってあげたんでしょ！私も食べたい！」

うおう！またややこいのが・・・つうかおっちゃん、そこまで話したんかい！

ええいもう！

「後で作ったげるから今はガマンしろい！」

「ホント？やった！」

うむナイススマイル！その笑顔に免じて許したる！

「私も食べたいわね？」

クツ・・・唯までかい！

「わあったわあった！昼メシん後にでも作ったるわい！」



「ありがとう!」

どういたしましてコンナロー!

『ポンポン!』

アン?俺の肩を叩くのはダレぞ?

「ジーーーー!」

はい春菜でした!まっ何となく読めてたけどね!

「春菜も食つか?」

「いいの?それじゃあいただこうかな?」

ええ構いませんよ・・・材料はまだタンマリありましたからね

つつわけで

「今日の昼メシは保健さん所な?」

「うん!」

「ええ!」

「うんわかった」

うむ、よき返事ですな、っとリトにも確認とらんと

「リトもいいか？」

「ああわかった！」

つつわけで今日の昼メシ場所は保健室と相成りました

まあ里沙と未央もかなり物欲しげな顔で見てきたが気力を振り絞って見なかったことにしたけどな！

コレ以上捌けるかい！けど土産では作ります

弱いとか言うな！流石のマサさんもあの視線には耐えられんのだ！

まあエテ山も見てたがコチラは楽にスルーしといたけどな！完全に目が校長（変態）三步前だったしな！

『キンコーンカーンコン』

ふむ授業ですな・・・はたして次はと・・・

『キンコーンカーンコン！』

歴史でした！やっぱり面白いな！歴史最高！つつかあの先生が最高！

「次はなんだ？そろそろ体育だろ！今日こそ体育だろ！」

ぼちぼち体育がしたいのでござる！

「体育は五限目よ、次は・・・物理ね」

グフツ・・・物理かよ！でも今日は体育があるのでよしとします！

「さあて・・・頑張るぞぉ」

「気が抜けるからそのやる気の無い態度、なんとかなさい！」

コレでもいっぱいっぱいなんすけどね？

まっコレが終われば昼メシと体育が待ってるのだ！頑張って乗り切りますか！・

・  
・  
・

『キンコーンカーンコン！』

はい終了！メシ！

「保健さんとこに行きますか？」

と俺、ララ、リト、唯、春菜の計五人で保健さんところへ向かいま  
す！保健さんとヤミを入れたら七人か・・・

大丈夫か俺！つうか書いてる人！捌けんのか？

まっ何とかなるじゃろ！っとそっぴいやヤミン事を唯と春菜にも紹  
介せないカンなあ

と脳内コチャコチャしてる間にも到着です

『ガラッ！』

「すんませえんココで昼メシ食っていいッスか？むろんデザートにホットケーキがついてきまあす！」

「当たり前じゃないガ克蘭君！さっどうぞ！」

フツ・・・またまた勝った！けど虚しい・・・

まっいいさね！メシメシっ！

と総勢七人で昼メシタイム！

まあメシん前に唯と春菜にヤミン事を紹介して知り合った経緯とかも話しました、したら二人に

「なんていうか・・・」

「らしいね？」

だとさ！どうやら理解されてるもようです！

後保健さんも宇宙人だと暴露ってました、けど、リト以外はアツサリしたもんでしたよ

ララ、唯、春菜言わく

「マサがいるもん！」

「マサ君がいるしね」

「うん、マサ君よりは普通だと思う」

だとさ！何気に春菜がいつちゃんキツツイぞ！俺じゃなかったら泣いてるところだぞ！

そしてその言葉を聞いたリトに

「確かに！驚いて損した気分だな」

って言われました！リトもキツツイぞ！むろんその後保健さんに

「やっぱり解剖したいわね」

とかも言われてキチンと

「NO解剖！解剖した場合はホットケーキが食べなくなります！」

最終手段を使いつつ拒否つとききました、したら保健さん慌てて

「いやねガ克蘭君ったら冗談よ冗談！解剖なんてしないわよ」

ですと！かなり必死でしたけどね！かなり汗かいてましたけどね！

でその弁当を食べ終わり食ミ〇（食後のミ〇ミ〇）して

『ジュージュー』

ホットケーキ作り！里沙と未央の分も作りました！

後、一応は多めに作りました！例え食後とはいえ油断は出来んだ！二度過ちはおかせぬ！

でみんな食べてます

「中々です」

「うん！美味しいわ」

「マサ！美味しいよ！」

「確かに美味しいわね」

「うん・・・けどちょっと複雑・・・」

「春菜ちゃん気にすることないよマサだし、でもまっ美味しいぞマサ」  
「？」

「うむうむ！好評好評！さってまだ結構あるし里沙と未央ん分を包んでおきますかね！」

・  
・  
・

「ばか・・・な・・・」

「ちょっと目を離れた隙にやられました！嘘だろ！まだ結構あったよ？つうか食後だよね？」

「つうか今回に限っては俺、一口も食ってねえんですけど？」

「マサ・・・悪い・・・俺には無理だった・・・俺も一口だったし・・・」

・・・

なんかリトに謝れた！リトも一口食った後に女性陣全員から熱い視線に耐えられなかったらしい・・・

気持ちはわかる！俺でも無理です！

つい思わず里沙未央のやつに手を出そうかと考えたけどやめました

いや違うから！ビビったとかいうわけじゃないから！ちょっと空が青かったから！

そういうことにしといたげて！

まあみんながみんな嬉しそうな顔をしてたは俺としても嬉しいけどな！

とこうして総勢七人による昼メシタイムIN保健室は終了したのであります。

あつ！里沙未央の二人に土産渡したら喜んでくれたぞ！うむ！ナイススマイル。

蛇足という名のオマケ！

ララ視点

今日はちょっと食べ過ぎちゃったかも！でも美味しかったんだもん仕方ないよね！

よし！ホントは怖いけど・・・

『ギシツ・・・』

「ツ！！！！！」

春菜視点

マサ君のホットケーキ美味しかったな？今度教えてもらおうかな？

「フンフン〜 あっ！」

大丈夫だよね？うん大丈夫！きっと大丈夫

『ギシツ・・・』

「ツーーーー！！！」

唯視点

・  
・  
・  
・



ふっ……今日は食後だっていつのに食べ過ぎちゃったかしら……

けどホントに意外よね？あんなに美味しいホットケーキなんてお店で出る味よ

さて現実をみないと……

『パンパン』

『ギシッ……』

「ッ！！！！？」

・  
・  
・  
・

涼子視点

「今日の仕事も終わりっ」と

今日もいい日だったわね、特にガクラン君ホントに多芸だわあの子、お弁当も少しもらったけど凄く美味しかったし

それにホットケーキは絶品ね、でもあの様子だとまだ他にも色々作れそうよね？

今度、他のも頼んでみようかしら？

ってアレ？そういえば生徒が使って出しばなしにしてたわね？

「ゴクリ・・・」

大丈夫！大丈夫よ！ちゃんと運動してるもの！大丈夫きつと大丈

『ギシッ・・・』

「ツツツツ！！！！！」

・  
・  
・  
・

ヤミ視点

プリンセスどうしたのでしょうか？急に顔色が悪くなっています  
たが・・・

「ん？コレは・・・」

ちょっと試してみましよう・・・自身のことを知るのも一流の条  
件ですから、決して決して決して心配になったわけで・・・

『ギシッ・・・』

「ッ！！！！！！！！！！！」

・  
・  
・  
・

共通視点

『あのホットケーキは危険だ!』

第十七話つばい感じ！（後書き）

後書き

最後のアレは・・・ある意味悲劇でした・・・温かい目でスルーしてあげて下さい・・・

あっ感想などありましたら是非にお願いします。

第十八話つばい感じ！（前書き）

前書き

ああまたもや・・・またもや・・・捌ききれないのに・・・

今回も頭痛薬をお持ちになっておすすみ下さい

## 第十八話っぽい感じ！

体育終わり〜！うむ今回も守りきったぜ！ん？何をとな？ゴールです！

今日もサッカーだったんですな！いや違うから！面倒とか思ったわけじゃないから！

ホントだから！

アンまだあるとな ん？アレか？前回のオマケではすでに一日が終わってたって？もう！そういうところはサラッと流そうよ！

そんなこと言い出したらアレだよ？もう完全にアレな感じになるだろ？わかってくれるよな？っていうかホントお願いします。

・  
・  
・  
・

沙姫視点

オーホホホッ！あらごめんあそばせ？私？まったくこの優雅で華麗で高貴な私のことを知らないなんて無知もいいところですね！

まあいいですわ！

私の名前は天条院 沙姫！かの有名な天条院グループの一人娘

天条院 沙姫ですわ！オーホホホッ！

「なあ知ってるか一年にすげえ可愛い子が転入してきたって？」

「知ってる知ってる！一回見たけどめっちゃめっちゃ可愛いかったぜ！」

ムカ！この私が近くにいるというのに・・・気にいらぬですわ！

「凜！その転入生というのは誰ですか？」

「ララ・サタリン・デビルークという生徒です・・・先週急に転入してきて既に男子生徒の間ではかなりの人気を誇っているようです」

ムギギ・・・この私を差し置いて！許せませんわ！

「しかし既に惚れている者がいるようでした他の男子にはさほど興味がないようで確か・・・」

野球部エースの・・・某とやらの告白をアッサリと断ったり他にも相当数の告白されてるようですが全て断ってるようです」

なんですよ！それで最近私に声をかける男子生徒が少なかったのですのね！悔しいですわ！何か目にも・・・

ン？閃きましたわ！

「凜？そのララという生徒が好きな男子生徒とは誰ですか？」

「は？何故？」

オーホホホ！わかっていませんのね！

「その男子生徒を私の魅力で骨抜きにしてみればララとやらはきつと悔しがりますわよ！オーホホホ！流石は私ですわ！」

私の魅力を持つてすればそんなことくらい簡単に出来てしまますわよ！オーホホホ！

「流石です沙姫様！」

そうでしょうそうですね！もつと褒めなさいオーホホホ！

「ああ・・・また沙姫様の悪い癖が始まってしまったか・・・しかしそんな簡単にいくだろうか？」

むっ！なんですよ！凜！その不安げなお顔は！

まあいいですわ！

「凜！早く教えなさい」

「ンッン・・・ええ、その男子生徒の名前は鬼島 政成、ララ・サタリン・デビルークと共に転入してきた生徒です」

特徴は・・・ガクラン姿であること、後、かなりの変わり者のようです

なんでも100メートルをバク転で10秒フラットをたたき出したとか

野球部エースの某とやらのボールをバットで真っ二つにしたとか、



ある意味ではこちら男子生徒に注目されているようです……  
まあ私も注目していましたが」

む？最後の方が聞こえなかったですわね？しかしなっなんなんですの非常識な男は！

さっ流石に少し……

「流石です沙姫様！そのような男をも魅力してしまわれるんですね！」

ハッ！そっそっですわね！そのような男を骨抜きにしてこそ意味がありますわ！

「オーホホホ！私にかかればちよいものですわ！さあ行きますわよ！」

待っていなさい鬼島 政成！オーホホホ！

「はあ……不安だ……果てしなく不安だ……」

「はい沙姫様！」

・  
・  
・  
・

マサ視点

何故か更衣室には俺だけでした！つつかりト待っていてくれても罰は当たらない……

やっぱりアレかなずっと・・・休憩したい（ツツコミの意味で）・・・そろそろ休憩したい（ツツコミの意味で）・・・とか言ってたからそれが原因だろうか？

やっぱり体育で、はしゃぎすぎたか？

まっ気にせずに行きましょう！

スツタラスツタラっと・・・

「オーホホホ！」

！！なっこっコレは・・・

『ピ・ポ・パ！』

「あっすんません病院ですか？救急車一台」

持っててよかった携帯電話！早速役に立ったな！最初の使用が病院への緊急連絡つてのはアレだけど・・・

「ちょっと何してますのオオ！！」

慌ててオーホホホの女子とその女子と一緒にいたポニーさんとメガネさんに止められました！

「まったく何をいたしますの！なんで救急車なんかを呼ぼうとしたの！」

「いや必要かなあと？ほら急に目の前に出てきていきなり『オーホ

ホホ』とか高笑いされたから遠回しのSOSかと思つて?」

保健室でもよかつたんですけどね?親切ですよ?

「クククツ・・・うまいこというな・・・ククク・・・」

なんかポニーさんのツボに入った!やったぜ!

「凜!何を笑っていますの!まったく!」

む?そんなに怒らんでもいいがな、ってコイツもどっかで見たよ  
うな・・・いややっぱわからんわ、よし聞いてみよう!

「ユ一達、誰さね?とまずは自分からだな、俺は鬼島 政成、マ  
サって呼んでやってくれや、よろしく!」

うむ!人に名前を聞く前にまずは自分からの精神だ!

「私のことを知らないと!この優雅で華麗で高貴な私のことを!」

「えっ何?あんたが高貴でポニーっ子が華麗でメガネっ子が優雅な  
ん?これやまた珍しい名前」

「違いますわよ!そんな名前なんて聞いたことありませんわよ!」

うん知ってる!言ってみただけだし、つうかコイツ面白えな?

「クツクク・・・たつたえられん・・・プハハハ」

ポニーさんのツボに入った!またまたやったぜ!

「私、優雅なんて言われたの初めてですよーイヤンイヤン」

急にクネクネしだしたなメガネさんよ？つうかコイツ結構面白えかも？今はちよち怖えけど

「凜！何を笑っていますの！綾もいつまで喜んでいきますの！ってそうじゃありませんわ！

ンッン！私の名前は天条院 沙姫！天条院グループ総師の一人娘！天条院 沙姫ですわ！オーホホホ」

『ピ・ポ』

「おやめなさい！」

チッ！惜しい！まっ今のは半分冗談だけど

「ククク・・・このように振り回される沙姫様は初めて見るな・・・ククク・・・」

あっ私は九条 凜だ！しかしバットでボールを一刀両断したのを見た時はどんな猛者かと思ったが・・・意外と愉快な奴だな鬼島政成」

見てたんだ？まっ結構ギャラリーいたもんな？

「喜んでいただき恐悦至極！凜だな？よろしく！後、フルネームはやめれマサか政成で」

「ふむ・・・では政成と」

うむうむ！なんか凜は武士っぽいな？なんかよく剣道部が持つてる竹刀袋？だっけか？紫色のアレ！も持ってるし

「あっわっ 私は藤崎 綾です！」

ほう！メガネっ子は綾ね？よしや覚えた！

「綾もよろしく！」

「あっはいよろしく願います」

うおう！そんなにペコペコ頭下げんでも！つつか普段はそっこのタイプなんだな？

「ちょっと私を忘れて何を勝手に盛り上がっていますの！」

いや忘れてねえよ？つつか

「沙姫みたんやつを忘れるわけねえじゃん？ちいとアイサツ交わしてただけやがな？」

淋しがり屋か？淋しがり屋なのか？

「呼び捨て！男の人に名前を呼び捨てにされたのは初めてですわ・  
・いっいえ今はそこではありませんわね！」

ンツン！オーホホホ！それはそうですわよね！私のように優雅で  
！華麗で！高貴な」

「うんにゃそっちじゃねえ面白えからだ！」

今だつてわざわざ途中からオーホホホいれたりとかすげえ面白えし！いやぁナイスな奴らと知り合いになれたな！

「誰が面白いのですの！」

しかもボケかと思わせてツッコミをこなす！素晴らしい！

「沙姫が！いやマジでいいキャラしてるわ！」

「えっ？いいキャラ私が？」

「うん！ホームラン！やったね！凄いぞ沙姫！」

サムズしながらナイススマイル！もう場外を軽く越えたよ！

「オーホホホ！ホームランとは何かはよくわかりませんが悪い気分ではないですわね！オーホホホ！オーホホホ！」

ああヤベエ！凄え面白え！

「クク・・・政成！中々・・・クク・・・やるな？実にいい手並みだ・・・ククク！」

恐悦至極！

「流石です沙姫様！」

「オーホホホ！もっとよ！もっと褒めた讃えなさい！オーホホホ！」

暫くの間、廊下に沙姫の高笑いが響き渡った・・・

ああ面白え！

ン？そだ沙姫達も引つ越しさせることできんかなあ？

「なあ沙姫達さ？俺らんクラスに引つ越してこねえ？」

「はっ？いきなり何を言っていますの！」

我がクラスの更さる戦力アップの為でござるよ！素晴らしい人材に会ったらスカウト！某黄色いウサギの野球チーム的発想だ！

「ふむ・・・それは無理だぞ？」

むう凜さんや？俺を侮るなよ？

「無理じゃないべさ？既に一回、隣んクラスから引つ越しさせた経験があるぞ？」

うん！唯のことです！

「その噂は聞いたことがあるがそれは政成と同じ一年だろ？私達は二年だ、流石に学年の移動はな？」

ああ、それは流石のマサさんでもアレだな？学年を下げるってのはな？ン？世の中には『下がる男』も存在すると？

いや知らんがな！って今さらだけど

「先輩だったんだな？先輩ってつけたほうがいいか？」

「構わん、政成にはあってない」

「ですよ〜！俺もそう思いまさあ！しっかし

「引っ越しは無理かあ残念だねえ」

「いやはや残念だ！実に残念だ残念で仕方がない

「オーホホホ！そんなに私と一緒にのクラスがよかったのかしら！」

「うん！沙姫達と一緒にがよかったぞ？」

「面白えしな！つておよ？」

「ッ！！まっまあこの天条院グループの一人娘で優雅、華麗、高貴な私と一緒ににいたいと思うの当然のことですわよね！オーホホホ！」

「おいおい？」

「ブツブツ！不正解！天条院グループとか優雅、華麗、高貴とかそんなわけわからん理由じゃなくて、ただ沙姫や凜、綾と一緒にだったら楽しいやろなとマサさんは思っただけですよ？」

「家柄？知らんがな！ダチンなるのにそんなもん関係あるかい！」

「ッッ！！！！いつ行きますわよ凜！綾！」

「アレ？何故に？って赤！真っ赤や！」



「はい！沙姫様くじゃ失礼しますね政成君」

『スタスタスタ』

むう！つとおよ？

「フツ・・・気持ちのいい奴だな政成は？それではまたな？」

ああそいつぁどうも？よくわからんが

「んじやな沙姫、凜、綾！また遊ぼうな？」

三人を向かって手を振って見送りました・・・そっぴや何しに来たんだあの三人は？

・  
・  
・  
・

凜視点

フツ・・・鬼島 政成、私が考えていた人物とは少々違ったがかなりの大物だな？

それ以上に変わり者だな・・・フフフ

沙姫様が最初にあんな事を言い出した時にはどうなるかと思ったが

この出会いは良い出会いであったようだな？

「うううなんなんですか？あの男は・・・」

私が骨抜きにして差し上げるはずでしたのに……これでは逆じゃありませんの……」

フフ……沙姫様の気持ちはわからないでもないな？

政成は沙姫様に近付いてきた今までの男とは全然違う、沙姫様をただの沙姫様として見れるやつだ

「沙姫様、大丈夫ですか？お顔が真っ赤ですよ？」

「うっうっ煩いですわよ！そっそんなことありませんわよ！」

そんなことあるんだが真っ赤だぞ沙姫様？

これはまさか本当に惚れたか？ふむ……それは少々厄介な事に……いや……ここ共有財産とすれば良いか？

ん？何かな？私か？フフフ……野暮なことは聞くものじゃないぞ？

マサ視点

沙姫達は何故に俺の前に現れたのかは謎だったが実に面白い奴らと知り合えたので、よしとする！

細けえこたあ気にしちゃいかんぜお！

『ガラッ！』

教室到着！

『キンコーンカンコーン』

即授業

『キンコーンカンコーン』

即終了！

いや嘘！かなり長かったです、俺にとっては・・・

『ガラッ！』

ン？つておよ？爺ちゃん先生やん？なんか久々？まあホントは毎朝SHRとかで来てただけだね

「ええ連絡事項があります、明日から更衣です以上です」

『ガラッ！』

はやっ！用件だけ伝えて即戻りましたな？まっダラダラ話されんよかよっぼどいいけどね！

しかし更衣かあ？ふむ・・・

「昨日まで春と思っていたのに実は明日から初夏だった！流石のマサさんもビックリだぜ！」

「色々と都合があるんだよマサ！」

流石はララさん！真理だな！

「意味がわからないわよ？」

わかってあげよう！世の中には学年は変動しなくてもクリスマス  
を三回向かえる高校生も存在するのだよ！

だからみんなあまり気にしちゃダメだぞ？マサさんからのお願い！

っとアレな発言は置いといてっと

「ヤミっ子を向かえに行きますか？」

帰りにタイヤキ焼き機も買わんといかんしな？

・  
・  
・  
・

「たっだいま」

でタイヤキ焼き機と材料を購入しての帰宅と相成りました

そして早速ヤミに

「マサナリ早く作って下さい」

とおねだりされたので、作り始めます！まっ夕食前なので数は

控えめに・・・

いや悔るな！あの失敗を忘れたか！

最悪余ってもまた食えるしな！

『ジュー』

という考えの元に少し多めに作成！ヤミの分だけじゃなくてララと美柑、リトもあります！

流石のヤミも自分の報酬が、とかケチ臭いことは言いませんでした！

つつかハムハムと一心不乱に食つとります

「夕食入らんくなるからそんくらいにしとき！」

適当な場所で止めておきました！

「マサ！コレ美味しいよ！また作ってね？」

「うんうん！おやつに最適かも」

ララと美柑にも好評だったぜ！ちなみに俺とリトは一匹は確保できたとっておこう！

その後はいつものように美柑と夕食を作って夕食タイム！

つまつまでした！つつかなんか食ってばっかだな？

その後はお風呂タイム！俺はむろん最後です！

何故か待つてる間に、ララとヤミ、そして唯に春菜に保健さんの  
悲鳴が聞こえた気がしたが全力で無視し・・・

・  
・  
・

美柑視点

アハハくなんかララさんとヤミさん急に顔色々が悪くなったと思  
ったらコレか・・・

うん・・・覚悟を決めよう！私はそんなに食べてないし大丈夫大  
丈夫

『ギシッ・・・』

「ホッ・・・」

少しは増えてたけどコレくらいなら大丈夫かな？

・  
・  
・

マサ視点

何故か美柑に限ってはホッと胸を撫で下ろしてる感じがした、何  
故？

っっておよ？

「マサナリ！今から勝負です！外に出て下さい！早く」

いや何故にそんなに焦った感じなんだヤミっ子よ？

「マサ！私も参加する！」

いやなんでやねん？なんでララまで？

「早くして下さい！事態は急をよつします！」

「そつだよ！早く早く！」

いやなんか怖えんですけど？目がマジなんですけど？リト既に自室に避難してるんですけど？

『ズルズルズル』

そして俺引つ張り出されたんですけど？何？俺何かした？心当たりがありすぎてわかんねえんですけど？

「いきますー！」

「いくよー！」

『シュババババ！』

『ピュー！ズドドドドー！』

暫くの間、ヤミの斬撃の雨とララの拳の嵐を避けつづけた

ルールは簡単！朝と同じで死んだら負けよ？

で避けてる時に美柑が来て、ちょぴり止めてくれんかなあ？といった感じの視線を送ったら

「お願いマサさん、付き合っただけで？」

ってララとヤミを優しい目で見ながら言われました

その優しい目はどこことなく、唯の小テストで30点以上取った時の俺を見るクラスメイツの目に似ていました。

その後何故かララとヤミの攻撃が激しさをました

まっ余裕で避けただけだね！でもね！普通の人なら死んでるからね！殺気が凄かったからね！

ああ人外バンザイ！

蛇足という名のオマケ

春菜視点



「んっ！っしょ！しょ」

頑張らないと！

「春菜〜晩ご飯は〜」

お姉ちゃん！それ所じゃないんだよ！自業自得だけど

「うう〜少し待ってて、今手が離せない」

「何？体調が悪い」

『ガチャ！』

「あっ！入ってきちゃー！」

今はダメなのに！

「ああ〜そういうことね、今日は私が軽いの作るから」

「あっありがとう・・・グスン」

その優しさが痛いよお姉ちゃん・・・

・  
・  
・  
・

唯視点

「私ちよっと出てくるから」

ジョギングよ！少しでもカロリーを消費しないと

「唯？こんな時間から・・・ってなんだジョギングか何かあるのか？」

「別にただちよつと・・・」

言えるわけないじゃない！体重がなんて！たとえ兄とはいっても

「ん・・・あつ！なるほどね・・・どつりで体重け」

『スパーン』

「グハッ！」

「余計な一言は身を滅ぼすわよお兄様？」

フン！さっ行かないと！

「たったくましくなつたな唯・・・ガクリ」

マサ君のせいねそれは、まあ今走らないといけないのも！

これは自分のせいね・・・

・  
・  
・  
・

涼子視点

『タツタツタツタ！』

ルームランナー作っててよかったわね、けど、今日は油断したわね・・・まさかあのホットケーキにはあんな罨が仕掛けてあったんなんて

ガクラン君、侮れないわね

ン？何かしら？自業自得？違うわ！アレはガクラン君が作るホットケーキが美味しすぎるのが悪いのよ！

けどあの味が食べられなくなるのは惜しいわよね・・・

今度、カロリーが低い材料、開発しようかしら？

うん！我ながらナイスアイデアね！それにまだ色々作ってもらいたいし・・・

でも今は

『タツタツタツタ！』

少しでもカロリー消費しないと！

## 第十八話っぽい感じ！（後書き）

後書き

はい！縦ロールさんとその一味でした！

何故か凜にまでフラグの匂い・・・ああやってもうた・・・

でも頑張っていきたいと思いますのでまた見てやって下さい。

感想などもありましたら是非に

第十九話つばい感じ！（前書き）

前書き

今回もブツ壊れております！

スンマセンです！いつものように薬的なものをお持ちになりおすすみ下さい。

## 第十九話っぽい感じ！

「な〜っ 夏夏夏 服を〜 変え変え変え 夏う用へ〜」

ということまで夏仕様のマサさんです！夏は大好きさ！

まっ！まだ夏つつ程ではござらんが

コレからの展開的に必要なことなのでござる！サツと流してね？

『ガチャ！』

「夏バージョンの俺参上！」

あっちなみに今の俺の恰好は下はガ克兰の時と一緒に、上は七分くらいの長さのシャツを着てます！半分くらい制服とはいえねえですけどね！

「似合っ〜！」

「うん似合ってるよマサさん」

「中々です」

うむ概ね好評！

「マサ？それ大丈夫なのか？」

ふむ・・・まっ確かに言われてみりゃあそうなんですけどね？

けど前ん学校はコレでも大丈夫だったし  
それに

「ワイシャツだけだとな・・・なんつうか・・・こう・・・な・・・  
まあ見たら早いか・・・ちょっと着てくるから待っていてくれ」

『ガチャ』

（俺着替え中）

『ガチャ』

「どうよ・・・これ・・・」

再び参上して感想を聞いてみる、まあ返ってくる答えはわかっ  
ただけどね

「・・・チンピラ？」

「うん・・・極道映画とかで見たことあるかも」

「やめたほうがいいです」

「それもカツコイイよ！」

上からリト、美柑、ヤミ、ララの順でした・・・

ええそうなんです、何故かワイシャツだけだとそんな感じになっ  
てまっんですチクソウ・・・

「じゃ着替えてくるわ・・・あのまま学校に行ったら・・・つづか学校に行く前に職質されてしまう・・・」

『ガチャ』

「なんで、ワイシャツだとあなるんだマサのやつ？タキシードん時もだつたけど」

「うーん・・・ギリギリ有りかな？」

「確かにアレはアレで悪くはありませんが・・・」

「うーんカツコよかつたけどな」

残念ながら俺的には無しです！マジ、カンベン！

・  
・  
・  
・

「再び夏バージョンの俺参上！さっきまでのことは忘れて学校へ行くつもりではないか！」

なんか妙なテンションになっているが気にするな！

まっなにわともわれ

スツタラスツタラと学校に向けて出発です！

あっちなみにリトとララも夏仕様になつたぞ？



ちゃんと褒めました！ララはピョンピョンしながら喜んでた

凄く癒されました、美柑も俺達にあわせて夏仕様にしてたのでコチラも褒めたら、照れてました、可愛いかったです

ヤミは変わらんけどな！でも褒めといた、何故ってなってたけど、まあ流れてことで！

と脳内コチャコチャしてる間に美柑が離脱しアイサツかわして学校に到着です！

やっぱり結構、ジロジロ見られてたけど俺だとわかると、さもあらんみたいなきな感じでした

地道な努力の成果だぜ！けど若干複雑だぜ！  
でヤミは保健さんの所へ

で俺達は教室です！

っと教室到着！

『ガラッ！』

「おはようさん！」

元気よく教室に入りました！続いてリトララの二人も教室へ

で席についたら、やはりというべきか唯に

「マサ君？その恰好はダメでしょう、前の学校の制服ですらないじ

やない！」

と注意された！

「リト、説明よろ」

リトに助けを求めた！リトなら実際に見たからわかるしな

「ちよつと？なんで結城君に？自分でちゃんとした理由を言いなさい」

食い下がるな唯にリトが

「古手川、カンベンしてやってくれ・・・あのな・・・マサ、ワイシャツを着ると・・・何故かチンピラになるんだ」

はい、そういうことです

「は？何それ？意味がわからないわ？マサ君？前の学校のはいいワイシャツはちゃんとあるんでしょ着替えなさい！」

クツ・・・引き下がりませんな！ええいそこまでいうのなら！

「着てやるわ！後悔しても知らんぞ！」

『グッ』

「ワクワク！さっ！マサ早く脱いで！」

シャツに手をかけたらなんかララが何故かカメラを構えたので

「トイレで着替えてくる！ニン」

『シユバ！』

NINJAした！

「むうなんで〜」

教室からララの残念そうな声が聞こえてきたが全力で無視！

でサクッとワイシャツきて再び教室へ

『ガラッ！』

「戻ってきて・・・」

教室に入り唯に声をかけられかけて途中でやめられました、

「どごよ?」

まっ結果はわかってんですけどね？

「私が悪かったわ・・・着替えてきなさい・・・」

ほらね？

「ププ・・・流石マサマサ！更衣一つでこの騒ぎ」

里沙君！笑っていただけて嬉しいです！だって里沙くらいだも笑

ってるの！

他のクラスメイトは目を反らす（エテ山とA&Bはコッチ）か涙を堪えてる（春菜と未央はコッチ）かのどちらかだもの！

ホントに目を反らしたいのは、そして泣きたいのは誰だと思ってるんだ！

外ならぬマサさんなんだぞチクソウ！

「着替えてくるでござる・・・ニン」

『シユバ』

一刻も早くその空気から逃れたくてNINJAしました！  
でサクツと着替えて三度教室へ

『ガラッ！』

「俺！復活！つうわけで唯、この恰好で許してね？」

「ええ先生達には私から言っておくわ」

助かります！頼りになるぜ唯！

『キーンコンカーンコン』

むっ？授業ですな！さて最初の授業はなんでしょな？

つておよ？何故かクラスメイツが教室から出ていったのですけど？

つうことあアレか移動教室？つまりは

「マサ？次は美術だから美術室だ」

なるほど！美術か！ならよし！美術も好きさ！

「じゃ行きましょう！」

と美術室へと移動です

・  
・  
・  
・

はい到着！うむ美術室だな！

「はい！では今日は・・・そうですね、人物画をしようと思います  
！」

ほう！つまりは似顔絵か！よしや誰と組もつかねえ

「ですので誰か一人モデルになってくれる人を立候補でも推薦でも  
いいですよ？」

はい？どうこと？二人一組でやるんじゃないかねえの？つうかアレ？な  
んだらうものっそいイヤな予感がすんですけど？

「はいはい先く生！」

「はい？えつとアナタは確か・・・転入生のララさんでしたね？立候補していただけるんですか？」

あつよかったララが立候補してくれるっばいな？いやはや、しっかしなんでイヤな予感がしたんでござろう？まっ気にしても

「モデルはマサがいい！マサのセミナード！」

オイ！待て待って下さいララさんや・・・アンタ嬉しそうに俺を指差して何を言い出してんでございますか？モデルはまだしもセミナードって・・・イヤ大丈夫！きつと止めてくれる・・・

「マサ？ああこちらも転入生の・・・えつとあつアナタで・・・こつコレは！ええそうしましょう！みなさんララさんの意見で

いいですね！異論は認めません！あつ私も参加しますが描く側で！」

アレ？ちょ？アレ？嘘？マジでか？つつか美術先生・・・いやマジでか？イヤ大丈夫！断るんだ！誠心誠意話せばわかってくれるはず！

「あつあのスンマセン・・・えと断るわけにはイカンでしょうか？ほら俺のセミナードなんて描いてもね？面白くないし？」

頑張れ俺！負けるな俺！

「いえそんなことはありません！私の眼力を侮ってもらっては困ります！例えば服の上からとはいえアナタの体がどれほど鍛えられているかなどおみとうしです！」

いや別に鍛えてるわけじゃないのよ？いや鍛えたけど、やんごと

なき事情で鍛えてつつうか鍛えられてたけど！主にジジイ関連で！

けどね写真パシャパシャやられる為とかクラスメイツの前でセミアードになる為じゃないから

ハッ！そうだ！保険さんの所に行こう！急にお腹が痛くなってきた事にしよう！

「ああ〜イタタタ・・・スンマセン・・・急にお腹が・・・イタタタ・・・これ無理ですね？いや残念・・・イタタタ・・・ちいと保険さんと」

『ガラッ』

「は〜いガクラン君？私に御用？大丈夫よ？何かあった時の為に私がココで見えていてあげるから？」

何故エエエ！つつか既に何かが起こってるんですけどオオオ！現在進行系で俺の身にイイイ！

「プリンセス連絡ありがとうございます」

オマエがララアアア！

「ヤミちゃん気にしないでいいよー！」

気にして下さい！マサさんを！

「そっそんなのハレンチだわ！」

よく言った！流石だ唯！

「うん・・・確かにちょっとマサ君が可哀相かな？」

「春菜！優しい子だぜ！よし二人の心強い味方が！」

「唯！ハルナ！こっちこっち！」

おう！ララ？唯と春菜を手招きしております、なんかまたもやイヤな予感

「コレ」

『ピラッ』

「ララさん！ハッハレンチだわ・・・でも・・・」

「うわぁうわぁ・・・」

アレ？え？オマエなんでアレ？なんで学校にアレを持ち込んでんの？しかもなんかトレーディングカード風に加工して

「マサナリ私も持っていますか？」

えっ？心読まれた？つうかアレ？ヤミさん？なんでオマエも？

「しつ仕方がないわね！コレも授業の一貫よね？うん仕方がないわ」

あらやだ唯さん素敵に寝返ってくれやがりましたね？

「そうだね？芸術の為だもんね？マサ君お願い」



まあ綺麗な角度のお辞儀ですね？春菜さん？見本にしたいくらいだよ？

「はっ春菜ちゃん・・・」

流石のリトも引いてますよ？つつか俺の方が引いてんですけど？

「男のセミヌードなんて描いても面白くないぜ女の子の方が・・・」

勇者エテ山が立ち上がり

「うるさい！」

「アナタは黙ってて下さい」

「ハレンチよ！」

「猿山君は少し静かにしててね？」

『ドガグシャゴキヤ！』

「ギヤアアアアー！！」

電光石火の勢いでララ、ヤミ、唯、春菜に沈められた

おっ恐ろしい・・・何が恐ろしいって・・・ほかのクラスメイツ（主に里沙未央の女子達）エテ山を助けるどころか止めを刺そうとしてるんだぜ

『スタスタスタ』

「大丈夫かしら猿山君？このクスリで」

流石は保健さん、なんやかんや言っても養護教諭ですな！

っアレ？その薬なんかドクロのマークついてね？いや見間違いさ！きつと見間違い・・・

「¥%#&%@?&¥#!!!！」

見間違いじゃねエエエエ！明らかに人間が発音できない言語で悲鳴上げとるウウ！

「フフフ・・・2時間もすれば目が覚めるわ」

ヌタリと笑う保健さんがとても怖かったです

「マサ・・・た・・・たた頼む・・・下手に逆らったらアレの餌食に・・・」

でその惨劇の後はリトがつつか殆どのクラスメイツ男子まで寝返りました

気持ちはわかる

なんせ惨劇を引き起こした本人である保健さんは何故か美術先生とイイ笑顔でサムズしあってるんだもの

有り得ないんだぜ！

で結局はモデルをすることになりました

まっ別にアレだしな！どうせプールとか海とかで見せることになるしな！

減るもんじゃねえし！

俺ん中の何か以外は・・・スマン少々強がった・・・なんか逆らえなかつたんです・・・でもわかるだろ？逆らえるようなアレじゃなかつたんだよ！

「マサ・・・コレ・・・」

そんな俺にそつとミ〇ミ〇を渡してくれたリトに愛を感じました・

リトも辛いだろうに・・・クツ・・・

さあ覚悟を決める！なあに2時間弱なんてあっちゅうまだ！（美術は2時限連続なのです）

ではいぢ・・・

『バツ！』

上着を脱ぎました・・・

・  
・  
・  
・

『キンコーンカンコーン』

やっとこさ終わりました・・・長かったぜ・・・あっちなみにもう上着は着てます、なんか残念そうな声が上がったけど知ったことか！

「うん！やっぱりマサの体カッコイイ！ほら見て！どおどお？」

ニコニコと嬉しそうな顔で完成した絵を俺に見せるララ、ナイススマイル！けど絵の方はアレでした・・・まっまあ

「よく頑張ったで賞を上げます」

つつといた、後、なぐでなでもしといた、だって可愛かったんだもの！

例え俺がセミヌードモデルをする原因を作ったとはいえ、そんなナイススマイルを見せられたら撫でざるえない！

漢つてのは馬鹿な生き物なのさ・・・

「やはり生は違いますね・・・とても有意義な時間でした、マサナリこれを上げます」

そいつあどうも、つうかヤミも絵を描くの参加したんやね？ふむ・・・ララとどっこいどっこいですな、まあ頑張った感じは出てる

「ヤミっ子にも頑張ったで賞を送ります」

撫で撫でしました

「私は・・・なんて事を・・・ハッハレンチだわ・・・」

何故か唯は落ち込んだ、さつきまでノリノリだったクセに！

「唯さん、仕方ないよ？だって凄かったもんマサ君」

そんな唯を春菜が慰めてました、春菜は優しい子です・・・暴走してたけど・・・

「ガ克蘭君、イイ体してたわね？つい私も興奮しちゃったわ、はいコレ」

どいやら保健さんも参加してたらしい、ふむ・・・って何コレ？

「写真並に上手いんですけど？シャレにならんくらいに上手いんですけど？」

めっちゃめっちゃ上手かったです、つうか美術先生よか上手かったです、美術先生落ち込んでるし・・・

「あらそうかしら？で？私は撫でてくれないのかしら？」

って撫でて欲しんかい？まっ別にいいけど

「はい、なぐでなで！」

「む？腕を上げたわねガ克蘭君？」

それやあ、もう日々腕を磨いてますから、つうか条件反射的に撫でまくってますから

ちなみにA & Bを筆頭にリトと謎のクスリで横たわってるエテ山以外の男連中は

「すげえマサの体はアレが」

「戦う漢の肉体ってやつだな、俺達もあの境地に」

とかなんとか言いながら、ものっそいヒーローを見るような目で見られました

コレただのケンカの傷だけどね？しかし漢スイッチが入ってて面白かったので

「フツ・・・この傷の一つ一つが戦い（ジジイとのケンカ）の歴史さ・・・」

つっといた、したらやっぱり

「ウオオオ！漢だアアア！」

「マサアアア！」

「「「マーサナリ！マーサナリ！」」」

めっさ盛り上がったた！ああ凄い面白い！暴走状態のララ達よりはコツチのがまだ安心する

「マサ？結局はノるんだな？」

「だってな？ララ達は目がおつとろしかつたんだもの？」

「・・・確かに・・・春菜ちゃんまでヤバかったし・・・」

うむ・・・あの時の春菜の目はいつまの優しい目じゃなくて、獲物を狩る肉食動物の目だった

「マサ君リト君？何か言ってたかな？」

「「いえなんでも！」「」

春菜怖！一番怒らしちゃイカンタイプやもしれん！

「プププツ！春菜も遅しくなったね？それとマサマサ！イイ体だったよ！見惚れちゃった」

「確かに！マサマサ凄い体だった」

里沙未央はこんな感じ

とまあコチャコチャありながらもなんやかんやで美術の時間は終わりました

少し、ほんの少しだけ美術が嫌いになりました。

「コレからもたまたまに鬼島君にモデルをやってもらいましょう」

「それはカンベン！」

イヤなフラグを立てんで下され美術先生！・

・  
・  
・  
で今の俺はまたまた、おっちゃん呼び出しで臨時用務の仕事！  
むろんヤミも引つ張ってきております

あっちなみにララとヤミと保健さんから美術の時のアレを貰いました、どうせいと？

とか思ったけど、一応スポーツバツクんにしまってます

とコチャコチャ考えながらも手も動かしていたのでサクッと作業は終わりました

「ほれ、マサ坊、ヤミ嬢、また頼むわ」

でおっちゃんに日当を貰って

「おっちゃんサンキュー！じゃまたな」

「ありがとうございます」

とおっちゃんにアイサツして別れた、ヤミもちゃんとお礼を言うようになりましたな、偉いぞ！

と撫でとくのも忘れない！

『ガラッ！』

でもはや仕事の後の恒例行事になりつつある



「保健さ〜ん！コーヒー飲みにきやした」

お茶会です！

「あらガ克蘭君？さっきぶりね？歓迎するわ、じゃコーヒーお願い」

保健さんも慣れたものですな！で三人でコーヒーを飲みます

なんかコーヒーを入れるスキルが上達してきてる気がするぜ！本格的にバリスタ・マサを名乗ろうかしら？

「ガ克蘭君？ちょっとお願いがあるんだけど？」

ン？脳内コチャコチャしてたら保健さんが頼み事があると話しかけてきました、ふむ

「解剖はNGですぞ？」

軽く釘を刺しておきます！まあ違うんはわかってっけど、またホットケーキかねえ？

「解剖じゃないわ、コレって作れる？」

ふむ・・・

「杏仁豆腐ツスカ？材料がありや作れるツスよ？」

何回かは作った事あるしね？サツパリしてて結構美味いんよな

「よかった！じゃ材料はあるから作ってもらえない？」

「ういうい！了！解！ヤミも食うだろ？」

保健さんの頼みに頷きつつヤミにも聞いてみます

「いえ私は・・・」

あらま？食わんのかい？

とそんなヤミに保健さんが何やら耳打ち

「ぼしよぼしよ・・・だから大丈夫よ？」

「ッ！！マサナリ私の分もお願いします」

結局食うんかい！つうか保健さんがヤミに言った、ぼしよぼしよの部分が気になるが  
触れたらヤバイ気配がしたので気にしないことにした

赤信号は渡っちゃダメさ！

つうわけで

「んじゃ俺ん分も合わせて・・・少し多めに」

「三人分でいいわよお昼前だし」

「えっ？でもホットケーキん時は」

「三人分でお願いします」

「あっああわあった」

若干コチャコチャありつつも杏仁作りを始めます！

・  
・  
・  
・

ほい完成！甘さ控えめ中々の一品！

「ほい！保健さんヤミ」

で二人に完成品を渡します

「うん美味しそうね！それにコレなら・・・カ・・・リ・・・も」

「そうですね、この食べ物なら大丈夫でしょう」

ン？保健さんが何言ってるか最後ん方がよく聞こえんかったぞ？

でもそれでよかった気もします！何となくではあるけどな！

まっなにわともあれ

「いただきますしょう！いただきます」

と一口パクリ！うむ！美味しい！

「ん〜サツパリしてて美味しいわね？コレもお店並ね？」

恐悦至極！保健さんナイススマイル！可愛いです！

「ええサツパリして食べやすいですコレも中々ですね」

ヤミの中々は美味しいさ！だって微妙に笑顔だもの！目が輝いてるもの！コチラも可愛いです！

とそんな二人に和みながらも三人で杏仁豆腐を食べました

いやあ美味かったわい……ハッ！最後まで食いきったのって初じゃね？快拳？ある意味快拳？

ちいとだけ嬉しかったりしました

しっかし……アレだな？

「なんか最近つつか俺が来てからなんでしょうけど、ココって喫茶店みたくなってるツスね？」

フとそんな事を思ったので素直に言ってみる、したら保健さん

「だったら私がオーナーになるのかしら？でガクラン君がマスター？ヤミさんが看板娘ね？」

おお！なんかシツクリ来る

「看板娘ですか？」

「ヤミなら可愛いからイケんじゃない？保健さんも可愛いしダブル看板？」

ヤミは可愛い！保健さんも美人だけど俺的には可愛いところが多いし

「ッ！ガクラン君、急にそういうことを言うのはズルイわよ？」

はい？って微妙に赤！もしや勝利？

「ドクター・ミカド？顔が赤いですが」

「普通はそうなるものよガクラン君の場合、下心なんて全く感じないし……」

いやだって普通に可愛いと思っただけやし？

「そういうものですか？」

「そのうちヤミさんにも分かるわ」

むむ？なんか俺、カヤの外？ええい切り込め！

「頑張れヤミっ子！なんか知らんが頑張るのだ！」

とりあえずヤミっ子を応援してみた！

「ハア！ガクラン君は……」

何故か保健さんのため息をつかれた、だってそんなくらいしか思いつかなかったでござる

まっそれはともかく

「喫茶 保健屋！近日オープン！」

「それなら『ミカド』の方がいいわね？」

「『マサナリ』でもいいのでは？」

侃々諤々の議論の結果

「『カフェ・スプーキーズ（変わり者達）』に決まりました！はい拍手〜」

『パチパチパチ』

不定期で営業中！場所は彩南高校、保健室です！

・  
・  
・  
・  
「つつかホントにするんスか？」

「お金を取らなければ良いんじゃない？まっ保健室に具合が悪い生徒がいない時に限るけど」

「昨日の昼の時とかわらないということですね」

「なんやかんやで今までと変わりはないつつう事ですな！」

『キンコーンカンコーン』

おっと、調度いい具合に終了の合図です

「じゃ戻りまあ〜す」

と俺が保健室を出ようとしたら

「ガクラン君、ちょっと待ちなさい、コレをララさんと西連寺さん、古手川さんにも渡してくれるかしら？あっお昼もまた杏仁豆腐お願いね？」

となにやらメモを渡されて、昼メシん時にまた杏仁頼まれました

まっ杏仁はいいんだけども、このメモなんじゃろ？

「見たらダメよ？」

「うツス！じゃ今度こそ戻りま〜す！また昼メシん時に」

保健さんの目が怖かったのでメモの確認はしませんでした。赤信  
(以下略)

・  
・  
・  
・

で教室について例によって唯に小言を貰いつつもメモを渡したら

「ッ！！フフ・・・まあコレくらいで許してあげるわ、あっ昼は私も参加するわよ」

何故か急に上機嫌に、同じようにララにもメモを渡し

「ッ！！流石はミカド先生！マサお昼ご飯楽しみだね？エへへ」

とコチラもまた上機嫌に、で春菜は

「ッ！！ありがとう御門先生・・・マサ君？お昼一緒に食べようね」

と涙を浮かべながら保健さんにお礼を言っていました

何故に？とか思いましたが気にしないことにした

だってほら・・・空が青かったから・・・



## 第十九話つばい感じ！（後書き）

後書き

感想で提案がありましたネタであります、いつかやるかと考えて  
おりましたのでココでドン！しました！

まあかなりアレなデキではありますが・・・でもコレからも頑張っ  
ていきますのでお暇なればまた見てやって下さい。

感想などもありましたら是非よろしく願います。

## 第二十話っぱい感じ！（前書き）

前書き

なんやかんやで二十話です、けどっぱいアレですので薬的な物をまっとうしな

## 第二十話っぱい感じ！

杏仁豆腐は好評でした！

で今は昼メシ後の仕事中、いやぁおっちゃんに呼びだされたんですな！

ん？ヤミはいねえッス、なんか一人でいいんだと？

つつわけでヤミっ子はまだ保健さんここでゆったりしてんでしょ  
うねえ

とコチャコチャ考えながらも手を動かします

っと終了了！

「おっちゃん終わったぜい！」

でおっちゃんに終了報告！結構早く終わりましたな

「おっ助かったぜマサ坊！また頼むわ」

「あいよー！」

とおっちゃんに返事を返して、スッタラスッタラ歩きます

さして、どうしよかね？保健さんどこに戻るか？ふむ・・・って  
およっ？

「よっ！沙姫！凜と綾も！」

沙姫達を発見したので声をかけてみた

「あっあら奇遇ですわね！」

「奇遇ではないのだがな・・・政成、臨時用務の仕事か？」

「政成君、こんにちわ」

でそれぞれ、そう返してくれました、ン？奇遇じゃないでござい  
うございちゃ？まっいいさね

「凜は俺が臨時用務してんのって知ってたんだな？」

俺の問い掛けに凜は頷きながら

「ああ噂でな？さっきの作業も見ていたぞ？手際がよかったじゃないか」

と褒めてくれました、つうか見てたんかい？あっなるほどね

「だから奇遇じゃねえつつったわけね？」

「そっいうことだ」

と俺と凜が話していたら沙姫が

「ちょっと私のことをほうっておいて何二人で盛り上がっていますのー！」

「と何やらござ立腹、いや別にほづっておいたわけではねえんでございますけどね？」

「アレか淋しがり屋なのか？ふむ・・・保健さん所にでも引っ張ってくか？いや流石に多いか・・・捌ききれんだろし」

「ふむう・・・チラっと外を確認、うむ良い天気ですな」

「よしや」

「屋上へ行こう！」

「はっ？いきなりなんなんですか？」

「ええい！コチャコチャ言うな！」

『バツ！』

「えっちょっと！何をいたしますのー！」

「何って小わきに抱えたんですよい」

「凜！綾、ついてきなされ！沙姫をこのまま屋上まで連行します  
で凜と綾にそう声をかけてスタスタと歩きます」

「フツ・・・強引なやつだな」

「はい！わかりました」

凜は苦笑しながら、綾は素直についてきてくれまする、うむうむ

「ちよっと！自分で歩けますわ！離しなさい！いやでも離してほしくないような・・・」

いやどっちやねん！とかコチャコチャしながらも

『ガチャ！』

屋上へと到着です！うむ！まさに日本晴れっですな！

とか思いながらも

「沙姫？離すぞ」

沙姫を解放

「あっ・・・」

っておよ？何故か残念そうですな？なんやかんや言いつつも楽しかったのかしら？

「また今度やっただげるからな？」

なんかそんな沙姫の様子が可愛いかったのでそう言いながらも思わず撫で撫で

「ちよ！いきなり・・・あう・・・」

あれま？意外と照れ屋さん？

「ジーーーー」

ン？この視線の感じは以前にもあったな  
前回は保健さん

「ほれ」

今回は凜でした、言われる前に撫めました！

「うむ・・・中々の腕だな」

フツ・・・日々精進してますからな！目差せ、撫で王！

つつわけで

「綾もいつとく？」

「既に手がのつかってますよ？」

考えた時には既にその行動は終わってるんだぜ！

なんかどっかのギャングさんが似たようなこと言っていました！  
とか思いながらも撫めました

「わっ私はおるか凜や綾まで・・・ケダモノですわ」

っておいなんでやねん！ケダモノってオマエ！なんでやねん！

「意義あり！俺はただ純粹に可愛いと思ったので撫でただけで、やましい気持ちなど微塵もないであります！」

可愛いと思っただら撫でなくなるだろ！つつか凜に関しては自ら要  
求していましたやん

「かつかわ・・・コホン！まっまあ私の魅力が高いから撫でてしま  
ったとそう言いたいわけですね！そっそれなら仕方ありません  
わね！オーホホホ！」

おっ？どうやら納得してくれました、うむ・・・相変わらずの高  
笑いっぷり！

では俺も

『ピ・ポ』

「だからなんで病院に連絡しようとしたしますのー！」

いやあだつてさ

「ほらアレじゃん？○東さんといったらゆでたまご、ダチ○ウとい  
ったら熱々おでん、じゃあ沙姫のオーホホホつたら、はい凜と見  
せかけて綾！」

「えっわ私！えっと・・・高貴ですか？」

なぬ？なんでやねん！ええい

「はい不正解！解答権が凜さんに渡りました！」



「えう・・・残念です」

うむガツカリしてるが不正解は不正解なのだ！

で凧の答えは

「ふむ・・・やはり病院連絡だろう」

流石は凧だな！

「正解です！凧さんにはマサさんからミ〇ミ〇が送られます、やったね！」

「ふむ、ありがたくいただきます」

さっ！それではそろそろお別れの時間が来てしまいました、ではまた不思議の世界でお会いしましょう！さようなら」

「って納得できませんわよオオオ！」

沙姫の叫び声が屋上に響き渡りました・・・

ふむ・・・

「まあ落ち着きなされ、ほら沙姫にもミ〇ミ〇あげるから、あつ綾も飲むか？」

ん？クイズの意味？ねえよ？何となくやってみただけでござえます  
ミ〇ミ〇、最初っからやるつもりだったし

「フツフン！そっそんなものではごまかされませんわよ！」

いや受け取ってんじゃん？嬉しそうに

「ありがとうございます」

綾は素直にお礼をいえましたね！偉いです！

「ジーーーー！」

で沙姫をジツと見てみます！大丈夫！沙姫は良い子だから気付くはずさ！

「沙姫様、ここはちゃんと」

あっ！ダメだって！ササツと凧に近寄り耳打ち

「言ったらイカンです沙姫が気付くの待ってんだから！沙姫ならちやんと気付く！」

「ふむ・・・なるほど・・・少し短慮だったな」

うむ！凧もわかってくれました！で再び沙姫を

「「ジーーーー」」

っと見ます、今度は凧も一緒だけど

「えっ！いっいたいなんなんですの！」

むむう・・・よしヒントだ！ミ〇ミ〇な方を見る、で沙姫を見る！頑張れ沙姫、頑張れ！

「ん・・・あっ！こっコホン、あっ・・・ありがたくいただきますわ・・・」

うむうむ！

「なっ？凜？言った通りだったべさ？沙姫ならちゃんと気付くって

「フツ・・・そうだな・・・」

いやはや、何となく嬉しくなりました

「まつ全くなんなんですか？お礼くらいいちゃんと言えますのに、それになんて飲み物を貰った私より嬉しそうにしています・・・」

さあね？何となくは何となくですよ

『ボン』

「まつまたですよ！」

勿論撫でした！

でまた1セットずつ凜と綾も撫めました、撫で王の座は近いぞ！

と能内コチャコチャしてたら凜に

「政成一つ頼みがあるんだが」

と言ってきました、頼み？はて？

「なんでしょかい？」

「ふむ、いやな以前にバットでボールを両断していただろう？アレをもう一度みたいと思ってな」

おお！そついや凜も見てたっつってな？ふむん

「別にいいぞ？減るもんじゃ・・・いやボールが減るがな！」

「いや今度はボールではなくてな・・・コレだ」

ン？何じゃいな？

「コレ鉄球じゃん？」

もの見事に鉄の球なんですけど？つつかどっから取り出したんだ？

「凜、いくらなんでもこんなもの斬れるわけありませんわ」

「そうです沙姫様の言う通りですよ」

ぬ？なんだとう？

「ふむ・・・流石に無理か？」

フツ・・・マサさんを！っていうかあの武人の力をナメるなよ！

「凜？オマエが持ってんのって木刀か？ちと貸してくれ」

ン？バットでやらないのかって？いや取りに行くの面倒だし

「ああかまないが」

おっと凜の許可も得ましたし、さてと！

「ちと危ねえから離れてろい」

と沙姫、凜、綾を少し離れた所まで移動させて

鉄球を

「そおーいー！」

『ブオン』

上空にブン投げます！

やはり

「我が名は政成！鬼島 政成！悪を断つ刃なり！」

前口上！まっ今回はただの鉄球ですけどね

『ヒューー』

おっ！コチャコチャ考えてる間にも落ちてきましたな！

では

「一刀……」

『シユパン!』

木刀を一気に振り抜き

『ズズ……』

「……両断!!」

『パカツ……ゴトン、ゴトン!』

「我に断てぬ物無し!!」

やはり決めセリフ!流石はあの武人の力だぜ!

「満足か凜?」

「ああ!凄いぞ政成!」

おう!めっさ喜んでますな!なんか目が輝いとるし!

「すっ凄いです〜!」

おっ綾さんも喜んでくれたようで、いやはややったかいたが  
ありましたな!

っておよ沙姫はリアクションねえのか?

「ポーーーー！かつ・・・こ・・・イですわ・・・」

おう？何を言ってるのか小声すぎて聞きとれねえんですけど？つかポーツとして大丈夫か？

「おい沙姫さんや？大丈夫か？」

とりあえず、目の前で手をヒラヒラさせてみました

「ハッ！だっただ大丈夫ですわよ！」

さいですかい？ならよござんすけどね

『キーンコンカーンコン』

む？時間ですか？

「じゃ俺あ戻るわ！またな」

「ごっごきげんよう」

ぬお！ごきげんようって！レアリティ高いアイサツだな、おい！

「ではな！」

「またです！」

凜と綾は普通にアイサツでした！

・ ・ ・  
沙姫視点

なっなんなんですよ．．．あの男はまさか本当に鉄の球を斬って  
しまっただなんて

屋上から去っていった一人の男子生徒、鬼島 政成の後ろ姿を見  
ながら先程の事を思い出す

「クク．．．本当にとんでもないやつだな政成は」

．  
．  
全くもってその通りですわ、けどあの時の政成さんはカッコよか

『ブンブン』

「ってだからこれではまるで逆ではありませんのオオ！」

本来なら私が政成さんを骨抜きにして差し上げるはずでしたのに！

「沙姫様？どうしたんですか？急に大声だして？」

ハッ！つい声に出てしまいましたわ、ンッン

「なんでもありませんわ！オーホホホ」

ええなんでもないですわよ！



『ピ・ポ』

「って凜！何をしていますの！」

「いや政成がいないので私が変わりに連絡をしようと思ひまして」

「余計なお世話ですわアアア！」

ああ政成さんと関わってから何かと調子が狂いますわね！

でも・・・少しだけですけど・・・たっ・・・楽しかったですわ・・・あっ！少しだけですわよ！

・  
・  
・  
・

マサ視点

ン？なんか知らんが凜が俺の役割を担ってくれた気がする？

まっ沙姫がオーホホホしたんでしような？

っと次の授業はなんだったかねえっと

『ガラッ！』

『キーンコンカンコーン』

教室に入った途端にチャイムが鳴るとは、ベストタイミンだな！

「マサ？お仕事お疲れ様」

お？席についたらララに労いの言葉を言われました

「おう！まっ仕事自体は早く終わったんだけどな？ちよっくらダチと会ったもんで遊んでた」

「お友達？私が知らない人？」

俺がそう答えたらララはハテナ顔でそう言ってきました、ってそ  
ういやララは知らんか？

「まな？今度紹介すらあ？面白え奴らだからきつと仲良くなれんぜ  
」？」

「うん！エへへ楽しみ」

うむナイススマイル！癒されます！とララに癒されていたら

「コラ！私語は慎みなさい、もう先生来てるでしょう」

『ペシン』

と唯に怒られた、まっいつものことでごせえますが

っとそだ、唯とリト、後、春菜も紹介せんとな？あっヤミっ子も！

とコチャコチャ考えつつも

『キーンコンカンコーン』

と授業終了です！

っっておよ？みなさん帰る支度なさってからに、つうこたあアレか？

「今日って五限で終わりなんか？」

頼りになる唯に聞いてみた

「ええそうよ？あつてもマサ君は・・・」

ン？俺？はて？

『ピンポンパンポーン！鬼島 政成君、鬼島政成君、用務員室まで来てください、ピンポンパンポーン』

ぬおう！呼び出し！今日三連チャンやん？まっいいけど、けど次は何すんでしょ？と考えていたら唯が

「明日プール開きだからプールの清掃じゃないかしら？」

つつて教えてくれました、プール清掃ねえ・・・

「まっ頑張りますかねえ、ピッカピカにしてやんぜい！じゃなクラスメイツ諸君！リト、ララは先ん帰えっつていいぞ」

気合い充分！さておっちゃんの所に行きますかねえ

『ガラッ！』

「意外と素直に行つたわね？結構大変だと思つけど」

「うん・・・あつ！ねえ唯！あのね・・・」

ン？教室に残つたララがなにやら言っていますな？まっ気にして  
もしかあないか

・  
・  
・  
・

はい到着！

『ガラッ！』

「おっちゃん来たぞ！ってアレ？ヤミだけか？おっちゃんは？」

用務員室に入つてみたら、ヤミっ子しかおりませんでした、で  
ヤミに聞いてみたら

「用事があるので後はマサナリに任せると言いコレを残して出てい  
きました」

ですと！でヤミが持ってたメモを確認、ふむふむ・・・道具とか  
手順とかが書いてありました、まっコレだけわかれば十分ですわい！

「おけ！じゃ行くべ？」

「はい！」

でまずはヤミを引き連れて道具の回収！続いてプールへGO！

スツタラスツタラ歩いて行って、はい到着！っておる？

「マサ〜来たね〜」

「ララ？」

「俺らも手伝うぜ？」

「リトもおります」

「道具はどこかしら？」

「おやまあ唯さんも」

「私は部活があるから少ししか手伝えないけど・・・」

「いえいえ春菜さんやその気持ちが嬉しいですよ」

「と結局はいつものメンツが揃いました」

「いやあ助かりますわい、今度またなんか作っちゃろ！」

「マサナリ？私も」

「ぬ？読まれた？まっかまわんけど」

「了〜解！タイヤキか？」

「ええ」

うむ！微妙に嬉しそう！

「サンキューな？じゃサクッとやりますかい！！」

「「「「「おおー！！」」」」」

うむ！ヤミもなんやかんやでノツてくれました！

でプール掃除開始！

既に水は抜かれています！がコケがね結構ありますな

「ぬっヌルヌルは・・・」

あっ！ヤミっ子早速グルグル目になつとるし？ああしゃあない

「ヤミは俺らがブラシで擦った後を上から水で流す係りな？頼んだぞ？」

「・・・仕方がありません、そこまでいうのであれば承りましょう」

負けず嫌いめ！

『ツルツ！』

「わきゃー！」

げっ！ララ！だあもっ！

『シュバ!』

「あじよつと!」

NINJAで救出!

「マサ!ありがとう!」

「気にしなさんな!滑っから氣いつけるよつに!」

『ツルツ!』

「えっ?きゃ!」

ってオマエもかい唯!でえい!

『シュバ!』

NINJA!

「たっ助かったわ・・・っていつまで抱えてるの!ハレンチだわ!」

「ハレンチいただきました〜!ってなんでやねん!」

親切だつつうのに!

まっいいけど・・・ってそろそろ春菜部活じゃねえんかな?ふむ  
一声かけとくか

「春菜?ぼちぼち部活じゃね?大丈夫か?」

「うん・・・そろそろなんだけど・・・」

ン？あつ！一人先に抜けるん気にしてんのかね？

「後は俺らで大丈夫だぞ？」

まっ最初は俺とヤミだけだったんだしな！気にせずに・・・

「うっんそこじゃなくて・・・マサ君、脱がないの？」

ハッ？何故？アレ？春菜さん？アレ幻聴？アレ？

『ガリガリ』

耳をホジホジして

「ワンモア？」

一応確認！

「えと・・・上着脱がないのかなって？」

「脱がねえよ！別に濡れてもねえのになんで脱がんとイカンの！」  
全く何を考えてらっしやるんだ春菜さんわ！見ろリトが

「春菜ちゃん・・・」

って悲しい顔してんでしょ・・・



『シュバ!』

イヤな予感がしたので咄嗟にバックステップ

『バシヤア!』

うむ・・・イヤな予感は当たりでした、なんか俺が立ってた場所に水がジャバアってなっとるし

「かわしましたか・・・」

はい!ヤミさんでしたね!

「コラ何してくれてんの!マサさんに水かけてどごすんの!」

与えた仕事と違うでしょ!

「いえ暑そうだったので親切です」

まあ!それはそれは・・・

「ってそんな親切あるかい!っうお!」

「え〜い!」

『シュバ!』

『バシヤア!』

「惜しい!」

今度はララがバケツに水溜めてかけてきやがりました！つうか確実に惜しいっていいやがり・・・

「あつ手が滑ったわ」

『シユバ！』

『バシヤア』

「クツ・・・うまくかわしたわね」

随分的確に手を滑らしましたね唯さん？つうか本音がゴロツと出てますよ？

「ヤミさんは上から段幕を！ララさんと唯さんは左右から挟撃！」

「つておい！春菜！何で指揮官になってんの！」

「わかりました！」

「うん！」

「わかったわ！」

「つてゴラ従うんかい！ええい！マサさんをナメるなよ！」

『バシヤアバシヤア！』

『シユバシユバ！』

「見える！私にも見えるぞ！」

しばらくの間、迫りくる水をかわし続けました

で結局は・・・

「ううびしょびしょだよ」

「アレだけの攻撃をかわし続けるとは・・・」

「私はなにをやって・・・って掃除いつの間にか終わってるわ・・・

」

「あと少しだったのに・・・あっ」

と俺とリト以外はスツカリ濡れネズミってやつです！

あつちなみに唯が言ってたように掃除はひそかに、こなしてましたぞ！

まっなにわともあれ

「俺の勝ちつてことで！じゃ俺あ水を張るから、オマエさん達は風邪ひかんように体操着にでも着替えてきなさい、ちゃんと体はふいとけよ？」

つって俺は一人プールに残って水を張ります！

ちなみにリト、ずぶ濡れになって服が透けたララ達の姿を見て、

電源が落ちたので端っこんほうにやっときました

・  
・  
・  
・

ではしばらくの間、ホケーとしてたら十分に水が張ったので、水を止めます

とそこへ調度着替え終わったのかララ達がジャージ姿で登場、つてあら？

「保健さんも来たんスか？」

何故か保健さんもおりました、

「ええ、この子達の服を乾かす場所を提供したのよ、でついでにガクラン君の様子を見に来たってわけ」

との事です、ふむん・・・なるほろね？

まっもう終わってんですけどね？さてリトを起こしますか

とリトを起こそうとしたら先に春菜がリトを起こしてました、けど何やら

「リト君お願いね」

と頼んでたのが妙に引つ掛かるが・・・まっ気にせんとっ、っとおよ？リト君、何故か真っ直ぐ俺の所へ

「マサ悪い！」

いや何故にいきなりあやまる？あつアレか掃除中に電源落ちたからか？まつそれ言い出したらアレだぞ？

ララ達なんか俺に水をかけようと頑張ってたただけだぞ？まつ楽しかったけど

「悪いマサ」

『ドン』

はっ？えっ？リト？

「こつこの裏切り者オオオ！」

そついう意味かよオオオ！油断したアアア！  
『バシヤア』

「やった！成功！」

眩しく笑う春菜と

「ハハ・・・よかったね春菜ちゃん・・・」

力無く笑うリトの対比が凄かったです。

・  
・  
・  
・

で、その後はみなさんお察しの通りの展開となりました

あっ何故か

「ララさん連絡ありがとう！」

と美柑が加わってたけどね！チクソウ・・・

第二十話っぱい感じ！（後書き）

後書き

くっ苦しい・・・デキが悪すぎる・・・キツイです・・・

でも頑張りましたので許して下さい。

感想などありましたら是非

## 番外っばい感じ！その3（前書き）

### 前書き

ある意味リハビリ的な物です、あつまたもやセリフと擬音中心です。かなり無茶します。

ちなみに書いてる人はやはりうる覚・・・ゲフンゲフン！

そうとう無茶しますので凄くよくきく薬的な物をもってどうぞ！



### 番外っばい感じ！その3

くもしもゼロ魔世界だったら

その1

「ちょっとアンタ起きなさいよ！」

『ヒュ』

『ガキン』

「ツッ！痛ったあ〜」

「プツハハハ！見るよ流石はゼロのルイズだぜ、使い魔召喚で平民呼び出したと思ったら起こすこともできないみたいだぜ？」

「ああホントだよなアハハハ！」

「アハハハ」「」

『ムクリ』

『ゴキゴキ』

「ふあ〜！ん？アレ？ここどこさね？」

「アンタ！アンタよくもグースカグースカ寝てたわね！おかげでバカにされたじゃない！」

「ぬおう！いきなりそんな言われても困るがな！つつかアレだよ？普通に寝てて起きたらココ何処？だぞ？そんなマサさんの気持ちも考えてみよう！大丈夫だユーならできる！頑張れピンクの人！」

「誰がピンクの人よ！だいたいなんで召喚の儀で平民が出てくるのよ！」

「はい？召喚の儀？はて？あつなんやかんやで巻き込まれた感じ？もうまたかよ！まただよ！まつなれたけどね・・・っとそっぴやまだ名前言ってなかったな、俺あ鬼島 政成 マサって呼んでやってくれや、でユーは？」

「マサね・・・私はルイズよ・・・」

「ルイズね・・・アレなんか聞いたことあるような？まっいいさね」

「ンツン、少しいいかね？」

「はい？あつ・・・クツ・・・」

「何故、私の頭を見ながら涙してるのかね？」

「いやなんでもないのでごせえます、いやホント、コレ汗だから心の汗だから」

「な、なにか引つ掛かるが、いいでしょう、さっ早く契約の議を」

「えっ？あのもう一度！もう一度召喚の儀式を！」

「なりません、決まりですので、さっ早く」

「なんか俺、カヤの外？つうか契約の儀式って何？」

「わっわかりました・・・ちよつとアンタ！コツチを向きなさい」

『バツ』

「アン？なんざんしょ？」

「ブツブツブツ・・・契約をなせ！」

『バツ！』

「ザラメより甘え！」

『ヒョイ』

「えっ！わっきゃっ！」

『スターン』

『ムクリ！』

「ちよつとなんで避けるのよ！」

「いや避けるだろ？つうかルイズ君！女の子でしょ！みだりに唇を許したらいけません！マサさん許しませんよ！」

「むっ！だけど使い魔の契約が出来ないと進級ができないのっよ！」

『ヒュバ!』

「無駄無駄!」

『ヒヨイ!』

「こっの!」

『ヒュバ』

「はい!ちよい待ち!」

『グイ!』

「あっちよつと離しなさいよ!」

『ジタバタ!』

「暴れんなっつの!っあっ!」

『チュ』

「あっ!」

『カツ!』

「頬つぺたでもよかったみたいね?」

「ええ・・・そうみたい・・・」

最初はこんな感じですが、実は呪文とかがよくわかんなかったのがごまかしたのは気にしないで下さい。

後マサはなんやかんやで直接スキューンでなければ、まっいいか？って感じではありません。

まあ頼っぺたで契約できるかはわかりませんが。

・  
・  
・  
・

その2

「諸君決闘だ！」

「よつするにタイムンってことか？いいぜい、売られた喧嘩は買いますよ？」

「威勢がいいのも今のうちだ！ヴェストリの広場まできたまえ」

『スタスタスタ』

「マサさん……こつ殺されちゃう……わっ私のせいで……」

『ポン』

「シエスタ君や？アレは『俺』が我慢できんかっただけでござえます、だから俺の喧嘩なんですよ？シエスタのせいじゃねえっての、

それにだ、俺あ喧嘩はジジイ以外にやあ負けた事がねんだ、勿論、あのイケメン君にも負けるつもりはねえ！  
つうわけでヴェなんとかって場所おせえて？」

「えっあっ……」

『タタタタ！』

「ちょっとマサ！アンタ、ギーシュと決闘ってどづいづことよー！」

「おっ？ルイズ？耳が早いすな、まっそのまんまですわい！」

「決闘なんてやめさない！殺されるわよ！」

『ニカツ！』

「死なぬえつつうの！まっ見てろい！シエスタ案内よろ」

『スツタラスツタラ！』

「あっはい……」

「ああ〜もう！あのバカ！」

・  
・  
・  
・

「フツ・・・逃げずによく来たね、その度胸だけは褒めてあげるよ」  
「うっせえですよキザイケメン君！一々バラを口にくわえるなっつ  
の！もうアレだぞオマエ、かなりアイタタくな感じだぞ？」

「クツ・・・その生意気な態度もコレまでだ！僕はメイジだからね  
！魔法を使わせてもらうよ」

「はいはい好きにしゃがれっつての」

「ちょっとギーシュ！決闘なんてやめなさいよ！」

「フツ・・・誰かと思えば『ゼロ』のルイズかい？ああ、そう言え  
ばあの失礼な平民はキミの使い魔だったね？主も主なら使い魔も使  
い魔・・・」

「うっせえぞキザイケメン！！おうコラ？テメエはよ？口喧嘩しに  
わざわざここまで俺を呼び出したのか？つとルイズ、ちいと下がっ  
てるい！」

「でも！」

「ああもう！シエスタ！ルイズ連行！捕まえといて！」

「あっはいー！」

『バツ！』

「ちょメイド離しなさい」

『ズルズルズル』

「うし！じゃやるか？」

『ゴキゴキン！』

「フツフン！少々痛い目にあわないとわからないようだね！行けワルキューレ！」

『ズオ！ヒュ！』

「おお！凄え凄え！がつ？」

『ガキン！』

「ききませんなあ？」

「なっ！素手で！！！」

「バグキャラだからね！」

「クツ・・・コレならどうだ！行けエエ！」

『ズオズオズオ！』

「おお！増えた！ふむん・・・よし！」

『ガシツ！グイツ！』

「ニヤリ・・・ワルキューレ・ピンボール！」



『ブン！ヒュー！』

『ガゴガゴゴ！ズズーン！』

「ハッハア！コングラッチレーション！」

「なっなっ！バツバカな・・・僕のワルキューレが・・・」

「嘘でしょ！何なのアイツ！」

「マサさん凄いです・・・」

「さあてと！キザイケメン」

『ザツザツザツ』

「ヒッ！くっ来るな！」

『ブンブンブン』

「あららっ？ビビってくれちゃって、でもまあ、一応なっ？」

『グッ！』

「ヒッ！参った！参った！」

「マサー！」

『ヒュー！ゴチン！』

「アダッ！」

「へっ？げっゲンコツ？」

「まっこんくらいで勘弁してやらあ！つとそだキザイケメン君、ま  
ずはやんねえといけないことがあんだろ？」

「ッ・・・えっあっ何を？」

「ハアゝ・・・ごめんなさいは？」

「えっあっ、すっすまなかつた」

「って違うでしょ！マサさんに言ってどうすんの！まずはシエスタ  
！でルイズ！」

でオマエが泣かしちまつた女の子二人にだ！オマエがどんな主義  
持つてるかあ知らねえがよ、女の子泣かしっぱなしってなあマサさ  
ん的にはダメだわ！わあつたか？」

「えっあっああ！わっわかつた！」

「うむうむ！意外と素直じゃねえか？それでこそ漢ってもんだあな  
？じゃ俺あ戻るわ洗濯物が残ってんだわ」

『ザッザッザッ』

「ちょっと待ってくれ！キミのキミの名前は？まだ聞いていなかっ

たよね？あつ僕はギーシュだ！ギーシュ・ド・グラモン！」

「ん？鬼島 政成だ、マサでいいぜい？じゃなギーシュ？ちゃんとごめなさいしとけよ？」

『ヒラヒラ』

「デカイ・・・デカイ背中だ・・・」

マサVSギーシュはこんな感じ、ギーシュに漢スイッチの予感

後、マサはガクランです、更にガンダルーヴの力を使ってません、  
というか使えるかも謎？ただルーンがあるだけです。

その3

「アツ・・・アンタ何者よ・・・」

「鬼島 政成だつての！通称マサさん！ヨロシクね？つて最初に言  
ったべさ？アレ言ったか？どっちだ？まっいいさね、後はまあバグ  
キャラ？」

「はっ？ばぐきゃら？何それ？」

「ああ、そういやわからんわな・・・まあアレだ規格外とかそんな感じ？ルイズと一緒にこった！」

「規格外ね・・・って私と一緒にってどういう事よ！バカにしてるの！」

「違えつての！俺あオマエが夜遅くまで頑張つてんのを見てんだぜ？んなやつ的事バカにする程腐つてねえつての！」

「なっ！しっ知つてたの！」

「まあな？なんか『ズドンズドン』物音がすんなあと思って気になつたんでな？で、そこで気付いたわけよ？」

「まさか気付いてたなんて・・・ンツン！まっいいわ、で何によ？」

「ルイズの魔法は特別なんでね？ようするに規格外みたいなの？」

「はっ？言いたくわれないけどアレはただの失敗よ・・・」

「はい！ルイズ先生！質問！」

「はっ？急に何？つてなんで先生よばわり？」

「気にするなノリだ！つとまあそこは置いておいて・・・つと普通つて魔法が失敗したらどうなんだ？俺の勝手なイメージだけだよ、多分、何にも起きなんじゃね？」

「あっ！たっ確かにそうかも」

「うむ！でもルイズのは何故か爆発？つまりは爆発魔法！つまりは  
イ」

「それ以上は言わす訳にはいかないわ！！」

「何故にわかった！」

「何となく言わしたらいけないと思ったのよ！」

「やるなルイズ！つとまあそれは置いておいて、失敗魔法じゃなく  
て、爆発の魔法なんじゃね？」

「爆発の魔法つて・・・そんな系統はないわよ」

「まっ俺あ魔法の事なんてサツパリサツパリだから戯言に聞こえつ  
かもしんねえけどでも実際ルイズ使ってるじゃん！だからまあ頭ん  
片隅にでも置いとくべし！」

「でも・・・そんな事、常識的に考え・・・常識？ジーー！うん  
！そうね常識にとられるのはよくないわよね！」

「今、明らかに俺を見て決めたよね？いや確かに俺はアレだけど」

「うるさいわね！男でしょ！細かい事は気にしない！」

「そう言われたら致し方ないでござるな！なんせマサさん漢だから  
ね！」

「意外と扱いやすいわよね・・・」

「む？何か言ったかねルイズ君？」

「なんでもないわよ」

ギーシュとの喧嘩後のルイズとの会話、マサ原作知識は殆どないのに、ソレっぽい事を言います。

そしてルイズ、意外と素直にその事を考えます、まあ常識？何それ？といった感じのマサがいるからですが。

この辺はもうご都合バンザイ展開！・

・  
・  
・

その4

『クイクイ』

「アン？つておよ？オマエ確か、キュルケのえっと……フレームだったか？どつたの？」

「ギャウギャウ！」

「ン？キュルケが呼んでると？ふむ……んじ行くか？あっコレ食いなから行くか？」

「ギャウウ」

「うむ！オマエ結構可愛いな？よしよし」

「ギャウ〜」

『バツサバツサ!』

「うおー!」

「キユイキユイ!」

「ん?オマエも欲しいのかマサさん特製の串焼き?」

「キユイ」

「おっ!じゃやるよ?ほれ、あ〜ん」

「キユイ!パク!美味しいのね〜」

「うおう!なんだオマエ喋れんのか?ビックリすんがな!まっぶっちやけ喋れんくても言いたい事は何となくは分かるけど、なっフレイム?」

「ギャウ!」

「そうなのね?ってしまったのね〜!つい美味しくて喋っちゃったのね〜!お姉さまに怒られるのね〜」

「えっ?何?喋れるのがバレるとマズイの?マズイ感じなん?」

「そうなのね〜、韻竜なのがバレるとダメだってお姉さまが!」

「韻竜?なんじゃそら?」

「ってまたやってしまったのね〜！」

『ゴロゴロ』

「ええい！転がるなつての！その韻竜？だっけか？がバレるとマズイってんだっいたら黙っとしてやっから」

『バツ！』

「ホントなのね！」

「おう！オマエ結構面白えしな？つとオマエさんは何て名前なんだ？あつ俺あ鬼島 政成だぜ？マサって呼んでやってくれや？」

「キュイ？マサお兄さまなのね〜、イルククウはシルフィードっていうのね〜」

「スマン意味がわからん？」

「えと韻竜の名前はイルククウなのね！でも韻竜ってわかるからお姉さまがつけてくれた名前はシルフィードなのね〜」

「ふむなるほろね？んじゃシルフィでいいか？」

「いいのね〜キュイキュイ！」

「うむ！ナイススマイル！撫でてやるっ」

「キュイ〜マサお兄さま優しいのね〜」



「ギャウ！」

「おうフレイムもか？うむ！よかるう！つとそだ、まだ串焼きあつから三人？三人なのか？まっいいさね、三人で食おうぜ！」

「ギャウ」

「キュイ！嬉しいのね」

「うむ、食いねえ食いねえ串焼き食いねえいいから食いねえ串焼き食いねえ！つてか？つてアレ？なんか忘れてんような・・・」

「・・・遅いわね・・・」

なんか使い魔達は仲良くなりました、そしてキュルケさん待ちぼうけ、残念！

けどその後にマサはちゃんと行きましたよ結果は・・・

「悪い！スツカリ忘れてた！」

「忘れてたって！いえいいわ・・・私ね？あなたに・・・」

「つてコラ！キュルケ！オマエなんつう恰好してんの風邪引くよ？つつか女の子でしょ！憤みくらいは持ちなさい！」

「いやえと・・・見えるの？」

「夜目はきくからな？つてほら、ちゃんと服をきる！全く男は基本は狼なんだから気をつけなさい！マサさんだからよかったもの」

「その展開を望んでた」

「このバカチン！」

『ゴチン！』

「イタツ！何を！」

「何をじゃないでしょ！もっと自分を大切になさい！」

『ガチャ』

「キュルケ！誰だその」

「ちっと黙ってるゴラアアア！」

「ヒイ！スイマセン！」

『ボタン、タタタタ』

「あの・・・今は違うのよ今は」

「っせえです！」

『ガチャ！』

「キュル」

「アアアン！ギロリ」

「まっままま間違えました!」

『バタン、タタタタ』

「さてキュルケ君や?」

「違っわよ!今のは!」

「ハアゝもういいわい、どうせまだ何人か呼んでんだろ?残りも俺が追っ払っとくからよ、自分を安売りすんなよな?よく考えろい!」

『バタン』

「あっ・・・行っちゃったわ・・・自分を安売りするな・・・か・・・あんな風に怒ってもらったのって初めてかもしれないわね・・・本気で微熱が情熱に変わりそう」

なんやかんやでマサ、お母さんモード!後、意外とそういうのは厳しいかも?でも服とかを来てたら隣で寝てても、まっいつか?とか思いますが、その辺りは曖昧です。

そしてキュルケ、フラグの予感!・

・  
・  
・  
その5

「アンタ、どこ行ってたのよ!まさかキュルケの」

「ルイズ君、正解！ちよつくら説教してた」

「はっ？説教？つてあの時の私みたいな感じ？」

「そっ！全く、女の子なら慎みをつてな？」

「ププ・・・キュルケ、いい気味ね・・・っとそうだったわ、明日、街に行くから」

「おう？何しに？」

「アンタの武器を買いに行くのよ」

「いらねえ！グーがありますから」

「ダメよ、使い魔が丸腰なんて私の恰好がつかないじゃない」

「いや他の使い魔の皆さんは丸腰」

「それは言ったらダメよ！いろんな意味で！」

「うむ、まっわあったわ、んじゃ明日は街な了解」

『チユンチユン』

「ルイズ？起きれ！朝ですよ？今日は街まで行くんじゃねえの？」

「ンツ・・・そうだったわね・・・それじゃ仕度するから」

「あいあい」

『ガチャ』

・  
・  
・

『ガチャ！』

「さっ行くわよ」

「あいよ！で何で？」

「馬を借りようかと思ってるわ、だいたい街までは馬で3時間ってところだし」

「んじゃ俺が走るっか？」

「はっ？アンタいったい何を？」

『バツ！』

「ってちよっと！」

「ルイズ？案内よろ？」

『ドンツズダダダ！』

「嘘！速っ！速い過ぎるわよオオオ」

「ってコラ、ルイズ？場所場所！」

「えっあつ？アツチよ」

「あいよー！」

『ズダダダ！』

「なっ慣れてくると結構気持ちいいわね？コレ？」

「そいつあよござんした？ってアレ？」

「ん？どうしたのよマサ？」

「いや知り合い見つけた」

「はっ？どーにこ？」

「上ー！」

「上？」

「ふむ・・・ルイズ？跳ぶ！」

「はっ？跳ぶって？いきない何？」

『グッダンー！』

「つて嘘オオオ！」

「残念ながら事実でござる！ニンニン！つと着地！」

『スタツ！』

「よっ！シルフィ？」

「キュイキュイ！」

「」「ポカーン！」「」

「つておよ？ルイズ？キュルケ？後一人は・・・誰だっけ？」

「キュイキュイ！」

「あつアレか？昨日シルフィが言つてたお姉さまってやつ？」

「わかるの？」

「まつ何となくな？つと俺あ鬼島 政成な？オマエさんは？お姉さまって名前じゃなかる？」

「タバサ・・・」

「タバサね？よろゝ！つてルイズ？いつまでほうけてんだ？」

「アツアンタのせいでしょ！アンタどんだけ無茶苦茶なの！」

「何を今更、それがマサさんつてもんですよ？つとキュルケよっ！

「ちったあ考えたか？」

「えっ？まっまあね……」

「うむ、なら」

「ちゃんと考えたわダーリン？」

「……はっ？アレ？今アレ？幻聴？」

「幻聴じゃないわよ、ダーリン？」

「ちよっとどついう事よマサ！！」

「知らんがな！つうかマサさんも意味わかってないからね！全くもつて予想外だからね！」

「フフ……アナタに怒られた時にね……私の微熱が情熱に変わったのよ？」

「ダアア！また慣れない説教裏目ったアアア！」

「フフ……ダーリン！」

『バツ！』

「させるかアア！タバサガード！」

「ムグッ……なんで？」



「いやスマン！タバサしかいなかった！悪い！」

「ちょっとダーリンなんでよ！」

「何となくだ！」

「マサ！昨日の事を詳しく話さない！」

「マサお兄さま大変なのね〜キュイキュイ」

「喋っちゃダメ」

『コン！』

「キュイ〜」

何故かタバサがガード要員に、マサ的には仲が良さそうだからいかな？と思ったようです、ちなみにコチャコチャあった後は例の、惚れたら考える、との答えになりました。ひそかに【ん？風邪か】が発動してましたしね。

後、シルフィードで街まで行く事になりました。

あつ長くなってきたのでゼロ魔偏は以上です。いつか続きはやる  
やも？

・  
・  
・  
・  
くもしも恋姫世界だったら

その1

『キラッ!』

「ん何だ今の光りは？」

『ヒューーン』

「よいしょオオオ！」

『ズドオオオン!』

「またまた穴から落ちたわけですが、はて？はたしてここはどどこじやろ？」

「なつなな人・・・なのか？」

「およ？第一街人？街人？まっいいさね、そんな感じの人発見！さて聞き込みだ！」

「おい！オマエ！何者だ？」

「ぬあ！先手打たれた！やるな！まっいいさね、俺あ鬼島 政成つてんだ、マサって呼んでくれや？でアンタは？」

「きじま まさなり？どれが字でどれが名なんだよ・・・まさか噂の天の御使い？」

「もしも〜はよ名前？はよ名前教えてくれなんだら、普通子と呼ぶぞ？」

「誰が普通子だ！私の名前は公孫贇だ！」

「うい！ハム子ね？」

「いやなんでハム子！！」

「うむ！何となくだ！シツクリくるだろ？」

「確かに馴染むけどそんな名前はイヤだアアア！普通に呼べ！」

「わあつたよ、普通子？」

「そつちじゃないからアアア！公孫贇だから！」

「うむ！公孫贇、絶好調！」

「何がだアアア！」

まさかまさかのハムさん陣営スタートです、ちなみに書いてる人は真をやった事ありません、故に真のキャラが出てもなんか違った感じになります。

後、マサ三国志、あんまり詳しくありません、ココでも、ああそ  
う言えばいたね？こんなの？レベルです。

その2

「ほうほう！なるほろ、今は乱世だと？コレまた物騒なこつて」

「まあ確かに物騒な世の中だけどな、マサのいた天の国では違ったのか？」

「天の国ちゃうちゆうに！つと一部じゃ戦争とかはあっけど概ね平和・・・俺の回り以外はね！！」

「はっ？どういうことだ？」

「フツ・・・目が覚めたら森の中だったり、氷の世界だったり、砂漠だったり、大海原を漂う小船の上だったり・・・」

「いや悪かった！ホント悪かった！もう聞かないから！ホラ？お茶飲むか？」

「公孫贖いい奴だな？貰うわ」

「いや別にいい奴って訳じゃないって」

「照れんなつつの！もしオマエがいい奴じゃなければ俺あ今だに原っぱさ迷って野宿だぜ？」

「いや普通はほつとかないだろ？」

「そういう事を『普通』って言うのがいい奴ってこつた」

「ッー！」

「おやま赤くなっちゃってまあ、可愛いですな？撫でていいか？」

「かわ！可愛い！」

『ナデナデー！』

「まっもっ撫でてるけどね！」

「~~~~~！！！」

マサのスキル撫でたがりが発動しました、書いてる人の勝手なイメージですが、ハムさんお人よしのイメージです、後、照れ屋さん。

・  
・  
・  
・

「で、マサはコレからどうするんだ？」

「ふむ、公孫贖のところで雇ってくんね？料理人とか大工とか、喧嘩要員とかで？」

「バラバラだな、ってマサ？喧嘩って・・・オマエ戦えるのか？」

「バグキャラ、ナメてもらっちゃ困りますぞ！ジジイ以外にあ喧嘩で負けたことあねんだよ」

「ばぐきやらっ？」

「アレ横文字通じねえのかよ！日本語は・・・」

「マサ！なんかそれから先は言っちゃダメだから！」

「うつつむ！俺もそんな気がする、でバグキャラってなあアレだ、規格外ってこつた」

「規格外？ああ〜空から降ってきてたしなしかもあんな高さから降ってきて無傷だったし」

「そゆこと！試しにその剣で斬りかかってみるか？」

「はっ？危ないだろ？」

「まっいいからいいから！マサさん信じて〜」

「ああもうわかったよ！避けるよ！」

『ヒュ〜！』

『ガキン！』

「なっなアアア！素手で！！」

「という事です！お分かりいただいたかね？」

「あっああ・・・とつとんでもないな・・・天の国ってのはマサみたいなのばかりか？」

「んなわけねえじゃん？俺みたいのがゴロゴロいたらエライ騒ぎになるわ！だからバグキャラなの！規格外ね！」

「なつなるほどね・・・ばぐきやらか・・・ってアレ？マサさつき  
爺さん以外には負けた事がないって言ってたよな？って事は・・・」  
「うむ俺のジジイは更にとんでもないってこつた・・・マジで洒落  
にならんぞ？」

「ハツハハ・・・とんでも一族か？」

「概ね当たり！まつジジイたあ血は繋がってねえけど」

「はっ？」

「俺あ拾われっ子なのだ！」

「オイオイ！んな事アツサリ言うなよ！」

「気にしてないからな？それにだ俺がそれを知った時なんてテレビ・  
・・・ああ娯楽の道具な？を見てる時にカクカクシカジカだぞ？」

「うわあ〜マサ？オマエ大変だったんだな？」

「フツ・・・まあな・・・チクソウ・・・アレ？なんだろ？このお  
茶しよっぱくね？なんかしよっぱいんだけど？」

「そうだな・・・しよっぱいな・・・クツ・・・」

マサのコレからについてでした、カクカクシカジカの部分は本編  
参照でヨロシク願います。

後マサはなんでも屋的なポジションになります。・

・  
・  
・  
その3

「マサ？ホントに一人で大丈夫か？」

「余裕！つうか盗賊風情にマサさんが負けるかっての！逆に味方いたら巻き込まれっから！じゃ行つてくらあ！」

『シユバ！』

「ホントに一人で行つちやつたよ・・・マサ大丈夫」

「オラオラオラ！テメエらそれでも漢かアアア！だっせえマネしてんじゃねえぞ！」

『ズドドドドド！』

「ギヤアアア！」

「グアアア！」

「なっなんなんだアイツは！」

「バグキャラだ！オラアアア！にんげ〜ん」

『ガシツ！』

「はっ離せ！」



「イヤで〜す！ボーリング！」

『ブオン！』

「ギヤアアア！」

『カコンカコンカコン！』

「スツトラ〜イク！つてか？」

「ハハハ・・・心配して損した・・・」

マサの初陣です、ちなみに怪我人は大勢出てますが奇跡的に死人はいません、ご都合です！

後、盗賊団はというと・・・

「オマエら正座アアア！」

「ハッハイ！」

「オマエらは男か？それとも漢か？」

「はっ？意味が」

「ええい！盗賊B歯を食いしばれ！」

「はっ？」

『ゴスン!』

「グハアアア!」

「いいか!漢はカッコつけてなんぼだろ!オマエらは今の自分を見てカッコイイと思うのか!」

「ハッ!俺達は・・・俺達は・・・」

「フッ・・・なあとまだ間に合う!オマエなら真の漢になれるはずだ」

「ほっ本当か?」

「ああ!きつとな!まずは罪を洗い流しそして真の漢としての第一歩を始めるのだ!今ここから!」

「おつ俺達が・・・真の漢に・・・」

「やるぞ!俺はやる!」

「俺もだ!」

「」「」「フアアア!」「」「」

「うむうむ!じゃ俺あ公孫贄に便宜はかってもらっからよ?オマエのクビが飛ばねえようにな?」

『ザッザッザ』

「ちょっと待ってくれ！オマエのいやアンタの名前は！」

「フツ・・・ 政成・・・ 鬼島 政成だ・・・ マサかマサナリと呼べ？」

「マサナリ・・・ ウオオオオオ！」

「マサナリ！マサナリ！」

・・・

「オイオイ・・・ オマエ何やってんだよ？」

「まっ気にすんな！アイツらは、もうバカなことあしねえよ、だから」

「ああわかったよ・・・ ハア」

「流石は公孫」

「白蓮だ」

「はい？」

「白蓮、私の真名だよ」

「真名？何それ？」

「ああ〜そついや知らなかったな・・・まっ信頼した奴にしか言わせない神聖な名前つてやつ」

「おう？マジか？いいのか？」

「いって、マサのおかげで私の軍は一人だつてかけてないし、正直助かったし、それにマサは、まっ友人だからな」

『ニカツ！』

「そつか？んじゃ改めてヨロシクな白蓮？」

「ああ！」

ココでも漢スイッチを押してます、やりたいほうだいです。

そしてハムさんに真名を覚えてもらいました、なんやかんやで無茶苦茶してるマサですがハムさんは信頼してるようです。

その4

「白蓮〜用事でなにさね？」

「来たかマサ？用事ってのは、新しく来た客将を紹介しようと思っ  
てな」

「客将？何それ？」

「ああ〜まあマサみたいな感じだ」

「ういうい！でその客将って？」

「ん？アレ？さっきまで」に・・・マサ！！」

『シユバ！』

「アン？ってうおー！」

『ガキン！』

「オマエ！いきなり何すんの！初対面の人にいきなり槍を突き立てちゃダメでしょ！マサさんじゃなかったら貫通してるよ！」

「フツ・・・いやすまないな、ちまたで噂の男の実力が見たくてな、しかし噂だとばかり思っていたが、本当に素手で槍を受けるのだな」

「趙雲！」

「ああ白蓮さんや、マサさんは特に気にしてねえんでそうカツカツしなさんな、まっ心配してくれたなあありがてえけど・・・ってアレ？白蓮？今、趙雲って言わなかった？」

「あっああマサがそう言うなら、あっそれと趙雲って言ったぞ」

「ハアアア！超雲？アレ？超雲？」

「うむ！確かに趙雲だが？」

「マジかアアア！アレ？女？アレ？嘘？アレ？」

「何をそんなに驚いて？」

「マサのそんな姿初めてみるな？」

「イヤイヤイヤ！アレ？ちょ！白蓮先く生、質問！曹操って男？孫策は？」

「はっ？マサ、オマエ何言ってるんだよ二人共、女だぞ？」

「マジでかアアア！アレ？なんかそんな感じの設定聞いた事あるよ  
うな・・・」

「さっきからブツブツ言い出してるが大丈夫なのか？」

「うっうむ！なんとか！立ち直りの早さには定評があるからな！つ  
て悪いな、取り乱して、俺あ鬼島 政成な？マサって呼んでくれや  
？」

「マサ・・・ふむ字は名は？」

「ああ趙雲、マサはなカクカクシカジカだから」

「ほう！それは興味深い！」

「まっ白蓮の言う通りでござるよ、趙雲でいいよな？」

「ああ構わないが、あっそれと先程の続きをしたいのだが？」

「は？続きつて？ああ喧嘩か？別にいいぞ？売られた喧嘩は買いますよ！？」

「フフフ・・・楽しみですな」

「趙雲、悪い事は言わない、止めたほうがいいぞ？」

「何をおっしゃいます公孫贄殿！コレの程の強者を目の前にしては武人の血が抑えられますまい」

「まっそこまで言うなら止めないけど、じゃ修練場に行くぞマサもついて来てくれよ」

「あいあい！」

・  
・  
・  
・

「フフ・・・ちまたで噂の鬼人政成とやらの力とくと見せて貰うぞ？」

「うわ何その中二臭い二つ名！マサさん恥ずかしいだろ！」

「あっそれ私が広めた！」

「ちょ！白蓮さ〜ん！何やってくれちゃってんの！マサさん明日から街歩けないよ！」

「まあいいじゃないか？結構似合ってるぞ？つとよそ見していいのか？」

「そういう事だ！ハアアア！」

『ズバババ！』

「ああもう！素手バリアアアア！」

『ガキнгаキнгаキン！』

「クツ！やはり硬い！しかし速さは私が」

『シュバ！』

「速さは何ですかね？趙雲君？」

「なっいつの間に後ろに！！！」

「今だよーん！」

「このッ！」

『ヒュン！』

『シュバ！』

「残念！外れ！」

「クツ！ハアアア！！！」

『ズババババ！！』



『ヒュヒュヒュヒュ!』

「ハッハア!まだまだ速さが足りん!」

「クツ!ハアハアハア!」

「ふむ、息が上がってきましたな?じゃそろそろ」

「クツ!来るか!」

『ヒュ!ゴチン!』

「アダツ!クツ・・・げっゲンコツ?」

「うむ!さっきの不意打ちの分な?でまだやる?」

「さっきのは気にしてないと言ったはずでは?」

「まっ一応だ一応!」

「一応か・・・フフ・・・ハハハ!参った!フハハハ!私ではとても勝てそうにないな」

「うい!勝つ利つと!ああ腹減ったな〜とそだ趙雲も一緒に食つか?美味しいの作るぞ?」

「鬼島殿が作るのか?」

「鬼島殿言つな!マサだマサ!もしくは政成!」

「ああ・・・では政成殿と」

「殿はいらん！」

「フフ・・・承知した、政成だな」

「うむうむ！お〜い白蓮！何時通りオマエも一緒に食うだろ？」

「あつああ、しかしマサ、ホントに規格外だな・・・とんでもないよ、コレが、ばぐきやらってやつなのか？」

「公孫贖殿？ばぐきやらとは？」

「マサの事だ規格外、ばぐきやらって言うらしい」

「なるほど・・・鬼人・政成は確かに規格外でしたな、ばぐきやらか、フフフ」

「ん？どうした急に」

「面白い御仁と知り合いになれたと思いましてな？」

「まっ確かにマサといると飽きないよ、その分疲れるけど」

「お〜い！白蓮！疲れるとか言うな！ちゃんと聞こえてるから！つうか頑張れ白蓮！負けるな白蓮！白蓮がツツコミしないとマサさん大変な事になるよ？」

「ああもう！少しは自重しろ！」

「無理でえす！」

「ククク・・・やはり面白い御仁だな・・・」

趙雲さんとの顔合わせと手合わせでした、戦闘シーンは苦手です。つうかヤバイですパワーバランスとか、まっまあサラツと流して下さい。

後、マサに二つ名が出来てました、鬼人・政成です、中二臭え！出来ればコチラもサラツとお流しを・・・

・  
・  
・  
その5

『ガチャ！』

「ふむ来ましたな政成？」

「いやオマエ何してんの？」

「ふむ、夜伽を？」

「はっ？夜伽？」

「フフ・・・じつじつとです」

『ハラリ』

「ってコラ！やめなさい！マサさん怒るよ！つつか何？今の若者の性はこんなにも乱れているというのか！！」

「おや？興味がないと？」

「ふむん？興味ねえ・・・特には？つつかはよ服着れ！女の子でしょ！憤み持ちなさい！もうコレかなり言ってるよ！」

「私は初耳ですが？」

「ああ・・・気にすんな！つつかはよ服を着なさい！」

「ふむ・・・しかし折角こうして夜伽に」

「そらあ！」

『ゴチン！』

「アダツ！」

「は・よ・着・ろ！！！」

「ツう仕方ありませんな」

『シュシュ』

「うむ！で趙雲君や何故に、んなマネを？」

「ふむ？不意打ちの詫びと夕食の礼をかねてな？」

「アホ！」

「むっ！アホとは失礼な！」

「あのな趙雲君や？んな事は詫びや礼でするもんじゃねえでしょうに？つうか不意打ちはゲンコくれてやったし、晩メシは俺から誘ったろうに？」

「むっ……政成は私が魅力がないと？」

「待てや！何でそんな事に？」

「普通はこのような状況になったら男は喜ぶはずなのだが？」

「残念ながらマサさんは普通ではないのです！」

「むっもしや？」

「違っぞ？そっちの趣味はねえ！」

「では！何故？やはり私に魅力がないと？」

「んな事は惚れた相手にするもんだろ？つうか趙雲は美人に見えなきゃそいつの目はおかしいと言っておこっ！」

「面と向かってそう言われますと照れますな？ンツンということは私は政成に嫌われていると？」

「ブツブー不正解！趙雲のこたあ嫌いじゃねえよ？寧ろ好きに属するぞ？まっ会ったばっかだけど」

「では！」

『グッ！』

「脱ぐなっつの！あのな？好きではあるが惚れてはいない！わかる？ちなみに白蓮も好きに入る」

「むっ？また複雑な？」

「男心は複雑なんですよ？」

「フフ・・・普通それは逆では？」

「趙雲君？残念ながら」

「政成は普通ではないのだろ？フフフ・・・仕方ありませんな夜伽は諦めますか・・・がつ？せめて一献付き合ってもらえぬか？」

『チャプン！』

「おう？酒か？ふむ・・・マサさん一応未成年なんだが？まっ酌くらいはしてやらあホレ趙う」

「星で構わない」

「はい？」

「真名だ」

「ああ！いいんか？」

「ああ、政成に呼ばれるのなら構わない、面白い御仁だしな」

「そらどうも？じゃ星？ホレ」

『トクトクトク』

「フツ・・・酌が良いと更に美味しく感じるな？」

「んなもんか？」

「そういうものだ」

趙雲が夜襲をかけてきましたがやはりマサは受けませんでした、けどなんやかんやで真名で呼ぶ事を許されました、やはりご都合！

っと以上になります！またまた半端な感じですが、コツチも続きをするやも？

## 番外っばい感じ！その3（後書き）

後書き

やってまっています、もう何コレ？といった感じですよ。

ですが一応は頑張りましたので、次回は本編ですよ！よろしければそちらも見てやって下さい。

感想などもありましたら是非。



## 第二十一話っぽい感じ！（前書き）

前書き

大分苦戦しました、けどデキは・・・

何時ものように薬的なものをお持ちになっておすすみ下さい。

## 第二十一話 っぽい感じ！

「コチラ、ブラボー1ターゲットに変わりはないか？」

「ブラボー2 変わりなし、ってマサ？二人しかいないんだからいちいちコードネームで言うことないだろ？」

「おいおいリト？折角こうなんかソレっぽい感じでやってたのに台なしだろ？コンナロー！」

ン？今、何をやっているのかと？ふむ、ならば説明しよう！

実は・・・

「盗撮とな？」

「ええ、プールの時期になるとそういう事をする人が出るのよ」

盗撮ね・・・つつか校長（変態）の仕業じゃね？アレならやりかねんし

あつちなみに今日は体育があります、でプールつつことになってただけど、男女別らしい。

何故と思わなくもないが、唯の情報により何となく納得しました。

何故か俺は一緒でもいいのでは？とララを筆頭に女子の皆さん、が言ってくれましたがあえて回避！

だって目が怖かったんだもの！普通は逆だもの！

いやスンマセン取り乱しました。

今はその盗撮君の話題でしたな、ふむ・・・

よし！

「俺とリトで取っ捕まる！なあと目星はついてる！」

「はっ！マサなんで俺まで！」

いやそんな言われても

「結城君、マサ君にはブレーキが必要なのよ、アナタなら出来るわ  
「！」

「古手川！？いや言ってる事はわかるけど、確かにブレーキ必要だ  
けどー！」

全く、リト君は中々に頷いてはくれませんが、なれば！

「唯の言う通りだぞ、リトよ！このままだと校舎の半分が灰燼とな  
るぞ！そしてそれを俺が直すぞ！それでもいいのか！」

「どんな脅し文句だよ！ああわかったよ！やる！やるよ！」

ということがあったのでしやるよ。

ちなみにリトは校長室の監視をしてもらっております。

『キーンコンカンコーン!』

むっ? 授業開始の合図!

「おいマサ? 授業始まっちゃったぞ? いいのかよ?」

「そこは大丈夫、盗撮犯を取っ捕まるつつたら授業免除になっただからな」

「はぁ・・・それならいいけど」

うむうむ、微妙声ながらもリト君、納得してくれました。

学校側も結構困っていたらしいし、今使ってる小型無線機も学校からの借り物です。

何でそんなものが学校にあるのかとかは聞いたらいけないぞ?

っとイカンイカン。

「リト? 今、うちのクラスの女子達がプールの時間だ、つまり奴が動くのは時間の問題という事だシツカリと見張りするのだ!」

「マサの中では既に犯人は校長で確定してるのな?」

いや奴だろ? つうか奴以外には・・・エテ山も、ちと怪しいか? でもまあ奴だと思っ。

まっ一応は部外者の犯行も考慮して俺は屋上で張ってるけど。

あつ 双眼鏡を持たされたけど俺には必要ないつうことでリトに持たせてます。

「校長動く様子ないぞマサ？」

ふむ・・・

「リト？気を抜くな！奴は油断を誘ってるんだ、気を抜いたら後ろからガブリだぞ！」

少しの油断が死を招くんだぞ、全く！

「いや後ろからガブリって・・・怪獣じゃないんだから」

「似たようなもんだ！」

まっ 後ろからガブリはないとは思っけどね？でも油断は禁物なのです！

っ っておよ？

・  
・  
・  
・

ララ 視点

『バシヤ』

「気持ちいいね唯？ハルナ？」

今は体育の授業中、今日からプールが始まったの、昨日頑張った  
かいがあったよ！

ン？私は遊んでただけじゃないのだった？

ぶっ！そういう事は言っちゃダメだよ！

まっまあ、確かに殆どマサが掃除してくれてたんだけど。

「そうね？今日は少し暑かったし・・・そう言えばマサ君、盗撮犯  
捕まえるって言ってたけど大丈夫かしら？」

唯も気持ちよさそうにプールサイドから足をつけてる、今日は自  
由に遊んでイイって先生も言ってたしね？

それでお喋りしながらクラスみんなもそれぞれ自由に過ごして  
る。

で唯はマサが大丈夫なのかな？って言ってるけど、心配ないと思  
う、だから私は唯に

「大丈夫だよ！マサだもん！」

って自信を持って言った、そしたら唯はクビを横に振りながら

「私が心配してるのはマサ君の事じゃなくて・・・やり過ぎないか  
って事よ？」

だって！

「確かに・・・マサ君ならありえるね」

ハルナも唯の言っていたことに頷いてるし

「まっ盗撮なんてするハレンチな奴は多少は痛い目に合った方がいいわよね？」

唯は盗撮をしている犯人に対してそう言うけど。

「うーん多少で済むかな？」

って言った私の一言に、冷や汗を流しながら

「……死にはしないでしょ。」

「もはや生死に関わってつてきてるんだ、否定は出来ないけど。」

ちょっとだけ、その犯人のメイフク？（マサがこういう時に使う言葉だつて言ってた）を祈った。

そしたら唯に

「ララさん？何してるの？」

「メイフクを祈ってるんだよ？マサに教えてもらったの！」

って聞かれたからそう答えたらハルナが

「……なんか微妙に違うような？」

だって、どっかおかしかったかな？

「当たつてると言えば当たつてるけど・・・ハア、マサ君もまた微妙な事を・・・」

むう？当たつてるのに唯からは、なんでかわからないけどため息をつかれちゃった。

何でだろ？って私が考えてたら

「ってララさん？水着！！」

唯が急にそう私に言ってきた、ほえ？水着？水着がどうしたんだろ？

「ララさん！なんか水着が伸びてる！」

ふえ？伸びてる？ハルナがそう言うので水着を見てみたら。

【プシュ、スイマセン、ララ様、つい気持ちよくて・・・】

と言うペケの声、うん、実は学校用の水着えっとスクール水着だっけ？が無かったからペケに変身してもらってたんだけど、

ペケ、この暑さの中でのプールが気持ちよかったみたい、ダラーってなっちゃってるし。

「アハハ、伸びちゃった。」

私がそう言ったら唯もハルナも慌てて

「何でアハハって笑ってるの、ってその水着どうなってるの！！」



「そっだよララさん！胸が見えちゃってるジーーうう・・・やっぱ  
り大きい・・・」

だって、ハルナは私の胸を見ながら小声で大きいって呟いてた、  
そうかな？

「ちょっと春菜さん？今はそっいう事を言ってる時じゃ」

「ジーー」

「えっなっ何よ？」

「唯さんも大きいよね・・・私が一番小さい・・・うう・・・努力  
してるのに」

なんかハルナが落ち込んだじゃった。

そしたら唯がそんなハルナを

「だっ大丈夫よ、きつと、うん！」

って一生懸命慰めてた、

「そっそっだよね、頑張ってるもん、毎日牛乳飲んでるし、腕立て  
伏せだって!!」

そんな事してたんだ？そんなハルナを見たらなんでだろちょっと  
だ視界がぼやけてきちゃった。

「って今はララさんよ！いや春菜さんの事を蔑ろにしてるわけじゃ

ないからね？ホントよ？」

あっ！そうだった、でもどうしようももうビローンってなり過ぎちゃってるし。

「あっ私タオル取ってくる！」

『バシヤ！タタタタ！』

唯の慰めで元気になったハルナがそう言ってプールから上がって更衣室の方へと走って行こうとしたら。

『ガサツ！』

更衣室の近くから黒い人影を飛び出していった。

「キヤツ！えつまさか今のって！」

「盗撮犯！！ツ待ちなさい！」

ハルナはそれにビックリしちゃったみたいでシリモチをついてる、唯はその人影に大声でそう言うも人影は止まらない。

どうしよう？追っ掛けた方が？って考えてたら。

地面に何かの影、その影はドンドン大きくなっていった。

『ズドオン！』

って音がした、そこにはやっぱり

「リト？盗撮犯発見した、追跡する！」

マサがいた。そしてマサは

「ララ？コレ、タオルな巻いとけ！じゃ俺あ追っ掛けるから、サラバ！ニン！」

『シュバ！』

って言って私に大きいタオルを渡して犯人を追っ掛けていった。  
った。

うーん、やっぱりマサ、カッコイイ！！

「今、マサ君、上から降ってきたわよね・・・」

「そこは、ほら・・・マサ君だし？」

「何かしら非常識なんだけどそう聞くと納得せざるえないわね」

・  
・  
・  
・

マサ視点

「何をいまさら、それがマサさんってもんでござえますよ？って言うてる場合かつつの！リト？犯人は校舎内部に侵入！警戒されたし！」

でも何となく言っておかないといけないような気がしたのでござるよ！

「マサ？校長じゃなかったみたいだな？つてあれ・・・マサ！犯人らしき奴、俺からも確認できた！俺も追っ掛ける！」

おっと、イカンイカン！リトから連絡、どうやらリトも犯人を確認したみたいだ、しかしまさかまさかの校長（変態）ではないかな？

流石のマサさんも予想外でえす！つと見えた！リトもいるな？

「リト？捕まえるのだ！」

「ああ！ダアア！」

『バツ！』

おっ？スピアータックル！

『ガッ！ゴロゴロー！』

うむ！決まった、やるなリト？

『ガラッ！』

「なんだ、なんだ？」

「いったい何の騒ぎだ？ン政成か？」

って、凜？ココって二年の教室近くだったんか？

「よお凜？奇遇だな？」

とりあえず凜にアイサツ

「うむ、政成この騒ぎは何だ？」

「いや盗撮犯をな？っていけね！説明は後な？」

凜への説明は後回し、現在進行系でリトが

「離せええ」

と暴れる盗撮犯を抑えてますからな。

「離すか・・・っうわ！」

『バキッ！』

あっ・・・野郎！

「はっ！はやく離さないからだ！」

『ダッ！』

野郎・・・

『ヒュバツ！ガシッ！』

「なっ・・・はっはな・・・イダダ！」

「こんくそがきゃ・・・よおくも

「リトを殴ってくれたよなあ？おうゴラ？テメエが盗撮犯だとかあもうどうでもいいわ・・・テメエ・・・このまま顔面整形外科医送りにしてやるよ！」

『バキゴキン！』

犯人を捕まえてる手とは反対の手の指を鳴らす、こんくそがきゃ許さん！

「ヒッ！！」

ハッ！いまさらビビったってクソ遅えよボケが！

『グッ！』

「ってマサ！落ち着けて！俺は大丈夫だから！なっ？」

アン？リト？っハアゝいやいや全く・・・リトはお人よしといふかなんというか・・・

「チッ！コレで勘弁してやらあ！」

『ゴガッ！』

「ガッ！」

『ドサリ』

ゲンコツです、ただちょっと強めのな？バツチリ気絶してるしな？

「リト？大丈夫か？」

つと今はリトにケガが無いか確認せねばな

「あつああ大丈夫！ちよつと口を切っただけだから」

ふむ、確かに口から、ちいとだけ血が出てんな？あつヤベ、またム力ついてきた、やっぱコイツ、顔面整形外科医送りに

「大丈夫だって！マサ落ち着けて！」

むつやっぱリトに止められた、なんてお人よしな奴め！

「しゃあねえですな？」

とりあえず、グーは収めます。

「政成もあんな風に怒るのだな？正直、少し意外だったぞ？」

したら凜がそう話しかけてきました、そんな凜に俺は

「まっダチ殴られたの見たらカツとなった！反省も後悔もしていない！全く微塵も！」

つつといた、ええそうですとも、リトが止めなかったらヤツてたね！うん！

「いや流石にやり過ぎはダメだって・・・まっ俺の為に怒ってくれたのは嬉しいけど」

むう残念？けど、そう言われたら、ちと照れるやも？いや照れるこっちゃんえやな。

「っと凜？教室出てていいのか？先生にコラってされんぞ？」

「問題無い自習だ、っとそうだった、政成とソコの男子生徒は……すまない名前は？」

「えっあ、結城 リトだけど」

「ふむ、結城リトだな、私は九条院 凜だ、政成の友人だな、よろしくたのむ」

「あっああ！」

むっ？そっういやキミらって初対面でしたな？いやはや紹介すんのスツカリ忘れてたわい。ってアレ？

「凜？沙姫と綾は？一緒ちゃうん？」

見かける時はいつも三人一組だった気がする、けど今は凜オンリー

「むっ？沙姫様と綾は今は教室にいるぞ？危なそうだったので控えてもらっていた、っといかな少し話しがズレたな、政成達は授業はどうしたんだ？さっき盗撮犯がどうとか言っていたが……？」

あっそんなの？まっ確かに沙姫は運動は出来そうだけど、なんやかんやでアレな事になりそうだもんな？

それに綾は運動苦手そうだったし？



「っと盗撮犯の事だったな？ふむ」

「まあそのまんまですわ、なんかプールん時期になつと盗撮犯が出るって聞いて俺とリトで取っ捕まるべさ？って話しになつたんよ？でリトが見事に取っ捕まえたという訳ですわ」

「簡単にザツと経緯を話しました、したらリトが

「いや俺だけの手柄ってわけじゃないだろ？」

「つって謙遜しなすつた、しかし俺

「捕まえたんはリトだろ？俺あトドメを刺しただけじゃん？所謂「こつあん」ゴールを決めただけだし？」

「と思うわけよ、けど凜に

「なるほどな・・・まあ二人の手柄ということでもいいではないか？」  
「って言われたので」

「じゃそれで！」

「それなら、うん」

「俺もリトもその言葉に納得しました。」

「うむ！ン？政成、そういえば犯人、そのまま放置してよかったのか？」

凜もそんな俺とリトを見て満足気に頷きつつ犯人のを指差す、けどまそこは大丈夫でござるよ！ン何故かとな？

「あの手応えだったなら2時間おねねコースだな？」

というところでございますよ。

「手応えでわかんのかよ！」

「だいたいな？」

リト君や？マサさんナメてもらっちゃ困りますぞ？

「フツ・・・流石だな政成、であの不埒者はどうするのだ？」

凜に褒められたっばい！つとあの盗撮犯ねふむ・・・

「とりあえずお顔拝見といきますか？」

ツカツカと犯人に近付きまする、ン？実は犯人、マスクとグラサンで人相を隠してやがったんですな、でもこの声ってどっかで聞いた事があるだよな？はて？いやまあいいや！さあ拝見つと！

『バツ！』

「「あっ！」「

こっコイツ・・・いつぞやの

「あんときのイケメン君じゃね？」

「確かに！えと弄光だったっけ？」

いやそこは知らんけど？つうか覚えてたのが奇跡っぽいけど、しつかし校長（変態）じゃなかったと思っただらコイツとはねえつとまあいいさね！とりあえずは

「さあてイケメン君の処分ですが既に考えはいる！」

「ふむ・・・どんな処分だ先生達に突き出すのか？」

いやいや凜さんや？確かにそれもするけどね？

「マサ？あんまりやり過ぎは・・・」

大丈夫さ！こんなアホな事をしでかす性犯罪者に相応しい刑を執行するだけだ！つうわけで！

『ズルズル！』

イケメン君（変態）をズルズル引きずって移動開始！

「ちょマサ？どうする気だ？」

「吊す！」

はい！皆さんもお気づきの通りであります！

パンツ一枚逆さ吊りの刑でござえます！

「凜？沙姫と綾にヨロシク言っといてくれ？じゃな！」

「ああ、わかった、ついでに先生達にも連絡しておこう」

うむ、助かります、けどけどけど

「最低2時間は吊すんで！そこんところはよろつつつといて？」

吊つてすぐに降ろされたら効果ありませんからな？ン？気絶してるから本人は気付かないかもですと？

甘いすなあ、吊す前に起こしますよ？いや待て・・・あえて起こさないで、気付いた時に、わけもわからないのに吊られてましたの方が面白いかな？」

「それはヒドイ！でも・・・まつそれくらいなら・・・まだマシかな？」

どうやら最後の方が漏れてたみたいね？けどなんやかんやでリト君もGOサイン！

「まつ盗撮なんて事をする不埒者には相応しい罰だ、2時間と言わずに半日くらい吊してやれ！ではな政成？」

『ガラッ！』

どうやら凜、半日コースをお望みらしい、まあどっちやでもいいけど。

まっ今はとにかく！

『ズルズル！』

屋上へ向けてGOだ！

でそれから

『ブラブラ』

キツチリ、イケメン君（変態）を逆さ吊りした後

「リト？一応、保健さんどこ行くか？」

「ん？いいよ、大丈夫、ホントにちょっと切っただけだし」

保健さんとこに行くかリトに聞いてみたけど、大丈夫だとリトが言ったので、行かないことに・・・

『ガラッ！』

「保健さん急患一丁！」

「結局は行くのかよ！」

しませんでした、まっリトは大丈夫って言うてる上に、俺から見ても大丈夫っぽいですけどね？結構リト打たれ強いし？

でも、どうせアノ後は特にする事はないっばいしな？報告は凜がしてくれるっつってたし。

まっようするに

「ん、わかったわ、結城君ね？あつ結城君見てる間コーヒーお願いね？」

「あいあい！ヤミっ子も飲むべ？」

半分くらいはコーヒータイムってやつです。

「杏仁豆腐もお願いします。」

はいよ！『喫茶スピーキズ』開店ですってか？

で授業終了までの間は杏仁したりコーヒーしたりしつつ

「なるほどね？ちゃんと犯人捕まえたのね」

「勿論でござる！俺が力の一千万！」

「そして俺が技の……って言わないって！……でも捕まえられてよかったよな？」

「そんなえっちい人が居たとは……私も参加するべきでした……」

「って感じで話しながら過ごす事に、リトめもうちよいで二千万パワーズが結成できたのに。」

あつリトのケガはホントに大丈夫だったぞ？普通コーヒー飲んどつたし、保健さんも薬を使う程じゃないつつつてたしな？

「あつ？そういえばガ克蘭君？コレ？」

ほえ？なんじゃろ？何やら保健さんに手渡されました。

「ふむ・・・本日付けで鬼島 政成を学校警備員に・・・ってなんですとオオ！」

いや何でやねん？

「役職が増えたなマサ？」

うむ、増えた、えと待て待て

「生徒兼臨時用務員兼店長兼学校警備員？かたがきエツライ長！」

「何かあったらただけどその都度動いてもらいたいんですって？あつ給料は出るらしいわよ？」

保健さんが補足説明してくれました、いやまあ別にやるのは構わんですけどね？つとそだ！

「ヤミ？オマエもやるか？リトも？保健さんは司令官＋治療係で？」

俺とヤミはいわずもがな戦闘要員ね？でリトはそのサポートです。

「うーん、別に手伝うくらいならいいぞ？」

おっ流石はリト？リトが仲間に加わった！

「タイヤキで手をうちましよう」

「うい！まかせれ！」

ヤミが仲間に加わった！

「そうね・・・解剖させてくれたら」

「保健さんは仲間に来ない！」

「嘘よ？ヒマな時なら構わないわよ？」

なんやかんやで保健さんも仲間に加わった！

うむうむ！後でララと唯、春菜も巻き込むか？頭脳担当で？まっ  
ララはフィジガル寄りっばいけど？

つつわけで！

「学校警備チーム『彩南ガーディアンズ！』結成でござる！」

司令官・保健さん！

前衛・俺&ヤミ！

前衛サポート・リト！

チームメンバー候補・ララ、唯、春菜！

で学校の平和を護るぜ！



「むしろ騒ぎが大きくなるような・・・」

リト君やそれは・・・

「否定は出来ん！」

「しろよー！」

ナイスツッコミ！でも否定はね？ホントに出来んです。

まっないわともあれ、こうして俺の役職が増えましたとき、とっぴんぱらりのぷ。

・  
・  
・  
・

凜視点

フフ・・・政成、やはり私が見込んだだけはあるな、友の為にア  
レ程の怒りをみせるとは

先程の政成の目を思い出す、目つきは悪い方だと思っていたが、  
あの時の目はかなり鋭かった。

何時もは飄々としているがアノ目は・・・うむアノ目で睨まれて  
みた・・・ゲフンゲフン！いや何でもないぞ、うん！

「凜？先程の騒ぎはなんでしたの？」

むっ？少し考えに耽っていたら沙姫様にそう問われたので

「実は先程、捕物がありました、沙姫様もプールの時期になりますと盗撮などをする不埒者が現れると聞いた事がありますでしょうか？」

「ええ、噂くらいわ、まあ私の美貌を少しでも写真に収めたいという気持ちはわからないでもありませんけどオーホホホ！」

むっ？ またもや沙姫様のスイッチが入ってしまった、ふむ・・・  
政成直伝の

『ピ・ポ』

「おやめさない！」

うむやはり効果は高いな、この技、実に便利だ。

「その盗撮犯さんを捕まえたって言ってたけど？」

綾に話しの先を促された、うむ。

「政成とその友人の結城リトという男子生徒が捕まえていたぞ？」

「政成さんが！何で私を呼びませんの！」

沙姫様、食いつきがいいな？うむ、どうやら沙姫様も政成の事が大分気になってるようだな？

しかし・・・興奮されてる沙姫様をどう諫めるか・・・ふむ、そうだな

「政成が沙姫様にヨロシク言っておいてくれと言っていました」

「あっアラ？そのですの？政成さんも私の事を忘れてたいた訳では  
ありませんのね？フッフ」

うむ、なんとか機嫌を持ち直されたようだな？おっと綾にも伝え  
ないとな

「綾にヨロシクと言っていたぞ？」

こちらに関しては小声で伝える、わざわざ持ち直された沙姫様の  
機嫌を損ねるのもどうかと思うしな。

「はいです、けど政成君とその結城君ですか？凄いですね？」

うむ確かに、結城リトも犯人を捕まえた時の動きは中々だったな、  
しかしやはり政成のアノ動き。

気付いた時にはもう犯人を捕らえていたからな？目にも止まらぬ  
とはアノ事だな？

それにやはりアノ目・・・うむ・・・やはりアノ目で・・・

「ちよと凜？どうしましたの？何か様子が変わりますわよ？」

ハッ！

「いえ、何でもありません、あっ私は先生方に報告してきますので」

『ガラッ！』

深く追求される前にするべき事をこなすことにした。

逃げではないぞ？

「凜？どうしたんですの？綾わかります？」

「うん？追求される前に逃げたのでは？」

もう一度言つがコレは逃げではないぞ！…

## 第二十一話っぱい感じ！（後書き）

後書き

なんでこんな事に？色んな意味で？でも頑張りましたので許して  
やっして下さい。

けども次回もまたお暇なら見てやっして下さい。

感想などもありましたら是非！

## 第二十二話っぽい感じ！（前書き）

前書き

久々にコチラを更新です。

しかしやはりアレな感じでありますので薬的な物をお持ちになり  
おすすめ下さい。

## 第二十二話っぽい感じ！

アレから教室に戻って

「カクカクシカジガで警備員になった！」

いつものメンツにそう報告をする、したら唯さんに

「アナタに警備任せたら大変な事になりそうね・・・」

って言われてまいました、しかしそこは安心なされよ！

「警備員の任命受けたんは俺だけだけど、勝手に警備チームを作ったから大丈夫さ！」

その名も『彩南ガーディアンズ！』保健さんを司令官として動く事になっとなります！

ちなみに今のメンバーは保健さんとリトとヤミっ子、で言わずもがな俺！でだ唯、ララ、春菜？警備チームに入らん？今ならチームステッカーがついてくるぞ？」

「いつの間につつたんだよ！」

おいおいリト君、それは聞かない約束だべさ？ちなみにどんなにかといますと、

黒い星のマークの中に白文字でS・Gと書いてるだけあります

まあSの尻尾の部分とGの下の部分を勾玉みたいな感じに工夫はしてありますけどねえ？

「マサ！コレカッコイイ！私も欲しい」

うむうむ、ララさんには好評ですな、って唯、春菜、何故に渋い顔？

「うん・・・コレ・・・うん・・・悪くはないと思うけど・・・」

「完全に暴走族のロゴよね？」

グハアアア！言われてもうたアアア、実は俺も若干そう思ったりしました、でもね？仕方がないんですよ？本人（書いてる人）一応無い智恵絞って考えたんです、せやから

「許してやってくれ、そこはこう華麗にスルーを、たのんます！」

「必死だね？」

「必死だな？」

「必死だね？」

必死にもなりますよ、ええコレボツになったら凹むからね、書いてる人が一時間くらいにノートに描き描きして作ったやつだからね！あっこんなんで一時間使うとか言わんといて！凹みますので。

つとイカンイカン、かなりアレ過ぎる脳内コチャコチャだな、よし話題転換の術だ！

「で三人さんどうよ？今なら杏仁とかもついて」



「仕方がないわね、学校の風紀を守る為には必要なことよね？いいわ入るわ」

「マサがするなら私もする〜！」

言い切る前に唯とララが仲間に加わりました、つうか唯さん、完全に杏仁釣られたような気がせんこともないが・・・でもなんやかんやで風紀種の血が騒いだというのもあるんでしよな？

つと春菜さんはどうなんでござろう？

「えっと・・・暇な時ならいいけど・・・危なくないかな？それに私役に立てるかわからないし・・・」

おう？危なくないかな？更に役に立つかが疑問とな？まあそこは安心なされよ

「前衛つうか、なんかあつたら積極的に動くんは俺とヤミっ子だ、春菜と唯は・・・連絡役もしくは頭脳担当？みたいな？リトも中継かな？」

「あつそれなら私でも出来そうかも？うんわかった、手伝うね」

うむうむ、春菜が仲間に加わった！

「ねえねえ私は？マサ、私は何する係？」

ララかぁ・・・ふむ、前衛？いや待て確かララって・・・

「ララ？前ララって発明品作ってたよな？なんかトイレみたいなん？ああいつの得意なん？」

「うん！まだまだいっぱいあるよ！それがどうしたの？」

ほうほう！やはり得意なようだな、つうかまだドツサリあるんかい？そっぴい原作でもなんか色々あったような無かったような・・・アレ？どっちだ？いやまあいいさね。

とりあえずララの役職は

「グッズ開発部長だ！俺には特に必要はねえけどリトやヤミになんか捕獲用の何かしらを作ったりする係な？後はこう連絡用の無線とか？偵察用カメラとか？護身用の何かしらとか？」

何かしらの部分はララ任せになります！

「うん！わかった頑張る！」

うむナイススマイルのよい返事なり、むろんなぐでなでしといた！

「なんか本格的になってきたな？ていうか大事すぎないかマサ？」

むう？リト君や甘い甘いぞオオ！つうか

「オマエ今日、ぶん殴られたばっかりじゃろがい！次にあんな目にあってみる！命の保証はねえぞ・・・犯人の！」

「犯人の方がよ！」

当然ですが？むろん、俺の報復的な意味で！

「えっ？リト君？だっ大丈夫だったの？」

「そっだよリト！大丈夫なの？」

「っっていうかマサ君、アナタがついていながら・・・」

うっ・・・それを言われたらかなり痛いものが・・・

「あっああ春菜ちゃんララありがとう大丈夫だから、後、古手川、あんまりマサ攻めないでやってくれ、俺が殴られた時、マサ凄え怒ってくれたから」

リト君・・・やだ惚れちゃう！

「そうなの？マサ君が・・・ねえ・・・あっアノ時みたいに？」

「アノ時？ああ・・・アノ時もマサってそんなに怒ってたのか？記憶に無いんだけど・・・けどヤバかったのはヤバかった・・・止めないマズかつたし・・・」

そっいやリト君、電源落ちてたね？つとリトそうでもないツスよ？ちいと美容整形してやるっと思ったくらいだし？拳で！

「マサ君が怒ったのって私見た事ないかも？」

「私は怒られた事あるけど・・・それとはちょっと違うのかな？」

「ララの時とは全然違っつて、目がヤバかった・・・」

ちょっとリト君？その言い方はなんかアレじゃね？なんつうか「う……アレじゃね？」

まっまあいいさね、ホントはよくねえけど。

「あっちなみにアレな？基本はなんかあった時用らしいんで、コッ子も臨時？って感じな？」

この事も一応は伝えておきまする

「わかった〜！」

うむ、ララよい返事だ！

「うん！」

うむうむ、春菜も！

「わかったわ……っとそういえば犯人って誰だったの？それと犯人どうなったのかしら？生きてる？」

およ？言っでなかったか？つつか生きてるかどうかってオマエ……

「犯人は弄光つてやつ、ほら前にマサと野球した？後、生きてるか  
らな？男としてはある意味死んだようなものだけど」

リト君、中々に上手いこと言いますなあ

「はっ？死んだって？マサ君、何したの？」

「屋上から逆さ吊り！パンツ一枚にしてな、性犯罪者には相応しい刑だろ？多分まだ吊られてんじゃね？最低2時間は吊っといってくれっつっつといたし？」

もしくは半日な？それは凜次第ですな！

「うん・・・まだマシな方・・・かな？」

おい、春菜さんや？一体何を想像してたんでござえますか？

「野球？あつ、マサにボールを斬られた人？」

ララの中であのイケメン君（変態）は斬られ役Mとしてしか記憶にないようです、まあ俺もララと似たようなもんだけんど。

「あつたわね、そう言えば・・・けどアノ人だったなんて・・・全く何考えてるのかしらハレンチだわ」

唯は軽く頭を抱えつつ殿下の宝刀をくりだした、うむ

「コレから奴はアレだなイケメン君にしよう！」

（変態）だと校長と被ってるしな！まっコレから出番があるかは謎ですけどねえ

「酷いな・・・」

いやいやそうでもないでしょ？つつか寧ろ慈悲深いだろ？

『ピンパンポーン、鬼島 政成君、鬼島政成君、職員室まで来て下さい、繰り返します……』

うお？呼び出し？まっ何の事は、だいたい察しはついてけど

「多分、警備員のこつたる？チラツと行ってくらあ！」

『ガラッ！』

「行ってらっしゃい！」

「ええ行ってらっしゃい」

「ああ！」

「うん、また後でね？マサ君」

あいよ〜っと！って感じで四人にそう見送られて教室を出ました。

でスツタラスツタラ職員室へ

『ガラッ』

「たのも〜！」

悩んだ結果、やはりコレにしました、そう何度も何度もネタは浮かばねえでござる。

・  
・

・  
・  
「失礼しやした〜」

であつちゆう間に用事は終わりました、まあ用事つうても給料を渡されただけなんですけどねえ？

ちなみにやはり諭吉でした。

後、教頭にガクランじゃねえことを言われるかと思つたけども

「それはそれでアリです!!」

とのことにより大丈夫でした。

とそんなこんながありながらも再び教室へで

「ホレ、リト!」

「えっ? 五千円? なんで?」

ふむ・・・なんでって・・・

「今日のお給料だ、二人で取つ捕まえたんだぜ? むろん折半だろ?」

「でも・・・」

むう・・・中々に強情なやつぢやな。

「いいから受け取れ、正当な報酬だ」

「あっああ、わかったサンキューなマサ？」

「それは学校側に言うべし」

とこんなやり取りがありました、でその後の授業はLHRでした

「ええ〜LHRですが、来週、毎年恒例の臨海学校があります、みなさんそれぞれ班を組んでください」

ほう、臨海学校とな・・・うむ！

「リト？組もうぜい？あつららと唯も！春菜は・・・里沙、未央と組むんかねえ？」

早速、いつものメンツに声をかける

「うん！エへへ〜臨海学校だって、楽しみだねマサ？」

うむららがサクツと仲間に加わる、いやはや実にナイススマイルです。

「マサ？自由行動の班はコレでいいかも知れないけど泊まりだぞ？部屋割りには男女別だって」

「そつね結城君の言う通りよ」



ほう、まあ確かにそうだなあ、男女一緒部屋は・・・チラリとエテ山をみる

「グヘヘ・・・」

うむ・・・

「教育的指導!!」

『ゴスツ!!』

「グエツ・・・」

なんかヤバイくらいに犯罪者フェイスだったもんで早めに処理しました。

「マサ、私マサと同じ部屋がいい!!」

むっ？ララさんや

「教育的にヨロシクねえので却下です。」

キミはアレか？エテ山んことを見てなかったんか？

「そうね・・・ララさん、私と同じ部屋にしましょう？マサ君とは自由時間の時に一緒行動すればいいじゃない？」

「あっ！私達も同じ部屋でいいかな？」

「ララちい、同じ部屋にしようよ？マサマサは・・・後で部屋に招

き入れれば」

「っておいコラ、里沙君？」

「そっか！リサ頭いい〜！！」

「おい、ララさんも」

「風紀委員GO〜！！」

「GOって・・・ンッン、初岡さん、ララさんダメよ！風紀的に減点です！」

俺のGOサインに若干なんでやねんの顔しつつもキツチリ指導、流石だぜ唯！

「「ええ〜」」

不満そうですね、ララに里沙。

「まあぶつちやけ俺も別にいいんじゃないかね？と思わんくもねえけど、教育的にな？」

「あっ！！だったら私がマサの部屋に行けば！！」

何を淒い良いこと思いついたみたいなお顔してやがりますかララさんや？

「そんなに巻かれないんか？」

「やだー！わかったよう・・・」

うむうむ、何とか納得してくれたようです。

「ねえマサ君、巻くって何？」

ん？春菜さんや巻くが気になつとるようすな。

「文字通りだ、布団に巻く、巻き寿司的な感じでコノ状態のララを学会ではミノムシ・ララという覚えとくように！」

「どんな学会よ・・・」

スマン唯、そこまでは考えてねえツス。

「ってというか猿山のことには誰も触れないんだな」

「結城が触れたからいいんじゃない？」

エテ山を見ながらポツリと呟くりト君とそんな結構ドライな未央さんでした。

・  
・  
・

あっちゅうまに数日たち臨海学校の前の日・・・とみせかけて、リトん親父さんの仕事場つか仕事家？の前に来ております。

なんかリットン親父さん、漫画家らしく締め切りが迫ってってエライこつちやになつとるらしいんですわ。

でリトと俺、ララが助っ人にやってきたつう訳です。

「マサ？何ボーとしてんだ？早く入るぞ？」

必要なことだったんですよ？とか思いながらも

『ガチャ』

仕事家に入りまする。

「来たかりト！！ン？電話で言つてた二人つてコイツらか？」

したら早速、頭にハチマキ巻いた熱血タイプなおっちゃんが登場、多分リットン親父だるねえ？

で早速、自己紹介しつつ

「どうも〜居候二号の鬼島 政成でえす、マサかマサナリって呼んでやって下せえ、宅のリトにはいっつも世話になつとりますは、あつコレ、粗品ツス」

健康ドリンク的な物を渡しまする。

「おっ！悪いな？助かるぜ、俺はリトの親父で 才倍だ！見ての通りの漫画家だ、俺ん事は好きに呼んでくれていいぜ？」

ほうほう！

「じゃ才倍んおっちゃんて！つとそれとコツチが」

「居候一号のララだよ〜！リトパパ〜」

うむうむ、元気一杯で実に良いアイサツです。

「おお！可愛い子じゃないか！リト、彼女か？かああ〜俺の息子もやるもんだねえ」

おお、リトと違って豪快っぱいな？で才倍んおっちゃんに

「違つって！！」

即座にリトがツツコミを入れ。

「そつだよリトパパ、私はマサと結婚するんだもん！」

ララが久々にアホ発言。

「エラー！エラー！その語彙は理解できません、エラー！エラー！その語彙は理解できません。」

久々にアレで対抗しておきました

「ぶつ〜絶対に好きになつてもらつもん！」

だからラランことは好きだつつうの、人間的な意味で、とララとそんなやり取りをしてたら才倍んおっちゃん。

「おっ！ララちゃんの片思いってか？ン？コレだ！キタキタアア、リト！手伝え、マサとララちゃんは・・・出来るか？」

なんかキタらしい、目に炎が宿つとるし、っと漫画ん手伝いか・・・  
ふむ・・・

「余裕！美術とかは得意ジャンル！」

「私も頑張る！」

俺はグツとサムズしながら答え、ララもグツとガツツしながら答える、しかしララよ・・・前ん美術ん時の絵は・・・アレだったぞ？まあ頑張った感じは出てたけど。

「ン~~~~、じゃ一応テストな？コレにリトん顔を描いてくれ！」

おっ、どうやらテストをするらしい。で

「俺！！ああわかった」

リトが若干ビツクリしてたけど、なんやかんやでモデルを引き受け

「じゃサクツと描きますか？」

「マサのセミヌードがよかったな〜」

「だが断る！！」

とこんなやり取りがありつつ

・  
・  
・  
「はい！完成！どうよ？」

所要時間10分です、ちなみにデキは・・・

「写真？コレ写真だろ！」

「ハツハツハ！マサさんナメるなよ？こついんは得意なんだぞ？」

はい、実は意外と上手いツスよ？保健さんくらいに？

「マサ、すごい上手〜！あつコレ、私のだよ？」

ふむ・・・ララの絵を拝見。

「うむ、頑張ったで賞だな？」

「わぁーい！」

うむうむ、可愛いです、絵はアレだけど。っと

「才倍んおっちゃん、ララは簡単な仕事を回してやってくんね？俺がその分、頑張っから頼む！」

小声で才倍んおっちゃんに相談。

「おう、にしてもマサ、本気で上手えな？バリバリ働いてもらうぜ？ララちゃんには・・・モデルをやって貰うとするか？」

というようなやり取りをして

「しゃっ！締め切りまで時間がないぞ！気合い入れてけよ！」

才倍んおっちゃんの掛け声により手伝いが始まりました。

で仕事中は

「ハツハア！次持ってこいやアアア」

「オラオラオラ！次タイイイ！」

俺と才倍のおっちゃんはこんな感じ。

「スゲエ・・・なんだアイツ、才倍先生について行ってるぞ？」

「ハハハ・・・マサ、無駄にハイスペックだよな？まあ助かってるけどさ」

アシスタントさんとリトはこんな感じ。

「ララ！ちょアレ取って！」

「うん！はい！」

ララはモデルをしながらも、サポートん仕事をシツカリとこなしてくれました。

ちなみに



『ブウーン』

「うぜえ！」

『ピン！パンツ！』

とハエが飛び回ってたんでデコピンで弾きました、何故か弾いたらカンシヤク玉みたく爆発してたんが気になったがスルーした。

そして・・・

「才倍先生、無理です！間に合いません！」

アシさんの一人が泣き事をいいやがりました、修正しようかと一瞬思ったがマジでギリらしい。

「せめて俺達が才倍先生と新人君並に手が動けば・・・」

なんか凄え悔しそう、ちなみに俺はアシさん達に新人君と呼ばれます、っと今はそれよか

「才倍んおっちゃん、どうすんべ？」

「チツ・・・どうするって言われてもなあ」

才倍んおっちゃんもどうしたらよいやらと頭を抱える。

するとララが

「ねえねえ？アシスタントさんだっけ？がマサヤリトパパみたいに早く作業が出来たらいいの？」

と聞いてきたので

「「ああ」

と才倍んおっちゃんと二人して頷くとララは

「よし！わかった、じゃあ、ちょっと待っててね？え〜っと・・・  
コレを・・・こうして・・・」

何やらアシさん達の椅子に機械を取り付けだし

「よしっ！完成〜！エヘ〜コレでバッチリだよ？使ってみて？」

とその改造椅子にアシさんの一人を座らせる

すると

『シャバババ！〜！』

「凄い！コレなら間に合いますよ才倍先生！！」

椅子から延びたロボットアームっぽい何かのサポートで、ものっそい早さで作業が進んでいきます。

「おお〜！ララ！凄えぞ？」

「エへへ〜」

思わずララを、な〜でなで。

「よし！コレで何とか間に合っぞ！さあラストだ乗り切れよ！！」

才倍のおっちゃんの掛け声により作業再開して・・・

『シュバババ！』

ララン作ったサポートマシンの効果もあり

「上がりイイイ！！」

「しゃあアアア！！」

なんとか締め切りには間に合いました！がしかし

「間に合ったのはいいけど・・・コレどうすんだ？」

「ううむ・・・完全に燃え尽きとるな・・・」

ララのサポートマシンは確かに有能だったんですけどね？

なんか反動が凄かったみたいであります。アシさん達、最終回の矢〇みたく真っ白になっとするし。

「すっすいません・・・俺達コレ以上は・・・」

あつ！アシさんの一人が才倍んおっちゃんに辞表出しとる

「「「すいません僕達も・・・」」」

まあ次々と辞表が・・・ってアレ？

「アシさんいなくなってもうたぞ？やばくね？才倍んおっちゃん？流石にやばくね？」

「根性ねえな・・・しつかしどうすつかねえまつリトともう一人、マサつう期待の新人がいるんだが・・・流石にそれだけじゃなあ」

期待の新人で・・・別に俺、漫画家目指してん訳じゃねえんですけど？

まあたまに手伝ってくれえならいいけど

「アハハ・・・どうしよう？あつ、そうだ！」

おつ？ララさん何か思い付いたらしい

『ピ・ポ・パ！』

何やら携帯を取り出すとどこかに電話

『スダダダ！』

したら何やら足音が聞こえ

「ララ様アアア！緊急事態はどういうことですか！」

登場したのはお馴染みザスティン君でした、まあぶっちゃけ予想はしてたけど。

「よおザスティン！」

「ハッ！マサナリ様もご一緒でしたか！」

ううむ、相変わらず様付けなんか、まあ別にいいけど。

「むっ・・・まさか・・・わかりましたぞ、とうとう、とうとうラ様との結婚を！！！」

「えっ！そうなのマサー！！！」

相変わらず飛ばしてんなザスティンよ、つつかなんでララまでそんな反応？呼んだのオマエじゃろがい？

「その気は今んとこねえつつうに！ララ？ザスティン呼んだんはアレだろ？才倍んおっちゃんの仕事を手伝ってもらったためだべさ？」

「むう・・・確かにそうだけど・・・」

何となくではあったけどララがザスティンを呼び出した理由を察してララにそう言うとなら頼っぺたを膨らませつつもコクンと頷く。

「ザスティンや！つつうわけで頼む！アシさんとして頑張ってくれ！」

「えっ……しっしかし……」

「頼むわ！後ろん黒服さんも頼みます。」

「ザステインと共にいた黒服の二人組にもペコツと頭を下げる、かなり勝手なことを言ってるのはわかってるしな。」

「あつ頭を上げて下さい！わかりました、このザステイン！全身全霊でその仕事をやり抜いてみせましょう！」

おお、やっぱりザステインいい奴！

「サンキュー！ザステイン！才倍んおっちゃんもいいか？」

「おう！仕事に関しちゃ今から仕込んでいきやいい！人手があるのは助かるしな！」

才倍んおっちゃんも、それで良いとのことにより、ザステインと黒服さん二名が才倍んおっちゃんの新しいアシさんになりました。

でその後は

「ほれ、リト、コレはマサ、でララちゃんな？」

と才倍んおっちゃんに給料渡され、最初は断ろうと思ったが

「稼ぎはいいんだよ！気にせず受けとれや、後、また忙しい時に手伝ってくれ」

とのことにより有り難く受け取りました、ちなみに……

リトとララは諭吉が三人、俺は五人でした。

で何で俺だけ二人多いんだ？つったら

「マサが一番働いてたからいいんじゃないか？」

「そつだよ、マサ頑張ってたもん！」

とリトとララに言われたので有り難くいただきました。

とこうして才倍んおっちゃんの手伝い、つうかバイトは終了したのでした。

## 第二十二話っぽい感じ！（後書き）

後書き

なんか最後あたりがグダグダな感じになってしまいました・・・

そして才倍さんの口調がわからない・・・こんなんじゃないかなかった  
ような気が・・・

でも頑張りましたので許して下さい下さい。

感想などもありましたら是非。



## 特別編っぽい感じ！（前書き）

前書き

ええこの話しは、A r i s h i a さんがお書きになっております。

【神様の力で異世界へチートってありますか？】

とのクロスであります、なにぶんこういうことは初めてであります、大分、アイタタタな感じになってるやもしれません。

ホントA r i s h i a さんスンマセンでしたアアア！

## 特別編っぽい感じ！

ドアを開けたら砂漠でした。

『ガチャ』

とりあえず閉めた、そら閉めますわ、だってアレだしね？ドア開けたらいきなり砂漠とかマジでアレだもん、アレな感じだし？

あっ！なるほど！アレだ目が疲れてんだな、ゲームのし過ぎですね、特訓にせいを出しすぎたよ。

よし！

『パンパン！』

うむスキツリ！さあて

『ガチャ！』

「デイザート？」

やっぱり砂漠でした、ふむ……よし！

「あえてGO！」

『ザク！』

逆に飛び込んでみた、

「ハッハア！いやあ久々！砂漠も久々だね？」

『ザクザクザク！』

ついつい久々の砂漠にテンションが上がり駆け回ってまいります。

あっドアの位置はバツチり覚えとるんで大丈夫でござえますよ？

しかし、なんで急にドア開けたら砂漠だったんやろ？

ララの失敗発明か？わからん？なんか今回は違う気がする。

まっいいさね！

「ヒヤッホオオオオ！！」

『ズザザザザッ！！』

全力！じゃないけど駆け回る！気分はアレです、海に来て、はし  
やいでる、黄金の大妖怪！わからない人は『うしお〇とら』を見よ  
う。

・  
・  
・  
・

ヴィード視点

「マズイです・・・」

やっつけてしまいました・・・こうつい茶目っ気を出してしまいました。

あっ私はヴィードと申します、マスターのユニゾンデバイスをさしてもらっています。

はい？マスターとは誰か？ですか？えっとマスターのお名前はです、桜井 怜っていいいます、今はレイ・ツァイベルって名前ですけどね？

えと詳しくは『Arishia』さん作の

【神様の力で異世界へチートってありですか？】

を御覧下さい。

えっ違いますよ？説明が下手くそだから丸投げしちゃえ！とか思ってますよ？ホントですよ？

コホン！今はそんなことよりも何がマズイかという事ですよ、そこが気になりますよね？そういうことにしといて下さい。

えっと、それですね、何がマズイかと言いますと、以前、マスターが私とユニゾンしてる時に異世界とコノ世界を繋ぐ魔法を使っただんです。

それで実は私はユニゾンしてる時にマスターが使った魔法はユニゾンが解けても、使えるんです、威力や精度は落ちますけどね？

それでつい、こうフと使いたくなっちゃいました。

「ええ〜い!!」

しちゃったんです、でもアレです、時間にしたら30秒くらいですし、しかも無限と言ってもいいほどの数がある世界にランダムに繋げただけですし・・・

それにそれにですよ？

コツチに繋げた場所は広大な砂漠なんです、普通！普通ならいきなり目の前に砂漠が広がってたら、スルーしますよね？

こう、ない！コレはない、みたいな感じですか？「砂漠だ！GO！」みたいなことをするようなアグレッシブな人なんて、普通はいませんよね？マスター以外で！

仮にいたとしてもそんな人の所にピンポイントで当たりを引くなんてようなこと有り得りえない、っていう軽い気持ちだったんです。

ですけど・・・

「ヒヤッホオオオ!!」

『ズザザザザ!!』

いました・・・遠見の魔法で確認してみたらいましたよ、楽しそうに砂漠を駆け回っています。

「コレ、見なかった事になりません・・・」

「なる訳ないだろ？」

『ビクウー!!』

「まままマスター？あつあの、こっコレは！えと・・・」

「話しは後だ・・・さて・・・逝くか？アフォデバイス・・・」

『逝く』？あつ！なるほど変換ミスですね？そうですよね？ホントは行くで、あの砂漠を駆け回ってる人を早く助けに行こっつてそういう意味での『行く』ですよね？

「ん〜？ハ・ズ・レ？」

マスター、素敵な笑顔です・・・

「イツ・・・イヤアアア！！」

・  
・  
・  
・  
レイ視点

アフォデバイスにOHAN・・・メンドイ、教育的指導を終え、改めて遠見の魔法で砂漠の様子を確認してみる

「棲んでるぜ・・・俺こそが・・・疾やさ（スピード）だ！！」

『ズザザザザー!!』

こっ……コイツ……人間か？いやチートの俺が言うことじゃないけど。」

まさか……転生者？

可能性としては有り得るな？普通の人間にアノ速さは出せんし？

さて……どうしたもんか？一応は様子を見に行くか？

「ヴァード、行くぞ？」

「ひうっ！！また！！またですか！イヤ、イヤアアアア！」

「そっちじゃない！砂漠だ砂漠！！！」

「えっあっはい！助けに行くんですね？」

助けか……アレ、助け必要か？今一度、遠見。

「ふう……いやぁナイス・ラン！スッキリ爽快ですわい……さて戻るかねえ………ホワッ？アレ？嘘？アレ？  
えっ？マジで？アレ？ドアが……ドアが……ドアが無えエエエ！いや待て落ち着け……心の眼で見るんだ、さすれば今一度ドアが……やっぱり無いんですけどオオオ！」

『ゴロゴロ』

あっ！必要だわ。

という訳で砂漠を転がってるガクラン男を助けに向かうことに。

砂漠に向かう途中でエレナとアリア、そしてクロードとルーナの  
特待組を見かけた面白そうだったから回収して進むことに

「ちょ！レイ！いきなりなんだ！」

なんかクロードが言ってるが聞こえないふりをしつつ

「ど〇でもドア〜！」

をポケットから出して一気に砂漠へ、ン？そんな便利な物がある  
んだったら最初から使えだど？

そこは流せ！コッチにも色々都合があるんだよ！

『ガチャ！』

で砂漠へ到達！

「あの・・・レイ君？なんでいきなり砂漠なんか？」

「そうよね？アンタの突拍子のない行動は今に始まったことじゃな  
いけど確かに気になるわ」

エレナとルーナがそう聞いてきたので

「このアフォのせいだ！」



『グイッ』

「イタタタ！マスター痛い痛いですう〜」

ヴィードをわしづかみにしつつ簡単に説明。

「意味不明」

アリア、それだけじゃわからなかったみたいね？

ああ〜、どう説明したものが・・・

「オイ、レイ！アレツアレツ？」

「クロード！今考え中なんだから邪魔・・・ゲッ！！」

考え事を中断させられてイラツときながらも前をみたら

「デザート・ワーム砂蟲！！しかも人が！！」

ルーナが言う通り、巨大な全長20メートルはありそうなデザート・ワームにガクラン男が襲われてる所だった

「レイ君！早く助けないと！！」

エレナが焦った声で俺に声をかけ、その声に頷きつつ

「ああ！行くぞ！！」

ガ克蘭男が襲われてる場所へと移動を始め

しかしデザート・ワームはガ克蘭男を飲み込もうと

『グアッ!!!』

その巨大な口を開いた、チィ!仕方ない

「ヴィード!ユニゾンだ!SLBブツ放つぞ!」

スターライトブレイカー

「了解です!ユニゾン・イン!!」

『カッ!』

瞬時にヴィードとユニゾンし

「喰らえエエエ!全力全壊イィ!スターライトオオ」

SLBを放とうとした瞬間

『ダンッ!!!』

ガ克蘭男、デザート・ワームの頭まで跳び上がり

「こんな砂漠で大口開けたら砂が口に入るたるオオオ!!」

『ガッゴンッッッ!!!!!』

デザートワームに向かって拳を振り下ろす、所謂ゲンコツ・・・

「ピギヤアアア!」

そのゲンコツの威力は凄まじく、デザートワームは一つ鳴き声を上げると

『ズズウウン』

そのまま崩れ落ちて動かなくなった・・・  
「やっぱりチートだったか・・・」

思わず漏れた独り言、急いで損した気分だなコレ・・・

・  
・  
・

マサ視点

いやぁビックリですわい、ゴロゴロ転がってたらいきなりデカイ  
ミミズもどきが出てくんですもん!

思わず迎撃しちゃいましたよ、でもアレだよな? 向こうもなんか  
俺ん事、食う気満々だったしね? 正当防衛だよな? うんきつとそう  
さ!

「そこんとこどうよ? 成立? 不成立?」

「成立(グッ)」

よしや! 成立した! ってアレ?

「キミら誰? 何? コイツもしやポチ的な存在だった?」

ビツとグツタリしてるミミズもどきを指差しながら聞いてみた

「こんな気持ち悪いポチなんて聞いたことないわよ！」

むっ！

「バツカ、オマエ、よく見てみるってホラ、つぶらな瞳が・・・瞳が・・・瞳ねえな？つかやっぱキツツイなコイツ？コレはちよつと流石のマサさんでも愛せないわ・・・いやでも頑張れば・・・」

「努力が肝心（グツ）」

「だよな！いい事言うねえ」

うむうむ実に素晴らしいことをおっしゃいますな、さてと

「でキミらは誰さね？あつ俺あ鬼島 政成ってんだ、マサかマサナリでよろしく！」

流石にそろそろ自己紹介！

「なんかズレてるわねこの人？」

おいおいおい。

「キミイ！初対面ん人にズレてるのか言うのはマサさん関心しないなあ、アレだよ？もし俺がズラだったらどうすんの？ものっそい気まずい空気にいたたまれなくなること請け合いだぞ？」

「ズラなの（ジッ）」

「うんにゃ自毛、ホレ！」

『グイグイ』

「自毛だった（コクン）」

あたりめえです、まだまだズルムケになるような年じゃねえですよ！

「なんか疲れるわ・・・レイ、アンタが相手なさいよ、アンタ、こんなタイプ得意でしょ？」

なんかツツコミ少女がバトンを渡しとる。

「クロード、パス！」

「俺かよ！！ああエレナ、パス！」

パスが繋がった！

「えっ私！えと・・・えと・・・ヴィードちゃんお願い！」

「えっえっえっあのアリアさんパス！」

更にパスが・・・

「パスカットオオオ！！！」

繋がさせなかった！強引に切り込んでみた。

「えっええ〜マスター！どっとうしましょっ？」

うむ、めっさ、あわわあわわしとる、実に面白い。

つとそだ

「パスカットとマスカットって似てるよな？」

マスターって呼ばれた少年に振ってみた。

「確かに！言われてみれば似てるよな？ああそう言われたらバスケットも似てないか？響きが？」

「おお！似てる似てる！やるな少年！」

「まあな！あつ俺はレイだ、そっちはマサでよかったよな？」

ほうほう、レイ君ね、覚えたナリ！

「なんだかんだでコミュニケーションがとれてるわね？レイ？」

「コミュニケーションって・・・ルーナちゃん・・・未確認生物じゃないんだから・・・」

「似たようなもの」

．  
．  
おおい！人をUMA扱いすんのはどうかと思うんですけど・・・

とコチャコチャありながらも改めて

「さつきも言ったが俺あ鬼島 政成な？マサかマサナリって呼んでやってくれや」

と自己紹介、したら続けて少年少女6人組が

「俺はレイ・ツアibelな？よろしくなマサ」

「私はヴィードと申します、よろしくお願ひしますマサさん」

「ルーナ・クロイツェルよ」

「えと、エレナ・テンペストです」

「アリア・ラフェール（ペコ）」

「俺はクロード・レヴァンだ」

と自己紹介、ふうむ、外国の子達だったか・・・つうことあ名前が前なんだよな？よし

「レイにヴィードにルーナ、エレナ、アリアでピロードだな！」

軽く一ネタ挟んでみた

「微妙に違い！！」

ナイスツッコミ！

「わあってますがな軽い冗談ですがな・・・えつと確かフカマチだっけ？」

「誰だよ！！遠ざってんだろぅが！！」

あつコイツ面白え！しかも中々のツツコミ力を持ってやがんな。

「マサ、フカマチじゃないからな、コイツはアレだ、マチムラだから」

「ああそつち？」

レイが被せてきた、やるなレイ君！

「どつちも違エエエ！ク・ロ・ー・ド！だ！！クロード！ていうかレイ結構付き合い長いだろ！なんでオマエが間違ってたんだアアア！！」

クロードの叫びが砂漠に響き渡りました・・・うむうむ

「「クロード絶好調」」

「腹立つ！後ろの音符が異常に腹立つ！！ていうか息バツチりだなオマエら！！」

いやあなんかしらんけど気が合ってたんでしょうね？

「落ち着きなさいよ、この手のタイプは真面目に相手をしたら疲れるだけよ？レイで学習したでしょ？マチムラ？」



「ルーナアアア！なんでオマエまでマチムラ扱い！！」

「フカマチ大変（ププ）」

「アリアちゃんまでクロード君、可哀相だよ？」

「なんだってこんな扱いなんだよチクショウ・・・」

あつクロードが落ち込んだ・・・ふむ

「負けんな！世間の荒波に立ち向かえ！大丈夫さオマエならやれる！頑張れ！頑張れ！！」

「そうだぞクロード！なんでそこで諦めんの！！頑張れ！頑張れ！！」

レイと二人で応援してみた。

「オマエらのせいだろオオオ！！」

ものっそい怒られ、がしかし！まだまだイクゼ！

「オイオイ、クロード君やキミそうやって直ぐに人のせいにするのはどうかなあって前々から言ってるじゃん悪いくせだぞ？」

「だな・・・つたく、ホント、だからオマエはアレなんだよ・・・ホントにオマエ、クロードだなあ」

「なんで俺が悪いみたいになってんだアアア！つつか前々からって

初対面だろオオオ！レイはレイで人格否定かチクシヨオオオ！！」

うむうむ、クロード君、すっごくイイ感じ！暫くの間レイと二人でクロードを弄って遊びました、凄え面白かったッス。

でその後、

「えと・・・マサさんは何故こんな砂漠に？」

エレナさんにそう聞かれたので

「なんかドアを開けたら、いきなり砂漠が広がってな？なんかしらんが俺ん中の何かがGOサインを出したもんで飛び込んでみたんさ？」

で、暫く疾風かせになって、ポチポチ帰えろつか？ってドアん所まで戻ったんだけどな、何故かドアが消えてた、いや不思議？」

いやぁホントに不思議なこともあるもんですよね？

「とというか、普通、目の前に砂漠が広がってたらスルーするでしょ？なんで飛び込むのよ？」

むっ・・・なんでってルーナさんや

「だから俺ん中の何かが反応した訳よ？そういうことってあんだろ？ほら、どっかの大妖怪も言ってるじゃん？」

乗りてえ風に乗り遅れたやつはな・・・間抜けってんだ！！と。」

いやぁホント名セリフだよね？

「深い(グッ)」

フツ・・・アリアっ子はわかってるようだな。

「でもそれで帰る方法が無くなるなんてホントの間抜けよね？」

「グハツ!!」

ルーナさん手厳しいツス・・・

「ちょっとルーナちゃんダメだよ、例えそう思っても我慢しないと」

「それって遠回しにエレナも思ってたって言ってるようなもんだよな？」

「クロード君!!言っちゃダメですよ!」

「ゴフツ!!」

『ドサッ』

最後はエレナに止めを刺されました・・・チクソウ

「ああマサ、気にするなテンションに身を任せてしまつ気持ちはよくわかる、それに元を辿ればコッチの責任だしな」

ガツクリなつてたらレイ君に慰められました、レイ君、いい奴です……ン？アレ？最後になんか……アレ？

「なあレイ君や？最後ん方に元を辿ればコッチの責任って言うてなかつた？」

「ああ言った！コッチって言うか正確にはコイツ！」

『グイツ！』

「イタタタ……マスター！痛い痛いです」

おう？ヴィード？はて？

「レイ先生、意味がわかんねえッス！」

「あゝ、実はなカクカクシカジかってわけ」

ほうほう、なるほど……

「すっスイマセンです、こつつい私の何かがGOって……逆らえなかつたんです」

おお！仲間発見。

「わかる！わかるぞお、アノGOサインなんか知らんけど逆らえんよな？アレってなんなんだろうな？」

「ですよね！ですよね！何故か逆らえないんですよ？」

うむうむ、ヴィード君、わかってるね！よし

「そんなヴィードには○○○○めげちゃっ」

「いいんですかー！やったです〜」

うむうむ可愛いやつめ

「なんでマサのやつ加害者と仲良くなってんだ？」

「ズレてるからでしょ？」

「ああ！なるほどー！」

おいコラー！レイとルーナ、ズレるとか言うな、ズラじゃねえっ  
つー！

『クイクイ』

ン？なんか袖引かれとる？

「私も飲みたい（ジツ）」

ほう、アリアっ子も○○○○が欲しいのか？うむ

「ほれ！美味えぞ〜」

「ンー！（コクコク）」

うむ、無表情ながらも何となくではあるが美味そうに飲んでると  
思う。

っとそだ。

「オマエらも飲むか？ってヤベツ！数が足りん！」

コイツは誤算でござる！このマサさんともあるつものが・・・不  
覚・・・

「ン？数が足りないのか？だったら創ろうか？」

おう？創る？

「レイ君！どういうこと？創るって何！どうすんの！」

「だぁぁにじり寄ってくんない！そのまんまだ！まぁ見てろ」

ゴクリ・・・

「ホレ！」

『ポンツ！』

なっなにイイイ、いきなり手からミ○ミ○が！こっコレは・・・

「師匠オオオ！弟子に・・・弟子にして下さいイイイ！」

「ハアア？何故に？」

何故にって・・・師匠！

「その技を覚えたいんです！師匠！どうかどうか弟子に！」

精神誠意、頭を下げる！地面に埋まらんばかりに！

「ああ・・・教えてやるから！師匠は止めろって！・・・ちょっとコツチ来い」

「ウツス！」

・  
・  
・  
・

で師しょ・・・じゃなかった、レイ君との都合5分くらいの修行の結果！

【称号・ミ〇ミ〇男】

を獲得！

そして

「体はミミで出来ている・・・血潮はボケで体は不死身・・・幾たびの戦場を越えて不敗・・・」

「ねえレイ君、マサさん何かブツブツ唱えだしたよ・・・大丈夫かな？」

なんかエレナに頭の心配をされて心の汗が出そうになりながらも

「ただの一度も敗走はなく・・・ただの一度も理解されない・・・彼の者は常に独りミミの丘で歡喜に酔う・・・」

「頑張るです！マサさん頑張ってくださいですよ」

ヴィードに応援されて気持ちを立て直し。

「故に、生涯に意味はなく・・・その体は、きつとミミで出来ていた！！」

呪文を完成させる。

『ゴヒウウウ！』

そして俺の回りには無数のいや無限とも言えるミミが突き刺さっていた・・・

「よしゃアアア！成功！やったぞレイ君、ヒヤッホーイ！コレで何時でもミミ飲み放題だぜエエ！」

いやぁレイ君に魔力ないから無理かもって言われた時はどうしようかと思ったが俺のミミに対する熱き思いが奇跡をよんだね！

「さあさあさあ！飲むがいい！なんせ無限に創れるからね、ドンドン飲めい！」

ワツハツハ~~~~いやぁテンション上がるわぁ



「マスター・・・アノ技、コノ世界（話し）だけの限定だって言わなくていいんですか？」

「う・・・うん・・・ちょっと言い辛いな流石に・・・」

ン？どうしたんだ、レイにヴィード？何故に俺を見ながら涙を流してる？

まあいいさね！今はミ〇ミ〇祭りじゃい！細かいことは忘れてた飲みあかそうぜい！

・  
・  
・

でみんなでミ〇ミ〇後。それなりにイイ時間になってきたので

「なあレイ？ポチポチ帰りてえんだけど、あのドアってレイも出せるん？」

「ン？ああ出せるぞ？」

レイ君に聞いたら出せるとのこと、ちなみにレイ君が転生チートだつてことは聞いてるぞ？、俺んことも話したら、レイは

「ああマサはアレか・・・バグか？」

つってました、つとイカンイカン逸れたわい。

「じゃ頼・・・」

『ズズズ』

おう？地震？ってアレ？

「なあレイ君や・・・なんかさっきんミミズもどきん5倍近いミミズもどきが前方に見えるんだが・・・見間違いかね？」

「俺も見える、あつちなみにアレはミミズもどきじゃなくてデザート・ワームっていうだ」

ふうんデザート・ワームとな・・・にして見間違いじゃねえんですな・・・ふむふむ・・・ン？

「なんかコチラに近づいてね？」

「ああ～多分アレだな、さっきマサが沈めたやつアイツのお子さんだったんじゃないか？」

ほうほう、アレで子供なんだな・・・いやはや

「デカイお子さんだな？」

「ええホントにまあ親もあんだだけデカイんだし、そう考えりゃあ」

「ああ納得だわ」

「だろ？」

しかしデカイなホント・・・

「ってアンタらなんで落ち着いてミ〇ミ〇だけ？を飲み続けてんの！ー！」

「レイ君、マサさんも早く逃げなきゃ！」

「おいレイー！マサ！何やってんだ！」

「離脱（ザッ）」

いやぁミ〇ミ〇は慌てて飲むもんじゃねえですし？それに

「逃げるほどんことでもなくね？」

「だな？ツシ！やるかマサ？」

フツ・・・いいねえレイ君！

『ゴキゴキン』

いつものようにクビを回しつつ指をならす  
レイ君の方は

「ヴィード、ユニゾンだ！」

「ハイですマスター！」

『カツ』

なんかヴィードとユニゾンとやらをし、喧嘩の準備を整える。

その間にも

『グオオオオオ!!!!!!』

せまり来るデザート・ワーム、俺とレイは

「バグキャラと」

「チートキャラ」

「「ナメんなよ?」「」

『ガッ!』

腕をクロスさせうちならし・・・

「イクぞ!オラアアア!!」

「応オオオオオ!!」

俺は下を走って、レイは上から空を飛びデザート・ワームに突っ込む!

「マジかよ!アイツら!!」

「本気!?止めなきや!」

「大丈夫(グッ)」

「うん・・・さっきはビックリして取り乱しちゃったけど・・・今何故かわからないけど大丈夫な気がする・・・」

背後でクロード、ルーナ、アリア、エレナ達の会話が聞こえる

フツ・・・アリア君にエレナ君、中々いい眼力してんぜ？

期待には答えんぜい！

『グオオオオ！』

っと目の前まで来ましたな！

『ガアアアア！！』

「はっバカみてえに大口開けちゃってまあ？」

大口を開けて俺を飲み込もうとするデザートワーム

『ガキン！』

しかし残念！

『！！？』

お？牙が突き刺さらんことに驚いとるようですか？

「悪いな？バグキャラなもんでよ？カッチカチだからよ？」

恒例のアレの変化版をやりつつ

『グッ！ズツ・・・ズオオオ！』

よいしょとばかりに持ち上げる！

「ハツハア！デケエわりには軽いなオイ！っしやオラアア！」

『ブオオオオン』

そしてレイがいるいる上空に向かってブン投げ

「レイイイイ！刺身にしてやれエエー！！」

レイに向かってそう叫んだ。

・  
・  
・  
・

レイ視点

「ホント・・・マサのやつ無茶苦茶だな？」

下で100メートルはあるだろうデザート・ワームの牙を受けて  
無傷な所もそうだけど

「普通投げるか？どんだけ腕力スゲェんだよ・・・まっ俺も負けて  
らんねえか？」

下ではマサが俺に向かって

「レイイイイ！刺身にしてやれエエ！！」

つつてるしな。

「リクエスト答えるとするか・・・創造！妖刀・・・八房！！」

妖刀・八房・・・一振りで八つの斬撃を放てることが出来る刀・・・それを右手に創り出す

更に

「八つじゃ少ないよなあ？よし」

『ヒュウー』

グングンと向かってくるデザートワームに向け

「秘剣・・・燕返し・・・改め・・・」

三つの斬撃を『同時』に放つ技・・・燕返しの状態に入る・・・

が・・・俺が今手にしてる刀は妖刀・八房だ・・・それで燕返しを放つとどうなるか？

答えは・・・

「二十四頭の（ラッシュ）・・・」

『ヒュウー』

「・・・<sup>ドッグス</sup>牙達!!!」

『ザウンッ!!!!』

音は一つ・・・されどその身は・・・

『ズズ・・・バシャン!!!』

二十四に分けられ・・・紅い花を咲かせる。

『ヒュウー・・・ズウン・・・ズウン・・・ズウン』

「ふう・・・終わりと」

ン?さっきと違って?仕方ないだろ?アレ、肩凝るんだよ・・・

っと

「マサ!」

下に下りながらマサの方に近づく

「いやぁレイ凄えなオイ!つつか今の俺の方が凄いけどね!」

うん・・・確かに・・・

「悪い!下のこと考えてなかった!」



マサ、デザートワームの血っていつか体液で、びっちゃびちゃになってるし。

「コレ・・・洗濯したら落ちるか？」

「そんならいならホレ！」

『パチン』

流石に悪いと思ったんでクリーニング処理しといた。

・  
・  
・  
・

マサ視点

「いやぁレイ君、色々出来んのな？一家に一台レイ・ツアイベル！一家に一台レイ・ツアイベル！ってか？」

「家電じゃねえつの！」

上手い切り替しだな？ちなみにレイ君、既にユニゾンとやらを解いてるらしい肩にチョココンとヴィードが乗ってます。

ン？

「アイツら・・・マジか・・・アノ二人世界壊すぞ？」

「ええ・・・レイも大概だと思ってたけど・・・マサも・・・有り得ないわ・・・」

「凄かった(グッ)」

「うん・・・レイ君、かつこよかった・・・マサさんも」

クロードとルーナは口をあぐり、アリアとエレナには褒められ  
たっばい、なんかエレナさんのはレイのついでっばかったけど。

でも嬉しいッス！

っと

「じゃ俺あそろそろ帰るわ！レイ頼む」

「ああ！じゃあなマサ？」

「それじゃあです！マサさん」

うむ！っとイカンイカン！大事なことを忘れてた

「なあレイ？ヴィードくれ！」

「とっと帰れ！！」

『パチン』

残念無念・・・やっぱりくれませんでしたしかも帰りは

『パカッ』

穴でした・・・

「じゃくなみなさん！また会おう！」

落ちながらもその声を上げて、レイ、ヴィード、クロード、ルーナ、アリア、エレナと別れたのでありました。

・  
・  
・  
・

後日談

レイ視点

「マチムラ君！マチムラ君は今日は欠席ですか？」

「なんでここでもマチムラ扱いなんだよ！」

「あっそれ、俺が広めた」

「レイイイイ！」

暫くの間、クロードは、マチムラと呼ばれたりフカマチと呼ばれたりするようになった。

・  
・  
・

新たな弄り方を見つけたマサに感謝だな。

マサ視点

「よっとー！」

『スタツ』

着地成功！つうかココ普通に居間だな？しかし誰もいないんかい？まっいいさね。

ン？

『ヒラヒラ』

「なんだコレ？」

目の前に紙が落ちてきた、でそれをキャッチ

【マサへ】

どうやら手紙らしい、ふむ・・・

【マサ、中々楽しかったぜ？またいつか・・・遊ぼうな？（クロード弄りの意味で）じゃまたなマサ！】

うむ！確かにクロード君は面白えやつだったな。

っとアレ？裏にもまだ何か書いてんな？

【PS、マサに教えたアレ、ソッチじゃ使えないから】



特別編っぽい感じ！（後書き）

後書き

A r i s h i aさんスンマセンでしたアアア！

なんかもうキャラがエライことに・・・ホント、スンマセンでしたアアア！

特にクロード君、ホントにスンマセンです、コレ大丈夫でしょうか？ホント、大丈夫でしょうか・・・教えて下さいA r i s h i aさあああん！！

第二十三話っぱい感じ！（前書き）

前書き

いつもより少し短めです

でも頑張りました。

いつものごとく薬的な物をお持ちになってください。

## 第二十三話っぱい感じ！

はい来ました、臨海学校・・・の前日です。

「いよいよ明日だな、いやぁ楽しみだねー！」

「うん！着いたらいっぱい遊ぼうね？」

おう、むろんでござえますよ、もうめっさはしゃぐねー！はしゃぐこと請け合いだね。

あっちなみに。

「美柑！ちゃぁんと荷物は纏めたかね？ヤミっ子も？」

そうこの二人も参加します、ン？どうやったかって・・・ふむ・・・  
実は

・  
・  
・  
・

『ガチャ』

「スンマセーン！二人程、追加で臨海学校に連れてきたいんですけど」

「ちょマサさん、ダメだよ、学校行事なんだよ？いくらなんでも」



「こうなったマサナリには何を言っても無駄だと思いますが？」

はい美柑君、成功フラグありがとう、そしてヤミっ子はよくわか  
ってるように。

「二人共可愛いからええよ」

うむ、やはりオツケーでしたな、さて

「二人がチ」

「テメエは壁にキスしてろッ!!」

『ゴシヤン!』

予想通りに飛び掛かってきやがりましたんで壁に突き刺しました。

「よしや、言質は取った行くべ」

「アハハ・・・やり過ぎのような・・・」

「えっちいマネをする人には当然の処分です、マサナリが手をくだ  
さいなかつたら私が手をくだしてました」

・  
・  
・  
・

というようなことがあったんですな、あっちなみに美柑の学校は  
臨海学校の時に丁度、創立記念日で休みだったぞ？で二日以降は普

通に休みが重なったのだ!

いや偶然が重なったね、ホント……

そついつことにして!

「マサ……張り切ってるって悪いけど……テレビ」

アン? テレビ? はて、と思いつつもテレビん方見てみりゃ美柑もヤミっ子もくぎづけですよん?

「何? 面白い番組でもやってんの? カンフー映画?」

「違うよマサさん……」レ……

ン……どれどれ……ふむふむ……

『……地方では大型の台風が接近しています、十分な警戒が必要ですよ』

ふむ、台風ねえ

「それがどうしたん?」

「明日の天気次第では臨海学校中止になるかも……って電話がきたんだよ」

ふ〜ん、なるほどねえ、臨海学校が……

「ハアアアア! なんですとオオオオ!!」

「リト、嘘でしょ！ねえ中止になっちゃうの！！」

思いつきりリトに詰め寄る、俺とララ、そら詰め寄るわ！

中止つて、おまつ・・・中止つて・・・折角、色々用意したんぞ！臨海学校のために徹夜してまで作ったもんだつてあるんだぞ！

「ちょ！怖い！怖いって、仕方ないだろ台風がきてるんだから」

むう確かにリトに詰め寄ったつて仕方ない・・・しかし台風め・・・俺の臨海学校を阻止するつもりか・・・

「そうはイクか！絶対臨海学校に行くんじやい！楽しみにしてたんだ！純粋な海水浴目的で海に行くなんて初めてなんだぞ！中止にさせてたまるかいイイイ！」

『ガチャ！』

そう言い残し、俺は結城家を飛び出した、中止にはさせん！台風め目に物見せてくれるわ！！

・  
・  
・

ララ視点

マサ飛び出していったやつた・・・マサも臨海学校凄く楽しみだつたんだ

ううん、マサだけじゃない私だって凄く楽しみにしてたんだもん！

「絶対に臨海学校に行く！マサとリトと美柑とヤミちゃん、唯にハルナ！みんなで行くんだもん！台風なんて・・・」

『バツ』

久しぶりに羽を広げて私は窓から外へと飛び出す。

マサの姿はもう見えない、どこに行ったのか少し気になったけど今は

「ララ~~~~」

アレ？

「リト？」

気付いたらリトも私の後を追ってきてくれた

「ララさん、どうするつもりなの？」

美柑も来てくれたんだ

「プリンセス？危ないです風が大分強くなってきました。」

ヤミちゃんも、私のことを心配してくれてるみたい、そのことは嬉しいけど・・・でも

「絶対に行きたいんだもん！台風なんて私の発明品で・・・！」

そう言って再び台風が近づいて来ている岬の方に向かおうとする

「俺もついてくよ、一人だと危ないだろうし？」

「うん、そうだね、私も臨海学校行きたいし何か手伝えるかもしれないし」

「岬までの道は私が護衛としてついていきましょう。」

ってリトも美柑もヤミちゃんも言ってくれた

「ありがとうみんな、エへへじゃ行くこう？」

台風は来てるけど嬉しくて思わず笑っちゃた。

それからみんなで岬の所まで移動して

「よし！じゃあ早速！」『ごーごーバキュームくん！』

「一つ目の発明品、『ごーごーバキュームくん』で台風を吸い込もうと考えてスイッチを押す

『ゴオオ・・・』

「ラララ止め止め！そこいらじゅう吸い込んでる！！」

失敗・・・肝心の台風は吸い込めなくて終わっちゃった。

でも諦めないんだから

・  
・  
・  
それからいくつかの発明品を試してみたけど全部失敗……

「ララさん……」

「プリンセス、雨も強くなってきていますし危険です」

美柑とヤミちゃんが心配そうに私に声をかけてくれる

でも、まだ諦めたくない、臨海学校に行きたいんだもん、マサと……ううん、みんなで！

「これで最後なら！」ぱくぱくイーターくん『雲を食べちゃえ！』

最後に残っていた発明品、『ぱくぱくイーターくん』これで台風を作ってる雲を無くしちゃえば、きっと！

『ヒュー……パクパク』

やった！上手くいきそう、台風の近くの雲を食べ始める『ぱくぱくイーターくん』

「イケるかも……ララ！」

「うん！臨海学校に行ける。」

リトもその様子を見て顔に笑顔が見える、エへへ、海に行ったら

マサといっぱい遊ぼう・・・アッ!

「そついえばマサはどこに行っちゃったんだろ？」

「ララさんが外に出た時にはいなかったの？」

「うん、もう見えなくなっちゃってた」

マサどこ行ったのかな？エへへ、私が台風をやっつけちゃった、  
って言ったらビックリするだろうな？

また撫でてくれるかな？エへへ

その様子を思い浮かべて自然と頬がゆるんじやう

「ララッ!..!」

えっ?リト?びっし

『ゴビュウ・・・ビュー』

あっ・・・『ぱくぱくイーターくん』が・・・

「風に飛ばされちゃった・・・」

『スタン』

今の今まで上手くいったのに・・・もう少しかったのに・・・

「ヒック・・・ヒック・・・ウエーン、なんで、なんで・・・もう

ちよつエグツ・・・だったのに・・・臨海ヒック・・・行きた・・・ウエーン」

一気に力が抜けて、座り込んだ、涙が出てくる、悲しくて悔しくて。

「ララさん・・・」

「ララ・・・」

「プリンセス・・・」

そんな私にみんなが心配そうに声をかけてくれるけど、涙は止まらない

「ウエーン・・・ツグ・・・マザ・・・」

泣きながら無意識にマサの名前を呼んでた、そしたら・・・

「風が吹く〜 岬の方〜から〜 台風を吹き飛ばす〜 凄い風〜  
なんつって？ララ呼んだか？」

よく知った声が、私の大好きな人の声が聞こえてきた

「マザ？」

「マザじゃねえつの！マサなマサ？つたく明日の準備は済ませたのかね？当日バタバタしたら困るよ〜？」



いつもみたいに軽い口調、それに最後に言ったことって……まるで……

「マサ……手に持ってるのなんだ？いやー応確認な？うん」

「ニツ……用務のおっちゃんに頼んで材料を借りて作った、巨大団扇だ！名付けて『風神丸』」

マサは手に凄くおっいきいウチワを持ちながらニカッと笑った

「マサナリはソレを作りに行っているのですか？」

ヤミちゃんの質問にうなづきながら

「応よ！目には目にを、齒に齒を、風には風をとてな？まあ見てるいー！」

そう言いながら、ウチワを担いで

「危ねえからちいと離れてるい？」

私達を後ろに下げ。

「臨海学校？楽しみだな？」

もう一度、ニカッと笑うと

「ウオッラァァァ！どけどけどけえ風神様のお通りだァァァ！邪魔するやつァァァブツ飛ばすぞオオオ！！！」

『ズダダダッ・・・グン・・・』

岬の先っちょと所まで走って行って、そのウチワを振りかぶって

「しゃラアアアア！！」

『ヴオオオンッ！！』

台風に向けてウチワを振り下ろした・・・そしてウチワから出た  
風が

『ゴツヒユウン・・・バアウン』

台風を吹き飛ばしちゃった・・・

「ハツハア！台風ごときが俺に喧嘩を売るなんざ千年早え！ってアレ？ヤベ・・・『風神丸』折れてもうとるがな！耐久性に問題アリだな」

台風が無くなり空からは太陽が見えた、けど私にとっての太陽は、空じゃなくて今、目の前にいる大好きな男の子。

「マサーー」

その太陽に向かって、私は飛び込んだ！

「リトガード！！」

「今は違っただろ！今は！！」

結局は阻まれちゃったけど・・・むう・・・少しくらいいいのに

マサ視点

「アハハ・・・マサさん無茶苦茶すぎ」

「ハツハツハ、無茶をやらかすのはジジイだけと思うなよ！でもまっつ、コレで臨海学校行けん？」

いやあ楽しみ！海つつたら今まではアレだったからね、人食い鮫とか大王イカとかと喧嘩する所だったからね、ジジイのせいぞろい！

ホント楽しみだね。

「むう・・・少しくらい抱き着くの許してくれてもいいのに」

おうララさん今だにイジケとる、ふむ・・・しゃあねえですなあ、話しを聞くかぎり今日は頑張ってたみたいだし

「ホレ、ララ？おんぶだ」

こんくらいはサービスしてやるわ。

「えっ？いいの？やった！」

『バツ！』

フツ……可愛いやつめ……ン？

「「ジーーー」」

美柑&ヤミよ、その目はアレか？してほしいんか？けどなあ

「リト、コレ持てるか？」

「はっ……うお……！」

リトに『風神丸』を持たせたら即効で潰れもつた、慌てて救出！

「ハアハア……なっ何キロあるんだよ……重すぎるぞ」

何キロつわれても……うっむ

「わからん？300くらい？多分？」

「おんおん300……！」

おっビックリしてる、まあ300キロつってるけど実際はまだ多いやも？

「リト……マサさんだよ？台風吹き飛ばしちゃうんだよ？」

「そうですね、なんら不思議はありません」

「あっ……そう言われたら納得だわ」

うむうむ、納得してくれてよかったわい。

「スウ〜スウ〜」

ン？

「ララ静かにしてんなあつて思ったら寝てたんかい？」

いつの間にやらララさん寝息を立てておりました

「疲れてたのかな？気持ちよさそう・・・ちよつと羨ましいかも？」

疲れてたねえ・・・まあそういうこともあらあな、俺が岬ん着いた時、めっさ泣いてたし、泣き疲れてやつかね？

にしても美柑君、羨ましいとは、やっぱしおんぶ希望だったみたいね？

「美柑にやあ後でやったげっから今は我慢な？」

「えっ・・・うっうん」

うむうむ、美柑は素直な良い子ですな。

「ジーーー」

「ヤミっ子もな？」

「仕方がありませんね、そこまで言うのであれば背負われてあげましょっ」

いやなんで上から目線？どんだけ負けず嫌いなんだ？

まあ人んこたあ言えんけど。

とこんな感じで話しをしながら帰宅しました。

そしてララを布団に寝かせてテレビをつけたら

『今日未明、突如台風が消滅するという事件がありました、情報によると岬の方で巨大なウチワのような物を・・・』

『プツン』

「マサ・・・今・・・」

「気にすんな！大丈夫大丈夫！」

うんきつと、大体、んな話し誰が信じるんだつつうの？

「マサさんを知ってる人なら」

「容易にマサナリに辿り着くでしょうね？」

うむ・・・その可能性は否定できんな？まあ

「アレは・・・風神様の仕業ってことでココは一つ」

そついうことにしといて！

あつちなみに『風神丸』は・・・

【ララ様のデダイヤルにしまっておきますので】

とのペケ君の言葉により、なんかララン携帯みたいなやつにしま  
つてあるんで大丈夫です。

・  
・  
・  
・

ちよつとしたオマケ

唯視点

「明日は中止かしら・・・でも今は風もないわね？」

ココアを飲みながら、そう呟き天気予報をみる為にテレビをつけた

台風が近づいてきてたから明日の臨海学校は中止になるかもしれ  
ないって考えてたけど突然、風も雨も止んで、天気予報を見るため  
にテレビをつけたら

『今日未明、突如台風が消滅するという事件がありました、話しに  
よると岬の方で巨大なウチワのような物を』

「ブフーー!!」

ニュース速報を見て思わず、ココアを吹き出してしまった、慌て  
て口元をハンカチで拭いつつ、思い浮かぶ一人の人物。

「マサ君ね・・・」

こんな非常識なことを仕出かす人はマサ君くらいよ・・・  
改めてマサ君の非常識っぷりを垣間見た気がするわ・・・

・  
・  
・  
・

春菜視点

明日の天気は心配だけど準備だけはシツカリとしてるそしたらお姉  
ちゃんが

「ねえ春菜、ニュースで面白いことやってるわよ？」

って声をかけてきた

「面白いこと？」

「そっ・・・ほら」

テレビでは

『今日未明、突如台風が消滅するという事件がありました、話しに  
よると岬の方で巨大なウチワのような物を』

という内容が流れてる、うん間違いない



「マサ君だ……」

「えっ？誰？」

思わずもれたマサ君の名前、この後、ごまかすの苦労したよ……  
マサ君……無茶苦茶すぎるよ……

涼子視点

『今日未明、突如台風が消滅するという事件がありました、話しによると岬の方で巨大なウチワのような物を』

「ガクラン君、凄いわねえ、解剖させてくれないかしら？」

【いやッス！NO解剖！】

むっ？独り言なのにキツチリ否定された気がするわ、流石ねガクラン君。

「それにしても、ホントに不思議な子よね？」

彼は私があった人物の中でもダントツで変わってる子、その身体能力もだけど、むしろ彼の考え方が不思議というか変わってるというか

「まっだから気にいってるんだけど」

明日からの臨海学校、彼の回りではどんなことがあるのかしら楽しみね？

まあきつと私もいつの間にか巻き込まれてるでしょうけど・・・  
フフ

・  
・  
・  
・

沙姫視点

『今日未明、突如台風が消滅するという事件がありました、話しによると岬の方で巨大なウチワのような物を』

「間違いなく政成ですね」

凜いくら政成さんとはいえ

「流石にそれは・・・」

そのまま無いといいきれませんか、政成さんなら十分に考えられますわね、何せ鉄の球を斬ってしまう程のお人ですもの

ああ・・・あの時の政成さんは・・・かっかっこ・・・うっコレで逆ですわ・・・でも・・・

「ポーーー」

凜視点

沙姫様、何やら思い出しているようだ、察するにアノ鉄の球を斬った時の政成の様子を思い出したのだろう。

確かにアノ時の政成は普段の政成とは違った雰囲気を放ち格好よかつたと言えるな、が普段と違うと言えばやはりアレだな

アノ不埒者に向けたアノ目、アノ目は・・・

「ポー」

マサ視点

「なんか二人・・・いややっぱ一人か？取り返しがつかんことになつとる気が」

風呂に入ってたらフとそんな予感が過ぎりました。

どうしてでしょうね？不思議なこつて・・・

『ガラッ！』

「マサーー!!」

「今は俺が入つとるから後から入れ! つつか女の子なら慎みを持って  
つの!!」

起きたと思つたら即効で襲撃してきおつてからに

つつか普通逆だろ!!

「「チラ・・・チラ・・・」」

「オマエらもじゃい! ゲンコされたなかつたら出てけ!!」

美柑にヤミっ子もセットで覗きやがってからに、 つつかキミらは  
ララを止めなきやダメじゃろがい!

ちなみに美柑のヤミは服を着てます、 ララはスツパだけどね、俺  
?俺はタオル巻いてんぞ一応な!

「「「ええ」」」

ほう・・・反抗的だなオイ!

『ガツン!』

「イタツ!」

『ゴツン!』

「あつっ！…！」

『ゴチン…！』

「ッ！…！」

ゲンゴ三連がまして叩き出しました・・・

何度も言つが普通逆！！

第二十三話っぽい感じ！（後書き）

後書き

キャラがキャラが・・・

でも頑張りましたのでお許しを〜

感想がありましたれば是非にイイイ

## 第二十四話っぽい感じ！（前書き）

前書き

予想外にも程がありました・・・気付いたら・・・

えとアレをアレしてどどどぞ。

## 第二十四話っぽい感じ！

美柑視点

『ブロロロ〜』

「あつヤミさん！コレ、食べる？」

「いただきます。」

ええ、今、私はバスの中にいます何故かというところ……前回で言っただけだからわかるよね？

そう

「海イイイイ！見る！海が見えてきたぞ！！」

「ホントだ綺麗〜」

リトの通ってる学校の臨海学校に参加しているから。

勿論、そんな無茶な事を言い出したのはマサさんだ、けど意外とアッサリ同行の許可が出た。

正直な話し、マサさん達が臨海学校に行くって言うていた時に少し羨ましいって思ってたから結構嬉しいかも？って思ってるのは内緒……でもないかな？嬉しいし。

でもリトの学校の校長先生は許可を出してくれたけど、他の生徒



の人達は大丈夫なのかな？思いながらも、朝、集合場所に行つてみたら

「ン？アレ？美柑ちゃん？にヤミさんなんで？」

「あつ春菜さん、えと私とヤミさんも一緒に行くことになつたんです。」

「ええ、急遽ではありますが」

私とヤミさんがそう話したら、少し驚いた顔をしながらも

「マサ君？」

アツサリとマサさんに辿り着いてた

「はい、先夕日に帰ってきたって思ったたら『美柑！ヤミ！臨海学校の準備をするのだぁあ』って言い出して」

「気付いたらもう校長室の目の前にいました、恐るべき早業でした、流石は私のターゲットです。」

ヤミさんまだマサさんをターゲット扱いしてたんだ？そういえば毎朝、勝負してるもんね？一回も当たったのみたことないけど

「むっ？」

あつ！しまったぁ・・・ヤミさん結構負けず嫌いなんだよね？さつき考えてたことがバレちゃったかな？

「気のせいですか？」

ホッ・・・よかった、っと春菜さんほったらかしかった。

っアレ？

「クスッ・・・マサ君らしいかも？昨日の台風もマサ君でしょ？」

マサさん、やっぱり春菜さんにバレてるよ？

そう思いながらもマサさんの方をみたら

「アレって確か・・・結城君の妹さんの美柑さん？それにヤミさんまでマサ君どついうこと？」

「まんまだ！旅は道連れ世は情け！参加する事になったでござる、ヨロシク頼むぜい」

「ハア~~~~~どうせダメって言っても聞かないでしょアナタの場合。」

「うむ！流石は唯！わかってるな！」

アハハ・・・唯さん結構敵しそうな感じがしたんだけどやっぱりマサさんに影響されてるみたい。

あつ！ちなみに唯さんとはプールでマサさんの写真を撮った時に会って、マサさんの紹介で唯さんって呼ばせてもらってる。

「あら？結城君の妹さん、確か美柑ちゃんだったかしら？」

「少しだけ唯さんとの出会いを思い出してたら御門先生が話しかけてきた、御門先生ともアノ写真撮影の時に知り合いになったんだよね？」

「御門先生は凄く大人っぽくて綺麗な人で私から見ても少し羨ましくなるくらいに美人な人、まあそれを言い出したらマサさんやリトの回りの女の人みんな美人なだけだね？」

「つといけない」

「えと、私とヤミさんも参加することになって・・・」

「ええ、よろしく願います、ドクター・ミカド」

「やっぱり御門先生も何故って顔をしてたから早めにその事を言う」と

「なるほど・・・ガ克蘭君ね？フフ・・・やっぱり面白い子よね？解剖させてくれないかしら？」

「ガ克蘭君って言うのはマサさんの愛称、マサさんは御門先生の事を保健さんって呼んでるみたい」

「それにしても 御門先生・・・解剖って・・・でもマサさんなら大丈夫かも？ちよつとだけそう思ったなら」

「NO解剖で！断固拒否！つうか美柑、流石のマサさんでも解剖はキツイっつもの！」

「御門先生の声が聞こえていたみたい、それに私が考えてたことも」

読まれちゃってようで、そう言いながら近付いてきて

「全く！保健さん俺なんかの解剖するよかりトの改造をした方が面白えと思うツスよ？リトもそろそろドリル着けたいとか言ってた気が」

「言っていないから！！」

「またまた〜ホントは着けたいくせに〜」

「御門先生まで！！着けたくないですから！！だから右手の持つてる怪しい薬をしまつて下さい！！」

つてリトを弄りだした、マサさんも御門先生もやるなあ、よし！

「リト？ドリルは右手でしょ？」

私も参加しよ！前の私なら例え顔見知りであってもそういう人の輪の中に入るうとは思わなかったけど、今はそっちの方が楽しそうって素直にそう考えて行動できるようになった

「はっ？美柑まで！！」

「結城 リト、右手だけドリルは淋しいので左手にはハンマーにしましょう。」

ヤミさんもごく自然にその人の輪に入っていく、ヤミさん、最初会った時にくらべて段々と標準が豊かになってきてる気がするな？

「何々リトを改造するの！だったら、ほんのうツールコノ万能工具で目からビーム  
！！」

ララさんも加わってきた

「いったい！俺をどうしたいんだアアア！！！」

「『冗談なのに』（ですが）『『『』」

「つ……疲れる……出発前なのに異常に疲れる……」

フフ……リトには悪いけどやっぱり楽しかも？

、そんな私達をみながら、春菜さんとは苦笑して、唯さんは呆れた顔けど微妙に口元は笑ってるララさんは

「ええ〜しないの改造？」

って言うってたけど……出発前からコレだけ楽しいんだから向こうに着いたらもっと楽しくなりそうだな？

ううん、きつと楽しくなる、だって……

「つとイカンイカン！そろそろバスに乗り込まねば……ン？美柑、俺ん顔をジーと見てからに？顔のパーツ以外になんかついてっか？」

「うん、鼻メガネがいつ着けたのマサさん？」

「NOW！なんか着けたくなった」

こんな面白い人が近くにいるしね？

・  
・  
・  
・  
ン？アレ？あつ！まだ私？

「美柑、どうしたのですか？」

「ううん、大丈夫だよヤミさん、ちょっと考え事してただけ」

「そうですか」

ビックリしてたらヤミさんに心配されちゃった。

「ねえねえマサ！海ってしょっぱいって聞いたけどなんでなの？」

「うむ、何故に海がしょっぱいかというとな？ンッン！ではでは皆さんお耳を拝借！」

あつ、マサさん昔話を始めてる、マサさんって結構そつという話を知ってるんだよね？よし私も聞こう。

「マサマサ、マイクあるよ？」

「おっ？悪いね、里沙じゃ使わせてもらおうぜい……むかし、む

かし、海は今のようによっぱくなくなかったくらいにむかしの話し、ある所に二人兄弟がおりました・・・」

マサさんが話しを始めると、今までそれぞれ好きなことを話していた他の生徒さん達もマサさんの話しを聞き始める

「兄弟の兄はとても裕福だったんだけどスゲエ性格が悪いやつ、弟は逆に貧しいけどスゲエいいやつだったんだと・・・」

である大晦日の日、弟はお供え物の米を借りようと思って兄に頼みに行っただけだな、兄は知らんがなっつて弟ん頼みを断ったんだと

「むうイジワルだ！」

「だよな？ちいとくれえ譲ってやれつう話しだわな？俺がその場にいたら正座させて説経してんね！」

「マサ君、横道にそれてる」

何時もは私かりトが軌道修正するんだけど今日は春菜さんがしてくれた、マサさんの話しはこうやって少しズレてったりするけどホントは私は好き、話しの続きを早く聞きたい気もするけど、こうやってズレたりするのも面白いって思うし。

「っと悪い悪い、でな？弟は、仕方ないつってガツクリ肩を落としながらも家に帰ったわけだ」

その帰り道で、腹を空かした爺さんに出会ったんよ、弟はその爺さんを見かねて自分が持ってた弁当を全部上げたんだと、自分も腹は

減ってただけどな？実に見上げた漢っぷり！」

「漢だな・・・」

「ああ・・・俺達もそういう漢になりたいもんだ」

「フツ・・・なれるさA&Bよ」

「ウオオ！マサアア！」

ハハハ・・・マサさん人気者・・・なのかな？

「つと続き続き、すると爺さんは弟ん漢気に感動したのか、ある物をくれたんさ」

「漢気って・・・優しさでしょ・・・そこは」

「ナイスツツコミ！その調子で頑張れ唯！」

「ハア~~~~~」

あつ唯さんため息ついてる、リトはリトで

「やっぱり古手川がいると助かるよな」

って休憩してるし。

「で、その爺さんがくれた、ある物ってのは石臼だったんよ？その爺さんが言うには、その石臼は自分が欲しいって思ってるもんを考えながら回すと



その欲しい物が出てくるっつう不思議な石臼らしい、爺さんはその石臼の使い方を教えつと、フと消えてしまったらしい、弟は不思議に思いながらも家に帰って、その弟ん嫁さんの前で、米出ろ〜米出ろ〜つって回したら米が出てきたんだと

「タイヤキは出るのでしょうか？」

「ああ、何でも出てきたらしいからな？ヤミには後で作ったげっからその物欲しそうな目はやめれ」

「仕方ありませんそこまでいうのなら貰ってあげましょう」

ヤミさんやつぱり負けず嫌いだよな？仕方がないって・・・あっ私も後で貰おう。

「あっガ克蘭君、私はホットケーキね？材料はちゃんと持ってきてるから」

「なんでやねん、まあ別にいいツスけど、つて、ええ〜い！物欲しげな顔で見るなクラスメイツ女子！後で作ったげるから今は我慢しな！」

「わあーい！マサありがとうー！」

「リトガード！」

「うわっ！バスの中ですねよ！」

御門先生のリクエストに抱き着いてきたララさんにリトを差し出して、ララさんは文句を言うけど、頭をポンポンと撫でてもらっ

たらずぐに笑顔になった

「ちょっと羨ましいかも？まあ私もお家では結構撫でてもらってるけどね？それに

「やった！」

「私は杏仁豆腐かしらね？」

「マサマサ話せる〜」

「うんうん、アレ美味しいよね？」

「ハハ・・・話しでは聞いてたけど、マサさんが作るお菓子凄いな。気みたい、私はお家で作って貰ってるし、一緒に作ったり作ってあげたりしてるから少しだけ優越感。」

「つと何処まで話したっけ？ああそうだった、米が出てくるまでだったか？でな、弟はその石臼から食べ物とか屋敷とか次々と出してくれたんさ」

「そしてその屋敷に知り合いや村の人達をみんな招いて盛大に宴を開いたんだと」

「屋敷まで出たのか！！っていうツツコミは無しで！何時もはマサさんからだけど蜜柑からお願い！」

「ってアレ？今なにか変なことが頭を過ぎったような・・・？つと続き聞かなきゃ。」

「でその宴中には、イジワルな兄も来てたらしくてな、その兄は今まで貧しいかったはずん弟が次々と料理をもつてくんのを怪しんでコツソリ後をつけたんだと

したら、『お菓子でろ〜お菓子でろ〜』って弟が石臼を回してお菓子を出してんのを見たわけよ」

「ねえねえなんでイジワルお兄さんまで呼んだのかな？」

「リト並にいいやつだからじゃね？」

「うっ……別に俺は……」

「照れるな親友！」

フフ……仲良いよね？リトとマサさん

「まあその兄はそんなリト並にいいやつ弟さんの気持ちを気付かねえで、アノ石臼があれば何でも好きな物が出てくる！！ってその石臼が欲しくなっちゃまったわけだ

そしてみんなが寝静まった時を見計らって、そんバ〜タレの兄はその石臼と出してあつたお菓子を盗みやがったんよ。」

マサさん、その兄のことが嫌いみたいだね？

「むう……ヒドイお兄さんだよ！」

「全くだ！俺がその場にいたらツームストンドライバーからのロメオスペシャルに繋げてるね！ギブっても許してはやらん！」

「ロメオか・・・アレ結構痛いよな・・・」

あつ、そう言えばリト、マサさんにその技をかけられた事があったっけ？その後ヤミさんに四の字固め？だっけ？もかけられてたな？

ン？なんでかけられたのかって？マサさんとヤミさんがゲームで勝負してる時に余計なことを言ったからだよ。

二人共、あんまりゲームは得意じゃないみたいだけど、結構頻繁に張り合ってる、私やララさん、リトも混ぜてもらってるけどハッキリ言っちゃつうと・・・

「美柑何やら不穏な気配を感じたが（ましたが）」

「アハハく何でもないよ？うん」

二人共この時はコンビネーション抜群だよね？負けず嫌いだからなあマサさんもヤミさんも。

「まあいいさね・・・でそんバクタレの兄は弟ん家から逃げだして近くの浜辺に繋げてあった小船に乗り込んで海を渡って更に遠くに逃げようとしたわけよ？」

そんで船の上で一緒に盗んできたお菓子を平らげて、腹が膨れつと、甘いもんばっか食ったせいか、しょぱいもんを口にしたくなつたわけさ

で早速、そんバクタレの兄は石臼を使って『塩出ろく塩出ろく』と塩を出し始めた」

「それからそれから」

ララさんが身を乗り出して聞いてる、マサさんの話し方って何か引き込まれちゃうんだよね？

「塩を舐めたバクタレん兄は満足して石臼から塩を出すのを止めようって思ったんだが、そのバクタレん兄は石臼から『出す』方法は知ってても『止める』方法は知らなかった！

いくら止めようって思っても、後ん祭りだわな？石臼からは塩が出続けて、その塩の重さん耐えられなくなった小船はブクブクと沈んじまった、バクタレん兄は命からがら逃げたしたんだが石臼は海の底

今でも石臼からは塩が出続けて、海の水はしょっぱくなっちゃまったつうわけでした、とっぴんぱらりのふう」

『パチパチパチ』

自然と拍手が起こってる、それくらいに引き込まれたもんね？私もヤマミさんもしてるし

「っと、最後にコノ話しはフィクションです、実際の以下略」

「だあ〜」

シツカリと落ちをつける所もマサさんらしいよ……

・  
・  
・

## マサ視点

意外と昔話盛り上がったな、実に満足！

「あつちなみに海がしょっぱいホントの理由は諸説様々でハッキリとはわあつてねえらしいぞ？もしかしたらホントに石臼があつたりしてな？」

「へーそうだったんだ・・・ねえねえもし、石臼から砂糖出ろって言つてたら甘かつたのかな？」

「かもな？どうせだつたらミ〇ミ〇出して欲しかったぜい」

この広い海が全部ミ〇ミ〇だつたら世界は平和になること請け合  
いだ。

「どんな海よ・・・まあ確かマサ君が言うみたいにハッキリとはわかつてないみたいね、有力なのは昔は海は塩酸みたいでその塩酸と溶けた岩からナトリウムが混ざつて塩水になった」

「唯！カンベン、マサさん限界、頭パーンつてなる！」

「ハア~~~~アナタはもう・・・」

いや唯さんの物知りっぷりはスゲエですが、難しくなってきたらマサさんヤバイのよ？

「アハハ・・・マサさん大丈夫？」

「うむ、何とか、勉強は苦手なんですわい」

「アナタねえテストとかどうする気よ？」

むっ……テスト……

「唯に教えてもらおう！なんせ唯先生は俺に初の30点台を取らしてくれたお方だからな！頼むぞ唯先生！」

まあ小テストではあつたけど、アノ時はマジで嬉しかったのだ！

「なんで私が！！ハア~~~~まあカンニングするとか言い出さないだけマシかしら？」

カンニングはしねえ！するくらいなら玉砕するわい、ってアレ？

「マサさん……」

「マサ君……」

「マサナリは……」

「ガクラン君って……」

えっ？何故に皆さん優しい瞳？暖かいけど冷たいよ？

「マサ……俺よりマズインじゃないか……」

リトまで！！

「マサ！頑張ろ！」

わあーい、ララに応援されたぜ、チクソウ・・・

「今に見てるよ・・・少なくとも赤点は回避してやるー!」

目標低いとかは言わんといて!コレが精一杯なんじゃい。

つとイカンイカン、折角の臨海学校、テストん話しはコレまでだ  
!まあまだバスん中だけんど

つつわけで!

「第一回、しり取り大会!ちなみに食べ物縛りだ!隣ん奴とペアを組んでな?」

と、しり取りを提案!みんなノリよくノってくれました。

あっペアを組めと言ったんはララとヤミン為でもありんす。

ちなみに

俺&ララ

リト&エテ山

美柑&ヤミ

唯&春菜

里沙&未央



A & B

他といった組み合わせになりました。

あつ保健さんは審判をするらしいんで不参加です。

校長（変態）はどうしたかとな？朝、美柑とヤミっ子に飛び掛かってきやがったんで即沈めて、バスん上に縛りつけてありますが何か？

つとまあ校長（変態）んことはいいとして、早速しり取り開始です！

で泊まる旅館に到着するまでん間は、しり取りをして過ごしました  
で到着してバスから降りながら

「ハア？ヤミっ子？最後、アレ時間切れだよな？」

「いえ、シツカリ時間内に答えていました、それに、それを言うならマサナリだってその前の解答が若干遅かった気がします。」

「何言ってるのアレはアレだよ？演出だよ？ギリギリ感を出すための演技？ホントはスゲー余裕あったしね！」

とヤミっ子と言い合い、最後まで残ったんが俺&ララチームと美柑&ヤミチームでした。

にしても、ヤミっ子め、完全に俺らん勝ちだったつうのに！

「アハハ・・・またやってるし？」

「いつつもだよな？マサとヤミちゃんって」

負けられねえですよ！つつかヤミっ子が引けばすむ話しだつづのに・・・まあ仕方があるまい、マサさん大人だから

「まあ引き分けにしようってやんよ！」

「いえ、私と美柑の勝ちです」

こっ・・・こんヤミっ子は！！

「どっちもどっちだよな？」

ほう・・・リト君・・・よい度胸だ！

「俺は腕な？」

「では私は足を」

『ギチギチギチ』

「アダダダ・・・ギブギブ！！」

腕十字とアキレス腱固めの刑に処しました。

「さっきまで言い合いしてたのが嘘みたいに意気ピツタリね？」

「アハハ、リト君大丈夫かな？」

「春菜さん、心配しなくても、いつものことですから」

「むう・・・マサとヤミちゃん意気ピツタリ、ちょっと羨ましい」

「フッフ、口は災いの元ね？それにガクラン君もヤミさんも引き分けでいいのに二人とも負けず嫌いね？」

とこんな感じで臨海学校はスタートし。

「ギブギブーーーー！！」

青空にリトの叫びが響き渡りました。

## 第二十四話っばい感じ！（後書き）

後書き

はい！出発からバスだけで一話。昔話の下りが長すぎた・・・

それに気付いたら美柑視点の方が長かったし・・・

折角、原作入手したのに何故にこんなことに？でも頑張りました！

そして何とPVが100万を突破していました！！見て下さった方々に深く感謝いたします、ホントにありがとうございます。

コレからもこんなアレな感じな話ではありますがお暇な時にも見てやって下さい。

どうもありがとうございました。

あっ感想などもありましたら是非に。

第二十五話っぽい感じ！（前書き）

前書き

キャラがキャラがアアア！

ドンドン進むキャラ崩壊！

薬的な物をもってどうぞ！

## 第二十五話っばい感じ！

「彩南高校のみなさん、遠い所よくぞ、いらっしやいました〜」

リトへの八つ当たりも終わったので今日とまる旅館の入口まで来たら、早速、旅館の女将さんとやら中居さんやらが出向かえてくれました。

「いやぁ正直、ここまでガチの旅館たぁ思わんかったぜい」

「だな？結構立派な旅館だよな？」

リトもベックラしとりますな、ぶつちやけ、今にも潰れそうな勢いん場所かと思っとなっただけんどな？

「おっ美人女将！」

エテ山、盛るなつ・・・あっ！

『バツ！』

「高美ちゃん！会いたかったよぉ」

変態（校長）が女将さんにル○ンダイブしとる　いつんまに縄抜けしやがった、あの変態（校長）は

『ヒュッ！ガシッ！』

捕まえて

「テメエは地面に刺さってるッ!！」

『ザスンツッ!！」』

入り口前に挿しときました。

「マサってホント、校長に遠慮ないよな」

むっ?リト君や?キミは勘違いしとるぞ?

「加減はしてるぞ?生きてんじゃん?」

俺がその気になったらマジに即パーンだぞ?

「生きてるってマサさん・・・過激だよ」

「そつでしようか?」

むっ、美柑には刺激が強いが、ヤミは寧ろコツチ側みただけんど

「校長先生、減点です!」

「唯さん多分、聞こえてないと思うよ?」

唯は唯で校長を減点して、春菜にツッコまれとりまん?

「マサ!私、アレ知ってるよ!アレって一輪挿しって言うんでしょ?」

おっララ上手なこと言うな

「確かに一輪挿しだわな？この旅館ん名物に・・・ならんな？アレじゃ客はドン引きしてまう」

地面に頭が刺さった変態なんぞ誰も見たがらんしな。

「あっ！先程のことはお気になさらず、今日はよろしくお願いします。」

おっ、気付いたら保健さんが変態（校長）の代わりんアイサツしとるし

「いえいえ、どちらにせよ私が手を下してましたから、それにしても元気な生徒さんですね？」

元気が売りですからな！にしても女将さん結構デキる？カラカラと笑いながらも自ら手を下すって

「あっそうそう、生徒さんの中に鬼島 政成君って子がいません？」

おっ？

「マサ、アノ女将さんと知り合いなのか？」

「いんや？全く、はて？」

思わずクビを捻ります、はて何なんでしょう？

「ガ克蘭君？御呼びみたいよ？」



つとイカンイカン

「あいあい」

と女将さんとこに行きまする

「あら、さっきの元気な生徒さんが鬼島君だったんですね？」

ちよつくら驚き顔の女将さんに

「どうも、元気が売りの 鬼島 政成ツス、あつ後、呼ぶ時あマサ  
かマサナリで！」

と自己紹介、したら女将さん

「フフ・・・聞いてた通りねえ確か・・・マサ坊だったかしら？」

と砕けた口調になってマサ坊呼びわり、まあ堅い口調よかはコッ  
チん方が楽でいいやね？にしてもマサ坊って俺んことを呼ぶってこ  
たあ

「もしや、用務んおつちゃんの知り合いツスか？」

今ん所、俺ん事をそう呼ぶんは『コツチ』じゃおつちゃんだけだ  
しな？

「そうよ、ウチの旅館の補修とかを頼んでるもの、そ・れ・で！マ  
サ坊が来たらコキ使ってやれですって、頼むわよ？」

ふうくん、縁は異なるもつて言うが、全くその通りだねえ……

よし！一応確認！一応な！

「マジで？」

「ええマジよ？ほらほら、やることは沢山あるわよ？あつ、ちゃんとお給料は払いますからね？」

マジらしい……

「まっいいか？おっちゃんにや世話なってっし？よしや！サクッと仕事、終わらせて遊ぶぜい！」

「そっそ！若いんだからその意気よ？というわけでコノ子借りますねエ、みなさんはゆっくりくつろいでいって下さいねエ？」

とんちんかかんで、旅館に来て何故か臨時用務員的な仕事をする  
ことになりもつたのでした。

つと

「じゃ諸君！なんか仕事すつことになったからまた後でなあ〜ヤミは……今回は遊びなさい、美柑ヤミンこと、よろ〜」

とみんなにアイサツして仕事に向かいました。

・  
・

唯視点

「まさか臨海学校に来てまで働くなんてね？」

今日からお世話になる旅館の女将さんの後をついていくマサ君の背中を見ながらポツリと呟く、ララさんの方を見ると

「むう・・・折角、マサと一杯遊べると思ったのに・・・」

とララさんが頬を膨らませている、そんなララさんをヤミさんが

「プリンセス、マサナリのことですからどうぞせ直ぐに仕事は終わらせてしまってください。気を落とさないで下さい。」

元気づける言葉を言う、そういえばヤミさんも用務の仕事の手伝いをしてるのよね？

「ねえヤミさん、マサさんってお仕事、早いのか？」

「かなり優秀みたいですね、一日掛かる仕事を一〜二時間で熟すと用務の方も言っていましたし、私から見ても非常に効率がいいです、マサナリ自身も半日あれば一軒家を建築できると言っていました」

美柑さんの質問にヤミさんはそう答える

どうやら優秀みたいね？けど半日で一軒家って・・・

「非常識だけど・・・マサ君が絡むと何故か可能な気がするわ」

「マサ君だもんね。」

「マサだしな。」

ホント、不思議な人よね？非常識なことでも彼が絡むと納得してしまうというかなんていうか。

少し前の私だったら頭から全否定してたわよね？

「はいはい！ガクラン君は頑張って仕事をしてるみたいだけど、みんなは各自の部屋に行って荷物を置いてきなさい、部屋に着いたら班長の人は点呼をとって私の所に報告に来るように」

つといけない！御門先生の言うように部屋にいかなきや。

「それじゃ行きましょう。」

私と同じ部屋になる人に声をかけて今日泊まる部屋へと向かうことに、ちなみにララさん、春菜さん、諸岡さん、沢田さんが同じ部屋だ。

「……はい……」

返事はいいんだけど、ララさんと諸岡さんには注意をしとかないといけないわよね？

「あの……御門先生、私達は何処の部屋に行けば？」

私がそう考えながら部屋に向かおうとしたら美柑さんがヤミさん

を連れて御門先生にそう尋ねてる、すると御門先生は少しだけ考え  
て私達の方を見ると

「うん、ガ克蘭君と同じ部屋でもいいんだけど流石にねえ、古  
手川さん、そちらの部屋に入れてくれないかしら？」

やっぱり・・・まあ知らない中じゃないしいいかしら？

「私は構いませんけど？みんなは？」

一応、部屋の人達にも確認。

「もちろん！」

「うん、大丈夫だよ」

「えーと、ヤミヤミと結城の妹でしょ？全然いいよ、人数多い方が  
楽しいし」

「そうそう」

みんなも、大丈夫みたいね？

「それじゃあ、ヤミさん美柑さん、部屋に行きましょう」

「はい、ありがとうございます。」

「ヨロシクお願いします。」

と予定より二人増えたけど部屋へと向かうことにした。

そして男子の部屋との境目くらいで

「古手川、美柑のこと頼むな」

と結城君に言われ

「ええ、わかったわ、結城君は、マサ君のことお願いね」

頷きつつも、そう返すと結城君は渋顔で

「スマン、無理かも・・・マサ、朝からかなりはしゃいでたから・・・」

ですって・・・ハア~~~~今回の臨海学校無事ですむかしらね？

「女将さ〜ん！次は？」

「そうねエ、屋根の補修お願いしていいかしら？」

「あいよ〜」

『ヒュバ！』

チラつと外を見てみたら沢山の工具を持ちながら屋根へと跳び上がるマサ君の姿。

「頑張ってるみたいねエ」

「みたいだな」

「ハア~~~~」

ハッキリ言って無理そうだと思った、でもホントの事を言つと、  
少しだけ楽しくなりそうって思ってるのよね？

あっ少しだけよ!!!

・  
・  
・

里沙視点

フフフ・・・来た！とうとう私にスポットライトが当たる日が来た！

予想外？予想外でしょ！私も予想外だったけど。

「里沙何やってるの？」

「未央、アナタにも何れ分かるわ！」

そのうち、未央にもスポットが当たる日が来るはずよ、うんうん。

「それじゃ点呼を取るわね？」

おっと、浸ってたら古手川さんが点呼を取り出したわね？

「ララさん」

「はいはい」

「春菜さん」

「はい」

「諸岡さん」

~~~~~

「ねえ古手川さん、私のことは里沙でいいから？私も古手川さんのこと唯にゃんって呼んでいい？」

前から、ちよっとだけ気になってたんだよね？唯にゃん（仮）って違うクラスだった時に聞いてた話しより、全然親しみやすいし？

まっマサマサの影響だけどね？

「ちよっと唯にゃんって！諸岡さ」

「里沙でいいよ、唯にゃん」

こつこつ時は強引に！これぞマサマサ流。

「ハア~~~~わかったわよ、コレからは里沙さんって呼ばせてもらうから」

フッフ・・・流石はマサマサ流！効果は抜群ね？

「あつ！私も未央でいいよ、唯にゃん」

「沢田さんまで！...」



おっ？未央もノツてきたね？

「ああわかったわ・・・未央さんね・・・ハア・・・絶対、このクラス、マサ君の影響受けてるわよ・・・」

うん、それは否定しない！でも

「一番影響受けてるのって唯にゃんだと思うけどね？」

「ウツ・・・そっそんなことは・・・ないと言い切れないわね」

でしょ？それと

「春菜もだけどね？」

「わっ私？そう言えばそうかも？」

自覚はあつたんだ？ん？結城の妹も、うんうん、って頷いてるね？

「美柑ちゃんでもいいかな？あつ私の事は里沙でいいからね？頷いてるけど美柑ちゃんもなの？」

「えっはい、そうですね？私も結構影響受けてるかも？前の私はなんていうか冷静っていうか冷めてるって感じだったんですけど、今は・・・楽しいものは楽しい！みたいな感じに・・・アハハ、ヤミさんもだよな？」

およ？ヤミヤミもなんだ？

「私がですか？」

「うん、最初に会った時より表情が柔らかくなったかなあって？」

「そうですね？」

「うん、私は今のヤミさんも好きだよ？」

「・・・そうですね？」

おっ？ヤミヤミ、照れてる？可愛い〜

『ギョッ！』

「むっ？何故、抱き着くんですか？」

「だって可愛いんだもん！」

もうメチャメチャ可愛いよ。

「マサナリみたいなことを・・・」

えっ？

「マサマサも抱き着いたりするの？」

「いえ、マサナリの場合は頭を撫でたがります。」

あっ、そういえば

「マサマサって可愛い！って言って、よくララちいも撫でてるよね」  
「？」

「うん！マサに撫でてもらうとすっごく嬉しくなるよ？」

おお！ララちい、すっごい笑顔！

「うんうん、マサさん結構、頭を撫でたがるよね？」

美柑ちゃんも、撫でてもらったことあるんだ、むむ・・・

「アハハゝ実は私も・・・」

「私も・・・あるわね・・・」

なにイイイ！春菜に唯にゃんまで！！ってことはこの部屋で少数派は

「私と未央だけ？」

チラツと未央に視線を向ける

『スッ』

逸らされた！！えっ嘘？まさか

「未央もあるの？」

「えっと前にバイトに行った時にバイト先に行く前に偶然会って、エライなあゝってアハハゝ結構、嬉しかったかも？」

むむう・・・なんてこと、私だけ仲間外れ？ガツカリだ・・・

「里沙さん、マサさんなら頼んだら撫でてくれますよ？肩を落とさないで」

美柑ちゃん、優しいね・・・それにしてもマサマサって・・・

「実はプレイボーイ？」

「プレイボーイって何？」

あつららちい、留学生だったっけ？うーん

「女つたらし？」

「アハハ・・・多分マサ君にはそういうつもりはないと思うけどな？」

ってことは天然？マサマサ・・・恐ろしい子！

「里沙、何か顔が劇画タッチになってるよ？」

ならざる得なかったのよ。

「マサ君にプレイボーイとか女つたらしとかハレンチなイメージは合わないわね・・・っていけない！えとヤミさんに美柑さん」

「はい」

「よし！点呼終わりね、それじゃ、御門先生に報告してくるわ」

唯にゃんはそう言い残して部屋から出ていった。

まあ確かに

「マサマサのイメージには合わないかな？ やっぱし変人とか、おもしろ人間とかの方がシックリくるわね」

これに関してはみんなの意見は一致したね。

・  
・  
・  
・

マサ視点

「それじゃあコレで最後ね、温泉の掃除お願いね？」

はい、なんやかんやでサクサクと仕事を片付けて最後ん仕事を承りまする。

「ういっす！ピッカピカにしてやんぜい！」

気合い十分さ、温泉は好きなのだ！だからこそ手は抜かん！

まあ仕事に手は抜かねえけどな。

「ホント頼もしいわね？ 文さんもイイ子を紹介してくれたわア、ねえ卒業したらココを継がない？」

なんかスカウトされた、あっちなみに文さんってなあ、用務んお

「っちゃんのことな？」

「ふうむ・・・あんまし先んこたあ考てねえッスからねえ、強いて言えば、なんでも屋とかにでもなるうとか思つとるんですが？」

「後はトレジャーハンターとか、探偵とか？なんか面白そうだろ？」

「普段は旅館の主人は仮の姿ね！ロマンだわア」

「おお！それも捨て難い。」

「まあ先んことはわからんですわい、今を楽しむ全力で！がモットーですから」

「フフ、そうねエ今しかない時を楽しむのが青春よねエ、少し羨ましいわ」

「むむ？青春とな？」

「楽しいことには青春なんて言葉は邪魔ですよい、女将さんだって全力で楽しむこたあできるでござる」

「フフ・・・そうかしら？つといけない、それじゃあ温泉の掃除任せたわよオ、あつまサ坊君は特別に一番風呂に入っていいわよ？」

「おっしゃー！一番風呂ゲットオオ」

「フフフ・・・ゆっくり楽しんでね？」

『キラーン！...』

ン？なんか女将さんの目が怪しく光った気がしたが、はて？

まっいいさね？じゃ早速、掃除始めますかねえ

と掃除道具と海パンを持って、温泉へ、ちなみに荷物は既に部屋に置いてあります。

内？何故に海パンとな？知らん、なんか持つてけと指示が出た能内で！

とコチャコチャ考えながらも海パンを着用して温泉へ

『ガラッ！』

「おお！リツパな温泉でござるな！」

入るんが実に楽しみでだ、よしサクッと終わらせんべか？

「オラオラオラ！」

『ゴシゴシゴシ！』

デッキブラシで擦りまくる！

「そろそろそろアアア！」

『ゴシゴシゴシ！』

隅々まで綺麗に！

「よしや終わりイイイ！次は男風呂だな？」

と反対側の男風呂へ、ちなみに入り口は別だけど中は繋がってますねん、あつ混浴じゃねえよ？

岩ん仕切が着いてんし？

と軽く説明しつつも男風呂に渡り掃除を開始！

「シヤラララッ！！」

『ゴシゴシゴシ！』

はい終了！で道具をかたして、体を洗って。

「一番風呂いただきます！」

『ザブン』

「ふい〜〜〜〜最高ですか？最高でえ〜す」

いやぁ実によい湯加減、マジに最高だぜい。

素晴らしきかな日本の温泉、と温泉を楽しんでると

『ガラッ』

ン？誰か入ってきたのう？そっいやボチボチ、リト達も入る時間だしな？



「ええ〜ララちい肝試し知らないの？」

と聞いたことんある女の子の声・・・ふむ・・・里沙か？

ふむ・・・は？アレ？えっ？ココ男湯？アレ？

「アレ？もう誰か入ってるよ？」

はい、その誰かことマサさんですよ美柑君。

よし、ここは冷静に冷静に・・・

「キヤアアア！覗きイイイ！」

悲鳴を上げてみた。

「「「「「なんでマサ（君）マサ（）さんが！」「」「」「」

いや、寧ろ

「オマエらがいる方がおかしいわ！ココは男湯じゃろがい！！」

まったく訴えんぞコラ！

「マサ〜ここ、女湯だよ〜？」

はっ？そんな馬鹿な・・・んなはずは・・・

『キラン』

ああ〜女将さんのアノ目の光りはそういうことね？なるほど、なるほど……

「女将に嵌められた！やられた……アノ目はアレだろ、俺を嵌める前のジジイの目とソツクリだったじゃん！なんで気付かないの！バカなの？俺！！チクシヨオオオ！女将イイイ！後でゲンコしてやる！！！」

許すまじ、女将！つとイカンイカン

「じゃ俺、男湯に戻るから、キミらはユツクリ暖まりなさい」

そう言い残して男湯に

「ええマサ〜折角だから一緒に入る！いいでしょ〜」

行こうとしたらララに止められた、ちなみにララさん始めみんなスツパにです、俺は海パン着用してっけど。

「残念ながら混浴じゃありませんので、却下な？」

全く！ララ君、女の子でしょ！ちったあ恥じらいとかをだなあ

「ねえマサマサ、リアクション薄すぎない？」

「う〜〜〜やっぱり薄いよ……」

「おっ女の子としてのプライドが……」

何故か肩を落としてる春菜と里沙、未央、寧ろ悲鳴上げたの俺だしね！！まあネタだけだ。

「まっマサ君！ハレンチよ！早く出ていきなさい！」

おっ！ようやくまともな反応！流石は唯だ。

「出て行くっつうに！」

で再度出て行くこととする、でもその前に、近くにあった桶を拾って

「オラアアア！」

『ヒュン！』

投擲！

『ゴスン』

「アウチッ！」

いつの間にやら復活した変態（校長）の処分、うむうむ、ナイス  
コントロール！で更にそっから

「ポイっと！」

外にほうり出しました。コレでよし！

「じゃ改めて、また後でなく、あつ美柑、そっちん脱衣所に俺ん服があっから後で持って来てくんね？」

「えっ・・・うっうん・・・わかった・・・ぐすん」

素直に頷いてはくれたが何故に泣く？

「美柑気持ちはわかります、余りにも反応が薄すぎます・・・」  
『ジ  
ワッ』

何故かヤミも涙目でした、しかしおかしいえっちいのは嫌いとか  
言っつて斬りかかってくるとか思ったんだが？でもまあスゲエ可愛い  
ツス。

撫でたくなつたが流石にガマンした。エライぞマサ！

とか能内コチャコチャしながらも男湯へとスツタラスツタラ移動・

「っつてコラ！ララ！ついてくんな！」

「ええ〜」

文句を言っつなっつうの！ええい！

「唯、ララ取っ捕まえといてな？」

唯にララを取り押さえといてもらいました

「わかったから早く出ていきなさい！ララさんもコッチー！」

『ガシツズルズル・・・』

「ううゝ折角一緒に入れると思ったのに」

「ガマンなさい！というかハレンチよ！！」

はいララさんハレンチいただきましたぁ・・・

で男湯に戻る途中の岩陰で

「何してんだ、リトにエテ山？もしか覗きか？ゲンコ喰らうか？」

とリトとエテ山を発見。

「うっ・・・さっ猿山に無理矢理・・・」

まあだろっな？リトは自ら覗きとかするタイプじゃねえし？

「うっ羨ましすぎるぞ！オマエ！マサがいいんだったら俺だって！！」

バカが女湯に特攻を仕掛けた・・・

「マサ・・・止めなくてよかったのか？」

「あっ・・・イカン・・・あんましバカだったんでスルーしてました」

また女湯に逆戻りかよ・・・

「キヤアアア！覗きイイイ」

「ハレンチよオオ！」

「イヤアアア！」

「えっちいのは嫌いですッ！！」

『ズド！バギ！ドガッ！グシヤッ！』

「ギヤアアアア！」

必要なかった・・・うむ

「まあ自業自得だな？」

「ハハハ・・・猿山生きてるかな？」

生きてんじゃね？多分？

「なっなんで俺だけエエエ」

旅館中にエテ山の断末魔の悲鳴が響き渡った。

アバヨ・・・クリ・・・ゲフンゲフン、エテ山。

「じゃ温泉に入りなおすべ？温泉！温泉」

「切り替えはヤッ！」

それが自慢だからね！それに、温泉とエテ山だったら温泉ん方が遥かに価値があるしな。

と再び俺は温泉を楽しむことにしました。温泉最高！

・  
・  
・  
・

春菜視点

少しドタバダがあったけどようやく温泉に浸かることができた。

それにしても

「ハア〜」

自然とため息が出てしまう

「春菜どうしたの？マサマサのリアクションが薄すぎた？」

里沙がそう話しかけてきた、確かにそれも少しはあるんだけど、今日の夜からする肝試しが・・・うう〜私オバケとか苦手なのに〜

「ねえねえキモダメシって何？」

そう言えばララさん、宇宙人だったっけ？身近にもっと変な人がいるから忘れてたな。

「ララちい海外生まれだもんね？えっと肝試しって言うのは、わか

りやく説明すると男女ペアで暗い夜道を歩いて目的地を目指すゲ  
ムみたいなもんだよ?」

ララさんの質問に未央が答えるとヤミさんが

「夜道を歩くだけですか?カントンすぎます」

うう〜ヤミさんわかってないよ・・・

「ヤミさん、えつとね肝試はただ夜道を歩くだけじゃなくて、幽  
霊が脅かしてきたりするからカントンにはいかないようになっ  
てるんだよ」

美柑ちゃんの言う通りだよ。

「そっそっ!こっちやって、うらめしや〜ってね!」

『ビクッ!』

うう〜里沙、脅かさないでよ・・・

「下らないわね?どうせオバケ役の人が脅かしてるだけよ?オバケ  
とか幽霊とか非常識なこと有り得ないわ」

唯さん・・・心強いよ!

「非常識の塊のマサマサがいるのに?」

「うっ・・・そっそっ言われると・・・」



流石の唯さんでも、マサ君の名前が出てきたら否定出来ないみたい。

「あっそうそう！知ってる？ここの肝試しのジnkクス？この臨海学校の肝試しで最後まで行った勇氣あるペアはその後にカップルになっちゃうんだって」

未央が肝試しのジnkクスを話してるけど・・・それよりも肝試しが心配で頭に入ってこない・・・

「別にカップルとかは興味ないわね？」

「え？唯にゃん、マサマサと仲いいじゃん？」

「ツツツ！！そんなことないわよ！ただの友達よ！！」

あっ唯さん真っ赤になってる

「まさか・・・唯さん・・・ララさんライバル出現？」

「えっ？そうなの？ううん！負けないよ！」

「だから違っわよ！それを言い出したら美柑さんにヤミさんだって仲がいいじゃない！春菜さんもだけど」

唯さんが反撃してる、マサ君かあ友達としては仲がいいとは思っ  
けど。

「ツツ！えっと私は・・・うう・・・マサさんといると確かに楽し  
いし・・・うう」

「マサナリは私のターゲットですが・・・しかし・・・嫌いでは・・・」

二人とも赤くなってる・・・

「わあ！お！マサマサ、モテモテだね？確かにマサマサ、いい男だしね？攻略難易度はすっごく高そうだけど」

「確かに、マサマサ、鈍いつていうかアレはもう病気のレベルだね？」

うん、それには同意するかも。

「むむう・・・頑張るもん！」

ララさん、真っ直ぐだな？

「肝試し、ペアはどうなるかなア？新たな楽しみが増えたかも？」

里沙、スツカリ楽しんでるな・・・ハア・・・

「そうだね！キモダメシ楽しみだねえ」

ララさん気楽でいいな・・・私は楽しみじゃないよ

「ハア~~~~」

少し長めのため息が漏れた。

• • • •

そして

「アン？俺あ裏方だぞ？」

「「「「ええ〜〜〜」」」」

マサ君、意評を尻きすぎぎ！

第二十五話っぽい感じ！（後書き）

後書き

マサはいつたい何処までいくんでしょうか？  
書いてる人も謎だらけです。

ええ次回は肝試しとなりそうです、頑張りますのでまた見てやって下さい。

最後に気付いたらリトが空気に・・・スマン、リト！嫌いじゃないんだよ？ホントだよ？

## 第二十六話っぽい感じ！（前書き）

前書き

人数が増えたらキャラの書き分けが非常に難しいです・・・

あっやはり薬的な物を持ってどうぞ

## 第二十六話っぽい感じ！

温泉から上がって、浴衣・・・ではなく敢えて、ジンベエに着替えました！

コッチの方が動き易いでござるからな。ちなみにいつ持ってきたかつとNINJAでサクッと部屋に取りにいったんですな？

つと女将発見！

「せいッ！」

『ゴッソ！』

うむを言わずゲンコした。

「イタッ！ちよつとマサ坊君、何をオ？」

「嵌られた仕返しッス！」

誰であるうがゲンコはします、それが俺！

「もゝそんなこと言ってエ、目の保養になつたでしょお？私からの優しさよオ？」

「そんな悪意タップリの優しさはドブにでん捨てれ、つか俺あエロティカル方面の感情薄いから全くもって意味ねえですよ？」

「・・・おかしいわね？若いのに枯れてるウ？」

さあ？いや俺自身もちつたあおかしいような気もすっけど、平気で、んな事しかかす女将も十分おかしいと思うぞ？

「まあそんなたあ置いといて俺あ何処に集まりやいいんスか？」

「うーん、もう少ししたら打ち合わせだからそれまで部屋で寛いでいいわよ？」

「ラジャー」

と予定を聞いて部屋へと戻ります、ちなみに肝試しんこたあ女将から直できいて、裏方に回れと言われますた。

どうやら迷子とか危険な目にあつた人達を助け出す役目らしい。

ある意味、警備みたいなもんですな？あつ保健さんも救護班として裏方だぞ？

「マサ？何してんだ？」

おつとリトが追い付いてきた

「ゲンコー！」

「女将さん相手にかよッ！！」

「されちゃった！」

ツッコミ、リトとおちゃめな女将でした。  
でその後、部屋に戻ってダラダラしてたら  
『コンコン』

とノックの音、打ち合わせん呼びに来たんかと思いつつ

『スッ』

襖を開けたら

「マサ〜遊びに来たよ〜」

「マサさん、コレ、脱衣所にあつた荷物」

「マサナリオ茶を入れて下さい。」

ララ、美柑、ヤミが遊びに来たらしい、つうかヤミっ子よ・・・

「尋ねてきてそうそうお茶を入れるとかアレだな、オイ！それとサ  
ンキュー美柑！」

『トポトポトポ』

「文句言いながらも入れるんだな？」

うん、まあ別に構わんちゃ構わんしな。

「ンッン・・・ふう〜お茶はマサナリに限りますね美柑のも捨て難  
いですが」



そいつぁどうも、なんか言い方が俺自身がお茶みてえでアレだけんど。

「ホレ、ララに美柑も座って煎餅食べな？」

「うんー！」

「ありがとうマサさん」

うむうむ、和むねえ・・・

『コンコン・・・スツ！』

またも来客？

「マサマサ、遊びに来たよ、アレ？ララちい達も来てたんだ？」

「アハハ、さっきぶりマサ君、リト君も」

「マサ君、さっきのアレは忘れなさい、いいわねー！」

「やっ！マサマサー！」

里沙、春菜、唯、未央も襲撃してきた、つか多いなオイ！

俺とリト入れて9人だぞ？大丈夫か？色々とー！！

「さっ流石にコレだけいると狭いかも？」

うむ、美柑の言う通りだな、仕方あるめい

「隣ん部屋ぶち抜いて繋げつか？」

「やめなさい！！！」

ちい残念！

「あっじゃあ私の発明、モゴモゴッ」

「わーわー！ララダメだつて！シーシー！」

危うくララがネタバレ発言するところだった、ナイス、リト！ファインセーブ！

「ねえマサマサ、さっきララちいなんて言おうとしたの？」

「さあ？アレじゃね？ヤミの本名が実はイ〇だと」

「違います！別キャラです！」

うむ、ナイスツツコミ！俺も言ってるマズイかと冷や冷やしたぜい。

「んんん怪しいなあ・・・唯にゃん知ってる？」

唯にゃんとな？唯にゃん？えっ？

「唯にゃん？」

唯を指差しながら聞いてみた。

「ツツツ!! 変だったら笑いなさいよ!」

おう? 真っ赤になって怒りだした! まあ別に

「変じゃねえよ? 里沙とも仲良くなったんだなあと思ったただけでござる、いやはや、よきかなよきかな」

うむうむ、っとそういや

「未央はどうなん?」

未央にも話しを振ってみた、したら未央も  
「私も唯にゃんって呼ばしてもらってるよ?」

とのことらしい、うむうむ

「いやあ唯はシャイなツンデレっ子ですがコレからも仲良くしてやって下さいな」

「誰がツンデレよ!!」

「」「」「唯!(にゃん)さん」「」「」

「なっ! 美柑さんまでツ!!」

うむ、それに関しては俺も予想外でえす。成長したな美柑!

「アハハ・・・唯さん大変そう・・・」

「古手川・・・頑張れ!!」

そんな唯に同情する春菜と応援するリトでした。

「とそついや今更だけんど」

「浴衣似合つとるよ?」

「ホント?わあ〜い!」

「うむ、ララ!ナイススマイル、可愛いです、な〜でなでした!

そしたら美柑も物欲しげな顔したんで美柑も撫でました

流れで

「私もですか?」

「うむ!ついつい!」

「ヤミっ子も、そして」

「なんで俺?」

「変化球だ!」

「あえてリトにいつてみた。」

「マサマサ、私だけ撫でてもらったことないんだけど?」

「おう?里沙?ふうむ、そついやあ未央はあつたけんど里沙はねえな?」

「ほい！」

「おっお〜！コレは・・・イイかも？」

フツ・・・日々腕を磨き続けているからな、目指せ撫で王！

「唯、未央、春菜もいつとく？」

「ツツ！！もう手が乗ってるじゃない！はっハレンチだわ！」

いやいやどの辺がさ？ただ頭撫でてんだけじゃんか？とか思いながらも、未央、春菜と、続けてな〜でなでしました。

スゲエ癒されたぜ！

まあやっぱし春菜を撫でた時にリトにもものっそい目つで睨まれたがな！

スマン、リト！撫で王は、な〜でなでの欲求には逆らえんのだ！

でその後に

「マサ！あのねこの後にキモダメシがあるんだって！ペア組みたいね！」

とララが言ってきたが

「アン？俺あ裏方だぞ？」

ついたら

「『『『ええ』』』」

と不満の声が漏れました、特にララが凄かった、がしかし

「変態（校長）とかが出た時に即効で沈めにやイカンのだ！更にケガ人とか迷子とかの救助もせなイカンしな？」

ついたら渋々ながらも納得してくれました。

で、その事を話してたら丁度、部屋にあった備え付けん電話が鳴り

「あいよ！こちらマサナリ！」

と電話に出たら

「ガクラン君？そろそろ打ち合わせだから集まってほしいんだけど？」

保健さんからの召集命令でした。

「あいあい！じゃ今から行きますわい」

『ガチャ』

と電話をきって。

「召集が掛かりもうした！つうわけで俺あ行くぞ？キミら集合までん間はリトでも弄っといてくれや」

とお集まりん皆さんに声をかける

「うう〜ん、マサとペア組めないのは残念だけどわかったよ！」

「うん、わかった、リト』で『遊んどくね？マサさん準備頑張ってる？」

「わかりました、私も結城 リト』で『遊んでおきます」

「フフ〜ン！結城、からかったら面白いリアクションするしね？」

「確かにねえ、結城で暇つぶしとこっか？」

リト』で『遊ぶ組の、ララ、美柑、ヤミ、里沙、未央と

「アナタ達ねえ〜ハア〜、マサ君、準備頑張りなさいよ？」

「アハハ・・・そんなことしないよ」

ストップパールの唯、春菜でした！まあ春菜は微妙に目が泳いでた気がせんこともなかったが、犬かきくらいに。

やはり

「ちょ！なんでだアアア！」

リトの絶叫が響き渡りました・・・うむうむ

「リト！すっごくイイ感じ！じゃ後でな〜」

『スッ』

最後にリトに一声かけて集合場所に向かいました。

・  
・  
・

まだまだ俺のターン！

つつわけで、打ち合わせ場所に到着！

「ガクラン君！コーヒーお願いね？」

「あいよ〜！」

で何故か保健さんにコーヒーを出しとります、つつかわざわざ持ってきてたんだなコーヒーメーカー？

「あつ私には緑茶を！」

「あいよ〜！」

ええい！女将もかい、まあ出すけどね！

「で打ち合わせせんでいいんスカい？」

流石のマサさんも、そろそろツッコみますよ？ええ！そりゃあツッコみますすとも。

「打ち合わせって言うても、もうあらかた準備は済んでるのよね？」



私とガクラン君は始まるまで特にすることないし?」

まあ確かに、すでに脅かし役人達あスタンバってるしな? つうこたあ何かい?

「コーヒーとかお茶を入れさせつために俺を呼んだとか?」

「まさか~~~~」

『『スツ』』

二人揃って目を逸らしよつた、凶星かい! ったく

「そんならそうと言やいいのに、別に断りやせんですよ」

そんくれえなら手間でもねえしな?

「御門先生? 彼、うちの旅館に出来ないかしらア?」

「ダメですよ? ガクラン君は私の専属シェフですから」

いやいやお二人さん何を言い出してんの? つうか

「保健さんの専属シェフになった覚えはねえんですが?」

「私がオーナーの喫茶店の店長なんだから似たようなものじゃない?」

むっ? そう言われりゃあそうなんだが

「微妙にニュアンスが違いッス！」

「固いわねえ、私の専属になったら、い・い・こ・と！してあげるわよ？」

ええいボタンを外しだすなっつもの！

「教育的指導！」

『ゴチン！』

「ツツツ先生に対してゲンコツって遠慮がないわねガ克蘭君は？」

当然です！つうか

「先生なら・・・つうか先生じゃなくても、みだりに服を脱いじやダメでしょ！俺だからよかったものの、女の子なら慎みを持ちなさい！」

もうコレ言うの何回目だ？まあ保健さんに言うんは初めてだけんど。

「残念ですねエ御門先生じゃ私が」

『グッ』

「脱ぐな女将！喰らいてえなら別だけど！」

グッとゲンコをチラつかせたら流石に大人しくなりました、って

「おや？保健さん？」

「ツツツ！！おっ女の『子』扱いされたの久々ね・・・」

「なんか赤くなつとる？俺、勝利？わからんが、ただ凄く可愛かったッス。」

「むろん撫でといた。」

「つとそだ、やるこたあねえつつてたッスけど道とか覚えんくていいんすか？」

「少しコチャコチャあつたが、この事を聞いとかんと流石にマズイと気付いたので聞いてみたら」

「はい地図！基本は一本道みたいだから大丈夫だと思っわよ？」

「保健さんに地図を渡された、確かに一本道ですな？しっかしなあ」

「横道とかに入った奴らがいたらどうすんですのん？」

「それはガ克蘭君の腕の見せ所ね？期待してるわよ？」

「丸投げかい！まっ期待されてるつつうなら。」

「漢、マサナリ！期待にんえてみせるぜい！」

「グツとサムズでナイススマイル！」

「ホント、面白い子ですねエ、御門先生が羨ましいわア」

「ええ、彼といるとホントに楽しいですよ？」

アナタに楽しい生活を、鬼島 政成！鬼島 政成をヨロシクお願いします。

とんやかんやありつつも

「さて！では今から肝試しを初めまゝす！」

肝試しが始まる時間になりました。

「変態（校長）もう復活しやがったか？中々しぶてえな？」

開会宣言しとる変態（校長）を見ながらひとりごち、クラスメイ  
ツン方も見てみたらエテ山も復活しておった、やはりアノ手の類は  
しつこいな？

「それでは今から肝試しのペアを決めるクジ引きを初めまゝす！各  
クラス男女それぞれクジ引きして同じ番号同士がペアでゝす」

能内コチャコチャしてたら、いつの間にやらクジ引きスタートし  
とります。

で皆さんドンドン、クジを引いていきまする、おっリトの番か？

「よっ！リト？頑張りたまえ、上手く春菜と組みりゃあいいな？」

「あっああ・・・組めたらな？」

チクツとリトに声をかけます、番号は・・・

13番、うむ・・・

「不吉極まりねえな？」

「ほっとけてー！」

まっ何かあっても俺が救助に向かいますよい？つと、次はララか？

「むう〜マサと一緒にキモダメシしたかったよ〜」

「悪いな？まっ俺も裏方で参加してるつちゃしてっしょ？なんかあったら呼びなさいな？パパツと言ってサクツと解決してやんよ？」

「うん・・・わかった、でも明日は絶対一緒に遊ぼうね？」

ふうむ？明日は・・・チラツと女将を見るパチリとウィンクされた、どうやら明日は仕事なしみたいね？おっしゃ！

「おうよ！ぶっ倒れんまで遊び倒すぜい！覚悟してるい！」

ナイススマイルでサムズった！

「うん！！エへへ」

うむうむ、ララ君、ナイススマイル、つと

「ほれほれクジクジ！」

「あつうん、えつと~~~~えい!!」

番号は~~~~

「13ですな・・・リトか？」

リト残念!まっ知らないやつと組むよか全然気は楽じゃろ?

「リトとかくじゃあねマサ!リトくペアになったよ」

でララはピコピコ手を振りながらリトの所に走ってきました。

おっ次は春菜か?ン?何アノ生きる屍な空気?もうヤバイくれえに、どんよりしとるよ?顔も真っ青だし?

「アハハ・・・マサ君、次は私だよね・・・『ゴソゴソ』5番か」

『スツタラスツタラ』

うむ・・・

「春菜ちよい待て!体調悪いんか?ヤバイぞ色々!負のオーラ出まくつとる!」

「アハハく体調はね大丈夫だよ・・・うん大丈夫・・・」

ううむ・・・体調『は』つうこたあ・・・ふむ・・・

「もしや・・・幽霊とか怪談とかオバケ系統が苦手とか?」

「ギクリ・・・わかつちやった？」

いや分かるだろ？つうか他んやつらは気付いとらんのかい？まあ今までは頑張ってポーカーフェイスってたんだろっねえ？

ふむん・・・よし

「春菜よ？安心したまえ、俺一回死んでんだぞ？でも普通に夕チになつてくれたじゃん？大丈夫大丈夫！」

勇気つけてみた、俺なりに！

「そうだったね・・・ということは幽霊も存在するんだよね・・・イヤだイヤだよ〜」

逆効果でした・・・

「まあなんかあつたらすぐに来つからな、うん頑張れ無理すんなよ？」

「うん・・・ありがとう・・・うう〜イヤだな〜」

『スツタラスツタラ』

そう言つて去つて行く春菜が寧ろ幽霊っぽかったッス。  
気を取り直して続いては〜

「5番ね！ホラ消えろ」

「俺の扱い酷くねえか！！」

エテ山5番でした、ン5番？5番って・・・春菜？ふむ・・・

「春菜に手えだしてみるや？えれえ目に逢わせてやんぞ？」

「ビクッ！！ハイ！わかりました！」

うむ、キツチリと釘は挿しといたぜい、一瞬、クジを奪ってリトと交換させようかと思ったが流石に自重。

「おっ？唯か？唯は・・・まっ大丈夫そうね？」

「はっ？何がよ？」

肝試しがですよい

「唯？もしペアんやつがハレンチ的なことを仕出かしてきたら・・・  
って俺らんクラスはエテ山以外は大丈夫か？」

「それでもないわ・・・ほら・・・」

ン？俺らクラスを見てみた

「「「ほへへへへ」」」

うむ・・・クラスメイツ男子スツカリ向こう側？まっ多少はしゃあねえっちゃしゃあねえんだが・・・

「はいコレ！保健さん特製、くしゃみスプレー！時間は稼げる、後は俺が処理するわ」



「助かるわ・・・やり過ぎはダメよ？マサ君も裏方の方、頑張りなさいよ？」

「サンキュー」

と唯はこんな感じでスプレーを受け取ってクジ引き会場から離れました、ちなみに8番ね？

「マサマサ〜頑張ってる？」

「頑張るんはスタートしてからですわい！ホレ、里沙、引け」

「それもそっか？それっど！」

はい、里沙は12番！

「何かあつたら助けてね〜」

ふむ里沙君や？

「アホ？」

「ちよつとアホっど！」

アホはアホです

「当たり前えのことを言うなっど！裏方じゃなくても助けるわい」

「むむ・・・そっか・・・そっかあ頼りにしてるよマサマサ？」

「おう！」

微妙に赤かったな？んな恥ずかしいこと言ったか？

「マサマサやるねえ？私も助けてくれるかな？」

おっと未央か？

「何がやるかは知らんがむろんだ！ダチがヤベ工目に遭ってたら手を出すなんてなあ、あたりきしやりきのコンコンチキよ！なんつってな？」

俺的にはですけどねえ？

「おっ？江戸っ子？」

「江戸出身じゃねえけどな？ホレ引け」

出身は異世界です！まあ日本は日本だけだね。

「うーんコレ！」

はい6番でしたっつと。

とこんな感じでクジ引きは進んでいき最後の人が引き終わりました。

ってそういや

「美柑にヤミっ子は引いてねえよな？何故に？」

「あつ私達は急遽参加だったから、人数の関係で」

「私と美柑のペアになりました」

ふっん、なるほろね？ふむ

「ヤミっ子、美柑を頼むぞ！！」

「当然です、美柑は・・・ゆ・・・友人ですから」

おっ？おっ？

「マサさんすっごい笑顔だよ？」

「美柑だつてナイススマイルだべさ？」

思わず美柑と顔を合わせて笑いあつてまいります。

ヤミっ子が自ら友人つて言つたん初めてだもんな？

「なんですか？その顔は不快です。」

「ハハハ！むくれるな、むくれるな！」

なぐでなでした。

「美柑は友人ですがマサナリはあくまでターゲットですから、その辺をお忘れなく」

フッ・・・

「でも俺にとっちゃあダチだもんね！な？美柑？」

「そっだね？フッフ」

いやはや何となく嬉しいですな？おっ？ヤミっ子、赤くなってる？

「ッ~~~~美柑行きましょう！」

どっやら照れてらっしやるようで、スタスタとスタート地点に歩  
つていきなすった。

「はいはい、ヤミさん待って！それじゃあね？マサさん！」

そんなヤミっ子を慌てて美柑が追い掛けたのであります。

・  
・  
・  
・

まだまだまだ！俺のターン！

つつわけで肝試しがスタートして最初ん組が出た後は裏方が集ま  
つとるテントにて待機中！ちなみにテントにやあ監視カメラから映  
像が送られてきておるまする。

はてさて、皆さんどんな感じかねえ？

「ギヤアアア！」

「イヤアアア！」

ふむ、脅かし役人、大分張り切ってんな？次々と脱落者が出るぞ？

しかし・・・いつちゃあなんだが・・・

「コレのどの辺に恐怖を感じると？」

落ち武者やらゾンビやらオオカミ男やらジエ○ソンやら・・・

「ひとつちゃ統一されとらんぞ？ツツコミ所満載じゃね？」

「ガクラン君、それを言っちゃダメよ？ホラ、高美さんは楽しんでるみたいだし？」

うん、まあ確かにあえて見ねえようにしてたけど

「うふふ、若い子が驚き悶える姿・・・いいわア~~~~」

と悦に入っとるし？

「変わった趣味をお持ちのようで」

「ガクラン君に変わったって言われるんだから相当よね？まあ少しは高美さんの気持ちはわかるけど・・・」

わかるんだ保健さん？まあ保健さんもオフェンス思考っぽいもん

な？

ちなみに俺もオフエンス思考！けど気持ちはあんましわからんです。

っおろ？アレは・・・

「うわあああああ！！！」

エテ山？ものっそい勢いで逃走しとるぞ・・・って

「あんサル！！春菜、置いてきやがった！！チツ！保健さん救助に行ってくる」

「えっ？別にケガ人とかはいないじゃない？」

いやいやいや！

「オンナノコ、ヤマミチ、ヒトリ、キケン！」

「なんで片言？でもわかったわ行ってらっしゃい、ついでに他の子の様子も見てきてね？」

俺も何故に片言になったかはわからんが

「了解！マサナリ！出る！」

『シュバツ！』

ソレっばい言葉を残してテントを飛び出しました。

そして

『シャバツ！シュバツ！シュバツ！』

木の間をN I N J Aしながら春菜を捜す！裏方テントはゴール地点だから逆走的な感じですよ。

つと発見！！

「ヒック・・・エグツ・・・ヒグツ！！」

うおう！めっさ泣いとる？そんなに苦手だったんかい？

『ヒュツ！スタツ！！』

木から飛び降り春菜の後ろへ

「ひう！！あう・・・えう・・・」

あつヤベ？余計ビビらしたか？よし明るく行くこう逆に！

「要救助者、発見！つてか？春菜、でえじょうぶか？」

ニカツと笑いでその声をかけました、したら春菜

「あう〜グズツ・・・マジヤくん？ごわがつ・・・エグツ！うえ〜ん」

『バツ!』

泣きながら抱き着いてきた、ふむ……

『ヒョイ!』

「へうつつ!」

あえて避けてみた

うむコケそう、流石に支えた。

「うううよげなくでも」

「いやあ悪い悪い、ついクセで!」

なんかしらんが避けてしまうのだよ、うむっと

「ホレ、涙でグシャグシャになつとるよ? タオル使つか?」

「エグツ……ありがとう……」

涙をふかせて一息つかせ更に

「ミ○ミ○飲めや? 落ち着くぜい?」

「うつつん、ありがとう。」

ミ○ミ○を飲ませて心の平穩を保たせます、でなんとか春菜、落ち着きました、流石はミ○ミ○だけ。落



「うむうむ、落ち着いたな？じゃ行くべかか？」

「えう！ヤダ！一人にしないでよ」

アン？何やら春菜、勘違いしとるようだ  
つうかビビリすぎて幼児退行しとるし？

「ああ、春菜、安心しなさいな、春菜も俺と一緒に行くつうな？」

頭をなでなでしつつそう言つと

「うっうん！」

と笑顔で返事、いやマジに幼児化しとるな？可愛いツス。

「あつ俺あ他ん人ん様子も見て来てくれって頼まれてんだが大丈夫か？なんだつたら先に春菜、運ぶか？」

一応確認です、マジにきつそうだったらそうすつけど。

「だつ大丈夫！うん、そこまで迷惑は」

「アホ！ダチなんてなあ迷惑掛けたり掛けられたりしてナンボなんだよ、つうかそんくれえ迷惑じゃねえつの！」

全く春菜さんはこんな時にも遠慮しおってからに。

「アハハ・・・そつか？うん大丈夫だからついていくよ」

そうなんですよ俺的には、まあとにかくついて来ることに決めたみたいね？さて行きますかね？

とスツタラスツタラ歩き出す、したらソッコで

「唯発見！」

「マサ君に春菜さん？」

何故か一人の唯を発見しました、はて？

「なんで一人やねん？相棒は？」

「あんなハレンチなやつは知らないわよ！！」

どうやら相棒がハレンチを仕出かしたらしい

「後でヤキ入れとくわ、エテ山共々」

「お願いするわ」

「お願いね！！」

まかせれ。っと更に向こうに、リト発見！

「オマエも一人かよ？ララはどした？」

「おわっ！おっおどかしなよ！！えとララは・・・逸れた・・・」

「リト君、ビビり過ぎー！」

「どっせよそ見てん間にララが駆け出してっただらろ？」

「うっうん・・・悪い」

「さもありん、つつか」

「別に謝るこっちゃねえよ、じゃララ捜さんとなあ？」

「つつわけてララを捜すことにしました。」

「アレ？春菜ちゃんに古手川？」

「アハハ、リト君も一人になっちゃったんだ？」

「そつえば春菜さん、なんでマサ君といたの？」

「エテ山が逃亡した、で救助に来たナリよ」

と話しながらララを捜す、流石の春菜も人が増えたせいか落ち着  
いとり

「う~~~~~~~~ら~~~~~~~~め~~~~~~~~し~~~~~~~~」

「キッキヤアアア！」

『ガシッ』

「えっちょ春菜ちゃん？」

「イヤアアア！」

『ブンブンブン』

まあすごいハイパワーでリトを振り回してからに、  
春菜どここに  
そんな力が？

『ドガバギズド！』

「「「ギヤアアア！」「」「」

リトに脅かし役の皆さん、ご愁傷様です・・・って

「そろそろ止めないとマズイか？」

「わかってるなら早く止めなさいよ！！」

「ですよ〜？」

「スウ〜〜〜」

思っいきり空気を吸って〜〜

「噎ッッッッ！！」

『ゴゴゴゴゴゴ』

気合いの喝をしました！

「ひう！！」

うむ春菜！活動停止、上手くいきましたな。

「ツ~~~~鼓膜が破れるかと思ったじゃない」

「大丈夫大丈夫、調整したからな？それに春菜もちゃんと止まったからよかる？」

唯に小言を言われたがそう言って納得して貰おうとしたら

「アレは気絶してるのよ！どうするのよ！」

してくれませんでした、うむ確かに春菜さん

『ヒラヒラ』

「.....」

気絶しとります、ちなみにリトも

『ヒラヒラ』

「.....」

電源OFF・・・しゃあないので右手にリト、左手に春菜を装備することにしました。

「じゃ行くべ？」

「ハア~~~~仕方ないわね.....」

そつそ、しゃあないんですよ、ちなみに脅かし役の人達は、意外とタフネスで自力で救護場所まで歩いてきました。

「それにしても春菜さん……一番まともだと思ってたのに」

「事実は小説より奇なりたあよく言ったもんだな、まっ面白えけど」

「アナタねえ、まっ確かに……そうよね？マサ君見ると妙に納得できるわ」

ハッハッハ

「言っておくけど褒めてないわよ？」

「先回りされた！」

やるな唯！

「あつ！マサさん？さっきの大声、やっぱりマサさんだったんだ？」

「そうみたいですわね？」

更に美柑とヤミが増えた！

「もうコレ、半分くれえ肝試しじゃなくね？既に六人もいるぞ？」

「確かにそうね？」

思わずもれた言葉に唯も顔かざるえなかったようです。

その後、ある意味予想通りに

「はい里沙&未央確保！」

置き去り組の二人を確保してララ捜しを続けます。

すっかり大所帯になった我らが一行、ワイワイガヤガヤと進みます。

「ねえマサマサ、春菜と結城どうしたの？」

「『喝』したら電源が落ちた。」

「ふん」

里沙の質問に簡単に説明、なんとか里沙さん納得したようです、まっ暴走んことは春菜の名誉に関わりそうなんで伏せとききました。

「マサ君、意外と気が聞いわね？」

「紳士だからね！！」

唯に褒められたんでそう答えたら胡散臭いやつを見る目で見られた、俺シヨンボリ。

「ねえマサさん、前から」

はて？どうした美柑君？

「ウワアアア！！！」

「でっ出たアアアア！」

『ズダダダダ』

「オバケ役の人達が逃げてきてるわね？」

うんそうだね唯君

「つつか脅かし役が脅かされてどうすんだつつの？全く、やれやれだぜ」

まあ心当たりはありまくるんだけどね！

「あゝマサ！！！」

ホラね！やつぱりね！幽霊メイクのララ登場、しかも・・・

「お連れの方、痩せすぎじゃね？もうガリッガリだぞ？肉を食べなさい肉を」

「いっいつ言ってる場合じゃないマサマサマ！アレ、ほっ本物！」

おや未央さんテンパってる

「ガタガタガタ！いっいやっ・・・」



まあ里沙もですか？

「れっ冷静な、まっマサさんの方がおっおかしいと思うんだけど・・・」

そうかねえ？つうか

「ララ、それ何だ？立体映像かなんかか？」

「わあよくわかったね！そうだよ立体映像でオバケ出したの！えとねリトパパのお家でオバケの本見た事あったから！」

ほうほう、まあ確かにリアリテイがあんな？

うむ・・・

「つうわけでパチもんだから大丈夫ですわい、よかったね」

「アハハ・・・そっか・・・」

「っていうか・・・まずくないかしら？里沙さん未央さんまいるのに？」

うむ・・・チラッ

「立体映像？嘘、こんなにリアルなのに？」

「ほっ本物じゃないんだよね？そうだよね？」

まだ未央がビビり入ってんな？まっ

「本物でも別にいいけどねえ？」

「『『『『よくないよ（わよ）』』』』」

唯、美柑、里沙、未央にそうツツコミをいただきました。

つとそだ

「ララ、リトを置いてっいたらダメじゃろ！！」

『ゴスン』

「アダッ！」

両手が塞がってたんで頭突きしました、加減はした。

「うう〜だって〜脅かすほうが面白そうだったんだもん」

「気持ちはわからんでもねえけどせめて一言リトにオバケしてくる！とかくらいのことは言いなさい！搜しただろが！」

「『ううごめんなさい〜』」

うむ、素直に謝りましたな

「まっ次からは気いつけるように、マサさん心配しただろっ」

「『うっうん！エへへ心配してくれたんだ』」

途端に笑顔になりおっしてからにナイススマイルだから許してやる

わい

「マサ君、そろそろ行かないと・・・今、春菜さんが目を覚ました」  
「ら」

あつ唯！俺も一瞬はその考えは過ぎつたよ？けどあえてスルーしたんだよ？

だって・・・

「うっ・・・うっ・・・ん」

ホラね！

「ララ！あの立体映像しまえ！ハリー！ハリー！」

急ぎララに指示をだす、見られたらまたまた暴れ出しそうなんで。

「えっ？ちよつと待って！えつと・・・」

えい、もたもたするな！

「マサさんなんで焦ってるんだろっ？」

「わかりません、しかし・・・何故でしょう・・・この雰囲気、何かがあるような気がします」

はいヤミさん正解！

『パチッ！』

春菜・・・

「@¥%?#\*||+#&」

再起動！暴走しました、いつの間にやら俺の手から降り立ってるし。

更にリトも装備してるしね？

「総員退避！春菜から離れろ！ララ、コッチこい！早くせえ！」

離れるように指示をだしララを招きよせます

「????」

はてな顔ながらも素直に来てくれましたな、うむうむ、で全員、春菜から一定の距離をとらせた、次の瞬間

「いっ・・・イヤーーーー!!」

『ブンブンブン』

リトを振り回して暴れ出します

『ズドガドバキッ!』

「ギヤアアア!」

あつ逃げ遅れた、脅かし役の人が犠牲になった、スマン！気付かなかったツス！

「うむ、まさに春菜無双！春菜強え〜」

「リト・・・安らかに・・・」

「西連寺 春菜・・・中々の使い手ですね」

二回目だし慣れた俺と、兄に厳しい美柑さん、戦闘力的な目線で見るヤミっ子。

「ハハハ・・・春菜、遅くなっちゃって」

「うん、そうだね」

春菜の成長っぷりに涙する里沙未央コンビ

「マサ君！早く止めて」

ふむ、そうね唯さん、そろそろリトがやばそうだし

じゃまたもや

「スウ〜〜〜」

息を大きく吸い込

「イヤーー」

『ブオン』

あつ春菜がリトを投擲した・・・

『ヒューン』

向かった先は、立体映像のガイコツ君

『スカッ』

まっ立体映像だからそうなるわな・・・

『ガンッ!!!』

ってアレ？

「あ~~~~」『でるでるびじょん君』が!!」

ほう、アノ立体映像はそういう名前だったんだな・・・

『バチバチバチ』

ふむ・・・バチバチ言ってるな

「爆発するかな？」

「するでしょうね？」

ヤミも同じ意見らしいな・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・  
・・・マズイでござる。

俺は無事にすむけど他のメンツは流石にマズイ!

「じゃあねえ！当て身！」

『トスッ！』

「うっ！カクッ・・・」

春菜を気絶させ！リトも回収！

「ララ！おんぶ！美柑、ヤミも掴まれ！唯、里沙、未央もだ！」

「「「「「わかった（りました）（わ）」「」「」「」

うし！

「跳ぶ！」

『ダンッ！』

みんなを抱えて、大ジャンプ！瞬間

『ズドオオン』

下では爆発がおこりました、ギリセーフ！で更にそこから

「このままゴールまで行くぜイイ！イヤッホウウウ！！」

『ダンッ！』

木を足場にしてゴールまでもう一跳び！

「わああい！楽し〜い」

「アハハ・・・高い、でも気持ちいいかも？」

「フツ・・・楽しんでいただけで幸いです。」

「非常識にも程があるわよ・・・」

「それがマサナリです」

唯よ、ヤミの言う通りだぜい！

「マサマサって一体何者？」

「実は宇宙人だったりして？」

残念、未央君、宇宙人はララとヤミっ子の方ですよ！

「後で教えてやんよ？」

里沙、未央にも俺んことを話すことにしました。

ララン発明も見られたしな？

っとゴールが見えてきたな。

「よいしヨオオー!!」

『ズダン!』



着地成功！！

「はい！到着！」

「派手な登場ねガクラン君？とにかく」

「今回の肝試し大会、達成者はキミたちだけだ！」

『パチパチパチ！』

したら、保健さんと変態（校長）それに女将を始め旅館のみなさんが拍手で迎えてくれました。

うむ、意外とまともな出迎えだったから校長（変態）に戻してやるう。

にしても

「俺あ参加者じゃねえんですけどね？」

「細かいことは気にしない、ガクラン君？」

ならそうすつか？

とんやかんやで肝試し大会は終了したのであります。

無事とは言わないけどね！

でその後は

「エ〜テ〜山〜、他数名〜」

「『『『ヒツ！ギヤアアアア！』』』」

とエテ山と唯にハレンチしたやつ、更に里沙未央を置いてった四人にきつちりヤキ入れ。

死んではないから大丈夫だぞ？

更に

「実は俺はカクカクシカジガ」

と里沙未央に暴露った、二人の反応は

「『寧ろ納得！！』」

でした、コレぞ積み重ねってやつだな？ララ、ヤミもそんな時に暴露ってたが

「『マサマサよりは普通！！』」

でした、コレが積み重ねだぜ・・・チクソウ・・・

## 第二十六話っぽい感じ！（後書き）

後書き

臨海学校編になって里沙未央の二人が少しだけ前に出始めた気が・

・

この二人も結構好きです。

しかし、大分メチャクチャになってきましたね・・・ホントに・

・

それに・・・リト君スマンなんか折ったかもしれない・・・

あっ感想などありましたれば是非にお願いします。

## 第二十七話っぽい感じ！（前書き）

前書き

なんかマサが主人公っぽいことしてます、ある意味無双？

後、やはりキャラがアレになってますので薬的な物を持ってどうぞ

## 第二十七話っぽい感じ！

『シユババババ』

「よっはっほっ！..！」

今日も今日とて斬撃、かわし中！

「クッ・・・やはり当たりません」

当然です、そう簡単にゃあ当たらんぜい

「そろそろみんな起きるからやめた方がいいと思うよ？」

おっと美柑がタイムアップ宣言

「じゃ今日はコレまでな？」

「仕方がないですね、そこまで言うならやめてあげます」

相変わらずの負けず嫌いなヤミさんでした。

ちなみに、今回は

「いついつもこんな事してるの？」

「まあな？もはや日課ですな？」

唯さんが見学に来ております、春菜と里沙、未央は今だに寝てるが、ちなみにリトもな？

「日課ってアナタ・・・あんなのが当たったらケガじゃすまないわよ」

ふむ・・・どうやら心配してくれとるようだな、けど

「当たらんし」

『ヒュバツ！』

当たらんと言った瞬間にヤミっ子が斬りかかってきたんで

『ガキン』

と素手バリア！

「とこんな感じで当たっても平気だぞ？つつかヤミっ子！もう勝負終わってんだろ」

「何を言うかと思えば実践には時間制限などありません、というこ  
とで攻撃を当てたので私の勝ちですね、フフ・・・やりました美柑  
！」

嬉しいそうに美柑に報告するヤミっ子と

「ひっ非常識だわ・・・」

アングリ顔の唯さんでした。

「アハハ、マサさんドンマイ！」

「いや負けてないからね！アレはアレだから唯に大丈夫って所を見ただけだから！」

「フツ・・・負け惜しみですか？」

「ハアアア？何言ってるの？つうか負けてねえだろうが！もう一戦やるかコラ！」

「見苦しいですよマサナリ？」

暫くの間、ヤミとの言い合いは続きました、何度も言つが負けてねえ！！

「マサさん可愛い」

「どっちも負けず嫌いね・・・確かに可愛いけど」

ええい、可愛いのは美柑にヤミに唯だっつってんだろ！！

つてそついや・・・ヤミっ子が笑ったん見たの初めての気がするよつな？

まっいいさね、とにかく！

「俺あ負けてねえ！！」

「そうですね、負けてませんね、じゃ美柑、古手川 唯、部屋に戻

りましよう」

颯爽と部屋に戻っていくヤミにイラッとさせられながらも二日目スタートです、コンナロー!!!

部屋に戻ったら既にリトは起きとりました

「おは、リト！腫れ引いたな？」

「ん？あっああなんとか」

リトの顔、昨日はかなりボコボコになってたが、今はスッキリ、いつものリトです、保健さんの薬も効いたみたいね？

つとそだ

「エテ山も起こさんとな？オラッ！」

『ガスッ！』

「へブッ！なっ何が!!」

蹴りを入れて起こしました。

「マサ、酷くないか？」

「いやあ、チクツと朝にあったもんで八つ当たり」

はいヤミっ子との一件です、寝てたんがリトだったら蹴り起こし



やあしなかつたけどね？

『ガバツ！』

「いついきなり何すんだよ！！折角イイ夢見てたのに！！」

「起こしてやったんだ有り難く思え、朝メシ食いっぱぐれたけりやあまた寝かしつけてやんが？」

やはりエテ山が突っ掛かてきたんでグツと拳をちらつかせたら

「いや、うん、ありがとう！朝メシ楽しみだな」

アツサリ引いた。

「マサ、猿山にも容赦ないよな？」

「だって俺エテ山、嫌いだもん」

「ひどッ！..！」

いやあなんか知らんけど、何となく気にいらんのよね？まっホントはそこまで嫌ってはいねえけど、好きか嫌いかでいったら嫌いとか答えるけどね！

とコチャコチャありながらもなんやかんやで朝メシを食い終わり。

『ザザアアン』

海！！

そう海です、臨海学校の醍醐味の海水浴！

「海だっぞオオオオ！！」

マサナリ浜辺に立つ。

「なあマサ、一つ聞いていいか？」

「何かねリト君？」

「あのさ・・・いや・・・古手川に任せよう」

むっ？リトが諦めた、まっいいさね、っとあそこに見えるはララ達ではないか？おっ近付いてきた

「マサ～～～遊ぼ・・・アレ？」

おっ？..どうしたんだねララ君？

「マサさん・・・あの・・・ちょっと、じゃなくて凄く気になるんだけど」

はて？美柑君、何が気になると？

「私もとても気になります、どういっつもりですか？」

いやどういっつもりって言われてもヤミオさんや？

「あっ・・・アナタねえ・・・」

唯、眉間にシワ寄ってるよ？

「アハハ・・・ちょっとそれはどうかなって思うよマサ君？」

むむ・・・春菜。

「何か問題でも？」

「・・・なんで肉じゃばん着てるの！！」「」

浜辺に美柑、唯、春菜のトリプルツッコミが炸裂しました。

はい実は前々から用意してたんはコレだったんですな？

「そんなものいつ用意したんですか？」

「臨海学校が始まる前からコツコツ作ってたのだよ、どうよコノ完  
成度？凄くね？」

グイッと胸を張ってみた。

「アツハツハ~~~~ヒイ~~~~マサマサ~~~~最っ高！！ナイス！」

里沙大爆笑でサムズ

「だろ？」

俺もナイススマイルでサムズ！

「マサマサって全力で無駄だよ〜?」

全力で無駄って未央君、それはヒドイと思うぞ? まっ否定はできんが。

「ハア〜〜気持ち悪いからソレ脱ぎなさい」

おう唯?

「ココで脱げと? ハレンチだぞ唯?」

「ツツツ!!! 違うわよ!!!」

好奇心を抑えられずにハレンチつつたら、めっさ赤くなりながら怒られた、反省!

まっ実は下に着てるからココで脱いでも問題ないんだけどねえ?

つつわけで

「よいしょ!」

肉じゃばんを脱ぎました。

「肉の次は骨!!!」

はいまたまた美柑、唯、春菜のツツコミいただきました。

今度は骨スーツです!

「アッハッハ!!! まっマサマサ脱ぎすぎ! アッハッハ! もうダメ〜」

！」

またまた大爆笑の里沙さんです。

「被せてみたのだ！どうよ？」

「しっ……死ぬ……ヒイヒイ……ゲホッゲホッハアハアハア・  
・ププ……」

里沙、笑い過ぎてむせてます、うむうむ、頑張つて作ったかいがあつたな！

「ホントに無駄だよねえ！ホラ里沙大丈夫？」

そんな里沙の背中をさすさす、する優しい未央さんでした。

でようやく

「はい、もうネタ切れ」

と海パン姿になりもつした、ン？前はあるなに躊躇っていたじゃないかと？チツチツチ、わあってねえですな？

ココは海だぞ？しかも今から海水浴だぞ？だったら躊躇うことはないだろう！

プールで泳ぐ場合も同じです。

「うーん、昨日はあんまり見れなかったけどやっぱりマサマサいい体してるねえ？」

「うん、もうヤバイよね」

日々、喧嘩三昧でしたからね？

『ペタペタ』

「お腹もボコボコだもんね？」

「あつ美柑ズルイ私も触る！」

美柑とララが腹筋をイジリだした、まっ別にいいけどね？

海にきたことによりテンション上がってるから多少のことは目を  
つぶるのだ！

『ペタペタペタペタ』

「やはり素晴らしく鍛えてありますね……」

「筋トレとかしてるわけじゃねえけどなあ？」

「えっ！嘘！コレで？」

おう、春菜驚いとる？

「うむ、毎日毎日、バケモノジジイと朝、昼、晩、喧嘩しまくって  
りゃあこうなる！死にかけるけどね！！」

命の保障はありません。

「そういえば、生傷だらけだよね」

「まあよ、あのクソジジイ、たまにポン刀持ち出すからな？危うくズンバラりされかつかつたわい」

素手でも十分に強えくせに、気分によって武器を使うからな、あのクソジジイは！

「怖っ！よく生きてたね」

「ハツハツハ！死、必っすればすなわち生く！根性決めればたまには生き残れんですよ？」

どっかの拳法青年が言ってたぜ！

「ハツハレンチだわ・・・けど・・・」

『ペタ・・・ペタ・・・』

ひそかに唯も腹筋をイジリだした、ハレンチだぞ！と言おうか迷ったが、可哀相だからやめといた。

「あっそうだった！マサ！この水着、似合っ？ねえ可愛い？」

今まで楽しそうに腹筋イジってたララが思い出したかのように水着が似合っかと聞いてきた。

ふむ・・・

「似合っとする似合っとする！可愛いぞ」

「わあ〜いい！やった！」

うむうむ、ナイススマイル！ちなみにビキニタイプの水着です。

「あつまささん、私はどうかな？」

むっ？美柑か・・・ふむ

「まだ早え！！んな背伸びせんでも」

「ヒドイ！がつ頑張ったのに・・・」

美柑の水着はかなり背伸びをしてました、まっ

「美柑は元がいいんだから無理すつこたあねえと思うぞ？」

「あつッ！！そっそうかな？」

「そうですねい」

美柑が赤くなった、赤美柑！可愛いッス、けど水着は無理してま  
す。

「ジーーーー」

おっ？ヤミ？ふむヤミか・・・そっいやヤミがああ黒いん以外着  
てんの見たこたあなかつたなあ、まあ今ん水着も黒いけど。



「似合つとるぞ？たまには違う服つつつても水着だけど、も悪かあねえだろ？」

「・・・そつでしようか？」

「おう！何だつたら今度、別ん服、買いに行つか？」

ニカツと笑いサムズ付きで、そう言つたら

「私にはアノ戦闘衣バトルドレスがありますが・・・かつ・・・考えておきます」

と言われました、ふんアレつて戦闘衣バトルドレスつてんだな？とか考えてたら

「ああヤミちゃんだけズルイ！私も私も」

ララが食いついてきた。

「まつ別にいいぜい、美柑も行くか？」

「うっうん！ヤミさん楽しみだね？」

もちろん、美柑も誘います。

「私は行くとは言っていないませんが・・・」

フツ・・・無駄無駄、もはやスッキリその気だぜい。

『ペタペタ』

さてと・・・そろそろいいよな？うん、もうそろそろいいはずだ！

「いつまで触ってたんだ唯？」

『ビクッ！』

「えっいや！ちがっ別にコレは！えと」

すんごいテンパってんなオイ！

「ええい！落ち着け、ただチクツと気になったただけだかんよ、おっ  
そうそう似合ってぜい！水着」

「ツツツ！！あつありがとう・・・」

おやま？意外に素直？

「ってジロジロ見ない！ハレンチだわ！」

でもなかったねえ、つか

「ハレンチって言われてもねえ？」

「そうそう唯にゃん、マサマサがその手の類、薄いって昨日で気付  
いたじゃん」

はい、里沙さんの言う通りですよ

「うん・・・そうなんだよね・・・」  
「うん女子としてせ・・・もう  
少しくらいは・・・」

「春菜さん、落ち込まないで、気持ちはわかりますけど」

何故か春菜と美柑

「えっちいのは嫌いですが、流石に反応がなさすぎるのも、腹が立ちます」

「だよねヤミヤミ」

ヤミと未央が肩を落とした、まあヤミン場合は半分くらい怒りが混じってるっばいが。

「たっ確かにそうよね・・・ハレンチだけど・・・アレはないわ・・・」

唯も続けてダークサイドに入った。

つかコイツら

「俺がああなるのがおのぞみか？」

ビツとある一点を指差す

「ハアハアハア！ララちゃんもデカイけど、古手川も・・・」

犯罪者に片足突っ込んでるエテ山です。

「ハッハレンチだわッ！！」

「切り刻みましょうか？」

頭を抱える唯さんと、殺る気満々なヤミっ子です。

「まあ確かにアレはキツイよね」と言っ

「コッチはコッチで・・・ね」

うん、気付いたようだね、里沙君、未央君。

「アレ？リト？寝てるの？おっい

』  
『ヒラヒラ

さっきから静かだと思ってたらヒッソリとリトの電源が落ちてました。

「ホント、耐久性に問題アリだよな？」

「我が兄ながら情けないよリト・・・」

まっそれでこそリトだけだな！

「リト君、大丈夫かな？」

おっ春菜さんは優しいねえ

「まっいつものこった、春菜も水着、似合っ

「あっありがとうマサ君」

いえいえ

「マサマサ！私達は」

「息ピッタリだと思う！」

バツグンのコンビネーションだぜ！

「違う！水着！」

ホラ、今だってピッタリじゃん？まっでも水着は

「似合っていないわけがない！」

ちょっと捻ってみた

「ツツツ！！」

赤くなった

「素の顔で、アッサリ言うなんて・・・」

「恐るべしマサマサ」

いや何が？普通に似合ってるから似合ってるっただけじゃん？

っっておよ？

「ううゝ結局、私だけ似合ってるって言われなかった」

なんか美柑がガツクリなってる

「買い物行く時に似合いそうなん買ってやっから元気だせ美柑君」  
頭に手を置きながらそう言ったら

「うっうん！ありがとうマサさん」

と元気になった、うむナイススマイル！

さて・・・そろそろ

「リト？起きね〜」

「ハッ！！」

リトを起こして遊びますかねえ  
で目を覚ましたリトは春菜を見たらまたもや即効で

「プシューー」

ってなったりしたが、何とか持ち直し意識を保ちました。

コレならなんとかかなりそうです。

つつわけで！

「そろそろ泳ぐか？海に来てんのに話ししかしてねえぞ？」

「うん！行くッ！」

うむララさんナイススマイル！じゃ行くか！けどその前に

「準備運動をしなさい、俺みたくアイアンボデーじゃない人だっているからねえ」

と準備運動をさせました、まっ俺には正直いらんけど

でようやく海へとGO・・・しようかと思ったが

「キミらちよい先に行っててくれい！肉じゃばんと骨スーツをしまつてくる」

との名目で先にララ達を海に

「うん、わかった！先に泳いでるね」

「あっララさん待って」

「チラッ・・・なるほど、マサさんらしいな？ヤミさん行こ！気持ちいいよ」

「・・・そういつことですか？はい、行きましょっ」

「あっ未央、ボールお願い」

「うん！」

「俺も先に行くからな・・・チラッ・・・うう大丈夫！大丈夫！」

と皆さん海へと向かいました、ちとリトが不安であるが、まあ大丈夫だろう、多分！

さて……

「唯君……泳げねえん？」

「ギクリッ！！なっなんで！！」

いやいや、なんでも、なにも……

「そんだけ大事そうに浮き輪抱えてソワソワ海の方見てたら気付く  
だろ？」

「うっ……もしかして他の人達も気付いたかしら？」

ふむ……

「美柑とヤミっ子は気付いてつかもな？春菜も気付きそうなもんだ  
つたけど、ララに引っ張られてつかしな？他は気付いてねえだろ？」

ララ、里沙、未央は海でテンション上がりまくってたし、リトは  
意識保つんに全力注いでたしな？

「うっ……べっ別に泳げなくつたっていいでしょ！だいたい、人  
間が浮くなんて非常識なんだから！」

いや、そんなに怒られても……つか



「俺、泳ぐどころか走れますが？」

「アナタは逸般人でしょ！私は一般人なのよ！」

上手えこといいやがるな？

「座布団いるか？」

「いらないわよ！どっから取り出したのよ！」

俺にもわからんが偶然持ってたのだ、いや不思議？

つとアレな話しはさておき

「教えたるか？」

「えっ？」

おう？ビックリ顔になった、ふむ、ではもう一度。

「俺、ティーチャー！唯、えっと・・・ス・・・ス・・・なんだっけ？」

「スチューデント？」

おう、流石は唯！

「それぞれ！いやあどうも勉強はね？苦手なんですわ」

「あのね・・・コレくらいは中学で習うことでしょ?」

「いやあ、俺、常に日本語でゴリ押しするタイプだから、結構なんとかかりますしね?」

「と」

「まっ昨日バスでもいったけどよ、唯にゃあこんな感じでテスト前とか勉強を教えてもらいてえわけよ?代わりつつたらなんだけだよ、泳ぎは俺が教えっから頼むわ」

手を合わせて頼みこみました

「・・・クスッ・・・なんでマサ君が頭下げてるのよ・・・わかったわ教えてもらっていいかしら?」

「おっ?よしや!」

「任せれ!あっちゅうまに、トビウオと呼ばせたるぜい!」

ニカツと笑いでサムズして答えました。

「マサ、やっぱり優しいね?」

「そうだね、ララさん」

「マサナリらしいと言えばマサナリらしいですが」

「いやいや」

「優しいかねえよ、コレは持ちつ持たれつってんだ……って何故いる！」

「もっもしかして聞いてた？」

気付いたら、ララ、美柑、ヤミの三人が近くにおりました。

「えっと……マサと唯が来ないからどうしたのかなって思って」

「アハハ、やっぱりちよつと気になっちゃって」

「美柑に同じくです。」

なるほどねえ

「スマン、唯！バレた！」

「べつ別にいいわよ……マサ君のせいじゃないし」

許してくれた、唯さんも優しい子ですなあ

「まっとにかく始めますか？」

「えっええ」

「唯、頑張ってね！応援するよ」

「うん、あつまサさん私にも少し教えてね？」

「プリンセスと美柑が付き合っつのなら私も付き合います」

とララ、美柑、ヤミもコチラ側に加わり唯のトビウオ大作戦が・

「キヤアアア！」

「水着がつー！」

「イヤーー！」

始まらなかったぜい・・・

「ガクラン君！出番よ！」

はい招集がかかりました〜

「悪い唯！教えんなあ今度な？」

ポンと唯の頭に手を置き謝って、現場へGOです！

「・・・まあ仕方ないわよね？」

いやマジにスマンな唯！

・  
・  
・  
・

で保健（司令）さんの元へ馳せ参じ

「ガクラン君、コレ！タオル、水着取られた子達に配ってって！」

とタオルを渡された、どうやら女子ん水着がパチられてっ  
たらしい。

「あいよ！」

でタオルを受け取り直ぐさま行動。

『バシャバシャバシャ！』

「ほい！そい！ほれ！」

今だに海から出れない女子達にタオルを渡していきます、ただ何故かタオルを渡してった女子の皆さんが

「ほぼノーリアクションって」

「プ・・・プライドが・・・」

「ぐすん・・・」

と泣きが入ってたが、そこは許せ！

「って里沙に未央もかよ！ホレ巻け！」

どうやら里沙未央の二人も被害に有ったらしいッス。

「サンキューマサマサ！」

「っていうか他の女子、マサマサが水の上、走ってるのスルーなんだ？」

「それより、マサマサのノーリアクションがショックだったんでしょ？」

はい実は水の上を走ってます、泳ぐよか断然早えし、右が沈み前に左を出せ！それが出来たら、二段ジャンプも空中疾走も目の前だ！

ってアレ？

「春菜もか！！ホラ！」

「ありがとう……えっとリト君が……」

アン？って……あつ！

「ブクブクブク」

電源落ちて沈んでるし……

「ええい回収！」

『ザバツ！』

リトを引き上げ、慌てて浜辺へと戻りました、その後もタッチ&GOでタオルを配りきり、なんとか一息つけました。

で海ん家にて。

「くそ~~~~~うらやまし」

「バケの皮が剥がれたなエテ山」

『メシッ!』

ドタマを掴んで、宙づりにします。

「そら吐け、やれ吐け、とつとと吐け!」

『メキメキメキッ!』

「アダダダ〜違う!俺じゃない俺じゃないから!」

ふむ・・・まっ実は

「知ってたけどね」

パツと手を離して解放します、それに、うらやましいと言いつう  
になったってこたあ犯人じゃねえってことだしな。

「ハアハア・・・わっ割れるかと思った・・・」

「割るつもりだったら、一秒かからんわい」

「怖いこと言うなよ!」

いや事実だし?けど、少々やり過ぎた感も否めないんで

「ほら、ミ○ミ○やるからカンベンしてくれ」

「あっああ・・・」

ミ〇ミ〇渡して、許してもらった。

あっちなみにリト君は、今だにOFF中です、至近距離からの春菜んセミヌードはダメージが、でかかったらしい。

「にしてもエテ山じゃあねえってこたあ・校長(変態)か？」

はて？今回は微妙に違う気がする。

「ガクラン君、お疲れ様」

考えこんでたら保健さんがやってきた、ふむ・・・

「さつきも言おうと思ったんすけど、白衣がトレードマークなんは、わかりますが水着に白衣は変ツスよ？」

保健さん、セクシイな水着に白衣を着てますねん、水着だけならわかっけど白衣は流石にどうだろう？

ってアレ？

「ガ・・・ガクラン君に変わって言われるなんて・・・奇をてらいすぎたわ・・・」

ガックリ手をついて落ち込みだした、相当にショックだったらしい。

「虚しい勝利だ・・・」



勝つには勝ったが、ちょっぴり虚しかった。

とコチャコチャしてたら

「ホント、最っ低！」

「あの水着高かったのに」

着替えてきた、里沙未央の二人がやってきた、かなぐり、ご立腹のようです。

「あの御門先生？なんで落ち込んで？」

続いて春菜さん、自分も水着を取られたのに保健さんを気遣う優しいさを持った春菜さんは、とっても良い子です。

「ガクラン君に白衣に水着は変わって言われちゃって・・・」

「アハハ・・・確かにちよっと変かな」

「西連寺さんにまで!!」

けど厳しさも持ち合わせてました、世知辛え

っと

「はいはい保健さん、元気だそうねえ、後でなんか作っただげるから」

「まっまあそうね、いつまでも落ち込んでる場合じゃないわよね、生徒達の水着が盗まれたんですもの、シツカリしないとね」

うむ、なんとか保健さん立ち直りました、よかったよかった。

で他の被害にあった女子の方々も次々とやってきます。

まっララ、唯、美柑、ヤミは春菜達ん付き添いでだっただけで被害にはあってねえですけど。

「マサ！犯人捕まえよ！このままじゃ折角の海が台なしだよ！」

おっララさん、やる気モードですな？

「まっ俺あはなっからそんなつもりですよ？俺ん役職忘れたか？臨時警備員もやってんだぞ？」

「そう言えばそうだったわね」

そうだったんですよ唯さん、つうわけで彩南ガーディアンズ、出勤です！

つつても

「犯人は人かどうかは謎だけどな？」

「どづいづことですかマサナリ？」

ふむ……どづいづことつつわれてもね？よし！

「はっい、被害にあった方々に質し問！犯人見たやつ？」

被害者にそう聞いてみたら

「見てないよマサマサ、いきなりだったし」

「うん、急に水着のブラだけが取られたって感じ」

「私もいきなりだったからビックリしちゃってよくわからないうちに……」

ふむ、里沙、未央、春菜は見てないと、で他の方々も影だけは見ただけど姿は見てないとの事でした……

さてさて、結構な数の被害が出てなのに姿が見えない

「どんだけすばしっこいんだっつう話しだよな？しかも海ん中で？普通できるか？んな芸当？」

「あっ！！言われてみればそうかも！」

だろ？美柑君、まあ

「俺なら余裕で出来っけど、んなことしてもな〜つか水着集めて何すんの？」

「確かにガ克蘭君なら出来るでしょうけど」

「マサは私達と一緒にいたもん」

と俺にはアリバイ有り。

「それにマサ君はそんなことするタイプじゃないわよね」

「うん、ちょっと考えられないかも」

「私もマサさんは絶対対しないと思う」

「確かに水着の盗難とマサナリは結び付きません」

うむ、どうやら俺、その辺の信用はありそうです。

「おっ俺なんて真っ先に疑われたのに・・・」

「猿山は前科があるじゃん、具体的には昨日！」

「そうそう、マサマサと違って変態オーラが出まくってたじゃん」

「ガハッ！そつそれは男なら仕方ないだろ！寧ろアイツがおかしいだろ！」

むう・・・エテ山よ・・・

「おかしいなあ認めるがオマエに言われんなあ非常に腹立つ！」

『ゴスツ！』

「へぶっ！！！」

喧嘩キックで沈めました加減はした。

「さて、とりあえず、犯人は人かはわからんが調査にでますか？」

「あつ私も行く！」

おっ？

「ララ？オマエまで水着取られたらどうすんの？」

流石に止めようとしたら、ササツと耳元に近付いてきて

「エへへ・・・大丈夫、実はコレ、ペケに造ってもらったやつだから取られても平気」

ほっ・・・なるほど！

「ってララ？ペケが取られたらアウトじゃね？大丈夫なんペケさんや？」

『大丈夫です、ララ様の頭についてる限りは』

いやいや

「逆に言ったら頭についてるペケが取られたらアウトって言うてるようなもんじゃん！ダメだろ？」

「もうマサは心配しすぎだよ！大丈夫って言ったら大丈夫なの！」

まあ確かに、水着狙ってきてんだったらペケは取られっこたあねえたあ思っが・・・ふむ・・・

「まっなんかあったら俺が動けばいいっか？」

結局はそう結論付けて

「じゃ俺とララは最初現場に行ってくるわ」

「まかせといてね！ちゃんと犯人捕まえてくるから！」

犯人確保に出ることに

「私達も手分けして犯人探そう」

「うん！」

どうやら、被害にあった女子達も独自に動くことにしたらしい

「ヤミ！護衛頼む」

「タイヤキで手をうちましょう」

「あいよ」

心配だったんでヤミっ子を護衛につけました、タイヤキくらいなら軽いもんです。

「ケガは・・・マサ君は大丈夫ね？ララさんにケガさせないようにね？」

「ハッ！かすり傷一つ付けさしやしねえよ！」

唯にラランことを頼まれたんで、そう答えたら

「ツ~~~~エへ~~~~嬉しい~~~~マサ~~~~」

ララが抱き着いてきた、リトが電源OFFってたから

『ヒョイ』

避けた

「わきゃー！」

で、ララが転びかけたんで一応支えた、かすり傷一つ付けさせんと言ったばかりだしな！

「アハハ・・・ララさんドンマイ！マサさん頑張ってね？」

「私も昨日、避けられたな・・・あっララさんも頑張ってね！」

「マサマサ！ララちい、ファイト〜」

「オ〜！！！」

「ガクラン君もララさんも気を付けなさいね？」

と騒がしくも犯人確保に出発しました！

・  
・  
・  
・

で、犯行現場へと到達です。

「もう・・・なんで避けるの？」

「じゃあねえだろ、リトがOFFだったんだから」

「そついうことじゃないもん！」

「だろうな？」

まっララがさっきらずっとブックサ言ってるが、それに関しては何となくとしか言いようがないんスよね？

つとイカンイカン！

「ララ君！気を引き締めれ！既に戦場だぞ！」

「えっ？戦場じゃないよ？」

いや、ニュアンスだからね、真っ直ぐに捉えられても困ります。

『スウー』

っあっ！

『ララ様！』

『ザバア！』

「はい残念！させねえよ！」



『バチャバチャバチャ!』

ええ犯人っていうか犯魚? いや魚類じゃねえよな?

まっとにかく

「ゲットだぜ!」

はい犯人は~~~~~

「あっ!コレって凶鑑で見たことある!イルカだよな?」

そうイルカでした、しかも

「このサイズは、子供?」

「そうみたい、凶鑑でもっと大きいって書いてあったもん」

『バチャバチャバチャ』

「ああ暴れんなつつの、俺に一度ロックされたら外れんぞ?大人しくしてな?なっ?」

チビイルカの頭を撫でながらそう話しかけたら大人しくなったんでロックを外します。

「わっ凄い!ホントに大人しくなっちゃった」

「フツ……心から話せば通じます！前にペンギンとも話してたじやん？」

まあ完全にはわかんないツスけどね？つとさてさて

「チビよ、何故に水着をパチっていった？」

チビルカに事情聴取、したらチビルカ。

『グイッグイッ！』

と俺ん背中に回って押し始める、ふむ

「アツチに何かあんのか？」

『バチャバチャ』

尾ビレをバチャバチャしだした、どうやら正解のようです。

「マサ！行ってみよ？」

「おう！」

むろん、そのつもりだぜい！

「じゃ案内頼むわ……あっそだ！チビ？背中に乗っていいか？あつ俺あ泳ぐけど」

『バチャ』

いいらしい、よし！

「ララ？チビが背中に乗せてってくれるってよ？」

「ホント！わあ〜い！ありがとうちびィ」

うむうむ、ララ、ナイススマイル！

でチビイルカはララを乗せて

『ザザザザ』

と進み出す、そんなチビの横に並び俺も泳ぎます。

「わあ〜気持ち〜」

「だだよチビ？」

『キュー』

おっチビ、鳴けるんかい？ふむふむ・・・

「もっと早く泳げるだよ？」

「ホント？イケ〜チビィ〜」

『グンツ！ザザザツ！』

ララン掛け声に合わせてチビイルカ更にスピードアップ！

「まっ余裕でついてけますけどね？」

とこんな感じでチビイルカの後をついていったら、どこの岩場に到着。

その先には

「なるほどな・・・」

「親イルカ・・・チビ・・・助けを呼びたくて」

チビイルカの親らしきイルカが岩場近くの浜辺に乗り上げておりました

『キュー・・・』

「ああわあってる、わあってる！まかせれ！すぐに助けてやっから、んな泣きそうなのツラすんな」

「エへへ、うん！私も手伝う！」

ぶっちゃけ一人でも余裕っちゃ余裕だったんだが、ララもやる気になってたんで二人で親イルカを救出しました。

そして

「じゃ～な？次からあ気いつけんだぞ？」

親イルカ、かすり傷くらいはあったけど大丈夫そうです。

『キユーー!』!』

「ははっ!お礼言ってるあ

律儀なイルカよなあ

「・・・親子・・・か・・・」

ン?ララ?どっ たんだ?

「デビルーク星のこと思い出しちゃった・・・よかったね・・・イルカさん」

ふうん、なるほろねえ・・・ふむ!

「よし!今日はララはよく頑張ったんで帰りは俺ん背中に乗せて帰ってやるう!」

「ふえ?いいの?」

「乗りたくなきゃ別にいいけどなあ」

「わあゝ乗る乗るもん!エイツ!」

『バツ!』

はい、ララが背中に乗りました!

「全速前進!」

「イケ～～～マサ～～～」

「あいよ船長！」

『ザバババツ！』

とこうして水着盗難事件は幕を閉じたのでありました

と見せ掛けて

元いた浜辺に到着したら

「マサナリ、犯人を捕えました」

と胸をはるヤミっ子と

「ぐっ・・・誤解なのに・・・グフッ・・・」

ポッコボコになった校長（変態）がおりました

「あのかなヤミっ子・・・」

でヤミっ子に事情を話したが

「あの人はえっちいので嫌いですから」

と全くもって反省はしとりませんでした

「まっ校長(変態)だからいいけど」

「し……しどい……でもヤミさんに殴れてワシ、ドキドキ」

「「死ね(んで下せ)」」

『ガスッ!』

「ゲブウ~~~~!!」

俺とヤミのダブル踏み付けで黙らせました……もうホント、ダメだこいつは……

第二十七話っぽい感じ！（後書き）

後書き

はい二十七回目でした・・・

マサ久々に動物と会話、もはや本気でなんでもアリになってきた  
気がしますが、コレからもこんな感じですよ

あっ次回も頑張りますので、また見てやって下さい。

感想などありましたら是非！



## 第二十八話っぽい感じ！（前書き）

前書き

・・・これは・・・マズイかも？

大分アレがソレになってますので本当に注意して強い薬を持って  
おすすめ下さい。

## 第二十八話っばい感じ！

「ああ、明日の今は、ボクは結城家の中」

と往年の名曲の替え歌を歌いつつ

『ジュージュー』

ただ今、保健さんの部屋にて【カフェ・スプーキーズ】出張営業です。

「よつと！」

はい完成、ホットケーキ&タイヤキです、保健さん、ヤミっ子と約束しとったから早速作つとったんですな。

「はいよ！保健さん、ヤミっ子」

「フッフ・・・きたわね」

「いただきます」

うむ、どつぞどつぞ。

「最近、メキメキ腕が上がってる気がすっけどどつだろっ？」

「そつね、ホントに上達してるわね？ヤミさんが羨ましいわ」

「ええ、特に美柑とマサナリが一緒に作った時などはかなり美味しいです」

うむ、どうやらお二人さんもそう思ってくれとるようだ、ちなみに最近になって、ヤミっ子、『中々』じゃなくて『美味しい』と言ってくれるようになりました。

「さてと・・・後の注文の品はっと・・・」

美味そうに食べる二人を見つつ、注文の品を作っていきます。

クラスメイツ女子に頼まれたやつですな！後は、リトっA&B・・・エテ山にも・・・ニヤリ・・・作ってやるか？

とガンガン作っていくのでありました、けどフと・・・

「コレ旅館でやることじゃなくね？」

「細かいことは気にしたらダメよガ克蘭君」

「そういうことです」

まっそれもそうですか？とコチャコチャありながらも、注文の品を作りきり

「じゃ出前してきます」

「いってらっしゃい」

「私もついていきましょう」

と出前に出かけます、ヤミっ子もついてきてくれるようだ。

『スッ』

保健さんの部屋を後にした俺とヤミっ子でした。

そしてスツタラスツタラと移動中、途中で生活指導の先生に遭遇したが

「出前ッス！」

と言ってヤキソバを渡したら、アツサリ引いた。

ちなみに男子連中用には、ヤキソバやら好み焼きやらを作っています、ポリユーム重視だ！

にしても

「コレってもしかや賄賂？」

「マサナリの場合は治外法権では？」

チガイホウケンらしい、ふむチガイホウケン・・・チガイホウケンな・・・

「フツ・・・カクカクシカジカという意味です」

ヤミに鼻で笑われて説明された

「いや知ってたよ？マジ知ってたから！」

「そうですね・・・フツ・・・」

クソウ・・・屈辱・・・

とそんなこんながありながらも、出前の品を配っていきます。

夕食後だったが結構評判はいいッス。

A & Bとかめっさ喜んでたしな、作ったかいはありますわい。  
で続いて、リトたち。

『スッ』

「出前〜出前で〜す」

「マサ、手広く色々やってるよな？」

俺もそう思う、まっとにかく

「食べ！エテ山にも作ってやったぞ、有り難く思え」

「まっマジで！-！」

フツ・・・俺が渡したお好み焼きに早速噛り付きがったな、よしよし

「おっ美味え！マジ美味・・・アレ・・・はら・・・ちよ」

「ニヤリッ!」

「グッナイ!エテ山」

『ドサッ』

「ちょマサ!何したッ!」

ふむ・・・何をしたかとな?

「保健さん印の睡眠薬を仕込んだだけだ、朝までグッスリだ」

「なるほど、やりますねマサナリ」

ヤミっ子に褒められた

「なんでそんなことしてんだ!」

リトにはツッコまれた、しかしリトよ

「まあ聞け、実はな、エテ山と他数名のやつらが女子ん部屋に夜襲をかける可能性がある」と故に秘密裏に処理せよ!と俺の中の何かか・・・」

「マサの推測かよ!」

うん、ぶつちゃけ勘です、まあ遊びに行くくらいなら全然いいかあと思うんですけど、エテ山と他数名は犯罪者の目だったんでな!

あっちなみに、他の女子生徒とA&Bには仕込んでませんよ?

「まっ……まあ確かにマサが言ってたみたいに今から女子の部屋に遊びに行こうって言い出してたけど」

どっつやら読みがあたってたらしい。

「そら見たことか、っとリト？今からララ達ん部屋に配りん行っけど来るか？」

「俺はいいのかよー!!」

ふむ、もっともな質問ですな、がしかし

「リトだしなあ？いいんじゃない？」

「マサナリとは逆の意味で安全ではありませんし……ただ……えっちいことをしたら……刻みます」

まあヤミさん、おっとろしいですな？

「うっ……やっ……やめとく……なんか俺の勘が意識しないでも、そっち関係に巻き込まれるっていつてるし」

ふむ、確かにそんな気がギュンギュンするぜ！

やっば連れて行きたいと一瞬思ったが捌くのが大変そうだから止めといた。

「じゃコレ、リトのな？あっリトのは仕込んでねえから安心して食べ」

「ああサンキューマサ！」

とリトの分を渡して部屋を後にしました。

・  
・  
・

でララ達ん部屋へ

『スツ』

「出前く出前で……」

『スツ』

即しめた……

「ふむ……世の中は広いな……」

「あのような世界もあるんですね、理解はできませんが」

うん、そうだな、けど偏見の目で見ちゃイカンよな？

ン？何を見たのかな？いやね？なんか里沙と未央が春菜や唯、  
ララに抱き着いて胸を揉んでました

美柑は隅っこの方で苦笑い……しまったなあ

「美柑、救出した方よかったかねえ？」



「今からまた踏み込みますか？」

ふむ・・・よし！

「3・2・1で踏み込むぞ？」

「ええ・・・3」

「2」

「1」

『スッ』

覚悟を決めて踏むこんだ

「ちょ・・・いや・・・くすぐつ」

『スッ』

遅すぎた・・・なんか美柑も混ざって、くんずほぐれつのバトルロイヤルになってた。

「クツ・・・悪い・・・悪い・・・美柑・・・クソツ・・・チキシヨオ・・・リトになんて言えば・・・」

「マサナリが悪いわけではありません・・・アノ時に、私が連れ出していれば・・・こんなことには・・・」

すまないリト・・・

『スッ!』

「ハアハアハア・・・はっ早く助けなさいよッ!」

浴衣がぐつちやくちやになった唯登場、けど

「いや・・・なんつうか」

「邪魔したら悪いかと?」

気を使っただんですよ?コレでも?

「余計なお世話よ!」

余計なお世話だったらしい

でそれから

「いやぁ・・・マサさんビックリしちゃったよ、もうリトや才倍のおっちゃんに土下座する覚悟までしてたぞ?」

「違うからね!マサさんホント勘違いしないでね!」

美柑必死!

ちなみに里沙未央の二人は

「いた〜い」

「マサマサ、アレはただのスキンシップなのよ」

俺んゲンコを喰らって仲良く正座で反省中。

「美味しい〜」

ララは暢気にホットケーキを、もきゅもきゅ、うむナイススマイル。

「・・・こんな時間に女子の部屋を訪ねるなんてハレンチよ」

いやいや唯君、今頃、体裁整えても？

「唯さん、美味しそうに杏仁豆腐食べながら言っても説得力が」

「えっ！いやコレは、ほら！せっかく作ってくれたのに勿体ないでしょ！だから仕方なく」

ほう仕方なく・・・仕方なくか？

「じゃ唯の杏仁はポット〇ユートしていいんか？」

俺がそう唯に言ったら

「うっ・・・それは・・・嫌よ・・・美味しいもの」

ササツと杏仁を隠して断固拒否の構え、まっ美味しいと言っていただいて俺としては嬉しいッス。

「ねえマサマサ」

「そろそろ私達も食べたいかな」と

ふむ、そうね？

「よしッ！」

お預け解除。

「やった！」

「いただきま〜す！う〜ん美味しい」

パクパクと食べ始めます、うむ、ナイススマイル。

つと

「じゃ用もすんだし戻って寝らあ」

「ええ〜マサ！今日はここで寝ようよ」

部屋に戻ろうとしたらララがアホなことを言い出した。

「却下じゃまた明日」

サクッと拒否って部屋へと戻りました。

・  
・  
・  
ララ視点

「却下じゃまた明日」

『スッ』

むう

「ぶう〜別にいいのに」

そう言っ出ていっちゃったマサを見てついグチがでちゃった。

「あのねララさん、いくらなんでも一緒に寝ようなんてハレンチよ  
「！」

むう？でも

「いつもじゃないけど・・・結構一緒に寝てるよ？」

リトのお家ではだけど？

「なっとなっとな！！そっハレンチだわあ」

わっ唯が真っ赤になって怒ってる？なんでだろう？

「わあ〜お！ララちいやる」

「ちょっと意外かも？いつの間にそんな仲に発展したの？」

「うん？」

「えっと、マサが初めてリトのお家に来た時、最初はね、裸で布団に潜り込んだんだけど・・・朝起きたら布団にグルグル巻きにされてた」

「アレは苦しかったよマサ・・・」

「アツハツハ！なんだただ一緒に寝てるだけってこと？」

「アハハ！まあマサマサだもんね？」

「アレ？なんでリサミオの二人は笑ってるんだろ？」

「あっ！美柑とヤミちゃんも一緒に寝てるよね？」

「そうそう、この二人も一緒に寝てるんだよね？」

「あつっ・・・ララさん言っちゃった・・・」

「まあ・・・そうですね？マサナリはターゲットですから・・・ええあくまでターゲットです他意はありません」

「むむ？美柑はなんで慌てるんだろ？それにヤミちゃんも、なんか変？」

「アハハ・・・そうなんだ？」

「全く美柑さんにヤミさんまで何を考えて」

「アハハ・・・ちょっと興味本意で一回潜り込んでみたんですけど・・・凄くこごう・・・寝やすかったっていうか・・・アハハ」

そうそう

「そうなんだよね！美柑の言う通りだよ、えつとね？ポカポカしてて、でも暑いわけじゃなくて・・・なんかこごう・・・わかんないけど、ホツとする？」

むう、口に出すのは難しいんだけど、そんな感じで寝心地がいいんだよね？

「確かに・・・そうですね・・・アレは下手な睡眠薬よりも強力です」

ヤミちゃんも、そう思ってるみたい。

「だからって男の人の布団に潜り込むなんて！間違いがおこったら」

「唯にゃん、他の人ならまだしもマサマサだよ？ないない」

「そうだよ・・・私達の裸見て、ほぼノーリアクションだよ？」

「うっ・・・確かに・・・」

アレ？なんだろう？

「マサ君のアレは堪えるよね・・・」

「そうですね春菜さん・・・」

「えっちいのは嫌いですが、反応ないのも腹立ちます・・・」

何故かみんな、どよ〜んって落ち込んじゃった？

「マサマサと結城を足して割ったら調度いいのよね？」

「アハハ！確かに、一方はノーリアクション、一方は反応有りすぎだもんね？」

それからリサミオの二人がそんなことを言い出したけど

マサとリトを足して割るって、ちょっと想像がつかないかも？それにマサはマサだし？リトはリトだし？

「あっそうそう！春菜っていつの間に結城のことを下の名前で呼ぶようになったの？」

私がそんなことを考えてたらリサがハルナにそう聞いてた

「えっと・・・マサ君がコツチの学校に通い始めてからかな？ララさんとマサ君とリト君でお弁当を食べてたら、マサ君が急に」

そうそう、そうだったなあ？えとリトの恋を応援する！って話しただけけど、アレはマサも私も、そういうことを抜きにして、ただ



そうしたいって思ったんだよね？

「ふ〜ん、やっぱマサマサ絡みか？唯にゃんも、マサマサ絡みだも  
んね？」

「うっ・・・まあそうね・・・違う制服を着てたから注意しようと思っただけなのに・・・あっというまにクラスが変わってたわ・・・」

「そうだったんだ？でも

「そのおかげで唯と友達になれたもん！私は嬉しいよ？」

「うっ・・・まっまあ・・・私も・・・少くらは・・・う・・・  
嬉しいけど」

「エへへ〜唯もそう思っててくれたんだ？嬉しいな？」

「~~~~~ララちいも唯にゃんも可愛い~~~~~」

『バツ！』

わわっ！リサミオが抱き着いてきた。

「ちょ！離して！また変な疑いかけられたら困るから！」

唯は、そう言ってリサを引きはがそうとしてるけど変な疑いって  
なんだろう？

「美柑、少し避難していきましょう」

「うん、そうする」

後、なんでか美柑とヤミちゃんがリサミオの二人から距離をとっていた。

「アハハ・・・私もちよっと離れよう」

後ハルナも。

それから少しの間、ワイワイみんなで騒いで

好きな人はって話しになった、勿論、私は

「マサ！」

って答えた。

「ララちいはもうまるわかりじゃん？けどなんで好きになったの？ほら前にマサマサから聞いたやつってカバーストーリーだったし？」

そういえばリサミオの二人にも私とヤミちゃんが宇宙人だってことバレてるんだよね？じゃあいつかな？

とマサと出会った日のことを話します。

「・・・それでね！私はすっごく嬉しいかったの、それから好きになっちゃった」

最後にそう言ったら

「ああ〜それは惚れるわね？」

「うん、そのシチュはヤバイよ」

「でしょ？それに」

「マサはゲンコツとかするけど優しいんだよ・・・えっとね・・・」

水族館の時の話しとか台風の時の話し、そして今日のイルカさんのこと、いっぱい話した

マサといると、とっても楽しいし、凄く嬉しくなる、一緒にいると、どんどん好きって気持ちが大きくなる。

「アハハ、ララちい、もうお腹一杯！」

「そうそう、口から砂が出そうだよ？」

むう、まだ語り足りないのに・・・けどミオ、砂ってなんでだろ？よくわかんないな？

「けどララちい、マサマサ、競争率以外と高いかもよ？」

「ふえ？」

「怪しいのがコノ部屋に何人かいるからね」

「むむ？ライバルってことかな？」

「ツツ!!アハハ・・・」

美柑？

「わ・・・私は別に、友達よ友達!!」

唯？

「・・・ターゲットです・・・」

ヤミちゃんまで？むむう・・・

「頑張る!!」

負けないんだから!でも・・・まだまだ増えそうだなあ?そうだが、みんなで一緒にお嫁さんにしてもらってもいいかも?

けどマサは

「中々、本気にしてくれないんだよねえ・・・」

なんでなんだろうなあ?

「確かに、アレは病気を越えて呪いだよね?」

「うん、アレは凄い」

私もその意見には賛成だよ・・・けど頑張る!絶対マサに『女の子』として好きになってもらうんだ!

いつかみたいにグツと握りこぶしをして決意した。

それからリサミオは春菜にも同じことを聞こうとしたら

『ジリリリリッ！』

って急に凄い音がして、慌てて外に出たら

「あわわわ！わしはただエレベーターのボタンを」

って、お爺ちゃん先生が廊下に座りこんでた

そこにマサが来て。

「はいはい、火事でも毒ガスでも爆弾でもねえからな、まったく爺ちゃん先生、むやみやたらにボタン押したらイカンじゃろい！」

「わしはエレベーターの！！」

「この旅館、エレベーターないからね！はい部屋に帰んぞ！ホレホレ、皆さんも部屋に帰えって寝れ！」

『ヒョイ』

とお爺ちゃん先生をおんぶしてお爺ちゃんを部屋に送ってあげた、やっぱりマサ優しい！

「もう骨川先生のモウロクにも困ったもんだね！」

「そつだね、さつ部屋に帰って寝よつか？」

結局その後はリサミオが言ってたみたいに部屋に帰って寝ることにハルナの好きな人がちょっと気になったけど、とにかく今日は。

おやすみ！！

・  
・  
・  
・

美柑視点

うっ、ララさんにバレちゃったかな？布団に包まりながら、さつき里沙さんと未央さんに言われた事を思い出す。

実は私、マサさんのこと、えっと・・・うん・・・好き・・・だと思っ。

マサさんと一緒に過ごして行って、優しいところや、面白いところ、妙なところで厳しかったり、たまに可愛かったり

そんなところを見てるうちに、だんだんと好きになっていったっ  
ていつか・・・

うっ、ララさんに悪いと思っけど・・・でも好きになっちゃった  
し・・・

どっしりよっ・・・寝れない・・・

こんな時、マサさんと一緒に寝れたらな？  
自然とそんな事を考えてしまって、余計に寝れなくなってしまっ  
た……

チラツとヤミさんや唯さんの方を見てみたらこの二人も寝れなそ  
う、ララさんはもう寝ちゃってるけど。

ライバル……多いな

そう思いながらも中々寝付けない夜を過ごした。

唯視点

ねっ……寝れないわ……

さっき言われたことをどうしても意識してしまう。

確かに、マサ君は家族以外では一番親しい男の人だ、それは認め  
るし友達だとも思うけど……

うう~~~~、あんな無茶苦茶で変な人なんてキライだったのに……

なんでかしら……今は……キライじゃない……

昼にマサ君に言われたことを思い出す、私だってバカじゃない

泳ぎを教えてくれるって言った時のあのやり取り、多分マサ君は私に気がつかってあんな言い方をしたんだと思う。

きつとマサ君は意識してないと思うけど・・・

変なところで優しいのよね・・・

もしかしたら・・・里沙さんや未央さんが言うように・・・

『カアアア』

顔が熱い！

ねっ寝れそうにないわ・・・

・  
・  
・  
・

ヤミ視点

地球の文化などを知るために本を読んでいます。

その本の中には人の感情などのことを知るために恋愛小説の本もありました。

最初は人の感情を理解するために読み始めたものですが、中々に興味深く読み耽ってしまうこともあります

私には好きという感情がいまいちわかりませんでした、私は生体



兵器であり、宇宙有数の殺し屋ですから、必要ないと思っていました

しかし、この星にきてマサナリと出会い、美柑やプリンセスなどと触れ合い、その感情がどういふものか、わかってきた気がします。

友人もできました、以前の私では多分、友人など考えもしなかったでしょう

楽しいと・・・嬉しいと・・・そう思える日々が続いています。

少しだけマサナリと出会うきっかけを作ってくれた、アノ偽の依頼には感謝しています。

ラコスポは気にいりませんが。

マサナリ・・・私のターゲットであり・・・今は・・・キライではない相手・・・

一緒に過ごすことが楽しいと思える人物・・・

ハッ！いえ違います、だからと言って好きというわけではありませんのでお間違えのないように。

春菜視点

好きな人・・・か・・・

私は・・・どうなんだろう？

ララさんや、唯さん、美柑ちゃんにヤミさんはマサ君のことが好きみたい。

マサ君か・・・不思議な人だね？

自分自身も変わってるけど、なんていうか人を繋ぐ天才？

それはとても凄いことだと思う、マサ君が来てから一気に輪が広がっていった気がする。

リト君も、以前に比べて私達と話してくれるようになったし。

たまに今日みたいに気絶しちゃったりするけど？

あつそういえば、肝試し気付いたらゴールしてたけど、何があつたんだろ？途中までは覚えてるけど・・・

リト君、顔が腫れてたし、みんなは教えてくれなかったし・・・

うん・・・何が・・・何が・・・スウ・・・スウ・・・

・  
・  
・  
・

マサ視点

「へっくしっ！ー！」

『ゴーンッ!』

ってヤベッ!!

くしゃみをした衝撃で、ヌルリと爺ちゃん先生が抜けてしまった。

『……片道でええかの?』

「買ったやイカンつの一!」

危ういところでギリギリ防いだ、実にヤバかったぜ……

にしても、風邪か?

「ねえな?」

我が事ながら、それはないと思いつつ、爺ちゃん先生を部屋に送り

自分の部屋に戻って寝ることにしました。

ハイ!おやすみ〜

第二十八話っぽい感じ！（後書き）

後書き

もう・・・ヤバイ・・・コレは・・・ヤバイ。

春菜さんとか最後はごまかした感じですね！

今だ迷ってる書いてる人です。

けどなるように・・・なるといいなあ？

ええ臨海学校編はコレまででした。

次回は・・・アノ人かな？

## 第二十九話っばい感じ！（前書き）

前書き

アノ人達の登場です。

大分アレな感じになってますが、薬！薬を持ってお願いします。

## 第二十九話っばい感じ！

「マサ坊くそっちゃん足場は終わったかあ？」

「余裕！」

「おっ！流石は文さんの紹介だ！」

「まかせれ！」

はい、どうも、ただ今、俺作業中！ン？用務の仕事かとな？いやいや今回は違いますねん

実は用務んおっちゃんに頼まれて学校サボッゲフンゲフン、休んで今度から始まるテレビ番組の臨時スタッフをしております。

確か・・・爆熱ナンチャラってやつ？

「爆熱少女 マジカル・キョーコだよ？」

そうそう、それぞれ・・・って

「コラ、主役！こっちゃん来たら危ねえだろ！」

ったく

「アハハ〜暇だったからついつい？」

はいコイツ、新番組の主演を勤める、霧崎恭子、見ての通りのアホの子です」

「ちょっとアホの子ってヒドイよ！」

どうやら声に出てたらしい、がしかし

「恭子君や？キミね、まだ番組始まってねえのに主演ケガで降板！と報道されてえのか？」

「その時はマサ君を盾にするから大丈夫！」

素敵な笑顔でサムズしてからに

「まっ俺あ頑丈だから別にいいけどな？」

「おお〜頼りになるね！」

そいつあどうも

「ガツハツハ！すっかり仲良くなってるな？休憩に入れ、キョーコちゃん、マサ坊連れてっていいぞ？コッチはあらかた終わったからな！」

学んガクおっちゃん、から休憩許可。

「じゃ！マサ君、お借りしま〜す！」

ピツと敬礼した恭子に引きずられながら休憩に入ります。

「ええい引きずらんでも行くわ、放火魔め！」

「ちよつと放火魔って言わないでよ！」

いやだつてアレだよ？ 決めセリフが

「どんな事件も燃やして解決だったか？ もうアレじゃん、完全に放火魔じゃん？」

「そついうところを優しく流すのが大人だよ」

むむ！ 残念だな恭子君。

「そんな大人になんかなりたくないやい！ 一生、悪ガキでいたいね！」

「悪ガキって・・・でもピッタリだよな？ マサ君に？」

なんかえらく納得された。

「どうも、生涯悪ガキ鬼島 政成です。」

とりあえずペコリと頭を下げといた。

「どうも、燃やして解決！ 爆熱少女マジカル・キョーコです」

返された、中々やりおるわ！

「で恭子君や？ 暇だ〜とか言ってたがセリフとかはいいのか？」



サクツと話題転換

「うん、それは大丈夫！それに撮影前にリラックスしたかったし」

ふんなるほろ。

「まっ根詰めすぎても疲れるわな？」

「そうそう！いや〜同い年の人がいてよかったよ！やっぱり年が離れてると気をつかっちゃうしね？」

はい、俺と恭子、同い年です、しかも恭子も高校生。

「高校生アイドル？も大変ですな〜」

「なんでアイドルの後にハテナをつける！」

いやさ

「特にコレと言って理由はねえッス、なんとなくだな？」

「なんとなくなくて・・・あっそういうマサ君だって高校生でしょ？つまり高校生スタツフ？」

うむ・・・

「寧ろなんでも屋に近えな？なんせ、高校生兼臨時用務員兼喫茶店  
店長兼臨時警備員だからな？つか長！」

やっぱり長いな？

「手広くやってるね〜どう？私のボディーガードもやってみない？」

ボディーガードねえ？

「任せれ、学校があっけど」

今日はサボ、ゲフンゲフン、休んでるが、あっちなみに公休扱い  
です。

「まっ暇な時でいいよ！」

どうやら暇な時でいいらしい

「まっ恭子たあもうダチだからな！ダチがピンチになってたら助  
けんなあ当たり前だあな？」

「おお〜いつの間に友達に？でも嬉しいかも？頼りにしてるよマサ  
君！」

おっさ！任せとき！とこうして恭子とダチになったのでした。

・  
・  
・  
・

恭子視点

どんな事件も燃やして解決！マジカル・キョーコこと、霧崎 恭  
子です！

ええ〜今日知り合いに・・・じゃなくて友達になつた同い年の男の子、鬼島 政成君、通称、マサ君とどう知り合ったのかわからない人の為に、私からその時の話しをしようと思いま〜す！

じゃチャンネルはそのままですた〜ト〜

「恭子？急にどうした？奇妙な動きしてからに？呼ぶか救急車？」

「呼ばないで！必要なことなんだから！」

「ン？ああなるほどね？たまに俺もやるしな？」

そうそう、わかってるんだったらいいよ！じゃ改めてスタート〜

・  
・  
・  
・

「フウ〜今日から撮影か？頑張らないとな」

独り言をいいながら、番組で着る衣装に着替える

今度から始まる番組、『爆熱少女 マジカル・キョーコ』の主演に抜擢された

この番組は、私の持つてる特技を活かした番組！

その特技っていうのは

『ボツ!』

指先から小さな炎を出す。

そう、私は生れつき炎や熱を出すことができるの。

何故そんなことが出来るかっていうと、実は私はフレイム星人っていう異星人と地球人とのハーフだから。

この事を知っていたプロデューサーがこの企画を通してくれて実現することになったわけ

ちなみにプロデューサーも宇宙人だったりする。

意外と宇宙人って地球にいるらしいよ? まっ公になってないから私の火を出す特技は手品で〜す! って言ってるけど。

っつとそう言ってる間に着替えて完了! 結構コノ衣装可愛いから気に入ってるんだよね?

よし

「どんな事件も燃やして解決! 爆熱少女 マジカル・キョーコ!」

『ボツ!』

さっきよりも大きめを火を出して決めセリフを練習

「火遊びすっとおねしょするぞ〜」

・・・えっ？ちよ・・・えっ？

「だっだれ！！」

気付いたら私と同じくらいの年の男の子が近くにいた、その男の子は驚いてる私に

「臨時スタッフん鬼島 政成です、まさかマサナリでよろしく！ちなみに現役ばりばりの高校一年な？」

へえ、私と同じ年なんだ

「って違う！なんでココに入ってきてるの！まさか・・・」

「当たり前！」

やっぱり・・・どうしよう・・・ストーカー

「荷物を置きに来たのだッ！！」

バーン！って効果音が聞こえるくらいに胸を張ってるけど・・・

「普通の上にココはスタッフさんの荷物置き場じゃないし！」

ストーカーじゃないのはホツとしたけどね？

それに落ち着いて見てみたら、そんなことをするタイプの人には見えないし？

「いやね、臨時だからよ？場所がないからテケトーな所に置いとけつわれてな？で何故かココが目についたんで、じゃココでいいや、

みたいなの？」

「そういえば臨時って言うってたね？今日は初日だから人数を増やしたのかな？」

「でさ、ユーいつまで手から火い出してんの？火傷すんぞ？もしくは、おねしょすんぞ？」

「いやいや、おねしょって……  
……  
……アッ！！」

「みつみみ見た？コレはアレだよ！手品！手品だから！」

慌てて、みんなにも言うてるような言い訳をする、急だったから少し吃っちゃたけど！

「なるほど！手品か……なるほど、なるほど……」

「そうそう！凄いでしょ？」

よし！なんとかなっ……

「って騙されるかい！種も仕掛けもなさすぎるわ！マサさんナメんなよ！そんなくらいわかるわい！」

ならなかった……どうしよう？マズイかも？

「でユーはアレか？メ〇メ〇の実でも食ったのか？ロ〇ア系か？」

「違うよ!!それ別のマンガじゃん!」

「だいたい、その実は別の人が食べてるし!

「うん知ってる言ってみただけ、まっ察するにユーも大宇宙からお越しか?」

「知ってるんだったら言わなくても……ってアレ? 『も』?」

「まさか……キミも?」

「いんやハズレ、俺あ地球出身、まっ別世界んだけどな?」

「別世界? どういうこと? と私がクビを捻っていたら

「まっそのまんまですわい、でユー名前は?」

「って名前を聞かれた、少しショック……結構テレビに出るようになったのに……」

「おゝい、落ち込むな〜頑張れ〜つつか名前〜」

「落ち込ました当人に応援された」

「……霧崎 恭子」

「少しだけ無愛想になっちゃったのは仕方がないよね?」

「おけ、恭子な？よろ〜・・・ってそっぴい見たことあるな〜と思  
ったら・・・アレじゃん！思い出した思い出した！」

おっ？おっ！！なんだ実は知っててくれたんだ！

「確か星のし・・・」

「違うから！別キャラだからッ！！」

凄く危ないことを言われるとこだった・・・

「えっ？違うの？だってホラ、手から火い出してっから、それって  
タ」

「私ね？フレイム星人と地球人のハーフなんだ〜」

コレ以上、言わせたらマズイと思ったから自ら白状した、我なが  
らナイスプレー！

男の子、確か鬼島君、マサって呼べって言ってたっけ？マサ君の  
方も

「いやぁ恭子君、ファインセーブ！俺も冷や冷やもんだったわ」

ホツと一息ついてる、自分でも危ないこと言ってる自覚あつた  
んだ？

・  
・  
・  
・



というような感じだった、それから、話してるうちに変わった人  
だけど面白い人だな？と思って友達になつてくれないかなあと思っ  
てただけど、マサ君の方はもう友達だと思つてくれていたみたい。

だから、アノ嬉しいって言葉は本心から出た言葉だったりする。

ちなみに私が高校生アイドルをしているって言った時

「おお〜そっぴやCMで見た気がする！！まっただけ可愛いけりや  
あアイドルでん通用すらあな」

って反応だった、正直ファンの人から結構可愛いって言われてた  
けど、あまりに素の顔で言われたから流石に照れた。

「どうした恭子？赤えぞ？発火すんのか？」

むっ？その時のことを思い出しとつ顔が赤くなつてたみたい。

にしても

「いくらなんでも四六時中は発火しないってば！！」

「うんだろっね？そんなだったらマジでてんやわんやだもんな？」

知ってたんだつたら言わないでほしいんだけどな？

「キョーコちゃん、そろそろスタンバイいいかな？」

あっ、撮影始まるんだ？

「は〜い！じゃ行かきゃ！」

「おう！頑張りたまえ！俺もぼちぼち仕事に戻らあ」

ニカツと笑いながら親指を立てるマサ君、そんなマサ君に私も

「うん！マサ君も頑張ってね！」

と笑いながら親指を立てて答え、スタンバイに入っただけでした。

マサ視点

再び仕事に励み中！サクサクサクサク熟します。

であっちゅう間に昼メシタ〜イム！

で何故か

『ジュージュー！！』

「はい上がり！」

鉄板焼きをしております

「おお美味え〜〜〜！！やるなあマサ坊！」

そついてもらえっと嬉しいやね？

「マサ君、大道具系のスタッフじゃなかったの？」

おっ？恭子？恭子も昼メシらしい

「なんか知らんがコツチも任された」

まっホント知ってます、どうやら用務んおっちゃんからの情報で料理が出来ると知られてたらしい。

「知らんって・・・まっいつか？えっと」

お好み焼き食べたいかな？」

「あいよ！任せれ！」

サクツと作って渡しました！

「おお〜美味しそう！ってマサ君は食べないの？」

「いやぁ腹減ったから食いてえんだけどさ？ほれ？後ろ」

「ン？うわっ！行列出来てるし！」

そうなんスよね？動くに動けん、まっ美味そうに食ってくれんなあ嬉しいんだけどな？

「つつわけで暫くは無理だわい」

「アハハ〜大変だね〜頑張れマサ君！！」

と応援の言葉を残し恭子さんは離れていった

で

「上がり！上がり！上がり！」

並んでいたスタッフ達を全員捌いて、ようやく昼メシへとありつ  
けます。

「さつてと〜」

「あっマサ君！こっちこっち！」

メシ食う場所を探してたら恭子に呼ばれ行ってみたら

「一緒に食べよ？」

とどつやら恭子、俺を待っていてくれたらしい。

「恭子さんは優しい子ですな〜マサさん嬉しくて泣けてくるわい」

「アツハツハ！大袈裟だよ！だって友達と食べた方が美味しいじゃ  
ん？」

まっ泣けてくるは大袈裟だけんど嬉しいんはマジです、それに、  
友達と食べた方が美味いって考え方も素晴らしい！まあ

「出来立てん方が美味しいやな？恭子もお好み焼きだべ？交換しよう  
ぜ？」

「えっ？悪いよ、私が勝手に待ってただけだ・・・」

『バツ！』

うむを言わず強奪して

「ムグムグ・・・悪いね既に食ってるわ諦めて、ソツチを食え！」

「強引！！でもありがとう！じゃ私も、いただきます！パクツ！  
うわっ美味し〜」

うむうむ、どうやら口にあったようだ、いやはや嬉しいねえ。

「そっいえばマサ君さ？彼女とかいるの？」

もっさもっさ食ってたら突然そんな話しを振られた

「生まれてこの方、できたことあねえな？」

「わっ！灰色〜」

灰色ってオマエ・・・

「ダチは結構多いぜ？男も女も含めてな？つか・・・アレ？むしろ  
女の子の方が多くね？アレ？」

うん、考えてみりゃあそつだな？まっだからって気にするこつち  
やねえけど。

「ふうん、もしかしたらその中にマサ君の好きな人がいたりして？」  
好きな人とな？ふむ

「そりゃあいるだろ？ほら目の前に？」

「・・・へっ？・・・ちよ・・・えっ？」

なんかフリーズした？

「アレ？聞き間違い？」

再起動

「いんや？俺あ恭子んこたあ好きだぞ？まっ会ったばっかだけだよ？」

「ツツツツ！！！！！！」

『ボウツ！！』

発火した、マジで文字通りに燃えとる！ってイカンがな！

「冷却スプレー」

何処からともなくアノ声で取り出して冷やしました、でなんとか発火はおさまりました

「えっと・・・あの・・・その・・・えと・・・嬉しいけど、まだ

会ったばかりだし、あつ嫌いじゃないよ！寧ろ好きな方に……  
って何言ってるの私！落ち着け～落ち着け～」

まあ何故か今だにテンパってるが、つてもしや

「ああ～恭子？」

「ひやつひゃい！～！」

ひゃいつてオマエ？まついいさね

「人間的な意味でだぞ？女の子として惚れてるかは別枠、つか今まで生きてきて後者は一人たりともいねえッス」

「へっ？えっ？なっなんだ～～きた……コホン！ビックリした  
」

いやスマンね？つか、ビックリの前の妙な咳はなんだ？いや触れ  
んと」。

「もう！マサ君そういうこと真顔で言っちゃうんだね？ビックリす  
るよ～！」

「俺にとつちやあ普通だしな？好きなもんは好きだし、逆に嫌いな  
奴には嫌いとか気にいらねえ！とか言っぞ？」

「ハッキリしてるな～？まあそつちの方が付き合いやすいけどね？」

でしようね？

「つとボチボチ時間じゃね？」

チラつと時間を確認したら、そんなくらいん時間になってたんで恭子にも確認をとつたら

「あつ！ホントだ！よしっお腹もいっぱいだし頑張ってくださいか！」

「頑張れ〜主役！」

「うん！とりやあああ」

と元気に走っていきました、うむ！元気が1番ですな？

じゃ俺も頑張りますかね！

「とりやあああ！」

恭子のマネをして俺も走って仕事場所までいきました。

恭子視点

「フウ〜」

凄くビックリした・・・あんなに正面から『好き』と言われたことはなかったし・・・そりゃあ、アイドルをしてるんだから少しはあるけど、でもそれはアイドルのキョーコとして言われてるだけだし

ただの霧崎 恭子として『好き』と言われたことはなかったから



な

まあそれは人間的な意味でってことらしいけどさ・・・

うん、嬉しさ半分、もやもや半分って感じだよ？けど・・・

「俺あ恭子のこたあ好きだぞ？」

『カアアア』

「うわあ〜うわあ〜」

ヤバイ・・・思い出しちゃったよ・・・あんな真顔で言うなんてさあズルイってホントに。

マサ君・・・顔は・・・目つきの悪い人、芸能界の人に比べればそりゃ美形って感じじゃない、けど結構、カッコイイ系の顔。

私的には好きなタイプの顔かな？

性格は、変わった人で面白い人、私がアイドルだってことを知ってても、普通に接してくれる、それも結構嬉しい。

それに私の秘密も知ってるし？

うん・・・

「むむむマズイな〜」

これはマズイよ・・・このままじゃ惚れちゃうかも？

いやいや・・・まだ会ったばかりだし？でも会ったばかりだけど、すぐに仲良くなれたな？

そういうところもポイント高い、更に料理も上手らしい、あの好み焼き美味しかったな？それに、ちよつと強引だったけど冷めてしまった私のやつと、交換してくれたし・・・結構優しい？

むむむ・・・ポイント高い！ポイント高いぞマサ君！！

そんな風にぼんやりと考えてたの時だった

「キョーコちゃん！危ない！！」

『グラッ・・・』

「えっ？」

ハツとして気付いてみたら、空を飛ぶシーンで使うクレーン車が倒れてきた

『ズオオオツ！！』

咄嗟に逃げようとしたけど足がすくんで動けない

「あっ・・・あ・・・」

自分に迫ってくる巨大な鉄のカタマリ・・・妙にゆっくり見えた・・・ああ私ここで終わっちゃうんだ・・・せつかく仕事も順調だったのになあ・・・

そんなことを思いギュツと目を閉じる

『ズオオオ・・・ガシヤアアア!!』

大きな音がした・・・やけにハッキリ聞こえるな？

「おい恭子君？大丈夫か？」

アレ？マサ君の声が聞こえる？恐る恐る目を開けてみると

「よつとー!!」

『ギギギツ・・・ドオン』

どうやら私生きてたらしい、ってマサ君？アレ今・・・クレーン車・・・片手で・・・

「まつ・・・マサ君？今・・・」

「ニカツ！盾にすんじゃないかったか？なあにマヌケ顔してんだか？」

マヌケ顔って・・・

「ヒドイと思う」

「歯に衣着せぬ漢ですから？まつ無事でよかったです？」

そう言っただけまたニカツと笑いポンと頭に手を置かれ撫でられた、マズいなあ・・・

「・・・ちやうじゃん」

「あっ？」

「ありがとう！いやぁマサ君！力持ちだね」

「まあよ！バグキャラだからね！」

「バグキャラか？ポイね」

とのんきに会話していたら、監督さんや、他のスタッフの人達も慌てて、コッチにきて私の無事を喜んでくれた。

マサ君に関しても結構大変だった、けど最後は

「まっ俺のバグっぷりなんざより恭子が無事の方が万倍大事だあな  
？」

とマサ君が言つと、みんな

「だな！」

「いいこと言うじゃねえかマサ坊！」

「カッコイイね」

そう言って、マサ君のことを追求するのは止めた。

ホントにマズイなあ

「火が・・・着いちゃったよ」

ポツリと誰にも聞こえないようにそう呟く。

私の中のある部分にひそかに火が着いた、着けた相手は・・・

「マサ君め・・・必ずマサ君にも火を着けてやるんだからッ!!」

『ボッ!』

マサ君に指を向けながら小さな火を着けたのだった。

・  
・  
・  
・

マサ視点

ハプニングがあったが、なんやかんやで今日のお仕事終了!

あのクレーン騒ぎのせいか、他のスタッフにエライ気にいられて、  
また時々でいいから手伝ってくれと頼まれた。

恭子にもしきりに

「ねっ! そうしなよ? 今日は平日だったけど、日曜日とか空いてる  
日でいいからさ! ねっ?」

と頼まれ、まっ暇な時ならなあと答えとききました。

その後

「あつ携帯番号教えてメアドも」

連絡先を交換、学んおっちゃんとか他のスタッフとかに生温い目で見られた

ダチの連絡先くらい普通に交換するだろ？とか考えてたら

「コ・・・コレは・・・手強い・・・」

なんか恭子が戦々恐々としとりました、何故に？

とそんなこんながありながらも、恭子始めスタッフさんらと別れ、帰宅中！スツタラスツタラと歩きます。

「おゝいオ〇エゝ 頑張れよゝ 俺がゝそばでゝっと」

イナズマな応援ソングを口ずさみながら歩っていたら

「ちょっと離して!!」

今日はイベントデーだなオイ!!

・  
・  
・  
・

レン視点

ハア~~~~まさかララちゃんがボクのことを忘れちゃってたなんて……

トポトポとそのことを思い出しながら歩くボク！

あつボクの名前はレン・エルシ・ジュエリア。

ララちゃんの幼なじみさ！

つまりは、ボクも宇宙人ってこと。

何故、地球に来たのかって？それは、ララちゃんと結婚するためさ！

ララちゃん……子供のころのボクは女の子みただってよく女の子の恰好をさせられたり、イタズラされたっけ？

フフ……けどあの頃のララちゃんの笑顔は忘れられないな？

凄く可愛かった、まるで天使みたいだね？それでボクはララちゃんに

「ねえ！いつかボクが男らしくなったら結婚してくれる？」

って言ったんだ、ララちゃんはそれに

「なったらね〜」

って答えてくれたっけ？

その言葉を胸にボクは男らしくなるうつつで頑張った！

昔に比べて男らしくなったださ！！

けど・・・ララちゃん・・・忘れてた・・・

「グスツ・・・」

ハッ！いけない、いけない！

「男らしさのカタマリであるボクが簡単に泣くわけにはいかないよ  
」！」

グイツと目元を擦って胸を張る！そうさボクは男らしさの・・・

『ムズムズ』

むっ？髪の毛が鼻に掠ったみたいだ？くしゃみが・・・

「はっ・・・はっ・・・ハックション！！」

『ボンッ！』

・  
・  
・  
・

ルン視点



「アレ？変わった？」

まさか、くしゃみ、したくらいで変わるなんて？

(ルン？なんで？)

(わかんないよ？多分、地球の環境じゃない？)

(そんな・・・)

頭の中？というより心の中でレンと会話する

『男女変換能力』

私達メモルゼ星人、特有の能力ちから、文字通り、男と女が心も身体も完全に性別が入れ替わるって能力。

本来ならくしゃみ程度じゃ入れ替わらないんだけどね？

(ルン！早く変われって！ほら、もう一回くしゃみすれば！)

(やだよ！あっそうだ！せっかくだし女の子用の服、買いに行こ！可愛い服あるかな～)

今の服、制服だっけ？レンのだけあってブカブカだしね？

(ルン~~~~~!!)

聞こえない聞こえないっつと！

『タツタツタ・・・ドンツ!』

「あたっ!ごめんなさい」

前をよく見ないで進んでたから、人とぶつかった。

本心は邪魔だな〜とか思ってたけど口にはしない。

「痛つて〜おっ?可愛いじゃん?」

「確かに!ねえねえ、遊ばない?」

「ぶつかったお詫びをかなてさ〜?」

ゲツ?もしかして、マズイ人達とぶつかったかも?見るからに悪そうな顔だし?

「えっと・・・急いでるし?ごめんなさい」

そう言っつて、その場から離れようとしたけど

『ガシッ!』

「そう言わずにさあ?付き合っつてよ?」

「肩痛いな〜?看護してくれよ?」

「俺もお願いしてえなあ?」

手を掴まれて逃げられない、うげえ〜気持ち悪い・・・もう最悪・

「ちょっと離して!!」

なんとか手を振りほどこうとするけど、結構強い力で掴まれてるみたいで振りほどけない。

(ルン!!)

レンが心配そうな声を出す、けど、その男達にはもちろん聞こえるわけもなく、無理矢理、私の手を引っ張っていかうとする

「じゃ行こう・・・アガガガ!!」

その時だった、急に私の手を引っ張る力が抜けたと思ったら、手を掴んでいた男が宙づりになる

驚きながらもシツカリと確認してみたら

『メキメキメキ』

「つたく、ベタすぎんぞオイ!肩がぶつかったア?看護オ?バカか  
デメエら?漢ならんなことくれえで一々ピーピー言ってるじゃねえ  
!ボケ共がッ!!」

ストライク!!ヤバイ!完全に私の好みにストライク!!

カッコイイ・・・鋭い目つきに、その雰囲気・・・それにピンチ

の時に現れるタイミングのよさ！

どれもこれも私の好みにド真ん中！！

思わずポクとなってしまう。

「なっなんだテメエ！邪魔すんじゃ」

「っせえ！！ツラ！！」

『ヒヨツ！ガツ！』

飛び掛かってくる、男に、そのカッコイイ人はクルッと回ってキックをする

「がっ！！」

『ドサツ』

そのキック一発で、飛び掛かっていった男はKOされた、ざまあみる！

「テメエよくも！！」

『チャキツ！！』

「あつ危ない！！」

もう一人の男が、カッコイイ人に向かってナイフを突き出す。

「つたく・・・最近の若者は直ぐに刃物を持ち出してからに・・・」

『パシッ』

「なっ！なに！」

カッコイイ人は慌てたようすもなく、そのナイフを指二本で受け止めて

「反省しろいッ！！」

『ガゴッ！！』

「ガハッ！！」

ゲンコツをしてまたまたやっつけた！

そして

『グイッ！』

今まで宙づりにしていた方の男に顔を近づけて

「ナンパをするなあ言わねえよ？けどよ・・・アレはちいとばかり違うだろ？漢だったら、だっせえマネはすんじゃねえ！おら！コイツら連れて散れ！」

『パッ！』

そう言っつて男を離すと、その男は

「っウワァァ」

情けない悲鳴を上げて逃げていった・・・カッコ悪い・・・

「っつてオイ・・・仲間置き去りかよ！！だぁ〜クソツッ！今度見かけたらゲンコしちやる！っと・・・大丈夫か？」

それに比べてコツチはカツコイイ！！よし！

「あつあのありがとうございます！助かりました、えと私、ルンっ  
て言います、できればお名前を」

自己紹介してなんとか名前を聞き出そうとする

「ン？俺か？鬼島 政成っつてんだ、マサかマサナリっつて呼んでやって  
くれや？でオマエさんはルンだな？おけ、覚えた」

よし！好感触！マサナリ君か・・・シツカリ心に刻んだよ。

「っつとイカンな？野次馬が集まっつてきてんじゃん、とりあえず、逃  
げんべえルン」

『バツ』

「わっわっ！」

やった！抱き上げられた！最っ高〜

「ニン！」

『シュバツ！』

うわっ！何、今の？一瞬で移動した？って

『ムズムズ』

あっあぁ~~~~マズイ！マズイ~~~~せっかく抱っこされてるの  
に~~~~

「はつくしょん！」

『ボンッ！』

・  
・  
・  
・

マサ視点

ルンを抱えてNINJAしたら、ルンが……

「誰？」

男になつとりました？いや不思議？はて？

「あっあの〜下ろしてくれないかな？」

ふむ……

「ほいな」

謎の男を地面に下ろす、はてはて？ハッ！まさか……

「忍法変わり身の術！お主……NINJAかつ！」

「NINJAが何かはわからないけど違うから」

でしょうね？なんせルンと同じ服のだし？だいたい、途中で変わり身とかされたら気付くちゅうねん、俺なら！

にしても、今更ながらコノ制服って彩南高のじゃん？

「ルンを助けてくれてありがとう、ボクからもお礼を言っよ」

おっとコチャコチャ考えてたら、頭を下げられた

って今……ルンつつたよな？あつ流石にわあつた！

「……伝説の修行場において、池に落ちた結果、男と女が入れ替わるという」

「実はボク見ての通り、男女変換能力という能力があるメモルゼ星人っていう宇宙人なんだ！」

ギリギリ防がれた、どうやら宇宙人だったらしい。

しかし今日の俺、危険な発言が多い気がする……ちょっと反省！っつと

「なるほどねえ？ん？そっついやオマエもルンでいいのか？」



「いやボクはレン！ルンとは別だよ、身体だけじゃなくて心も変わるんだよ」

ほうほう、なるほど！

「じゃレンな？あつ俺あ鬼島 政成な？マサかマサナリって呼んでやってくれ」

「知ってるよ、ルンの間も一応ボクにも意識はあるからね？」

いやいや

「けどレンもルンも別人だろ？だったら自己紹介すんのが筋ってもんだろ？」

「ハッ！そっそうだね、うん！それじゃマサと呼ばしてもらっていいかな？」

「おう！ヨロシクなレン！」

グツと握手！ダチが増えたぜ！っといカンイカン！

「晚メシン仕度が！じゃ俺あ行くわ！気いつけて帰れよ？ルンにもヨロシク言っといってくれ！またな？」

チラツと時計を見たらそこそこイイ時間だったんで帰宅することに

「ああ、今日はありがとう」

もう一度、お礼を告げるレンにヒラヒラと手を振りながら家路に急いぐのでした。

・  
・  
・  
・

レン視点

去っていくマサの背中を見て

「なんて男らしさ・・・よし！」

コレからの目標はアノ背中にしよう！そう心に決める。

そんなボクの決意の中

(レンのバカッ！！なんで連絡先とか聞かないの！会えなくなっちゃったらどうするのよ！)

ルンがうるさい・・・握手をした時も

(変われ〜変われ〜)

ってうるさかったしな・・・どうやらルン、マサに惚れてしまったらしい。

確かにアノ男らしさ！ルンを任せても大丈夫そうだ。

(ルン！マサとはまた会えるさ！最後にマサは『またな』って言う

たんだぞ？)

そうボクはマサが言ったその言葉を聞き逃さなかった。

(ン？ンフフゝそうかな？そうかな？ああゝまた会いたいなゝカツ  
コ良かったし？)

そうだな・・・アレくらいに男らしかったらボクもララちゃんに  
振り向いてもらえるかな？

ルンじゃないけど、ボクももう一度会って、友達になりたいと思  
った。

(マサナリ君ゝゝゝ)

ルンもそうみたいだしね？

第二十九話っぽい感じ！（後書き）

後書き

やっちゃったぜ！！

気付いたら新たなフラグを二本も！！

けど後には引けないんだぜ！！

まだまだガツスンガツスン立てていく可能性が高いでありますが・  
・また見てやってくれると嬉しいです。

感想などありましたら是非に！！

## 番外っばい感じ！その4（前書き）

前書き

性懲りもなく、またもや番外編！

たまにやりたくなります。

やはりうる覚えな上にいつもの如くセリフと擬音中心です。

そして、アレがソレですので気をつけておすすみ下さい。

## 番外っぽい感じ！その4

「もしもD・Cダ・カーボ世界だったら」

「ラララ〜」

『ヒューン・・・ズドン』

「えっえ？何？」

「もはや穴から落下が定番になってきたなオイ！」

「誰？なんで空から？」

「定番だからじゃね？つと俺が誰かとな？ふむ、大概始まりは落下からの漢、鬼島 政成です！マサかマサナリでよろしく！でユーは？」

「落下からって・・・ンン・・・えと私は、白河 ことりッス・・・えとなんで鬼島君は」

「ノンノン、ことり君、マサ、もしくはマサナリね？」

「え・・・あつ、わかったッス、それじゃマサ君で」

「うむうむ、ことりさんは素直さんですなあ〜」

「いや〜そんなこと、ないツスよ〜、って違う！なんでマサ君は空から?」

「うむ・・・まあ色々あるんですわい、生きてりゃあ空から落下することの10や20くらいあるんですよ?」

「それはないと思うんだけどな〜」

「俺はある!!」

「ン〜ン〜・・・嘘じゃないみたいだけど・・・なんでだろうハッキリと『読めない』・・・でもイヤな感じはしない・・・」

「おお〜い、ことりさんや、急に独り言はアレだぞ?なんかアレだぞ?知らない人に見られたら病院に連絡入れられちまうぞ?」

「アハハ・・・大丈夫ツスよ〜マサ君が病院の世話になってないんですから〜」

「それはアレかね?直訳すると、ゴートウーホスピタルと言いたいのかね?」

「冗談ツスよ!冗談!」

「むう、やりおるな、ことりさんや、ってそういやココどこ?俺は政成」

「知ってるツスよ〜、えとここは・・・初音島って所だけだ」

「初音島・・・聞いたことねえですか？」

「えっ！！結構有名だよ、一年中桜が咲いてる島だって！」

「ほう・・・でも知らん？・・・ふむ・・・コレは・・・またかよ！  
！まただよ！のパターンか？」

「はい？」

「ああ気にしなさんな！ちよつくら世界渡っただけだから」

「ああ〜なるほど・・・マサ君・・・悪いことは言わないツス・・・  
・ゴートウーホスピタル！」

「だから違えつつってんじゃない！アレじゃねえからマジで！」

落下、ことりさんと出会うでした、何故かはわかりませんが、ことりさんはマサの心が上手く読めないようです。

けどあまり警戒されてません、ある意味、警戒されていますが。

〜その2〜

「へえ〜マサ君は私と同じ年ツスか？」



「みたいね？ン？つうことあ、ことりつて学生か？」

「そうだよ？ほら、向こうに見える学校、あそこに通ってるツスよ」

「へえ〜デカイな？アノ学校？」

「そう言われたらそうかも知れないかな？マサ君も学生さんでしょ？」

「おう？何故にわかった！もしやエスパー？エスパーことり？」

「当たりツス！なんと私は人の心が読めちゃうんです！」

「ほう！初当たり、やったぜい！！」

「えっ・・・信じるの？」

「ン？まあ知り合いに色々いつからね？こつ見えて人生経験タンマリだからね？そういう奴もいんじゃない？くらいには」

「・・・嘘は・・・ついてない・・・」

「ついてねえつの！全く、ことりさんのうたぐり侍め！」

「うたぐり侍って・・・私、女の子ツスよ・・・もう！！」

「侍に男も女も関係ござらん！そこには生き様があるだけだ！」

「わけわかんないツスよ〜」

「魂で感じる！ユーならできる、頑張れ〜頑張れ〜」

「応援されてもな〜……………」  
「ねえ…………マサ君…………」

「おう、どつた？」

「アノ…………怖くないの？」

「何が？まんじゅっ？」

「もう違うよ！！えと…………私」

「ことりが？怖いかと？アホ？ことりさんって実はアホの子だったんですな」

「ちょ！アホの子って！！」

「あんなあ心から読めたらどうなんだっつの？だから怖い？アホか？つつかな俺あことり、んことはダチだと思ってる」

「え…………つつっ」

「で心が読めるくれえでダチにビビるほどヤワなやつちゃあ無えんですよ、マサさんはな？それに…………ことりは怖いっつか可愛い部類だろうに？」

「つつ…………あっありがと……………嘘じゃないのかわかるだけ強カッス」

「アン？最後なんつった？」

「アハハなんでもないよ？あつそれとマサ君が学生つて見破ったのは心を読んだわけじゃないよ？マサ君の心、上手く読めないんだよね？」

「へえなんでだろうな？つて待て！なら何故に俺が学生と見破った！！」

「マサ君、ガ克蘭ツスよ？」

「ハッ！ぬかったわ！」

「知ってたくせに？」

「おう、ばれてくら！」

かなり早い段階のネタバレでした。

「でマサ君はコレからどうするんですか？」

「ふむ……どうしようかねえ？ううむ……ちゅうちゅうタコがない……ちゅうちゅうタコかいな……今回は20人か？ま  
すまず」

「また古風な数の数え方ツスねえ！それに20つて大金だよ？」

「ネタ的な数え方をしたかっただけでござるよ、あっコレ、コツチでも使えっか？」

「えっうん、大丈夫だよ？なんでわざわざ聞くの？」

「だから言ったべさ、世界渡ったって！つまり俺、異世界人！おけ？」

「仕方ないよね・・・」

『ピ・ポ』

「またんかい！携帯から手を離せや！」

「えっ？でも」

「でもも、しかもねえです、つうか、ことりさんもドップリ肩までファンタジーに浸かっとなるじゃろ、エスパー的な意味で！！」

「ハッ！そういえばそうツス！驚愕の事実」

「嘘つけ、半分くれえネタのくせに」

「アハハハバレたか？」

「フツ・・・マサさんナメてもらっちゃ困りますよ？」

「マサ君、悔りがたし・・・って何の話してっけ？」

「俺の今後？まあしゃあねえからダンボールハウスでも建設すつか

ね？いや待て・・・ログハウスでもいいか？」

「やめといた方がいいツスよ？」

「むづ、じゃあどうしろと？自慢じゃねえが戸籍も無けりゃあアテも・・・アツ！いた！」

「えっ？・・・ってまさか・・・私ツスか!？」

「うんユー！どうにかならんじやるか、ことりさんや？」

「えと私、女の子？マサ君、男の子、わかる？」

「うむ、寧ろ俺は漢字の漢と書いて『漢』だが」

「それは別にどうでもいいツスよ、っと・・・男の人が女の子の家に転がり込むのってどうかなあ」と

「ん？家賃は払うが？」

「そういう意味じゃなくて・・・ホラ・・・何て言うか・・・」

「ん・・・ああ！なるほど！ボタンがポトリ的な意味か？ないない  
「！」

「うわぁ・・・そこまで素の表情で言われると凹むツスよ・・・」

「凹まれてもなあ？いやね、ことりは確かに可愛いぞ？それに少ししか話してねえけどいいやつだし、好きか嫌いかでいったら即効で好きと答える」

「うわぁ告白された!!」

「またんかい！話しは最後まで聞きなさい、ええとな、俺ん中では『好き』と『惚れてる』ってのは別もんなわけよ？」

ことり、んことは好きだけど女の子として惚れてるかと聞かれりゃあくびを捻らざるえねえ、でだ、更に、マサさん的には惚れてもないのに、んなことをするんはNGなんさ？おけ？」

「う・・・うん・・・そっか・・・マサ君って意外とそう所って堅いんだ？」

「意外とな？ちなみに理性もガツチガチ！例え、ことりがスツパで横切ったとしてもノーリアクションだと思うぞ？もしくは、風邪引くぞ？くらいは言うかもしらんが」

「ホントかなあ・・・むむ・・・ホントみたいツス・・・それはそれでシヨックだよ・・・」

「でシヨックを受けとる、ことりさんや、何故にシヨックを受けとるかは知らんがどうにかなりまへんか？」

「おっ・・・お姉ちゃんに聞いてみないとわからないかな？」

「お姉ちゃんとな？ことり、姉貴いるんか？よしや！じゃ早速聞きに行くべえ」

「えっ、うっうん」

なんやかんやで、「とりさん家に向かうことになったようです。

『スツタラスツタラ』

『バキッ!』

「キヤアアア!」

『ドサッ』

「フィー、セーフ!」

「はわわ・・・落ちる落ちる!」

「落ちた後だぞ? つうかいつまで落下し続けてんの?」

「ハイ? アレ? ハッ・・・美春、助かったんですか、よかったです!」

「うむ、よかったよかった、つうか俺の存在ガン無視かコラ? このままパワーボムに繋げんぞ?」

「はわわ! それはイヤですよ! つて、アナタ様はどちらさまでしょうか? つて美春、抱っこされてます! まさか拉致? 拉致なんですね!」

「よし、パワーボム ジャイアントスイングに繋げる!」

「アハハ! 冗談ですよ! えっと、もう下ろしてもらっても大丈夫ですよ!」

「むっ、わあつた、ホレ」

「よっと!?!」

『スタツ』

「マサ君」

『タツタタタ……』

「ハアハアハア……マサ君……急に『ニン』とか言つて消えたと思つたらナンパツスカ……」

「眼科に行け!なんでナンパやねん!レスキューしとつただけじゃない!」

「えっナンパだつたんですか」

「よし、パワーボム ジャイアントスイング キン〇ク・バスターのコンボを味わわせてやるっ!」

「冗談、冗談ですよ〜アハハ〜つてアレ?白河先輩?」

「ん?えつと……天枷さん?」

「おう?知り合い?つうかまだ自己紹介してねかつたな、俺あ鬼島政成、呼ぶ時はマサかマサナリでヨロシク!」

「ンッン!白河 ことり」



「知つとるがな！」

「むうつれないなあ」

「えつとお・・・美春もしかしてお邪魔虫ですか？」

「言ってる意味がわからん？つつか名前！もうわあってるけど、  
— 応！ホレ！」

「えつあつ！えと、天枷 美春です」

「ハイ！おけ、美春ね！つてン？」

「・・・ちよつとくらい照れたりとかの反応があってもいいと思っ  
ただけどな・・・」

「何をぶつくさ言ってるんだ、ことりさんは？」

『ササッ』

「もしかして、マサナリさんって凄く鈍いんじゃないですか？」

「そうかも・・・」

「おい、コラ！マサさん残して内緒話しか？ガールズトーク突入か  
！マサさん淋しいと暴れるだすんだぞ？」

「迷惑な習性ツスね」

「まったくです！」

「まあそらあ半分くれえは冗談だけど……ちなみに急に消えた理由はなんか前方に木から落下しそうな奴がいてな？それをレスキューするためだ、で落下しそうだったやつが美春だったってこつたってそついや美春君や、何故に木の上から落下したんだ？」

「えっ？アアアア！そうだった！ネコさんが！」

「ハツ？猫？……アツ！アレか？」

「はい！下りられなくなってたから助けようと思って」

「逆に俺にレスキューされたと？」

「はい……シヨボン……」

「マサ君、ハツキリ言い過ぎだよ、でも猫……まだ下りられないみたい」

「マサナリさん！何とかネ……へっ？」

「あらよつと！」

『グツ！ダン！ヒョイ、スタツ』

「ふいゝ要救助猫、確保ってか？ってなんかいいかけてなかったか美春？」

「白河先輩……私の見間違いですかね？今明らかに、軽く5メー

トル以上は跳んだような気が・・・」

「見間違いじゃないかも・・・私もそう見えた」

「おゝい無視か？・・・まあいいさねつと猫君や次回からは気いつけて高い所に行くようになさい」

「ニヤ〜！」

「ん？なあに気にするねい、車に気いつけて帰えんだぞ？」

「ニヤ〜！」

「おう！またな？」

「白河先輩・・・見間違いでしょうか？今マサナリさんネコさんと話してませんでした？」

「見間違いじゃないと思う、私もそう見えた。」

いくらファンタジーの住人とはいえ、そら驚きます。

でそれから。

「マサナリさんって何者なんですか？」

「アン？俺？鬼島 政成だっつってんじゃない？まっ強いていやあバ

「グキヤラだ！」

「バグッて・・・けど・・・」

「もの凄く納得です。」

「だろ？つと、ことりい、ほちほち行こうやあ」

「えっあっ！うん！」

「ん~~~~デートですか？」

「眼科に行け」

「「ヒドイ!!」「」

「なんでダブル？ただ、ことりん家に居候になろうと思ってるだけだぞ？」

「それはそれで問題のような？」

「むっ？大丈夫大丈夫、美春君や？牡丹がほとりの意味だろ？ないない、ホントない！半導体のシリコン純度くらいない」

「99・999・・・パーセント!!って、あつ白河先輩」

「・・・うん・・・安心だよ・・・でもさ・・・それはそれでさ・・・うん・・・フフ・・・私だってさ・・・女の子なんだよ・・・うん・・・なんだかとてもチクショーだよ」

「あ……アハハ……」

とつてもチクショーな気分になってしまった、ことりさんでした。  
とりあえず、ダ・カーポ編はここまででした。

・  
・  
・  
・

くもしもFF7世界だったら

その1

「大丈夫？」

「……問題ない」

『ヒューン』

「あつ危ない！」

「ン？チツ！」

「当たると見せ掛けて方向転換！」

『ダンッ！クルクルクル！』

「着地！」

『スタツ！』

「はいその女の子！何点？」

「10点！」

「オツシヤアア！つといつまでほつけてんのツンツンヘアー君？」

「ツンツンヘアーじゃない・・・」

「いやツンツンヘアーだから、もう完全に重力に喧嘩売ってるからね！なあ？」

「うん、売ってるね？」

「フウ」

「ふむ、クールなやつちゃ？つと俺あ鬼島 政成ってたんだ！呼ぶときゃあマサかマサナリでヨロシク！」

「わかったマサだね？えつと、私はエアリス、でツンツン君は？」

「・・・クラウド」

マサ、クラウド&エアリスに会つてました。ちなみにマサ毎度の「とながら落下です！」

更に毎度のことながらガクランに知識は薄いです！

やはり、あゝいたね？くらいのレベルです。

・  
・  
・  
・

その2

「ほう、エアリス君は花屋をしとるんですなあ？」

「正確には花売りだけどね？」

「でクラウドは？」

「元・ソルジャーだ」

「なるほど、武闘家に転職してゆくゆくはバトルマス」

「言わせるかッ！」

『ヒュオッ！』

『ガキン！』

「クラウド君、ツツコミにしては厳しすぎじゃね？そんなデカイ剣で斬られたら普通の人は大変なことになるよ？」

「チッ・・・」

「あはやだ、コノ子ったら舌打ちなんて、エアリスさん、もう私ど  
うしたらいいか・・・」

「教育は全てオマエに任せたはずだ・・・って違っつてば！えっ？  
今素手で防いだよね？」

「ハッ！そういえば！キサマ何者だ！」

「バグキャラですから！カッチカチャぞ！」

ワンテンポ遅いクラウドさんでした。

・  
・  
・  
・

その3

「おまつ！マジありえねえ・・・なんで銃？そこはドリルだろ！漢  
ならドリルだろ！」

「文句言っんじゃねえよ！！！」

「言っわ！ちよつと待ってるオオオオ！」

『カチャカチャカチャ！』

「よし完成！」



『ギューイーンッ!』

「勝手に改造すんじゃないやねエエエ!」

マサ、バレットの銃の方の手をドリルに改造！  
実はバレットにとっての最強武器！

・  
・  
・  
・

その4

「ほひほひほひ!」

『パカッ!』

「なっ!チイ!」

「えっ?うそ!」

「落とし穴!」

『ヒューン』

「ほいキャッチ!キャッチ!キャッチっ!」

「マサナリか?」

「そつそ！なんかテキトーに歩いてたら何故かココに？」

「ここ地下下水道だよ？」

「ティファ？マサだよ？ありえるありえる」

「ああ〜そうね？ありえるわね」

「理解されてるなマサナリ？」

「羨ましいかね？」

「フウ〜〜〜」

コルネオ屋敷から落下、ちなみにマサは女装はとんでもないことになるので別行動でした。

・  
・  
・  
・

その5

「へっへ〜ん！バイバイ〜イ！」

『シュバツ！』

「逃がさんで〜じわるニン〜！」

『シュバツ!』

「ゲツ! アンタも忍?」

「違うNINJAだ!」

「バツタもん! ああもう! はなせせ」

「いやです! さてお仕置きタ〜イム!」

「えっ? うそ? その態勢って・・・」

「悪い子にとっての定番! お尻ペンペンです!」

「イヤ~~~~~許して~~~~~もうしないしないから~~~~~」

ユフィ危うくお尻ペンペンの餌食に!  
実際はしてません。

・  
・  
・  
・  
終わります。

番外っばい感じ！その4（後書き）

後書き

悪ふざけの産物でした。

けど頑張りました！

次回！次回は本編の予定ですので、そちらも是非にヨロシクお願い  
いたします。

第三十話っぽい感じ！（前書き）

前書き

とじとじ三十話です。

ではいつものように薬的な物をまっけてぶっぞー！

### 第三十話つばい感じ！

「転入生とな？」

どうやら俺が学校をサボ・・・ゲフンゲフン休んで仕事をしていた昨日、転入生が来たらしい。

「どんなやつ？面白えやつか？」

「キザったらしいやつだ！」

「アン？リト？」

「なあリト、どうしたんよ？」

「実はカクカクシカジカ」

ほうほう、どうやら転入生、コレまた大宇宙からお越しらしい、でリトと犬猿らしい。

どうやら転入生、またもララの婚約者候補なんだと？ちなみに幼なじみらしい。

でララがリトん家に住んでるもんだから、何かとリトに突っ掛かってくるらしい。

まあララは

「リトとレンちゃん仲良しだよ？」

とか言っ तरीますけどねえ……ってん？レン？おる？レン？

「こらまた偶然だあな？」

「何がだよマサ？」

「いやさ、まっ学校に着いたらわかりますわい」

とりあえずはそう言っ て学校へ

で

「ララちゃん！今日もキミは……えっ？」

「よっ！おはようさん、レンー！」

教室に入って、即効でレンと遭遇！でアイサツ。

「マサ？」

おやま、ビックリ顔でほうけてからに。

「マサ！オマエ、コイツと知り合いなのかよ！」

おっとリト君がレンを指差しながら聞いてきた。

「まあよ？昨日偶然会ってな？ダチになった、なあレン？」

リトの質問に答えつつレンにも話しを振ってみる。

「えっ友達？友達になってくれるのかい！」

あらま？レン君や？

「何をいまさらですわい、俺ん中では既に昨日からダチのつもりでござえますよ？」

「そっ・・・そうか・・・そうだったんだ？」

そうだったんです！

「あっレンちゃん！あのね、コノ人が私の未来のお婿さんだよ！エ  
へへへ」

「今のそんな予定は刻まれておりません！」

全くララめ

「えっ・・・マサ・・・が？」

「だから言っただろ！ララが好きな奴は俺じゃないって！」

「だっ騙されないぞ！結城！そう言ってボクにララちゃんをあきらめさせるつもりだろ！」

ふむ・・・



「コレどういう状況？」

「リトとレンちゃんは仲良しなんだよ！」

なるほど！

「仲良きことは美しきかなってか？」

「「よくない！！」」

いやさ、バッチリのコンビネーションですがな？

とそんなこんながありながらも一時限目開始です。

であっちゅう間に終了。

「ねえレン君、コレ教えて！」

「あっ私も私も！」

ふむ・・・

「レン、人気者だねえ？」

授業が終わると同時に、レンの回りに人だかりができとります。

「マサ君もある意味、似たような者でしょ？」

唯さんや、その、ある意味ってなあアレかね？遠回しに

「珍獣と言いたいのかね？」

「そうじゃないわよ・・・強く否定はしないけど」

むむ、そこはハッキリ否定してくれても罰は当たらんと思っわけ  
でござえますが？

っっておよ？

「マサ、昨日はありがとう、改めてお礼を言っよ」

いつの間にやらレンが近付いてきて昨日の礼を言ってきた。

「気にすんねい、んな畏まられても困らあ」

律儀な奴だな？昨日もお礼言ったがな？

「そうかい？でもキッチンとお礼を言いたかったのさ？」

ふん？ホントに律儀な奴

「そっぴやあレンってララの幼なじみだったか？」

「そっだよ？泣き虫レンちゃん！昔のあだ名」

何故がララが答えた。

「泣き虫・・・」

レンが落ち込んだ・・・ふむ・・・ポンとレンの肩に手を置き。

「なあに、気にすんな、泣くことくれえ誰んだってあらあな？」

慰めてみた。

「そっそっかい？」

パツと明るい表情に戻りました、浮き沈みの激しいやつちゃ？

「マサもだよな？この前フラン〇ースの犬見てボロボロ泣いてたし？ララもだったけど。」

ってリト！？

「なんで言っちゃうの！-」

「アノお話し、悲しかったから」

確かに・・・すんげえ悲しいツス・・・クソウ・・・思い出したら凹んできた・・・

「意外と涙脆いのねマサ君って？」

「ああ・・・結構な？確か他にも・・・」

ハッ！イカン！リトめここぞとばかりに余計なことを喋る気だな！

『ヒュル!』

「よ・け・い・な事は喋るな?」

『ギチギチギチ!』

コブラツイストです。

「アダダダ~~~~~わかった!悪かった俺が悪かった!ギブギブウ!」

フ・・・それならよし!

『バツ!』

開放。

「ちくしょー、ちょっと何時もの仕返しをしようとしただけなのにひどい目にあつた・・・」

どうやらマジで仕返しだったらしい、コレからはちょっとは手加減しよう・・・

「思いませんでした!ガンガンいくぜ!」

「しよつよ!たまには!」

うむつむ、流石はリト!

「ゆ・・・結城とマサ・・・って仲が良さそうだねララちゃん」

「うん、ちょっと嫉妬しちゃうくらい、マサ、リトの事、いっつも親友だ〜っていつてるよ?」

まあぶつちやけいつもじゃねえけど、親友ですから。

「そ・・・そうなんだ『キツ!』 結城!まさかララちゃんだけじゃなくマサまで!」

ん?アレ?えっ何?

「はっ?意味がわかんないから!だいたいなんでテメーはそんなに俺に突っ掛かってくるんだよ!」

「うるさい!結城!今にみてるッ!」

ふむ・・・

「コレ?どういう状況?」

さっきと同じようにララに聞いてみる。

「仲良しなんだよ!」

ああなるほど!

「「良くない!」!」

息バツチリなリトとレンでした。

新たな定番が生まれた瞬間だな、やったぜ！

「マサマサを巡って結城とレンレンが！」

「骨肉の争い？」

いやいや待て待て、里沙&未央？

「意味がサツパリわからん？」

「わからなくていいわよ・・・ハレンチだわ・・・」

わからなくていいらしい、つうか何故にハレンチ？唯さんや？

「フツ・・・とにかく結城！キミには負け・・・ふえ・・・まっま  
ず・・・」

おっ？

「ハックション！」

『ボンッ！』

あっ・・・ルン？こんな感じで変わるんだな？

「あっ！マサナリくん！」

むっ？なんかルンが飛び付いてきた？よし！

「リトガード！」

「やっぱりかよー！」

仕方ないやん、定番なんですから？

「フフ〜ん〜・・・アレ？マサナリ君じゃない？」

はい、そうですよ、そいつぁリト君ですよ、ルン君や？

「ララさんの幼なじみって聞いてたから薄々は思ってたけど・・・」

「レン&ルンも大宇宙からお越したと？つかリアクション薄くね？」

「マサ君のお陰で耐性ができてるからかしらね？」

ふむ、なるほど

「いやはや」

「褒めてないわよ？」

残念、褒められてなかった。

「あつルンちゃん！」

「ララちゃん？」

あつララはルンの方も知ってたんだな？まつ幼なじみだから、そら知ってるわな？

にしても・・・

「思ったよかクラスメイツもリアクション薄くね？」

「マサマサよりは全然普通だし？」

「そうそう、いまさらレンレンが女の子に変わったくらいじゃね？」  
「？」

「アハハ〜そうかも？」

「すんげえ複雑なんすけど？」

「まっまあ確かにマサよりは・・・ってマサ！なんでいつつも俺を盾にすんだよ！」

「何となく？」

もう何となくとしか言えねえッス。

「じゃじゃあ今度は俺を盾に！」

むっ？エテ山か・・・

「ブブブー、マサナリはエテ山を装備しなくなかった！」

「ひどっ！全部オマエの判断だろ！そこを何とか！」

チツ・・・エテ山しつげえ・・・しゃあねえ！



「ブブブー！ウマのフンは装備品じゃない」

「ひど過ぎる！ー！」

だってイヤなんですもん！

「ププ・・・猿山、ウマのフンって・・・ププー」

「笑っちゃ悪いって、似たようなものだとしても？」

里沙中々の反応！未央君、ナイスな毒舌でした。

となんやかんやで意外とアツサリ、レン&ルンの存在が受け入れられました。

でそれから

「マサナリ君、マサナリ君？あのララちゃんの婚約者ってホントなの？」

なんかいきなりルンにそう言われた。

「いんや全然？」

キツパリ即答！

「うう・・・マサ・・・手強いよ・・・でも頑張る！」

なんかララが落ち込んだけど直ぐに頑張る宣言、つか何を？

「そっか・・・よしッ！」

そして何故かルンがグツと拳を握ってやる気のリアクション。  
意味わからん？

「おやおや・・・未央さん？これはこれは・・・」

「面白い展開かも？」

里沙&未央よ？何が？

「・・・私は別に・・・興味は・・・うう・・・」

唯まで、なんかおかしくね？

「マサ・・・オマエ・・・ホントすげえよ？」

リト？何が？クツソウ・・・なんだこの空気？ええい！負けるか！

「そあーい！..」

『ゴリキー！』

「ぐえっ・・・なっ・・・なんで・・・ガクリ」

何となくエテ山のクビ筋あたりを、そあーいした！

「すまねえ・・・あの空気なんか耐えられなかった、オマエの墓にはミ〇ミ〇供えてやるからな？」

キラッとナイススマイルでサムズった！空にはピッと敬礼しているエテ山が見えた気が・・・

『ガバツ！』

「生きてるから！俺まだ死んでないから！」

チツ・・・しぶてえ・・・

『キーンコーンカーンコーン！』

おっ？休み時間終了？

さてと

「次あなんだつたかねえ？」

いつもの如く唯に確認

「次は・・・」

『ガラツ』

おっと唯が言う前に先生さんご到着。

「鬼島君？仕事ですよ？」

おっ？

「どっちんスか？」

「用務の方です」

「あいあい！了解〜〜〜じゃ皆さんは授業頑張ってます〜」

『ガラッ』

とそう言い残して、いつもの如く用務の仕事へと向かいます。

で

『ガラッ！』

「ヤミっ子、仕事だぜい！ってあら？」

例によってヤミっ子を連れてこうと保健室にいったら、保健さん  
だけでした

「保健さんヤミっ子は？図書館？」

「ええヤミさんは図書館にいるわよ？本を借りに行ってるわ？」

ふむ、やはりかヤミっ子、結構、読書家だもんな？

まっ邪魔しちや可哀相か？

「あ〜〜俺が来たこたあ内緒で！」

「フフ・・・ええ黙っててあげるわ？」

うむうむ、流石は保健さん！

と今回は、ヤミっ子抜きで用務ん仕事をすることに。

おっちゃんも、ヤミっ子がいないことにはツッコまなかったぞ？

そういうところが実に渋いッス！  
でサクッと作業は終了！

『ガラッ！』

「マサナリ？仕事ですか？」

「うんにゃただのサボリ」

「不真面目ですね？」

「フフ・・・そうね？あつガ克蘭君？コーヒー、ヨロシク？」

とテケトーに用務の事はぼかしつつ、コーヒータイム！

「そういえば昨日、ガ克蘭君のクラスに転入生が入ってきたでし  
よ？」

「レンとルンの事ッスか？」

「あら？知ってたのね？」

おやま？その言い方、やはり保健さんも知ってたようで？

「昨日、仕事ん帰りにたまたま会って、そんな時に」

「そう言えばガクラン君、昨日は休みだったものね？どつりで昨日は静かだったわけだわ？」

「そうですねお陰で読書に集中できました・・・」

むう・・・なんだヤミっ子、その言い方はアレだなオイ！クソウ・

・・・

「フフ・・・淋しそうにしてたくせに？」

おや？

「なっ！ド・・・ドクター・ミカド！なっ何を！」

おっ？ヤミっ子盛大に照れとる？

「まっまママサナリ、かつ勘違いしないで下さい！私はただ、えつと・・・そう、このコーヒーが飲めなくて残念だと思っただけです！くれぐれも！勘違いしないように！」

珍しいなオイ？こんな慌てるヤミっ子は？まあ可愛いけど

「ツ~~~~」

そして撫でてるけど、すんげえ赤かったツス。

しかしアレだなヤミっ子の場合はアレだな？普通は慣れてくるん

だが、なんか逆だな？とか脳内コチャコチャしてたら。

「フフ・・・ヤミさんも、わかってきたってことじゃないかしら？  
それはそうと・・・」

と保健さんに言われた、わかってきた？はて何が？とか思いつつも、保健さんも撫でました。

遙かなる高み、撫で王の道はまだまだ遠いぜ！

とコチャコチャありながらも。

『キンコーンカンコーン』

二限目終了！ってそっぴや今日は珍しく軽食は作らなかったな？

とか思いながらも

「じゃまた遊びにきや〜す！」

「たまには体調崩していらっしやい？看病してあげるわよ？」

「う〜ん・・・まあ悪くなったらヨロシクたのんますわ！相当なこ  
とがねえ限りは崩さんけど」

なんせバグボデーですからね？

「た・・・体調不良で・・・決着がつくのは不本意ですの・・・  
わ・・・私も・・・かか・・・看病くらいは・・・してあげてもい  
いです」

「おやま？ヤミっ子まで？嬉しいねえ？」

「サンキューな？そんときゃたのまあ〜じゃまた昼に〜」

「ニカツとナイススマイルをしながら保健室を後にしました。  
で教室に帰りつき。」

「マサナリくん」

「リトガード！」

「ルンが飛び付いてきたんでリトガード！つか何故に飛び付く？」

「マサーー！」

「ゲッ？ララも対抗してきやがった？ふむ・・・」

「リト&ルンガード！」

「新技だ！つつても、ただリトに抱き着いてるルンも一緒に差し出したけど。」

「「むう〜〜なんで？」」

「仲良く頬を膨らます、ララとルン、もちろん。」

「何となくだ！」

「つつといた、でララとルンに挟まれたリト君にやっぱり文句を言



われ。

続いて唯に

「また保健室でサボってたわね？マサ君！！」

と怒られた。

「途中で授業を中断させてはいけない俺の気遣いだ！」

グツと胸をはりそう主張！たまにはそういつこともあります。

「いらぬ気遣いよ！」

でも、やっぱりダメだった残念！がしかし

「コーヒー入れてた」

つつたら

「始めからそう言いなさいよ？」

アツサリ許されず、もはや用務　バリスタの流れは唯、公認らしい。

そんな感じでコチャコチャしてたら、皆さん教室移動を始めてます。

「マサ、あのね？次は調理実習だって！頑張って美味しいの作るからね！」

ほう！どうやら俺の得意分野だな？にしても、ララ・・・ちと不安？

「マサナリ君、楽しみにしててね？」

ほう、ルンもなんか頑張るっぽい！よし！

「ならば俺も気合いを入れて至高の料理を作ってやるわ！」

料理人魂に火が着いたぜ！

「何々？料理対決？」

「面白いそうじゃん？」

フ・・・なんかイベントっぽくなってきたな？

「第一回！チキチキ！ーA料理の鉄人大会〜」

『パ〜パン パ〜パツ パ〜パン パツパパ〜』

「「「おお〜〜〜！！」「」」

うむうむ、ノリのいいクラスメイツだ！あつちなみにBGMはもちろん、アレだぞ？ちと古いが分かる人には分かるはず！

「マサ君・・・また大事にして・・・」

まあ唯さんは頭抱えてましたけど。

でなんやかんやで調理室へと向かい。

「本日のテーマは~~~~お菓子!!和・洋・中、種類は問いません!各自自分の持てる限りの力を発揮して下さい!」

家庭先生がお題をだしての調理開始!いやぁノリがいいッス。

ちなみに

「解説の御門 先生、いかがでしょう?」

「他の人はわからないけど、ガクラン君はかなり腕前をもってるわ、どんなお菓子が出てくるか楽しみね?」

解説に保健さん。

「そうですか・・・ではゲストのヤミさん」

「タイヤキがいいです」

ゲスト、ヤミっ子です。

ちなみに、司会は里沙&未央の二人、家庭先生は開会を告げる支配人のポジションらしい。

つとイカンイカン!はよ作らな?

制限時間があるしな?流石の家庭先生もこのイベントだけで授業を全部使う気はねえらしいです。

で早速調理開始

・  
・  
・  
・

はい終了！

いや違うから上手く描写が浮かばなかったとかそんなんじゃないから？信じれ！

とかメタなことは置いておきた、とりあえずは完成！

「できた〜！」

「私も！」

ララとルンの二人もできたらしいな？

「では、早速審査の方を！まずは……ルンさん！」

「はい！」

『コトツ』

ふむ……ルンのは……パフエです！

「じゃいただくわ」

「いただきます」

保健さんとヤミっ子の二人がルンのパフェを試食。

「マサナリ君も食べてね？」

おっ？どつちやら俺も食っていいらしい、では・・・一口！

「パクツ・・・むっ・・・普通に美味えッス！」

「やったー！」

中々やるやんルン？

「そうね・・・けど・・・少し物足りないないかしら？」

「そうですね、コレはコレで美味しいですが・・・」

おっ？

「おっと辛口の評価！」

「いつもマサマサのお菓子を食べてるだけに舌が肥えてるようです

」

むっ？なんかそれ俺が悪いみたいやん？

「むっ・・・いいもん、マサナリ君に美味しいって言ってもらった  
し」

おやま、ルンさん、器が広いねえ？

で、ルンのパフェが終わり、続いてララ！

「うん、はい！コレ！」

『ドンッ！』

ふむ・・・ララのは・・・

『ポコポコポコ・・・』

紫色した何か・・・なんかポコポコ泡立ってるし・・・

「こっコレは・・・果たして食べられるのでしょうか？っていうか、ララちい料理したことある？」

「ううん初めて！頑張ったよ！」

うむ、ナイススマイル！でもなあ

「こ・・・コレは危険な香です・・・あの試食のほつを・・・」

里沙さんもかなり不安を感じてらっしゃるようで、吃りつつも保健さんにヤミっ子に試食を振る、がしかし。

「ガ克蘭君？お願い」

「マサナリ？出番です。」

あっ俺？やっぱ俺？

「マサ！頑張ったんだよ！すっごく！食べて食べて？」

ふむ……

「マサ君……やめた方が……」

唯に止められたが、しかし！

「じゃいただきます！」

紫色のそれに手を伸ばした……

「むぐむぐ……」

「どう美味しい？美味しい？」

ふむ……

「スマン、ハッキリ言って美味くはねえ？寧ろ味はやバイ部類だな  
！」

「えっ……そっそうなんだ……ごっごめんねマサ……うっ、  
あの残していいよ……ごめんマサ……」

ふむ……

『ガツガツガツガツ！』

一気に全部食べ切った！

「えっマサ？」

「嘘？アレ全部食べ切った？」

「マサ君！！だ・・・大丈夫なの？」

「フッ・・・こんくらいで根を上げるようなやわな胃袋ではねえわ！」

「と」

「まっ味はヤベエが頑張った気持ちは嬉しい！次はレシピを見ながら作りなさい」

「ポンとララの頭に手をのせて、そう言ってやる」

「えっ・・・また食べてくれるの？」

「おう！俺だつて始めっから美味えのが作れたわけじゃねえ、コッ  
コッ頑張りなさい！」

「うっうん！エへへ」

「うむうむ、ナイススマイル！」

「むっ・・・ララちゃん羨ましい・・・でも・・・マサナリ君・・・  
やっぱりカッコイイ」

「ん？ルンも撫でてほしいのか？」

「ほれ」



「わっ！やった！」

うむうむ、コチラもナイススマイル！

「マサマサ・・・恐ろしい子！」

「うん・・・ありゃ落ちるよ」

はっ？何が？

「アノ顔、気付いてないわよね？それにしてもガ克蘭君？お腹大丈夫？」

「余裕！」

「そっ・・・アレを食べて余裕ね・・・解剖したいわね」

「ダメ解剖！」

と保健さんのやり取りがありつつ

「さあてゝ続いて！真打ち登場！マサマサだ〜！」

はい俺の番と〜！

「ほい〜！」

『...』

俺のは少し薄めのホットケーキの上にミ〇ミ〇味のシャーベット、更にミニタイヤキを挿しました、まあシャーベット以外は作りなれたもんですが、中々のデキだと思えます。

「じゃいただくわ・・・パクツ・・・うん、美味しい!」

「ええ、マサナリ美味しいです」

フツ・・・好感触!

「これは決まりか?っていつかマサマサ!」

「私達も食べたい!」

むっ?里沙、未央も食いたらしい、

「マサ!私も!」

「マサ君・・・私も食べたいわ?」

「マサナリ君!私もいい?」

「あの・・・マサ君・・・食べたい」

おう?どうやらララ達つつつかクラスメイツ女子、殆どが食いたらしい・・・ふむ!

「了解くじゃ作るわ?」

とこうして、なんやかんやで、クラス全員分を作ることに、結局、

授業はコレで潰れたが

「構いません、コレだけ美味しいお菓子が食べられたのです、満足よ？あっレシピ教えてね？」

寛大なる家庭先生でした。

そっいや勝負、うやむやになったな？まっいっか？

第三十話っぽい感じ！（後書き）

後書き

なんやかんやで三十話でした！！

飽きっぽい書いてる人ですが、よく続いたな〜と感慨深げ・・・

成長してませんけどね！

ですがコレからも頑張っていこうと思いますので、是非また見てやって下さい。

感想などありましたら是非！

## 第三十一話っぽい感じ！（前書き）

前書き

時間が掛かりました・・・

やっぱりアレな感じですので、薬的なものを持ってゆいぞ。

### 第三十一話 っぽい感じ！

「いつの間にやら一学期どころか夏休みが終わってたことに流石のマサさんも驚きを隠せねえぜ！」

「マサ！冒頭から危険な発言はやバイから！」

はいスンマセン、いやね、気付いたら夏休み終わってたんだよ？更に言うなら更衣までいつてます。

そら驚くだろ？いくらなんでも？

あつちなみに夏休み中も結構な頻度で用務のおっちゃんに仕事任されてました、やはり、おっちゃん手広く色々やっとなるようです。

それ以外は特に変わりはないね！  
だつて気付いたら夏休み終わってたしね！

期末テストすら受けた記憶がないからね！

その辺りは都合とか色々あるんで触れないでね？マサさんからお願い！

「マサ坊！ヤミ嬢、新学期早々悪いが仕事だ！」

おっと、仕事が入ったぜ！

「じゃ行くべヤミっ子」

「わかりました。」

あつちなみにヤミっ子も夏休み中の仕事はたまに参加してたぞ？  
ということになってるらしい。

なんか後半にヤバイ電波をキャッチした気がするが、流す方向で！

「マサモヤミちゃんも頑張ってたね！」

「じゃ先に行ってるからな、頑張れよ」

いつもんように二人の声援を受けつつ、仕事へと取り掛かりました。

で作業終了、一限目に差し掛かってたんで、いつもの如く、保健  
さんそこへ

「そうそう、もうそろそろ学園祭ね？というわけで、私達は私達で  
『カフェ・スプーキーズ』をすることにしたわ、ガクラン君お願い  
ね？」

「おけ！料金設定とかは保健さんにお任せしていいッスか？」

「ええ、任せなさい」

というところで、学園祭は喫茶店をすること

「あつヤミっ子もむろん参加な？看板娘だ！」

「何故、私が？」

「俺一人で全部は回ら・・・ねえこともねえけど、やっぱり看板娘がいた方がпойじゃん？頼むわ？保健さんも？前にも言ったけどダブル看板で！」

「はぁ・・・仕方ありません、その代わりに」

「わあつてますがな？」

例によってタイヤキで手をうちました、保健さんも

「私もいいわよ？」

快く引き受けてくれたでござえます、つとそだ！

「保健さん？もう二人看板娘追加していい？」

「ええ、構わないわよ？三人じゃ少し大変かもしれないし」

ふむ、よしや！

「じゃ後で連絡入れとくかねえ？」

「マサナリ？誰を呼ぶんですか？一人は想像がつきますが、もう一人とは？」

むっ？やはり気になるかヤミっ子よ？まっ

「一人はヤミっ子も保健さんもご存知、美柑だ！まっ美柑もめっさ



料理上手えから、作るんもやってもらおう予定！で、もう一人は……俺んダチだ、二人は直接は面識はねえと思うけんど」

はい、そうです、もう一人とは恭子んことだな？まあ忙しそうだったら四人だけんど？つか最悪三人か？まあ大丈夫だろ……

「やはり美柑でしたか……しかもう一人……気になります……」

「そうねえ？ガクランのことだから……まっそれは別にいいわね」

まあ二人ともテレビで見たことくらいはあると思うけどねえ、つか保健さんや、その微妙な間はなんだ？とか考えてたら

『キーンコンカーンコーン』

一時限目終了です、つうわけで

「じゃちと電話してきますわ」

そう言っつて、保健室を後にし

『ピ・ポ・パ！』

早速、恭子に連絡！まあ多分、向こうも休み時間のはずだしな？美柑は家に帰っつてからっつてことだ。

『プル……』

「もしもしマサ君……」

「はやつ！」

ワンコールもしないうちに出やがりました？

「いやぁつい嬉しくてってさ？でマサ君？どうしたの？あつとつと  
う私のマネージャーに」

「ならん！つかしつけえ！」

はい、アレから何度か手伝いに出向いているうちに、恭子君なんかマネージャーにならない？とか言い出したんですわ、もうなんでやねん？

「残る念！で本当は？」

「うむ、もうちょい先んことになんだけだよ？俺らん学校で学園祭やるんだわ？でさ恭子」

「行く！絶対行く！大丈夫、ちゃんとスケジュール空けて貰うから  
！」

「うお！？食いつき半端ねえな？」

「楽しみだなあ？やっぱり学園祭といったら・・・」

なんか勘違いしてるっぽいけど、まあコレで

「労働力ゲット〜！バリバリ働いてもらうぞ恭子君！」

グッとナイススマイルでサムズ、まあ見えないだろうけど

「えっ・・・アレ？マサ君？アレ？聞き間違い？今・・・労働力つて言わなかった？」

ふむ・・・

「言ったぞ？喜べ恭子君！キミは俺が店長する喫茶店『カフェ・スプーキーズ』の5番目の戦士に選ばれたのだ！」

4番目は美柑です！まあ仮だけど。

「せっ・・・戦士って・・・ようするにマサ君のする喫茶店を手伝うってこと？」

「そっそ？役職は看板娘な？まあ俺以外は全員看板娘だけど？」

みんな可愛いしな？

「看板娘かぁ・・・フッフ！今こそ現役高校生アイドルの力を見せる時！」

おっ？恭子ノリいいな？つうこたあ

「承諾か？」

「うん、最初はちょっとビックリしたけど他の学校の学園祭に参加するのも楽しそうだし？」

よっしやー！

「恭子いいやつ！じゃ頼んだぜい！」

「まっかせなさい！でも・・・そだ！今度デ・・・ゲフンゲフン・・・  
・買い物に付き合っつてね？」

「おう！つかデて・・・」

「あっ！そろそろ授業だから！」

『ガチャ・・・プープー』

切られた・・・つかデって何？デって？まあいいさね。

とにかく恭子の参加は決定！

つつわけで、保健さんとヤミっ子に報告して教室へと戻ります。

『ガラッ』

「・・・何コレ？」

いやさ、えっ？何コレ？はっ？

「マサ〜〜どう可愛い？似合っ？」

「可愛いちゃ可愛いが？んだそんな恰好？コスプレ？」

はい、なんか教室を開けたら、クラスメイツ女子がネコミミとか  
イヌミミとかなんかそんな感じのやつをつけて更には、なんか極端  
に露出が多い恰好してますねん？

はて？どゆこと？

「エへへ〜やった！」

うんララ君、ナイススマイル！ちなみにララ、なんかヒョウっぽい感じの恰好です。

って違うかな？

「リト？コレどういうこと？」

「あつああ、ほら学園祭近いだろ？それでうちのクラスはアニマル喫茶をやるって猿山が」

はあ？アニマル喫茶？つかエテ山の発案かい？チラツとエテ山を  
見てみると

「ハアハア・・・ウヒョ〜〜〜最高〜〜〜」

ふむ・・・

「指導！」

『ゴスツ！』

「グエツ！」

あんまりにも犯罪者フェイスだったんで沈めといた、後悔も反省もしとりません！

にしても・・・

「うう~~~~私までこんな恰好~~~~」

はい、唸ってるのは唯君です、唯はぶちネコです

「唯までたあねえ？止めなかったん？」

「うつつるさいわね！止めようとしたけど簡単に止まらなかったのよー！」

でしょうね？まあ似合ってたけど。ちなみに春菜は黒ネコ。

「マサナリく~~~~」

ルンが飛び付いてきた、ふむ今日はルンの方か？ちなみにルンはタヌキですつとイカンイカン！

「リトガード！」

やはりリトを差し出し防ぎました、この流れ仕様です！

「マサマサ〜猿山の発案だけど結構似合うでしょ？コレでお客様を釣ってマサマサの料理で満足させる！商売繁盛間違いなしッ！」

「里沙あキツネか？似合ってるちゃ似合ってたけど、それあ無理だぜい？俺あ別口で喫茶店する予定だからな？『カフェ・スプーキーズ』だ、まあ準備くれえは流石に手伝うけどな？」

「『ガガーン！』」

一緒について来てたりスっ子の未央まで同じリアクション、ホントコンビネーション抜群だわ。

「ええ〜〜マサ、コッチで料理作ってくれないの？」

「悪いな？でも、まあ手伝いくれえはすっからよ？」

ブーたれてるララの頭をポンポンしながら、そう言って諫めます。

「あのねマサ君？一応クラスの行事よ勝手にそういうことをされたら困るわ」

「でも保健さんから許可もらったぜ？つか発案は保健さんだし？」

「みつ・・・御門先生・・・何を考えて・・・けどそれならまあしかたないわね」

うむ、唯も納得してくれましたな。

「ハッ！マサマサ、だったら売上勝負とかは、負けたらなんでも言うことを聞くとか？」

むっ？里沙？売上勝負とな？ふむ・・・

「中々面白そうじゃなか？売られた喧嘩は買わしてもらっぜい？けど、いうこと聞くなあ俺だけな？後、出来る範囲な？」

流石に保健さんやヤミっ子、美柑に恭子はアレだしな？まあ美柑はまだ決定してねえですけど。

「よし！それでオツケ〜みんな勝ったらマサマサ好きに出来るって  
さ」

アレ？里沙さん？好きにできるとは？いや出来る範囲って言った  
じゃん？アレ？やってもうた？

「ホント？よあ〜し！絶対勝つからねえ！」

「よしッ！マサナリ君を好きに出来る権利は私が！」

「はっ・・・ハレンチだわ・・・でも・・・」

アレ？やっぱやってもうた？アレ？いやいや負けなきゃいい話し  
やん？うん！

『ガラッ！』

「話しは聞かせていただきましたわッ！その勝負！私のクラスを参  
加させてもらいますわよッ！」

沙姫？アレ？

「オマエ授業どうしたよ？」

「自習だよ？政成、中々、面白いことになってるじゃないか？沙姫  
様の言う通り私達のクラスを参加させてもらうぞ？」

自習ってなんか嘘くせえぞ凜？まあ詳しくは触れないけど。あ  
つちなみに、いつの間にやら二限目突入しております、一限目は学



園祭の話しあいだったらしいが二限目も学園祭の話しあいでございます。

「ねえマサ？誰？マサのお友達？」

おっと、そっぴやララ、沙姫達んこと知らなかったな？

見てみりゃクラスメイツもポカンとしとるし、ではでは

「コチラ二年の、沙姫、凜、綾だ、確か沙姫が高貴担当で、凜が優雅担当、綾が可憐担当だったか？」

「違いますわよッ！だいたいなんですの担当って！」

うむ、流石だ！

「みたかね？ポケと見せ掛けてツッコミもこなせる素晴らしいやつだ！」

「すっ素晴らしい？そうですわよね？まさに私の為にある言葉ですわ！オーホホホッ！」

うむ・・・

『『ピ・ポ』』

「だからなんで病院に連絡をしようとするんですのッ！それに凜まで一緒にあってー！」

いやさ、そらオマエ

「だって・・・なあ？」

「合図かと思ひまして？」

そつそ、凜の言う通り、それに定番だし？

「そんな合図は誰もしてませんわよッ！」

うん知ってる。

「また可憐って言われちゃいました〜イヤンイヤン」

「綾もいつまでクネクネしてますのッ！」

「ハッ！すっすいません、沙姫様〜」

いやあホント、ビシバシとツツコンでるな？

「少し変な人だけどこの人がいれば少しは楽ができるかしら？」

「どうだろうな？」

ってコラ、唯にリト？なにサボろうとしてんだオイ？つか唯、いつもなら沙姫達んことを注意とかするはずだろうに？そんなに休みたいんかい？

「休みたいわ」

「休みたい」

「どうやら口には出してないが、顔に出てたらしい、クソウ・・・二人揃って休みたがりやがって、俺、ちょっとシヨンポリ、まあすぐに切り替えますが。」

「とりあえずは」

「まあこの三人も俺んダチだから、仲良くしてやってくれい」

「ララ始め、クラスメイツのみなさんに向かってそう言うっておく、無理にたあ言わねえですけどね？」

「うん！わかった！ヨロシクね沙姫く凛、綾く」

「うむうむ、ララは素直な優しい子です。」

「うううんマサナリ君が言うなら・・・うう増えたよ・・・」

「ルンも仲良くしてくれるっばいけどダチが増えて何故に唸るんだ？」

「マサ君といると交遊関係一気に広がるわよね？」

「うん、そうだね唯さん？マサ君の回りには人が集まってくるんじゃないかな？」

「むっ？春菜君や？なんかその言い方は微妙にアレだな？誘蛾灯みたいな感じじゃね？まあ別にいいけど。」

「それになんやかんやで仲良くしてくれるっばいしな？」

「つつわけで沙姫達もヨロシク頼むわ？」

「ちょ！ちよつとマサナリさん何を勝手なことを！」

むう？

「別にええやん？ちいと強引すぎっかもしんねえけどよ？ダチはさ・  
・なんつつかアレだ？いいもんだぜ？バカやって笑いあえるそう  
いう奴らは多い方が楽しいだろ？」

まあ無理になるもんじゃねえけど。

「わ・・・わかりましたわよ・・・そんなお顔で言われたら断れま  
せんわよ全く・・・」

うむうむ、よきかなよきかなってか？

「マサ嬉しそう！」

「ノンノン嬉しそうじゃなくって嬉しいんだ」

なんか嬉しくなんよな？

「フフ・・・やはり政成との出会いはよきものであったな？」

「アン？なんか言っただか凜？」

「いやなんでもないさ」

あっそう？ってそういや

「なんの話してたっけ？」

「マサが言うこと聞いてくれるって話したよ！」

ああ！そうだったそうだった！つかララさんや？

「そら俺らが負けたらの話しだろうに？」

「勝つもん！」

「勝つのは私達のクラスですわ！」

ほお〜言うねララさんに沙姫さんや？

「上等！！簡単に勝てると思うなよ？」

フツ・・・楽しくなってきたなあ？

「って言うか、先輩達のクラスの参加は決定済みなんだ？」

「春菜！水差しちゃダメだって！」

「そうそう面白くなってきたんだから！」

とこうしてなんやかんやで学園祭は喫茶店勝負をすることになりました。

で、その後、保健さんとヤミっ子にその事を話したらお二人

「私達が勝つたら何か言うことを聞いて下さい。」

「そうね？そっちの方がモチベーションが上がるわね？」

とか言い出しやがりました、つか待て！

「それ、俺、どちらにしろ勝っても負けても言うこと聞かねえとイカンがな？」

流石にそう主張、したらお二人さん

「やる気が出ません・・・」

「そうねえ・・・つまらないわよね？」

ふて腐れやがった・・・なんだコイツら？クソウ・・・

「わあっ！なんでもはアレだけど、簡単なんだったら聞いてやらあー！」

「少しはやる気が出てきました」

「フフ・・・そうね？」

クソウ・・・少しどころじゃないくらいに目が輝いてるくせに・・・  
・アツ！そだ！

「なあ？俺らが勝つたらよお？つか勝つけど、注文を一番取った奴ん言うことを聞くってことで？流石に四人分はな？アレだろ？」

フフフ・・・まさに策士！こうすることにより更にモチベーションが上がり売上アップツ！更に俺も楽が出来る！勝ちも盤石なものとなるのだよ！

「面白そうですね・・・」

「そうですね、そっちの方が張りがあるわね・・・」

『ギラリッ！』

うむ、見事、作戦は成功のようだな？恭子にも言っておかねえと？

つつわけで恭子にも電話したら

「フフフ・・・勝ちはもらったアアア！絶対勝つからねッ！注文も私が一番取る！」

フツ・・・見事にバーニングしたな？よしよし！

そして帰宅後に美柑を勧誘！

「ヤミさん絶対勝とうね！」

「勿論です、しかし注文は私が一番」

「待ってヤミさん、こじは・・・ゴニョゴニョ」

「なるほど、やりますね美柑？」

「少しでも確率高いほうがいいしね？」

とこんな感じで参加表明、ヤミになんか耳打ちしてたんと最後にセリフが気になるがそこはあえてスルー！

「負けないからね！」

「コッチのセリフでいー！」

決戦の日は近い！

・  
・  
・  
・

ちよつとオマケ

唯 視点

「ハア〜」

息。  
自分の部屋で、学園祭のする喫茶店でする衣装を見て思わずため

こんなハレンチな恰好をしないといけないなんて・・・



つい断れなかったわ・・・

まっまあ仕方ないわ、ホントはイヤだけど・・・

それにしても、いつからこんなに緩くなったのかしらね？私・・・  
まあマサ君と会ってからだけど。

そういえば喫茶店の売上によってはマサ君を・・・

『カアアアア！』

「なっ何考えてるの私！はっハレンチだわアアア！」

・  
・  
・  
・

涼子 視点

「ガクラン君に何、お願いしようかしら？解剖？」

『解剖は無理！ダメ解剖！』

むっ？やっぱりガクラン君の声が聞こえてきた気がするわね？

でも解剖がダメなら・・・うん？

暫く私の助手をやってもらおうかしら？

うん、それもいいわね？

とにかく、まずは勝負に勝たないとね？

フフ・・・ガクラン君がいたら学園祭こんなにワクワクできるなんてね？

ホント、面白い子よね？

・  
・  
・  
・

沙姫 視点

「向こうがアニマル喫茶なら私達は昆虫喫茶ですわッ！そして必ず勝ちますわよッ！」

「ええ必ず勝ちましょう！」

「はい沙姫様！」

オーホホホ！去年学園祭クイーンと呼ばれた私の力を見せてませますわッ！

そしてマサナリさんと・・・

「ポーーーー」

・  
・

凛 視点

フツ・・・沙姫様も随分とやる気になってるようだな？

今までのように1番でなければ気がすまないというわけではなく、政成が言うことを聞いてくれるという権利があるからな？

フフ・・・私達が勝つたら・・・

「ポーーー」

・  
・  
・  
・

恭子 視点

フフフ！チャンスが巡ってきたよ。

マサ君が中々、マネージャーになってくれないけどコレなら・・・  
やっぱりダメかも？

ううん？何を聞いてもらおうかな？

フフン！楽しみ！絶対勝~~~~つ！！

・

・  
・  
・

ルン 視点

「負けない！勝ってマサナリ君と！フッフーン！」

あんなことやことを・・・

（ルン？いくらなんでも無理だと思っけど？特にマサは）

むっ？

（レン、うるさい、折角やる気になってるんだから水を差さないでよ？）

（マサならルンを任せられると思うから応援はしてるけど、マサ、その辺はすつごく堅いって話を聞いたけど・・・）

（むう・・・私も聞いたことあるけど・・・でもいいの！）

（ゲンコツされそうになってもボクに変わるなよ！アレ、すごい痛いんだぞ！）

（・・・）

（ルン？）

「とにかく頑張る！」

( ちょっとルン~~~~~んとか言え~~~~~ )

・  
・  
・  
・

マサ 視点

ふむ・・・

「今さらながら安請け合いしすぎたか？」

「マサ、遅いから？」

そうかねリト君？にしても・・・俺が勝ったらどうしようかねえ？

チラッとリトを見る。

うむ、アレにしょ！

学園祭楽しみだねえ！

第三十一話っぱい感じ！（後書き）

後書き

クリ○ゾンでドーンしました・・・ホントスンマセン、中々上手  
くできませんで、つい・・・

ですが頑張りました。

感想などありましたら是非！

第三十二話っぽい感じ！（前書き）

前書き

中々難しい・・・なんか色々難しい・・・

でも頑張りました、あつ何時ものように薬を持ちつつどっどど！

## 第三十二話っぽい感じ！

はい、彩南祭・・・の前日。

「中々、いい雰囲気ね？」

「でがしょ？」

ン？何がとな？気になるかね？

「まさか、増築するなんてマサ君無茶苦茶だねえ？」

「そうだね、キョー」さん

「マサナリらしいと言えばマサナリらしいですが」

はい、恭子君の言う通り、保健室を増築しました、いやあ流石にちいと狭かったしね？保健さんもアツサリ

「いいわよ？」

と云ってくれたしね？

あっちなみに、恭子君が何故に既にいるのかというと

昨日

・  
・



「えっと・・・確かここでよかったと思ったんだけど・・・」

学校帰りに家の前でうろつろつしてる不審者を発見！

「おい、コラ？オマエ、何してんの？」

「あつマサ君！やっぱりココであつてたんだ！」

ええ、それが恭子君でした、恭子いわく

「いやあどうせ私の学校、明日は休みだし、準備から手伝おっかなあつて？」

とのことらしい、いやあ

「やる気満々だなオイ？」

「うん絶対勝つてマサ君に言うことを聞いてもらうのだ！」

おおく燃えとりますな？比喩的な意味で？

「マサ！キョーコちゃん？キョーコちゃんだ！わあ！わあ！」

おっ？ってそっぴやあ

「ララ、マジカル・キョーコ見てるもんなあ？」

「うん！私キョーコちゃん大好き！ねえねえキョーコちゃん友達に

なつて！」

「ララ、ナイススマイル！」

「恭子お？だつてさ？頼むわ？」

「えっ？うん、いいよ？えっと」

「ララだよ」

「ララちゃんだね？ヨロシクね？私の番組見てくれてるんだ、嬉しいー！」

「うむうむ、仲良きことは美しきかなつてか？」

「マサナリが言っていた、もう一人とは」

「そっそ！」

「げっ・・・現役アイドルを電話で呼び出すって・・・マサ、オマエ、ホント凄えよ・・・」

「いやいや、そうでもないですよ？つか俺的には、ダチを誘つただけなんすけどね？」

「とヤミっ子にリトと暢気に会話したら」

「マ〜サ君？」

「なんか猫撫で声で恭子に声をかけられた、ふむ」

「微妙？つか不気味？」

「ヒドッ！」

いやさ、だってアレだし？なんか微妙だった？それに

「何を企んでやがる？マネージャーはやらんぞ」

完全になんか企んでる顔だしね？

「くうく相変わらず手強い・・・まあマネージャーのことじゃなくて、泊・め・て？」

キラッと輝く笑顔で、泊めて発言。

「俺も居候なんだぞ一応？俺じゃなくてリトに言えリトに！」

もえ殆ど我が家状態な感覚ですけどね！でリトを指差しながら、  
そう返す。

「えっ俺に振るのかよッ！」

当然だろうよ？

「えっと・・・お願いしていい？」

「ねえリトいいでしょくキョー」ちゃん泊めても！

恭子とララのダブルアタック！

「あつああ、俺は別にいいけど・・・美柑にも聞かないと」

リト、アツサリ陥落、まあリトなら断りやせんわな？

「やったねキョーコちゃん！」

「うん、ありがとうララちゃん！」

手を取り合ってきてきゃっきやはしゃぐララに恭子、うむスツカリ仲良しさんだな？

まあ美柑も大丈夫だろ？

つつわけで

『ガチャ！』

「たっだいま〜」

「あつお帰り〜」

家に入って早速

「コイツ泊めてやってくれい！」

「えっ？ちよ？えっ？その人、まさかマジカル・キョーコ？」

「そっそ？俺んダチ！で『カフェ・スプーキーズ』5番目の戦士だ  
！」

「戦士って……でも、うんわかった、いいよ？」

うむうむ、流石は美柑だ！

「つつわけで、恭子宿泊決定〜〜〜！」

「やった！」

「わあ〜〜〜い！」  
で晩メシん時に

「キョーコちゃんってハーフだったんだ」

「うん、そうだよ？ほら」

『ボツ！』

って恭子が暴露ってた、まあララヤヤミも暴露ってたけど。

「恭子？おねしよするから火遊びはやめれ？」

「だからしないってば！もう！」

「知ってる言ってみただけ？」

やっぱり言っておかないとアレだしね？

「なっなんか不思議な光景だよな？家にマジカル・キョーコがいる  
って？」

「つていつか宇宙人率、多いよね？家つて」

「いやいや結城兄妹よ？」

「丁度半々じゃん？つか恭子はハーフなんだから2・5？地球人率の方が多いだろ？」

「そういえばマサナリは地球人でしたね？」

「うん一応。」

「でもでも、私がマサと結婚したら私も地球人ってことに？マサがデビルーク星人に？」

「だからあ今んとこ、その気はねえつつの！」

「全くララめ！」

「けっ・・・結婚？マサ君・・・どゆこと？」

「ララの妄想？」

「妄想じゃないもん！絶対するもん！」

「はあ？」

「そ〜ですね？」

「むう・・・」

ララしつこいねえ？いつになったら気付くのやら？

「こっコレは・・・私が思ってたより厳しいかも・・・でも・・・絶対にマサ君にも火をつけてやるんだから」

って恭子？何を戦々恐々してんだ？つうか火をつてオマエ・・・

「やめる放火魔？俺あ焼いても食えんぞ？」

「そういう意味じゃないよ、もう！！つていうか食べるなら別の意味でゲフンゲフン、なっなんでもないよ？アハハ〜？」

いやどういう意味よ？つか後半なんか危険なことを言おうとしてなかったか？

「やっぱり・・・キョーコさんも・・・多いなあ」

「わっ私は別にマサナリはただのターゲットです・・・しかし・・・でも・・・」

意味がわからんぞ？ヤミっ子？美柑のはわかるけど、ダチのことだろ？まあダチは多いぜい！ハッハッハ！

「ハア~~~~~」

つてアレ？なんでタメ息？

「マサ・・・オマエ、やっぱ凄いや・・・」

いやリト君？何が？

とかありつつ晩メシを食い終わり、三〇三〇タイムしたから食器を洗い、まったりタイム。

「ねえねえマサ君？ララちゃんは見てくれてるみたいだけどマサ君はどうなの？」

ン？『爆熱少女マジカル・キョーコ』を見てるかってことか？ふむ……

「録画でな？リアルタイムは裏の時代劇みてる」

「シヨック！！」

いやシヨックつけられても？

「そういえばマサさんアノ時間って自分の部屋でテレビ見てるよね時代劇だったんだ？」

はい、そうです、実は俺、部屋があります、結城家、結構広いッス！

「そういえばヤミちゃんもいないけどヤミちゃんもマサと一緒に見てるの？」

「ええ、まあ単純ですが中々面白いです。」

「だよな？なんかこう印籠を出す時とかテンション上がるわ」



はい、基本はアノ隠居の話です、まあ將軍の話しとかも好きだけど？

「うう・・・今度、監督に時代劇の要素を取り入れて貰おう・・・」

ふむ・・・

「頑張れ？」

とりあえず恭子がガツクリなつてたんで応援しといた。まあ正直

「アレに時代劇って微妙じゃね？」

と俺は思っけどね？『発火娘・奇術師・恭子』になるんかね、その場合？

「だよね〜〜グスンッ」

まあこの様子じゃなさそうだな？

「マサ・・・ハッキリ言い過ぎだろ？もっと気をつかってやれよ？」

むっリトにダメだしつけた。けどね？

「録画で見てるつってんじゃん！なんだったらテーマ曲歌ってやるつか？」

「えっ？マサ君歌えるの？」

ええ歌えますよ？普通に？

「燃える！マジカルキョーコ！だったか？」

「うん！わあ、ねっマサ君！歌ってみてよ？」

「聞きた〜い！」

「うん、私もちょっと聞きたいかも」

「興味はあります」

ぬ？

「だってさマサ？」

ふ〜む・・・

「じゃ一曲ー！」

歌うことにしました、しかしコレって恭子の歌だよな？本人前にっ  
てある意味罰ゲームじゃね？とか思わなくもねえが？

「~~~~~」

歌詞は書いてる人が解らないので省略！いや俺はわかるよ？でも  
ほら、色々あるから！だから触れないでね？

とか電波をキャッチしつつも

「~~~~ はいどうもありがとうございました~~~~」

一曲歌いきりました。

「そっ……そっくり!」

「うん、キョーコちゃんみただった声は!」

「似てたね? 凄く!」

「見事な声帯模写です」

「ああ姿見えなきゃわかんないだろ? コレ?」

ハツハツハ! なんやかんやで喜んでもらったようだな?

あっちなみに、ヤミっ子のいうように声帯模写です、中々上手いよ俺? まあちいとキモイけど? っつと

「どうよ恭子? ちゃんと歌えたべ?」

「うっうん、完璧すぎてアレだけど……でも嬉しいかな?」

まあ俺の声バージョンもあるけどね? まっ恭子嬉しそうだからいいやね?

で、その後は

「覗くなよ?」

「アハハ! 覗かないって? っっていうか普通は逆だよ?」

うむ恭子君、実なまともなセリフだ！なんか凄くホツとしたよ！  
けどね？

『ギラリッ』

俺が風呂に入ると言い出すたびに、プレデターの目になる奴がいるんです！ええ美柑とヤミですね？ララはプレデターの目ではないけど、まああの手この手で風呂に侵入しようと思みやがるから侮れんのは侮れん！

つつわけで

「リト監視な？」

「うっ・・・きつ今日は俺が背中を流してやるよ、うん！」

はあ？まあ仕方ねえか？あつちなみにリトとはたまに入ってます、なんか視線に堪えられない時があるらしい、気持ちはわかる！

「じゃ入るべ？」

「あっああ」

とリトと入ることに、あつ風呂場、狭いと思ったそのアナタ！広いよ？今は？広くしたのだ！（俺が後ララの発明とかで）才倍のオツチャンが帰ってきた時と三人で入っても余裕だったし？

「うっ・・・いつつもリトばかり・・・」

「リト羨ましい」

「いつものことながら確かに不公平ですね」

知らんがな？

とか思いながらもリトと風呂に入りましたで風呂から上がったら

「マサ君！もう一回お風呂入ろう！私とッ！」

なんか恭子の態度が一変しておりました手には、いつぞやのトレ  
ーディングカード風加工された写真がありもうした、なんでやね  
ん？とか思いつつも。

もちろん

「却下な？」

サクッと拒否つといた、つかさつき逆とか言ってたくせに！

「現役アイドルとお風呂に入れるというチャンスをアツサリ拒否！  
もっと悩んでもいいと思う！」

「却下な？」

「うっ……て照れ屋さんだなあマサ君？」

「却下な？」

「うっ……入ってきます、ララちゃん一緒に入る？」

「うん！」

「あっキョーコさん、私も一緒入ります、なんか気持ちは痛い程わかりますし」

「そうですね・・・私も一緒にします」

と女の子組は揃って風呂に向かい

「マサ・・・ホント凄えよ・・・」

リトにまた凄えって言われた、いやどこが？

・  
・  
・  
・

恭子視点

「有り得ないよマサ君・・・」

チャプンと湯舟に浸かりながらも、つい独り言。

「マサさんはその辺は凄く厳しいですからね？」

「そうなんだよキョーコちゃん聞いて聞いて！マサが入ってる時に私が入ったらいつもコラア！ってゲンコツされて追い出されるんだよ？ヒドイよね？ね？」

えっ？ララちゃん？マジ？さつきはまあ自分で一緒に入ろう言い出したけど・・・

「はっ・・・裸で？」

一応確認！もしかしたら水着とか着てたかもしれないし？

「うん、お風呂だもん裸だよ？」

うそ～～～ララちゃん、女の子の私から見てもスタイルめっちゃめちゃいいよ？私も、少しは自信はあったけどララちゃんには敵わないかも？って思うくらい、しかもスツゴい可愛いし！

美柑ちゃんにヤミちゃんもスツゴい可愛いけど？

スタイルは・・・フン！まあ美柑ちゃんはまだ小学生だしね？ヤミちゃんは・・・アハハ？

「キョーコさん？何か余計なことを考えてませんか？」

「偶然ですね美柑？私も感じました」

うっ・・・

「アハハくなっなんでもないよ？ホント！あっそっそっそうだ！マサ君ってホントそんなリアクションなの？」

慌てて話題を変えることに、ちよつと怖かったし？

「うんホント！えっと・・・」女の子なら慎みを持ちなさい！』っ

て

あ〜〜ポイかも？確かにマサ君言いそう

「マサさんのアレ、キツイよね？」

「ええ、えつちいのは嫌いですが、反応ないのも腹立ちます」

確かに、女の子としてその反応はキツイかも？さっきので結構、きつかったし？

ううむ・・・マサ君、この辺もニブニブなんだね？なんて手強い？

しかも、ララちゃんライバルっぽいし？美柑ちゃんもヤミちゃんも、多分ライバル！むむう・・・私、接点がちょっと少ないからな？不利だぞ？

ハッ！そうだ！いいこと思いついた！

「エへへ〜」

「どうしたのキョー」

「ちょっとね？」

まあいきなり明日から！ってのは無理だけど？

ん？何を思いついたか気になる？

まだ内緒だよ？



マサ視点

「つ・・・強え・・・」

「いやマサ君が弱いだけだど？」

ララ、美柑、ヤミ、恭子が風呂から上がった後、例によってゲームで勝負したらボッコボコにされた。

つか恭子君

「弱くねえつつつてんじゃん！いやあビビるわあ恭子君、ゲームが得意だったとはな？いやあ芸能界でも1、2を争う腕前なんじゃない？もう特技ゲームっていれちゃえば？プロフィール的なものに？」

「ププツ！マサ君必死だね？面白いぞお？」

グフツ・・・

「バーカバーカ！チイクシヨオオオ！」

後ろに向かって前進した！

「あつ逃げた？」

「ぶう！私とまだ勝負してないのに？」

「マサさん可愛い」

逃げではなああい！前進だ！後ろに向かったの！

つと

「ヤミは来い！特訓だ！」

「仕方ありませんね？」

ええ、日々の精進が大切なんです！故にヤミは連れてきます。

「まあ二人共ドングリの背比べだもんな？」

リトよ？

「右！」

「左です！」

『ギチギチギチ』

雉も鳴かずに撃たれまいに・・・

「イダダダダ！悪かった〜悪かった〜ギブウ〜ギブウ〜！！！」

ダブル腕ひしぎで刑に処した

「マサさんとヤミさん、連携レベルが上がってるよね最近？」

「うん仲良し、やっぱり羨ましい」

「っていうか、誰もリト君のこと心配しないんだ？」

「いつものことだもん」

「いつものことですから」

はい、いつものことです。

「ギブウ~~~~ギブウ~~~~」

といつものように結城家の夜はふけていったのでした。

で朝

「だろっね？」

はい、恭子が布団に潜り込んでた、正確には恭子もだけど？

まっ予測の範囲内です、なんかそんな気がしてたしね？

まあそれはさておき

「マサナリ？」

「あいよー！」

朝の運動、で美柑が起きてきて朝メシを二人で作る

あつむろん当たってないぞ？そうそう当たってたまるかい！

朝メシ後に学校へ？ちなみに本日は丸一日彩南祭の準備で殆ど自由登校みたいなもんです。

まあ準備が終わってるところはだけど？

「じゃまあなんかあったら呼びなさい」

「ああ、わかった、じゃマサも頑張れよ？えっとヤミに霧崎も」

「キョーコでいいってば？」

「いや、ちょっとそれは・・・」

まあリトだしな？

「マサ！明日は絶対負けないからね！」

フツ・・・

「悪いが勝つなあ俺らだ？」

『バチンッ！』

俺とララの間には火花が走った・・・

「ご苦労、恭子君？」

「いえいえお気にならなず」

実際に恭子が走らせたんだけどな！いやあ恭子君わかってる！

とそんなこんながありながらも保健さんのところへ

「あら？その子がガ克蘭君が言ってた子？」

「そっそ？5番目の戦士」

「まだそれ引つ張るんだ？」

と恭子を紹介、やはり、その時に二人共宇宙人、まあ恭子はハーフだけど明かしてました。

「マサ君の回りって結構宇宙人多いね？」

「言われてみればそうですね？」

「そうね？でもガ克蘭君は宇宙人なんて目じゃないくらい変わってるからいいんじゃないかしら？」

むむ？

「保健さんも変わってるなあと思うけどねえ？まっ俺あ好きだけど」

保健さん面白えし？結構ノリ良いし？

「むっ……いきなりは反則だって言ってるじゃない」

おう？照れた？勝利？

「マサ君っていつつもこうなのヤミちゃん？」

「大概こうです・・・」

「反則だね」

「ええ反則です」

いや何が？好きなやつは好き！嫌いなやつは嫌い！普通だろ！つてコレも結構言ってるな？まあ実際そうだしね？

でその後、午前授業、まあ所謂、半チャンだった美柑が合流して5人で準備。

材料やらなんやらかんやは保健さんが担当されました。

ちなみに俺は、ちよくちよく自分のクラスに呼び出されて、力仕事とかをやらされたり何故か

「政成、少し手伝ってもらいたい」

と凜に呼び出され、凜達のクラスも手伝ったりし結果最終的には

『鬼島 政成君・・・鬼島 政成君、次は3ーBへ行して下さい』

と放送で各学年、各クラスへと派遣されまくりました。

「マサさん人気だなあ？」

「ガクラン君、有名だもの学校内で知らない人はいないんじゃないかしら？」

「マサナリですしね？」

「確かにマサ君、キャラ濃いからな？」

上から、美柑、保健さん、ヤミっ子、恭子の順でした。

・  
・  
・

で話しは冒頭へと戻ります、つか回想めつさ長かつたな？いや気にしちゃダメさ！みんなも気にしないでね？マサさんからのお願い！

っとアレはアレは置いといて、とにかく準備は殆ど終わり！

「そつえばマサさん、私達衣装ってあるの？」

ン？脳内コチャコチャしてたら美柑が、そんなことを聞いてきた、ふむ衣装か・・・

「はいエプロン！俺作ね？」

『スピーカーズ』とロゴが入ってるエプロンです！

「えっ？マサ君コレだけ？他のクラス結構凝ってるって聞いたよ？ララちゃんのことなんて・・・まあちょっとやり過ぎだけど凄かったっぽいし？」

ふむ・・・

「まっアレはアレで可愛いけど、でもマサさん的にはコッチのが好きなんよ？大丈夫！キミなら素のままイける！なんせそのままでも可愛いからね！」

いや何度言うけどアレはアレで可愛いよ？うん。

「またいきなりそんなこと・・・でもフフ・・・やる気出てくるわね？」

「そうですね？私もやる気出てきました」

「そうだね？そこまで言われちゃね？頑張っちゃうよ私！」

「ええ明日は勝ちます」

うむ！なんかやる気が出てるっぽい！

「じゃ明日は絶対え勝つぞ！」

「」「」「おお～～～～！！」「」「」

決戦は明日！必ず勝つ！



第三十二話っぱい感じ！（後書き）

後書き

とりあえずはココまでです！

次回は学園祭！

次回も頑張りますのでまたヨロシクお願いします。

感想などありましたら是非！

番外っばい感じ！その5（前書き）

前書き

本編が思い浮かばない・・・

故に番外です。

恭也、ユーノ、クロノのファンはご注意を。

## 番外っばい感じ！その5

くもしもリリカル世界だったら・2く

その1

「いやア先日はうちのフェイトとアルフがご迷惑をおかけしたよう  
で？ってほらフェイト、アルフもごめんなさいしな？」

「えっうっうんごめんなさい」

「なんであたしが頭下げなきゃ」

「ア～ン？」

『グッ』

「わっわかった！下げるよッ！悪かったね！」

「うむ！というわけで二人共頭下げてんで許してやってくんね？」

「えっあっはい・・・えとアナタは・・・」

「ン？悪いまだ名前言ってなかったな？フェイトん家の居候 鬼島  
政成ってんだ！マサかマサナリでヨロシクな？」

「あっはい！マサさんですね？えっと私は高町 なのはです」

「おけ！あつ敬語じゃなくていいぜい？疲れるべ？」

「あっはいわかりまし・・・じゃなかつたわかつたの」

番外の続きですアレからなんやかんでまずは、なのはに謝りに行くこうという流れでフェイト、アルフを連れて巽屋まで謝りにきました。事情やらはフェイトやプレシアから聞いていたということですからちなむにアリシア、プレシアは留守番。

「そついやなのは店の手伝いか？うむ、なのっ子も良い子さんですなあ？」

『ナデナデ』

「エへへありがとうなの」

『ガシャン』

「キサマアアなのはのから離れるオオオ！」

『ビュオッ！』

「よっつ」

『ヒョイ』

「オラッ！」

『ガスンツドサッ』

「チラツ・・・16時42分凶器所持及び傷害未遂の疑いで緊急確保！なのは青い服の人達に通報！」

『グッ！』

「マサさん・・・その人・・・私のお兄ちゃん」

「マジでッ！！えっマジで？」

「あらあらウチの恭也がごめんなさいね？出来れば通報はしないで欲しいんだけど？」

「む？しゃくないですなあ？けどアレだよ？俺だったからよかつたけど他の人だったらズンバラリだったぞ？」

「ごめんなさいね〜」

「お兄ちゃんがごめんなさいなの後で叱っておくの！」

流石のシスコ兄貴もバグ相手にはアツサリ沈みました相手が悪すぎます。

後なのは魔王っぽいフラグ。しかし実際はOHANASIではなくクドクドと叱るだけです。コッチのがある意味シンドイ。

・  
・  
・  
・

その2

「そつだ温泉に行こう！」

「唐突ね？」

「フフフ・・・なんと商店街のクジで温泉旅行が当たったのだよ！移動はレンタカーだけどプレシア免許は？」

「あるわ・・・偽造だけど」

「今のは聞かなかったことにしてじゃ行こうぜい？フェイト、アリシア、アルフも行きたいべ？」

「うん！行きた〜い！楽しみだねフェイト？」

「そつだね？姉さん？」

「まあたまにはいいんじゃないのかい？フェイトもあたしも旅行なんてしたことないし」

「よしや！決定！プレシア頼むぜい！」

「仕方ないわね？わかったわ行きましようか？」

温泉旅行にも関わらずレンタカーとはコレいかに？とかはスルー！  
でお願いします。

時間軸とかも出来ればスルーで！

で温泉出発日

『ブォーン』

「.....」

「なあプレシア？もしかして緊張してる？」

「そつそんなことないわよ！たかがクルマの運転くらいで大魔導師プレシア・テストアロツサが緊張するなんて有り得ないわ！」

「いやガツチガチじゃん？ハンドルカ一杯握りすぎて手が白くなつてんぞ？」

「うるさいわね！運転なんて久々なのよ！集中してるんだから喋りかけないで！」

「あつそ・・・あつそつだ！？大事こと言い忘れてた」

「下らないことだったら後にしなさい」

「下らなくねエって？あのかなプレシア君？日本はな・・・左車線だ」

「はっ？」

『パツパーーーーー！！！！』

「ッー」

「「「イヤ~~~~~!!」「」」

『キツキツー!』

「ハアハアハア・・・し・・・死ぬかと思ったわ・・・マサナリ! そういう大事なことは早くいいなさいよ!危うく一家心中よ!」

「大丈夫大丈夫!いざとなったら助けますから?ってほら後ろ詰まるからはよ行け?」

「わっわかつたわ」

『ブォーン』

「あたし達生きて温泉まで辿りつけるのかい?」

「こっ怖いこと言わないでよアルフ」

「私なんてまだ生き返ったばかりなのに」

「だっ大丈夫よ?母さんに任せなさい運転も慣れてきたわ」

「そいつあよかった、けど前は見た方がいいと思う」

『パツパアアア!』

「「「「イヤ~~~~~ヤ~~~~~」「」」」



プレシアさん何故か運転が苦手なキャラになりました。

実はマサバイクの免許はありますがクルマの免許はありませんま  
あ年齢的に取れないですしね？けど運転は出来ます。

・  
・  
・  
・

その3

「フフフ・・・燃え尽きたわ・・・」

「プレシアお疲れ？」

「うう~~~~クルマ怖いクルマ怖い」

「ウプツ・・・気持ち悪い・・・フェイト？大丈夫かい？」

「うっうん大丈夫！あっ姉さんは？」

「最初は怖かったけど最後は楽しかったかも？」

「アリシア強い子だな？まあ俺も結構楽しかったな？プレシア帰り  
も頑張る~~~~」

「あっ・・・」

「「イヤ~~~~~!!」」

温泉到着後でしたアリシアは楽しくなってきたようです。

しかしフェイトとアルフはゲッソリ。

プレシアもゲッソリ。

・  
・  
・  
・

その4

『チャプン』

「ふい〜い〜いやあやっぱ温泉はいいやな〜？およ〜？」

「ン・・・ハッ！キサマは！！！」

「ヨオ？確か・・・恭也だったか？後そっちは・・・」

「なのはと恭也の父で高町 士郎だよ・・・確かマサナリ君だったか  
な？」

「そっそ？って恭也君や？座りなさいな？折角の温泉なんだから」

「むっ・・・しかしアレから俺は母さんとなのはにこっぴどく搾ら  
れたんだぞ！」

「自業自得じゃね？通報しなかっただけでも有り難く思った方がい  
んじゃね？」

「そうだな聞いた話ではいきなり恭也が斬りかかったそうじゃないか？桃子達にコツテリ搾られたようだから俺からは何もいわなかったが」

「アレはコイツがなのは頭を撫でて」

「頑張ってたからねエ？頑張ってる子は褒めなきゃなるめえ？まっ頑張りすぎてもアレだけどね？」

「ハハハ確かにそうだな？うん桃子に聞いてた通り良い若者じゃないか」

「そいつあどうも？まあ良い若者はアレだけど？」

「それにしてもマサナリ君、実に鍛えた体をしているな？恭也が勝てなかったのも頷ける」

「むっ確かに・・・どんな鍛え方を」

「シヤレにならんくらいブツ飛んだバケモノジジイと毎日のように喧嘩したらこうなります」

「喧嘩・・・実戦で鍛えていったということか」

「しかし喧嘩でつくような傷じゃないぞ？」

「まあ普通のやつなら死んでるような喧嘩だからね、半分くれえ命たまの取り合いだから」

マサ温泉にて土郎と恭也に遭遇、でなんやかんやでそんな話題。

後、恭也とはなんやかんやで蟠りはなくなりたまに手合わせすること。

そして珍しく写真イベントが・・・

『パシヤパシヤ』

「わあ〜ツわあ〜ツ」

「コレは凄いねエ」

「デジカメ買って置いてよかったわね」

「マサお兄ちゃんすっご〜い」

あつたようです何故かテストアロツサファミリーにパシヤパシヤやられました。

強制イベントです。ちなみに

『パシヤパシヤ』

「すずか撮れた?」

「うん大丈夫アリサちゃん」

「マサさんお父さんやお兄ちゃんより凄い」

「えっなのは知り合いなの？」

「うんお友達かな？」

「そっかなのはちゃんの・・・ねえ今度」

『ガラッ！』

「ちびっ子共何してやがる？」

「にやあああ見つかったの〜」

「退避よ退避〜」

「まってアリサちゃん！折角獲物が至近距離まできたんだもん」

『パシヤパシヤ！』

「獲物つてオマエ・・・獲物つて・・・」

三人娘との出会いはこんな感じ、なのはは知っていたけど。

・  
・  
・  
・  
その5

「協力？」

「うむ！まあアレだなフェイトとアルフが迷惑かけたろ？それに人

手は多いにこしたこたあねえし？」

「うん・・・だから・・・えっと・・・なのは？私も」

「あっ・・・うん！エへへ〜フェイトちゃんが初めて名前呼んでくれた！ねえフェイトちゃん友達になつて」

「えっ？友達？」

「ん？アレ？オマエらもうダチじゃなかったの？」

「マサお兄さん・・・友達ってどうやってなるの？もう友達だったの？」

「ダチってなあ・・・なんか気付いたらダチだった！みたいな感じ？俺にとっちゃフェイトもダチだしな？あっなのはもな？」

「そうなんだ・・・うんわかった！なのはも友達」

「うんエへへ〜」

「うむうむフェイトのダチが増えたぞアルフ」

「うん！うん！よかったね〜フェイト」

なんか温泉の段階で二人は友達となりました。

そっぴやユーノかなり空気・・・

その6

「ふええ〜ユーノ君って人間だったんだ！」

「アレ？なのはには言ってなかったっけ？」

「聞いてないよ〜」

「そういえばユーノって・・・温泉の時に女湯の方に居なかったい  
ど？」

「・・・ち・・・ちがアレは無理矢理！」

「子供だからいんじゃない？コレで18とかだったらボコにしてるけ  
ど？」

「うん・・・確かにアノ時は無理矢理だったし・・・」

『シユシユ』

「なのは？それ何？」

「あつフェイトちゃんも使うファブオーズ？使った方がいいよ？」

「ヒトイ！...」

ユーノ人間だと判明、なのはフ○ブりました。ひそかにフェイトとアルフもフ○ブってます。

・  
・  
・  
・  
その7

「何故アナタ達はジュエルシードを？」

「ん？ほたつといたら危ねエからつてのもある、それにジュエルシードが散らばったのは『事故』とはいえコツチにも原因はあるからなあ」

「事故？」

「うむ！『事故』いやあプレシアン実験装置のコードをネズミが食いちぎりやがってな？なんとかしようとしたらしいけど魔法が弾かれたんだと？で輸送機に当たっちゃまったんだなコレが」

（マサナリ？）

（いいからそういうことにしとけ？）

「何か怪しいがそれはいいじゃあ何故直ぐに管理局に連絡せずにした？」

「プレシアはドジっ子だから？はわわわわ！早くジュエルシードを集めないと危険だわ！っとなつて連絡すんのがスポンと抜け落ちたんだろ？プレシア ドジっ子！」

「はっ！？なんだそれは？そんな言い分が通ると・・・だいたいプ



レシア・テストロッサはドジっ子っていう年じゃないだろ！」

「あっ！」

「何だ？」

『バチバチバチ』

「そんな年じゃなくて悪かったわね……」

「ちょッ！いや今のは!？」

「クロノ……アナタが悪いわ？裁きを受けなさい」

「母さ……」

『ズドオオオン!』

「ギヤアアアア」

クロノ裁きの雷を受けました。ちなみになんやかんやで無罪を勝ち取ります。

・  
・  
・  
・

終わりです。

番外っばい感じ！その5（後書き）

後書き

なんか色々グツチャグチャでした。

スランプだ・・・トンネルが長い・・・

第三十三話っぽい感じ！（前書き）

前書き

学園祭編ラストです！

苦戦しました・・・

では何時ものようにクスリを持ってどうぞ！

### 第三十三話 っぽい感じ！

『それではただ今より第〓回、彩南祭を開催いたします』

はい来ましたア彩南祭当日！つまりは決戦日我等『カフェ・スプーキーズ』の負けられない戦いが始まります。

つつわけで

「カフェ・スプーキーズ開店だアア！」

「「「「おお〜〜〜！！」「」「」

うむ気合い十分だ！コレなら勝てるぜ！

『カランカラン』

おっと早速客だな！では俺は厨房へ行きますか。

「じゃコッチは頼んだぜ？」

と言葉を残して厨房に向かいました、そして即効で美柑が

「マサさん注文〓ホットケーキ二つと紅茶にミ〇ミ〇お願い」

「あいよー！」

『ジュージュー』

注文を取ってくれたので作ります。

「マサ君レアチーズケーキにショートケーキ オレンジ2」

おっ今度は恭子か？あつちなみにコッチは開店前に作ってたやっね？一応こんななんも作れますねん。

「あいよ！つと美柑ホットケーキ上がりヨロシク！」

「うん！」

「マサナリ注文ですタイヤキとアイスを」

おわ！ガシガシ来てんな？つか軽食ばつかだな？ボリユームあるのもあんだけどな？まっいいさね？今は

「あいよ！恭子コッチ上がったヨロシク！」

「はいはい」

とこんな感じで客を捌いていきます。

「ガ克蘭君スペシャルお願い」

スペシャルってのはアレね？ちょい前の調理実習の時に作ったアノ盛り合わせんことね？

「マサさん注文タマゴサンドとコーヒー三つずつ！」

おっと脳内コチャコチャしてる場合ではござらんか？

ガシガシ作んぜい！

・  
・  
・  
・

「ん？ちいと客足は弱まったか？」

暫くは次々と注文が来てたけど今は落ち着いてきております。

「そうね？今は落ち着いてきてるわね？あつガクラン君ご苦労様」

おつ保健がやってきた、どれ

「保健さんもお疲れッスはいコーヒー」

「ンッありがとう・・・ふう～落ち着くわね？あつ後少し摘めるものもいいかしら？朝から動きっぱなしだからお腹が空いてきちゃって」

まあそろそつだわな？

「じゃあ賄い限定タマゴチャーハンはいかが？」

「軽くじゃない気がするけど、でもお腹はすいてるしお願いねガクラン君？」

あいよッ！っうわけで

『ジャッジャッ！』

とナベを振ります回します。

『カンッ』

「はいお待ちっとー！」

であっちゆう間に完成、具はタマゴだけっつうシンプルなやつだ  
けんどな？

「うんおいしいそうー！じゃいただくわ……うんおいしいわ！」

そいつあよかった！

「それにしてもお客さん女の子が多いわね、やっぱりカロリー控え  
めの文句が聞いたのかしら？」

保健さんモグモグしながらも客層の報告。

「そっなん？」

「ええ私が材料を開発してね？」

おゝ流石は保健さん！

「まあ男の子のお客さんの殆どはアニマル喫茶に取られてるっついで  
うのもあるみたいだけど男の子はアッチ女の子はコッチって感じか

しら？」「

なるほろねえ？

「確かに可愛いっっちゃ可愛いけどなあ？男はエロスで出来てるってことかねえ？」

「ガクラン君だって男の子でしょ？」

「フツ・・・保健さんや？」

「俺あ漢だからね！つか俺あ例外っしょ？自分で言うんもアレだけど」

「それもそうね？んごちさうさま 美味しかったわ！それじゃ私は戻るわ！」

お粗末さんでしたってか？つと

「じゃ保健さん次は美柑あたりを休憩させてやって下され」

「ええ声をかけておくわガクラン君は休憩は？」

「俺あ十日ぶつ通しで働いても倒りやせんから大丈夫ツスよ？」

「タフね？」

まあバグだしな？

で続いて美柑、ヤミ、恭子の順で休憩に入りました



やっぱりメニューは賄いタマゴチャーハンにしたでござる。

にしても恭子……

「思ったよか騒ぎになってねえのな？」

「ソックリさんって思われてるんじゃないかな？」

どうやら恭子聞いてたらしい。

「どうするいつそバラして一気にお客さんの数アップ！ってしようか？」

ふむ……

「いいわ？なんか勝負半分くれえどうでもよくなってきたし？」

「えっ！？なんで？あんなに張り切ってたのに？」

確かに開店前は絶対勝利とか言ってたけどな？まっ勝つには勝ちてえけど

「ほら会計時にさ美味しかったとか言ってくれる声が聞こえっと嬉しくてな？したらなんか勝負よか美味しかったって言ってもらう方が重要になってきたわけよ？幸いっつうか幸いじゃねえけど負けでも言うこと聞くなあ俺だけだしな？」

まあ勝つてもいうこと聞かないカンけど。

「そっか〜〜うんマサ君っばいね？うんうん！」

何が嬉しいのやら恭子君、今日一番のナイススマイルだな？

「マサさんだな〜」

「ええマサナリですね」

「ホント、ガクラン君よね〜？」

うおッ！どうやら美柑にヤミ、保健さんも聞こえてたらしい。

「コチラも笑つとりますし？そっぴやヤミっ子最近笑うようになってきたよな？まっパツと見はわからんだろうっけんど。」

「まっとにかく後半も頑張りましょっつてことぞ〜？」

「ええ勝つてガクラン君に頼みを聞いてもらわないといけないしね  
」？」

「ってアレ？ちょアレ？保健さん？アレ？」

「話し聞いてた？」

「聞いてたわよ？け・ど？」

「「「それはそれコレはコレよ！（だよ）（です）（「「「「」

まあまあ保健さんどころか美柑にヤミに恭子まで？息ピッタリだ

なオイ？

まっやる気出してくれんなあいいけどね？なにはともあれ後半戦スタートですってか？・

・

後半は前半より急がしくなりました、どつやらロコミニとかで広が  
つとるようだ。

相変わらず女性客中心ですがね？

「っつお！スゲエ盛況だな？」

「流石はマサの店だな？マサ頑張ってるみたいだな！」

おつ？この声は・・・

「A&B？どつた休憩か？」

チヨロつとだけ顔を出す。

「ああ・・・ようやく昼メシ！コッチも急がしいぞ？」

「急がしいのは女子だけだな？」

ほう！なるほど？

「よしやチィと待ってる？」

『ジュージュー』

A & B にお好み焼きを作る。

コレ結構美味いはずなのにあんまし出ないんだよなあ？

とか思いながらも

「そら食ってけ？オマエらはダチ料金で100円でいいぜ？一応商売だからな？」

「ホントかサンキュー！マサ！」

「マサのお好み焼きマジで美味いからな！」

いやいやオマエらも美味そうに食ってくれっから作る方としても作りがいがあるんでござえますよ？

「美味え〜〜ってそっぴやマサ？アレって」

「ああ俺も気になってただけど」

A & B が指差す先には恭子の姿。

「マジカルキョーコか？」

おうA & B も知ってるらしい恭子やっぱし有名みたいね？まあ今は他のお客にはソックリさんって思われてるけど？

「内緒な？ダチなんだわ？電話で手伝ってくれっって呼び出した」

俺がA&Bにそう言ったらA&Bプルプル震えだし

「流石はマサだぜ」

「平然と俺達の予想を上回りやがる！」

「そこに痺れる憧れる~~~~~!!」「」

うむ・・・相変わらずナイスコンビネーションで面白えな？

でA&Bは学園祭が終わってからでいいからサインを貰ってくれと頼んで出ていきました。

喫茶店が終わってからつとそこに奴らの漢気を感じた。

A&B・・・ちやくちやくと漢を磨いているな！

もちろんサインはちゃんと貰うと約束しといた。

で再び厨房に戻って料理人

したら・・・

「うつひよ~~~~アニマル喫茶もいいけどココも楽園だ！」

またまた聞き覚えのある声・・・はいそうですね？

「校長先生！」

保健さんの言う通り校長（変態）です・・・

「キミを注文さあチュープリーズ」

「ちょっイヤ！」

美柑・・・フツ・・・フフ・・・

『プチン！』

「店内はお触り厳禁だボケエエエ！テメエはアアア」

『ガシツ！ズダダダ』

ドタマを掴んでそのまま外までダツシユ！

「へっへ？」

「地面とキスしてるオオオ！」

『ズドオオオオン！！』

地面に突き刺す！

でスタスタと店内に戻り

「美柑大丈夫か？」

「えっうんマサさんありがとう」

うむ大丈夫みたいだな？さて

「ええお騒がせしてスンマセン！今後あのような変態が発生した場合直ちに御呼び立て下さい速やかに処理しますんで？ヤミも・・・刻んでいいからな？」

「わかりました」

うむコレでよし！

さて厨房厨房っ！

「マサ君怖～～怒らせないようにしないと」

「大丈夫ですよキョーコさんマサさん優しいし？」

いやいや美柑君や優しかねえっの？

とかありながらもコレ以降は変態は発生しませんでした。

コレも□□ミで

「あの店変態が入ってきたら店長に瞬殺されるんだって？」

って感じで広まったらしいです。

概ね間違えではないけどね！

で時間は飛んで夕暮れ時

つまりは閉店時間です！

「ありがとうございました」

ラストのお客を見送る恭子の声。

「お疲れさ〜ん？」

エプロンで手を拭きつつ厨房から出ると皆さん流石にグッタリし  
とります。

「疲れた〜〜急がしかったね？」

「そうね？予想より2・5倍増しで疲れたわ」

「そうですね？でも結構楽しかった！ねっヤミさん？」

「多少は・・・ですが」

ふむ？さてさて？

「疲れた時には甘いもの？余りもんだけどケーキでも食つか？」

俺の言葉に四人はもちろん頷きます

そこへ

『カランカラン』

「ちよ〜〜と待った〜〜！私達も頂戴！急がし過ぎて食べに  
これなかったんだから！」

里沙登場！



続いてぞろぞろやってくるクラスメイツ達に

「私達もお呼ばれしたいですわ!」

沙姫、凜、綾トリオ。

ふむ・・・数が・・・しゃあねえ?作るか?

「ちいと待つてる?足りねえ分は作ってくつから?」

またまた厨房に引っ込み足りない分を補充何とか材料は足りました。

で

「皆さんお疲れ様でした〜カンパ〜イ!」

打ち上げ&

「じゃ売り上げ結果発表〜」

結果発表です!

さてどうなってるやら?まあ勝ち負けはどつでもいいって言ったけどどつせなら勝ちとえやな?

ちてちて?.

「じゃまずは三位から……えっと三位は……昆虫喫茶〜」

「そっそんな……学園祭クイーンの私が……」

「まあ正直予想通りだったが……沙姫さま元気を出して下さい」

「そうですよ沙姫さま！私達頑張りました！」

ふむ……沙姫達が三位か？

「まあ沙姫？そっ落ち込みなさんな？食うかコレも？ホレアーン」

「あっあ〜ん……まっまあこんなことでごまかせる私ではありませんが負けを認めるのも器のさですわ！オーホホホッ」

うむ元気が出たようだな？

『ピ・ポ』

「だからそれはおやめなさい！」

ナイス反応！けど凜はしてくれなかったら？チラツと凜を見ると

「アーン」

パクパクとヒナをしてみましたとりあえずエサを与えといた。

「うむ格別！」

そう味は変わらんだろうに？とか思いながら振り向くと

「「「「アーン!!」」」」

ヒナがめっさ増えてた全員にエサを与えました。

でそれから

「モグモグ・・・え〜と二位・・・じゃなくて一位を発表した方が  
いいよね?一位は~~~~~」カフエスプーキーズ」!!残念」  
アニマル喫茶』僅差で二位!」

「「「ええ~~~~~」」」

「「「「やった!」」」」

対象的な反応のクラスメイツにスプーキーズメンバー!

いやあなんやかんやで勝ったね?

「私達の敗因は回転率が悪すぎたね?もう悪すぎ!一人の客が粘り  
すぎだし!」スプーキーズ」の方は高いレベルでお客さんが入って  
るし回転率も私達の三倍はあるわ・・・王道には勝てなかったか・・・」

ほうほう里沙のよくわかる解説ですね?

チラッと見てみたら確かに単価は向こうが高いけど回転率めっさ悪いし?

でも単価のせいで僅差って感じか?

「やったねヤミさん!」

「ええやりました!」

「ごめんね〜ララちゃん?」

「むう悔しい!」

キヤキヤはしゃぐ美柑にヤミそれに恭子。保健さんは・・・

「さて勝つには勝ったけど・・・私達はまだ勝負は終わってないわよ?」

おう?そっぴやそんなんしてましたな?俺が言い出したこととは言えスツカリ忘れてたわ?

で・・・その保健さんの言葉で四人は伝票を確認しあう

そして・・・

「やった!私の勝ち〜〜!」

勝ったの恭子でした!

「うう・・・後少しかったのに」

「あの変態が邪魔しなければ」

「あらら負けちゃったわね?」

悔しそうな三人にはしゃぐ恭子!

はて？何をお願いされるのやら？とか考えてたら

「ん〜〜〜後で頼むよ！へへ忘れないでね〜〜」

微妙に残しやがったな恭子め！！

「まっマサマサ達の勝負はいいとしてマサマサ？私達には何を頼むの？B（強）までならオツケーだ」

「指導！」

『ガスッ！』

「いつ痛〜い！冗談じゃん！」

アホなことを言うからでい

「里沙も反省しないよね〜マサマサがBなんてするわけないじゃん！やってもB手前！ワンタッチくらいなら私も」

「指導！」

『ゴスッ！』

「ふぎゃ！痛〜い！冗談だつてば！」

未央君もおバカですわ！

「ハッハレンチよ里沙さん未央さん！」

ええもう唯の言う通りですわ！

まったく何を考えてんだコイツらは？って

「マサナリ君？マサナリ君なら私・・・ん~~~~」

ルンよ？何故にクチビルを突き出してるんだ？

「アツ！ルンちゃん！えつと私？私~~~~~！」

ララモかよ！！

仕方あるめエ・・・

『パチンパチン』

何処からともなく洗濯バサミを取り出し口に装着してあげました。

「ム~~~~ム~~~~（痛い！痛い~~~~）」

知らんがな？

「マサ君容赦ないわね？」

「当然ですとも唯さんや？」

つとそろそろ俺の要求を言おうかねえ？

「では俺の頼みな？春菜10月16日に街のそつね？ネコ像の前に来てくれ以上！！」

前々から考えてた頼みを春菜に言う。

すると

「「「何イイ!」「」」

騒然となる店内

「マサ!どづいうこと!」

「そつだよマサさん!」

「マサナリ?理由を話して下さい」

「マサ君?私も知りたいわ?」

いやね?そんな詰め寄られても?っつてうお!

「ちょマサ!どづいうことだよ!」

リト!やっぱしか?そうなるわな?リトは?けどけど...

「まあまあちいと来い!」

リトを店の外に連れだして懐から二枚のチケットを取り出す。

「ほれ?」  
「レ?」

「へっ?」

ふむ・・・イキナリ過ぎか？どれ説明せにやな？

「プレゼントだ？まだちいと早えがな？春菜と行ってこい？」

そうコレが俺ん考えてた頼みってやつ。

「えっ・・・なんで？」

ってオイオイリト君？

「誕生日その日だろ？だったら惚れたヤツと過ごすのも悪かねえ・・・  
なんつってな？頑張れや？」

「えっ・・・あっ・・・マサ・・・あっ・・・ありがとう」

フツ・・・

「なあに気にすんな親友！」

バンバン背中を叩く。

「痛いっつの！！」

手加減しとりますってば！そんな感じでリトと戯れてたら

「「「「「ホッ・・・」「」「」「」

何故かホツとしたようなため息が聞こえた気がしました。



はて？チラツと見てみたらララを筆頭に何人かが盗み見てたらしい慌てて顔を引っ込めていました

何しとるんだアイツらは？

あっちなみに春菜は見てなかったぞ？里沙未央は見てたけど。

とまあこんな感じで学園祭は『カフェ・スプーキーズ』の勝利にて幕を閉じたのでありました。

とっぴんばらりのぷ。

・  
・  
・  
・

オマケの里沙未央

「フフフ・・・喫茶店勝負はマサマサに負けたけど・・・真の勝利者は私達！」

「うんうん！スッゴいよ売り上げ！」

ン？何の売り上げかって？フフンわかってるくせに？

そっ！マサマサのセミヌード写真！裏ルートで販売してたのさ！

もうね？バカスカ売れたね！ララちいや唯にゃん美柑ちゃんにヤ

ミヤミ他にも天条院先輩とかとりあえずマサマサの知り合いは殆ど買ってたね？

ちなみに私と未央も個人的に何枚かは押さえてある！そこら辺は抜かりなしってね？

それにしてもマサマサの写真が凄いのは女子だけじゃなくて男子にも売れてるってとこなんだよね？

あつバラ的な意味じゃないからあしからず！なんか憧れのな感じみたい。

まっとにかく売りが凄かったってことは確か！

コレは

「来年もしなければなりませんな〜未央さんや？」

「おやおや？悪いお人だ里沙さんや」

「「プツ・・・アハハハ！！」」

思わず笑いあう私達！いやぁ楽し〜

『ポン！』

ン？

「随分と楽しそうだなあ里沙君？未央君？俺も混ぜてくれよ？」

「まつ……マサマサ?」「」

アレなんだろ?マサマサ笑顔なのに……震えが止まらない……

「さっ?遊ぼうか?」

『ニタリ』

「「イツイヤアアアア!?!?!」」

それから先のことは思い出したくないし余り覚えていない。

ただ一つだけハッキリしてることはある

それは……

人は恐怖でも死にかけるってことだよ!!

第三十三話っぱい感じ！（後書き）

後書き

ええ今回！

春菜はやっぱりリトで！となりました！まあまだ完全にはアレですが。

ちなみに次回の分も既に出てます、というか次回の方が早く終わりました。

不思議なことがあるものです。

ではまた次回に！

## 第三十四話っぽい感じ！（前書き）

前書き

連投です！

アノ人の登場です。

そして苦手な戦闘描写が・・・

けど頑張りました！

クスリを持ってどうぞ！

## 第三十四話 っぽい感じ！

「よっしっひげッ！」

『グッ』

起き上がった時に腹から熱い物が逆流し競り上がってくる

「ペッ！！」

『ビチャ』

口から出たのは赤黒い血・・・アア〜こりゃ内臓もイツちまったか？

左手は動かねえ・・・ってわけじゃねえが・・・完全に明後日の方向いてやがるし？

「ハアハアハア・・・しっこいぞ地球人！」

「うるぜえよ？どっつあんぼつや・・・」

ああ〜呂律もまわんねえんでやんの？

「まだ減らず口を叩くか地球人・・・」

『ダン！』

真っ直ぐに俺に向かって突っ込み拳を奮うとっつぁんぼっや

『ゴッ!』

「ツ~~~~ガアアア!痛でえなオラアアア!」

その拳を顔面で受けつつもそのまま右手で掴み引き寄せ

「ダラアア!」

『ガゴッ!』

頭突き!!

「ガッ・・・!」

『ザッ』

それを受けよるめきながら額を抑え

「こっの石アタマがッ!」

文句を言つとっつぁんぼっや

ハッ!ざまあ!

「いい加減沈め!!地球人!!」

「デメエが沈めや!とっつぁんぼっや!」

それを皮切りに再び始まる殴り合い。

『ガゴツ！ドガツ！ゴギヤ！』

何も無い場所に俺達の殴り合う音が響く。

ああ〜なんで俺？こんなバケモンと喧嘩してんだ？

なんか意識が朦朧としすぎて思い出せなくなってきた・・・

俺と喧嘩してる相手とっつぁんぼつや・・・確か・・・ギドつっ  
たか？

ララの・・・

・  
・  
・  
・

ララ視点

「わざわざ学校に来てどうしたの？ザスティン？」

今日の放課後急にザスティンが学校に来たおごづかいからまだあ  
るんだけどな？口には出さないけどそう思いながらザスティンに用  
件を聞く。

「ララ様・・・大切な話があります・・・」

ン？大切な話し？なんだろう？



「実は・・・」

「ええええ~~~~~!!??」

ザステインの話しを聞いて思わず大声を上げてしまった。

・  
・  
・  
・

リト視点

「ふあ~~~~ようやく放課後か・・・」

今日も疲れた・・・主にマサのせい!

ホントに参るよな・・・

まあなんだかんだで俺も色々助けてもらったりしてるけど

それに

『ピラッ』

カバンから取り出したのは映画のチケット。

マサがくれたものだ・・・しかもペア!

あの学園祭の対決でマサのこの喫茶店が勝ってマサが春菜ちゃ

んに

「では俺の頼みな？春菜10月16日に街のそうね？ネコ像の前に来てくれ以上！！」

って春菜ちゃんを誘ってたそれで回りは大騒ぎ特にララとルン古手川それに二年の天条院先輩達が凄かった初岡とかは面白いがってたけど。

もちろん俺も

「ちょッ！マサどういことだよ！」

ってマサに詰め寄ってしまった、そんな俺をマサは

「まあまあちいと来い！」

と言って教室の外に連れだして

「ほれ？コレ？」

って言って二枚の映画のチケットを俺に渡し。

「プレゼントだ？まだちいと早えがな？春菜と行ってこい」

思わず固まる俺にマサはニカッと笑いながら

「誕生日その日だろ？だったら惚れたやつと過ごすのも悪かねえ・・・  
・なんつってな？頑張れや？」

バンバンと背中を叩きそう言ったんだよな？

イキナリすぎだったけど嬉しかった。

まあ春菜ちゃんと二人きりっていうのは凄い・・・き・・・緊張するけど。

ああ・・・まだ先の話なのに今から緊張してどうするんだよ！  
せつかくマサがお膳立てしてくれたんだ頑張れ俺！

前よりは全然話せるようになったし！大丈夫きつと！

ってそついやララはどこ行ったんだ？マサとヤミは放課後もまた用務の仕事があるから先に帰っていいって言ってたけど。

ってアレ？アレは・・・天条院先輩？それに近くにいる子供は誰だ？先輩達の弟か？  
なんか違うような気が・・・

「オンブしてよキレイなお姉ちゃん？」

そんなことを考えてたらその子供が天条院先輩にオンブをせがんでいた。

天条院先輩はスツとその子供に背を向けてしゃがみ込む。

結構優しいところがあるみたいだな？ちょっと変な人だけど。

『ニヤリ』

ってなんだアノ子供？なんか笑い方が邪悪っていうか確実に何かしらやらかそうとしてる笑いだけど。

「それッ！」

『モミモミ』

ゲッ！あ……あの子供！て……天条院先輩のむ……胸を！

「あははは〜」

「ななな……」

楽しそうに笑う子供、それに反して座り込んでしまった天条院先輩。  
輩。

「おっお待ちなさい！」

「よくも沙姫さまの胸を！！」

そして始まる追いかっこ……って

「それそれ〜〜」

『バツバツ』

「キャッ！……」

「ッ!？」

スツスカートをめくりやがっ・・・・・・・・・・・・・・・・  
・・・・・・・・・・・・・・・・つて一瞬意識が!!

「ゲッ!!」

気付いたらあの子供がすぐ目の前までつてアッ!なんかイヤな予  
感が・・・

「お兄ちゃん助けて〜怖いお姉ちゃん達がいじめる〜」

つてやめろ!抱き着くな!仲間と思われ

「お兄ちゃん・・・アナタの差し金ですか?」

つてヤバイヤバイ!

「違っ!ホント違っ!」

必死で弁明。

「結城 リトか沙姫さま政成の友だからそういつことではないでしょ  
う」

おっおっ!なっなんとか助か

「ええ〜〜お兄ちゃんがやってこいって言ったじゃん」

「オイイイ！出鱈目いっ」

『ゾクリ』

すっすげえ寒気が・・・恐る恐る前を見る。

「フフ・・・マサナリさんにもまだ揉ませていないのに・・・許しませんわ!!」

『ズチャ』

バッバズーカ！なっなんでそんなもん持って！

「結城リト・・・大人しく縛につけ・・・何・・・悪いようにはしない」

『チャキ』

ってコツチは木刀だけど切っ先が赤い~~~~~確実に血で濡れてる~~~~~！

「えっと・・・そういうのはいけないと思います」

『バツ』

あつメガネの先輩は良心的かもハリセンだし・・・って

「言ってる場合かアアア！ホントに違うんだアアア！」

「「「問答無用!!」「」」

だあああ!なんで・・・とりあえず今は逃げる!

『ズダダダ!』

「「「待て~~~~~」「」」

待てるかアアア!!!

『コケツ』

ゲツ躓い・・・

『ズドオン!ガキン!バチン!』

「ギヤアアア!!」

・  
・  
・  
・

「ハアハアハア・・・ひ・・・酷い目にあつた・・・」

最後はなんとかわかってもらえたけど・・・

しかしあの子供なんだったんだ?いつの間にかいなくなって

『ズドオン』

今の音・・・テニス部から・・・

!!

急いでテニス部まで行くとそこには立ったまま気絶してる佐清その横には大穴が空いていてケタケタと笑うあの子供。

「ハツハツハッ当てないでやったぜ？感謝しろ〜」

このパワー・・・宇宙人？

「じゃ後は好きにさして貰うぜ〜〜ハツハツハッパラダイ〜ス！  
」

『バツ！モミモミ』

「イヤ〜ン」

「ちょ胸は・・・アツ・・・！」

ってオイ何やって・・・ハツ！アイツ春菜ちゃんの方を見る！  
春菜ちゃん！

「春菜ちゃん逃げるぞ！」

「えつりト君？キャツ！」

『グッ！』



あんな変な子供に春菜ちゃんを触らせてたまるかと春菜ちゃんの手を掴み逃げる。

『ズダダダ!』

「リト君? ちょなんで?」

「アイツ絶対! 宇宙人! しかも変態!」

走りながら春菜ちゃんにそういう、あんなふざけたパワー宇宙人以外に・・・一瞬頭の中でマサが「やつほくく!」と手を振ってる気がしたが気にしないことにした。

『ズダダダ・・・ガチャ!』

必死で走って辿り着いたのは屋上。

「ハアハアハア・・・ここ・・・ここまでくれば・・・」

「おい! 俺様から逃げ切れると思ってんのか?」

はっ? 慌てて背中を見てみればあの子供!

「いつ・・・いつの間に・・・」

俺の疑問に子供はケタケタと笑うだけ。そんな俺に

「あれ? リト? どうしたのハルナも?」

かけられる声ララダザスティンもいる。

「ララ！なんか変な子供が！！」

背中に引っ付いてる子供を指差しながらララにそっぴいと子供は

「よう？ララクしぶりだな？」

とララにアイサツをしている知り合い？まさか婚約者候補ってやつか？一瞬その考えが過ぎったがララが言った言葉は

「パパ！！」

予想とは全然違う物だった・・・って

「パパアアア！？」

思わず大声を上げてる俺と春菜ちゃん・・・パパって・・・ちよ  
ッちよつと待て！

いつの間にか背中から降りたあの子供を見ながら

「何言ってるんだよララ！コイツどう見ても子供だぞ！？」

俺の疑問にはララではなくザスティンが

「いや・・・」

バツとあの子供にひざまずき

「そのお方こそ間違はなく銀河を束ねる我等が王・・・ララさまの

お父上だ」

「ザステインのこの態度・・・まさかホントに？

「ククツ・・・そーゆこつた？見た目で判断してるようじゃ

『シユル』

「この宇宙じゃ生きていけないぜ？」

尻尾？

「俺がデビルーク王！ギド・ルシオン・デビルークだ!!」

「どうやら事実みたいだ。だとしたら一体何故？」

「ララ？俺が何のために地球へ来たかザステインから聞いているな？俺の後継者・・・つまりオマエの結婚相手が正式に決まった」

え？どういう？

「それは・・・ここにいるコイツ・・・鬼島 政成だ!!」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・  
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・  
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・  
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・  
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「あ~~~~」

「ん？どうした嬉しいだろ？」

いや・・・あの・・・

「パパ？あのね？この人はリトだよ？マサじゃないよ？」

「・・・コクコク」「」

ララの言葉に頷く俺と春菜ちゃんそれにザスティン。

「はっ？だつてララ？コイツの家に・・・つて確か居候先がそんな名前の奴だつたよな・・・」

何やら考えだすララの親父。

「ダアア~~~~地球人の男の顔など一々覚えてられるかアアア！めんどくさい！」

そんなこと言われても？

「ええ〜い！だつたらその鬼島 政成とやらはどこにいる！」

いやだからそんなこと言われても？とそんな時だった

『ガチャ』

「ン？何まだ帰えつてなかったんか？つてザスティン？オマエ何してんの？つか誰？このチビツ子？」

マサ？

マサ視点

「はぁ？何？このとつっあんぼうやララの親父なわけ？」

何となく屋上に顔を出してみたらララを初めリトに春菜、さらにはザステインに知らないチビツ子？どうやらララの親父らしいなんとなくとつっあんぼうやと名付けてみた。

「と・・・とつっあんぼうやだと？」

なんかピクピクしてるが知らんがな？もう完全に俺ん中ではとつっあんぼうやなのだよ。

「まっまあいい！とにかく鬼島 政成！喜べ！オマエは俺の後継者に選ばれたぞ！オマエに関する報告はザステインから受けている！貧弱な地球人にしては中々に高い戦闘力を有してるらしいな？ザステインを倒せるくらいなら俺も安心して後を任せられそうだ」

ふむ・・・コイツは何を言ってるんだ？

「嬉しいだろララ？ララの意志を尊重した！どうだ？コレでコイツは正式な婚約者だ！」

「私の意志？」

「フハハハ！そうだ！俺も中々いい親父だろ？ハハハ！」

ふうん・・・へえ・・・へえ・・・

『ピキピキ』

「ざけんなボケ？俺の意志は？ねえじゃねえか？どこにもよオ？」

「・・・なんだ？まさか・・・イヤだとしても言つつもりか？」

『ズオツ！ビキツ・・・ピシピシピシ』

なんだコイツ？キレたのか？とつつあんぼつやの回りコンクリにヒビが入ってやがる。

まあだからってビビる俺じゃねえんだよ

「ああイヤだね！俺自身がララに惚れてねエ！ンなんで結婚なんかしちまつたらララにも失礼だろうがよ！ンなこともわかんねえのかボケスが！」

結婚つてなあお互いが惚れてこそだろうが！

「クク・・・生意気を口を・・・少しばかり強いからと自惚れたか？たかが地球人ごときか？地球ごとツブしてやるうか俺が力を開放すればたやすいぞ」

はあ？こんクソガキヤ？何言つて

「パパ！」

ララ？

「私！マサとは結婚・・・したいけど・・・無理矢理はイヤ！一方的に結婚しても嬉しくない！ちゃんとマサに女の子として好きになってもらわないと意味がないの！」

「ララ・・・ハハ・・・ラランやつ・・・わあってんじゃんか？いつも結婚結婚！言ってるわりに？」

「ララ・・・俺はオマエを気持ち優先してだな！」

「うそ！ホントは王位を早くゆずって遊びたいだけでしょ！」

「なぬ？マジかコイツ・・・？」

「うっ！！！」

「凶星かよ・・・この・・・とっつあんぼつやは・・・ハハ・・・」

「なあラリア？」

「えっマサ？どうし・・・あの顔怖いよ？」

「ん？そうかあ？チラツとリトと春菜ザステインを見たら三人共青い顔してやがる、そんなに凶暴な顔してるかねエ？」

「まあいいや・・・」

「俺さあオマエに初めて会った時によオ・・・確か・・・なんつったつけ？ああそうだったそうだった！オマエん親父をブツ飛ばすつたんだよなア？そうだったそうだった・・・悪いな？言った通り

ブツ飛ばすわ」

「はっ？脆弱な地球人が銀河最強の魔王と言われる俺をか？ハハハ！なんの冗談だ？」

冗談？冗談ねエ？

「冗談じゃねえよボクちゃん？『最強』？ハッ！『最強』程度で吹き上がってんじゃねえぞ？とつつあんぼうやアア？」

「キサマ・・・余り調子にノルなよ？俺は気が短いんだ？」

「奇遇だなあ？俺も気が短いけえんだよ？つつかかなあ・・・とつくの昔にブツちぎれんだよボケエエエ！」

『ギシリ』

俺と奴を中心にした空間が歪む感じ。

「クク・・・いいだろう生意気な地球人に宇宙の広さを教えてやる」！

『ピッ・・・ヴォーン！』

とつつあんぼうやが懐から取り出したボタンを押すとそこには広い空間が広がっている。

「俺が力を開放して暴れたらこんな星など持たないからな？ココなら暴れても問題はない」



へえ・・・

「コッチも好都合だわ？」

俺も似たようなもんだしよオ？

「マサ！マサ～～」

ン？

「なんでララン声が聞こえんだ？」

「コッチの姿は向こうには見えるからな？ザスティンがやたらとキサマのことを押すのでな？キサマの自惚れを見てもらつアラにもアノ地球人達にもな？」

ふん・・・あつそ？

「まあいいわ・・・」

『ゴキゴキン！』

クビを回しながら指を鳴らす。

「やるツ！？」

『ダン！』

なっ速え！

『ガゴツ!!ヒューンズドォーン』

「ハッ!わかったか地球人?コレが銀河最強の力だ!」

「つたく・・・何勝ち誇ってやがんだか?

『ムクリ』

「ああ〜やるじゃねえかとつつあんぼうや?ジジイ以外に顔面殴られて血い出すなんざあ久々だぜ」

「口元の血を拭いながらそう言う俺。

「ほう?地球人にしては頑丈だな?ツ!!」

『ダンツ!!』

「はっまたかよ?

「ナメんな!オラツ!」

『ガツ!』

「迫る拳にカウンターの右!

『ズザザ』

「グッ!チィこの速さに着いてくるか!」

一回見りゃ覚えるわ！それに速えが速過ぎはしねえよッ！！手を地面につけてるとっつぁんぼつやに向かい。

「オラッ！」

『ギユル！ズドン』

胴回し回転蹴り！

「チィ！」

『シユン』

避けられた・・・けど計算済み！

『バツ！グルン』

手を地面につけた態勢から水面蹴りで足を払う。

「うおっ！」

足を払われ宙に浮いたやつに水面蹴りの回転を利用した

『ギユン！ゴッ！』

右フック！！

「ガッハ！！！」

『ギューンズドオオン!』

後方へ吹き飛ぶとっつぁんぼつや・・・ざあまあ!

「オラ立てや?」

土煙りがあがるそこを見ながら一言。まあこんなもんじゃ終わりやしねえだろうしな?

『ヒュオツ!』

風が吹き土煙りがはれる・・・っては?

「誰だオマエ?」

そこに立ってたのはとっつぁんぼつやじゃなくて俺よりちよい低いくらいの身長な男。

「クク・・・中々強いじゃないか?」

ってコノ声・・・

「オマエ・・・とっつぁんぼつやか?」

「とっつぁんぼつやと呼ぶんじゃない・・・まあいい・・・銀河統一戦争の時に力を使いすぎたからな?やむなく子供の姿になっていたが・・・」

『グオツ!』

「コッチが本当の姿だ!」

『ヒュン!』

さつきよか段違いに速え!!見え・・・

『ズドム!ゴキッ』

腹!?チイ肋骨イッたか?

「ガッハ・・・テムエはどこか念能力者だッ!」

『ブオッ!』

左を振るう。

『バシッ!!!』

受け止められ・・・マズッ!

「フッ!!」

『ゴキヤ!』

そのまま左腕に肘を落とされる!クソが!

「ラアア!」

咄嗟の前蹴りで距離をとる、しかしそんなのお構いなしに

「銀河最強をナメるなよ?」

『ズガガガガガ！』

拳の雨！何とかやり過ぎそうとするが・・・速え上に重え！

クツ・・・マジでシャレにならねえ・・・守ってたらジリ貧だわ・

・

「ガアアア！」

『ズドドドド！』

反撃に撃つてでるそこから始まる殴りあい、チィ左腕がロクに動かねえ・・・さっきのでイカれたか？

それに俺あ『全力』で殴ってるつうのに・・・効いてるのか効いてねエのか・・・しかも左腕のせいかとつつあんぼうやの方が手数が多い・・・

マジで強えわコイツ・・・

「ハハハ！やるじゃないか地球人！俺とここまでやり合えるやつなぞそうそっくないぞ！」

「そいつぁ・・・どうもッ！」

コイツまだ余裕がありやがる・・・こちららそこまで余裕はねえつうのに！

『バチバチバチ』

「だが・・・コレで終わりだ・・・死ぬかもしれんがな？」

アツ・・・なんだあとつつぁんぼうやの尻尾の部分が放電して

「フン！！」

『カツ！バオオオオン！』

凄まじい轟音と激痛吹き飛ぶ俺・・・マズった・・・

・  
・  
・  
・

ララ視点

「マサアアア！！」

パパ・・・なんてことを！

パパが撃つたのはパパの切り札、尻尾にエネルギーを溜めてそれをたたき付けるっていう単純な技だけど威力は凄い星なんて簡単に壊せるくらいに。

そんな危険な技をマサにするなんて・・・

マサとパパが喧嘩を始めた時に止めるべきだったんだ・・・パパが本気を出すなんて思わなかった。

イキナリ過ぎてほうけてしまっていた少し前の私を叩きたい。

ジワリと涙が浮かぶ・・・マサが・・・死んじやったかもしれない・・・足が震える。

怖い・・・なんでこんなことになっちゃったんだろう・・・

ガタガタと震える私に

「プリンセス・・・マサナリは私のターゲットです・・・こんなことで死ぬなんて・・・ないです」

いつの間にか屋上に来たヤミちゃんがそう言ってくれる・・・けど！・・・

その時だった

「よっくらぜ！」

マサ・・・生きてた！顔は何時もの顔じゃなくてポコポコに腫れちゃってる

左の手なんて全然違う方を向いちゃってる

でも生きてた・・・

私がマサが生きてたことに安心をした・・・けど

・・・『トーン！』・・・  
・・・『トーン！』・・・  
・・・『トーン！』・・・

さっきよりも激しく闘い始めるマサとパパ余りの速さに私の目で



も見えない音だけが聞こえる。

けど・・・コレ以上やったらマサが死んじゃう！！

なんでこんなことになっちゃったんだろっ？

私がお姫さまだから？

婚約者候補がいるから？

だったら・・・

『ピッ』

デダイヤルからある道具を取り出す。

「ララ・・・それなんだ？」

リトが私の出した道具のことを聞いてくる

「『ばいばいメモリーくん』コレで地球のみんなから私の記憶を消す」

「ララさん何を！」

ハルナ・・・ごめんね？

「パパとマサは私がプリンセスで婚約者候補だから喧嘩を始めちゃった・・・だからね？・・・プリンセスとか婚約者とかそういうの無しでゼロからマサと始めた」

私がそこまで言った時だった

「バカがデメエツ!!」

「ひっッ!」

響くマサの大声

「ペッ！俺が何時ラランころをそんな目で見た！俺はなあオマエが姫さんだからダチなわけじゃねえんだよ！オマエがララだからだろうがッ！このドバカが!!それに・・・俺が喧嘩してんなあ・・・『俺』が気にいらねえからだボケエエエ!」

マサ？

「プリンセスウ？婚約者候補オ？知ったことかアアア！んなふざけた物使いやがったらなマジで許さねえぞコノ大バカがアアア!!」

ハハ・・・

「バカじゃないもん・・・」

「バカだろ?」

「バカだよ?」

「バカです」

「ララさま失礼ながら私もバカだと言わせていただきます」

ヒドイなあ・・・みんな揃ってさ・・・ザスティンまで一緒にな  
って。

でも確かに私バカだった・・・そうだよな？マサは私を私として  
見てくれてたよね？だから好きになつたのにバカだなあ私？

・  
・  
・  
・

マサ視点

「オマエなあ人の娘をバカバカと・・・俺の・・・親の前だぞ？」

「バカだろうがよ？」

このとつつあんぼつやも相当だけだよ？

「フツ・・・それだけポロボロのくせに口は減らないやつだ・・・  
気にいったぞ鬼島 政成？」

「オマエだつて似たようなもんだろうが？つかフルネームで呼ぶな  
や？」

「そうだなマサナリよ？さて・・・そろそろ終わらせるぞ？」

『バチバチバチ』

チツ・・・さっきのアレかよ？ナメンじゃねえぞ？

「先程より強力だぞ？なにせ」

『ギユオ！ゴゴゴゴッ！！』

「全力だからな？」

ハッ！上等！

「銀河最強の一撃・・・受けても立っ<sub>て</sub>いられるかアアア！」

『ヴアアア！ギャドオオオオン！！??？』

視界が白く染まる・・・

意識が弾けかける・・・

体を重い衝撃が貫く・・・

膝を尽きたくなる・・・

けど・・・

『グッ！』

「ざけんなよ・・・『最強』程度で躓いてたらよ・・・『最高』<sub>ツツ</sub>に  
は勝てねエんだよ！！！」

尻尾を握りそのままヤツを

「ガアアア！」

『ズドオオオン！！！！！！！！！！』

地面に叩きつける！

「ガツハア！」

全力も全力！火事場のクソ力で叩きつけたんだ！流石に効いたろ？

『グッ』

しかしとつつぁんぼつや膝に手をつきながらも立ち上がる。とす  
る。

「ハアハアハア・・・」

そんなとつつぁんぼつやの目の前に立ち

ニカツと笑い

「オラッ！」

『ゴガンツツツ！！！！』

右の拳を叩き落とす・・・

『フラ・・・』

チィ・・・クラクラしらがんな？やっぱアレが効いてるか？根性

入れねえとブツ倒れそうだ。

「ハアハア・・・まだやるかよ？」

「ハアハアハア・・・体に力が入らん・・・もう立てんわ！この姿も限界だしな」

『カッ』

とっつあんぼつやの体が光り小さい状態に  
ハハ・・・

「俺の勝ち・・・だな？」

「まさか地球人に黒星を付けらるとはな・・・」

ハッ！

「バグキャラナメんなよ？つと・・・」

そう言いながらとっつあんぼつやをヒョイと担ぐ

「ああ~~~~痛え・・・オラとつとと屋上に戻せ」

体がギシギシいつてんだよ・・・

「フン」

『ピッ！ヴォン』

「マサ！」

おっララ？屋上に戻ったか？つと

「ララ？来い！」

「えっ？」

ちよいちよいとララを手招きし近寄ってきたララに

「ラッ！」

『ガスン！』

「いたッ！！」

ゲンコ！で続けてララが持ってた変な装置を奪い

『グシヤ』

握り潰す

「あっ『ばいばいメモリーくん』」

ビックリ顔のララに

「二度とこんなもん作るな？作ったら百発ゲンコだからな？」

「うん……うん……ごめんなさい……作らない……絶対に」

よしよしっ！と！さてやることあやったし・・・

「悪いリト？帰り・・・ヨロシク・・・」

『ドサッ』

限界が来ていた意識を飛ばした

・  
・  
・  
・

ララ視点

「悪いリト？帰り・・・ヨロシク・・・」

『ドサッ』

「マサ！！」

倒れたマサに慌てて駆け寄る。

「帰りつてコレ病院だろ！救急車！」

リトが慌てて病院に電話をかけようとするそこへ

『ガチャ』

「結城君！ガ克蘭君を保健室へ運んで！」



ミカド先生が屋上に来てくれた見てみたい。

「俺も運んでくれると嬉しいんだがな？」

パパ？

「パパ！やり過ぎだよ！」

「仕方ないだろ！たかが地球人があそこまで強いとは思わなかったんだ！しかもマサナリのやつ殴りあいの中で強くなっていきやがった・・・どうなってるんだコイツは？」

「それでもやり過ぎ！パパのバカ！」

「親に向かってバカとはなんだバカとは・・・ツツ・・・大声出させるからキズに響くだろ！」

知らない！

「コラ喧嘩してる場合じゃないでしょ！早く！」

ハッ！そうだった！急いでマサと一応パパも保健室に運ぶ！

そしてマサとパパのことをミカド先生が診察して

「全治三ヶ月ってどこね？よくコノ体で暴れることが出来たわね？普通ならとつくに死んでるわよ」

診断の結果マサは全治三ヶ月の重傷パパはそこまで重傷じゃないみたいけど。

マサ無茶しすぎだよ・・・

「とりあえずガクラン君は暫く私のところで面倒ん見るわ？治療ポツドを使えば少しは早く治るはずよデビルーク王は・・・治療ポツドの必要はなさそうね？」

マサのことは凄く心配だったけどミカド先生の言う通りにマサをミカド先生に頼んでその日は私達はパパを連れてお家に帰ることにお家に帰って美柑に事情を話したら美柑も凄く心配してた。

そして私は

「痛い！痛いわ！」

「パパ我慢してマサはもっと痛いんだから！」

ちよこつとパパに八つ当たりしながらもパパの看病をする、ホントはマサの看病もしたかったんだけどミカド先生がダメだって言うてたし。

ひそかに

「えっとララさんのお父さん？ご飯です」

「おっ悪いな結城 美柑・・・って辛！辛いぞコレ！」

「あっ味付け間違えたかも？」

美柑や

「デビルーク王？マサナリに教えて貰った整体をして差し上げます体の治りが速まりますので」

「ん？金色の闇か・・・いや別にいい・・・イヤな予感が・・・」

「遠慮せずに」

『ゴキゴキゴキー！』

「グアアア！いいと言っただろオオオ！」

ヤミちゃんも八つ当たり！

その後ろでリトがそっと手を合わせていたのが印象的だった。

そんな日々が三日くらい続いた後

夜に

『ピンポーン』

って玄関からチャイムの音が鳴るパパを残した全員で玄関まで出ていきドアを開けたらそこには

「たっただいま〜！元気か諸君？」

「『『『マサアアア！（さん）（マサナリ）』』』」

全治三ヶ月のはずのマサが立っていた顔にはまだバンソウコウと  
か張ってあるけど凄く元気そう。

「やっぱり驚くわよね?」

あつミカド先生も一緒にいたい?

「ドクターミカド?マサナリは?」

「平気も平気よ?私が学校から帰ってきたら腹が減った〜って冷蔵  
庫荒らされてたわ」

「いやそこはスンマセン!猛烈に腹が減ってたもんで?」

うん何時ものマサだ!エヘヘ

「マサアアア!」

「リトガード!」

「やっぱりかよ!」

うん・・・コレも何時も通りだ・・・グスン・・・ちょっとくら  
いいいのに・・・

「何時も通りだね?マサさん全治三ヶ月って聞いてたから心配した  
んだよ?」

「悪いね心配かけちゃって？」

美柑の言葉に謝りながら撫でるマサ・・・むう！

「ほれ？」

「エへへへ」

私も撫でてくれた！それからヤミちゃんにミカド先生何故かリトも撫でられてた

「それにしてもマサ？ホントに治るの早かったな？御門先生の治療ポッドってそんなに凄いのか？」

リトの疑問にミカド先生は

「普通なら三ヶ月が一ヶ月になる程度よ？それを三日って・・・ホントにガクラン君どうなってるのかしら？解剖」

「NO解剖で！」

「残念？」

私はマサが早く治って嬉しいけどな？

でそれからマサが治ったっていうことでちょっとしたパーティーをひらいた。

たった三日だけど久しぶりに感じるマサのタマゴ焼きはとっても美味しかった。

それとパパがマサのことを

「息子よ？」

と言い出したパパが言うには

「俺を倒せる程のヤツだぞ？コイツが息子になったらデビルークは安泰だハッハッハ！ララ！コイツを逃がすなよ！」

ってことみたい・・・また勝手なことを言って！って思ったけど私はマサを逃がすつもりはない！

だから

「うん！絶対マサに好きになってもらうんだ！女の子としてね！」

何度目かの誓い！きつとマサに好きになってもらう！

そんな私にパパは

「頑張れよララ！ン？そうだ・・・モモにナナも纏めて面倒を見てもらうか？フハハ！何せマサナリは銀河最強の俺を倒したんだ重婚くらい構わんだろ！ハハハ！」

パパ・・・

「構うわ！ボケエエエ！アホかとっつぁんぼつやアアア！」

『コイツ』

「ガハッ！ちょ！待て俺はまだ体が治ってないんだぞ！」

「知るかオラアアア！」

ああ・・・また喧嘩始めちゃった・・・

前程本気じゃないけどね？

けど・・・うん・・・纏めてかあ～～～ちよつといいかも？

私はそう思ったのだった。

それからパパはミカド先生の薬で体は治りデビルーク星に帰っていった。

「こんな薬があるんだつたら最初から渡してくれよ？」

ミカド先生にちよつとだけ文句を言ってたけどね？・

・  
・  
・

ちよこつとザステイン

「流石は私の主になるお方！まさかデビルーク王を倒してしまうとは」

私を見る目は確かだった！

「このお方こそララさまに相應しい！」

「このザステイン！マサナリさまに一生ついていきますぞ！」

・  
・  
・  
・

ちよこつとマサ

「なんかザステインが取り返しがつかんくらいに走りだした気が・  
・まあいいさね？面白いから」

ザステイン！オマエはそれでイケ！

面白いから！！



## 第三十四話っばい感じ！（後書き）

後書き

バグVS銀河最強の回でした！

しかしなんか地味な感じに・・・

あつても一応はめっさ速く動いてるんです！破壊力も半端ないですし？

わかりづらいけどね！あつ後マサは【限界突破】で強くなっていたという感じでヨロシク願います！次にやったらコレ程は苦戦しません！

ン！コホン！

ええなんか色々言い訳っぽくなっておりますが次回！

次回もまた頑張っていきたいと思しますのでまたよろしければ見てやって下さい。

感想などありましたら是非！

思い付きっばい感じ！（前書き）

前書き

活動方向でチラッと書いてみたボツネタです長くなっただんでツイ  
コチラへ？

主人公はマサではないです。

ちなみにリリカル世界という設定。

思い付きっぱい感じ！

コレはある意味不運で幸運な男の物語・・・

その男の名は東条 草太・・・

彼には親がいなかった・・・何故なら彼はコノ世界に生まれた人物ではなかったのだ

神の気まぐれ・・・

所謂ヒマ潰しにより彼は選ばれ生まれた世界から別の世界へと送られた。

元々両親は他界していたし彼自身も20を迎えようかという年頃であった、住んでたアパートも家賃滞納で追い出される寸前、そんな彼は住家も用意してくれるし生活資金なども送られるとの甘い蜜に飛び付いたのだ。

しかしコノ世界に送られた時の彼の姿はどうみても子供。

鏡の前で気が遠くなったものだったそんな彼の前にヒラヒラと一枚の紙が落ちてくる

パツとその紙を掴み見てみると手紙のようだ。

手紙には

『そっちの方が都合がいいからね？ほらストーリー的にも絡みや

すいつしょ？（笑）それに・・・』

「なんでやねん！！」

途中まで読んで半分に破り捨てた（笑）がシャクに触ったのだから仕方がないことだと思いたい。

そんな怒り浸透な彼の頭の上にポトリと落ちてくる謎の物体。

イライラした顔をしながらもその物体を手にとると物体はピコピコと点滅しながら彼にアイサツを初めた。

その物体はデバイスという物であった。

彼が送られた世界・・・『リリカルなのは』という魔法少女の物語だ。

一部では魔法ではなく魔砲と言われているが・・・

何せ極太の光線をバンバン放つような話である魔砲と呼ばれるも致し方ないと彼 草太も思っていた。

そんな話しはさて置きこのデバイスという物体

この物体は魔力という力を補助し増幅す魔法を可能にするという道具である

色々の種類があるようであるが彼が手にしたデバイスはインテリジェンスデバイスと呼ばれる物

デバイス自体にA・Iが組み込まれており知性のあるデバイスである。

名前は『ライフ』

ライフはやたらと草太のことを尊敬の眼差しで見ている……いや瞳は無いのだがそのような雰囲気なのだ。

何故？と草太が問う

ライフは彼のことを自身の世界を捨ててまでコノ世界におこりうる不幸や悲しみを救う為にやってきた真の勇者である！

と激しく間違った認識をしていた。

実際はただ目の前に出された住家の生活資金に飛び付いただけそんなつもりはミクロンたりともないのであるが……

彼は疲れた顔をしながらも正直にそのことを話したのだがライフは

『そのような悲しい目で嘘をつかれても私にはわかります……元の世界が忘れられないのでしょうか？私は……私だけはわかっていますから！』

全然わかっていなかった……疲れた顔がまずかったのかライフ自体がアレなのか……

手にしたデバイスのアレっぷりに思わずハラハラと涙が流れる草太である

しかしその行動もまずかった・・・ライフは

『今・・・今は泣いて下さい・・・私は何も見てませんから・・・』

原因はオマエである。

そつツツコミを入れる人はいなかった。

・  
・  
・  
・

アレからなんとか気持ちを立て直した草太はデバイスを起動してみようと思った。

デバイスの起動・・・コノ世界では魔法を使える人物を魔導士と呼ぶ魔導士はデバイスを起動することにより体にバリアジャケットと呼ばれる戦闘服を身につける

所謂変身ヒーローのソレである

そんな男の子の夢である変身が目のあるのだ試してみたくないので男の子だ

「俺だって男の子こういうのに憧れるのさ!」

とは彼の弁である20を過ぎたやつを男の子と呼ぶかは甚だ疑問であるが男は何時だって夢見る子供なんだし精神はともかく体は子供だ問題ナツシング!

「ライフ！セターアップ！！」

『カツ！』

彼を中心に部屋の中を白い光りが包む光りが晴れた先には

「アレ？ちよつアレ？」

全くもって先程の姿と変わらない草太の姿いや一つだけ変化して  
る部分があったそれは彼の足元

『カランコロン』

部屋に響く懐かしい音・・・チャンチャンコが似合う某妖怪と幽  
霊のハーフの少年の愛用の逸品である

「なんで下駄やねん！こんなもんどおーせえちゆうんじゃボケエエ  
エ！！！」

魂の叫びであった

そう彼が身につけたものはバリアジャケットではなく完全に下駄  
だった、まごうことなく下駄だった。

ひとしきり叫びガツクリと手をついた彼の前には先程半分に破り  
捨てた手紙

その手紙には

『それに・・・リンカーコア作る為にキミの年齢使ったんだよね、それでも魔力バリアジャケツト出来ないくらいに低低だけど！ププ、頑張ってね』』

「ウガアアアア！！」

細切れに破り捨てたのであった。

そんな彼を見ながらライフはコノ世界で生き抜くと決めた一人の高潔な勇者の決意の叫びと盛大に勘違いしていた。

しかし彼が決めたことは

「無理無理！下駄でどうせえちゅうんじやい！よし元々関わらないつもりだったけど今ので確定！危ない道は避けて通りましようって地球の歩き方にも書いてるもんな！」

逃げることであった・・・彼は足の速さ事逃げ足の速さには自身があつたのだ。

しかしハッキリ言おう・・・それは無理であると・・・

コレはある意味不運で幸運な男の物語・・・

男の名前は東条 草太・・・コノ物語の主人公である。



2なのはとの出会いはこんな感じ

・  
・  
・  
・

夕食の買い物ですましスタスタと家路に帰る草太は一応自炊ができるコレでも前の世界では一人暮らしが長かった方である。

無駄に凝り性のせいかと洋中様々な料理を習得している味もそれなりによい。

本日は中々に良い食材が安くで手に入ったのでホクホク顔である。

今日は何を作ろうか？アレか？それともコレか？

頭の中に本日の夕食のメニューを巡らしながら歩いている彼の横をトコトコと小学生くらいの女の子が通りすぎ

『ベチャ』

「ふにゃー！」

見事にコケた男の性についついスカートの中に目がいってしまった草太少年「ほう？ピンクか？うむうむネコさんマークが実にプリーチー！」と暢気に感想を漏らす

直ぐさま我にかえると今の自分の行動を振り返り何やってんだチ

クシヨールとガツクリ肩を落とす。

彼が肩を落としたのも仕方あるまい今の姿はともかく中身は20なのだそんな自分が小学生のパンチラに盛大に反応をしたのだアウトアウトアウトのトリプルプレーってなもんである。

彼の中では『国のお母さんも泣いてるぞ？カツ丼食うか？』とはぐれで純情なベテラン刑事の取調べが行われていたりする

そんな草太少年の横では先程転んだ女の子が見られてないよね？大丈夫だよな？と赤い顔をしながらもパタパタとスカートについた砂を落としていたりする。

しかし残念ながらバッチリガツチリ見られているのだ女の子は草太に気付くと

「み・・・見た？」

真つ赤な顔で確認をとるハツとその声で取調べ室から呼び戻された草太少年はバツと敬礼

「いえ自分はネコさんなんて全然知らないであります！ピンク色なんて全然わからないであります」

「にゃああ言わないでなの～～～」

ポコポコと叩かれる草太少年それにより自分の失態に気がついたのだが女の子の攻撃は全くもって痛くはない

こしょばいこしょばいってなもんだ見てしまったという罪悪感も手伝って暫くポコポコと叩かれていた草太少年だが結局すぐに女の子は体力が切れてしまいハアハアと息をはく。

そこでようやく

「ゴメンつい？でもわざとじゃないよホント？マジで？信じてお願い！俺の沽券の為に！」

謝り始めるのだが半分くらいは自身のメンツだ女の子はそんな草太少年の謝罪を

「うっうんそうだよな？転んだのは私だし叩いちゃってごめんさないの」

アツサリと受け入れ自分も悪かったと草太に謝るどうやら優しい子ようだ。コケンって何だろう？とクビを捻る姿が実に可愛いらしい。

「あの・・・キミって初めて見る顔だけど引越してきたの？」

女の子の質問に似たようなものだと思った草太少年は引越してきたばかりだと頷くと女の子はそうなんだとニパツと笑い

「あのね？私は高町　なのはっていうんだお友達になる？」

自己紹介をしながら友達になろうと言い手を差し出してきた引越したばかりで友達がいないだろうと草太少年を気遣っての行動なのだろう？実に優しい子だ。

そんな優しい女の子の手を草太少年も握り返そうとしピタッと動きが止まる

(待て・・・今・・・なんつて言った・・・高町　なのはって言わなかったか？まさか・・・いや聞き間違いだ！そうに違いない！)

僅かな希望を抱き女の子の名前をもう一度聞いてみる

「なのはだよ？」

なのはだった・・・

カチカチカチ

高町　なのは・・・該当一件

瞬間草太少年の脳裏に前の世界での学校に行っていた時代のクラスメイト達の会話が蘇る

バインドと呼ばれる捕縛魔法でギツチギチに縛り自由を奪い身動きが出来なくなった少女に躊躇いもなく極太のレーザーをブツ放す  
恐ろしい人物

いわく魔王・・・

恐ろしいのは自らを悪魔と呼ぶらしい自覚がある悪魔・・・なんと・・・なんと恐ろしきことか・・・

「どづしたの？」

クリツとクビを捻る姿はとても可愛らしく先程の笑顔など思わず草太少年もつられる程に良い笑顔だった・・・しかし今は逆にそれが恐ろしい。

（ヤベエ絶対ヤバイ！マジヤバイ！二日目にして魔王遭遇ってマジヤバイって！ひのきのぼうとオナベのフタで魔王に挑めと言ってるのか？無理無理無理！絶対無理！）

チラッなのはな方をチラ見してみればどうしたんだろうとクビを傾げ自分と友達はやなんだろうか？と若干涙目になってきている。

一瞬悪いことをしてしまったような気分になる草太少年だが必死に

（落ちて着け草太！コレは罠だ確かに見た目は可愛いし今の泣きそうな顔なんて思わずアメちゃんを上げたくなるが絶対背中にフアスナーがついてるんだ！そんで中には『キシヤーキシヤー』って鳴くなんか恐ろしい生物がいるんだ！そうに決まってる！騙されちゃダメだ！）

『ジワッ』

そんなことを思われてるとは知らない、なのはやっぱり自分と友達になるのはイヤなんだと思えば涙が出てくる

グラッ・・・その姿に草太少年の良心は盛大に揺らぎ

「ととと友達ないいいよ？うん大丈夫OK！嬉しいな〜こんな可愛い子と友達になれて？わ〜い」

ガシッと手を握りながらまくし立てる、なのはそんな草太少年の

言葉に先程とは違う意味で真っ赤になるのだった。

ちなみに草太少年

「えっとお名前を聞かせてほしいの?」

とのなのはの問いに最後のあがきとばかりに

「セバス・チャンです!」

偽名を使おうとしたが一瞬でウソだとバレ

「東条 草太です・・・ホントスンマセン・・・レーザーはカンベ  
ンして下さい。」

正直に名前を言い。

そんな草太少年を見ながらなのははレーザーって何だろうとクビ  
を捻るのであった。

はい超思い付きで書いてみました所謂勘違い系。

まあ続きはないんですけどね?

つい思いついたもので?

ちなみに主人公の名前は苗字の最初と名前の最初をくっつけると

東草 逃走

となります単純！

思い付きっばい感じ！（後書き）

後書き

三人称って久々と思った書いてる人でした。

今回は本編です。

ホントなんかスンマセンでした。



## 特別編っぽい感じ！その2（前書き）

前書き

ええ2回続けて本編ではありません。

コチラが先に上がったもので・・・

ええコノ話しは光軍さんの『白夜叉と鈴鳴の鬼』とのクロスで  
あります。

やっぱり非常にデキがエライこっちゃんに・・・

あつ銀魂のアレです詳しくは光軍さんの『白夜叉と鈴鳴の鬼』  
でどうぞ！

1288

ちなみに時代は原作ちょい前くらいな感じ？

大丈夫かコレ？

薬を持ってどうぞ。

## 特別編っぽい感じ！その2

洋基視点

「銀先輩〜ヒマや〜」

余りのヒマさについて銀先輩にそう声をかける俺！

ン？俺が何者かやと？

俺ん名前は浅倉 洋基や

まっ詳しくは光軍さんの『白夜叉と鈴鳴の鬼』を見たってや？  
説明下手くそやねん？

ン？その展開一度見た？そこは流せや！？そういうとこ突いとっ  
たら以下略や

後関西弁が変とかそういうのも無しの方角でお願いします！

そういうとこデリケートな部分だから！わかるだろ？そういうと  
こ？

ってアカン！強烈な電波んせいで思わず標準語になってもった。

「洋基く〜ん？オマエさつきからブツブツ何言ってるの？アレかヒ  
マすぎてアレになったか？ヅラアアア洋基がアレになったアアア！  
絆創膏もってきて〜人一人包めるくらいのオオオ！」

「ツラじゃない桂だ！絆創膏は今切らしてるコレで我慢しろ」

『スチャ』

「ってアレやないわアア！ツラ先輩も絆創膏要求されとるのになんでんまい棒を取り出しとんねん！」

「バカな・・・鎖羅魅サラムだぞ？」

「知らんわボケエエエエ！何コツチがおかしいみたいな空気出したらどないやねん！鎖羅魅サラムで何が解決すんねん！」

『サクサク』

「ばっか洋基？よく考えてみるよ？絆創膏絆創膏ふあんほうほう・・・うあんほう・・・んまい棒鎖羅魅サラム・・・な？ソックリだろ？」

「どこがやアアア！無理矢理にも程があるわアアア！」

「ではいらないと？」

「いらんとは言ってへんやろ！」

『『『サクサク』』』

んまい棒はやっぱ・・・んまい！？

ってアレ？なんで俺達んまい棒サクサクしとんのやる？

•  
なんや違う話ししとった気がすんねんけど・・・なんやったか・

『ヒューン』

なんやったか・・・

『ヒューン』

なんやった・・・

「洋基く〜ん〜そこ危ないよ〜」

「銀先輩ちよっ黙つといてんか！今考え事しと・・・ハッ？」

『ヒューン・・・』

ちャッ！ハッ！嘘やろ！待て待て待て・・・アカンて！ホンマありえへん！

「なんで人が降つて来とん」

『ズドオーン』

フ・・・思えば短い人生やった・・・せやけど俺は・・・ホンマ  
楽しかったわ・・・銀先輩・・・ツラ先輩ほな・・・松陽先生・・・  
今行くわ・・・

「なあその白髪さんや？アノ子大丈夫？なんかめっさブツブツ言  
い出してんだけど？」

「大丈夫じゃないな？オマエ絆創膏持つてな〜い？ひと一人包める  
くらいの？」

「銀時・・・流石にないだろ？とりあえずんまい棒コンボタイジユ混捕駄呪で」

「あるぜい？ほら？あつてもソレんまい棒？は食つ」

「おお〜じゃ包むか？あつ俺も食つ」

『ゴソゴソ・・・サクサク』

「って包まれてたまるかアアアアア！あつツラ先輩俺も食つ」

『サクサク』

やっぱりんまい棒はんまい！！

ってアレ？アレ？なんでんまい棒サクサクしとんのや？アレ？な  
んか違うやろ？ちゆうか・・・コイツ・・・誰？天人？

・  
・  
・  
・

マサ視点

んまい棒とやらをサクサクしてたら先程危つく衝突しそうになつた謎の青年にジーっと見られております。

まあそら急に人が落下してきたらそうなりますわな？普通は？

白髪さんと長髪さんは特に気にしてないっばいけど？

「なあオマエ誰や？空から降ってきたけど天人なんか？」

おっ？

「あまんと？何それ？」

「知らねえのかオマエ？どんな田舎もんでも天人は知ってんぞ？」

いやさ？白髪さんや？

「知らんもんは知らんのよ？つかココ何処？」

「江戸だ！」

江戸？いやいや江戸？いや確かに和服の人が多いけど？でもクルマとかブーンしとるよ？

はて？やっぱしアレ？やっぱアレ？例によって渡った感じ？よしでは……

「またかよ！まただよッ！！」

「おわっ！急に何言ってるんだオマエ？アレか故障ですか？頭に致命

的な欠陥でも負いましたか？」

「いやいや貴殿の髪程ではござらぬよ？」

「天パか！このクリンってなってる髪か！テメエに俺の天パの何がわかるってんだコラアアア！」

「あらあら？やだよコノ子ったら？そんなに怒っちゃって？カルシウム不足か？」

「取るカルシウム？」

「スツとミ〇ミ〇を渡します」

「仕方ねえな？銀さん心広えから許してやらア？」

「怒りを納める白髪さん流石はミ〇ミ〇だ！」

「今完全に賠償されたやろ？もののみごとに完璧に？」

「オイオイ洋基く〜ん？なんでそういう見方しかできないわけ？銀さん別にミ〇ミ〇に釣られたわけじゃないから？ただ純粹に心が広いだけだから？ホントそういう穿った見方しか出来ないなんて銀さんは悲しい」

「そつだぞ洋基？小さいことでグチグチとそれでも侍かッ！」

「ツラ先輩も貰ったんや？」

はいひそかに長髪さんにもミ〇ミ〇渡しました。

「ユーも飲む？」

「貰うわ……」

でぶつかりそうになった人にもミ〇ミ〇進呈みんなでミ〇ミ〇しました。

その時にお互い自己紹介。

ぶつかりそうになった人が浅倉 洋基で白髪さんが坂田 銀時  
通称銀さん、長髪さんが桂 小太郎 通称ツラ

「ツラじゃない桂だ！」

がキメ台詞らしい。

「キメ台詞じゃない桂だ！」

中々面白えッス。

後やっぱし俺が異世界渡ったついたら多少はビックリしてたけど宇宙人……ここでは天人つうらしいがいるんでまあそういうこともあるんじゃないかね？っと感じでした。

「でマサ？オマエどうすんのコレから？」

「どうしようかねえ？晩メシン仕度もあるし帰りたいんよな？」

「だったら俺に任せな？万事屋ん仕事を始めたところだからな？」

万事屋？はて？



「なんでも屋ってことや？」

クビを捻ってたら洋基君が教えてくれました。

なんでも屋かあ？俺も卒業したらやろうと思ってる候補に上がってんよな？

とか思いつつも

「俺金・・・はあっけど使えんコレ？」

ピラツと万券を20程取り出します

「・・・さあ張り切って行くぞオオオ！ヅラアア洋基イイイ！オマエらも手伝えエエエ！！！」

使えるらしいもつめっさ張り切っとります。

つか何故に使えんだ？とか思ったけどアレがアレになる感じなんで全力でスルー！

まあとにかく

「10人でカンベンな？俺も色々あつから？」

「十分！上客ゲットオオオ！コレで家賃が払える！！！」

銀さんカツカツらしい。

にしても今さらだけんど・・・なんか聞いたことあんだよな？銀時つう名前？何だったかねえ？

まっいいさね！

「とにかく手掛かりを捜しますか？」

つうわけで江戸ん街で聞き込みです。

「ところで政成君？キミ攘夷活動に興味はないか？今入ったらコノ攘夷志士タオルが」

「ヅラさんや？話し聞いてた？俺帰るつったじゃん？面白そうだけど無理よ？」

「残念だ・・・中々言い目をしていたのだが・・・あつヅラではない桂だ！」

途中で思い出したように言わんくても？  
面白えけど？

こんな感じでコチャコチャあつたりもしたけんどね！

あつちなみに聞き込みする時はなんか不思議な穴とか不思議な洞窟とか不思議な扉とかそんなあやふやな感じで聞くということになりました。

コノ辺は深くは聞かないでね？そういうところわかるだろ？みんななら？つてアレ？コレって既にやったような・・・

まあスルーで！

「何やっとなのやマッサージ？はよ行くで？」

「悪いね洋基君？つてアレ？銀さんやツラは？」

「二手に別れるんやと？マッサージは俺とや？」

なるほろ？あつちなみに俺は洋基にマッサージと呼ばれとります。  
あだ名を付けるんがクセなんだと？

「おけ！じゃ行くべ？」

「おう！ほな着いてきてや？」

スツタラスツタラ洋基君の後を着いていき

「オッチャン不思議な穴とか扉とかん話し聞いたことないか？」

「不思議な穴？いやらしい穴なら」

「指導！！」

『ガスツ！』

なんか危ない発言をしやがりかけたんで名もなきオッチャンには  
沈んでいただきました。

「マッサージ？オマエ何しとんねん？聞き込みが台なしやん？」

「俺ん中の指導の血が騒いだ！反省も後悔もしてない！」

「意外と潔癖やな？」

「まあよ？カッチカチやぞ？」

「それは鉄壁や？」

ナイスツツコミ！まあ実際はそこまで潔癖じゃないんだけどなんかクセみたくなってきてんだよな？

まあ普段は気絶する程はやらんけど。

「とにかく次に行きまっしょい！」

「せやな？オツチャン勘忍な？」

イイ顔で横たわってるオツチャンを放置して別の場所へと移動。

でコツコツ聞き込み。

たまに喧嘩も売られたりしたけどザクツと撃退。

洋基君結構強いツス。抜刀術でバツバツタって感じ？

俺？俺は言わずもがなジャーマンとかブレーションとかでガッスンガッスンって感じ？

素手バリアした時は洋基君やっぱしビックリしとったけど。

「ってアレ？あそこにおるん銀先輩達やないか？」

ン？洋基が指差した方を見てみますと確かに銀さんとツラの姿が・・・つうか・・・うん

「アレさ？飲んでるよね？確実に一杯引つ掛けてきてるよね？」

「せやな？完全に飲んどるわ？前金で金渡したんがマズかったんちやう？」

ええ実は前金で10人渡しとりました、にしても

「何？あのダメな大人？」

「まさにダメな大人・・・マダオやな？」

確かにマダオです。

っておよ？俺らに気付いた？ヨタヨタと千鳥足で近寄ってきます。

さて・・・制裁加えるべきか？

「ヒッククッ！いやコレはあれやから？ほら？情報つれ言つるは酒場に集まるもんらろ？ヒッククッ！」

「うむそうらな？銀時の言う通り・・・しかし酒場に来れ酒をろまらいと怪しまれるからは故に俺らちは仕方なく」

聞いてもないのに言い訳し始めてんですけど何コノ人達？なんかもっともらしいこと言っとりますけんど？」

「呂律回らんよつになるまで飲む必要はないやろ？」

はい洋基君の言う通りですな？

「はつか！らつれよ！アノ酒美味かつたんらろ？」

「うむ銀時の言う通り」

ホント何だ？このダメな大人は？

とりあえず……

「オラオラオラアア！」

『シャカシャシャカ！』

ヘッドシエイクの刑です。

「ちよやめ揺らす……ウプッ！」

「銀時の言う通……ウプッ！」

「オボロロロ……」

了！  
当然リバース！お食事中の方はスンマセン！と謝りつつも制裁完了！

「アホやな銀先輩にツラ先輩も……せやけどなんか二人見とつたら俺も……ウップ……オボロロロ……」

あつ？洋基君が貰いゲロったし？流石に悪いと思っただんで背中をサスサス。

「ちょ俺らもサスって！」

「銀時の言う通りだ」

「黙れマダオ共！オマエらは自業自得じゃろがい！」

とは言ったものの一応は二人もサスサスしました。

で落ち着いた所で

「情報はあつたん？」

「ああ！銀さん侮って貰っちゃ困るぜ？なんでも古寺ん井戸に異界に繋がるトンネルが開いてるつう話した」

おお〜！キッチリと仕事は熟してたみたいね？なんかソレっぽい情報だし？

「古寺？ああ〜アノ幽霊寺やな？」

おっ？古寺ん場所は洋基君も知ってたみたいね？にしても

「幽霊寺とな？」

「ああなんでもそん古寺には出るらしいで？せやから人があんまり寄り付かんねん？」

ふ〜ん？なるほどね〜？まっとりあえずは

「行ってみんことにや話しにやらんし行くとしますか？つてオイ！銀さんや？アンタ俺の仕事はココまでだ！みたいな顔してんの？案内してけれ？そこまでやって初めて仕事熟したことになるから」

「いや・・・ほら？だつてほら？アレだろ？もう日が暮れるし？良い子の銀さんは日が暮れる前に帰らないと？夜遊びは非行の始まりつて言うだろ？銀さんそういうの関心できないな〜」

「いやいや銀さん良い子じゃないだろ？つつか今酒場から出てきた大人が言うセリフじゃねえと思うんだが？」

「銀時よ？まさかビビっているのか？」

「ギクツ！」

ツラン言葉に盛大に反応しとりますな？凶星みたいね？

「バババ！馬鹿言つてんじゃねえ！銀さんが幽霊ごときにビビると思つてるわけ？？その発想にビビるわ〜つつか幽霊なんていないから？宇宙船が飛び交うような時代に幽霊とかマジ非科学的だわ〜？ツラそんなだと時代に取り残されちまうぞ？まっ銀さんは全然信じてないけど？」

コレ完全にビビってるな？よしッ！



「俺幽霊の知り合いいるんだけど？更に言っなら見えるタイプだけだ？」

ちよつと追い込んでみよう。

「えつ何？幽霊の知り合い？オイオイマサ？それ幽霊じゃないから？それはアレだ！！それスタ○ドだわ！すげえなマサ？スタ○ド使いか？すげえわ！俺もそのうちスタ○ド使えるようになりてえもんだ？」

「ぜがひでも認めへん気やな？」

みたいね？まあ面白いけど？

「とりあえずは行くか銀さん案内よろ？」

「だから俺は日が暮れる前に！」

「銀時？やはりビビってるのか？」

「ビビってねえつつてんだろオオオ！そんだけ言っただったら行ってやらアアア！ついてきやがれコノヤロオオオ！」

いやホント面白えッスこの人。

（俺達移動中）

はい古寺到着。

辺りはスツカリ夜です。

『ギョッ』

さて・・・

「なんで俺と洋基ん服ん袖挿んでんの？」

「せやな？そんなにガツチリ挿まれたら歩きにくいやろ？」

「ばつかオマエ！コレはアレだから未成年のオマエらが迷子にならないようにつう年長者としての気配りだから？銀さん気配りが出来る人だから今の時代気配りが出来ないと女にモテないよ〜その点銀さんは気配り出来るからね〜」

気配り・・・ねえ？

「銀時が女子にモテたと聞いたことがないが？」

「うるせえヅラアア余計なこと言つなやアア！俺ア天パじゃなかつたらすげえんだよ！天パじゃなかつたら！」

「天パのせいだけやないと思うで？銀先輩普段目が死んだ魚やしマダオやし？」

「いざって時にはきらめくんだよ！洋基は知ってんだろ！後マダオって言うんじゃないやねエエエ！」

まあきらめくのは何となくわかるけど・・・残念ながらマダオでござえますよ？銀さん？

とかコチャコチャありながらも古寺へと入ります。

で早速・・・

「何かいるな？」

「ああほんまに出よったな？」

ヅラさんと洋基君の言う通り白い着物のまさに幽霊って感じのを発見！

「ばばば・・・出っ・・・いや待て落ち着けアレは幽霊じゃねえから？ほら足が見えるし？いやア流石は銀さん！見抜いたね？流石だわ〜」

ふむ・・・

「ここでマサさんの豆知識！幽霊に足が無いってのは嘘らしいぞ？なんでもむか〜しの画家が幽霊の絵を描く時にメンドイって足を省いたんだと？でそれが広まって幽霊には足が無い！ってことになつたらしい？マサさんの豆知識でした！」

「おお〜〜そうなんや？やるなマツサー？」

「中々に博識だな政成君？」

いえいえそれほどでもねえでありますよ？あつー一応は・・・コノ情報はあやふやな場合がありますんで間違つても当方は責任を負いかねます。

というところでヨロシク願います。

うむ・・・コレでよしっと！さて銀さんは・・・

「オイイイ！なんでそういうこと言っちゃうのオオオ！そういうこと言っちゃったらアレが幽霊ってことにいやいやアレは幽霊じゃねエエスタ○ドだアアアアア！」

うむうむ狙い通り！実に面白し！ナイスなりアクションです。

まあ確かに銀さんが言うみたいに

「透けてないしね！俺が知ってる幽霊は大概は透けてたしな！多分幽霊じゃないんじゃないかね？どね！」

スタスタ白い着物ん人どこまで歩いて確認。

「\*%¥\*¥#@%」

ほうほう・・・なるほど！

スタスタと戻ってきます、で

「なんか天人らしいぞ？翻訳機とやらがイカれたとかで言葉が全然通じないから部屋も借りれねえんで翻訳機とやらが直るまでココを間借りしてるんだと？」

「わかったんかい！」

まあニュアンスでね？

「つつわけで幽霊じゃないみたいだからよかつたね、銀さん？」

「えっ？何が？始めからわかってたよ銀さんは？銀さんには全てお見通しだったし？」

「必死だな銀時？」

「はっ？別に必死じゃないし？事実を語ってるだけだから？」

「いや必死だと思うだって目が死んでねえですもん。」

「銀先輩ほんまアレやなあ〜ン？銀先輩の言つとつた井戸ってアレやないか？」

「おう？ほうほう確かにソレっぽい井戸がありますな？」

「%@#¥\* @¥%」

「ン？さっきの天人さん？ふむふむ・・・」

「どうやら当たりっぽいな？あの井戸ん中空間が歪んでるとキツチリイメージ出来てりゃあ帰れるわけね？」

「なんか無理矢理ツポイケドやはりスルーってことで？」

「とにかくアノ井戸に入ればいいってわけね？」

「つつわけで」

「じゃ帰えるわ？サンキューな洋基、銀さんツラ？天人さんも」

四人にアイサツして井戸へ

「ほなな〜ヒマがあつたらまた来いや？」

「うむ是非とも攘夷活動に参加してもらいたい」

「じゃあなマサ？」

「¥@\*+%#@」

それぞれの言葉を背に受けつつ井戸の淵へと足をかけて最後に

「そついや・・・そんな人は幽霊じゃねえけど・・・この寺体が透けてる人が何人かいるから？じゃあな〜〜〜」

『ヒューーン』

そのことを教えてあげて井戸へと飛び込みました。

「オイイイイ最後になんつうこと言ってくれてんのオオオオオオ！  
せめて嘘だと言ってエエエ！！」

うむうむ実に面白し！

まっ嘘じゃねえんですけど？

あつー応俺は元ん世界に帰れましたよ？

洋基視点

帰ってたな〜

中々面白いやつやったなマッサージ？

最後に不気味なこと言い残しよったけど？

「いやいやいや無い無い！アレは嘘だろ？嘘に決まってる！嘘だよな？嘘じゃなきゃ許さん！」

銀先輩かなりきとるな〜

「いつまでガダブルしとんのや？ほら銀先輩帰るで？」

「ああ！一刻も早くこの場から立ち去るんだ！いやビビってるとかじゃなく今日は見たいテレビ番組があるから！早く帰えらないと始まるから！」

もうバレとるんやけどな〜

まあええわ！

と古寺を後にしようとした時やった・・・

「洋基・・・おかしくないか？」

ゾラ先輩がそんなことを言い出したんや？で俺が聞き返したら

「背後に気配がする」

何言つてんのや？マッサーに毒されたんか？テンドンか？

「アノ天人やる？」

「いや天人はアッチだ」

あつほんまや？寺ん中に入つとるし……

……は？

俺らは揃つて後ろを振り向いた……すると……

「「ギヤアアアアア……」」



特別編つばい感じ！その2（後書き）

後書き

光軍さんコレ大丈夫でしょうか？

もうマジでアレじゃね？かなりアレじゃね？

やっぱり無謀だった・・・

コレ大丈夫ですかアアア光軍さアアアん

ってアレ？コレやんの二回目？

## 第三十五話っぽい感じ！（前書き）

前書き

久々に本編を更新した気がしました。

では何時ものように薬的な物をもってぶっぞ。

### 第三十五話っばい感じ！

「おは〜」

三日ぶりとは言え何時も通りに教室に入ります。

「マサ君！？ちょアナタ大丈夫だったの？全治三ヶ月って聞いたわよ〜！」

おう？唯？どうやら知ってたようで心配してくれたっばい。

「元氣も元氣！今日も朝メシが美味かったでござる！」

ノイズが走るとか呼吸が乱れるとか全然ないしね、つかアレだからこんくらいのケガは日常茶飯事だったし。

「確かに元氣そうね？全く・・・心配したわよ」

「サンキューな？唯？今度なんか奢るわ？」

頭をポンポンしながら礼をいいます。

でその後ルンが抱き着いてこようとしたんで何時もの如く『リトガード』続いてララ『リト&ルンガード』をしておきました。

「いや〜マサ君私も心配したよ？」

「悪いな恭子も？」

「まっ元気そうじゃかったよ？」

まっ元気は元気ですからね？まだ顔にバンソウコウは貼ってあっ  
けど。

『キーンコンカーンコーン』

おっと授業授業。

「歴史だったらいいね〜」

「数学よ？」

「うげっ！？用務の仕事入らんかねえ？」

「我慢なさい！もう」

数学も苦手でござるからな。

大体数学なのに何故にアルファベットが入ってくれんだ？意味が  
わからん。

『ガラッ』

ぬっ？ティーチャーが来ましたなあ？寝ないように頑張ろう。

• • • •

『キーンコンカーンコーン』

やっとこ終わった。

「マサ大丈夫？」

「大丈夫とは言えん？コレならとっつぁんぼうやと喧嘩してる方がまだ楽だわい」

「ダメだよ、またケガしちゃうよ？」

「慣れだ慣れ？意外と慣れるもんだ」

痛えこたあ痛えけんど。

「そう言えばマサ君のケガって喧嘩でしたケガなの？」

「まあよ？あそこまでハデに喧嘩したなあ久々だったわい、たまにはおもつくそ暴れるんもいいもんだスカツとすんぞ？」

「限度があるわよ限度が！全治三ヶ月の重傷をおうまでするもんじやないわよ！」

まあええやん？唯さんや？三日で完治したんだし。

とか思いつつもそろそろ

「で恭子君？オマエなんでいんの？しかもうちの学校の制服着て？趣味か？」

「遅ッ！時間差！？って趣味じゃないってば？見ての通り転入してきたのだくくく」

ほう！やっぱりしか。

「じゃ今日からクラスメイツか？」

「正確には一昨日からだけどね？」

一昨日か？一昨日はまだ俺は寝てますたしな治療的な意味で。

「騒ぎにならんかったとや？」

「意外と大丈夫だったよ？っていうかマサ君がいない間ララちゃんもこのクラスも元気なかつたし」

なんと！？

「そつそクラス・・・寧ろ学校一の名物のマサマサが三日も居なかつたからね」

「うんうん私達も心配したよ」

里沙に未央・・・なんともコレは。

「ありがてえこつて？　って俺、前に臨時スタッフで休んだことあんべさ？」

「それとこれとは話は別だつて？　なんせあのマサマサが全治三ヶ

月って聞いたんだよ？」

「心配もするって？」

まっ確かに言われてみりやあそつだわな。

「あつ！ そつだマサ君 臨時スタッフで思い出したよ」

ン？ 恭子。

「なんぞや？ マネージャーはやらんぞ？」

「わかつてるつてば？ 残念だけどさ？ えつとマサ君さ・・・テレビ出てみない？」

ふむ・・・ホワツツ？ 恭子、今なんつった？ 聞き間違いか？

「ワンモア」

耳をホジホジして確認。

「テ・レ・ビ・に出てみない？」

聞き間違いじゃないらしい。

「何故に？ なんだアレか実録暴走する若者みたいなアレかコラ？ 確かにアレだよ俺アレだよ中学ん時から数えて相当な回数職質されたり停学くらったりしたよ？ けどさ若気の致りじゃん？」

うつかり他校の校舎半壊させたりしてジャンジャンパトカーが来

たよでもそれも若気の致りじゃん？

ヤク○な人と揉めてうつかり事務所を潰したりもしたよでもそれもコレもみんな若気の致りじゃん？　　つてあら？　　」

「うわ〜・・・もうなんていうか・・・うわ〜」

アレもしや俺余計なことを言った？　　なんか恭子始めクラスの殆どの皆さんドン引きしてるし。

まあルンは。

「マサナリ君ワイルド!!」

ってなんか目をキラキラさせてましたけど。

「冗談だぞ？　　冗談？」

「マサマサ・・・遅いつて？」

急いで冗談ということにしようとしたけど後の祭りでした。

「怖いものだな・・・若さ故の過ちは・・・」

「マサ君・・・アナタお爺さんのこととやかく言えないわよ」

グツサリ!!

「カハッ!!」



唯さん・・・それは言われなくなかったッス。

「マサ？ 大丈夫？」

心配して声をかけてくれたララの優しさが身に染みました。

「マサ・・・そのころから無茶苦茶だったんだな」

だから若気の致りだつてんだろリト。

「っていつかマサマサ今も似たようことやってそうだよね」

ギクリッ！！

「そそそそんなことないよ？ ホント！ マサさん紳士なもの！」

（ ）（ ）（絶対やってる~~~~~）（ ）（ ）

アレなんだろ？ なんかクラスメイツの心の声。

「まっええやん？ そのことはその辺に置いておいて！ 恭子君やテレビとはコレいかに？」

とりあえず話題転換の術。

「詳細は気になるけどなんか詳しく聞くのは怖いからわかったよ、えとテレビっていうのはね？ 私が出てる『マジカル・キョー』に」

はっ？

「マジで言ってるの？ 恭子君？ アレー一応子供向け番組だよね？  
そんなんに俺みたいなの相が悪いのが出て大丈夫なん？」

あつ不細工ではないよ？ でも人相が悪いのは認めとるんです。

「大丈夫！ ほら私と初めて会った日、マサ君が初めて臨時スタッフで来た日ね？ の時にクレール車片手で持ち上げてたじゃん？  
で監督が怪力のキャラとしてどうかあつて？ 監督もスタッフもマサマサのこと気にいってるんだよ」

まっ確かにちよくちよく臨時スタッフしにいてスタッフさんと監督さんとかたあ仲良くなったけど。

「わあマサ！ 『マジカル・キョーコ』に出るの？」

いやいやララさんや。

「あつ顔はねなんか仮面着けさせるって？ 鬼の？えと『鬼面童子』ってキャラみたい」

ふむ。

「なんじゃそりゃ？ 合わなくね？ 『マジカル・キョーコ』と微妙に合わなくね？」

「問題ないさ〜」

ないんかい。

「じゃいいぜい！面白そうだし？学んオツチャンや監督さんにも世話になつとるし？」

給料イロつけてもらつとるしね。

「おお〜〜〜じゃっ早速監督に伝えてくるよ〜〜〜」

恭子君電話をしに教室を出ていきました。  
その後クラスメイツやんやんやの盛り上がり。

「今からマサマサのサイン貰ってたらプレミアつくかな？」

「無理だべ？仮面つけてんだぜ？多分一発キャラだべさ？」

「ああ〜最後あたりにお約束的に爆発みたいなの？」

多分そんな感じっしょ。

「ええ〜マサ爆発しちゃうの？」

「テレビ的な意味だからなら？流石のマサさんも爆発はせんよ？」

爆弾程度じゃケガはしねえけど。

『ガラッ！』

「マサ君〜今度の休みからだっ〜」

恭子が帰ってきた。

ふむ今度の休みからか、まっもうちよい先だな。

「おけ！ じゃ恭子の『お願い』は聞いたからな？」

あっお願いってのはアレね？ 彩南祭のアレね。

「……………」

おう？ 恭子？ どうしたんだ。

「しまったアアアアアア！ 私のバカアアア！ もっと別のこと聞いて貰うはずだったのにイイイ！ 私のバカアアアアアア！！」

恭子君？

「ねえキョーコちゃんどうしたのかな？」

「さあ？ 発作じゃね？ ってララにクラスメイツよ今は恭子に近付くなよ？ 発火するから」

「発作でもないし発火もしないよ！！」

でしょうね？ 言ってみただけだし。

「ン？ マサ君？ もしかして霧崎さん」

「キョーコでいいよ、唯にゃん？」

「唯にゃん！！アナタまで！？？」

どうやら恭子君、唯のあだ名つつかそんな感じのを里沙未央コンビから聞いてたらしい。

「まっまあいいわ・・・キョーコさんね？ キョーコさんって・・・」

「うむ唯君察しの通り！星の」

「フレイム星人と地球人のハーフだよ！！マサ君、危険な発言はやめようね！？？」

「すみません、ついつい。」

「そうだったんだ、結構多いんだね宇宙人って」

「そっだよ春菜ちゃん、あっ一応内緒ね？」

まっこのクラスつつか学校んヤツらは宇宙ん人の存在を認識してりますけどね。

「あっそっだマサマサ！ オカルトっていうか不思議つながりで思っ出したんだけど最近旧校舎で幽霊が出るんだってさ」

おっ？ 幽霊？

「ひつっ！？里沙くくくやめてよくくく」

春菜やっぱし盛大に反応してますな。

「マサナリ君怖くくい！」

「リトガードっ」と

抱き着こうとしたルンにリトを差し出しつつ。

「幽霊ねく？アレじゃね？泥棒的なヤツらなんじゃね？つか幽霊でもよくね？別段迷惑してるわけじゃ」

『ガラッ！』

「ガ克蘭君くく」

「マサナリいますか？」

おつ保健さん&ヤミっ子？

「指令よ」

指令？保健さんがヒラヒラさせた紙を受け取る。

「何々・・・『旧校舎の幽霊騒ぎを調べよ、なおこの指令書は読みしだい破棄されたし』何処の秘密組織だっつうの？まっいいさね？恭子」

ポイツと指令書を投げて。

「ハイハイ」

『ボツ!』

恭子に焼却処分してもらいました。

で

「よつするに警備のアレってことツスカ保健さん？」

「そういうことね？ 面白がって夜に旧校舎に忍び込む生徒がいたりするから早めに対応をするんですって」

なるほどねえ？ つか一応俺も生徒なんだが・・・まっいまさらだな。

「了解〜じゃ今日中に何とかしますわ？ ヤミも保健さんと一緒に来たってこたア手伝ってくれんだべ？」

「ええ私も学校側から要請されたので」

あつ言っでなかつたけんどヤミっ子、生徒ではないけんど他は俺と似たようなボジになります。

「じゃ早速」

「ダメよ？　今から授業でしょ？　放課後になさい」

残念まっいいけどね。

『クイクイ』

ン？

「あつ・・・あのマサ君・・・わ・・・私も参加しないと」

「春菜はいいわ？　苦手だべ？」

また春菜無双つてことになったら大変だしね？　リトが。

「ダメダメ！　春菜も一緒に行こうよ」

「そうそう！　面白そうじゃん？」

ってオイ！　里沙未央。

「オマエら来る気か？」

「もちろん！！」

来る気満々だな。

「私ももちろん行くよ」

「風紀委員として私も見過ごすわけにはいかないわね」



「幽霊 驚く 抱き着くチャーンス！！マサナリ君、私も！」

「むむ・・・その手があったか！マサ君？ 私も行きたいな？」

「ララ、唯、ルン、恭子も参加表明。」

「うう~~~~イヤだな~~~~」

春菜無理せんでもよかのに。

「リト春菜は任せた」

「えっあっうんわっわかった」

春菜が来るってことはリトも来るってことになるのです。

「それじゃガクラン君お願いね」

「あつまサナリ次の休み時間に用務の仕事もありますので」

保健さんとヤミっ子がそう言って出ていったところでチャイムが鳴って授業と相成りました。

ちなみに物理・・・グフッ。

「ほらシャキッとなさい」

「体育はまだか〜」

「今日はないわよ」

チクソウ・・・

で苦行を終えて用務の仕事へ。

「なあヤミっ子」

「なんですかマサナリ」

二人で屋上の補修中この前とっつあんぼつやがヒビだらけにした場所です。

「どうせだったら作業着作ろうと思ってんだがどうよ？ 黒いツナギなんだけど？」

前々から作ろうとは思ってたんよね？ 別に制服でも問題はねえんだけど、やっぱしこういう作業にはツナギだべ。

「それは私も着るんですか？」

「うむ俺とオソロ、なんかロゴも入れようかなあと思ってんだけど  
『M・Y』なんちゃらみてえな？」

なんちゃらの部分はまだ決めてねえけど。

「・・・総合サービスはどうでしょう」

「おっ！ それいいな？ 確かに色々やってんし』M・Y・S・S  
にしよう！」

S・Sは総合サービスの略ね。

「じゃコレが終わったら早速作るか？ 実は持って来てんだよな素材。」

「はい・・・フフ・・・お揃いですか」

ン？ ヤミっ子・・・微妙に嬉しそう。

以外とお揃いとか好きなのかしら？

まっでも可愛いッス。

で屋上の補修を終わらせオッチャンに日当貰って何時もの如く保健さんとこへ。

あっ既に授業は始まっとなりますコレもいつものことね。

サクサクと保健さんとヤミにホットケーキとコーヒーを提供して俺はチクチク作業着を作成中。

「ホントに器用よねガクラン君ってきつといいお嫁さんになるわね？」

「保健さん？ 俺一応つか完全に漢だから？ 主夫やオカンにはなれても嫁にはなれんですっ」と

「じゃ私の主夫に」

「お断りしま〜す・・・っと出来た!」

うむうむ中々のデキ。

「ほれヤミっ子? 着てみ? アツチのカーテンとこで」

出来立てホヤホヤの作業着をヤミっ子に渡します。

「はい」

素直に向かうヤミっ子です。

「あら素直ね・・・フフ」

ヤミっ子は結構素直なところありますよ保健さんや? つか何その意味深な笑い? まっいいさね? ヤミが着替えてる間、俺の仕上げちまおう。

チクチクっと。

『シャツ』

ン? 着替え終わったみたいね。

チラッと顔を上げて見てみる。

「~~~~~!?!?」

ふむ・・・

「まだ着替え終わつたらんやん？　つか何してんの保健さん？　針グツサリ飛ばされたい？」

ええ『シャツ』したの保健さんでした、ヤミっ子まだ着替え途中真っ赤になつとります。

まっそれはともかくチクチクつと。

「少しくらい反応があるかと思つただけど・・・なんかごめんなさいヤミさん」

「あやまらないで下さい・・・ドクター・ミカド、グスン」

『シャツ』

反応つて言われてもねえ困りますがな何故かシクシク泣いてるヤミっ子がカーテンを『シャツ』してる音を聞きながらチクチクを続けます。

で

『シャツ』

「おっ丈は合ってるっばいな？」

今度はちゃんと着替え終わつとります。

「ええ・・・ピッタリです」

うむ。

「結構似合ってる・・・のか？ 俺的には似合ってたあ思うけど」

「そうね？ 女の子がツナギの作業着ってどうかなって思ったけど結構似合ってるわ」

おっ保健さんのお墨付き。

「そうですか・・・あつまサナリ中々動きやすいです」

ちょっと赤くなりながらヤミっ子動きやすさの報告。

まっ作業着だからな動きにくかったらアレだしなそこから辺も追求しとります。

「あつ後結構頑丈よ？ 俺が普段着てる服並には？」

「なるほど・・・それは戦闘用にも使えそうですね」

まっ破れ辛いつてなあ暴れるには最適だけどな。

「いつも着てるバトルドレスだっけ？ アレも頑丈にしたるか？」

「お願いします」

サッとさっきまで着てた服を俺に渡すヤミっ子。

って素材が・・・まっ足りるか？

「おけ！まかせれ〜さ〜てチクチクっ」と

早速チクチク開始。

「フフ・・・ヤミさん大胆ね〜脱ぎたての服ガ克蘭君に渡すなんて？」

「あっ・・・ツ〜〜〜〜〜〜！！まっマサナリやはり後に」

「無理もうやっとる、つか既に中盤」

その後チクチクやってる間、真っ赤な顔でう〜う〜唸るヤミっ子でした。

ホント表情豊かになってきたよな。

あっ一応俺も自分の作業着に袖を通しましたよ。

その時。

「覗いちゃや〜よ？ 覗いたら昼のオヤツは無しになります」

「卑怯よガ克蘭君」

「私だけ見られて不公平です」

というようなやり取りがありました。

つか卑怯って何だっつうの？ ヤミっ子もオマエえっちいのは嫌いじゃなかったんかい。

「それはそれコレはコレです」

ホント便利だよなその言葉、考えたヤツは天才だと思う。

で着替えて見せてみたら

「似合うわね」

「ええかなり似合ってます」

との有り難きお言葉をいただきました、自分で言うのもアレですけどなんかしらんけど作業着とかもめっさ似合っつのです。

あっちなみにヤミっ子は上までキッチリ着てるけど俺は上は着ないで腰の辺りで結んでいます。

で両手首に籠手・・・あっリストバンドみたいなヤツね？ を装備。

コレもひそかに作ってたんですな。

あっ上はちゃんと着けてねえっつたけどシャツは着てるからセミアードではないんでその辺はあしからず。

それと『M・Y・S・S』のロゴは背中と腕んとこに書いてます  
白文字で。



「じゃ次から仕事ん時はコレを着るってことぞ？」

「わかりました」

まっ今日の放課後からになるでしょうけどな。

『キーンコーンカーンコーン』

キリよくチャイムが鳴りましたな、つつわけでサッとガクランに着替えて。

「じゃ教室に戻りますわ？」

と保健室から教室にスツタラスツタラ、途中。

「マサナリさん！？」

「政成！！」

「えっ？ ホントです！！」

沙姫、凜、綾に遭遇。

「よっ！元気か？」

「元気ってマサナリさんこそ大丈夫なんですの！」

「そつだぞ三ヶ月の重傷と聞いていたんだぞ！」

「心配しましたよ」

軽く手を上げてアイサツしたらめっさ心配されてました。

でもう大丈夫だということをお伝えたら凜が。

「なるほどな・・・あの体のキズは伊達ではないということだな」

と言ってきたんで頷きながら。

「まあよ？　そういうこ・・・って待て？　何故知ってる？」

おかしい・・・この三人学年が違うから知らないはず・・・まっ半袖とか着てたら腕のキズとか見えるけど、凜は『体』つつたよな？　いやさ隠すことでもねえんだが・・・まさか。

「オマエら・・・里沙未央から」

「なっな・・・なんのことですか？　一枚千円とか知りませんわよ」

「そっそっただぞ政成？　全然知らないぞ」

すんげー動揺してんのがアリアリと伝わってくるわけですが。

「アハハ」

曖昧に笑う綾さん。キミは買ってないよな？　そんな思いを込め

て見てみたら。

「じっごめんなさい政成君・・・三枚ほど」

買つとるし!？」

「まあいいけどね・・・ホントはよくねえけど・・・」

「わっ私は知りませんわよ? 今だに裏ルートで取引されてるなんて知りませんわよ!」

「沙姫様! 喋りすぎです!」

なるはどね・・・なるほど・・・里沙未央・・・オマエらの運命は決まった。

「里沙ア? 未央オ?・・・まだ遊び足りないようだなア? フツハハ・・・ハツハツハア! 悪い子はいねえがアア!」

『スツダダダダ!』

「アレ私・・・もしかしてマズイこといいました?」

「沙姫様、今はあの二人の冥福を祈りましょう」

「死にはしない・・・はず・・・しかし・・・やはりアノ目・・・アノ目は・・・ゾクゾク」

なんか三人組が言ってるが気にせず特に凜のアレは全力でスルーして教室へ。

『ガラッ！』

教室に入り周りを見渡す。

いねえな。

「春菜ア？ 里沙と未央知らねえ？」

「まっまママサ君？ ちょっとちょっとわからないかな？」

「リトオ？」

「わっ悪いわかんねえ」

ふむ。

「唯イ唯は知ってるよなア？」

「しっしし知らないわ」

その後ララにも恭子にもルンにもクラスメイツ全員に聞いたが返ってきた答えはかわらず知らないの一点張り。

なるほど・・・

「そっかア・・・そっかそっかア・・・なるほどなア・・・オマエ

「らもグルだったのかア？ そっかそっかア俺とそんなに遊びてエかア？」

「『『『掃除用具入れの中です！！』『』『』」

ビツとクラスメイツ全員掃除用具入れを指指す。

瞬間ガタツと揺れる用具入れ。

『ガチャ・・・ギイ・・・』

「見イツウけたア？」

「『ヒイ~~~~』」

用具入れには抱き合ってブルブル震える里沙<sup>エサ</sup>未央。

「さあてかくれんぼは終わりだ？ 次は鬼ごっこだア？ 30秒やる全力で逃げる？ 全力でなア？」

それこそ命の限りなア。

『キーンコンカーンコーン』

「あつまサマサ！ 授業！ 授業始まつちやったよ！」

「うんうん先生も来たし！ねっ？ ねっ？」  
ふむ・・・

「先生エエ？ 俺らちよつと次の授業、鬼ごっこしててイイツスカ

ア？」

「き……鬼島君……しかしじゅ授業が」

「先生もスル？」

「どうぞどうぞ！！ 存分に心ゆくまで！！」

「「クラスに引き続き先生にまで見捨てられたアアア！！」」

オイオイ里沙未央オ。

「暢気に話してる場合かア？ 30！」

「カウント始まったアアア！に逃げるよ未央！」

「うん地の果てまで！」

『ガラッ！』

教室を飛び出す里沙未央。

「ハッハッハア！ 地の果てかア？ そんな程度じゃ逃がさねエよ？  
24・・・23・・・」

「「っ怖っ」」

20・・・19・・・18。

「マサ怖いよ〜」

17・・・16・・・15。

「里沙・・・未央・・・逃げ延びてね？ 無理だと思っけど」

14・・・13・・・12。

「春菜ちゃん俺もそう思う」

11・・・10・・・9。

「まっマサ君・・・やり過ぎは」

8・・・7・・・6。

「知ってるか唯？ 恐怖で人は・・・」

5・・・4・・・3・・・2・・・1。

「死なないよオ？ ハッハア！ 狩りだアアア！ 悪い子はいねえ  
がアアアア！！」

『ガラッ！』

「ハッハッハッハッハッハアアアアアア！」

『ズダダダダ！』





**第三十五話っばい感じ！（後書き）**

後書き

次回はアノキャラの登場となります。

次回もよろしければまた見てやって下さい。

感想などありましたら是非。

## 閑話っぽい感じ！（前書き）

前書き

少し前から考えていたマサの中学時代の思い出話です。

少しというが大分マサの性格が違います。

そしてジジイ以外にマサに多大な影響を与えた人がです。

そして蛇足的な感じなのでアレと思われる方もいらっしゃると思いますが出来れば温かい目で許してやって下さい。

では薬を持ってどうぞ。

## 閑話っぽい感じ！

「アン？ 俺の中学時代？」

みんなで集まってパーティー的なことをしてたら突然ララが俺の中学時代はこういう感じだったのかと聞いてきた。

チラツと見てみたら他のみなさんも興味津々って感じらしい。

ふむ・・・じゃちよつとだけ。

「今よか短気だった終わり」

「」「」「短ッ！」「」「」「」

そうツツコミ！ ナイスチームワークですね。

「まっそれだけじゃアレだわな？ じゃあ・・・」

・  
・  
・  
・

『スゴオー！』

「お！ッ」

久々に登校してきたら早速喧嘩を売られた問答無用でそのバカの

頭を掴み校門の横の壁に叩きつける壁には衝撃で所々ヒビが入っている。

更に俺はそのバカの頭を

『ギヤリリリリ』

マッチを擦るみてえに壁に擦りつけてやった壁には糸を引いたようにベツタリとそのバカの血がついている。

そんな俺を見て回りのヤツらはヒソヒソと何か呟いている。

少しだけその声が聞こえたがハッキリ言ってロクなことを言われていない。

そりゃそうだ俺・・・鬼島 政成は10人中10人が不良という・・・そういうヤツだった。

別にタバコとかを吸ってるわけじゃないただ売られた喧嘩を買ったらそう言われるようになっただけ。

まあ今みてえにやり過ぎの部分もあるけどな。

そんなことを考えながらも自分のクラスへと向かう、途中やはり教師に呼び止められ、めでたく指導室へとご案内されることになった。

まっ予想の範囲だけだよ。

「鬼島？ 二年に上がったばかりだろ後輩も出来たんだ少しは大人しく出来んのか？」

「ありや俺が悪いわけじゃねえツスよ？ 喧嘩売ってくんのが悪い」

「それを買つなと言ってるんだ」

そりゃ無理だわ？ 基本俺は売られた喧嘩は買つ主義だからよ。

そうは思っても口は出さずに教師の説教を受け流していた。

教師が言ったように俺は中学・・・2年に上がったばかり同年代・・・特にこの学校にはダチと呼べるやつはいない。

まあただでさえ学校に来ることが少なえ上に今みてえに指導室の常連だし仕方ねえちゃ仕方ねえけど。

結局その日は。

「鬼島・・・もう帰っていい」

「折角来たつうのに？ 停学ツスか？」

「そつだ」

え〜と・・・何回目だ？ まっいいわ何回目かの停学処分となり学校を後にすることに。

『プツプー』

その帰り道クルマのクラクションが聞こえそっちの方を見てみたら見知った顔。

「コラ！ 不良少年？ 学校どうした？」

「ツ！！ でけえ声出すなパー子！！！」

「パー子言つな射殺するよバカナリ！！！」

この喧しい女・・・香田 葉子（こうだ ようこ） 歳は・・・  
三十路前のだつ

『ダキユン！！』

「ツ！！ パー子何すんだゴラ！ 俺じゃなかったら死んでんぞ！」

撃ちやがった躊躇なく今に始まったことじゃねえとはいえ何考え  
てんだコイツは。

「チツ避けられた」

避けられたとか言ってやがるし！ 普通避けるわ！ いくら俺で  
も撃たれたら痛えんだぞ！ 死にはしねえけど。

「なんかさくアンタが私のこと三十路前のくせに今だに彼氏がいな  
い寂しい独身女って言った気がしてさ？ そりゃ撃つでしょ？」

そこまでは言って・・・つうか考えてないつつうに。

どんだけ気にしてんだ？

「結婚式に出席する度に私以外の友達が既婚になってるのよ？ その度に、葉子はまだなの？ ってウエディング姿で勝者の笑みをされるこの私の惨めさわかる？ クソ・・・離婚しろ！ 夫浮気しろ！！」

うわ・・・最悪だコイツ。

ちなみにパー子、こんなんでも一応刑事なんてのをやっている。

俺と知り合いになった経緯もその関係だ、ヤク○なヤツと喧嘩になりハデに暴れ過ぎて事務所まで潰したということがあったのだが、その時に警察の世話になることになった。

で事情聴取したのがパー子ってわけ。

「えっ？ 何？ アンタ中坊？ うわ若ッ！若さが憎い！」

「知らねえつつのー！」

事情聴取の時はこんな感じ。

ハッキリ言ってホントにコイツ刑事かって思ったもんだ。

で名前を聞いて葉子だったんで勝手に葉の部分はを葉はに変えてパー子と呼ぶようにした。

その時一回目の射撃を頂戴したが。

「でバカナリ・・・アンタまた停学くらったわけ？」

「まあよ？」

パー子との出会いを思い出していたらいつの間にもやらパー子のア  
レな状態・・・嫉妬モードってどこか？ は解除され俺にそう聞い  
てきたんで頷きながら答える。

「ハア〜普段から学校行かないくせにたまに行ったら停学って」

「学校行けねえのはジジイのせいだつづの！ それに停学になっ  
たのは喧嘩売られたからだ！ 俺は悪くねえ！」

「あ〜アンタの爺さんブツ飛んでるもんね〜？」

「パー子もな？」

「ゲツ！！ アレと一緒にされるのは心外なんだけどっていうかア  
レよりはまともだし」

一般市民に躊躇なく発砲する刑事の何処がまともなのかとパー子  
に問いたい。

まっ確かにジジイよかはまだマシだけど。



「あつそつだアンタ停学くらつてヒマでしょ？　ちよつと手伝つてよ？」

パー子は俺を見かけるところやつて仕事を手伝わす、お陰で俺はパー子ん所の警察署ではかなり認知され、パー子の上司のミヤさんなんかは俺とパー子はコンビだからとか言い出すしまつ。

コンビと言えば聞こえはいいが完全にパー子を押し付けてる感は否めない。

一度俺がそつ言つたら。

「すまない……キミにしか頼めないんだ……本当にすまない……  
うう胃が……キリキリ……」

俺に対してもだつたが躊躇なく発砲するような女だ、当然手も足も早くミヤさんから聞いた話だとパー子のコンビだつた人らは一週間持つたら奇跡というくらいだ。

余りに悲痛な顔で言われてしまい流石にミヤさんと胃が大変なことになるんで引き受けたという感じだ。

「オラ！　バカナリ早く乗れ！」

「はいよ」

まっ俺自身もパー子の仕事を手伝つのを楽しんでるだけだな。

給料出るし。

ひそかに危険手当て（パー子的な意味も含め）で結構な額もらってる。

『バタン』

クルマのドアを閉めシートベルトを着けると

「よしよしアンタ、シートベルトとかそういう所ちゃんとしてるわよね？ 不良のくせに」

パー子にそう言われた、イラッとしたんで。

「じゃ仕事頑張れ？ 俺は帰る」

そう言った瞬間に

『カチャ』

コメカミに銃口を突き付けられ。

「手伝うわよね？ こんなか弱き乙女の頼みを聞けないなんて男が  
廢るぞマサナリ君」

このアマ・・・

「だから結婚できねえんだよ？」

『ダキユン』

ギリギリかわした。

・ ・ ・ ・

「で・・・パー子さん？ 何故今俺はオマエのメシを作ってるのかね？」

「アンタ料理上手いじゃん」

俺が聞いているのはそこじゃねえもっところ全体的な意味だ。

そんな気持ちを込めてジト目で見てやると

「ン？ 何？ まさか・・・惚れた？」

「ない！ オマエはない！ 地球上にオマエしか女がいなくてもない」

「コノガキ・・・こんな美人に向かって」

アホなことを言うからだ、確かに見た目は結構良い、普通に美人とは言えるんだがいかなせん性格がアレすぎる。

「性格を矯正しろ？ じゃねえと一生結婚は無理だな」

「にやにやにおくくくじゃアンタが貰えばいいじゃん！ 料理出来るし」

「オラ出来た食え」

「スルーかい！ チクシヨ~~~~ハグハグハグ！ 美味え~~~~  
チャーハン美味え~~~~」

そいつあどうも。

はぁ・・・食ってる姿は普通に可愛いんだけどねえ・・・どうしてこつアレなのか。

「ウグツ！！ ん~~~~ん~~~~」

つかえたらしい放置してやるうかと一瞬思ったが流石に可哀相な  
んで水を飲ませて背中を摩ってやる。

「ふう~~~~危うく母さんと感動の対面するところだった」

「オマエの母ちゃんまだ生きてるべさ？ 前会った時オマエのこと  
貰え貰えってアホなこと延々言われたぞ」

「オイ、マイ・マザー何考えてるんだ・・・バカナリ中坊だぞ、干  
支一回り違っし」

俺もそれ言ったし。

「いやでも年上の女房は金のわらじを履いてでも捜せって素晴らし  
い諺もあるし」

俺もそれ言われた。

「どっ？ お買い得よ？」

「お買い得ならもう売れてるわな？ 売れ残りの間違いだな」

「ムキイイ！ 売れ残りって言うなアアア！」

間違いを訂正してやったただけだ、って珍しいなパー子発砲しねえのかよ？

いや発砲してほしいわけじゃねえけど。

「仕方ないじゃん、今張り込みしてるんだから撃つたらバレるし」

ふむ・・・張り込みか・・・薄々はわかってたけどやっぱし張り込みだったわけか。

ちなみに張り込みつつてもクルマの中でしてるわけじゃなく張り込み相手の近くのアパートを借りてそこで見張りをしている。

ようするに俺はパー子にエサをやる係ってわけだ。

「エサ言うな！」

言っつてねえつうの考えただけだ、ってそつだ。

「パー子？ もしや泊まりになるか？」

「なるよ〜？ あっアンタの爺さんには連絡しといたからコキ使えつてね」

今でも十分使ってたろうに。

つかジジイもジジイでアツサリ頷くな・・・いやジジイだし言うても無駄だわな。

「おっ！！」

ン？ 動きがあったか。

「むむッ！！」

随分と真剣な顔で望遠鏡を覗いてるな？ どれ。

「俺にも見せろつと」

パー子を横にずらし望遠鏡を覗いてみるってオイ。

「オマエはオツサンか！！何普通に覗きしてんの張り込みはどうした張り込みはバカなの？ バカだろ？ バカと言え！！」

望遠鏡から見えたのは着替え中の女の人の姿だった。

「そんなに怒んないくてもいいじゃん？ いいもの見れたでしょ？」

コイツは・・・サツと懐から携帯を取り出す

「えっなに写メに撮るの？」

今だにアホなことを言ってるパー子。

『ピ・ポ・パ』

通報っていうかミヤさんに報告あわよくばチェンジをお願いしたい。

「ン？ マサナリ君かいどうしたん」

「ミヤさん？・・・今パー子と」

「・・・ただ今留守にしております香田君関連のことに関しては今後も留守なのでかけても」

『プッ』

シット！ 完全に丸投げしやがった！！思わず携帯を叩きつけようか迷ってる俺の肩をパー子はポンと叩き。

「あきらめなってる？ アンタと私はコンビなのさ？」

白い歯眩しくサムズアップして笑うパー子に正直軽い殺意を覚えた。

コイツはマジでどうにかならんのか？ なんでジジイといいコイツといい俺の周りにはこんなばっかなんだチクソウ・・・

「アンタだって似たようなもんじゃん？ バグのくせに」

「オマエらと一緒にすんな確かにバグだけどオマエら程ネジは外れてねエー！ー！」

「ヤク○事務所を単身で潰すような中坊のことを普通は外れてると  
言います」

クソ~~~~~言い返してエけど事実なだけに言い返せねえ~~~~  
~~~~。

「まっそう落ち込むなバカナリ君？ 飲むかミ○ミ○？」

落ち込ませたのオマエだろ！ とは思ったがミ○ミ○は好きなん  
でありがたく頂いた。

ミ○ミ○美味え~~~~。

「うむうむ流石はミ○ミ○！ 元気の源だね？」

「それには同意する」

まっ俺がミ○ミ○飲むようになったきっかけは今みてえにパー子  
から進められたからなんだけど、今では好きな物とは聞かれたらま  
ずミ○ミ○ってくらいに好きだ。

コレに関しては素晴らしい飲み物を教えてくれたパー子に感謝し  
てる。

「そうかそうか感謝してるか〜うんうん！ じゃ足ナメ」

『ゴスッ！』



あんましアホだったんでつい手がでしまったゲンコツってやつだ。

「ツ〜〜冗談なのにさ〜？ っていうか乙女の頭をポカスカ叩くなバカになったら」

「安心しろ？ オマエはもう手遅れだ？ 更に言っと行き遅れだ？ やったな倍率ドンだ」

「クソツ・・・いつか絶対射殺してやる」

殺られてたまるかっつうの。

コイツホントにしそうだから怖えんだよな。

その後は見張り相手の方に特に動きはなくダラダラと時間だけが過ぎていく。

「じゃ私お風呂に入ってくるから〜覗くなよガキ？」

「フツ」

「鼻で笑われた！！」

そりゃ鼻で笑うだろ。

「この鍛えられたナイスボディ葉子さんに向かって」

「ペタンコのくせに」

「憎い・・・巨乳なヤツらが憎い・・・BとCの間には越えようの

ない壁がある……」

「Aのくせに見えを張るな見えを」

「ギクツ！！上げ底バレてる！！ううゝ入ってくるよシクシク」

哀愁漂う背中を見ながら俺が感じたことは何故か晴れやかな気分だった。

「外道~~~~~」

失礼なやつちゃ？

さてさてパー子は気にせず見張り見張りつと。

望遠鏡を覗き見張りを再開……動きなしつと。

あつちなみに何の見張りかっていうとヤバイ葉っぱの取引があるんだと。

で取引があつたら写真に取った上で急いで踏み込みあわよくば確保。

コレ……パー子はまだしも中坊の俺がやっていい仕事じゃねえよな？ まっコレも今に始まったこっちゃんえねえけど。

「おっ？ ちゃんと見張りしてるね〜感心感心！」

パー子上がったか？

「ちゃんと温まったか？ 春とはいえまだ寒いんだから風邪引くぞ？ ってコラまだ髪濡れまくってんだろ？ マジで風邪引くぞ」

「そのうち渴くって」

ハア〜。

「チツ！ 来い！ オラ タオル寄越せ？」

半ば強制的にタオルを奪いガシガシと拭いてやる。

「アンタってさあ？ 意外と面倒見いいよね〜？」

俺に頭をガシガシされながらパー子は上目使いでそう言うてくる。

「普通だ普通！！ つかほっとかんだる普通」

「普通ねえ？ なんでアンタが友達出来ないのか不思議だわ？ 面倒見はいいし料理も上手いし、あつ仏頂面だから？ でも結構笑うわよね？ 私らの前じゃ」

「あんな俺ダチないわけじゃねえから？」

「アンタの学校にはいないっしょ？」

グッ・・・確かに。

「俺が見ると目え反らすか喧嘩売ってくるかの二択なんだよ・・・」

「あ〜アンタ目つき悪いもんね？ アンタのこと知らないヤツはそ

うつするか？ ちょっとは直しなよ？」

「生まれつきだったつうに整形しろってか？」

まあする気はサラサラねえけど。

「そついうことじゃないって？ 普段からニコニコしてたらいいじゃない？ ちょっとは変わるよ印象？」

逆に怖えつつうのつと。

「ほら終わり！ じゃ俺風呂入ってくるわ」

「覗いていい？」

「晚メシいらねえな？」

「すみませんでした~~~~」

綺麗な土下座だなオイ。

まっその土下座に免して晚メシ抜きは許してやるさね。

ちなみに俺の着替えやらの荷物はスポーツバックに入ってる普段から持ち歩くようにしてる、こつこつ事態に備えてな。

と説明もそこそこに服を脱いで風呂に入る。

風呂はいいやね〜やっぱし？ ささくれ立つ心が落ち着くわ。

パー子との張り込みは内風呂がある部屋が多い察しの通りパー子

のわがままだ、それがまかり通るのがパー子の凄い所だ。

その度にミヤさんが胃を押さえてるが。

最近俺がパー子の担当をしてることで胃薬の数が減ったよ！と嬉しそうに話したミヤさんに署の人達と一緒に思わず目頭が熱くなったものだ。

『ザバッ』

ついそのことを思い出してしまい再び目頭が熱くなりかけたが頭を振って風呂から上がりサツと着替えをすませ見張りをしてる部屋へと戻る。

「バカナリ〜〜ごは〜ん」

ハア〜〜早速エサやりの仕事が待っていた。

「ちょっと待ってる?」

ため息をはきながらもエサを作ることに、さて何を作るか。

「につくじゃが！ につくじゃが!」

肉じゃがが食いたいらしい。

まっ材料はあるし肉じゃがにするか。

サクサクと準備を進め料理を作っていく、であっという間に完成。

「ほれ？」

「いただきま〜す〜ハグハグ、肉じゃが美味え〜〜」

ホント美味そうに食うよな？ パー子のヤツ、作りがいがあるわ  
ジジイは文句しか言わないからな。

そう思いながらも自分の分につけていく、ふむ中々。

「美味え〜〜バカナリ〜私の嫁に来〜い」

「イヤだ、オマエはイヤだ例え無人島にオマエと二人だけになってもオマエはイヤだ」

「チイクシヨ〜〜〜ハグハグハグ」

普通に食えんのかコイツは。

その後パー子はさっさと寝て俺に見張りを任せやがった。

まあコレもいつものことだが。

こんな感じで停学&張り込み初日は終了。

・  
・  
・  
・

張り込み2日目。

「ふあ〜〜おは〜〜バカナリ？ 動きあつた？」

タップリ8時間の睡眠をとり間抜けな欠伸をしながら起きるパー子。

「あつたら叩き起こしてるっつうの？ 顔洗ってこい」

「ンー」

素直に顔を洗いにいくパー子、で顔を洗い終わると予想通り。

「ごはん！ タマゴ焼きと魚とみそ汁と白米、あつおしんこもね？」

朝メシのリクエスト、メニューまでキツチリと。

「はいよ」

素直に作るエサを与えないとうるさいのだ。

ちなみにコイツは料理は出来ない、俺がいないとインスタントや出前、コンビニ弁当頼りになる。

故にたまにパー子の家にメシを作りに行ったりもする。

パー子の母ちゃんにも頼まてるしな。

そう考えてる間にも朝メシは完成し二人で食う相変わらず喧しく食うパー子であった。

その後

「じゃ俺2時間くれえ寝るから」

一週間くらいは寝なくても大丈夫だけど一応は軽く寝ておこうと思っただけになつた瞬間。

「ダメ！ アンタ寝たら私ヒマじゃん」

即効で邪魔された。

「見張りをしろ？」

それだけ言つて目を閉じる。

「寝るな〜寝たら死ぬぞ〜私が！ ヒマ過ぎて！ いいのか〜」

うつ・・・うぜえ・・・マジうぜえ、ハア〜しゃあないムクツと起き上がり

「わあつたよ寝ねえよ・・・つつか寝れねえよ」

まつ別にそこまで眠いわけじゃねえしな。

「わあーい！！ だからマサナリ君好き〜愛してる〜」

「オマエの愛はいらん」

「にゃー！！ にゃにい〜〜〜署内きつてのアイドル葉子ちゃんのおぞぞー！！」



「上に暴走がつかない？ 後アイドルって年じゃねえから」

「ムガア~~~~張り込み終わったら絶対射殺してやるからなバカナ  
り~~~~」

はいはい。

二日目はこんな感じ動きなし。

三日目・・・

「腰揉んで？」

「はいよ」

「あつても変なところ触っちゃや〜よ？」

「ハッ」

「また鼻で笑われた!!!」

腰やら肩やらを揉まされる動きなし。

そして四日目。

「バカナリ！ 行くよ!!!」

「動いたかよ」

とうとう動きがあったようだ、こういつ時のパー子は普段と違いシッカリとした顔になる。

やはり刑事なんだな、と思う瞬間だ。

「写真は撮ったんか？」

アパートから出てる寸前にこのことを確認。

「当然!!！」

ならよし！ アパートを出てヤツらのアパートに急ぐ……ン？  
マズッ!!！」

「パー子！？バレたッ！」

「はっ？ マジ？」

俺らが向かってるのが相手にバレたっばい慌てて相手は部屋が飛び出している。

ってオイ！

「パー子ッ！ しゃがめ！」

パー子の頭を抱えこむ瞬間。

『ダキュンドウッ!!』

肩に衝撃、痛ってエエ。

「ちょアンタ大丈夫!!」

「痛えに決まってるんだろ？ 痣になんなこりゃ？ 痛ッてエエエ」

「撃たれて痣で済むアンタやっぱおかしいわ？ でもサンキュー」

どう致しまして。

「さあて・・・とっ!!」

ギラツと獲物を狩る目になるパー子。

「よくも私の相棒を撃ってくれたわね・・・ヤツら許さん!!」

キレてやがる完全に目が座ってやがるし。

「殺すなよ捕まえるのが仕事なんだから」

俺自身もムカついてはいるんだが一応忠告。

「殺さないよ腕の1、2本は頂くけどね!! 行くよッ!」

「じゃ俺は肋骨で」

あつ総入れ歯も追加だな、パー子に当たってたらヤバかったし。

撃ってきたヤツの処刑方を考えながらも逃走しようとしているヤツらを追い掛ける、追い掛けながらも近くにあった石を拾い。

「シャラアアア!！」

『ブオンゴギヤア』

俺を撃ってきた相手に投擲。

「ストラーク!! うわ~~~~痛ぞ〜」

パー子の言う通り見事顔面ヒット! よし総入れ歯完了だな。

「お〜お〜慌ててる慌ててる! じゃ私も」

『ダキユン! ダキユン! ダキユン!』

楽しそうに撃ってるなオイ! あっ一応足元狙ってるな。

「逃げるのやめないと次は当てるよ~~~~っっていうか逃げろ! さあ逃げろ! 今すぐ逃げ」

『ガツツ!』

「ツつ~~~~叩かなくてもいいのに~~~~」

知るか! つか逃走を促すな、そして当てたがるな。

あつヤツらは完全に逃走を止めたようだ、パー子の撃ちたいオーラにやられたんだらうな。

流石に命は惜しいってか。

とこうしてヤバイ葉っぱの取引をしてたヤツらの確保に成功したのだった。

ちなみに宣言通り俺を撃ったヤツの肋骨は俺が両腕はパー子が頂いた。

その時他の捕まえたヤツらの怯えようはチワワ並の震えっぷりだったことを伝えておく。

引き渡した時にやっぱしミヤさんが胃がぐぐぐ胃がぐぐぐと言っていたが反省も後悔もして・・・いやちよつとは悪かったかもしれないなあ。

「じゃあねバカナリ？ 助かったわ、またお願いね、アンタの爺さんにもヨロシク言っといて」

「ヒマだったらな」

その後はパー子に家の近くまで送ってもらい帰宅した。

その夜・・・ジジイがビームをブツ放した流石に死ぬかと思った。

・  
・  
・  
・

「とまあこんな感じでござえますよ」

中学時代の思い出つうか出来事的な感じのことを話し終えたらみなさんから。

「「「映画?」「」」」

って言われてしまいました・・・否定出来ねえッス。

「マサさんとお爺さんもそうだけど葉子さんって人の影響も受けてるんだね?」

むむ・・・確かにそうやも知れんな? つか今の俺ってジジイとパー子を足して割った感じじゃね? ころキツツイ。

「ねえねえマサ君、その葉子さんとはどうなったの?」

恭子君・・・どうなったってどういう意味だ? つかなんでその質問に反応しまっくってんだララ達は。

まっいいさね。

「どうもこうもずっと振り回されっぱなしだったわ? ジジイと双壁をなす厄介なヤツだったわ」

まっお陰ついたらアレだけど徐々に俺も砕けた性格になっちまっただんですけどね。

「マサ君が振り回されるって・・・想像したくないわね・・・」

唯さんや言ってることはわかるがもっとなんかフワツとしたのに

包んで欲しいッス。

そう思いつつも俺の昔語りは終了したのでありました。

・  
・  
・  
・

夜・・・みんなが寝静まった後コツソリと庭に出る。

パー子は結局結婚はしなかった、というか出来なかった。

何故なら死んじまったからだ。

俺が三年に上がる前にクルマに引かれてアツサリ死んだ。

道路に飛び出した子供を助けてっつうパー子らしい理由だ。

俺が病院に駆け付けた時にはもう助からない状態だった最後の言葉は

「結婚しなかったな」

最後までソレだった泣いていいのか笑っていいのかわからねえっつうの。

久々にパー子のことを思い出し少し笑って少し泣けた。

俺も一回死んじまったけど・・・パー子アノ世で結婚できたのか

ね。

「無理だな」

『無理言つなバカナリ!!』

どこかでパー子の声が聞こえた気が少し笑ってから。

「笑ってるぜ俺はよ？ 四六時中じゃねえけどよ」

ポツリと呟いてミ○ミ○を飲んだ。



閑話っぽい感じ！（後書き）

後書き

マサの思い出話でした。

なんか跡付けっぽいけど流してやって下さい。

次回は本編・・・の予定。

番外編っぽい感じ！その6（前書き）

前書き

本編の進みが非常に悪いです。

故にまたまたネタを・・・

かなりご都合連発。

口調も変。

何時ものことですが・・・それでも大丈夫なかたはどうぞ。

## 番外編つばい感じ！その6

くもしも リリカル世界だったら・3く

その1

『ズツ』

「ン？ うおっ！？ すげっ手が生えとるし？ けど痛くねえな  
ふむ・・・よしっ」

『ガシツ！！』

「雑巾搾りだオラアア！！」

『ギチギチギチ』

「痛い痛い痛い~~~~~延びる延びちゃっ皮が延びちゃっ~~~~」

謎の襲撃者・・・まあシャマルですが、シャマル雑巾搾りの刑。

・  
・  
・  
・

その2

「で・・・オマエら誰よ？」

「」「」「」「」「」「」

「黙秘かい、キミらね？ 人体に腕突っ込んでおいてそれはないんでねえの？」

「アナタだって私の手を搾ったじゃないですか・・・ほら真っ赤になっちゃったじゃないですか！！！」

「その程度ですんでよかったね、次はジュース（血）が出るまで搾んぞ？」

「ヒイツ」

「まっ冗談だ半分は・・・でそのピンクポニー！！！」

「わっ私か？」

「オマエ以外にピンクポニーはいねえだろ大体なんだオマエら揃いも揃ってコスプレしてからに・・・ってあつなるほどオマエ・・・手品師か？」

「違う！！！」

「違えよッ！！！」

「違います！！！」

「違うぞ」

「だろうね？ 大方アレだろ魔導師だったか？ だろ？」

「違う騎士だ」

「棋士ねえ・・・何将棋とか強えの？」

「騎士違いだッ！！」

なんかアツサリ言ってしまったシグナムさんです、ちなみに四人纏めてやられてるんで四人が四人とも頭にデカイタンコブがついてます。

そして

「はぁ・・・ようするにオマエらん主・・・つかオマエらん様子見てたら主つつか家族か？ の病気を治す為に魔力を集めてたと・・・」

「主は・・・今もその病に蝕まれ車椅子での生活を余儀なくされている」

「車椅子・・・ン？ 車椅子！？ アレ・・・聞き覚えが・・・つかもしや・・・オマエらん言ってるやつってよ関西弁のタヌキみたいなチビっ子じゃね？」

「タヌキじゃねエ！！ はやてをバカにしてんのかテメエ！！」

「ちょっとヴィータちゃんはやてちゃんの名前言っちゃった！？」

「オマエもだシヤマル・・・」

「あっ!!」

「なんかてんやわんやだなオイ？ まっいいさねやつぱし はやてだったかよ・・・ガッツリ知り合い・・・つつかダチやがな」

「何！？ オマエ 主を知ってるのか!？」

「まっタイムセールを共に闘う仲だからな？」

「タイムセール・・・はっ!! オマエ名前は？」

「鬼島 政成ってんだ マサかマサナリでヨロシク！」

はい実はマサ、はやてと顔見知り、マサ的にはダチだったようです。

で自己紹介後、なんやかんやでマサも協力することに。

「いいのか？ 確かに主から聞いた限りオマエという人物は信頼できそうだしその強さも魅力的だが」

「シグさんや・・・あのなダチがよお大変な目にあってたらよ手を出すなんてなあ『当たり前』のことなんだよ」

「フツ・・・『当たり前』か・・・しかし私達のやってることは言ってしまうえば犯罪だホントにいいのか？」

「普通に頼めばいんじゃないかね？ ちょっと魔力頂戴 みたいな感じで

つかシャマルが俺ン体に手をつ突っ込んだんも魔力を取る為か？」

「リンカーコア自体有りませんでしたけどね・・・凄い力を感じたんですけど」

「はっ？　じゃ何かコイツ魔力も何もなしであんなふざけた強さだったってのかよ!？」

「何ッ!！」

ヴォルケン組かなりビツクリ、流石のヴォルケン組もこんなぶっ飛んだヤツを見たことはなかったようです。

・  
・  
・  
・

その3

「はい今回魔力を提供してくれるフェイトに　プレシア　でなのは君で〜すハイ拍手〜」

「まっマサナリには借りがあるし少しくらいなら構わないわ」

「うんマサお兄さんには一杯助けてもらっただもん」

「お兄ちゃんが迷惑かけちゃったしそれにほって置けないの」

「マサナリ・・・アノ話　本気だったのか？」

「まあよ？ こっちのが手っ取り早いべ？ それにプレシアは魔法に関してスペシャリストだぜ俺よか断然頼りにならあ」

「そう言われると照れるわね・・・ンッン・・・それでアナタ達・・・闇の書の・・・いえ違うわね確か・・・夜天の書だったかしら」

「夜天・・・なんだその名は・・・聞き覚えが・・・」

「私も」

「私もです」

「・・・」

「あら・・・なるほどね・・・どうやらバグが発生してるみたいね？」

「呼んだ？」

「マサナリじゃないわよ！？ ンッン・・・つまり今は『闇の書』と言われているけど本来は『夜天の書』と呼ばれるものよ？ けど致命的なバグが発生したのかその守護騎士達も『闇の書』だと思ってる・・・コノ子達の主が病に掛かっているのもその辺りに原因がありそうね」

「おお～～～流石はプレシア！！」

「アリシアを生き返らそうと色々調べ回ったからロストロギアに関する知識はそこいらの専門家より遥かに豊富よ」



「ロストロギアって何だっけ？」

「マサお兄さん前にも説明したよ〜」

「悪い忘れた」

「簡単に言うと凄い力をもった代物よ？ まっマサナリ自体が歩くロストロギアね」

「『『『『『『『『『『『』』』』』』』』』』』』」

「ナイスチームワークだなオイ！」

マサ、歩くロストロギア、ちなみにフェイト、なのは、は管理局に入ってますん 軽く手伝う程度です。

でそれからプレシアさんの魔力を集めるよりバグを外した方が手っ取り早いということバグを外すことに。

その方法は・・・

「持っててよかったジュエル・シード！！」

「アナタ・・・それ・・・」

「フツ・・・何かの役に立つと思って二つばっかしパチツといた」

「マサお兄さん無茶苦茶・・・」

「マサさんダメだよそんなことしちゃー!」

「まあまあええがな? 平和利用ですよ」

「マサ兄? いきなり来て・・・むっ・・・マサ兄!」 どういうことや!? 私というものがありませんながらその子達は私とのことは」

『ガスッ』

「昼ドラの見過ぎだアホダヌキ!」

「痛いわ〜こんな車椅子で薄幸の美少女にする仕打ちやないよ」

「美少女は認めるが薄幸ではねえな? ほれ回りを見てみるシグにヴィーにシャマルにザフ・・・こないいやつらに囲まれてんだ? 何処が薄幸やねん」

「!?! うん せやな・・・薄幸ちゃうかったわ」

「主・・・」

「はやて・・・」

「はやてちゃん・・・」

「主・・・」

「で更に 車椅子もおさらばだ その本借りるぜ?」

「えっ？」

「そお〜いッ!〜!」

『カツ!〜!』

「はい終了〜」

「相変わらず掛け声はそれなのね？　なんでそれでホントに使えるのかが不思議よ・・・」

「えっと・・・マサ兄？　何が・・・ってマサ兄・・・今マサ兄に抱き着いてる女は誰なん？」

「さあ？　つか離れる」

「あっすっすいません・・・つい」

「ついって意味わかんねえつうの・・・つか完全に本から出てこなかった？」

「はい・・・ンン・・・バグが取り除かれたので私もこうして出てくることが出来ました、私の名前は・・・名前・・・名前・・・」

「えっ名前ないの？」

「はい・・・シヨンボリ」

「シグ達は知ってる？」

「ああ……まだ記憶が曖昧だが確かに私達守護騎士は四人ではなく五人だったコノ者は融合騎だったのだが……名前は……名前は……シヤマル頼む!!」

「えっ私に振るの……えと……えと……ヴィータちゃん!!」

「はっ!? 無理無理 わかんねえってザフィーラなんとかしろって!!」

「ワウ!!」

「座敷犬になってごまかしやがった!？」

「うう……いいんだ……私なんて……どうせ私なんていなくても物語は進んで行くんだ……それでハッピーエンドとかになるんだ……」

「すげえダークサイドに堕ちてんな……はやてなんかない? オマエん本から出てきたんだし?」

「ん……あっ!! リンフォース!! リンフォースはどうや?」

「主イ……ありがとうございます……コレからは気軽にリンと御呼び下さい! セカンドオーナーも」

「セカンドオーナー? 俺?」

「はい私をあの手から救いだしてくれましたから」

「はぁ・・・つかセカンドオーナーはやめれマサかマサナリでいいの」

「わかりました」

なんかリインフォースが出てきました、ただ喋り方がわからない・・・こんなじゃなかった気が・・・そしてご都合連発。

・・・  
その4

「ねえ　なのは？」

「何フェイトちゃん？」

「私達・・・来た意味あったのかな？」

「言わないでフェイトちゃん・・・」

ほんのり空気のフェイトと　なのはでした。

・・・  
その5

「っとはやて オマエ足・・・どうだ？ 治ってるはずなんだが？」

「えっ？ あっ感覚が・・・ンツ動く！！ 動くでマサ兄！！ うわっ」

『バツ』

「おっと・・・いきなり動き回るんは無理か・・・まっ叙情になれてきやいいか？」

「うん！！ ありがとなマサ兄！ 家族も増えたし足も動くええことづくめや！ エへへへ」

「うむナイススマイル！」

管理局出番無しでした。

・  
・  
・  
・

ちよっとしたオマケ

s t s にて・・・

「努力することの何処が悪いんですか！！ 凡人は努力するしかないんですよッ！ー！」

「ティアナ・・・努力することは悪いことじゃない・・・でもね・・・

・コレを見て……」

『パッ』

「何ですかコノ映像……ただ女の人がゴロゴロ寛いでるだけじゃないですか!！」

「まだわからないかな……あのね……そうやってそんなことばかり考えてたら……」

「ゴクリ」

「私のお姉ちゃんみたいにお嫁さんに行きそびれてああいう風になっちゃうんだよ!! それでもいいの!？」

「ハッ!?!……私……私……間違っていました……ごめんなさい　なのはさん……」

「いいのわかってくれれば」

「なのは……美由紀　かなりのたうち回ってんぞ?」

「お姉ちゃんの犠牲は無駄にはしないの……」

なんだコレ?

終わりです。

番外編っぽい感じ！その6（後書き）

後書き

美由紀さんのファン・・・スンマセンでしたアアア！！

なんかつい・・・

ええ次回こそは多分本編！！

感想などありましたら是非。



## 第三十六話っぽい感じ！（前書き）

前書き

なっ何とか・・・終わった・・・かなりグダグダな感じやも・・・

アノ人の登場です、ドンドン キャラが増えていく・・・

まだまだ増えますが・・・

それでは何時もの如く薬的なものを持ってどうぞ！！

## 第三十六話 っぽい感じ！

放課後になったんで早速作業着に着替えて件の旧校舎へとやってまいりました。

作業着は概ね好評、そしてララに

「ヤミちゃんばっかりずるい〜」

とか言われたんで

「はいはいララにはララでなんかこさえてやっから　つかペケの仕事取ることにならね？」

『大丈夫ですマサナリ殿の技術は参考になりますから』

「そうかいそいつあよかった」

どうやら大丈夫みたいね、実はひそかに俺ペケとそこそ服について話したりとかしてます、描写ないけど、っとイカンイカンなんかアレな発言、とか考えたらやっぱしララに

「わあ〜いマサ大好き〜〜〜」

「はいはいリトガードっ」と

飛び付かれたんで当然リトを差し出しとききました。



ブーブー言ってたくせに今はノリノリのララ、恭子、で里沙、未央。

「「うううう」」

微妙に・・・つつか完全に腰が引けてるリト、春菜っておよ？

「大丈夫・・・幽霊なんていない大丈夫・・・」

ひそかに唯もビビり入っとなるがな。

「フフツよしこのチャンスをいかして・・・マサナリ君と・・・エ  
へへへへへへ」

ルン・・・オマエ・・・なんかアレだな不審者丸出したなオイ。

「まっ頑張るベヤミっ子 MY総合サービス結成初仕事だ!!」

「ええ!!」

うむうむ良い返事、まっ今までも色々こなしてたけどな。

さて今度こそ・・・

「「「キツ・・・キヤアアアアア!!」」」

おつ？ 既に誰か・・・つつか聞き覚えありまくりな声だが・・・

「誰が入っていたようですね・・・マサナリどうしますか？」

「いやさ完全に知り合いっつかダチだから」

「ほっとくわけにもイカンわなあ？」

暢気にヤミと会話してる中、ひっそりと春菜がパニック状態。

つか春菜だけじゃねえけど。

「俺らは先入って今の声のやつらん様子見てくるわ」

「わかりましたコチラはまかせて下さい」

うむ流石はヤミっ子頼りになりますわい。

ガツチリ撫でていざ突入！！

『ギシッ・・・』

ふむ・・・暗えなまだ日は落ちてないんだが。

「いや〜〜雰囲気あるね〜〜」

「いかにも出てきそ〜〜」

まあ確かにソレっぽいっつちャソレっぽい。

「ゆ・・・幽霊なんていないわよ 非科学・・・ジー〜」

「非科学代表ですが何か？」

「い……いるかも知れない……いえマサ君は別！！ 宇宙人や異世界人はいても幽霊なんていないはず！！」

一応、俺生き返ったけど元・幽霊ってことに……なるのか？  
わからん？

まっいいさね。

「マサナリ君……暗くて歩き辛いから手を繋いで欲しいな？」

ふむ……確かに普通の人まつルンは宇宙人だけんど、には見え辛いか？ あつ俺は夜目がききますんで。

『グッ』

「えっ……あの……コレ？」

「懐中電灯 それなりん重さがあつから鈍器としても使えっぞ？」

「あつ……ありがとうマサナリ君……うう……やっぱり手強い……手を繋ぎたかったのに……」

はあ

「寧ろんな暗いところで手を繋いで歩いたらコケるべさ？ 唯に里沙未央も使うか？」

「えっええ」

「うんうん用意いいねマサマサ!」

そいつぁどうも。

「つと・・・そろそろ声が聞こえた場所か?」

『理科室』

と書いてますな。

「ゴクリ・・・いかにもって感じやっぱり基本だよね理科室って」

「うんうん動くガイコツとか人体模型とか」

「ちょっとやめなさいよ里沙さん未央さん!」

「よし・・・何か出てきた時が抱き着くチャンス!! チャンスを逃がすな私!」

チャンスって何だチャンスって・・・ってしもつたりトがない・・・まっ避ければいつか?

さて

『ガラッ』

「沙姫～～凜～～綾～～いるか～～?」

はい先程の声はコノ三人でした。

「ヒィ〜〜〜何も聞こえませんか 何も見てませんわ」

おう？ すんげえガダブルしてんな、春菜といい勝負。

「沙姫様 幽霊ではありません 政成です」

それに比べて冷静・・・でもないか若干顔が青い凜。

「きゅ〜〜〜」

綾にいたっては意識飛ばしとるし。

「あの声って天条院 先輩だったのね・・・」

そうだったんですよ唯。

で何とか落ち着いたところで何故に旧校舎に来たと聞いたところ。

「この学校の女王<sup>クイーン</sup>たる私が学校で知らない事などあつてはなりませんわ!!」

との事らしい。

「すまないな政成 一応は止めたのだが・・・」

凜は何とか止めようとしたみたいね？ まっソレで止まるようなタイプじゃないわな。

「ちょっと凜 政成さん何をこそこそ話してますの!!」



沙姫元氣一杯だな、さつきまでガダブルしてたのに。

「まっ元氣が出たならそれでよしってか？ 綾は・・・里沙？  
綾  
は  
」

「まだ氣を失ってるよ〜どうするマサマサ？」

ふむ・・・まっどうするもこっするもねえわな？

ヒョイツと担いで。

「一旦出て保健さんに預けてくつか？」

「そうした方がいいわね」

唯も俺の意見に賛同、まっこのまま進んでも全然いいんだけど  
応って事で。

で綾を連れて一旦外へ・・・出ようとした時

『出てけ・・・ココから出ていけ・・・』

「「「「「ヒッ！？」「「「「

ふむ・・・

「言われんでも出てくっつっつに・・・まっ後でまたくっけど」

話を聞いてなかったんかね？

「まっまママサマサ・・・あっあ・・・アレ！　アレ！！」

アン？　里沙どうした・・・っておよ？

『ガチャガチャ・・・ギシッギシッ』

ガイコツと人体模型が動いとるな、　さっきん声はコイツらか。

「あっ・・・ありえない・・・幽霊なんて空想の産物であって・・・

唯・・・なんかブツブツ言い出したし。

「ヒイ~~~~私も何も見てませんわ~~~~何も聞こえませんが~~~~」

「沙姫様　落ち着いて下さい！！　とりあえず政成に抱き着きましょう」

オイとりあえずって何だとりあえずって

『ギラッ！！』

「今だ！　マサナリ君~~~~怖~~~~むずむず・・・嘘　こんな時にッ・・・へ・・・へ・・・ヘックシッ！！」

『ボウン！！』

ルンがレンにチェンジ、つか久々だな

「よおレン？ とりあえず・・・コレ着るか？」

「たっ助かるよマサ・・・」

女子の制服のままだったんでたまたま持ってたジャージを貸してやりました。

微妙に女子の制服が似合ってたのが涙を誘う。

にしても・・・

「意外と落ち着いてんな未央？」

と思ったら。

『フキフキフキ』

「・・・」

無言でメガネを拭いてました・・・寧ろそっちのが怖えッス。  
『出てけ・・・さもないと・・・』

だから出てくっくっしてんだろっが。

『ガシヤ・・・ギギッ！！』

「イヤ~~~~来た~~~~マサマサ~~~~何とかして~~~~」

はいはい。

「よっ・・・」

近くに落ちてた棚を右足で蹴り上げて・・・

『ギョルッ』

回転しながら左足で

「こらせッ!」

『ドンッ!』

ガイコツ&人体模型コンビに蹴りつける

『グシャッ!』

でガイコツ&人体模型コンビ・・・メンドイな理科室コンビでいか？ は壁と棚に挟まれ身動き出来ず。

「コレでよかる？ じゃー旦那ぞ〜」

「おお〜マサマサカツコイ〜」

よせやい照れらァ つか里沙さっきまでビビッてなかったか？ まっいいけぢ。

「ポ〜」

沙姫に凜は何をほうけてんだか？

「まっマサ君・・・少しやり過ぎじゃ・・・いくらゆっ幽霊とはいえ・・・」

加減してるつうに、つか唯、幽霊なんていないんじゃないんかったんかい。

まっ多分アレ幽霊じゃねえけど。

『カサカサカサ』

ン？音がする方を見てみたらさっきン壁と棚の間から 小さい毛玉がわらわらと出てきた・・・まさか・・・

「真っ黒く」

「マサ アレ多分宇宙人だ」

言い切る直前にレンに阻止された、残念・・・違ったらしい。

『逃げる~~~~みんなに報告だ~~~~』

喋りおつた!!

なんと喋れるのか・・・コレはまた・・・ふむ・・・

『ヒュッ』

一匹一人？どっちだ？ まっいいや取り敢えず確保。

『ヒィ〜〜〜離せ〜〜〜!!』

イヤです。

ピチピチ暴れる毛玉君ですが逃げられないとわかると大人しくなりました。

『フン!! 離さなかったことを後悔するぞ仲間は沢山いるんだ!』

口は大人しくなってねえけどね!!

って仲間 さっきん毛玉の群れか? 違っっぽいよな。

はて・・・つか今だに綾を抱えたまんまなんだが・・・コレこのまま次のイベントに入るんじゃない・・・

「イヤアアアア!!」

「ちょ春菜ちゃん落ち着い・・・うわアアア」

入るようです。

「今のって春菜さんと結城君の・・・」

唯の呟きの直後。

『ズドン!! バキッ!! ドガッ!!』

響く破壊音。

間違いねえな・・・

「春菜無双だな」

いつぞやの肝試し以来だな。

「冷静に行ってる場合じゃないでしょ!!」

「ごもつともですな。」

で急いで現場に駆け付けたら周りには春菜が討ち取った沢山の屍

・・・

まっ全員多分宇宙の方々、もしくは妖怪なんか？

で顔がポッコロボコのリトに必死で謝ってる春菜。

もう正気に戻ったようだ。

しかし・・・アレだな・・・

「春菜が天下を取る日も近いな？」

「戦国乱世じゃないんだから・・・でも春菜ちゃん・・・暴走時はマサ君といい勝負

かも？」

「はっッ!?!」

あつペシヤって崩れ落ちた、そんなにイヤかい？ まっイヤだろ  
うな、自分で言うのもアレだけど。

「でヤミよ・・・どうした 何凹んでんの？」

「マサナリとの初仕事・・・醜態を曝してしまいました・・・ニユ  
ルニユルは苦手です・・・」

はあ・・・チラツと見てみたら確かにヤミっ子が苦手そうな一っ  
目のデカイタコみたいなんがいる。

「まっ次があらア」

「はい・・・」

なでなでしといた。

もちろんララにも要求されたんでララもなでなで。

ちなみにララ弱点の尻尾を掴まれて反撃できなかつたらしい。

で恭子は春菜の無双っぷりにアングリしてたんだと？

っとそれはともかく・・・

「毛玉君や？ 事情を話せやここ最近の幽霊騒ぎってオマエらか？」

俺に取っ捕まってたのがある意味幸いした毛玉君に事情徴収。

どうやら毛玉君達リストラされて放浪してたら地球に辿りついた



との事、でそんな連中が集まって旧校舎に住み着き

「なるほどね〜それで自分達の住み処を守る為に幽霊騒ぎを起こしたわけね？」

いつの間にもやら保健さん登場。

「御門 先生？」

「フフ・・・少し気になったから様子を見に来たのよ？ 別に出待ちしてたわけじゃないわよ？」

出待ちしてな？ その言い方完全に出待ちしてたな。

ほら俺以外の皆も俺ン心の声に賛同して頷いとるし。

『ミカド・・・？』

『あの有名なドクター・ミカド！？』

っておよ？気がついた宇宙の方々がざわざわしとる。

「保健さん有名人なん？」

「それなりにね？」

ふん。

「ドクター・ミカドは医者としてとても有名ですから」

ヤミっ子の補足説明。

そういやヤミっ子も保健さんの事知ってたしな、まっヤミはヤミで有名らしいけど。

「それにしてアナタ達・・・コノ子達に手を出してよくその程度ですんだわね？」

コノ子達・・・」

『『『デビルークの姫と・・・殺し屋 金色の闇イイイイ！！』』』

おう！？ 宇宙の方々かなり驚いてる・・・つつかビビッてる。

ガタブル震えて

『『『こっ殺さないで~~~~~』』』

とか言っとるし。

そんな宇宙の方々にララは

「やだ そんな事しないよ」

うむっむララ君は優しい子ですな

その言葉に感激した一つ目タコの方がヤミっ子ににじり寄ってたが直ぐさまヤミっ子、俺の後ろに隠れて。

「す・・・少しでも触れたら斬りますよ」

強気なのか弱気なのか・・・でも可愛いッス。

「ガクラン君もそれでいいかしら？」

「俺？ ふむ・・・まっ 酌量の余地があるしな・・・実質的な被害は春菜無双によるリトだけだし？」

「うう~~~~言わないで・・・」

肝試しん時はあえて気付かないフリをしたが今は春菜も自分が仕出かした事って知ってるからね あえて弄ってみた。

「まっもしリトをツラ腫らしたンがオマエらだったら潰すけどよ？」

やり過ぎない程度に。

「ホントよかったわねアナタ達？」

『へっ？』

『ただの地球人なの？』

「クスッ 『ただの』 じゃないわよ？」

まっバグですから。

「っと保健さん幽霊騒ぎン原因はわかったけど・・・どつすんの」  
イツら住み処なんだろ？ リトん家は・・・」

「流石に無理だ!!」

リト君起きてたみたいね まっ確かに多いしデカイし無理か。

「ニユルニユルは・・・ニユルニユルは・・・」

ヤミ的な意味でも。

「ココに住ませるわけにもいかないし・・・仕方ないわね？ 私がアナタ達に仕事紹介してあげよつか？」

「おっ 保健さんアテがあるん？」

「ええ 知り合いに地球で遊園地の経営をやってる宇宙人がいるの  
アナタ達 オバケ屋敷とかにピツタリじゃない？」

『『『おお~~~~ホントすか!! すげー!!』』』

やんややんやな盛り上がり。

「なあ恭子 コイツら特撮とかでもイケんじゃね？」

「確かにイケるかも？ 今度監督に聞いてみるよ」

『『『すげー!!』』』 仕事が見つかったばかりかテレビデビュー  
!~!!』』』

いやさまだ決まってるじゃないかな？ まっいつか。

「~~~~見た目でオバケと驚いたけど意外と普通だったね？」

「うん見た目はアレだけどリストラとか仕事が決まって喜ぶとかね

「？」

確かに見た目は厳ついのはっかだしな、人の事 言えねえけど。

「結局 幽霊じゃなかったのね・・・やっぱり幽霊なんていないわ」

「うんよかったよ」

心底ホツとした表情の唯に春菜。

「オホホ・・・こんなことだろうと思っていましたわ！」

「沙姫様・・・ハア~~~~」

沙姫よ・・・オマエ春菜並にビビッてたる？ あっちなみにコノ二人も宇宙人ン事知ってます、ってアレ？ コレ言ったっけ？ まっついいや。

『スウ・・・』

『よかったですねお仕事見つかって・・・コレで私も静かに過ごす事ができます』

ン？

「またクラシカルな・・・」

声をする方を見てみたら、白い着物に透けてる体の女の子、ちらほら火の玉も・・・まさに幽霊。

「オマエさん幽霊？」

一応確認。

『はい！ 申し贈れました私 400年前にこの地で死んだ お静  
といます』

「へ〜〜〜400年・・・だから着物か？」

『一応幽霊ですから〜様式美です〜』

いやさ お静よ。

「俺 一回死んでるけど 死んでる時着物じゃなくて普通の服だったぞ？」

寝てる時の服だったし。

『そうなんですか〜今と昔の違いですかね〜？』

時代ってヤツだな。

「まっマサ君・・・な・・・何普通に会話してるの？」

「ゆっ幽霊だよマサマサ？」

いやさ唯に未央よ。

「だから 俺だって元・幽霊だつつに つか一々そんなんでビビ

つてたら身がもたんぞ?。」

つかビビる要素が見当たらねえつうの。

つて俺とララとヤミに保健さん以外全員ビビッてるし微妙にビックリ顔だけど・・・まあ春菜は暴走してないだけマシか?

『まあ普通は幽霊見たらあなりますよ』

「慣れた対応だな?。」

『ええコレでも400年の・・・えっと・・・えっと・・・なんて言っただけ?』

「ベテランか?。」

『はい!! それです ベてらん ですから』

まっ400年はベテランどころじゃないけどね。

「ガクラン君 ホントに動じないわね? ンツン・・・お静ちゃん  
つて言っただかしたらアナタ・・・私のところに来なさい体を造って上  
げるわ その若さで亡くなって・・・色々やりたいこともあるで  
しょ?。」

『えっ?』

「保健さん そんなんでできるの?。」

「ええ」

保健さんすげえな 今日大活躍じゃん。

『わあゝわあゝ実体ですか？ わあゝわあゝ ホントはちょっと憧れたんですゝ 私 幽霊だから人に触れないしすり抜けちゃうし』

どうやら静君、実体に憧れてたらしい、にしてもやっぱり幽霊ってすり抜けるんだな・・・どれ。

『ペタペタ』

『へッ？』

軽く手を触ってみたらすり抜けませんでした。

「すり抜けねえじゃん？」

『嘘？ なんで？ アレ？』

『ペタペタ』

俺をペタペタ触り出す お静君。

『アレ おかしいですねゝなんででしょう？』

なんでだろうねゝ？ 元・幽霊だからか。

で俺の対応が余りに普通だったからかビビッてたメンツも気が抜けたらしくスツカリ慣れてました、まっ綾は終始気絶してたけど。



ちなみに俺以外には触れませんでした。

「解剖」

「NO 解剖で!」

とこうしてなんやかんやありつつも幽霊騒ぎは解決と相成り・・・

「むつ村雨 静と申します! お静って呼んで下さい! あっマサナリさ〜ん〜体貰えました〜」

「おお〜よかったな〜静〜」

「はい〜」

クラスメイツが増えました。

「このクラス ドンドン おかしな人が増えてきてるわ・・・マサ君を筆頭に」

よせやい唯 照れるだろ?

「全然褒めてないわよ!」

残念。

「あっ新たなライバルの予感・・・」

ルンよライバルってなんだライバルって

「マサ君・・・罪な人だよ・・・」

恭子まで意味わかんねえつうに。

「仲良くなれるかな？」

「なれるなれる!!」

「うん頑張る!!」

ララはホントに良い子さんですな〜可愛いッス。

『キーンコーンカーンコーン』

おっと授業スタートー時限目は・・・歴史。

「歴史は得意です!!」

だろっね静君。

第三十六話っぽい感じ！（後書き）

後書き

かなり久々な本編でした。

次回は・・・なんたる未定？

そろそろ双子姉妹か？

やっぱり未定です。

第三十七話っぽい感じ！（前書き）

前書き

今回は殆どネタが入ってない感じ。

そしてマサの出番が殆ど無し。

けど頑張ったんでよろしければ見てやって下さい。

## 第三十七話っぽい感じ！

リト 視点

「うう~~~~きつ緊張する~~~~」

心臓の音が凄いいことになってるな・・・

彩南祭の時にマサに手渡された映画のチケットを見て気を紛らわしながら待ち合わせの場所へと足を進める。

映画はドタバタ系のコメディー、マサが言うにはイキナリ恋愛映画とかは厳しい、コッチのが後から盛り上がるとのこと、意外とそういつとこ詳しいだなんて思ってたらマサの部屋にそういうレクチャー本みたいのが置いてあった。

俺の為にわざわざ買って調べてくれたみたいだ。

ホント・・・普段はアレだけど友達思いで良いヤツだと思つ。

ララ達がマサが好きって気持ちもわかるよな・・・

はっ？ いや違うから俺はそういう趣味ないからな！！

『俺もだぞ~~~~』

いつ・・・今のマサの声が・・・幻聴？ いやマサならやりかねないような・・・

っていつの間にか待ち合わせ場所のネコ像の前……

春菜ちゃん私服姿だ自宅に帰って着替えたみたいだ……。今日も学校だったけど（半日）マサの指示らしい、制服姿でうろろろしてたらめんどくさいことになるからって言ってた、俺も家で着替えてきてるんだけどさ。

そういえばララのやつ……。用事があるって朝から見なかったな……。っていけねー!!

「はっ……。春菜ちゃん!!」

「あつリト君」

ちょっと吃つたけど仕方ないよな？ だって春菜ちゃん私服姿すっげ〜可愛い……。何度か見たことあるけどやっぱり可愛いぜ春菜ちゃん。

「あつあのリト君？ ボーッとしてどうしたの？」

「やばっ!! ついほづけちまった。」

「だっ大丈夫！ えっと……」

「クスッ そつか……。ならよかった」

「うう〜〜優しい〜〜」。

「えっと……。それじゃあコレ 春菜ちゃんの分のチケット!」

「えっあっうん．．．ありがとう」

取り敢えずマサから貰ったチケットを春菜ちゃんにも渡す。

「アレ．．．まだ映画には時間あるみたい．．．」

えっ？ 慌ててチケットを確認したら春菜ちゃんの言う通り確かに映画まで時間があるみたいだ、しかも結構な．．．どっど．．．どうしょ．．．コレで時間がありすぎるからって帰っちゃったら．．．ってネガティブになるな！

折角マサがお膳立てしてくれたのに！！

けど．．．うう〜

『クシヤ』

ン？ ポケットの中に何か紙が．．．チラッと確認してみたら。

『春菜はイヌが好きらしい．．．ペットショップが近くにあったぞ？ 休憩もできるらしいぞ？』

というメモっていうか手紙．．．マサ．．．ホントに頼りになる。

「あっあの春菜ちゃん時間あるみたいだから近くのペットショップに行かない？」

誘う言葉を言うのは俺、マサのメモはあったけど一歩踏み出さな  
いといけないのは俺自身だからな。

「えっ？ うん！ ちょっと行って見たかったんだ」

よしッ！

「そっそれじゃあ行くっか？」

「うっうん」

春菜ちゃんと並んでペットショップへと足を進める。

「リト君リト君」

「えっなっ何？」

「ペットショップこっちだよ？」

「あっ！ 悪い春菜ちゃん」

「クスッ謝ることじゃないよ」

まっこんな調子だったけど、でも無事にペットショップに到着することができた。

そして今は子犬のコーナーにいる。

「クーンクーン」

『□□□□』



「きゃつくすぐつたいよ〜」

子犬に頬を舐められてくすぐつたそうにしてる春菜ちゃん、でもよかった・・・楽しそう。

『ガジガジ』

俺他の子犬に何故か足をガジガシとかじられてるんだけど・・・まあ子犬だから痛くはないんだけど。

「春菜ちゃんって犬好きなんだね？」

足をかじられてることは気にしないことにして春菜ちゃんにその話を振ってみる。

「うん えつとお家にも一匹飼ってマロンっていう名前だね？ ホントはお姉ちゃんのなんだけど面倒を見てるうちに好きになっちゃって」

「そっそうなんだ ン？ 春菜ちゃんって姉がいたんだ」

「うん お姉ちゃん 一人暮らしたっただけど私が高校に上がったから学校に行くのに都合がいいからってお姉ちゃんのところから通ってるんだ」

へえ〜知らなかったな・・・

「お陰でこき使われちゃってるんだけどね？」

苦笑しながらそう言う春菜ちゃんだけど仲は凄くいいんだなって思った。

それから暫く子犬コーナーで子犬と遊んでる春菜ちゃんと学校ごととかの話をしたり、この前の幽霊騒ぎのことを謝れたり、好きなテレビ番組の話をしたりして過ごし。

小腹が空いてきたんでペットショップ内にある喫茶コーナーに行つて軽く摘める物と飲み物を注文。

俺はクラブサンドにコーヒー、春菜ちゃんはホットケーキにオレンジだ。

トレイに注文の品を乗せてテーブルに座つて食べ始める。

「結構美味しいな・・・でも」

「そうだね けど・・・」

「マサ（君）の美味しい」

同じことを考えてたみたいだ、思わず顔を見合わせて笑つてしまふ。

「店員さんには悪いけどね？」

ペロツと舌を出す春菜ちゃんが凄く可愛かった。

思えばこうやって春菜ちゃんのことを春菜ちゃんって呼ぶようになったりこうしてちゃんと・・・いやまあ少しは緊張してるけど、

話せるようになるとは思わなかったな。

そのキツカケの人物、俺の親友、変なヤツ・・・まっきつとマサなら

『俺がそうしたかったただけだからな』

って言うんだろっな。

と少しそんなことを考えてたら春菜ちゃんがどこかジーツと見ている場所がある、なんだって思って俺も見てみると 犬用のクッキーが売ってる場所だった。

さっき聞いたけど犬飼ってるって言うってたもんな。

よしッ！

注文の品は全部食べたことだし。

「春菜ちゃん コレ片付けて買いに行こっか？」

「いいの？」

「ああ 行こっぜ」

「うん ありがとう」

ちよっただけ前よりも積極的になれたかな？ 少しは成長してる気がする、まっホントは心臓バクバクなってるけど。

「クスツ・・・百面相みたい・・・」

うつ・・・声には出てないけど顔に出てたみたいだ。

そして会計の時に。

「えっ大丈夫だよ」

俺が払おうとしたら春菜ちゃんに悪いからって止められた・・・  
けど。

「大丈夫 ちよつと臨時収入があつたし」

そう言つて少し強引気味に俺が払つた、あつ臨時つてのは親父の  
仕事の手伝い、忙しい時（メ切り前）じゃないのに珍しいと思つ  
ただ。

『まっ息子のデ・・・おつとイケね口止めされてんだつた』

その言葉で大体は察した。

まっ取り敢えずは臨時収入があつたつてこと。

だから大丈夫は大丈夫。

「ありがとう リト君」

うん、この笑顔の為だつたら安いもんだよな。

そして春菜ちゃんが気になってた犬用のクッキーを買って、再び子犬コーナーで遊ぶ、フと時計を見るとそろそろ映画の時間が近づいて来ていた。

「春菜ちゃん そろそろ映画に行こうぜ」

「あつ時間なんだ・・・うんちょっと名残惜しいけど・・・バイバイ」

ちよつとだけ淋しそうに子犬に手を振る春菜ちゃん。

そんな春菜ちゃんに俺は勇気を振り絞って。

「まっまた来ような」

って言った、やっぱり吃ったけど、そして春菜ちゃんは嬉しそうな顔で。

「うん そうだね！」

そう言ってくれた・・・勇気を出したかいがあるぜ。

心の中でガッツポーズ。

・  
・  
・  
・

ペットショップから出て映画館へ移動した俺と春菜ちゃん、映画のチケットを出し中へと入る、ついでにポップコーンとジュースも・

・さつきも食べたばかりだけだな。

席は・・・

「リト君こっちだよ」

「ああ ありがとう春菜ちゃん」

春菜ちゃんが見付けてくれたみたいだ、その席へと移動して並んで腰を下ろす。

「面白そうだね」

「だね」

映画のパンフレットを見ながら上映までの間の時間を潰し、少ししたら上映が始まった。

映画はマサが言っていたみたいにコメディーみたいだ、少しだけ恋愛要素も入ってるけど基本はコメディー結構面白いみたいだな。

「クスッ」

まあ俺は隣で楽しそうな顔をしている春菜ちゃんを見てる方が楽しいけど。

って映画も見ないと！ 後で映画の話しを聞かれて見てませんでした、って流石に言えねえし。

そのことに気付いてからは、映画を見ながらチラチラと春菜ちゃ

んを見るって感じだった、たまに目が合った時はドキッとしたけど。

「面白いね？」

って小声で言ってくれた。

うん確かに面白かった・・・気がする、うんさっきはああ言ったけどやっぱり春菜ちゃんが気になって映画の内容が頭に入ってたのかなかった！

あつでもちゃんと見たぞ一応は！

内容頭に入ってないけど・・・。

まっまあとにかく映画が終わり辺りはスツカリ夕方。

「面白かったね映画？」

「あつああ・・・」

覚えてない・・・口には出さないけど。

「リト君あの・・・」

えっ？ あつそうか・・・もう夕方だし帰る時間もんな。

楽しい時間っていうのはホントに過ぎるのが早いよな。

もっとゆっくり流れりゃいいのに。

そう思いながらも。

「送っていくよ」

って春菜ちゃんに言う。

「あっうん・・・ありがとう」

今日の話しながら春菜ちゃんの家を足を進めていく、映画の話  
を振られた時は多少焦ったけどなんとかごまかした。

そして暫く歩いていると。

「あっお家ここだから」

あっもう着いたんだな。

「ああ それじゃあ 今日は楽しかった」

「あっあのリト君 もうちょっとだけお話ししたいし散歩しない？  
渡したい物もあるし・・・」

思わぬ春菜ちゃんからも申し出、断る理由は全然ない。

それに渡したい物って・・・まさか・・・いやいやいやいや思考  
が猿山みたくなってるし！

「あっああ」



取り敢えず春菜ちゃんの申し出をクビを縦に振って頷く、すると春菜ちゃんは。

「ありがとう ちょっと待っててねマロンも連れてくる」

そう言っただけの中へ入り、すぐにまた出てきた。

「ガウツガウツ!!」

ってうわッ!! 春菜ちゃんが出てきたと同時に一緒に出てきた犬が俺に向かって吠える。

「マロン リト君に吠えちゃダメ!」

春菜ちゃんが言ったマロンって犬ってコイツだったんだ。

結構気性荒そう。

「ゴメンねリト君?」

「いいよ全然大丈夫」

申し訳なさそうに謝る春菜ちゃんにそう言葉を返し、近くの公園へと散歩に出かけることに。

散歩の間にもマロンに吠えられたりしたりして、そのたびに春菜ちゃんに謝られたりしたけど、ちゃんと話しも出来たぞ。

そして公園につくとマロンは急に全力で走り出す。

急に走り出したもんだから春菜ちゃんはバランスを崩して転びそうになる、慌てて支えようと、調度抱き合うみたいなのが恰好になってしまった。

途端に頭に血が上る、ヤバイ意識が、春菜ちゃんも少し顔が赤い。けど俺はその比じゃないくらいに赤いだろう。

バツと離れて必死で気を失わないように意識を繋ぎ止める。

「あっありがとうりト君」

「うっうん・・・けっケガしなくてよかった・・・」

何とかそれだけ口にすることが出来た、そんな俺にマロンが

「ガウツ!!」

噛み付かんばかりの勢いで吠え出す、オマエが原因だろ！

いやちよつとだけ嬉しかったけど。

「マロン!! だから吠えちゃダメだよ! もう・・・」

再びマロンを叱る春菜ちゃんに俺は大丈夫って告げると春菜ちゃん、また俺に謝ってから。

「えっと・・・りト君・・・あのコレ!」

綺麗に包装された包みを渡された。

「お誕生日おめでとつリト君ー!!」

ほづけてる俺に春菜ちゃんがそう告げる……ってそう言えば今日って。

「俺の誕生日……」

「えっ忘れてたの!？」

いや春菜ちゃんとのデート……デート……になるのかな？ に意識が行き過ぎてて……とは流石に言えねえし。

「アハハ……ちょっとだけ……」

とりあえず苦笑いしながらごまかし。

「えっと……開けても？」

と春菜ちゃんに聞いてみる。

「うっうん気にいってくれるかわからないけど……」

春菜ちゃんのプレゼントだ、気にいらなはずがないって！ そっ思いなながら包みを開けると中には。

ジョウロがはいつてた

「えっと……私かねリト君のことを知ったのって中学の時にリト

君がお花にお水を上げてたのを見た時だったんだ・・・それで可愛いジヨウロだったから・・・どうかなって？」

春菜ちゃん・・・知ってたんだ・・・

「そっそれに！ ほら前にお花とか育ててるって言ってたから」

おっ覚えててくれたんだ・・・

「き・・・気にいらなかった？」

「そんなことないって！！ すっげー嬉しい！ 春菜ちゃんありがとうー！」

「わっ！！フフ・・・よかった！！」

ホント最高に嬉しい、俺のことを考えてくれたんだ、ホント嬉しい。

そっだ・・・いつそのこと・・・今・・・告白しまおうか・・・ちよっと良い雰囲気だし。

うん、そっしよっ！

そっ決意をして春菜ちゃんに告白しようとした時・・・

「ガウッ！」

『ガブッ！！！！』

「痛ってエエエエ!!」

「まっマロン!! メツ! ごめんリト君~~~~~」

マロンに阻止されてしまった・・・クソー・・・。

その後は必死に謝る春菜ちゃんに大丈夫って言って（ホントは痛えけど）春菜ちゃんを送ってから帰宅することにした。

告白は出来なかったけど・・・凄く楽しかったな。

そう思いながら家に入ると。

「~~~~~誕生日おめでと（うございます）~~~~~」

マサに美柑、親父にララにヤミまでがもそう言って出迎えてくれた。

うん春菜ちゃんの時とは別の嬉しさ。

すげえ嬉しい・・・それから家で俺の誕生日パーティーをした。くれた。

料理はマサと美柑がいつもより気合いを入れたって言ってたようにいつもより美味かった気がする。

気持ちも嬉しかったしな。

そして美柑からストラップを、ヤミからは本をプレゼントしてもらった。

でララは・・・

「リト〜私もプレゼント！ 庭に置いてあるから早く見て」

ララのプレゼントは庭にあるらしい、ララについていき庭に出ると、そこには・・・

『キシヤーー！！』

・・・  
なんかあきらなかに地球の外からきた感じの口がある巨大な花が・

「プランタス星だけに咲く 宇宙でも凄くレアな花だよ？」

いや・・・ララ・・・うっ嬉しいけど・・・

「こりゃスゲー！ すごいいいの貰ったな〜リト〜」

親父・・・マジか？ いや嬉しいけど。

「お世話頑張っつてねリト・・・」

美柑・・・頑張るけど・・・頑張るけどさ。

「コレは・・・プリンセス 奮発しましたね」

ヤミはこの花のこと知ってたようみたいだ・・・この花・・・そんなに凄いのか？ いや見たら解るけど。

「ふむ・・・名前はやっぱりビオラン」

「リト！ セリーヌにしよう！」

マサ危険な発言、確かに一瞬俺もそう思ったけど、そしてナイス  
美柑！

とこうして家に家族・・・まあ花だけが増え・・・俺の最高の  
誕生日は幕を閉じたのだった。

・  
・  
・  
・

少しオマケ

早速 春菜ちゃんに貰ったジヨウ口を使ってセリーヌに水をやって  
いたら。

「おっ それ・・・春菜からか？」

マサが料理を持って近付いてきた、セリーヌは水だけじゃなくて  
花の部分にある口からも食い物を食べるらしい。

それでマサが作ってくれたみたいだ。

「ああ・・・春菜ちゃんからのプレゼント！！」

「よかったなリト 楽しかったか？」

セリー又に食べ物を通してながらマサが俺にそう言うてくる。

「スゲー 楽しかった・・・ありがとなマサ？」

「まっ俺がそうしたかったただけだしな」

「プツ・・・やっぱり」

「アン？」

やっぱりマサはそう言ったな、ホント、マサには感謝してる。

「ホント・・・サンキューな親友？」

「とりあえずどう致しましてと言っておこう親友」

ホント・・・マサは最高の親友だと思った。

「う~~~~羨ましい~~~~」

「うん やっぱり仲良いねマサさんとリト妬けるな~~~~」

「・・・私だってマサナリとは・・・コンビです・・・悔しくなんてありません」

ララ達が覗いてるのは気付かなかった。



## 第三十七話っぽい感じ！（後書き）

後書き

ある意味 間幕みたいな感じでした。

マサ視点も一度もなかったですし・・・

まあリトと春菜・・・少しは縮まったかな？多分。

まあマサは相変わらずですが・・・

ええとりあえず次回！ 次回もまた頑張っていきますんで、また是非ヨロシクお願いします。

感想などありましたら是非！！

第三十八話っぽい感じ！（前書き）

前書き

連投・・・。

何故か早くできました。

まあデキはアレやもですが・・・とにかく薬的な物を持ってどうぞ。

### 第三十八話 っぽい感じ！

「ういゝッス 保健さん・・・ヤミっ子も・・・」

「あらガ克蘭君・・・って えっ？」

「まっマサナリどっとうしたんですか！！」

なんか二人めっさ驚いてんな・・・まっそらそつか・・・今回は別にサボりに来たわけじゃなく・・・

「ちいとベット借りていいッスか・・・」

マジに体調が悪いのだ、心臓がドンドンしてるし 目の前はチカチカするし・・・気持ち悪いし・・・マジやべえッス。

「えっええ・・・はっ早く横になりなさいヤミさん体温計取ってきて」

「はいッ！」

なんかすげえ慌ててっし・・・まっクラスメイツもかなり騒いでたからな。

「マサ！ マサ大丈夫？ 先生~~~~マサが~~~~」

「マサ君 早く保健室に いえ救急車！？」

「救急車はいらねえから・・・スンマセン・・・ちいと保健室行つて来るツス・・・」

みたいな感じだったしな・・・。

『ピピッ』

「ねっ熱は・・・37度3分・・・ガクラン君 平熱はどれくらい」

「平熱は高め方ツスから・・・それが平熱ツスね・・・」

大体36度から7が平熱。

「マサナリ・・・水飲みますか？」

「今はいいわ・・・悪い・・・寝るわ・・・心配させて悪い・・・寝りゃあ治っから・・・」

そう言っつて目を閉じると直ぐに眠気が襲つてきた。

しかし・・・まさか俺が体調崩すたあな・・・まあ若干 心当たりはあっけど・・・な。

・  
・  
・  
・

ヤミ視点

「今はいいわ・・・悪い・・・寝るわ・・・心配させて悪いな・・・寝りゃあ治っから・・・」

マサナリはそう言つと直ぐに寝息を立て始めました。

「まつまさかガクラン君が体調を崩すなんてね・・・」

ドクター・ミカド凄く驚いてるみたいです、いえドクター・ミカドだけではありませんが・・・私も凄く驚きました。

「ガクラン君 平熱つて言つてたけど・・・今朝の様子はどうだったの？」

「今朝までは何時も通りでした」

「そう変わったことは特になかったのね？」

変わったこと・・・そう言えば・・・

私と何時ものように勝負をした後、結果ですか？ 聞かないで下さい、斬りますよ！ ンツン・・・勝負の後・・・プリンセスが。

「マサ〜あのね？ 私の研究所が完成したんだよ〜見に来て見に来て〜」

「おつ そういやなんか作ってるつってたな行ってみんなベヤミっ子」

「はい」

プリンセスの後に付いて行ってプリンセスのラボを見せてもらうことになりました、美柑に結城 リトも興味があったのか一緒に付いてきています。

プリンセスのラボはマサナリの部屋のロッカーの中がありました。

「ララ君や・・・自分の部屋に作りなさいって言ったべさ？」

「だってマサの近くがよかつたんだもん！」

「だもんじゃありません！ まっ別に使ってねえけどよ」

「まあまあマサさん・・・えっとララさんこんな狭い所にララさんのラボってあるの？」

「だよな・・・ラボって研究所ってことだろ入るのか？」

美柑に結城 リトは地球人ですからそう思うのも無理はありませんね。

「大丈夫だよ！ ほら入って！」

『ガチャ！』

プリンセスがクローゼットの扉をあけるっそこは・・・

「おお〜広えなオイ！」

「ホントだ・・・」

「っていつか・・・家より広くないか!？」

「へへ苦勞したよ 特注の空間歪曲システムを使ったんだ!」

やはり空間歪曲システムでしたか。

「空間歪曲?」

「流石は宇宙科学・・・」

結城 リトに美柑、聞き慣れない言葉みたいですな。

マサナリは・・・

「うむ歪曲な歪曲・・・いやぁいい歪曲だよな時代は歪曲だよな!」

「知ったかぶりですか?」

「知ってます～～歪曲くらい知ってます～～」

「じゃあ説明してみてください」

途端にダラダラと汗をかきはじめマサナリ・・・やはり知ったかぶりでしたか。

「ホントに知ってるつってんじゃん! ほらこのメカっぽいのをこ  
うして」

マサナリがムキになって近くの装置に触った瞬間。

「マサ！ ダメ」

「アン？」

『バリバリバリ！！』

マサナリの体に電気が走ったようです。  
プスプスと煙りを上げるマサナリ。

「いや・・・これはアレだから・・・電気治療の装置だろ？ いやあやるなララ～～～すげえ健康になったわ」

「違うよ作りかけなメカなの だから触ったら危な」

「いやあマジで健康になった！ 今日も元気に頑張んぜい！」

マサナリ・・・あくまで意地を張る気です。

「あつ危ね～～危うく俺も触るところだった・・・」

結城 リトが触っていたらホントに危なかったかも知れませぬね。

「マサさん可愛い・・・」

美柑の言葉には同意します。



・  
・  
・

「というような事がありました」

「なるほどね。もしかしたらそれが原因かもしれないわね？」

ドクター・ミカドの言う通りそうかもしれないね。

でも・・・マサナリがそのような事で体調を崩すとは・・・

「ガクラン君も一応は人間ってことね？」

「そうですね」

忘れていましたがマサナリは地球人ですし耐性がなかったのかも  
知れませんがね。

「それじゃ私は少しだけ職員室に行かないといけないからガクラン  
君のこと見ててあげてね？」

「わかりました」

そう言ってドクター・ミカドは部屋を出ようとドアを開けて・・・  
えっ？　なんでしょう、ジッと私の方を見えていますか？

「襲っちゃダメよ？」

「ッ！！！　しっしません！！！！」

「フフ・・・それじゃあお願いね」

『スッ』

人が悪いです・・・大体寝込みを襲うなんてそんな・・・

『カア~~~~~』

違います！ えつちい意味じゃありません！暗殺者としての意味であつて断じて えつちい意味では・・・

いけません・・・顔が熱いです。

チラッとマサナリの方を見えます。

「うう・・・ああ・・・」

一気に頭が冷えました・・・苦しいのでしょうか？

確か・・・こういう時は・・・濡れタオルを用意しマサナリの額に乗せる。

熱はないみたいですが こういう方法しかわかりませんし。

「ン・・・スウ・・・スウ・・・」

よかったです、落ち着いたようです。

その様子にホッと息をはきます・・・。

それにしても・・・

「まさか私がこのようなことをするとは・・・」

不思議なものです、先程は暗殺者という言葉を使いましたが・・・もはや暗殺者としての意識が前程、高い物ではなくなってきているのは正直 自覚しています。

以前は傷つけることしか出来ない呪われた力とと思っていた私の変身能力・・・今は少しだけ違います。

マサナリと用務の仕事をしている時に同じ事を言ったのですが。

「ヤミっ子くくドライバー イカれた ちょいトランスしてくれや？」

「わかりました」

このようなことにトランス能力を使うと思っていませんでしたが仕事でしたから素直にマサナリの言うことを聞きました、その後には

「直してんじやん・・・まっ結局は使いようだな？」

軽い調子でしたがマサナリの言葉は私の中に深く染み渡りました。

私の能力は傷つけることが出来る力・・・けど違うことも出来るのだと。

マサナリとの出会いは私に色々と新たなことを教えてくれました、

自分のことすらも。

だから私は・・・マサナリを・・・

無防備に寝ているマサナリの顔・・・いえ唇の部分に自然と顔が引き寄せられる。

その距離がどんどんと近くなり私はスツと目を閉じて・・・

「ダ・メ・よ?」

『ビクウ!!!』

「ド・・・ドクター・ミカド?」

「襲っちゃダメって言ったでしょ?」

みつ見られてました・・・

『カア~~~~~』

「とっ図書室に行つてきますッ!」

「はいはい行ってらっしゃい」

私は逃げるように保健室から飛び出しました。

うう～まさか気配に気づかないとは・・・いえ それ以前に・・・

「うう～まさかあんなことをしようとするとは・・・」

自分自身の行動に驚きます・・・けど・・・

「惜しかった・・・です」

・  
・  
・  
・

涼子 視点

「まさかヤミさんがあんな思い切った行動をとるとはね」

流石に驚いたわ、もしかしたらヤミさんだけじゃなくて他の子でも同じ行動をとったりして・・・

うん・・・有り得そうね。

「スウ・・・スウ・・・」

フフ・・・無防備に寝ちゃって。

「私も心配したわよ？ 早くよくなりなさい」

生徒としてっていう意味もあるけど、どちらかっていうと一人の男の子としての言葉。

教師としてどうかと思うけど、こんなに面白くて変わってて不思議な子はいないわ、だからつい目をかけちゃうのよね。

それに・・・結構 いい線いつてるわよねガクラン君って？ まっガクラン君とちゃんと付き合わないと あっ男と女って意味じゃないわよ？ 付き合わないと、その良さは伝わってこないけど。

うん・・・仲が良くなればなるほど 良さが伝わる・・・そのクセに本人は凄まじい病気レベルに鈍感・・・。

「困った子よね〜」

まあそこも良いんだけど。

ガクラン君・・・アナタ結構 モテてるわよ？ まっ本人に言うても無駄だろうけど。

「ホント・・・困った子よね〜」

鈍感に効くクスリってないものかしら？ 流石に作るのは・・・いくら私でも無理そうね・・・。

『ズズツ』

あら？ 布団が動いてるわねガクラン君起きたのかしら。

って・・・えっ？

ガクラン君が寝てるベットを見てみたら私の予想の斜め上のことが起きていたわ。

それは・・・

・ ・ ・ ・

マサ 視点

「ん．．．あ〜っと！」

いやぁ良く寝たわい、もう体調もガッツリ治りもつした。

うむやはり調子が悪い時ア寝るのが一番だな！

「がっガ克蘭君．．．」

おっ保健さん、いやぁ心配かけちまったよな。

「おはッス！ 俺 復活．．．ってデカ！！ 保健さんデカ！ 成長期？」

いやさ、もうデカイ！ 見上げるとかそういうレベルじゃなくデカイ！ もう山の如く。

「そうじゃないわよ 私が大きくなったんじゃないやなくてガ克蘭君が縮んだのよ」

はい？

「マジで？」

「ホントよほらカガミ」

ふむ保健さんが持っていた手鏡をしてみる、うむ俺の全身が写ってますな、手鏡なのに!!

「まさか180どころか8センチになるとは・・・」

驚きだぜ。

「惜しいわね 7・8センチくらいよ」

「何故に届かん8の壁!!」

チクソウ・・・あと2ミリが遠い・・・。

「ガ克蘭君 暢気ね〜縮んでるっていうのに」

「いやさびびっとりますよ? でも まっそうこともありませんわい  
何となく原因わあっとりますしな」

「ララさんの未完成のメカに触れたからでしょ?」

おう! 保健さん ヤミっ子から聞いてたらしいな。

いやアレは未完成じゃなく電気治療装置だから! あくまで電気治療だ。

っつてそういや・・・

「ヤミっ子は?」



「図書室よ そろそろ戻ってくるんじゃないかしら」

ほづ。

「あつガクラン君の看病ちゃんとしてたみたいよ・・・途中までは」

「そうか・・・今度タイヤキ作つたら、って保健さん最後小声過ぎて聞こえなかったが。」

まっスルーで。

『ガラッ』

おつ 噂をすれば本を抱えたヤミっ子。

「ド・・・ドクター・ミカド・・・まっマサナリは」

なんで吃つてんだヤミっ子。

「起きてるわよ・・・あつヤミさん内緒にしてるわよ」

「づっ・・・あつありがとうございます」

内緒？ はて・・・まっいいさね。

「よっヤミっ子！ 看病サンキューな お陰さんで元気になったぜ  
い  
い」

「そうですか・・・よかつ・・・へっ？」

おっ驚いとりますな。

『ドサッ』

あっ本落とした。

「まっまっ・・・マサナリ どっどっしたんですか？」

「なんか起きたら縮んでた いやはやビックリだ！」

「そっそっですか そんなに驚いてるようには見えませんが」

「寧ろ本人より私達の方が驚いてるわね」

確かに、そう言われりゃそっやもしれんですな。

いやさそれなりには驚いてはいるけどね。

「まっその内戻るっしょ 戻らんかったらララに頼めばよかる？」

「楽天的ですね」

「ホントね」

それがマサさんってもんなんですよ。

まっとりあえず。

「次は体育だ！ 頑張るぜい！」

「そのまま出る気ですか！」

ヤミっ子にツッコまれた、がしかし。

「体育こそ俺の見せ場だからな！ むろん出る！」

「ガクラン君それは・・・ちょっとどうかしら？」

むむ・・・保健さんまで。

『ガラッ！』

「マサく大丈夫？」

「マサ君 平気？」

おっララに唯か？ あっちなみに今日は恭子とルン&レンは休み、恭子はアイドルの仕事、でルンは・・・つうかルンもなんとスカウトされてアイドルになったんだと。

確かにルンも可愛いしな・・・っと今は。

「よっ！ ララ 唯 二人からも言っっちゃってくれや俺ア体育出てえんですわ」

「・・・えっ マサ？ アレ？ マサってこんなに小さかったっけ？」

「そんなわけないでしょ！！ マサ君！どうしたの！ 何があった

の！」

ララは天然、唯はナイスツツコミ。

つととりあえずは。

「起きたら縮んでた以上！ あつ体調自体はガッツリ回復したぜい？」

ヤミにも言つた事情説明。

「ち・・・縮んでたつて・・・いくらマサ君だからつて・・・そんな非常識な・・・」

常識では計れないことなんて往々にしてあるもんですよ。

「あつ そつかーわかつた！！朝のメカの効果だ！！アレつて体を小さくするメカのだから まだ未完成品だからすぐに効果が出なかつたんだね！」

ほうほう・・・なるほど・・・電気治療ではなかつたのか。

つとそうだ。

「アレ体調悪くなつぞ俺ですら」

「そうなんだ〜うん改良する！ ごめんねだから体調悪かつたんだね」

「気にしなさんな 触つたなア俺だしな」

「確かに自業自得ですね」

そうなんだがヤミっ子よ・・・そう言われっど何やらモヤツとするわけですが。

「ラ・・・ララさんの発明品だったのね・・・体が縮むなんて常識だわ・・・」

常識で計れないことは往々にしてあるもんだ、2回目だけだ。

「まっとりあえずは体育に・・・」

「ダメよ！ 大人しくしてなさい」

「そうです」

むむ・・・。

「大丈夫だっつうに！ ちいと体が縮んただけだっつうに！」

「手の平に乗るサイズはちょっとどころじゃないわよ！」

確かに乗るけど。

「ララ」

「何？」

ちよいちよいっどララを手招きして手の平を向けさせ、乗ってみる。

「どうも手乗りマサです！」

「言ってる場合!？」

「どれだけ暢気なんですか」

「うくん流石はガ克蘭君 この状態でもネタをいれるなんてね」

唯の一言で思いついたんですわ、でついつい。

「エへへマサ可愛い〜」

可愛いのはキミ達の方だったつうに。

でそれから結局は参加はダメだが見学なら可ってことになりました。  
た。

「体育は参加してこそ体育だろうに」

「ダメです」

保健さんおめつけ役にヤミを派遣しやがりました・・・まっ確かに隙を見て参加したろって思ったが。

「ヤミっ子や・・・下ろしなされ」

「下ろしたらどこに行くかわかりませんので」

俺はそこいらの犬かなんかかい! いや確かに駆け出しそうな気

もするけど。

あっちなみに俺、ヤミっ子に抱えられてる状態ツス・・・なんかほら人形みてえな感じで。

それと俺を見た時ン クラスメイツのリアクションは。

「よかった・・・触らなくて・・・」

リト安堵する、どうやらリトもあのメカに触るところだったらしい。

「うわゝマサ君小っちゃい可愛い」

心配した後にこんなリアクションの春菜、だから可愛いとか言うなつつうに。

「アツハハハ！ さっ流石マサマサ！ 体調で驚いたけど・・・プ  
プ・・・まさか小さくなって帰ってくるなんて・・・アハハハ！  
やっぱりマサマサ最高~~~~！」

「笑いすぎだつてば・・・でもマサマサ流石！ あっ体調はいいの  
？」

里沙爆笑、未央からは心配の声。

つとといったような感じでした。

あっそれと・・・エテ山の野郎が。

「フハハハ！ 小さい今こそ 恨みをはらすチャンス！っていう

かその位置羨ましいぞオオオ」

とかほざいて喧嘩を売ってきたんで。

「ヤミ・・・ちょい下ろしてくれや」

「私が撃退しましょうか？」

「いやいやそれには及ばん」

スタツとヤミっ子から下りて。

『ゴキゴキン』

「ちいと縮んだくれえで・・・」

クビを回しながら指鳴らし。

『ダンッ！』

そしてエテ山ん顔面の前まで大ジャンプ。

「へっ？」

「俺に勝とうなんて一億年早え！！」

『ゴッ！』

テンブルに右フック！！

「のひよ~~~~~！！！」



『スタツ』

着地つと！

『ズドーン！』

うむ中々飛んだな。

「うわ〜猿山大丈夫か？」

「まっ加減したからそのうち起きんだろ？」

「バカだね〜猿山のやつ？ 小さくてもマサマサだよ」

「うむ 里沙君はよくわかってんな なでなでしてやる」

再び大ジャンプしてなでなでを・・・って流石にちいと無理が・・・。

「マサマサ可愛い〜〜〜ぴよこぴよこ跳ねてる〜〜〜」

うおっ！ 里沙？

『ギョッ！』

「むがつ・・・ええ〜い離さんかい！！」

「ええ〜胸気持ちいいでしょ？ 全身で味わえるなんて中々ないよ」

アホですコイツ。

ヒョイっと抜け出し。

「指導！！」

『ガッツ！』

「痛ッ！！」

ゲンコツ。

「里沙……小さくてもマサマサだって自分で言ったばかりなのに……」

未央君の言う通りですな。

『ギョッ』

ってオイ……

「ヤミっ子っ」

「マサナリはコッコです」

はぁ……まっいいけぞ。

「ヤミちゃん私もマサ抱っこしたいー」

「ダメですマサナリはココです」

「ヤミさん・・・私も・・・」

「ダメですマサナリはココです」

以下似たようなやり取りが暫く続きました。

はて？ ヤミっ子に何があったのやら。

「トランスすれば私だって・・・」

「何が？」

「なんでもないです！」

はぁ・・・で体育が終わるまでの間はヤミっ子に人形ヨロシク抱っこされて過ごしました。

そして体育が終わってから。

『ドクン・・・ドクン・・・』

ン・・・こりゃあ・・・この動悸は・・・さっきほど苦しかねえけど・・・。

「ヤミ・・・下ろせ・・・」

「マサナリ！？ 大丈夫ですか？」

「問題ねえ・・・多分・・・戻りそうな気が・・・」

そこまで言った瞬間。

『ズオツ!』

体が一気に熱くなり 一瞬で元の大きさに戻りました。

「うむ・・・やっぱり視点が高えといいやね・・・ってヤミっ子?」

「ッ~~~~~!!」

ふむ・・・真っ赤だな・・・そっいやこの大勢・・・はたから見たら・・・。

「あ~~~~~ヤミちゃんずるい~~~~私も抱き着きたいのに~~~~」

ララが言ってみてえにヤミっ子が後ろから抱き着いてる感じだな。

「私も~~~~~!!」

むっ? ララ。

「甘い! 今回は ヤミガード!!」

後ろのヤミっ子を引っぺがしてララに差し出しました。

やっぱりブーブー文句言われたけどな!!

とうとうして俺 小さくなる体験は終了したのでありましたとぞ。

とっぴんぱんらのびん。

## 第三十八話っばい感じ！（後書き）

後書き

マサ小さくなるでした。

あつ普段は小さくなったりしません今回はたまたま、都合主義と  
もいますが。

そしてヤミ・・・もはや原型が・・・

いや全キャラですけど・・・ってアレこれ言つの何回目？

とにかく次回も頑張りますんでお暇ならまた見てやって下さい。

第三十九話っぽい感じ！（前書き）

前書き

今回もまたある意味キャラ登場・・・そして何時も通りに無茶苦茶しました。

特に注意してオススミ下さい。

薬は大量に持って！！

### 第三十九話っぽい感じ！

「ううマサ・・・」

俺の横にはゲツソリした顔で俺の名前を呼ぶ『女の子』。

ええ本日俺学校サボ・・・ゲフンゲフン休んでオツチャンに頼まれた仕事・・・あつ前に臨海学校に行った時に泊まった旅館ね？の補修作業に行っていたわけです。

で終わらせて帰ってきて街を歩いたら見覚えのあるヤツがナンパされていたわけでありませう。

かなりしつこめ・・・つうか完全にアウトなアレだったしまあ身内だったんで手を出したわけです。

「まっま・・・じゃなかった！ えとありがとうございます」

そう言っただけで俺にペコリと一礼して走り去ろうとしたんで。

「なんで他人行儀やねん・・・リト？」

「えっ・・・ば・・・バレてた？」

はい今言った通り結城家 長男 俺の親友リト君です。



なんとリト、ララのトンデモ発明で女の子になってしまったとのこと。

「ツツ・・・俺も大概だけどリトも大概愉快的な人生だよな？ ククツ・・・」

「うう笑うなら笑えよちくしょー」

涙目リト君・・・ふむ。

「ダツハハハ~~~~ヒィ~~~~面白すぎる！ ダハハハ！ ぼんぽ痛い~~~~ぼんぽ痛い！ ダ~~~~ハハハハ！！」

遠慮なく爆笑させてもらいます。

「笑うなちくしょ~~~~！！」

笑えつつたべさ？ ププツあ~~~~面白え。

でひとしきり笑った後。

「で元に戻れんの？」

「多分・・・今ララ解除するメカ作ってる・・・はず」

ふうむ。

「じゃ家で待つてりゃよかったのによオ？ なんでわざわざ外に出てんだ？ 新しい自分発見か？」

「んなわけあるか！！ 家にいたらララとか美柑とかヤミも一緒に  
なって女物の下着つけさせようとするんだぞ！！」

うわ・・・そらキツツイわ？ まあ今は女の子になってるけど。

「大変ね〜リト君？」

「全くだ・・・なんで俺がこんな目に・・・シクシク」

悲壮感タップリだなオイ。

「ミ〇ミ〇飲むか？ 元気出るぞ」

「サンキューマサ」

ミ〇ミ〇は元気の源です。

「それしてもマサ？ よく俺だっつてわかったな？」

「マサさんナメんな？ チクツと見た目が変わったくれエで親友が  
わからなくなるようなマサさんじゃねえっつもの」

例えリトが犬とかになっても見分ける自信が・・・ってリト？

「じゅうマサ〜〜」

あらまあコノ子ったら、じゅるじゅるきちやっとなるよ。

つつか・・・うん。

「めっさ可愛いッス！ 撫でま〜す」

「か・・・可愛いってうう〜」

可愛いもんは可愛いッス。

まつリトが男ん時にもネタ的な意味でちょこちょこ撫でてたけど今はガチに可愛いし。・

・  
・  
・

美柑 視点

ええ〜学校帰ってきたらリトが女の子になっていた。

うんわからないよね？ 普通ならでも事実が事実。

ララさんの発明のせいなんだって、ララさんになんてそんな発明をって聞いてみたらララさんいわく。

「理想のおっぱいになるため〜」

ということみたい・・・正直ちょっと興味がそそられたのは内緒

ンツン・・・それでなんでその発明品がリトについて聞いたらリトが校舎から落ちてきてララさんが作った発明品に衝突し爆発、結果

リトが女の子になっちゃったということ。

リトも運がないっていうかなんていうか・・・それにしてもリト・・・なんで校舎から落下したんだろ。

私がそう考えた時、ヤミさんがサッと目をそらした。

聞いてみたらヤミさんララさんが

「ヤミちゃん？ ヤミちゃんは自分のおっぱいについてどう思う？」

と聞かれその場は

「キョ・・・キョーミありません」

と答えたみたいだけど後になってカガミの前で変身して胸を大トランスきくしてたらしく・・・そこを運悪くリトが通りかかって・・・つい・・・このこと。

ヤミさんの気持ちは痛い程伝わってきた気持ちはわかるよヤミさん。

そしてリト・・・やっぱり運がないよ。

その運がないリトは今は家から逃げ出してる。

まあちよつと私達、悪ノリし過ぎた部分があるしそこは少し反省。

マサさん居たら間違いなくゲンコツされてるな。

あつマサさんは今日は学校休んで仕事にいつてるみたいマサさん働き者だよね。

大丈夫って言ったんだけどお金を定期的に入れてくれてるし。

フフ・・・なんかもう一人の大黒柱って感じ。

そういえばそろそろマサさんも帰ってくる時間かな？

もしかしたらリトにも会ってたりし・・・

そこまで考えて私はとてつもないことに気がついた。

「美柑どうしたのですか？ 顔色が悪いです」

「ふう〜ちょっと休憩〜アレ？ 美柑どうしたの？ 大丈夫？」

ヤミさんとリトを男に戻す為の道具を作ってたララさんが私のことを心配して声をかけてくれた、その気持ちは嬉しい。

ただ・・・思い浮かんだ突拍子もない考え。

「ヤミさんララさん・・・ヤバイ」

マサさんとリトは普段から仲がいいマサさんはリトのことをよく親友と言ったりたまに冗談で。

「リトの嫁です」

みたいなことを言ったりする。

けど冗談は冗談・・・マサさんは凄く鈍くて思わずため息つく時もあるけどその手の趣味はないって言うてたし。

えっとつまり何が言いたいかって言うと・・・今までは

マサさん男、リト男・・・結果ブツブー！！

で今は・・・

マサさん男、リト女の子・・・結果ピンポンピンポーン！！

せっ・・・成立しちゃう・・・

「ララさん早く解除する道具作って！ 早く！」

「えっなんで？ どうしたの美柑？」

「いいから早く！ じゃないと大変なことになっちゃうから！」

「ララさんだって関係あるんだよ！ ヤミさんも！ もちろん私も

！！

好きな人が『兄』に取られるなんてあっちゃならないんだよ！

女の子のプライドが大変なことになるんだよ。

今だに疑問符をつけてるララさんを急かす。

あつヤミさん・・・ヤミさんも私が慌ててた理由に気付いてくれて

「プリンセス可及的速やかに解除する装置を」

と一緒に急かしてくれた、ある意味ライバルだけと思いは一緒だった。

・  
・  
・  
・

マサ視点

「いやないって！ 流石にないって！ ない・・・チラッ・・・と思う・・・」

「リトどうした発作の類か？」

「違うって！ なんか不吉っていうかなんていうか盛大に勘違いされた気がただけだから」

「はぁ・・・なんだそら？ 意味がいまいちわからんが、まっいいさね。」

「とりあえずは帰るか？」

「えっ・・・また絶対からかわれるって」

「ちやちや」

「何時ものことさー！！」

ポンとリトの肩に手を置きナイススマイルでサムズった。

「チクシヨーーーー」

『ズダダダダ!!』

あつリトが逃走した。

『コケ・・・ズザアアア』

あつコケた・・・盛大に・・・もうナイス過ぎるくらいのヘッド  
スライディングって動かねえな、気絶しちまったか？

『キキッ』

おつリトの横に高級車が・・・ってアレ・・・降りてきたの沙姫  
じゃん、おつ凜に綾もいるな。

何やらテキパキと指示を出してるな、おつリトをクルマに乗せた  
な・・・。

『ブォーン』

去ってたな・・・ふむ・・・。

「拉致？」

いや沙姫だしな、大方リトん事を心配して連れてったんだろな・・・  
まっ沙姫に任せときゃ大丈夫だろ、知らねえ仲ってわけじゃねえ  
し。

さってと・・・。



「一旦帰って後で向かえに行くか」

もしかしたらリトが言っていた解除装置つてのが完成してっかも知れないしね。・

・

リト 視点

「う……ん~~~~」

目を覚ましたら見慣れない風景、やけに高そうな装飾品とかが目に入る。

「ここは……」

「私の屋敷ですわ」

独り言だと思ってたら返事が帰ってきた、って……あの人……

て……天条院先輩!!

なっなんで……。

「気がついたようですわね私は天条院 紗姫と言っ者ですわ 初めまして」

「はっ……初めまして……?」

えっ・・・俺、面識あるよな一応は、なのになんで・・・ハッ！  
『バツ！！』

自分の体を見てみたら膨らんでる胸・・・慌ててシーツで隠す、  
そっそーいや今 女の子になってたんだっただよ・・・ってゆーか何  
で裸・・・。

「あなたが着てた男物の服は 破れていましたし汚いので捨てませ  
たわ！」

「え~~~~~!!?」

ちよッ何てこと！

「ご心配なく凜 綾！」

えっ・・・ちよっその手に持つてる物は・・・。

『バツバツ！』

「うわッ！ ちよっと何をッ！」

いきなり飛び掛かれてパニクる俺、であっという間に・・・。

「へっ」

「まあ！ やっぱりお似合いですわ！」

ドレス姿にされていた・・・しかも。

「沙姫様がアナタの為に用意してくれたのよ！　ちなみに下着は私  
が選んだの！」

恐る恐る見てみる・・・

『スッ』

！！　あゝ目を反らしたいこの現実から目を反らしたい・・・  
俺・・・とうとう女物の下着を・・・。

「おっ・・・終わった・・・」

「どうした何ん落ち込んでいるんだ？　まあいい沙姫様し感謝の方が  
いいぞ　倒れていたキミを介抱して下さったのだぞ」

「あっ・・・」

そっそう言えば・・・えと確か俺、マサにからわかれて思わず逃げ  
出したら盛大に転んで・・・えっと・・・気を失ってたのか？

「ん・・・キミ・・・どこかで見たことあるような気がするが・・・  
はて・・・」

九条先輩ジーツと俺を見てるな・・・もしかして気付いた？　っ  
てマズイ！　もしバレたら・・・以前にコノ三人にボロボロにされ  
たことを思い出す。

結局誤解ってわかってもらえたけど・・・それに男の俺がこんな  
恰好してるなんて知られたら・・・今度こそ終わりの気がする色々

な意味で！！

とっとにかくごかそう。

「き 気のせいですわ！！ ええ気のせい！」

ちよつと天条院先輩の口調が写った。

「そうか・・・ふむ・・・どこかで見たような気がしたのが」

ホッ・・・なっなんとかごまかせたか。

「凜 失礼ですわよ ンツン・・・ところでアナタ・・・お名前は  
「？」

「へっな・・・名前？」

えつと・・・えと・・・そうだ！

「り・・・リコです！！ 夕崎 梨子です！！」

ちよつと元の名前を変えただけだけだ。

「そ・・・よろしくねり」

乗り切った、なんとか乗り切ったみた・・・。

「アナタ お住まいはどちら？」

まだだった~~~~どっどっしよ・・・えとえと・・・。

「あ……あの……どっどこかな〜え〜と……え〜と  
と〜と〜と〜」

ダメだ上手い考えが全然出て来ない。

「自分の家がわからないの？　じゃあ学校は？」

たったみかけてきたよ……うう〜。

「そ……それも……ちょっと……」

流石に彩南って言えないし……。

「……ま……まさか……アナタ……」

えっばっバレた？　マズイ！？　またバズーカ！？　よし謝ろう、  
今の内に謝ろう。

「うぐめんな」

「記憶喪失……」

「えっ？」

記憶喪失って……もしかして勘違いされてる？　ってことはま  
だバレてない！　セーフか。

「倒れていたのも頭を強く打っていたからかもしれないわね……  
いえもしかしたら男物の服を着ていらっしやったのは……何かか

ら逃げて・・・」

「力尽きて倒れてしまい頭を打つたというわけでしょうか・・・だからあんなところで気絶していたわけか・・・辛かったな」

「可哀相です・・・大丈夫です！ねっ沙姫様」

アレ・・・なんか勘違いの幅が・・・っていうか確かに逃げたけどマサのからかいから・・・でもそんなに重い感じでは・・・。

「もちろんですわ 綾！ リコ アナタの記憶が戻るまで私がアナタを守ってあげますわ！！」

て・・・天条院先輩・・・思い込みが激しい人なんだな～～～～。

窓から見える遠くの青空を眺めるしかなかった。

・  
・  
・  
・

マサ視点

「ただいま～～つておよ？ 春菜に静どしたん？」

「あっマサ君」

「マサナリさんこんにちは」

あつこの二人　なんか知らないけど仲良くなったようです、春菜は幽霊苦手だけど静に対しては大丈夫らしい生身つてのもあるっばいけど。

「えつとリト君が学校を早退しちゃったからちよつとお見舞いに」

「はい！　そうなんです」

ほう、よかったな〜リト。

「ってリト早退したんか？　まっそらそっか？」

イキナリ女の子になったんだアノ様子じゃバレるの恐れて早退したんだろっな。

「あつまささんお帰りなさい・・・アレ春菜さんに・・・えつと」

そっぴや美柑は面識なかったやな。

「ほれ前に話した元・幽霊」

「はい元・幽霊の村雨静です〜お静って呼んで下さい」

「ああ〜前に話してた・・・えつとそれでなんで春菜さんとお静さんは・・・」

「リトの見舞いだとよ　まっ今はいねえけど」

沙姫家でメシでも食ってんだろ多分。

「えっ早退したのに・・・もしかして病院？」

「アハハ・・・実は・・・」

春菜が微妙に勘違いしてたんで美柑が説明。

「えっリト君おっ女の子に？」

「あゝもしかしてあの時にぶつかった人ですかね？」

「あっそう言えば似てたかも・・・」

およりト ガツツリ春菜に見られてたらしい。

「リトに会ったんだ」

「多分ですけど〜えっとこんな感じの人でしたよ〜」

『サラサラサラ』

おっ何処からともなく筆を取り出し人相描きを始める静。

「はいできました〜」

ふむ・・・。

「浮世絵っばいな・・・」

「うん・・・ちょっとわかりづらいかな〜」



美柑も困惑しとるしな、どれ。

「貸してみ？」

「えっはい！」

『サラサラサラ』

さつき会ったリトの女の子バージョンを描き描き。

「ほれコレだろ？」

「うわッ！ そっくりです〜」

「さっきの子だ！」

「マサさん絵上手い！」

うむ自分でも満足の出来だ。

「ってアレ？ マサさんリトに会ったの？」

おっやっぱその辺ツッコまれるか。

「会ったぞ 爆笑したぞ からかったぞ したら逃げられた で拉致られた」

「爆笑って・・・マサ君 容赦ないよ・・・」

「うんまあマサさんだし・・・でも最悪の自体は免れたかな・・・」

ってアレ マサさん最後・・・拉致って言わなかった？」

「いいましたね」

うん言った。

「ちょッ！ マサ君！なんで落ち着いてるの大変だよ！」

「そっそっだよマサさん！」

「いやさ拉致つてのはいい過ぎた正確には保護？ まっ大丈夫だな  
んせ沙姫だったしな」

「天条院先輩？」

「そっそ だから大丈夫だろって思ってな沙姫は結構面倒見良さそ  
うだしな今ごろ良い肉でも食ってんじゃね？」

松阪とか近江とかの。

・  
・  
・  
・

リト改めリコ視点

改めなくていい・・・ってアレ 俺なんで急にそんなことが浮か  
んだんだ？

「リコどうしたの？ 遠慮せずに召し上がってちょうだい？」

「は……はい……」

目には前にはすげ〜豪華な食事 高そうな肉とかがズラリと並んでる、とりあえず目の前の肉を一口。

『パクッ』

う……うま〜〜口の中で溶けて無くなるって感じだよ、やっぱり良い肉なんだな〜〜けど……うん、美柑とマサのメシの方が好みかな〜いやコノ肉もすっげー美味いけど。

『パクッ』

おっコレも美味い。

「お口に合ったようですね良かったですわ……それじゃ食べたら皆さんでお風呂に入りましょうか!」

「えっ……」

ちょッ! えっ? 今なんて……お風呂に入る? 皆で……えと。

「お……私もですか?」

一瞬 俺って言いかけたけど訂正して確認。

「もちろんですわ!」

なっ……また〜〜家でもララと一緒に入ることになっつ

まっけたのに！あつ言っておくけどアレだからな！ 女の子になつた恥ずかしくてまともに洗えないついたらララが入ってきたんだからな。

「さっりこ行きますわよ」

『ズルズル』

あつちよつと言ってる場合じゃなかったちよつと待って。

ホント待って~~~~~。

・  
・  
・  
・

マサ視点

「出来た~~~~~！！」

居間でまったりお茶を飲んでたらララの声が聞こえてきたどつやら解除装置とやらが完成したっばい。

「あつマサ！ 帰ってきてたんだアレ？」

春菜に お静も来てたの？」

「うん心配だったから」

「はいおじゃましています」

ふむ・・・ララ・・・。

「それ解除装置じゃなくてバズーカじゃね？」

「いやなんかアララが持ってたのは俺が思ってたそれとは全然違うんですが。」

「解除ミサイルを撃つためだよ」

なるほど。

「アララは俺が思ってたよか遙かにアホの子だった」

「アホの子じゃないもん！！」

いやさアララよ。

「何故に解除『ミサイル』？ ミサイルに搭載すんなつついに」

「ええ〜だつて解除ミサイルだよミサイルに搭載しないと解除ミサイルじゃないよ」

いやだから・・・まあいいさね。

「とりあえず・・・行くか？」

「えつりトの居場所わかるの？」

「沙姫ン家だと思っが・・・ってそっいちゃ。」

「俺 沙姫ン家知らねえや」

「リト 沙姫のお家にいるんだ」

多分な、けどどうしたもんかね。

「春菜知ってつか？」

「ごめんわからない」

だよな。

「ヤミは？」

「わかりませんよ」

そらそつだ。

「静」

「わかりません！！」

元気はいいね！ でもやっぱしわからない。

「じゃ美」

「流石にわからないよマサさん」

だ！  
早めに答えられた、まっ全員わからんと・・・ふむ・・・あつそ

『プルル・・・プルル・・・』

「出ねえな」

「誰に電話してるの?」

「沙姫 家教えて貰おうと思ったんだけどな・・・やっぱり出ねえな・・・」

『ピッ』

どうすつかねえ・・・その辺の郵便局が交番で聞くか?

「マサまかせて! じゃくん『くんくんトレース君』 コレでリトの後を追跡出来るよ!」

ララが取り出したのはイヌっぱいつつかイヌなメカ。

まっバズーカよかまともだしなんか使えそう。

「じゃ頼むぞトレース君!」

『ワウッ!』

おっ!ちゃんと鳴くとは、やるなララ。

「じゃ俺とララはリトを向かえに言ってくらあ留守番よろ」

「行ってきます」

『ワウッ!』

「いつてらしゃいマサさんヲラさんリトお願いね」

「わかりました」

「っていつか私達ここで待ってていいのかな？」

「いいんじゃないですか？」

とまあこんな感じで家を出発しリトを向かえに沙姫ン家に向かったのであります。

にしても何故に電話に出なかったんだろな風呂か？ リトと一緒に入ってたりとか。

・  
・  
・  
・

リト視点

一度は逃げ出せたものの……。

「少しでもアナタの不安をやわらげてあげようとする沙姫様のお心遣いなのに！ お願い！」

藤崎先輩のその一言……確かに天条院先輩ってララの親父の時もそうだったけど優しいところあるし面倒見も凄くいい 良い人なんだよな……。

で思わず。



「は……はい……」

って言うっちゃったよ……クビを縦に振っちゃったよ……。

でも……やっぱり……。

『ザパア』

やっぱりマズイって！マズすぎる~~~~！なるだけ先輩達の方を見ないようにしてるけど。

なんか向こうでキャキャしてる声が聞こえてくるけど……！

ってダメだって俺……！！何を考えてんだ！とっとかく入ってしまったのは仕方ないとしてスキを見て逃げ出そう。

うん、少なくとも風呂からは。

「どうしたんだ？ そんな所に突っ立って」

『ビクッ！』

「シャワーを使いたいんだが……」

「ツーーーーー！！」

は……裸……マズ……意識が……いやまだ大丈夫、少しは耐性ついてきたから。

『耐久性アップだな！』

なんか脳内でマサがニカツと笑いながら親指を立ててたけど全力で無視。

『ひどいぞ親友』

だから出てくんたつてば~~~~。

「どうしたんですのニコ？ 急に手をパタパタ振って・・・あっ少しお湯が熱かったんですのね！ お待ちなさい今下げますわ」

「あっ私が行きます沙姫様」

うつかつ囲まれてる、見るな、なるだけ見ないように見ないように。

「だっ・・・大丈夫です・・・えと私もう上がりますね！」

ダッシュで風呂場から逃げる。

「あら・・・逆上ってしまったのかしら」

「かもしれませんね」

「なら後で冷たいお飲み物を上げましょう」

「はい沙姫様！」

何か言ってるけどなんとか風呂場から出ることが出来た、で急いで着替える・・・って俺・・・また女物の下着を・・・しかも躊躇



うん落ち着け。

「フ」

一呼吸してたから用意して貰ったジュースを飲んで気持ちを落ち着かせる、うんアレは気の迷いだ、大丈夫。

「マサ〜コッチから匂いするって〜」

「おうツ！ つか俺ら完全に不法侵入だよな・・・まっ一応は門の監視カメラに名前言っといたけど」

って今の声・・・。

「まっマサナリさん？」

「確かに政成の声だな・・・何故・・・」

『ガチャ！』

「ここみたい！！あついた！！」

「おっホントだな！」

『トクン』

「マサ・・・」

って待て俺！！なんでマサ見てトクンってしてんの落ち着けエエ  
エ。

「まっマサナリさん何で私のお家に・・・遊びに来て下さったんですの?」

「悪い沙姫 ちと違う」

「そっそうなんですか・・・」

『ポンポン』

「今度 遊びにくっからよ」

「えっええ まっまあそれなら歓迎致しますわ」

むっ・・・天条院先輩嬉しそうだな・・・頭撫でられてさ・・・俺なんてあんまり撫でてくれないのに・・・って違うだろオオオ。

何むっとしてんだよ!!

「それで政成は何をしに来たのだ?」

「あゝそいつ向かえに来た」

「「「えっ?」」」

俺を指差しながらそう言うマサ、そんなマサに驚いた顔の天条院先輩達。

「しっかしなんだその恰好? まっ似合っただよ」

あつツ・・・似合ってる・・・かな？ だったら嬉しい・・・嬉しい  
がるなアアア。

「まっマサナリさんリコと知り合いですの？」

「リコ？ はっ？ 誰？」

「あの子だ」

俺を指差す九条先輩。

「ありゃリトだぞ なぁララ？」

「うんそうだよ沙姫 あのね私の発明品で女の子になっちゃたんだ  
」

「「なっなんですってエエエ！！」」

「でっでは・・・アレは結城 リトだと・・・」

あ・・・バレた・・・今日が俺の命日かな・・・。

ギロリとコツチを睨む天条院先輩達を見て俺はそう思った、けど・・・  
やっぱり。

「まっ落ち着け リトも悪気があったわけじゃねえんだわ ばらした俺が言うのもなんだけどイキナリ女の子になりました！！ つて  
なって隠したくなっただら？ で言うに言えなくなっちまったわけだ  
そうだろ？」

コクコクとマサの言葉にクビを振る、マサ・・・流石、わかって  
くれてた。

マサの説得に天条院先輩達も怒りの矛先を納めてくれたし・・・  
後は・・・男に戻れば・・・。

「リト~~~~こつち解除ミサイル!!えいッ!」

『ドォーン』

ララ・・・なんで・・・なんで・・・。

「なんでミサイルなんだアアア!!」

『ズドォオン!!』

ってアレ・・・衝撃があんまりない・・・煙りはすげーけど・・・  
もしや失敗? まだ女のまま? そんな俺の心配は煙りが晴れると  
同時に無くなってくれた。

そう・・・俺は・・・。

「もっ戻れたアアア!!」

男に戻れた! よかった・・・それにマサを見てもアノ ドキド  
キはないし・・・それも含めてよかった。

「みんな俺 男に戻れたぞ!!」

「~~~~~」

ってアレどうしたんだ？　なんで黙って・・・あっ俺　ドレスの  
ママ・・・でもないよな何故か普通に男物の服だし。

「う・・・う～～～～ん～～～～」

ン？　今の声は・・・マサじゃないしらラでもない、天条院先輩  
達でもないよな、でもなんか聞いたことが・・・しかもさっき・・・

声のしたほうを見てみるとそこには・・・。

「えっ!?!」

「アレ・・・なんで私　女のまま～～～～!!」

さっきまでの・・・女の子だった時の俺がいた・・・。

・  
・  
・  
・

### マサ視点

沙姫ん家を出て家までの帰り道。

「いや～～まさか・・・分裂するとは・・・」



「俺（私）だって予想外だよ」「

見事にシンクロしてんな 流石は元・同一人物。

「ううん急いで作っちゃったから こうなっちゃったのかも？」

ララいわくそういうことらしい、まあ詳しく話されてもサッパリわからんだろうけど。

「元に戻るの私」

ちなみに女の子の方のリト・・・リコね？リコは自分のことを私と言います何故かは知らないが。

「ちょっと難しいかも・・・」

「うううううどうすりゃいいんだううう」

「まあまあそう落ち込むなってミ〇ミ〇飲むか？」

「マサ~~~~」

なでなでしたら泣き付かれた。

「俺コツチでよかった・・・」

「薄情者！..!」

リトが胸を撫で下ろしリコはリトを怨みがましく睨み、ララはリコに対抗して抱き着いてきた。

キツチリ リトガードしたら。

「リコだけずるい〜〜リコだけずるい〜〜」

めっさ文句言われた、つか何故にリコは大丈夫なのかは俺も謎、元がリトだからかね？

「そこんとこどうよ？」

「「わかんないって」「」

シンクロしてるなりトリコよ、とこんな感じで家に帰り。

「よっ予想外の事態だよヤミさん・・・」

「流石に斜め上すぎます・・・」

美柑とヤミはリトがリトとリコになったことは微妙に違う感じに  
なんか戦々恐々として。

「アハハ・・・リト君 リコさん？ 元気出してね？」

「俺は大丈夫だけとありがとう春菜ちゃん」

「薄情者・・・」

苦笑いの春菜に大丈夫と返すリト、やっぱりリトを睨むリコ。

「ララさんの発明は凄いですー!!」

「エへへ そうかな」

天然な静ララでした。

とまあなんやかんやでこうして結城家の住人が増えた。

第三十九話っぽい感じ！（後書き）

後書き

はい、ある意味リト・・・じゃなくリコですがヒロインになりました。

前々からこうしようかな？みたいに考えてたんで・・・頑張れり  
コ！

ある意味人事な書いてる人でした。

第四十話っぽい感じ！（前書き）

前書き

とつとつ四十話。

少し長め・・・というより後半部分は殆どオマケです。

## 第四十話っぱい感じ！

「リコちゃん洗わないとダメだよ」

「ちょララ！ だからって揉む・・・やめっ・・・」

ただ今、ララ&リコ入浴中。

「大変そうだね〜リコ君」

「大変『そう』じゃなくて大変なんだよ・・・いやホント俺コッチでよかった」

風呂場でキャツキャツうかギヤーギヤーしてる二人を尻目にダラダラとテレビを見てます、リトはなんかホツとコツチでよかった発言してるけど。

「リト 父さんと母さんにどう説明しようか？」

「あっ・・・！！」

「なんか増えたでいんじゃない？ 俺やララ、ヤミのこともある許してくれたんだべなんとかなるんじゃない？」

まあかなり軽いけど多分、大丈夫なような気がする。特に才倍のおっちゃんは。

『ギヤウ~~~~ギヤウ~~~~』

「むっセリーが夜食を所望らしい、どれラーメンでも作ってやるかねえ」

セリーとはセリーヌのことね、セリーはラーメンが好物なのだ。

「なんでわかるんだろうねマサさん？」

「さあ？ マサナリですし」

「だな でも今くらいだったら俺でも何となくはわかるけど 腹すいてんのかな〜くらいには」

それがわかれば上出来だリト君、とか思いつつセリーの夜食をせつせと作り食べさせてやりました。

でその間にララとリコが風呂から上がってきたようです、リコすっごいゲッソリしてるけど。

「ハハ・・・大丈夫か？」

「そう言うんだったら代わってくれ」

「イヤだー!!」

「薄情者・・・」

風呂上がりのリト&リコの会話より。

「さて・・・明日も学校だけんどリコどうすんの？」

まっ今日は俺はアレだったけど、その事をリコに確認。

「あ〜〜どうしよう〜留守番・・・」

「え〜リコも一緒に大丈夫だよ！」

「まっ家でゴロゴロしてるよりはいいんじゃない行ってくればい  
じゃん」

「ララ 美柑！！ そっいうけどさ私 女の子になりましたっ言  
えるかアアア！！」

「いやさリコ君。」

「沙姫達はもちろんのこと春菜に静にもバレとるがな、いまさらじ  
やねっ？」

「うっ・・・けど・・・オマエからもなんとか言ってくれ」

「俺に振るのかよ！！ まっまあ・・・行ってもいいんじゃないか  
？」

「オマエ・・・人事だと思ってるだろリト？」

ジト目でリトを睨むリコ、あっリコは普通にリトのことをリコと  
言います、逆も同じ。

「そっそそそんなことないぞ、なあマサ？」



「吃つとるがな まあでもいんじゃね？ 家で一人でいてもつまらんだろっ」

「うっ……そっそういうなら……わかった行くよ……」

うむ、じゃ明日はリコも学校に行くってことで。

ってそういや。

「制服リトの使うんか？」

「あっ……そうだったリト？」

「あっああでもサイズ合わないか？」

「そこは俺がチクチクツとサイズ合わしやいんじゃね？ ペケもいるし」

『そうですね サイズの補正くらいなら直ぐにできます』

うむ、流石はペケ、あっペケ服に変身できるだけじゃなく破れた服の補修とかもあっちゅう間に出来るぞ、俺よか全然精確だし速えし、まあ頑丈にしたりすんなあ俺に分があっけど。

「今度は負けん」

『コスチュームロボのメンツにかけて勝ちを譲りませんよマサナリ殿』

たまたに服の補修とかの勝負してます。

「だったら私の制服は〜リコは女の子だよ〜女子の制服の方がいいと思う!」

「はあああ!! ララちょっと待て!! 勘弁してくれなんで私が女子の制服着なきゃいけないんだよ!」

ララの提案に激しく拒否の姿勢のリコ、そんなリコの肩に優しく手を置く美柑君。

「今 女の子じゃん?」

「うっ……でも……でも」

「諦めたほうがいいと思います」

結局は押し切られる形でリコは女子の制服で行くことになりました。

「<sup>レ</sup>愁傷様……」

そんなリコにそつと手を合わせるリトだった。

「まっ似合いそうだけどな沙姫のこのも可愛いかったし」

「そつそつかな? まっマサがそついうなら」

「リコ……なんで赤く……いや……わかるけど……まっマサならいいか」

リトよ意味がわからん。

「ああ……やっぱり……」

「肉体に引つ張られ過ぎです……わずか一日では……」

「元々仲良かったもん……」

美柑とヤミも意味がわからんつうに。

「じゃじゃ早速着てみようサイズが合わなかったらペケに直しても  
られないといけないもんね」

「あっああ」

ララはリコとペケを引き連れて着替えに行き、俺とリトは風呂に、  
やっぱり美柑とヤミの目がプレデターだった。

こんな感じでその日は終了したのであります。

ちなみにリコの制服披露は明日になります。

そして翌日。

朝の運動に朝メシと何時も通りに朝の時間を過ごし。

『ガチャ』

「どっどっかな？」

「おお〜似合っとする似合っとする」

「そっそっか？へへ」

うむナイススマイル。

「ドンドン進んでるなり」

「うるせ〜リト」

いやさ何が？ 女化？

「それだけじゃないと思う」

「ですね」

はあ・・・まっいいさね、とにかく出発ってことで。

セリーにアイサツしつつ家を出発、で校門まで来たところで。

「一応は校長のところに行った方がいいかな？」

とのリトの言葉により校長（変態）のところへ。

「テメエは天井とキスしてろッ！！」

『ズガンッ！！』

『プラーン・・・』

やっぱり校長（変態）はアレだったんで天井に刺しときました。

その後は教室へ。

「うう〜校門からだったけどやけにジロジロ見られてるんだけど・

」

「そついやそんな見慣れねえ顔だからじゃね？」

「でもココの制服着てるのに」

「あっわかった!！」

おっララが何やらわかったらしい。

「ブラつけてないからだよッ!！」

「ララアアデカイ声で言うなアアア!！」

まあまあ騒がしいこつて、つか、うん。

「視線がものつそい強くなってね？ もうなんかアレな感じ」

男子達ギンギラギンのアイウオンチュベイベーになつとります。

とりあえず・・・。

『ギロリッ!！」

マサナリはメンチを切った。

『『『『『サツ』』』』』

男女連中は一斉に目を逸らした、うむうむコレでよし。

「ハアハアハア・・・やはりアノ目は・・・」

「凜！？ 何があつたんですのッ！！」

「アハハ・・・」

何時もなら話し掛けるがあえて今はスルーで。

大方、何故にリコが居るんだと話し掛けようとしたんだろうけど。  
とにかく。

「教室行くか」

「うん」

「「ああ」

教室に移動し、教室に入ると。

「えっ！？ リコさん？」

「あっホントです〜」

昨日から知ってる春菜&静かトコトコとやってきたんで、軽く説明。

「そっそうなんだ今日からクラスメイトってことになるんだ なんか変な感じだけどヨロシクねリコさん」

「ヨロシクお願いします〜」

「あっああヨロシクな春菜ちゃん 村雨」

うむうむ仲良くしたまえよ。

「マサ君？ あの人がって・・・」

「唯か？ ふむ・・・」

今の内にちやちやっと紹介しとくか。

「はい注~~~~目!!」

クラスメイツに呼び掛けつつ。

「リコ~~~~いらはい」

「あっああ」

リコを呼び。

「嫁です!」

ボケた。

「ブフ~~~~~!! マサおまツまたかよ!」

まあなりトよ、いやあつつい・・・ってリアクションが・・・。

「なっ・・・ちょッ! マサ君!」

「マサ! なんぞどういこと!」

「そうだよマサ君 嫁って何!」

「マサナリ君 冗談だよね冗談だよね!」

遅ッ!!つか怖ッ。

「イツツ・ア・ジョーク!」

サクツと冗談と言ったとききました。

「「「「「心臓に悪い!」」」」」

どうやら心臓に悪かったらしい、ちょっと反省。

「でマサマサ、その子は誰なの、ってゆうか結城に似てない?」

おっ里沙君鋭いな。



「リトの・・・」従姉妹だよ 「はい？」

リト君？ はて？

「あゝマサ従姉妹ってことにすることにしたんだよ」

リコがこっそり耳打ち。

「何故に？」

「そつちのが現実的だろ？」

いやさりコ君、現実的ってオマエ・・・。

「いまさらじゃね？」

「いいんだよ！ とにかく従姉妹ってことで！」

はあ・・・まっいいけどね。

「えっと・・・リトの従姉妹で夕崎 梨子です・・・」

あつ苗字は結城じゃねえんだ。

「オイ リト オマエこんな可愛い従姉妹がいるってなんで教えてくれなかったんだよ！！」

「ちょ猿山落ち着け」

まあ教えようないだろ本人だし。

「ねえねえリコちゃんっていったっけ俺 リトの親友で猿山！」  
がつついてんなエテ山。

『ササッ』

「つかリコ何故に俺の後ろに隠れる？」

「あ……あの視線はイヤだ……」

はあ……まあわからんでもないけど。

「だつよエテ山 散れ！シツシツ！」

「俺は野良犬かなんかか！！」

いやさエテ山。

「犬に失礼すぎるだろ 地べたに頭こすりつけて謝れ犬に」

「ひどッ！……」

そうでもねえです、俺ン中では犬>エテ山だからな。

どつちか切れと言われたら迷いなくエテ山を切ると思う。

『ガラッ』

ン、ティーチャーか？早くね？

「マサナリ仕事です」

シツカリ作業着姿のヤミっ子だった、どうやら仕事らしい。

「つつわけて後ヨロ〜」

と教室を後にして、おっちゃんのとこで着替えて本日の作業場所へ、ちなみに最近つつか結構前からだけどおっちゃんは完全に俺とヤミっ子に仕事を任せてくれとります、まっおっちゃんはおっちゃんであることあるらしいけんどね。

つつわけて俺とヤミっ子だけで現場へ。

「バイク欲しいな〜」

「オートバイですか マサナリの場合、自分で走ったほうが遥かに速いのでは？」

「まあそりゃあそうなんだけんどな折角免許あつしな〜」

まあ前ンとこで取ったやつだけどこっちでも使えるらしいしな。

「プリンセスに頼めば性能の高いのを作って貰えるのでは」

「チツチツチ どうせ買うなら80年代とかのバイクがいんだよ手入れが大変なヤツだとなおよし！」

「何故ですか？」

「愛着わくだろ？ カスタムとかも自分でしてエシパーツとか集め

てな？」

楽しいぞオ〜．．．ってそついやアツチに置いてきたバイクどう  
なつたんかねえ。

『ピラッ』

ン．．．紙が降ってきた．．．どれ．．．おつ久々にアイナじゃ  
ん。

『お久しぶりです〜あのマサさん．．．ごめんなさいです〜バイク  
．．．売られてますです〜！』

フツ．．．。

「クソジジイイイイイ！！ 孫の形見ぐらい残さんかいイイイ  
イ！！！」

吠えたね、いやさ吠えざるえねえだろ！

「まっマサナリどうしたんですか？」

「ジジイが俺のバイク売つぱらいやがった．．．マジありえん形見  
だぞー応 普通 売つぱらうか？ マジありえねえ．．．なんなの  
あのジジイ本気でバカなの？ バカだけど、どこまでバカなんだ  
あのジジイは！！ いつか絶対ブツ飛ばしてやらアアア！！！」

100年後くれえにあの世にで。

「まつマサナリ・・・えと・・・確か美柑は・・・よしよし落ち着いて下さい」

ヤミっ子になでなでされた、なんか微妙に違う気がしたが気持ちはありません。たかたんて素直に受け取り、落ち着くことができた、表面上はね。

教室戻ったらエテ山に八つ当たりしてやろうとかチラッと考えたが流石に自重。

『ガラッ』

「うーッス！」

「ガ克蘭君 いつもの」

「私もいつもの」

用務の仕事後は常に保健さんここでコーヒータム。

「聞いたわよ 結城君が女の子になった上に男の子と女の子に別れちゃったんですって？」

「あらま保健さん耳が早いこつて 一応知ってんなあ 一部ッスけどね なっヤミ」

「ええマサナリのクラスでは結城 リトの従姉妹として通すらしいです」

用務ン作業中にそのことも話しとったんですな。

「大変ね〜 それにしてもララさんの発明品ぶっ飛んでるわね〜この前はガクラン君が小さくなったし」

「いやさ全く。」

「ガクラン君が女の子になったのも見て・・・ないわね・・・自分で言った瞬間に後悔したわ」

「気持ち悪いことこの上ないですね」

「いやさ全く、俺もそう思う、かなり気持ち悪いデキになると思う、事故ってレベルじゃねえくらいに。」

「まっ何故か俺には効かないらしいけど」

「試したの？」

「ララが興味本位で、もちろんゲンコしといたけど。」

「前の一件で耐性が出来たんでしょうね」

「それがよっぽどガクラン君の我が強いかね？」

「多分 保健さんが正解な気がする、小さくなったりするくれエなら別にいいけど女の子になるとかマジでイヤだしな、リコには悪いけど。」

『ガラッ』

「ン 保健さんお客さん・・・って」

「むっ・・・政成？」

凜かよ、はて朝チラツと見た時あ具合悪そうに見えなかったけど、いやある意味アレだったが。

「九条院さん どうしたのかしら？」

「いや私は大丈夫だと言ったのですが 沙姫様が仕切りに保健室で休めと言ったもので無下にもできず・・・」

沙姫の気持ちもわからんでもない。

「とりあえずコーヒー飲むか？」

「いただきます」

凜にコーヒーを出すことにしました体調自体は大丈夫っぽいしな。

「ほれ凜・・・あっ保健さん ちなみに凜も知ってる一人ね？」

「そうなの？」

「美味しいな・・・ン？ 何がだ？」

「リコ」

「むっ・・・そうだったな 朝に見掛けたが何故 リコも来ている？」

微妙に眉間にシワが寄ったな。

「まっ家で一人でいるんもつまらんだろってな？」

「昨日 話しをして来ることにしたんです」  
簡単に説明。

「そうか・・・」

「まあアレだ・・・なんかあったら相談くれえ乗ってやってくんね？ ヤミや保健さんにも言えっけど 女の子だかんな色々とあんだろっし・・・流石に俺にはわからんこともあるしな」

「こればっかしは俺もリトもわからんしな。」

「むっ・・・しかし・・・ふむ・・・」

「頼むわ 昨日のが引っ掛かってんだったら頭下げっから半分くれえは俺も原因なんだわ」

「・・・わかった 相談に乗れることなら乗ろう沙姫様に綾にも言っしておく」

「わかりました」

「ええ任せなさい」

「よしっよ。」

「今のリコには内緒な？」



「フツ・・・ああ」

「わかってるわよ」

「わかりましたが・・・何故？」

フツ・・・ヤミっ子よわかってませんな。

「様式美ってヤツだ　こういう時は内緒にすんのがセオリー」

「はあ・・・」

微妙にわかってない顔だな、まっその内ヤミっ子もわかるさね。

・  
・  
・  
・

鐘がなったんで保健室を後にし教室へ、凜も自分の教室へヤミは図書室へとそれぞれ向かいます。

『ガラッ』

「わおッ！　リコちゃん　ノーブラ？」

「あッ・・・ちょっと朧岡・・・やめっ・・・」

『ガラッ』

閉じた・・・ふむ・・・リコ・・・里沙に胸揉まれとるな。

『ガラッ』

「下はどうかな〜」

「沢・・・田・・・勘弁して」

スカートめくられそうになってんな・・・。

「あっ・・・まっ・・・マサ助けて・・・」

目が合った、まっ流石にそろそろ助けにやマズイヤね。

「指導ッ!!!」

『ガスン! ガスン!!!』

「痛ッた~~~~~!!!!」

当たり前じゃ痛いようにやったんだから。

「里沙オマエはアレか誰かの胸を定期的に揉まないといけない謎の病にでもかかってんのか? 未央も未央でめくんなつうの、しかも教室で!!!」

男子連中がギンギンギラギンの以下略やないかい。

「いや〜結構いい胸してたからつい食指が?」

「ふともも、もすべすべしてたし?」

知らんがな。

「うう~~~~アイツら怖い・・・」

リコ・・・スツカリ怯えとりますな、俺ン後ろでガクブルしてるし。

「唯も止めるつつつに」

一番止めるタイプだろうに風紀種的な意味で。

「つつ・・・巻き込まれる気がして・・・」

はぁ・・・巻き込まれるね・・・そういやいつぞやの臨海学校の時も似たような感じだったな。

「唯にゃんの胸もいいよ〜」

「大きいもんね〜」

「ちょッ!!そんなこと大きな声で言わないで!!」

確かにそうだが唯の声のがデカイ気がする。

つか・・・。

「わきわきすんな!!」

『デシッ!デシッ!!!』

ダブルチョコップ、本格的にアカンはコイツら。

リトはリトで助けんかったんかね、とリトを見たら、例によってカッチコチになってた。

元・自分でもダメなもんはダメらしい、まっ昨日も言ってたしな。

「いいな・・・リコさん・・・男の子だったのに私より大きい・・・」

「

「春菜さん牛乳飲みましよう牛乳」

この辺りはあえてスルー。

「うーん・・・ねえねえマサ！」

「何さね？」

なんかアホなこと言いそうな気がするが。

「おっぱい大きい方がいい？」

予想以上にアホな質問だなオイ。

「どついう質問やねん 意味がわからんわ!!！」

「だからっおっぱいが大きい方が」

「そついう意味じゃないからなララ君」

本気で意味がわからん。

「私も気になるぞマサマサ〜マサマサってそういつとどつなの？」

「うんうん気になる気になる」

「マサ君 私も気になる！」

「マサナリ君 教えて？」

ぬおッ！ 予想以上にララのアホな質問に食いついてるし。

なんか答えねえといけん雰囲気だなオイ、唯も何故かりコも気になるって顔してやがるし。

「大は小を兼ねる・・・そして小さいことは技術であると言っておこっ」

ぶっちゃけどっちゃでんよかってことです。

「わかんないよマサマサ〜」

「んなこと言われてもな〜俺アマジで どっちゃでもいいしな〜あつ強いていうなら」

「「「「うんうん」」」」

「小せえ方がからかいがあつて面白えと思つ」

ヤミとかこのネタでからかうとすっげえ面白えッス、めっさ斬りかかれるけど。

「アハハ・・・マサ君にこういう事 聞くのって無駄だったよ」

「うん・・・どうやって攻めればいいんだろ？」

知らんがなルン、つか何故に攻めこまれにやイカンのだ。

「うーん・・・それじゃあ無駄だと思うけど好みのタイプとかは？」

むっ好みのタイプ・・・その手の質問は初めてですな。

ふむ・・・。

「里沙 無駄だった」

「さっきのでもアレだしね」

「そうね・・・あつべつ別に気になってるわけじゃないわよ」

「うーん私は気になる」

なんか好き放題言ってるやがるけど。

「目がこう・・・キューっと吊ってる感じんヤツかな？」

指で目尻ん辺りを持ち上げつつ・・・まっ持ち上げなくても吊ってただけ。

「「「「「えっ!?!」「」「」「」

オイなんだその反応は。

「もっ・・・もう一回・・・幻聴かもしれないし？」

「だから こつ目がキューっと吊ってる感じんヤツ」

もう一度説明、ついでに。

「まあ唯とか凜が近えな？ あつ後里沙にヤミも結構近え」

うんうん確かに近えわ。

「まっまともな答えが・・・しかも」

「わっ私!？」

「ツーーーー!!」

おやま、唯は赤くなるんは結構見たことあつけど里沙は珍しい気がする。

「マサ待ってて目がキューってなる発明品作る!!」

「銀河通販で売ってるかな？」

「私も探してみなきゃ!」

オイオイ・・・待て待て、意味がわからんぞ？ つかりコもリコで何故に目尻を持つちやげてんだつうの。

「そつそれじゃあマサマサが彼女にするならそつという人ってこと？」

むっ未央……ふむ……。

「それも微妙　まっあくまでタイプだ　ぶっちやけ惚れちまったら  
どうでもよくなんじゃないかね？ 『ソイツ』だから惚れるんだろっし・  
・まっわかんねえけどそんな気がするわ」

多分だけどな。

「やっぱり発明は止め！ 私らしく勝負！」

「そつそっしよう」

「うん私もそつする」

なんの勝負やねん。

「そつか……で……でも……すっ少し有利……いや私は……  
でも」

「うっむビックリした……まさかちゃんとタイプを答えるなんて・  
・ちよっ意識しちやうじやん？」

はあ……まああくまで好みのタイプってただけだけどな。

・  
・  
・  
・



ヤミ 視点

図書室にて何時ものように本を選んでいるとフト。

『グッ!』

むっなんでしょう・・・何故私は拳を握って・・・所謂ガッツポーズをしてるのでしょいか、わかりません・・・しかし。

「フフ・・・悪い気はしません」

何故か自然と口元が緩みました。

・  
・  
・  
・

凜 視点

沙姫様と綾に政成から頼まれたことを伝え終わり、沙姫様と綾も了承してくれ、雑談していた時。

『グッ!』

「凜 急にどうしたんですの?」

「ガッツポーズ?」

はて・・・何故か自然に出たな・・・。

「わかりません急に・・・ただ・・・フフ・・・とても良い気分です」

「また保健室に」

それには及びません沙姫様。

・  
・  
・  
・

マサ視点

もうちよい続け。

つつわけで昼休み今日も今日とて保健さんところでムシヤムシヤ。

「あっマサ君 マサ君が出てる回もう完成したよ 今日 放送だから」

はい既に撮影は終わっとります、ついこのあいだだったけど。

「キョーコちゃんホント 今日マサがマジカルキョーコに出るの？」

「うん出るよ〜まっ顔は仮面付けてるけどわかる人は一発でわかるよ、性格とか殆どマサ君のまんまだし」

「今日は裏の時代劇は特番でないのでからそちらを見ましょう」

むっ……今日は時代劇ないんか……残念。

「マサ君……その顔自分が出てるのに時代劇 優先する気だったね？」

「まあな？」

時代劇が好きなんです。

「フフ……その辺もガ克蘭君っぽいわね？ とにかく今日は私も見てみようかしら？」

「私も見るね！マサナリ君……あっ私も、もしドラマとかで役が来たらマサナリ君に出てもらいたいな」

「あっ！ ルンちゃんもかしいたらマジカル・キョーコに出ることになるかも？」

「えっ！？ホント？」

「うん……まだわからないけど……監督さんが目をつけてたよ？」

ほう……ルンもマジカル・キョーコにね。

「えと何時からかしら？」

「8時だよ唯！」

まあ実際は何時からかはアレだけどメタ発言という名の予防線。

みんなもその辺は深くはツツコムなよ！！

とかありつつ昼メシ終了、で保健さんはリコに残るように言っ  
てリコを残し解散。

早速頼みを聞いてくれたっぽい、頼りになるますわい。

まあ帰って来たリコは頭から湯気が出てたけど、何があったかは  
スルーで。

そしてそして学校が終わり帰宅。

メシやら風呂やらを済まし・・・8時になりました。

セリーも気になるんか中を覗いています。

『チャララ〜』

おっ始まったな、どれ・・・どんな感じかねえ〜。

・  
・  
・  
・

???視点

ガヤガヤと街には何時ものように人が溢れ歩道を行きかっている。  
『ブォーン』

車道に走るクルマ……。

どれもありふれた光景。

そんな地上より奥深い地下……深い……深い地下……そこに現在の街ではそう見られない古い建物、江戸時代などで見られる程に古い屋敷が建っている。

その屋敷の中に映る人影。

「退屈だ……」

呟く声……広い屋敷のようだがその影以外には誰もいない。

「何か面白えこたアねえもんか……」

声の主は再び呟くと近くの玉……占いなどに使われるような水晶玉に目をやる、すると水晶玉は光りを放ち何かを映し始めた水晶玉に映るは一人の少女、それに対峙する異形。

『出たわねウザース！ もう許さないわ 骨のズイまで燃やしてあげるッ マジカルチェンジ！』

水晶玉に映る少女が呪文を叫ぶと彼女の体は炎を纏い一瞬の内に衣服が変わる。

そして彼女の指先から放たれた炎が異形の怪人を包み異形の怪人を燃やし怪人は倒れた。

『今日もバツチリ燃やして解決！！マジカル・キョーコ！』

水晶玉に映る少女の名前。

その名を確認した影は口元を楽しそうに、まるで新しい玩具を見つけたような笑みをうかべながら。

「ハツハツ 炎術師の類か・・・面白エ・・・どれ久々に地上に出てみるか」

影は笑いながら手に仮面を取り屋敷を後にした、後にはその少女が映し出されている水晶玉の光りが残った。

・  
・  
・  
・

『私 霧崎 恭子 魔女の血を引く高校生の女の子 世界にストレスをふりまく悪の組織ウザースと戦う魔法少女なの！ちなみに肩に乗ってるのは 相棒のシローネ 言葉が喋れる白猫ちゃんだよ』

第××話・・・。

「新たな敵？ 登場 仮面姿の変なヤツ!？」

暗転。

「フゝ昨日も大変だつてねシローネ？」

「そつだニヤゝキョーコちゃん ウザースにも困つたもんだニヤ」

肩の白猫と会話をするのは 水晶玉に映っていた少女、マジカル・キョーコ。

その恰好は昨日異形を倒した服装ではなくごく普通の高校生の制服。

「キョーコくゝん」

そんなキョーコに声をかけてくる同じく制服姿、ただし女子ではなく男子の、もちろん性別は男。

「あつ池綿センパイ!!」

池綿という名前のように、確かに名前の通りに整った顔立ちをしている。

ただ……。

「顔だけだけど!!」

キョーコからは顔だけしか認めてもらってないという少々残念な人だ、この池綿という残念な人物もキョーコの正体を知ってる一人でキョーコと共にウザースと戦うことに協力している。

しかし最近は……。

『ビュウー！』

風が吹きキョーコの短めなスカートが捲れ上がった……結果その下着がチラリと見える。

「むっ今日は赤！！」

キョーコの下着の色を目に焼き付ける池綿、年頃の男なら致し方ないが少々スケベであり、キョーコに協力しているのも このような突発的な事態に出会う為になってきているようだ。

この辺りが顔だけしか認めてもらってない所以なのだがもちろん本人は気付いておらず、その上。

「もう、池綿センパイのエッチ、お詫びにお昼奢ってもらおっかな」

「安いものさ！！」

キョーコの要求にとても良い笑顔で答える池綿であった……このように度々キョーコに奢ったり無理めな要求も二つ返事で頷く悲しい男だった、しかし十分過ぎる程の見返りは得られていると思っている所謂、ギブアンドテイクだ。

そんなキョーコと池綿の前に踊り出る一つの影。



「昨日はよくもやってくれたへや〜」

アフロ頭のこの男。

「モジャック將軍！！ 昨日の今日で懲りないヤツ！！」

モジャック將軍という名前らしい、彼はキョーコと敵対する組織ウザースの戦闘指揮官であり毎回のようにアフロヘヤーを焼かれる残念な怪人である。

「昨日はやられたへや〜が今日でオマエも終わりへや〜いでよ・・・ヘルス会長ツ！！」

モジャックの掛け声と共に現れたのは体重計の姿をした怪人。

「フハハ〜マジカル・キョーコ！！ ボクという最終兵器が出たからにはオマエは終わりだアア！！ くらえイ 必殺の・・・」

『カタカタカタカタ』

ヘルス会長の額にあるデジタル部分が数字を刻み、そして・・・。

「マジカル・キョーコよオマエはニキロ増だ！！」

放たれた呪いの言葉。

「ああアアア！！」

余りの威力にキョーコの体に電流が走る、実際は走ってはいないが女の子に取ってはそれほどの衝撃なのだ。

ちなみに彼女の名誉の為に言っておくが実際は増えていないのであしからず。

『ドサッ』

ガクリと崩れ落ち地面に座る形になるキョーコ……。

「やっぱり赤!!」

キョーコのピンチにも下着の色を目に再び焼き付ける池綿、だから顔だけしか認めてもらえないのだ。

そんな池綿を置いて。

「キョーコちゃん大丈夫かニヤ!？」

「う……うん……大丈夫だよシローネ」

キョーコを心配し気遣うシローネに大丈夫と答えを返しながらも彼女の中の熱き炎は燃えていた。

「ヘルス会長……女の子の体重を偽るなんて……しかもニキ口も増えたなんて言うなんて……許せない!!」

『ボツ!!』

彼女の気持ちに答えるように彼女の体から炎があがる。

「骨のズイまで燃やしてあげるッ! マジカルチェーションジ!!」

『ゴオオオ!!』

彼女の呪文で炎は更に燃え上がり、彼女を包む、そしてキョーコは。

「なんでもかんでも燃やして解決！ 魔法少女マジカル・キョーコ 見参!!」

怪人ヘルス会長を倒す為、マジカル・キョーコに変身したのだ。

そしてキョーコは何時も如く。

「ハアアア!!」

怪人ヘルス会長を焼き尽くそうと指先に炎を集める、そこへ。

「見つけた!!」

「へッ?」

何時もと違う展開・・・彼女に声をかける謎の男の声・・・はたして彼は何者なのか?

後編へ続く!!

「チャンネルはそのままだよ? じゃないと燃やしちゃうぞ!?!」

『チャランラ〜』

・ ・ ・ ・

「~~~~~」

マジカル・キョーコ オープニングテーマ霧崎恭子とファイヤーシ  
ンガーズ『燃える！ マジカル・キョーコ！』 NOW ON  
SALE!!

・ ・ ・ ・

『チャラッチャラ』

「見つけた!!」

「へッ？」

急に声をかけられたキョーコ声がした方を見てみると今まで戦っ  
てきた怪人とは毛並みが違う謎の和装の男、その顔の半分、口から  
上の部分には片方しか角がない鬼の仮面をつけている。

「新手の怪人!？」

一瞬キョーコはそう考えるがその鬼面の男はモジャック將軍とへ

ルス会長に近づくと。

「その炎術師は今から俺と喧嘩すんだ譲れ」

炎術師？ 喧嘩？ キョーコは鬼面の男に言葉にクビを捻る。

「ヘヤ〜 ヘルス会長 コイツが誰だか知らないがコイツもやってしまっへヤ〜!!」

「ハッ!! 喰らえ必殺・・・」

キョーコがクビを捻っている間にも事態は進展しモジャック將軍の命令によりヘルス会長が鬼面の男に必殺技を放とうとする。

「ハッハア!! 大人しい譲れやよかつたのよ・・・」

しかし鬼面の男は楽しそうに笑いながら右手でモジャック將軍ん左手でヘルス会長を掴み持ち上げ。

「飛べオラアア!!」

空に向かってほうり投げ。

「今回はアフロ焼かれなかったへヤ〜〜〜〜〜〜〜〜〜!!」

「モジャック將軍 そいう問題ですか〜〜〜〜〜〜!!」

『キラーンッ!!』

モジャック將軍とヘルス会長はキラリと輝く程まで高く高く消え

ていった。

その様子を目を丸くして見るキョーコに鬼面の男はニツと笑いかけ。

「さあ〜て邪魔者は消えた・・・炎術師・・・喧嘩・・・しよっぜエ？」

「まただ・・・炎術師、喧嘩・・・どっいう意味だろう、後者はまだわからないでもないが炎術師とは・・・。」

「アナタは何者！！ 炎術師って何？ ウザースじゃないの!？」

キョーコは鬼面の男に己の疑問をぶつける。

「俺か・・・俺は・・・そっうだな・・・鬼面童子・・・ってところか？」

「それ偽名でしょ!！」

「ああ偽名だな」

素直に偽名と認める鬼面の男、鬼面童子、これには思わずキョーコもずっける、しかし直ぐさま立ち上がり。

「後の二つも答えて!！」

「炎術師ってのはオマエのことだ 火を自在に操るヤツのことだろ  
うに」

「違う 魔法少女！！ 魔法少女マジカル・キョーコ！！」

強く否定、後に訂正、キョーコにとっては譲れない部分である色々な意味で。

「魔法少女・・・時代の流れかねエ・・・今じゃ炎術師のことはそう言っただな」

「炎術師じゃない魔法少女マジカル・キョーコ！！」

「わあっただ！ わあっただよ 魔法少女マジカル・キョーコこれでいいんだなッ！！」

やはり素直な鬼面童子である、そんな鬼面童子に満足気に頷く。

「はい最後！」

「ウザースなんてのは知らん・・・俺ア見ての通り一人だ」

確かに彼は一人のようだ、先程の素直な様子からいっても嘘をついてるようには見えない。

「ふん・・・一人・・・友達いないの？」

そんな鬼面童子にキョーコは心を焼く炎を放った、無自覚に、その炎を受けた鬼面童子は。

「いいい・・・いる！！ ダチくれえいるに決まってるんだろ！！  
今は連絡取れねエけど！！」

凄まじく動揺していた。

「嘘っぱいな〜？」

「いるってホントに！！ 俺アそんなに淋しいヤツじゃねエって！！」

「まっいいけど・・・アナタ ウザースじゃないみたいだけど人間？ 何の目的で私に？」

最後と言っておきながら更に質問を増やすのはご愛嬌。

「人間かどうか・・・人間だぜエ・・・地獄のな？ まあ地上じやあ鬼と言われてるがな」

「地獄・・・鬼？ 何しに地上に出て来たの！！」

地獄や鬼という言葉に一瞬クビを捻るも、自身も魔法少女であり怪人と戦っているわけだしありえなくはないと納得させるキョーコ。

「なんで出て来たのかってなア・・・地獄ってのはヒマでなア・・・特に今となっちゃ俺に喧嘩売ってくるヤツなんざいなくてな・・・ヒマ潰しに地上を覗いたら面白そうなヤツを見掛けてな・・・それがオマエさんだ」

鬼面童子の答えを聞き疑問が晴れたキョーコは。

「やっぱり友達いないんじゃないんじゃん？」

再び心を焼き尽くす炎を放った、しかし・・・その炎は心ではな



く。

『プチン』

「ダチがいねエわけじゃねつってんだろオオオ!！」

勘忍袋を焼いてしまったようだ。

『ブオン』

鬼面童子の拳が唸りを上げ地面を殴りつける。

『ズドオオオオン!!!』

「へッ!?!」

殴りつけられた地面はコンクリートにも関わらず巨大なクレータ  
ーとなっていた、流石のキョーコもコレには間抜けな声を上げ冷や  
汗を垂らす。

「アレ・・・マズツた?」

「キョーコちゃんマズイニヤ・・・アイツ ウザースと違って正統  
派に強いニヤ」

シローネもマズさを悟ったようだ、ちなみに池綿はというと。

「キョーコくん負けるな~~~~~」

かな~~~~り遠い位置から無責任な応援中である、基本 彼は

安全な位置から見守るタイプであった、だから顔だけと言われるのだ。

「ええ〜い こうなったら仕方ない相手はウザースじゃないけど・  
骨のズイまで燃やしてあげる！ ハアアア！」

今回は指先ではなく手の平に炎を集め始めるキョーコ、手の平に集まった炎を巨大な火球へと変えて。

「燃えちやえ！！」

鬼面童子に投げ付ける。

『ドゴン・・・ゴオオオ！！』

火球は鬼面童子し火柱となる。

「やったね！」

勝利を核心しグツとガッツポーズ。

「まだニヤ！！！」

「えっ？」

何時も敵・・・ウザースの怪人ならコレで倒せるはずなのだ、寧ろお釣りがくる程の威力で放った炎。

しかし・・・。

「オオオオオ!!」

『ズダンッ』

雄叫びと共に地面を踏み鳴らす音。

『バウンッ!!』

その衝撃で鬼面童子を包んでいた炎は消し飛んでしまった。

「う……うそ!?!」

キョーコがそう呟くのも無理はない今までの敵ならば確実に倒れていたのだ、しかしこの鬼面童子は倒れるどころかその炎を掻き消し、その上、多少焦げた程度のダメージしかおっていない。

「温いな……」

ダメ押しのセリフ。

「か……かつてないピンチニヤ!キョーコちゃん飛んで空から攻撃ニヤ!!」

「うっ……うん……」

シローネの言葉にキョーコは直ぐに反応し愛用の空飛ぶホウキに跨がり、空へと舞い上がる。

「へ〜面白エ術 使っじゃねえか?」

「魔法!!」

ピンチとは言えやはり譲れないようだ。

「はいはい・・・魔法な・・・魔法」

めんどくさそうに訂正する鬼面童子、先程アレだけの事を言われたのにやはり素直だった。

「キョーコちゃん！」

「うん！」

少し小型ながらも沢山の火球を作り出し、鬼面童子に向かって乱射するキョーコ、上空から数で押し切る作戦のようだ。

「ハツハアの当てだなア！！」

襲いくる火球の数は膨大であるが楽しそうに笑いながらその火球を今度は避け続ける鬼面童子、顔は半分隠れているがその口元は子供の・・・悪ガキのようであった。

キョーコが火球を放ち、鬼面童子が避ける、放つ、避ける、放つ、避ける・・・この攻防が続き。

「流石に飽きてきた」

ポツリと鬼面童子が呟く、同時に彼の姿がヒュンと掻き消える。

「消えた！？」

姿が見えなくなったことにキョーコは驚きの声を上げる、しかし

正確には消えたわけではない。

「よっと・・・意外と揺れないな」

キョーコの背後から聞こえる声、そう・・・。

「えっ！？ ちょっとなんで私のホウキに乗ってるの！！」

鬼面童子である、彼は別に消えたわけではなく、目では捉えられない程の速さでキョーコのホウキに跳躍し乗っただけだ、キョーコのように跨がってるわけではなく両の足でバランスよく立ってはいるが、乗っていることに変わりはない。

「面白そうだから乗ってみた」

「面白そうって・・・下りてよ！！」

「むっ・・・仕方ねエ・・・ン？」

キョーコとのやり取りの中、何か気になる物を見つけたのか・・・  
・車道の部分に目を送り・・・鬼面童子は。

「チッ！！」

キョーコのホウキから飛び降りると同時に空中を蹴り。

『ダンダンダン！！』

まるでソコに足場があるかのように空を駆ける。

「く……空中走ってる……」

「ビックリニヤ」

その様子に驚くキョーコとシローネ、ただこの二人も火を出したり猫なのに喋ったり現在進行系でホウキで空を浮遊しているのだが。

「ハッ！！　そういえばアイツは何を」

気を取り直したキョーコが鬼面童子の方を見てみるとその方向には歩道から飛び出し今にもクルマに引かれそうになってる小さな男の子の姿。

「クツ……！！」

急いでキョーコはその方向に飛ぶがいかんせん気付くのが遅すぎた、間に合いそうにない。

実際にキョーコは間に合わないだろう、しかし間に合った人物はいた。

『ガシッ！』

クルマに引かれそうになった子供を助けた人物、それは先程までキョーコと戦っていた相手、鬼面童子であった。

鬼面童子は子供を安全な歩道まで運ぶと。

『ガッン！』

一発ゲンコツをかます、最初のようなふざけた威力ではないが子

供にとっては十分に痛い威力だ、頭を押さえて涙目になる子供に更に鬼面童子は。

「ボウズ あんな鉄の塊にぶつかったら死ぬぞ!! 普通の人間のガキは 俺みてエに頑丈じゃねエんだから」

「で・・・でもボールが・・・」

子供が指差す先には丁度車道の中程に確かにボールが転がっていた。

「ボール? あの球ところか・・・チツ・・・待ってる!! 動くんじゃねエぞ!!」

ボールを確認した鬼面童子は再び車道に出ると器用にクルマを避けながらボールを拾い歩道に戻ると子供に。

「そら」

「わあ・・・ありがとう鬼さん!!」

「いってことよ もうあんなマネすんじゃねエぞ!!」

「うん」

鬼面童子の言葉に素直に頷き子供は嬉しそうに去っていった。

「な・・・なんかあの人・・・」

「いいヤツだニヤ」

素直なこといい薄々はそうじゃないかなあ思っていたキョーコ  
だかもはや薄々どころか問答無用で良いヤツじゃないのかと思ひ初  
めてきた・・・そこでフト。

「もしかして・・・」

何か思い当たる事があったのか、鬼面童子に近付き。

「鬼なのに良いヤツだから友達ができないとか？」

思い当たった疑問を素直にぶつけてみた。

『ビクッ！！』

盛大に反応を示す図星のようだ。

「べつ別に良いヤツじゃねエから・・・俺が良いヤツ 何を言いや  
がる 俺ア鬼だぞありえないから つかダチなんていらぬし」  
それは白状してるのと同じである、そんな鬼面童子を見てキョー  
コは思った。

(友達いないとか言っつて悪いこと言っつちゃったかも)

(そうニヤ ちょっと可哀相ニヤ)

と・・・そして。

「私でよかつたら友達になってもいいよ？」

無駄に戦わなくて済むし正直勝てなそうだったというのもあるが、



キョーコは良いヤツそうだと思ったのだ、ほんの少しだけ、池綿ゼンパイよりは使えそう。主に戦い面でもかと思っていたが、そこはご愛嬌。

「ホントか！！　ダチになってくれるのか！？」

輝く笑顔とはこの事だ、嬉しくて堪らないといった顔である。

余りに嬉しそうな様子にキョーコもつられて嬉しくなってしまう。

「うん　いいよ」

「キョーコちゃんかなるならボクもなるニヤ！」

「猫もか！！　ち・・・地上に出てきてよかった・・・」

若干泣きそうな鬼面童子であった。

そんな鬼面童子を見ながら顔を見合わせ苦笑するキョーコとシロ―ネであった・・・。

そして。

「なんかあつたら俺を呼べよ！」

彼が言うところの地獄に彼は戻っていったとても嬉しそうな様子で・・・。

それを見送ったキョーコは。

「あっそういえば・・・今日は燃やして解決してない!!」

「たまにはそういう回があってもいいニャー!!」

「そうだねシローネ!」

重大な事に気がついたがシローネの一理あるかもと思ったので、その言葉に頷き。

「帰ろっかシローネ?」

「そうするニャー!!」

シローネと仲良く家へと帰るのであった。

立ち去るキョーコの後には綺麗な夕日と・・・。

「また忘れられてるなボクツ!!」

忘れられることに慣れた様子の残念な人影だ映っていた。

つ・づ・く・く!!

第四十話っぱい感じ！（後書き）

後書き

オマケの方が苦勞したのは何故だろう・・・そんな疑問はありながら  
も次回も頑張っていきますんで、お暇なればまた見てやって下さい。

第四十一話っぽい感じ！（前書き）

前書き

予想外・・・色んな意味で。

## 第四十一話っぱい感じ！

美柑 視点

学校が終わって帰り際に。

「美柑ー！ー！！」

呼び止められた、振り返ったら私と仲良くしてる友達の二人。

「今日 これからどっか遊びにいかない？」

遊びの誘いかくくく何時もなら行くんだけど。

「あゝごめん！ 今日 私 家庭訪問の日なんだよね？」

そつ今日は家庭訪問の日なんだよね、だから今日は無理なんだ。

「そつか美柑ちゃん今日なんだく残念！」

「ごめんね！ そついうわけだからまたね？ たえちゃん やえち

やん！」

「うん！！」

二人に謝って家へと帰る、父さんもう帰ってきてるかな？。

『ガチャ』

「ただいま」

「おっお帰り美柑!」

あつまサさんもう帰ってきてたんだ、ってアレ？ マサさんだけ？  
ちょっと珍しいかも。

「今日はみくんなそれぞれ用事があんだと」

なるほどね〜やっぱり珍しいな〜 あつと……。

「父さんは……まだ……か？」

「才倍のおっちゃんか って何故に今日帰ってくるん？」

「うっん今日は私 家庭訪問だから」

「ぬっ！ なんと家庭訪問か……美柑ん担任が来るんだろ紋付で  
出迎えたほうがいいか？」

紋付って……。

「普通でいいよ普通で っていうかマサさんも参加する気？」

「うむ 美柑が世話になってんだここはピツとアイサツをせねば!  
!」

アハハ……嬉しいようなそうじゃないような……でも……  
どっちかっていうと嬉しいほうかな。

『プルル・・・』

あつ電話!!!

『ガチャ』

電話に出たら父さんだった・・・なんかイヤな予感・・・。

『すまねー漫画の締め切りがやばくて帰れなくなつた!?!?』

ああ・・・やっぱり・・・なんかそんな気がしたんだよね・・・。

「もう何日も日にち変えてもらってるんだよ?」

『すまねー!! そだ美柑、今家には誰がいる?』

「えっとマサさんだけだけど・・・」

『変われ!!!』

父さんに言われるままにマサさんと電話が変わる。

「なんぞ 才倍んおっちゃん・・・あつ?・・・マジか・・・まっ別にいいけどよ・・・おっちゃん次はこうなる前に呼べよ・・・あまかせろ! じゃな?」

『ガチャ』

あつ切っちゃった・・・もうどうしょ・・・仕方ないな、先生に

日付変えてもらつよう電話しないと。

そう考えてもう一度受話器を手にしようとしたら。

「つうわけで俺が代理だ!!」

ピタリと手が止まる・・・えつと・・・。

「マジ?」

「うむ 才倍のおっちゃんに頼まれた! 任せろ!」

う・・・うゝむ・・・ たっ確かにマサさん もう一人の大黒柱って感じだけど・・・。

「いいのかな?」

「まかせろオオオ! 今から紋付造つてくるわ!!」

「紋付はいいから普通でいいって普通で!!」

「むっ・・・残念」

ふ・・・不安だなゝゝ それにしても父さんリトがいたらリトに頼んだのかな? うゝん・・・リトはリトでテンパって大変なことになりそう・・・まっとにかく。

「お願いねマサさん」

「おっじ」



変なことしなければ堂々としてるマサさんのが確かに適任かも。  
ただ・・・マサさんだからな。

・  
・  
・  
・

晴子 視点

「ここが結城さんの家・・・」

玄関先で住所が書いてあるメモをもう一度確認する。

いよいよ私の大好きな漫画『英雄学園』の作者 結城 才培先生  
にお会いできるのね！！

っていけない、目的が少し変わってきてちゃってる。

えっ 目的？ それはもちろん才培先生のサインを・・・じゃな  
くて家庭訪問！！ しっかりしなきゃ。

グツと気持ちを引き締めて玄関先の扉を開き家の敷地内に入る。

チラッと庭の方を見ると・・・家よりも大きい植物が目に入った。

「何かしら・・・変わった植物が・・・さすが漫画家の家って感じ  
ね・・・」

見たことない植物だわ・・・おっ・・・襲ってきたりしないわよ

ね……。

少しだけ不安になりながらも、玄関の呼び鈴を押す。

『ピンポーン!!』

どきどきするわ……才培先生どういう方かしら……って違うってば、もうしっかりなさい晴子!!

『ガチャ』

玄関のドアが開く。

「はい」

美柑ちゃんね、えっと……となりにいる人が才培先生かしら？  
ちょっと違う感じがするけど……あっとアイサツアイサツ。

「あ あの！ こんちには！ 私 美柑ちゃんの担任の新田 晴子  
です!!」

少し詰まっちゃったけど大丈夫よね。

「こりやまたご丁寧に俺は 結城家 居候2号の 鬼島 政成ツス  
今日は才培のおっちゃんがどーしても仕事抜けられねエッてこと  
で代理ですわヨロシクお願いします」

えっ……代理？ ってことは……。

「アハハごめんなさい晴子先生 父さん締め切りがあって……そ

れで父さんが代理を大丈夫ですかね？」

「そっか、才培先生いないんだ・・・仕方ないよね人気漫画だから・・・シヨンボリ。」

「なあ美柑、先生さんなんかシヨンボリしてね？」

「うんしてるね、やっぱりマズかったかな？」

「あついけない！！ つい・・・。」

「えっと大丈夫ですから、ただ才培先生にお会いできなくてサインが貰えないのが残念だな、って・・・あつ。」

「アレちよつと余計なこと言ったかも。」

「才培のおっちゃんのファンらしいな。」

「みたいだね？」

「うっ・・・バレちゃった。」

「はい・・・ファンです。」

「ファンなんです、『英雄学園』大好きです。」

「それ聞いたら才培のおっちゃんも喜びますわ・・・っと何時までも玄関で話してるわけにもいくめえ。」

「そっだね晴子先生、どうぞ中へ。」

「はい」

案内されるままに家の中へと入れてもらおう、それにしてもあの居候っていった男の子・・・あの人の声ってどっかで聞いたことがあるような・・・。

居間に通されて出してもらったお茶をいただく。

「あつ美味しい・・・」

それに落ち着く・・・さっきまで少し焦ってたし助かるわ。

気持ちを落ち着けることができたので改めて才培先生の代理の居候さんを見てみる、若い・・・まだ十代かしら？ 少し目つき悪い・・・街で会ったら目を逸らしそうかも。

でも美柑ちゃんは随分と気を許してるみたいだし、さっきの感じはそこまで悪い人じゃないかも。

「えっと・・・鬼島さんは居候といただきましたけど・・・どういつ？」

「マサナリでいいツスよ　っと居候つてのはそのまんまツス　事情があつて今は結城家に世話になってるんですわ」

事情・・・気になるけど深く聞いちゃいけないわよね、きつと色々があるんだわ。

「マサさん晴子先生 深読みしてるかも？」

「つつてもな〜話すわけにもな〜俺ア別にいんだけど」

「それもそうだね」

やっぱり深い事情が・・・そつそつだ話題を変えよう。

「あつあのマサナリさんはご職業は？」

「学生ツス 高校一年ですわ」

こつ高校生だったんだ若いなつた思つてたけど。

「ただの高校生じゃないけどね色々やってるしマサさん あつ晴子先生 マサさん 父さんの仕事も手伝つたりしてますよ」

えっ？ スタジオ才培で・・・。

「ホツホント？ あのだったら才培先生に会つた時にサインを・・・あつすすいません！」

つい身を乗り出しちゃつて反省。

「いいツスよ・・・色紙あつたっけか？ まつあるだろ多分」

やった！！ サイン貰つてくれるんだ、良い人だこの人。

「あつあの出来ればコレに・・・」

サツとバックの中から『英雄学園』の最新巻を取り出す。

「おっ最新巻か・・・もう出たんだな」

「私買ったよマサさんこの前 オマケページ担当したって言ったし」

えっ・・・えっ!?!? おっオマケページ担当・・・そこまでの地位にいるなんてただの手伝いじゃない、待って・・・まさか・・・。

『ペラペラペラ』

急いでページをめくる・・・あつた!!

「じつこのページですか!?!」

「ああそれぞれ」

やっぱり!?!? ってことは。

「スタジオ才培の新人君ってアナタだったんですか!?!」

「ん? ああ 最初に手伝った時に定着したあだ名ですな」

凄い!! 今や才培先生の右腕、スタジオ才培の隠し玉と言われる程の人が目の前に・・・。

「あっあの私 以前から目をつけてたんです デビューはいつですか! きっと人気になりますよ!」

「うわぁ・・・スッゴい食いついてるし・・・」

「いやさデビューする気はねえッスよ あくまで俺ア手伝い」

なっ!？ もっ勿体ない・・・きつと人気になると思うのに。

「まっ俺アデビューする気はねえけど・・・ザステインってヤツがデビュー寸前とか言ってたんでそっち頼みますわ」

ザステイン・・・確かスタジオオオ培のチーフアシだっかな、そっか・・・デビュー間近なんだ・・・新人君がデビューしないのは残念だけど、応援はしよう。

「つとイカンイカン・・・なんか色々脱線しとる」

あっ! そうだった、今日は家庭訪問にきたねよね、つい興奮しちゃった。

「学校での美柑はどんな感じッスかね？」

「学校での様子ですね 美柑ちゃんは頭もいいし落ち着きのあるい子ですよ クラスの皆からも とっても信頼されてます!」

「そうッスか〜 そうッスか〜 いやア流石は美柑!! エライぞ」

「エへへ」

マサナリさん自分の事みたいに嬉しそう、美柑ちゃんも頭を撫でもらって嬉しそうね、こういう美柑ちゃんの姿は余り学校では見な

いかも。

お兄さんに甘えてる感じかな？ ううん、なんだろう、ちょっと違うかも。

「才培のおっちゃんも喜ぶわな」 いやホント出来た子で

「そこまで言われると照れるよマサさん」

フフ・・・うんやっぱり仲が良いみたいね、そう言えば・・・美柑ちゃん、前と比べて少しだけ明るくなったっていうのとは違うわね・・・物事を積極的に楽しむようになってきたかも・・・。

美柑ちゃんこの年では少し大人っぽ過ぎる感じだったけど、ちゃんと年相応になってきたから私としては安心してたけど・・・うん、マサナリさんの影響かしら？

なににせよ私としては良い影響だと思うわ。

美柑ちゃんはシツカリしてるけど まだ小学生なんだし、こつやつて甘えることも必要なものね。

私も先生として頼れるように頑張らなきゃ。

フフ・・・家庭訪問に来たのに何か一つ勉強になった気がするわね。

それから美柑ちゃんの成績のこととかを詳しく話、その度にマサ



ナリさんが自分の事のように喜んでるのが印象的だった。

「それじゃ そろそろ」

「あゝこの後 時間あるツスカ？ 家で晩メシどうツスカ なつ美柑？」

「うんいいかも晴子先生どうですか？」

うっ・・・ちよつと魅力的・・・うん・・・いいのかな。

「今日はすき焼きにすつか？」

「そうしよつか？」

すっ・・・すき焼きか・・・うむむ・・・。

「いいんですか？」

「もちろん！！」

結局 ご馳走になること・・・でもその前に。

「私 一旦 学校に帰らないと」

書類とかもあるし。

「じゃ途中まで送ってきますわ 俺らも食材調達せなイカンし」

「そうだね　っとおサイフ取ってくる」

そう言って美柑ちゃんは家に入っていき、また直ぐに出てきてカギをかける。

「じゃ行くか　セリー留守番頼んだぜ」

『ギヤウ!』

・・・あの植物・・・鳴くんだ・・・流石に驚いた。

・  
・  
・  
・

美柑　視点

晴子先生を途中まで送ってからマサさんと買い物、晴子先生を送ってる時に。

「ハッ!!　　そう言えば私　男の人に食事に誘われたの初めてかも・  
・キヤーキヤー」

って言い出した時は色々な意味で冷汗が出たよ。

まあそれは置いておいて・・・。

「フフ・・・」

「どつた美柑？」

「なんでもないよマサさん」

嘘、なんでもないって言ったけど マサさんと二人っきり、ちょっとだけデート気分。

マサさんと二人っきりなることって少ないからな、マサさん何時も誰かというし、あつそれがイヤってわけじゃないよ、私も楽しいもん。

でもたまには・・・ね？

まっ相変わらずマサさんその辺は鈍いからわかってないっばいけど。

「っと・・・コレで終わりか？」

「うんそうだね」

あっ買い物終わっちゃった・・・うん。

「マサさん もう少しだけブラブラしない？」

もう少しデート気分を味わいたいし。

「ン？ よかよ っとそだ 美柑はどうやら学校で頑張ってるみてエだかな・・・どれご褒美じゃ服でも買いに行くか？」

「うっ・・・うん！」

やった！ 散歩くらいのつもりだったけどますますデートっぽく  
なってきた。

買った食材はコインロッカーに預けて、近くのブティックへ。

『ウィーン』

「いらっしやいませ〜」

店員さんに出迎えられて私のサイズに合う服のコーナーへ・・・  
うん・・・。

「どうかな？」

一着の服を手にとりマサさんに聞いてみる。

「おっ可愛いじゃん・・・でも俺的にはコッチのが好き」

うん、そっちも可愛い。

「ちょっと試着してくる」

「おっッ」

自分で選んだ服とマサさんが選んだ服の二つを持って試着室へ。

まずは私が選んだのから着てみる。

『シヤッ』

「どうかな？」

「おっ可愛い可愛い」

「エへへ、嬉しい、次はマサさんの。」

『シヤッ』

「よしッ！ 二つとも買いだ！」

「えっ？ 一つに絞るよ？」

「マサさんそこそこ稼いでるから大丈夫だっの。」

「悪いな〜って思ったけど嬉しかったし、甘えちゃった。」

「っと……流石にそろそろ戻つか？」

「うん……晴子先生も来てるかもしれないし」

「ちょっとだけ残念だけど 晴子先生を交えての夕食も楽しみ。」

ブティックから出てコインロッカーから食材を取り、並んで家へと帰る、食材はマサさんが持つてるけど買ってもらった服は私が持つてる、マサさんが持つるか？って言うてくれたけど自分で持ちたかったしね。

「家路へと帰る時……フと……手繋ぎたいな〜って思ったから。」

「マサさん……あの……手……繋いでいい？」

「むっ・・・いいぞ別に〜ほれ」

あっさりOK 　ただ若干子供扱いっぽかったのがムツとしたけど、この際気にしないで手を繋ぐ。

自分で言い出して置いて少しだけ照れる気持ちがあるけど、でも嬉しいし気持ちホコホコとしてくる。

あゝ私はホントにマサさんが好きなんだなって思った。

・  
・  
・  
・

家に帰りつくと丁度のタイミングで晴子先生が来てから一緒に家の中に入る。

「~~~~おかえり〜」

あつ皆帰って来てたんだ、一斉に出迎えられて晴子先生は目をパチクリさせてた。

マサさんがそんな晴子先生に。

「美柑の兄　姉　居候1号　3号ッス」

軽く説明・・・っていうかりこはもう姉ってことになってるんだね・・・まっ確かにそうなんだけど。

「あつえと私は美柑ちゃんの担任の新田 晴子です 今日家庭訪問で来たんですけど その時に夕食に誘われまして お言葉に甘えさせてもらいました」

晴子先生も自己紹介と今いる理由を話す、その後はそれぞれ自己紹介をした後に、夕食の準備。

「あつ私も手伝い・・・わッ！」

『ツルツ』

「よツとツ！ 晴先生 ドジっ子ツスね？」

「うう~~~~どうも鈍くて・・・」

多少ハプニングはあったけど準備を終わらして、皆ですき焼き。

「美柑・・・それは」

「エへへマサさんに買ってもらっちゃった」

「ええ~~~~いいな~~~~いいな~~~~マサ~~~~」

「はいはい わあったわあった」

「わあーいマサ大好き~~~~」

「リトガード」

こんな感じで何時も通りに騒がしく、でも楽しい夕食。

やっぱり晴子先生は目をパチクリさしてたけどね。

「まっマサ……あのさ……ほら私も服買わないといけないし」

リコ……進みすぎ。

っていうか……。

「リトまさか……リコ……」

「あっああ……まさかだ……今日遅かったら リコに相談されてた」

ほっ本格的に元・兄がライバルに……前代未聞だよ。

でも……うん、負けない!!

そう決めたある日の夕食だった。



## 第四十一話っぽい感じ！（後書き）

後書き

新たなキャラが出てました、まあ今後の登場は薄いですが。

そして気付いたらマサ視点がなかった・・・たまにはそういうこと  
もあります。

今回は・・・次回ということだ！

お暇ならばまたどうぞ。

第四十二話っぽい感じ！（前書き）

前書き

無双しています。

色々アレでやっぱりし薬的な以下略。

## 第四十二話 っぽい感じ！

『ゴキヤツ！！』

髪を掴み地面に叩きつける、気絶しないように加減してだ。

「オラ・・・とつと居場所言え 二度と物噛めなくなりてエか？  
アツ！？」

「あぐ・・・ら・・・」

チツ・・・粘りやがるなコイツ。

再び髪を掴み頭を地面から離し・・・。

「ここから・・・少し・・・離れた・・・た・・・立・・・入・・・  
禁止の・・・倉庫・・・」

立入禁止の倉庫ね・・・。

「い苦勞！！」

『ゴシヤー！』

今度は気絶してくれエの力を込めて叩きつけた。

もう物は噛めねエだろうが・・・。

「俺の身内を拉致ったテメエらが悪い……」

それだけ言い残して倉庫へ……唯と春菜が居る場所へと向かった。

・  
・  
・  
・

涼子 視点

『シャアアア』

起きぬけに目覚めのシャワーを浴びる、ホントは体によくないんだけど、これしないと目が覚めないのよね。

『キュッ』

「ふう……どうも朝が弱くていけないわ……」

シャワーを止めながら独りごちる。

さて……着替えて学校……。

「御門先生、朝ご飯できました」

の前に朝食ね。

あつ言い忘れてたけど、お静ちゃんは私の家に住んですわ、人工体のメンテナンスもあるし、丁度、助手も欲しかったしね。

『ガシヤ』

「わきゃ〜〜みそ汁が〜〜みそ汁が〜〜」

おつちよこちよいな助手だけどね。

朝食を済ませると、お静ちゃんは先に学校へと行っちゃったわ、日直なんですって。

すっかり受け入れられてるみたいで安心するわね、まっガ克蘭君のクラスっていうのもあるんでしょうけど。

『ガチャ』

お静ちゃんから少し遅れて私も家を出る、暫く歩くと。

「あら先生、おはようございます」

「おはようございます」

八百屋の奥さんがアイサツをしてくれたから私もアイサツを返す、ここ野菜を買ったりしてるから顔なじみになってる。

顔なじみ・・・フフ・・・そうね、この惑星にきて、もう3年になるものね・・・はやいものね。

感慨深いものがあるわね。

「おい見ろよ、御門先生だぜ！」

「うひょ〜今日も大人の色気ムンムンだな〜」

学校に近づくにつれて生徒達が増えてくる、そして男子生徒達からそういう声が聞こえてくるのが耳に入る。

う〜ん・・・大人の色気・・・ね・・・年頃の男の子達だったらそういうのに興味があるのは当然よね・・・普通なら・・・。

「おは〜ッス保健さん」

「おはよございませすドクター・ミカド」

フフ・・・普通じゃない子のお出ましね。

「おはよガ克蘭君、ヤミさん・・・今日は少し早いわね？ 仕事？」

「保健さん正解！ はい景品」

ガ克蘭君愛飲のミ〇ミ〇ね、ありがたく受け取る。

「ホント好きね〜ガ克蘭君」

「チツチツチ・・・上に大が抜けとりますな、マサさんはミ〇ミ〇が大好きなのだ、一日飲まなかったら大変なことになるね」

ちょっと見てみたいわね。

「マサナリ、私も飲みたいです」

「ほれ」

ほほえましいっていつかなんていつか・・・フフ・・・ヤミさん可愛くなつたわね、恋をすれば女の子は変わるってホントよね。

もっともガクラン君は気付いてないけど。

そのままガクラン君とヤミさんの二人と一緒に登校。

「ガクラン君がいると学校、賑やかになるわよね」

「何時でも楽しいめ人生を出来れば回りも巻き込んで！ なんつって？」

フフ・・・確かにガクラン君はそんな感じよね、私だって巻き込まれてるものね、それが結構心地良いのよね。

「多少は押さえたほうがいい時もあります」

「それは無理じゃないかしらガクラン君、ブレーキなさそうなもの」

「チクソウ・・・自覚はなくはないが人に言われたら何故かモヤツとするんだが」

「あら大変・・・このクスリ使ってみる？」

遊びで作ってみた薬を取り出してガクラン君に渡してみる。

「・・・なんか非常にイヤな予感がするんでノーサンキュー」

惜しい……。

「ドクター・ミカド、その薬は？」

「ホ・レ・薬よ？」

『ガスッ！』

「痛ッ！！」

がっガクラン君……あっちよっと怒ってるわね。

『パシッ』

あっ！ ホレ薬……取られちゃったわね。

『トポトポ』

流されちゃったわね、まあガクラン君のことだから……。

「こんなん作っちゃイケません！ マサさん怒るよッ！」

やっぱり……ガクラン君、こういうのは嫌いみたいね。

「一時的なものよ？ ちょこっとだけこうなんていうのかしら……  
側にいる子を抱きしめたくなくなるくらい？」

「むっ……しかしですな」

堅いわね。



「ジーー、あの薬、欲しかったです」

あらあら・・・ヤミさんは欲しかったみたいね・・・うん・・・  
ガクラン君はよく頭とか撫でるけど抱きしめるとかしてくれないものね、私もちよ〜っただけ抱きしめてもらいたいものね。

あら本音がちょっと出ちゃったわね。

「まっとにかくああ言う薬はちよ〜とな〜」

「わかったわ、次はコレを元に抱き着き薬を作ってみようかしら？」

「完成したら私にも分けて欲しいです」

他にも欲しがる子は多そうね。

コレくらいだったらガクラン君的にも大丈夫みたいだし、もしダメだったら言い切る前にゲンコツ飛んでくるものね。・

・  
・  
・

マサ視点

「ドクター・ミカドは何故この惑星に来たのですか？」

ン、そついや聞いたことねエな、ヤミっ子のは知ってっけど。

「ガクラン君も気になる？」

「ちいっただけ？ まっ無理に聞こうたア思わねェけど」

「フフ・・・別に深い理由はないわよ、ただ・・・風が吹いたから・・・かしらね？」

なるほどな・・・。

「保健さん、乗りたい風には乗れたか？」

「ええ、乗れたわ・・・今もね？」

そいつアよかった。

・  
・  
・  
・

???  
視点

フン・・・何が乗りたい風だ、その気まぐれな風のせいで我々が  
どれだけふりまわされた事か・・・。

『ケイズ様・・・いかが致しますか？』

「予定通り事を進める・・・お前らはしくじるなよ」

『ハッ！』

クク・・・待っているドクター・ミカド・・・我らが必ず・・・。

・  
・  
・  
・

マサ 視点

「シャツ終わりっ！」

「そうですね」

流石にちいと時間かかったな・・・一時限目に突入すんなア何時もん事だけんど、今回は三時限目も後半だしな。

しっかし・・・ンだろな・・・なあくんかこう・・・イヤな予感つつつかなんつつか・・・。

「どうしたんですか？」

「わかんね？ なんかな・・・まっ保健さんどこ行っか？」

妙な引っ掛かりがあんだけど、とりあえず何時もの如く保健さんどこへ。

『ガラッ！』

保健さんここで何時通りに過ぎしてはいるんだが・・・やっぱり、どうにも引っ掛かる。

「ガ克蘭君どうしたのかしら？」

「わかりません先程からあの様子です」

むむ〜。

『キンコーンカンコーン』

むっ、三時限目終わったか。

『ガラッ』

あつ、今の俺じゃねえぞ、どうやら客、ヒザから擦りむいて少しだけ血を出してる女子に肩を貸してる女子・・・つか二人共クラスメイッ。

「あら、どうしたの？」

「階段で転んじやって・・・」

「アレか里沙から逃げてたとか？」

ハイ、ヒザを擦りむいてるヤツは何故か里沙に毎度の如く胸を揉まれてる別名。

「チチ揉まれ娘」

「ヒドイ！！ マサナリ君までそんな事言っわけ？」



「いやさ振りかと思ってる？」

「そんな振りしないってばッ！ 優しくして優しく！」

むっ、しゃあねえですな。

『チヨンチヨン』

今度は優しめに、まっ多少は染みるだろうけど。

「はい、痛い痛いの〜〜飛んでけ〜〜具体的にエテ山に

「プツ・・・」

「ククツ・・・具体的にはって・・・ププツ・・・」

うむ、やや受けだな。

「ホントに飛んでいかないでしょうかね？」

「だな、確かに飛んでたら面白エんだけどな？ 保健さんそんな薬ない？」

「流石にないわね、あつガ克蘭君、消毒終わったならば」

「あいよ」

保健さんにタッチ。

チャッチャッと手際よく処置していく保健さん、流石はプロです

な。

「これでよしつと・・・大したケガじゃないからすぐに治るわ」

「俺なら5分で完治かな？」

「流石のマサナリ君でも5分は嘘でしょ？」

むっ、バレたか。

「スマン嘘ついた、1分前後だった」

「「短縮してるッ!？」」

ナイスコンビネーション。

「確かにガ克蘭君なら、そうでしょうね」解剖

「NO解剖で」

されてたまるかっつうに。

「残念・・・まっとにかく神崎さん、これからは階段から降りる時はもっと注意しなさいね」

保健さんの注意。

「そうだぞ」もし頭打ったら普通は大変な事になんだぞ、そうならマサさん泣くぞマジで」

俺も頭を撫でつつ注意。

「うん気をつけるよ、御門先生、マサナリ君、ありがとございまして」

「ヤミさんもまたね」

頭を下げて保健室から出る、日和と直子を見送りました。

「ってイカンがな俺もボチボチ戻りますわ」

今だに何か引っ掛かっている部分はあるけど教室に戻ることに。

『ガラッ!』

おうツ？ 今のも俺じゃねエぞ、つかリトにララだし、リコもいるな。

「あれ〜？ やっぱりここにもいないな〜、あつまサ、春菜と唯見なかった？」

「見てねエぞ」

学校来てすぐに用務ン仕事してたしな。

「おつかしいな〜朝来る時、見かけたんだけどな〜」

はあ・・・つうこたア休みってわけじゃねエんだよな。

「一時限目から見えないんだよ」



なぬ！？ どういうことじゃ、唯に春菜・・・サボリ？ いやねえな、特にあの二人は。

『カタカサカサ』

アン？ ンだアレ・・・クモ？ いやクモにしちゃメカチック過ぎだわ。

『ピッ・・・ウンッ！』

おわッなんか光ったレーザー？・・・ってなんだこりゃ・・・。

「テレビ画面みてエ」

アレね、映画とかでよくある空中に画像がくみたいな感じ。

『ジジッ』

むっ・・・映ったな、って誰だコイツ、画面には右目んあたりにデカイキズがある妙なグラスンつけたヤツ。

「ケイズ！？」

保健さん・・・知ってるヤツらしいな・・・つか・・・保健さんの様子からしてコイツは・・・。

『やあお久しぶりですね・・・ドクター・ミカド』

「どづしてここが・・・」

『フフ・・・我々を見くびってもらっては困りますな』

なるほどな・・・ムカつくわ・・・喋り方から何からムカつく・・・  
・気にいらねえヤツだわ。

「御門先生のお友達？」

「いや・・・どーみても違うと思う」

「同感だ」

「まったくララは・・・無邪気だねエ、まっそこがララの良いところだ  
けど・・・。」

「何か私に用かしら・・・」

保健さんの目からしてコイツは完全にダチってわけじゃねエな。

『フツ、わかかった事を・・・今日こそはアナタに来ていただきま  
すよ・・・我らが組織『ソルゲム』はアナタの力を必要としている  
のですから？』

アツ？ ソルゲム？

『ソルゲムですと！！』

ペケ知ってんのか。

「デビルークと敵対関係にある組織マフィアの一つです」

『はいヤミ殿の言う通り、殺人の請け負いや武器の密輸、製造などあらゆる悪事を行う組織マフイヤです』

ヤミも知ってたか・・・まっ殺し屋してたんだ、その手の事も詳しいわな・・・。

「お断りするわ！！　アナタ達とは考えが合わない・・・何度もそう言っただはすよ」

ハハ・・・だよなア・・・保健さんならそう言っわな。

「だだよ？　とつとと消えろや」

『誰だこのガキ・・・フン・・・まあいいドクター・ミカド、いや御門先生？　大切な生徒と引き換えになっても・・・ですか？』

アア！？　何言っつて・・・ま・・・まさか・・・。

・  
・  
・  
・

涼子 視点

「何ですって！？　ケイズ何を！！」

「アナタの地球での生活は調査済みなんですよ先生・・・ごらんいただごう」

『ヴンッ！！』

「「「！！」「」

画面に映し出されたのは・・・私の生徒・・・西連寺さんに古手川さん。

ケイズ・・・アナタなんてこと・・・。

『ゾワッ』

凄まじい寒気。

「オイ・・・こりやなんだ・・・なんで唯と春菜が映ってる・・・」

ガ・・・クラン君？

『またさっきのガキか？ 見て通りだ・・・フハハ、ドクター・ミカド！ どうします？』

ケイズが何か言ってるけど、それどころじゃない。

ガクラン君から出させる怒気・・・いえ、怒ってるなんてものじゃない。

「・・・てやる」

何かを呟いてガクラン君は出て行った・・・。

『ペタン』

それと同時にララさんに結城君、リコさんが座り込む、無理もない私だって座り込みたい気分なもの。

ヤミさんはまだ大丈夫みただけど汗が凄いわ……。

『フツ……なんだあのガキは……まあいい、さてドクター・ミカド答えを聞きたい……もちろん我らが望む答えをね……さもなくば』

映像の中に映されている西連寺さんと古手川さんにゼリー状の物体が襲いかかる。

『あのスライムは我々が造った合成生物でね……人質の自由を奪い命令一つで彼女らを窒息させる事もできるんですよ』

得意気に話すケイズ……だけど。

「わかったわ……言う通りにする……けど一つだけ言うておくわ」

『何ですか？』

「アナタ達……終わりよ」

この銀河で一番怒らしちゃいけない子を怒らしたんだから。

・  
・  
・

マサ視点

「ここか・・・」

あのクサレが言ってた倉庫だな・・・唯に春菜は無事か、倉庫に侵入し耳を澄ます。

「ふひひ・・・いい眺めだなア」

声が聞こえんな・・・ゲスな声・・・耳障りだ・・・。

その声の聞こえる方へと進む・・・居たな・・・無事ではあるが・・・なんだア？　なんかスライムみてエのに張り付かれてやがる、しかも半裸だし。

「この娘達、本当にミカドを説得できたら解放するのか？」

「まさか！　どっちも上玉だ、いくらでも商品価値はあるだろうさ」

商品・・・価値・・・だと・・・。

「オイ」

「あっ？」

『ゴキヤゴキヤ！！』

商品価値とかほざいたクサレを横殴りにし更にそのまま地面に叩きつける。

『ビクンビクン』

死んではないない辛うじてだろうけどな。

「まっまマサ君？」

「えっ？」

唯と春菜の声を聞いたら少しだけ安心した・・・が。

「クサレスライム・・・二人から離れる」

スライムが張り付いてる状態じゃまだ安心は出来ねエ・・・。

「はっキサマが誰だか知らんがこのスライムは我らが造った物だ我ら以外の言うことなど」

「黙れ」

『ゴシヤッ！！』

裏拳で轉つてたヤツを黙らし。

「離れる」

もう一度だけ命令。

『ピギーーーーー』

『ジュルル』

離れたな……。

ようやく一安心だわ。

「唯、春菜……大丈夫かよ……つとまずは服着た方がいいわな」

「ちょつまサ君、こつち見ない！ ハレンチよ！！」

「リアクション薄いけどね……グスン」

何時ものセリフの唯に、何故が泣きそう春菜、ハハ……まっ元  
気そうで何よりだわ。

で二人が着替え終わった後。

「あ~~~~二人は見ねエ方がいいぞ？」

先程転がしたクサレ共……まだ一発しか殴ってねエ……その  
程度で済ますにはコイツらはやり過ぎた……まだ済ますつもりは  
ねエ、それに聞かねエといけねエこともあつしな。

「マサ君、なつ何する気！」

「決まってる……誰の身内に手エ出したのかわからせてやんだよ・  
……クソ共が……商品価値だア……クソボケが……」



口に出すと更にムカつく言葉だ・・・俺ンダチをコイツらは・・・商品とほざきやがった・・・。

『ザザッ』

ビクビクと痙攣してるヤツのところまで歩き・・・足を持ち上げ。

『ゴキヤー!』

右腕を踏み潰す。

「アギヤアアア!!!」

ハッ気付けになって目覚めてくれたか。

「オイ・・・商品価値ってなんだ?」

「アツ・・・アガ・・・ウガッ」

ふむ・・・。

「答えねエか・・・そっか・・・シッ!!!」

『ゴキヤー!』

左手を踏み潰す。

「アアアアツ!!!」

お〜お〜痛そう。

「商品価値・・・って何？」

「あっ・・・あっ・・・」

また答えねエか・・・。

『グオツ』

足を持ち上げる次は右足だな・・・と狙いを定め。

「マサナリやめてください」

アン・・・ヤミか。

「ヤミも来たんだな」

「ええ・・・心配でしたので」

「心配つてなア？　こんなヤツらにやられる俺じゃねエてなアわかんだろ？」

毎朝、運動してんだからよ。

「そういう意味ではありません、マサナリがやり過ぎる事をです」

あっそつち・・・か・・・けどなア。

「コイツら・・・唯と春菜を拉致っただけじゃなくてよオ・・・商

品って言ったんだよ・・・商品ってよ？ 許せるか？ 許せるわけねえだろうがよッッ！！」

足を持ち上げ・・・ドクサレの右足を・・・。

「まっマサ君・・・おっお願いやめて私達は大丈夫だから・・・ねっお願いだから」

唯・・・チッ。

『スタツ』

足を地面に下ろす。

クサレ野郎は・・・。

「アガ・・・ガ・・・」

どうすつかねえ。

「これで縛っておきましょう・・・もっともソッチのは縛る必要はないでしょうが」

ヤミっ子、用意いいなオイ。

「にしてもよおわあつた居場所？」

「わかります、行く先行く先で血ダルマの組織の人物が転がってるんですから」

「アア〜〜そういや学校に潜んでたヤツから始めて見つける度に全員血ダルマにしたな〜全員妙なグラサンして堅気じゃねえ感じだったから一発でわあつたしな。」

「まっ反省も後悔もしてねエけど・・・。」

「まっマサ君・・・もう平気よね?」

「おう、見てン通りこんクソボケ共はもう動けんたる」

裏拳で黙らせたヤツはヤミっ子が縛ってるしな。

「そつちじゃないわ・・・春菜さんが聞いているのはマサ君がつてこ  
とよ」

「俺? はて・・・。」

「マサナリ・・・あれは普通の人間にはキツすぎます、保健室の時  
などプリンセス達が腰を抜かしかけてました」

「アア〜〜」。

「かなりドタマにきてたからな・・・って保健さんは!」

「そうだったの、保健さんはどうなったんよ、まさか・・・。」

「大丈夫です、マサナリが保健室を出た後に従う振りをしてました  
が・・・そろそろ向こうも決着がついてるはずです」

そか・・・なら・・・。

「とりあえずは・・・保健さんどこ行くか？ あのクサレキズ野郎のツラの反対側にも同じキツつけてやる・・・」

「まっマサ君・・・おっ怒ってるのはわかるけど・・・怖いから・・・落ち着いて」

むっ・・・そんなに凶暴なツラだったか唯よ。

「ハッキリ言っただけ怖すぎます、私はマサナリのその顔は余り好きではありません」

むむ・・・。

『パンツ！』

頬を張って気持ちをリセット、まあリセットしきれねえけど、大分落ち着いたことは落ち着いた。

「どれ・・・行くか？」

「ええ」

「うっうん・・・わかった」

「わかりましたついてきて下さい」

とヤミの案内で保健さん達の所へ、あっ一応クサレ共も引きずってな。

・ ・ ・ ・

涼子 視点

ゲイズに指定された場所に向かう、私ができるのは極力時間を稼ぐこと。

いえそこまで時間は必要ないかもしれないわね、ガクラン君の様子じゃ・・・早ければ私が着く頃には向こうは決着がついてるかもしれないわ。

ヤミさんも後からガクラン君を追ってたけど・・・きっとガクラン君がやり過ぎないように・・・ね。

「ようこそ・・・待っていましたよドクター・ミカド」

ゲイズ・・・勝ち誇った顔をしてるけど・・・アナタ銀河でも指折りのバカよ。

「フフ・・・」

「何がおかしいんですか、ドクター・ミカド？」

「いえ・・・ちょっと・・・ね？ アナタの末路がね？」

「？ わけのわからない事をいいますね・・・まあいいでしょう、

「さあ我々と一緒に来ていただきたい」

「その前に……生徒達は無事なの？」

「もちろん、アナタが我が組織『ソルゲム』に忠誠を誓ってくださいるのならすぐにでも解放いたしますよ」

忠誠……ね……イヤに決まってるわよ、チラツと時計を見る、もう解放されてるかしたら、そろそろだと思っけど、でも一応は時間を稼いでおこうかしら。

「……そんなに私の医学が欲しいの？」

「ええ、欲しいですねエアアナタの医療技術をもつてすれば生体に強化改造手術を施し、常識を超えた能力をもつ最強の兵士を造り出す事ができる!!」

常識を超えた……ねエ……頭に浮かぶのは『常識美味しいのそれ?』な男の子、あの子に比べればそんな力なんてそれこそ無意味よね。

何せ『最強』より『最高』を目標にしてる子だもの。

「そしてそれらが我が組織の『商品』として宇宙に出回ればデビルークが統一した、この宇宙を再び戦乱の世に戻す事も夢ではない!」

語るわね、まっその方が都合がいいけど……ただ腹は立つわね、特に……。

「商品・・・また商品・・・テムエらは・・・」

そつ商品って言葉・・・フフ・・・ガクラン君・・・来たみたいね？ 早かったわ。

「なっキサマ！！ あの時のガキ！！ それに人質も・・・クソ部下は何をして」

「部下・・・コイツらか？」

『ブオン』

ガクラン君が引きずってた何かを投げる・・・あらら・・・一人は顔が潰れてるだけだけど・・・もう一人は・・・両手砕かれてるわね。

ガクラン君を怒らすような事を言ったみたいね。

「さあて・・・俺の身内に手エ出したんだ・・・しかも・・・また商品とかほざきやがった・・・」

ゲイズ・・・アナタの末路は決まったわ・・・。

「骨の二三本で済むと思うなよッ！！」

破滅よ。

・  
・  
・



マサ視点

「アガッ・・・許ひ・・・」

「アッ？ 何聞こえねエなッ！！」

『グシヤッ！！』

ただ今、顔面モチツキ大会開催中。

「ガクラン君・・・もうそろそろやめなさい、ゲイズ 顔の原型無  
くなってるわよ」

むむっ・・・確かに大分ガッスンガッスンしたからな。

『パッ』

「うっ・・・」

『ドサッ』

仕方がないんで離してやる。

「戻った？ マサ戻った？」

ララ・・・そっぴや来てたな、リトにリコモ。

「おっ俺が殴られた時、一回見たことあるけど」

「ああ・・・それ以上に・・・怖かったな」

「マサ君、お願いだから余りその顔はしないで欲しいわ」

むむ・・・ヤミに続いて唯まで。

「」「」「うんうん」「」「」

つか寧ろ全員。

「じゃあねえだろ・・・ドタマに血が上ったんだしよ・・・身内に  
手エ出されたらどうも・・・な？」

こればっかかな・・・どうしようもねえ。

「ふう〜」

ミ○ミ○飲んで落ち着いっつ。

「落差が凄いわね・・・」

「ええ先程と同一人物とは思えない程に」

まっ切り替えの早さには定評があるからな。

「で・・・コイツら・・・どうする五分刻みに解体しちまうか？」

「ダメだってマサ!!!この人達はザステインに任せるから大丈夫!

」!

チツ・・・解体してやるつと思ったのに・・・。

「ララ様〜マサナリ様〜」

おつザステイン早えな・・・つとそうだ・・・ザステインに連れてかれる前に言っておかにかんことがある。

『グイッ！』

あのキズのヤツ・・・まっ顔面がグシャグシャになってるからキズも何もあつたもんじゃねエけど、を引き寄せ。

「いいか・・・ここにいるダチらも、学校にいるダチらも、家にいるダチも、俺に回りにいるダチは・・・俺の大切な身内なんだ・・・その身内に手エ出してみる・・・次は・・・ない・・・確実に殺す・・・わあつたか？」

「アツ・・・アガ・・・出・・・出・・・ざない・・・出ざない・・・ゆるひで」

『パッ』

まっこれでよかる。

「つつわけで保健さんもう大丈夫みてエだぞ」

「凄い変わりようね・・・けど・・・うん・・・それだけガクラン君が私達の事を大切に思ってるってことかしらね？」

当然ですとも。

「命だつて惜しかねエ・・・とまでは言わんけど、腕の二、三本くれエなら惜しくもねエくらいにはな？」

流石に命はアレだしな、一回死んでるけど。

「そう言ってくれるのは嬉しいけど・・・もし猿山だったら？」

「髪の毛一本たりともやりたくねエな、潔く逝けと言つ」

何故にエテ山、如きの為に腕をやらにやいかんのだ。

「相変わらず猿山に厳しいなマサ」

当然ですともリコ君よ。

「まっポチポチ・・・帰るか、腹減つたし」

「あつそう言えば今日・・・」

「学校・・・もう終わってるわ」

夕方だからね、そら終わってんだろ、とか思いつつ一旦は学校に戻ることに、荷物があるしな。

「西連寺さん・・・古手川さん・・・ごめんなさい危険な目に合わせちゃって」

その帰り際、保健さんが唯と春菜に謝ってたが。

「いえ・・・別に先生のせいじゃないですし・・・」

「もう二度ごめんですけど・・・マサ君のアレも」

「うん・・・怖いもん」

「確かに怖いですしね」

「ああ・・・アレは怖い」

「怖すぎ」

むむう・・・。

「そうね・・・ガクラン君は、あんな顔より今みたいな・・・まっ  
今も目つきは悪いけど・・・今みたいなのが・・・私は好きよ  
？ ガクラン君！！」

「」「」「！！」「」「」

何故にそんなキミらがそんなリアクション、ララ、唯、ヤミ、リ  
「よ。」

「アハハ・・・御門先生・・・」

「いつ今のって・・・いやまさかな・・・」

いやさ。まさかって何だリトよ。

「ガ克蘭君？」

「アン？」

『チュツ』

「「「「あ~~~~~!!」「」」」

なぬ!?

頬つぺたにキスされた、まっ直接スキューンじゃねえからいいけど。

「フフ・・・お礼よ」

礼って礼を言われるようなごちゃしてねエだけんど・・・。

その後はララが口を尖らせて飛び掛かってきたんで避けまくった。

後、唯とヤミ、リコがブツブツ何やら呟いてたんが微妙にアレだった。

とにかく、全員無事でよかったよかったって事で。

「マサ~~~~チュ~~~~」

「やめれつつつに、直接スキューンはアウツだつつつの!!」

二度目だけんど頼っぺたくらいならいいけどよ。

「フフ・・・大変ね」

原因作った保健さんが言っとなっつつに！！

第四十二話っぽい感じ！（後書き）

後書き

マサ色んな意味で無双でした。

寧ろ、保健さん無双？

そして、脇役キャラに勝手に名前を付けてみました。

一応は……。

チチ揉まれ娘さんは、かんたき神崎 ひより日和

その相方さんが、やまぎし山岸 なおこ直子

です……まあ由来は特にないですけど、かなりテケトー！

次回……次回は……例によって次回です。

それでは次回に。



第四十三話っぽい感じ！（前書き）

前書き

前半はおバカな話・・・後半は・・・マサが悪役ヒールしています。

## 第四十三話っぽい感じ！

「エロ本を買おうと思う」

「ハア！？ ちょっとマサ意味わかんないぞ」

ふむ・・・やはりわからんようだなりト君よ、ならば詳しく説明せねばなるまい。

「ほら、なんちゅうか俺もそこそ良い年だろ？ エッチイ本の一冊や二冊くらいは所持してた方がいんじゃないかね？ と最近思い始めてきたわけよ」

うむ、このまま枯れてると言われ続けるのもアレだしな。

「だからってわざわざ俺に言うことないだろ・・・」

むむっ・・・確かに、リトは所持してなさそうだしな・・・ふむ、この際だ、リトも所持させるべきではないか？ 耐久力だって上がるぞ！ きつと！ うむ、それがよかるう。

「よしリト行くぞ！！」

「ハッ？ どこに！？」

「決まってるべき、エロと言えばエテ山だろ？ どんなエロ本を買うべきかを聞きに行くのだ」

なんせヤツは我がクラスきつてのエロスだからな。

「いや・・・俺はいいって・・・別に」

「ええい、コチャコチャ言つな行くぞ!」

『バツ!』

リトを抱えて、NINJAで教室へ、さてエテ山は・・・うむ、いたな。

「エテ山ア」

「なっなんだよ・・・マサ、何か用か？」

警戒してますな、まあ俺がエテ山に声をかけるってこたアそうそ  
うないからな、大概は指導したり八つ当たりしてるし。

「まあそう警戒するねい、ちいと聞きてエことがあんだわ」

「聞きたいこと？」

「おい、マサ、ホントに聞く気がよ？」

当然じゃい、クルマとマサさんは急には止まらるのでござえます  
よ。

「マサマサが猿山に声かけるって珍しいね？」

「うんうん」

珍しい光景に里沙と未央が興味をそそられたようですな・・・ふむ・・・里沙と未央か・・・この二人も中々にアレだな、特に里沙はしょっちゅう誰かの胸を揉んでるし・・・。

「里沙と未央にも聞いてみつか？」

「バカかマサ！！ 普通そついうこと女の子に聞かないからッ！！」

リトに怒られた残念、まあ確かに言われてみりゃそつだわな。

「つうわけで里沙未央よ悪いがちと席を外してくんろ？」

「え~~~~何で？」

「気になるじゃん？」

渋ってますな、がしかし。

「女の子に聞くような内容じゃねエからな」

「ふ~~~~ん、怪しいな~~~~？ もしかしてエツチな内容とか？」

「アハハ！！ 里沙マサマサだよ〜ないない！」

里沙め中々に鋭いな。

「ブツ！！ マサどうすんだよ感づかれてんじゃん、っていうか完

全に俺も巻き込まれてんじゃん!!」

小声で叫ぶとは……リト器用ですな。

まあ感づかれたならば仕方あるめえ、未央は里沙の考えに手を横に振ってはいるが、どうせなら巻き込もう。

「エテ山にな、どんなエロ本を買うべきか聞こうと思ってな？」

「マサアア言うか!! 普通ホントに言うかッ!!」

リト君、大絶叫、うむ実にいい感じ。

「えっ……マジでマサマサ？」

「うむ、マジじゃマサさんもそこそこ良い年だからね、一、二冊くれえはな？」

「って言うかなんでそれを俺に聞くんだよ……」

エテ山よ。

「オマエの9割はエロスで出来てんだろぅが、だからだ!! エロスの事ならエテ山に聞けとの俺の何か指示を出したからな」

何かは例によって宇宙意思的な物ね。

「ふん……マサマサも色を知る年頃か……うんうん、よしッ!

! 私に任せなさいマサマサ!! 私がビシッと指導して上げるよ

!!」

ほう、里沙か・・・当初の予定ならエテ山に聞く予定だったが・・・  
・里沙も中々に頼もしいな。

「では頼むぞ！！ 里沙君」

「お任せ！！」

グツとサムズしあう俺と里沙、その横で。

「ダメだ・・・ホント、ダメだコイツらなんでこうなってんだ・・・」

「里沙も走り出したら止まらないからね」

リトと未央がため息をついているが。

「着いて来なさいマサマサ！！」

「うっす！！」

気にせず教室を飛び出したのであります、そんな俺達を慌てて  
追い掛けるリトと未央、そしてエテ山。

・  
・  
・  
・

「さてと・・・まずはステップ1『エッチイ本をゲットせよ！』を

行く予定なのだがどうだろう里沙教官？」

「それも中々に捨て難いけど、まずはココー!!」

教室を飛び出し里沙の案内で来た場所は……。

「テニスコート？ 教官!! 何故にテニスコートなのでありますか？ 意味がわからなくてごぜえます!!」

「いいからいいから」

はて……テニスコートにエロスは関係あんのか。

「里沙が考えてる事は何となくわかるけどね……っていうか私達、部活なんだけど？」

「未央こんな面白そうな事を前にして部活なんて言ってる場合じゃないって!!」

「確かにそうだけどね」

あつ言い忘れてたけど今は放課後ね、更に言うとララと恭子、リコは買い物に、唯は委員会、ルンはアイドル稼業、ヤミは美柑と約束があるらしい。

「あつでも一応、私達もウェアに着替えよつか？」

「うん、そうだね、じゃ着替えてくるから待っててね」

むむ、コチャコチャ考えてる間に里沙未央の二人は部屋に入っ  
ていきなすった。

それと入れ替わるように。

「えっアレ？ リト君、マサ君それに猿山君まで・・・どうしたの  
？ なんか珍しい組み合わせだね？」

テニスウェア姿の春菜登場。

「えっ・・・あつ春菜ちゃん、えっとちよつとマサが」

まあ流石に濁すわな。

「フツ・・・この度、一念発起してな・・・まあ俺らのことは気に  
せずに練習に励みたまえ」

「うっ・・・うん、なんか関わったらイヤな予感がするし・・・」

後退りしながらその場を離れる春菜君、つつかイヤ予感って何さ  
イヤな予感って、まあいいけどね。

「「おまつたせ〜」」

おつ里沙未央テニスウェアバージョンの登場、同時にチラホラと  
他の子達も・・・むっ日和と直子もテニス部らしいな、ピコピコ手  
を振ってるし。

とりあえず俺も軽く手を上げといた。



「さて・・・マサマサ何か感じない？」

むっ里沙よ何かって・・・ふむ・・・。

「そこだッ!！」

『ヒュッ!！」』

落ちてたテニスボールを投擲。

「アウチ!！」

『ドサッ!！」』

はい、気配の主はお馴染み。

「校長かよッ!！」

カメラ片手の校長（変態）でした。

「まああの校長のことは置いてっと・・・マサマサ、そういうことじゃなくてさ・・・うん、ほらチラッ」

ピラッと自分のスカートを軽く捲くる里沙・・・ええい。

「指ぐ」

「はいストップ!！」 マサマサ！ コレはエロスの第一歩だよ？  
大体コレはスコートだし見せても大丈夫なパンツなんだから一々指

導してたらイカンですよ」

むむ・・・なるほど・・・チラツとリトとエテ山の方をしてみる、リト真つ赤、エテ山なんかハアハアと興奮中、エテ山に指導の血が騒いだが・・・。

「猿山はちよくとキツイけどマサマサの反応もダメ、結城は・・・うっん反応ありすぎだね」

今回は我慢した方がよいらしい。

「で・・・マサマサ、どう？ 興奮してこない？ ほら？ ほら？」

ピラッピラツとスカートを捲くる里沙・・・ふむ。

「全然・・・寧ろなんつうか・・・指導の血が・・・」

「こりゃダメだ、猿山なんてヤバイくらいに興奮してるのに、結城は・・・電源落ちてかけてるね」

むむう・・・エロスへの道は厳しいでござる。

「里沙くっくっやっぱマサマサ、無理だっくっくっだっくっくっマサマサだもん」

クツ・・・諦めモードに入りやがりましたな未央め・・・しかし、しかくっくし、漢、政成。

「ここで引いてたまるかアアア!!」

「よし!! よく言ったマサマサならば次よッ!!」  
うむ。

「マサマサ、何でもこう無駄に全力なんだろうね、ほら結城、起きろ  
後、猿山、余りハアハアしないでくんないキモイから」

毒舌つぶりが半端ねえな未央よ、まあ確かにエテ山かなりアレだ  
けど、しかしまだまだ我慢。

「して里沙よ次とはなんぞや？」

指導の血を抑え込みつつ里沙に問う、なんか目的からドンドン、  
ズレてる気がするが、そこはスルーで。

「チラリズムが効果は薄いみたいだから、うん、日和ちょっと来て  
~~~~」

里沙に呼ばれてトテトテと近づく日和君、一緒に直子もついて来  
とります。

「日和ッ!!」

案の定、近付いて来た日和君の胸をコレでもかってほど揉みはじ  
めやがる里沙。

「ちょ……里沙……やめ……アン」

「ふふ〜ん、日和〜〜また大きくなつたね〜〜」

流石はチチ揉まれ娘だな、揉まれっぷりが様になつとるわい．．．  
ってイカンがな、直子も止めるみたいな顔しよるし。

「里沙！！ 何やってんの母さん里沙をそんな子に育てた覚えはありませんか！！」

「だ〜か〜ら〜、そこでオカンになつちゃダメだつてば〜」

なぬ．．．イカンのか．．．なれば。

「頑固親父も無しね？」

未央に先回りされた．．．クツならばどうすればよかとやる？  
とか考えてる間にも、未央が日和のスカートの部分にツツ〜と手を伸ばし始めやがりました。

「日和はおっぱいだけじゃなくてコッチもいいもの持ってるからね〜」

「み．．．お．．．あつ．．．ン．．．ヤバイって．．．だ．．．  
男子の前．．．ウン．．．」

これは流石にマズイのでは？ いくらマサさんとはいえマズイつてのはわかるツスよ、リトは電源さつきからOFFってるし、エテ山なんでヤベエくれの顔だし。

「止めるべき？」

「お願いマサナリ君、日和あのままじゃ変な趣味に目覚めちゃうよ」  
「確かにな……ではでは……。」

「指導ツツツ!!」

『ガスッ! ガスッ!』

ダブルゲンコッ!! うむ……すんげえスッキリする。

「痛ったいな~~~~もっ~~~~」

「指導は無しって言ったじゃん」

「ええ〜いブツクサ言うな!! 流石にやり過ぎじゃい!!」

このまま日和が変な趣味に目覚めたらどうする……。

「ハア……ハア……チラッ……チラッ……」

イカン……手遅れかも知らん……やたらと潤んだ目つきで俺にスコートをチラチラと見せ始めてるし。

「どうすんべ~~~~コレ」

「アハハ……とりあえず日和、あっちに連れてくよ……明日になつたらきつと直る……といいな~~~~」

今だにスコートをチラチラしてる日和をズルズルと引き攀った顔

で引きずって行く直子でありました、頑張れ直子！！ キミなら日和を戻せるはずだ。

「日和〜シツカリしなさいって、なんでマサナリ君にアンスコ見せてんのー！！」

「直子〜わかってないな〜あのリアクションが薄いのが興奮するんじゃない、ハアハア・・・」

「マニアック過ぎるし！！ 元に戻って、お願い〜」

多分。

「う〜ん、マサマサを興奮させるつもりが日和の扉開いちゃったね〜」

「才能があつたんじゃない？」

そんな才能はいらんと思う、まあとりあえずは・・・。

「スマン日和」

謝つと〜じ。

『寧ろお礼を言いたいよ〜』

なんかそんな日和の声が聞こえた気がするが全力でスルー。

「じゃあ次はどうしようっか？」

日和の尊い犠牲を無駄にせんためにもまだ俺は歩む事を止めることは出来んのだ。

「っていつか結城、どうしよっか？」

むむ・・・リトか・・・確かにこの先、リトにはかなり辛い戦いになりそうだ、クツ・・・仕方あるまい。

「春菜~~~~」

チヨイチヨイツと春菜を手招き。

「うつ・・・な・・・何・・・かな？ マサ君、っていつか巻き込まないでね、お願いだから巻き込まないでね？」

めっさ警戒されとるし、まあ気持ちはわからんでもねえが。

「スマンがリトの事を頼みたい、この先の戦い・・・リトにはとても耐えられそうにないのだ・・・頼む春菜!!」

「えっ・・・あっうん・・・えつとリト君を見てればいいのかな？」

「有り体に言えばな、まあ練習しながらでいいから気にかけてやってくれ、リトはそのベンチの方に寝かしとくから」

とリトを春菜に託し。

「エテ山は」

「ぐふふ・・・こんな美味しいイベント逃すかっての」

流石は9割の男だな、非常に指導したいがまだまだ我慢。

「とりあえずテニスコートから離れよっか？ そろそろ佐清が来るころだし？」

「だね」

ン、場所移動をするらしいな。

「つか佐清って誰よ？」

「テニス部の顧問のイケメン野郎、女子に大人気のな！！」

ふん。

「まあ猿山に比べたら・・・っていうか比べるまでもないっか？  
確かにイケメンだし、マサマサは・・・イケメンって感じじゃないし」

「まっそれだけだよね、私は苦手だし」

「あつ未央も？ 私もだなくなんか物足りないんだよね」

ほうほう、里沙未央の二人は苦手らしいな、はて・・・どんなヤツじゃろ？ 逆に気になるな。

「っとグズグズしてたら佐清が来ちゃ」

「鞆岡、沢田、何をやってるんだい？」



「あちゃ〜来ちゃったよ」

しまったって顔の未央、ふむ、この声をかけて来たヤツが佐清つつやつらしいな、つかコイツ見たことあんな、確か体育教師だったか？ ちゆうか……。

「俺らン事、完全にスルーしたあのエセ爽やか」

「アイツ男には大概あんな感じだからな……ケツ！！」

ほう、なるほどね〜これなら、まだエテ山の方がマシだわ。

「ン……そこにいるのは……鬼島と猿山か、今は部活中だぞ部外者は入ってこないようにしなさい」

今頃お気づきですかい、つつかコイツの目ムカつくわ……。

「私達が呼んだんですけど〜」

「う〜ん……そうは言ってもね……特に……」

チツ……その目……覚えがあるわ……中坊ん時によくその目で見られてたからよ。

「殴っちゃおっかな……」

「ダメだってマサマサ、よくて停学、最悪、退学になっちゃうって」

小声で呟いたのが聞こえたのか未央に止められる、しかし。

「俺、しょっちゅう校長（変態）を、『そお〜い』してんだけど  
」？」

「アレは別枠だって」

確かに別枠ですな。

「まあとにかく部外者は早く出るように問題行動を起こされたら困  
るからね？」

『ピキピキッ・・・』

ヤバイ・・・マジ、ヤバイ・・・ホント、ヤバイ。

「殴っちゃう殴っちゃうよ〜〜」

「我慢してマサマサはやれば出来る子だから、ねっ？ ねっ？」

グウ・・・しかしだな・・・。

「鬼島、その目つきは何だ？」

「生れつき目つきが悪いもんで」

よし、耐えてる、まだ耐えてる、我慢強いぞ俺。

「そうかいボクを睨んでるように見えたからね？」

睨んどんじゃボケエエ本気でメンチきってやるつかゴラァァー！！

ってイカン落ち着け・・・あくまで紳士にいらおう紳士に。

「か・・・かか勘違させてスンマセンね・・・以後、気いつけますわ・・・」

ふう〜・・・凄いぞ俺、偉いぞ俺。

「フツ・・・」

何・・・あの勝ち誇った顔・・・えっ俺・・・負け・・・いやさ、落ち着け、負けではない、敗北は己の中にあると思え。

「フウ・・・フウ・・・ち・・・ちよこつと失礼しやす」

スタスタと一旦、その場から離れ・・・。

「フンガツ!!」

『ゴスツ!!』

己の額にゲンコツ!!

『クラッ・・・』

自分の拳とは言え流石に効いた・・・膝が揺れるわ・・・。

がコレで少しは平静を保てる、とか思ってたら未央が様子を見にきてくれた。

「スマンね・・・ちよつと額に蜂がいたもんで」

「マサマサ・・・額割れてるし・・・」

『ポタポタ』

むっ確かになんかポタポタ流れてんなと思ったら血だったか・・・

「問題ねエ・・・寧ろ昇つたを血抜くの丁度いい」

どうせ直ぐに止まるしな。

うむ、何とかコレでやり過ごせ・・・。

「初岡君、あの鬼島が同じクラスなのはわかるけど、余り彼みたいな子と付き合わない方がいいぞ、学校きつての問題児なんだから・・・さっ練習しないとね？」

里沙の腰に手を伸ばす、エセ野郎・・・アカン・・・もうアレだ・・・。

「いいよな、コレは殴ってもいいよな、寧ろ殴るべきだよな」

「ダメ！！ 確かにムカつくけど我慢してよホントに退学になっちゃうから！！」

グギギギ・・・しかし既に限界をかなり通り越えてんですけど・・・もうヤベエですこどオオオ。  
「ったく、だからアイツ嫌いなんだよ露骨過ぎだろ？」

エテ山か・・・八つ当たり・・・いやイカン、ここで八つ当たり

したら完全に負けだ。

「ホントどれだけ危機感ないんだろうね佐清のヤツ・・・すっごい細いロープ渡ってるって気付いてないのかな？ 里沙がイヤな顔してるのも気付いてないし」

確かに里沙、マジ勘弁な顔して・・・ハッ！！ コレだ！！

（里沙よ・・・作戦Sだッ！！）

チラッとこつちを見た里沙にアイコンタクト。

（オツケー！！ 任せて、まったくウチのマサマサを学校の癌あつかいした罪は重いよ）

嬉しいことを言うってくれんな、マサさんちょっとキュンってなっただろ。

「マサマサ、里沙、何するつもり、なんか視線で会話してたけど？」

「まあ見てろ」

行け里沙よッ！！

「キャッ！！ 先生、今、お尻触った~~~~~！！」

「なっ！？ 違う触ってない！！」

嘘つけ・・・俺は気付いてたぞ、腰に回してた手が段々と下に下がってっただのをな、もう殆ど尻に手が届いてたしな！！

だからあなたが間違えではない。

「マサマサ~~~~!!」

「おっツ!!」

さて行くか。

「天が呼ぶ地が呼ぶ・・・敵を倒せと俺を呼ぶ!!」

前口上を入れた上で。

『ダンツ!!』

跳躍しクルクルと回転、本来なら作業着を付けたいとこだが今はないんで『S・G』腕章を腕に装着。

『スタツ!!』

里沙とエセ野郎の前に着地し。

「学校警備員、鬼島 政成・・・推参!!」

バーンという効果音が欲しいとこだが今は妥協。

「そののエセ爽やか野郎!! 我が友に手を出した罪は重いぞ、大人しく縛につけエエい!!」

ビツとエセ野郎を指差しながら宣言。

「手を出すつて・・・鬼島・・・ボクは無実だし遊びなら他の場所  
でやってくれないか、ボクはコレから彼女達に指導をしないとけ  
ないんだ」

「ええ〜い黙らっしやい！ バレてねエと思ったら大間違いだぞこ  
の野郎！！ テメエの手が里沙の尻に伸びてたの見てんだよッ！！」

「うん私も気付いてたし」

「私もそう見えた」

「俺も」

「どうやら里沙はもちろんの事、未央にエテ山も気付いてたらしい  
な。」

「どうでい、もはや言い逃れは出来んぞ！..」

縛につきやがれてんだ、その過程で一、二発殴らせる。

「何々」

「ちょっと何があったの？」

「佐清先生が里沙のお尻を触ったんだって」

「え〜〜嘘〜〜」

この騒ぎのせいか、テニス部のヤツらが集まって来たようだな、

春菜はリトの看病してるけど、おっコッチ見たな、ふむ、そのままリトを見ててくれといった視線を送っとく。

「はいはい、全く・・・キミ達ね、ボクがそんな事をするわけないじゃないか・・・キミ達ならわかるだろ？」

「・・・そうですよね」

なぬ・・・マジか・・・。

「と言うわけだよ、ボクはキミと違ってこうして信用されてるんだ、初岡君も、沢田君も少しは彼との付き合いを考えなさい、鬼島も余り二人に近付くな！！　コレ以上二人をたぶらかせたらボクが許さないぞ！！」

「・・・キヤーーーー佐清先生」カッコイ」

えっ・・・マジか・・・よっ予想外だぞ。

「何故に・・・」

「佐清、見たはいいからね、それに演出が上手いし・・・見る目ない子はコロツと騙されるんだよね」

「うん、ホント、イヤ・・・なんでこう騙されちゃうのかな」

「男は顔なんだよチクシヨ」

クツ・・・エテ山が言う通りやも知らんが・・・非常にムカつく。

「フツ・・・わかったかい？　わかったならさっさと出て行くんだ、



ボクに言った事は聞かなかった事にするからな」

『キラッ』

「『『キヤーー佐清先生優しい』』」

野郎オオオ。

「もう・・・いいよな・・・うん、俺、頑張った、もういいよな、うん・・・」

十分耐えたツスよ・・・うん。

「テムエゴリアアア！その白く輝く歯を総入れ歯にしたんぞゴリアアア」

耐えよと思ったけど無理でした、限界ってあるよな我慢にもよ。

「マサマサ！ 落ち着いてダメだつてば〜」

「そつだよマサマサ〜深呼吸〜深呼吸〜」

「知るかアアア！！ あのエセ野郎のご自慢のツラア整形したらアアア！！」

麻醉無しの拳で！！

「フン・・・なんでもかんでも暴力で解決、まるでチンピラじゃないか、なんで昶岡君や沢田君がキミなんかと仲良くしてるのか・・・」

「

むがアアア!! 整形してやるつもりだったが、手エ出したら完全に負けになっちまう……どうする……どうする……。

「マサナリ君、コレ……コレでギャフンと言わしちゃいなよ?」

むっ……直子?

「オマエさんは向こうじゃねえんだな」

「当たり前じゃんマサナリ君と同じクラスの子に佐清のファンはいないし?」

むっ……確かに言われてみりやエセ野郎にキヤーキヤー言ってるんなあ知らんヤツらばっかだな。

「そうだよ、あの目で見られてても興奮しないよ」

日和はスルーしつつ、直子が渡してきた物……テニスのラケットを受け取る。

「コレを凶器にしるって事……じゃねえよな?」

「マサマサ、気持ちはわかるけど違うっしょ? つまり」

「テニスで佐清のヤツを凹ませちゃえってこと!」

やはりか……ふむ……しかし。

「ヤツが勝負に乗るか?」

「簡単簡単!! まあ見てて」

トテテとエセ野郎のところに走る里沙。

「佐清先生くくマサマサがくテニスしたいんだって」

里沙よ・・・すんげえ演技くせえぞ、つかアホな子みたいだぞ。

「うん部外者にコートを使わせるわけにはいかないからね?」

チツ・・・言ってることア正論だが、やっぱしムカつく。

「私く佐清先生のカツコイイとこ見たいなく先生なら楽勝だろっし  
く」

おっい、すんげえ棒読みだぞくそしてやっぱしアホの子みてエだ  
ぞく。

「みんなも見たいよね?」

おつ、エセ野郎にキヤーキヤー言ってたヤツらに上手く振りやが  
つたな。

「見たくくい」

「あんな不良みたいなヤツやつつけちゃえく」

「佐清先生頑張っくく」

真ん中のヤツ激しくムカつく・・・コイツもガチコンいわしたるか・・・女の子だろうがガチコンいく時アガチコンいくぞ。

「そうかい？ 仕方ないな」鬼島、ボクが相手をしてあげるよ、勝負が終わったら出ていくんだぞ」

おやおや・・・。

「バカがアツサリ網に掛かったな」

「だな・・・マサ、何時もは敵対してるけど今回は全力で応援するからな!!」

ふむ・・・。

「オマエの応援なんざいらん・・・と言いたいところだが、あのエセ野郎に比べりゃエテ山の数が倍マシだ・・・任せろ、エセ野郎キヤン言わしてやんよ!!」

グツとエテ山にサムズ。

「あ~~~~気持ち悪~~~~舌が火傷するかと思ったよ、マサマサ、やつちやって!!」

「里沙もご苦労・・・今度なんか奢るわ」

「いってマサマサには美味しいお菓子作って貰ってるし、私もムカついてたしね」

ニツと笑う里沙・・・かっけえじゃねえか。

「マサマサGO～～!!」

任せろ未央。

「マサナリ君・・・景気づけだよ、チラッ!」

日和はスルーで。

「アーン・・・やっぱりいい・・・ハアハアハア」

「ある意味、無敵ね日和・・・とりあえず日和は私に任せて、頑張  
ってねマサナリ君!!」

日和のアレっぷりはやっぱり全力でスルーしつつ直子の言葉にグ  
ッとサムズ。

チラッと春菜の方を見たら、春菜もちよこつと遠慮気味にサムズ  
してくれました。

まあ目で。

(やり過ぎはダメだよ?)

と訴えてはいるけど、そこはまあ善処するってことで。

直子に渡されたラケットで肩を叩きながらエセ野郎の待つコート  
へ歩く。

「さて鬼島、キミはテニスをしたことがあるのかい？ なければキ  
ミからサーブしていいよ」

ふむ・・・テニスカ・・・言われみりや・・・。

「ねえなア・・・つかルールも詳しくは知らんしな・・・けどサーブはいらん」

なんか施してみてえでムカつくしな。

「やれやれ気が強いね・・・折角ボクがサーブを譲ってあげたのに」

「バカの施しは受けねエ主義なんだよ」

特にオマエみてえなタイプのヤツからのな。

「何アイツ～～佐清先生に向かってあの言い草」

「やっぱり不良よ～～っていうかアイツの方がよっぽどバカっぽいわ  
「よ」

「だね～～」

イラッ・・・やっぱりし真ん中のヤツ、ムカつく。

「フン・・・やっぱりチンピラだな・・・鬼島、スポーツは喧嘩のようにはいかないよ、それをボクが教えてあげよう」

『バツ』

エセ野郎がそう言いながら得意気な顔でボールをトス。

「フツー!!」

『スパーン!!』

それなりの速さで飛んでくるボール・・・まあ俺から言わしゃ、  
すつとろ過ぎる、そのボールを。

「ラァー!!」

『ズバンツ!!』

ラケットで打つ・・・コートに向かってじゃなく。

『ギューン・・・』

「えっ!!」

『ヒュン・・・ギョルルルツ!!』

あのムカつく真ん中のヤツの横ギリギリをな!!

「悪いな手元狂った」

ニヤリと悪役笑い。

「あう・・・あう・・・」

カツカツカ・・・ビビってんなア、いやあちよつとスツキリ。

「うわあ～マサマサ容赦ないね」

「当たってないんだからいいでしょ？」

「そうだね〜あの子も、ちょっと言い過ぎだしね〜」

上から里沙、未央、直子です。

「アイツ何〜〜最悪〜〜」

「ホントホント」

ハッ！！オマエらにいくら嫌われようが痛くも痒くもねえわ、つうわけで。

「また手元が狂うかもな〜」

又タリと笑いながら悪セリフ。

『シーン・・・』

よしよし、静かになったな。

「悪役キル似合うなマサのヤツ」

「うんうんハマってるね、見てて気持ちいいけど  
そいつぁどうもっど・・・させて・・・。」

「続きだな？」

「クツ・・・チンピラめ」



はいはい、何とでもいえ、即効で凹にしてやんよ。

・ ・ ・ ・

はい終了！結果はむろん。

「俺の勝ちってことで・・・まっ聞こえてねえわな？」

最後にエセ野郎の横を狙ってクレーター作ってやったら気絶しやがったしな。

クレーター作る直前に、エセ野郎が、デジャヴがどうたらとか言ってたが、ってしてもた・・・アレ直すの俺やん。

ってわけを着替えてきてから修復作業を熟しました。

で、その後は春菜にちいとばっかし怒られた、けど反省も後悔もしてねえです。

後、一部の女子に盛大に敵視されもうしたが、そこは気にせずスルー。

ンでリトが目覚めたんで本日は帰宅することに。

ってそういや・・・俺、なんか目的があったような・・・まっいいさね。

・ ・ ・ ・

翌日・・・。

『鬼島 政成・・・三日間の停学処分』

テニスコートでのアレが伝わったらしい、つうかエセ野郎とあのアマ達のたれ込み、みてえだな・・・。

「まっしやあねえやな・・・停学久ツクだなオイ」

「マサ君・・・女の子に暴力振るってたって聞いたけど・・・ホントはどうなの？」

「唯か・・・あながち間違っつてねえよ、まっ詳しくは里沙達に聞いてくれや、じゃな」

「あつちよつと・・・もう・・・」

ヒラヒラと手を振って教室を後にしました。

さて・・・停学中は何すつかね〜。

第四十三話っぽい感じ！（後書き）

後書き

マサ停学！！

まあ実際はコレくらいで停学になるかは謎ですが停学処分になりました。

「ちょっと悪役ヒールし過ぎましたしね。

まあ次回には多分、停学は解けてますけど。

というわけで次回！！ お暇なればまたヨロシクお願いします。

## 第四十四話っぽい感じ！（前書き）

前書き

久々にあのキャラ登場、更にはあの二人もチョロっと顔見せです。

## 第四十四話っぽい感じ！

停学初日、帰宅後、縁側の方でごろりと横になりつつダラダラと過ごす。

『ギヤウ?』

セリーは何故に俺がこの時間帯にいるのか気になるみてえですな。

「停学くらったからな、まあ簡単に言やあ学校来ないで家で反省してろ〜ってことな」

『ギヤウ!?!』

「全然、全くもって反省なんざしてねえよ?」

ええ、まあ停学自体はしゃあねえたあ思ってるが、反省も後悔もしてねえですからな。

『ギヤウ、ギヤウ?』

「まあ停学は慣れてっからな、彩南でくらったんは初だけどな?」

『ギヤウ?』

「ナツハハハ!!! 中坊時代と前ン学校じゃ停学キングだったからな」

まあ自慢するようないつちやねえけどな。

『ギヤウ、ギヤウ？』

「ハッキリ言うね、セリー君は、まあ確かにそうなんだけどな？」

特に中二の後半辺りまではな、先生どころか学校全体の嫌われ者だったかな」

『ギヤウツ！！ ギヤウツ！！』

「セリーは優しい子だね、マサさん嬉しくて泣けてくらあ、まっ俺ンダチら皆、優しいんだけどな、いやはやマサさんは幸せ者ですわい」

ホント良いヤツらばっかだしな、つと。

「ぼちぼち昼メシだな、弁当食うかね、セリーはメシ温めつか？」

『ギヤウ』

「おうツ！ ちいと待ってる」

とセリーのメシを温めてからのんびりと弁当を食いました、たまにはこういづのもいいやな。

と、思つたああ思つんだが・・・。

「やっぱりヒマだわなあ」

まあセリーがいるから大分マシなだけんど・・・ヒムはヒム。

今日から三日だよな・・・ふむ・・・おっ！！　そだ。

『ピ・ポ・パ』

中々に良い事を思いついたんで、電話を掛ける、相手は・・・。

『マサナリ様！！　どうなされましたか！　もしやララ様との結婚を』

「違いからな？　ザステイン、オマエ定期的に、とつつあんぼうやと連絡取ってるつったよな」

『はい、そうですが、それが・・・ハッ！！　やはりララ様』

「だから違いつうに、とりあえず、とつつあんぼうやに用があつてな、で、連絡取りたいんだわ、今ザステインは才培のオツチャンのどこか？」

『いえ、今日はアパートにあります』

「そか、じゃあ向かうわ」

『はっはい』

携帯を切り、着替えやらなんやらをスポーツバックに詰め込み準備を済ませ、ザステインの住んでるアパートに向かうことに、停学中とかはこの際スルーで。

っとその前に。

『三日程、留守にする マサより』

と書き置き、でセリーにも。

「じゃ俺ア出かけてくらあ三日くらいしたら帰える予定だから、そう言っただけや、留守頼んだぜい？」

『ギャウー!』

伝言を頼んで、ザステインの住んでるアパートへ。

特にトラブルもなく、あっちゅう間に到着……。

はい、嘘です、二、三回程、絡まれたり、更にはしつけえナンパ・・つうかアウト気味なそれに困ってたっぽい人がいたんで、絡んでたヤツをぶっ飛ばしたりとかしてました。

・ ． ． ．  
そついやあのナンパされてたン春菜に似てたような気がすつが・  
・ ． ． ．  
まあいいさね。

まあそんなこんながありがたながらも到着し。

ピンポン鳴らしたら速攻でザステインが出てきた、部下の黒服ン二人は今日はいねえみてえですな。

まあそれは置いてつと、早速だけんど、とつっあんぼつや、と繋ぎを取ってもらつ。

連絡する方法はテレビ電話的な通信機を使うらしい、ザステイン



いわく、ララも持つてるとか言ってた。

そうこう考えてる間にも、とつつあんぼつやの顔が映る。

「よお久々だなあ」

『そつだな息子よ』

「息子じゃねえつうに」

『何れはそうなるじゃないかハツハツハ！！』

こういう所が実にララの親父だと思う、まあメンドイから今はスルーして。

「とつつあんぼつやさあ、『ソルゲム』つうクソ共ン事、知ってんべ？」

『フン、あの目障りな犯罪組織マフィアか・・・それがどうした？』

「ああ実はちいと前になカクカクシカジカって事があつたんだわ・  
・まあ今回のヤツらは潰しといたけどよ、後からまた似たようなボケ共が来られてもうぜえからよ・・いっそ今んうち、キツチリ潰しとこかなあつてな？」

『なぬ！？ 本気がマサナリ？』

「おう！！ 停学くらって三日程ヒマだしな？ まっ半分くれえはヒマ潰しだ」

ってなんかコレ思考がクソジジイっぽいような・・・いやさスル  
ーで。

『ククク・・・アハハハハ！！ ヒマ潰しかア、ハハハ！！ ヒマ  
潰しに『ソルゲム』を潰すか・・・いいぞオ流石は我が息子だ、ワ  
ハハハハ！！』

なんかツボってるな、つうか息子じゃねえからなつと。

「でだ・・・連絡したんは他でもねえ」

『フツ・・・皆まで言うな・・・わかってる、最近、体も鈍って  
いた所だ一暴れするとするか？』

話せるねえ。

『じゃあ今から迎えに行くから待っているフハハ、この銀河に我ら  
親子の力を』

『プツン』

なんか言ってたが途中で切った。

「つうわけで、ちよっくら暴れてくつから、俺が留守の間、なんか  
あつたら頼んだぜザスティン？」

「私もお供したいのですが・・・そうおっしゃられるのであれば、  
マサナリ様の留守の間はこのザスティンにお任せ下さい！！」

うむうむ。

『バンツ！！』

「行くぞ息子よツ！！」

「早ツ！！　つか息子じゃねえつうに！！」

ツッコミ入れつつも、とつつあんぼつや、の宇宙船で俺、宇宙デビュー。

宇宙船の窓から地球を見つつ。

「ホントに青いんでやんの？」

思いの他、青い地球にビックリですわ、ってそーいや。

「宇宙って無重力なんじゃねエの？」

「大概の宇宙船には重力をコントロールする装置くらいはついてるぞ、地球の技術ではそんな装置はまだ無いようだがな」

ほう、流石は宇宙科学だな、ン？　ってこたあ、某・龍球のアレみたく重力何倍みてえな修業部屋みたいんがあんのかね？　あつたら、やってみてえな、どれ聞いてみよ。

つつわけで、とつつあんぼつやに聞いてみたら、やっぱし、あるらしい、それどころか不思議リストバンド（霊界探偵ヨロシクなアレみたいなん）まだあるんだと。

かなり興味がそそられたんで。

「くれー！！」

「ない」

なかった・・・正確には今は持ってないんだと、チクソウ・・・。

「とうかマサナリ、オマエは十分強いだろ、俺より強いんだ、つまり銀河一だぞ、それ以上強くなってどうする？」

「フツ・・・何れ、クソジジイをぶっ飛ばす為にな？ 言いたかねえがこんくれえじゃ手も足も・・・出るこたあ出るが話にもならんのよ」

「ブツ！？ 何だと！？ マジか？」

「マジ、そうね・・・俺と、とつつあんぼつやが一緒に掛かったとしても片手であしらわれんじゃね？」

更に言えば、肋骨は確実に持ってかれんだろうし、腕やら顎やらも持ってかれそうだな。

「俺の宇宙ランク下がらっばなしだな」

「気にすんなアレは別枠だかな」

バケモノと書いて、ジジイと読むくれえだからな。

「オマエも似たようなもんだろ」

呆れ顔でツッコまれました、まあ確かにバグはバグなんだけどね？ アレの前じゃ霞みますわ。

っと、ジジイの話題はこんくねえにして。

「で、ソルゲムのヤサは何処にあつか知ってんの？」

「それに関しては・・・そろそろ情報が入ってくるはずだが」

『ブオン』

『お父様、ソルゲムの居場所を突き止めました』

おっ？

「そうかよくやったぞモモ、データを転送しておいてくれ」

『はい』

ふむ、画面に映ってんのはララに似てる女の子、で、とっつぁん  
ぼうやの事を、お父様・・・。

「ララの姉妹か？」

「ララの妹だ、丁度いい、モモ、こいつが何れオマエの夫になる」

「勝手に決めんなっつうに」

「いいだろう、三人纏めて面倒見てもらっつもりなんだぞ」

知らんがな。

「ああ〜モモだったか？ とっつぁんぼうやの戯言はスルーしてい  
いからな」

『えつとアナタは・・・もしかしてマサナリさんですか?』

おう? どうやら俺ン事を知ってるっぽい。

「正解、鬼島 政成ってんだヨロシクな」

『あつ、私はデビルーク第3王女、モモ・ベリア・デビルークです、よろしくお願ひします、あつちよつと待ってて下さいね? ナナくナナく』

はて? ナナ? ってモモ第3王女つってたな、ララが第1として・・・もう一人ララの妹がいるってことか。

『ンだよモモく?』

『ほら、あの人がマサナリさんですよ』

『何ツ!! 父上を倒したっていうアイツか・・・うわっ目つき悪ッ!!--』

初っ端から失礼なやつちな、つうか。

「オマエもな」

『何だとくくく私のどこが目つき悪いんだくくく!!!--』

「鏡を見る、そこに答えはあるからな」

『腹立つくくくアイツ腹立つくくく』

うむうむ、いやぁコイツからかいがあるな。

「マサナリ、ナナで遊ぶな」

「面白かったもんでついつい」

隙を見てからかおうと心に決めた。

『ナナ、ちゃんと自己紹介しないと』

『あぁ〜〜わかったよ、デビルーク星、第2王女、ナナ・アスタ・デビルーク』

ほう、第2・・・ってこたあ次女ってことだよな。

『私達、双子なんです』

双子とな・・・ふむ、そのわりには・・・モモとナナの胸を見比べる。

『んだよ、その目は・・・』

「乳製品を沢山取れ」

『私がペタンコって言いたいのかアアア!!』

「いんや、寧ろ、ペタンコ?」

『小つさい』ッ』をつけんなアアア! 余計小さく聞こえんだろオ

オオ!!』

ああ・・・スツゴい楽しい。

「マサナリ、オマエSだな」

オフェンス思考だからね。

『クスクス・・・マサナリさん余りナナをからかわないで下さいね、  
ナナ気にしてるんですから』

「うむ、前向きに善処する」

政治家的な発言、まあぶっちゃけ、弄る気満々だけだな。

『姉上はこんなヤツのどこがいいんだか・・・』

『あら、結構ステキな方だと思っけど?』

よせやい照れらあ。

「で、マサナリどっちが好みだ?」

ってオイ、とつつあんぼつや、いきなり意味のわからん質問を・・・  
まあどっちが好みつわれりゃ・・・ふむ。

「ナナ」

『ッ!!... おっおま・・・ちよっ・・・』



「非常にからかいがあるからな」

実に弄りやすいしな。

『そんな理由かよッ！！ やっぱ腹立つアイツ~~~~~!!』

うむうむ、ナナ君、すんげえいい感じ。

「楽しすぎる」

『Sですね〜』

「Sだな〜」

オフェンス思考だからね。

で暫くナナをからかって遊びました、ひそかにモモもナナを弄つてたな、どうやらモモもオフェンス思考。

まあナナがモモに。

『外ヅラがいいんだよな腹黒め・・・』

とか言ったら、おっとり風味だったモモがヤク ヨロシクな感じに豹変し。

『ギチギチギチ』

『だ・れ・が、腹黒いのかしら〜?』

とスリーパーしてました。

「おお〜いナナが顔色が青から白に変わりかけてるから止めれ〜」

『あつ・・・オホホホ・・・すいません、はしたないマネを』

うむ、モモも一癖ある子ですな、まあ面白えけど。

「マサナリ、コレを飲め」

とつつあんぼうやにカプセルを渡された。

「何コレ？」

「オマエ一応地球人だろ、生身で宇宙に放り出されたら・・・どうなんだ？」

生身ねえ・・・ふむ。

「死ぬな多分、流石のマサさんも生身で宇宙遊泳は厳しい気がする」

まあ試してみねえとわからんけど、試すわけにもイカンしな。

「コレを飲んでれば宇宙空間でも死にはせん」

ほう、そいつあまたご都合・・・ゲフンゲフン、便利なこつて。

ゴクリとカプセルを飲む、特に変化はねえけど。

「大丈夫なん？」

「問題ない」

ならよしつと。

「そろそろソルゲムのアジトだ用意はいいか？」

おっ？ 結構早かったな。

『オマエ、ホントに行く気かよ？』

「当然だろ、ダツハハ！！ いやあこういうんも久々だわい、おもつくそ暴れたらア」

『ゴキゴキン』

クビを回しながら指を鳴らす。

『戦う男の背中・・・ステキですね・・・ポッ』

別に背中は見せてねえですが・・・つつか何故に赤くなるモモよ、そしてニヤニヤすんな、とつつあんぼつや。

「じゃ通信を切るぞ」

『父上ケガをしないでくれよな・・・オマエはケガしろ』

『コラッ、ナナそういうこと言わないの、マサナリさんも頑張ってるよ』  
『下さいね』

『ヴォン』

ナナめ……会う機会があったら、めっさ弄くりましてやる。

「さて……じゃあどうするっ？」

「この宇宙船頑丈か？」

「当たり前だ、俺の船だぞ」

ふむ……ならば。

「このままドーン突っ込もうぜい、派手にいこうや派手に」

「クックク……いいなあ……喧嘩は派手にいかないとなあ」

そういつこってすよ。

「突っ込むぞッ！！」

とっつあんぼうやの掛け声でグンツと速度を上げる宇宙船、そのまま速度でソルゲムンヤサ……なんかデカイ……ガンムと  
かでてきそうなコロニーみたいなんの横っ腹に。

『ズガアアアン』

突っ込んだ。

『ビーツー！！…ビーツー！！…ビーツー！！…』

サイレンが鳴り響く。

「さあて開戦だ・・・行くぞ息子よ」

「息子じゃねえつうの、とっつぁんぼっや!」

『ガコン』

宇宙船のハッチが開き、軽口をたたき合いながら飛び出す。

目の前には俺ら（侵入者）を排除しようと出てきた、機械の軍団、前ぶつ飛ばしたヤツらと同じ恰好のグラスアンズ。

『ドンドンドンッ!』

そいつらが持つ銃から光の弾が乱射される。

「フンッ!」

「オラよッ!」

撃たれた弾をとっつぁんぼっやは尻尾で、俺は拳で弾き返し、弾かれた弾が機械軍団やらグラスアンズに命中。

ドサドサと倒れるヤツら・・・。

「も・・・脆ッ・・・」

「普通のヤツらはアレで撃たれたら、ああなるわ」

いやさ、まあそうかも知らんが・・・脆すぎだろ。  
『ジャキッ！！』

銃がダメなら剣ならどうよ？ とばかりに剣を構え斬りかかってきやがるヤツの剣をとっつぁんぼつやが、やはり尻尾で弾き飛ばし、そいつに軽い、押し出す感じの蹴りをくれる。

蹴り出されたヤツは俺の正面に、それをすかさず。

『ゴッ！！』

裏拳。

それを喰らったヤツは壁に激突し、ズルズルと崩れ落ちた。

それを合図にしたように、一斉に襲い掛かってくるソルゲムのアホ共。

1番近い位置にいた機械君のドタマをガシッと引つつかみ。

『ブチンッ！』

収穫！！ クビがもがれた機械君はバチバチと火花を散らし沈黙。  
収穫したクビをぶん投げて何人かをぶっ飛ばす。

『ギューーン！！』

「おっドリル？」

手がドリルの機械君がそのドリルで俺を串刺しにしようと手を振り下ろす、それをガツチリキャッチすつと、ドリル君、己のドリルの回転力で体がバツタバツタと回転しだす。

その回転に巻き込まれてぶっ飛んでくソルゲムのアホ達。

「マサナリ、そいつを何時まで持つてるつもりだ？ バタバタと鬱陶しいぞ」

確かに鬱陶しいツスね、ってなわけで援軍に来たであろうソルゲムのアホ共に投擲。

『ドオーン』

はい撃破。

「手応えねえなあ」

「まあ俺とオマエだからな・・・さて次に行くか？」

ドンドンと襲い掛かってくるソルゲムのヤツらをぶっ飛ばしつつ、ガンガン進む、で一際立派な扉の前。

『ウィーン』

「フツ・・・よくここまで来た」

なんか偉そうな態度が鼻についたんで有無をいわずにポッコボコにしました。

「最後まで言わせてやれよそこは」

知らんがな、ってもしや。

「コイツがボスか？」

顔面がいい感じに整形されたヤツを指差しつつ聞いてみる。

「ふむ・・・どうだろうな？ 影武者の可能性もあるが、ここの警備の具合なども考えてそう考えるが妥当じゃないか？」

はあ・・・コイツが・・・ねえ・・・。

「死ぬ程、盛り上がらねえボス戦だったな」

「いいんじゃないか、どんなに偉そうにしてもザコはザコだ、さて、じゃココを爆破して帰るか」

「ういっい」

なんかアツサリし過ぎな気がすっけど。

とこうしてソルゲムのヤサを潰し、停学一日目は終了・・・つつか一日も経ってねえよ。

「どっしたもんか・・・」

ズドンズドンと爆発してるソルゲムのヤサを背にし宇宙船で呟く。



「何がだ？」

「いやね、まだ一日くれえしか経ってねえべ？ 俺、三日程留守にするって書き置きしてきたんよ？ で直ぐに帰んのもなあ」と

「帰りたくないわけじゃねえんだけど、なんつうか・・・ほら、わかるだろ？ こう微妙に照れる感じってやつ。」

「別に気にすることじゃないだろ」

「まあそう言われりゃそうなんだけどな？」

「つつわけで気にせず帰宅っと。」

地球に着いた頃には辺りはスツカリ夜中になっとりました。

「じゃあな、モモナナの二人にもヨロシクつっといてくれ」

「うむ、中々いい運動になった・・・ではな息子よ」

「せやから息子やないつつうに。」

「とか思いつつ、とつつあんぼつやを見送り家へ。」

『ガチャ』

「はい、ただいま」

「マサ！？ おまっどこ行ってたんだ！！」

「そつだよマサ心配したんだよ!！」

うおっ!! 熱烈な歓迎。

「悪い悪いヒマだったんで、ちいと出掛けてたんだわ」

頭をポンポンしつつ謝る。

「マサさん……この書き置き……」

「あゝ三日の予定だったんだけどな、思いの他、早く片付いてな?」

もそつと手応えあってもよかつたんだけどな。

「マサナリ……何処で何をしてたんですか?」

「だからヒマ潰しだつつうに」

あんまりヒマは潰れなかったけど、まあ一日は潰れたんでよしとしよう。

とりあえず。

「腹減ったからなんか食うか? オマエらメシは?」

と聞いてみたら、一応は食ったらしい、でも夜中まで起きてたんで小腹が空いたって事で、俺はテケトーに親子丼を作り、他はタイヤキとかの軽いお菓子。

でむしゃむしゃ食べてたら。

「学校大変なことになったぞ？」

何かしらあったらしい。

「ほら、マサが停学になったろ？ で初岡と沢田がそれにキレて、賛同した、うちのクラスで暴動になりかけたぞ？ いや俺もムカついてるけどさ」

なぬ！？ そいつあまた。

「マジか？」

「ああ・・・なんとか一応は収まったけど・・・明日になったらまた爆発しそうな感じだった」

「アタ~~~~唯は止めなかつたん？」

「古手川か・・・古手川も怒ってたからな・・・形だけは止めてたけど」

あ~~~~どうしたもんかねえ。

「ララは？」

「私はもちろんマサの味方だもん!!」

ありがたいつちゃありがたいが・・・。

「まあ今は大人しくしてなされ明日、俺も学校行くからよ？」

「停学中だろ？」

フツ……甘いぞリト君。

「停学喰らったんは学生としての俺だけど用務員のマサさんは喰らってねえからな、用務員として学校に行けばよかる？」

まっ今、思いついたんだけど、ちなみに警備員でも可。

「そうですね、用務の方もマサナリがいないと困ると言っています、私も……困り……いえ違います仕事の効率の事です」

ヤミっ子は何を微妙に慌ててんのやら。

「ハア……マサさん鈍いよ……まあそれがマサさんだけど」

美柑にため息をつかれた……俺シヨンボリ。

とそんなこんなで夜は過ぎていき、停学一日目は終了したのであります。

さて、明日は……どっすつかねえ。

第四十四話っぽい感じ！（後書き）

後書き

次回はマサの報復・・・になる予定。

まあ予定は予定ですから狂う可能性もありますが。

とにかく次回もまたお暇なれば見てやって下さい。

番外編っぽい感じ！その7（前書き）

前書き

本編の進みがアレ気味により番外！！

やっぱりアレですので薬を大量に持ってどうぞ。

## 番外編っぽい感じ！その7

くもしもサモンナイト3の世界だったら

その1

「せ・・・先生・・・」

「ハアハアハア・・・数が多い・・・このままじゃ・・・せめてア  
リーゼだけでも」

『ピギイーーーーー!!』

「クツ!!」

「先生ーーーーー!!」

「いきなり登場蹴りイイイイ!!」

『ズドーーーーン!!』

「「えっ?」」

「大丈夫かっつとイカンな・・・まだスライムもどきがどっちやり  
居るがな、アイサツはアレぶっ飛ばしてからな?」

『ダンツ!!』

「えっ……あっ……」

「だらっしゃアアア!!」

『ズドン!!　ズガン!!　ガドン!!』

「す……凄い……」

「あの人是一体……」

「ご都合テンプレ的にマサ登場により抜剣はせず、ちなみにアティとアリーゼの組み合わせです。」

モンスターを倒した後は自己紹介などすませました。

・  
・  
・  
・

その2

「マサナリさんは召喚された方という事なんですか?」

「さあ?　召喚ってのが何かは知らんが、なんかドアを開けたら森が広がっててな、一か八か飛び込んでみたらドアが無くなってやんの、ダッハハハ、まいったまいった!」

「一か八かって……っていうかなんで笑ってるんですか」



「いやぁ好奇心には勝てなんだ、まっ笑るとけ笑るとけの精神ですわ」

「マサお兄さんって・・・」

「アリーゼ君、その可哀相なヤツを見る目は止めようね」  
『キユピー』

「キユピーもコイツ、マジでダメだ、ホントダメだとか言うな！！」

「「わかるのッ!?!」」

今回は落下じゃなかったようです、そしてキユピーから完全にアレ扱い。

「まっ俺の事情はそんなとこ、アティとアリーゼは？　ここの住人なん？」

「いえ違います、私達はその海賊に襲われて、その時に船から投げ出されてしまい気付いたらココに」

「海賊・・・ねえ？　さっきんスライムもどきといい物騒なことって」

「マサナリさんのいた世界・・・えっと・・・メイトルパやロレイラルではなさそうですし、かっいつてサプレスでもない、シルターンですかね？」

「どれでもねえ気がする、つか初めて聞いたぞ？　なんぞそれ？」

「あっえっと・・・大まかに言いますとまず私やアリーゼが住む世

界の事をリンバウムと言いまして、その世界を囲むように、機械の体を持ったロボットなどが住む『機界ロレイラル』妖怪や鬼などが住む『鬼妖界シルターン』天使や悪魔などの霊的な者が住まう『霊界サプレス』幻獣や半獣の方が住む『幻獣界メイトルパ』という世界があります」

「ふむふむ・・・アリーゼ知ってた？」

「えっ？ あっはい常識ですの」

「ふん・・・俺あ知らんかったけどな？ こりゃ完全に異世界だな」

「えっともしかしたらマサナリさんは名も無き世界の方なのかも知れないですね」

「名も無き世界ねえ？ 一応、地球の日本つつ名前があんだけどな？」

「名も無き世界の事はコチラでは余り詳しくはわかってないんです」

「なるほろね、まっなんとなくはわあったわい」

「またわからないことが聞いて下さいね？」

「だつよアリーゼ」

「マサお兄さんに言ってるんだと思いますよ」

軽い説明でした、その後は探索をすることに。

・  
・  
・  
・  
・

その3

「お~~~~い!!!」

「ン？ 第一島人発見か？」

「そうかもしれません・・・えっ？ アレって・・・」

「アン？ どつたのアテイ」

「ソノラちよつと待ちなさい、あそこにいるのは」

「なんでスカーレル、やっと私達以外の人に会う・・・げっ!？」

「むっ人の顔を見ていきなり、ゲツ!？ とは失礼なやつちゃ」

「マサお兄さんそんな暢気な事を言ってる場合じゃないんです、あの人達は」

「私達の船を襲った海賊!!!」

「マジでか!!!」

ソノラ&スカーレルとの出会い、その後、戦闘になりましたが、まあ例によって、ゲンコツが火を吹きました。

「……ってわけなのよ、それで今は一時休戦って事にしない？」

「だってさ？ 俺あ別にいいけどな〜アティとアリーゼは？」

「えっ……あっ……私も構いません」

「……先生がそういうなら」

「ふ〜む……ちよい待ち！！ アリーゼ、カモン！！」

「えっ……あっ……」

「アリーゼ、まあ自分らが遭難した原因のヤツらと行動すんのが引つ掛かってんなあわかるが……まあアレだ旅は道連れ世は情け……じゃねえけど、アイツら自身は特に悪いヤツらじゃねえと思う、まだ会ってばっかだけだな、とりあえずは一緒に行動してみても、やっぱり納得できねえって思ったら……グーパンでも叩き込めゃいい、おけ？」

「わ……私……喧嘩なんてした事ないですし人を殴るなんて……」

「じゃあ蹴りで」

「そっいつ問題じゃ……」

「じゃあ」

「いや・・・もういいです・・・わかりました、もし納得できなかつたら、その時はちゃんと話してみようと思います」

「うむ、良い子さんだ」

『スタスタ』

「あ・・・あのアリーゼと何を話してたんですか？」

「ああスマンスマン、アティの帽子の中には何が詰まってるのかと相談してた」

「マサお兄さん？（ボソツ）」

「そついうことにしとけ（ボソツ）」

「で結局、私達と一緒に行動してくれるってことでいいのかしら？」

「おっ！」

「はい」

「は・・・はい」

「なんやかんやでソノラ&スカーレルと行動を共にするようです。」

・ ・ ・

#### その4

「あ・・・アレ・・・アニキッ!!」

「ン？ ソノラどった・・・って、ガッツリ襲われてんなアレ、しかも旗色悪そうだし・・・よしや行きますか」

「マサ助けてくれるの?」

「まっ見過ごすわけにもいくめえよ、晩メシがまずくなっちまうしな」

「私も行きます」

「おけ、じゃ軽く暴れるとすっか」

『ゴキゴキン』

「オラアアアア!!」

この後は無双しまくってカイル&ヤードを救出、紹介などを済ませて彼等の海賊船へと向かい初日終了。

・ ・ ・

その5

『ドタッ』

「カァー！強えー！、素手の喧嘩じゃ負けなしたつたのによオ」

「ダッハハハ！！ 悪いなカイル、俺あジジイ以外に喧嘩で負けたこたあねえんだよ」

「チツ・・・マサに勝てるヤツがいるつても信じられねエけど、手え抜かれたつてのがな・・・クソー」

「しゃあねえべき、ちいと力入れて殴つたらカイル上半身消し飛ぶぞ」

「おつかねえなあ、まっ負けたのは仕方ねえ、またヒマがあったら喧嘩しよつぜ」

「おう！ 喧嘩は買いだかな」

マサとカイル朝喧嘩でした、ある意味カイル強化フラグ。

・  
・  
・  
・

その6

「……というわけで私達はアナタ達、人間を信用していないの、だからアナタ達には協力できないわ」

「……そうですか」

「まあアルディラン言ってることあわからんでもねえけど、この島をそんなんしたんは俺らじゃなくね？」

「それでもよ、どうしても人間に対しての不信感が残るのよ」

「根が深いこって……まっどうせ俺らも……つうか特に俺ア、この島から簡単にゃ出られんし、のんびりいきゃいつか」

「……ソウ言エバ、オマエハ召喚サレシ者ダッタナ」

「アレって召喚になんのかね？ アテイとかが使う召喚たあ違う気がするが」

「確実に違うと思いますよ、大体普通は一か八かで飛び込んだりしませんよ」

「じゃあねえべさ好奇心には抗えねえんだって」

「それで還れなくなるって……マサナリ……アナタ……」

「冒険野郎と呼んでくれ、つかその目はやめれ、アリーゼにもさらたから」



やっぱりアレ扱いのマサです。

・  
・  
・  
・

その7

「ヒヤハハハ！！ 死ぬ死ぬバケモノ共ー！！」

「テメエがなッ！！」

『ガゴッ！！』

「ぐえつゝゝて・・・テメエ、人間のくせにバケモノの味方すんのかッ！！」

「っせえぞクサレタトゥー、気にいったヤツらたあつるむし、気にいらねえヤツはブツ飛ばす、コイツらは気にいってる、テメエらは気にいらねえだからブツ飛ばすッ！！ 人間？ バケモノ？ 知るかボケエエエッ！！」

「血の気が多いなマサの野郎は・・・オラアアア俺も交ぜろーッ！！」

「アニキ！！ もう仕方ないなあ」

「私は人間だけど、でも……アナタ達のやってることは許せません！！ 行きます」

ビジュ率いる帝国軍相手にやっぱし無双。

「た……助かったぜマサナリ」

「まあ気にすんなヤツファ、アイツらの顔つきが気にいらなかったただだかんよ」

「マサナリ殿は……よくわからない人ですね？」

「人間ナノニ何故我々ノ味方ヲシタ？」

「だからからく気にいったらヤツらたあダチにもなるし、つるむ、気にいらねえヤツらはブツ飛ばす、難しいこつてもなんでもねえだろうに」

「単純なのか何なのか……とにかく助かったわ、先生に海賊さん達も助けてくれてありがとう、私達、護人はアナタ達をこの島の仲間として歓迎するわ」

なんやかんやで島の仲間として受け入れられました。

とりあえずサモンナイト3編は以上です。

・  
・  
・  
・

くもしもリリカル世界だったら4く

その1

「はい、というわけで、フェイト、アリシア、はやて、ヴィーの四人は明日から学校に通うことになりました」

「ちょっと待てマサ！！ はやて達はわかるけど、なんで私まで通わなきゃいけないんだよッ！！」

「うむ、よい質問だ・・・それはな、士郎のおっちゃんに戸籍を頼んだら、オマエの年齢が、はやて達と同じってことになったからだ、で面白そうだからそのまま小学校にブツ込もうと俺が提案した」

「オマエのせいだよッ！！ 私絶対イヤだからな！！」

「後、シグは俺ん手伝い、シャマルは翠屋でバイトな、桃さんが、雇ってくれるってよ」

「うむ承知した」

「はいわかりました」

「ってオイ、コラ、マサ聞けエエエ！！」

「ヴィータ無理やで、ああなったマサ兄は止まらんし」

「が・・・学校ってどんなところかな？」

「マサお兄ちゃんが楽しい場所って言うってたよ」

「そうなんだ、楽しみ」

「あつザフは・・・」

「ワフツッ!」

「スツカリ、座敷犬だな・・・自宅警備員つてことで」

士郎さんに裏で活躍してもらいました、ちなみにマサは士郎さんのツテで基本は修理工的なことをしながら、なんでも屋として働いてます。

・  
・  
・  
・

その2

「「行つてきます」

「はい行つてらっさい」

「アリシア、フェイト、クルマに気をつけなさいね・・・ン？ アルフその目は何かしらっ?」

「それをプレシアが言うかね」

「黙りなさい!」つと・・・マサナリとアルフも、もう出るのかしらっ?」

「おう!! 今日から新人が入るしな、アルフも今日から先輩だな」

「そうだったねえ、まっ私がビシッと教育してやるよ」

「返り討ちに合うんじゃない？ 俺の見立てじゃシグのが強えぞ」

「うっ・・・大丈夫だよ、なんせ私、先輩だからねッ!!」

「まっ頑張りたまえ・・・じゃ行くべ、プレシア留守番よろ」

「ええ、行つてらっしゃい」

・  
・  
・  
・

「はい、つうわけで本日の依頼はここ最近、鳴海に出没してらっつう引ったくりを取っ捕まえることだ」

「ふむ・・・引ったくりか・・・許せんな」

「オマエも人の事言えないだろシグナム」

「うっ・・・」

「はいはい、アルフ、初っ端からやる気を削いでやるなっつうに、シグも・・・まあ気にすんな、アレは非常時だったんだし俺も気にしてねえからな」

「そう言ってもらえると助かる」

「うむ、さてアルフよ、ワンコモードだ、この犯人が現場に落とすたつつうキーホルダーから犯人の匂いを追跡するのだ」

「私はオオカミだ!!」

「ドックフードをオヤツに食うヤツはオオカミとは言わん、人それをワンコと言う、今度、『今日 わんこ』に応募しようかと画策中」

「止めるホントにッ!!」

「そう言えば主がその番組にザフィーラを応募してたな」

「やるな、はやて俺も負けてられん、コレは直ぐさま応募せねば」

「お願いだから止めて!!」

「残念つと話が大分逸れたがアルフ頼めるか？」

「ヤダね」

「ええい拗ねるな、今度伝説のマンガ肉作ってやるから」

「ホントかい!? 仕方ないねえそこまでいうならやっちゃるよ」

「単純だな（ボソッ）」

「アホの子だからな（ボソッ）」

「なんか言っただかい？」

「「なんにも」」

こんな感じながらも引つたくり犯も捕らえ解決見事に解決しました。

・  
・  
・  
・

その3

『カランコロロン』

「・・・なんぞコレ？」

「す・・・凄まじい臭いだな」

「鼻が・・・鼻がアアア」

「あらマサナリ君、いいところに来てくれたわね」

「ウーツス、桃さん、どつたんスか？」

「えっと・・・シャマルちゃんがちょっと・・・」

「まさか・・・シャマルを厨房に入れたのですか!!」

「えっシグどついうこと？」

「シヤマルの料理の技術は壊滅的なんだ、料理を兵器に変えるという程に」

「シグナムそれは酷いんじゃない？ あつマサナリさん、コレ食べてみませんか？」

「コレをか？ 自然界に存在しねえ色なんだが、コレ何？」

「シヤマル特製ショートケーキですー！」

「はぁ・・・ショートケーキ・・・こんな色じゃねえと思うんだが・・・どれ」

「マサナリ食べる気がー！！ いくらオマエでも無事ではすまんぞー！！」

「そうだよやめときなって、臭いだけで意識を持ってかれる代物だよー！ー」

「そうねー桃子さんも止めた方がいいと思うわ」

「そんな酷い・・・頑張ったんですよ、食べてくれますよねー！！」

「食うって・・・モグモグ・・・ふむ・・・」

『ゴリツバキツグチャ』

「ショートケーキを食べる音じゃないわねーっていつかマサナリ君」



「大丈夫なのか？」

「うむ・・・シャルル」

「はい！！ 美味しかったですか？」

「普通のヤツだったら死ぬんじゃない？ まあ死にしくても病院直行コースだな、ハッキリ言うならポイズンの類」

「はうツ・・・がつくし・・・頑張ったのに」

「もぐもぐ・・・まっ精進しろや」

「あらあら、そう言いながらも全部食べるのねマサナリ君」

「折角作ったのに勿体ねえしな・・・ンツ・・・ごっそさん」

「マサナリ・・・よく無事だな」

「胃袋もガツチガチだからな、こんくれえじゃビクともしねえよ」

「頑丈だねえ」

マサ、シャルルのポイズンクッキングも耐え切ります。

・  
・  
・

その4

「マサちゃんってさ、私と同年でしょ？」

「高校には行かないの？」

「行ってもいいんだけどな、編入試験受けても間違いなく落ちるしな、勉強苦手なんだわ」

「だったら私が教えてあげよっか？ 高校くらい出てた方がいいと思うし」

「美由紀・・・勉強出来るの？ 伊達にメガネは掛けてねえってことか」

「いやメガネは関係ないから、でどうする？」

「やめとくわ・・・一応、まだアッチの高校に籍があると思うしな・・・まっ明日には気が変わっかもしれんけど、そんなときゃ頼まあ」

「うん、わかった頼みなくなったら何時でもいってよ」

マサ、高校フラグ、美由紀・・・多分、高校2年くらいで同年くらいのはず・・・多分。

半端ですが今回はここで終わりです

番外編っぽい感じ！その7（後書き）

後書き

なんだコレ？

何時もにましてアレだった気が・・・。

あつ・・・そう言えばグラムさんとネコ姉妹・・・まっまあスルーで。

あつ次回は本編の予定です。

第四十五話っぽい感じ！（前書き）

前書き

今回もまた苦戦しました・・・。

では何時ものようにクスリを持ってどうぞ！！

## 第四十五話っばい感じ！

「敵は気絶した癖に、ボクは学校の癌を退治したんだとか偉そうに言ってるのよ！！」

これはまさに挑戦、私達クラスに、いやマサマサに関わってきた・・・マサマサがダチって言うてくれてる私達に対しての挑戦！  
！ これは暴動じゃない、これは聖戦だアアア！！  
「

「「「オオオオツ！！」「」」

うっうっむ・・・学校に着いた瞬間何やら人だかりが出来てるなあと思つて言つてみたら、里沙がアジ演説をしておりました。

まあその気持ちは嬉しいっちゃ嬉しいんだが・・・って、およ？  
いつの間にやらララヤヤミもアッチにいるし。

「リト、私達も行くぞッ！」

「ちよッ引ッ張んなリコ」

あらまりト、リコもかい？ ってイカンイカン・・・こんままじや里沙を筆頭に集まってくれてるヤツらも停学とかにされちまう。

スタスタと近付き。

「おはようさ〜ん」

「「「マサ（マサマサ）（マサ君）（マサナリ君）（マサナリさ  
ん）（マサナリ）！？」」「」」

はい、いいリアクションありがとう。

「そつそマサさんですよつと里沙・・・と集まってくれてん方々、気持ちはあるがてえんだが・・・今は大人しくしててくれや？ なんかあつたら頼むからよ？」

「むっ・・・そういうけどさ〜あんなふざけたマネされて私も腹の虫が収まらないし」

ふ〜む・・・まあ確かにあのエセ野郎にやム力ついてるっちゃム力ついんしな・・・。

むうむう怒ってる里沙の頭に手を置きつつ

「カリは返すさね売られた喧嘩は買う主義だしな？」

ニツと笑いながら、そうっておきます、まあぶっちゃけ特に何も考えてねえんだけど。

「マサマサがそういうなら・・・」

不満顔のみんなに若干申し訳ない気分になるが、ここは抑えてもらいました。

で学生としての俺は停学中なんで教室にはいかずに、おっちゃんのところへ、ヤミっ子も一緒。

「マサ坊停学喰らったんだってガツハハ、若いうちはそんぐれえ元気な方がいいわい！！ まあ授業がない分、たっぷり働いてもらうがなガツハハハ！！」

相変わらず、気持ちのいい、お人ですわい。

「というより私とマサナリの仕事量は普段から多いのでわ？」

「ヤミ嬢、それは言わねえのがお約束つてもんだ、とにかく何時もどおり任せたぞ」

ってなわけで何時もの如く用務の仕事、ちなみに今回は、はなっから作業着で学校に来ました、まっヤミは何時もの服で今から着替えるみてえだけど。

・  
・  
・  
・

学校休んで出張とかした次の日は通例で仕事量は若干多いわけだが、今回もその例に漏れずにそこそが多い、まあ昨日は休みつつ停学喰らって早退したただけだけど。

で今日は授業にでることもないから、のんびりやっています。

「そろそろ休憩すつか」

「はい」

10時を少し回ったところで休憩タイムで保健さんところへ向かいます。

「それでガ克蘭君、ガ克蘭君はこのまま黙ってるの？」

保健さんとここでコーヒータイムしてたら保健さんがそう聞いてきた、つか保健さん……。

「俺がなんかするとしたら参加する気満々がな」

「そうね……ほら私も一応は養護教諭だから職員室に行くんだけど……佐清先生がね……自慢気に語る語る、危うく手がでるところだったわ」

おやま……そりゃあ、なんつうか。

「なんなら暗殺しましょうか、今なら口八でいいですが？」

「やめんかい」

ヤミっ子も物騒な事を。

「それじゃどうするの?」

「どうするつつてもなあ? その気になりゃ行方不明にすることくれえはチヨロいんだが……流石になあ……」

うむむ……つか既に。

「あの顔、めんどくさいからどうでもいいや、って顔ね?」

やるな、保健さんガッツリ読まれとるがな。

「いいんですかマサナリ?」



「なんつつかあんなエセ野郎如きに頭使うよか、なんか面白え事を考えた方がよくね？」

とマサさんは思い始めてきたんですわい、なんつつの？ まあア  
しだ。

「喉元過ぎたら熱さ忘れる、ってヤツ？」

つつても、あのツラ見たらうつかり殴ってまっやもしらんけど。

「ふ〜ん・・・つまらないわね〜、やっぱり私が」

「気持ちだけありがたく頂きますわい、まっどうせアノ手の類は  
勝手に自滅しますわ」

「そういうものですか？」

「そういうもんだ、例えば・・・そうね、どごその組の娘さんにち  
よっかい出したんがバレるとかな？」

うむうむ、ものっそいありえそうだ。

「ガ克蘭君？ アナタ良い感してるわね？」

頷いてたら保健さんに肩をトントンされた、反対側の手の指は外  
を差しとります、見てみたら。

「ビンゴか？」

まさにそれっぽい黒塗りカー・・・ってン？ アレって・・・。

「大悟ンおっさんじゃん」

「知り合いですか？」

「知り合い・・・つうか、まあちいと前にヤク○なヤツと喧嘩した事があるてな・・・そいつらん事務所叩き潰したんだけど、まっそんなときに知り合った、Not堅気なおっさん」

まっNot堅気だけど、筋はキッチリ通すし身内を大切にすることを考える、おっさんだから俺的には嫌いじゃない部類のおっさんです。

あつ潰したヤツらたあ別口だからな。

「サラッと、とんでもない事、言ったわね・・・やっぱりあのニコラスの事件ってガクラン君の仕業だったわけね・・・」

「内緒の方向で」

「どうせ、その内にバレます」

それでも、だっつうの。

「まっ、堅気に手を出す・・・つうか、一般生徒には手を出さんだろ」

つうわけで、暫くは静観・・・。

「つてわけにもいかないでしょ、ほら警備員、一応行って来なさい」  
「ですよ〜」。

まつ、狙いがエセ爽やかとは限らんし様子くれえは見に行っか。

「ヤミっ子、用務の作業・・・続き大丈夫か？」

「大丈夫です、いつも作業してますので」

「うむうむ頼りになる相棒だわい、じゃ先に続き始めといてくれや」

「はい！」

「行ってらっしゃい」

うむ、良い返事！！

とヤミっ子に用務の作業を託し、保健さんの声を背に受けつつ保健室を出る。

まだ、おっさんらは校門の方にいたよな・・・ン？

アレは・・・チツ。

「鬼島！！ オマエ停学中だろツ！！ いや、それよりアイツらをなんとかしる警備員だろ！！」

このエセ爽やかは・・・。

『ピコンッ!』

おっ!?! 閃いた、そうね・・・よしや、そうすつか。

「スウ~~~~ええ~~~~佐清先生~~~~仮にも先生ともある  
うものが生徒一人に任せる積もりツスカ~~~~それはヒドイんじ  
やねえツスね~~~~!?! それとも何か後ろ暗い事でも~~~~  
」

学校中に聞こえるくれえの大声を出す。

『ビクッ!』

「き・・・キサマ・・・何をッ!」

おんやあ? どうやらマジでビンゴみてえだな。

「こりやまた好都合だねえ。」

おっ? 更に好都合な事に里沙発見、素早くアイコンタクト。

「佐清先生~~~~それは~~~~ちょっと~~~~ないんじゃないですか~~~~  
? それとも~~~~ホントに後ろ暗い事が~~~~あるんですか~~~~?」

うむ、ナイス追い打ち、でもやっぱりアホな子みたいだぞ。

「も・・・籾岡君・・・そっそんな事は・・・」

「ふむ・・・生徒一人に任せっきりとは感心せんな」

おっ、凜、良いタイミングで合いの手を、俺にウインクしてるし、俺も軽くエセに見えないようにサムズ。

「ゲツ……し……しかし……」

へたれだなオイ……。

もういいわ、無理矢理連れてくか？ うむ、そうしよう、でも軽く。

「まっ、俺も警備員なんで〜一応は様子を見に行つて来ますわ」

「そっそうか……よし、早くアイツらを追い返すんだ」

フツ……何をホツとしてるんですかねえ〜。

『ガシッ』

エセ野郎の襟首を引つつかむ。

「なっ何をツ!?!」

動揺してるエセ野郎にニタリと悪役笑いしつつ。

「いや〜流石に怖いんで〜〜ついて来て下さいよ〜〜せ・ん・せ・い?」

助かったと見せ掛けて落とす、コレは基本だよな。

ジタバタと暴れなんとか逃れようとしてるみたいだが、無駄無駄、  
テメエ如きが逃れられるわきゃねえだろ。

「じゃ逝きますか」

ズルズルとエセ野郎を引きずる後ろで、里沙と凜が、ハイタッチ  
しておりました、なんか仲良くなってるみたいね？ 仲良き事は美  
しきかな？ だな。

・  
・  
・

『ボタン・・・ブロロロ・・・』

「逝ってっらっしゅい」

はい、お見送り終了。

ン？ 何があったとな？ まあ大方の予想通りですわい、まっ実  
際は予想よか、あのエセ野郎がド腐れだって感じだったけどな。

あのド腐れ野郎、大悟のおっさんの娘さん、あつ今、中三のテニ  
ス部ね？ が来年ココに入るからってテニスで推薦してやるから、  
どうたらこうたら、とかざけた事を言っただと。

もう情状酌量の余地無しだわ。

さて、この事はキツチリ報告・・・は、まっいいか？ 十分怖え

目に遭うだろうし・・・もつ目障りな事にやらならんだろうよ。

さてと・・・。

「用務の仕事に戻りますかねえ」

スツタラスツタラ作業現場に戻る・・・前に一応は報告を・・・  
教頭に。

「自業自得ツス、半年くれえは給料カットの処分はした方がいい  
ツスよ、むろんボーナスは無し」

いやあ〜ホント、俺、菩薩並だわ、まっ何かやらかしたら今度は  
俺が直接手を下すけどな！！

生まれてスイマセンと言うまでボコにしたる。

「わかりました、ではそのように・・・さっ鬼島君！！ 撮影タイ  
ム！！」

ってオイ、教頭・・・作業着もフェチでもあつたらしい・・・結  
構パシヤパシヤやられた。

まっなにわともあれ、あのエセ野郎への制裁・・・つつか自爆だ  
けど、は終了ってことで。

その日は用務の仕事をしたり、保健さんのところでダラダラして  
過ごしました。

で、結局エセ野郎は・・・無事に帰って来たが、頭がスキンになっていた、むろん爆笑してやった。

睨まれたが。

「アレ、俺にメンチ切っていいのかな？」

「ヒイ！！ すっスイマセン！！」

一応、殺すのとかは無しで、つつといたんで命の恩人だし、更には、大悟のおっさんから俺の事を色々と聞かされたらしく、チワワの如くになってやがりました。

ざまあ〜。

むろん、エセ野郎の人気は地に置いたのは言うまでもない。

まあ俺は俺で、ヤク〇と繋がりがあるとか囁かれるようになったんですけどねッ！！

「なに気にするな、言っているのは政成の事をよく知らないヤツらだけだ」

脳内コチャコチャしてたら凜が声を掛けてきた。

「まっ確かにな、つか、まあ知り合いなんは事実なんだけどな？」

「ふむ・・・政成の知り合いならそこまで外道というわけではないのだから？」



「まあな、ムカつくヤツらだったら潰してるわなあ？」

実際、潰してるヤツらもいるしな。

「フツ…… そうだな、政成ならそうするだろうな」

「そういつこつた、一応、内緒な？」

もうなんか内緒も何もない気がすつけど、まっ凜も頷いてるし問題なしって事で。

・  
・  
・  
・

はい、もうちょい続きます。

ちなみに今は放課後ね。

「停学も明日までだわなあ」

「っていつか普通に学校に来てて停学も何もないでしょ？ マサ君の場合」

「それもそうなんだけどな、っと唯は……今、帰りか？」

「えっ、うんそうだけど今日は委員会もないし」

ふむ……。

「じゃ遊んで帰らね？」

唯とあんまし外で遊んだ記憶がねえんだよな？ 学校ン時は委員  
会とやらでアレだし。

「えっ？ あっ・・・だ、ダメよ、学校帰りに寄り道とかは・・・」

「むう・・・堅いのう唯君は、チクツとくらいええやん？」

「ね〜ね〜マサ〜、リサミオがカラオケ行こうって」

おっ、ララ、良いタイミングだな。

「おう！！唯も行こうぜい、たまにはよかんべ？」

「えっ、あっ・・・わ・・・わかったわ、あんまり羽目を外されて  
も困るし、うん、そうね、風紀委員として監視をかねて私も行くわ  
！！」

うむ、実にツンデレ、ご馳走様ですって感じだな。

それでこそ唯だ！！

で、唯も参加って事になりカラオケに行く事に。

メンツは、俺、リト、リコ、ララ、ヤミ、唯、春菜、里沙、未央  
の8人。

結構な大所帯になったな・・・。

「そっぴや俺、カラオケって全然行ったことねえわ」

「そうなのか？」

うむ・・・記憶にある限りは・・・うん、ねえな、宴会場とかにあるカラオケならしたこたああるけど。

ちなみに何故、宴会場のカラオケをしたことがあるのかは・・・まっ色々とあるって事で。

「でもでもマサってご飯作ってる時とか、買い物に行く時とか何か歌ってるよね？ えっと・・・なんて言うだったかな」

「鼻歌？」

「うん、それ！！」

確かにそう言われりゃそうやもしれんが・・・。

「カラオケと比べるってどうよ？」

「別次元だな」

だよなあ。

とそんな感じで話しつつもカラオケボックスに到着です。

受付は慣れてるっぽい里沙がサクサクとすませ、部屋へGO。

それなりに多い人数だから部屋も大部屋らしい。

「「じゃまずは私達から」」

おっ先陣を切るのは里沙未央の二人か？

「~~~~~」

おっ上手え、息もバツチりやん。

「「どうもありがとう~~~~ございました~~~~」」

『パチパチパチパチ』

うむうむ、自然と拍手も出るわなあ。

「じゃ次あ俺な!~!」

「あつまサ!~! 私とコレ歌お?」

おう? ララが指差してるのは・・・マジカル・キョーコの最新  
ープニングやん。

「いいぜい、また声マネで歌うか?」

「うん!」

よし、じゃピッピと曲を入力して。

「「怒りの爆熱少女!~!」」

をララと歌いきりました。

「うまッ!!--」

「ララちいもだけど」

「マサ君もそっくり!--」

「っていつかどうやって声を?」

と中々に好評っぱかった。

まつ声マネして歌うのも面白えけど、普通に俺バージョンの声で歌いたいで次からはそれ用の曲にするかねえ。

「じゃ次は・・・」

「私がいきましょう」

おっ、ヤミか? ってヤミって・・・。

「日本の歌わかるのか?」

うむ、リコの言う通り、あんまり曲とか聞いているイメージはない気がするが・・・。

「問題ありません、地球に来てそれなりに学びましたので」

とマイクを握るヤミっ子。

歌った曲は……。

「~~~~~」

なんとなんと演歌でした、しかも上手い。

意外と似合ってたのが面白かった、あと歌い終わった後の、『どうだ!』って顔がめっさ可愛いかった、もちろん撫でといた。

で、その後はリトと春菜がデュエット、コレはリコが仕込んだらしい。

グツと俺にサムズしてました。

どうやらリコモリトを応援する側のようだ。

緊張で若干リトが音程外したりしてたが、そこは、ご愛嬌って事で、その後リコが歌い。

「唯は歌わんの?」

「えっ? あっ……うん……えと……コレ」

唯が選んだのは今、人気のJ-POP、最初は緊張してたっばいけど、上手かったッス。

で一周、回ったんで。

「俺!」

声マネしないタイプの選曲をして。

「情〇のオオ 真〇赤なバクヲをオオ」

熱唱！！

すんげえ気持ち良かったッス。

それなりに好評だったしな、里沙いわく。

「喉が強い、聞き惚れるってよりは一緒に盛り上がれる感じの歌声  
！！」

らしい。

とこんな感じでカラオケは盛り上がりました。

今度は美柑や恭子、ルン、沙姫達と一緒に行くところかねえ。

## 第四十五話っばい感じ！（後書き）

後書き

佐清・・・自爆、とこういう結果になりました。

いや決して考えるのがめんどくさかったとかそんなんじゃないですよ？ ホントに。

ンツン、毎度毎度のパターンですが。

次回も頑張っていきたいと思imasuので、お暇なら次回もまた是非見てやって下さい。

感想などありましたら是非！！



第四十六話っばい感じ！（前書き）

前書き

今回からトラブルクエスト編スタートです。

## 第四十六話 っぽい感じ！

『ピュウウ~~~~』

「ふむ・・・はて・・・ここはどこじゃろ？」

気付いたらただっ広い荒野にいました、いやさ、まあぶっちゃけ原因はわあってはいんだけど。

では何があったのかダイジェストで。

朝学校に来て何時も通りに用務して保健さんところでダラダラ。

教室に向かう時にガ克蘭のポケットに手紙が入ってんねに気付く、果たし状の類？  
とか思いつつ開く。

中に妙なメッセージカード。

『招待状、このカードを開いてください』

と書いてたんだガンガン開く。

『カツ!』

なんかカードが光りだしアナウンス口調で。

『鬼島 政成がエントリーしました!』

と聞こえる。

荒野にポツーン……ってわけです。

はいダイジェスト終わり。

「キヤーーーーーッ!」

ン? なんか上から声が……しかも、この声……。

『ドサッ!』

「ナイスキャッチ!」

「えっ? あっ? へっ? まつまサ君?」

若干錯乱気味の唯でした、でとりあえず唯を下ろします。

「あっありがとう……って、えっ!? どのなのココ!」

「荒野？」

「見ればわかるわよッ！！ 聞いているのはそこじゃなくて！！」

「でしょうね、つつてもなあ、つておよ？ 唯が持ってたのって。

「俺んポケットに入ってたメッセージカードと同じじゃね？」

「えっマサ君も？ 私も何故かカバンの中に入ってた」

「お互い招待状とやらを見せあう、どうやら同じもんのような。

「はてはて・・・およ？ 中に何か書いてんな？」

「見れば何かしらわかるやもしれんな、つつわけで中身を拝見。」

『これは体感RPGです、クリアするまでは元の世界へ戻れません・

』

「ちょッ！！ えっ何よコレどういづことー!？」

「唯、まだまだ混乱中のようですな。」

「まあ落ち着けや、生きてりゃこついつ事もあらマ、寧ろ目的がわあつてんだけマシだわな」

「何でマサ君はそんなに落ち着いて・・・そうね、マサ君だもんね」

「なんか妙に納得した顔をされた、唯君もわかってるな。」

「まっ、とりあえず移動しようやRPGつってこたあ、どいづに街

でもあんだる基本だしな」

「えっええ……でも、何処に街があるのかしら？」

ふむ……まっ最もな意見ですな……って、およ？ よく見たら普通に町が見えるがな。

「唯、町発見」

「あっホントだわ！ とりあえず行ってみましょう」

というわけで前方に見える町へ向かってGO……しようと思ったら。

【敵があらわれた!!】

「空に文字が!？」

はい唯君の言う通り空に文字が出てきました、で、その文字通りに。

『ブモオオオオツ!!』

牛頭のマッソー……まっ敵だわな？ が登場。

「つか序盤で出るタイプじゃなくね？ 普通序盤ってもっと小型じゃね？」

「いいい言ってる場合じゃないでしょ!!……ど……ど……どにするの!？」

「ン？ どうするかって？」

『ブモオオオオオオ！！』

『ズドドドドツ！！』

ツノを俺の方に向けて突進してくる、牛頭君……そんな牛頭君は……。

「にじするッ！！」

『ゴガンツ！！』

打ち下ろしの右！！

『ブモ……』

あっさり沈んだなオイ、所詮は序盤だわな。

【敵をやっつけた！！】

『ボンツ！！』

おう！？ 例の文字と一緒に牛頭君が消えた。

『チャリーン』

その後には何故かコイン……多分、ゴールドの類だわな？ に……うむうむ。

「流石はRPGですな」

「えっ……ていうか、えっ？　なんで？　っていうかマサ君、よくあんなのを……あつてもマサ君だし……」

唯は何やらブツブツ考察中、にしてもなんたる近い将来、似たような経験……あっ敵を倒したらゴールドになるっつうやつね？　を経験する気が……まっメタっぽいんでスルーだな。

「ほれほれ唯、とりあえずゴールド拾って町に行くべえ」

「えっええ」

考察中の唯を呼び戻して、改めて町へGO！！

途中……。

「よいしょーッ！ー！」

『ギーーーーッ！ー！』

「ほいさッ！ー！」

『グオオオオオ！ー！』

と何故か敵にめっさ遭遇したけどなッ！ー！まっゴールドは貯まるからいんだけど。

唯 視点

町まで目と鼻の先くらい距離なのに、怪物……えっとモンスターっていつのかしら？

とかなりの確率で遭遇してる。

全部マサ君がなんとかしてくれてるんだけど……なんていうか……今もモンスターをやっつけてるマサ君を見て。

「マサ君……楽しんでない？」

「まあな？　なんか、わくわくすんべ？」

やっやっぱり……楽しんでたのね……でも、あんまりにも無邪気な顔で言われたから怒るに怒れなかったわ。

なんていうか子供みたいで少し可愛いかな？

こんなわけのわからない事に巻き込まれたのに少しだけ口元が緩むのを感じた。



マサ 視点

はて？ 唯君、何かおかしな事でもあったかね？ ちょいさっきまで混乱したり眉間にシワが寄ってけんど。

まっ唯もなんやかんやで楽しんでるつつうことかね？

と、まあそんなこんながありつつも、なんやかんやで街に到着。

「やあ！ ストツタの街へようこそ！！」

町に入って最初の住人、農家っぽいオツチャンが定番セリフを言っとなります。

つか、このオツチャン……。

「目の焦点あつてなくね？ つか何処見てんだ？」

「そっそうね、何か別のとこ見てる気が……」

唯も俺の意見に頷いてます、とりあえず手をひらひらしてみた。

「やあ！ ストツタの街へようこそ！！」

「それはもう聞いたけど……やっぱりココは日本じゃないんです

か？」

「やあ！ ストツタの街へようこそ！！」

「いえ・・・だから・・・」

「やあ！ ストツタの街へようこそ！！」

ふむ・・・そろそろだな、ン？ 何がとな？ 言わずもがな・・・

「なっ何この人！！ 非常識だわッ！！！！」

唯の爆発までの時間ですよい。

「まあまあ落ち着け唯君よ、さっきも言ったけどコレRPGらしいからな、セリフはコレしかねえんだろ？」

「えっ？ はっ？ ど・・・どういふこと？」

どういふことか・・・ふむ。

「まあアレだ、テレフォン・ショッキングのタ○さんと観客のやりとりみてなもん？」

何を聞かれても、そうですね！！みたいな？

「ハア、何となく言いたい事はわかるけど多分違ってると思うわ・・・

」

「うむ、ホントは俺もそう思う。」

「まっ多分ゲームかなんかの世界にポーンされたんだろ？ RPG  
って書いてたべ？」

「ポーンって・・・そんな軽い調子で・・・って、コレってララさ  
んの仕業？」

「まっやっぱし、そこに行き着くわな？ ララならこんくねえのメ  
カとか造れんだろうし・・・けど・・・。」

「それならそれでララなら一声くれえ掛けそうなもんだがな」

「こんなの作ってみたの〜皆でやる〜、みたいなの？」

「そう言われればそうかも・・・。」

「まっココで唸ってても仕方ねえ、とりあえずは探索探索！！」

「ハア〜〜やっぱり楽しんでるわね？」

「まあな！！ マサさん結構ゲーム好きだからね。」

「やあ！ ストツタの街へようこそ！！」

「まだ言ってたんだな住人Aよ・・・その職務に忠実な姿勢は買う  
けどな。」

「まっそんな仕事熱心な住人Aは置いといて、俺と唯は軽く街を巡

ってみる事に。

でスツタラスツタラ歩ってたら。

「マサさ〜ん！ 唯さ〜ん！！」

「マサ！！ 古手川！？」

美柑とリコに遭遇。

どうやらこの二人も招待状とやらでポーンされたらしい。

続けて、リトに春菜にも遭遇、一気に2から6人パーティーになりもつした。

で早速作戦会議。

「サクツとクリアするっことで、幸い敵・・・モンスターかはシヨボイし、なんとでもなんじゃね？」

「いや、それはマサさんだからだと思っ」

「「「うんうん」「」」

美柑のセリフに一同仲良く頷く、うむ早速パーティーの連携がとれてるな！！

「まあでも確かにクリアしないと元の世界には戻れねーって事だし・・・」

「だな・・・えっと春菜ちゃんと古手川はゲームとかやるの？」

「あつうちはゲーム機ないから・・・」

ほう、春菜はゲームしねえんだ、まあしなそうつちやしなそうだな。

唯は・・・。

「私は小さい頃、お兄ちゃ・・・ンツン、兄と一緒にやった事もあ  
るけど・・・RPGとかはさっぱりだわ・・・」

ふむふむ・・・前に某ドラゴンなアレなネタにはシツカリとツツ  
コンでた気がするが・・・まあいいさね、つうか。

「何故に、兄と言い直したん？」

「うっうるさいわね！！ 別にいいでしょ！！」

なんか怒られた。

「まあまあ、それにしても兄弟率高いね？ 私もお姉ちゃんいるし  
・・・」

春菜がまあまあってしながら兄弟率の高さを指摘・・・つか・・・

「ハイ！！ 俺、兄弟は疎か親のツラすら見た事ないんすけど！  
つかクソジジイとも血は繋がってねえんすけど！！」

バツと手を上げてそう言ってみた。

「「「「「」」」」」」

なんか一気にパーティーの雰囲気が悪くなった。

「いや、そんな暗くなられても？ イッツ・ジョークじゃん？」

「ブラック過ぎるわよ……っていうか、普通はそんなに明るく言う事じゃないわよ」

むむ……残念なり。

「じゃあちよつと深刻な雰囲気醸し出しながら……」

「止めてって！！マジで困るからッ！！」

リコに阻止された……。

「うう……迂闊だったかも……」

「いやさ、そんなに落ち込まれても……」

「リト頑張れ！！」

「俺に丸投げかよッ！？　っていうかマサのせいだろ！！」

まあ確かにそうなんだが……。

「春菜に気にしてねえから落ち込むのは止めろっつって来て」

リトに小声で伝言を頼む、自分で言えみたいな顔をしてたが強引に押し切ってGOさせた。

「あの、なんでリトに？」

「ン？ まあこの辺りで好感度を稼いがそうかなあと？」

はい、スツカリ忘れてるやもしれんがチーム『リト恋』の一貫です。

「あくなるほどく、っていうか・・・なんでマサさん人の事はアレなのに・・・自分の事は・・・」

「だよな・・・」

「そうよね・・・」

「ハア~~~~」

何故か美柑、唯、リコにため息をはかれた、なんでやねん？

とかコチャコチャやってる間にもリトが立て直し、再び作戦会議。

「唯と春菜はゲームは経験なしか」

先程の事を思い出して、そう話を振る。

「マサ君は・・・どうなの？」

「俺ア結構ゲームは好きだぞ？ RPGも普通にやる、寧ろ徹夜で

やるッ!！」

「ハア~~~~徹夜してまですることじゃないでしょ?」

むむ・・・唯に呆れられた。

「まあ気持ちはわかるけどな、ついハマって朝だったって事、俺もあるし」

「うんうん」

リトとリコの二人からは共感してくれたけどな、二人共わかっ  
ますな。

(あんまりハマって欲しくないんだけど・・・一緒に寝れないし・  
・・・)

美柑が何やら呟いてたが小声過ぎて聞き取れなかったッス。

「ンッン・・・とにかく、春菜さんと唯さんは経験がないって事だ  
ね?」

「まっ経験が役に立つかは、わかんねーけどな」

「いやいやリト君や、多少は役に立つと思うぞ? セオリーの的な意  
味で。」

「まあ、アンタ達、旅人かい!!」

「おうッ!? 何やらイベント発生か!!」



「寧ろプレイヤー」

と答えてみた。

「旅をするなら職業を設定しないと戦いには勝てないよ！ 町外れに転職屋があるから言っといで！！」

あっさりスルーされた・・・チクソウ・・・。

「まあまあマサさん落ち込まないで」

「っていつかさっき私にゲームがどうのって教えてくれたばかりじゃない」

美柑に慰められて、唯にツツコミを頂戴した。

まあ序盤でよくある説明キャラってヤツだろわな。

つか・・・。

「町に来るまでン間にガッツリ戦闘してきとるんだが・・・コレいかに？」

「その辺は気にしないほうがいいんじゃないか？」

リコの言う通り気にしない事にしました、まっ戦闘してたのにレベルとか上がんなかったし

その職業ってのを設定しねえとレベルが上がんねえとか、そんな

とこだろ・・・と思う事にしたんで、皆もその辺の事はヨロシクど  
うぞー!!

「とりあえず、その転職屋さんっていう所に行ってみよ」

と転職屋とやらにGOすることに、途中。

「にしても、あの村人、職業を設定とか身も蓋もない事を言うのね」

「んなこと言い出したら最初に会った住人Aもだろうに、筆ろ、い  
まさら、その事にツツコム唯の方が身も蓋もない気がすんだが？」

「うっ・・・仕方ないじゃないRPGなんて全然わからないんだし」

まっテレビ画面でやんのと実際に体験すんとの違いもあつだろ  
うけどな。

というような感じがありながらも転職屋に到着。

### 【転職屋】

わかりやすくそう書いとります、つかその下にあるバニーガール  
のイラストが微妙に不安を誘うんだが・・・。

『ガチャ・・・ギイー!!..!』

とりあえずは扉を開けて中へ。

「「「「よじこそ〜〜〜転職屋へ〜〜〜!!..!」」」

『ボタン』

入ろうと思っただが、とりあえず閉めた。

「ダメだ・・・なんか転職できない気がするわ、つか何故にバニーやねん？ 転職って言ってみりゃ就職みてえなもんじゃん？ だったら転職屋って職安みたいなもんじゃん職員がこんなんじゃ無理だろ？」

ええ転職屋の職員皆さん全員バニーガールでした。

つか、もうなんでやねん？

「アハハ・・・まあゲームだし？ ほら遊び人って職業もあるじゃん？ ゲームでは？」

いやさ、まあ確かにそうだけど。

「っていつか今の人達、同じ人ばかりだった・・・」

「グラフィックの使い回しだな・・・」

だな・・・。

「で、どうするよ？」

「どうするも何も職業設定っていうのをしないといけないんでしょ？ なら入るしかないわよ・・・っていうかあの人達ハレンチだわ・・・」

ですよねっ、と言っわけで再び中へ。

「」「よつこそ〜〜転職屋へ〜〜!!」「」

再びその出迎えでした、で、続けて。

「ここではプレイヤーそれぞれに適した職業を設定できま〜〜す  
!..!」

「職業を設定すると、その職業に合わせた身体能力や特技・魔法な  
どか使えま〜〜す!!..!」

ン!!..! 何ッ!!..!

「マジかッ!!..!」

「マジで〜〜す!!..! 設定しますか〜〜?」

「むろんだッ!!..!」

フフフ・・・とうとう夢にまで見たビームが撃てるやもしれん!!..!

まあ職によつてはだろうが、俺ならビームが撃てる職につけるは  
ず!!..!

「マサ・・・そんなにビーム撃ちたいんだな?」

「当然! 全、漢の夢だからなッ!!..! つか勝手に決めちまったけ  
どいいよな?」

いまさらながら全員に確認、全員大丈夫つてくれました。

で、律儀に待ってくれたバニーさんがそれを確認すると。

「ではで〜〜〜6名様、ごあんな〜〜〜い、転職〜〜〜ON！  
」

『ガコンー!!』

と壁から出たレバーを引き……。

『シュウウウウー!!』

『パツ!!』

あっという間に……。

【はるな：勇者 レベル 1】

「え……私、勇者!？」

【みかん：魔導士 レベル 1】

「いいね……これ……」

【ゆい：武道家 レベル 1】

「なっ何なの、このハレンチな恰好はッ!」

【リト：花屋 レベル 1】

【リコ：花屋 レベル 1】

「っていつかなんで俺とリコは花屋なんだよッ!」

「もつと使える職業とかあるだろッ!」

に転職……。

何やら唯、リトとリコが文句言ってるが……職業はランダムなんだと……つうか……つうか……。

「贅沢言つてんじゃねえよ、それはアレか俺への当て付けか、アアッン? 職業ないニートな俺への当て付けですかねエエ?」

「……うっ……す……すいません」「」

ギロリと睨むと三人共、謝ってきた……しかし。

「いいですね……職業がある人は……? おやおや春菜先輩は勇者ですか……? カッコイイツね……? 美柑先輩は魔導士、流石ツスわ……ニートな俺たあ一味も二味も違いますわ……」

残りの二人にも因縁を吹っ掛ける。

「うっ……うわ……」

「スツゴい、やさぐれてるよママさん」

ケッ……そりゃやさぐれもすんだろ? 俺だけ職業設定が出来

なかったしなッ!!

バニーいわく60億分の1の確率で職業設定できないヤツがいるんですと!!

ほぼ地球の人口分の1でジャスト、ドゥー、イットですよ・・・  
チクソウ・・・。

唯一の救いは・・・。

「一応レベルは上がりま〜〜す!!」

ってことくらいッスわ・・・。

「もうアレだわ・・・いつその事、この転職屋、更地にしちまうか・・・」

「やめなさいって!!」

武道家、唯に止められた・・・クソウ・・・。

「職についてる人には逆らえませんわ・・・ケッ!!」

「ほ・・・本格的にやさぐれてるなマサのヤツ」

「うっうん・・・ね、ねえマサさん、元気出して!! マサさんだつたら強いから大丈夫だって!!」

「そつそうね！！ 町に来るまでの間に沢山モンスターも倒せてたものマサ君なら大丈夫よッ！！」

「そつだよマサ君！！ マサ君が主力なんだよ！」

「ああ春菜ちゃんの言う通りマサだったら大丈夫だって！ なっ？  
なっ？」

とパーチーの皆さんの熱い友情パワーとミミのパワーでなんとか気持ちを立て直しました。

で、気持ちを立て直した後に改めて、みんなの恰好をみる。。

春菜・・・確かに勇者っぽい感じで剣を装備してます。

美柑・・・コレまた魔導士っぽい感じで本を持ってる、杖じゃねえんだな・・・まっ本の場合もあるわな。

リト・・・花屋っぽいエプロンに、ジヨウロを装備。

リコ・・・やっぱり花屋っぽいエプロン、こちらはハサミ。

で・・・唯。

「なんでチャイナやねん？」

「うっ・・・うるさいわねッ！！ 無職の人に言われたく・・・アッ！！」



そうツスよね・・・ええ、ホント・・・ええ。

「ホント・・・俺みたいなニートがでしゃばった事、言っただけホント・・・スンマセン・・・」

「ごごごごめんなさいマサ君！！　ホントわざとじゃないのよホントに！！」

「俺みたいなもんには気がつかなくていいツスよ・・・へ・・・」

立ち直るのに掛かったミ　ミ　の本数3本、何故か逆に唯が泣きそつになつてたんで寧ろ最後は俺が慰める感じになつたツス。

まあとにかく色々あったが無事転職を終えて、北の大地にいるつづつ大魔王を倒しに次の町へと向かったのだつた。

俺は転職出来なかつたけどなツ！！

## 第四十六話っばい感じ！（後書き）

後書き

色々悩んだ結果・・・何故かマサは職業設定無しに。

ちなみに職業候補は・・・。

【まさ：なんでも屋】

とか。

【まさ：超魔王】

とか、ありました、上はまだしも下はないですね、今思えば。

まあとにかく職業がないマサですが次回も頑張るだろうと思いま  
すので、お暇なら次回も見えてやって下さい。

感想などありましたら是非！！

第四十七話っぽい感じ！(前書き)

前書き

とらクエ2回目です。

やっぱりキャラがエライ事に・・・。

頭痛薬を持ってどうぞ。

## 第四十七話っぽい感じ！

「この森を抜ければ次の町だつてさ」

と美柑の言う通り、次の町に向かう為に森を通っております。

まつ森つつつても獣道つてわけじゃなくて人が通れるようにある程度は舗装されてんだけどな。

「大魔王つてなあどんなヤツかねえ、とつつあんぼつや、みてえなヤツかな？」

「いや、あんなの出てこられたらマサ以外対抗出来ねーから」

まあそう言われればそんなような気がするが。

「マサ君？ えっと・・・そのマサ君が言ってる人って誰なの？」

あ~~~~そういや、唯は知らねえんだつたか？

「ララの親父、銀河最強の魔王さんだと？ かなり強えぞ〜？ 下手すりゃ負けてたからなく俺ン中での強さランキング2位だな」

1位はむろんジジイ、1位と2位は、そうとうなバケモンでもねえ限りは代わらんだろうな。

「っていつかそれに勝ったマサ君って・・・」

「実質、銀河最強？」

ふむ・・・言われてみりや・・・でもなあ、上に一人いるのを身をもって知ってつから、そんな気は全然しねえわな。

「だから職業設定できなかったんじゃないか？ ほら最強キャラって足枷とかつく場合ってあるだろ？ レベルが極端に上がりにくいとか」

「そうなの？」

「いやさ、俺に聞かれてもなあ？ コレ製作したヤツじゃねえとなあ？」

「やっぱりララか？ でもなあ・・・さっき(前回)も言ったけどララじゃない気が・・・ふむ・・・」。

「大魔王って・・・ララさんかな？」

「うーん・・・ララさんならありえるけど・・・どうかしらね？」

「どうせだったら俺が大魔王に」

「やめなさいって、このゲームクリア出来なくなるでしょ」

残念で・・・ッ！！

「唯ッ！！」

「へっ?」

『グイッ!』

唯の手を引き。

『ベロンッ!』

唯の背後にいた毛むくじやら君、の舌を回避。

「残念!」

『ズドンッ』

更にそいつに蹴りッ!!

【敵があらわれた】

「表示遅えつつのッ!! っと唯、大丈夫だよな?」

「あ・・・うん、ありがとう」

「お気になさらずと・・・コレ、俺が倒す? キミら頑張る?」

パツと見、たいしたことなさそうなんで経験を積ませてみようと  
思います。

残りの数の三匹だし・・・。

『ギャオオオオ！！』

うーむ……空から何やら……。

「どどど……ドラゴンー！」

「嘘でしょ序盤だよッ！！」

慌てまくりの結城兄妹、確かに上を見たらでかいトカゲ……まあ完全にドラゴンですね。

よしゃッ！！

「俺はアレ貰うから、キミら、そっちな？」

『ダンッ！！』

そう言って近くの木の上に跳ぶ！！

フッ……マサさんが空中戦をこなせないと思っちなよ！！

・  
・  
・  
・

美柑 視点

「俺はアレ貰うから、キミら、そっちな？」

そう言い残してマサさんジャンプして木の上に、相変わらず凄いジャンプ力だな。

「っていうかマサあんなヤツ相手に一人で大丈夫・・・そうだな、マサだし」

「そうだね、マサさんだし」

リコの言葉に頷いて応える、なんせ銀河最強だもんね。

『グワア！！』

「きゃあっ！！」

あつ唯さん・・・しまった・・・コツチにも敵が居たんだつた、ドラゴンのインパクトが強すぎて忘れちゃってた！！

唯さんはモンスターに手を掴まれてしまってる、どうにかしな・・・。

「イヤーーーーッ！！」

『バキヤッ！！』

い・・・え？

【ベロモンBを倒した！】

「おおっ！！ 流石、武闘家！！」



うん、リトと言つ通り、キック一発で唯さんはモンスターをやっつけてた。

そういえば職業にあわせた身体能力になるって言ってたっけ？

「よーし俺もッ!！」

リトがジヨウロを構え、モンスターに水をかける。

【リトはジヨウロを使った・・・しかし効果はなかった!！」】

「そりゃそうだろうッ、つか何故、水をかけるッ!！」 殴るとかしらよッ!！」

【リコはリトにツッコミを放った!！」】

「一々表示するなッ!！」

ハハ・・・なんだろうコレ？ まあリコの言つ事はわかるけど・・・  
っていうかリトもなんで水をかけたんだろ？

『ガアアア!！」』

「うわあああ!！」

あ・・・やばっリトとリコが。

「リト君リコさん!！」

春菜さん!！」

二人とモンスターの間に春菜が飛び出して持ってた剣を横に振る。

「えいつー!!」

『ザンツー!!』

【ベロモンCを倒した!!】

凄い……。

「春菜ちゃん! テニス部仕込みの剣技!!」

「いや、リト…… テニス部で剣技は教えないと思う」

私もそう思う、まあ確かに何故か春菜さんが剣を振る時、テニスのラケットがダブって見えただけ……。

「うっ…… まっまあとにかく後一匹だ美柑、魔法で倒せッ!!」

「うん!!」

リトの指示に従って魔法を…… って今はどんな魔法が使えるんだろ? 持ってる魔法書を見してみる。

えーと…… 今のレベルで使える魔法は……。

「とりあえずコレでいいや!!」

適当な呪文を選んで。

「プリンー!!」

唱えてみる。

『カツー!!』

すると魔法書が小さく光った、うん魔法っぽい……でも……。

「どうな魔法だ？」

リトがそう言うけど効果は書いてないからどんな魔法かはわからないんだよね？

うん……。

『パラッスルッ』

ん……？ って……えっ？

「へっ？ ちょ嘘!!」

リコのエプロンが外れ、何故か上着がずり落ちて胸が……丸出しに……ってリコ……大きい……元、男なのに!!

『ボンッー!!』

【ベロモンドはうつとりしている】

リトはそんなリコを見て何時ものようにフリーズ、何故かモンス

ターは見とれてる・・・うん、リコ大きいしね・・・元、男なのに  
！！

「み・・・見るなりトオオオ！！」

『バゴオ！！』

「グハッ！！」

『グオオ！！』

【ベロモンドを倒した！！】

リコは胸を隠しながらリトを巻き込んでモンスターも一緒に倒す。

うん、すっかり立派な女の子だねリコ、胸とかリアクションとか  
胸とかねッ！！

「うう~~~~美柑・・・オマエ？　なんて事するんだよ~~~~」

涙目で訴えてくるリコ・・・うん、不覚にも可愛いと思ってしま  
った。

でも、やっぱり胸が・・・。

「ジーーーー・・・いいなあリコさん・・・」

わかる、とてもわかるよ春菜さん。

「よ・・・よかった私じゃなくて・・・」

「古手川・・・薄情だぞ」

「あっご・・・ごめんり」さん!..!」

ブツブツと恨み言を言うりこ・・・横にはりこの一撃で気絶中のりト。

「コレ・・・どうしよう?」

とりあえず、りこに謝っておいてりトは春菜さんに任せる事にした。

「マサ君は?」

唯さんの言葉で思い出し上を見てみたら・・・。

「次は回転だッ!..!」

『ギヤオオオ!』

楽しそうにドラゴンに跨がって遊んでいた・・・。

「アレって・・・どういう状況?」

唯さんの眩きにどう答えていいかわからない私だった・・・。

マサさん・・・予想外過ぎるよ。

・ ・ ・ ・

マサ 視点

「よつとツ！ じゃくなくあんまし人を襲うなよ」

『ギヤオツ！！』

ドラゴン君から下りて、手を振って見送る。

中々に人懐っこいヤツでしたなあ。

「マサさん・・・何がどうしたらドラゴンに跨がる事になったの？」

「さあ？ なんか懐かれた、つか寧ろリトに何があった？ ってあの毛むくじゃら共か・・・よし、絶滅させて・・・」

とか考えたたら、申し訳なさに、そーっとリコが手を上げる・・・  
ってオイ。

「リコかよツ！！ なんでやねん？」

「ハハ・・・ちょっとな・・・詳しくは聞くな」

虚ろな目のリコ、気にはなったが聞かない事にした、それが優しい。  
さだ。

まあリトも春菜に介抱されてっし、それはそれで役得・・・と思っ  
てくれてるだろうと信じてるぞ。

「で・・・どうよ戦えそうか？」

モンスターを撃退できたってこたあ戦えるんだろうけど一応は確  
認。

「えっええ、なんとか・・・」

「うん、私も」

「私はまだ呪文がわからないから・・・さっきのはアレだったし・・・」

唯と春菜は大丈夫っぽい、美柑は、微妙に目を逸らしてんな・・・  
もしや・・・。

「リトがああなったんで・・・」

「うっ・・・アハハ〜」

美柑が一枚噛んでるらしい、果たして何があったのやら？

「リトとリコはどうだったよ？」

グッタリ中のリトとガツクリ中のリコではなくて、唯に確認。

「結城君は・・・ちょっとわからないわ、でもリコさんは大丈夫じ

やないかしら？ まあ半分くらいはアレのせいだけど」

アレって何さアレって……さっきは聞かないようにしようと思  
ったが、非常に気になるじゃろ。

で、結局聞き出してみたら。

「えっと呪文で……プリンって呪文があったから」

『カツ！』

『ピン、ピンッ！……！』

「えっ！？」

ン……？ って……あっ……！

唯の服が……。

「は……ハレンチよッ……！」

唯が胸を隠しつつ殴りかかってきた、とりあえず避けて。

「なるほどね〜つかはよボタンしめなされ」

つつといた、したら慌ててボタンをしめとりました。

で、そんな唯に美柑が。

「…………ゴメンなさい唯さん、まさかアレで発動するとは思わな



くっつて!！」

と謝ってました。

「うう〜見られた・・・また・・・見られちゃった・・・責任を・・・」

「それはダメ!！」

コチャコチャやってる唯と美柑は置いていて。

「ゴールド回収すっか」

ゴールドを回収しときました。

その間に何とかリト、リコ、唯が立ち直ったんで。

「じゃ先に行きますか〜」

森を進むことに、町までどれくれえでつくかねえ〜。

・  
・  
・  
・

???  
視点

「流石ですね〜ドラゴンを手なずけるなんて」

「っていつかあの時点で、あんな強力なヤツ出ないよう設定したんじゃないのかよ?」

「フフ・・・そっちの方が刺激があって面白いじゃない?」

うわっ・・・楽しそうだな、やっぱコイツ腹黒・・・そう思った瞬間。

『ビュッ! ギチギチギチ』

クビにアイツの手が絡まってきた。

「ぐぎぎ・・・死ぬ～～死ぬ～～」

「よ・け・い、な事を考えるからよ?」

必死でタップしてなんとか離してもらったけど、マジで死ぬかと思っただ・・・。

「ハア・・・ハア・・・ハア・・・殺す気かって」

「大丈夫よ、それくらいじゃ死なないわ!!」

悪びれる様子もなく笑顔で言う・・・本気でコイツ怖え～～よ。

「フフ・・・捕われの姫を助けに来る勇者・・・ステキなシチュエーションよね」

「いや勇者はアイツの仲間だろ、アイツ無職じゃん」

「もう、夢がないわね」

事実を言ったただけだって、それにしてもアイツ・・・ホントに強えんだな・・・。

最初の町につくまでのモンスターとの戦い・・・圧倒的に強かった。

っていつか強すぎだろ？

『ジジツ・・・』

ん・・・何だ？ 何か見られてるような・・・。

『ブーン』

気のせいか・・・。

・ ・ ・ ・

マサ 視点

『バシッ！！』

【モンスターを倒した、リトはレベルがあがった！！】

「ふ~~~~けつこつやっつけたな」

【リト：レベル4 HP 18/32】

「そうだね、呪文も少しずつわかってきたよ」

【みかん：レベル4 HP 20/28】

「ゲームだけあって攻撃受けてもあまり痛くはないけど、流石に疲れるね・・・」

【はるな：レベル5 HP 20/28】

「ところで気になってるんだけど、このHPエイチピーってのは何なの？」

【ゆい：レベル5 HP 25/30】

「ああそれはHPヒットポイントって、なんて言えばいいかな・・・あっゲームん中の命のポイントみたいなものだよ」

【りこ：レベル5 HP 24/31】

「なあ・・・」

『サッ』

唯が明らかに目を逸らした。

「な・・・なくなると、どうなるの？」

「なあ・・・」

『サッ』

リトがやっぱり目を逸らた。

「ただ多分・・・せせ戦闘不能であーなると思う」

リトが指差す先にはズルズルと棺桶を引きずって歩く戦士っぽいオッサン・・・まあそれは別にいいんだ・・・。

「そろそろ俺から目を逸らすのをやめろッ!!」

【まさ：レベル@ HP £ # & # @ / # \* # + #】

うん、なんか俺のステ表示だけ明らかにバグってるんすよ、そしてレベルも上がないんすよ・・・。

つつかレベル@ってなんだ@って聞いたことねえよ!!

確かに俺、バグキャラつつってるけどさ、そこまでバグにしなくてもいいと思うんですけど!!

「マサ・・・どんまい!!」

「気にするわッ!! 何イジメなの？ 転職できないわ、ステ表示はおかしいわ、完全にイジメじゃん!? アレか俺みたいなもんは

アレか？ ゲームの世界でも通用しませんよってか？ そこまで社会不適合者かコラッ！！ よし、もういい、もう決めた俺が大魔王に成り代わったらアアア！！」

この世界に恐怖を振り撒いてやらアアアア！！

「おっ落ちていてマサさん、ねっ？ ねっ？」

「そうよマサ君！！ 大丈夫、大丈夫だから」

「フハハハ！！ まずはあの町から破壊しつくしてやるわッ！！」

大魔王マサの降臨じゃアアア。

「『『『『『やめろー！ー！』』』』』」

結局パーティー全員の説得により大魔王マサの降臨は防がれた。

だが人々よ・・・覚えておくがいい・・・。

「俺が覚醒（八つ当たり）するのは時間の問題だということ・・・

「イヤなフラグを立てるなッ！！」

そら立てたくもなるつつの・・・なんで俺だけこんななんだ  
チクソウ・・・。

「まっ・・・まあとりあえず暗くなってきたし、そろそろ宿屋で休もうよ、町もあるし」

若干モヤモヤが残りながらも美柑の言う通り町に行って宿屋に泊まることに・・・だがその前に。

「道具屋に行きてえミ〇ミ〇がもうない」

「売ってるのか？」

「売ってなかったらマジで一暴れしてしまつやもらん」

「やめなさいって・・・」

「マサ君、ホントに暴れそう・・・売ってることを祈ろう」

・  
・  
・  
・

はい、町へと到着。

「クク・・・旅人とは珍しいな・・・ここはへボンの村だぜい」

んなこたあどうでもいい。

「道具は何処だ!?!」

「クク・・・旅人とは珍しいな・・・ここはへボンの村だぜい」

フツ・・・。

「道具屋は何処にあるか聞いてんだポケエエエ！！　しゃきしゃき  
答えんかいイ！！」

「わぁー！マサさん落ち着いて落ち着いて！！」

はっ！！　イカンイカン大分ささくれ立ってる・・・。

「すまん、もうね、なんかね、色々とね、限界なんです・・・ミ〇  
ミ〇が飲みたいミ〇ミ〇が飲みたい・・・飲みたいよ〜」

つい膝を抱えてまいりました・・・ミ〇ミ〇が飲みたい・・・。

「うっ・・・可愛い・・・」

「ああ・・・可愛いな・・・」

「言ってる場合じゃないだろ！！　マサ、今古手川が道具屋を見に  
いっけてくれるからな、もう少し我慢しろよ？　暴れるなよ？」

頑張るツス・・・でも無かったら・・・。

『タツタタタ』

「マサ君、ほらあったわよ」

「唯、大好き！！」

『バツ！！』



唯が持つ、ミ○ミ○を見て、つい感極まって抱き着いてしまいました。

「「アア~~~~~!!」」

「ツツツ!! ままママサ君!？」

なんかてんやわんやになってるが今はミ○ミ○優先。

ミ○ミ○美味え~~~~~。

「だ・・・抱き着かれた・・・マサ君に・・・抱き着いた・・・マサ君に・・・」

「わ・・・私が買ってくればよかった・・・」

「次は・・・うん・・・」

「アハハ・・・何か大変な事になっちゃってるし」

「マサ・・・かなり追い詰められてたんだな」

リミットブレイク寸前だったからな・・・今は大分落ち着いたけど。

っつ・・・。

「いや~~~~すまんな唯、色々とテンパってた」

「べ・・・別に・・・は・・・ハレンチだけど・・・その・・・う

うゝゝゝ」

ものっそい赤くなってた、流石に反省、以後気をつけよう。

まあ同じ状況になったら再びあなる気がするが・・・。

とか脳内コチャコチャしつつも宿屋へGO。

「いらっしゃい、6名様ー泊食事付きで180ラブルになります」

ゴルドの単位はラブルらしい・・・っと。

「おっちゃん、二部屋だぞ?」

「お値段は倍になりますか?」

「よかよか、金・・・ラブルか? はそこそこあつから」

結構モンスター狩りましたしな。

「では、360ラブルです、2階へどうぞ」

チャリーンとラブルを払って2階へ。

「俺とリトが同じ部屋な?」

「そりゃそつだろ」

「えっ？ 私同じでもいいけど？」

ふむ……まあ確かに美柑はしょっちゅう俺の布団に潜り込んで来てるが……。

「だ、ダメよ同じ部屋なんてハレンチだわッ!!」

「と、委員長が申しておられるんで別部屋で」

「うーん、仕方ないっか……あっシャワーあるんだ、結構汚れたし浴びてこよっと」

ペタペタとスリッパの音を響かせて美柑はシャワーを浴びに。

「欲を言えば風呂がありゃよかったんだけどな〜シャワーはどうにも……いつそ作るか？」

「勝手に作るのはダメだよマサ君」

「ですよ〜」。

しよーんなか、今日はシャワーで我慢すっか。

「じゃ俺らは部屋に行くから」

「何かあつたら呼べよ」

とリトと二人で部屋へ。

「さって……トランプとかありゃあな〜」

「二人でやつても詰まらないだろ?」

「寝るまでの間は、みんな呼べばええやん」

「あ~~~~そう言われたら・・・でも、みんな疲れてるだろうし」

ふむ・・・そう言われりゃそうだわな〜俺アめっさ元気なただけどな。

『ガチャ』

おっ?

「マサ、私達は全員シャワー浴びたからオマエらも浴びてこいよ」

どうやら女子組が浴び終わったらしい。

「じゃリトからでいいぜ、俺ア最後でいいからよ」

「ああ、サンキュー、じゃ浴びてくるよ」

リトを送り出し、今は部屋にリコと二人。

「待ってる間ヒマだろ、私達の部屋に来るか?」

「お〜行く行く」

リコに誘われてリコ達の部屋へ、あっ一応、リトには書き置きは残しといたぞ。

で、リトがシャワーを浴びてくるまでの間はリコ達の部屋に何故かあったトランプをして過ごす。

ちなみにババ抜き、中々に白熱中。

美柑は結構ポーカーフェイスで強い、春菜も若干表情に出るが、感がいいのかジョーカーを上手く避けてる。

で唯は……。

「コレね……うッ!」

「顔に出過ぎだろ?」

めっさわかりやすいッス、リコも言わずもがな。

俺? 俺は……。

「ほい、コレ……うしツと!」

サケサクと手持ちのトランプを減らしてますよい。

こつこつのはそこそこ強いッス。

『ガチャ』

「マサ?」

おっと、リトがシャワーから上がったか。

「リト、タッチ」

「えっあっ、ああ」

リトに勝負を託し、俺はシャワーを浴びに……っと。

「覗いちゃや〜よ？ 特に美柑!」

「名指し!」

いやさ、毎度毎度プレデターの目で見られりゃ名指しにもなるだろっに。

とか思いつつ部屋を出てシャワー室へGO。

サクッと服を脱いでシャワーを浴び……。

「ジーーーーッ」

浴び……。

「ジーーーーッ」

浴び……。

「脱がないのですか?」

「オマエが見てなければな、ヤミっ子」

はい、二階にも関わらず窓から視線を感じそっちを見て見れば何故かヤミっ子がプレデターの目でコッチを見てやがりました。

「気にしないで下さい・・・私は通りすがりのウサギさんです・・・  
ピョン」

いやさピョンとか言われても・・・確かにバニーの恰好だけど。

【やみ：遊び人 レベル1】

どつやらヤミっ子は遊び人に転職したらしい・・・。

まあ正直・・・。

「バニーは無理があるだろ？」

色んな意味で？

『ピキッ』

「うさぎさんは傷付きました・・・斬ります」

中に入り込んで来て斬りかかってきたんで『素手バリア』で防いでからたたき出しました。

いや、可愛いっちゃ可愛いかったんだけどな、やっぱり無理があった感否めなかつたんで。

反省も後悔もしてねえッス。

今だにシャワー室の外で、わーわー言ってるけど。

「入ってきたら、ゲンコだからな」

ついたらようやく大人しくなりました、まあ後でタイヤキを作る事になりそうだけど。

何故にシャワーに入るのにこんな苦労せないかねん。

そう思いながらシャワーを浴びる俺で・・・。

「「そーー」」

「バレてるからなッ!」

『ガスッ!』

「痛ッ!」

『ガンッ!』

「痛いです・・・」

美柑とヤミが覗きにきやがりました・・・つか唯も抑え・・・。

「やっぱり・・・凄い・・・って何やってるの私ハレンチだわッ!」

フツ・・・唯・・・リコに春菜も居やがるし。

「出てけバカタレ共がアアア!」



『ガスッ！ ガスッ！！ ガスン！！！！』

前にも言ったが普通は逆！！

・  
・  
・  
・

ちよこつと???.? 視点

「もう湯気が邪魔で大事なところが見えない」

「おい・・・ちよつと変態っばいから」

「何言ってるのアナタだって最初興奮してたでしょ？」

「うっ・・・」

確かにちよつとだけしたけど・・・、いやだってあんなに凄いと  
は思わなかったし・・・。

「ああ~~~~湯気邪魔~~~~!!」

アレはちよつと・・・な~~~~。

さっきのミ〇ミ〇だったけ？ がなくなってた時のアイツを見ての  
反応もやばかったし。

「ゾクゾク・・・もうちょっと追い詰めてみたい・・・ポッ」

だぜ？

コイツ、どんだけだよ・・・。

「もう少し、もう少し~~~~~!!」

コイツ、マジでヤバイんじゃないかなと思った私は悪くない。

第四十七話っばい感じ！（後書き）

前書き

????・・・丸わかりだと思いますが、まあ一応って事で。

なんかモ・・・ゲフンゲン・・・アノ人がヤバイ感じに・・・フ  
アンの方、ホントスンマセン。

気付いたらこんなことに・・・。

次回・・・次回もヤバイ感じになるやもしれませんが、宜しければ  
また見てやって下さい。

感想などありましたら是非！！

## 第四十八話っぽい感じ！（前書き）

前書き

書き分けが~~~~書き分けが~~~~。

相も変わらず書き分けが下手くそですが、頑張りました。

クスリを持ってどうぞ！！

## 第四十八話っぽい感じ！

シャワーを浴びた後、ヤミも仲間に加わったって事で寝るまでの間、軽く作戦・・・つつか方針？ 会議。

「あ・・・あのマサさん、私達、何時まで正座してれば」

「アアン？」

「・・・なっなんでもないです」

はい、俺とリト以外は全員正座させとります、ゲンコはしたが、まあ一応って事で。

「マサナリ・・・足がしびれてきました」

「後10分じゃッ！！ なんだったらソロバンの上でさせてやるーか、アーン？」

地味に痛えぞ〜。

「マサ・・・まあ気持ちはわかるけど・・・ほら、もっそろそろさ？ 話もはかどらないし」

ふむ・・・まあ確かにリトの言う通りっちゃ言う通りだわな。

「よ〜し、足崩していいぞ、リトに感謝するよ〜」

仕方ないんで正座解除をしてから、話をすることに。

「ヤミはなんか情報ねえの？」

今まで一人で行動をしてたんで何かしら俺らが知らない情報を持つてるやもと、思い聞いてみる。

ヤミは軽く手を顎にあて思案のポーズ。

「そうですね・・・ここから一つ先の町のカジノにあるスロットは右から二番目が当たりが出やすいらしいです」

ほづほづ、ならその台をブン回すってことで・・・。

「ヤミさんヤミさん、いくら遊び人だからってカジノの情報はちよつと・・・」

ハッ！！ イカンイカン・・・ナイス美柑、危うく情報に躍らされる所だったわい。

にしてもヤミっ子・・・キツチリ遊び人してんだな・・・まあやっぱしバニーは無理があると・・・。

『ジャキン』

ヤミの頭のうさみみは刃物になるらしい、思っくそ喉元に突き付けられました、まあ・・・それでも。

「あえて無理があると俺は言うっ！..！」

「斬ります!!」

避けまくりました。

その後、部屋で暴れるなど唯に怒られたりとかあったが。

めぼしい情報はなしってだったんで本日は就寝。

情報収集も明日に回すって事に。

ちなみに、むろんヤミも女子組の部屋だぞ。

まあベットが三つしかないってんで俺らの部屋にあったベットを一つ持って来たが。

それでも一個足りねえけど美柑とヤミが同じベットで寝るってことで落ち着きました。

で部屋に戻った後、やっぱり疲れてたんかりトは即効でグッスリ。

俺も寝るかと思ってたら、コンコンと窓を叩く音。

はて・・・と目を向けると、何やら派手な柄のトリが窓をクチバシで突いたりしました。

「なんぞ?」

とりあえず窓を開けてトリに接触。

『クアークアー!!!』

ふむ……。

「はあ？　つか姫って誰よ姫って？」

『クア!!!』

「はい？　マジか？」

『クアークアークアー!!!』

マジらしい……。

あつー応、通訳いるわな、簡単に言うなら大魔王の城に捕われの  
姫さんが居るらしい。

で、その姫さんってのがララ、もし助けたくば、我が主、大魔王  
様を倒してみよ〜。

『クアーアークアクアクア!!!』

「うるせーつづの、焼鳥にしちまっぞ」

高笑いまでつけやがってからに。

にしても……ふむ……やっぱりララが噛んでたつづことか？

な〜んか俺の感からして違う気がすんだよな〜、かといって……  
このゲームん世界……どうにも温い気がするしな。



恨みを買った覚えはありまくるが……わざわざこんな温い事するわきゃねえし……。

愉快犯……か？

まっいいさね。

『クアークアクア!!』

っと……まだいたんだな派手ドリ……って何？

『クアツ!!』

何やら不穏な事を言い残して派手ドリは飛び去っていった……。

あつ、不穏な事って何かって？ ふむ……それは……。

『ズシン……ズシン……』

置き土産があるんですと……。

チラツと窓から外を見る、外には宿屋よかデカイおっさん……がコツチを覗いてやがりました、やっぱアノ派手ドリ、焼鳥にしちまえばよかった……。

【大魔王の刺客 ゴーリキがあらわれた!!】

いや、だから遅えーつうに、ってヤベツ!! おもっくそこん棒振りかぶってやがるし!!

リトは……。

「グウ~~~~春菜ちゃん~~~~ん……」

良い夢見てるっばいな、起こすのも可哀相か。

『グツ!~!』

窓に足をかけて振りかぶってる、こん棒に向かい跳び……。

『ガアアアアア!~!』

「だらっしゃ!~!」

右足で蹴るッ!~!

『バゴオン!~!』

よしっ武器破壊成功。

そしてスタツと宿屋の外に着地。

『グオオオオオ!~!』

武器を失いながらも、俺を踏み潰そうと足を持ち上げる、ゴォリキ君。

つか……。

「夜中だつつに・・・近所迷惑だろうが・・・この・・・」

それを、ヒョイツとかわし・・・再び跳びヤツの頭上へ！！

そして右足を振り上げ。

「デカブツがアアアア！！」

『ギャゴンツ！！』

脳天へと叩き落とす。

『ボウンツ！！』

はい、終了つと。

「マサ！？」

「マサさん何があつたの？」

あれま、結局リト達起きてきちまつたか、まつそら起きるわな・・・。

「ちいとデカブツ退治をしてただけ」

「戦闘があつたのですか？」

「そつそ、まつサクツと終わらしたから問題ねえよ・・・あつ・・・と一応情報ゲットしたから・・・まつ明日の朝に話すから今日は寝

るべし」

寝れる時に寝とかんとアレだしな。

「えっ……でも……」

「はいはい、寝不足は美容の天敵ですよ、明日、明日!!」

唯が食い下がってきたけど、そう言っただけで寝かせました。

そして翌日。

「カクカクシカジカってわけでララは魔王城にいるんだと？ まっやるこたあ大きく変わんねえ大魔王撃破ってな？」

朝ミ○ミ○をしつつ話します。

「ってオイ!! マサなんでそんなに落ち着いてんだよララが掠われてるってことだろ!？」

「もしかしたらララさんがグルだって考えてるの？」

「どっちも外れな気がするわ、ホントにリトの言う通りだったら手口が温すぎる、俺ア恨まれてる自信はあっけど……」

リトリコに美柑、唯、春菜は、恨まれるってヤツらじゃねえ、ヤミは……まっ暗殺者やってた都合上、多少はあっかもしんねえけど」

「一応まだ廃業はしてませんが……確かに多少はあるかもしれませんが」

因果な稼業だしな、つうか、まだ廃業してねえーんだ？ まっ上に一応ついてついてるぶんマシか。

「さらに言えば、もし俺らをこのゲームムん世界に閉じ込めんのが目的だとしたら、わざわざクリアしたら出れますよ〜って言うか？」

俺だったら放置するね。

「「「「「あつ・・・!!」「」「」」」」

ヤミ以外が、言われてみりゃって顔してる。

「まっ半分くれえは勘だけどな？ ララが一枚噛んでるつつのもの、俺の勘じゃ外れな気がする」

「私もそう思います」

おっヤミもか？

「つつわけで、会議終わり、まあそのうちに色々とわかってくん  
だろ？ サクッと次の町に行くべ〜」

多少、無理矢理感はあるけど、そうしめて次の町へGOする・・・  
前に。

「ってヤミっ子、それ何よ？」

フと気付いたらヤミっ子が宝箱を抱えておりました。

あっ最初に気付くべきだろ？ とかそういうのは無しの方で。

「昨日、マサナリが戦闘をした場所に落ちていました」

ふむ・・・ようするに戦利品って事か？

「何が入ってんだろ、開けてみようぜ」

「危なくないの？ 罠かもしれないわよ？」

唯、中々によいとこついてるな、たまに宝箱って罠とかある場合もあるしな。

でも、まっ・・・。

「大丈夫じゃね？ 勘だけど」

そこまでイヤな予感はしねえし。

「勘って・・・それで大丈夫なのマサ君？」

「意外と勘は働くんですよい、こついう場合は直感に従うのが吉と出る」

まあたまに大凶とか出るけどな。

「大凶だったら大凶だった時って事で。」

「では開けます」

「待て待て待て、一応は俺が開けるわ、仮に爆弾的なもんだったらアレだしな」

俺だったら多少、服が焦げるくらいで済むし。

つつわけで、一応はパーチーのメンツには少し離れてもらい宝箱をオーブン。

### 【魔王城への道】

というアイテムが入っとりました、見た目はなんかペンダントっぽい。

それを手に取り。

「爆弾じゃねーみてえ……ン？」

そう言った瞬間……ペンダントが光り……。

『カツ!』

危ないと思ったんで。

「そーいッ!」

『ヴォオン!』

空に向かって、そーい、しました、いや、危なかった。

「今の光って何だったの!？」

「わかんね? やっぱ爆弾の類だったんかねえ」

「畏じゃねえと思ったんだけどな、まあ勘が外れる事もあるわなあ。

「あ・・・あのマサさん」

「残念と思ってたら微妙に顔が引き攣ってる美柑に話しかけられた・・・何か手に紙、メモみたいなんを持っているが・・・はて？」

「アレ・・・爆弾じゃないみたい、ほら」

「ン・・・美柑が差し出したメモを見てみる・・・。

「何々、アイテム『魔王城への道』はワープアイテム!!」

「一気に魔王城へと乗り込みたいアグレッシブなアナタにピツタリ、コレを使えば魔王城へひとつとびだ!!」

「か・・・ふむ・・・やっちゃったぜツ!!」

「グツとナイススマイルでサムズしてみた。

「アホーーーー!! マサ、おまつ、なにしてんのツ!？」

「やっちゃったぜ!! じゃないわよ!!」

「だってさあ、そんな言われても・・・。

「後の祭なんだぜツ!!」



またまたナイススマイルでサムズってみた。

「アハハ・・・最短ルートが・・・」

「あ~~~~どうすんだよ」

「過去は振り返えないんだぜツ!!!」

と、魔王城への最短ルートを自ら、そおーい!! した俺達パーチーであった。

まあ、そおーい、したの俺だけどね!!

.....

???  
視点

「あつ・・・アホ過ぎる・・・」

アイツは私の予想よりアホだった・・・っていうか折角、コッチがお膳立てしてやったってのに。

「なんで放り投げるかなあー!! マジ、アイツ有り得ねーよ? もう気遣い台なしじゃねーかよツ!!!」

。さつきはちょっとは頭回るんだって関心してやったつーのに……

アイツやっぱただのアホだ……。

「なあ、どうする？ もう一回、送るか？」

「うん……また放り投げられるかもしれないわよ？」

だよな……、いや……流石のアイツでも。

「二度は無えーだろ？」

「そうね、あつ！ それだったら一応イベントとして事前にどう  
いうアイテムが手に入るって前置きをしてから渡しましょうか」

ああ……、それだったら大丈夫だよな、元々どんなアイテムが  
わからなかったってのも原因の一つだし。

「それじゃあ私は少し設定を弄ってくるわね？」

「ああ、わかった」

そう言って部屋を出ていくアイツ、ってん？ あの横に見えるの  
は……。

『プーン……』

あつ……飛んでつちまった……まっいつか。

アイツが戻ってくるころには姉上も目を覚ますだろーし・・・コ  
ツチはコツチで軽く準備しとかねーとな。

・ ・ ・ ・

マサ 視点

『ビュオン！！』

クマっぽいモンスターから振り下ろされる爪をかわしながら懐に  
入り、腹に蹴り。

ガクンと腰を落としたモンスターに鼻っぱしら反対の足で跳び膝  
を叩きこむ。

さらにその肩の部分足をかけて跳び上がり後ろに控えてたトカゲ  
男の顔面にバッター蹴り。

『ズザーー』

軽く滑りながら着地、同時に近くにいる馬ツラにダッシュ。

ガツと顔を掴み・・・。

「ツラアー!!」

『ゴシヤン!!』

地面へと叩きつけた。

さって……次は……。

『ヒュッ!! シヤコン!!』

「話になりません」

『バララ……』

ヤミが片付けてくれたみたいね。

【てきを倒した!!】

「お疲れヤミっ子」

「疲れてませんが」

軽く手をたたき合う俺とヤミっ子、確かに疲れてはいないわなあ。

「っていうかいまさらだけど二人共ゲームバランス無視しまっくてるよな」

「まあ、頼りになるけど」

ハッハッハ、唯さん照れますがな。

「マサさんは、まあアレだけど・・・ヤミさんが倒しても経験値入らないんだ？」

それは俺も思った、さつきからヤミっ子、レベル1のまんまなんですわ。

俺は相変わらずレベル@つつつ、わけのわからんレベル。

「なんでやる？」

「ゲームの設定を無視してるかだろ？」

むむ・・・そついや変身トランスして斬撃でぶっ倒してるもんな。

「些細な事です」

「それもそうな、別段困ってるわけじゃ、ねえし」

キツチリ、ラブルは出るしな。

個人的にはレベルは上がってもらいてえけど・・・つか。

「@マークの次のレベルってなんなんだろうな？」

実に謎ですわい。

まあどちらにせよ上がらないもんは上がんねーですけどねッ！

っとイカンイカン・・・このままでは大魔王になってしまっつ。

ミ〇ミ〇して落ち着く。

「次の町って・・・確かカジノがあるだったか？」

「そんなことしてる場合じゃないでしょ」

むっ・・・ぶっちゃけ、ちよつとカジノで遊ぼうかと画策してたんだが唯にコラッてされた。

委員長にガキ大将は逆らえないのだ、まあたまに逆らうけど。

「あっ・・・見て看板がある」

ン・・・おっ確かに春菜の指差した先には看板が。

何々・・・。

【ココから先、東カジノ 西 港町】

か・・・。

「個人的には東に」

「ダメよ西!!」

やっぱりね、つうわけでカジノは諦めて港町へと向かいます。

で、襲ってくるモンスター達を、主に俺とヤミで倒しつつ、港町へと到着。

意外と近かったツス。

『パンパンパーン!!』

って、うおッ!?

「なんだあ?」

町に入った瞬間、何故か派手な出迎え。

「おめでとございます!! アナタ達はこの町に来た10000組目の旅人です!!」

ほうほう、よくあるアレってことか? つまりコレはイベントですな、つかコイツなんか秘書っぽいメガネだし。

「ではでは記念すべき10000組目の旅人のアナタ方には・・・この町の秘宝、町長が偶然拾ったアイテム、コレがあれば魔王城へ、ひとつとび『魔王城への道』を差し上げたいと思います」

おう!?! それって・・・。

「マサ君が放り投げたアイテムね」

唯よ、確かそうなんだが、そんなジト目で見るのはやめれ。

「まあまあ唯さん、でもラッキーだね、コレで直ぐにでも魔王城

に辿り着けるよ」

美柑の言う通りだわな。

「っていつか偶然、拾ったアイテムが町の秘宝って……しかも、それマサが放り投げたヤツじゃ……」

「リコ君それは言わない約束だ」

まあ正直、俺もそう思ったけどな、まあなんにしても、そのアイテムが手に入るんだから結果オーライってこと……。

「でもでも……流石にコノ町の秘宝をタダで差し上げるわけにはいきません……ですので……」

にはならないようだ……。

キラツと秘書っぽい人のメガネが光る。

「私達が用意した課題！！　これをクリアしていただきます、どうですか？　やりますか？」

課題……ねえ？

当然、俺はやる気だが……はて、皆はどうじだろ？　一応は確認。

「私はやってもいいと思う」

「そうですね、私も参加して損はないと思います」



「だな、春菜ちゃんは？」

「いいんじゃないかな？　ねっ唯さん？」

「そうね、早くクリア出来るのに、こしたことはないし」

「ってわけでマサ」

全員賛成って事により。

「課題でもなんでも持ってこいやッ！！」

一度、そーい、したアイテム『魔王城への道』を手に入れる為のイベントに挑戦することになりました。

つか・・・リコじゃねえけど・・・なんか非常に損してる気が・・・まっいいさね。

とにかくチャッチャと課題とやらをクリアしますかね。

．．．．

「お見事でした！！　では約束通り『魔王城への道』を差し上げます」

ン？ えっ何？ いつの間に課題が終わったんだって？ まあそれはアレだ、なんか気付いたら終わってた。

いや別にアレだから課題考えるのがアレだったとかそんなんじゃないから。

ホントそういうことにしといて下さい、皆もあまり触れたりするなよ？ マサさんとの約束だ。

「課題・・・どんな課題だったのでしょうか？」

「触れるなっつーに！！」

ヤミっ子め、デリケートな部分だっつうのに。

「アハハ・・・まあとりあえず、アイテムも手に入った事だし使ってみよ」

うむ、ナイスフォロー美柑。

ってなわけで、甲が乙して何した結果、手に入れた『魔王城への道』を使ってみる事に。

『カツ！！』

つと光り始める『魔王城への道』一瞬、また、そおーい！！しようかと思っただが流石にやめといた。

偉いぞ俺!!

とか考えてる間にも……。

『ヴンッ!!!』

移動……ワープか? 終了したらしい……つか……うん。

「コレ落ちるな」

はい、ワープした地点は地上から若干、離れた空中でした。

『バサッ!!!』

ヤミはトランスで羽を生やして浮き、更に髪もトランスして近く  
の美柑と春菜、リコを掴む。

俺は俺でリトと唯を回収。

「よっつ」

スタツと着地。

ヤミもユツクリと降りてくる。

「マサ、サンキュー助かった」

「ありがとうマサ君」

「お気になさらず」

二人に礼を言われたんで、そう返し。

「ヤミもナイス!!」

「お気になさらず」

俺のマネをしたらしい、若干、得意気な顔が可愛いッス。

「み・・・見ろ、アレが・・・」

「大魔王さんの城ってか？　つか崖の上って・・・立地条件としてどうよ？」

土砂が起きたら一発でアウトだぞ。

「いや・・・その感想ってどうなの？」

俺の感想に呆れ顔の唯さんです。

『皆さーんッ!!』

ホワツツ？　今の声って・・・。

「ペケ!!」

はい、なんか半泣きで走ってきてるペケでした。

「よおペケ、オマエさんもコツチに来てたんだな？」

「ハイ、ララ様が招待状とやらを受け取って私も一緒に・・・ララ様はずっと眠っておられるし・・・それで私はなんとか助けを呼ぼうと城から抜け出して来たんです」

ほうほう・・・。

「ララはここに居るつうことで間違いなさそうね・・・つか寝てるって・・・ネボスケめ・・・」

叩き起こしてやらにゃアイコンな。

「ネボスケってマサナリ殿・・・と・・・とにかく私がララ様の所までご案内します、早く！！」

ってなわけでペケの案内で魔王城へと侵入。

「ねえ、ペケ、コレってララさんの仕業なの？ ココって別の惑星？」

城の中を進みながら、美柑がペケにその事を聞く。

「いえ、違います、よく調べてみないとわかりませんが歪曲空間を利用して作られた電腦世界だと思われます」

「電腦世界？」

「まんまゲームの世界つうことったる？ でララの仕業なのか？ 違うっばい気がすんだが」

『それも違います、ただ……この空間、どういうわけか構成パターンが以前ララ様作りかけてやめた3D体感ゲームに似ています』  
なるほど……間接的には嚙んでるってことになるかねえ。

もしくは……その作りかけの3D体感ゲームってのをパクった？  
どうやって……だ？

簡単にパクれるもんなのか……。

「マサ君!?!」

アン? どった唯……って考え事してるヒマはねえっばいな。

【てきがあわれた!?!】

「ってアレ勝てるのかよ!?!」

「私達、まだ低いままじゃん!?!」

流石は魔王城ってだけあって、中々に凶暴そうなのが、どっちらり出てきやがった。

まっ……。

「邪魔……ッ!?!」

「邪魔です」

『ズドツ！！ ガキヤ！！ ズバン！！！！』

瞬殺。

「悪いな、降り懸かってくる火の粉はってヤツだ」

「相手が悪かったですね、では行きましょう」

ラブルは・・・まっどうせ直ぐにクリアっすからいいか？

と、思ったが何故が回収しないと怒られる気がしたんで回収。

「やっぱりこの二人って・・・」

「バランス無視だよな・・・」

黙りゃんリトリコ、無事に進めるんだからいいじゃねえか。

「まっララがこの城に居なかったら城ブツ壊してんだけどな」

「それって色々どうかなーって思うよマサ君」

残念。

まっ半分は冗談だけどな。

「オーホホホ！！ お待ちなさい！！」

むっ・・・今の高笑いは・・・。

【てきがあらわれた！】

あっ・・・敵なんだ・・・。

「沙姫達・・・敵だったんかよ？」

はい、敵としてあらわれたのは沙姫達でした。

ちなみに凜は・・・忍者っぽい恰好、背中に剣を背負ってる、うん、まだ解る。

綾・・・魔法使っぽい恰好、杖装備、おけ、全然大丈夫。

だが・・・。

「沙姫！！ オマエはダメだ！！ 何その恰好？」

「そっそうよハレンチよッ！！」

はい、沙姫の恰好は大分アレな感じですが、オマエどごその女王様だっつう感じのボンテージ衣装、やっぱり鞭装備。

「だ・・・だ、ダメって、マサナリさん、これは女王クイーンに相應しい恰好ですわよ！！」

いやさ、まあそう言われりゃあそうなんだが・・・。

「凜・・・オマエも止めようよ、ある意味クイーンだけと違うクイ



「インだろっに」

「すまない、沙姫様が気にいつていたのでな」

「気にいつてんだ？ まあ趣味は千差万別だしな。」

「ほどほどに・・・な？」

「ななななんですの、その優しい目は、何かとっても悲しいですわッ！ー！」

「お気に召さなかったようだ、っと・・・イカンイカン、沙姫で遊んでる場合ではござらん。」

「ほいで・・・沙姫達・・・敵なワケ？」

「うっ・・・それは・・・」

「ン？ どつたんでしょ？ 何か葛藤してるっばい。」

「大魔王に協力したら元の世界に戻れると聞いていたので・・・まさか相手が政成達だとは思わなかったのだ」

「ふ~~~~ん・・・ン？」

「なあつつこたあ大魔王とやらを見たのか？」

「大魔王かはわかりませんがフードで顔を隠した人達にそう頼まれましたよ」

ほうほう……人『達』 複数か……ソイツらが黒幕ってこと  
だわな。

「何人居た？」

「二人だ」

二人か……二人？

「男、女？」

「女だ」

ふむふむ……二人組、女……ねえ……で、こんな事が出来  
るヤツ……やっぱ宇宙からお越しだろう……。

ン……二人組……女……宇宙からお越し……むむ……  
な……んか覚えが……しかも最近……やっぱアイツらかね。

「どうしたんだマサ？」

「何か考え事してるみたいけど？」

「ン？ ちいとな、黒幕が誰かわかったかも」

うんうん、まあ勘の部分が多いけど多分アイツらだと思っ。

「「「えっ!?!?」「」」

俺の一言に一斉に驚く皆さん。

「まっ確信は持てねーけど・・・先に進みやあ、わかるわい、沙姫、凜、綾、どうする着いてくつか？ それとも・・・喧嘩するか？」

ニイっと笑いながら沙姫達を見る。

「しししませんわ、マサナリさんと一緒に行きますわよ」

「ですね〜勝てそうにないですし〜」

うむうむ、よし沙姫と綾が仲間になったっばい。

って凜は・・・。

「やっぱり、その目・・・もっと睨んで欲しい・・・」

なんかヤバイ感じになってるッス。

とりあえず、スルーしといた。

にしても・・・俺、リト、リコ、美柑、唯、春菜、ヤミの七人プラス沙姫、凜、綾の三人で十人か・・・。

大分大所帯・・・。

「うわッルンちゃん、まだ追っかけてくるよ!!!」

「しつこく〜い!! もうなんなのあの変態!!」

なんか更に増えそう・・・。

今のつて、恭子にルンだよな。

「うつひよ〜〜ルンちゃ〜〜ん、キョーコちゃ〜ん、ステキな恰好〜〜チューして〜〜」

ハア〜〜〜。

「テメーは柱とキスしてるッ!!!!!!」

『ゴガンツ!!』

二人を追っかけ回してた校長（変態）を柱に突き刺しとききました。

つゝか、なんでコイツ、オオカミの恰好なんだっつうの。

オオカミに失礼すぎるわ!!

「マサナリく〜〜ん、ありがとう〜〜」

「助かったよマサ君〜〜!!」

よっぽどアレだったのか、校長（変態）を壁に刺したら二人が飛び付いてきた。

むろん。

「リトガード!!」

しときました。

話を聞いたらこの二人も大魔王側に雇われたらしい。

で、結局、この二人も一緒に行く事になり、総勢十二人の大所帯で先を進む事になりました。

マジで多いなオイ。

「チーム分けした方がいいんじゃないかね?」

と思ったが、このままGOするじや。

捌ききれないだろうけどねッ!!

## 第四十八話っぽい感じ！（後書き）

後書き

半端ですがココで一旦切ります。

次回で、とらクエ編は終わり・・・かな？

フと気付いた事・・・書いてる人はソロバンという言葉が好きかもしれない。

どうでもいいッスね。

感想などありましたら是非！！

## 第四十九話っぽい感じ！（前書き）

前書き

とらクエ編ラストです。

そして久々に登場のアイツ、覚えてる人、いるんだろうか……。  
ではクスリを持ってどうぞー！！

## 第四十九話っぽい感じ！

???  
視点

ククツ・・・データの解析は充分だな、やはりララの技術力の高さは素晴らしい、コレを一から造ったのだからな。

このデータさえあれば・・・ヤツに復讐するのもたやすい。

前は不覚を取ったが・・・。

今に見ている鬼島 政成！！

クク・・・ハハハ・・・フハハハ！！

・・・

マサ 視点

「シッ！！」

『ガゴッ！！』

裏拳でゴーレムを弾き飛ばす。



大所帯になつた俺達一行、だからつつつて敵さんの数が減るわけ  
でなし、寧ろ、わんさか出てきやがります。

「つか・・・オマエらも殆ど初期レベルなのな？」

「くくくうつ・・・」

俺の問いに微妙に声を詰まらす、ニューフェイス達。

沙姫達に恭子、ルンね？

「まあ別段、問題があるわけじゃーねえけど・・・よッ!!」

喧嘩キックで、モンスターを沈めて、戦闘終了つと。

「ペケよ〜い」

『コチラです!』

ペケの案内・・・少し進むと、また敵・・・うん流石に。

「う・・・う・・・うぜえーぞ、ゴラアアア!! 雑魚がポコポコ  
出てきやがってー」 つかエンカウント率がおかしいだろポケエエ  
エ!!--」

あんまりなエンカウント率の高さにイライラが爆発・・・思わず  
マジで城ごと、破壊してしまいそうになつたが

パーチーメンバーに宥められて我慢した。

ただ、憂さ晴らしの犠牲になつたモンスター君達。

久々に、顔面マツチ（顔面を壁に叩きつけてマツチの如く擦る）した時のパーチーメンバーのドン引きっぷりには、流石に少し反省。

なんか凜は頬を染めてゾクゾクしてたが、やはりスルーした。

赤信号は渡っちゃダメだからだッ！！

『マサナリ殿！！ この扉の向こうにララ様がッ！！』

おっ・・・ようやくか、ペケが指差す先にはやたらと豪華な扉。

「大魔王はコチラですよ〜って感じだわな・・・じゃ早速」

「ちよっマサ君、いきなり入るの心の準備とか・・・」

「そうですね、マサナリさん、こういう場面で優雅に可憐に高貴に行く為には」

なんか唯と沙姫が言ってるがスルーしつつ足を持ち上げ・・・。

「出てこんかい、ナナアアア！！ モモオオオオ！！」

『バギャン！！』

黒幕であろう二人の名を叫びながら、喧嘩キックで扉を蹴り開けた。

なんか後ろで、ソイツら誰ー！ とか言ってるが、説明は後っこ・・・。

「アン？ ンだこりゃ・・・」

扉の先には・・・。

「このッ出せエエエ！！」

「ちょッ・・・あつまサナリさん助けて〜〜」

『ナナ様！！ モモ様！？』

黒幕だと思つてたナナモモの二人が、トリカゴみたいなのに入れられておりました・・・はて・・・。

「アレ？ 黒幕オマエらじゃねえーの？ つかララは？」

勘が外れたか。

「後で話しますから、今はココから出して下さ〜〜い」

はぁ・・・とりあえず二人をトリカゴっぽいのか救出。

「オマエが早く来ないから、あんなとこに閉じ込められちまったじやねーか！！」

「知らんがな、つかナナよ、なんで文句言われなイカンのよ」

「うるさい、なんかオマエの顔を直で見たら文句言いたくなっただよー！！」

コッチが折角、用意したワープアイテム一回、放り投げやがって・  
・だから時間がかったんだよバーカ!!!」

何コイツ・・・腹立つ？　つか・・・。

「バカじゃねエ!!　勉強が苦手なだけで決してバカじゃねエ。

つか何？　そのセリフからして、やっぱ黒幕はオマエらだったワケ？

黒幕なのに閉じ込められてたワケ？　オイオイ・・・シツカリしろよ・・・なんの為にペツタンコなワケ？　胸にいくはずの栄養を頭に回してるからこそそのペツタンコなんだろ？　それが・・・このぎまppingて・・・やれやれですわ~~~~~」

「ペツタンコって言うなコラアアア!!　テメーなんてアレだ、アレだろ？　もう改名しろマサナリじゃなくてバカナリに改名しろ!!!」

方。　ギャーギャーと言い合う俺達、つか大分、久々だな、その呼ばれ

「まあまあ、ナナ喧嘩しない!!　　すみませんマサナリさん」

結局はモモが場を執り成し、なんとか話が出る状態に。

「えっと・・・マサ、その二人って」

「ララの妹達、双子なんだと、胸の成長に著しく違いはあっけど」

「ンだと!!!　バカナリ!!!」

ナナが殴りかかってきたがサラッと避けます、かわします。

「ハア~~~~コレだからペッタニコは、普段から乳製品をとってねーから短気なんだよ」

「うるせー毎日とってるんだよ!! 努力してんだよ、成果が出ないだけで!!」

あっ……してるんだ努力……うん、なんだろ。

「マジ……スマン、悪かった、ホント、スマン」

「……マジな顔で謝るなよ、悲しくなるだろ……」

いやさ、流石にちょっとは悪いと思ったんで。

「仲間です……」

「仲間だね」

「仲間……かも」

ヤミ、美柑、春菜、ナナに仲間意識が芽生えたようだ。

……イカンイカン、なんか話が大幅に逸れてる、俺のせいだけ。

「って……ララって妹がいたのかよッ!! つーかなんでマサは二人の事を知ってたんだ?」

「あ~~~~ほら、俺が停学になった初日に出かけてたる？ そんな時にな？」

リコが思い出したように、そう聞いてきたんで軽く説明。

まっつつぁんぼつや、と銀河マフィアを潰してましたって事は言わないけど。

「あつ・・・すみません、ちゃんと自己紹介をしてませんでしたね。

私はモモ・ベリア・デビルーク、デビルーク第3王女です、よろしくお願ひしますね、ほら、ナナも」

「第2王女、ナナ・アスタ・デビルークな」

俺とペケ以外のメンツに二人が自己紹介。

「って、そついやララはよ？」

「あつ！！ そつだった、オイ、バカナリ、姉上が大変なんだよ」

「大変つて・・・何があつ・・・」

『ズドオオオン！！』

詳しく聞こうとした瞬間、部屋の壁に穴が空き、そこから八工みたいなツラしたロボットと生き物が交ざった感じのモンスターがあらわれた。

「私達があのと리카ゴにいたのもアレの仕業です！！」

なるほろ・・・いやさ待て。

「アレも、このゲームのモンスターの的なもんなんちゃうの？」

「違う、あんなモンスターはいない！！　アレは急にあらわれたんだ！！」

なんと・・・つうこたあ。

「バグってことかよ」

まっ俺も人のこたあ言えねえけど。

『違うなー！鬼島政成！　バグではない、コレは俺が操っている』

俺の言葉にハエの口をギチギチと鳴らしながら答えるハエなモンスター・・・って・・・。

「なんで俺ン名前知ってたんだ？」

『復讐する相手だからだッ！！　キサマにやられた恨み今、ココで晴らしてくれるー！！』

はあ・・・ようするに・・・。

「リベンジ野郎ってことね？」

やれやれですわ・・・つか・・・うん、恨みを買った覚えはあるんだが・・・コイツ、マジで誰だ？　皆目検討がつかんぞ？　ソル

ゲムの残党？

『キサマがこのプリューマ様にした仕打ち忘れたとは言わせんぞ！』

プリューマ・・・ねえ・・・。

「全然、覚えてねえわ・・・」

『な・・・なんだと！！キサマ、第二十二話っぽい感じ！で、ピンってしただろ！！ピンって！？』

いやさ、そんなメタな事、言われても・・・つかピンって何？ピンって・・・全然、わかんねえわ。

『ググ・・・その顔、全く覚えてないな』

うん、全然、覚えてねえ。

「まあいいわ、で、何？俺に復讐してえんだろ？覚えてねえけど・・・まっそれは別にいいわ、ちゃっっちゃとかかってこい」

頑張つて頭を捻つても思い出せそうになかったんで、あきらめて、クイクイと指招き。

『フン・・・生意気な・・・コレを見てもその態度が取れるかッ！』

プリューマがそう言って見せてきたのは・・・。



「姉上!!」

「お姉様!!」

「「「「ララ!!」」」」

「「ララさん!!」」

「「ララちゃん!!」」

「プリンセス!!」

尻尾に巻き付かれて眠っているララ……ギチリと歯を食いしばる音が聞こえる。

「オイ……ララを離せ」

・  
・  
・  
・

ナナ 視点

「オイ……ララを離せ」

あのプリューマッってヤツが姉上を人質にしていた。

その事がわかった瞬間、あのバカの雰囲気が一気に変わった。

アイツはかなりバカでムカツク事を言って時とは違い、その時のアイツは凄く怖かった。

「オイ・・・ララを・・・離せ」

同じセリフ。

一歩ずつプリューマに近付きながら言うバカナリのヤツ。

『ヒツ・・・来るなッ！！ 来たら、ララを』

「どうする気だ・・・キズの一つでも付けてみる・・・生き地獄を味あわせてやる・・・」

怖い・・・めっちゃ怖い・・・。

こんなに怖いのは生まれてから初めてだった。

私に向けられてるじゃないのにだ、実際に向けられてるプリューマはどれほどの恐怖かわからない。

自業自得だ、姉上を人質に取るなんてマネして・・・。

そっから先はあつという間だった。

プリューマのヤツが壊した壁のガレキをバカナリがコンツと蹴り。

それに気をとられた際に、バカナリが姉上を取り返し、私達に預

ける。

人質がいなくなったプリユーマが慌てて逃げ出そうとするけどバカナリは逃がさず。

『ゴツ！！ グシャツ！！ ドチャー！！！！』

なんか思い出すとトラウマになるくらいの制裁をして。

「次は無え」

マジで怖かった・・・。

・  
・  
・  
・

マサ 視点

制裁が終了したんで、ミ〇ミ〇で気持ちを落ち着ける。

「ん~~~~おはよ~~~~アレ？ ニニ・・・どこ？ 私・・・  
学校にいたのに・・・」

おっ、ララ。

「起きたか〜ネボスケめが」

「~~~~マサ~~~~アレ~~~~？」

起きぬけで寝ぼけてるララにモモが事情説明。

ちなみに今までグツスリだったんはモモが調合した睡眠薬が関係してるとのこと。

「配合、間違えちゃいました、テヘ」

オチャメっぷりが可愛かったが、残念ながらそれ以上にイラツとした。

問答無用でゲンコツを叩き落とした。

「おお〜〜モモのぶりっ子が通じないって初めてみるぜ、やるじやんバカナリ」

なんかナナに褒められた。

「あれあれ？ マサって二人のこと知ってたっけ？」

「まあな、つつても実際に会うなあ初めてだけどな」

前は画面上だったし。

「それにしても、ナナ、モモ、なんでこんなことしたの？」

おつ、そういや、その事、聞いてなかったな。

「姉上の身近にいる地球人の事をよく知りたかったんだよ」

「特殊な状況に置かれる程、人柄がわかりますからね」

はぁ・・・なるほろ。

「後は・・・何れ私達の旦那様になる方がどういう方が知りたかったんです、ポツ！」

「いろいろと待てつつうちに、何故に俺を見ながら旦那様扱い？ つか達って何よ？ 達って？ 意味がわからんわ？」

モモのヤツはマジで何を言い出しくさりやがってんだろ。

「常日頃、お父様が、私達、姉妹はマサナリさんが、まとめて面倒を見てくれるって言ってましたから」

「私は認めないからなッ！！」

「え~~~~ホント？ ねえ〜マサ、ホント？ 結婚してくれるの？」

いやさ、待てやデビル〜ク3姉妹。

「~~~~ちよつダメー！！」「~~~~」

俺、リト、春菜、ペケ、綾を除く全員から総ツッコミ。

かくいう俺も。

「却下の方向で、今ん所はその気はサラサラねえから」

つつといた、ララとモモがブーたれてたがスルーした。

「私達は父上から、よくオマエの話を聞かされてたからな、それでモモのヤツはオマエの事を気に入ってるんじゃないの？」

なんじゃそりゃ。

まあアレだな、それはきつとアレだ、一過性の風邪みたいなもんだから、そのうちに気付くだろ。

今だにララが気付いてねえのが不安が残るが。

【ン？ 風邪か発動中】

ハッ！？ なんかもものつそい久々に電波受信した気がする。

まっまあいいさね、とりあえず電波のこたあスルーして。

「まだ聞きてえことがあつたんだわ、コレを作つたンはナナかモモか？」

「ーから用意したワケじゃないよ、姉上のラボにあつた作りかけのゲームソフトを改造したんだ」

つまりはベースはララが作つたと。

「私が？ 作つたつけこんなの？」

ララは覚えてねえらしくペケに確認してる。

『地球に来て間もないころ地球のゲームにハマって作っておられました』

「あ〜〜！　そういえば途中で面倒になってやめたような・・・」  
つまり放置してたつつうことかい。

「いや〜苦勞したよ完成させるの！」

ナナが得意気な顔で主張、その横でモモが。

「まあプログラム完成させたの、ほとんど私なんですけどね」

つつてる、つてこたあ、いや待て、ほとんどつつうことあ、もう  
ちよい聞いてみるか。

「一週間くらい、かかったかなア」

「そうですね、ほとんどナナは地球見物してましたけど」

なるほど、なるほど・・・やはりか。

「イベントとか考えるのも苦勞したよ〜〜特に、ほらバカナリのヤ  
ツがワープアイテムを放り込めたからさ〜〜フォローする身にもな  
れっでもんだよね〜」

「フォローしたのも私・・・」

おや・・・何やらモモの様子が・・・。

「スゴイでしょ？ 私！！」

ナナは気付いてないらしい、もう威張りに威張りまくってる。

『シュルツ！！』

「ア・ナ・タ・がしたのはお姉様の知人に適当に招待状を配っただけではなくて？」

うむ、モモ、見事なスリーパー。

「うぎぎぎぎぎ死ぬ、死ぬぎぎぎぎぎちよっバカナリ助け……ろ」

めっさ必死に助けを求められた、放置してもよかったが一応は。

「やめれ〜ナナの顔がそろそろ赤から青に変わるから」

つつて止めといた、後ろでリトが。

「大人しい子に見えたけど、やっぱりデビルークの血筋だ……」

と戦々恐々してた。

まあそれは置いていて。

「転職とかレベルとかってどっちが担当した？ やっぱモモか？」

このことは聞いておかねえとなア。



「えっ・・・えつと・・・」

「あゝゝ死ぬかと思った・・・どっちもモモだけ」

「ちよっ！ ナナなんて言っちゃうのー!!」

「またクビ絞められたくねえーもん」

フツ・・・そうか、モモか・・・そうか、そうか・・・。

「モモさんや・・・」

ヒタツとモモの肩に手を置く、ギギツという効果音が聞こえそうな感じで振り向くモモ。

「な・・・なんですかマサナリさん？」

「なして俺だけ転職できんかったんかなあと？ ステ表示もイカれてやがったし・・・レベル@の次のレベルって何になるんだ？ 詳しく聞きてえーなア？」

「アハハ・・・離脱ツ!!」

『ボウンツ!!』

煙玉を使って逃げ出そうとするモモ・・・。

「ハハ・・・逃がさねえよ・・・大魔王さんよ・・・待てオラアアアアア!!」

大魔王狩りじゃアアア!!

「マサとモモ追いかけてこ始めちゃった、私も交ざりたいな」

「いや、姉上、アレそんな生易しいもんじゃないから、モモめっちゃ必死だし」

しばらく追いかけてこは続きました。

あつ別に取っ捕まえて、どうこつてこたあしてねえんで、その辺は悪しからず。

「ハア・・・ハア・・・ハア・・・ナナ、ゲームはもうおしまいよ、制御リモコンを・・・ケホケホ・・・だ・・・出し」

「息を整えてからでいいからな」

流石に追い掛け回し過ぎたか？ と若干反省。

ただモモのヤツも途中で。

「ウフフ 捕まえてこらんさーい」

とかネタを入れてたけどな。

その辺りは評価に値する。

「ゴメンね〜妹たちが迷惑かけちゃって」

「別にララさんが謝る事ないよ！」

「別に命の危険があつたワケじゃないし」

ララの謝罪に手をパタパタしながら答える春菜に美柑。

「まつ最後のハエ以外は結構楽しかったしな〜」

「マサ君、最初から楽しんでたものね？」

まあよ、あつ後、最後のエンカウト率の高さもいただけなかつたつちやいただけくない。

「私達つて出番全然なかつたけどね」

恭子の言葉に頷く沙姫達&ルン、そこはスマンとしか言えないッス。

まあなにわともあれコレで現実世界に戻るワケですな。

『カチ・・・カチ』

「あれ？ あれ！？ つかしいな〜〜」

「どうしたの？」

「いや・・・転送システムが起動しないんだけど・・・」

さつきからナナがクビを捻ってたから、もしやと思ってたら、ト  
ラブる発生したらしい。

『ドンッ！！ゴゴゴゴ！！』

「な・・・何だ！！」

「地震ですわ!?!」

いや・・・地震つか・・・あっ！！なるほど。

「大魔王を倒したら大魔王の城って崩れる基本ですな」

「「「言ってる場合かッ！」「」「」

いやさ、一応は言っとかねえとアレかなあと。

『ゴバア！！』

「うわーっ！！」

ヤベッ、リト！！

「伏せるオオ！！」

リトが伏せたのを確認してリトに向かって崩れてきた柱にバツタ  
蹴り！！

「大丈夫かよ？」

リトの振り向えってみたら、春菜に押し倒されてました。  
はて……。

「あっありがとうマサ、春菜ちゃん」

どつやら春菜がリトを庇おつとして飛び込んできたようだ。

『ピシッ……ピシッ……』

「えっ？ く……空間が……」

「割れてってる！…」

「どうなってるんだ一体！？」

美柑達の言う通り目の前がヒビ割れて、そこからグニャっとした空間が覗いている。

「コレ、イベント？ 裏ボス前のイベント？」

「違えーよ！！ こんなイベント用意してない！！…」

あーやっぱしか……イベントだったら気楽なもんだっただが。

「リラ わかるか？」

「どういうことあ詳しいヤツに聞く聞くのが一番。」

「バグが発生してる・・・プログラムが不完全だったんだ!!」

マジかい・・・。

「ええ!?!」

「ヤバイじゃん! ちょっとモモ!!」

『歪曲空間が保てなくなってます!』

「このままじゃ私達、皆、異次元の迷子になっちゃう!!」

そいつあまた・・・。

「厄介な・・・」

「ど・・・どうするの 마사君!?!」

「どうしたもんか・・・って唯?」

唯の方を見てみたら、服がテレビの砂嵐にみたくなって、胸が丸見え状態に。

なんで? 美柑また魔法を使ったんか?

「あれ・・・私のも・・・あっ!! そっか、この服もデータの部だから」

『ジジッ・・・』

「嘘……消えてく……！」

どうやらあの魔法じゃなかったようだ。

「ちょっとマサ君、結城君、女子の方を見ない……ッッッ……！」

あ……リト……。

「おわ……！」

「……キヤ……！」

響くは女子組の悲鳴、うん、そうだね、リト、下半身、丸出し状態ですねん。

「斬ります……！」

「ちょっと待てヤミ……！ 助けて……マサ……！」

はいは……いと。

「ヤミ落ち着けつつつに、わざとじゃねーんだから……多分？  
だよな？ そういう趣味があるわけじゃねえよな？」

「当たり前だ……！」

股間を手で隠し必死に訴えるリト君です。

「つつわけで……ってヤミっ子、何よその目は」

「なんでマサナリの服は消えないんですか、ズルイです」

いやさ、コイツは何を言い出してんだろつ。

オマエさっきリトに斬りかかってたクセに……。

「……ズルイ」「……」

ってララに美柑、恭子にルンもかよ……！

「……ジューー」「……」

「ジツと見ても消えないからなツ……！ コレ、完全に俺のガクラ  
ンだからデータでもなんでもねえから……！」

何を期待の目で見てやがるんだ女子組め……！

「……チツ……」「……」

舌打ちを止めるつつつ。

「ってアホな事してる場合じゃねえだろうに、ララ……！ コレ元は  
オマエが作ったんだろ、どうにか出来るか？」

気を取り直してララに確認。

「うん、大丈夫……！ 二人とも、メインコントロールルームはどこ  
……？」

「えっ？ あっ……その奥の階段上ですけど……」



モモが指差す先には王座の先、カーテンの裏に階段があるって事か。

「ペケ！！ ドレスフォーム！！」

ペケを装着し、羽を出して階段へと向かうララ。

「待つて、お姉様！」

「私らも行くよ！！」

ララを追い掛けてナナモモの二人も奥へ。

「しゃっ！！ 後はララに任せて時間を稼ぐだけだな、オマエら出来るだけ固まれ！！ 落ちてくるガレキは俺が対応するッ！」

「私も手伝います」

「助かるヤミっ子！！」

と俺とヤミの二人、この場を凌ぐ。

ララ・・・頼んだぜ。

・  
・  
・  
・

ララ 視点

『ヒューン!!』

モモが言っていたメインコントロールルームへ急ぐ。

あの扉。

『バンツ!!』

「ここだね!!」

扉の先の部屋に飛び込み。

「プログラムを修復しなきゃ! え~~~~と」

『タ・・・タタタン』

えつと・・・えつと。

「コレをこ〜して、えつと~~~~」

うん、なんとかなりそう。

「さすが王家、始まって以来の発明王・・・」

「うん・・・」

あっ二人とも、来たんだ、さっき付いて来るって言ってたもんね。

「よしッ！ これで完了！！」

最後のプログラムを入力して、なんとかバグは取り除けたと思う。

『ララ様、バグは……』

「うんバッチリ！ あと30秒で自動的に皆、元の世界へ転送されるよ！」

ペケの心配そうな声に笑顔で答える、ン？ アレ、ナナ、モモ・二人とも、どうしたんだろ。

なんか暗い顔してる。

「ゴメンなさいお姉様……私達が勝手な事をしたせいで……」

「でも知りたかったんだ、バカナリのヤツが本当に姉上の事を幸せにできるヤツなのか……」

そっか……二人とも、私の事を思って、してくれた事なんだ……。

うん！！

「ナナ、モモ……あのね私、マサの事を好きになった事、絶対に後悔なんてしないよ、だってね……今もとっても幸せだもん！！」

マサと居ると笑ったり、怒ったり、泣いたり、お姫様じゃない私でいられるから。

私を私として見てくれる人だから。

私の事をお嫁さんにしてくれるかはわからない、ううん絶対にマサのお嫁さんにしてもらう、つもりだけど。

でもコレだけはハッキリと言えるんだ。

「私はマサが大好き!!」

・  
・  
・  
・

アレから私も皆も無事に元の世界に帰れてナナとモモの二人はデビルーク星へと帰っていった。

もう少し、ゆっくりして、いつてもよかったのにな。

それに・・・モモが言ってた、ナナもモモもマサにまとめて、お嫁さんにしてもらうって事が気になったから聞きたかったんだけど。

前にパパも同じこと言ってたな。

うん、そうなら皆、仲良くマサのお嫁さん、きつと楽しい。

「ねえララさん、マサさんもちゃんとコッチに帰ってこれただよ  
ね?」

「ううん・・・うん、そのはずなんだけど・・・」

転送システムはちゃんと作動したはずなんだけど、何故かマサだけ逸れてしまった。

ヤミちゃんは。

「マサナリの事です、何かバグが発生したのでしょうか」

って落ち着いて言ってたけど・・・。

そう言えばあのゲームの世界でもマサだけ色々バグってたって言うってたもんね。

「マサナリですので、大丈夫でしょう、直ぐに帰って来ます」

ヤミちゃんはそう言うけど、やっぱりちょっとだけ心配そうな顔。

私も心配。

『ガチャ！』

「たっだいま〜と、や〜と帰ってこれたぜえ〜ヘックシヨイ〜！」

あつマサだ!!

皆で、玄関までマサを向かえに行く、なんか疲れてる顔、それに凄く寒そう。

「マサ、どこに行ってたんだ？ ってどうした、凄え震えてるし！」

「！」

「うう~~~~南極・・・寒い~~~~風呂入るわ、風邪ひいちまう・・・  
ヘックシヨイ!!」

そう言って、お風呂に入りに行っちゃった・・・って。

「ねえ・・・今、マサさん南極って言わなかった？」

「おっ俺の聞き間違いじゃなかったんだな・・・」

「な・・・南極をガ克蘭だけでか・・・普通は絶対死ぬだろ!!」

えっと・・・南極って確か・・・。

「地球上で、最も寒いとされる場所です」

うっ・・・うわ~~~~。

もしかして、私のせい？

う~~~~ん・・・。

「マサごめ~~~~ん!! お詫びに私が背中流す~~~~!!」

「出てかんかい、バカタレ~~~~!!」

『ガツンッ!!』

やっぱりゲンコツされて追い出されちゃった。

お詫びなのに~~~~。

「ンなお詫びあるか・・・へ・・・へ・・・へックシヨイ!! あ  
~~~~別にオマエのせいじゃね・・・へックシヨイ!!」

マサ・・・大丈夫かな~~~~。

~~~~心配。

## 第四十九話っばい感じ！（後書き）

後書き

まさかのプリューマさんでした、まあ直ぐに退場しましたが。

そして、かなりグズグズになった感が否めない……。

まあ何時もの事ですが。

キャラもどっちゃりいたけどほぼ空気でしたし……やっぱり捌ききれなかった……。

反省ばかりですが、次回も頑張っていきたいと思えますので次回もお暇なれば見てやって下さい。

感想などもありましたら是非！！



番外編っぽい感じ！ その8（前書き）

前書き

かなり、やつちやった感、満載の番外編。

特に後半、NARUTO編が・・・。

キャラ崩壊どころか設定崩壊の代物です、それでも大丈夫、という強き方はクスリを大量に持ってどうぞ。

番外編つばい感じ！ その8

くもしもD・C ?世界だったら

その1

「キミ・・・ボクと一緒に行く義之君」

「うん・・・」

『パアアアア』

「えっ！？ また枯れない桜が・・・」

「ふえ？ へっ？ 何？」

『ズボツ！！』

「って、うわ地面から手が~~~~ゾンビ~~~~」

「怖い、おくらおくら」

『ゴボンッ！』

「ゾンビじゃねえっての！！ つかマサさんだってビックリだから、まさか土から登場とか思わなかったから！」

プロローグ、まさかまさかの、土から登場のマサです。

更になんとマサ……。

「えっ……子供？ 子供のゾンビ？」

「ゾンビじゃねえつつてんだろ！ つか子供でも……ってアレ？  
ちよっ、アレ？ マジで？ 俺、子供？」

「「コクコク」「

「マジでかアアア！！ 俺、ちっさなつとるー！ーッ！！ あっ  
夢だ夢、うん、前の時は夢だったし、夢に違いねえよ、よし、起き  
る俺エエエー！！」

『ゴガンッ！』

『パカッ！ プシユーー！！』

「うむ、痛い……コレ夢じゃねえな」

「って何やってるのキミー！！ 血がスッゴい出てるしー！！」

「大出血サービスって事でココは一つ？」

「上手いこと言ってる場合じゃないからー！！」

「……カクッ」

という感じで、なんとマサ、子供スタート幻想的なプロローグも

マサのせいだ、てんやわんやです。

そして義之君、刺激が強すぎたのかひっそりと気絶。

・  
・  
・  
・

その2

「えっと・・・つまりキミは異世界出身で元々は17才だったってこと?」

「そっそ、後、マサかマサナリでいいぞ〜」

「うっ・・・うん、わかったマサナリ君って呼ぶね、あっボクは芳野 さくらだよ、コッチの子は・・・」

「義之・・・桜内 義之・・・」

「おえ、さくら、に、義之な、よろ〜」

『ビクッ！ ササッ』

「って義之君〜その反応は何さね？ 何、そんなに俺って凶暴なシラしてる?」

「普通、あんな所から出てきて頭から噴水みたいに血を出されたら怖くなるよ・・・ボクもちよっと怖かったし」

「そいつぁ盲点だった以後はパーチーの時とかにしかしないよう注意するでござる」

「楽しいパーティーが阿鼻叫喚になっちゃうから止めようね」

「残念です、まつ冗談だけどな．．．にしても、参ったねえ〜マサさんも色んな経験してっけど．．．子供になるたあな．．．いくら永遠の悪ガキを目差してるとはいえなく、まっなるようになるか！ ダツハハハ！！」

「前向きだねマサナリ君」

「人生、笑ったもん勝ち、わろとけ、わろとけ、ですよい」

「強いねマサナリ君は．．．」

「まつジジイ以外に喧嘩で負けたことねえからな！！」

「そういうことじゃないよ．．．普通はさ．．．もつと．．．こつ悩んだり、落ち込んだりするものだよ？ いきなり知らない所に一人つきりだよ？」

「一人ちゃいますがな、さくらに、義之がいるやん」

「いや．．．だから．．．えっと」

「まつアレだ慣れた慣れ、似たよなことあ経験しまくってからな、子供状態は初だけど」

「なんだろ、マサナリ君を見ると……あんまり気にし過ぎるのも間違ってる気がしてきちゃったよ」

「まっ気にせず気楽に行きまっしょいってことぞ？ な、義之君？」

『ビクッ！』

「うん、そろそろ慣れような、流石に凹むから」

「この後、なんやかんやで、さくらさん家の居候になります。

義之君もなんとか慣れてくれたようです。

・  
・  
・  
・

その3

「いや〜ビビった、さくら、せいぜい俺より、あっ今の見た目のことな？ よか、ちょい上くらいと思ってたんだがよ」

「あ……あのね……ボク、コレでも立派な大人だよ？」

「ってことはアレか……今から乳製品とっても手遅れか……負けんな！ さくら！！」

「背！？ それとも胸のことかなア？」

「両方、倍率ドンだな、でもさ・・・頑張れば奇跡って起こるから・・・きつと・・・望みは限りなく薄いけど・・・頑張れ！超頑張れ！！」

「そんな奇跡いらないよ～～～！も～～～怒った！！今に見てる、通販で買ったバストアップマシンの力を見せてやる！！」

結果・・・。

「グスツ・・・ヒック・・・うう・・・なんで・・・なんで・・・なんでサイズダウンしちゃうんだよ～～～ヒドイよ～～～、わあ～～～ん！！」

「うっうっむ・・・流石のワシも笑え・・・」

「ブツ！？・・・ダツハハハ～～～ヒイ～～～面白ろ過ぎる～～～ダハハハ！！　さくら最高～～～ダツハハハハ！！！！ぼんぼ痛い～～～ぼんぼ痛い～～～ブハハハハ！！」

「マサナリ君の鬼～～～～～～！！！！」

「ホント、鬼じゃな・・・」

マサ、さくら、純一会話より。

時間軸とかは無茶苦茶。

あつちなみに、音姫と由夢との関係は、音姫が義之君と秘密の共有で仲良くなり、音姫は義之君にベツタリ。

由夢は何故かマサにベツタリ、よくベットに潜り込んでくる感じ  
です。

つて感じて・・・あつちゅう間に・・・。  
10年前後・・・。

・  
・  
・  
・

その4

『ガラッ!』

「うーッス、音姫くゝなんぞ用?」

「もう、マサ君、私の方がお姉ちゃん、なんだから、お姉ちゃんっ  
て呼んでって言うてるでしょ」

「いやザンスつと、つか義之が言ってんだからよかるつに」

「弟君もマサ君も私の弟なの!!」

「つつてもなく、まっ気が向いたらってことで、向かないだろっけ  
ど・・・で、なんぞ用があつたんじゃねーの?」



「それは私から話すよ学校一のお騒がせ男のマサナリ君？」

「待て待て、そりゃ誤解だぜい、まゆきよ、俺が騒ぎを起こしてんじやねえ、騒ぎが俺を駆り立ててるんだ！！」

「いいこと言った、みたいな顔してるけどね・・・完全にキミが中心だからッ！ もうね、キミ、ブラックリストどころかブラック・ブラックリストだから！！」

「恐悦至極」

「褒めてな〜〜い！！ キミね今月だけで何回、騒ぎ起こしてると思ってるの！！」

「過去は振り返らないんだぜ、俺は今を全力で生きてるんだぜ！！」

「無駄に全力過ぎるって言ってるの！ えっと・・・カツアゲされたウチの生徒を助ける、うんコレまではいいいよ、良い事したね？ って褒められる事だよ？ けどさ、その後にキミ何した？」

「えっと・・・なんだっけ？ 忘れちった？」

「そう・・・そっか・・・忘れたね・・・午後のニュースになつたのに忘れた・・・か？ フフ・・・いい加減しろー！！ ぬっ殺すわよー！！」

「まあまあ、まゆき、落ち着いて・・・それで、マサ君は何したのかな〜？」

「ハアハアハア・・・ごめん、ちょっと興奮したわ・・・えつと・・・そのカツアゲしてたグループを叩きのめした後、裏で繋がりがあつた不良グループを一掃・・・その全員を橋から逆さ吊り・・・ね？」

「えっ！？ アレってマサ君の仕業だったの？」

「あ~~~~、あつたな、そういう事、まっ反省も後悔もしてねえけど」

「しろー！！ ちょっとは、しろ、反省ー！！」

「いんや、しないねー！！」

「だあ~~~~もうっ！！ なんでこつキミは無駄に頑固なのー！！？」

「よせやい、照れらあ」

「マサ君、褒められてないからな？」

マサ、生徒会室へ呼出し、こつこつこつとは日常茶飯事です。

・  
・  
・  
・

その5

「マサ兄さん、また呼出しされたんですか？」

「まあよ、で、由夢は、また猫を被ってんのな？」

「うるさいです、いいじゃないですか、学校と家では分けるものです」

「大変ね〜偽・優等生も」

「むっ・・・人間きが悪いですよ」

「事実じゃん？ 昔は素直で可愛かったのに・・・」

「むむ・・・今は可愛くないと？」

「可愛いぞ？ 腹黒いけど」

「一言余計です！！ 可愛いって言われるのは嬉しいけど、腹黒いつてなんですか？ 腹黒いつて！！」

「文字通りだな、まっアレだ、文字通りだな」

「二回も言わくていいです！！！！」

「大事なことからねッ！」

呼出し後に偶然、由夢と会った時の会話より。

マサは由夢をからかって遊んでいます。

・  
・  
・  
・

その6

「弟君〴〵このエツチな本は何!? えっちなのはいけません!  
! しかもコレ全部、胸が大きい子ばかり!!」

「うっ・・・音姉・・・あつ、それ、アレだマサのだから!! 俺  
のじゃないから!!」

「って待てや義之、俺、そんなん買った覚えねえから? あつ、で  
も そろそろ一、二冊くらい所持してたほうがいいか? よし、そ  
れ俺がもらった!!」

『ヒョイ! パシッ!!』

『ペラ・・・ペラ・・・』

「ううゝむ、チラッ・・・ふゝゝむ・・・」

「マサ、音姉の前で堂々とエロ本読むって・・・」

「ちよっマサ君!? えっちなのは!! っていうか、なんで私と  
見比べてるのかな!?!」

「フツ・・・戦闘力たつた5か・・・ゴミめ！！　って義之が言った」

「弟君？　ちよつとアツチの部屋に行こうか？」

「マサ、おまつ何、って、ちよつ待つて音姉！！　言ってない言っ  
てないから！？　目のハイライトが消えて怖いからッ！！　助け」

「人に無実の罪を着せようとするからだ、裁きを受けて来ーい！！」

『ズルズル・・・』

・  
・  
・

「ギヤアアアアア！！」

「今日も義之は元気ですってか？　さあゝて晩メシ作ろつと、あつ  
由夢、いるコレ？」

「いりません！　女の子にエツチな本、渡さないで下さい！！」

「じゃ後で、さくらに渡すか」

「それもどつかと思うけど・・・っていつかマサ兄さん、やっぱり  
おかしいと思う、男の人だったら、もつと別の反応が・・・って、  
いまさらか？」

マサ相変わらずエロスが薄いです。

とりあえずD・C　？　はココまで。

・  
・  
・

くもしもナルト世界だったら

その1

『ヒヤハハハ！！　たかが人間がこの守鶴様に勝てると思ってるのかよオオオ！！』

「るせえよタヌキ風情が・・・我愛羅・・・ちいと待ってるよ、この腐れダヌキ、ボッコボコにして・・・一緒に美味しいメシ食おうな？」

「マザ・・・ナ・・・」

『ハッ！！　もういいぜ、オマエは死ねエエエ！！』

「ギャーギャー吠えんな、タヌキ汁にしちまっぞゴラァァァ！！」

・

・ ・ ・

『いや、ホント・・・調子にノってスイマセンでした』

「アアーン？ 俺に謝ってどうすんだア？ 俺じゃねえだろ我愛羅に謝れ我愛羅に！！ それともアレか、やっぱりタヌキ汁になりてえかア？」

『ヒィ〜〜〜〜！！ すいません、すいません我愛羅様！！ ホント、許して下さい！！』

「これは・・・夢か？」

というわけで、マサ、砂の国スタートで、我愛羅と守鶴の関係を、拳で解決。

守鶴、マサの舎弟になりました。

我愛羅の睡眠不足も解消。

完全にご都合！！

・ ・ ・

その2

「マサ兄は忍にならないのか？ それだけの実力があれば風影にだってなれるだろ」

「フツ・・・俺は忍じゃくてNINJAだからなッ!!」

「NINJAって・・・バツタもんじゃん」

「カンクロウ・・・マサ兄に口答えか・・・殺すぞ？」

「ちよっ我愛羅!! 軽くツツコミ入れただけじゃん！ それだけで殺されたくないじゃん!!」

「バカだね〜カンクロウ、我愛羅がマサにベツタリだって忘れてんのかね〜」

「ちよっ待つじゃん我愛羅!! ギャ・・・ギャー!!」

カンクロウさんは落ち役を担うようです。  
流石に死にそうになるとマサが止めに入ります。

そして始まるNINJA無双。

・  
・  
・  
・

その3



「つつワケで、ちよっくら木の葉の国に遊びに行つてこよかなあと  
思つ」

「どつというワケで!?!」

「甲が乙して色んな都合でだ、我愛羅達も行つか?」

「マサ兄にが行くなら行く」

「俺も行きたいじゃん、木の葉の忍がどんなものか見てやるじゃん」

「おけ、我愛羅とカンクロウは行くとテマリは?」

「あ~~~~行きたいけど、ほら、一応、私ら忍だよ? ほいほい別の国に行くのはね〜」

「テマリ・・・俺は忍じゃないNINJAだツ!」

「我愛羅!! 完全にマサに影響されてる!?!」

「うむうむ、成長したな我愛羅!」

我愛羅NINJAに・・・キャラ崩壊が凄まじいです。

コレからドンドン、NINJA軍団が増えていきます。

例えば・・・木の葉の国に行く道中にて波の国に寄り。

・ ・ ・

#### その4

『バチバチ・・・ガキイ!!』

「なっ雷切を生身で!？」

「キサマ・・・マサナリと言ったか・・・なんのつもりだ？」

「そうです、マサナリさん、再不斬さんを助けてくれたことは、お礼を言いますが・・・」

「うっせえ白!!」

『ゴガツ!!』

「ツ~~~~!!」

「オマエ、何、死のうとしてんの？ 命は賭けても消費はすんなッ  
!! ダチに死なれたら目覚めが悪いだろポケエエエ!!」

「ダチ・・・ボクは再不斬さんの道具なんです、道具は」

「ちょい待て・・・再不斬くん・・・何、白、道具扱い？ どう  
いう事かな？」

「フン・・・白がそれを望んだ」

「よじつオマエら齒を食いしばね、修正してやる!!」

・  
・  
・  
・

「で、何か申し開きは？」

「チツ・・・あれだけボコボコにして申し開きもねえーだろ」

「そうです・・・ボク・・・一応、女の子なんですけど」

「黙りやん!!」  
「これ以上、やいやい言ったらお尻ペンペンすつぞ  
!!!」

「「スイマセンでしたー!!」!!」

この後、なんやかんやあり、再不斬と白がNINJA軍団に。

ちなみに白、テンプレ的に女の子設定。

ガトー一味は、我愛羅とテマリ、ついでにカンクロウが凹にしてみました。

まさに「都合」。

これ以上は色々と危険な気がするので以上です。



番外編っぽい感じ！ その8（後書き）

後書き

大分、エライことになってました・・・。  
もうコレ・・・何？

でも頑張った結果ということ許して・・・下さるといいな。

次回は本編の予定！

ソチラの方も是非ヨロシクお願いします。

感想などありまし・・・いえ、なんでもないです。

第五十話つばい感じ！（前書き）

前書き

五十話です！！

なんやかんやで、なんと五十話・・・。

と言っても特に特別な話でもないですが・・・。

というか・・・やっぱり大分アレな感じ・・・。

それでも大丈夫という方は頭痛薬を持ってどうぞ。

## 第五十話つばい感じ！

はい、どうも南極から無事帰還した鬼島 政成です。

南極・・・寒かった・・・。

南極なのに白クマがいた・・・。

密猟者と一戦交えた・・・。

まあ・・・。

「慣れたものでした！」

普通のヤツなら死んでるけどねッ！！

つか、寧ろ懐かしさを感じた俺ってどうだろ？

大概、人外だな俺・・・ああバグでよかった、人外バンザイ！！

ちなみに若干風邪気味だったが、風呂入ってメシ食って一晩したら治りました。

「南極から帰って来て風邪も引かないマサって・・・」

リトにそう言われたが。

「バグだからね！」

つつといた、まあ風邪気味にはなっただけだな！！

「マサ治ったの〜風邪、大丈夫？」

「おう！ 悪いな心配かけちまってよ」

「ううん、私のせいだも」

『ペチン！』

「あづっ！ー！」

デコピン。

「昨日も言ったろうに、ララのせいじゃないですよ、寧ろ久々の南極は楽しかったぞ〜寒かったけどよ？」

ペンギンとか可愛いかったしな。

「うん・・・エへへ」

デコを押さえながら何故か嬉しそうなララでした。

ナイススマイル。

「ってアレ？ 今、マサ『久々』の南極って言わなかった？」

「言ったけど？ コッチじゃ初だけど計5回は行ってンぞ？」



勿論キーワードはジジイだ。

「初回の際はマジで死を覚悟したもんだ・・・クソジジイをぶっ飛ばすっつう強い意志で生き残ったけどな!!」

返り討ちにあっただけど・・・肋骨と右腕を持ってかれた・・・。

あっ・・・眼底骨折も追加だったか？

アレ？ 鼻骨だけ？ アレ？ どっちだ？

「マサナリ、どうしたんですか？」

「ん？ ああ、気にすんな」

うん、別に無理に思い出すようなこつてもねえしな。

っと、ぼちぼち学校行かんねえーと。

さてさて、今日は体育あったけかねえ。

・  
・  
・  
・

ルン 視点

「最近めつきり出番がない私だけど・・・今回は私の出番!!」

「ちわ~~~~~銀河通販です、ルンさんにご注文の品、お届けにあがりました~~~~」

フフ・・・やっと届いたわね・・・。

「宇宙珍獣 モドリスカンク!!」

おしりから生物を若返えらせる特殊なガスを発する生態を持つコノ子を使って・・・。

ララを子供にしてパワーを半減させて長年のうらみ・・・例えば

ほわわわ〜ん・・・あっ回想ね？

『ルンちゃ~~~~ん』

まだ子供だった時に私がお花畑でお花を摘んでる時、ララが来て

『なあに？ ララちゃん』

思えば純真だったな私・・・あっ今も純真だけど。

『えへへ〜ビックリするもの作ったよーー』

そう言ってニコニコと笑うララ・・・今だったら確実に逃げてたけど、あの頃はまだまだ子供だった。

『ほら 強力 水でっぼーー!!』

『バシャー！！』

『キヤーーーー！！』

結果、ずぶ濡れ……。

『ね？ ビックリしたあ〜？』

ビックリしたところの話じゃなかったのー！！

他にも……。

『ここからなら景色がよく見えるよ〜』

『ふえ〜ん……高いよー怖いよー！！』

柱みたいに細い山の上に連れて行かれてたり……。

『すごい生き物、捕まえたよー！！』

『ブクブクブク……』

もう、なんて形容していいかわからない完全にモンスターな生き物を目の前に出されたり。

前回のゲームの世界だってそう！！

まあアレはララの妹の仕業だったみたいだけど……。

一人だけ、お姫様役って納得いかない！

私なんて、マサナリ君と会うまではキョーコ・・・あっ、キョーコとは気が合ったし同じアイドル仲間で仲良しなんだよね？

キョーコとだったらマサナリ君を共有しても、いいかな？って思うし・・・キヤーキヤー！！

あっ・・・話がズレちゃった、ンツン・・・えっとマサナリ君と会うまであの変態校長に追い掛けまわされてたし・・・。

でもマサナリ君が助けてくれたけど！！

マサナリ君、カッコよかったです。

あの怒ったマサナリ君は怖かったけど・・・ぶるぶる・・・ララじゃなくて私が捕まっても、ああいう風に怒ってくれたかな？

怒ってくれるよね？ マサナリ君だもん。

ホントは怖いから、あんまりあんな風には怒ってほしくないけど。

ってまたズレちゃったわ。

とにかく、コノ子を使ってうらみを晴らす！！

いくらララだって子供にしちゃえば簡単はず！！

「さあ来るのよッ!!」

ガシツとモドリスカンクを掴み、いざ出ば・・・

『キュピーン』

えっ？ 今、なんか目が光ったような・・・ってまさか!!

『プシューーッ!!』

「キヤーーッ!!」

・  
・  
・  
・

マサ 視点

「ふえ~~~~ん」

学校に着いたらチビツ子の泣き声が聞こえてきました・・・はて・・・  
なんか聞き覚えがある声なんだが・・・。

「なんだ・・・迷子か？」

リトが見てる方向に、シクシクと泣いてる子供・・・ふむ・・・。

ゴソゴソとポケットを探る・・・。

「おっ？ 上手い具合にアメちゃんがあったな？ よしゃ」

スタスタとチビツ子に近付き……ってアレ？ このチビツ子……。

「ルンか？」

「うん、マサ、コノ子、ルンちゃんだよ！」

はい、ルンでした……。

「うう……ひつく……ふえ〜ん、マサナリ君〜」

『パフッ』

チビツ子、ルンが泣きながら抱き着いてきた、リトガードしようか迷ったが子供だったんでキャンセル。

ヒョイツと抱っこして。

「どうしたルン？ 何があったん？」

ルンに事情を聞いてみる、横でララと微妙にリコが羨ましそうな顔をしていたがスルー。

ちなみにヤミ、今日は図書館に見たい本が入刊する事を思い出し家を出てから、駆け足で図書室へ行つとります。

「ひつく……あのね……銀河通販で……買ったスカンクに……

・・・

はい？

「スカンクのガスで子供になった！？　なんだ、そりゃー！！」

まあリトが驚くのもわからんでもない、が、しかし。

「オマエ、女の子になったり、分裂したりしとるやん？　子供とか、まだ普通じゃね？」

「「うっ・・・確かに」」

俺の指摘に思わず言葉を詰まらせるリトリコ、コンビ。

まあそれは置いて、振ったの俺だけだ。

『どうしてそんな怪しげな生き物を？』

ペケの言う通りだな。

まあ面白そうだけど。

「え！？　あ、あのね　カタログで、かわいかったから・・・」

腕の中で、わたわたしてる子供ルン・・・なんか可愛いッス。

「それで、ルンちゃん、スカンクは！？」

「逃げちゃったの・・・」

「なにー！ー！！」

マジかい・・・そりやまた・・・難儀な・・・。

「見つからなかったら、ど～～～しよ～～～、あ～～～ん」

「泣くな、泣くな、大丈夫さね、俺が直ぐに見付けたるから、なっ？ アメちゃん食つか？」

頭を撫で撫で。

したら、なんとか落ち着いたのか、泣き止んでくれました。

「む～～～ルンちゃん羨ましい・・・ン？ アレ？ あっ！！  
もしかして、あれ！？」

『ガサッ』

ララが指差す先に、確かにいた、ソレっばいの・・・うむ、可愛  
いッス。

ルンが買いたくなるのも頷けます・・・。

「よし、私が捕まえ上げるッ！！」

っと・・・スカンク君の可愛いさにキュンってしてる間にララが  
スカンク君を捕まえようとダッシュ。



『プシューー』

「キヤツ!？」

スカンク君が噂のガスを発し、ララが煙りに包まれ・・・煙りが晴れると。

「あはは〜私も子供になっちゃった!」

子供ララになつとりました・・・ういゝむ。

制服がブカブカだな・・・裾上げしねえと・・・。

『それは私の仕事ですぞ!!』

何!？

『カツ!!』

ペケがあっちゅう間に裾上げ。

流石はペケ・・・コスチューム・ロボは伊達じゃねえぜ・・・。

俺とペケの間に妙に熱い風が吹いた気がした・・・。

「ってアホな事してる場合じゃないだろマサ! ペケ! ンなことしてる間にスカンク、校内へ入っちゃまったぞ!!」

ハッ!？ しもた・・・つつい。

「リト、リコ、二人を頼むわ、ちよつくら捕まえてくらあ」

抱っこしてたルンをリトに預け、スカンクを追って校内へ。

ルンがなごりおしそうにしてたんで。

「捕まえた後にな？」

つつたら。

「ルンちゃんだけズルイ！ 私も私も~~~~」

ララにも要求されたんで、頷いて応え、改めてGO。

校内に入ると。

『プシューーー!!』

あのスカンク君がまたガスを放つとりました……で、その相手が……。

「ゆ……唯さん!？」

はい、唯です。

春菜も一緒にいたけど、ガスの効果範囲じゃなかったのかチビツ子化は免れたらしい。

「マチャ君!! コレはどーゆことなの!?! マチャ君の、ちわざ

!？」

えっ……何？ この唯……『マチヤ君』って……『ちわぬ』  
って……。

「黙ってたらメー！ こたえなちやい！」

どつやら唯、かなり子供状態に引きずられてるっぽい。

ものっそい舌足らずだし……。

っと……今はそれどこしゃねえわ。

「春菜、唯のこと頼むー！」

「えっ？ えっ!？」

唯のことは春菜に任せ、スカンク君を追い掛け……。

「む~~~~グシユ……」

あっイカン……唯……充電始めてるし……。

「あ~~~~ん……唯のこと無視したらメーー!!」

あ~~~~スカンク君が気になるが……。

「あ~~~~ん」

「まあ……よしよし」

「あ~~~~~ん！ マチャ君が無視ちた~~~~！ あ~~~~  
~~~~ん！！」

「これは……うん……。」

「よし、唯！ 肩車だ！！」

「ふえ？ う……うん！！」

妥協案として唯を肩車しながらスカンク君の追跡をすることになりました。

「ホッ……よかったね唯さん？」

「うん！！」

唯……大分アレだな……。

「マチャ君！ あの悪いスカンクを、ちゅかまえて、唯がメツてるの！！」

「はいよ」

色々と思うところはあるが、チビツ子、唯を肩に乗せて出発！！

あつ唯の制服もぶかぶかになってたけど、そこは何故か持ってた、ソーイングセットで裾上げしといたぞ。

まあ仮留めだけだな。

『タツタタタタ！！』

「あつ！ マチャ君、廊下は走つたらメーよ！」

「細けえこたあ気にすんな、今はあのスカンクを捕まえんの優先！」

チビツ子、唯は子供ながらに風紀種だったと再確認しつつも、見失しなつちまつたスカンク君を探す。

自分のクラスも覗いてみたら。

「キヤー！ー！？」

「あら ペツタンコ・・・」

チビツ子状態の、里沙未央・・・つうかクラスメイツ全員がチビツ子・・・。

ココでも、ガスを噴射したらしい。

が、既にスカンク君の姿は見えず。

「ふぎや~~~~~！！」

つと今の声は・・・。

「爺ちゃん先生！！」

ダッシュで現場へGO・・・って。

「はて・・・ワシは一体・・・？」

ううゝむ・・・どうやらあのガスは子供になるワケじゃなく若返るってことらしい。

つか・・・。

「爺ちゃん先生、めっさいケメンだったんだな？」

かなりのイケメンでした。

それ故に・・・。

「マチヤ君？ 泣いたらメーよ？」

時の流れが見えました・・・。

「っとイカンイカン・・・スカンク君探さな！！」

気を取り直し追跡再開。

子供になったクラスメイツとかは、後から追って来た、リト、リコに春菜が対応してくれとります。

「唯・・・あっちで待って・・・」

「ヤ~~~~！！ マチヤ君と居るー！！」

唯を預けようと思ったが断念。

肩車が気にいったのかね。

とか思いつつもスカンク君探して走り回る。

最初は廊下を走ったらメーとか言ってた唯、なんかキャツキャ楽しそう。

ってアレ……。

「ヤミっ子もかい!？」

中庭にてヤミ発見。

「マサナリ……どうしたんです……ン？ 体が……縮んでます」

「反応遅ッ!！」

ヤミもチビツ子になっとりました。

つか気付けよ!!

「本に熱中になってましたので……ン？ 肩の上に居るのは……」

「唯だ唯、カクシカシカジカってワケでな……っと、イカン、スカンク何処だ!——!！」

「マチヤ君、アレ!？」

アン? って・・・オイオイオイ!!

唯に髪を引っ張られ、その方向を見てみたら屋上の貯水タンクに上ってる、チビツ子ルン。

リト達といたないと思ったら、あんな所に・・・。

なして・・・あつ!! 貯水タンクの上にスカンク君発見。

のんびりスヤスヤお休み中。

ルン・・・自分で捕まえようとしてるワケか・・・。

その意気は買っが・・・。

「危ねえーつつの!!」

あ~~~~もう、しゃあねえ。

「唯、抱っこだ!! シツカリと掴まってるよ!!」

「えっ・・・うん!!」

肩車から抱っこに切り替えて、貯水タンクを目差し。

「ニン!!」



『ダンッ！！』

跳ぶ！！

途中でルンを回収するのも忘れません。  
そしてスタツと貯水タンクの上に着地。

「ふえ〜〜？ マサナリ君！？」

「はいはいマサナリ君ですよ、つとルン、あんな所、上ったら危ねえーだろうに！！」

「うう〜〜だって・・・私のせいで・・・」

「気にすんな生きてりゃ失敗くれえあるもんだ・・・つと、その箱借りるぜ」

またガスを噴射されたらアレなんでルンが持ってた箱を借り。

『カポッ！』

「はい捕獲成功つと！！」

なんとかかかんとかスカンク君の捕獲に成功。

「アレ〜マサ、もう捕まえたの〜？」

どうやらララも捕まえに来てたらしく、ヒョコツと隣の貯水タンクから顔を出す。

「おう！ バッチリだ！」

グツとサムズで応えといた。

で・・・その後。

このガスには効果時間があるということが判明。

「そのうちガスの効果がきれるでしょ」

と苦笑いの保健さん。

それまでの間は・・・。

「マチャ君は唯と、おままごとするのー！」

「じゃー私がママ役！ マサはパパ！」

「ええ〜ララちゃん、ズルイー！ マサナリ君、私がママだよね？」

「メーー！！ 唯がお母さんするのー」

「マサーー！ サッカーしよ〜」

「マサはボクと野球するんだ！」

チビっ子軍団と遊ぶ事に・・・。

つか・・・。

「一辺に言うなっつうの・・・あ~~~~よしや！なら、かくれんぼだ!!! リト、リコ、春菜、保健さん、で俺が鬼すっからな？最後まで隠れてたヤツの言う遊びをする、それでどうだ？」

「~~~~うん!~!~!」

おっしや!!

「つうワケで悪い、協力してくんね？ 事後承諾だけど？」

「ああ、いいぜ」

「うん」

「わかった」

「たまには・・・こついうのもいいわね？」

快く協力してくれたリト達に感謝しつつ。

「学校から出たらダメだからな？ 危ねーとこ・・・屋上とかな？は行くなよ？ 破ったらゲンコツだからな？ わかった人~~~~」  
「!~!」

「~~~~は~~~~い!~!~!」

「よしや良い子さんだ、じゃ100数えたら探すからな~~~~は  
い、隠れる~~~~」

「~~~~わ~~~~い!~!~!」

とチビツ子軍団との、かくれんぼ対決スタートです。

「上手いものね〜ガ克蘭君？」

「だな、俺達がいくら言っても言う事、聞いてくれなかったのに」

「まっ俺、自身まだまだガキだからな、波長が合うだろ？ それに、遊びって事になると自然と耳を傾げるもんだわな？」

「う〜ん、でも凄いなと思うよ？ マサ君、保父さんとか向いてるかもっ？」

保父ねえ……。

「こんな目つきの悪い保父ってどうよ？」

自分で言うのもアレだけど。

「大丈夫じゃないか？ 実際、クラスのヤツらも懐いてたじゃん？」

それは俺のことを覚えてたっつのが大きい気がするが……まっアレだな。

先のことあ未定だわな。

っど……。

「しゃッぼちぼち100秒だな、行きますかい？」

「「ああ」

「うん」

「ええ」

待ってるチビツ子共よ、ガシガシ見つけたるぞ!!

・  
・  
・  
・

「はい、終了~~~~~!!」

結果は・・・。

「私です」

グツと胸を張ってるチビツ子、そうヤミっ子でした。

ひそかにヤミっ子、参加してたらしい。

「「「む~~~~~!!」」」

むうむう唸ってるヤミ以外のチビツ子軍団。

「まあ勝負事だからな、しゃ〜ねえよ」

そんなチビツ子軍団な頭を撫で撫でしつっ。

「して、ヤミっ子よ、何すんだ？」

「そうですね・・・とりあえずマサナリ座って下さい」

ヤミっ子に言われた通りに、座る・・・ちなみに椅子にじゃなく普通に地べたに、あぐら、でな。

で、俺を座らせて何をするかと思えば。

『ポスッ』

と、俺の上に座り。

「本を読んで下さい・・・」

微妙に赤い顔で本読みを所望。

「おけ、じゃ読むからな〜、おっ？ 童話か・・・チビツ子共、お話の時間だ、座れ〜」

読んで欲しいと言われた本が都合よく童話だったんでチビツ子達にも聞かせることに。

あっー応は。

「ヤミよかる？」

「構いません、ただ、家に帰ったらもう一冊読んで下さい」

そんならいなら可って事で、改めて、本読みを。

「むう~~~~いいな~~~~唯もマチャ君に座りたい~~~~」

「ヤミちゃん羨ましいよ〜」

「後、少して勝てたのに~~~~」

ええい、指をくわえるな、チビツ子共……。

「ガクラン君？ 今度、私も座っていいかしら？」

「あつ……マサ、私も……」

「ダメですコレは勝者の特権です」

って何故にヤミが答えるよ？

まあいいけど。

とにかく本読みを開始……そして本読みが終わる頃にガスの効果  
果が切れて、みんな元の状態へと戻る事が出来ました。

で、唯がチビツ子の時の事をガツツリ覚えてて、めっさ真っ赤にな  
ったりとかあったが。

。 ともかくにも、無事にチビツ子事件は幕を閉じたのだった・・・

と思わせて。

「マサの子供姿も見てみたい！」

ララのこの発言により。

『プシューー！！！』

俺もチビツ子化することになってまいりました。

「「「「目つき悪ッ！！」「「「

「生まれつきだからね！！」

チビツ子状態でも目つきの悪さは変わり無し。

つか、唯と違って俺は子供状態でも、思考はあんまし変わらんらしい。

あのガス、個人差があるらしいな。

「でもマサ可愛い〜」

「そうね、こころ生意気そうな感じがまた可愛いわね、ねえガクラン



君、抱っこしていいかしら？」

「却下でー!!」

ココで許したらオモチャにされんのが目に見えてるしな。

と、抱っこ拒否をしまくってたら焦れた、ララを筆頭にクラスメイツの一部が実力行使に出やがるうとし、そこを保健さんが。

「また、かくれんぼ、してガクラン君を見つけた人が抱っこ出来るっていうのはどうかしら？」

と、かくれんぼリターンをぶち上げて、かくれんぼ、をすることに。

結果は……。

「やった〜〜！ マサナリ君、抱っこー!!」

ルンでした。

で、ガスの効果が切れるまでの間、ルンに抱っこされて過ごしましたとさ。

とっぴんぼらりりのぶ〜。

## 第五十話つばい感じ！（後書き）

後書き

キョーコさんはアイドルの仕事で休みだったっんです！！

決して忘れてたワケじゃないですよ？

と言うか・・・前回でマサ、風邪引くつばい感じだったのにアッ  
サリ、スルー！。

実は風邪引きパターンも考えてたんですけど、なんやかんやで、  
こんな感じに・・・。

まあ風邪気味にはなったようですけど・・・。

ンツン・・・ええ次回もまたヨロシクお願いします！！

無理矢理な感じな書いてる人でした。

感想などもありましたら是非！！

## 第五十一話っぽい感じ！（前書き）

前書き

今回もまた、特に最後辺りがフワツとした感じに……。

ですが頑張りましたので、胃薬を持ってどうぞ……！

## 第五十一話 っぽい感じ！

『パンツ！ パパンツ！！』

「いいかアアア！ やるからには勝アアアつ！！ 狙うは優勝一点のみツ！ 二位以下は負けだアアア！」

「『『『オオオオオツ！！』『』『』」

「ガンホーガンホーガンホー！！」

「『『『オオオオオツ！！』『』『』」

うむツ！ 実によし、流石は我がクラス実にノリがいいですな、一部は呆れてるのがいるけど。

ン？ 何が行われてるかとな、ふむ、それは・・・『彩南高 スポーツフェスタツ！』 まあつまりは体育祭です、あつたいいくさい体育祭じゃなくてたいいくまつり体育祭と個人的には読みたい。

「マサ君張り切ってるわね・・・まあ確かに好きそうだけど・・・ただ・・・」

「うん、なあマサ・・・なんで小さい状態なんだよ？」

むむつリトよ中々に良い所に気付いたな。

「ハンデだ！！ 保健さんの提案により俺ア小っさなマサさんとし

て参加することになったのだよ！」

ララのビックリドッキリ発明を使ってな、ちなみに今回は体の不調は特になかったぜい、改良の成果は上々のようですな。

「小さいからとて侮るなかれ！！ たとて小っさかろつと校舎を灰燼とすることくれえたやすいわッ！！」

「「「するなッ！！」「」」

はい、ナイスツッコミ、リト、唯、リコ、まあ流石にしないけどねえ。

直すの俺だしね。

「私が抱っこするの〜〜」

「ララちゃん私だって抱っこしたい」

「私もしたい！！」

ふむ……。

「ララ達はさっきから何を言ってんだ？」

「マサを誰が抱っこするかだってさ」

はぁ……抱っこねえ……また抱っこちゃん人形の如くって感じか。

「よつとッ!」

リトの肩に飛び乗り。

「俺アリトに運んでもらうからいいわ」

「ちょッ!! いや運ぶの自体はいいけど俺、めっちゃくちゃ睨まれてるから!! 俺以外にしてくれ頼む!!」

むむ・・・リト以外ねえ・・・ふむ。

「じゃA&B? どっちか肩借りていいか?」

「俺達も勘弁して下さい!!」

むっ残念・・・したら誰の肩を借りたらええちゅうんじゃ、まっ無理に誰かん肩ア借りなくてもいいんだけど・・・チラッ・・・ふむ。

「行け!! 風紀ロボ唯!!」

「風紀ロボって何!？」

わからん何となく。

「まっともかく唯君・・・キミに決めた!!」

「まっまあ別に構わないけど・・・」

「「「ええ〜〜〜!!」「」

なんか不満の声を上げてますな、ララ、ルン、恭子よ。

「何で唯なの〜〜私が抱っこしたいのに〜〜」

「そつだよマサナリ君!」

「ブーブー不満だぞ〜マサ君!!」

「なんかオマエらだつたら、もみくちやにされそつだしな? 唯なら大丈夫そつと判断した」

リコでもよかつたつちやよかつたんだけど唯の方が位置が近かつたしな。

『ギョッ』

「つてオイ・・・唯よ? オマエまで抱っこちゃん人形扱いかい?」

「えっ・・・あっ・・・ほら・・・落ちたら大変だから、たつ他意はないわよ! ホントよ!!」

ならば何故に微妙に焦ってたんだ・・・まっいいけど。

「「「いいな〜〜」「」

不満タラタラのララ、ルン、恭子でした。  
とコチャコチャありながらもグラウンドへ。

「まつ・・・マサさん可愛い・・・あつあの唯さん私も抱っこしてもらいたいなあ・・・」

「美柑もかいッ!」

小つさいマサさん人気だなオイ! おもちや的な意味で。

あつちなみに何故に美柑がいるかつつと、一般の観覧も可つてことになつとるからです、故に。

「ララ様アアマサナリ様アアこのザスティン全力を持って応援させていただきますぞオオオ!」

なんかますます愉快になつたザスティンも来てます、黒服さん二人もな、なんか一人はザスティンを見ながら胃を押さえてるけど。

後で保健さんから胃薬を貰つてやろう。

「おつ! あそこに見えるは・・・沙姫達だな?」

どれアイサツしとくかねえ・・・なんせこのイベント沙姫が二、三枚噛んでるらしいしな、協賛だし・・・まつそれでなくても声くれえはかけるんだけどな。

「唯! 俺アちいと沙姫達にアイサツしてくらあ?」

「あつ・・・ちよつとマサ君!」

スルツと唯の腕から抜け出して、ヒョイヒョイと歩く生徒達を



かわしつつ、沙姫達ンとこに到着。

「よっ沙姫、凜、綾！！」

「ン？ 今、マサナリさんのお声が・・・」

「はい確かに政成の声でしたが・・・あっ！！ まっ政成！？ どつどうしたんだその姿は？」

「ほっホントです、お人形さんみたい」

あっそついや沙姫達は小さいマサさんは始めてでしたな。

「今日はハンデでコレで出ることになったんだわ、ちなみにコレはララのビックリドッキリ発明の効果な？」

ザクツと説明。

「そっそうなのか？ だっ大丈夫なのかその姿で？」

「問題ござらんーAの小っさな巨人たア俺のことよウ！！」

言われたことないけどな、つか普段は小っさくないけどな。

「ちょっと凜、マサナリさんはどこにいますの？ 声はすれども姿は見えずですわ！」

あっまだ見つけてなかったんだ沙姫。

「沙姫（下です下）」

「下・・・へっ？」

目が点とはこのことだな・・・実にナイスなリアクションだ。

「やっほ〜」

手を振ってみた。

「コレ・・・お人形ですの？ ほっ・・・欲しいですわ!!」

「人形じゃねえから本人だから!!」

つかこんなアレな人形は欲しいたア思いませんが、俺はな!! 我  
が事だけど。

「ララさんの発明らしいですよ?」

「あっ・・・ララの・・・納得ですわ」

ララよ・・・オマエもなんか色々と浸透してるっばいぞ、嬉しい  
かは甚だ疑問だけんど。

「マサ君、勝手に動かない!! 踏み潰されたらどうするつもり?」

おう? 唯が連れ戻しに来たらしい、美柑も一緒に。

「ないない、避けるし、ヒト一人くれえ軽いもんですわい」

「マサさん力持ちだもんね?」

うむ、腕力には自信あるからな。

「それじゃ次は私が抱っこしますね唯さん!!」

「えっ・・・あっ・・・美柑さん、ちょっと、ほらマサ君は私のクラスだし責任を持って私が」

責任つてなによ責任つて。

「ふむ・・・何やら複雑だな・・・仕方あるまい間を取って私が管理しよう」

いやさ凜よ、管理つて何、管理つて。

「オーホホ!! マサナリさんがそこまで言うのなら私が」

「凜」

「うむ・・・」

『ピ・ポ』

「だからおやめなさい!!」

なんか久々にやったなコレ、相変わらず反応早くて面白えッスわ。

とかありながら、アイサツも済ませたって事でクラスに戻る。

戻る時は唯の肩に乗りました、まあ直ぐに抱っこちゃんされたけど。

美柑、沙姫、凜が後ろで。

「いいな〜」

「羨ましいですわ」

「むう・・・不公平だ」

とか言っ指を加えてたのがアレだったが。

そんなに俺をオモチャにしたいんかい。

でクラスに戻って来たら、沙姫と未央が何やらポスターを持って  
キヤイキヤイはしゃいでました。

「GO唯!!!」

「えっ・・・あっ、うん」

唯に指示出しして近付き。

「なんぞそのポスター？」

「おつまサマサ、コレ見て、この大会の賞品!!!」

どつちら、賞品があるらしい。

「この大会で、優勝したクラスには、なんと!!!」

「豪華客船の特別スペシャルディナー招待券が全員にもらえるんだって!!」

なぬ!?

豪華客船・・・だと・・・。

「いらね〜〜〜〜!!」

「「えっ!?! なんで!! 豪華客船だよマサマサ!!」」

いやさ、そんな言われてもね・・・こう・・・なんつか・・・。

「俺が乗ったら、ジユツパチ、で沈むからなく、絶対沈むって間違  
いねえって。」

普通の船ならまだしも、『豪華』客船だぞ? 上に『豪華』って  
付いてる時点でアレじゃん。  
沈むって言うてるようなもんじゃん?」

わかるヤツにはわかるんです。

今までだって数々の豪華客船が沈んできたしな。

「アハハ、マサマサ、映画じゃないんだから」

「そうそう、そういうのは映画の中だけだって」

里沙、未央の二人はネタだと思ってるらしい。

うん、まあ半分はネタだしな・・・。

「まったく、体育祭を賞品の為に頑張るなんて・・・不純だわ」

むむ・・・唯・・・。

「いい事、言った!! 流石は唯! そうとも、勝利を目差すのは当然だ、がしかし、それは賞品の為じゃねえ・・・」

そう、何の為に勝利を目差すか・・・。

「我がクラスが・・・1-Aが最っ高のクラスだと証明する為よオオオ!!! 1-A最高オオオオ!!!」

「ウオオオ!! いいぞマサーー!!」

うむうむ、流石よ・・・。

「おお、流石マサマサ、照れるような事を臆面もなく」

「うんうん、なんか燃えてくるよ!!」

フツ・・・里沙、未央もわかってくれたようだな。

「まっ、それに豪華客船って、なんかカッコリしてる雰囲気、得意じゃねえしな」

「苦手そうなものね、マサ君」

ええ、得意じゃねえです、ネクタイとか付けないといけなさそうだしな。

「マサ〜〜最初の競技はペアでするんだって、私と一緒に出よー  
ー!」

「おっ、もう始まるんか？ おっしゃ!! ザクツと一位を掻っ攫いに行くぞララ!」

「うん!」

「あっ・・・ま・・・マサ君、が頑張ってるね、あつ後やり過ぎはダメよ」

ヒョイツと唯から抜け出してララの肩へ、さてさて、ペアつつつてたけど最初の競技はどんななかね。

唯の応援を受けつつ、最初の競技の確認を試みれば・・・なんと。

「おんぶ競争・・・だと?」

「うん! 面白そうだよマサ!」

いやさ、ララよ・・・確かに面白そうやも知らんが・・・。

「サイズ的に無理じゃね?」

いや、このサイズでもララを持ち上げるこたあできるよ？ 余裕  
でも、それ、おんぶじゃなくね？

「私がマサを抱っこして走るっか？」

「いやさ、どっちにしろ、おんぶ、じゃねえやん？」

はてはて……どうしたもんか。

と唸ってたら。

「ガクラン君の場合は、おんぶ、じゃなくても可よ」

何処からともなく保健さんがあらわれて、そう言ってくれました。

つつワケで……。

「ほいさ！」

「わわッ！」

ララを持ち上げて競技位置へ。

パツと見、ララ浮いてるみたく見えんだろっなコレ。

「凄いね〜マサ、小っちゃいのに力持ち！〜」

「よせやい、照れろ〜」

ン……およよ。



「沙姫に綾も、コレに出るのな？」

「まっマサナリさん!？」

「マサナリ君も、おんぶ競争に参加なんですね。っていつか・・・それ、おんぶ、じゃないような・・・」

「あつサキにアヤ〜二人も出るんだね、負けないよ〜マサ号は凄いんだから!！」

微妙に会話が噛み合っただけなオイ。

まあとりあえず。

「俺は特例だ特例、サイズの関係でな? つうか、綾が背負う方なのな? 逆のがよくな? 綾、運動苦手なんじゃねえの?」

「あつ・・・」

二人共、忘れてたらしい。

「綾、変わりなさい、私がおんぶして走りますわ!！」

「でも・・・沙姫様に、おんぶ、なんて・・・あの・・・」

「いいんですよ、得意、不得意がありますもの、さあ早く」

そう言って、沙姫が綾を、おんぶ。

うむ……。

「敵ながらあっぱれな心意気」

「うんうん、サキ優しい」

「沙姫様~~~~」

沙姫の心意気に綾が感動して泣きそうになる。

いや〜俺も胸を打たれたね。

「うつ……べ……別に当然の事ですわそれに、おんぶクイーン  
の私が、走るんですもの、いくらマサナリさんとは言え勝ちを譲り  
ませんわよ」

「フツ……負けてはやらんよ……」

だからと言って勝ちを譲らんぜい、とそうこつしてるうちにも。

『さーいよいよ始まります、最初の種目は、おんぶ競争！ 実況は  
私、放送部の猿山ケンイチと 特別ゲスト 校長で お送りします』

エテ山、見かけねえと思ってたら、んな事やっとなんだな。

『それでは各自 スタートラインへー!!』

「マサ！ ララ頑張れよ!!」

「ララさんファイト!!」

「マサ君~~~~ララちゃん~~~~狙うは一位だ!! 行け~~~~  
!」

フツ・・・燃えるぜい。

『よーい! スタート!!』

『パンツ!!』

「おっしゃアア!!」

『ズダダダダッ!!』

『おお〜つと、スタートと同時に飛び出したのは明らかに不自然な一組、小さな体にふざけたパワー!! 私が所属するクラス1-A、核弾頭、バグキャラ、鬼島 政成とララちゃんペア~~~~! ホントにどうなってるんだオマエは~~~~!!』

エテ山が言う通りバグなもんでな。

『そして・・・おや? 今回、この、スポーツフェスタの協賛をしてきています、天条院 先輩と藤崎 先輩ペア、非常にゆつたりと進んでいます、トラブル発生か? はたまた、それは作戦か!?』

むむ、エテ山の実況が気になり、チラッと後方を確認。

確かに、沙姫と綾は大分、後ろだな・・・はて・・・。

『カチッ』

って・・・はい？ 今なんか足元でカチッて音が・・・。

『ガシャン！！』

ゲッ・・・。

「トラップかよッ！！」

足元から飛び出て来たのは、巨大な（今の俺からしたら）グロ  
ブ。

それを咄嗟にサイドステップでかわす。

『カチッ！』

「またかい！！」

「わわッ！！」

『プシャアアア！！』

今度は水が・・・。

「「「や~~~~ん！！」」」

俺達は上手くかわしたけど変わりに他のペアの人達が巻き添いに・

。。。

『うお~~~~ナイスマサ!! スケスケ、もといビショビショだ~~~~!!』

『うーん、ナイストラップですなあ』

そして興奮する、エテ山と校長(変態)ヤツらには後で指導だな。

「あ~~~~マサ、沙姫達が!!」

「なるほろ・・・沙姫達はコレを見越してのんびり行ってたワケか・・・」

しかも、あの動き、あらかじめトラップの位置がわかってるっばいな。。。

『トラップゾーンを前に、止まってしまったマサララ、ペアを抜いて、ココで一気、天条院先輩、藤崎先輩ペアがトップに踊り出ました!!』

「マサ、どうするの? 私が尻尾ビームしようか?」

「フツ・・・いらん・・・トラップ上等・・・この程度で俺の前進は止まらんよ」

まあ現在進行系で止まってるちゃ止まってるんだが、その辺りは、秀囲気ってことで。

「イクゼツ！！ チイとばっかし我慢してな？」

「えっ・・・う、うん！！」

『お〜〜と、マサララ、ペア！ 覚悟ん決めたか、トラップゾーンに飛び込んだー！ って何イイイ！！』

「よいしょー！！」

『ブオン！！』

「わきゃー！！！！」

『なんとマサ選手、ララ選手を空中へと放り投げたー！！ 何をやる積もりだー！！』

『カチツカチツカチツ・・・』

ララを空中へ投げ、今から通る予定の場所のトラップをわざと起動させ。

「そらッ！ うらッ！ だらっしゃー！！！！」

『ドガ！ ガシッ！！ バキヤ！！！！』

発動したトラップを全て破壊、そして放り投げたララを、キャッチ！！

「ダッハハハ・・・俺を止めたけりゃ今の万倍持ってこーい！！」

「わわわ・・・マサカツコイ~~~~!!」

『なんとなんと、マサ選手、ララ選手が空中にいる間にトラップを破壊!! 相変わらず規格外の行動!! このマサ選手の行動に会場のボルテージもヒートアップ!!』

「~~~~いいぞマサ~~~~!!」「」

っしゃッ、いい感じに盛り上がってんな、さあ〜て。

「待てや沙姫イイイ、綾アア一位は俺とララのもんだアア!!」

「GOMASAAA!!!」

現在トップの沙姫、綾ペアをぶっこ抜く為にダッシュ!!

「わわ・・・沙姫様、マサナリ君と、ララさんの二人が追い付いてきました」

「さ・・・流石はマサナリさんですわ・・・でも、おんぶクイーンの名にかけて一位は譲るワケにはいきませ・・・アッ・・・」

『コケッ』

『お〜っと、ココで一位を独走していた、天条院洗濯、藤崎先輩ペア、躓いてバランスを崩したアア!!』

チャンス・・・と言えばチャンスだが・・・。

一気に沙姫達の隣まで、つめより。

「ララ！ 支える！」

「えっ？ あっ……わかった！！」

ララに転びかけてた二人を支えてもらう。

「なんのつもりですよ！！ コレは勝負ですよ！！」

「沙姫の心意気に免じて手を貸したまでよ、武士の情けってな？  
一位は譲らんけどな！！」

それだけ言っつてぶっこ抜き……。

『パンパン！！』

「シャアアアア！ 見たかオラアアア！！」  
「やったー！！！！」

見事一位獲得！！

で、続いて二位は。

「く……悔しいですわ……でもマサナリさん相手なら仕方ありませんわ」

「沙姫様、ご立派です！！」

と沙姫達。



「あつ・・・マサナリさんララ・・・支えてもらったこと・・・お礼を言いますわ」

「フツ・・・アレは沙姫の心意気に打たれたることだ、まっ実際に支えたんはララだけだな？ ララもサンキューな？」

「いいよ、だってサキもアヤも友達だもん！！」

うんうん、ララ、ナイススマイル。

ララの言葉に沙姫と綾も照れつつ嬉しそうな顔。

「むっ・・・仲間外れは酷いぞ」

「おっ凜・・・ってオマエ、何その恰好？ スナイパー？」

ヒョコツと出てきた凜を見てみたら、体操着じゃなく、ピタツとした黒いボディースーツに何故かライフルを背負ってた。

って・・・。

「狙撃しようとしてたのオマエかよ！！」

ええ、実は、競技の最中、何やら狙われてる気がしてたんです。

「フツ・・・気付いていたか？」

クールに決める凜。

そんな凜を冷めた目で見た俺は悪くない。

「ぞくぞく・・・それはそれでイイ!!」

って、凜ビクビクと震え出したんだが・・・。

「本格的にアカンわコイツ」

「凜・・・何がアナタをそうさせたんですの・・・」

もはや完全にアレな凜に、どうしていいかわからない、俺と沙姫。

「ねえねえアヤ、リンどうしちゃったのかな？」

「たまにああなるんです、危ないから近付いたらダメですよララさん」

ララに注意する、綾でした。

ホントに何があった凜？

## 第五十一話っぱい感じ！（後書き）

後書き

小っさいマサ無双・・・と思わせて、ある意味、凜さんが無双です。

ホントになんで、こんなことに・・・。

ある意味、沙姫さんがまともに見えるし・・・。

進んだな・・・キャラ壊れ・・・。

こんなキャラ壊れな話ですが、次回も頑張っていきたいと思います、よれしければ、また見てやって下さい。

感想などもありましたら是非！！

番外編っぽい感じ！ その9（前書き）

前書き

かなり久々の投稿です。

しかも、番外・・・。

さらには短い・・・。

こんなんですが、頑張りましたんで見てやって下さい。

番外編っぽい感じ！ その9

くもしもD・C 2世界だったら、その2く

・  
・  
・  
・

その1

『ガラッ！』

「ういーツス、音姫、まゆきく、来たぞくつか今日は特売日だから説教なら明日にしてもらいてえんだが？」

「説教じゃないよマサ君、あつ買い物は弟君にメールしてるから時間は大丈夫だよ」

「ならよしつと・・・で説教じゃなかったら何さね？ 用務関係の仕事か？ 午前中に終わらせませ？」

「それも知ってる、仕事が早いってのは感心できるわね」

「ダツハ八褒めてもアメちゃんしか出ないぞく」

「あんがと」

「あつマサ君！ 私も」

「はいよ」

『コロコロ』

「で、俺を呼んだんは何用？ アメちゃんが食いかつたん？」

「違つて・・・生徒会に新しい子が入つて来たんだけど、この時期、私も、音姫も忙しくてさ」

「それでマサ君に面倒を見てもらおうつて、まゆき、と話して決めたんだけど・・・どうかな？」

「ホワツツ？ なして俺？ 他に人員がいねえワケ？ つか俺、生徒会たあ対極の位置じゃねえの？ ブラック・ブラックだぞ？」

「ん〜〜確かに、そうなんだけど、その子って留学生なのよ、それで、他の子だったら、物おじしそうだし・・・その点、キミはそんなこと全然ないでしょ？」

「うんうん、それにマサ君つて面倒見がいいしね？」

「俺がか〜？ ンなこたあねえだろうに、俺が面倒見が良いつてんだつたら音姫と、まゆき、は菩薩かなんかか？ よし、拝んどこ」

「拝むな、拝むな・・・全く、知らぬは本人ばかりかね〜・・・まっつとにかく、そういうワケで、キミに面倒を見てもらいたいワケよ、ついでに生徒会の仕事も手伝ってもらつ、まさに一石二鳥つてね？」

「はぁ・・・あつ、でも用務ン仕事があつたら、そつち優先だぞ？  
給料もらつてんだし」

「それは大丈夫だよ、ちゃんと調整するから」

「なら、おけ！！で、その謎の留学生Eは？」

「もつすぐ来るよ」

『ガラッ』

「失礼します」

「おつ噂をすれば・・・つて、おろ？ オマエさん」

「えっ？ あ~~~~~！！！！ あつアナタ、あの時の！！！」

「えっ？ えっ？ マサ君、面識があるの？」

「あ~~~~、まっチクツとだけな？ 名前は知らんけど、なっ？  
ツンデレ？」

「ツンデレって何よ！ 私の名前はエリカ・ムラサキよ！」

「おけ、エリカ・ツンデレ・ムラサキな！！！」

「余計なミドルネームを入れないで！！！」

というワケで、マサ、エリカ嬢の面倒係をする事になりました。

人選的にどうよ？　と思わなくもないですが、そこはスルーで。

ちなみに、エリカとの出会いで、義之君みたくアレはなかったッス、変わりに……。

「パンツ見えとるよ?」

「ッ~~~~~!!」

という二つがあったようです。

・  
・  
・  
・

その2

「はい、というワケで今日の晩メシは、まゆき、と、エリカも参加つて事で」

「うん、いいねマサ君!!」

「えっ?　ちよっなんで?」

「エリカつて一人暮らしなんだろ、一人のメシは味気ねえべ?　つか淋しくね?　俺だったら淋しくて泣くね」

「あっ……あのね、子供じゃないんだから一人で食事くらい」



「まあまあムラサキさん、マサナリ君の言葉に甘えちゃいなくて、  
ん〜〜それにしても、マサナリ君の料理って久々だね〜」

「一週間前に昼メシ食いに来たやん」

「一週間は長いんだって」

「さいでつか？ まっ美味そうに食ってくれっから、俺も嬉しいけどな、っと、じゃ仕込みやら、なんやら、あっから早速行くべ〜よ」

「ちよっ、ちよっと、私はまだ行くとは・・・」

・  
・  
・  
・

「お・・・美味しい・・・」

「そっか、そっか、お代わりもあっからな」

「あっ私、お代わり!!」

「あいよ!! 由夢は？」

「や、私は、もう十分ですから」

「義之は？」

「俺はするぞ」

「あつマサナリ君、ボクも」

「お姉ちゃんは、そろそろデザートが欲しいかな」

「あつ、マサ兄さん、私も」

「あいよ」

「相変わらずの主夫っぷり、コレで性格さえブツ飛んでなければ、一家に一台、欲しいところなだけだね」

「まゆき先輩、マサがアレなのは今に始まったことじゃないですって」

「でも、それがマサナリ君のいい所でもあるよ、少しくらいは押さえて欲しいけど」

「フツ・・・無駄に全力と言われる漢にそれを求めても無理ですな、ほれ、お代わり組にデザート組・・・っとエリカはどっちよ？」

「えっあ・・・私は・・・デザートを・・・」

「あいよ」

まゆき&エリカを招いての夕飯タイムになりました。

そして夕飯後は、みんなでゲームをしたりして過ごしました。

結果は言わずもがな・・・。

「チックショーーーー!!」

だったようです。

・  
・  
・  
・

その3

「おっはよ〜マサナリ君!!」

「ン? よ〜藍、今日は藍か?」

「おお〜〜また直ぐにバレちゃったよ、よくわかるね?」

「『二人とも』ダチだからな、茜」

「嬉しいこと言ってくれるな〜、っていうか今のもわかったんだ?」

「当然さね・・・っと・・・イカンイカン・・・まだ作業の途中だわい、オマエらは料理部で早く来たんだろ? オマエらも、はよ行かないカンのじゃねえの?」

「おっと、そっだった、じゃね、マサナリ君、お仕事、頑張って〜」

「あいよー!」

はい、ネタバレになりますが、マサ、茜と藍の区別がつかます。  
ちなみに普段は、茜です。

まあこの辺りは原作を参照で。

・  
・  
・  
・

その4

『ガラッ!』

「おはようさん」と

「おはよう、マサナリ、昨日の呼び出しは何だったの？ また、何かやらかした？」

「杏君や、俺がしょっちゅう何かやらかしてると思ったら大間違いだぞ」

「あら？ 違うの？」

「違うつつつの、たまにはやらかさない日も・・・」

『ピンポンパンポーン・・・生徒の呼び出しをします、鬼島 政成君・・・鬼島 政成君・・・生徒会室まで来て下さい・・・ってい

「うか来ー！ーい！！」

「クスツ・・・やらかしてるじゃない」

「うむ・・・昨日は、やらかす日だったようだな、じゃ行ってくら  
ア」

『ガラツ』

『スタスタスタ』

『ガラツ！』

「馳せ参じましたぞ」

「馳せ参じましたぞ、じゃ、なーい！！ キミね、昨日、私達  
を送ってくれたのは嬉しいけどさ、その後の短時間で何があったら  
あんなことになるのかな？」

「チンピラに喧嘩を売られたら」

「買うな~~~~~！！」

「売られた喧嘩は買う主義だからね！！ つか、アレだぞ、あんボ  
ケ共、この辺で、ヤバ〜イ、葉っぱを捌こうとしてやがったんだぞ  
？ 見過ごすワケにもいくめえよ？」

「そついつのは警察の仕事でしょッ！！」

「つつてもなく、知り合いの刑事のオツチャンにも頼まれたしなく」

「学生にそんな危険なこと頼むなよ刑事さん……っていうかキミも聞くなって……」

マサ、やっぱり色々とやってるようです。

そして、まゆきさんは苦労人。

ちなみに、音姫さんは、この事は詳しくは知りません、まゆきさんが詳しくは伝えなかったようです。

実に苦労人。

・  
・  
・  
・  
・

その5

「マサナリよ、昨日は大活躍だったようではないか」

「相つ変わらず耳が早えな、杉の字」

「フツ……非公式新聞部の情報網をもってすれば、そのくらい調べるのはたやすい、どうだ、前々から言ってるよう、我が非公式新聞部に入らんか？」

「寧ろ、オマエが俺のなんでも屋の仕事、手伝わね？」

「ふむ……それも、また一興……では協力関係といくか」

「おけ、なんかあったら頼まあ」

ブラックリストのナンバー1とナンバー2が手を組みました。

ちなみに、ナンバー1はマサです。

まあ手を組んだといっても、場合によっては敵対とかもするよう  
ですが。

・  
・  
・  
・

その6

『~~~~~』~~~~~』~~~~~』~~~~~』

「お~~~~義之！ オマエ、ギター弾けたのか！！」

「あつああ、まあ趣味程度だけだな、っていうかマサに教えてもら  
ったんだけどな」

「えっ義之、マサナリも弾けるの？」

「ああ、アイツ、ギターどころか、ベースもドラムも出来るぞ？」

「そついや、得意そうだしな〜マサのヤツ」

「あの〜〜、そのマサナリ君って・・・あのマサナリ君？」

「あっそう言えば、ななかは会ったことなかったっけ？」

「うん、まあ名前は知ってるけど」

「そりゃそうだろう、この学校でマサのこと知らないヤツっていないんじゃないか？」

「有名人だもんね」

「よせやい照れらう」

「っていつの間に！！」

「今です、蛍光灯を取っ替えに来ただわ、つうワケで」

『ガチャガチャ』

「はい終了〜っと・・・で、ソツちゃんヤツは初めて見る顔だが・・・  
あつ、俺あ鬼島 政成な、マサかマサナリでヨロシク」

「あつ 白河 ななか だよ」

「ななか、なヨロ〜っと・・・イカン、イカン・・・次は陸上部の  
部室を直してこなイカンのだ、つうワケで、拙者はこれにて、ニン  
！！」

『シュバツ！！』



「えっ……き……消えた？」

「ななか、気にしちゃダメだよ、マサナリ、たまに、ああやって忍者っぽくいなくなるんだよ」

「くくく俺も身につけてく」

「いや、涉、アレは普通のヤツには無理だから」

マサ、チラッとNINJA。

あっちなみにマサ、そこそこ楽器が出来ます。

かなり半端ですが以上です。

番外編っぽい感じ！ その9（後書き）

後書き

何か色々と半端・・・。

ホント、スンマセンです。

次回は本編の予定・・・。

また時間がかかってしまつやもしれませんが、更新の際には、是非ヨロシクお願いします。

感想などありましたら是非。

絶賛スランプ・・・書いてる人でした。

第五十二話っぽい感じ！（前書き）

前書き

めっさ久々に本編。

どうにもグダグダ感が拭えませんが頑張ったんで、どうか見逃してやって下さい。

では何時ものように痛み止めを持ってどうぞ！！

## 第五十二話 っぽい感じ！

ただ今の競技は、パン食い競争、ウチのクラスからは日和が出とります。

俺も全競技やったるかい！！

とか思ったんだが、流石にアレだったんで、全部は出ない。

まっその分、応援はキッチリとつうワケで。

「オラアアア行けエエエ日和！！ 気合いだ！！ 根性だアアア！！」

腹から声を出し応援中。

「ちよッ・・・マサ君・・・声、大き過ぎる」

あっ、しもつた・・・唯に持ってもらってたんだったわ。

「悪い、ついな？ って日和ー、気を抜くなー！！」

一応は唯に謝りつつも、応援は続け・・・って、オイ・・・。

「なあ……アイツは何をやつとるんだ……」

「な……何か、上着を捲くり出ししてるわね……って何やってるの！！ 神崎さんハレンチよ！！」

ええ、日和のヤツ何を思ったか、上着を意図的に捲くり出してやがりますねん。

しかも何故か、めっさ、俺の方を見てますねん。

いやさ、そんな熱い視線を送られても……つつか、どうせいと？

そんな俺の気持ちは関係ござらん、とばかりに日和は、なんか妙にテンションが上がっていつとります。

「本格的にイカンはアイツ……」

「は……ははハレンチだわ……」

『パンパパンツ！！』

あっ……いつの間にやら終わっとるし。

さて……次は……。

『タッタタタ』

「ハアハア……どうだったマサナリ君？」

日和の事はスルーしようと思ったが、そうはいかないらしい。

息が上がってる日和が報告に来た、走ったから息が上がってるんだと思いたい。

「か、神崎さん！ アレは何だったの！？ は、ハレンチよー！」

「あっ古手川さん、アレってアレのこと？ アレはね、ほらパンを食べる時ってジャンプするよね？ その時、チラッとお腹が見えるよね？ そこで私は気付いた！！ マサナリ君が応援してくれてたし、チャンスって思って……フウ~~~~興奮した~~~~」

なんだろ、コイツ……何うつとりしてんの？

なんか……うん……アレだな……うん。

「日和」

ヒョイと日和の肩に飛び乗り。

「えっ？ 何？ あっ、新しいプレ」

「もう喋んなー！！」

『ゴスンッ！！』

ゲンコー！！

「へにゃー！？」

『ドサッ』

見事に崩れ落ちる日和さんです、崩れっぷりは中々に面白かった、そこは評価してやらんこともねえ。

「ちょッ！ マサ君!？」

「唯、言いてえこたあわかるが、あのまま放置して方がマズイだろ、コイツ何処まで突っ走るかわからんぞ？」

「うっ……まっまあ確かにそうね……」

そういうことです、うっワケで日和は一旦。

「日和、担当の直子さ〜ん、お願いしま〜す」

「そろそろ担当外れたいよ……ハア〜それじゃ連れてくね」

ため息混じりに日和を引きずって行く直子です。

つか……。

「日和の頭、削れてね？」

ええ直子のヤツ文字通り、日和を引きずってんですわ、しかも持つてる部分が足だから頭がね、ゾリゾリ音を立ててますねん。

「こつすれば、ちょっとくらい回路が直るかなあってね？」

直子いわく、そう言うことらしい。

なんか色々苦労してるっぽい。

頑張れ直子、負けるな直子！！ 日和が戻る（正常）その日まで。  
さて気を取り直して。

「次は唯の出番じゃね？」

「えっ、あっ！！ そうね・・・それじゃあ」

「唯ー！！ その間、私がマサを預かるよ！！」

というワケで、抱っこちゃん人形な俺、唯 ララにバトンタッチ。  
つか・・・フと思ったんだが・・・。

「小つさい状態って競技に出る時だけでよくね？」

「いいの！ それじゃマサを抱っこ出来ないもん！！」

さいでつか・・・つか一々、抱っこちゃん人形扱いせんでも、よろしいやん、とか思わなくもねえが、なんか言っても無駄な気がしたんでスルーした。

あつちなみに唯の出る競技は中距離、400メートル走です。

色物な競技だけじゃなく、こつこつ普通のもあるみてえですな。



つと……唯の出番だな。

おっ！？

「唯、結構、速え！！　しゃッ唯！　行けエエエ！！」

「頑張れー！ー唯！ー！！」

ララと一緒に声援を送る、心なしか、若干、速くなった気がすんな。

『パンパンッ！！』

「おっしゃー！！　唯、よくやった！！」

「やったー！！一番！！」

唯、見事に一位を獲得！！

いやぁ流石だわい。

照れ臭そうに帰って来た唯を盛大に向かえました。

うむうむ、優勝が近付いてるねえ。

「次は私達だからマサ君、応援してね？」

「頑張っちゃうからね！！」

次の競技は二人三脚、俺らクラスからは、恭子とルン、ペア。

さらには。

「私達もでるよマサマサ」

里沙と未央。

さらにさらに。

「俺達だってやってやるぜ!」

「一位を取ってマサの背中に追い付くぜ!」

A & Bの三組です。

つつても、それぞれ出る組はバラバラなんだけんどな。

「全組! 一位を掻っ攫え!! 我がクラスの層の厚さを見せるの  
だアアア!」

「「「「「「おお~~~~!!」」」」」」

・  
・  
・  
・

で、結果……。

「見たマサ君! イエーイ!!」

「マサナリ君〜やったよ〜」

恭子&ルン、ペアー位。

「ふっふ〜ん！ 伊達にコンビ歴は長くないってね〜」

「そうそう！ ブイ！！」

里沙&未央、一位。

「くっそ・・・スマン・・・B、俺が・・・あの時、躓まずかなきゃ・・・スマン」

「オマエのミスで負けたんじゃないやねえ負けたのは俺『達』の責任なんだ！！ オマエのミスは俺のミスなんだ、そういうもんだろ相棒つてよ！！」

A & B・・・惜しくも二位。

ただ・・・。

「よく言ったBイイイイ！ Aよ、このまま傳いてていいのか？ Bの漢気に応える為に立ち上がるんだ！！」

なあに次の競技は俺が出るでいビツと一位を搔つ攫ったらアアア！！

だからAよオマエも次に出る競技で搔つ攫え！！ オマエなら出来る！ なっB？」

「おう！ マサの言う通りだA！」

「ああ・・・ああ・・・わかった・・・やってやるぞー!! ウォー  
――!!」

熱き漢魂オトコソウルに日がつく俺達だった。

A & B よ・・・成長したもんだぜ。

「青春ね〜」

そんな俺達の横を、どっかの机妖怪・・・じゃなく、保健さんが  
通り縋り。

『ヒョイ』

何故か回収される俺だった。

「いやさ、なんでやねん？」

「私も抱っこしたいもの」

保健さんも抱っこちゃん人形にしたかったらしい。

と、そんなこんなが有りながらも。

俺、出場の、大玉を転がし。

「おっしやー！ー！ー!!」

『速い！ 速いぞー！ 鬼島ー！ ってていうか転がせー！ ！ 持って走るなー！ ！ ！』

若干エテ山に突っ込まれつつも一位を掻っ攫う。

で、続いてAも、気合いで一位を取った。

うむ、大分、来てるぜ我がクラス。

と・・・ここで午前の部、終了。

昼メシタイムってなワケで皆で弁当をむしゃむしゃ、あつ流石に俺、元のサイズに戻っとなりますよ。

「スポーツのイベント・・・楽しそう・・・ですね」

昼メシを食ってたら、ポツリとヤミっ子の咳く声が聞こえもつした。

ちなみに、ヤミっ子、今まで図書室にいたらしい。

「じゃヤミっ子も参加すりゃええやん？」

「そつだよヤミちゃんも参加しよ？ 楽しいよ！ ！ ！」

「しかし・・・チームが・・・」

むっ、そんなもん俺らクラスに入ればいい気がするが・・・。

「それなら、ガクラン君の二人でチームを組めばいいんじゃないかしら？ 二人共、仕事で組んでるでしょ？ 用務員チームってこと

で、どうかしらっ。」

保健さんの、その一言により、急遽、俺&ヤミの。

1-A別働隊、M・Y・S・S出場の流れになったッス。

ちなみに、コッチのチームの点数は半分だけ1-Aに加算って事になりました。

俺が二倍、出ないといけんくなるんだが、そこは、まあ全然大丈夫ってことでスルー。

ヤミが微妙に嬉しそうだったのが可愛かったッス。

あっ、それと、出場する際の衣装は勿論、ユニフォーム作業着ッス。

まっヤミに対して校長(変態)が。

「そ、それより、この『私物』の体操服を貸しましょう！ あっ勿論、私物だから返して下さいね？ 洗わずに！！」

とかほざいてたんで。

「ダブル・シャニング・ウィザード！！」

『『ゴキヤン！！』』

の刑に処した。

ホント・・・ダメだコイツ。

とりあえず、校長（変態）を処刑した、M・Y・S・S最初の出場競技は……。

「綱引き……ですか？」

はい、綱引き。

各クラス、トーナメント方式で一位を決めるらしいツス。

俺クラスとぶつかったらどうなるんよ？ と思ったが、そこは、そのまま、対戦することになるらしい。

むろん、我がクラスとは言え、当たったら勝ち譲らん、まっどつちが勝ってもクラスには点が入っしな。

と、脳内コチャコチャしてる間に、最初の対戦クラスと対決。

「二人対約四十人……しかも一人、小人って……」

「リト……余り深く考えるな……それにヤミはともかくマサだぞ？ 四十じゃ……」

リトとリコの会話が聞こえてくる中。

『パンツ！』

勝負開始の合図が響き……！

「そおーいーい!」

「・・・そおーい」

ヤミと共に一気に綱を引き。

「「「「ギヤアアアア!」」」」

対戦クラスの叫び声が青空に響いた。

うん・・・そうだね・・・。

「やり過ぎましたか?」

「うむ、つい張り切っちゃったな?」

次からは少し押さえた方がいいかなあと思いました。

「なっ?」

「いや、やり過ぎだろ? あっ・・・当たりたくねーっ!」

いせ、リト君、ちゃんと調整するってばよ。

・  
・  
・  
・



で、結果は、一位、M・Y・S・S、二位、1-A、でした。

「フハハハ！！ 見たか俺とヤミっ子の力！！」

「フハハ・・・」

俺のマネをするヤミっ子が可愛いかったッス。

まあ向こうからしたら憎らしいだろうけどね。

その後もガシガシと競技が進み。

『さー続いては、男女混合、1KMマラソンです』

これには、リト、春菜、唯が出る。

「リトーーーー頑張れい！！ オマエなら行ける！！ 春菜も、唯も  
気合いと根性だー！！」

「おお！！ 絶対優勝してやるぜッ！！」

いいねえ、リト張り切っとなりますぞ。

「燃えてるねリト君」

「そうね、マサ君のが写ったのかしら？」

そんな会話がなされてる中！！

『よ～～～い、スタート!!』

『パンツ!!』

1KMマラソンがスタート。

つか。。。

「1KMって。。。マラソンって距離じゃなくね?」

「ですが中距離というワケではありません」

むっ。。。確かに、とヤミと暢気に会話をしてたらアクシデントが起こった。

『ドンッ!』

「キャッ!?!」

「春菜ちゃん!! 危ねっ!!」

『バツ! ドサッ。。。』

スタート直後の混戦に巻き込まれ、春菜が弾き飛ばされ、それを庇ったリトが足をくじいた。

ヒョコヒョコと春菜に肩を借りて戻ってくるリト、その後ろを心配そうに着いてくる唯。

さて。。。俺は。。。

「アイツら・・・D組か・・・ちよつくら、ベッコリ殴り込みに行  
って」

と思った直後。

「ご・・・ごめん・・・ボク、ま・・・回りが見えなくて、ほ・・・  
ホント、ごめんなさい!!」

春菜を弾き飛ばした太い男子生徒が謝りに来た。

「ど、どうしても一位になりたくて、頑張ればボクでも一位になれ  
るかなって思っで・・・ホントにごめんなさい!!」

「ああ・・・いいよ、頑張った結果だもんな」

「うん、仕方ないよ」

そんな太つちよ君を許す、リトと春菜。

ベッコリ殴り込みに行くつもりだったんだが・・・。

その筋を通し太つちよ君に免じて止めとくことにした。

「まっとにかく保健室だな・・・」

「あっ私が連れてくよ」

「頼む春菜!!」

春菜にグツと頭を下げる。

「うん!!」

「マサ、次の競技、頑張れよ……って次って」

「敵ってことになんのかねえ? M・Y・S・Sとして出っからな」

まっどっちゃんにしろ、1-Aに点数が入るワケだが。

「そつか……じゃララ! 頑張れよ! 頼んだぜ?」

「うん!!」

オイオイ、そりゃあ、ちょっと薄情じゃねえのかい?

とか思わなくもねえけど、まあ仕方ないっちゃん仕方ない。

「手が空いたら整体してやっからな?」

「ゲツ!? 勘弁してくれって……ツテテ……」

「あつ、リト君! あんまり動いちゃダメだよ、ほら保健室に」

春菜に連れられてリトは保健室へGO。

「結城君、大丈夫かしら?」

「見たところ、そんなに腫れてねえし、多分、大丈夫だと思うぞ、今日一日大人しくしてりゃ、明日にでも治つたら」

「それって、マサさん基準？」

「いんにゃ、俺なら2分で即完治」

「ガクラン君って・・・ねっそろそろ解剖」

「NO解剖で!!!」

「残念!!!」

「つたく、なんで、そう解剖したがんのかねえ保健さんは・・・つて待て!!!」

「なしてコツチにいんの？ 今、ケガ人が保健室に行つてんじゃん？ なにしてんの？」

「大丈夫よ、西連寺さん、テニス部でも、ケガの処置は慣れてし、ある程度は勝手も知ってるわ、それにほら・・・ね？」

「茶目つ気たつぷりにウィンクする保健さん、はて・・・つて、なるほろ・・・。」

「協力してくれんるスカ？」

「少しくらいはね？」

「よかったな、リト君!!!」

保健さんもホント助かります。

「その代わり・・・今度、助手を手伝ってもらおうよ?」

「そりゃいいツスけど・・・静は?」

「あの子は・・・力仕事に向かない・・・ってワケじゃないけど、ほら」

保健さんが指差す方向を見ると。

「わきや~~~~~!!」

『ドンガラガッシャン!!』

なんにもないところで躓いた上に、その横にあった、競技に使った道具に突っ込んで目を回してる静っ子が見えた。

って・・・あっ、魂出てる。

「ねっ?」

「なんとなくわかったツス」

「コレは不安が付き纏うわ。」

「頑張ってるのはわかるんだけどな。」

『次の種目は借り物競争です』

っと、出番だな。

「さあ〜て行くべえ〜か」

「ええ」

「マサ！ ヤミちゃん負けないからね！！」  
俺、ヤミ、ララの三人はスタート位置へ。

「えっ？ まっまたマサナリさんと同じ組ですよ！？」

どうやら沙姫も同じ組で走るっぽい。

「悪いが一位は貰う！」

「いえ、一位は私です」

「私が1番になるもん！！」

ある意味、コレ個人戦みたいなもんなんで、同じチームでも勝負になる。

特に俺とヤミ！！

で、ララも結構負けず嫌い。

「おやおや・・・俺に勝てるんでも思ってたのかねえ？ こと運動に関しちゃ、一人以外にゃ負けねえぞコラ？」

「それも今日までです、今日で二人目が刻まれます」

「勝つもん!」

ほっほう〜・・・生意気な・・・。

「潰したらアアア!」

「コチラのセリフです」

「エッへへ〜ン一位は私〜」

かなりヒートアップしてきとります。

「アレ・・・私・・・おいてきぼりですか?」

あっ・・・なんかスマン沙姫、ついつい。

「あっ・・・そっそっですわ! マサナリさんこの競技で私が勝つたら・・・」つ言っことを聞いていただけませんか?」

微妙に落ち込んでるなあと思ってた沙姫がバツと顔を上げ、そんな事を提案してきた。

むろん、負けるつもりはサラサラないんで。

「よかよ?」

つつたら。



「絶対勝ちますわーーーー！！」

めっさ燃えてた。

それに続くように。

「マサナリ・・・私が勝ったら」

「マサーー！私もー！！」

ヤミにララの二人も要求。

「フツ・・・上等！！ 勝てたらな！！」

『『『ギラリ！！』』』

俺の一言に目を光らす、ララ、ヤミ、沙姫。

そんなこんなで負けられない借り物競争が・・・。

『パンツ！！』

始まり・・・。

『パンパパン！！』

「凜！ 綾！！ やりましたわ~~~~！！」

「おめでと~~~~ございます沙姫様！！」

「流石です沙姫様!!」

何が何やらわからんうちに終わったッス……。

ええ結果は、あのはしゃいでる沙姫を見てわかる通り、沙姫が一位。

俺、ヤミ、ララ特に俺とヤミは互いに互いの足を引っ張り合った結果、惨敗。

「マサナリが、あそこで邪魔をするからです」

「ハア!? 邪魔したなあオマエだろうが!!」

「むう……二人が、そうやって邪魔しあうから負けちゃうんだよ」

「オイ、コラ、ララ? オマエだって俺とヤミにビームぶっ放してただろうが!! お陰で、借り物カード粉碎だぞ!!」

責任のなすりつけあいには体育祭が終わるまで続いた。

・  
・  
・  
・

あっちなみに沙姫の要求は。

「こ……今度、私のお家で、私の執事をしていただきますわ!!」  
だとさ?

正直、似合わんだろと思わなくもないが、約束は約束なんで、やらなイカンよな。

## 第五十二話っぽい感じ！（後書き）

後書き

無理矢理な感があった、体育祭編でした。

そしてマサ、執事になる・・・まあ次回とは限るませんが・・・。

というかベターだなく、まっいまさらですが。

では次回も頑張っていきたいと思えますので、また是非。

感想などもありましたら是非！！

第五十三話っぽい感じ！（前書き）

前書き

なんだかんだで、執事編！！

正確には執事モドキの回！！

やっぱりアレがソレで、アレなんでアレをアレして、どんぞ。

## 第五十三話っばい感じ！

やって来ました、沙姫の家！

ン？ 何の為とな？ うむ、それはアレだ、前回、なんやかんやで、沙姫に敗北をきつした為に、執事のマネ事をしに来たんですな。既に一回は侵にゅ・・・ゲフンゲフン、来たことがあったんで、その要領でスツタラスツタラ中に入ろうとし。

玄関先についてた、監視カメラに、やっほーする。

今回は俺が来るのを知ってたからか。

「ようこそ、おいで下さいましたわ！！」

と沙姫達が出迎えてくれた。

そいで、もって早速、執事服とやらに着替える事に。

まあ言わずもがな・・・。

「どじょい」

「こ・・・怖い・・・です」

「に・・・似合いませんわ・・・」

「私としては有りだが・・・流石に一般受けはしないだろうな」

例によって、どこのマフィア？ って感じになってまいりました。

「ホント何でやねん・・・普通さあ、主人公って、こういうの似合うもんなんじゃないの？　なんで、マフィアよ・・・」

「政成、若干メタだぞ？　いや似合ってなくはないが・・・人を選ぶということだ、さっきも言ったが私としては、あっているぞ」

凜がそう言って、慰めてくれたが、さっきから、綾が俺を視界に入れないよう必死で目を逸らしてるんですが？

微妙に沙姫も距離をとってるし・・・。

「沙姫、着替えていいか？」

「えっええ・・・まっまあ仕方ありませんわ」

いや、ホント、スマンね・・・。

つつワケで執事服は却下の流れになりました。

で、執事服を着替えて、普段着、状態にエプロン（スピーキーズ仕様）を着用。

「まっコレで妥協ってことで」

「ええ、構いませんわ」

「でも、それって執事というより家政婦さんですよね。」

うむ、俺も若干そう思わなくもねえですが。

「じゃやっぱしアレを着ると?。」

ビツと執事服を指差して、そう言ったら。

「怖いからイヤです!!!」

「却下ですわ!!!」

即座に綾、沙姫から反対されました、俺もイヤだけどね!!

まっ、凜だけは微妙に、悩んでたっぴいが。

「で、執事って何すんの?。」

はい、いまさらな質問をする俺。

そこそこ色々な経験をしたりしますが執事の経験はないツス。

「それは私が指導をしていこう、代々、九条院家は天条院家に仕えていた家系だ、キツチリと指導してやろう。」

ほう・・・そう、だったんだな。

ってアレ?



「綾は？」

「あつ私は、その昔、私が男の子達に虐められてた時に、沙姫様に助けていただいて・・・それで」

ほうほう、それで恩義を感じてると・・・うむ。

「やっぱり良いヤツだな沙姫！！ うむうむ」

「そつそつでもありませんわ！ 天条院家の者として当然のことをしたまでですわ！！」

微妙に照れて赤くなる沙姫です、つか、きつと沙姫なら、天条院家とか、んなこたあ関係なく、手を出した気がする。

とか思いながらも、勿論、撫でました。

そんなこんながありつつも。

「では、政成、まずは言葉使いからだな」

凜の熱血指導、目差せ執事への道が始まったッス。

つか・・・言葉使い・・・か・・・。

「無理くせえ~~~~元々、苦手なんだが、カッチリした言葉使いって」

「それはわかるが、今日は沙姫様の執事として来たんだ、苦手だろうが、先ずはやってみろ」

むむっ・・・厳しいな凜よ・・・。

仕方あるめえ。

「沙姫殿、西洋から仕入れた、茶っ葉がありまする、拙者が入れて、  
「じぎそつるじ」

「何語ですの!!」

いや、俺にもわからん、なんか改めて、やれと言われるとテンパ  
った。

ンッン・・・では、改めて・・・。

「ナンナンナリトゴメイレイヲ！ ナンナリトゴメイレイヲ!!」

「怖いですわー！ーッ!!」

メカチツクにやってみたら、怖がられた、残念。

コレもダメっど・・・。

「あっあのマサナリ君、こつういのは、どつでしよつか？」

綾、何か良い案があるっばいらしく、俺に耳打ちをしてきた。

「えつと〜ゴニヨゴニヨ」

えっ？ マジでか？

「に……似合ねえ……、俺アどこぞのイケメンじゃねえんだぞ」

「まあまあ、とりあえずやってみて下さい」

むむ……仕方あるめえ。

絶対、似合ねえ気がすつけど……。

俺と綾のやり取りを何か言いたそうな顔で見てた、沙姫のところまで近づき。

『スッ』

と、ひびかずき。

「我が姫、我が拳は、我が姫の為に……」

「えっ？ えっ！？」

何やら混乱してる、沙姫の手をとり。

「我が姫に忠誠を」

『チユッ』

手の甲にくちづけ……。

うむ・・・似合ねえ・・・。

つかキャラじゃねえよ、ってしてもた・・・コレ絶対ドン引きされるわ～～～。

そう思いつつ顔を上げたら。

「まっまママサナリさん！！ あっあっ・・・ぶしゅ～～～～～  
く！！！」

『ドタッ』

沙姫、煙を上げて電源がOFFになってまいりました。

「そんなにイヤかい・・・いやわかるけど、全然、似合ってなかったしさ、もう二度とやらん」

舌が火傷するわ！！

「何！？ 二度としてくれないのか！！ 私にはしてくれないのか  
！！！」

「せん！！ つか何故に凜にまでせなイカンのじゃ！！！」

「ズルイぞ！ 沙姫様は確かに主だが、沙姫様ばかりズルイではな  
いか！！！」

「知らねえーっつうの！！ 大体アレ全然似合ってねえだろうが

「！！やる必然性がねえ！！」

「必然性だらけだ！ いや・・・寧ろ必然性しかない・・・と言っ  
ていい！！」

「いやさ、凜よりフォームも上手いだ ワ風な感じを出されても・・・  
微妙に似てたけど。」

「そんな言い合いを続ける横で。」

「沙姫様~~~~大丈夫ですか~~~~」

「ウフフ・・・ああ・・・幸せですわ・・・」

沙姫を介抱する綾に、何故が微妙に恍惚とした表情で電源OFF  
中の沙姫でありました。

「必然性・・・しかないと言っていい！！」

そのフレーズ気に入ったのか凜よ・・・。

・  
・  
・  
・

流石にもうちよい続きます。

と恒例のメタ発言をしつつ、沙姫が目を覚ましたんで執事への道、再開。

ちなみに、凜にはアレはしなかった、なんかめっさ、ふて腐れたが、知ったことが、ですわい。

沙姫にも、もう一回要求されたが、むろん、それも拒否つといた。

アレはやってて、自分でもさぶイボ物だったしな。

封印だ、封印。

「ンじゃ、先ずはお茶でもいれまする」

言葉使いはやっぱし変だが、そこはまあ妥協してもらい、お茶をいれます。

この辺は手慣れたモンです、まっこんな高級そうな、茶っ葉や、道具は使ったことあねえけど。

「どござ」

「ありがとうございますわ・・・ンッ・・・あっ、美味しいですわ」

「恐悦至極」

フッ・・・一日の長がありますからな、っと俺も・・・。

「待て待て、政成、一緒に飲んでどござする」

と思つたら凜にダメ出しを喰らつた。

「えっダメなん？」

「一応、執事だろ、主の許可が出たならまだしも、自分からはダメだ」

むむっ・・・残念・・・。

執事つてめんどくえせな・・・。

「向き不向きつてあつけど完全に俺には不向きな職業だな・・・将来、執事だけはせん」

「そういうな、見る、政成が入れて、お茶で沙姫様が嬉しそうになさっているだろ、それを見て政成も嬉しくならないか？」

「なるぞ、美味そうに飲んなぐつてな？」

ああまで美味そうにしてくれつと入れた側としても満足ですわい。

「その気持ちが執事には大切だ、どうだ将来、執事になりたくなつただらう？」

「ならん、堅っ苦しいのは苦手なのよ」

「頑固な」

カッチカチだからね、つか、なんで、そんなに執事を押すよ凜。

「何をコソコソ話してますの？ お二人も一緒に飲みましょう」

おっ？

「コレならおけ？」

「うむ・・・というか、既に綾は飲んでるな」

ですな、ちゃっかり綾です。

さっきのことと言い、以外と油断ならんな、このメガネっ娘は。

まっいいさね、とりあえずお言葉に甘えてっことで、お茶タイム。<sup>△</sup>

茶菓子はスコーン。

コレは市販のヤツ、やっぱ高いんかねえ。

まっでも・・・自分で作った方が心情的に美味しく感じる気がする。

若干、自慢っぽいが、メキメキ実力は上がっとなるしな。

つつワケで。

「次は俺が何か茶菓子を作りますぞ、沙姫、何をか食べになりてえですかい？」

「えっ・・・えっと・・・チーズケーキを、いつかの学園祭の時に食べたケーキが美味しかったですわ」



「おけ！　です、じゃチーズケーキを作ります、凜も綾、よかか？」

「ああ」

「はい」

と次の茶の時間はチーズケーキを作ることに。

で、お茶タイムが終わり。

「マサナリさん、チェスのお相手を」

むっ？　チェスカ・・・チラツと凜に確認。

「主のチェスのお相手を勤めるのも、執事の役目だ」

「どうやら、そういうことらしい・・・。」

「では・・・僭越ながら・・・」

と沙姫のチェスの相手をする事に・・・。

「ポーンとナイトが合体！！　超戦士！　ナイトロードが誕生！！」

「そんなルールありませんわ！！　というか・・・マサナリさん・・・チェス・・・出来ませんか？」

うっ……。

「スンマセン……全然、わかんねえです、将棋なら出来るでござえますが……」

チェスは全くもって、出来ませんねん。

「いや……ホント、スンマセン……」

「そっそそんなに落ち込まなくても、いいですわ、私が教えて差し上げますわ」

と、沙姫にチェスを教えてもらうことに……それで、なんとか、かんとか、ルールだけは、わかったっぽい……。

で、再戦。

「チツクシヨーーー！！ 将棋なら負けねえ！！ 将棋盤、持って来ーーーいッ！ー！」

ボロ負け……こういうの得意なはずなんだが……。

チェスとは相性が悪いぞ、チクシヨー。

あっ、後、さっきのアレで、ちょっと凜に怒られた。

でも、なんやかんやで将棋盤を持って来てもらって勝負することに。

ちなみに、沙姫はチェスとは逆に将棋はわからないらしく、対戦相手は凜。

その勝負を見ながら、綾が教えていくって形。

で勝負の結果は……。

『ジャラジャラ』

「フハハ……さて、凜よ、次はどうするよ?」

持ち駒ジャラジャラな俺。

「ムググ……まさか、政成がここまで強いとは、クツ……今まで、父上、以外に負けたことはないというのに……」

王将が殆ど丸裸な凜。

フツ……将棋は強いんですよ、将棋は。

「クツ……投了だ」

「イエース! 見たか沙姫! ワツハハハ!」

主の沙姫に勝利の報告!!

「な……なにか可愛いですわ」

「子供みたいです」

可愛いのはオマエさんらの方だったつうに、子供なんは認めるけど

ね。

「っと・・・ボチボチ昼メシの時間帯でござえますな、昼メシはど  
うするんでござえますかな？ 作りまするか？」

「マサナリさんの手作りですか？ よっよろしくお願いしますわ！  
」！

おっ食いついた！ 昼メシだけに・・・うん忘れてくれ。

「では厨房に案内しよう」

「あいあい」

凜に案内されて厨房へ・・・。

「うへえ〜デケエなオイ？」

「それは、そうだろう、天条院家の厨房だぞ？」

まあ家、自体もデカイしな、しかも高級食材が、どっちやりやん。  
・・・まっ俺はあえて・・・。

「コレだな、後はコレ」

「むっ？ 何を作る気だ？ というか、ソレは食材じゃないだろ？」

まあ、そうなんだがね？

ン？ では何をつてか？ それはアレです、鉄板です。

更には肉とソバと、炊いた米。

「後はガスを引いてつと・・・」

上手く、ガスを引っ張って来て、沙姫が待つメシ用の部屋に。

「何をいたしますの？」

「フフン、今日の昼メシはパフォーマンス込みだ！ まっ見てて下されー!!」

鉄板を繋げたコンロの上に置き。

『キンキンッ!!』

二本のへらをうちならして。

「先ずは肉だ!!」

『ジュューッ!!』

と鉄板に乗せて焼き始める。

「鉄板焼きのパフォーマンスか？」

「凜正解つと!!」

『ボウッ!!』

定番のフランベ。

そして。

『ヒュックルクル！！』

コショウが入ってるアレ・・・確か・・・ミルだったか？ を体の後ろから回して投げて、キャッチ。

更に、二〜三回、回転させ。

パツパツと味付け。

「す・・・凄いですわ」

「こういうの生で見るの初めてです」

「やるな、政成」

中々に喜んでるっばいな。

「まっ味も・・・美味しいはず、つか良い肉だから、美味しいわな、コレは料理人の腕とはあんまし関係なさそうだけど、とりあえずは、召し上がって下され」

『カシヤカシヤカシヤ』

サクサクと肉を切り分けて、三人に差し出す。

うむうむ、中々に美味そつに食べてますな、さてさて。

後は……。

『ジュージュー……』

軽くパフォーマンスをしながら、作り上げたのは。

「なんですのこの、お料理？」

沙姫はやっぱし知らなんだか……まっしゃあねえわな。

「ソバ飯でござえます、以外と美味いから食べて下され」

「えっええ……ハム……あつ美味しいですわ……」

うむうむ。

「そいつあよかったでござえます、凜に綾は？」

「美味いぞ」

「美味しいです〜」

よしよし、好評、好評。

一応、自分の分も確保して昼メシは終わり。

美味そうに食ってくれたんで満足満足ですしたわい。

パフォーマンスも喜んでくれたしな。

で・・・後片付けをしとる時に気付いたワケだが。

電球が切れてたり、若干、ホントに若干ではあっけど、微妙に壁のところにキズが入ってたりした部分が目についた。

「何せ広いからな、気をつけてはいるが、どうしても手が回らない事がある」

凜に聞いたらそういう事らしい。

で、俺、臨時用務員としての血が騒いだんで。

「じゃ補修しまゝす」

とサクサク補修作業に取り掛かる、この辺りの実力もメキメキと上がっとなります。

今なら一軒家も半日、掛からずに建築出来る気がするぜ！！

とか言ってる間にも補修作業は完了。

「流石だな」

と凜や、通り掛かった、本職の執事さんやら、メイドさんやらに感謝されました。



「凄いですね〜マサナリ君」

「そっそうですわね・・・真剣にお仕事をなさってる姿・・・かっただですわ・・・」

仕事に手は抜かない、それが職人つてもんですからな。

つか、沙姫、小声過ぎて、最後聞こえなかったんだが・・・。

まっいいさね。

とりあえず、作業も終わったし・・・。

さてさて・・・執事の仕事に戻りますかねえ〜。

と・・・ココで、ある事に気付いた。

「執事ってコレであってるのか？」

「違うな」

「違う・・・と思いますわ」

「違うんじゃないかな〜と」

やっぱり違うっぽい。

つか執事っぽい事を全然、してない気がする。

「やっぱり向いてねえーわ」

心底そう思う俺です。

「政成はなんでも熟しそうな気がしたんだがな」

「んなワケねえじゃん、そこそこ色々と熟せなくもねえけど、なんでも無理よ?」

巷で融通が効かないと評判だからな。

つか巷って何処のじゃろ?

自分で言っておきながら、クビを捻ってたら。

「どうしたんですの? 何かお悩みでもありますの?」

と、沙姫に心配された。

思いきつと聞いてみた。

「巷って何処じゃろ?」

「へっ?」

やっぱりクビを捻られた。

そら、そうだろ。

「いや、気にせんといて下され、対したこっちゃんええですからな」

「えっええ、わかりましたわ」

とりあえず、気にするなと言って置き。

次は何をするのかと聞いてみたら。

「そうですね・・・お勉強をする時間で

『ダッ!!』

離脱を試みた。

「待て政成！ 何故、逃げる！」

「いや、あの、勉強はちょっと？ ほら別にテスト前ってワケじゃねえし？」

「何を言ってますの日々の努力が肝心ですよ!!」

グッ・・・沙姫、超正論・・・とか思ってたら。

「まあ私でしたら、お勉強などせずともテストで一位をとるなんて楽勝ですけど!! オーホッホッホ!!」

『ピッピッピッ』

「だから！ それはおやめなさい!!」

コレばかりは定番だから、そう簡単にはやめねえです。

「全く、とにかく、お勉強をいたしますわ」

というワケで勉強タイム。

この時間は非常に辛かった。

故に語りません。

ただ、沙姫、凜、綾は自分の勉強が殆ど進まず、俺に教えるのに時間を取られまくったとだけは言っておきます。

ホント、スンマセン……。

一応、執事って事になってるのにね……。

主に迷惑掛ける執事ってどうよ？ ついたら。

「構いませんのよ、というより、マサナリさん、もう執事は結構ですわ、窮屈でしょう？」

って言ってくれたツス。

いやホント、助かります。

「じゃコレからは普通になってえ事？ いや、やっぱり執事業務は向いてなかったわ、ホント、本業の人は尊敬すんね？ 目差そうたあ思わねえけど」

開放感と共にクビをゴキゴキ鳴らす、まあ全くもって執事として

は機能してなかったけど。

「ふむ・・・やはり執事は目差す気にはなれないか残念だな」

「凜そう言わないの、マサナリ君、凄く窮屈そうだし」

いや、窮屈だったんですよ。

「まっ執事は終了したけど、チーズケーキは作りまっしょい」

「っ言っつのは以下略だからな。」

で、チーズケーキを作り、お茶タイム。

「そっいや、三人って付き合いは長えのか？」

チーズケーキをモグモグしつつあの妙な敬語もどきをやめて、その事を聞いてみる。

「そうですね、小さい頃からの付き合いですわ」

「そうですね」

「私の家系の話をしたる？ だから私はそれこそ生まれた時からだな」

ほっほっ。

「その頃からの仲良しさんってワケか？ 仲良いもんな？」

「そういう政成も、結城 リトと仲が良いだろ」

「まあよ、いっちゃんの親友だからな？」

コッチに来てから、ずっと世話になりっぱなしだしな。

「少し・・・妬けますわね」

「そうですね」

「フツ・・・羨ましいかね？ ってオマエら三人も似たようなもんじゃん」

「そういう意味じゃありませんわ」

ならどういう意味やねん？ とクビを捻ってたら。

「やはり鈍いな・・・」

「呪い級だって話だから」

呪いって何よ？

と、こんな感じでダラダラとお茶タイムを過ごし。

そろそろタイムセールの間で。

「じゃ、そろそろ帰りますわ」

「えっ？ もっもうですよ！？」

「悪い、タイムセールがな？」

「主夫だな」

「主夫ですね」

なんか最近、俺もそう思う。

まっ、それはさて置き、帰りますっつと。

「スマンな、結局、執事っぽいこたあ、何もせんくつてよ？」

「いえ・・・楽しかったですわ」

「そうかい、それなら、まあよかったわ？ じゃくな？」

「・・・ごきげんよう」

「ではな、政成」

「さようならマサナリ君」

手をヒラヒラさしながら、沙姫の家を後にしました。

沙姫、若干淋しそうにしてたな、また今度遊びに来るべえか。

とこうして、執事のマサさんの一日は終わったのであります。

つか、何度でも言うが、全然、執事してなかったけどね！！

・ ・ ・ ・

沙姫 視点

行ってしまいましたわね・・・。

少し淋しいですわ・・・。

楽しい時間は早く過ぎ去る・・・この言葉は本当でしたのね。

マサナリさんが訪れた、今日という日は、本当に、あっという間に、それこそ瞬きのように過ぎてしまいましたわ。

「ララが羨ましいですわ・・・」

マサナリさんと同居してるというララ、その事が羨ましく感じますわ。

でも・・・一つだけ優越感を感じることがありますのよ。

それは・・・。

そつと右手を握る・・・この手にマサナリさんが、くちづけを、なさって下さったこと。

余りに驚き過ぎて、気を失ってしまったのは不覚ですけど。



フフ・・・嬉しかったですわね。

「むう・・・沙姫様、羨ましいです・・・何故、私には・・・」

「まあまあ凜、きっと、また何か、アレばやってくれるんじゃないかな？」

「それはダメですわ！！ アレは私だけの特権ですわ！！」

綾の言葉思わず大きな声を上げてしまい・・・。

『カア~~~~~』

「お・・・お家に入りますわよ！！」

熱くなってしまった、お顔を見られないように、急いでお家に入りました。

「むむう・・・やはり羨ましい」

「うわあ~~~~沙姫様、可愛い・・・」

う~~~~恥ずかしいですわ。

やはり、マサナリさんが絡むと調子が狂いますわね。

イヤじゃないですけど。

寧ろ楽し・・・なんでもありませんわ~~~~~!!

## 第五十三話っばい感じ！（後書き）

後書き

はい、なんだコレ？

な、感じに・・・つか執事って何？ 何する人？

書いてる人にもサツパリサツパリです。

故に殆ど何時も通りに、ただ遊んでるだけな感じに・・・。

ちなみにマサ、直接ズッキューンじゃなかったら、良いんじゃないかね？  
タイプです、ってコレ言うの何回目だろ？

まっまあそれはさておき、今回は・・・そろそろ双子をガッツリ出したいかなあ？ とかうっすら考えてますが、やっぱりどうなるかは謎！！

ですが次回も更新の際には是非、覗いてやって下さい。

感想などありましたら是非！！

第五十四話っぽい感じ！（前書き）

前書き

双子さん襲来！！

と思わせて、全然違う話です。

っていつか出てきません。

でも、頑張りましたので、何時ものようにマレをマレってんぞ  
！！

## 第五十四話っばい感じ！

唯 視点

『スタスタ』

「む〜〜〜〜」

今、目の前を、お兄ちゃんが通っていった。

で、なんで私が唸っているかっていうと・・・その通っていった、お兄ちゃんのカッコが問題だからだ。

そのカッコってというのが・・・。

上着を着ないで、上半身、裸のカッコ・・・。

「ちょっと、お兄ちゃん！ そんなカッコで家の中、うるつかないでっ！」

「あー！？」

私が注意すると、お兄ちゃんはめんどくさそうに振り返って。

「別にいいじゃねーか？ 家の中なんだから」

「だめよ！ だらしがないわー！！」

全く、いくら家の中だからって……。

一瞬だけ……マサ君の上半身、裸の姿を思い出し。

慌てて頭を振る、うう~~~~なんてハレンチな……。

「チツ……最近は大分、丸くなったと思ったのに、相変わらず、おカタイな……って唯？ どうした？」

「なっ、なんでもないわよっ！ ホントに!!」

言えるワケないじゃない……。

「そっか？ まっあんまり、おカタイ、ままだと、いつまでたっても男ができねーぜ？」

なっ……!?

「何、言ってるのよ!! そんなのいらな……」

そこまで言っつて、言葉が詰まる、いらない!! と言いつつもりが、言い切ることが出来ない。

どうしても、思い出してしまう、男の子……。

強引で、無茶苦茶で、勉強が苦手で、サボり魔で、目つきが悪くて、友達思いで優しい、そんな変わった男の子。

一部の先生には問題児扱いされてるし、きっと彼と出会う前の私

だったら、同じ様にただ問題児としてしか見れなかったかもしれない。

でも、ただの問題児じゃなくて、彼の回りは、いつも誰かの笑顔で溢れてる。

私も彼の前では笑う事が多い、まあ、ため息の数も多いけど……。

最近のため息は、彼の無茶苦茶な行動だけじゃなくて、彼の凄い鈍さに対しての方が多いかもしれない……。

里沙さんや、未央さん、いわく呪い級、確かにあの鈍さは、呪いよね……。

「あー？ また唸りだしたな？」

『ピロリロリ〜』

「おっ電話、もしもし！ あ、マユミ？ 今日？ おっ、もちろんヒマ、バツカ、香織とは、もう別れたって〜〜〜」

むっ……お兄ちゃん……人が悩んでるって言うのに……。

「ハレンチだわっ！！」

『パンツ！！！！』

つい、強い力でドアを閉じてしまった。

ドアの向こうで。

「ん？ 何でもねーよ、妹が難しい年頃でね、アイツも、もっと他の事に……って最近、結構、目を向けてるよな……まさか……イヤ、まさかな……っと悪い悪い!!」

そんな、お兄ちゃんの声が聞こえた。

・  
・  
・  
・

「もう……うちの家族はどうしてあんなにだらしないのかしら」

気分転換の為に外へと出掛ける。

あら……あそこに居るのって……。

前の方に見えるのは、買い物袋を下げてあるく結城君に、ララさんの二人。

「あつ！ 唯だ~~~~唯!!」

ララさんが私に気付いて、何時もみたいに人懐っこい笑顔で、私



に駆け寄ってくる。

「急に走り出すなって!! よお、古手川」

少し遅れて結城君も、袋を揺らしながら駆け寄る。

「こんにちは、買い物かしら?」

二人にアイサツをして、そう話題を振ると。

「あっああ、何時も買い物とか家事は美柑やマサに任せっきりだから、たまにはさ?」

「マサも美柑もいっつも頑張ってるもん、だからたまには、お休みしてもらうんだ」

フフ……。

「そうなの? それでマサ君はお家にいるのかしら?」

「いや、それが……八百屋の、おじさんがギックリ腰になったって聞いて、マジかい!? おっしや、ちよっくら手伝ってくらあゝって飛び出してっただよなゝ」

今のマサ君のマネ似てたわね? それにしても。

「らしい話ね」

「うん、マサは優しいからね」

「俺もそう言ったら、んなこたあねえって、こういうなあ持ち持たれつつてんだ、八百屋のオッチャンには、値引きしてもらってっしな？ って返されたぜ、ハハ、妙なとこで照れ屋だよなマサって」

臨海学校の時にも同じこと言ってたわね。

「マサ優しいのにな」

「だよな」

「そうね」

気付いたらこの場にいない人の話題で盛り上がった。

人付きが下手だった、昔の私には信じられないかもしれないわね。

「あつ！ 唯、見て見て〜あのね、こんなの買ったの」

そんな事を考えてた私にララさんが思い出したように、何かを見せてくる。

何かしら？ と見てみたら・・・。

「マジカル・キョーコの入浴剤！！ 一瞬で溶岩風呂のできあがりだつて！！」

えっ何それ？・・・そんな、嬉しそうに言われても・・・。

「大丈夫かよ、それ・・・」

結城君が半目でララさんが持つ入浴剤を見てる。

「大丈夫だよ！！ だってキョーコちゃんのだもん！！」

「それがなんで大丈夫ってことに繋がるのかわからないわ・・・」

「だよな・・・溶岩って、危険過ぎる匂いがするし」

そうよね・・・。

「ええ～～～でもでも、温泉の名前に、地獄温泉っていう怖い名前の温泉があるってマサが言ってたよ」

た・・・確かに、そうだけど・・・。

「マサもまた、微妙なことを・・・」

しかも間違った知識じゃないってというのが、また・・・なんとも言いづらいわね。

それから少しだけ話をして二人と別れ、のんびり、と街を見て歩く。

外に出て来てよかったわね、さっきのことといい、いい気分転換になるわ。

そう言えば、マサ君、今、その八百屋さんの手伝いをしてるのかしら？

気になるわね……。

「少し……覗いてみようかしら？」

でも……邪魔になったら……でも気になるし……むう……

あつ！！　　そういえば、タマネギが無かったわよね、うん、買いかないと、そういうことにしよう。

そう、自分を納得させて、八百屋さんへと向かい足を進めることに。

「……ギヤハハハ！！」「」

ン……何？　あつ……何よ、あの人達、歩道なんかに座りこんで……。

迷惑って言葉を知らないのかしら……。

上向いた気分が下がり始める、やっぱり、ああ、いつのは見逃せないわ。

「あなた達！　そこは通行のジャマよ！　道をあけなさい！！」

座りこんでる、男の人達に注意する、すると、その人達は。

「あ？」

ジロリと私の方を睨みながら。

「何？ 俺らに行ってるの？」

と詰め寄ってきた。

「そつよ！..！」

怯まずにそう返す、マサ君が怒ってる時に比べれば、怖さなんて感じない、比べるまでもないけど。

ホントはカツコのことも言いたかったけど、余りカツコだけで人を決めるのは・・・。

チラツと詰め寄ってきた人のカツコを見る・・・やっぱりダメね、あんな所に座ってた人達だし。

「だいたい！ そのカツコは何よ？ 親が見たら泣くわよ」

結局は言ってしまった。

「ホホ~~~~言ってくれるじゃん」

「おっ、このコ、ちょっとカワイくね？」

「俺もそう思ってたトコ！」

ニヤニヤとイヤらしい笑いを浮かべる、その人達。

何を……。

『グツ!!』

「ッ!!」

その人達のうちの一人が私の後ろに回り、羽交い締めになされてしまふ……。

「はっ放しなさいよ!!」

その人達のリーダー格みたいな人に、そう言うも。

「ヒヒヒ……ンな事、言わずに遊ばーぜえ」

またイヤらしい笑いをしながら近付いて来て、私のスカートに手を伸ばし。

「キレーな足〜」

スカートを摘み、捲くろうとする。

イヤ……なんで、男って……全部の男の人がこうじゃないかっていうのは、わかってる。

身近にそういう人がいる……でも……。

誰か……何とか言ってよ。

回りに助けを求めても、回りは、見てみないフリ……。

なんで、明らかに、この人達、間違ってるのに……。

誰か……マサ君……。

「ウオオオオ!!」

そう思った時、私を囲んでいた男の人達の一人が、突然、大声を上げた。

私のスカートを捲くろうとしてた、あのリーダー格っぽい人が。

「ゲハハ……興奮し過ぎだ……は？」

動きを止めて、その大声を出した人の方を見る、私も、恐る恐る見てみると。

「ウオ……ガツ……オゴツ……ブクブクブク……」

足が地面から離れ、浮いている状態、そして口からは泡を吹いて気絶してしまった。

その後ろには……。

「テメエ……何してんだ、あ？ 人の身内によオ？ そんなに遊ばせてえなら俺が遊んでやるよ？」

何度か見た、あの怖い顔のマサ君がいた……。

安心したと同時に、助けに来てくれた嬉しさ、さっきの恐怖、そして、マサ君が怒ってる時、特有の怖さ、そんな気持ちがないまぜになって、ほうけている間に。

『ゴキンッ!』

「アギヤッ!」

私を羽交い締めにしてた人の手が外れる、今の音……。

『ダラン……』

「折れ……折れ……痛でえ……痛でえ……よ」

「うるせえな？ 外しただけだよ」

腕を抑えて、叫ぶ人にマサ君は冷たい目でそう呟く。

「て……テメエッ」

「テメエも黙れ」

『ブンッゴギヤッ!』

リーダー格っぽい人を振り返りもしないで、殴りつける。

鼻が折れたか、そのリーダー格の男からは沢山の血が流れでている。



いつ・・・痛そうだ・・・。

そのリーダー格に対して。

「右手・・・だったな？」

そう言って足を振り上げ・・・って、まさか!!

「マサ君!! やり過ぎ、落ち着いて!!」

「あん？ って、前にも似たようなことあったな？」

振り返りながら、そう言うマサ君、そう言えば、以前にも、あつたわね・・・。

この状態のマサ君にはやっぱり慣れないけど・・・。

「まっいいさね、唯がそう言うなら、この辺でカンベンしてやっか・・・」

『ピ・ポ・パ』

マサ君はそう言って携帯を取り出し、どこかに電話をかけ始める。

「あっスンマセン、バカが三人転がってんで、救急車三台、ヨロシクお願いしまゝす」

『ピッ』

電話してた場所は病院だったみたい。

「コレでよしっとなんていってイカンな、めっさ注目されてるな？」

マサ君が言うように、回りを見てみると、かなりの注目を浴びていた。

その中には、マサ君を……なんていうか……かなり、イヤな目で見てる人もいる。

その目を見て凄くイヤな気分になる……確かに、やり過ぎ出し、怒ったマサ君は怖いけど、何もしてくれなかったアナタ達が、マサ君を、そんな目で見るなんて……!

そのことに一言、言ってやることにするよ。

「よかよか、慣れとるし？ まっよく知らんヤツに、あんな目で見られても屁とも思わんわい、っと、とりあえず離れるべし」

『バツ!』

と私を抱えて。

「ニン!」

『シュバツ』

出会った時みたいに、一瞬で移動した……つい。

「ハッハレンチよ……!!!」

と言ってしまったのは仕方ないわよね、本当は、嬉しいのに。

「はいハレンチいただきました〜」

相変わらずのマサ君だった。

・  
・  
・  
・

マサ 視点

唯を連れて、あの場から離脱し、唯を下ろしてから。

「あっと、そーいや唯、大丈夫だったか？」

かなり、いまさらながら確認。

「うっうん・・・大丈夫・・・マサ君、助けてくれてありがとう」

大丈夫みたいね、うむ。

「ナツハハ、気にしなさんな、困った時はお互い様ってな？」

「クスッ・・・やっぱり」

ン？ 何がやっぱりなんだ？ まっいいさね。

っと・・・そだった。

「まだ、八百屋の手伝いがあるんだったわ」

そろそろ行かねば・・・あんまし遅くなるとオツチャンが無理に出てきてまう。

「そっそっすいえば、マサ君って八百屋さんの手伝いをしてるんだって？」

「まあよ、って何故に知ってた？　って、さっきんでわかったんか、ナイスな推理力だな」

グツとサムズ！

「違うわよ、ララさんと結城君に会って、その時に聞いて」

ほう、それはまた奇遇な・・・。

ってイカンがな。

「オツチャン無理する5分前だ・・・じゃそっすいっこったから、俺ア行くわ、あつと、今から帰るんだっいたら送るか？　さっきみてえなに遭ったらイヤだべ？」

そんならいだったら、パツパツと行けると思うしな？　まっ唯ン家がどこにあっかは知らんけど。

「大丈夫よ、それより私も八百屋さんに用事があるから、一緒に行くわ」

ほづほづ。

「おけ、じゃ行くべ？」

NINJAしようかと思ったが、普通に歩っても5分で着くんで歩って行く。

「して、何が入り用だ？ 交渉しだいで安くなっぞ？」

「えつとタマネギを・・・」

「何個だ？」

「えつ・・・あつ・・・ひ・・・ひとつ？」

タマネギ一つか・・・。

「何？ 悪い！！」

いやさ、急に怒られても・・・悪いとは言ってねえやん。

「うつ・・・そうよ、別にタマネギを買いに行くわけじゃないわよ、ただ、ちよつとマサ君の様子を見に行こうと思っただけよ」

いやさ、特に何も言っていないつつに・・・まっ、様子を見に来てくれようと、してくれたんはありがてえけど。

「ってこたあ唯、今日ヒマか？」

「えっ？ ええ、そうね、今日は、予定はないわね？」

うむつむ、そっかそっか・・・よしっ!!

「何？」

「まっ着いてきんしゃい」

と唯を引き連れて、八百屋へGO。

八百屋へ着いたら案の定、オツチャンが。

「だ〜から大丈夫だってんだ・・・イギツ!!」

無理して出てくるとこだった・・・。

「あつマサちゃん、いいところに帰ってきたね〜、ほら父ちゃん！  
マサちゃんが居るから店は大丈夫だよ、父ちゃんは大人しく寝て  
な!!」

「母ちゃん！ だから、こんぐれえ屁でも・・・ウギツ!!」

大丈夫じゃねえやん、めっさ脂汗だらげやん・・・ったく。

「オツチャン、無理したら後に祟んぞ？ おら、俺に任せて寝る寝  
る」

「そうそう、そうしな、長引いて困るのは自分達なんだから」

「チツ・・・しゃ〜ね〜な〜、店は頼んだぜ、マサ坊・・・ウガツ  
・・・」

ひよっこり、ひよっこり、店の中（奥の方が家になっている）戻っていく、オッチャンです。

「ったく、父ちゃんも、いい加減・・・って、おや？ マサちゃん、この子は誰だい？」

ぶちぶちグチりながらも、唯に気付いた、オバチャンが俺に、そう聞いてくる。

「よくぞ聞いてくれた！！ 本日限定の看板娘だ！！」

ニツと笑いながら唯を紹介、そう、さっき思いついたのは唯に手伝って貰おうってことですね。

「えっ？ えっ！？ ちょマサ君！！ どっどっということ？」

まっ、やっぱり唯さん、ビックリしますけどね。

「まあまあ、頼む！！ やっぱ看板娘が必要だろ？」

「マサちゃん、ココに立派な看板娘がいるじゃないかい、オバちゃんじゃ役不足って言いたいのかい？」

「残念ながら、年と体重が、つか、看板『娘』だぞ？ 娘じゃねえよさ」

「ハッキリ言うね～～～全く・・・コレでも若い頃は彩南のマドンナだったのに」

マドンナ・・・ねえ・・・。

「時代が見えるわ」

「うるさいわ！！ まっ 寄る年波には勝てないね、で、えっと・・・  
名前は・・・なんていうのかしら？」

「あっ？ えっと・・・古手川 唯・・・です」

「そうかい、唯ちゃんかい、バイト代を出すから、手伝ってくれな  
いかい？ こんな目つきの悪い店員だけじゃ、いくらオバチャンで  
も、花が足りないからね」

うむ、まあ確かに目つき悪いけど。

「まっつうワケで頼むわ！！ なっ？ 俺もなんか奢っから」

手を合わせて頼み込む。

したら唯。

「ハア~~~~仕方ないわね？ まっ 助けてもらった、お礼あるし・・・  
えっと、よろしく願います」

ため息をはきながらも、了承してくれました。

まっ、んなつもりで手を出したワケじゃねえんだけどな。

「そうかいそうかい、助かるね〜それじゃ、エプロンと野菜の値段



が書いてるメモを持って来るから、待っててね、唯ちゃん」

一旦、奥の方へと引っ込む、オバチャン。

「全く・・・マサ君、急過ぎるわよ、一言くらい言っただけで欲しかったわ」

「悪い、ついな？ まっやってみっと楽しいぜ？ オバチャンも良い人だしな？」

「まあそれは何となく雰囲気わかるけど」

と軽く唯と喋ってる間に、オバチャンが戻ってきて。

「それじゃ、唯ちゃんはコレを付けて、マサちゃんは・・・」

「むろん、あるぞ」

例によってスピーキーズ仕様のエプロン。

「用意が良いね〜、それじゃ唯ちゃん頑張っ、マサちゃんは慣れてるから、わからないことがあったら、オバチャンかマサちゃんに聞くんだよ」

「は・・・はい」

と、こんな感じで、八百屋の手伝い、再開。

まっ唯は再開じゃなくてスタートだけ。

っと、その前に・・・。

「オバチャン、コレ通帳」

「あら、忘れてたよ」

大事なモンを忘れんなつつうに。

「えっ？ 通帳って何で？」

「ん？ 仕入先に入金して来たんだわ、で、なぐんか、感が疼いて、ソツチの方行ってみたら、唯とカッチンコってワケ」

いや、ホント、感に従って良かったツスわ、と頷いてたら。

「そう・・・なんだ・・・そっか・・・フフ」

微妙に笑っとなります。

はて？

「ん？ オバチャンだけのけ者かい？」

「いついえ、少し、コツチに来る前にあつたものですから」

「そうかい？ って唯ちゃん、カタイね〜もつと普通に話していいんだよ、マサちゃんだって、そうしてるだろ？」

確かに唯、カタイわな、まっ唯だしな。

「えっ？ でも・・・」

「うん、礼儀正しい子だね、マサちゃんも」「コまでとは言わないけど、ちょっとは見習いな」

「いまさらですがな」

と、そうこうしてる間にも。

「スイマセン」

お客さん、がやってきた。

「じゃ先ずは俺が対応すつから」

「ええ、それを見て流れを掴めばいいのね」

話しが早くて助かるわい。

つとイカンイカン、待たせっぱなやがな。

「あいあい!!」

「おっ？ マサちゃん、久しぶりだね」

「おやま、三鷹のオバチャン、何を探してんだ？」

「お姉さんといいな、お姉さんと・・・えっと、ダイコンにレンコン、ニンジンには・・・ゴボウだね」

ふむ……。

「おでん、にキンピラか？」

「当たり前だよ」

そっか、そっか……そだ。

「だったら春菊もいいぜ、ザクツと切って、あんまし煮込まねえようにすんだわ、美ン味いぜ」

「そうなのかい？　じゃ春菊も!!」

「あいよ!!」

ヒョイヒョイと野菜を詰めて、手渡し。

「じゃ、コレ、お金」

「あいよ……えっと……釣りはっ」と

ぶら下がってるお釣り入りのザルから釣りを出し。

「はい、三百万!!」

チャリンと手渡す。

「古いね、マサちゃん、ホントに高校生かい？」

「現役でな」

「年ごまかしてるようにか思えないね〜それじゃ、頑張りなよ」

「あいよ、毎度あり〜〜〜」

と、三鷹のオバチャンが帰るのを見送り、振り返ると。

「凄いわね」

「だろ？ マサちゃん、相変わらず上手いね〜、オバチャン、惚れ惚れしちまうよ」

唯は目を丸くして、オバチャンには、やたらと褒められた。

いやはぢ。

「照れら〜くな？ まっこんな感じで唯も」

「さっ流石に、それは・・・」

「そうだね〜流石に最初からアレを目差すのは難しいね、まっ先ずは普通にやってみな？ ゆっくりでいいからね？ ほら、次のお客さんが来たよ」

唯、初陣！！

さてさて・・・おっ？ 吉田の婆ちゃんか、あの婆ちゃんだった  
ら初陣でも大丈夫だな。

「おやおや・・・今日は随分と可愛い店員さんだね〜」

「えっ？ あつえと・・・」

「あつごめんなさいね〜っついね〜・・・それじゃ、ダイコンとタケノコを下さいな」

「あつはい・・・えつとダイコンはさっきアツチにあったから・・・えとタケノコは・・・」

あつ、そだった、まだどこに何が置いてあつかわからないわな・・・。

まっでも吉田の婆ちゃんなら。

「フッフ・・・慌てなくても良いよ〜、ゆっくり落ち着いて」

「はい、えつと・・・あつあつたわ、それじゃ、えとメモメモ・・・」

タケノコ片手にメモを見て、値段を確認する唯。

それをニコニコと笑いながら、ゆっくり待つ吉田の婆ちゃん。

うむむむ・・・流石は吉田の婆ちゃんだな。

「それじゃ、〜円になります」

「はい、お金・・・」

ダイコンとタケノコが入った袋を受け取り、代金を渡し、そのお釣りを唯が慌てながらも、渡すと吉田の婆ちゃんは。

「ありがとう、可愛い店員さん、それじゃ〜ね」

手を振って去っていきました。

そして、唯が。

「フウ〜〜〜きつ緊張したわ」

と戻って来る。

「うむうむ、良いでき良いでき」

「そうだね、その調子だよ唯ちゃん」

唯を労う、俺とオバチャン、そんな俺達に唯は。

軽く笑いながら。

「あのお婆さんが優しくかったからね、優しいお婆さんだったわ」

と応える。

「まっ吉田の婆ちゃんだからな？ たまに遊びに行くと手作りのおはぎを出してくれただけだな？ それがまた、美ン味のなんのつて」

あの味は、そうとう頑張っても出ないわな？ ホント絶品です。

「そっそうなの？ マサ君、あのお婆さんのところに遊びに行ってるのね？」

「そうなんだよね〜 吉田さん、一人暮らしでね〜、マサちゃんが時々、様子を見に行ってるんだよ、吉田さん、孫が出来たみたいだっつて嬉しそうにしてたよ〜」

「そう・・・マサ君は・・・優しいわね、今度、私も連れて行って欲しいわ」

ふむ・・・。

「まっ優しいかは知らんが、今度、行ってみつか？」

吉田の婆ちゃん家、落ち着くからな〜。

おはぎ美味えし。

「スイマセ〜ン」

おっとっど客、客！！

「あいあい！！」

と、こんな感じで、唯と代わる代わるお客さんに対応し。

唯も、段々と慣れてきた頃。



「うん．．．やっぱりマサちゃん、この店、継ぐ気ないかい？  
ほら、ウチは一人娘が嫁に行っちゃった、だろ？ マサちゃんだっ  
たら、父ちゃんもオバチャンも任せられるんだけどね」

と、何度目かの勧誘、なんか知らんが手伝つと結構な頻度でされ  
ます。

「ほら、唯ちゃんも一緒に」

「えっ！？ えっ？ そつそれは．．．あの」

おっ？ なんか唯も勧誘されてんな？ つか赤！！

めっさ赤くなつとるし？

「おやおや、コレは．．．そうかい、そうかい、やっぱりかい」

いやさオバチャン。

「やっぱりって何が？」

「何がってマサちゃん．．．気付いてないのかい！？」

「気付くって何に？」

「あれま．．．やっぱり病気だね〜マサちゃんは．．．」

病気って．．．めっさ元気なんだが．．．。

「ハア〜唯ちゃん頑張るんだよ、オバチャンは応援してるから

ね!！」

「えっ? あっ、えと・・・うう~~~~」

何故か唯を励ます、オバチャンと、う~~~~唸る、唯でした。

つか応援って何よ?

とかありつつも、再びやって来た、お客さんに対応する。

な〜んか、唯が赤くなりながら、チラチラと俺の方を見てた気がするが・・・はて?

まっ今はお客さんに集中っと。

で、暫くそんな感じで進み、そろそろ日が傾いてきて、晩メシの食材を買いに来た、お客さんも下火になってきた、そんな時。

「いらっしやいませ・・・ってお母さん!！」

どつやら唯の母ちゃんが買い物に来たらしい。

「あら? 唯、何してるの?」

「えっ、えっと」

なんか、めっさテンパってるな、どね。

「どうも〜、唯ン母ちゃんツスカ? 娘さんお借りしとりま〜す」

軽くアイサツ。

「ちよつマサ君!？ マサ君はアツチ行つてて!」

あれま・・・照れくさいんかねえ。

まっあんまし、邪魔しても、コラツてされるし、ボチボチ店も閉める時間ってことで。

「じゃ俺ア、明日ン準備に回りますわ」

「はいよ」

と裏に回る。

なんか唯と唯の母ちゃんがキヤイキヤイ言ってるのが、気にならんこともねえが。

スルーしつつ作業を続ける。

で、唯の母ちゃんてラストってことらしく、店じまい。

唯がまた、赤くなりながら、うううううう唸ってたが・・・オバチャンから給料を受け取り。

唸ってる唯を送って本日は帰宅したのです。

・  
・

唯 視点

マサ君に家まで送ってもらって。

「あ……ありがとう……」

とお礼を言いマサ君を見送った後、家の中へと入る……。

うう~~~~絶対、お母さんにかかわれるわ……。

まさか、お母さんがあの八百屋さんに来るなんて……。

まっまあ、私も八百屋さんのお手伝いをするなんて思いもしなかったけど。

家の中に入ると、案の定、ニヤニヤとしてる、お母さんに……お兄ちゃん……。

うっ……お母さん……お兄ちゃんにも話したのかしら？

この様子だったら話してるわよね……。  
ハア~~~~。

どうしてよ。

うん、とりあえずはお風呂に入って時間をかせよう。

少しは落ち着くはずよね？

そして、お風呂に入って、気分を落ち着かせ。

晩ご飯の時間になった。

やっぱり時間を置いたのがよかったのかしら？

お風呂から上がった後は、マサ君のことは聞いてこなかった。

あっ？ 今日はお鍋なのね？ そう言えば八百屋さんで、シイタケとかの、野菜も買ってたし。

食卓について、お鍋をつつく。

うん、美味しい、温まるわね……。

「で、唯、あの男の子は彼氏？」

「ウグツ！！ ケホツケホツ……お、お母さん!？」

いきなり何を言い出すのよ、思いっきりむせちゃったじゃない。

「あらあら、遊ちゃん、お水」

「ああ、ほら、唯」

お兄ちゃんか、水を受け取り、喉をならして飲む……。

フウ~~~~~んとか少しは落ち着いたかしら・・・よし、普通に・・・。

「ちち違っわ、クラスの友達よ」

少し吃ったけど、なんとか上手く返せたかしら？

「へえ~~~~」『今は友達か』

「ええ、今は・・・ってお兄ちゃん！！今はって何よ、今はって！！」

「いや~~~~なるほどね~~~~ってな？そっか、そっか、どつりで最近は丸くなったワケだ」

むう・・・丸くなったって何よ、丸くなったって。

「唯も春が来たのね~~~~母さん、嬉しいわ~~~~、今度、あの男の子を紹介してね？」

「だからマサ君は、そんなんじゃない！！」

「あらあら、マサ君って言うのね~~~~」

ああ~~~~もう、ドンドン墓穴を掘ってる気が・・・。

「で、どんなヤツだ？」

「う〜ん、母さんは少ししか見てないけど、見た目だけだったら、

ちよ〜つと目つき悪くて、怖そうだったかしら？ でも、雰囲気は良い子そうだったわよ？」

「へ〜〜〜、そうなのか唯？」

うつ・・・私に振らないでよ・・・コレ以上、喋ったら、また余計なことを言っちゃうじゃない。

「あらあら、照れちゃって可愛いわね〜」

「クク・・・まさか、唯のそんな反応が見られるとはな〜」

黙ってたら黙ってたで、勝手に想像してるし・・・。

どろろって言うのよ〜〜〜。

結局その日は、二人に散々からかわれた・・・。

もう、怨むわよ、マサ君!!

第五十四話っばい感じ！（後書き）

後書き

はい、今回、唯さんの話でした。

というか八百屋のオバチャンのが目立ってた気がせんこともないですが・・・まあ、そこはアレってことで。

さてさて次回こそ、双子さん・・・なのか？

やっぱり謎、ですが次回もまた頑張っていきたいと思えますんで、また見てやって下さい。

感想などありましたら是非！！



第五十五話っばい感じ！（前書き）

前書き

今回も双子さん未登場。

そして今回の話は、誰得？ な感じですが、いつも以上に強めのク  
スリを持ってどうぞ！！

## 第五十五話 っぽい感じ！

目の前には正座しているララ、クベには反省中の札がぶら下がっている。

まあ俺がかけさせてるんだが。

「で、ララよ何か申し開きは？ あるなら聞いてやらんこともねえ」

「ううううううだってキョーコちゃんのうううううう」

「黙っしやい！！」

『ガスンッ！！』

ゲンコー！

「痛っ~~~~聞くて言ったのに~~~~」

「っせえ！！ おまつ、風田・・・おまつ・・・このバカタレ！！」

『ゴスン！！』

「痛い！！ 三回目だよ~~~~」

三回でも足りんわ！！

あつ、一応は何があつたか、説明しますわ。

ええ、ララが一瞬で溶岩風呂になるつうアホな入浴剤を使いくさりやがったせいで、風呂が壊れました。

や、多少なら、即、修復できるんだけどな？ 中がつまってるわ、風呂の側面が軽く歪んでるわ・・・その他、諸々で、簡単には修復できねえんです、材料もないしな？

ホームセンターに行つて探したら、なかったしな、思わず、取り寄せになりまゝす、と言つたあの店員の顔面に蹴りを減り込ませるところだった・・・。

ああ~~~~イカン・・・またイライラしてきた・・・。

「うう~~~~ごめんなさいマサ」

クツ・・・。

「ハア~~~~もうええわ・・・ハア~~~~」

ごめんですんだら六法全書はいらんわボケーー！！ と言いたくなつたが、涙目だしキツチリと反省してるみてえだしな・・・。

ハア~~~~。

あつ・・・そつだ。

『ピ・ポ・パ』

とりあえず、アイツに電話、ン？ アイツって誰かって？ それ  
は。

『もしもし、マサ君？ どうしたのこんな時間に？ あつ私の声が  
聞きたくなつたとか？ それともマネージャー』

「ならん」

はい、恭子ですね。

『やっぱりかゝ手強いな、って何かマサ君、元気、ないよ？ 何  
かあつたの？』

「あつた、風呂が壊れた・・・マジカル・キョーコの入浴剤のせい  
でなアアア！！ 溶岩風呂ってアホかアアア！！ 即刻、発売停止  
しろーーーー！！」

『私に言われても困るよーーーー！！』

「知るかーーーー！！ 半分は八つ当たりだーーーー！！」

『八つ当たりってひどい・・・』

『ピッピ』

言うこと言っただんで切った。

フウ~~~~~少しは気が紛れたか。

『プルル』

むっ・・・電話・・・相手は・・・やっぱり恭子か・・・。

『ピッ』

一応は出る、まあ。

『ちよっマサ君、途中で切るのは』

「ピー・・・タダイマ、留守ニシテオリマス、発信音ノ後ニメッセー  
ジヲ残シテ下サイ、タダシ残シテモメッセージハ自動的ニ消極サ  
レマス・・・ピー」

『プッ』

コレでよし、大分スッキリ。

さてさて、後は・・・。

「着信拒否っ」と

うむ、コレでよし、流石に明日には戻すけどな。

「うっうわ~~~~キョー」  
「可哀相」

「美柑や、仕方ないんだ、こうするしかなかった」

俺のイライラを解消する方法はな。

『ピンポンピンポンピンポンー!!』

って、なんだあ？ ごっさ、チャイム連打されてるんだが？ はて……。

なんだろ、なんとなく、連打してるヤツが誰だかわかる気がするワケだが。

と、このままスルーしてやろうかと思ってたら、リコが普通に玄関まで出て、開けやがりました。

で、やっぱり……。

『ドタタタッ！ バンッ！！』

「ハアハアハア……マサ君！ 着拒はヒドイって……！」  
息も切れ切れな恭子だったッス。

つか、大分、早かったなオイ。

まあとりあえずは。

「はいはい、スンマセン、スンマセン、まっ形だけだけど」

「でしょうね！！ 全っ然、誠意が感じられないもんね……！」

誠意どころか反省の気持ちも一切込めてないからな。

でキヤイキヤイ言ってる恭子をテケトーにあしらい、ララや美柑、ヤミ相手にブチブチ言ってるのをスルーしつつ。

銭湯に行くことにした。

ちなみに女子組は既に風呂に入ってようなんので銭湯に行くのは俺とリトだけ。

で、着替え取って来て、リトと銭湯へGO。

「しかしマサ、ちょっとやり過ぎじゃないか？ ララは・・・まあ仕方ないけど、霧崎は完全に八つ当たりだろ」

銭湯に向かってスツタラスツタラ歩ってたら、さっきんことでもリトに注意されもつした。

「ふむ・・・そう言われてもな？ お風呂大好きマサさんの楽しみがグシャってなったもんでよ？ ついイラつとな」

流石に若干、頭が冷えて来たんで、悪いことをしたような気がせんこともないような気がしてきた。

「後で謝れよ？」

「まっ前向きに検討するってことで」

とこんな感じで話をしながらも銭湯、『彩南 ぽかぽか温泉』に到着。

うむ、初めて来たが。

「そこそこデケエな」

「だな」

あつちなみにリトも実際に来るのは初めてらしいッス、場所は知ってたみてえだけどな。

「じゃ入るべ」

「おう」

暖簾を潜り脱衣所で、パツパツと服を脱いで、中へ。

「おお〜〜外から見てもそうだったが中も広えな〜」

「だな・・・って、やっぱ、めっちゃ注目されてんなマサ」

ン？ 注目とな？ って、確かに俺、めっさ見られてる上にざわついてます。

所々、声を拾ったら。

「凄い体してんなアイツ」

「どっかの組の人か？」

「目を合わしたらヤバイ？」



とか、なんか・・・まったりあえずは。

「堅気だっつうのー!!」

つっといた、折角、のんびり湯に浸かりに来てるのに誤解させて、のんびりをブチ壊すんもアレだしな。

この辺の対応はそれなりに慣れとります。

で、ちゃんと堅気ってのが伝わったのか・・・は、若干微妙だけど、ざわつきはおさまりました。

うむうむ、コレでよじつと。

やて・・・。

「リト、背中流して・・・って、どうしたよ？」

リトの背中を流したろうかと思ったら、なんかリト、ゲッて顔になっとなりました。

はて・・・って、およ？

リトが見てた方向にいたのは。

「よお！ レン、なんか久々だな」

「やあ、マサ、で結城、その顔はなんだ？」

「うるせーイヤなヤツに会ったなって思ったただけだ」

ふむ、相変わらず、なんつうか、仲が良いのか悪いのかって感じだな。

まっいいさね。

「レンも銭湯に入りに来たんだな」

「あっああ、宇宙船のバスルームが壊れてね」

おやま。

「レンもかよ」

「も？」

「ああ、まあコッチも風呂が壊れてな？　でまだ風呂に入ってなかったりと俺は銭湯に来たってワケさね」

軽く事情説明。

詳しくは言わんけど。

「まっそれは置いといてっつと、どれリト背中、流たるよ、レンもな？」

「ゲッ？　アイツもかよ？」

「いいのかい？　って結城、さっきから失礼だぞ」

こんな感じでリトとレンがヤイヤイ言い合いながらも、三人並んで背中を流し合う。

「ってレン、なんか嬉しそうな？」

「ン？ いや、ボクはこうやって友達に背中を流してもらったことがなかったから」

ほづほづ。

「まっ、レンの体質じゃ仕方ないよな、っていうか大丈夫なのか？」

「むっ結城、大丈夫って、それは何か？ ボクが男らしくないからと言いたいのか？」

「違うって、体質って言っただろ」

「あっ・・・まあ、大丈夫・・・なはず？」

不安で一杯だなレンよ、まっ確かにリトの言う通り、ココでくしやみしたら、エライことになりそうだな。

まっ、そうになったら、そうなたで。

「女湯の方にほづり投げてやっから安心しろ」

「ほづり投げるって・・・マサ」

「レン、マサならホントにやるからな」

当然です、一切の遠慮なくな。

さてと、体も洗ったし。

「湯に浸かるかね〜」

「おう」

「ああ」

またも、三人並んで湯に浸かる。

うむ・・・。

「あ〜〜最っ高・・・気持ちいな？」

「ああ、ウチの風呂も広くなったけど、ココ程じゃないしな、やっぱり広い風呂は気持ちいいよな」

「地球でも日本の、こういう文化は素直に素晴らしいと思うよ」

うむうむ、ホント、気持ちいいッスわ。

ウチの風呂のこたあ残念だったが、この銭湯のことを知ることが出来たのは収穫だな。

「マサ、コレからも、ちよくちよく来ようぜ」

「おう、いいこと言うね〜そうすっか？」

「その時はボクも誘ってくれよ」

「なんで、オマエを……って言いたいけど気持ちいい、しな、そうするよ」

「フン、別に結城には聞いてないけど……まあ、いいよ気持ちいいから」

うみうむ、流石は銭湯のパワーだな。

二人の様子も大分、軟化したようだわい。  
ン？ あそこに見えんのは。

「サウナもあんだな？ 行ってみつか？」

「いいぜ」

「ああ、結城、どっちが長く入れるか勝負だ！！」

おっレン、中々、面白えこと考えんじゃん。

「俺も入れる、いつちゃん最初に出たヤツはコーヒー牛乳な？」

「ゲツ？ 絶対、マサが一番になんたる？」

「た、確かにマサには勝てない気がする」

フツ……当然、勝つしな、あのアホな入浴剤じゃねえけど俺を  
ギブらすには溶岩くらいの熱さは必要だぜえ。

とか思いつつ、もサウナへ。

・  
・  
・  
・

40分後……。

「大丈夫か？」

「「きゅ〜〜〜〜」

リトとレン、意地を張り合いによりダブルノックダウンとなりました。

で、今は二人を水風呂に漬けて、冷やし中。

二人がなんとか回復したんで結果を伝える。

そう結果は。

「じゃ出る時、コーヒー牛乳奢るわ、フルーツ牛乳でもいいぞ」

「えっ？ なんでだ？」

「そっそっだよマサ、なんで」

ふむ……なんでって、そりゃオマエ。

「俺がいつちゃん最初に出たしな」

二人を運ぶ時にな？ まっ言わんけど。

「う〜ん、なんかマサに悪い気がするな・・・」

リトは微妙に気付いてるっばいな、この辺は付き合い長いしな。

「っと、そつだ、なあレン、マサの分は俺とオマエで半分にしようぜ」

「フン、結城にしてはいい考えだね、マサ、そういうことだから」

おつ？

「よかとや？」

「おつ！！」

「ああ！！」

じゃお言葉に甘えっとすっかねえ。

で、上がる前にもう一回、湯に浸かってから、銭湯から上がり。

「コッソソッソソ・・・プハア〜」

キツチリ腰に手を当てて、コーヒー牛乳を飲みます。

やっぱり銭湯に上がりはコレをやらなアレだからね。

定番って大切ですよ。

「じゃ、帰るべくか」

と、帰宅したのでした。

・  
・  
・  
・

流石にもうちよい続くぜ！！

ってなワケで、レンと別れた後の帰りに。

「なあザステインんとこ寄ってみねえ？」

フとザステインの住んでるアパートに寄ってみようと思いついた。

こっから結構近えし、そろそろデビューだしな。

まあ、そろそろが若干長い気がするが、そこはスルーで。

「ん？ いいぜ」

よしっ、じゃコンビニで差し入れ買ってつかねえ。

さてさてザステインは頑張ってるかね。



でアパート到着。

『ピンポーン』

『ガチャ』

「はっ？ まつマサナリ様にリト君、どうなさったのですか？」

「銭湯の帰りに近くに寄ったもんでな？ ほれ差し入れ」

差し入れを手渡すとザステイン君。

「あっありがとうございます！！ このザステイン、感激の極み！  
」！」

相変わらず、快走っぷりでした、うむ、ホント面白いヤツ。

で、中に入れてもらったら・・・。

「散れてんな~~~~掃除しようぜ」

「ハツ・・・すっすいません、現在執筆中のマンガの追い込みが厳しく・・・」

ああ~~~~そっか・・・まつ、そういう理由な仕方ねえっちゃ仕方ねえか。

「マウルとブワッツは」

あっマウルとブワッツってなあ、ザステインと一緒にいる黒服さ

んの名前ね？

最近、名前を覚えてもらったんですわ。

ちなみに金髪オールバックで、左目にキズがあるのがマウルで、黒髪で無口、厳ついのがブワッツです。

まあドツチも厳ついけど。

「二人は今、現在も執筆中です、なんとかこの作品を間に合わせねば、折角掴んだチャンスですので！..!」

おゝおゝ、やる気十分だな・・・よしっ!!

「リト」

「わかってるって、手伝うんだろ？ 俺も手伝うよ」

「流石親友!! ってなワケだ、ザステイン!!」

「はっ!! しかし、マサナリ様にはコレまでも食事など、差し入れをしていただいておりますし・・・コレ以上は」

「気にするねい、やりたくてやってんだからよ？ っと今日は泊まりこむか、家に電話せんなら」

「あっ、それは俺がするよ、マサは先にやっててくれ」

「そっか？ サンキュー、リト!!..! じゃ、やるべー..!!..!」

グツと気合いを入れて、アシ作業に取り掛ろつとする俺。

ザステインはというと。

「マサナリ様・・・リト君・・・このザステインは・・・このザステインは・・・銀河一の幸せ者でございます!!!」

超、泣いてやがりました。

いや、そこまで喜んでもらえつと、なんか照れますわい、と思  
いながらも。

「おら、シツカリせい、オマエが指示出さんでどつする、オマエの  
マンガだぞ?」

「はいっ!!!」

喝を入れて復帰させ、アシ作業に。

リトも電話が終わり、手伝いに加わる。

「しゃオラオラオラー!!!」

「ハアアアア!!!」

カリコリ、カリコリ、手を進める。

「うん、マサは何時ものことだけどザステインも随分、早くなっ  
たよな」

「ええ、隊長の努力は凄まじいモノがありましたから」

「うむ・・・」

・  
・  
・  
・

で時間が経過していき、日付が変わった頃、一段落がついたんで。

「夜食でも食いますか〜台所借りるぜ〜」

勝手知ったるザステイン宅。

チャツチャと夜食の用意をいたします、あつ夜食のメニューはヤキソバにオニギリね？

「なんかマサ、アレだな・・・通い妻みたいだな？」

ふむ・・・確かに言われてみれば・・・食材もたまたま俺が補充してるしな。

てなワケで軽く。

「アナタ〜出来たわよ〜〜〜って気持ち悪っ！〜!」

「ネタ挟んだのはいいが、めっさ気持ち悪かった。」

「これはキツツイ。」

「ああ、かなり気持ち悪いから」

「す．．．すいません、マサナリ様、このザステイン．．．いくらマサナリ様とはいえ．．．気持ち悪さは拭えませんでした．．．」

「いやさ、ザステイン、リトはまだしも、そこまで苦情の顔で言わんでも。」

「本人だって気持ち悪いって思ってたんだから。」

「まっいいさね。」

「まっとにかく食おうや、腹減ったべ〜」

「夜食を食います。」

「うむ、今回も中々。」

「美味しいですね、隊長」

「当然だ、マサナリ様、自らが作ってくれた、うんぬんかんぬん．．．」

「ホント、ザステインって突っ走ってるよな。」

「まあ喜んでもらってんなら嬉しいが。」

とこんな感じで夜食を食べて再びアシ作業開始。

そして・・・朝の5時頃に。

「で・・・出来た・・・」

ザステインのデビュー作、完成！！

「うむ、お疲れザステイン、リトにマウルにブワッツもな？」

全員に労いの言葉をかける。

「マサナリ様とリト君のお陰です！！ ありがとうございます！！」  
「！！」

「ハハ・・・気にするなって」

「とリト君が言ってンぞ、じゃ俺らは帰るわ、雑誌に載ったら、祝いの酒でも持ってくる」

そう言い残しリトと共に、ザステイン宅を後にしました。

その帰り。

「ふわあ~~~~」

リトのあくび。

「悪いなりト、付き合わせてよ」

「ン？ いいよ、どうせ今日まで休みだし、ザスティン、頑張っ  
て連載取れるといいな？」

眠い目ながらも、そう言ってくれるリト君です。

「いや〜ホント、良いヤツだわい」

「ハハ・・・マサには負けるけどな」

「いやいや、リトには負けるっつうの。」

のんびりと帰る道には新聞配達の人と。

昇り始める朝日が目に入ったとき。

・  
・  
・  
・

ちょっとしたオマケ

家に帰りついたら。

「ク~~~~ク~~~~」

「むにゃむにゃ……」

居間のテーブルでグッスリ寝てる、ララと恭子。

その周りには……。

「うわ……酒クサッ!!」

はい、リト君の言う通り、確実に飲んだ形跡あり。

このバカタレ共は……。

「起きろこのバカタレ共が……!!」

『ガスンツ!!』 『ゴスンツ!!』

「痛~~~~~い!!」 「

ダブル、ゲンコで叩き起こし。

「オマエら正座……!!」

「ふえ？ ふえ……うつ……頭痛い……」

「うう~~~~マサ君、今はカンベンして~~~~」

「っさいわ!! オマエら未成年だろう!! 何、二日酔いになるまで飲んでだボケー……」



「大きな声出さないで〜〜」

頭を抱える、バカタレ二人の説経は約2時間続き。

このバカタレ二人は今日、一日中、反省中の札を下げせる俺だった。

「飲まなくてよかったねリコ、ヤミさん」

「だな」

「ですね」

未成年のアルコールの摂取はダメ!!

飲むなら甘酒くらいにな? マサさんとの約束だぞ!!

## 第五十五話っばい感じ！（後書き）

後書き

男連中との付き合いって感じの回でした。  
ホント、誰得だよ？

なんかホント、スイマセン。

しかも、多分、今年最後の更新になるんじゃないかなって感じ  
なのに……。

まっまあ、次回の更新が来年になるかはわかりませんが、次回も  
頑張っていきたいと思えますので、（次こそ双子？やっばしなぞ）  
ンッン、また是非に！！

感想などありましたら是非！！

第五十六話っばい感じ！（前書き）

前書き

新年一発目！！

まあ、あけてから大分、時間が空きましたけど……。

あつようやく、来ます、あの二人！！

ってなワケで、今回は風邪薬を持ってどうぞ。

## 第五十六話っばい感じ！

風呂が直りました！！

まあ正確には直した、なんだけどな？ とにかく、風呂が直ったんですわい。

ちなみに前回、ララと恭子は若干言い過ぎた部分があったんで、軽く謝つといた、特に恭子には。

ただ、アルコール摂取に関しては許してねえんで、反省札は丸三日は下げさせてました。

恭子は撮影とかの時は外していいつつといたけどな。

ン？ 風呂を直すのに三日も掛かったのかとな？ いやさ、材料がね、届いたんが今日だったんですわい。

だから掛かった日数は実質、一日・・・も掛かってねえけど一日だぞ。

まあ、それはともかく・・・久々に家風呂、銭湯もいけど家風呂は家風呂で好きなんです。

つてなワケで早速！！

「風呂ーーーーッ！！」

『ガチャー!!』

「……………」

ン？

待て……いやさ待て……。

目をコスコス……。

「……………」

「まあ……大胆ですねマサナリさんったら」

いやさ大胆つてオマエ……。

『プルプルプル』

あつ……イカン。

「のぞき魔……………」

『ブンツ……………』

洗面器が飛んできたッ!!

『パシツ……………』

マサナリは上手くキャッチした!!

って言ってる場合じゃないっつもの。

「悪い!! わざとじゃねえよ? いやホント!!」

とりあえず謝るところ、悪いと思ったら頭を下げる、基本だな。

「いいから出てけバカナリーーッ!!」

結城家にナナの叫び声が響いた。

・  
・  
・  
・

「バカナリ・・・肩揉め」

「ウスツ・・・」

はい、ただ今、俺、ナナにめっさこき使われています。

今回に限っては、完全に・・・とは言わんが八割方は俺の確認不足が原因だからね。

久々の家風呂に浮かれてましたわ・・・。

「チクソウ・・・ごういうんはリトの仕事だろ・・・」

「どっちの意味だよ！！　っていつか仕事ってなんだ仕事って！！」

「ドッキリハプニング？」

いや、寧ろ、トラブる、と言った方がいいような気がする。

「無駄口叩くなよな〜しっかり揉めバカナリ」

イラッ・・・このペッタンコは・・・。

「モモはアツサリ許してくれたつつのに・・・だからペッタンコなんだ」

まあ。

『未来の夫になる方ですから・・・ポッ』

とか、なんとか言ってたがこの辺はスルー。

「ペッタンコって言うなー！！　のぞき魔のくせにー！！」

って・・・このペッタンコは・・・さっきから、のぞき魔、のぞき魔って・・・。

「わざとじゃねえつつてんだろがッ！！　つかさ、よくよく考えたらおかしくね？　普通さ家主の断りもなしに風呂に入るか？　入らないよね？　オマエ頭大丈夫？」

もういい、もうサービス期間は終わりだ！！

大胆、俺、全員、居間にいたの確認してたからね？

その上で入ったワケだから。

うん、コレ俺の落ち度、五割くらいだわ、寧ろ五割切るわ。

「ウグツ・・・たっ確かにそうだけど・・・でもオマエに頭の心配されたくねえーよバカナリのクセに！！」

「黙れペツタンコ、つか絶対ナナよか頭いいね俺、流石のマサさんも人家の風呂に入る時は断り入れるからね」

「汗かいたから入りたかつたんだよ！！」

「アイタタタ~~~~、いや俺、自分でも自分勝手だわって思うけど、それ以上に自分勝手なヤツって久々に見たわ」

いやホント久々だわ、流石のナナも返す言葉がないようだな、ハハハ、俺、勝・・・。

「そう言えばマサナリはドクター・ミカドの家の冷蔵庫を勝手に荒らした事がありましたね」

うん、ヤミっ子、それ今、言うことじゃなくね？

ほら、ナナのヤツ、なんかニタ~~~~笑ってるし。

「うわっ・・・有り得ないぜ、流石の私も人の家の冷蔵庫は勝手に漁らないよ」



「っせえ腹が減ってたんじゃ！！ 三日何も食ってなかったんだぞ、ケガは食って治すもんなんだよ栄養を欲してたんだよ！！」

その後、約三十分、言い合いは続きました。

で、ようやく。

「ナナ、モモ、急にどうしたの？」

と、ララが二人にそう聞く、確かに気になるっちゃ気になる。

まあ多分、遊びに来ただけだろうけど。

「もお~~~~来るなら来るって言うてくれたらよかったのに」

「そうすりゃ俺も、のぞき魔、扱いされずに済んだのにな」

「うるさい！！ 慌てて出て来たんだよ！！」

ン？ 慌てて？ はて？

あっなんかモモがナナを睨んでる。

「あ……いや、何でもない！」

ふむ……なんか……。

「裏がある気がする」

「うん、私もそう思う」

俺の呟きに頷く美柑。

聞き出そうかと考えてたらモモが。

「そ、それより、お姉様！ その後、マサナリさんと結婚に向けての動きはありましたか？」

なんかアホな事をほざきだした、更に続けて。

「例えば〜〜〜キスとか？ もっと色々な」

「この辺りで指導！！」

『ガスンツ！！』

「痛いっ！！ ちょっとマサナリさん何するんですか？ そっぴんぷレイはもう少しレベルが上がって」

「指導アゲイン！！」

『ゴスンツ！！』

「ツ！！！！ さっきより痛い〜〜〜」

二発目は強めです。

「ったく、なんか色々教育に悪い！！ 家には美柑を始めまだまだ

子供がいるんだから、そういう発言は控えなさい!!」

ヤミとかセリーとかね!!」

セリーはまだまだ子供です。

つて・・・あら？

「子供つて・・・ううううううなんか悔しい・・・確かにまだ小学生だけど・・・なんだか、とつても」

「ええ・・・チクショーな気分です・・・」

なんか美柑とヤミの二人がガツクリなつてた。

「なあ・・・姉上、バカナリのヤツつて何時も、ああ、なのか？」

「うん、なんかね？ たまに、ああなるんだよ、えっと・・・オカシなつたかな？」

「やっぱり微妙なラインで厳しいよなマサつて」

「どの辺にラインがあるか謎だけどな」

俺も、つづか書いてる人も謎つつつてた・・・ってイカン大分メタだ。

「ンツン・・・キス云々はともかくとして・・・どうなんですかお姉様？」

「うう~~~~マサ~~~~結婚」

「断る」

「全然ダメだよ~~~~」

当たり前だつつつの、多少の前フリがあった所で頷くかつつつの。

「やっぱりお父様がおっしゃってたみたいに手強いみたいですね、私も気合いを入れないと」

何の為の気合い？　つか、その視線は何？

「うわ~~~~ゲームの世界の時から思ってたけど・・・やっぱりまた増えてる」

「倍率が高すぎます・・・」

増えてるって何？　ダチ？　つか倍率って何？

「ホント・・・マサすげえよ」

「アレで気付かないんだもん・・・はあ~~~~」

ため息をつくなりコよ、なんか切ねえだろチクソウ・・・。

「ハア~~~~姉上~~~~コイツは止めとけて、だって、お風呂のぞぎ、とかするやつだぜ~~~~」

「ええ〜〜〜マサが、のぞきっ。」

いやさ、だからアレはわざとじゃねえっつじ。

「普段はのぞかれてるみたいですけどね？」

モモの発言に思いつきり目を逸らす美柑&ヤミ、何故か微妙にリ  
「も。」

うん、まあなんとか、なんとか阻止してるけど……って。

「待てイ！！ モモなして知ってる！！」

あの数々の攻防を。

「あっ表のセリーヌさんに聞きましたよ」

ほうほう。

「なるほろな、セリーヌから聞いたワケね、セリーヌのお喋りめが……  
まっ別段困るワケじゃねえけど」

事実だしね。

「って……マサ、今、モモ、セリーヌから聞いたって言わなかったか？」

「言ったな」

「ってことはモモ植物の言葉がわかるのか？」

ン？ あっ……言われてみれば……ってアレ？

「リトもリコもわかるじゃん」

「流石に細かいことまではわかんねーよ！..！」

「つか、わかるのマサぐらいだと思ってたから！..！」

いやさ、俺だってニュアンスなんだが。

まあ何故か細かいこともわかるっちゃわかるけど。

「えっ！？ マサナリさんも、リトさんも、リコさんも、植物の心がわかるんですか！..？」

心？ 心とな？ いや心じゃなくて……。

「セリー喋ってんじゃない、正確には鳴いてんじゃない」

「うん」

「ギャウ〜ってね」

モモの言葉にそう返す、セリーの言葉がわかる組の俺、リト、リコ。

「あとねマサは前、ペンギンやイルカとお喋りしてたよ〜、ね〜マサ？」

「うむ、ちなみに最近はカラスと仲良くなった」

中々に漢気のあるカラスだぞ、詳細は省くけど。

「何！？ バカナリ、オマエ、動物とも話せるのかよッ！？」

「何故かは知らんけどな？ 魂で話せば通じたのだよ」

「ふわ〜〜〜凄いですね〜、植物だけじゃなくて動物とも・・・あつちなみに私は植物とナナは動物と心を通わせることが出来るんです」

「デビルークでも私達しか持っていない特別な能力なんだぜ！！ まあ・・・なんでバカナリが持つてるかはしんないけどさ」

「俺も謎だつつうの、つか俺の場合は喋って・・・じゃねえな、鳴いてくれんとわからんぞ？」

「あつ！！ そう言えばマサって前のイルカの時もだったもんね？」

「うむ、まあ詳しくは第二十七話っぽい感じ！ を・・・ってイカシ、コレもメタだわ、とか若干、自分のメタ発言にセルフってたら」

「ナナ様！ モモ様ア！！」

と非常に聞き覚えのある声が聞こえてきた、つか、前以て言おう、たまには。

うん、そうだね、ザステインです、マウルにブワッツもおりますで、そのザステイン君、窓に足をかけて普通に侵入してきやがりました。

「ザステイン!!!」

そんなザステインに驚き顔のララに。

「ちゃんと玄関から入れ!!!」

ツツコム、リト君。

そうだな、俺も言わないとな。

「結城家は室内土足不可だボケーー靴を脱がんかいバカタレ共がアーーーー!!!」

『ガスン、ゴスン、ゴガン!!!』

「『『『ありがとうございまーすっ!!!』』』」

ゲンコ三連、何故か礼を言う微妙に体育会系なザステイン、マウル、ブワッツの三人です。

で、何しにきたのか聞いてみたらば。

「先程、デビルーク王より直々に通信がありました、お二人が・・・」

「



ザステイン君、微妙に溜めるをつくり、ビシッとナナ、モモの二人を指差し。

「勉強がイヤで家出したと!!」

『『『ビクンッ!!!』』』

「『『へっ?』』」

「プリンセスの妹達はわかりますが何故マサナリまで反応してるのですか?」

うつ・・・なんか身に覚えがありまくるもんで。

しょっちゅう保健さんところにいるしな。

「ナナ、モモ、そうだったの?」

目が点のリト、リコ、美柑、ヤミにツッコミを食らって、つい、心の中で言い訳してる俺を置いて、ララが二人にそう聞く。

「だって・・・」

「面倒なんだもん教育係に張りつかれて宇宙の歴史とか王族のたしなみとか・・・」

うつ・・・そらキツイ。

「あー！ー確かに！」

「幼少の頃、ララ様もよく逃げ出しておられました」

俺でも逃げるね。

「しかし！！ 長きに亘る銀河の戦乱をデビルーク王が治めて十余年、コレからの時代は勉強も大切な事なのです！！ むろんマサナリ様も」

『『『ダツ！！』『』』』

ザステインが俺の名前を持ち出した瞬間、ナナ、モモ共々、疾風かせになりました。

・  
・  
・  
・

ララ 視点

「むろんマサナリ様も・・・って、あれ？」

「三人とも逃げてったよ」

いつの間にか逃げちゃったマサにナナにモモ、そのことを美柑がザステインに教えてあげたら。

「しまった追うぞ！！」

「はっ!」

ってザスティン達はマサ達を追っかけて出ていった。

うん。。。

「困った二人だねー家出なんて」

「オマエが言うな」

「というか何故マサナリも一緒になって逃げたのでしょうか？」

「自分の名前が入ってたからだろ？」

あっ!? そうだったマサも一緒に逃げちゃってたんだ!!

「追っかけよ!!」

「ああ!!」

「うん!」

「わかりました」

私達もザスティン達に続くように家から飛び出した。

・  
・  
・

マサ 視点

今は家からちよい離れた河川敷にあります。

「クツソ〜〜地球にはザスティンもいること忘れてた！」

「はぁ・・・ナナが家出しようなんて言うから、こんな事に・・・」

「んな状況だったら俺も家出するつうの、裏があるたア思ってたが  
そういう事情だったたアねエ」

うんうん仕方ねえよ、ホント。

「おっ？ バカナリわかってるじゃん・・・って、なんでバカナリ  
まで一緒になって逃げてんだよ？」

「知らん、なんか俺の名前が出た瞬間、逃げたくなった、勉強はイ  
ヤでござる！！ つか、なんで俺までせなイカンねん」

「それは・・・何れはデビルークの王になるからですよ」

「ならん、つか意味わからん」

「もう・・・だから、お姉様に私、それにナナの夫になる」

「ピー、エラーです、その語彙は理解できません、ピー、エラーで  
す、その語彙は理解できません」

「もう、強情ですねマサナリさんは」

強情も何もないつうの。

「・・・なぐんで姉上もモモも、コイツがいいのか？」

「あら？ ナナ、マサナリさんはステキな殿方よ？ セリーヌさんに聞いたもの」

むっ？ セリーヌ、何を話したんだ？ つかステキって・・・。

そつとモモにミミミミを手渡した。

「いや、別にコレが欲しくて、ステキって言ったワケじゃ・・・」

「いいから受け取るとき、気持ちやから!!」

うさん臭い関西弁なのは気にするな、気持ちだから。

「あつ私もくれよ〜モモだけズルイって」

むっ・・・ナナもか、仕方あるまい。

「ほれ、ラス2だからな、後で買いに行かねば」

家にはまだストックはあるけどね。

で、三人でミミミミ・・・。

うむ、美味い。

「して・・・飛び出した方がいいが、どうすんべ〜？ ザスティン走りだしたら中々に止まらないタイプだぞ」

「知ってるって、私達の方が付き合い長いんだぜ」

そらそっか。

「はあ・・・やっぱりナナの考えに乗ったのはまずかったかな〜？」

「な、何言ってるんだモモだって賛成しただろっ！！」

「それは、その場の流れというもので・・・」

ほうほう・・・。

「嘘だな、絶対ノリノリだったね、もう喜々として賛成したね、わあ！！ ナナ、それいいわね？ じゃ私、宇宙船用意してくるから！！ とかいった感じだったね」

間違いねえって、うん、もう目に浮かぶようだわ。

「うわっ凄いな、セリフまで全く同じだぞバカナリ！！」

ほらね！！

「うっ・・・だって、窮屈だったから・・・」

「フッフーン、そうだろ〜？ モモはいつともイイ子ぶるからな、バカナリには通じてないけど、まっいつも優秀な双子の私と比べら

れてひがむのはわかるけどさっアハハ!!」

優秀ね・・・どちらかつつとアホな子だと思っんだが。

『ピキッ』

おや？ モモの様子が・・・。

『ピク・・・ピク・・・ピク・・・』

コメカミがヒクヒクしてるぞ!!

これは・・・まさか・・・。

「いいたい事はそれだけ？ ねえ、それだけ？」

モモはヤク○に進化した!!

はい、軽くポケットな怪獣っぽく実況してみました。

まあようするに、何度か見てるアレって事ね？

で、モモはナナの尻尾を。

『くにくにく』

と握り始めやがりました。

途端にナナは。

『ビクッ』

「ふぁッ・・・あん・・・ちょッ・・・シ・・・尻尾は反則・・・  
っ・・・あっ・・・あ・・・」

つてな感じに。

いまさらながらの、マサナリのワンポイントレッスン！！

デビルークの人は尻尾が弱点！！

みんなも覚えよう。

とか、脳内でアホな事をやってる間に。

「お返しっ！！！」

『コチヨコチヨ！！』

「ひゃっ！！こ、こら放しなさい・・・やん」

「んんっ・・・あんたこそ～～～～」

とくんずほぐれつな感じに発展しとりました。

うむ・・・流石に・・・。

「はい止めれ～～～姉妹喧嘩も悪くはないだろうっけんどマサさん、  
おいてけぼり、で寂しいぞ～～」



そろそろ止めます、理由は言った通り寂しいからだっ！！

「「あっ……」」

「ちよつモモ……オマエ、バカナリとはいえ男の前で尻尾イジるなよっ、あんな声出しちゃったじゃないかよ」

「ナナだつて……でもちよつとクセになるかも？」

なるな、そういうのは日和だけでお腹一杯だから。

『大丈夫、扉を潜れば新しい自分に出会えるよ！！』

……。一緒に、日和の声が聞こえた気がしたが、全力をもってスル

『あ~~~~ん……いい~~~~』

スルーです。

まっアレなヤツは置いといて。

「して、びじすんのよ、」  
「聞くの一回目だけび

「びじするって言ってもな〜」

「うん、捕まりたくないですからね〜あの窮屈な暮らしはちよつと……」

ですよ〜。

「見つけましたぞ、マサナリ様、ナナ様、モモ様!」

ゲツ・・・ザステイン、追いついてきたか？

まあ、大分コチャコチャやってたもんな。

「マサナリ様の勉強は何れということ、さ・・・迎えの船も手配しました、ナナ様、モモ様、コチラへ・・・」

「うう・・・」

ザステインの言葉にうなだれながら俺を見る二人。

ふむ・・・なんかんやで俺はわけわからん勉強をしなくていいっぽい流れだが・・・。

まあ勉強が苦手な仲間として見過ごすのは漢が廢るな。

よしっココは。

「ザステインよ、まあ待て」

「はっ？ 何故でしょう、いくらマサナリ様の言うこととは言え」

「まあ聞けつて、あのよ〜窮屈過ぎるのはよ〜流石にどうよ？ そりゃ勉強が出来た方がいいやも知らんけど・・・ガツチガチ過ぎんだろ？」

家出したってことはよ、家出するくれえに抑えつけられてたっ

てことなんだぜ？

それだけ二人がしんどかったってことだ、少しは勉強の時間を作るんはわかるけど、あんまし抑えつけんでやってくれや、頼むわ！  
「！」

なんか自分でも目茶苦茶な事を言ってる気がするが構わず頭を下げる。

「まつマサナリ様！！ そんな頭を上げて下さい！！」

ザステインはそう言うが頭は下げ続ける。

出来れば、頷いてもらいてえという気持ちを込めて。

ザステインの頭を上げて下さいという声が聞こえる中しばらく頭を下げ続けていると  
、とうとう。

「わ、わかりました、わかりましたから、私がデビルーク王に掛け合ってみます！！ ですから頭をっ！！」

とザステインが折れてくれた。

「ホントか？」

「はい、このザステイン、二言はありません！！」

「そっか・・・サンキューなザステイン！！ よっしゃ、だってよ、ナナ、モモ！！」

ザステインに礼を言いつつグッと二人にサムズ。

「おお〜〜やったじゃんバカナリ!!」

「やっぱり正攻法は強いんですね〜」

嬉しそうにナイススマイル。

うむ、勉強苦手な仲間だし、ダチだしな、何とかなってよかった  
ですわい。

その後は、更に追い掛けて来たらしいリト、ララ、美柑、ヤミ、  
リコと合流し、ザスティン達が帰るの見送った後、家に帰ったので  
した。

そして、ナナとモモの二人は・・・。

「バカナリ〜、ゲームしようぜ〜」

「あつマサナリさん一緒にお風呂に入りませんか?」

「マサ〜〜私も一緒に入る〜〜」

「いいぞナナ、後、ララモモは却下な?」

暫く地球に住むことになり、結城家で居候することになりました  
とナ。

「増えたね、色んな意味で」

「増えましたね色々な意味で」

「増えたな色んな意味で」

美柑、ヤミ、リコが言ってる、増えたってのは住人がってことはわかるが・・・色んなってなんだ？

「ハア~~~~」

今日も今日とて、ため息をつかれて切ないマサでした。

・ ・ ・

ちよこつとザステイン 視点

意を決してデビルーク王に報告をした所、デビルーク王は。

『そうか、それは都合がいい』

とおっしゃられました、何故と私が聞くとデビルーク王は楽しげに笑いながら。

『どうせマサナリには三人共、面倒を見てもらうんだからな、ハッハッハ、今の内に仲を深めた方がいいだろう、アイツはいいぞ~~~~  
アイツがいればデビルークは安泰だし、娘達もきつと笑って過ごせるからな!!! 俺も娘、思いの父親だろ、フハハハ!!!』

デビルーク王・・・。

「なんと素晴らしきお考え!!!このザスティン、感服いたしました  
!!!」

『フハハハ、当たり前だろフハハハ!!!』

マサナリ様、デビルークは何時でもアナタ様を待っていますぞ!!!

第五十六話っばい感じ！（後書き）

後書き

時間がかかりました・・・。

まあデキはこんな感じでしたけど、さすが頑張りました。

今年も不定期ながら、頑張っていきたいと思えますので、今年も是非ヨロシクお願いします。

感想などありましたら是非！！

第五十七話っぽい感じ！（前書き）

前書き

進まない・・・ああ、進まないったら進まない。

久々の更新です。

なんか随分と間があいた気がします。

では、何時もの如くクスリを持ってどうぞ。



## 第五十七話っばい感じ！

空は快晴、本日も、また晴天ナリ。

絶好のお出かけ日和ってえヤツですわい。

「マサ〜準備出来たよ〜」

「おう！！ ナナモモの二人はどうだ？」

「コツチも、もう出れるぜ」

「はい、私も終わりました」

はい、ってなワケで本日は、ナナとモモの二人に街を案内しよう、な感じでお送りすることになり申した。

で、出かけるメンツはナナ、モモ、は勿論のこと、俺にララの四人でございます。

あんまし、大人数で動いても捌ききれないしね！！

ゲフンゲフン・・・若干メタでござった。

それにしも・・・なんか最近マジに学校行ってないような気がするが・・・いやさ、行ってることあ行ってるんだけどな？

まあアレだな、この辺りも深く触れたらアレなんでスルーで。

「マサ〜〜〜早く行く〜」

「あいよ！ じゃ行ってきま〜す」

「~~~~行つてらっしゅい~~~~」

とララに急かされ、留守番組の見送りを受けつつ家を出た。

そして、スツタラスツタラと街を練り歩きつつ。

「はい、ココが家から、いっちゃん、近えコンビニな？ やべっミ  
〇ミ〇がない！？ ってな時は非常に助かります」

便利ポイントを紹介。

まあミ〇ミ〇は基本、常にストックはしてるけどな。

「夜中にアイスとか食べたくなつた時も来るんだよ」

ララの言う通り、そういう時にも非常に助かります。

特に美柑はアイス好きだから、しょっちゅう来てるしな、まっ夜  
ん場合は俺かりト、もしくはヤミと一緒じゃねえと行かさんけど。

「アイスか〜〜でもコンビニって確かアレだろ？ 品揃えっていい  
のか？」

「最近のコンビニはそこそこに品揃えがいいぞ？ まっ流石に専門店には劣るけどな」

「そうなんですか、あつ、それじゃ、アイスの専門店ってどこにあるんです？」

相槌をしながらも小首を傾げそう尋ねてくるモモ。

ふむ……。

「よしや、なら食いに行くか？ 奢っちゃるララにナナもな」

「ホント、わあ〜い！〜！」

「やりい〜！〜！」

「まあ、ありがとうございます」

うむうむ、ナイススマイルですな。

と、ナイススマイルな三人を引き連れてアイス屋へ。

で、アイスを食べつつ、再び街を、すったらすったら。

するとナナ、モモの二人。

「ぶるぶる……バカナリ……寒い……」

「うう~~~~地球の冬を侮ってました・・・」

って、なっぴやがりました。

まあ確かに、この二人、結構、薄着でやりましたな。

その上、アイスも食ったワケだしな、そうなるわな。

まっ俺はもちろんの事、ララも平気そうにしとりますが。

「ほれ、カイロ・・・って一個つか、ねえな」

「それだったら私のも使っていいよ」

ガタブルしてる二人にカイロを進呈、後で服も買いに行った方がよさそうですね。

って・・・。

「ララはカイロ渡して平気なん？」

そら二人よか、厚着はしてっけどカイロの力は侮れねえぞ。

とか考えてたら。

「エへへ〜こっすれば平気だもん」

バツと俺の腕に飛び付いて来ました。

むろん。

『ヒヨイ』

避けた。

「ぶう～～～避けなくてよ～～～ごうしたら暖かいんだよ、マサも暖かい方がいいでしょ？」

むむっ・・・いや、まあ理屈はわからなくてもないが、何故かついで体が反応してまった。

って、それだったら・・・。

「ナナかモモの二人に引つ付けばいいべ～」

「マサがいいの!！」

いやさ、そんな言われても・・・。

「マサナリさんは女心がわかってませんね～、っていつか私も反対の腕、お借りしていいですか？」

なんかモモに失礼な事を言われた気がしたが、否定出来ないような気もした。

つか、既に、片腕は確定なのか？

「ねえ～マサ～たまにはいいでしょ～」

ララの、おねだり。

ふむ……。

「頷くべきか、頷かざるべきか……そこんとこどうよナナ」

あえて、カイロを頬に当てて、「はふう〜」なつてたナナに振つてみた。

「ふへっ？ 何が？ っていうかコレいいな〜暖け〜」

聞いてなかったらしい、ナナ完全にカイロに心を奪われとります。

気持ちは、わからんでもないが。

で、結局……。

「エへへ〜暖かい」

「は〜遅しいですね」

と、二人を腕にぶら下げること……つか、なんだろ。

「何、この王宮暮らしな感じ？ マジに何処のマハラジャだったっつうの」

こんなんは、もっとこつ、イケメン君のやる仕事ではなかるうか？

「そこんとこどうよっ？」

『カーイー！！（知らんがな）』

通り過ぎりのカラスは結構、薄情だった、クソウ、クロ助、あっ前回、言ってた仲良くなったっつうカラスな？ だったら、なんか、ソレっぽいことを言ってくれるのに。

「はふう〜〜暖つけ〜〜・・・ン？バカナリ、オマエ何してんだコラ、姉上から離れる、っていうかモモも何、引っ付いてんだよ！！」

「遅っ！？ つか、そのセリフはララに言えつつうの！！」

「ヤダ〜〜〜」

即効でヤダされたし。

「あら、なんだったらナナも引っ付いてみる？ 暖かいわよ？」

俺は湯たんぽ、か、なんかかい？

「バツバカ！！ そんなの出来るか！！」

「そんなこと言わずに、ほらほら」

「ちよっモモ、引っ張る」

『ポフッ』

背中に軽い衝撃、モモに引っ張られたナナが背中に引っ付いたら

しい。

「~~~~~ツ!?!?」

なんか見なくても、真っ赤になってるのがわかる。

つか……。

「鬱陶しいわアアア!!」

そろそろ、鬱陶しく、なってきたんでマハラジャモード解除です。

確かに暖かいのは暖かいんだけど、鬱陶しさのが上に来た。

ララとモモが、ぶう〜ぶう〜言って、ナナが、うう〜うう〜言うてたが、知ったことが、です。

つか……今、思ったワケだが。

「ペケよ、二人の恰好、厚着に出来るの?」

『素材があれば出来ますが……流石に難しいです』

無理らしい。

まあ、確かに、空気で服は作れんわな。



その後、虎視眈々と腕に喰らいつこうとしてるララとナナを避けつつ、服を買い、その後にカイロを補給。

これでよしっと思たが、何故か、今だに腕を狙ってるララモモ。

そーっと思ひよる度に、ガオーツとやっときました。

ある意味、『ダルマさんが転んだ』状態。  
古きよき遊びです。

そろそろカンケリにでも移ろうかしら？ と若干、思考が明後日にGOしかけた所で。

「マサ、そろそろお昼ご飯だよ」

「だな、さあ〜て、何、食うかねえ〜トンカツか？ カツ丼か？  
カツカレーか？」

「全部、カツって入ってますね〜好きなんですか？」

フツ……。

「何を隠そう鬼島 政成、好きな食べ物はトンカツなのだよ、まあなんでも食うけどな」

はい、俺、カツが好きなんでござる、都合、五十数話やってきて、  
初告白！！

ン？ ミ○ミ○？ アレは別格だ。

「で、その、トンカツだっけ？ 地球の食べ物だろ、美味しいのか？」

「美味しいぞ〜」

「うん、マサが作った、あのチーズが入ってるの美味しいよね？」

ひそかに、シソも入れてるんだえ。

ちなみに、カツ丼する時はカツのサクサク感を残したいんで、分け分け、して作ります。

「へえ〜〜、そんなに美味しいのか〜〜って、昼は外で食べるんだろ？ バカナリが作ったヤツ食べれないじゃん」

「それは残念かも」

「あつ・・・マサ、どうする？ 一旦、お家に帰る？」

ふむ、まあそれでも、いいつちやいいんだが・・・こっからだつたら・・・あの彩南食堂のが近いわな。

「よしや、着いてきなされ、馴染みの店があつからよ、ソコだつたら俺も厨房に入れてもらえっし」

と三人を引き連れて彩南食堂へ。

そのオヤジさんは、中々に面白いオヤジさんで、材料費を払ったら作らせてもらえたりするのだ。

まあ顔見知り限定だけだな。

ってなワケで。

『ガラッ』

「オヤジさーん」

「むっ？ マサか・・・今日はどっちだ」

「なか厨房」

「ふむ・・・」

とオヤジさんに言ってから。

「じゃ三人はちいと待ってる、作ってくっからよ、トンカツでいいよな？」

「うん！ー！」

「おう！ー！」

「はい！ー！」

三人に声をかけて、厨房へ。

もはや勝手知ったる、彩南食堂ってなもんで、手早く、用意をすませ。

サクサクと調理開始！！

トンカツだけにねっ！！

言っ、即後悔・・・後悔するってわかってんのに何故に言っ  
しまっだらうか。

そんな俺の問いに答える人もむろん、いないッス。

そんな、どうでもいいアレを交えつつも調理の手は休めずに作っ  
ていき。

ジュージューとキツネ色、一歩手前の段階でカツを油から上げま  
す。

するってえと、余熱で綺麗なキツネ色に仕上がるんですなあ。

『ザクッ』

っと良い音をさせるカツ君、トロツと出てくるチーズがまた美味  
そうッス。

我ながらよきでき。

盛り付けをして切っていたキャベツを添えたら、はい完成。

ゴマを入れるかは好みで。

オヤジさんに厨房から出ることを伝えてララ、ナナ、モモが待つ席へ。

「ほい、上がり〜」

「わあ〜い、美味しそ〜」

「おお〜確かに美味そうだな〜」

「だね、ちよつと女の子としては複雑だけど」

それぞれ、そんな感じのリアクションがありつつ。

「はい、手を合わせてください、いただきます」

「いただきます」

「「?」?」?」

何時ものアイサツ、ララはすっかり慣れたようだけど、ナナモモの二人は、まだ、ちよつとわかってないようです。

そんな二人にララがお姉さんぶって。

「あのね、ご飯を食べる前はね、いただきますす、ってするんだよ、ほら二人も」

って教えてたんが、ほほえましかったッス。

もちろん、撫でといた。

そんなことがありながらも、ようやく一口。

「美味しいね？」

「うむうむ、中々のデキよ」

トンカツに関しては美柑には負けん自信があるしな。

「ハグツ・・・美味しいな~~~~このチーズが美味しいぞバカナリ」

「ええ、サクサクしてて中は柔らかくて・・・美味しいですマサナ  
りさん」

そいつあよかった。

実に好評、満足ですわい。

食べ終わった後は、ララが二人にごちそうさまを教えて、俺は俺  
で皿洗い。

コレをすると少しだけ割引になるのだ。

で、オヤジさんにお代を払って、彩南食堂を後にしました。

そして、またまた街を練り歩く。

「そっぴや、あの、いただきます、ってのと、ごちそうさま、って

ヤツ、アレってなんなんだ？」

ナナからの質問。

「地球の礼儀作法でしょ？」

その質問にモモが答える。

「まあ正確には日本の、だけどな？　さらに言うなら、感謝の気持ちってヤツだ」

「そっだよ〜えっと・・・」

「食材に感謝の気持ち、栄養になってくれて、ありがとっってな？　まっ受け売りだけどな」

「「へ〜」」

俺の受け売りセリフに感心した声を上げる二人。

みんなも、いただきます、と、ごちそうさま、は、出来るだけ、ちゃんと言いましょう。

マサさんとの約束だ。

「して、次は何処に行く、リクとかあるか？」

「ん〜〜私は、出来れば動物とかいるところがいいな」

「私は植物ですね」

「そっぴや、ナナは動物とモモは植物と心を通わせることが出来る  
っつってたわな。」

「動物に関しては、ペットショップが近場にあっけど、植物は・・・  
植物園があつたか？ 隣街だけど」

「あつ、でしたら私は今度連れて行って下されば、いいですよ？二  
人つきりで・・・ね？」

最後は何故か耳打ち。

「まっ別に構わんけど、植物園だしな、ゾロゾロと大人数で行くと  
こでもねえわな」

と返したら。

「いや、そういう意味じゃなくて・・・アレおかしい？ もっとこ  
う・・・期待してたりアクションと違う」

「はて、どんなリアクションを返せばよかったのやら？とクビを捻  
ってたら。」

「おい、バカナリ、何やってんだよペットショップ行くんだろ、早  
く行こっせ〜」

キラキラ笑顔のナナに急かされる、よっぽどペットショップに行



くのが嬉しいらしい。

クツ・・・可愛いじゃねえか。

当然のように撫でといた。

流れるに、ナナ ララ モモの順でした。

あつ、撫でた順番ね。

・  
・  
・  
・

『ウィーン』

ペットショップに到着するとナナ。

「おお〜いるいる！！ プツ、アイツ面白い顔してるし、おっア  
イツ可愛い!?!?」

こんな感じではしゃぎながら、奥へ走っていきました。

相当、好きなんだな〜。

「あつナナ〜行っちゃった、もう、勝手に走り回ったら迷子にな  
っちゃうのに」

「いやさ、ララよ流石にナナもそこまでアホの子じゃないだろ?」

走り回るんは確かに減点対象だけど。

「ええ、でも私は、ああやって走り回ってよく迷子になっちゃったし」

経験者らしい。

なんか目に浮かぶようだわ。

こじ……。

「わあ~~~~い!!」と駆け回ったあげく、「アレ~~~~ココ何処だっけ?」となってるのが。

「ララは昔からアホの子だったのな?」

「アホの子じゃないもん!!」

アホの子だろ。

まっ、らしいっちゃ、らしいけど。

「マサナリさん、マサナリさん、コノ子が何言ってるかってわかります?」

そんな感じでララで遊んでたら、モモが子犬を抱えて、そう聞いてきた。

『ワフツ、ワフツ!!』

ふむ・・・。

「高い、怖い、下ろして〜、だと」

「わっ、ゴメンなさい、子犬さん」

慌てて下ろすモモです。

この子犬、結構なビビリらしい。

「今みたいな機会なんざ、しょっちゅうあるだろうに、大丈夫かアイツ？」

そんな不安が過ぎる俺に、近場のワンコ（マルチーズ）が。

『ワウツ！！（そう言ってやるな兄さん新入りにはよくあることさ）』

と言ったのが印象的だった、つかあんな愛らしい顔のわりに、ものっそい渋いなアイツ。

さらに、その渋いマルチーズ。

「モモ、アイツは抱っこされんのが好きらしいから、抱っこすんならアイツにしとけだよ」

という情報を教えてくれました。

このマルチーズ、もはや俺的にはマルチーズのマルさん、はココのコーナーを仕切ってる、らしい。

と、こんな感じで暫くワンコと戯れてたら。

『ピンポンパンポーン、迷子のお知らせをします、迷子のお知らせをします、彩南よりお越しの、えっと・・・コレそのまま言っているのかしら？ えっいいの？ ンッン、失礼しました。』

彩南より、お越しのバカナリ様、彩南より、お越しのバカナリ様、ご家族を、えっ家族じゃない？ 下僕？ そっ・・・その歳で、そんなプレイを・・・最近の子は進んでるわね、お姉さん、ドキドキだわ』

なんか随分グツグダグダな迷子アナウンスが流れてきた。

つか、色々と待て。

コレ、どれからツッコめばいいんだ？ ツッコミどころが多過ぎんぞコレ？ まあとりあえずは・・・。

「あの、アホ！！ 下僕ってなんじゃボケエエエ！！」

下僕扱いは許さん！！

ララナナに待機してるように言って、ダッシュで迷子受け付けま  
で向かい。

「おっ来たな」

「おっ来たな？ じゃねえ、こんボケがアアア！！」

『ガスンツ！！』

アホの子の頭に鉄槌を振り下ろしました。

なんか、アナウンスしてた人が。

「えっ？ 何、一つ進んでそういうプレイ、やだ、お姉さんドキドキしちゃ、ふぎゃっ！？」

とかアホな事をほざきくさりやがったんで、ついでに、ガスンツやっといた。

反省はしてない、するつもりもない。

その後。

「ホント、ご迷惑、おかけしました」

「痛つたい、頭を押さえんなよ」

「っせえ、オマエが頭を下げんからだろが！！」

「いいですよ、ナナちゃんも心配かけちゃダメよ」

そう言ってニッコリ笑う迷子受け付けの姉さんは、凄くいい人だった。

さっきのアレと頭に付いた、コブが無ければな！！

まあ頭にコブを付けたのは俺だけだ。

一応、もう一度、受け付け姉さんに頭を下げ、ララとナナが待つ場所へと向かう。

「ちよっ手を離せて」

「ダメ、また迷子になるだろうに、また、あのアホなアナウンスを流されたらたまらん」

そういう理由で手を繋いで戻りました。

で、戻ったら戻ったでララに。

「私も手を繋ぎたい！！ 迷子になっちゃつと困るもん」

こんな感じで、駄々をこねられ、意図的に迷子になられても困るんで、右はナナ、左はララって感じで手を繋ぐ、ニコニコ顔のララ君です。

「うーん、両手とも塞がちゃってるな、私はどうしようっ？」

モモが、そう言いながらクビを捻っていたが、なんつうかアレだ。

「コレ以上、引率する子が増えたら大変だろうに」

「あっ、マサナリさんにとっては、そういう認識なんだ・・・ホン

ト、手強い、マサナリさん」

他にどう認識せいと？　つか手強いって何？

「子供扱いすんなバカナリ！！　アレか胸か、私がペタンコだから  
かつ！？」

「店に入って、はしゃいだ結果、迷子になるようなヤツのことを大  
体は子供という、もしくはアホの子、両方ヒットだな、ちなみに、  
この場合、胸はあんまし関係ないな、ペタンコなのは否定はせん  
が」

「なんだとー！ー！！」

キヤイキヤイ喚くナナでした。

つか……。

「オマエさ、動物の言ってることわかるんだよな？」

「ああ」

「じゃ、迷子受け付けに頼らずに動物に聞いてくりゃよかつたろう  
に」

「……あっ！？」

今、よつやく気付いたって感じなナナ、やっぱりアホの子なので  
はなかるつか、と思った俺は悪くない。

そんなこんながありつつも、ペットショップにいた時間が結構、長かったこともあり、そろそろ家に帰りまっしょい、ってな時間になったんで、帰宅。

その間も、ララとナナと手を繋いだ引率気分です。

まっ途中から、モモが、あんましにも羨ましいそうにしてたんで、ララがモモと変わってやってたりとかしてたがな。

良いお姉さんしとるやないかい、つつたら。

「エへへ、ホント？ 嬉しい」

嬉しそうに笑って背中に飛び付いてきた、今回は、良い姉さんっぷりに免じて、そのまま、ララをぶら下げ、右にナナ、左にモモ、背中にララってな感じで、家路についたので、ありました。



第五十七話っばい感じ！（後書き）

後書き

こんな感じの話でした。

無理矢理、感が凄い、まあ書いてる人の話は大概、無理矢理だらけですが。

どうも最近、グチっばいぞ書いてる人！！  
ンッン、では、また次回。

感想などありましたら是非！！

## 第五十八話っばい感じ！（前書き）

前書き

最初は二話に分けようかなとか考えておきながら、結局、上手く膨らまず自信がなかったんで、一話になりました！！

そんなこんなで、五十八話、クスリを持ってどうぞ。

## 第五十八話っばい感じ！

「髪型を変えてみようかと思うー！！」

ただ今、昼休み、何時もの如く、保健さんのところで昼メシ&デザ  
タイムをして、フと思立った事を宣言。

「「「はい？」「」」

俺の宣言にハテナ顔の何時ものメンツ、保健さんは。

「あら、また何か面白いことをするのかしら？」

とか言ってるが、まあ文字通り髪型を変えるだけで、あつて、特  
に面白いことでも、ないような気がせんこともないような気がする  
が。。。

ン？ それだったら、わざわざ宣言するな、とか、そういうのは  
ナシの方向で。

つてイカンイカン、今だに何時ものメンツ目が点でほっけとりま  
すがな。

あつ、ちなみに、ナナモモの二人は家で留守番中。

つて、またズレたわい。

まあとにかく。

「髪型を変えてみようと思うー!!」

再び宣言ー!!

それは、もう、敵は本能寺にあり!! と言った、明智さんの如く。

ン? 何、いやさ、流石のマサさんも、そんならいいことは知ってるから、そこまでアレじゃねえから。

「いや、マサ、いきなり意味がわからないから」

「だからだね、髪型を」

「いや、そういうことじゃないって」

ふむ、だろうね。

「まあアレだ、軽い気分転換だ、こん髪型にして、そろそろ一年くらいだからな」

「そうなの? ねえねえマサ、それじゃ今の髪型にする前はどんな髪型だったの?」

ララ君、どうやら俺の前の髪型に興味があるようだが……。

「ふむ、前の髪型は……フッ……あの頃は若かった」

「急に浸ったわね」

そら、もう自分の若さっぷりに浸りたくもなりますとも、ええ。

「で、どついう髪型だったんですか？」

ヤミっ子よ、やっぱ聞いちゃう？ それ聞いちゃう？ まあいいけど。

「そつね、唯にめっさ怒られること間違いない髪型」

「だから、どついう髪型よ」

ふむ。

「今の髪型をベースに横を五分くらいにして更にラインを入れた」

うむ、若気の至りだな。

まあそれなりに気にはいたんだが。

「それは、また、なんていうか・・・怖いかも？」

「まあ大分、厳つい感じだったからな、今、思い返しゃあ喧嘩、売られる原因の二割くらいは、そのせいもあつたかもな」

うんうん。

「マサ君、今、そついう髪型にしたら怒るわよっ！ー！」

「しねえつつうに、つか既に怒つとるがな」

アレは若さ故だしな。

「まあまあ古手川さん、それで、どついう髪型にするのガクラン君  
」？」

「うゝむ、どついう髪型にしようかねえ、ピンパ（ピンパーマ）で  
もあてるか？」

探偵 語の時の松 さんの如く。

つて、コレも唯にコレってされそうだな。

「いつそ切るか？ バツサリと？」

「ええゝゝ切っちゃうの！？」

「そう言われれと惜しい気もする」

ガクランと共に、このチョンマゲも結構付き合い長えし。

かれこれ・・・三年前後か？

「そう言えば、マサ君の髪って私くらいの長さだよな」

そう言ってきたんは春菜さん。

「下ろせば、殆ど同じ長さじゃねえ？つか寧ろ、俺のが長くな？」

髪を束ねてたゴムを外し、下ろしみる。

「あつホントだ結構、長いかも？」

「春菜ちゃんより私に近いな」

言われてみりゃ春菜よかりコに近いな、つてこたあ。

「リコも俺と同じ髪型にできんじゃないね？」

「そうかな？」

うん、この長さだったら多分、出来るわな。

「どれ、ちょい来てみ」

チヨイチヨイつとリコを手招き。

「あっああ」

近付いて来たリコをクルッと反転させ俺のヒザの上に座らせる。

「ちよっマサ!?!」

なんかリコが慌てるが、スルー。

「むう~~~~いいな~~~~」

「むっ……それは勝者の特権のはずです」

「まっマサ君、何をしてるのハレンチよ!?!」

「あら、大胆」

この辺もスルー、ちなみに上からララ、ヤミ、唯、保健さん。

「マサ、ホント凄えよ」

「アハハ・・・」

リトに春菜もスルー！！

と、スルーをしまくりつつ、リコの髪を弄り後ろに束ねる、で、俺が使ってるゴムで縛る。

うむ完成。

「リコ、俺の髪型バージョン！！ って微妙！？」

やっではみたものの微妙だった。

「微妙って・・・いや、それはいいから下ろし・・・いや、でも、下ろして欲しくないような」

俺の感想に何やらブツブツ呟いてるリコをヒザから下ろす。

「あっ・・・」

んな残念そうな声出されても。



「マサ！！ 次、私！！私！！！！」

「はっ？ ララの髪の毛の長さじゃ無理だろ？」

「いいのっ！！ 早く早く！！」

何がいいのか、サッパリわからんが。

まっいいさね。

ポフッと俺のヒザに座り、ニコニコ顔のララ。

「はい、お客さん、どついう髪型をご希望で？」

「エへへ〜マサの、おヒザ！！ マサの、おヒザ！！」

言語回路がクラッシュしたのか、言葉が全く通じてねえんですが。

「お客さん、冷やかしだったらカンベンして下さいよ、つか冷やかしだったら下りね」

「わわっ！！ えと、えと・・・」

「はい、3・2・・・」

「みつ、みつあみ！！」

みつあみとな？ まためんどくさいのを、まっいいけど。

「かしこまり〜」

チヨコチヨコとみつあみ作業に入ります、ちなみに全体的な、みつあみじゃなくて、髪の手だけ、みつあみ、にする感じのタイプね？

コッチのが楽し。し。

「お客さん、いい髪質、してますな〜」

「ホント？ ホント！？ 嬉しい！！」

半分くらいテンプレ的な意味で言っただけなんだが、なんか思いの他、喜んでるな。

まっ確かに、サラッサラだしな。

と、そうこうしてる間にも完成。

「はい、終わりっつと、下りね〜？」

「うう〜もう終わっちゃった」

若干、シヨンボリしてるララを下ろしたら、続くように。

「では、次は私です」

若干、予想通りではあるがヤミが名乗りを上げました。

つか、なんか最初の趣旨と大分ズレてる気がするが……。

まっいいさね。

「はいはい、どうぞ、して、ご所望は」

「美柑と、お揃いにして下さい」

ほう、ほう、美柑と、お揃いか、うむ。

「かしこまり〜・・・って、ヤミの髪、完全にストレートだぞ？  
微妙に違う仕上がりになっけど？」

美柑の髪は微妙に、ウェーブがかかってるしな。

「美柑とお揃いにして下さい」

むむっ・・・それでは微妙にダメらしい。

霧吹きとムースがあればいいんだが・・・。

流石に持ってねえしな、とクビを捻ってたら。

「はい、ガクラン君」

と、保健さんに霧吹きと手渡された、やるな保健さん、グツとサ  
ムズしとききました。

で、道具も得たってことで、早速、ヤミっ子の髪を弄り、美柑仕  
様に。

「うむ、どうだ？」

「お揃いでしょうか？」

「おう、まっ長さとは違っけどな？」

「そうですか・・・フフ」

うむ、嬉しそうですね。

これはアレだな、帰ったら即効で美柑に見せびらかすな。

間違いない。

「じゃあ次は私かしら？」

「保健さんか？ 保健さんは・・・どんな感じにするべくな？」

保健さんはショートヘアだしな。

ふむ・・・。

「西連寺さんみたいにストレートにしてみようかしら？」

ストレートか・・・。

「丁度ストレートパーマ用のアイロンはあるしね」

何故にあるかは謎だが、まっぶっちゃけ、俺のジンガイ握力なら

手を熱湯につけて、髪を挟めば、ストパー効果が出るんだけどな。

でも、道具があるなら、そっちを使います。

ってなワケでストパー用のアイロンを使い、保健さんの髪をストレートに。

「ん・・・さつきから少し気になってたけど、ガクラン君、慣れるのかしら？」

「慣れてるっ程じゃねえけど・・・まっ色々とな？」

ジジイやパー子（閑話っぽい感じ参照）の髪を切ったり、弄ったりさせられてたし。

特にパー子は給料の殆どをアホな通販やらに注ぎ込みやがるから、美容室に行く金すらないパーだったからな。

そら、結婚できんわな。

「どうしたのマサ？ 笑ってる？」

「ん、ちょっとな？」

知らんうちに笑ってたらしい。

「っと、はい終わりっと、おっやっぱ微妙に感じ、変わるな？」

「そっ？ 似合ってるかしら？」

似合ってるかか・・・。

「似合ってなくもないが、何時もの方が、いい気がすんな、俺はだけど」

「あら、残念、失敗かしら？」

「失敗ってワケじゃねえだろ、あくまで、俺は、だしな」

「そ・こ・が、重要なのよ」

はあ？

「なんでやねん」

「それを素の表情で言うガクラン君って・・・まっ、それがガクラン君かしらね？」

よく、わからんが、まあいいさね。

つか、ヤミにリコに唯よ、口をパクパクさせた、と思ったら、今は呆れ顔で、しかも完全に俺を見て呆れてるし。

なんか切ないだろ、チクソウ。

まあいいさ、サクッと切り替え。

「して、唯に春菜はどうする？」

「あっ、私はいいかな？」

ふむ、春菜は、やらないと。

「わっ、私は……でも、あんなヒザの上なんて、ハレンチな……でも……うう〜」

唯は……何やら葛藤。

『キーンコンカンコーン』

「おう？ 昼休み終わりだな、しゃ午後もお勤め頑張りますかねえ」

次はなんだったかねえ。

「あっ……うう〜、勿体ないことしちゃっ……って、私は何を！？ ハレンチだわ〜」

疾風の如く走りさつてく唯でした。

「廊下は走っちゃダメって言うべきか、否か」

「やめてあげなさい、ガクラン君も原因の一つなんだから」

俺が原因一つらしい、よく、わからんが、従うことにした。

「なんていうか、マサ、やっぱりオマエ、凄えよ」

「アハハ……」

いや、リト、だから何が？

・ ・ ・

そんなこんなが、ありつつ、あっという間に放課後です。

さて、今回は、何しようかねえ、今回は珍しく……って程じゃねえけど一人だし、ちよっと寂しい。

『ガラッ』

「ガクラン君、ヒマかしら？」

「おや、保健さん、昼休みぶり、つか、なんぞ？」

「ちょっと手伝ってもらいたいことがあるのよ、いいかしら？」

ふむ、手伝いか……。

「おけ！ いいぜいヒマだし」

というワケで、今日の放課後は保健さんの手伝いをするつもりもった。

で、廊下をスツタラ、スツタラしながら、何をするのかを聞いてみたら。

「クスリに使う薬草を取りに行くから手伝ってほしいのよ、結構、危険な場所だし、お静ちゃんは、人工体のメンテが終わったばかりだし、サポートがね」



「ああ、どつりで、静、朝から見なかったワケだ、で、危険な場所とは？ やっぱし大宇宙的な感じか？」

「ええ、オキワナ星っていう原始惑星なんだけど、私の宇宙船で片道4時間つてところかしら？」

「片道4時間か・・・今から行ったら日付回らね？」

「うーん、そうなんだけど、急に必要になったから、やっぱり無理かしら？」

「いんや、全然問題ねえよ、つと、じゃ行く前にリトに連絡入れとかねえと」

ポチポチとリトにメール。

『わかった、コッチは大丈夫だから気をつけるよマサ』

との返信。

「やだ、リトきゅん、惚れちゃう」

「コラコラ、一応、隣に私って女性がいるのに、男の子に、キュンってしないの」

「だって、ほら、この気遣い、惚れるわ」

パツと保健さんにもリトからの返信メールを見せてみる。

「あら、確かにそうね、やるわね結城君」

「イイ男っしょ？」

「ガ克蘭君もね？」

おう！？      なっ・・・なん・・・だと。

「いえ、ケファイアです」

「照れちゃって、まあ、可愛いわね」

クツ・・・なんかイニシアチブを取られた。

クソウ、エテ山がいたら八つ当たりしたのに。

「フフ・・・まっコレくらいにしとこうかしら、ヘソを曲げられても困るしね、それじゃあ、私は準備してくるから、校門で待ち合わせましょう」

「あいあい」

若干モヤッとした感じを引きずりつつも、校門前で待ち合わせれ  
ことに。

校門に着いて、少ししたら保健さんも準備が終わったのかやっ  
て来た。

「結構、早かったツスね」

「受け持ちのクラスもないし、そんなものよ、それじゃ、まずは私の家に行きましょう」

「あいあい」

並んで歩く帰り道、まあ帰り道つっても保健さんのであって、俺のじゃねえけど。

「そついや保健さん家に行くのつてスゲエ久々だな」

「そうね、ガクラン君が勝手に冷蔵庫を漁ってた時、以来かしら？」

「そこは、スンマセン、猛烈に腹が」

「まあ全治三ヶ月、治療ポッド込みで一ヶ月を、三日で治したんだもの、それはお腹も空くわよね」

「ええ、もう、どごそのラバーメンの如く、食って、寝れば、たいてい、のケガは治るんですわ」

キズは食って治せ、を地で行くヤツだからな。

「昔から、そうなの？」

「ですわい、今でこそガッチガチだけど、しょっちゅう、ケガしてたし」

「ガクラン君の、お爺さん？」

「そっそ、あんクソジジイは、いたいけな小学生の孫の頭掴んで普通にガラスにガツシヤンとかしやがるからな」

マジ有り得ん。

「それは、また・・・」

冷や汗タラリの保健さん、流石の保健さんも引き気味です。

「更にだ、アレは、幾つだったかねえ・・・10になるか、ならぬいかくらいン時だったか、急に、『漢はクマを倒してナンボじゃ！？』とか言い出して、デカイクマの前に放り出された事がある」

今なら、全然余裕だけど、あの頃はまだまだ若かった。

「そっそれで」

「それでも何も、肩口から『ガザッ！』ってやられて大出血サービス、それでも、何とかかんとか、眉間を狙って沈めたけど、クマは眉間が弱点って漫画で読んでてよかったッス」

ホント、漫画の知識も役に立ちます。

普通はそういう状況ないけどねっ！！

「クマを倒す小学生って・・・ホント、解剖」

「NO解剖で、つか、まだ続きがあるんですわ」

恒例の解剖を断りつつ、そう言う俺。

孫をクマの前に放り出すだけでも有り得んジジイだが、こっから先も有り得んです。

「つ……続きがあるの？」

「うむ、で、クマを沈めたはいいが、流石のマサさんも大量に血を失ったんで、ぶっ倒れたワケですよ、で、気付いたら、俺が沈めたクマ君が、俺のキズをナメててさ」

「少年漫画みたいな展開ね、拳を交えて友情がってことかしら？」

多分、そんな感じ。

「で、クマ君との友情を深めた俺は、ジジイに復讐をする為にクマ君と共に、ジジイを襲撃に行ったワケですわ」

クマ君という心強い強敵<sup>と</sup>を得たこと、大量出血があつた事も重なつて、「ヒヤハー」な、ナチュラル・ハイ状態だつたんです。

多分、脳内麻薬だっけ？ 的なものもドバドバ出てたと思うし。

それが……間違いだつた……。

「それで、っていつか一気に暗くなったわね、何があつたのかしら？」

「フツ・・・返り討ちにあいました」

「やっぱり・・・でも、ガクラン君って大体、返り討ちにあってるんじゃないかったかしら？」

うぐつ・・・まあ確かにそうなんだけどね。

ただ・・・。

「その日の晩メシがクマ鍋だった」

「えっ！？ えっ？ まさか・・・」

驚き顔の保健さんの、そんな保健さんに静かに頷く俺。

「強敵とこよ・・・オマエは美味かった・・・」

残さず美味しくいただきました。

残すワケにはいかねえよ!？

「とっ・・・とんでもないわね・・・っっていうか食べたのね?」

「強敵とこの血肉を糧に今日も元気に生きてます、クマ太郎・・・俺は元氣だぞー！ーっ!!」

「ガクラン君も・・・色々あったのね・・・」

色々と有りましたとも、ええ。

と、こんな感じで【ジジイ・エピソード】強敵との別れ、オマエは美味かった編】を話してる間にも、保健さん家に到着。

今の俺のモチベはかなり高いぞ、ジジイへの怒りの意味で。

「なんか、星をまるごと破壊しかねないくらいに気合いが入ってるわね、気持ちは、わかるけど少し抑えなさい」

保健さんにそう言われたんでミ ミ 飲んで落ち着きました。

で、ミ ミ 飲んでたら。

「あっマサナリさん、どうしたんですか」

静、登場。

何故かナース服。

「よお、静、チクツと保健さんの手伝いにな？」

「そうなんですか」

「おう、で、静は体の調子は、どうだ？ つか何故にナース服？ 保健さんの趣味か？」

「体は絶好調です！！ この衣装は・・・御門先生が」

あっ、やっぱり保健さんの趣味なんだ。

保健さんも白衣だったり、ナース服だったり、随分とまたマニアックな。

「なんか微妙に勘違いされてる気がするけど、一応、ココ診療所よ？ だからコレは仕事着よ、ガクラン君やヤミさんだって用務作業の時に作業着を着るでしょ」

そっいや、そっだわな。

うん、なんかスンマセン。

「で、マサナリさん？ どうです、この衣装似合います？」

心の中で謝ってたら、静が、クルッと回りながら、そう聞いてきた。

うむ。

「似合ってる可愛いぞ〜〜、ただ、絶対にオマエに注射や点滴はされたくないけどねっ!!」

「みつ御門先生〜前半は嬉しいけど後半はヒドイこと言われました!!」

保健さんに泣き付く静君、そんな静君に保健さん。

「私も遠慮したいわね」

「はっっ!?! 御門先生まで〜〜なっなんでですか〜」



ザクツと一刀で斬りふせてた、うむ、流石です。

つか……。

「なんで、言われても……ねえ？」

「そうよね〜」

「なんですか、その目は、なんですか、その目は〜〜」

言わないのも優しさです。

なんとか犠牲が出る前に気付いてくれたら、いいなあと思う。

つか……。

「今まで、大丈夫だったん？」

ちょっと不安になったんで保健さんに聞いてみる。

『スッ』

目を逸らされた。

「マジかい……」

「冗談よ、流石に」

冗談だったらしい、非常にわかりづらいつつこの。

ちなみに、このやり取りの間、静はプックツ顔で、ずっとワキヤワキヤしてました。

なんか面白かった。

もうちょい弄って遊ぼうかと思ったが、出発する時間があんまり遅くなってもアレなんで。

「で、ぼちぼち、出ますん？」

「そうね、そうしようかしら、お静ちゃんはどうする？ 人工体の調子、さっきは大丈夫って言ってたけど」

「大丈夫です、私が役に立つってことを証明してみせます！！」

ふむ・・・気合い十分だな。

ただ。

「気合いと結果が反比例すると俺のカンが警報鳴らしてるんだが」

「奇遇ね、私のカンも鳴ってるわ」

ふんす、ふんす、と気合いが入りまくってる静を不安に感じる、俺と保健さんだった。

ともあれ、静も同行ってことで保健さんの宇宙船へと乗り込みます。

宇宙船に乗るのは二度目だな。

「じゃっ出発しましょう、行き先は、原始惑星オキワナよ、お願いね?」

どうやら音声で行き先指定出来るっぽい、とっつぁんぼっや、の宇宙船も似たような感じだったが、流星は宇宙科学だな。

『ヴォーン』

保健さんの宇宙船は低い駆動音と共に、一気に加速して、あっちゅう間に地球とオサラバ。

当然のように。

「わきゃ~~~~」

と、転がる、静君、シートベルトを着用しないから、まあ俺もしてないけど。

「しょうがないわね〜」と苦笑しながらも保健さんに目で頼まれたんで回収してイスに座らせる。

「うう~~~~すいません」

「お気になさらず」

シヨンボリ顔の静の頭を撫でつつ、そう言った。

「そういえばガクラン君って、宇宙船は初めてなの？ 慣れてるっ  
ぽいけど」

保健さんに、そんな話題を振られたんで。

「いんや、二度目」

と正直に答えときます。

実際、二度目だし。

「二度目・・・ね、一度目はソルゲムを漬した時かしら？」

「ですな」

って・・・ン？ アレ？

「やっぱりね」

どうやらカマをかけられたっぽい。

つか、なんで知ってたんだ？ そんな俺の考えが伝わったのか。

「銀河ニュースでやってたもの、銀河マフィアのソルゲムのアジト  
が何者かに、叩き潰されたって」

銀河ニュースとな!？

そんなもんがあるとは知らなんだ・・・ってアレ。

「それで、なんで俺に繋がるんでっしやる？」

「わかるわよ、ゲイズが来てから、間がないうちにソルゲムが潰されたってなったらね？」

ああ〜そう言われりゃ・・・アレか。

「一応、言っておくけど単独犯じゃないよ？」

「でしようね、いくらガ克蘭君とはいえ宇宙船がないのにソルゲムのアジトに乗り込めないもの、察するに・・・デビルーク王あたりに協力してもらったとか？」

なんたる推理力・・・。

「保健さん名探偵？」

「残念、医者よ、それにしてもガ克蘭君も・・・無茶したわね、ちよつとした話題よ、銀河に謎の正義の味方あらわるって」

なんじゃそら。

「別に無茶でもなんでもなかったツスけどね〜齒ごたえなかったし、とつつあんぼつや、も手伝ってくれたしな、大体、正義の味方って言われる程、御大層な志じゃねえしな」

半分ヒマ潰しだったし。

「まっガクラン君なら、そう言つと思つたけど、それでも、私は感謝したいのよ、おかげで、コレからも地球で、今の生活をおくれそうだしね」

「そいつぁよござんした、まっ俺も保健さんがいなくなつちまつたら寂しいしな」

「フフ・・・そう言われたらますます地球から離れられそうにないわね」

そう言つて笑つ保健さんは、凄くいいスマイルでした。

うむ、ナイススマイル。

つて、さっきから、静、ひとつことも喋つてねえが、どうしたんだ？

と、静の方を見てみたら。

「うぶつ・・・気持ち悪いです・・・」

真っ青になってました。

「酔つたみたいね？」

「そうみたいね、しょうがないわね、お静ちゃん、酔い止めがあるから飲みなさい、ホントは宇宙船に乗る前に飲んだ方がいいんだ

けど、大分、楽になるわよ」

背中をサスサスして、静に酔い止めを飲ませてやる保健さんです。

ココまでベタなんも珍しい、ホント、静、外さないな、ベタ的な意味で。

で、オキワナ星に着くまでの間、大分体調が持ち直した静が再び酔わないよう、気を紛らせる為に、シリトリやらなにやらして過しました。

・ ・ ・ ・

そして、オキワナ星に到着。

原始惑星ってだけ、あつて非常に自然が豊かです。

「中々、良いところですね」

「パツと見はそうなんだけど、ほら、あそこ」

保健さんが指差す方向には。

「はわわわ~~~~、なっなんですか、あの大きな生き物!？」

「うむ、ジュラシック」

レックス的な恐竜がいやがりました。

「ねっ？ ってワケで結構危険なのよ」

なるほどねえ。

「確かにアレ肉食そうだわ、って、なんかアイツめっさコツチ見てね？」

「みみみ見えます、はわわわ~~~~わっ私、食べても、美味しくないますよ~~~~」

「あら、私の造った人工体よ、味も保証するわよ？ 色んな意味で」

色んな意味で、何を言ってるんだっつうの。

っと・・・まっ、このまま、あのレックスもどきのエサになるんはカンベン願ってえし。

よだれをダラダラ垂らし始めたレックスもどきに。

「喰われるのはどっちなかねエ」

ニイツと笑いながら、そう言ったら。

『ビクン』

と震えて立ち去っていきました。



うむ、実に平和的な解決だったな。  
って、静。

「まっマサナリさんも怖いです〜」

「あらあら、お静ちゃんには、ちょっと刺激が強かったみたいよガクラン君？ まっ、あの怒ってる時よりは、全然マシだけど」

むむっ……。

「俺的には大分、紳士的かつ、平和的なアレだったのに……」

「そうね、言われてみれば、無駄な争いをしないで済んだんだからよかったわよね、ほら、お静ちゃん、何時までも震えてないの、何時までも震えてたら、そのうちガクラン君が泣いちゃうわよ？」

いやさ、別に泣きはせんが？ 多分、きっと、メイビー。

「あっ、ゴメンなさい、マサナリさん」

「よかよ、気にしなさんな」

半泣きで謝る静にそう言っとききました、まあぶっちゃけビビられるのは慣れてるちゃ慣れてるしな。

「して、保健さんが言った、クスりん薬草とやらは？」

「ああ、それは、ココから少しだけ森に入ったところにあるわ」

「おけ、じゃっ行きまっしよい、静も転ばないよう気をつけ」

『ベチヤ』

「いつ痛いであ~~~~」

言い切る前にコケて涙目で鼻を抑える静、ホント外さないな、ベタ的な意味で。

そんな静に注意を払いながらも、保健さんの行ってた場所に向かい、薬草とやらを確保。

攻撃を仕掛けてきそうな、恐竜君やら、不思議植物君やは、軽くメンチを切ってお帰りいただきました。

その度に静が、ガダブルして、即、謝るって感じになってました。

そして、今は再び宇宙船。

「結構、採集早く終わったツスね〜」

「ガクラン君のおかげで最短ルートをいけたもの、普段だったら、避けるトコを向こうが避けてくれたから、大分、時間が短縮できたわ」

「うむ、どうやら役に立ってたようだ、よかったですわい。」

「あっ、ちなみに静は……。」

「ス~~~~むにゃむにゃ……美味しいです〜」

薬草確保した帰りの段階でお眠になり、俺がおんぶして宇宙船ま

で連れてきた。

今の寝言といい、実にベタなヤツめ。

「ベタね〜」

「ベタですな〜」

そんな静の寝息と寝言をBGMに、地球へと帰った俺達でありました。

## 第五十八話っぽい感じ！（後書き）

後書き

久々にジジイエピソード、実は後、一つ程ジジイエピソードは考えてたりしてます。

まあ何時やるかは謎ですけど！！

ンツン・・・では次回も頑張っていきたいと思えますので、おヒマなれば、また見てやって下さい。

感想などありましたら是非！！

閑話っぽい感じ！ その2（前書き）

前書き

かなり時期外れ！！

そして短い！！

軽いオマケ程度な感じですよ。

閑話っぽい感じ！ その2

「・・・ろ~~~~~~~~~~~~カ~~~~リ~~~~」

なにやら声が聞こえる・・・。

聞き覚えのあるような、懐かしい声・・・。

「起きろバカナリー！！ 起つきつろ！ 起つきつろ！！ そして私にご飯を作れ！！」

。この理不尽な物言いいい・・・やはり聞き覚えのある声だ・・・。

「起きないな・・・起きないと撃つぞ、ハイ、3・2・1！！」

『ダキユン！！』

『バツ！！』

「うおっ！？」

「チツ・・・避けられた」

「っっのママは・・・。

「人が気持ちよく寝てたつうのに、いきなり、何しやがるパー子！

「！」

「アンタが早く起きないからじゃん、私、お腹減ってるんだから、私ご飯作れ〜」

何？ 何なのコイツ？ ホントなんだろうコイツ？

「久々にアンタの肉じゃがが食べたいの！！ はい、につくじゃが、につくじゃが！！」

俺の沸き上がる怒りを無視して、肉じゃがコールをしだすパー子、ホント・・・コイツは、どうにか、ならんのだろうか？

「ハア〜〜チツ、しゃ〜ねえな、ちいと待ってる」

「ヤッホーイ！！ だからマサナリ君、好き愛してる！！」

「オマエの愛はいらん」

「なんだとー！！！！」

喧しいパー子をあしらいつつ、肉じゃがを作る。

「ハグハグ・・・美味え〜〜〜やっぱバカナリの肉じゃが美味え〜〜〜！！！！」

「はいはい」

まったく・・・美味そう食ってからに。

それにしても……。

「久々だな、パー子」

「ハグハグ……ほうだね〜ンツン……えっと、私が死んだ時、以来だから……約二年くらい？」

もう、そんなくらい経つか……。

「アンタも一回死んだみたいけどね」

「まあな、つつても直ぐに生き返らせてもらったけどな？」

「みたいだね〜、で別世界へポーン！！ いやホント、バカナリ愉快な人生歩んでるね〜」

「バラエティー豊富だからな」

うむ、実に豊富ですわ。

「それに、アンタ前より笑えてるじゃん」

「そっか？」

「うん、私が死ぬ前は、ちょっとはマシになったなあ〜って思ってたけど、今はそれよか、ず〜〜とマシ」

「そんなに酷かったか俺？」

なんか若干凹むんですけど。



「結構ね、まっコレも今やアノ世のアイドル・スター、葉子ちゃんのおかげだね!!」

キラッと白い歯を輝かして笑うパー子。

うむ……。

「年を考える三十路前」

「それを言うなアアア!! ホント、射殺するよ!!」

されてたまるかつつうの。

っと、そうだった、そうだった、パー子に会ったら聞きたかったことがあつたんだよね。

「……何、バカナリ、そのイラッとする笑いかた」

むっ、顔に出てたか。

あつ、何を聞きたかったかって? そりゃもう、お察しの通り。

「結婚できたか?」

「はうっ!?!」

胸を押さえてのたうちまわるパー子。

「ククッ……だろうと思った」

「クツ・・・だろぅと思っただってアンタ・・・わかってて聞いたってこと!?!」

「まあよ!!　ププ~~~~」

「チツクシヨ~~~~何よ、その笑い!!　いい、アレよ、そう、アレだから、私くらいにイイ女に釣り合う男がいないだけだから!　もうアレね~~~~ホント、イイ女も罪よね~~~~」

ププ・・・スツゲエ必死だし。

ああ〜面白え。

つか・・・。

「オマエの無茶苦茶っぷりについてこれるヤツがいねえだけじゃねえの?」

「おふっ!!　言っちゃう?　それ言っちゃう?　ねえ、そのこと言っちゃうんだ、チクシヨ、合コンの第一印象は、それなりにいいのに、少し素をだしたら、サーッと離れていきやがて~~~~チクシヨー!!　私の何が悪いんだー!!」

「それがわからんうちは、結婚は無理だなダツハハ」

うんうん、つうかわかる日が来るとも思えんが。

「そうだ、バカナリ!!　やっぱアンタが私を貰えばいいじゃん、アンタだったら私の性格わかってるし!!」

「イヤだ、オマエはイヤだ、オマエを妻と呼ぶくらいなら俺はヤドカリを妻と呼ぶ」

「チイクシヨー！ ヤドカリに負けたー！ー！」

ヤシガニでも可。

暫くの間、のたうちまわるパー子の姿を堪能した。

なんか、すつごく晴れ晴れとした気分になった。

その後は。

「バカナリ、久々にマッサージしてよ、あつ、でも、変なところ、触っちゃ、やよよ？」

「はっ！！」

「やっぱり鼻で笑われた！！」

とパー子のマッサージをさせられたり。

「イエーイ！ 私の勝ち！！」

「ざっけんな！ もう一回じゃ！！」

「無駄無駄、アンタ、ゲーム弱いもん」

「弱くねえつうの!! オマエがちょっとだけ強いだけだから、俺は決して弱くねえ!!」

「いんえ、弱いです〜まっ葉子ちゃんがすごく強いってのもあるけどね〜」

「絶対泣かす!!」

ゲームで勝負をし……。

「さって、じゃ、そろそろ時間だから」

コントローラーを置くパー子。

「時間って……もう、ちょい待ってって、後ちょいで勝てるから」

「だから無駄だったば」

「無駄じゃねえってホントに、もう少しで勝てんだよ、だから、もう少しくらい、いいだろうがよっ!!」

「だ・か・ら、時間なの」

俺の頼みに困った顔で、そう言うパー子。

わかってる、ホントはどっかで、わかってる、でも……。

「時……間って……ちょっと……くらい、いいだろ? ぼら、見ろっでグスッ……さっきの……ヒッ……おじがっただじゃん、

なあ、だのむっで・・・なあ？」

なんか、喋りにくいな、オイ、なんかパー子の顔が霞んでるしよ。

「もう・・・泣くなって、男だろマサナリ」

「泣いでねえっで・・・なあ、もうぢよい」

「わがままいうな、なっ？」

やっぱり困った顔のパー子、少しだけ笑って頭を撫でられた。

「じゃ久々に会えて、よかったよ、肉じゃがも美味しかったしね」

待てって、肉じゃがなら、今からまた作ってやってもいいから。

ホント、さっきのより美味しいの作るし。

そう言いたかったけど、言葉が出ない。

かわりに出てくるのは。

「ヒッグ・・・ウグッ・・・エグッ」

情けない音。

「あ~~~~もう、アンタ以外と泣き虫だからな~~~~ほらミミ  
上げるから泣きやみな、で、笑って見送いなさい、葉子さんは、ア  
ンタの笑い顔、結構、気にいってんだから」

そっか・・・そっか。

渡されたミミを飲み、グツと目元の水滴を拭う。

そして、なんとか。

「ニッ」

と笑う。

「うんうん、それで、よしよし！　じゃ、あんまし早くコッチ来たらダメだからね？　バイバイ」

パー子も笑い、そして手を振る。

それと同時にパー子の体が薄くなっていき俺の意識も薄れていく・・・。

「またな・・・パー子」

いつ会えるかはわからんねえけど、今度は勝ちてえな。

最後にそう思いながら意識を落とした。

・  
・  
・  
・

「ん……？ん？」

気付くと布団の中だった。

どうやら俺、夢を見てたらしい。

随分とまあハッキリした夢だったような気がする。

最後あたりが情けなかった気もすっけど。

って、フとカレンダーに目をやる。

「12月25日か……」

今日は世間一般でいうクリスマスだった……微妙に気が重い。

あんまりクリスマス好きじゃねえんだよね。

口クな思い出ねえし。

でも……今年のクリスマスはそんなに悪い気分じゃねえかもな  
し。

そんなクリスマスの朝だった。

• • •

『メリークリスマス、デス、マサさん』

『アイナより』



閑話っばい感じ！ その2（後書き）

後書き

ホントは二ヶ月前にやりたかった・・・そんなネタでした。

まあクリスマス編はクリスマス編で別にやるような気がしますけど。

計画性がない書いてる人でした。

感想などもありましたら是非！！

第五十九話っばい感じ！（前書き）

前書き

やっちゃまったぜ・・・そんな感じの59話。

とぅとぅとぅ。。。

ンッン、クスリを持ってどうぞ！！

## 第五十九話っぽい感じ！

〜里沙 視点〜

「なあ、いいだろーちょっと付き合ってよ」

そう私に声を掛ける見るからに軽薄そうな男。

「うるさいなあ、アンタみたいなチャライ男にキョーミないんだって」

ったく、さっきからこのナンパ男、しつこいつたらない。

折角、気分よく歩いてたっというのにコイツのせいで台なし。

「そんなコト言わずにさア〜〜〜」

あ〜〜〜、もうホントにウザイ、アレだけキョーミがないって言うてるのに、なんでわかんないかね〜〜〜。

ン？ おやおや、向こう見えるのは・・・我らがクラスのママサマサじゃん。

珍しく一人なんだ？

トボトボ歩いちゃって・・・なんかあったのかな？

まっいいや、とにかく今は、このナンパ男を振り切る為に。

「あぁん、ダーリン　もう遅いよぉーっ!!」

そう言いながらマサマサに駆け寄る、飛び付いても避けられそうだし、それにしても、ううくん、ちょっとアホっぽかたつかも？

「んんんんって、およ里沙かよ、どった？つかダーリンって何？  
なんかアホっぽいぞ」

さっ流石マサマサ、自分でもちよっと、そう思ってたけど、ハッキリ言うね。

まっいいや。

(マサマサ、ちょっと助けて、さっきからしつこいナンパにあっちゃってさお願い!!)

ナンパ男に聞こえないように小声でマサマサに頼んでみる。

(ぶくん、直訳するとあのアゴヒゲを血ダルマにすればいいんだな、まかせろ)

(いやいやいや、過激すぎるってば、ちょっとだけ彼氏のフリをして欲しいのっ!)

(ぶっ飛ばしたほうが早くね?)

(マサマサ、コレも人生経験、我慢も覚えよう、ほらお願い)

(むっ・・・しょーんなかねっ、ソレっばい感じを出せばいいんか？)

(そっそ)

ふう〜〜〜交渉成立つと。

一時はバイオレンスな流れになったけど。

「よお兄さんよ、コイツは俺ン大事な大事なヤツでな、悪いがそういうこつたからカンベンしろや」

ッ！！

大事な大事なって・・・いや〜〜〜アレだね、自分で頼んだコトとは言え、そう真顔で言われると照れる。

「そっ・・・そうか・・・彼氏持ちだったのかよ」

私がちよつと照れる間にナンパ男はそう言って去っていった。

ふう〜〜〜。

「ありがとマサマサ助かったよ、にしてもマサマサ大事な大事なんて、思わず照れちゃったじゃん」

「あん？ 嘘は言ってねえぞ？ 俺あ里沙ンコトあ大事なヤツだと思っつっしな」

「つてちよつ！！」

いやいやいや、マサマサ！？

待て私、落ち着け私！！

まさかマサマサの口から、そんな言葉が出てくるとか・・・しかも私につ！！

そつ・・・そう言えば、前にマサマサの好みの女の子の話をした時、私が近いって言ってたような・・・。

つて待てつて私、里沙さんともあるうものが中学生じゃあるまいし。

動揺しすぎつしょ。

それに・・・ララちいを始め数々の女の子からのアプローチに全く気付かない鉄壁という呪いが掛かっているマサマサが・・・。

「あん？ どつた里沙、赤くなったり唸ったり・・・つてアレ、なんか似たような反応を見たコトがあるような・・・まっいいさね、里沙は大事なダチだからよ」

「ダ・・・チ？」

「おつっ！！！」

ダチ・・・かあ〜、やっぱりねえ〜、ちょっとガツカリ・・・  
なんかおかしいとは思ってたけど。

マサマサだしねえ〜。

全くドキドキしちゃったじゃん。

この里沙さんをドキドキさせるとは。

「やるねっマサマサ!」

グツと親指を立てサムズアップ、よくマサマサがやる行動。

まっ私もたまにやってたけど、マサマサがクラスに来てからは、  
頻度が多くなってる気がする。

「なんかわからんが褒められたっぽい？」

いや、まあ褒めらてるワケじゃないけど。  
それにしても、なんで私、ガツカリした?  
ン~~~~。

チラッとマサマサを見る。

うーん、やっぱり目つき悪い、でも、それなりには・・・カッコ  
よく見えなくもないかな？

好みが別れそうだけど。

実際、マサマサって、一部の女子には怖がられたり、敵視された

りしてるし。

主にテニス部の一件とか、後、野球部の・・・誰だったかな〜  
コレミツ？ 違う気がする、何とかってヤツのファンの子から。

「人のツラをジーっと見てからに、今更、珍しいモンでもねえー  
だろ？」

「悪い！！ ちょっとね？ って、そういえばマサマサー人って珍  
しいじゃん、どうしたの？」

慌てて話題転換、まっ別に慌てる必要もないけど。

「珍しい・・・って程じゃねえけどな、たまには、そういうコトも  
ある」

「私からしたら珍しいって、何時も誰かといるじゃん」

多いのがララちいにヤミヤミに結城かな？まっ私や未央もクラス  
の中じゃ多い方に入るけど。

「そう言われりゃ、そうだわなあ」

そうなんだって。

「っと、でマサマサは何してたワケ？」

まだこのコトを聞いている途中だったわ。

って、おや、マサマサ・・・どうしたんだろ？ なんか微妙に・・・



・しかめっつら、目つきの悪さが更に極まってる。

近くを通った気の弱そうなりーマンとか、ヒィって悲鳴上げてるし。

「こらこら、マサマサ、顔が怖いぞ〜何があつたんだ〜？ お姉さんに話してみなさい」

「ん・・・実はな・・・」

神妙な口調のマサマサ、少しくらいの悩みだったら、里沙お姉さんが解決してあげるからねマサマサ。

「実は・・・」

「うんうん」

ほらほら早く。

「実は・・・」

「引きが長いっつーの!?!」

「いやあスマンなっつい」

全く、まっ流れるにやっとかないといけない気持ちは解るけど。

「では改めて・・・ええ、本日、私、鬼島 政成・・・家出して来ましたー!?!」

ピシッと敬礼するマサマサ。

ふむふむ、そっか、そっか・・・って。

「家出ッ!？」

「うむ家出だッ!！」

家出ってマサマサ・・・。

「マサマサって結城の家に居候してるでしょ？　なんで家出？」

「うむ・・・それが、やんごとなき事情によりな」

「それも話してみなって、ココまで言っただし、ほらほら」

「むっ・・・仕方あるめー、ならば話そう何故、俺が家出をしたのか、その真相をっ!！」

カツと目を見開きくマサマサ、うん、正直、絶対に下らない理由  
だろっとは思ってるけど。

・  
・  
・  
・

「マサマサ・・・なんていうか・・・うん、くっ・・・下らねー」

「……！ そんな理由で家出って子供かいっ……！」

マサマサが話した理由は、思ってた以上に下らない理由だった。

その理由ってというのが。

マサマサがゲームでヤミヤミと勝負をしてたらしい、これは何時ものコトみたいなんだけど。

『ドーンッ……！』

「フフ……コレで354勝300敗520引き分けですね、勝ち星に50以上の差が出てきましたか……もうマサナリでは相手になりません」

この一言でマサマサ激怒……！！

でも、だからってコレが直接の家出の原因じゃないみたい。

その後も勝負をして、どうしても勝てなかったマサマサを見兼ねた結城が。

「なあマサ気分転換に俺とやろっぜ」

と言ったらしい、結城はマサマサよりゲーム上手いらしいけど、ココで結城が……。

『ドーンッ……！』

「あつやられたか〜マサも上手くなってるな〜」

超棒読みだったらしい、結城なりの優しさなんだろうけど・・・  
タイミングが悪かった。

「うわーんッ!! わざと負けられても嬉しくないんだよー、  
つか二度目だろー!! バーカーカ、リトのバーカ家出して  
やるー!! うわーん!!」

で、現在に至ると・・・。

うん・・・やっぱり・・・なんていうか。

「下らねーっ!!」

「下らない言うなー!! やられた本人にしか解らないんだよあ  
の切なさは!!」

下らないってば・・・まっコレ以上、ツツいても可哀相だし。

「で、マサマサどうすんの?」

「俺の決意をナメるなよ、帰る気はねえ!! 明日には帰るけど!  
」

「明日には帰るんかい!?!」

ビシッと裏手ツッコミ、今日、私、結構ツッコんでるなあ。

「うむ・・・だって、ほら淋しいし?」

淋しいって・・・まっ結城の家って結構、大人数で住んでるみたいだし、それに慣れちゃったら、そう思うのかもね。

でも、まっ一応、言っておく。

「淋しがり屋」

「ウサギが俺かっくてくらいだからな」

ウサギ・・・マサマサとは対極の位置にいる気がするんだけど・・・。

こんなガラの悪いウサギってのも、ちょっとな。

「仕方ないな、そんな淋しがり屋なウサギさんは、里沙さんが面倒を見てあげよう」

「おっ? マジでか!?!」

「マジマジ、ほっとけないしね」

なによりマサマサといると面白いくらいのトコが多いし。

「持つべきモノは頼りになるダチですわ」

「フフン、もっと褒めたたえ、そして敬いたまえマサマサ君、まっさっきのお礼ってのもあるけどね」

「礼を言われるようなコトした記憶はねえんだが？」

さっきのコトをもう忘れたのかよー！

って違うか？ マサマサにとってアレは、お礼を言われるようなコトでもないってコトなのかな？

どっちもありえそう。

本人は違っつて言うけど、コレで結構お人よしだからな。

っつと・・・考え事はココまでにして。

「じゃマサマサ、とりあえず行こっ！！」

「どっくにさ？ 夕日？」

「違っつて青春ドラマじゃなんだから、まっ着いて来て」

「あいあい」

はい、一名様ご案内。

っつてな感じで連れて来た店。

『ガチャ』

「おかえりなさい」

店のドアを開けるとメイド服を着た未央が出迎えてくれる。

「ただいま〜って、未央じゃん！！　つか何故におかえりなさい？」

未央のバイト先の喫茶店、妹C A F Eってトコ、ちょっとマニアックだけど。

っていうか・・・。

「マサマサしつかり、ただいまって言ってるじゃん」

「いやさ、おかえりなさい、と言われたら、ただいま、と返すのは常識だろ？」

いや、まあ確かにそう言われれば、そうなんだけど・・・マサマサの口から常識って言葉が出てくると、やっぱり違和感が、そして私も無性に、ただいま、と言わないといけないような気分にな・・・。

「あれ？　里沙、マサマサと一緒にたんだ〜」

「まあね〜、あつと、ただいま〜っ！！」

相槌しながら、やっぱり、ただいまと言っておく。

って、似たようなコトがマサマサが来たての頃にあっただよ。

あの時は、おはよ、だったけど。

プツクク・・・あの時の唯にゃんの反応とクラスの皆の反応は面白かったわ。

まっ私も反応したんだけど。

一人、思い出し笑いをしてる間に。

「ほうほう未央のバイト先ってココだったんか？」

「そっだよ、お兄ちゃん」

「同年じゃろ？」

「もうマサマサ妹C A F Eだよ？ だから、お兄ちゃんていいの！」

「そっいうモン？」

「そうなの、お兄ちゃん！！」

ってな感じで、マサマサが未央と話してた。



「何気に未央の趣味ってコッチ系だからね」

「ほうほう趣味と実益ってヤツですな」

「そうだよ〜あつ、そだ、どう、お兄ちゃん可愛い？」

クルッと回ってアピールする未央。

「おお、可愛いぞ〜」

「ありがと！ お兄ちゃん！〜！」

この辺、マサマサはお世辞でもなく普通に可愛いって言うんだよね〜。

まっ女の子としては嬉しいけどね。

未央も嬉しそうだし。

っていうか未央、さっきからマサマサのコトめっちゃ、お兄ちゃんって言うてるな〜。

確かに、そういう、お店だけど。

私が、そう言うど。

「いや〜、なんていうか、私ってマサマサみたいな、お兄ちゃんが欲しかったんだよね〜、何気に頼りになるし？」

「よせやい、照れら〜」

未央の言葉に満更でもない感じのマサマサ、う〜ん、まっ確かにマサマサ頼りになるっちゃ、なるよね。

でも……。

「ゲームが原因で家出したクセに〜」

ちよつとイジワルしてみる。

「グツサリ刺しやがんなチクソウ……」

「アハハ、ごめん、ごめん、ついね〜」

うらみがましく言うマサマサに手を合わせて謝る。

「って、何時までもココに突っ立ると邪魔だよね、とりあえず席につこっか？」

気付いたら立ったままで結構、話しこんでたし。

未央もバイト中だしね。

「あ〜そうだったね〜、それじゃ、ゆっくりしてってね、お兄ちゃん、里沙もね〜？」

「おうっ!!」

「未央もバイト頑張れ」

バイトに戻る未央にメールを送り、空いてる席へと座る。

「マサマサ、ここは私の、おごりだからね」

「ン、いいんか？ マサさん結構稼いでるぜ」

「それは知ってるけどね、たまには、おごらせなって、じゃないとお礼にならないじゃん」

それに、いつも……ってワケじゃないけど、結構な頻度で、マサマサの手作り、お菓子とか貰ってるし、おごっても貰ってるしね。

「礼ねえ、さっきも言ったけど」

「こらっ、あんまり拒否するのも失礼だぞ、遠慮せずにたのみなさい」

全くマサマサは。

「ふむ、ンじゃそういつコトなら遠慮なく……」

そうそう、それでいいんだよ。

メニューを開き眺めるマサマサ、私は・・・いつも通りにパフエでいっか。

あつ、言ってなかったけど私、何回かこのお店に来てるから、未央もいるし。

「よしや！ 決まったー！」

どっかの誰かに説明してる間にマサマサは何をたのむか決めたいだね。

それじゃ注文しないとね。

未央は・・・あ~~~~今は別の客の対応してるか。

仕方ない・・・つても、ちょっとアレだけど未央以外の店員の娘に声を掛ける。

「はい、ご注文は？」

「私はパフエを・・・マサマサは？」

「うむ・・・メニューの端っこから端っこまで」

「待てい！！ 遠慮するなって言ったけど、それはしなさを過ぎー！」

「冗談ですがな」

「いくらお約束だからって心臓に悪過ぎる」

マサマサだったらホントにしそつってトコが特に。

「クスクス・・・」

つて・・・あつ。

「ほら、マサマサのせいで笑われちゃったじゃん」

「ノンノン、笑わせたのだよ里沙君、この違いは大きいぜえ？」

ンな得意気な顔で言わてもな。

「あつ・・・えつとスイマセン！！ つい」

「よかよか気にしなさんな・・・つと、あんまし引き止めても仕事に差し支えるわなあ、俺は・・・コーヒーで」

「あつハイ、パフェとコーヒーですね」

「えっ、マサマサそれだけ？」

もっとたのんでもいいのに・・・さっきのは行き過ぎだけ。

「漢は黙ってブラックのみを飲んでればいいんだって」

なんじゃそりゃ？

「プククツ・・・」

ほら、また笑われてるし、まっマサマサから言わせれば笑わせてるんだろうけど。

「まっぶつちゃければさほど食いたいのがなかったただけなんだけどな〜」

「おいっ！！　そういうコトは店員さんがいない時に言えっば」

「こりゃ失敬」

反省してないね、絶対。

「アハハハ！！」

まっ店員の娘も笑ってるし大丈夫か。

「ンツン・・・えっと、それじゃあ、ゆっくりしてたってね、お兄ちゃん、お姉ちゃん！！」

この辺は、このお店のテンプレね、女の子の場合は、お姉ちゃんになるんだってさ。

「初対面で、お兄ちゃんとはコレいかに？」

「だから、こつこつ仕様だつっのっ！！」

「ププッ・・・」

マサマサのアレな言葉にやっぱり吹き出しながら、注文を伝えに行く店員の娘。

去り際に小声で。

「面白い彼氏さんですね？ いっな」

って言われた。

彼氏じゃないんだけどね。

・  
・  
・  
・

「おまたせしました、パフェとコーヒーになります」

「どうも」

「ありがとう」

結構早く出てきたかな？

パフェをつつきながら。

「マサマサ、ホントに今日は帰らないの？」

と聞いてみる、私の質問にマサマサは。

「帰らんよ、大丈夫、ちゃんと連絡はしたからな」

携帯を私に見せてきた、どれどれ内容は……。

『明日には帰る、だが今日は帰らん!!』

だって……ってどうか……。

「コレって家出じゃなくない？」

ちゃんと連絡までして、ちなみに宛先は美柑ちゃん、結城の妹ね？

「いや〜心配させたら悪いかなあ〜と？」

「だったら家出しなきゃよかったんじゃない」

「フツ……鞘から抜いた刀を戻すなんてマネは出来ねえのよ」

いやいやマサマサ。

「そんな微妙にカッコつけられても……ね〜？」

内容が内部だし。

「漢はカッコをつけたがる生き物なのです」



「寧ろ面白いけど。」

「それはそれでよしっ！ー！」

いいんだ。

まっ、それもマサマサっばいか。

「そう言えばマサマサってさ、付き合った子はいないって言ったじゃん、アレってマジなの？」

マサマサは私から見たら結構、いい男だし彼氏にしたら絶対面白いし、大事にしてくれそうだから、モテそうな気がするんだけど。

実際、モテてるっばいし。

ララちいとか唯にゃんとかヤミヤミとか。

「マジだぞ、んなコト嘘ついても仕方ねえーべ？」

そりゃそうだけど。

「中学の時とかどうだったの？ 前にちょっと話してもらったけど」

あの話は、ドラマとか映画とか漫画とかの類並にアレだったけど。

「中学ねえ、それこそ、ありえねえって、マジに煙たがられてたからよ、ほら、いつぞやのエセ爽やかみたいいな目で見られてたし、同年のダチ、本気でいなかったからな」

ああ〜佐清ねえ〜。

あんな目で見られたっていうコトか〜。

「う〜ん、あんまり想像つかないな〜」

「スゲー仏頂面だったらしいからな」

仏頂面・・・ねえ？ マサマサって結構表情豊かな方だと思っけど。

「やっぱり想像つかないや」

「まっ、若かったてことさね」

「いや、まだウチら十代じゃん」

「ですよね〜」

そう言ってカラカラと笑うマサマサ、う〜ん、このマサマサが仏頂面で煙たがられてた・・・ね〜？

そりゃ一部の先生とか女子にはアレだけど。

でも男子にはかなり人気あるんだよな〜マサマサ。

コレはクラスの男子に限らずだ。

私達を除いたら寧ろ男の方にモテてる気がする、バラ的な意味じゃないけど。

ってアレ？ 『私』達？

何故？ ココはララちい達って言うポイントなの？

むむ……どうも里沙さんおかしいぞ。

そりゃマサマサのコトは好きか嫌いかって言われたら好きだけど。

チラツと顔を上げてマサマサを見ている。

ン？ マサマサどうしたんだろ？ なんかジーっと入口のトコ見て。

気になったから私も入口の方を見ている。

そこにはフードをした男の客。

このお店は特徴的だから、男の客の方が多い。

寧ろ、女の子で入ってくるのは私を始め、ココでバイトしてる子の友達とかぐらい。

だから男の客が入って来ても全然珍しくない、と、というか普通なんだけど……。

「マサマサどうしたのさ？」

結局、なんでマサマサが、あの人を見てるかがわからなかったから、聞いてみた。

「いやな……なぐんか……アイツやらかしそうな気が……」

やらかす？ 何を？

マサマサの言葉にクビを傾げる。

「おかえりなさい、お兄ちゃん!!」

その間に、未央が、その男にココでの、お決まりのセリフで対応する。

すると、その男。

「ウへへ……可愛いなぐん流石はボクと妹だよ」

背筋がゾツとする声。

未央もそう感じたのか、小さく悲鳴を漏らすと後退りする。

「どうして、お兄ちゃんから逃げるんだい？ ほら、お家に帰ろっとなっ？」

男はニヤツと気持ちの悪い笑いをしながらポケットに手を入れる、そこから取り出したのはナイフ!?

「「「キヤーー!!」「」」

「「「うわっアイツなんだ!？」

悲鳴が上がる。

コイツ、ヤバイやつだったんだ、だからマサマサはあんなコト言  
って……。

って、そんなコト考えてる場合じゃない!!

未央がつ!?

「マサマサ!!」

私がマサマサに声をかけた時、もうマサマサは動いてた。

いつの間に移動したのか、未央と男の間に立つと。

「テメエ、何してんだ、アツ？」

ギロリと鋭く男を睨みつける。

男はそんなマサマサに気をされながらも。

「邪魔するなツ!! 刺すぞ!!」

ナイフをマサマサに向けて脅す、そんな脅しに屈するようなマサマサじゃない。

「やってミソラシド？」

めっちゃ余裕な顔のマサマサ。

寧ろ挑発してるし。

その言葉に、ナイフ男がキレたのか。

「どけー！ー！！ ミオちゃんはボク妹なんだ、ボクの家連れて行くんだー！！」

ナイフを構えてマサマサに突っ込んでいく。

『ドゥッ！ー！！』

そんな音がお店に響く。

続いて聞こえたのは。

「ホントに刺しに来やがったよコイツ・・・ったく、最近の若いモンはコレだから、つくかよ・・・アニキを語るなら妹に刃物向けてんじゃねえ、このクソガキがー！ー！！」

『ゴジャッ！ー！！』

マサマサの怒鳴り声と何かが潰れたような鈍い音。

マサマサが、ナイフ男の頭を床にたたき付けたみたい……。

。ビクンビクンと痙攣してるから、死んではいないと思うけど……。

まあこんなヤツに同情するツモりは全然ないけど。

「大丈夫か未央？」

それを尻目に、未央に声をかけるマサマサ。

「ふえ〜ん、お兄ちゃん怖かった〜」

未央、よっぱど怖かったのか少し幼児退行してるし。

あつ抱き着こうとしてる。

『ガッ!』

オデコ押さえられて阻止されてる。

なんか未央バタバタしてる、面白い……けど。

「そこは素直に抱き着かれて上げてても、いいんじゃない？」

近付いて、その声をかける。

「いや、なんかつい？」

それもマサマサっばいけど。

「うう~~~~お兄ちゃん酷い・・・」

未央も未央で、何時までマサマサをお兄ちゃん扱いしてるんだろ？

まっとにかく。

「未央が無事でよかった」

「ありがと、里沙」

うん、ホント無事でよかった、マサマサに感謝。

私達が話してる間に、他の店員の娘が警察に通報をしてくれて。

ナイフ男は警察へと連行。

「まあ、た、オマエ絡みかマサ、ったく人が折角競馬に打ち込んでたつのに」



「仕事しろよヤマさん」

「何言つてやがる、俺は競馬場という事件現場で当たりという名の犯人を捜査してただけだ」

「本格的にダメなオッサンだな、オイ」

「うるせー、クソガキ、おら連れてけ〜、さあ〜て、次は2-4か？ いや、あえて大穴、1-5を・・・」

どうやらマサマサあの刑事と知り合いらしい。

「刑事と知り合いって顔広いねマサマサ」

「それなりにな？」

わかりやすそうできて意外と謎が多いよねマサマサって。

その後は、マサマサは店員の娘達や、客に。

「体を張って妹を護る、その姿、まさに兄の鏡！」

「アニキと呼ばせて下さい！」

「お兄ちゃん」

「ちょっとマサマサは私のお兄ちゃんだけど!？」

「いいじゃないですか、少しくらい、ね〜お兄さん？」

つてな感じに大人気。

つていつか未央・・・私のお兄ちゃんって・・・まっいつか。

「ホント話題にコトかかないよねマサマサって」

「バラエティー豊かな人生だからね!!」

だから一緒にいて面白いんだけど。

・  
・  
・  
・

ン、もうちょい？ それから後はどうなったかって？ はいはい、  
じゃ続きね。

あんなコトがあつたし、未央の両親、今日はいないらしいから、  
私の家に未央を泊めるコトにした。

まっ私の家も両方とも今日は泊まりって言ってたんだけど。

「ほうほう、ココが里沙ん家か」

「そっだよ〜お兄ちゃん」

「未央、何時までマサマサをお兄ちゃんって呼ぶ気？」

「少なくとも今日一杯はマサマサは私のお兄ちゃんです」

「はぁ・・・本格的にマサマサに懐いたのかな？」

「さっきから、スキあればマサマサに抱き着こうとしてるし、全部阻止されてるけど。」

「って、今思えば・・・未央はまあいいとして、マサマサを泊めるとして、しかも両親がいないのに。」

「結構大胆なコトしてるな〜。」

「まっ面倒を見るって言ったのは私だし。」

「マサマサだからね〜、たとえ未央がいなかったとしても、手を出してくるなんてないだろうけど・・・残念だけどね？」

「ん？ 『残念』？ また？」

「ふ〜む・・・コレは・・・いよいよ認めるしかない？」

家に入って晩ごはんを料理をしているマサマサを見て、お客さんにさせるコトじゃないかな〜と思いつながらも。

ライバルは多い・・・しかも可愛い子揃いで手強い子ばかり。

「フフン」

「どうしたの里沙？」

「本格的に参戦しちゃおっかなびっくりね？」

「えっ？ 何に？」

「マサマサ争奪戦に・・・ねっ？」

「うそ〜〜ん！！ 里沙まで!？」

驚いてるね未央。

まっそりゃそっか。

「う〜ん、やっぱりマサマサ倍率高いよ」

「アレお兄ちゃんじゃなかったの？」

「『今』はいいの」

なんか意味深だけど・・・まさか未央まで・・・とか？

うん．．．こりゃ苦勞しそうだね、マサマサめっちゃ鈍いし。

でもマサマサの隣の座は里沙さんのモノだからね。

覚悟したまえマサマサ！！

そう決意した、ある一日だった。

第五十九話っぽい感じ！（後書き）

後書き

いや〜〜、とうとう里沙さんにフラグが・・・。

だって、良いキャラしてるんだもん、ひそかに未央さんも怪しげ・  
・・・。

あっ石は・・・石は〜〜〜〜。

出来れば感そ・・・石は〜〜〜〜。

息抜きっぽい感じ！（前書き）

前書き

完全に遊びです。

いや、ある意味、何時もそんな感じですが・・・。

例によってセリフと擬音のみ。

今回は特に注意し、頭痛薬、胃薬、まんまるドロップ、そして強い心を持ってどうぞ。

息抜きっぱい感じ！

「はい、どうも、『来る世界間違えてね？』 他、色々の主人公、鬼島 政成です」

「ねえマサ？ 他、色々って何？」

「色々は色々だ、まあ深くは気にすんなララ」

「うん、わかった！！」

「うむうむ、実に素直さんでよろしい、さて今回、何時もと若干違う感じではあるが、それには理由があるんだわ」

「理由って何？」

「うむ・・・なんと俺、鬼島 政成が誕生してから大体一年が経過したのだよ！！」

「アレ？ マサって16歳じゃないの？」

「いや、そういう意味じゃねえから、確かに16及び、場所によっては17だけんど」

「場所？」

「まあ色々あるんだっの、ってワケで今回は特別に、その各場所からゲスト来てる」



「ゲスト？ マサのお友達？」

「おつよー！！ 面白いヤツらばっかだぜい」

「ホント？ ホント！？ 私もお友達になれるかなあ？」

「慣れるともさ、じゃあまずは、『来る世界間違え・・・いやそうでも・・・いややっぱ間違えだわ！』 から！ 俺のマスターことツツコミ師！ マジカル、凜だー！！」

「だから胡散臭い名前で呼ぶなアアア！ それに私は魔術師よー！！」

『ドン、ドン、ドンー！！』

『ガキン、ガキン、ガキンー！！』

「はい、登場からナイスツツコミー！」

「わあ！ 指から何か出たよ！？ ねえねえ今の何？ 今の何？」

「今のは霊〇という」

「ガンドよー！！」

「ガンド？」

「はい凜先生ララに説明してあげてくんな」

「ララ？ この子のこと？」

「うん！ 私がララだよ！」

「ふっ・・・ふくん・・・何、あの胸・・・っていうかスタイル、反則じゃない？ クツ・・・なんだか女として自信が砕けそう」

「ふえ？ どうしたの？」

「なっなんでもないわ、うん」

「ヒザがめっさ笑ってるが？ 生まれたての小鹿もかくやと言わんばかりにガクガクなってるぞ？」

「っさいわよ！！ 色々あるのよ！！」

「相変わらずカルシウムが足りてねえーな凜君は・・・って、そういや、キミら自己紹介してねえやん、ほれ、お互い自己紹介」

「うん！ えっと、私はララ・サタリン・デビルークだよ？」

「ちなみにララ君、宇宙からお越しです」

「はい！？ 宇宙！！ あっあの話ってホントだったの！！」

「うん、マジじゃ」

「そうだよ、デビルーク星っていう星から来たんだ」

「なっなんていうか・・・アンタ、回りからして無茶苦茶だったワ

「ケね？」

「言われてみりゃ、そうやも知らんが、オマエも負けてねえだる魔術師のクセに……」

「だからバグのアンタにつ！！ やめましよう不毛だし……ンッ  
ン、私は遠坂 凜よ、ヨロシクねララさん？」

『ニツコリ』

「だから、そのキャラ、キツイつうに」

「黙れ！！」

『ドン、ドン、ドン！！』

『ガキン、ガキン、ガキン！！』

「だから効かねえーっての、っと、このままじゃ全然先に進まん、  
ゲストはまだいるんだから」

「そつなの？」

「何？ まだ誰がいるの？」

「うむ、各場所、一人づつな、ってなワケで次は『やる職、間違えてね？』から、ちびっ子、魔法使いコト、魔法幼女エヴァっ子だ！

「！」

「幼女じゃないわアアア！！　っていつか私はオマエより遙かに長く生きてると言ってるだろオオオ！！」

「わかってる、わかってるぞ、エヴァ、600歳ぐらいだったよな、よしよし」

『ナデナデ』

「そのほほえましいのを見る目は止めるー！　でも撫でるのは止めるなー！！」

「マサ！　マサ！！　私も私もー！」

「はいよ」

『ナデナデ』

「で、マサ・・・この子は？　600歳とか言ってたけど？」

「む・・・マサナリ、なんだ、この貧相な胸のヤツは」

「貧相！？　アンタみたいな子供が言うー！！」

「貧相は貧相だろ」

「グギギ・・・ちよつとマサどきなさい！　このお子様に社会の厳しさを教育しないといけないからっー！！」

「フン・・・お子様だと？ 高々、20年も生きてないような小娘が、闇の福音と言われた私に教育とは・・・氷漬けにしてくれようか？」

「ちよつとケンカしちゃダメだよー」

『プルンッ！！』

「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」

「クツ・・・」

「むう・・・」

『ジーーーー！！』

「えっ？ なっなんで、私を睨むの？」

『プルン、プルン！！』

「フツ・・・ララよ察してやれ」

「マサ？ 何を？」

「気付いたのさ、所詮、自分達が砂場の山にしかすぎないって」  
「・・・ププッ・・・」

『プチッ!!』

「5番、6番、7番も・・・ね？ セット!!』

『スチャ!!』

「リク・ラク・ラ・ラック・ライラック・・・氷の連弾・・・12  
8矢・・・」

『パキパキパキ・・・』

「死にさせー!!』」

「喰らうがいいわー!!』」

『ズギアーン！ スドン！ スガガガガッ!!』

「わあー!!』 マサー!!』」

・  
・  
・  
・

「で、オマエら自己紹介は終わったんか？」

「なんでアレだけの攻撃受けて無傷なのよアンタは……」

「わかってたことだが……コレだからバグキャラは……」

「そういえば、マサってパパの全力攻撃受けても大丈夫だったもんね、ケガはしなかったけど」

「うむ……アレは中々にやばかった」

「パパのアレ、星くらい普通に粉々にしちゃう攻撃だし……むう……やっぱりパパやり過ぎだよ!!」

「無事だったから、いいんだよ、つかキツかったことあキツかったが、あんぐれえじゃ負けてはやらんしな」

「でもでも」

「はいはい、あの喧嘩は俺が納得したしケリもキツチリついたんだから、それで、しまい」

「うっうん、わかった」

「アイツの言ってたことって話半分どころか……」

「ああ、丸々、本気らしいな・・・星を粉々とは・・・スケールが  
違い過ぎるわ・・・」

「つとイカンイカン、話がそれたな、で次回紹介は？」

「したよー!!」

「ええ、まあ一応ね・・・まさか真祖だとは思わなかったけど・・・

「フン、まあキサマがいた世界とでは魔法の概念からして違うよう  
だがな」

「そうね、私達の世界なんで魔法なんて5つしかないワケだし」

「はいはい、難しい話はこの辺で終われ〜マサさんケムリ出ちゃう  
からね、つか、あんまし詳しくねえーんだから、掘り下げられたら、  
色んな意味で困るから、オマエらも、わかるだろ？ その辺？」

「そうね・・・」

「そうだな、にしても・・・マサナリ、まさかホントに宇宙人と居  
るとは思わなかったぞ」

「私のこと？ でも、私以外にも宇宙から来た子、多いよ？」



「だな、結構ダチにいるし」

「無茶苦茶世界め」

「それは私がもう言ったわよ、にしても、この中でノーマルに、まあ魔術師だけど、に人間なのって私だけ？」

「いや、一応は俺もカテゴライズ的にはだな」

「少なくともノーマルではないだろ、断じて」

「うん、マサはちょっと普通じゃないもんね」

「ちょっと、じゃすまないでしょ、コイツは」

「自覚はあるが、やっぱ人に言われつとモヤつとすんなオイ!!  
まあいいさね、よくねえーけど、そんなら次は、普通と言えばコイツだろ!!」

『来る時代間違え・・・でも・・・いやどうだろう?』 から、  
ハムの人、こと、普通子だ!!」

「ハムでもなければ、普通子でもないからツ!! 公孫贖だつて言  
ってるだろマサ!!」

「ハツハツハ、悪い、ついな？」

「つたく・・・」

「公孫贇？ 公孫贇って・・・確か・・・」

「ああ、三国志に出てくる、白馬長史と同じ名前だな」

「おっ？ 久々に呼ばれたな、そういう風に」

「白蓮、何、その白馬なんちゃらって？」

「一応、二つ名だよ、ほらマサだって鬼人って言われるだろ？」

「言い始めたの白蓮じゃん！！ つか、鬼人はやめれつつの！！」

「いいじゃないか、もう大分広まったんだし」

「チクソウ・・・もう諦めるしかねえーのか・・・」

「マサ、えっと・・・」

「あつと、悪い悪い、つい二つ名が着いてしまったという残念な現実にかツクリしてたわい、ンッン、はい、コチラ、公孫贇さん、ツッコミ担当」

「やっぱりツッコミかよ・・・マサのせいだろ・・・まあいいけどさ、公孫贇だ、よろしくな」

「私はララだよ、よろしくね!!」

「うむうむ、ほれ凜とエヴァも」

「えっええ・・・公孫贛・・・ねえ・・・」

「男だったはずだが・・・それにしても、なんだ・・・見事なまでに・・・」

「なんだよ？ 人のことジロジロ見て？」

「不幸なオーラが漂ってるな」

「しかも普通のオーラまで一緒になって」

「おーら、つてのが何かわからないけど、大きなお世話だ!!」

「いや、流石にココまで見事なまでに不幸なオーラと普通のオーラが同居してる人物を見るのは長い人生でも初めてだったからな」

「ええ、ホントに見事だわ・・・しかも仮に亡くなっても一行とかで済まされそうな扱いを受けてそう・・・」

「一行って言うなアアア!!」

「まあまあ、落ち着け白蓮さんや、凜もエヴァも・・・まあエヴァはともかく、ぶっちゃけ俺もそう思ったし、けど凜は言い過ぎだべさ？ 一行ってオマエ・・・一行って、切な過ぎんだろ」

「そつそつね・・・うん、我ながら、凄く言い過ぎた気がするわ・・・  
なんか、ホント、ごめんなさい」

「いいよ・・・もう・・・グスン」

「ああ〜よしよし、白蓮」

『ナデナデ』

・  
・  
・  
・

「すまん、落ち着いた」

「うむ、なら、よし!」

「ねえねえマサ、さっきから気になってただけど・・・パイ・・・

「

「おっとストップ!」

「ふえ?」

「ララが気になってたんは、俺が、パイ・・・じゃなくて、公孫賛  
んことを白蓮って言ってたことだろ?」

「うっうん」

「そうね、私も気になったわ」

「ああ、説明しろ」

「おう！！ ってワケで白蓮先生お願いしま〜す」

「やっぱ私かよ・・・まあいいよ、えつと白蓮ってのは、私の真名のこと、真名ってのは、自分が認めた相手にしか許さない、神聖な名前のことだ、もし仮に、許しを得てないのに呼んだ場合は、クビを斬られても文句は言えないってくらいにな？」

「ってワケだ、わかったかな？」

「何、偉そうしてんだか、迂闊に呼んでクビ落とされかけたクセに」

「いや、アレは・・・迂闊だった、今後も気をつけねば・・・」

「そうしろ、ふおろー？ だったっけ？ するのも大変だしな」

「そうなんだ〜、ってことは公孫贗は、マサと、とっても、仲良しってこと？」

「えっ？ いやっ、その、マサは、ほら、友人だし、良いヤツだし・・・えと・・・うう〜〜」

「むう~~~~ライバル？」

「クツ・・・半ば予測はしていたが・・・コイツもか・・・」

「ホントにコイツは・・・」

「何かね凜さん、その視線は？」

「別に・・・改めて、アンタが呪い級だと思っただけよ」

「なんじゃそらっ？」

「「「「はあ~~~~」」」」

「ってオイ、一斉にため息はくなや!!」

「まあいいわ、で、まだ居るワケ？」

「後、一人な？ ってワケで最後の一人は、『人選間違えてね？』から、もつと牛乳を飲んだらいいと思うよ？ な、リースさんでくす!!」

「何ですか、その説明は!! 飲んでるもん、毎日飲んでるもん、腕立て伏せもしてるもん!!」

「何かしら・・・あの子を見てたら・・・自分を見てるみた・・・」

「だいたい、私、あの人と、あの人より大きいですし！！ 確かに大きくはないですけど、この中では真ん中です！！」

『ピキッ』

「ねえ、ちょっと、あの人って私のことかしら？」

「フン・・・私をオマエ達と一緒にするな、成長の余地がない、オマエ達とは違う」

「あら・・・600歳を越える、お婆さんが、成長・・・ねえ？」

「えっ？ 600歳！？ 10歳くらいじゃないんですか！！」

「よし、その赤色と緑色、慈悲はないぞ？」

「むっイカン、また勃発した、落ち着け、その真・フラット3」

「平らじゃないわよ！！！！」

「少しはあるわっ！！！！」

「そうです！！ 断じて平らじゃありません！！！！」

「そうだな、平らじゃないな、平らに近いだけで、平らじゃないよな、うんうん」

「いやマサ、余計怒らせるだけだから」

「うん、マサやっぱり、私ももう少しおっぱい大きいのがいい？」

「いや、だから別にどっちゃでん・・・」

「はあああ！！ 何！？ それだけアレばもう充分でしょ！！」

「ちよっ凜さん？ まだ俺、喋って・・・」

「そっだ！！ さっきから思ってたが、なんだその体は！？ ふざけるのか！？ いくら宇宙人とは言え限度があるだろ限度がっ！！」

「いや、寧ろ、中学生なのに、もっと、ふざけた・・・」

「そうですよ！！ なるたけ見ないようにしてましたけど、何を食べたら、そうなるんです！！ 出来れば教えて下さい、私だけに、コッソリと！！」

「いやリース、自分だけってオマエ・・・」

「ううううなんか怖いよ～～～」



「持たざるモノの怨念ってヤツだな」

「ちょっと、その普通のヤツ！！ 持たざるモノって、どういう意味！！ ちょっと普通に胸があるからって！！」

「うっ・・・飛び火した！！」

「てんやわんやだなオイ・・・つか、俺スルーされまくって流石に凹むんだが、まっいいさ、そのウチ収まんだろ・・・火種は俺な気がすっけど」

・  
・  
・  
・

『この紋所が目に入らぬかッ！！ ここに、おわすは、さきの副・・・』

『プツンッ！！』

「ちょっと凜、おまつ、今、めっさいいところだったのに！！」

「うっさいわ！！ 火種起こした張本人のクセにアンタ何、のほほん時代劇見てんのよっ！！」

「いやさ、なんか長くなりそうだったし、つか、ちょっとモコン返してくんない？ 今、見せ場だから、ホント、マジ、いいところだか」

「フンー!!」

『パチン』

『ピキピキピキ・・・』

「ちよっエヴァアア!! オマエ、何してくれてんの!? 氷漬けじゃん、テレビ氷漬けじゃん!! リモコンどころの騒ぎじゃねえーだろ、コレ!!」

「えいつ!!」

『バキヤン!! パリン・・・』

「リースウウ!! 氷溶かせばなんとかなったかもしれないのに、粉々だろコレー!! 人のテレビ、何、粉碎してくれだボケーー!!」

「あっスイマセン、モンスターかと思って」

「嘘つけー!! オマエ絶対わかってやってんだろ? 異世界ウンヌンとか抜きにわかってただろ!!」

「まあ落ち着けてマサ、えっと今な箱みたいなの、が何かはわからないけど、ほったらかしにするオマエも悪いんだぞ」

「そうだよ、私達が大変だったのに」

「むっ・・・しゃーねえ、本来ならチームストンドライバーの刑だが、確かに俺にも悪いトコがあった気がするし、不問にしてやらあ」

「あっそ、別にどうでもいいけど、で、マサ、アンタ、わざわざ、私達を呼び出して、何する気だったわけ」

「そんなモノ決まってるだろ、私を伴侶として紹介」

「ダメー！！ マサは私と結婚」

「両方とも違うからな、まっアレだ、呼び出したんは・・・まあアレだ、うん・・・アレだよアレ」

「伴侶とか結婚とかは少し気になるけど、今は置いておいて・・・マサ、オマエ、まさか何も考えてなかったのか？」

『ビクッ！！』

「いや、何言ってるんの白蓮さん？ そんなワケないじゃん？ もうアレだから、俺の中では凄いイベントがギッチリだから、寧ろイベントだらけだから」

『ダラダラダラ・・・』

「凄い勢いで汗をかいてますね」

「ああ、もう、なんかネットリし過ぎて気持ち悪い程に汗をかいてるな」

「まさに脂汗ね」

「マサく？ 大丈夫？」

「えっ？ 何が？」

「汗が・・・」

「違うコレはさつき手を滑らせて料理用の油を被ってしまったただけだ、決して汗ではない、もうマサナリ、失敗、テヘッ」

「・・・気持ち悪っ！！！！」

「ゾンビ型のモンスターより数倍、ヒドイですね」

「そうかなあ？ ちょっと気持ち悪かったけど、私はそこまでじゃないと思うけど」

「いやさ、自分で正直キツツイと思ったし、でも何故か、やってまうんだなあコレがホントになんででしょうね？ いや不思議」

「まあマサだしね、で、マサごまかせたと思ったワケ？」

『ビクッ！！！』

「えっ？ 何が？ ごまかすって何を？」

「私達を集めて何をするツモリだったかよ」

「フツ・・・マサナリ、そう照れるなハッキリ言えばいいだろ、私の伴侶に」

「はいはい、また横道に逸れるから少し黙りなさい、まっ大方、何も考えてなかったんでしょうけど」

「そんなコトねえーって、マジ考えてたから!!」

「じゃ何するツモリだったんだ？」

「えっ？ いや、それは、オマエ・・・アレだ、ボシヨボシヨ・・・だ」

「マサ、声が小さくて聞こえないよ」

「いや、だからね、ボシヨボシヨを・・・」

「マサナリさん、まだ聞こえませんかよ」

「・・・カンケリ」

「」「」「」「」「」

「カンケリ？」

「うっうむ、こう、皆でワイワイ、カンケリをだね」

「アホかアアア!!」

「カンケリってなんだカンケリって!! 意味がわからんわっ!!」

「カンケリってアレだろ? マサが街の子供に教えてたアレだろ? それをわざわざココで!？」

「昔エリオットや城の子達とやったなあ、で、今からするんですか? 私、強いですよ?」

「「「以外とノリ気!!」」」

「ねえねえ、カンケリって何?」

「あっカンケリってというのはですね・・・」

「よしよし、なんか思いの他、リースが食いついてくれたな、このまま一気にイけるか?」

「えっ、何? 本気でやる流れになってるの!？」

「オイ、普通の、止めてこい」

「普通って言うな!!」

「・・・っという遊びなんです」

「うん、わかった！！ マサー、カンケリやる〜！ 私が勝つたら、お願いごとを聞いてほしい！！」

「ん？ 例によつてか？ おけ、いいぜい」

『ギラリッ！！』

「そついうコトなら話は別ね」

「ああ、面白い、この勝負は私のモノだ」

「急に目つき変わったよ、この二人……でも……私が勝つたら……いやいや、流石にそれは……でも……」

・  
・  
・  
・

「はい、つうワケで勝負はポイント制で、行われます、一位がビリンヤツに命令出来る権利が与えられます、あんまり無茶なのはダメな？」

「うん！！ わかったー！！」

「順位の操作も必要になってくるわね」

「フ……どちらにせよ一位は私だが」

「ぼいんと、って何だ？」

「点数制ってコトですよ」

「ンッン、まあとにかく、勝負開始ってコトで、じゃんけん〜〜」

「」「」「ほいっ！」「」「」

・  
・  
・  
・

「バカ・・・な・・・」

「はい、あそこで膝をついてるバカは置いておいて、結果ね、面倒だから一位とビリだけ言うわ、一位は私、ビリはマサね」

「クツ・・・まさか、この私が二位に甘んじるとは・・・」

「私は三位か・・・ふつ・・・いやいや、真ん中だな、うん、真ん中！！」

「う〜ん久々だったからカンが鈍っちゃいましたね」

「ぶう〜一番になれなかった、でもビリじゃなくてよかったよ〜」

「結局、殆ど順位発表しちゃったわね・・・まあいいわ、さっマサ」



「まあ凜さん、ステキな笑顔ですこと、何か？」

「楽しい、楽しい撮影タイムよ？」

「やっぱりかいー！ー！ つかなんでや」

「うるさい、つべこべ言わずに、とっとと脱げ！ー！」

「チイクシヨooooooooo!!!」

「フツ……あの魔術師、遠坂 凜といったか……わかっているではないか」

「わあーい!! マサ、早く早く~~~~」

「えっと……撮影して何ですか今から何をするんですか？」

「わかんないよ、まっもう少し様子を見てればわかるだろ？」

・  
・  
・  
・

『パシャ、パシャ、パシャ、パシャ、パシャ、パシャ、パシャ、パシ  
シャ、パシヤ、パシヤ、パシヤ、パシヤ、パシヤ、パシヤ、パシヤ、パシヤ、  
パシヤ、パシヤ、パシヤ、パシヤ、パシヤ、パシヤ、パシヤ、パシヤ、パシ  
ヤ、パシヤ、パシヤ！ー!!』

「チクソウ・・・すっげえーパシヤられた・・・」

「わっ、凄い、このカメラで撮ったの凄く鮮明」

「頑張つて改造したんだよ」

「ほう、やるな・・・どね、コッチと」

「すっ凄かった・・・マサつてあんなに凄い体してたんだ・・・」

「ビックリしました、ホントに凄かったです・・・」

「例によって向こうは異常な盛り上がりだなチクソウ・・・まあいいさね、よくねえーけど、とりあえず、アイツらは置いておいて、そろそろお開きだから、しめますわ」

「ンッン・・・ええ、コレからも、ンな感じでコチャコチャやつてくけど、ヨロシクお願いしま〜す！！ あっ別に現実逃避じゃねえーから、赤信号は渡っちゃダメだから、赤信号は渡っちゃダメ！！マサさんとの約束だぞ？ じゃ、そういうコトで！！」

.....

「ちょーーと待ったーー!! バカナリ大事なスーパーヒーローを忘れてるよ!!」

そう、今やアノ世のスーパーアイドル、よう・・・って誰もいねエエエ!! チェクショーーー!!」

息抜きっぽい感じ！（後書き）

後書き

はい、遊びの回でした、ある意味、記念的なモノですが。

つつても、まだ一年ではないんですが、だいたい、それくらいです。

この辺りのフワツとした感じも、また、この話の特徴です。

って、どんな特徴？

こんなアレな話とアレな書いてる人ですがマサ共々、コレからも是非ヨロシクお願いします。

ああ〜アツチもコツチも進まない、書いてる人でした。

次回は本編・・・かな？

第六十話っぱい感じ！（前書き）

前書き

ボツネタにしようか迷った話。

かなり季節外れ。

ですが頑張りましたんで、何時ものようにクスリを持ってどうぞ。

## 第六十話っぽい感じ！

リコ 視点

今日、12月25日、まあクリスマスってヤツだ。

そのクリスマスの日、私達は沙姫先輩の別荘で開かれるクリスマスパーティーに招かれて来ている。

あつ、私が、天条院先輩のコトを沙姫先輩と名前で呼ぶようになったのは、沙姫先輩がそう呼ぶように言ったからだ。

最初は私が元は男でリトだったから、かなり、警戒されてたけど、完全に女になっちまって、それで男だった時と・・・まあ色々と勝手が違っていて、戸惑ってた時に相談に乗ってくれた。

最初に保護？ された時から、そうだったけど、やっぱり面倒見がいいんだよな、沙姫先輩って。

今でも結構、お世話になってたりする、ララや春菜ちゃんにも助けてもらったり、相談に乗ってもらったりしてるけど。

それと、完全に女になっちゃったコトで気付いたコトがある。

それは、春菜ちゃんを見ても以前のようなドキドキがなくなったコトだ。

そりゃ今でも春菜ちゃんのコトは好きだけど、でも、それは、友達としてという意味だ。

そのコトはリトには話してある、そしてリトのコトはリトのコトで応援しようと決めたんだけど・・・まあ少しは進展してるのか？

元が自分だけに不安だ・・・激しく。

というか・・・人のコトだけじゃなくて自分のコトも気にしないとなあ。

ハア~~~~。

まさか自分が女になった上に分裂して、男を好きになるなんて・・・。

私の人生も大概だよな。

まあ・・・いいんだけどな。

っと、話が逸れた、えっと、どこまで・・・そうそう、沙姫先輩の別荘でやるクリスマスパーティーに招かれたってトコまでだったよな。

パーティー会場には、結構な数の人が来ている。

まっ沙姫先輩はハデ好きだからな。

私達のクラスのヤツらも来てるし。

それに美柑にナナ、モモ、ヤミもだ。

「リコ、はいコレ食べる？」

「サンキュー、美柑、ン、美味しいな」

美柑が取ってくれた料理を摘み口に運ぶ、結構美味しい、っていうか、この黒いのって・・・。

「キャビアという食べ物ですね」

やっぱり・・・。

初めて食べたな。

こういう高級な食材が使われてたりする辺り、沙姫先輩が開いたパーティーだなあと思う。



「あつ・・・春菜さんだ」

ン？ 美柑が指差した先を見ると確かに、その先には春菜ちゃん、リトと猿山に話し掛けてるな。

「リト、わかりやすいくらいに顔がニヤけてるな」

「だね、元・自分として、今、何考えてるとかわかったりする？」

うん・・・確かに元・自分なんだけど、大分、考えとかも変わってるしな。

でも、まあ多分。

「ちょっとだけパーティー仕様の春菜ちゃん・・・可愛い！！ってトコじゃないか？」

「ああ、確かにリトっぽい」

だろ？

「それにしても・・・マサナリ、遅いです」

キョロキョロと回りを見るヤミ。

「今日も働いてるんでしょマサさん？」

「ああ、なにもこんな日にまで働かなくてもいいと思うんだけどな」

そう、実はマサ、このパーティーに来ていなかったりする。

モチロン招かれてないなんてコトはない、それどころか、沙姫先輩は一番にマサを招待してたし。

やっぱりマサが好きなんだろうな・・・ハア、なんだかなあ。

ンン・・・で、さっきも言ったけど、マサは、今日も今日とて働きに出てる。

何の仕事かまでは聞いてないけど、補修関係って言っていた。

その仕事が片付いたら来るとは言ってたけど。

そういえばマサ、今朝は微妙に機嫌が良さそうだったよな。

前に聞いた時は、クリスマスはロクな思い出がないから好きじゃないとか言ってたのに・・・。

「早く来ないかなマサさん」

「マサナリにしては時間が掛かってますね、やはり私もマサナリに着いていけばよかったです」

「そう言っとなって、マサもそのうちに来るだろ」

そうは言ったものの、早く来ないかなあ、と思ってるのは一緒な

んだけど。

折角、少しだけだけど着飾ってるんだし。

『ザワツ』

「おーー!!」

「スゴイ!!」

「カワイー!!」

なっ・・・なんだ？

なんか凄い騒がしけど。

その騒ぎの中心を見てみたら、そこには・・・。

「おまたせー!!」

「久々だよな〜こつこついう恰好って」

「パーティーだもの、着飾らなきゃ」

かなりハデな恰好のララ、ナナ、モモ。

「うわぁ〜ララさんもナナさんもモモさんも、ハデ〜」

「ですね」

大分ハデだな、スゲエ目立ってるし。

まあ確かにあの三人ってパーティー慣れしてそうだし、そういう服は持つてると思ったけど。

あつララのはペケか？

って……ン？ あそこにいるのって……。

その場所に近付いて。

「沙姫先輩、どうしたんです？ っていうか、その恰好？」

「うっ……り、リコ……」

「いやな、奇をてらってサンタの恰好をしたいいんだが……見ての通り完全に出鼻をくじかれた」

あ……、なるほど、あつちなみに、沙姫先輩は凜先輩が言うようにサンタの恰好、凜先輩に、綾先輩はトナカイの恰好。

確かに、目立つ恰好だけ……。

「ネタに走り過ぎましたね」

うん綾先輩の言う通りだと思っ。

「うう〜こんなコトなら、普通にドレスにすればよかったですわ・・・あっ、ところでリコ、マサナリさんは？」

「それが・・・まだ来てないんですよ」

「そ・・・そうですの・・・」

ガツクリと肩を落とす、沙姫先輩。

「何も、こんな日に仕事をしなくても、いいと思っんですけどね」

「私もそれ言ったんですけどね、まあマサだし」

「だな、政成だしな」

それで色々と納得してしまっんだよなあ。

「まあもっ少ししたら来ると思います、マサは友達との約束を無下にするやつじゃないし」

「ですわよねっ！？ うん、リコもパーティーを楽しんでいくんですのよ？」

「ありがとうございます」

沙姫先輩達と別れ、再び美柑達と合流。

それとほぼ同時に。

「うーっす、うむ、間に合ったみてえだな？」

マサ到着。

って……。

「作業着姿のままかよ!？」

「直で来たからな、流石にマズイか？」

「別にマズイってワケじゃないと思うけど……」

「パーティーに参加する恰好ではないですね」

ヤミの言葉に頷く私と美柑。

「確かになあ、みんな普通に着飾ってるしなあ、仕方あるまい、ちよつと隅っこで体育座りしてくるわ」

「なんで体育座り!？」

「っていうか、そんなコトされたら、その一角だけホラー並に空気が重くなりそうだから。」

「ああ~~~~マサ~~~~来たんだね~~~~マサ~~~~ど~~~~う? このドレス可愛い? 可愛い?」

「おう！？ ララ、随分とまあハデなこつて、まっ可愛いけどな？」

「エへへ〜嬉しい〜」

ホント嬉しそうだなララ、っていうか、その積極性がちよつと羨ましい。

「バカナリ、オマエ来るの遅え〜つて」

「仕事に手は抜けねえーからな、ナナも着替えてんのな？」

「まっ一応な、結構ニガテなんだけどな、こつという恰好」

「カッチリしたのは肩凝るもんな〜」

「ああ、どうもな〜」

マサとナナ、喧嘩も多いけど、結構、性格が似てる部分があるせいか、かなり仲がいい。

私はそれに少し危機感を覚えてたりする。

まあ私だけじゃないんだけど。

「マサナリさん、お仕事ご苦労様です、お飲み物はどうですか？  
つて、今の新婚さんみたい・・・ポツ」

「わからん、オマエの発想のトビ具合は一切わからん・・・まっ飲みもんは飲むけどよ・・・ンッンッン・・・プハア〜仕事の後

のこの一杯、堪らん」

モモはララとは違った意味で積極的だ、っていうか、それすらも流すのがマサなんだけど。

モモから受け取った飲み物、ジュースかな？ を一気に飲み干すマサ、やっぱり喉が渴いてたのかな。

ってモモ。

「ニヤリ……」

もの凄く意味深な笑いしてるんだけど……。

「マサ君、こんばんは」

「やつほ〜マサマサ」

「おに……ンッン、マサマサ、楽しんでる？」

「ん〜ん〜ん〜？ おお、春菜、里沙、未央が楽しんでるも何も来たばっかだっつうに」

「マサ君も、今日くらいは」

「まあいいがな唯、好きでやってんだし」



確かにマサ、本気で、やりたくなかったら、やらなそうだしな。

つつか、さっきの沢田の、おに……って何だったんだ？

慌てて言い直してたけど。

どうも最近、初岡と沢田の特に初岡は、マサに対して、こうアピールってというか、そういうのが高くなってる気がする。

上手くは言えないけど……うん、前より距離が近くなったって  
いうか、近付こうとしてるっていうか……そんな感じ。

「なっ!?! まっマジかアアア!!」

少しだけ考え事に集中してたら突然マサが大声を上げた。

「どっどっしたんだよマサ?」

そんなマサにリトが声をかけてる、ホントにどっしたんだマサの  
ヤツ?

するとマサは、ふるふる、と微妙に指先を震わせて、ある場所・  
・というか人物を指差す、その先にいたのは、沙姫先輩達。

確かに目立つ恰好だけど……なんでマサは、そんな激しく反応  
して……。

「さっさ、さ、さ・・・サンタさんだアアア!!」

・  
・  
・  
・

「「「「はい?」「」「」」

少しの沈黙、そして一斉にクビを捻る私達。

そんな私達にお構いなく、スゲエ興奮した様子のマサは。

「リト、サンタさんだ!! サンタさんがいる、ヤバイ!! ど、ど、どどうしょ、さっサイン!! サイン貰ってくるっ!!」

「いやマサ、落ち着けて、アレは」

「落ち着いてる場合じゃねえだろ!! サンタさんだぞ! サンタさん!! さっサンタさーん!!」

何時ものように、ノリで動いてんのかと思いきや・・・あの様子・・・。

「本気・・・だったな?」

「うん、本気が目だった」

「マサ君・・・サンタさん、信じてるんだ・・・」

なんとも言えない気持ちが私達を包む、そんな中、モモが……。

「アツ……アハハ……、まさか、こうなるなんて、ちょっと予想外……」

そう呟いたのを聞き逃さなかった、モモを問い詰めると。

「えっと、さつき渡した飲み物に、少しクスリを……」

「ちよっ！！クスリってなんのクスリだよ！！」

「飲み物が、お酒に近い成分にかわってというクスリを、酔うと、どうなるのかな」と気になりまして……」

なっ……お酒!?

って待て……いくら、お酒っていったって、マサが簡単に酔っ払うようなヤツに思えないんだけど……。

いや、マサは未成年は酒をダメって言うヤツだから、飲まないんだけど。

「オイ、モモ……そのクスリって、まさか……『銀河の魔王』じゃ」

「うん、三つほど」

「三つ!? おまつ!? 三つって!!」

「それくらいじゃないと酔った姿は見れないかなあ〜って」

「だからって三つはやり過ぎだろ!!」

なっなんか、話を聞く限りじゃ、相当ヤバイ感じがするだけだ。

「ねっ、ねえ、ナナさん、その『銀河の魔王』って・・・」

「ああ〜〜、父上が銀河統一戦争で銀河を統一した時の記念で作った、銀河で一番強い酒・・・みたいなモン、あんまりにも強過ぎで、飲み干すのは、作らした父上ですらダメだったってくらいに」

なっ、マジかよっ!?

「さっき、マサ、一気飲みしてたぞ!!」

「強いんですね〜マサナリさんって・・・そこもステキ・・・ポッ」

「ちよっモモさん、マサ君はまだ未成年なのよ!! それなのにお酒なんて」

「いえ、あくまで、お酒のようなモノで、お酒じゃないですよ?」

そついつ問題じゃないだろ。

っていつか悪びれる様子が全然ないのかモモ。

「というコトはマサナリは今、かなり酔っ払ってる状態というコトでしょうか？」

「ええ〜〜マサ酔っ払っちゃったの？」

「さっきの様子、見てたら・・・有り得るような・・・でも酔っ払ってなくても、ああ、なった気もする」

確かに、マサだし。

で、そのマサは今。

「あつあの、おつ俺、さつサンタさんのファンです、マジ応援します、あの、さつさ、サインを！！」

何処から取り出したのかサイン色紙を持って沙姫先輩にサインをねだっているところだった。

流石に沙姫先輩も、どう反応していいか、かなり戸惑って・・・。

「うっ・・・か・・・可愛いですわ」

「可愛いですね」

「すっごく目がキラキラしてますね」

別の意味で戸惑ってるし……。

「沙姫様、ココは一つ、一芝居してあげては？ 流石に、違つとは……」

「言えませんわね……ンッ、サントさん」

「そう言えばサントさんって、女の人だったんたンスね？ おっ俺、ずっと爺ちゃんだと思つてたんス！！ やっぱホンモノは違つスね！！ 勉強になるツス！！」

まっマサ……狙つてやってるのか？ いやマジだなアレ。

そんなマサに一瞬だけ慌てたそぶりをみせる沙姫先輩達だったけど、直ぐさま。

「それは、私の、お爺様でしてよ、私は孫の……えつと……クロス……ええクロスですわ！！ サントさんは家族でプレゼントを配ってますのよ」

「そうなんスか、スゲエ！！ サントさんスゲエ！！ あっクロスさんって呼んだ方が」

「サントさんでいいですわよ？」

「うッス、あっおっ俺、まだ名前」

「マサナリさんですわよね？」

当然、マサの名前を知ってる沙姫先輩、マサが教える前に、マサの名前を言う、それが凄い衝撃だったのか。

「教えてないのに、俺の名前を！！ やっぱスゲエ！！ サンタさん、スゲエ！！」

すっげえ嬉しそう。

「かつ・・・可愛い過ぎますわ・・・」

うん、確かに・・・コレは可愛い・・・。

「あつ、えと、それでサインを・・・」

「ええ、サラサラっと、コレでいいかしら？」

沙姫先輩が書いたサインには。

『サンタクロースよりマサナリさんへ』

と書かれている。

そのサイン色紙を受け取ったマサは、やはり嬉しそうに。

「あつ・・・ありがとうございます！！ 宝物にします！！ ヤッホーイ！！」

とはしゃいでいた。

よっぽど嬉しいんだな。

「それでは私は今からプレゼントを届けに向かわないといけませんので、では、みなさん、メリークリスマスですわ〜」

最後に、そう言い残し、去っていくサンタの沙姫先輩に、トナカイの凜先輩に綾先輩。

多分着替えに行くんだろうなあ。

「頑張ってください！！ マジ応援してますんで、ありがとうサンタさー！ーん！！」

それに手を振って見送るマサ。

そして沙姫先輩達が去った後、私達のところに戻ってきたマサは。

「見る！！ いいだろ〜〜サンタさんからサインもらったんだぜ〜〜スゲエだろ？ なっ？ スゲエだろ？」

そう言いながら満面の笑顔でサイン色紙を見せびらかし始める。

この時、俺達の回りにいる人達、特にマサと仲がいいヤツは、こう思っただろうなあ。

(( ( (可愛い・・・) ) ))



と、特に私を含め女性陣は。

「やっぱり酔っ払ってるっぽいな〜アレ」

「っていつか、真相伝えたらどうなるんだろっな？」

猿山……。

「止めるよ、オマエ、ボッコボコにされるぞ？ マサにじゃなくて  
ララ達に」

「うっ……それはそれで……いや流石にしねえーって」

リトの言うように多分、私も参加するだろうな。

まっ流石に言わないみたいだけど。

他の人達も言わないようにしてくれてるみたいだし、マサの夢？  
は護れそうかな？

そう思ったのもつかの間。

「フッ……鬼島」

「あん？ オマエ……誰？」

マサに声をかけてきた男……ってアイツ弄光？

マサは覚えてないみたいだけど。

「弄光だ！！ オマエと野球で勝負したりしただろっ！！」

後、盗撮の犯人。

私がまだリトだった時に殴られたけ？ あの時、マサが本気で怒ったの始めて見たんだよな。

「はぁ・・・で、何？ 羨ましいのか？ サンタさんのサインが羨ましいかね！！ ワツハツハツハ！！」

覚えてはいないけど、やっぱりキライらしいなマサ。

「フツ・・・いいか、鬼島・・・サンタがいると思ってるのか？ オマエ、幾つだよ、サンタなんていないんだぜ？」

あっ・・・あのヤロー・・・言っちまいやがった！！

「はぁ！？ テメエ何、言ってるのサンタさんをバカにしてんのか？ 今もプレゼント配りを頑張ってるのに、謝れサンタさんに！！」

「だ〜から、それはサンタじゃなくて親がプレゼントを置いてん

だよ」

「違うねっ！！ サンタさんだね！！ 俺は一回も貰ったコトないけどサンタさんは、いるね！！ っていうか、さっきいたね！！ あっオマエみてえーに、腐ったヤツにさサンタさんは見えねえーのか？ 残念だなあサンタさんが見えなくて」

「オイオイアレは・・・」

げっ、さっきのサンタが沙姫先輩だとばらす気だ！！

殴ってでも止めるべきか？

そう考えてた一瞬の間にヤミが弄光の背後に回り、髪を刃物に変えて。

『チヤキッ』

「・・・いいですか二度は言いません、サンタさんはいます」

「はっはい・・・サンタさんはいます！！」

ヤミ、ナイス！！

「フツ・・・要約わかったかね、全くサンタさんがいないとか、なんちゅう無礼なヤツだ、もし今日、俺がサンタさんに会ってなかったら、オマエ、血ダルマにしてんぞサンタさんに感謝しろ！！」

寧ろマサじゃなくて、私達に血ダルマにされるトコだったけどな。

まあ何とかマサの夢も崩さずにすんで良かったか。

その後、着替えてきた沙姫先輩にマサが自慢気に。

「見ろー沙姫、俺サンタさんにサイン貰ったんだぜ？ スゲエだろ？ っていうかあのサンタさん沙姫に似てたけど親戚か？」

「えっええ、遠い親戚ですわ・・・」

「マジか！？ スゲエな、だから今日サンタさんが来てたんだな！  
！ 今度、会ったら頑張って下さいって伝えてくんね？」

「モチロンですわ・・・あゝゝ少しだけ心が・・・」

その胸の痛みは、わからないでもなけどさ。

こんな感じでパーティーの間マサはずっと嬉しそうにして、たまにサインを見ては、にへらゝと笑っていた。

その顔もちよっと可愛かった。

で、次の日……。

「昨日パーティーだったよな？ 行ったまでは覚えてんだけど……後、サンタさんに会えたような気がしたんだが……」

クビを捻るマサ、微妙に記憶がトんでるらしい、そんなマサにラが。

「マサはサンタさんに会ったよ、ほらサイン」

そう言って昨日のサインを渡す。

「なっ……サンタさん……スゲエ！！ サンタさんのサインってスゲエ！！ サンタさん、ありがとー！！！」

サンタさんにお礼を言うマサを見て、少し幸せな気持ちになった私達だった。

第六十話つばい感じ！（後書き）

後書き

こんなネタでした。

何故にいまさらクリスマスネタ？

それは書いてる人にも謎だらけ。

って気付いたら本編、二話続けてマサ視点なし！？

次はマサ視点だと思えます。

ってワケで次回もまた見て下されば嬉しいです。

感想などありましたら是非！！

第六十一話っぽい感じ！（前書き）

前書き

たまにしたいくなりますアホ話です。

まあ笑えるかはアレですが・・・。

ではクスリを持ってどうぞ。

## 第六十一話 っぽい感じ！

「紳士道を極めてみようと思うー！！」

「はっ？ ちょっとマサ？ いきなり何、言い出し……ってなんか似たようなコトが前にもあったような……」

リト何やら困惑気味。

つか確かに前に似たようなことをした気がするが、あの時は何だったか……エロ本を手に入れようとしてたんだっただか？

なんやかんやでうやむやになったけど。

まっ今はそのことは、そおーい、しといて。

「紳士道を極めたいと思うー！！」

「いや、だから……」

「うむ、リトよ、何故に急にそんなことを言い出したのか、だろ？」

「ああ、さっきも言ったけどな」

そこはスルーしね。

っと理由だったな。



「いやね、俺、頻繁に、紳士だからねっ！！　と言うが大概、胡散臭いやツを見る目で見られるだろ？　故に俺が真まことの紳士だと証明する為、紳士道を極めるのだよ、いやさ、極めねばならんだ！！」

「はっ・・・はぁ・・・ようするに、見返したいってことか？」

平たく言えばそうなるな。

「一応、軽く辞書で調べてみた、上品で礼儀正しく、教養の高いりっぱな男性が紳士だと・・・残念なことに一つも当て嵌まらんかった・・・なるほど、コレでは今まで胡散臭いやツを見る目で見られても仕方ない、が、しかあゝ生まれ変わった俺は違う！！」

「わざわざ調べたのかよ・・・なんでこう無駄に行動力があるのか・・・」

無駄とか言うなっちゅうの。

まあいいさね、とにかく紳士道を邁進する為に。

「とりあえずハンカチのことはコレからはハンケチーフと呼ぶことにする！！」

「目をつけたところがそこかよっ！！」

うむ、なんか、そう呼んだ方が紳士っぽいしな。

「だがコレ以上、他に紳士としてやるべきことが見当たらん・・・」

実に困った」

「もっとあるだろ色々!」

「うむ流石はリトだ、ならばリトよ、その色々とやらを教えてください!」

「えっ!! いや・・・そう言われると・・・うっっん・・・」  
むむっリト、色々とは言ったものの思い浮かばないらしい。

さて困った・・・。

俺の紳士への道がかなり早い段階で行き詰った。

「とりあえず・・・優しくするとか? ってマサは普段から結構、優しいか?」

「いやいやリトに負けるっの、つか別に優しかねえーと思うんだが?」

「そんなことないって・・・」

「いやいや・・・って、なんかエンドレスになりそうだな?」

にしても優しさが。

「よし、ならばコレからバフ○リン並の優しさを心掛けよう!」

なんせアレは50パーセントが優しさで出来てるといっ凄いくスリだからな。

それくらいの優しさを心掛ければ紳士ヘグツと近付く気がする。

が、優しくするとは言ったものの、具体的にどうすればいいかわからん。

はて……ン？ あそこのベンチで寝てんのは、エテ山か？

ふむ……あんなとこ、あっ一応、今は昼休みな？で中庭を歩いてたとこ……っとズレたな……。

ンツン、あんなとこで寝てたら風邪を引く……やも知れん、まあぶっちゃけエテ山が風邪を引こうが、どうでもいいっちゃいいし、風邪を引いたことに気付かない可能性もあるが。

たった今バフ○リン並の優しさを……！！

と決めたばかりだしな。

しょーんなか……。

「起こしてこよう、風邪を引くやもしれんしな」

「へっ？ 珍しいな、マサが猿山のことを気にかけるとか……つて、あっ、優しくするとか言ってたもんな」

うむ、そういうことだよ。

んじゃっ、エテ山を起こすというミッション開始だ。

成功したら優しさが+3くらいされる気がする！！

失敗は出来ん、誰もが認める紳士になる為に！！

ってなワケでスタスタとベンチ接近し……。

「グウ~~~~グウ~~~~グフフ……ぷるん、ぷるんのバイン……  
バイン……」

一体、どんな夢を見てるのか……完全に犯罪者フェイスだなオイ。

そんなエテ山には、そおーい！！

と、何時もならイッてるのだが、ここは我慢し、一旦は通り過ぎる。

後ろでリトが。

「アレ、マサ？ 猿山起こすんじゃないのかよ？」

と、クビを捻っているが、そんなリトに口パクで準備があるとだ

け言い、準備をしに行く。

まあ準備つうほどのアレじゃねえんだけど。

で、準備を終わらせエテ山が寝てるベンチへ。

「うつひよ〜〜、た・・・たまんね〜〜〜〜ムニヤムニヤ・・・」

うむ、さっきと変わんねえ犯罪者フェイス、寧ろ寄り悪化しとるな。

そんなエテ山を起こすには・・・。

「紳士ハンケチーフ!!」

『ベチャ』

水で十分に湿らせた紳士の必須アイテム、ハンケチーフを顔面に。

「むぐつ・・・うつ・・・ん・・・  
・・・  
・・・」

アレ？

起きないツス？

いや、それ以上に動かなくなったツス。

はて……。

「そりゃそうだろー！ー！ ちよつ猿山起きろー！ーそのまま寝たら一生目覚めないからー！ー！」

慌ててリト君がハンカチ・・・じゃなかった、ハンケチーフを退かしました。

ン？ エテ山は起きたかって？ 起きた起きた。

なんかご先祖に会ったらしいけど。

「完全に渡りかけてるし・・・マサ、流石にやり過ぎだって・・・まあ途中で止めなかった俺もアレだけどさ」

ちよつとリトに怒られた。

流石に少し、砂一粒分くらいは反省。

だが、後悔はしない。

何故なら、なんかスッキリしたから。

ホントなんでだろうな？ いや不思議。

優しさ以外のポイントが+3された気がしつつも、この果てしなき紳士への道は続いていく。

「さあ行こう、俺達の旅は始まったばかりだ!!」

「いや、逆になんか終わりそうだから、って『達』!? 達ってやっぱ俺も入ってるし!!」

いや流石にまだ終わんねえよ?

後リトが入ってるのは仕様です。

・  
・  
・  
・

「で、やって来ました教室です」

「ああ・・・つうかマサ、まだ続けんのか?」

続けるっつうの。

紳士は一日にしてならずだ、まあまだ初日だけ。

「マッサマサ、結城、何? なんかまた面白いことしてるの?」

教室に入ったら里沙が話しかけてきた。

「初岡？ いや、まあ・・・マサが・・・」

「今日から俺は真まことの紳士になる、その為の修業中だ」

ザクツと説明。

「はい？ マサマサが紳士？」

むっ、やはり胡散臭いヤツを見る目で見られとるじ。

しかし負けん！！

その程度で屈するわけにはイカンのだ。

「イエス！！ アイ・アム・ジェントル！！」

「なんで英語？」

いやさリトよ、それは俺にもわからん。

しいて言うならそれっぽかったからだと思われる。

「ふむふむ、紳士ね〜、よしっマサマサよ協力するよ！！ なんか面白そうだし？」

おう？ 仲間が増えたっばい。

「うっ・・・そうだった・・・初岡も走り出したら止まらないタイ



「ブだった」

「ってコラ、リトよ仲間が増えたのに、何故にガツクリしてんだっつうの。」

「まあいいさね。」

「して里沙さんや、紳士の行動とは何をすべきかとか分かるかね？」

「とりあえず行き詰まっていたことを聞いてみる。」

「今のところ、ハンカチをハンケチーフと言うこと、と、優しいをバフオリン並にすることしか分からんし？」

「フフーン、いいマサマサ、紳士には常セットでついてまわる存在がいる！！それが分かる？」

「なんと！？ そんなに存在が……。」

「なんだろ？ うゝむ……紳士について回る存在……ハツ！？」

「わかった！！ シルクハツ」

「それは淑女レディよー！！」

「最後まで言わせてくれても罰は当たらんと思うが……つかシル

クハットじゃなかったんだ。

他はカイゼル髭、あっ、先っぽがクルツとなってる、あの髭のこ  
とね？

くらいしか思い浮かばなんだが・・・しかし、なるほろ、確かに、  
紳士と淑女はセツトな気がする。

「と、言うわけで、この里沙さんが淑女を担ってあげ・・・」

「チェンジで」

「最後まで言わせてくれても罰は当たらないと思う！！　っていう  
か紳士を自称するならそこは、ちゃんと淑女として扱ってくれるべ  
きじゃないマサマサ！！」

「俺はチェンジと言える紳士だからね！！」

これぞ紳士のニュースタイル！！

明日からきつと紳士の本場ブリテンでもチェンジ旋風が巻き起こ  
るな、うんうん。

「何考えてるかわかんないけど、多分それはないと思う」

リトよ、その辺りは紳士的にスルーしれ。

「マサマサ〜〜、私が淑女ってそんなにアレ？ アレな感じ？  
流石の里沙さんも凹みそう・・・」

むっイカン、なんか里沙が落ち込みだしたし。

落ち込ましたのは俺な気がせんこともないが。

やはりハツキリ言い過ぎたか・・・よし、ならば。

「キツめかなあとと思う、具体的にはオチを言ったはずの話に、から  
〜〜〜〜、とか言われるぐらいに」

「それ完全に罰ゲームじゃん！！ えっ何？私が淑女するのって罰  
ゲームクラス！！」

「ハツハツハ、八割方は冗談だ」

「残り二割は本気かよ・・・」

それは言わない約束ですよ。

とは言え、紳士に淑女は・・・ってコレ二回目・・・まっいいさ  
ね。

紳士に淑女は付き物だし。

俺もまだまだ立派な紳士とは言えないし。

「里沙よ、確かに今は里沙が淑女？ ハンツ！ と鼻で笑われたとしても何れは、淑女と言えば里沙、里沙と言えば淑女と言われるほどの淑女を目差せばいいんだ！！」

俺とて今はまだ、胡散臭い目で見られてるしな、だから共に、何処の社交界に出ても恥ずかしくない紳士に、淑女になるうじやないか！！」

そつと里沙の肩に手を置き、力強く宣言する。

「そうよね、マサマサだって紳士からはほど遠いのに紳士を目差してるんだし」

それはそれでイラツとするが、まあいいさね。

「では、いざ目差さん！！ 見えるかアレが紳士の、淑女の双子星だっ！！」

里沙を立たせ肩に左手を回し、右手は空の彼方にある星を指差す。

「あつ・・・見える私にも見える！！」

なんか微妙に赤くなってるが・・・なるほど紳士、淑女の双子星の輝きにテンションが上がったんだな。

気持ちはわかる。

なんという輝き!!

「ねえ結城君・・・止めないの?」

「あつ春菜ちゃん、リコ、まあそのうち飽きるだろうし? それに下手に手を出したら長引きそうだし?」

「だな、放課後には飽きてるだろ、っていつか、初岡・・・ちよつとだけ・・・いや、まあいいけど・・・」

「いいな~~~~私も入りたいな~~~~」

「止めときなさいララさん」

「う~~~~ん、こつ突発的に変なことをしなければ最高のお兄ちゃんなのに・・・まっそれもいいんだけど」

なんかめっさ色々と言われてるな?

つか未央よ、オマエは今だにお兄ちゃん期間が続いてるのな?

そしてリコよ放課後までだと? ナメるなよ!!

もうすでに若干飽き始めて来てるわっ!!

『キンコンカンコーン!!』

・ ・ ・ ・

『キンコンカンコーン!!』

はい、というわけで放課後です。

「さて放課後だが何すつかねえ」

「アレ、マサ、紳士は？」

「飽きた、つか飽きてた」

昼休みが終わるちょい前からな。

「やっぱりかよ」

呆れ顔のリコ君です、ええそうですよ、やっぱりですよ。

とはいえ紳士的な行動はちょこちょこ頑張っているとは思っ  
けどな。

ちなみに里沙も既に飽きてました。

「その辺り結構似てるよなマサと朧岡って？」

考えてることが読まれたらしい、やるなり下。

っと、今はそんなことより何して過ごすか？というか遊ぶか、だな。

「ゲーセンにでも行くか？」

「おっ、いいな？ カラオケでもよかったけど」

じゃ誘うヤツは・・・ふむ部活組の春菜、里沙、未央は、もう部活行ってるし、アイドル組の恭子ルンは仕事でいねえーし・・・後は・・・。

「唯〜〜〜、静〜〜〜二人も行こうぜい」

「帰り道にゲームセンターに寄るなんて減点」

「はいはい、減った分以上に楽しみや、よかる？ で静は？」

「げーむせんたー？ キョーミはあるんですけど、今日は御門先生のお手伝いが〜」

おっ？ 残念。

「あっ、そういえば明日の町内美化運動の話し合いがあったんだっ  
たわ、マサ君、どうせ言っても無駄だから寄り道するなどは言わな  
いけど」

「あいよ、騒ぎはなるだけおこさないようにだろ？」

「なるだけじゃなくて、おこさないように！..！」

なるたけな？

「ハア~~~~、不安ね・・・あつ、いけない急がないと」

ため息をはきながら教室から出ていった唯さん、それに続いてる保健さんとこに向かった静でした。

「行っちゃったね〜、ねえマサ、町内美化運動って何するの?」

「ガラの悪いヤツらを片っ端から狩り取ってくんじゃね? やべっ俺とか真っ先に狙われるじゃん」

「普通に掃除だからな?」

ですよね〜、まあ仮に狙われても狩られはしないけど。

寧ろ狩り返してくれるわっ!!

狩られそうになったらただどね。

「まっそれは置いといて、ヤミと合流すんべ〜」

「うん!!」

「ああ」

「わかった」



で、ヤミと合流してゲーセンへとくりだし。

「よっ、はっ、ほっ!?!」

『ダクション、ダクション、ダクション!?!』

「マサ、カッコイイ」

「中々やるますね」

「っていつかガンシューで曲撃ちって」

「まあマサだし、あっ私もやるっ」と

まずはガン・シューティングゲームにチャレンジ。

『ガボーン』

「クッ・・・なんて手強い」

「はやっ!?!?」

一面の半分も進まないうちにゲームオーバーになりました。

チクソウ・・・最近のゲームは難易度が半端じゃないらしい・・・。

「おっクリアー!?!」

「凄いリコ上手〜い」

「やるますね」

なん・・・だと？

『ボン』

リトに優しく肩に手を置かれました。

チクソウ・・・。

実銃なら負けないのに・・・いや撃つたことは・・・あるな、そして撃たれたこともあるな。

つか曲撃ちして一面の半分もクリアーできない俺って客観的に見て・・・。

『バツ』

思わず顔を両手で隠してしゃがみ込む俺だった。

「マサ？ どうしたの？ 気分悪いの？」

「ララ、今はそっといてやれ、なっ？」

リトの優しさが目に染みるッス。

その後ララ、リト、ヤミっ子も挑戦しリトはクリアーララはラスボスまで進んだがヤミは……。

『ガボーン!!』

曲撃ちまでした上で俺とほぼ同じ一面の半分くらいでゲームオーバー。

『スタスタ……バツ!!』

やっぱり顔を隠してしゃがみ込むことになりました。

「あっヤミちゃんも……」

ちよっララ見るな!!

今俺達を見るんじゃない!!

っていつか、ほっといたげて、そっとしといてあげて……

それが優しさってヤツだから。

・  
・  
・

気持ちの立て直しに要したミ〇ミ〇三本。  
さて気を取り直し別のゲームにチャレンジだ。

ってわけで、釣りゲーム。

『ピチピチ』

釣れたには釣れたが・・・カジキとかの大型な魚が釣れるゲームで、メダカ並の小物が釣れた・・・何故？

こんなん隠しキャラレベルだろ？

つか俺、結構釣り得意なはずなのに・・・。

リトとリコの生暖かい目より。

「やったねマサー!」

無邪気な笑顔のララさんが辛かったッス。

ええ〜い次!!

クレーンゲーム。

『ウイーン・・・ガシッ』

「よっしっ！… そのまま、そのまま」

『ポトッ！…！』

「よっしや！…！」

うむ、上手くゲット出来たな…。

「リト上手〜！…！」

リトが…。

ン？ 俺？ ハツハツハ… ぼちぼち八千円に突入するよ、入れた金額が… チクソウ…。

「マサ、もう止せって、なっ？ ほら私が取って上げるから」

結局、狙ってたカラスの人形はリコに取ってもらった。

リコも上手かった… 後、リコはヤミの狙ってたヤツも取って上げてた。

嬉しかったが微妙に切なさがセットだった。

そんな感じで、色々なゲームを遊んだ結果……。

「ゲーセンつまんねえ……」

「同意です」

俺とヤミはゲーセンが余り好きじゃなくなったとさ。

でもいつかはあのガンシューをクリアしたりカジキ釣ったりワ  
ンコインで狙いの品をゲットしてやる！！

ゲーム自体は好きだしな。

第六十一話っぽい感じ！（後書き）

後書き

〇〇してみようと思うー！！

コレをちよくちよく入れいこうかなあと思います。

マサの〇〇してみようシリーズ的な感じ？

まあ大概アホな話になるでしょうけど・・・。

というか前回がクリスマスで今回は何故か学校スタートって・・・  
正月は何処に？

相変わらず時間軸が無茶苦茶・・・。

まっまあそれはともかく次回は多分、美化運動かな。

若干不安。

とにかく頑張っていきます。

感想などありましたら是非ー！！

第六十二話っぽい感じ！（前書き）

前書き

前書きに何を書くべきか・・・それが問題だ・・・。

そんなこんなで六十二話です。

ではクスリを以下略でどうぞ。



## 第六十二話 っぽい感じ！

『どきどき公園』

はい、本日晴天、雲一つない、とは言わないがよく晴れた良い天気の中、俺達、彩南高生徒らは町に貢献、美化運動の真っ最中・・・なんだが。

「校長！！」

「なんで男ばっか掃除やらされてんだ！ 町内美化運動は全生徒参加のはずだろ！！！」

「・・・そーだ、そーだ！！！！」

と、まあエテ山を筆頭に男子連中から不満の声が上がっております。

文句言わずにキリキリ働けと言いたいところだが、確かに言ってることあ間違ってるねえーんで横目で見つつ。

「よっ、はっ、とっ！！！」

『カコン、カコン、カコン！！』

落ちてる空き缶を簡易で設置したゴミ箱に蹴り入れる。

掃除とは言え遊び心は忘れないッス。

ちなみにリトも俺の隣で空き缶を拾って三回に一回くらいは蹴り入れとる。

リトも中々にやるぜ。

まったまに外してっけど。

「ほれ、リト」

足元の空き缶をリトにパス。

「わっ……とっ、入れ」

器用に左の足首でワントラップしてっ右足でシュート。

『カコンー!』

ナイスゴール。

「結構楽しいなコレ?」

「ああ、でも、ちょっとは真面目にしねえーと……」

「多少の遊び心は必要だっつの、ほれ、あそびで、ちいさい言っつてんよかは働いてんだろ?」

「それもそっか？」

ちらつと確認、今だに、やいやい、言ってる男子連中に校長（変態）は。

「まあまあ皆さん、そう慌てずに、女子生徒なら私が用意した、お掃除衣装にお着替え中です」

なにやら余裕の顔・・・うむ、何故か腹立つ。

「アレから回収したほうがいいんじゃないかね」

「止めとけて、まだ何かしたワケじゃないんだし」

残念、リトに止められた、でも何かしたら回収してもいいらしい。

時間の問題だわなあ。

「おっ、早速、来ましたね、お掃除衣装の~~~~」

「ちよつと~~~~何でこんな恰好なワケ？」

「~~~~おおっメイド服!~~~~」

うん、メイド服だね、まじうことなくメイド服だね。

つか何故にメイド服？

「もつと適した服があんだろよ」

あつちなみに俺は何時もの作業着、リト達、男子は体操着＋ジャージな？

「ヤミも参加したのか？」

「ええ、ヒマですし、マサナリとプリンセスにも誘われましたから・・・まあ、あの服は着ませんけど」

はい、ヤミにも声を掛けといた、ヤミの恰好は俺と同じ作業着です。

「・・・あの恰好がよかったですか？」

ヤミが何やら若干不安げに俺にそう聞いてきた。

「いんや、つか、アレ動きにくそうだろ？ 掃除に向かねえーべ？」  
スカートんところかヒラヒラし過ぎて引っ掛かりそうだし。

「うむ、やはり作業着だな、まっ作業着なんは俺とヤミだけだけど  
つか、作業着は俺とヤミのしかねえし。

「マサナリと二人だけ・・・ですか、二人だけ・・・フフ」

何が面白かったのやら？

「マサーーっ、どうこの衣装？ 似合うかな？」

おっララ。

「似合うけど掃除には向いてねえ！！」

可愛いし似合ってるのは似合ってるだけだな。

「わぁーい、似合ってるって言われたよペケー」

『よかったですねララ様、あつまサナリ殿、今回は私も手伝いますぞー！！』

ほう、ペケも掃除に参加か、つか掃除に向いてない、の部分はスルーかい！！

いやさ、まあ別にいいけど。

「うひょ~~~~ヤミちゃん、よく来てくれましたたね~~~~でもなんで私の用意した、お掃除衣装を着てくれなかったんです」

「マサナリとプリンセスからゴミ掃除と聞きましたから、後、私にはマサナリとお揃いの作業着があります」

『ガジ、ガジ！！』

目を離れたスキに校長（変態）がヤミに絡み、かみ砕かれてた、牙付きの口状にトランスした髪で・・・いやシャレじゃねえーよ？  
一応は。

しかしなんだろ。

「ぎにゃあああー!..!」

叫んではいるが、何故か微妙に嬉しそうなんだが・・・変態は一味違うということやもしれらん。

「ヤミっ子、そのナマモノで遊ぶの飽きたら生ゴミに入れとけよ」

「わかりました」

「マサそれは、ちょっとだけ酷い気がする」

大丈夫、ヤツのポジションはそんな位置だから。

「フフン・・・今だ時間差~~~~!!..!」

ララ、珍しくってものアレだが抱き着いてこないと思ったたらコレを狙ってたらしい、しかし無情の・・・。

「リトガード!..!」

しといた。

「むう〜、やっぱりダメだよ〜」

「いついから離れるって」

リト君、そろそろ慣れてもいいと思う、まっそれはそれでリトっ  
ぽいけど。

「ちょっと、遊んでないで掃除しなさい!」

「だって唯〜〜マサいっつも避けるんだよ〜」

正確には避けてるわけじゃねえけどな、避けたりもすっけど。

つか……。

「唯ってさ、なんだかんだで押しに弱いよな?」

メイド衣装に身を包む、唯に思ったことを口にしてみた。

前のアニマル喫茶だったか? の時もなんやかんやで衣装を着て  
たし。

「うっ……言われてみれば確かに、でも別に喜んでこんな恰好し  
てるワケじゃないわよ!」

でしようね。

まっ喜んでるのもいるっばいけど、ララとか後。

「このメイド服も中々可愛い、どう？」「ご奉仕しちゃうよ？」

未央とかね。

むろん未央のご奉仕発言には、いらね、つつといた。

つれないな〜お兄ちゃんは、だとさ。

今だ、お兄ちゃん期間は続いています。

ン、リトどうした？何やらキヨロキヨロ辺りを見回してからに・  
・あつ、なるほろ、春菜を探してんだな。

里沙未央と一緒にいないんは珍しいっっちゃ珍しいもんな。

最近は・・・つか、静が来てからは静と一緒に行動してる時も多いけど。

ってそついやリコもいねえーな？

はて？

「なあ唯、リコとか春菜は？」

「えっ？ あつ、リコさんは天条院先輩と一緒に所で掃除するって  
言ってたわね、春菜さんは・・・」



クビを傾げる唯、知らないっぽいな。

「春菜なら、お静ちゃんと商店街の方で掃除してるよ」

「ララが知ってたらしい、商店街か・・・。」

「全校生徒参加だったから公園だけじゃねえーたあ思ってたが・・・つか、その恰好で商店街って・・・正直どうよ？」

色んな意味でアウトくさいぞ？

「それは思っても言わない約束だぞマサマサ」

里沙にコラッてされた。

ちょっと反省。

それはさておき。

「ってワケでリト、行ってこい」

春菜と静の二人と一緒にリトを派遣しよう。

「はっ？ ちょっと・・・」

行きたいクセに微妙に戸惑ってるリト君、そこで一押し。

「集めたゴミをを運ぶ人員だ、静が運んでみる、すっ転んで集めたゴミぶちまけるぞ？ つうわけで行ってらっしゅい」「

静には悪いがダシになってもらった、まっ実際ありえないとは言えんしな、つか、八割はありえるし。

「ああ〜〜なんかわかる気がする、わかった行ってくるぜ」

その場面が想像出来たのか頷くとゴミ袋とホウキをもって駆け出して行きました。

コレでよしつと。

「マサナリ、何故わざわざ理由を？」

「人ってなあ、理由付けないと動きたがらないもんだってどっかの偉い人が言ってた」

ヤミの質問にそう答えとく。

まあ理由なく直感で動くこともあっけどな。

「なるほど・・・それはそうと・・・コレ動かなくなりました」

ペツとトランスした髪口から吐き出したのは多分、校長（変態）多分と言ったのは真っ赤になり過ぎてる上にモザイク指定確実な状態だったからだ。

大分、捏ねくり回したな・・・唯とか里沙未央とかドン引きだし、ララはそうでもないけど冷や汗はかいてます。

つかアレ生きてるか？

スタスタと接近し脈拍を確認・・・ふむ、なるほど、チラツと時計を確認し。

「9時45・・・じゃないな46分、ご臨終です」

そつと手を合わせた。

「ちよつ！？ 嘘ーっ！ やっヤミヤミ！？ えっ、ちよつ嘘ー！！」

「殺っちゃった！！ 校長いつかは殺られると思ってたけどホントに殺られちゃった！！」

「ヤミさん！！ こっここコレ、コレ！！」

里沙、未央、唯、あわわあわわ、の大慌て。

「殺りました」

そして何故か誇らしげに胸を張るヤミっ子、なんか字が違う気が・・・いや間違つてねえけど。

「まっ落ち着け、確かに脈は完全に止まってたが、コノ手のタイプは脈が完全に止まった状態でも30秒も経過すると復活するから・・・ほれ、ぼちぼち30秒」

「ハッ！？ おや？ 私・・・確か女の子一杯の花畑にいたのです

が・・・はて？」

「どんな花畑？　つか、寧ろその花畑に居たほうが幸せだったんじゃない？　コイツの場合。」

「うわぁ~~~~校長先生、生き返った~~~~凄い」

『なんとも不思議な生態ですね』

宇宙っ子とコスチュームロボから見ても不思議な生態を持つ校長（変態）だった。

そのうちキャトられるんじゃない？　キャトられても無事に済むだろうけど。

2299

「掃除しなきゃ掃除」

唯は息を吹き返した校長（変態）を見なかったことにした。

目を背けたい気持ちもわからんでもねえーけど。

「校長ってホント何者なんだろうっね？」

「ある意味地球外生命体より地球外生命体だよね」

「失礼な一緒にしないで下さい」

「うっうん・・・私もちよっと・・・イヤかな？」

未央の発言にイヤそうな顔をするヤミ、ララ。

気持ちはわからなくてもない。

「校長（変態）はアレだな、多分、新種なんじゃね？ 新種、校長

（変態）ボトルキャップの仲間みたいな？」

「ちみ、やっぱり所々失礼だよね？」

妥当だっつうの。

っと、何時までも校長（変態）で遊んでいてもしよーがねえわな。

「ンじゃ唯じゃねえけど掃除再開しますかねえっと」

『ガスッ！！』

「へきよ！？」

『ガコン！！』

ナイスゴールっと。

ン？ 何したかって？ むろんゴミをゴミ箱へINしただけだが？

グラスにつけてて、動いたり喋ったりするのが特徴の。

「いいのかしらアレ？」

「シッ！！ 唯、見ちゃいけません！！」

「見ちゃいけないってアレはマサ君が・・・」

「見ちゃいけません！！」

「だから・・・まあいいわ・・・疲れるし・・・」

うむ、ようやく諦めてくれたようだ。

さって・・・一応、ここいらの空き缶やらペットボトルやらは掃除したし別の場所へと移動すつとすつかねえ。

「アレ？ 誰も助けてくれないんですか～～ちよつと～～」

残念ながら聞こえませんが、まあ誰か気付いたヤツが出してくれんだろ多分。

・  
・  
・  
・

スツタラスツタラ移動しながら落ちてるゴミを拾いに拾うコンク

りに張り付いてるガムなどもあったりしたが、それはヘラで剥がします。

全くガムは包み紙に包んで捨てれつつうに。

むっタバコの吸い殻もか？

「結構、多いなオイ」

「そうね、もう・・・自分達が住んでる町をなんだと思ってるのかしら」

唯も立腹気味です。

「ホントだね、あつまう一杯だ捨ててくる」

ララも唯の言葉に頷きながらゴミ袋に集めたゴミを回収ポイントに持って行った。

最初は十袋くらい溜めてから一気に俺が運ぼうと言ってたけどかさ張ると邪魔になるから一つづつ運びなさい、と唯に言われたんで一つづつ運ぶことにしたのだ。

ちなみにヤミと里沙未央も回収ポイントへGOしてる。

とと・・・ん？

「あつま〜さ〜君〜唯にゃん」

「マサナリ君……に古手川さん」

向こうに見えるは恭子にルンのアイドルコンビじゃん。

「今日はアイドル稼業は休みかよ？」

「っていうか、なにか私おまけみたいなお扱いだったような……まっ  
っ気持ちは少しはわかるけど」

「アハハ……なんか久々に登場した気がしてつい？ 定期的に登  
場してる唯にゃんが羨ましいなあ〜なんて？」

「うん……しかもマサナリ君と絡みも多いし……クツ……羨  
ましい……」

なんか色々メタ発言だな、つかルン羨ましいって……まっ俺主  
人公だから絡みが多いイコール出番が増えるだからな。

後メタついでに言うが、登場してないだけで、二人が学校に来た  
時は一緒にメシとか食ったりしてんぞ？

っつとメタはここまでにして。

「で稼業は休みでいいんか？」

「うん、今日はね〜アイドルも楽しじゃないよ〜」

「でも楽しいけどねー!!」

うむルン、ナイススマイル。



「やりてーことがあるってなあ、いいこっちゃ、楽しんでしてるんならなおのことだわなあ」

「そうね、マサ君は将来やりたいことってあるの?」

むっ? 俺か・・・。

「冒険野郎」

「「「はい?」」」

三人揃ってクビをコテンと傾げるなよ、いや、まあわかるけど。

冒険野郎とか言ったがそれは半分くらいは冗談だしな。

いや冒険もしたいけど。

「便利屋とかが濃厚、つか既にやってるしな? ほれ見よ、この作業に書いてるべ」

『M・Y・S・S』って?」

クルッと回って背中に書いてる文字を見せる。

「そういえば、やってたね、このMってマサ君のMでしょ? Yはヤミちゃん・・・ってことはヤミちゃんも?」

「マサナリがどつしてもと言っつのなら・・・」

おう？ いつの間にやらヤミっ子戻って来たらしい。

「おう、まっヤミが他にやりてえことがあるってんなら無理には言わんが・・・俺的には頼みてえとこだ、探偵とかのマネごとかもしてえなあ、宝探しとかも、楽しいぜえ」

考えただけでわくわくするね。

「そうですね、そこまで言うのなら・・・考えておきます」

「良い返事を期待してるぜ」

他にもメンバーを加えると思うけど。

「むっ、アレ考えておきますって口では言ったけど」

「うん、間違いなくやるね」

「・・・」

上からルン、恭子、唯でした、唯はただ複雑そうな顔をしてるだけだ。

「唯はどうするんさ？」

そんな唯に質問返し。

「わっ私？ 私は進学する予定だけど・・・後は・・・八百屋さんとか？」

「八百屋ですか？」

「えっええ……少し前にマサ君と手伝いをして楽しかったし、あの八百屋さんのおばさんも……」

『カーーーッ!!』

なんか唯、みるみる赤くなってるな、何故に？

いや手伝いしたんは覚えてっけど。

「どう見るルン？」

「うん……多分だけど、二人でお店を継がないかと言われたんじゃない？」

「むむっ私が継ぎたい!!」

「あっズルイ、キョーコ私も私も」

いや継がないし？

そんな予定はありやせん。

「マサナリは私と便利屋をするんです」

つかヤミも何故に急にやる気に？

いや助かるけどね。

「こっ子供は・・・二人くらいかしら？ ひっ一人っ子は寂しいもの・・・って私何を考えてるのっ！！ ハレンチだわー！！！」

唯にいったい何があっただらろう？

『クイクイツ』

ン？ ヤミっ子？

「私は三人がいいです」

「それは将来の旦那に言えや、つか、ヤミっ子にはまだ早い、メッ！！！」

全くヤミっ子は。

「あっアレすらもスルー・・・あの呪いって解けないのかな？」

「何言ってるのルン、私達で解くんだよ！！！」

「ハッ！！ そうね流石キョーコ！！！」

「燃える女ですから!!」

いや呪いって何？ 何？ 俺、呪われてんの？

よし勇気を持って聞いてみよう。

「なあ俺って何か呪われてるわけ？」

「呪われてるわね」

「呪われてますね」

「呪われてるね」

「呪われてるよ」

呪われてました。

チクソウ・・・教会に行かないといけないのだろうか・・・。

いやさ行かんけど。

つと・・・呪いうんぬんは、そーい、して、ゴミも結構溜まってきたし・・・ン？ いつの間にとな？

話してる間も手は動かしてたからな。

つつわけで溜まってきたし、恭子にルンのも溜まってるみてえー  
だから二人の分+俺と唯の分を持って。

「回収ポイントに持ってきますわ」

みんなに伝えてゴミ袋四つを持ち回収ポイントへGOしました。

・  
・  
・  
・

で、回収ポイントから戻ってきたらララに保健さんが来てた、つ  
か保健さんもメイド服なんだな・・・感想を聞かれたんで。

「正直微妙」

と答えといた。

「またハッキリと・・・」

ちよつとガツクリ気味の保健さんです。

つと、そんなことはさておき、何やらララと保健さん、俺を除い  
たメンツがポカーンとなってやがります。

保健さんのメイド姿にたいするリアクションじゃない・・・と思  
うが、はて？

「何があったとや？」

「い、今ララさんがもう一人……」

ホワツツ？ ララがもう一人？

「ララ、いつの間に分身の術を習得した？」

「私そんなの出来ないよ？」

出来ないらしい。

はて？

「ドツペルゲンガー？」

「違います、アレは……」

「多分モシヤ・クラゲね？」

ヤミに続いて保健さんが、そう説明。

「なんぞモシヤ・クラゲって？」

「触れた人間の情報を読み取り本人やその人の記憶の中の人物に擬態することで身を守る特性を持つドツペル星形にのみ生息する希少種よ」

なんと……そんなんが居るとは広いな宇宙。

「えっと、なんでドッペル星形にしかないモシャ・クラゲが……」

「あつ、そう言えば今朝の銀河ニュースで希少生物の密輸業者が逮捕されたってやってた、でね、その密輸業者が潜伏してたのが地球みたいで……」

「ルンも銀河ニュースとやらを見てるらしい、つか密輸業者ねえいるもんだなどこにでもよ……」

「まっもう逮捕されたみたいだけんど。」

「で、逮捕した時に不注意で、そのモシャ・クラゲ君を逃がしてもうたと?」

「ええ、ニュースではそう言ってたわね」

「ってことはさっきのララさんは、そのモシャ・クラゲ? ってこと?」

「でしようね」

「しかし、先程プリンセスに擬態したモシャクラゲ、どうにも様子がおかしかったです」

「様子がおかしかった?」

「どんな風によ?」



「えっと・・・ララちゃんがゴツチに近づいて来たと思ったら、急に、私マサのこと大キライ!!! って」

「ええ~~~~!! そんなこと絶~~~~っ対ないよ、だって私マサ大好きだもん!!」

ぬっ? ララさんや・・・。

「ちよっ照れるべ?」

「だってホントだもん!!」

いや俺も好きだけどな。

「だから結婚・・・」

「しねえーよ? それとコレとは別問題」

女の子としてはクビを捻るってーの、コレも何回目だ?

「相変わらず呪いは解けてないのね、まっ今はそれよりモシャ・クラゲを捕まえないと・・・このままだったらかなりの騒ぎになるわ」

それもそうですな。

つつわけで・・・。

「ヤミっ子、ミッション発令だ」

「了解しました、モシャ・クラゲの捕獲ですね」

「そつそ、無傷でな？」

密輸業者に連れてこられた上にケガまでさせちゃったら可哀相だしな。

「私も探す〜〜〜!!」

『ララ様に成り済ますとはとんでもないヤツです私も協力いたしま  
すぞ』

ララにペケも探すのに協力してくれるっばい。

「唯達は・・・もしアレ？　なんかおかしくね？　つての見かけた  
ら携帯に連絡ヨロシク!!」

「えっええ、わかったわ」

「了解〜〜〜!!」

「まかせてマサナリ君!!」

よしっと、じゃ探します・・・あっ!?

「なんかめっさガラが悪いのが居るーーーー!!」

なにあのガラの悪さ？ 目つきもめっちゃめっちゃ悪いし？ ほら道行く人が避けて通ってますよ？ 全く……。

「あっマサだ」

はい、俺でした……作業着じゃなくてガクラン姿だけど俺でした。

「俺ってあんなにガラ悪かったんだなあ……」

改めて見るとしみじみそう思います。

なんたるガラの悪さ、しかも仏頂面だし……よりガラの悪さが際立ちます。

「って早く捕まえないとっ！！」

しみじつしてる間に唯が捕獲に乗り出したってオイ、俺モドキ君？ キミ何してんの？ 何、唯の肩に手をかけて見つめあってんの？

つか唯も何、目を閉じてんの？

アレ？ 顔近付いてない？ アレ？

って……。

「俺ン、ツラで何しとんじゃボケーー！！ つか唯も正気に戻ら

んかーいーい!!」

「ハッ!! わっ私、いったい・・・」

唯は正気に戻ったが俺モドキは逃走・・・慌てて追っかける。

追っかけた先で・・・。

「はふう〜あつマサナリさん、えっとさっきのお返事を・・・」

どつやら静にも声を掛けてたらしい・・・つか、マジで何してくれとんのじゃ!!

「マサ、お静は俺と春菜ちゃんがなんとかするから、マサは早くさっきのを」

リトにそう言われ、再び俺モドキを追っ掛けて、ヤミと挟みうちで引っ捕らえ・・・。

「・・・って何だオマエ、調子悪いんか?」

ってことに気付きました。

「やはりそうでしたか」

どつやらヤミは何となくそう思ってたらしい。

後からみんなも合流。

「うん多分ね、地球の空気が合っていないんだよ」

「なるほど・・・モシャ・クラゲは繊細な生物ですもの・・・それで擬態能力が正常に働かなくて本人らしからぬ行動をとってたのね」

ララと保健さんの解説。

ふむ・・・知らん土地に投げ出された上に体の調子もすごく悪い、更にはガラが悪いのに追っ掛けられたからビビったと・・・。

「・・・保健さん」

「ええ、銀河生物保護センターに連絡しておくわ、直ぐに来てくれるでしょ」

「だってさ、よかったね」

と、こうしてモシャ・クラゲ騒動は幕引きになりました。

そして、その後はキッチリ美化運動。

「にしてもよりト、さっきは気にならんかったけど、俺モドキを追っ掛けてる時えらくアツサリ行かせたよな？ なして？」

「あっああ、直ぐに偽物だってわかったし」

なんと!？ リト偽物と見破ってたらしい。

「うんリト君、あのマサ君が偽物だって言ってたもんね、私は直ぐにわからなかったけど」

「私もです〜私の、ときどき、が〜」

まあ見た目はガクランを除いては同じだてたしな。

「ん〜まあ、行動がマサっぽくなかったし・・・それに、ほら親友だしな？」

なっ・・・リトきゅん・・・何この気持ち・・・。

「今なら抱かれてもいい」

「気持ち悪いって!」

だってリト君・・・超惚れるわあ〜。

いや俺が女の子だったら間違いなくコロリだぜ。

リト・・・恐ろしい子。

・  
・

オマケな春菜視点

「『『『』一番の障害はリトである！』『』『』」

「アハハ・・・リト君大変だなあ〜」

マサ君が好きな女の子達にとってリト君がライバルに認定された。

しかも一番の・・・確かにリト君とマサ君は仲が良いしね。

それにしてもリト君ってやっぱり中身で人を見る人なんだ・・・  
一発で見抜いちゃったもんね。

それは二人が仲が良いってのもあるだろうけど。

うん、やっぱりリト君は凄いなと思う。

マサ君も一発で見抜いちゃいそうだけど・・・それはマサ君だし  
ね。

最近のリト君を目で追うようになってきた私・・・。

気になる人だから、そういう部分を見ると余計に気になってくる。

また一緒に遊びに行きたいな・・・。

「春菜さん、どうしたんですか、リトさんの方をジーッと見て」

「うっうっうん、なんでもない!!」

お静ちゃんにリト君を見てたのが気付かれたみたいで慌ててごまかす私だった。



第六十二話っばい感じ！（後書き）

後書き

リト独走状態！！

イカン、このままではリトエンド！！

いやならないと思いますけど。

そして最後の春菜さんが若干無理矢理っばいです・・・まあいつものことですが。

ンツンさてさて次回は・・・未定！！

色んな意味で。

後書きも何を書けばいいやらな書いてる人でした。

感想などありましたら是非！！

番外編っばい感じ！その10（前書き）

前書き

番外です。

短め、例によってセリフと擬音のみでいつものようにキャラ崩壊。

大量の胃薬を持ってどうぞ。

## 番外編つばい感じ！その10

くもしもスクールランブル世界だったら

その1

「前回までのあらすじ・・・主人公、鬼島 政成は例によって穴から異世界に旅立ったのだった」

「えつえと・・・マサさん急に何を？」

「そして、そこで一人の女の子に出会ったのだった」

「頭を強く打ったのかな・・・」

「打ってねえつうに八雲さんや、ほら何が何やらわかんねえーかなあと思つて一応あらすじをだな」

「は・・・はあ・・・」

「八雲、マサ先輩がおかしいのは今に始まったことじゃないよ」

「サ・・・サラ失礼だよ」

「でも八雲だつて頭の調子疑つてたじゃない」

「うっ……そっそれは……えと……ごめんなさいマサさん」

「いや謝られたら逆に凹むんすけど」

「大丈夫！！ マサ先輩は多少凹んだくらいで丁度いいから！！」

「オマエはストレートに腹が立つなエセシスター」

「エセじゃないですー！！！！」

というわけで色々とすっ飛ばしてのスタートです。

それだけではアレですんで一応は、なんやかんやで矢神高に転入生という形。

むろん21C。

住家は矢神神社 塚本家の倉庫 絃子さんのアパート 美琴さん  
家なっていきました。

その過程で色々知り合いになってます。

ちなみに美琴さん家でバイトしたり播磨のマンガを手伝ったり晶  
さんから仕事回してもらったりで生活費はそこそこ稼いでたりして  
ます。

ちなみに八雲はマサの心は読めないっばいです。

・  
・  
・  
・

その2

「して拳児君や・・・どうなん？」

「ああ？ 何がだよ？」

「天満だ天満、頑張ってるのかなぁとな、下ン名前で呼べるくらいにはなっ たんかよ？」

「うっ・・・」

「別に下ン名前で呼ぶくれえよかるうに、怒りやしねえだろ天満なら」

「でもよゝいざとなったらよゝ」

「ったくアレだけ天満がいない時にゃ天満ちゃん天満ちゃん言うてるクセに、ナポスケからも言っ てやれや」

『プヒプヒ』

「何、根性なしってなんだオラ!!」

「今のオマエのこったろ？」

「ンだと、わあったよ!!　じゃあ今から下の名前で呼んできてやるよ、ウオオオオ!!」

『ズダダダ!!』

「これでよしとナポスケも協力サンキューな」

『プヒプヒ!!』

マサ、播磨を応援する感じです。

ちなみにマサと播磨はマサが塚本家倉庫で寝泊まりしてた時に一回やり合ってます。

決まり手は正固めでした。

「なあマサ、今、播磨が雄叫び上げながら走ってっただけど何したんだ？」

「ン？　発作じゃねえの？　若い時分にはよくあるこった」

「なんだそりゃ？　あつと・・・今日は道場の方に顔出さねえーか

「？」

「今日は・・・晶に仕事回さして貰ってっからなあ、まっ簡単な仕事だから終わったら行けんじゃね？」

「そっか、って仕事ってなんだよ？」

「うむ、何やら白い粉的なモノを運ぶっつ」

「それ怪しすぎだろっ！！　なんだ白い粉的なモノって、アレか？　アレなのか！？」

「察しの通り小麦粉だ、近々お好み焼き屋がオープンするらしいからな」

「紛らわし言い方すんなよっ！！　焦っただろっ！！」

「わざとです」

「腹立つな・・・まっいいよ、で道場には来れるんだろ？」

「多分な？」

「じゃあ頼むよ、先生がまた手合わせしたいんだって」

「フツ・・・よかろう、いつ何時誰の挑戦でもだからな」

「闘魂イズムかよ・・・しかも王者の立場かよ、まあ確かにマサは強いけど」

その後の美琴さんとの会話です、たまに美琴が通ってる道場にも顔を出しています。

ちなみに播磨は天満のことを下の名前で呼ぶことになりました。

・  
・  
・  
・

その3

「街は今~~~~ 眠〇の中~~~~ あの鐘を~~~~ 鳴〇すのは~~~~  
ア〇タ~~~~」

「また渋い歌を口ずさんでるなキミは・・・ホントにキミは十代かい?」

「ン? 絃子かよ」

「絃子』さん』だ」



『パン、パン！！』

「当たりませーん」

『ヒョイヒョイ』

「チツ、また避けるか・・・拳児君なら当たってくれらるんだが」

「ハツハツハ、撃たれなれてるからな、しかもモデルガンじゃなくて実銃を」

「一体どんな生活を送ってたのやら」

「バラエティー豊かな感じ？」

「バラエティーね・・・気になるけど、今はいい、今日の晩は中華が食べたいんだが」

「それはアレか？ 作りに来やがれってことか？」

「おや作り来てくれるのかい？」

「来ねえーよ」

「なっ！？ 今の流れなら、ハアゝまあいいけど、とか言っ作りに来てくれる流れだろ！！」

「じゃあ普通に作りに来てとか言えばええやん」

「クツ・・・作りに来てくれ、中華が食べたいんだっ！！」

「おけ、諸々用事が終わったら行くわ」

『スタスタ・・・』

「フウ・・・どうにもペースをとれないな・・・」

絃子さんは餌付けされてるようです。

・  
・  
・  
・

その4

『茶道部』

「ウイス」

「あら、政成君」

「よっ昴、八雲とサラはまだかよ」

「何、私だけじゃ不満かしら？」

「別にそうは言ってねえーだろうに、気になったただけですよい」

「そつ、で政成君も何か飲む？」

「じゃミ〇ミ〇ド」

「一応茶道部なんだけど」

「知ってるけど、表書いてんじゃん？ えっ何？ もしかして俺、表の字が読めないくらいアホとか思われてる？」

「そういう意味じゃないわ・・・まっアで始まってホで終わる部分は否定しないけど」

「それ、もう言ってるじゃん、完全に言ってるじゃん！！」

「フフ・・・失礼」

「まっいいさね、ミ〇ミ〇プリーズ」

「ええ」

晶との会話でした。

・  
・  
・  
・

その4

『好きというモノがわかったかしら』

「・・・」

『そう・・・』

『ガラッ』

「ン・・・八雲・・・に誰よオマエ？」

『へえ・・・アナタ私が見えるの』

「見えるぜえ、って何、オマエ幽霊的な感じ？ 若干透けてるけど」

『ええ、そうなるわね』

「ふ〜ん、っと八雲、さつきから何ボサーとしてんだ？」

「えっ・・・あっ・・・その・・・」

『そうね、この際だわ、アナタにも聞いてみましょう、アナタは好きという意味がわかる？ もちろん、男女のという意味だよ』

「イキナリだなオイ・・・ふむ、つってもなあ17年彼女なんざ出来たことねえヤツに聞くこっちゃねえー気なすっぞ、もっと適任を探せ適任を」

『それでも、アナタだって人を好きになったことくらいはあるでしょっ?』

「そらあるわなあ、ココにいる八雲のこたあ好きだしな、他にも好きなヤツらはいるぜ特に身内はよ、けど男女のそれってことになったらクビを捻るわなあ」

「あっ……」

『私の求めてる答えじゃないわね……けど、フフ……八雲はそういう反応をするわけね、八雲、その気持が答えに繋がるわよ……それじゃ』

『スウ……』

「あちら消えちったよ、浄めた塩でもまいとくか?」

『それは止めて』

「消えてねえーのかよっ!?!」

『いいまかないようにね、わかったまいたらダメよ!?!』

「なるほどつまりは、まけてことか、了解まかせろ、そあーい!」

『パララ!?!』

『熱い、あつつい！！ ちよつ、熱ついーーーー！！』

「フハハハ、踊れ踊れ踊れーーーー！！」

『キヤーーーー、ちよつと八雲助けてーーーー赤くなってないで助けて  
ーーーー！！』

幽子さん、災難でした。

後、八雲さん微妙にフラグ立っています。

・ ・ ・ ・

その5

『カリカリカリ』

「ほいコツチ上がりつと」

「いつも悪いなマサ、妹さんも」

「いっいえ」

「まっ俺あアシのバイトもしたあるしな」

「マサさん、凄く上手です」

「確かになあ俺より上手えしな、マサ、オマエ、プロになる気は」

「ねえよ？ コレで食ってこつたあ思わねえーしな、つってもバカにしてるわけじゃねえからな」

「オマエはそんなヤツじゃねえってことくらいわかってるよ」

「そうですね」

「そりゃどうもっど．．．どれ何か食いますかあ台所を使わせてもらっぜい」

「あっ私も手伝います」

『ガチャ』

．  
．  
．  
．

『ガチャ』

「フウ~~~~食った食った、相変わらず美味えなあマサに妹さんのメシは」

「日々これ精進、目差す高みはまだまだ先つてな」

「高み・・・えと前に話して聞いた、お爺さんですか？」

「そつそ、そのクソジジイ、常に右手にいやがらあ、喧嘩しかり料理しかりな」

「その話だけでマンガが出来そうだぜ」

「フィクション丸出しだしな、ありえんわ・・・」

「でも、お爺さんのお話をしてる時、楽しそうにしています」

「ああ確かにな、妹さんの言う通りだ」

「ゲッ・・・マジか!？」

「はい」

「おう」

「マジかい・・・衝撃の事実・・・」

播磨のマンガの手伝いでした。

・  
・



その6

「よしっ・・・補修作業終わりっ」と

「すっすいませんいつも」

「気にしなさんな、かれんさんや困った時はお互い様ってなあ」

「マサナリ、終わッタなら、私とスパーをシロ」

「ああ？ 別にいいけど、つか俺レスリングのルール全然知らんとやけど？ なにパワーボムとか延髄蹴りとかありあり？」

「それはプロレスの方じゃないですか・・・私達がやっているのはアマレスですよ」

「私ハ構わん！！」

「あっいいんだ？ じゃ遠慮なく」

「えっホントにそれで始めちゃうんですか？ い、いいのかな？」

『カンッ！！』

「ハアアア!!」

『ドゥッ!!』

「おっナイスタックル、まっ倒れてはやらんけど・・・なっ!!」

『ヒョイツ!!』

「だらっしゃー!!」

『ドスンッ!!』

「ホントにパワーボムしちゃった!? ちよっララさん大丈夫!!」

「キユ~~~~!!」

「俺、勝ー利!!」

「ちよっとやり過ぎですよ〜」

「加減はしたってば、直ぐに目え覚めますよい」

「うっ~~~~ん」

「なっ?」

「あっよかった・・・もう、マサナリさん、さっきも言いましたけど、やっぱり過ぎだと思えます」

「イヤ・・・良い、イチジョー、寧ろ・・・ナンダ・・・少し、気持ち良かッタ・・・ポツ・・・」

「えっ!? ララ・・・さん? ちょっとマサナリさんコレどうするんですかっ!!」

「おっと、俺コレから特売に行かないといけない時間だから、じゃっ!!」

「逃げたーーーー!!」

ララ・ゴンザレスさん、新たな扉を開きました。

頑張れ一条さん、超頑張れ!!

以上です。

番外編っぽい感じ！その10（後書き）

後書き

はいスクールランブルでした。

スクールランブルもキャラがドッサリです。

またいつか続きやるかも？

さて次回は本編の予定です。

感想などありましたら是非！！

思い付きっばい感じ！ その2（前書き）

前書き

はい、本編の予定・・・だったのに、本編が思い浮かばずについてまた思い付いてしまいました。

活動報告でチラツとしたオリキャラ君です。

やはりご都合です。

お暇なればクスリを片手にどうぞ。

## 思い付きっぱい感じ！ その2

「ハア~~~~、とうとうコレで一人ぼつちやな・・・」

俺ン名前ば楯川 衛。

歳は17の高校生ばい。

俺ン住んでるとこば九州の田舎の方やけん、高校に行くんは電車で一時間はかかるばい、まっ俺ば体力付けるために、自転車で行つとお。

俺は父ちゃんと母ちゃんはおらん、母ちゃんは俺を産んで直ぐに亡くなつたらしい。

ものごころも付く前やつたけん、直接、顔は見た記憶はなか、やけん写真で見た母ちゃんは、美人やつた、マザコンやなかよ？

父ちゃんは、ゴツイ体に敵つい顔の人やつた、よくコレで美人の母ちゃんと結婚出来たと思うとつたが母ちゃんの方がベタ惚れやつたらしい。

世の中はわからんばい・・・と話ばズレたな、父ちゃんは消防士やつた、その中でも危険が多いレスキューの仕事をしよつた。

仕事に出かける父ちゃんば幼心にカツコよかったばい。

やけん、俺が5つになる時に仕事ば出かけた父ちゃんは、その足で帰ってくることはなかった、ビル火災で一人でも多く、一人でも・  
・・ そう言つて引き止める同僚の人を振り切つて・  
・・ 結局、自分一人以外は全員助けよつたと。

カツコよかばい、俺の誇りたい。

死んでしまふんはダメやけど。

やから俺は父ちゃんみたいに人を助けられる人に・  
・・ 守れる人になりたか。

自分の命も含めて。

父ちゃんも亡くなつてから俺は父ちゃん方の爺ちゃんと婆ちゃん  
のと一緒に暮らすことになつた。

母ちゃん方のもう亡くなつてたけんな。

爺ちゃんも婆ちゃんも優しか人やつた。

爺ちゃんはイタズラ好きで俺と一緒にイタズラしてよく婆ちゃん

に怒られとったけどな。

そんな爺ちゃんも俺が中学に上がるころに亡くなった。

あの時の婆ちゃんの。

「もう爺さんを叱ることはなかな・・・」

淋しそうな顔は胸が痛かった・・・。

それでも婆ちゃんは次の日から元気なそぶりで俺んことば育ててくれた。

強か人ばい。

その強か婆ちゃんも、昨日亡くなった・・・穏やかな顔やった。

色んな人が葬式に来てくれた、父ちゃんの時も母ちゃんの時も爺ちゃん時も、そして今日の婆ちゃん時も。

人柄やな・・・コレだけん人に慕われとったということや。

誇らしかあ。

やけん・・・コレで完全に俺ば一人ぼっちばい・・・身内はもうおらんけん。



下を向くと泣きそうになる・・・慌てて目をゴシゴシと擦り声を出して。

「俺はあのカツコよか父ちゃんの子で、強か婆ちゃんの子で、しっかりせんね!!」

自分に喝ば入れる。

そつたい、俺はあのカツコよくて強か人達の血が流れとお!!

落ち込んでばかりいたら笑われるばい!!

グツと前を見据えて歩き出す。

歩き出す道の先は光り輝くモノばあると信じて・・・。

つて、なんね？ ホントになんか光つとお？

暗いはずの田舎道にもかかわらず俺の目の前ば光りが差し込んできた。

そん光りに誘われるようフラフラと近寄っていたと。

そん光は俺が近づくと徐々に小さくなっていった・・・。

光は放つてたモンの正体はビー玉みたいな玉やった。

「なんやったとやるか？」

ツンツンとそのビー玉を突いてみた、するとビー玉は再び光り始めた……それはさっきよりずっと強か光りやった……。

光りの強さに思わず目ばつむる……。

次に目ば開けると、グニヤグニヤ景色が歪んどった。

「なんね一体!!」

わけもわからずに叫ぶ、今、持ってるビー玉が原因とやるか？

こいが爺ちゃんば言ってた神隠しとやるか？

まさか俺が神隠しは遭うとは……。

「って、のんき過ぎるばい俺!! どげんかせんな!!」

セルフでツツコミば入れる。

どげんかせんとイカンとは言ったものの……。

回りを見渡してん、やっぱり景色ば歪んどお。

どげんもこげんもイカンばい……。

「父ちゃん……コレ、どげんすればよかとやるか？」

思わず天国の父ちゃんに聞いてみた、答えは返ってこんとやけど・  
。。。

やけん、答えの変わりやなかとやるけど、小さな声が聞こえてきた。

「ウツ・・・エツ・・・ヒック・・・お父さん・・・」

女の子の泣き声・・・。

俺はそのままその泣き声を聞いてられんかった・・・。

やから俺はその泣き声を止めたくて、俺に止めることが出来るかわからんけど、止めたかったから、その泣き声の聞こえる方へ走り出したと・・・。

そして直ぐに転んだばい・・・。

情けなかあ・・・そう思いながら直ぐに立ち上がろうとして違和感に気付いた・・・地面についた手が小さかったと、まるで子供の手ばい・・・。

「ヒック・・・エック・・・」

ハッ!?

そげなことばどつでもよかるつもん。

泣いてる女の子が優先したい!!

浮かぶ疑問を投げ捨て、ひたすら走る、何度も転びながら……。

どれくらい走ったやるか？ 声が近づくとグニャグニャだった景色は徐々に元に戻っていった。

そしてグニャグニャとした景色が完全に元に戻ると、そこにはベ  
ンチで泣いとる、女の子がおった。

聞こえてきた泣き声はこの子やったとね……。

俺はその女の子に近づいて行って。

「なんで泣いてると？ 俺に話してみんね？」

「ふえっ……」

目を真っ赤にした女の子が俺を見る。

「ああ……目は真っ赤ぞ、せつかくの可愛い顔ば台なしばい」  
そう言いながらポケットからハンカチば出して涙を拭う。

女の子は少しだけ顔を赤らめると俺にされるがままに目元を拭わ  
れる。

幾つくらいやるか？ まだまだ小さかばい。

こげん小さか子がなして一人で泣いてたとやる。

「さっきも言ったけん、俺に話してみんね？」

「うっうん・・・あのね、あのね、なのは、は良い子でなくちゃいけないの・・・」

女の子・・・なのは、は詰まりながらも話してくれた・・・。

なのは、の父ちゃんが大ケガばしたらしい、それで家族ば、そんなことでズーンと重か空気になってしまったらしい。

そんな中、なのは、は家族に迷惑ば掛けんよう手が掛からないよう、良い子にならないとイカン、そう思ってたと・・・。

そして今日、手伝いばしようとして失敗ばしてしまった、どうしようもなくなつて家を飛び出してきたと・・・。

「なのは、は優しか子やね・・・やけんな、子供ば我が儘言ったり、甘えたりするのが普通たい」

「で、でもっ！ー！」

「でも、も、しかもなか・・・俺の婆ちゃんが言ってた、それが子供の仕事ばい、父ちゃんも言ってた、子供の我が儘が・・・甘えることが一番の親孝行たい」

「そうなの？」

「間違いなか!!」

不安そうな、なのは、に力強く頷いてみせる。

なのは、は幾分か気持ちば和らいだのか笑顔を見せてくれたと。

「うんうん、さっき泣き顔よか、ずーっと可愛いか、女の子は笑顔が一番ばい、そん笑顔ばあれば父ちゃんも直ぐに元気100倍たい!!」

「ほっホント?」

「きつと、そうたい!!」

こんな良か子が泣き顔で過ごすなんてことばあっちゃならん。

神さん、仏さん、なのは、の父ちゃんば助けてやって下さい。

どうか・・・どうか。。。

そんな俺の願いと同時に俺が持ってたビー玉が小さく光り出したと・・・光りは直ぐに収まったとやけど・・・。

「ふえっ? 今の何?」

「わからんばい・・・なんやったとやるか?」

ホントわけわからんことばかりばい……。

まっ今はわからんことば考えても仕方なか。

「なのは、もう夕暮れやけん、家に帰らんなら、送ってくけん、飛び出して来たとやる家人ば心配しとるよ」

「うっ……うん……あつ、えと名前……」

「ン？ ああ俺、まだ名前言ってなかったな、衛、楯川 衛ばい」

「衛……君？」

「そつたい」

今更ながら、自分の名前を教え、なのは、に案内されて、なのは、の家へと向かう。

その時に、なのは、の年が5つだと聞いて同時に俺ん年も5つくらいまで下がってることがわかったと……。

道理で子供みたいな手だと思った……。

ガツクリ肩を落としたら、なのは、が泣きそつな顔になったんで、慌てて気持ちば立て直した。

せっかく、なのは、ば元気になったとに、また泣き顔は見たくな

かしな。

やけん、どうしたもんやろか・・・まっどうにかなるばい。

考え過ぎるんは苦手たい。

「ついたよーー」

なのは、の家は喫茶店やった、中々、良い感じばい・・・俺ん田舎にはまずなか店やんね。

物珍しさから、中をジーーーーっと見てしまっ。

「どうしたの？」

「珍しいくてな、俺は田舎モンやからこんなシャレた店は珍しいかとよ」

あっあのケーキ美味そうばい。

食べたかあ・・・やけん金ば・・・。

チャラ・・・。

泣きとうなるほど少なかね・・・。



「食べたいの？」

「よかと！？ ハッ、なんでもなかよ、武士は食べねど高楊枝たい」

というより、こげな小さな子にたかるわけにはイカンやろ・・・  
まっ俺も今は子供やけど。

「そっそれより、中に入るばい」

「うっうん」

話しを逸らしがてら中に入るよう促す。

中に入ると直ぐに、なのは、に似てる女の人が駆け寄って来た。

「なのは、よかった・・・心配したわ・・・」

そん女の人は、なのはを抱き寄せる、目に涙は浮かべて。

やっぱり心配してたんやろな・・・。

「お母さん・・・ごめんなさい・・・」

「うっうん・・・うっうん・・・」

なのはの母ちゃんやったとね……。

暫く二人は抱き合っていたけど、なのは、の母ちゃんが俺に気付くと、なのは、に。

「えっと……この子は？」

「衛君！！」

なのは……それだけじゃわからんやろつ。

「どうも……俺の名前は楯川 衛、言います、なのは、とは……なんやろ友達になるんやろか？」

「衛君は友達なの！！」

友達と思っとなってくれたみたいばい。

「そう、なのは、のお友達なのね」

「です、で……うん、なのは？ 言いたいことばなかったとや？」

「ふえ？ あっ……でも」

「なのは……オマエん母ちゃんば、なのは、のことをこげん、涙が出るくらい思ってくれとるとよ？ 遠慮ばしちやイカンばい、さ

つきもいったとやる、子供の仕事ばなんやった？」

「えと・・・甘えること、と、わがママ・・・」

「そうたい!!」

俺となのは、のやり取りを静かに見てた、なのは、の母ちゃん・  
。。

そして、なのは、は俺に言ったことば？母ちゃんにぶつけたと。

なのは、ん母ちゃんは、シヨックば受け取ったけど、直ぐに、笑顔を作って、なのは、を撫でとった。

こん人も強くて優しくか人たいね。  
きつとコレで大丈夫ばい・・・。

そんな時、電話の音が鳴り響いた。

なのは、の母ちゃんがその電話に出る。

すると、なのは、の母ちゃんの顔がみるみる変わり笑いながら泣き出した。

電話をきると、なのは、の母ちゃんは心配そうに見てる、なのは、  
に。

「お父さんが目を覚ましたって」

「ホント!? ホント!」

嬉しい報せやった・・・二人はまた抱き合って泣いてた。

嬉し涙やったら、悪くなかね。

その後、なのは、の兄ちゃん、と姉ちゃんもやってきて、みんなで病院に行くことになった。

俺も何故か一緒に連れてってもらった。

なのは、が一緒に来てと言ったからだ。

「なして?」

「衛君が元気になるって言ったらホントに元気になったの、きつと衛君のおかげなの!!」

なのは、いわくそつという理由らしい。

正直買い被りやと思うんやけど・・・。

そう思いながらポケットに手を入れると、あのビー玉に触れた・・・。

まさか・・・なあ?

そして、なのは、の父ちゃんがいる病室へと入る。

大ケガと聞いてたけど、思ったより元気そうやった。

その姿に、なのはも、なのはの母ちゃんも、兄ちゃん、姉ちゃんも、泣いて喜んどった。

「あつ、ども・・・なのは、の友達の楯川 衛です」

俺が自己紹介した時、なのは、の父ちゃんは凄く驚いていた。

なんでも、目が覚める直前に聞こえた声が俺と同じ声だったらしい。

気になって、なんと言ったか覚えてるか聞いてみたら。

神さん、仏さん、なのは、の父ちゃんば助けてやって下さい。

どうか・・・どうか・・・。

そう聞こえたらしい。

思わずポケットから、あのビー玉を取り出す。

「あつ、それ、さっきピカーって光ってたビー玉」

なのは、の言う通り、このビー玉が光って、なのは、の父ちゃんは目を覚ました。

このビー玉は一体なんなんやろ？

「ああ〜さっぱりわからんことなつとお」

こんビー玉ば拾ってから不思議なことばかりたい。

とりあえず整理ばせんとな〜それに、クビをぐりんと捻つとお、なのは、ん家族にも事情は説明せんなら。

俺は今だに整理出来てないながらも、ビー玉を拾ってからのことば話したと。

・  
・  
・  
・

「あの〜信じられんですやろけど？ やけん、嘘やなかとです  
「！」

話し終わってみて、まず気付いたことは……ブツ飛び過ぎとい  
ひじよ。

こげな、こと子供の妄想以外にありえんばい……。

しかも俺は今は完全に子供やし……。

あつ、ここ都合がよかことに病院たいね、このまま入院コースやるか……。

静か、過ぎて悪い方向を考えてしまう。

「いや、衛君は嘘はついてないよ、少し驚いただけだ、実際、ボクもこうして元気なってるのが何よりの証拠さ」

「こげな嘘みたいな話、信じてくれるとですかっ!!」

良か人ばい。

まさか信じてもらえるとは……。

「やっぱり衛君のおかげだったの!!」

「いや、そいはわからんげな……やけん、こんビー玉ば、ホントになんなんやろ？ 不思議たい」

ビー玉を翳してみてもさっきみたいな光りは放たない。

わからんたい……。

「ところで衛君、キミはコレから行くあてはあるのかい？」

「家は帰ろう思ってます、えと……言うところなんやけど」

なのは、の父ちゃん、土郎さんの質問にそう答える。

ちなみに母ちゃんは桃子さん。

兄ちゃんは恭也さん、姉ちゃんば美由紀いう名前と。

「ふむ……桃子、聞いたことあるか？」

「ないわね」

「田舎やけん仕方なかとです、で、申し訳なかとですが、電車賃は貸してもらえんとやるか……いや、お金は家にあるけんサイフに小銭しかなかとです」

うわっ……かなり図々しいことば言っとお、俺。

そんな図々しい俺に土郎さんは。

「それよりも今日は家に泊まっていったらどうかな？ ボクも明日には退院できるみたいだし、明日、ボクが送っていくよ」

そう言ってくれた優しい人ばい。



やけん。

「イカンです、無理ばして、また倒れたら大変ばい!!」

「いや、もう体は本当によくなってるんだよ」

「やけん・・・むう・・・」

本音を言えばありがたかとやが・・・むう・・・。

「あの・・・喋り方でわかると思いますが近所やなかとですよ?」

「九州の方だね、何リハビリには丁度いいさ」

リハビリにしては厳しかと思うんやけど・・・。

「ホントに体は・・・」

「大丈夫」

ニッコリ笑う土郎さん。

「明日はみんなでドライブかしら?」

「桃子さん、ドライブいう距離やなかですよ!!」

のんき過ぎばよ。

「っていつか、まもちゃんって今、5歳児になってる子供だよね、色々大丈夫？」

「中坊の美由紀に言われたくなかつ、美由紀も子供やるつもり！」

「いやいや、実際まもちゃん子供だし」

「恭也もなんとか言ってるやらんねっ！！俺は17で年上ぞ！！」

「・・・いや完全に子供だろ？」

むうがアア~~~~~。

「衛君、子供の仕事は、なに？」

。なの・・・そのセリフばココで言うとは卑怯やなかるうか・・・

「あ・・・甘えることと、我が儘ばい・・・やけん俺は子供やなくて！..!」

結局、俺の主張は通らずにあまつさえ、桃子さんや美由紀にかいぐりかいくりされてしもうたと・・・。

屈辱ばい.....。

・  
・

・  
・  
その後は、士郎さんば残して、なのは、の家に一日お世話になる  
ことになったと。

「まもちゃん、一緒にお風呂入るっか？」

「何ば言つとおーと！！ 年頃の娘ば、そげんこつ簡単に言つたら  
イカンばい！！」

「あれれ、さっきは子供扱いしてたのに？」

「そげなことは知らん！！ 桃子さんからも言ってくれ」

「あら、私も入ろうかしら？ なのは、も一緒に入る？」

「うん！！」

「うん、じゃなかアアア！！ 俺は恭也と入るばい」

「むっ・・・わかった、父さんの件で礼もしないといけないしな」

別に俺は何かしたわけでも、なかとやが、その言葉にのっかり、  
恭也と風呂に入った。

「フツ・・・母さんに美由紀、それに、なのは、のあんな楽しそう  
な顔は久しぶりに見た」

「からかわれたコツチはたまらんばい……」

「ハハ、すまないな、だが、そうだな本当に久しぶりだ……全く俺は何をやっていたのか……」

「うゝむ、考え過ぎは体に毒とよ、元気になったんならそれでよろうもん」

「そうだな、フツ……しかし、本当に衛は、17だったのか？」

「何処を見て言うとおーと……」

いや、わかつとおーとやが。

チラツと自分の下半身を見る……。

悲しいくらいに子供ばい……。

「ククツ……ププツアハハハ!!」

「笑うんやなかつ!!」

二度目の屈辱ばい……。

男としてこげなほどの屈辱ば味わったのは初めてたい……。

そんなショックなことはあつて風呂から上がった俺は待ってたのはさらに……というか、半ば予想ばしてたことやっただけ、驚くことやつた。

それは……。

「えと、衛君が言つてた村？ 何処にあるか調べてみたけど……」

「なかとやる……ハア……予想ばしとつたけど……敵しかあ  
神隠し恐るべしやな。」

敵しかあ……。

「えつ衛君、お家なくなつちやつたの？」

「みたいやな……」

家どころか故郷まるごとやけんなあ……。

金ば小銭しかなかし……。

「まっなるようになる、ケセラセラばい！……」

「軽っ！？ まもちゃん軽すぎー！……」

「考えても仕方なかつ、こんくらいで落ち込んでたら、笑われるばい」

俺は、カツコよか父ちゃん、と強か婆ちゃんの血ば流れとるとよ。

「げなことで凹んでられんばい。」

「うん・・・じゃ衛君、家の子にならない？」

「そやね、それもよかたいね・・・って何ば言つとぉーと桃子さん！？」

思わずノリッコミ「この辺は爺ちゃんの血たいね・・・。」

「ふむ、となると衛は俺の弟になるのか？」

「じゃ私はお姉ちゃんだね」

「なのは、は？？」

「きさんら全員、俺より年下やろつがっ！..」

恭也、15、美由紀、13、なのは、5、俺は17。

桃子さんは知らんげな。

「フツ・・・アレで、か？」

あつ？ 今、恭也は俺ン下半身ば見て言いくさった？

しかも鼻で笑って？

ハハ・・・。

「仏の顔も三度までぞっ！！ ぼてくり、こかす！！」

いくら仏の衛さんと言われた俺でん、今は許せんばい！！

怒りを拳に込め恭也に殴りかかったと・・・。

「このっ、オラ！！ 今なら謝れば許してやるたい！！ どうねっ  
！！」

『ブンブン！！』

「届いてないがな」

クツ・・・そうたい、セリフば勢い良かったばってん、恭也に額は押さえられ俺の拳ば、ちっとも当たらん。

『ガクリ・・・』

膝から崩れ落ちたげな・・・。

「悔しかあ・・・もう悔しいかあ・・・やけん、泣かん、こげなこ  
とで泣いたら九州男子の名折ればい」

膝を叩きながら零れ落ちそうになる涙は耐えたと・・・。

「プツアハハハ、まもちゃん、面白っ！！」

「面白くなかつー！！」

「エへへ・・・」

「フフフ・・・」

「なのは、も桃子さんも笑うんや・・・」

そこまで言っつて、気付いたと・・・せつかく楽しそうに笑って  
るげな。

俺が泥ば被るくらい、なんちゃんなかよな。

「ハア・・・好きなだけ笑えばよか、笑う門には福は来るって爺ち  
やんが言っつてたばい」

そう呟いて楽しそうに笑う、みんなを見てたげな。



そして次の日、土郎さんば退院して、俺ン話ばしたと。

土郎さんも、俺に家の子にならないかと言ってくれた。

あてもなかった俺は、その言葉に甘えさせてもらった。

ただ……。

「申し訳なあ……俺ば楯川を名乗りたかです、父ちゃんと母ちゃん、爺ちゃんに婆ちゃんば名乗った楯川でいたかです……やけん、高町姓ば名乗れません、申し訳なあ……」

「ああ、わかつたよ」

俺ン我が儘に土郎さんも桃子さんも笑顔で頷いてくれた。

こげん行くあてがなか俺ば引き取ってくれた上に、そんな自分勝手な我が儘を聞いてくれた二人には……いや高町家の人達ば感謝してもしきれんです。

いつかきつと恩返しはしたか。

楯川 衛、元17歳……現在5歳の決意たい。

思い付きっばい感じ！ その2（後書き）

後書き

はい、一発系のオリ主君でした。

何故か博多弁・・・。

しかも微妙に間違ってるっばい。

まっまあそこは温い目で！！

感想などありましたら是非！！

次回こそは本編・・・だと思えます。

第六十三話っぽい感じ！（前書き）

前書き

今度こそ本編です。

長々話すのもアレなんで、えとクスリを持ってどどど。

## 第六十三話 っぽい感じ！

「モモーっちょっと来てー」

ララが上に居るモモを呼ぶ。

あつちなみにナナ、モモの二人は結城家の天井裏に空間を作って住んでいます。

例の歪曲なんちゃらってヤツですな。

たまにモモがスツパとは言わないが裸ワイシャツとやらで俺ンベツトに潜り込んできやがる。

当然、巻いています。

最近巻いても懲りないんで巻いた上で逆さに吊したりもしてるけど。

「どうしました？ お姉様、あら、お静さん？」

説明してる間にモモ、一緒にナナも下りてきた。

ララがモモを呼んだんは静がモモに用事があったからですな。

その用事ってのが。

「実は御門先生がポワポワ草という薬草を所望されていてまして、植物に詳しいモモさんがお持ちなら、ゆずって頂けないかと思って来たんです」

ってことです。

「ああ、ポワポワ草なら私の庭園で育ててるので、おゆずりしますよ」

「わー、ありがとうございますー!!」

あるらしい・・・つかモモよ。

「庭園って、ンもんあつたんかい？」

「ええ、マサナリさん今度見てみます？ お花も咲いてますから綺麗ですよ」

「そりゃいいねえ、花に囲まれて紅茶でもってか？ メルルヘンだな」

「メルルヘンって似合ねえー!!」

知ってるつうにナナよ。

「ララ様・・・」

ン？

「わっ！！？」

「ザ、ザステイン！？」

「オマエどうしたん！！ 病人まっしぐら並に顔色やべえーぞ！！」

静の後ろからヌツと現れたザステイン君、何時もの元気はどこへやらって感じに顔色が真っ青。

しかしザステインは、特に気にしてる様子もなく。

「ン？ 私の顔色がどうかしましたか？ あっ、それよりコレ・・・デビルーク王からいただいた三人分のお小遣です」

「えっ、あっ・・・うん」

「では、私はこれで・・・」

とララにお小遣を渡してふらふらしながら戻っていった。

つか・・・マジに大丈夫か？

「メシ食ってんのかアイツ？ いや食ってるはずだ・・・風邪？  
なんか違う気が・・・あゝ~~~~もう！！ 静、保健さんに連絡  
取ってくれ急患が一人入るって」

あのままほって置くワケにもイカン、ここはやはり保健さんの出番だろ。

本人自覚ないみたいだけど無理矢理引っ張ってきやいい。

「いえ・・・アレは・・・もしかしたら、マサナリさん、あの人、病気じゃなくて悪霊にとりつかれてるかも知れませんか！」

なぬっ!？

「「「えーーーーー!!?」「」」

・

・

・

「で、真相を確かめるべくザスティンのアパートに来たわけだが・・・」

「す・・・すごい靈気を感じます」

「コレは静の言。」

靈気・・・ねえ・・・ふむ。

「確かに言われてみりゃ、空気が妙だな、澱んでるつつか・・・なんつつか」

ハッキリとはわからんけど。

ドアの向こうからも。

『ゴゴゴゴ・・・』

って効果音が聞こえてくる気がするし。

とにかく突入してみつか。

『ガチャ・・・ギイイ』

ドアを開けた先には、マウルとブワッツがぶっ倒れてやがりました。

「マウル！ ブワッツ！！」

「オマエらどうしたよ！？」

コイツら、そこいらのチンピラや空き巣やらにやられっほどヤワじゃねえはずだぞ。

「ララ様、マサナリ様・・・た、隊長が・・・ガクッ」

それだけ言っただけで気を失ったマウル。

隊長ってザスティンだよな、つうことあザスティンが犯人？

「こりやますます、静ん言っただことに信憑性が出てきたな・・・」



ザステイン、下の面倒見はかなりいいし、むやみに、んなことするやっちゃんえはず。

多少、走り出したら止まらない時もあったけど。

『ガラッ！！』

「バカナリ、これ！！」

二人に気をとられてると、ナナが奥のドアを開けた。

その奥には、水着の女の子のポスター、まっグラビアだな、やら、魔女っ子ロリーなる謎のポスターやら、グラビア雑誌、女の子の人物、フィギュアだなどが散乱してました。

「クツ・・・何故にガ○プラが無え・・・ド○とか最高なのに・・・」

「マサナリさん、色々とズレてます」

ハッ！？ イカン、イカン。

にしても、ザステイン、居ることはいたんだが・・・。

「ハアハア・・・くくく・・・ひひひ・・・」

「エツちな本を見ていらっしやいますね・・・」

はいモモの言う通りザステイン、ハアハアしながら熱心にエロ本を見てました。

「まあ殿方ですし、たまっていらいしたんでしょうね、マサナリさんはいかが？」

「うむ・・・やっぱりー、二冊くらいは所持してた方が・・・って違うがな、オイ、コラ、ザステイン！！ エロ本読むなどは言わんが、まず片付けからしろっ！！」

もう、めっちゃめっちゃ散れてるがな。

ああ前にも掃除とか片付けは毎日しろって言ったつうのに。

「そうです、この部屋は不衛生です！！」

「って違うだろっ！？ さっき、お静ザステインに悪霊がどうとか言っただけじゃんか！！」

あっ・・・そうだった、ついつい、この散れてる部屋を見たら。

「ハッ！？ そうでした・・・ンッ、では改まって」

静、一旦咳ばらいしてからピシッとザステインを指差し。

「その人の体から出なさい悪霊っ！！ アナタの悪意が、その方の身体を蝕んでます！！」

中々、カツコイイな静。

「悪・・・霊？ はて・・・何の事です？」  
惚ける気らしい。

「惚けないでください、私の靈感はゴマかせませんよっ！！」  
それでも更に強く出る静。

いつもの静に比べて大分、ビツとしてんな。

そんな静に観念したのかザステインは、ゆらりと立ち上がると。

『ふ・・・くくく、そうか・・・せつかく馴染みやすいカラダを見つけて憑依したってのに・・・』

ザステインの声と知らないヤツの声が重なって聞こえやがる・・・

静、大正解ってか。

『んん？ でも、よく見たら、みんな、すんげー可愛い・・・』

ふむ・・・確かに、ララにナナモモ、静は可愛いわな。

「俺も含めて？」

『男は違えー!!』

でしょうね。

逆に俺も含めてだったらマジ気持ち悪いしな。

そんな俺のアレな考えは置いてザスティンに憑依してやがる悪霊は興奮したのか。

『たまらんぜあああ!!!!』

と叫びながら何故か上半身の服をバリンと弾き飛ばしました。

そんなザスティンに対してのみなさんのリアクションは微妙に冷たかった。

つか……。

「何故に期待に満ちた目で俺を見る」

「マサは脱がないの？」

「脱がねえーよ!!」

「でもほら、相手が脱いたらコチラも脱がないと、礼儀として」

「どんな世界の礼儀だっつーの!!」

「見たいような見たくねえーような、でもやっぱり見たいような・  
」

ナナはまだマシだと思いたい。

静はキョトンしてたけど、うん、そのリアクション実にホッとす  
る。

『何をゴチャゴチャ・・・とにかく、ちょっと、おっぱい見せる  
ー！ー！ー！』

そんな俺達のやり取りの中、興奮具合が増した悪霊は、ストレ  
ートに変態セリフを叫ぶ。

すると・・・。

『ギチツ・・・バツ！！』

「やんっ！！」

モモ、そして・・・。

『ボツ！！』

「わわっ！？」

ララの服の上が弾け飛び、胸が丸見え状態に。

『フヒャヒャー、俺様の念力でポロリだぜー！ー！』

念力って・・・なんじゃそりゃ？

『バツ！！ ビリッ！！』

そう思いつつも着ていたガクランを脱ぎ、二分割。

「そら、巻いてろ」

それを二人に手渡します。

「マサ・・・ありがとう」

「あっありがとうございませすマサナリさん」

「お気になさらず」

後で、縫わないとなあガクラン。

『てめーーっ、余計なことすんじゃねーよ！？』

「知るかボケっ！！」

突っ掛かってくる、悪霊操作型ザステイン、カウンターで顔面に蹴りを減り込ませようか考えたが・・・コレ、ザステインにダメージいくんかなあ。

と思つてちよいと戸惑つ。

『ベシッ！！』

『ぎっ！！』

するとザステインの横つツラに雑誌が飛んで来た、むろん雑誌はジ○ンプ。

いや、何がむろんかは知らんけど。

雑誌を飛ばした、つうか投げたのは……。

「おいっ正気に戻れよザステイン！！」

何故か念力の被害に遭わなかつたナナ。

にしても何故にナナは……。

『つるぺたにキョーミねーッス』

「なっ！？」

ああ、そういうことね……。

「てめーっ臣下の分際でっ！？　っていうかバカナリ、オマエも何、納得した顔してんだ、オマエ、ザステインの後でぶっ飛ばすからなっ！！」

俺を睨みながらもザスティンに飛び掛かるナナ。

いや、スンマセン、ついなるほどと。

まっぶつ飛ばされはしねえーけど。

『ピッ！！』

そんなナナを憑依型ザスティンが指差すと。

『フワッ』

「うわっ！？」

ふわりと空中に浮かぶナナ。

そして俺の方に突っ込んできやがりました。

一瞬、避けるか？ と考えたけど流石に可哀相なんで。

『ドッ！！』

「よっ」と

そのままキャッチ。

「さっサンキュー・・・って、オイ、いつまで抱きしめてんだっ！



「！」

いや別に抱きしめてるわけじゃねえーですけど。

まっ客観的に見たら抱きしめてるように……いや、どちらかっつてえと抱っこが正解か。

ララとモモが指をくわえて。

「『いいなあ』」

とか言っただがるし。

いいのかコレ？

まっいいさね、ナナがさっきからブンブン拳振り回してやがるし、とりあえず下ろそう。

「このっ！、いい加減当たれ！！ こんにやろっ！」

下ろした後もナナの攻撃はやみませんでした。

まあ全部、避けてるわけだけど。

『ワハハハ……ッ、触らせる……っ！……』

あっイカン、ナナとじゃれてる場合じゃなさそうだわ。

なんか憑依型ザスティンが、ララとモモに飛び掛かるうとしてやがっし。

しょーんな、ザスティンには後で詫び入れよう。

そう決めてカウンターのカンカキックを叩き込む態勢に入る。

そこへ静が。

「えいつ念力集中!!」

『ゴバァン!!』

『うおーっ!!』

不思議パワーで窓ごと憑依型ザスティンを外へと吹き飛ばす。

うん・・・そついや静って、ポルターガイスト的に、念力使えるって言ってたな。

つか・・・今、言うこつちゃねえーやも知らんが。

「コレ、やっぱり直すの俺か？」

俺だらうな・・・まっいいけど。

そんな疑問はさて置いて、事態はまだまだ進みます。

つてな感じで外に吹き飛ばしたザスティンを追って静が、破壊し

た窓があつた部分から。

「たあつ！！」

『バツ！！』

勇ましく跳ぶ！！

そして・・・顔から地面に落下・・・。

「あらよつと！！」

『バツ！！』

する寸前に俺も窓から跳んで先回りし、静を支える、足で。

で引き起こし。

「オマエ鈍いんだから無理すんなっつーの」

「うう・・・すみませんです、カッコイイかなくて」

気持ちはわからんでもねえーけど。

「ンツン・・・気を取り直して、アナタ！！ 女の人に乱暴するなんて許せません！！」

ビシッと憑依型ザステインを指差す静。

ただ・・・その言葉。

微妙に俺にも覚えがあったりするような気が無きにしてもあらず。

でもアレは指導だから、うん指導。

たまに八つ当たりの的なのもあったりするけど。

そこは優しくスルーをお願いします。

まっそのことはとりあえずは、そぉーい、して。

憑依型ザステイン、静の言葉に涙混じりに。

『うるせえ、オマエに俺の気持ちかわかるかっ!!--!』

ってほえ立てる。

続けて。

『生前500人の女にフラれた俺の気持ちがアアア!--!』

「しっ、500・・・」

静、目を点にして驚いてやがります。

しかし500か・・・ふむ。

「ギネスに申請してやるのか？」

『するなー！ー！？ 人の心があるのかオマエはっ！ー！』

「残念！ー！」

まっ勝手に申請しようか、とか思ってるけどケケケ。

「まっマサナリさん、凄く悪い顔してます」

おやま、どうやら顔に出てたらしい。

『くっそー、バカにしゃがってー！ー、チクショー、一回くらい生のおっぱい触りたかったー！ーっ！ー！』

ホント、ストレートに変態だな、コイツ、ある意味、男らしいと言えなくもねえーが。

「大人しくザステインから出てけえ、そして成仏しれ、あの世で彼女が出来るやも知らんぞ？ 限りなく低い確率やも知らんけど、とりあえず来世は諦めろ、きつとオマエの来世は便所コオロギだから」

間違いない。

少なくとも俺が閻魔様なら、便所コオロギにする。

『べっ便所コオロギだとオオオ！ー！』

「うん便所コオロギ、もしくはフンコロガシ、最悪、空き缶のプシ

ユって開けるアレ、プルタブだったけか？」

『もはや生物でもないだろオオオ!!』

変わりに静物だからいいんじゃないね。

「あっあのマサナリさん、いつ言い過ぎかなあって？」

「ああ!？ どこが？ 妥当だろうがよ？」

全く持って正当な評価だわ、俺的には。

「えつとおくもしかしてマサナリさん・・・怒ってます？」

ン？ ふむ・・・まっ流石に気付かれますか。

「まあよ、なんとかこう、緩い感じでいこうかなあと思ってたんだけどなあ・・・ザステインの体好き放題にされるわ、マウルにブワツツはやれてるわ、ララ、モモ、ナナに手を出されるわ・・・」

ああ・・・イライラする。

「テメエ、閻魔様の裁き待つ前に地獄、体験させてやるよ・・・」

『ビキビキッ』

『ヒッ!..?』

「はわわわ・・・」

ギロツとザステインに憑依してるクソボケを睨む。

あくまでザステインじゃなく憑依してるクソボケをだ。

上ではララ達が。

「まっマサ怒っちゃった……」

「ひっ久しぶりに見ましたけど、やっぱり凄い迫力ですね」

「あっああ、やっぱりアイツ怒らすと怖え……」

とか言ってるのが聞こえる。

さて……コイツ、マジでどうしてくれようか？

まずはザステインの体から出ていってもらわねえーと、いけねえーし。

どうやって？

ザステインには悪いが、ザステインごとボコるか？

いや流石にそれは最後の手段だな。

極力したくねえし。

「静……」

「はっ、は、は、はい……」

って静、半泣きだし、少し落ち着こう。

フウ……

深く息を吐く。

よしっ少しは落ち着いたはず。

で、小声で静に。

「ザステインの体から、憑依してやがるクソボケって、どうやった  
らたたき出せる？」

「えっ……えと……あっ！？ 思い付きました！！ あのマサ  
ナリさん、私があんとか引っ張り出しますから、それまでは黙って  
見ててください」

ふむ、作戦を思い付いたみてえだな。

どんな作戦かは知らんが……。

「危ねえと思ったら手を出さずぞ」

「大丈夫です、私を信じてください！！」



さっきまでビビってたのに、今はグッと俺の目を見ながら力強く  
そう言う静。

そこまで強え目で見られちゃ信じねえわけにはいかねえーわな。

「たのんだぜ」

「はいっ！！」

トンと静の二の腕部分に拳を当てる。

静はそれに強く頷くと、ザスティンに憑依してやがるクソボケの  
前に踏み出し。

「えと・・・む、胸を触れればいいんですね？」

『えっ？』

さっきまでガタブルしてやがったクセに静の言葉に反応する、ザ  
スティンに憑依中のクソボケ。

俺も思わず、オマエ何言ってるの？ と言うところだったが、静を  
信じて我慢。

すると静は更に一步、ザスティンに憑依してるクソボケに近づき  
ながら、制服の上着のボタンを外し。

「わ、私の身体は人工体ですけど、普通の人と変わらないです、そ

れでアナタが満足して、その身体から出てくれるなら……」

『ファサ……』

上着を脱いでブラウス姿になる静。

「私の……身体で……」

そんな静に上からナナが。

「お静っ！？ バカナリ、オマエ止め……バカナリ？」

『ギチギチ……』

我慢我慢……静に考えがあつてのことだ我慢だ……。

なんか口から赤いのが垂れてきてたり、グツと握った拳からポタポタ地面にトマトジュース的なのが落ちてるけど、我慢。

そんな俺を見てナナは、それ以上は言わない。

ザスティンに憑依中クソボケが、ビクつきながら俺を見てたんで。

「手は出さねーよ」

静を信じるって言ったしな、手は出さん。

その言葉に安心したのか。

『うほーっ！』

と、変態的奇声を上げる。

「さあ・・・触ってください・・・」

静は目を閉じて、グツと胸をクソボケに突き出した。

まだ我慢、我慢だぞ・・・。

『ハアハア・・・では、遠慮なく・・・』

手をワキワキさせながら静の胸に手を伸ばすクソボケ、その手が静の手に触れる・・・。

寸前で、静は、クソボケを腕を掴むと、幽体離脱しながら。

『えーっ！っ！っ！』

『又ルン！っ！』

と、ザステインの体に憑依していたクソボケを引きずり出した。

『な、な、な何だアーーー！？』

中から出て来たのは眼鏡を掛けてデブいクソブタ。

「オオオア！っ！」

『ゴキヤツ！！』

そのクソブタの顔面に跳び蹴りを叩き込む。

『ブヒッ・・・て、手を出さないんじゃないのかっ！！』

ククッ・・・このブタは何を言ってやがるのか？

「出したのは足だ、手は出てねえ」

『そっそんな、っていつか何故、幽霊の俺につ！？』

「さあ、知らねえなあ？ どうでもいいだろ、テメエは今から地獄に出荷されんだからよおブタ君」

一歩一歩ニタリ笑いでブタに近付く。

『ヒッ・・・おっ女、オマエも、騙したんだな女はやっぱり嘘っ』

こんクソブタ、かなりふざけたことを言いくさりやがるな。

『ドガッ！！』

クソブタのデブった腹に蹴り。

『ブヒッ』

そして・・・。



ぎます・・・」

「というより味方と敵で違うが正解じゃなかなあど？」

「うんうん」

「でもザステインや私達の為に怒ってくれてるし・・・怒ったマサは怖けど・・・」

ザステインに気をかけてる間になされたララ達の会話より。

あつザステインは全然・・・とは言わないが大丈夫だったぞ、静も大丈夫だったし。

若干、体が重いか言ってたけど、もし続くようだったら保健さんのところに行くよう言っていた。

「私が不甲斐ばかりに・・・しかし、そんな私にそのような言葉を掛けていただくとは・・・このザステイン、一生着いて行きますぞっ！・・・」

その時のザステインはこんな感じ。

まっ何時も通りに戻ってホッとしたわな。

コレでこそザステイン。

と、こうして、悪霊騒動は幕を閉じたのであります。

とっぴんぱらりのぷ〜。

・  
・  
・  
・

あつ、もうちょい？ 半端だった？

うむ、じゃもうちょい。

あの幽霊騒ぎ以降、静の元に。

『最近、夜な夜な悪さをしてる幽霊がいるんだけど、どうにかしてくれないだろうか？』

とか、そういう依頼が舞い込むようになり。

ちなみに頼んでものも幽霊だったりする。

「あつまサナリさん、あの、えと、お手伝いを・・・」

「あいよっ」

で、俺も静の手伝いな感じのことをちよくちよくするようになった。

まっ幽霊と見えるし、触れるし、荒事になった静・・・でも大丈夫だろけど心配ちゃ心配だしな。

ふむ・・・。

「なんか俺、主人公っぽくない？」

「えっ？ マサナリさん元から主人公ですよ？」

メタな会話をしながら依頼現場に行く俺と静の靈感コンビでした。

「・・・マサナリの相棒は私です」

コッソリ見てたヤミはスルーした。

今度こそ、とっぴんぱらりのぷ。



第六十三話っぽい感じ！（後書き）

後書き

う〜〜〜む、最後の部分カットするか迷ったです。

でも半端でしたんで、GOしました。

つかマサ・・・なんか悪役っぽいな相変わらず・・・。

ンッン・・・えと次回は・・・以下略です。

えと感想などありましたら是非！！

第六十四話っぽい感じ！（前書き）

前書き

なんか駆け足気味。

どうにも上手くない感じですが、頑張りましたのでクスリを  
持ってどうぞー！ー！

## 第六十四話 っぽい感じ！

「ゆ……結城さん！ オ……オレと付き合ってください！！！」

「えっと……ゴメンなさい」

「そ、そんなーっ！！！」

「すげー！」

「C組の大好きくんまで撃沈！」

「つゝか、付き合ってたって、最近の小学生って進んでんのな」

「いやはやビックリだわ、うん。」

「あつ、どうもマサです、ただ今、俺、美柑の通ってる小学校に潜入中。」

「まっ潜入つっても用事はちゃんとあつたんで不法侵入じゃないから、その辺りはあしからず。」

「ちなみに用事つゝのは、晴先生に頼まれてた才培のオツチャンのサイン本届け。」

「で、職員室の場所を聞く為に美柑を探したら、美柑が何やら少年Oに呼び出されてたんで気になりこうして隠れて見てたワケです。」

「それがまさか、告白の現場とは思わなんだけど。」

以上、軽く状況説明終わり。

「最近は小学生でも付き合ってる子とかもいるけど」

「うんうん」

「ほえ〜コレも時代の流れか〜、おっさん、も年をとったモンだけ」

「おっさんって・・・まだ若いように見えるけど」

「まっ現役高校生だしな、しかも一年」

「そうなんですか？」

「そうなんですよ、あっちなみに今、会話してるこの二人、俺が隠れようとした場所にいた、先住民の方々です」

「先住民って・・・」

「なんか違うような？」

「声に出てたらしい、まっ確かに違うような気はする、でもニユア  
ンスはそんな感じ。」

「っていつか・・・」

「えっと、どちらさまっ？」

まっ当然の質問ですわな、随分と時間差だったけど。

「結城家、居候2号だ、あっ一応、不審者じゃねえから、って、今のこの隠れてる感じ完全に不審者のそれだけど、ユー達を含め」

「そう言われてみれば・・・」

「確かに怪しいかも私達も含め」

コトと次第によっては青い服の国家権力を召喚されかねんなコレ。

まっ逃げ切る自信はあっしツテもあるから召喚されても大丈夫だろけど。

にしても・・・。

「美柑君、モテますな〜、ちよつと目を離してるスキに二人目が現れてんぞ？」

「あっ・・・ホントだ!! 今度はB組の」

「好田くん？」

さて、その好田君とやらの結果は・・・。

「ゴメンなさい!..!」

「そんな~~~~~!?!」

残念無念、つか、散り際のセリフがさっきの少年Oと同じだな。

「おお~~~~好田くんも惨敗か~~~~」

「あ~~~~」

まっ人生そついうコトもあるよ、好田くんとやら、強く生きろよ。

と、若干、無責任なコトを考えつつ、何時までもこうしてるワケにもイカンってコトで。

ササツ、とNINJA風味の隠密で美柑の背後をとり。

トントン美柑の肩を叩く。

「誰?」

振り返る美柑。

が、しかし、そこに俺の姿はない、またまた背後に回ってます。

で、再びトントン。

「えっ? はっ?」

再び以下略。

計三回くらい繰り返した所で。

「マサさん？」

流石にバレた。

「うむ、マサさんだ」

バレたからには仕方ねえーってなノリで、素直に頷く。

「えっと・・・なんでマサさんが？ っていうか見てた？」

「うむ、ガッツリ、あそこに潜んでるヤツらと」

ビツとさっきまでいた場所を指差す。

「やつほ～～美柑！！」

「アハハ美柑ちゃん、ゴメンね～～」

「たえちゃん！ やえちゃん！？」

どうやら、あの二人、たえ、と、やえ、と言っらしい。

「あっそれと俺が何故にいるかつつと、晴先生にサイン届けにな  
「？」

「へっ？ サイン？ あっ、お父さんの」

「それそれ」

ビックリ顔の美柑にさらに説明。

「な・・・何もわざわざ学校に届けにこなくても・・・私に言えば明日、渡したのに」

「いや、折角だし、どうせヒマだったしな」

それに、こつこつうんは早く手に入れたいモンだろうし、欲しいヤツにはとっては。

「って、お～～～い、私達、ほったらかし？」

「あつ、ゴメン！！」

「スマン、スマン」

美柑と一緒に謝るとききます。

「って、そうだった！！ マサさんも見てたって言ったよね？」

「うむ、見てたが、いや～～～ホント美柑モテるな？」

俺がそう返すと美柑君、何やら、わたわたと手を振りながら。

「かつ勘違いしちゃダメだからね！ クラスの男の子と付き合つてか絶対にならないから！！」

なんか必死ッスね。



「美柑ちゃんムキになってる〜〜〜もしかして〜〜」

何やら俺と美柑を見比べてる・・・多分、コッチが、やえ。

「えっ？ そっいうコト？ そうなの美柑？」

「うっ！？」

いやさ、たえ（多分）さんや、そっいうコトって、どっいっうっ  
ちや？

「へえ〜へえ〜」

「なんね？ 人の顔ジロジロと見てからに？ そんなに人相悪いか  
ね？」

「うん悪い」

「うん、ちょっと・・・」

知ってるけどね。

「もっ、もう、いいでしょマサさん晴子先生にサインを渡すんだよ  
ね、職員室に行こー！」

「あいあい」

なにやら赤くなった美柑に引きずられ。

「美柑〜〜頑張れ〜〜」

「美柑ちゃんなら絶対大丈夫だよ!!」

そんな二人の声を背に受けて職員室へとGOします。

「もう二人とも・・・まあ頑張るけど・・・」

なんか美柑も頑張るらしい。

・  
・  
・  
・

「あ、あ、ありがとうございます〜〜!! やったあ〜〜、才培先生のサイン〜〜」

美柑に案内されてやってきた職員室、晴先生を発見し、早速、サイン本を渡したら、こんな感じで、はしゃいどります。

「晴子先生、嬉しいそうだね」

「だなあ、いやはや、持って来て良かったわい」

まあ微妙に晴先生のティーチャー仲間から温い目で見られたりし

てるわけだが……。

フと……。

「なあ美柑君、もしか俺も、たまあゝにあんな目えで見られたりしてる?」

「ううん」

おっ? 大丈夫だったよう……。

「結構、頻繁」

「そーっすか……」

やっぱり見られてたらしい、頻繁に。

少しくらいは気をつけようかなあと思ったけど、多分、気をつけただとこで、どうにもならんような気もしたんでそこいらに、転がしといた。

「じゃ、帰んべえ」

「そうだね、晴子先生、暫く納まらなそうだし」

今だにキャツキャしてる晴先生を残し、小学校を後に。

「そついや、醤油ってまだ大丈夫だったか？」

「うん、まだ大丈夫だったよ、けど砂糖がもうきれそうだったかな？」

「じゃ買ってくか」

美柑と並んで歩く帰り道、台所的な話題になる。

で自然、晩メシのメニュー辺りに会話が移行。

「今日は何すつかねえ・・・炊き込みとソバでも作るか？」

「ソバってまたマサさんが打つの？」

「おうよっ！！ やっぱ手打ちだろ？」

はい、俺、ひそかにソバとか打てますねん。

まっ職人って程じゃねえーだろうけど、そこそこに良いソバ打つぜえ。

「そっかあ、楽しみ！！」

「おう、今日はゆず粉でイクぜえ」

前回は茶ソバだったからな。

ってわけで、材料やら、砂糖やらを買いにGO。

で帰宅した後、早速ソバ打ち。

物珍しさからか、ナナ、モモの二人が見学に下りてきた。

でナナがやりたそうにしてたんで。

「やるか？」

「いいのか!!」

「おう!! じゃ手洗ってきな? で、頭に帽子とかかぶれ、髪の毛が落ちるからよ」

「わかった!!」

ドタドタと準備に向かうナナです。

結局それが合図になり、みんなでソバ打ちすることになりました。

まっ、ナナとモモ以外はやったことあんだけどな。

で、完成。

本日のメニューは、炊き込みご飯に、手打ちソバ、そして、天ぷら

らでした。

うまうま、だった。

そして翌日。

学校にて。

「マズイ・・・非常にマズイ・・・」

俺、かなりマズイ状態に追い込まれました。

本日、休み時間にジイちゃん先生に呼出しを喰らい、仕事とか関係じゃねえ呼出して久々、とか思いつつ、職員室に行ったわけ  
あります。

ジイちゃん先生から告げられたことは・・・。

「このままの成績だったら、進級は厳しいでふ・・・」  
でした。

次のテストで、赤が一つでもあれば、アウトー！！

らしいッス・・・。

『ガラッ』

「マサ〜、お爺ちゃん先生、なんだったの〜？」

どうしようか、いや、まあ勉強するつかねえんだが、どういっぴらんすべきかを考えながら教室に入るとララが声を掛けてきた。

「うむ・・・下手したら俺、後輩になるやもしれん・・・」

「ふえ？」

微妙に意味がわかってなさそうなララ。

そりゃそつか・・・なんやかんやで宇宙の人だし、成績はトップクラスだけど。

「俺、留年の危機！！」

バーンッ！！ と効果音がつく感じで言ってみた。

「りゅーねん？」

「うむ、まあよつするに、オマエ、成績がアレ過ぎだから、もっかい一年やれ！！ ってこと」

まあ成績だけじゃねえパターンもあんだけど、今回の俺はコツチ。

って冷静に言ってる場合じゃねえーような気がする。

さっきも言ったけど非常にマズイツウの。

「つつわけで、唯先生ー勉強教えてくんろー!!」

唯に泣き付くことにした。

「ハア・・・普段からマジメにしないから、そうなるんでしょ」

正論過ぎるぜ・・・。

実際、こうして困ってるし。

「あつ効いてるわね・・・もう、それじゃマサ君、今日の放課後から勉強するわよ」

「ウツス、頑張るツス」

こうして、俺、進級へ向けての勉強、大・作・戦、が実行されることになり。

あっという間に進級を賭けたテストまでの時間が飛びました。



いや、勉強のアレが面倒だったとか、そんなんじゃないから。

一回やったし？ いや一回って何かは知らんけど。

まあ甲が乙して何した結果ってことで。

結果はギリギリでセーフだった。

唯先生に感謝！！

と、そんなこんなで二年に上がることが決まりつつ。

3月6日。

本日はなんと・・・春菜の誕生日でございます。

その前に正月とかはどうしたとかそういうコミは無しの方  
向  
で。

まっとにかく本日は春菜の誕生日なわけでございますよ。

ってなわけで春菜の誕生日会。

会場は春菜ん家。

余り大人数で押しかけれるんもアレってわけでメンツは絞って、俺、リト、ララ、里沙未央……で。

「なんでオマエが居んの？」

「セッティングしたの俺じゃん!!」

エテ山です。

まっ確かにセッティングしたのコイツなんだよな。

「ご苦労だったな、お帰りはアチラだ」

ビツと外を指差す。

「ヒドッ!?!」

「ホント猿山に容赦ないなマサ……」

うん、今だにそんなに好きじゃないからね。

まっでも。

「三割冗談だ」

つつといた、流石に少しだけ可哀相だし。

「まつ猿山は処遇はどうでもいいとして何時までもコロコロにいても仕方ないし、呼び鈴鳴らすよ〜ん」

『ピンポーン!〜!』

里沙がステキに毒を吐きつつ呼び鈴を鳴らす。

『ガチャ』

「はい、いらっしゃーい」

直ぐに出てくる春菜です。

「やつほー春菜!」

「来たよ〜ん!」

こんな感じでアイサツをかわす女の子組。

その裏で猿山がコッソリ、リトに。

「へへ・・・感謝しろよリト、俺が鞆岡たちと西連寺の誕生パーティーセッティングしたおかげでこうして家に入れるんだからな!」

と耳打ち。

まっ確かにそうっっちゃそうだな。

リトも、わかってるって、って言うてるし。

まっとりあえずは。

「中に入るべえ」

ララ達も先に入ってるしな。

で中に入ったら即効で。

「ワン、ワンッ！！」

面白え顔の犬が突撃してきた。

そっいや春菜って犬、飼ってるっつてたやな。

道理で静が不参加だったわけだ。

あっ一応は補足、静は犬がめっちゃめっちゃ苦手なのだ。

自慢の念力が暴走するくらいに。

でもま、昨日コツチに不参加のメンツで祝いをしたらしいぞ。

ララに飛び付いてペロペロしてる犬。

「あっマロンだ」

「知ってんのリト？」

「ン？ あっああ、一回、会ったことあるし」

リト君、面識があったようすな。

「！！」

おやつ？ なんかめっさりトを見てんな。

「ガウツ、ガウツ！！」

「うわっ、やっぱりかよ！！」

スゲエ吠えられてるし、つか、やっぱりって前に会ったって時も、  
こうだったんだろか？

続いて俺を見るマロン君。

「キユ~~~~ン」

俺には吠えずに腹を見せて服従のポーズ。

「なんでマサは？ いや、わかるけど」

飼い犬とはいえ、野性的なカンでも働いたんかねえ。

「ほれ、そんなポーズばとらんでよか、後、リトに吠えるな、エテ

山にはいくら吠えてもいいけど」

「俺はいいのかよっ！！」

むろんですがな。

っと、イカン、イカン。

主役がほったらかしやがな、つつわけで、春菜が待つ居間に。

そして。

『パン、パパン！！』

「「「「誕生日おめでとーー春菜ちやん（西連寺）ーー！！」」」」

鳴り響くクラッカーの音+俺達の声。

そしてパチパチと拍手する音。

「ありがとう」

ニッコリ笑顔の春菜。

うむうむナイススマイル！！

えととと。。。。

「春菜、キッチン借りていいかあ？」

「えっ？ マサ君が何か作るの？」

「おうっ、ケーキは買ってきたヤツだけど、ケーキだけじゃなっつうわけで作ります、コレが俺から誕生日プレゼントってことですか？」

「うん、ありがとうマサ君！！」

うむ、嬉しそうだな。

さて許可も得られたし。

「マロン、案内よろしく」

「ワフッ！！」

マロンに案内されてキッチンへと向かったのだった。

・  
・  
・  
・

リト視点

春菜ちゃんの誕生日。

マサは料理をプレゼントにするって行ってキッチンへ行った。

だから材料とか買って来たんだな。

俺もちゃんと持ってきたけど……。

俺が持ってきたプレゼントはヘアピン、飾りの部分とかは自分で作ってみたから、半分は手作りだったりする。

気にいってくれるかな……。

大丈夫だよな、うん!!

「さーて、盛り上がってきた所で、みんな聞いてくれイ、今日はいもの持ってきたんだ!!」

ン、猿山？

「おー、なにになに?」

「ジャジャーン、定番ゲーム『カラーツイスト』!!」

効果音つきで猿山がバツクから取り出したのはカラーツイスト。

「あ、それ知ってるー何げにハマるよね」

猿山が出したカラーツイストに沢田がそんなリアクションをする。

俺も一応、知ってると言えば知ってる、やったことはないけど。



「え？ なになにに、どんなゲーム？」

でも、やっぱりっていうかララは知らないらしい。

流石に宇宙にはないんだなコレって。

そんなララに沢田が。

「まあ簡単に言うと、ルーレットに従って示された色の上に手足を置いていって倒れないようにするゲームだよ」

と説明。

確かそんな感じのルールだったな、ララへの説明だけど俺も詳しくは知らなかったし聞いておいた。

（フッフ・・・上手くいけば女の子と絡みあってドキドキなゲーム、都合よくマサはいないし、俺の狙いはララちゃんだぜ！！）

ってなんだろ？ 猿山がものスゲエ不穏なことを考えてる気がする・・・つか、ちょっとだけ口に出てたような。

鼻息もスゲエ荒いし。

「よし、まずは俺と！ー！」

「じゃあさ、リト、春菜、一緒にやってみよー!」

「「へ?」」

おっ俺?

つか猿山ほつたらかし?

「里沙、未央、後で替わるからルーレット、お願い!」

ほつたらかしらしい。

「ちょ・・・待って・・・」

とか猿山が言ってるけど完全にスルーだし。

初岡達も。

「いいよー!」

「二人でやるのが定番だけど三人ってのも面白いかもね!」

猿山スルー。

提案したの猿山なのに・・・少し可哀相な気がした。

「じゃあ、三人ともシートの上立って!」

そんな猿山はおいて進むみたいだ。

昴岡に言われたままにシートの上に立つ、俺に春菜ちゃん、ララ。

「俺、このゲームやった事、ねーんだけど」

「私も・・・」

春菜ちゃんもやったことないみたい。

「大丈夫、大丈夫ホント簡単なんだから、じゃルーレット回すよー」

昴岡がカラカラと笑いながら、そう言いルーレットを回す。

「右手、黄！！ はい、みんな、右手を黄色の所においてー！」

昴岡の指示に。

「よつとー！！」

「はいっー！！」

「んー！！」

俺、ララ、春菜ちゃんが、従ってシートの黄色の所に右手をおく。

なるほどな、確かに言ってた通り簡単だな。

俺のその気楽な考えは直ぐに崩れることになった・・・。

ゲームが進むにつれて、ドンドン態勢がキツくなってくるのはもちろんだけど、それより。

『ムニユ』

頭の上にララの胸が乗っかってるし、目の前には春菜ちゃんの手モモが……。

これは危険過ぎるだろ！！

なんか猿山がこのゲームを持ってきたワケがわかったような気がする。

っていつか辛ええー！！

色んな意味で限界が近いんだけどー！！

「フフフ……結城、いい表情かおしてるウ〜」

「もっ初岡、たっ楽しんでないで早くルーレット回せー！！」

もうかなり限界だっつーの！！

「ン〜ン〜、それが人にモノを頼む態度かなあ〜？ ほら、お願いします、でしょ？」

なっ……。

なんて意地悪な顔してんだチクシヨー。

「ほらほら早くウ~~~~」

クツ……仕方ねえ。

「お……お願い……します」

クソーー、なんかスゲエ悔しいぞ!!

「よく出来ましたア、じゃあ次は……右手、赤!!」

赤!?

赤は……アソコしかねえーけど……手をおければ少しは楽な態勢になれるかも。

よしっ!!--

「むぎ~~~~~!!--」

赤の所に必死に手を伸ばす。

あと少し・・・あと少・・・。

『ガチャ！！』

「ウイー、出来たぜえ！！」

へっ？

「どわっ！？」

「きゃっ！！」

「あっ！！」

『ドチャッ！！』

・  
・  
・  
・

マサ視点

料理を作り終わって居間に戻って来たら、リト、ララ、春菜がく  
んずほぐれつの状態で崩れ落ちてた。

はて？

よく見てみたら、崩れ落ちた三人の下には、赤とか黄色とか色付きの円が書いてあるシート。

ふむ・・・ツイスターゲームをしてたワケか？

ってことは、もしか俺。

「邪魔した？」

「うん、もうマサマサ、タイミング悪いよ」

「空気の読めなさには定評があるからね、って、ほれ、いつまで、くんずほぐれつなんだ、テーブルよろ」

未央の言葉には、寧ろ開き直ってそう答えとききました。

そして俺の言葉に、わたわた、しながら離れるリト&春菜、ララは何時も通りな感じだったけど。

つか、目線が俺が手に持ってる料理に集中してるし。

具体的にはタマゴ焼き。

ララの好物だったしな。

でテーブルを設置させて料理を並べ、みんなで食います。

中々につまつま。

「あつ結構、量作ったから余ったら晩メシに回すようない」

「うん、ありがと、お姉ちゃんと食べるね!!」

そついや春菜、姉がいるつつつてたな。

そんな感じで料理も食い終わり。

「じゃマサマサもツイスターしよう!! 今度は私と未央とマサマサねえ」

と、ツイスターゲームをする感じに。

つかエテ山はスルーなんだな。

まっエテ山だから別によかけど。

でツイスターゲーム中に。

「秘技、関節外し!!」

を披露したらドン引きされた、残念です。

こんな感じでしたばらく遊び、そろそろ帰るつつ時間帯に。

帰り際にリトが春菜にプレゼントを渡してた。



春菜、めっちゃ嬉しそうだった。

うむうむ頑張れりト……！

と、こうして春菜の誕生日会は終了したのでした。

第六十四話っぽい感じ！（後書き）

後書き

色々とすっ飛ばし、次回辺りから二年生になる・・・予定？

まあ変わらない感じのノリでイクでしょうけど。

ではまた次回。

感想などありましたら是非！！

番外編っばい感じ！その11（前書き）

前書き

番外の多さ・・・それすなわち、アッチもソッチもいっばい、いっばい・・・。

例によってセリフと擬音。

ですが頑張りましたので痛み止めを持ってどうぞ。

## 番外編っぽい感じ！その11

くもしも、ダ・カーポ世界だったら・2」

その1

「まさか、お姉ちゃんがOKを出すなんて思わなかったよ」

「ン？ そんなに意外だった？」

「うん、ほら、マサ君って、なんていうか、その」

「確かに怪しさの塊だらけだね、それでも、どことなく、あの子は信じられそうな気がしてね、ことり、だってそうだろう？」

「うっうん」

「それに顔に似合わず悪い子じゃなさそうだしね」

「うんうん、それはホントにそう思うよ」

ってわけで前回の続きです。

マサはなんやかんやで、住家をゲットしたようです。

そしてマサがない時の白河姉妹の会話でした。

・ ・ ・ ・

その2

『バサツ！！』

「ククク・・・フフフ・・・ファーハーツハハハ！！」

「おっ、お姉ちゃん・・・マサ君どうしたの？」

「いっいや、私の助手をさせようと思って白衣を着せたら、こっぴな  
った」

『バサツバサツ！！』

「フハハハツ！！ やっべ超楽しい！！」

『バサツバサツ！！』

「なれてきたら・・・ちよっとカワイイかも」

「ことり、正気！？」

「えっだってなんか・・・」

『バサツバサツ！！』

「ワツハハハ！！ スゲエ楽しい！！」

『バサツバサツ！！』

「ねっ？」

「うっうん・・・まあ少しはカワイイか？」

マサ、暦先生の助手をするようです。

そして白衣をバサツが気に入ったようです。

・  
・  
・  
・

その  
3

「マサ、ロービー」

「ほごほご……」

「ふう〜、美味しい、美味しいコーヒーがあると仕事も捗るね」

「そいつあよござんした、して次、何かすることあねえーの？」

「クラスに配るプリントは？」

「もう刷ったぞ」

「それじゃ、することないわ・・・ヒマだったら散歩でもして来るといいよ、ただ教室に入ったらダメだからね」

「むっ、ダメなん、ことり、のクラスに襲撃かけようと思ったのに」

「ダメ、後、学園から出るのもアウトね」

「うい了解〜、じゃテケトーにぶらついてきますわ」

『ガラッ』

・  
・  
・  
・

『キンコーンカーンコーン!!』

「おっ？ 休み時間が、よし、休み時間だったら襲撃かけてもいいだろ、多分!!」

「襲撃ってどこに襲撃するつもりですか？　っていつか不審者ですか？」

「ことり、のクラスに……って不審者じゃねえつうに」

「あれ？　今の声……あ~~~~ッ！！マサナリさん！！」

「よう、美春！！」

「なっなんで白衣きて学校でうろついてるんですか！？」

「助手だから」

「はい？」

「助手だから」

「いや、だから、わかんないですよ」

「ふむ、暦先生、ってわかるか？　ことり、の姉ちゃん」

「あ~~~~、白河先生ですね」

「そっ、その白河先生の助手」

「なるほど、だから白衣！！」

「そっそ、カッコイイべ」



『バサツバサツ！！』

「おお~~~~！！　なんか悪の組織の幹部みたいです〜研究担当の

「だろ~~~~フハハハ！！」

『バサツバサツ！！』

「やっぱりカワイイかも・・・」

マサ、散歩中に美春と遭遇。

そしてコッソリ見てる、じつじつです。

・  
・  
・  
・

その4

「ラ~~~~　　うつ・・・ケホッ、コホッ・・・」

「なんだ〜歌姫って言ってもこんなもんかよ〜」

「ガツカリだよな〜」

「・・・」

「ひとり・・・」

「もう、なんなのアノ人達、勝手な・・・あっ!？」

『タツタタタ、ダンツ!!』

「ドカーーンッ!!」

『ズドツ!!』

「グハアアアア!!」

「なっ、イキナリ何、すんだコラアア!!」

「っせえボケ共がっ!! チクツと失敗したからってグチグチグチグチ言いくさりやがって・・・。

失敗しねえーヤツなんざいねえんだよ!! 失敗しねえーんならハナっから練習なんざしねえーんだよボケが!!

必死こいて練習してるヤツをバカにしてんじゃねえーぞ!!」

「・・・」

「ったく・・・とりあえず今日んところは散れや・・・今、俺が言ったこと、よおーく考えるい」

「あっああ」

「わっわかりました・・・」

マサ一喝!!

「まっマサ君・・・えと・・・」

「ことり、まっ気にすんなや、人間、調子が悪い時もあらあなあ」

『ナデナデ』

「うっうん・・・ありがとう」

「おう!!」

「なんかいい雰囲気だね・・・」

「もしかして私達・・・邪魔？」

「おう？ あっ悪い悪い、っと、ユー達は、ことり、のダチか？

あつと俺は鬼島 政成な？ マサかマサナリでヨロシク」

「みつくんにもちゃんツス、そして私が」

「いや、オマエは知ってるから、つか、なして、ことり、が答える

「？」

「つれないなあ〜」

「やっぱり私達……」

「邪魔？」

みつくん&ともちゃんとの出会いはこんな感じでした。

ちなみに。

みつくん、佐伯 加奈子。

ともちゃん、森川 知子。

らしいです。

「いや、てつきり、ことりの彼氏かなあって思ったよ」

「そうそう、ココまで、ことり、と仲が良さそうな男子って工藤君以外に見たことなかったし」

「もっもっ……みつくん、ともちゃん」

「まっ、俺あ仲良いヤツには大概こんなだから、つか彼女なんて

いたことないからな人生で」

「わっ私も彼氏なんていたことないツスよ」

「私もだ・・・」

「うっ・・・私も・・・」

「やーい、灰色~~~~!!」

「マサ君が言う!?!」

「そっだよ自分だってそうなんだよね!!」

「棚に上げ過ぎ!!」

「棚に上げの技術には定評があるからな!!」

その後の会話より。

・  
・  
・  
・

その4

『スタラスタラ』

「あつマサナリさ〜ん!!」

「おつ美春に・・・誰？」

「音夢先輩です〜」

「わわつ、美春、引つ張らないで・・・」

「音夢なあ・・・つと、鬼島 政成な、マサかマサナリでヨロシク  
!!! つと、で美春は何しよん？」

「今から音夢先輩とチヨコバナナを食べに行くんです!! バナナ  
〜」

「チヨコバナナとな？ そついや最近食ってねえーなあ、俺も行っ  
ていいか？」

「行きましよう!! 音夢先輩、いいですか？」

「えつつつん」

「じゃ、行くべえ〜」

・  
・  
・  
・

「はむはむ・・・美味しい〜」

「うむ、美味えな〜、たまに食つと尚更」

「美春は毎日でも食べれますよ〜」

「っていつか毎日食べてるでしょ美春は」

「アハハ〜そうですね〜、それくらい美味しいんです」

「俺にとってのミミミミミミみてえーなモンが」

「ミミミミミミ」

「うむ、常に心にミミミミミミをだからな」

「じゃ私は常に心にバナナをです!」

「対抗してどつするの・・・」

音夢さんとの出会いでした。

「へえ〜、音夢ってアニキがいるん」

「はい、だらし無い兄が」

「かったるい星人ですからね〜」

「かったるい星人となっ！！ まさかココにもいたとは宇宙人」

「宇宙人じゃないですよ……ン？ココにも？」

「気にしなさんなコッチの話、でも、まっ仲は良いんだろ？」

「えっ？ あっ、それは……えと」

「照れてますな〜」

「照れてますね〜」

「照れてません！〜！」

「まっ仲が良いのはいいこった、仲良きことは美しきかな、ってど  
つかの誰かも言ってるしな」

「そうですね〜」

「そっそっですかね？」

「そっそ」

マサ、異世界つんぬんの「ア」は「一」恋、白河姉妹に口止めされてま  
す。



ダ・カーポ編は以上です。

・ ・ ・ ・

くもしもグリーン・グリーン世界だったら

その1

「お、お、お・・・おん!？」

「なあ祐介や・・・バッチはどうしたんだ？」

「発作じゃないか？」

「またかよ・・・しゃーねえーなあ、首筋に一撃入れたら治るか？」

「止めるっしょ!! 次に目を覚ますのが2時間になるだろ!!  
ってそれどこじゃないっしょ、とりあえず着いてくるっしょ!!」

「どっつするマサ?」

「面白そうだし行ってみつか？」

「じゃ早く着いてくるっしょー!! 天神に一番星ももう現場に行ってるしょー!!」

・  
・  
・  
・

「おっ、祐介にマサ、オマエらも来たのか？」

「おう、光、なんか面白そうな感じがしてな」

「面白そう？ やっぱり、面白いコトをするでござるか？」

「いいから、体育館の中を見るっしょー!!」

「あっ？」

「「「!?!?!」」」

「こっこれはっ?!?!」

「おっおいおい、バッチゲー、コレって、うはははは」

「おっ、お・・・おなごー!! おなごの群れでござすー!! おなごの群れでござすー!!」

「そついつとっしょー!!」

「ふうん、編入生が来るつつつてたけど女子だったんな？　つかオマエら、興奮し過ぎじゃね？」

「何を言ってるしょー!!　俺達はオマエみたいに、枯れてないしょー!!」

「全くだ・・・おおっ、あの子、カワイイ!!」

「おいどん・・・おいどん・・・あぁ~~~~おいどん、の熱い青春が・・・」

「ムグツ・・・押すな・・・苦し・・・」

『ギシギシ』

「押してないっしょ、押してるのは祐介の方」

「うははは、やべっあの子、足が・・・うははは!!」

「青春が、おいどんの青春が・・・ハジケそつでごわす~~~~」

「!!」

「ムグ~~~~!!」

『ギシツ・・・ギシツ・・・』

「ふむ、この後の展開、読めるな・・・」

『ガシャン!!』

『ドタドタドタ・・・』

「ハジケちゃっ・・・た？」

「やっぱしな・・・、つか、やっぱコレ直すの俺？ 俺だよなあ、まっいいけど」

「クウウオウラアア!! このガキ共オオオ!!」

「やべっ轟!!」

「逃げるでござす!!」

『スツタタタ』

『コケッ』

「うわっ祐介がコケた!!」

「振り返るな、ヤツの犠牲を無駄にするじゃない!!」

「祐介どーん!!」

「はっ薄情者!!」

「ヒヤハハ、そーら一匹、捕らえ」

「られるワケにはいかねえーのっとー!!」

『ヒョイ!!--』

「まっマサ!?!」

「鬼島!?!」

「につしし、悪いが、このまま逃げさせてもらつわ、じゃ〜〜な、轟のオツサン!!--」

『スツタタタ!!--』

「待たんかーい!! 鬼島〜〜〜高崎〜〜〜!!」

ってワケでオープニング。

ちなみにマサは用務員と緒方さん経由で用務しながら生徒、たまに学食も作ったりしてます。

後、総長とやり合って勝ってます。

めんどくさがって総長はしてませんが。

・  
・  
・

その2

「・・・・・・・・」

「ウイス、ってバツチどうしたんだ顔にワカメやら豆腐やらつけてからに、新車のイメチェンか？」

「そんなイメチェンなんか無いっしょ！！」

「だろうよ・・・で、何したん？」

「ヒヒヒ、コイツ、いきなり女子の胸のサイズ聞いて、味噌汁、ぶっかけられたんだよ」

「仕方ないっしょ、どーしても、知りたかったっしょ！！」

「アホだな、つか、顔についてるヤツ食べよ、もったいないから」

「ヒドイっしょ・・・」

「流石はマサ、死人戸惑いなく鞭を振るな」

「って、そういえばマサナリどん、今日、食堂に来るの遅かったでござすが」

「オマエらが壊したトコの修復作業してたからな、まっついでに、

塗装が剥げてたトコとかも、直してた」

「相変わらず働き者でござすな」

「まっ霞を食って生きてるわけじゃねえーからな・・・っとなん？」

「あの〜〜〜」

「あん？」

「鬼島君と高崎君？」

「おっ俺？」

「ちよっ祐介！！ オマエ、どういっことっしょ！！ いつの間に女子と知り合ったっしょ！！」

「マサナリどんもでござす！！ 正直に吐いた方が身の為でござすよー！！」

「まっ天神じゃまずマサに勝てないけどな・・・でも気になるぜ、どういっことだよ二人とも知り合いか？」

「ふむ・・・う〜〜〜ん・・・記憶にねえなあ」

「俺も・・・えと、どっかで会っただっけ？」

「えっ、あっ、違くて、私が一方的に知ってるだけで、ほら体育館で先生が二人の名前を叫んでたから」

「なるほろな、で、ユー名前は？ あっ俺は鬼島 政成な、マサか  
マサナリでヨロシク、でコツチが」

「伊集院 忠知！！ バッチグーで呼ばれ」

「オマエじゃねえーよ」

「そうそう、マサが言ってるのはこの鐘の音学園の流れ星、一番ほ」

「テメエでもねえーから、あっ泰三も違うからな」

「せめて少しくらいはおさわりしたかったでごわす……」

「……」

「ってオマエだよ、祐介」

「あっやっぱり？ えと高崎 祐介」

「うん、覚えた、マサナリ君に祐介君に、伊集院君、それで、一番  
ほ君で、おさわり君だね！！ あっ私は千歳 みどりです」

「おけ、みどりな」

「っていつか俺、一番ほ、じゃねーし」

「おいどんも、おさわり君じゃないでごわす、でも、おさわりはし



たいでござす」

「おっ俺も俺も!」

みどりとの出会いでした。

その後は、みどり、に頼まれて祐介と共に学園の案内。

・  
・  
・  
・

その3

「助けて~~~~」

「まっマサ、上、上!」

「木の上に女の子が」

「ほんまやね・・・どね」

『ヒョイ、ヒョイ、ガシッ』

「ほい救出っ」と

「ふえ〜ん、助かった〜怖かったよ〜」

「ああ〜よしよし、もう大丈夫だからな〜」

「なんか手慣れたなマサ」

「それでもねえーけどな？ にしても、オマエさん、なしてこんなとこに？」

「えっ？ えっえつと・・・遠足で来てて」

「遠足ねえ〜、お仲間さんは？」

「はぐれたあ〜」

「ありやま、近くを探すか？」

「無理だと思う、もう、みんな行っちゃったもん」

「なぬっ!？」

「マジかよ・・・どうすんだよ」

「困ったね〜」

「あつでも、私がいなくてわかったら向かえには来てくれると思  
う・・・」

「あつ、そうなん？ なら、よかったわ・・・じゃ暫くココで待っ  
とく」

「一ヶ月後くらいに」

「ってオイ!!! 一ヶ月って・・・一月って・・・マジか？」

「うん、ちょっと理由があつて、言えないけど」

「はあ・・・言えない・・・ねえ・・・ふむ・・・しょーんなかな、一ヶ月後には向かえとやらは来るんだべ？」

「うん!!--!」

「じゃ、それまでは俺ん部屋に来るか？ 幸い俺は一人部屋だしな」

「ちよつマサ、マジか？」

「マジだが？ ほつとくわけにもいくめえーよ？」

「あつありがと、お兄ちゃん、顔に似合わずに紳士だね!!--!」

「その手の類のセリフは何度も言われてるっての、もうちょい捻るように努力しろ」

「りょーかい!!--!」

「フフ、よかつたね」

「うん、お姉ちゃんもありがと」

「マジで大丈夫かな・・・」

というわけで謎の女の子はマサの部屋に居候することになりました。

そして。

「で、オマエ、名前は？」

「うう・・・言えない」

「ふむ・・・言えない、と・・・じゃ何て呼べばいいかねえ」

「アリスはどうでござるか!?!」

「アリス・・・ねえ？　つか、なんで居るんだ泰三？　いや祐介は呼んだ覚えはあっけど」

「悪いマサ、どうしてもついて行くなって聞かなくて」

「おいどん、のリーダーがピンピンと反応したでござるから、すわっ行かねばと思ったでござる!?!」

「リーダー？」

「リーダーでござる、こっ小さい女の子をサーチするでござる!?!」

「げっ・・・で、天神オマエ、まさか・・・」

「テヘツ、二人には正直に白状するでござす、おいどんは、小さい女の子が好きでござわー!!」

「あ~~~~そう、犯罪行為には走るなよ」

「そこら辺の線引きは大丈夫でござす!! それでシャルロットは!!」

「シャルロットって・・・ホンモノだな天神・・・」

「どうよ??」

「イヤ!! っていうか、なんか怖い、この大きいの」

「おっ大きいの・・・ふるふる・・・大きいの、何故だか興奮するでござわすー!!」

「ひっ!!」

「興奮すんなポケッ!!」

『ズドム!!』

「うっぷすっ!?! すっすまんでござす、おいどん、つい・・・」

「まっこんなヤツだけど根は悪いヤツじゃねえーからな? だが襲われそうになったら躊躇なく目を狙えよ」

「わかった！！ しゅっしゅー！！」

「って色々、話がズレまくってるって、どうすんだよマサ？ 名前もわかんないんじゃないじゃ困るだろ？」

「だよなあ・・・どうすつかない」

「マリアはどうでござい」

「泰三は少し黙ってる」

「すすすまんでござい・・・」

「なあオマエ、好きな色ってなんだ？」

「えっ？ グリーンだけど」

「じゃ、みどり、でいいんじゃないか？ あつみどり、だったら千歳と被るか・・・よし、コレからオマエは小みどりな？」

「ちよつ祐介・・・マジか？」

「そつそれは、ちよつと・・・っていうか小みどりって語呂が悪すぎだし」

「じゃポチだ、ポチか小みどり、どっちにする」

「うう・・・小みどりでお願いします・・・」

「あっいいんだ・・・つか祐介って時々、スゲエ、ぶっ飛んでんよ

な

「マサに言われたくねえって、っていつかもう眠いんだよ・・・俺、部屋に戻って寝るわ、帰るぞ天神」

「わかったでござす、じゃまたでござすマサナリどん、小みどりちや〜ん」

『ササッ』

「やっぱり、あの大きいの怖い、確実に私の貞操を狙ってる・・・」  
「否定できねえーな、まっなるたけ泰三と二人っきりにならないよ  
うにしるよ?」

「うん」

謎の女の子、小みどりでした。

とりあえずは以上です。

番外編っぽい感じ！その11（後書き）

後書き

グリーングリーン、結構好きです。

特に男キャラが。

それはさておき今回は多分、本編、そちらも是非に。

感想などもありましたら是非！！



番外編っぽい感じ！その12（前書き）

前書き

二回連続番外編・・・。

これはマズイ兆候やも・・・。

あつ何時もの如くセリフと擬音です。

よく効くクスリをを持ってどうぞ。

## 番外編つばい感じ！その12

くもしもリリカル世界だったら・5く

その1

「しくしく・・・」

「なあはやて君、ラインどうしたん？」

「わからんのや・・・前回からずっとあんな感じなんよ、時々、コ  
ツチ見てはブツブツ言って、またシクシク泣いて・・・なんか悪い  
ことしてしまったんやるか・・・」

「前回・・・前回ねえ・・・あつ!？」

「マサ兄どうしたん、何か思いあたることあつたん!？」

「うつ・・・うむ・・・いやな、ほら前回、ヴィーにシグ、シヤマ  
ルにザフとかに仕事割り振ったじゃん」

「せやな、確かそんな感じやったな、ヴィータとザフィーラは仕事  
とはいうはちよつとアレやけど、それがどうかした・・・あつ!？」

「気付いたかね」

「うん気付いた、ちゅうか、気付いてもった・・・」

「しくしく・・・どうせ、どうせ私なんて居ても居なくても一緒なんです・・・前回だって出番どころか存在すら忘れられてしまうよ  
うな、そんなダメな存在なんです・・・あつ、そうだ今日辺りにで  
も丈夫なロープを作りましょう、フフ・・・」

「作るなアアア、っていうかスンマセンでしたアアア!!」「」

というわけでリインさんのグチからスタート。

ホント前はスンマセンでした!!

・  
・  
・  
・

その2

「で、フェイト、アリシア学校はどうよ?」

「うん、すごく楽しいよ、友達も出来たんだ、ねっフェイト?」

「うっうん、マサお兄さんの言った通りだった」

「そう、よかったわねアリシア、フェイト」

「うん！！」

「エへへ・・・あっ姉さん宿題・・・」

「あっ、そうだった、じゃ一緒にやる」

『スタスタ・・・』

「フフ・・・」

「ん？ どうしたプレシア」

「宿題を頑張る二人にご褒美のおやつでも作るうかしらと思ってね」

「おっ？ 母ちゃんしてるねえ」

「当たり前よ私は二人の母親だもの」

プレシア母さんでした。

あっプレシアは結構、料理は出来ると思います、マサのが出来ま  
すけど。

ちょっと悔しいけどマサからも習ったり、桃子さんから習ったり  
もしています。

・  
・  
・  
・

その3

「ふむ・・・」

「どうしたマサナリ難しい顔して」

「そつだよハッキリ言っつて似合ないよ」

「っせいアルフ、まっ否定はしねえけどよ」

「悪かつたつて、でもホントにどうしたのさ？」

「たいした事は出来んが聞くくらいは出来るぞ」

「いやな・・・高校どうしよっかなあつてな」

「「高校？」」

「おう、ほれフェイト達が学校通いだしたべ？」

「うん二人共楽しそうに学校に行つてるよ」

「主も楽しそうにしていたな、ヴィータはぶつくさ文句を言っつてい

だが、アレは本心では楽しんでたな」

「そう、それだ！ それ！！ いやな楽しそうに学校行ってんのが羨ましくなっちまってよ、ちいとだけ俺も学校行きたくなくなっちまったわけよ」

「なるほどね、でもマサって勉強苦手なんじゃなかったっけ？ この前フェイトとアリシアの二人の宿題を見てダラダラ脂汗かいてたし」

「うむ・・・苦手ではある、つかアレ小学生がする問題か？ マジでビビったぞ、最近の小学校侮れねえ・・・」

「確か主が行ってる学校はレベルが相当に高いらしいからな」

「高すぎだつっつの、通学バスとかもあるらしいしな、お嬢様学校なんかねえ？」

「男も通ってるから微妙に違うんじゃないかい？」

「いやニュアンスだつて、つと、まっ学校の話は今保留にしようか、じゃ次の現場に行きまっしょい」

「うん」

「ああ了解した」

シグナム、アルフのなんでも屋仲間との会話でした。

・  
・  
・  
・

その4

『カランコロン』

「いらっしゃ……あっマサさん」

「よっ、なのは手伝いか？」

「うん、マサさん今日はどうしたの？」

「シャルルの様子見とヒマ潰し、今日の依頼はもう片付いたしな、でシャルはどうよ？」

「そうなんだ、お疲れ様なの、えっと、シャルさんは……」

『ササッ』

「そおーっと、そおーっと……」

「なあアイツ何してんの？　つか怪しくね？　もう怪しさが半端な  
くね？　呼ぶか青い服の人達？」

「コラッ、シヤマルちゃん!!」

『ビクッ!?!』

「うっ・・・」

「勝手に厨房に入ったらダメよ!!」

「うう~~~~だって、だって私だってお料理作りたいんですよ~~~~  
〜今度は失敗しませんから~~~~」

「そう言って前にドドメ色でコンクリートより固いシユークリーム  
を作ったの忘れちゃったのかしら?」

「うっ・・・歯ごたえがあったほうが美味しいかなって?」

「歯ごたえどころの問題じゃないでしょう? もう、とにかくお客  
さんが居る間はダメよ!」

「はい・・・シヨボン・・・」

「なるほろね」

「アハハ・・・」

「あっ・・・マサナリさん・・・」



「よっシャル、まっそう落ち込むなや」

「うう〜でもですね、私だってお料理を作りたいんですよ〜  
お家でも、はやてちゃんに止められちゃうし〜」

「まっ前に食ったショートケーキ並のだったら普通ならポックリ逝  
つちまっ可能性があるしな」

「うう〜ヒドイ」

「マサさん、ちょっと言い過ぎのような・・・」

「つつわけで次に何か作ったら俺ンとこ持ってこい残さず食っから  
よ」

「えっ!?! 良いんですか!?!」

「おうよ、でもレシピ通り作るようにしろよ? 足し算引き算は後  
からだ」

「はい、頑張ります!?!」

「うむ精進したまえ」

シャル料理上達フラグ、ちよっとづつ上達していきます。

頑張れシャル。

・

その5

「グッ・・・」

『ドスン』

「じゃ本日も俺の勝ちってことだ」

「ああ・・・次はせめて掠らせるくらいはしたいな」

「カッカカカ、そうさせんよ」

「マサちゃん次は私だよ」

「おう！！ 決め技は何がいい？」

「痛くないので！..！」

「美由紀、最初から負ける気がい？」

「だってお父さん恭ちゃんですら軽々しくあしらうマサちゃんだよ？」

「そういわれると・・・な」

「でしょ？ っていうわけで痛くないので！..！」

「おけ、振りだな」

「振りじゃないから!!--」

「わあってるって・・・ニタリ」

「うう・・・不安・・・」

「じゃ初めるよ、初め!!--」

「オウラアアア、サソリ固めエエエ!!--」

『ギチギチギチ・・・』

「痛ったい、痛い痛い痛い・・・ギブウ~~~~~~~~ギブウ~~~~~~~~!!--」

・  
・  
・  
・

「あっお姉ちゃん今日もマサさんにやられてるの」

「今日も元気に叫んでるわね」

恭也&美由紀との手合わせでした。

恭也は普通に模擬戦ですが何故か美由紀さん毎回プロレス技かけられています。

なんかそんなキャラです。

美由紀頑張れ！！ 超頑張れ！！  
リリカル編は以上です。

・  
・  
・  
・

くもしもIS世界だったら

その1

「なあ千冬さんよ・・・なして俺がIS学園に通わないイカンのよ？  
いやね一夏はわかるんぜIS起動できんだから、でも俺あうんと  
もすんともだぞ」

「あのかなマサナリ、ISを生身で圧倒するようなバグキャラを野放  
しにするわけにはいかないだろ？ それと織斑先生だ」

「いやまあ言わんとしてるこちゃわかっけど一夏とかがIS動かし  
てんのを体育座りして見てるってか？ そりゃねえべさ千冬」

「別に体育座りじゃなくてもいい、胡座でもかいておけ、それと織斑先生と言え」

「ならいっそのこと寝そべってやろう、それでもいいのか千冬よ！」

「流石にそれはダメだ、というか織斑先生と言えと言ってるだろ、少なくともIS学園では」

「前半は了承、後半は断固拒否の構え!!」

「ええい、このガキだけは・・・」

(ホントだったら私だってオマエをIS学園には通わせたくなかったんだ・・・なんせココは女だらけなんだぞ、むやみやたらとフラグを立てられたら・・・クツ)

というわけでかなり無理矢理な感じでIS学園入りです。

軽い設定として。

マサ、例によって落下スタート 落下地点が一夏君の拉致現場  
無双 アレ俺、子供じゃね？ なんやかんやで千冬さんに引き取られる。

といった感じですよ。

ちなみにガツチリ千冬さんにフラグON。  
そしてISは起動出来ない。

あつひそかに東さんとも面識あり、お互いネジが外れててること  
もあり結構仲良しな感じ。

・  
・  
・  
・

その2

「えっと・・・今日は授業の前に新しいクラスメイトを紹介します、  
鬼島くくん入って来て下さい」

『ガラッ!!!』

『バツクルクルクル・・・スタツ!!!』

「ホントは別の学校に通う予定だった漢、鬼島 政成ここに見・参  
ツツツ!!!」

「」ポカーーン・・・」

「あつあの~~~~鬼島君~~~教室で三回宙はですね~危ないから」

「いやスンマセン、こういうのは初回のインパクトが重要かなあ」

と？」

「インパクトですか？確かに凄いインパクトですけど」

「じゃ作戦は成功ってことで！！」

「何が作戦は成功だ馬鹿者」

「おっ千冬、そついや千冬って副担だったっけか？」

「織斑先生だ！！」

『ヒュンー！！』

「やなこつた！！」

『ヒョイ』

「チツ・・・」

「あつ、えつと織斑先生」

「むっすまない山田先生、続けてくれ」

「はい、えつと今日からこのクラスの仲間になる鬼島君です」

「どもども、さっきも言ったけど鬼島 政成な？ マサかマサナ  
リでヨロシク」

「おっ・・・男!？」

「オリムゝに続いて二人目!！」

「っていつかなんで制服違っの!？」

『ざわざわ・・・』

「おっ? 大分ざわってますなあ」

「ざわってますなあ〜ではないだろ馬鹿者、静かにしろっ!！」

『ピタッ』

「おっ見事な一喝、手慣れてんな」

「当たり前だ、コレでも教師だぞ」

「さよで?」

「ホッ・・・織斑先生、ありがとうございます、えっと、鬼島君は席について下さい」

「あいあい・・・って俺は・・・っとアッチか」

『スタスタ』

「よっー夏!！」



「まつマサ、オマエまでなんで」

「休み時間にも話すわ、じゃ後でな？」

『スタスタ・・・ドスッ』

「よう、お隣りさん今日からヨロシクな!!」

マサ、クラスに見参でした。

むろん隣の席は・・・。

「フフン、私の隣の席になれるなんて随分と運が良いですわね」

「ン？ そうなん？」

「なっ、なんですの、そのコイツ誰？ っという顔わ!？ まさか私を知らないといいますの」

「うむ全く、どっかで会っ・・・」

「私語をするなっ!!」

『ヒュン、ヒュン!!』

「よっど」

『パシッ!!!』

「あいたッ!?!」

『バシッ!!!』

「ツ~~~~アナタのせいですわ」

「はいはいスンマセン、ほれ静かにせんならまたチョークが飛んでくんぜえ」

「クッ・・・」

・  
・  
・  
・

「つまりISとは・・・」

「はい真耶先生!!」

『バツ!!!』

「あっハイ、鬼島君、質問ですか?」

「ウッス、質問つうか・・・何を言ってるかすら全くわかんねえん

ですけど？　つか俺教科書すらねえんですけど？イジメ？」

「えっ！？」

「ピクピク・・・マサナ、ンッン・・・鬼島それはどういうことだ？」

「そのまんま、つか俺が本来通う予定だった学校の教科書はあつけど、IS学園の教科書はもらってねえし？　制服もだけど」

「しまった・・・最初に気付くべきだった・・・仕方ない明日までには用意するから今日は隣のオルコットにでも見せてもらえ」

「あいあい、いや真耶先生もスンマセンな授業中断させて」

「あつ、いえ、こちらこそ、それじゃ続けても大丈夫ですか？」

「はい先生！！」

『バツ！！』

「あつハイ織斑君」

「俺もほとんど全部わかりません！！」

「えっ！？　まさか織斑君も教科書が・・・」

「ピキピキ・・・おい織斑・・・オマエは教科書どころか参考書も渡したはずだが？」

「電話帳と間違えて捨てました!！」

『ビヨン!!!』

「痛っ!?!」

『バシッ!!!』

「今のは一夏が悪い・・・っと、お隣りさんや、つうわけで悪いけど教科書見せてくんね?」

「な・・・なんで私がアナタに、さっきもアナタのせいでチョークを投げられてしまいましたのに・・・」

「頼むわ、なっ? 流石に授業初日で寝て過ごすんは真耶先生に悪いしよ」「よ」

「初日じゃなくても寝たらダメですわ!! もう仕方ありませんわね・・・」

「サンキューな・・・っと、そっぴやお隣りさん名前は?」

「セリシア・オルコットですわ」

お隣りさんはセリシアさんでした。

・  
というかマサ、教科書もないくらいに急な感じでの転入? 編入? だったようです。

・  
・  
・

その3

「で、やって来ました屋上へってか？ 箒も久々だなあ」

「あつああ、しかし一夏だけじゃなく政成までISを起動させたなんて」

「そうだよな」

「いんにや二人共その予測はハズレだ」

「「はっ？」」

「俺あ一夏と違ってIS起動出来まつせ〜ん」

「なっ！？ じゃっじゃあなんで」

「千冬の陰謀」

「勝手に人を陰謀者に仕立て上げるな」

「千冬姉！？」

「ココでは織斑先生だ！！」

『ビュン！！』

「ッ！！」

『ガスッ』

「うう~~~~マサだって織斑先生って言ってねえのに・・・」

「コイツはいくら言っても聞くようなヤツじゃない、もう私も半分諦めた」

「あっ・・・確かに」

「そうだな・・・政成だし」

「納得されちった」

「ちったじゃないだろに・・・まあいい、何故、マサナ・・・鬼島がココに通うことになったかというとな、わかりやすく言つなら、ゴリラやライオンを放し飼いにするわけにはいかないということだ」

「「あっなるほど」「

「納得されちった・・・チクソウ・・・」

屋上説明会、何故か千冬さんも参加です。  
ちなみに篝さんは一夏君ONです。

・ ・ ・ ・

その4

「あつようやく見つけましたわっ！」

「ン、どつたんセリシア？ なんぞ用？」

「まっまた名前を呼び捨てに」

「まあいいがな、で、なんぞ？」

「そつそれがイギリス代表候補生であるセリシア・オルコットに」

「代表候補生つて何よ？」

「なっ！？ それすらも知らないなんて無知もいいところですわー！」

「しゃーねえやん、マジで急だつたんからよ、昨日の今日でコッチに通うことになったんだぜ？ で代表候補生つて何？ いやさニユアンスでなんとなくはわかつけど」

「仕方ありませんわ、代表候補生とはカクカクシカジカというわけですつまりエリートなんですわよー！！」

「ほうほうエリートとな、そりゃ肩が凝りそうなポジションだな？」

「ええホントに色々と疲労が溜まりま……って違いますわ、アナタ、私をからかってますの！！」

「うん、ちょっとリアクションが面白いから」

「うん、じゃありませんわー！！」

全然ペースが取れないセリシアさんです。

・  
・  
・  
・

その5

『ガチャ』

「今日からココが俺ン部屋かってン？なんだあの箱？手紙もあんな・  
・えーつと束からか・・」

『やつほ～～～マー君、IS学園に通うことになったんだって～～、  
そんなマー君に束お姉さんからプレゼント～～～名付けて成り切り  
ISセット～～～簡単に言つとISっぽい着ぐるみなのだ～～コレ  
を着て頑張れマー君！！』



「ほつほつ、つまりコレを着てしまかせてトトか・・・やるな束  
」

というわけでマサ、ESの着ぐるみで頑張ります。

無理があるなあやっぱり・・・。

とりあえず以上です。

番外編っぽい感じ！その12（後書き）

後書き

IS実は全然知らないクセにやっちゃいました。

そして無茶苦茶設定。

ロボ系？　なのに着ぐるみって・・・。

どんどん追い詰められてる気がする・・・。

あつできれば感想など・・・いえなんでもないです。

第六十五話っぽい感じ！（前書き）

前書き

本編！！

なんか久々な気がします。

アノ人の登場。

ではクスリを持ってどうぞ。

## 第六十五話っばい感じ！

春休みはアツという間に終わり、今日から始まる新学期、とうとう俺達も二年生へとなりました。

これを機に髪型を変えようかとか考えたけど結構この髪型も気に入ってるんでこのままでGO。

しかしなんだな・・・なんつうか二年生の時期、特に17になった後からは色んなことが起こりそうな気がする、こっぴ別世界に行ったり帰ってきたり・・・。

いやさ、その辺りは気にせずいこう、みんなもその辺りのことは余り触れないようお願いします。

特に時期とかに関してはねっ！！

大事な注意事項でした。

っとメタは置いておいて、いやある意味重要だけど。

まっとにかく今日から二年ってことで気合いを入れていこう。

まずは朝メシだな。

つつわけで、何時も通りに美柑と朝メシ作り。

「フフ・・・」

「どった美柑？」

「今じゃもうスツカリ習慣化しちゃったけど、こうしてマサさんと一緒に朝ご飯を作るのってもうそろそろ一年になるんだなあって」

ふむ・・・そっぴやそっぴや、まっ一年にはまだちいだけ届かねえけど。

「コレからもヨロシクね？ マサさん」

「おうよー！」

なんか改めて言われっとなんか若干照れる気がせんでもねえけどコレからも世話になる気満々なんで。

(出来れば、ず～～～っとだったらいいな)

むっ小声過ぎて聞き取れん。

「マサナリ、日課です」

「はいよ、じゃ美柑、後よろ」

何を言ったか聞こうと思っただらばヤミっ子が何時もの日課を誘ってきたんで庭へGO。

『ヒュン、ヒュン、ヒュン！』

『ヒヨイ、ヒヨイ、ヒヨイ!』

結果は言わずもなです。

「おはよ〜マサ! 今日から二年生だね、なんかワクワクしちゃう」

おっララ今日も元気だな。

うむうむ良いこった。

「ふあ〜おはよう」

「リト、オマエ顔くらい洗ってこいって」

「うるせーリコ、ふあ〜」

リトリコも登場。

しかしリト眠そうだな、つかリトって朝は大概眠そうだよな、リコはそうでもねえのに、いや不思議。

ちなみに学校がある日の朝のメンツはコレで全部。

ナナモモの二人はまだ寝てたりする、まっ俺達が出る少し前からいにはモモは起きてくっけど。

「「「いただきます」「」」

で、朝メシ。

うむ、今日も美味い。

「今日から新学期だな、クラスとかの割り振りはどうなのかな？」

「一緒だぜ、俺らA組は多分そのまま繰り上げだな」

「そつなのマサ〜？」

そつなんです、そこら辺は上手く教頭に頼んでっからな。

例によってパシヤられたけど安いモンです。

「よかったなリト、春菜ちゃんと一緒に」

「うっ・・・ゲホ、ゴホッ！？ リコ、おまつ」

やるなリコ成長したもんだ。

リトにとっては災難かも知らんけど。

そんなこんなでコチャコチャありつつ、朝メシは終了し学校へG  
O。

家を出る時にモモが起きてきたんでアイスツをしてからだっただけ

ど。

でスツタラスツタラ通学路を歩きます。

「そういえば美柑も六年生だね」

「うんララさん」

六年生か、来年には小学校を卒業か・・・クツ・・・なんか美柑の卒業式の日には泣いてしまいそんな気がする。

いやさ、まだ先だけでも。

寧ろ、こっからが長そうだけど、一年の間に夏を複数回迎えそうだけど。

っとメタってる間に分かれ道で美柑は小学校へ。

そして俺達も学校へと歩いていき到着、でクラスの確認。

みんな揃ってキッチリと2ーAだった。

「ホントに同じだったな・・・っていつかそのまま繰り上がった感じか？」

「だな」

「だから言ったべさ」



「やったねマサ!！」

「おう!！」

それもこれも教頭先生のお蔭ですな。

ナイス教頭、俺も撮られたかいたったってなもんだ。

クラスを確認しヤミは保健さんそこへ、俺達は教室へ。

「よっ唯また一年ヨロシクな?」

「えっええ……っていうかマサ君、全員同じ顔ぶれなのって」

「まあいいがな細かいこつちやよ?」

「細かい……って二年生になっても全然変わらないわねマサ君は」

「ハッハッハ」

「褒めてないわよ」

むっ先手を討たれた残念。

流石に付き合いが長いだけはあるな、まあ結構序盤から先手を討たれてた気がせんこともねえけど。

そんな感じで唯と会話してる中リトはリコに引っ張られつつも春菜にアイサツ。

再び同じクラスになれた事に春菜も嬉しそうっばい。

うむうむ、頑張れリト。

「マ〜〜〜サ君」

「マサナリくん」

「「マツサマサ〜〜〜」」

その後、恭子にルン、里沙未央や他のクラスメイツにアイサツをし。

『キーンコンカーンコーン』

『ガラッ』

「おふぁよつごいまぶ」

鐘が鳴りSHR。

ちなみに今回の担任ティーチャーも爺ちゃん先生。

そのSHRの時に例によって呼出しがあり今学期の仕事始めな用務仕事。

ヤミもメキメキと実力上昇中。

「相棒ですから」

だってよ、益々頼りになりますわい。

で、何時ものように。

「保健さ〜〜ん」

『ガラッ!』

コーヒータイム。

「うん、久々に飲むとやっぱり美味しいわね」

「三日前に飲んでたやん」

春休み中、薬草の調達やら静の幽霊相談やらでそれなりの頻度で保健さん家に足を運んでたんですわい。

たまにホントにコーヒーやらホットケーキやらが食いたいってな理由だけで呼び出されたこともあっけど。

ちなみにヤミっ子も定期検診的な感じで行ったりします。

「学校で飲むのは久々だもの」

「まあそっぴやそっぴですな」

つつても春休み中も何度か学校に顔出してんだけどな俺とヤミっ

子は、用務的な意味で。

「それにしても、新学期になって二年生に進級してもガクラン君は変わらないわねえ」

「いや髪型変えようかとは思ってたんだけどやっぱり断念したんですわ、気にいってるし」

「そうですねマサナリはその髪型が合ってます」

「そうね、ガクラン君に合ってるわね」

「だろ？」

ヤミつ子&保健さんからもお墨付きをいただいたぜ。

『キーンコンカーンコーン！！』

おっと、授業終了。

「じゃ戻りますわ」

「ええ今年度もヨロシク頼むわよガクラン君」

「あいあい」

保健さんの言葉に返事をしつつ保健室を出ます。

今回は俺だけじゃなくヤミっ子も一緒。

「図書室に行きますので」

って事らしいッス。

新年度だし新刊も入ってっから気になんだろな、読書好きとしては。

ただたまに本気で意味のわからん本を読んでる時があんだよな。

前なんて『世界のネジ百科』つうの見てたし。

んなのが図書室にあんのも驚きだけどな。

「マサナリまた後で」

「おう、なんか面白えのが入ってたら教えてな、冒険活劇系なら特に」

「わかりました」

活字も読みます。

ヤミっ子と別れ教室へ入ります。

「リトお次はなんだ体育？」

「次はLHRクラス委員を決めるんだってさ」

クラス委員なあ・・・ふむ。

「ねえねえマサ、私ね委員長に立候補しようと思うのマサも一緒にしよー!!」

「やだ、つか委員長と言や唯だべ？　こういうんはビシツとしたのがしねえと俺とララに任せてみるや三日で学級崩壊しちまうぞ」

寧ろ三日もつたらいい方だと思う、それになにより。

「ガラじゃねえしな、ココはやっぱ前クラスに引き続き、男子は、あげる、女子は唯だろ？　まあ無理にたあ言わんけど」

あつ、あげるってのは、前のクラスで委員長してた的目　あげるってヤツな？

微妙に雑なデザインながらしつかり者なナイスガイだ。

実に頼りになる人物です。

「そつかあ〜うん、そう言われたらそうだね」

うむうむララ君、納得してくれたようすな。

で、そんな俺達の声が聞いてた、あげるもスチャとメガネのズレを直しつつ。

「マサナリ君の期待にひいてはクラスの期待に応えられるよう頑張

るよ、まあボクが選ばれたらただけだね」

うむ、かけえな・・・流石は切り札的存在。

まあ初登場なんだけど。

「っていつかマサ君、一年生の時のクラス委員は私じゃなくて春菜さんだったわよ」

「うん、まあ唯さんがクラスに来てから唯さんに手伝ってもらってばかりだったし、お陰で部活に集中できたんだけどね」

唯の言葉に若干申し訳なさそうながら感謝の気持ちが出てる春菜。

つか・・・前のクラスの女子のクラス委員って春菜だったんか、ふむ、確かに春菜も向いてるような気がするな言われてみりゃ。

どうも委員長イコール唯と思い込んでたな。

「んじゃ今学期は唯か？」

「私は・・・別に構わないけど」

「うん私も唯さんが良いと思う、責任感もあるしシッカリしてるから」

「唯も少しは手伝うから頑張ろ～～～!!」

「唯にゃんは委員長キャラだしね、私も唯にゃん押すよ」

あれよあれよと唯の流れに。

と、こうしてココに2ーAのクラス委員が誕生したのであった。

男子・・・的目 あげる。

女子・・・古手川 唯。

この新体制で今年度も駆け抜けるぜA組！！

「っていつか休み時間の中にクラス委員決めてよかったのか？」

「「「「あつ!?!」「」「」

2ーAのスタートはフライングスタートだった。

『キーンコンカーンコーン』

微妙な空気ながら二限目。

クラス委員が既に決まっちゃまってるので何すんべえ〜という感じになった。

爺ちゃん先生は自由にして構わん、ただ余り騒ぐのはダメっていうスタンス。



普通なココで親睦を深める為に自己紹介やらなんやらかんやらがあつたりすんだが、そこはA組、そのまま繰り上げ状態なんで見知ってます。

つつわけで各自雑談タイム。

騒がしくなってくつと唯にコラッてされるのである程度は抑えてっけど。

「そついや身体測定っていつだ？」

新学期の恒例行事ついたらコレがあるよな。

「次の時間よ、今日は新学期の初日だから普通の授業はないわね」

ってこたあ体育はないか残念、数学とかないのは嬉しいけど。

やてやて。

「今日こそ180の大台に乗せてえなあ」

多分きつとちよつとは伸びてるはず身長。

「マサって身長179センチだったっけ？」

「おう前に測定した時はな、アレから約一年、伸びてるよ俺！！」

「そんなに180センチまで身長が欲しいのか？」

「うむ、179センチと180センチでは差としては1センチしか変わらんが、その1センチが凄まじくデカイのだよ」

わかる人にはわかるはず。

と期待に胸を膨らませつつ迎えた身体測定。

とりあえず男子からってことで測った結果。

「179、8センチね」

「何故に届かねえー！チクシヨーーー！！」

無情に告げる保健さん結局2ミリ足りなかった、クソっやはり伸び伸び体操をするべきだったか……。

チクソウ……後2ミリ、後2ミリだというのに……。

来年、来年に期待するしかねえ。

あっちなみに体重は74キロな。

「あつガクラン君、次は女子なんだけど女子の時は覗きとかある可能性があるからヤミさんと警備をお願いね」

「あいよ了解」

リトにも手伝ってもらおうか迷ったがリトがカンベンしてくれって言ったんで今回はリトは不参加。

で男子が終わったんで続いて女子。

保健さんの心配した通りに覗き発生、犯人は校長（変態）を筆頭に、いつぞやのイケメン君エテ山など他数名<sup>ハレンチ</sup>。

処分は屋上からの逆さ吊り。

ヤミっ子が細切れに刻もつかと言った時、思わず頷きそうになっただけんど流石に自重。

校長（変態）辺りは刻んでも再生しやがりそうだけど。

あつ後、吊したメンツの中にリトの中学のサッカー部の後輩君がいたらしい。

「立花・・・無茶しやがって・・・」

吊されてる後輩君を見ながらのリトの感想です。

リコは吊されて当然みたいな顔してたけど。

ちなみに学校が終わるまで吊しました、今日は半チャンだけど、仮にフルでも学校終わるまで吊しますが。

とまあこんな感じで新学期初日は終了したのでありました。

・ ・ ・ ・

「まだだ、まだ終わらんよっ!!」

「つうわけで実はもうちょいだけ続きます。

このパターンも何度もやってるっから実はも何もない気がすつけど、それはアッチ辺りに、そぉーい!!! して。

家に帰ったら、見慣れないクツがあった。

「ん？ このクツ・・・お客さんか？」

リトがそう漏らすと同時くらいにドタドタと美柑が玄関まで飛び出してきた。

「どった美柑？ 妙に慌ててからに」

「大変だよ、みんな早く来て!!」

と手を急かされながら居間に行くと、ソファーに座りコーヒー飲んでる頭にグラサンが乗つけた女人。

「はて・・・どこなリト、リコ、美柑の兄妹に似てるが・・・。」

「か、母さん!!」「」

リトリコの揃ったリアクション。

「どつやら母ちゃんらしい・・・どつりで似てるわけだわな。」

「あら、お帰りィ」

「いつ帰って来たの!？」

「ついさつき、ちょっと日本に仕事があつてね〜あまりゆっくりはしてられないけど」

「お・・・親父に連絡は？」

「それが急な事だったからパパには連絡できなかったの、それにパパも忙しいだろうしね？」

確かに才培のおっちゃん忙しいわな、ぼちぼち締め切り近えし。

とリトリコ美柑の後ろで頷いてると。

「それよりリト、それにリコでいいわよね？」

「あっああ」

「まさか娘が二人になるなんて思ってなかったわね、アッハハ」

「私も思ってなかったよ」

リトが電話で連絡した時もアツサリ受け入れたけど、結構豪快

さんだな。

「つとと、美柑からも電話で聞いてたけど一気に家の住人が増えたんだって？」

むっ俺らんこったな、ではでは。

バツと手を挙げ。

「居候二号！！ 鬼島 政成、マサかマサナリでヨロシクどうぞ」

「一号のララで〜すりトママ初めまして〜」

「三号ですヤミです」

うむむ見事に繋いだな、ってそういや……。

「四号と五号は？」

四号ナナ、五号モモね。

「あつ二人は出掛けてるみたいだよ」

シツカリ美柑に通じました、お出かけ中だったか、じゃ紹介は今度ってことになるか。

「なるほど、なるほど〜、えつと確か男の子は異世界人で女の子は宇宙人だったかしら？ あつ一応、私も自己紹介しなきゃね、リトに美柑、それにリコの母で林檎よヨロシクね」

ふむ林檎な・・・リンさんでいいか？ 凜と被っけど。

そんな感じに俺が呼び名を考えてたら。

「ム!？」

『ギラッ』

何やらリンさんの目が獲物を狩る目になり。

『ムニユ』

「へ・・・!？」

『モミモミ』

「ちよっとリトママ!？」

とリラの胸やら尻やら腰やらを触り始めた・・・とりあえず。

「ふーむ・・・B89、W57、ヒッ・・・」

『ヒョイ』

クビ根っこを引っつかんで引きはがしときます、ゲンコと迷ったけどな。

「ユー何しちゃってんの？」

「アハハ、つつい仕事モードになっちゃって……っていつかネコ持ちは止めて欲しいな」

「マサ、ホント誰でも容赦ないよな」

「うん、母さんがネコ持ちされる光景なんて滅多に見れないよね」

「無理に見たいモンじゃないけどな」

そりゃそうだな、大分レアな光景だと思うぞ。

よし、下ろし前に。

「写真撮っとくか記念に？」

「いやホント、写真は許して、お願い、っていつかそろそろ下ろさう私を」

仕方ないんで写真撮影はなしにしました、でリンさんを下ろします。

「ホント、話に聞いてた通りアグレッシブな男の子ね」

恐悦至極。

「ン？ あら……よく見ると、その「も」……」



『ギラッ』

今度はヤミっ子に狙いを定めたっばい、その視線を感じてかヤミっ子。

『ササッ』

つと俺の背中に隠れます。

「ムッ・・・ねえヤミちゃんだっけ？　ちょーと出て来て欲しいんだけど、ほらお菓子上げるから」

「・・・いりません、後でマサナリにタイヤキを作ってもらいますので」

そんな約束をした覚えはねえけどな。

まつ別にタイヤキくらい作っけど、つか・・・。

「完全に拉致目的な犯罪者の手口だなオイ、コレ通報したほうがいいか？」

「アハ八母さん、ファッションデザイナーだけどモデルのプロデュースもやってるから、仕事モードに入るところなっちゃうんだよね？」

ほう・・・なるほろな。

「ねっ？　ねっ？　というわけで、ちょーとどいて・・・ムッ!？」

『ギラッ！！』

何がどういうわけなんだっつうの、と思ったが、リンさんまたまた目がギラッとなつとる。

「これは・・・良いボディだわ・・・女の子ばかりプロデュースしてたけど・・・フフ」

アレ？　なんかターゲットが俺になつてねえかコレ？

完全に俺を見てるし。

「ちよつとよく見せてー！ー！！」

「イヤじゃボケエエエ！ー！！」

リンさんが飛び掛かってきたのを皮切りにリンさん、美柑、リコにララヤミの女子連合VS俺独立軍の服と俺の中の何かしらを護る為の戦いが幕を開けた。

・  
・  
・  
・

そして現在。

例によって女子連合ゲンコツしてから正座のコンボ。

ちなみにリト君、俺には加勢してくんなかった。

「いや巻き込まれなくなかったし」

だとき、気持ちはわからんでもないけど、後で何かしら報復はする。

「んで申し開きは？」

「ほらつい仕事モードに入っちゃって・・・ねっ？ 足崩していい？ この年になって正座させられるのは大人として辛いものが・・・」

「後10分」

「うう~~~~ 厳しいわ、この子・・・」

意外とね。

厳しいところは厳しいんです。

「あつ、リンさんは10分つっただけでララ達は後30分だからな」

「~~~~ええ~~~~」

リンさんは、仕事モードつう理由になるかは謎だが、まあそういうアレだったつうことでちっとだけ情状酌量の余地があったが便乗して脱がしにかかったララ達には酌量の余地はねえんです。

そして10分経過し、リンさんの正座は解除。

「イタタ・・・まだちょっと痺れてるわ」

足をさすさすしてるリンさんにコーヒーを出す。

「完璧に台所は把握してるみたいね」

「家の台所は美柑とマサでもってるしな」

約一年だからな、そりゃ把握だってしますわい。

初日で大体は把握したけど。

「あっそうだ、今日は久々に私がお昼作るわ」

「ん、忙しいんちゃうんリンさん」

「さっきまで正座させてたマサ君が言うことじゃないわね、まっ時間はまだ余裕あるし大丈夫よ」

というこもらしいんでリンさんが昼メシを作る運びに。

ちなみに俺がリンさんと呼ぶのは了解、得とりますよ。

リンさんが昼メシを作ってる間にララ達の正座時間も終了。

俺は手伝いを申し出ただけど。

「まあまあココは結城家のママさんに任せなさい!!」

って言われて断れられた。

美柑も同様に。

「たまにしか作らないんだから美柑も座ってまってなさい」

断られて待機。

「はい完成!!」

メニューはメインがコロツケとカラアゲ、それと小鉢に小肉じやが。

「美味え・・・」

なんかすげえ美味く感じた、こつ味もだけどころ・・・上手くは言えんが、なんか美味かった。

「フフ、これが母の味ってやつね、ほら、おかわりもあるわよ」

。なるほどと思ったこの味は俺にはどうあがいても出せねえな・・・

ガッツリおかわりした。

リト、リコ、美柑も久々に食べたからか、美味そうに食ってた。

「ママか・・・元気がなく？」

ララは自分の母ちゃんを思い出したのか、こんな感じ。

そんな感じのララにリンさんは。

「ララちゃん、地球でのママは私ってことで甘えちゃいなさい、マサ君にヤミちゃんもねっ？」

そう言っ頭を順に撫でられた。

ふむ・・・流石はリト、リコ、美柑の母ちゃん、めっさ良い人だわホント。

「もしかしたらマサ君はホントに息子になったりしてね？」

「「ッ~~~~母さん!!」「」

リンさんの言葉に何故か激しく反応する、リコ、美柑。

ふむ・・・養子縁組つうことか？

「マサ多分、考えてることは意味が違っぞ？」

どっちら違っつぱい。

「コレは鈍いわね〜あつと、そろそろ出発しなきゃ」

脳内コチャってるとリンさんチラリと時計を見ながら、そう言う。

ホントに忙しいんだな・・・。

で、空港まで見送り。

最後に女の子組に耳打ちして、手を振って去って行った。

「大変なあホント」

「だな、まあコッチはコッチで大変そうだけど」

耳打ちされた女の子組はグツと気合いを入れました。

はて？ なして？ 気合い？

クビを捻る俺だった。

・  
・  
・  
・

林檎 視点

飛行機のシートに座りながら今日の出来事を思い出す。

美柑から電話で聞いてたけど、マサ君を始め、みんな良い子達だ

ったわね・・・。

後二人いるみたいだけど、その子達に会えなかったのは少し残念だったかしら。

それにしても・・・マサ君はホントに息子になるのかしらね？

美柑からの電話でかなり話に出てたから気になってたけど案の定、美柑はマサ君が好きみたいだし、というか美柑だけじゃなかったみたいけど。

当の本人はもの凄く鈍いみたいだけど・・・。

だから、みんなと別れる前に。

「頑張つてね!!」

と美柑にリコ、ララちゃんにヤミちゃんの女の子達を応援する言葉を言った、個人的には美柑とリコに頑張ってもらいたいけど。

みんな良い子達だから、ついララちゃんにヤミちゃんの二人にも頑張ってもらいたいって思っちゃうわ。

フフ・・・。

「誰が彼のハートを射止めるのかしらね、先は長そう」

そう独り言をもらし、目を閉じたのだった。



第六十五話っぽい感じ！（後書き）

後書き

リトママ登場でした。

これで結城一家は全員出たかな？

大分掛かりましたけど・・・。

さて次回は・・・やっぱし次回ですが頑張っていけます！！

感想などありましたら是非！！

第六十六話っぽい感じ！（前書き）

前書き

新携帯にて再発進！！

ただしまだまだ使いなれない。

半年はかかりそうだ・・・。

って前書きで何を言ってるんだ書いてる人。

とっとりあえず気にせずには何時もの如くクスリを持ってどうぞ！！

## 第六十六話っぽい感じ！

唯 視点

『ピュピュ』

「ふう・・・だいぶ熱が下がって来たみたい」

体温計を確認してみたら、36度7分、口にした通りに朝に比べたら下がって来てるわね。

ハア・・・油断したわ、風邪を引くなんて・・・二年生になったばかりだっていうのに。

早く治さなきゃ・・・勉強も遅れちゃうし・・・。

それに・・・。

「マサ君に会えないのも淋し・・・」

はっ！？

なっなんでもないわ、なんでも。

って私、誰に言い訳してるのかしら？

やっぱりまだ調子が悪いみたいね、うん、きっと、そう。

『キィ・・・』

「唯、メシと薬だぞ、まっレトルトだけど」

「あっ、ありがとう、お兄ちゃん」

「おう・・・ン？ 唯、顔赤いけど熱上がったのか？」

うっ・・・どうやら顔が赤くなってたみたい。

「大丈夫よ、そっそれより、お兄ちゃん大学は？」

慌てて話題を逸らす。

「ン、それならいいけど、大学は今日はフケる、カワイイ妹が苦しんでるのに学校なんて行ってられっかよ」

キリッとした顔でそう言うお兄ちゃん。

「そんな事サボる口実にはならないわよ」

どうせサボるツモリだったってことくらいはわかる。

「うっせーな、風邪ひいてても、おカタイねオマエは」

ほら、そう言うてはいるけど図星つかれたって顔してるもの。

全く、ホントにだらし無いんだから。

「お母さんは出かけたの？」

「ああ、買い物にな、まっ直ぐに帰って来るってさ」

そう。

『ガチャ』

「ただいまー」

「なっ？」

「うん」

玄関から聞こえるお母さんの声、ホントに直ぐだったわ……。

「荷物ありがとうね」

「気にしなさんな、どうせ寄る予定だったツスから」

ん？

今の声って……。

・  
・

マサ 視点

唯の見舞い＋プリントを届ける為に唯の家に向かった俺。

モモ缶でも買ってこうとスーパーに寄ったらバツタリと唯の母ちゃんに遭遇。

一回チラツと見ただけだったけど、向こうも俺もお互いの顔を覚えていて、そのまま話し掛け、荷物持ちがてら一緒にGOすることに。

「ほら、マサちゃん、上がっていきなさいな、唯も喜ぶから」

「ウツス、まっ元から邪魔する気だったりわけですが、モモ缶も買ってきたし」

俺、唯の母ちゃんにマサちゃん言われています。

まっ唯の母ちゃんだけじゃねえですけどね。

「あら、病気の唯にナニする気だったのかしら、コノコノ」

脇腹をツンツンされた。

「看病」

「顔色一つ変えないわね」

変える必要がないですがな。

「母さん、客？」

ン、階段から誰か下りてきましたな……つか、めっさいケメン  
だな。

「あつ遊ちゃん、ほら、彼が噂の」

遊つう人らしい、多分、唯の兄貴かな？

前に兄貴居るつってたし。

つか噂って何さね？

そんな噂になるようなことは……まっ色々あるような気がせ  
んこともなきにしもあらず。

「へえ〜〜」

って何かめっさ見てんなオイ。

よし、ならば……後ろをキョロキョロしてみた。

「いや俺が見てるのキミだから、つか後ろに誰もいないから、逆にいたら怖えーって」

うむ。

「ベタだけど一応やっておか・・・ッ!？」

唯のアニキさんの後ろを指差しながら口をパクパク。

もちろん指先はふるふると震わせてます。

「はっ!？ ちょっマジか!！ 居んのか何か居るってのか!？」

「いないッスよ」

「いないのかよッ!！ だったら今のリアクションはなんだってんだって」

「いやあ〜ベタと見せ掛けて変化球を投じてみよっかなあ？ っと俺は唯んだちの鬼島 政成ッス、マサかマサナリでヨロシクどうぞ」

ビツとサムズしながら自己紹介。

まあしかしアレはアレでベタけんどな、でもベタって大事さ。

「ハハ、なるほど、こういうタイプな」

こういうタイプです。

どういうタイプかは知らんけど。



「つとイカン、イカン、コレ冷蔵庫まで運びます?」

唯の母ちゃんと荷物、ほったらかしだったがな。

ガサツと荷物を持ち上げて唯の母ちゃんに話を振る。

「ああ、いいよ俺が持つてくから、ほら、マサ・・・でいいよな?」

「いいツスよ」

「じゃマサで、マサは唯に会つてきなよ」

ふむ・・・そう言つてくれんなあありがたいんだが・・・。

「モモ缶があるんスけど?」

「それは、私に任せなさい、ほらほら早く」

「ン、じゃお願いしますわ、部屋は・・・」

「二階に上がつて直ぐの扉、名前が書いてつから」

「あいあい」

つてわけで唯の部屋へ。

『コンコン...』

ちゃんとしてノックはします。

「はっ、はい」

おっ起きてた、起きてた、流石に寝てたら帰るツモリだったしな。

『ガチャ』

「よっ、唯、調子はどう・・・」

「あっ・・・」

ふむ・・・おかしい、唯、返事したよな？ したはずだよな？

にも関わらずになして半裸？

汗でも拭いてたのか？

横に洗面器あるし。

まっとりあえず。

「今のは唯が8俺が2つてコトで！！」

責任の割合を提案してみた。

「ツ~~~~早く出て行ってハレンチよっ!!」

ハレンチいただきました〜。

が、しかし今回は8:2であると主張したい。

・  
・  
・  
・

『ガチャ』

一旦、唯の部屋から出て入って来て良いと言われるまで待機した後に再び入室。

「8:2?」

「うっ・・・アレは確かにうっかり返事しちゃった私が悪かったわ」

「じゃ8:2で」

「でも見られたことには変わらないわよっ!!」

いやまあ確かにそうなんだけども、だがしかしやっぱ8:2だし。

つか、実んどこ8:2って言いたいだけだったりする。

っといカンイカン、なんか色々と目的がズレてるがな。

まあ唯の様子を見る限りは

「熱はなさそうな？」

「えっ、 あっ、うっうん大分良くなっただわ」

「そいつあ良かった、 っとほれ今日のプリント、 後は今日の分のノート」

スポーツバックを漁り唯に手渡す。

「あっ、 ありがとう・・・こっこのノートってマサ君が？」

「応よ！！ と言いたいとこだけんどなノートは春菜先生でござる」  
ほら俺はアレだから用務とか用務とかバリスタとかあるから。  
嘘です気付いたら授業が終わってたとかそんなんです。

「そう春菜さんが、 明日お礼を言わなきゃね」

「そうしなされ」

さて・・・やるこたあやったし唯ン母ちゃんもアニキもいるこっ  
たしポチポチおいとましよう・・・。

とかチラツと思ったけど唯も思ったよか元気そうだし、 もち  
っとだけ邪魔しようか？

しかし風邪は治りかけが肝心だし・・・悪化したらマズイよな

あ。

むむう……。

「マサ君どうしたの？ 急に難しい顔して」

「うむ、なあ俺帰って方が良いか？ ほれ治りかけだべ？ あんまし、はしゃぐとな？」

「クスツ……そうやって気をつかうのはマサ君らしくないわよ、大丈夫ホントに楽になったから」

ふむ……唯がそう言うなれば、もうちょいお邪魔しよう。だが唯よ。

「マサさんはアレだぞ巷ではお気遣いの紳士として名を馳せた漢だぞ」

「フフ……そうね、マサ君は妙なところで優しいものね」

アレ？ ちょっ、そういう切り返し？ なんか予測と違うんですけど？

もっと二つ胡散臭いヤツを見る目で見られるかと思ってたんですけど？

はっ！？

「さてはまだ熱があるな……！」

「なんでそうなるの、 熱はもう殆どないわよ」

「ぬっ!? 熱がないとな、 それは逆にマズイぞ唯君、 人は基本的に熱を持つ生き物だ、 情熱という名の熱を」

「マサ君って優しいとか誉められたりすると、 そうやってわけのわからない事を言って誤魔化すわよね、 たまには素直に受け止めなさい」

「なっなんやてえーっツ!？」

「予測外、 また予測外な切り返し。」

「ツッコミとかはどうした!！」

「何? その優しい目は!」

「フッフ、 なるほどね、 マサ君が私とかをからかってる時はこんな気持ちだったのね」

「ムウガアアアアア!！」

「俺の本気はこんなもんじゃないんだからねっ!！」

立ち上がり部屋を出る為にドアノブに手を伸ばす。

「おっ怒った?」

「トイレ借りるんだからねっ!！」

「あつうん、どいぞ」

『ガチャ、バタン』

・  
・  
・  
・

唯 視点

私の部屋から出ていったマサ君。

最初は私の部屋に男の子、それもマサ君が居ることに少し緊張をしていたけど。

マサ君と話始めてからその緊張も直ぐに無くなった。

マサ君のそういう部分は相変わらず凄いと思う。

今も小さく下から聞こえてくる母さんやお兄ちゃんとの会話。

聞き取れる限りは昔からの知り合いのような雰囲気。

ホントに人見知りとかしない人よね。

私も最近是人付き合いとかは上手くいってるとは思っけど。  
お兄ちゃんにも丸くなったとか言われるし。

昔の私ってそんなに厳しかったかしら？  
フとそう思う。

うん、確かに言われてみれば……。  
今と比べたら堅いって言われても仕方ないかしら？

そう思う。

あつ、だからって言うて規則を破ることが良いこととは思わな  
いわよ。

まあ今、お見舞いに来てくれてるマサ君は規則とか全然気にし  
ないような人だけだ。

フウ……。

何故かしらね、私とは正反対な人なのに……。

こんなにも気になってしまう。

今日マサ君が私のお見舞いに来てくれたことが嬉しくてたまらな  
い。

素直には言わないけど……。

フフ、さっきマサ君に素直にとか言うておきながら自分はこう  
なんて。

やっぱり調子が狂うわね。



『コンコン』

「唯々入って良いか？」

あつまサ君、戻って来たみたいね。

「ええ」

「ホントかさつきみたいなことにならんか？」

「ならないわよっ!!」

さつきは迂闊過ぎただけ。

「ホントか、そう言って、またハレンチいただきました〜的な感じにはならんよな？」

うつ疑い深いわね。

あつまさか……。

「さつき私がかかってたことを根に持ってるのか？」

「ハツハツハ、そんなことはないですとも、ただ純粹に唯で遊ぼうと思っただけですとも」

「私で遊ばない!!」

やっぱり根に持ってたんじゃない。

『ガチャ』

「ナイスツツコミ、ほれ唯さんやモモ缶でござえますぞ、風邪  
と言えばコレだよな」

満足気にと笑いながら部屋に入ってくるマサ君。

モモ缶お母さんに渡されたのかしら？

「そら食べやれ食べドンドン食べ」

「そう言われると逆に食べにくいわよ」

「むっ、そりゃそうだ、っと、唯、あ〜ん」

えっ？ はっ？

一瞬何を言ってるのかわからなかった。

えっと・・・マサ君がモモ缶のモモが刺さってるフォークを持って私の口元に持って来てる。

そして、セリフは、あ〜ん・・・。

「そら、あ〜ん」

いやだから・・・。

そりゃたまにララさんとかがマサ君にしてもらってるのは見たことあるけど。

それで少し羨ましいとかも思ったりしたけど。

だけどいきなりやられたら、あっ焦るでしょ。

あつ、でも良い機会だし、そうね何事も経験よね。

意を決して口を開く。

「あ、あ〜ん」

『シヤクッ』

口の中に広がる甘酸っぱいモモの味。

と言いたいけど正直、味が良くわからない、こっコレはかなり恥ずかしいわ。

ララさん達、よくコレを平気で出きるわね。

「美味えか？」

「えっあつうん」

ホントは味なんて分からないのについ反射的にそう答える。

「そいつぁ良かった、もう一個食うか？」

「うっうん」

思わず頷く私。

はっ恥ずかしいけど、でも嬉しさが無いわけじゃないし。

「ほい、あ〜ん」

「あっ、あ〜ん」

だから結局モモが無くなるまでマサ君に食べさせてもらった。

・  
・  
・  
・

マサ 視点

うむミッションコンプリート。

ひそかにドアんところから覗いてる唯の母ちゃんとアニーにサムズを送る。

はい実はコレ唯の母ちゃんの指示だったりする。

唯が喜ぶからとかなんとかで。

まあ確かに微妙に嬉しそうに見えなくもなかった気がせんこともなきにしもあらずだったな。

実際はどうかはアレだけんども。

まあそれは一旦置いておきフと気付いたんだが

唯の部屋を軽く見渡すと結構な数のネコグッズ。

「唯はネコ派か？」

「えっ急に何？」

「部屋が結構ネコグッズだからなネコ好きなのではと推理したわけよ」

「推理って・・・まっまあ確かにネコは好きだけど」

フフンやっぱしな。

「コレからは名探偵マサと名乗ろう」

見事な推理っぷり。

「名探偵って、この部屋を見たら普通に分かると思うわよ、私が言うのも変だけど」

「ですよね〜ネコ一杯だしな」

「そこまで一杯じゃないわよ」

ほほう唯君やそれはどの口が言いやがるってんだ。

「唯の後ろに居るニャンコ人形、その直ぐとなりのニャンコ人形（小） クッション更には・・・」

目につくネコグッズの数々を上げてみた。

「うっ、確かに言われてみれば一杯だわ」

「フッ勝った、いやさんの勝負かは知らんけど。」

「ちなみに俺あどっちかってえとイヌ派」

「そっなの？」

「うむ、どっかってえとだけどな、動物は全般的に好きな部類だけど非常食的な意味で」

「非常食!？」

「流石に冗談ツス、半分くれえは」

「半分は本気じゃない!!」

いやね、 うん、 なんつかほら。

「やんごとなき事情により食わきや流石に逝ってまうー!! みたいな状況が多々な」

むろんキーワードはジジイだ。

「いついつたい何がどうなって何を食べてたのか気になるけど聞くと後悔しそうだから聞かないでおくわ」

「まあそれが賢明ですな」

あつ、と一応は流石に人は食ったことねえよ、流石に。

カエルとかはあつけど。

「って何の話からこうなったんだっけ？」

「マサ君がイヌ派って話じゃなかったかしら？」

ああそうだった、そうだった。

で動物全般的に好きって話だったっけか。

「まあとにかくマサさんは動物は好きなんですよ非常しょ」

「最後の部分はもう良いわよ」

むっ、残念。

そんな感じでダラダラと話をしていると

『コンコン』

ノック音。

続いてガチャッと入って来たのは。

「どしたんスカ遊さん」

「お兄ちゃん？」

遊さんでありました。

はて？



「マサ母さんが晩メシ食ってかないかだってさ、どうだ？ 俺も、もうちょいマサと話したいし」

晩メシの誘いだった。

ふむん……。

チラッと唯を見ると。

「いいんじゃない？ お礼もしたいし」

と結構ノリ気。

むむむ……。

「じゃお言葉に甘えてさしてもらいますわ、っと、その前に家に連絡せな」

ピッピッと携帯を弄りリトにメール。

『わかった、みんなにも伝えとくから古手川にもお大事にとって伝え  
といてララ達も心配してたからさ』

との返信。

それをそのまま唯に見せます。

「ララさん達が・・・明日はちゃんと学校に行かなきゃね」

「ですな、まっ今ん様子見る限りは大丈夫そうだな、っと遊さん、  
つつわけで晚メシいただきやす、つか寧ろ手伝いますわ」

そう言って立ち上がり部屋を出ようとする俺に唯&遊さんが

「マサ君、お客さんでしょ?」

「つか料理できんのか?」

それぞれの疑問、唯のは疑問じゃねえけど。

「まっ今日は作りたい気分なんですよい後それなりに美味えの作れ  
ますぜい」

そう言って今度こそ部屋を出る俺で。

で部屋を出た後に唯ノ母ちゃんに俺も作る〜と言ったら結構アツサリ許してくれた。

つか寧ろほぼ完全に俺に任す流れに。

望むところだ！！

つつわけでメニューは風邪に効く、味噌煮込みうどん！！

後、オニギリ。

微妙に統一感がねえけど後で小腹が空いた時様のおやつとさせてレモンスコーンも作ってみました。

ちなみにレモンスコーンも風邪に効くのだ。

オニギリはアレだけど。

で作ったモンをテーブルへと運びます。

丁度くらいのタイミングで唯と遊さんも顔をだした。

ちなみに唯の親父さんは単身赴任らしいッス。

「うっ美味そうだなオイ」

「そうね〜遊ちゃんコレねマサちゃんが殆ど全部自分で作ったのよ」

「ナツハツハ、キャリアがそこそこありますからなナツハツハ」

10年以上はな。

まっキャリア積んでも越えられなさそうな味もあっけど。

「コレって・・・風邪に効くのばかり」

「あれま唯さん流石に気付いたか？ まっ大分治ってるみてえだけど、はよ治しんしゃいつてな？ ウチのクラスは唯さんが居ねえと締まりませんわ」

いや、あげる君が居るには居るけど。

「ありがとうマサ君」

うむうむナイススマイル。

「まっ唯には世話になってるしな進級かけたテストとか他にもよ」

お互い様でござえますってな。

つととイカンイカンせっかくの味噌煮が覚めてまっ熱々が美味えの。

「じゃ食いまっしょい」

とみんなでいただきますして味噌煮とオニギリを食います。

うむ中々のでき。

「美味しい・・・それに温まるわ」

「だな普通に美味えよコレ」

「マサちゃん、手際見ても思ったけど料理上手ねえ」

「いつでも嫁に行けるように鍛えとりますんで」

「嫁ってオマエ女装でもする気かよ？」

女装……。

軽く想像してみた。

「国家権力が動くくらいにとんでもない仕上がりになりそうなんだがコレいかに？」

いや、コレはやばいモザイクは確実。

良い子どころか悪い子にも見せられんだろう。

チビッ子が見たらまず泣く、ヒキツケを興す、トラウマだって確定だな。

「お兄ちゃん食事中に気持ち悪いこと言わないでよ想像しちゃったじゃない」

「そうね遊ちゃん今のは遊ちゃんが悪いわ」

「えっ？ 今の悪いの俺だけか！？ 切っ掛けはマサだろうっよ」  
確かに俺切っ掛けだったけども。

「四分六シブロクで遊さんにも責任があるってことで」  
遊さんが四、俺が六ね。

「いや七三だろ俺三な」

「むむ、じゃそれで」

なんか今回は責任の割合判定ばっかしてる気がする。

「フフ、賑やかな唯」

「そうね母さん」

アナタに賑やかな生活を一家に一台、鬼島 政成、一家に一台、  
鬼島 政成をヨロシクお願いします。

ただし人によつては鬱陶しいとも言えるけどなっ！！

とこんな感じで料理も中々好評にて晩メシを食い終わり。

チクツとだけ遊さんとゲームしたり、結果は聞くな。

で流石に……。

「じゃボチボチ帰りますわ」

時計を見たら夜の9時過ぎだしな。

結構長い時間お邪魔したな。

「ええ今日はありがとうマサ君」

「じゃーな、また遊びにこいよ唯が居ない時でも別に良いからさ」

「それじゃ気をつけて帰りなさいねマサちゃん」

と古手川一家に見送られて。



「月とって 青いから」 遠回りして帰ると」

鼻歌混じりに帰宅したのでありました。

唯、明日は学校出て来られるかねえ」。

まっあの調子なら大丈夫だよな。

「早く良くなれよ唯」

・ ・ ・ ・

唯 視点

『早く良くなれよ唯』

マサ君が帰った後、フとそんな声が聞こえた気がして少しだけ可笑しい気持ちになる。

同時に嬉しい気持ちにも。

「どうした唯？ 急に笑い出して」

「なんでもないわ」

隣にいたお兄ちゃんに気付かれたみたい。

それになんでもないと答えるとお兄ちゃんは、そっかって言っ

「面白えヤツだったな唯とは正反対っぽいけど」

マサ君の印象を話す。

「大分変わってる人ね」

「だな、アレが唯の思い人ってか？」

「ええ・・・ッ!？」

アレ今、私普通に頷いて、ちよっ!!!

「いつ今のはなしよ!! ボーっとしてただけだから!？」

「だからつい本音が出ちゃったのね」

「うん・・・って違うわよ!!!」

お兄ちゃんに続いて母さんまで!!!

いや別に違うってわけじゃないけど、アレ私、何言っ

「不意打ちに弱いヤツ」

「そうね唯、顔、真っ赤よ」

うう~~~~。

そっそれは風邪だからよ、そう風邪だから。

殆ど治りかけてるけど。

「ねっ寝るわ明日は学校行かないといけないし」

うん二日も休むわけにはいかないものね。

「ああ」

「お休み唯」

なんでニヤニヤしてるのよ二人共!!

もう風邪なんて引くもんじゃないわ!!

ちよっただけ風邪も悪くないか思っただけ……っただから何を  
考えてるのよ      !!

第六十六話っぽい感じ！（後書き）

後書き

六十六話でした。

さて次回は・・・。

やはり未定。

でも頑張っていけます新携帯と共に。

感想などありましたれば是非

！！

## 番外編っぽい感じ！その13（前書き）

### 前書き

最初は活動報告のところでしようとした小ネタです。

地味に長くなり千文字のボーダーを越えたのでコチラへ。

まあ全体としては長いとは言い難いですが。

例によって殆どセリフと擬音でお送りしますクスリを持ってどうぞ。

### 番外編っぽい感じ！その13

くもしもIS世界だったら・2く

その1

「マサナリさんはまだ来ませんの、まさかこのごにおよんで怖じ気づいたんですの？」

「フハハハハ！！ 待たせたなっ！！！」

「!?!」

「トウツッ!?!」

『クルクルクル・・・スタツ!?!』

「ハアくあのバカは一体、何をやってるんだ」

「まさか登場シーンを考えてて遅れたとかでしたりして？」

「否定できんな特にアイツは」

「ンツン・・・随分と遅い登場でしたわねっそれにISはどうしましたの？ やはり怖じ気づいたのですわね？ まあ私と戦うなんて無謀な・・・」

「うんにゃ時代劇の再放送、録<sup>ロク</sup>るの忘れててさ急いで録ってた、危うくコンプしそこねるところだったわ」

「完全に私的な用事ですね」

「あのバカだけは・・・」

「じだっ！？ ろくっ！？ クラス代表を決める大事な時にアナタ何を考えてますの！！」

「いや前回やってた時に録ってなかったんさ、いやぁ再放送してくれてホントに助か」

「知りませんわよっ！！」

「むっそんなカリカリせんと、カルシウムをだな」

「誰のせいなのっ!!」

「・・・政治？」

「ア・ナ・タですわよっ!! ってなんでさも意外みたいなお顔を  
してますのっ!!」

「まあまあ落ち着きなされセシリアさんや、今から勝負すんだろ？  
そんなにカツカしてたら勝てるもんも勝てないぞ？ まあ勝つのは  
俺だけだ」

「フッフッフ・・・良いですわ、マサナリさんISを起動なさい、  
かんぷなきまで叩き潰して差し上げますわ!!」

「あいよっと、じゃあ本邦初公開!! ISチェーンジ」

『ガチャガシャンガシャン!!』

「・・・な、何をなさってますの?」



「見てわからんか？ ISチェンジの第一段階、簡易更衣室の組み立てだ」

「なんでそんなことしてますのっ！！」

「むっセシリア君やそれはアレか遠回しにココで公開ストリップをしると言ってるのか？」

「そんなこと一言も言ってますんわっ！！」

「私は一向に構わん政成、脱げ」

「脱がんわ千冬！！ つか俺の部屋のシャワー室に仕掛けてた隠しカメラ、アレオマエだろ全部撤去したから」

「し、しし知らん私は全く知らん」

「・・・織斑先生」

「その反応で十分わかるな」

「まあ千冬は後でガチコン、イクとして第二段階に移行!!」

『シャツ』

「よっ・・・ちょアレ? コレちょっ? ン? ちょっアレ?」

「なっなんか凄くバタついてるますね、っていつか起動じゃなくて着替えじゃ」

「山田教諭、見なかったことにしてくれると助かります」

「はっはい」

『ピポパ』

『はいはっい東お姉さんだよっどうしたのマー君?』

「東、緊急事態だ!! 東が送ってきたアレ、サイズ合わねえぞ!!」

『ああ〜アレは、ほら各パーツの部分に小さなウサギマークがあるでしょ? それ押したらサイズがピッタリになるよ〜』

「あっそうなん？　じゃっポチツとな」

『バシユーンッ！！』

「おっマジじゃサンキュー束」

『いいよ〜ん、じゃねマー君』

『プッ』

「じゃ改めて第二段階移行！！」

「パッパ〜　パッパ〜」

「あっあのマサナリさん、その簡易更衣室とかはこの際良いですわ、  
ですが何を口ずさんで」

「変身中のテーマ曲、パッパ〜」

「そっそうですの・・・もうなんか既に疲れてきましたわ・・・」

「よっ……っし変身完了!!」

「あくまで変身で通すんですね」

「相変わらず変なところこだわんな政成のヤツは」

「変・身・完・了!!」

「強調しましたね」

「強調したな」

「黙りゃん担任&副担任!! とにかく変身完了!!」

『バツクルクル、スタッ!!』

「我が道に行く黒い装甲!! 正体不明な謎の人、その名もマサナ  
リンガー・S!!」

『ババーン!!』

「・・・もう、どの辺りからツッコんでいいのかわかりませんわ」

「ちなみにマサナリンガー・SのSはスーパーでもスペシャルでもなくスプーキーのSだっ!!」

「どちらでも良いですわ・・・早く始めませんか？ もう疲れてきたのでゆっくり寝たいですわ」

「むっ、さよか？ じゃ審判く始めちゃって」

「ようやくか・・・まあ良いこれよりセシリア・オルコットと鬼島政成の試合をおこなう!!」

「本当にようやくでしたわね・・・」

「ういっ了解」

『ゴキゴキン・・・』

「あっオルコット一言、言うておくことがある」

「はっはい」

「アレの後に気が抜けるのはわかるが試合が始まったら集中する」とだ、でないか・・・五秒も持たんぞ？」

「えっ？ それはどういっ」

「忠告はした、では試合開始っ！！」

『ドンッ！！』

「なっ！？ 速っ！！」

「おらよっ！！！」

『ギヤドッ』

「クツ・・・しかも重い、これは確かに油断出来ませんわ、とにかく今は距離を」

『バツ』

「取らせねえーよ!?!」

『ギャゴツ!?!』

『ズドーン!?!』

「あっクツ・・・は、速すぎますわ、私のブルー・ティアーズが全  
くついていけないなん」

「暢気に感想なんざ言ってるヒマはねえぜえ?」

『又ツ』

「あっ・・・」

「じゃコレで終いだ」

『グツ』

「クツ・・・」

『ギョッ』

「・・・？」

「と思っただけど今は、ちと不意打ち臭かったな」

「なっ何を言ってますの！！ 私に情けをかける積も」

「違えって言ったる不意打ち臭かったってよ、それで勝ってもスッキリしねえしなあゝっうわけで仕切り直し」

『ザッザッザ』

「・・・後悔いたしますわよ」

「やせてみるい、しねえけど」



「させてみせますわっ！！ ブルー・ティアーズ！！」

『バシユ、バシユ、バシユ！！』

「おっフン・フンネル？」

「違いますわっ！！ って、あぁ〜もう！！ 踊りなさい！！」

『バシユッ！！バシユッ！！バシユッ！！』

「なんでえ違つかよ残念なり、っと、よっ、ほいさっ、あらわっ」と

『ヒョイ、ヒョイ、ヒョイ』

「すっ凄いですね政成君アレだけのビットからの攻撃を余裕でかわしてますよ」

「そっだ・・・ン？ 山田教諭、いつの間に政成のことを名前で呼ぶわっ」

「あっそれはですね、この前、教材を運ぶのを手伝ってもらったんですけど、そのお礼に一緒にお煎餅を食べたんです、その時に名字で呼ばれるんはアレだからマサか政成でヨロシク！！ って言われまして、政成君って一見すると不良さんみたいですけど話しやすく優しい男の子ですよね」

「そっそっですか・・・」

(クツ・・・早速か)

「あっあの織斑先生どうしたんですか？」

「なんでもないです、それより試合を」

「あっ、そうですね」

『バシユツ！！バシユツ！！バシユツ！！』

「あっ当たらない・・・」

「数が多くても真っ直ぐしか飛んでこねえしな、で、ネタ切れか？」

「まさか、後悔させると言いましたでしょう！！」

『ガゴツ、ギャドン』

「おっ？ ミサイル？ だがムダなり！！」

『ヒヨイ』

「避けてもムダですわ」

『ヒューン』

「あれま追尾型かい？」

「後悔なさいコレでチェックメイトですわっ！！」

「だからしねえつつつの」

（とは言えどうすつかねえ、別に当たっても問題ないっちゃないん

だが・・・おっ！！　そだこのシチュならアレだな、悪魔も泣き出すスタイリッシュな魔人さんのアレ)

『ヒューン』

「よっと」

『ガツスタツ！！』

「なっなあ~~~~っ！！」

「イヤツツホウ~~~~！！」

『ヒューン』

「ミツミサイルの上に乗った！？」

「また無駄に器用なことを・・・」

「ハツハアアア！！　次こそ終いにすんぜえエエ！！」

『ヒューン！！』

「ブ、ブルー・ティアーズ、撃ち落としなさいっ！！」

『バシュッ！！バシュッ！！バシュッ！！』

「そう来ると思ったぜい！！！」

『バツズドーン！！』

「しまっ！？」

「オウラアアア！！！」

『ゴッッ』

「ッッッ！！！」

『シッサッ』

「オルコット気絶だな、しかし決まり手が頭突きとは……ある意味、前代未聞だぞ、まあ良い勝者、鬼島 政成！！」

というわけでVSセシリア戦でした。

決まり手は頭突き！！

ちなみにミサイルに乗るアレはモチロン、デビルなあの人のマネです。

・ ・ ・ ・

その2

『ムクッ』

「ここは・・・」

「おっ起きたかセシリア」

「マサナリさん？」

「うむマサナリさんだ、どだ調子は一応は加減したけど気持ち悪いとかねえーか？」

「ええ大丈夫ですわ」

「なら良かったわ、まっ加害者の俺が言うんもアレだけど」

「全くですわ、痕が残ったらどうする積もりですの」

「残らんで、その手の調整は匠クラスだから」

「匠クラスってマサナリさん、いくら勝負とは言え女性の額に頭突きをするなんて非常識ですわよ」

「だが俺はするっ！！ 常識に囚われない漢だからな！！」

「囚われないではなくて外れてるが正解ですわ!！」

「じゃそれで」

「納得しますのっ!？」

「うむ、自覚はなきにしもあらずだし」

「ハア・・・なんで私はこんな人に負けましたの・・・」

「カツカツカ!! 俺は喧嘩じゃジジイ以外にや負けたこたあねえからな、今後も負けるつもりはねえけどよ」

「喧嘩ってマサナリさんアレは」

「はいはい細かいこたあ良いですがな、あつそだ俺、代表になるつもりはねえからセシリアが代表やってくんね?」

「はっ? マサナリさん、何故!？」

「何故と言われっと、強いて言うなら理由は二つ、一つはガラじゃねえからだな、だってクラス代表って委員長みてえなもんじゃん?



似合わねえったらありやしねえべ?」

「たっ確かにマサナリさんが委員長というのは似合いませんわね・  
・で、ですがそれでは何の為に勝負をしたのかがわかりませんわっ  
!!!」

「ン? そりゃ決まってる、セシリアが売ったモンを俺が買ったただ  
けさね」

「はっ? えと・・・つまりは売られた喧嘩を買っただけと言いた  
いわけですの?」

「はい正解、そんなセシリアさんにはミミをあげよう」

「あっありがとうございます・・・って、そっいつ問題じゃ・・・ハ  
アゝもう良いですわ」

「おっ? じゃ代表はセシリアってことで良いか?」

「いえ、私も代表は辞退しますわ」

「なぬっ!?!? じゃどうすんの?」

「一夏さんにやってもらいましょう」

「一夏？ アレ？前にやった勝負はセシリアが勝ったんじゃないか？  
たか？」

「アレは殆ど私の負けでしたわ・・・何より私自身が勝ったと思えませんでしたもの、そんな状態じゃ胸を張ってクラスの代表とは名乗れませんわ」

「なるほろな・・・セシリア、良いなオマエ」

「何がですか？」

「なんつうか、かっけえよ、俺あそういうヤツはかなり好きだわ」

「すっすす好き！？ なっ何もこんな所で」

「おっつ！？ 赤っ！！ っと一応、言っとくけど人間的な意味で  
な」

「そっそっいつことはもっと手順やムードを……えっ？人間の？」

「うむ」

「まっ紛らわしいですわ……！」

勝負後の会話でした。

紛らわしいマサです。

で、セシリアさんが落ち着いた後に。

「じゃボチボチ戻りますわ、セシリアはもちっと休んでるな」

「えっええ」

『ガラッ』

「あつマサナリさん、そう言えば、もう一つの方の理由を聞いてませんわ」

「もう一つの理由？ ああ、なんで代表にならんかの？」

「ええ」

「そりゃオマエ・・・俺が出たら勝ちが決まっちまうだろ？じゃな、ゆっくり休め」

『ヒラヒラ』

「あつ・・・行ってしまいましたわ・・・」

「フウくマサナリさん、男の人でもあのように強い方が居ましたのね・・・少し変わってますけど・・・それにあの去り姿、少し素敵でしたわ」

というわけでセシリアさをフラグの匂いです。

・ ・ ・ ・

その3

「クツ・・・嫌な予感がしたと思ったらやはり・・・」

「はぁ・・・政成君、カツコイイですね」

「オルコットだけじゃなくココもかつ!？」

コツソリ覗いてた千冬さん&真耶先生。

真耶先生は巻き沿い気味にフラグの匂い。

とりあえずは以上です。

## 番外編っぽい感じ！その13（後書き）

後書き

というわけで番外でした。

番外だけで13・・・最近は、と言っても更新事態の期間が空いたりしてますがホントに番外ばかりだ・・・。

何故か思い浮かぶ・・・。

ISとか殆ど知らないクセに。

っとイカンがな！！

じつ、次回は本編か？ 多分、本編の予定！！

そちらも是非ヨロシクお願いします。

感想などありましたれば是非！！



第六十七話っぽい感じ！（前書き）

前書き

本編です！！

ただ主人公の 마사가 あんまし出てない・・・。

いつもの如くクスリを持ってどうぞ！！



## 第六十七話っばい感じ！

ナナ視点

「はぁ・・・」

クソう・・・アイツら、いつつも、いつつもバカにしゃがって・・・。

公園のベンチに座りさっきのコトを思い出しながらため息。

「ナナちゃん、どうしたの？」

そんな私に声をかける人。

俯いてた顔を上げて確認。

「春菜！ お静！」

そういえば今日って休みだったんだっけ？

そうだ、二人に相談してみよう。

「実は、さっき・・・」

ほわわ〜ん・・・あっ回想な。

私が漫画を読みながら部屋でのんびりしてた時だった。

地球の漫画ってスゲー面白えよな。

バカナリとは趣味が合うから、よくアイツから漫画借りて読んでる。

って、そんな話じゃなかった。

バカナリから借りた漫画を読んだ時に、モモが下着姿で。

「見て見てナナ！　こんな下着買って見たの、ステキでしょう！！」

って見せびらかしに来ただけ。

なんて、いうか、こうつい、モモのヤツの胸に目がいつちゃって。

「……………」

って微妙な顔をしたみたいでさ。

「あら、どうしたの、その表情？」

って言われてさ、まっココまでだったら別にいいんだよ、ちょっと腹立つけど。

でもその後モモのヤツが……。

「まっ！　ゴメンなさい私とした事が……ナナにはブラなんて縁の無い物だったわね」

『ピキッ……』

「!?!」

・  
・  
・  
・

「ーってワケなんだよ！ モモのヤツ、ちょっと胸が大きいと思っ—て!?!」

「あ~~~~~」

あの勝ち誇った表情、ムカつく~~~~~。

「よし決めた！ 何としても胸を大きくしてモモを見返してやる！  
！ 後ついでにバカナリも!?!」

いっつも、いっつもペツタン」って言いやがってエ~~~~。

見てろよ~~~~~!?!」

直ぐにバインバインになつて。

『ぶるん』

『フフ〜ン、どうだバカナリ』

『うおっ!?!? オマエそんな色っぽかったか?』

『隠れてた実力が出たってヤツ?』

『まっ・・・参ったぜ・・・ナナ、いやナナ様!!』

『アッハハハ~~~~この、ぷるんぷるんなナナ様にひざまずけバカナリ~~~~アッハハハ!!』

「~~~~って言わせてやる~~~~見てる~~~~」

「そっそんな青写真を・・・」

「マサナリさん、そんなこと言わないと思いますけど」

うつ・・・確かに、お静の言う通りかも・・・でも、見返してやるって決めたんだ!!

「春菜とお静も協力してくれっ!!」

「ちょっとナナちゃん!？」

「どっ、どこ行くんですか~~~~っ!？」

春菜とお静っていう心強い味方を得た私は、おっぱいを大きくするっていう目標の為に・・・。

「ただいま」

向かった場所は家。

「おかえりいナナさん、あっ春菜さんに、お静さんも」

「こんにちは！！」

家に帰ると美柑が出迎えてくれる。

「なんつーか、珍しい組み合わせだな、よっ春菜、静！！」

ついでにマサナリも。

「あっマサ君、こんにちはわ」

「マサナリさん、どうもです〜あっ、そういえば御門先生が今度また薬草の調達に協力してほしいって言ってましたよ〜」

「ふむ・・・おけ、ヒマな時ならつつといてくれや」

そういやバカナリって、ドクター・ミカドが使う薬草集めを手伝ってるって言ってたな。

モモも自分の庭園で育ててるのをたまに分けてるみたいだし。

ドクター・ミカドが地球に住んでるって知った時はちょっと驚いた。

金色の闇のこともだけど。

まさか金色の闇に狙われて生きてるところか一緒に住んでるなんてなあ。

私も一緒に住んでるけど。

バカナリって実はスゴいヤツなのか？

父上にも勝ったって聞いたし・・・。

「アン？ どしたんナナ、人のツラ、じろじろ見てからに、ハッ！  
？ さては昼メシのオムライスにケチャップでペッタコって書こうとしたのがバレたか！！」

『ピキッ！！』

「やっぱオマエなんてバカナリだバーカッ！！ 今に見てるー春菜、お静、美柑も行くぞ！！」

「えっ、あっ、うっうん」

「はい!!--」

「ちょっと、わっ私も!! っっていうか何するのっ!?!」

勢いで美柑も誘ってみたけど、チラツと美柑のある一部分を見て。

うん、きつと美柑も仲間!!

「アレ? なんだろ・・・スゴくなんかスゴくこっもヤヤする」

「いいから行くぞ!! 見てろよバカナリ!! 直ぐにぶるんぶるんになってやるからなっ!!--」

そう宣言して春菜と静、美柑と一緒に自分の部屋へと行く。

美柑はちょっと引きずりながらだったけど。

って・・・。

「バカナリ、オマエはついてくんなっ!!」

「何故に!？」

「なんでもだっ!! とにかくついてくんな!!」

「ぬう今日はみんな出かけちまったからヒマなんだよ、俺も混ぜるよ」

「絶対ダメ!! 覗いたりすんなよ!!」

『ウィーン』

そう言ってドアを閉める。

「マサさん、ちょっと可哀想かも?」

「いいんだよ、アイツが居たら出来ない話だし」

バカナリとは言え男の前でする話じゃないもんな、おっぱい大きくする話なんて。



「マサさんが居たら出来ない話？」

あつ、そうだった引っ張って来たけどまだ美柑には今日の目的を  
言ってなかったっけ？

「それは・・・名付けて『おっぱい大作戦』だっ！！！」

『バァーン！！』

手をグーにして高く突き上げて宣言！！

目指すはふるんぷるんだ！！

「おっ、おっぱい大作戦？」

「そっ、そういうネーミングなんだ・・・」

「おお、なんかスゴそうです！！！」

ふふうん、そうだろお静、咄嗟に考えたにして良いネーミングだと思う。

『大』の部分なんかおっぱいを大きくするっていう意味もあるんだぜ。

美柑と春菜の反応がちょっと微妙だけど。

「そ、それで、その名前で何をするかは大体分かったけど具体的に何を？」

「そうなんだ良いところに気付いた美柑、そこなんだよなあ」

牛乳は飲んでるんだけど効果は・・・きっと、そのうちに出る！！

今は即効性重視。

「ううん・・・どうすれば良いか・・・私も日頃、色々やってるけど、あまり効果ないんだよね、腕立てとか・・・」

春菜、腕立てやってるのか腕立て・・・聞いたことあるな。

ん？ アレ？

「春菜は普通に胸あるじゃん？」

今、気付いたけど少なくとも私達の中では一番あるし。

次がお静。

で、その次が……。

むむう……。

「えっ？ ナナさん、その目は何？」

「なあ美柑、美柑つて、どれくらいなんだ？」

パツと見は私と変わらないくらいだから余計に気になった。

「うつ……えっえつとゴニョゴニョ」

私にだけ聞こえるよう耳打ち。

「ヨシッ！……」

美柑にはサイズは勝ってたギリギリだったけど。

「ちょっとナナさんヨシッて何!? ヨシッて!!」

「ふふふん、美柑よりワンランク上の女だったからさ」

「なっ、わっ私はまだ将来があるし!! まだまだ先があるからっ  
!!」

「それは私もだっつて」

まだまだ成長するはずだしな。

「えっとう、こっついつのつて・・・あっ思い出しました!! ドン  
グリの背比べですね!!」

『ズーン!!』

おっ、お静!!

ガツクリ肩を落とす私と美柑。

「おっ、お静ちゃん、それはちょっと言っちゃダメだよ」

「美柑・・・絶対に大きくなるうな」

「うん絶対に!!」

今ので美柑とスゴく仲良くなれた気がする。

・ ・ ・ ・

### ヤミ視点

本日私はドクター・ミカドの診療所で検診をしてもらっています。

何故かと言うとドクター・ミカドにトランスの力は身体に負担も掛かるので検診を受けておいた方が良いと言われたからです。

私、自身もその自覚はありましたのでコレまでも定期的に受けていますが。

今日の検診では身体のデータを取るために身長や体重などを計っていました。

次は胸囲ですね。

「トランスはしたらダメよ」

「うっ……わわかりましたドクター・ミカド」

コッソリとトランスを使ったのが見破られてしまいました……。仕方がありませんので、大人しく受けました。

「あら？ 前に計って時より少し大きくなってるわね」

「ほっ、本当ですか、ドクター・ミカド!!」

「ええ本当よ」

やっぱりました……。トランスを使わなくても大きくなっていま

した。

フフ・・・美柑とセカンド・プリンセスには悪いですが、コレからはワンランク上のヤミちゃんです。

もしくはヤミっ子です。 あっ、でもヤミっ子と言って良いのはマサナリだけです、その辺りは・・・。

「次はウエストね」

考えごとをしていたらいつの間にかドクター・ミカドが密着する格好になっています。

私のウエストを計る為ですね。

『ふにょん』

!?

何故でしょう・・・先程まで、とても気分が良かったのですが急に気持ちが下降しました・・・。

ですがまだまだ私だって大きくなります、なるはずですトランスを使わずとも絶対に。

・  
・  
・  
・

ナナ 視点

「そっだよねヤミさん」

「み、美柑、急にどうしたんだよ？」

「えっ？ あっ、なんか急にヤミさんのことが浮かんで・・・なんでだろ？」

？ 意味がわかんないと思ったけど、何故か私も思い浮かんだんだよな・・・。

まっヤミも仲間だしなっ！！

今日は出かけてるみたいだけど今度はヤミにも参加してもらおう。



うん、それが良い。

つとと・・・えっと、そういや大分、話がズレたけど何の話して  
たんだっけ？

うううん、あっ、そうだった！！

思い出した、思い出した。

春菜は胸、普通にあるって話だったよな。

そのことをもう一回春菜に言ってみたら春菜は、ちょっと涙目にな  
りながら。

「・・・そう？ でもララさんや唯さんとか周りの人見てるとなん  
か・・・ね、お姉ちゃんも私より全然大きいし・・・」

「あゝゝゝ確かに、あの二人は特に大きいですしね・・・っていう  
かりこも普通大きいし・・・」

だよな・・・姉上にムカつくけどモモ、リコのヤツも大きいし・・・  
。。

ううううなんで姉妹なのに私だけ・・・。

「あの〜気になったんですけど」

お静？

「何が？」

「えっと、私、長年死んでたから、よくわからないんですけど、なんで皆さん胸を大きくしたがるんですか？ 飢饉に備えて、栄養のたくわえとか？」

「えっ？」

「飢饉に備えてって、流石は昔の人」

あつ、そう言えば、お静ってずっと幽霊ってヤツをしてたんだっ  
たっけ？

なら、お静に教えてやらないとなっ。

「そうじゃないぞ、お静！ その方が大人っぽいからだっ！！」

またグーにした手を突き上げながら言う。

「ふえ？ 大人っぽい・・・ですか？」

「そうだ！！ 私の経験だけどモモは周りから結構大人扱いされるのに、私はいつつも子供扱い！！ 双子なのに！ きっとこれは体型のせいだっ！！」

まあそんなモモもバカナリには子供扱いされてたりするけど。

「「あーー」」

「なるほど〜つまりナナさんは大人の女性になりたいワケですね！

「！」

ついでに言うならバカナリを膝まづかさせたい！！

「そう言えば胸をがとも大きい御門先生もスゴく大人っぽいです

もんね」

「だろ？」

あの人、スゲー大人っぽいし。

それもきつと胸だ！！

胸がポイントなんだ。

「あっそういうば、こんな話を聞いたことがあります！！  
胸を大きくするには誰かにモミモミされるのが良いと！！」

「そ、そうなのか！？」

そうだったんだ、知らなかった・・・。

「うっ、なっなんかイヤな予感が・・・」

「わっ、私も・・・」

？

春菜に美柑、せっかく具体的な方法が分かったのに、なんでそんな微妙な顔してるんだよ。

「どうします？ 早速、実践してみては？」

「そうだなー！」

「えっ、ちよつナナちゃん！？」

「それは止めた方が良いと……」

「なんだよ二人とも、胸が大きくなりたくないのか？ 私はやるぞ絶対に、ぶるんぶるんになってやるんだー！」

「わぁーすごい気合いです！！ なら私も念力で、さぼーとしますねー！」

え

なっなにを……。

「えいつー！ー！」

『ピキッ!』

「おわっ!?!」

て、手が勝手に。

「それっ!?!」

『ぺたっ』

「あ……ン、ちよっナナさ……ん」

「あわわっ、わっ悪い美柑、でも手が」

私の意志とは関係なく勝手に手が美柑の胸に。

「それ春菜さんも〜」

『ピッ!』

「えっ、え〜お静ちゃっ」

『ぺたっ！！』

「へっ！？」

こっ今度は私！？

春菜の手が私の胸に。

「お次は〜美柑さんです〜」

「はっ・・・あ！！ お、お静さ・・・た、楽しんで・・・な、ん・・・」

「それ〜」

『ピシッ！』

『ムニッ！』

「あっ・・・み、美柑ちゃん」

「じっゴメン春菜さん・・・ヤっ、ナナさん、くすぐっ」

「そ、そんなこと言ったっ・・・わ・・・私だっ・・・あふ・・・」

「み、美柑ちゃん、摘まんじゃ!!--」

「それぞれ~~~~」

『・・・・・・・・』

「「「~~~~」」」

・  
・  
・  
・

「はあ・・・はあ・・・」



「……………これ……………ホントに効果あるのか？」

「あ……………あんまりない気がするんだけど……………」

なんかスゲー怪しいんだけど。

「あれ……………？　そうですか？」

お、お静、アレだけやっときながら……………。

「お静ちゃん、この話、誰から聞いたの？」

「里沙さんです！…！」

「あ……………やっぱり……………」

里沙って確かに春菜の友達の？

私も会ったことあるけど……………。

「うう、臨海学校の時もだったけど・・・結構危険かも里沙さん  
って・・・」

そ、そうなんだ、今のもだけど私も次、会った時は気をつけよう。

「はあ、なんか妙に疲れた、っていつかお腹空いてきたな」

「そういえば、そろそろお昼だね」

「あっホントです!! 春菜さんどうしましょう?」

「どうしよっか?」

「あっそれじゃ春菜さんもお静さんも一緒にどう? 多分マサさん  
二人の分も作ってくれてると思うし」

美柑の言う通りカナリだったら、作ってるだろうな。

「そうしよっぜ!! 昼からもまだ続きたいし!!」

「えっ? お昼もモミモミするんですか?」

「それ以外の方法でだっ！！」

アレは効果あるかわかんないし、スゴい疲れる。

「うん私もアレはちょっと遠慮したいかなあ」

「残念です」

「残念って、お静ちゃん、やっぱり楽しんだの？」

ジト目でお静を見る春菜。

春菜だけじゃなくて私に美柑もだけど。

「アハハ、ちょっと楽しくなっちゃいました」

全然悪びれてないし、お静、モモと違って黒くない分、逆に夕チ  
が悪い。

「完全に里沙と未央の影響受けてる・・・」

「後でマサさんにゲンコツしてもらおう」

「ほう！？ 美柑さん、それは許して下さい、マサナリさんのゲンコツ何故か霊体まで響くんですよ」

急に涙目でペコペコしましたし。

確かにアイツのゲンコツは痛いからな。

まっいいや、とにかく、お腹空いたし。

「とりあえず下に行こうぜ」

三人に声をかけて下へと降りる。

おっ良い匂い。

そっぴや今日はオムライスって言ってたっけ。

結構楽しみだな。

「おいバカナリ昼ご飯出来てるか」

『ガチャ』

バカナリに声をかけながら居間のドアを開けたらバカナリの姿が見えなかった。

おっかしいな。

「バカナリのヤツ出かけたのか？」

「うん出かけるんなら出かけるで一声くらいかけると思っけど、まっまああの時に声をかけられたらスゴい困ったけど・・・」

確かに。

じゃどこに・・・。

「あっアレ・・・」

「あっマサナリさんです!?!」

なんだ、やっぱり居たんじゃん。

「おい、バカナ・・・うっ!？」

バカナリを呼ぼうと春菜が指差した方を見ながら声をかけようとしたら途中で声が詰まった。

だってバカナリのヤツ・・・。

『ジャラ〜ン』

「ファ〜 ト〜 戦 キミの を〜 戦わない らは笑っだろ〜  
ファ〜 イ〜」

「な、中島み き、歌ってる・・・」

「す、すごい悲しい後ろ姿だね」

「何故か涙が出そうです〜」

うっうん。

確かに見てて胸がズキズキする……。

ど、どうする。

とりあえず、もう一度誘ってみるか？

そうだな、そうしよう。

流石にほったかしに出来ないし……。

そう決めてバカナリに近づき肩に手を置きながら。

「ば、バカナリ、ご飯、食おうぜ？」

そう声をかけた。

そしたらバカナリのヤツは若干潤んだ目で。

「ホ、ホントか？ 仲間外れにしないか？ 一緒に食べて良いのか？」

「しない、しないから、なっ？」

罪悪感もスゴかったけど、なんかカワイイと思って、気付いたら頭を撫でてた。

「よし！！ なら食おう春菜に静の分もあつからな、じゃんじゃん 食べ、デザートだってあるからな！！」

急に目をキラキラさせながら立ち上がり嬉しそうに昼ご飯の準備をしだすバカナリを見て。

やっぱりカワイイかもしれないと思った。

「マサさんやっぱり寂しかったんだ」

「だね、今スツゴい笑顔だし」

「嬉しそうです」

まあそれでも春菜と静の分を作ってる辺り変なところで律義だよな



バカナリのヤツ。

バカナリが作ったオムライスは美味かった。

デザートゼリーも。

で昼ご飯の後はどうしようかって思ってたら。

いや、ほら、またあんな感じで悲しい後ろ姿されても困るし。

だけど食べ終わる時くらいにバカナリの電話が鳴って。

「あいあい、あん？ まっ空いてるちゃ、空いてる……おけ、わあつた、まかせろい！！」

『ブツ』

「つつわけで俺あ昼からチクツと出るわ、遅くなっかも知らんから晩メシは先に食っててくれや」

「えっと、マサさんまた、どっかから手伝ってって電話？」

「まあな、つうわけで晩はヨロシクな」

って感じでバカナリのヤツは出かけるらしい。

バカナリたまにこんな感じで休みの日に手伝っいに出るんだよな。

やっぱバカナリ、バカだけど面倒見が良いな。

バカだけど。

「ナナ君や、なんか念入りにバカにされた気がするんだが」

あつヤバイ、結構鋭い。

「こ、細かいことは、気にすんな男だろ」

「むっ仕方あるめえマサさん漢だから気にしないでおいでやらあ」

簡単なヤツ。

それからバカナリのヤツが出かけた後、また私の部屋に集まって『おっぱい大作戦』第二部。

とは言っても……。

「うーん……なんか良い方法ないかな？」

バカナリのヤツが帰ってきたら驚くくらいに効果あるヤツ。

「やっぱりモミモミします？」

「お静ちゃん、それはちょっと……」

「やっぱりマサさんにゲンコツしてもらえば良かったかも」

「はわっ！！」「冗談ですよ冗談！！」

目が本気だったクセに……。

まっお静の案はほって置いて。

「あつ、そうだー!!」

方法じゃないけど思いついた。

「ナナさん、何か思いついたの？」

「直接な方法じゃないけどな」

「それって？」

「とりあえず方法がわかんないんだから銀河ネットで、いい方法があるか探してみようって思ってたさ」

うんうん流石は私!!

良いところに気づいた。

優秀〜!!

「さっ最初からそれやってれば午前中あんな目にあわずにすんだの

に・・・」

「うっ・・・美柑、そういうこと言うなよ、あの時は思いつかなかっただかし。」

「まあまあ、美柑ちゃん、それにしてもネットって宇宙にもあるんだね」

「まあね、私はコーユーの苦手だから、あんまりやりないけど」

慣れないながらもネットで胸を大きくする方法を検索する。

『カチッ』

おっ出た。

「ん~~~~~？ キューオクトパスを使った手軽なバストップ法・  
・・・」

手軽か、簡単に出来るってことか。

だったら丁度よいかもしんない。

「ねえねえナナさんキューオクトパスって？」

あつ、そうだった流石にわかんないよな。

「キューオクトパスっていうのはハッチ星の陸上生活型のタコのことだよ」

「タコですか？」

「うん、友達だからデダイヤルで呼んでみる」

『パカッ』

美柑の質問に答えながらデダイヤルを弄る。

あつ一応説明しとくと。

情報入力した物をいつでも呼び出せる姉上が発明した伝送システ

ムのこと。

私はいろんな星で友達になった動物を。

モモは植物。

姉上は発明品とかを入力してる。

いつでも呼び出せるからスゲー便利なんだぜ。

ってなんだろう、なんかスゴい、いまさら感が……。

まっまあいいや。

『ピッ』

入力完了!!

『ブンッ!!』

『チュミーン』

『ウニヨウニヨ』

「キューオクトパスのオクちゃんだ!!」

「わ~~~~カワイイ!!」

「そつだろお静!!」

あのつぶらな目がカワイイんだよなコイツ。

「うっうん・・・なんか頭のトゲが」

「そこはかたく不安」

それも含めてカワイイのに。

「それで、それでナナさん、このコでどうするんですか?」

あっそうだったまだ方法は見てなかった。

「え〜と・・・カワイイ吸盤でバストを吸引・・・?」



「へっ吸引？」

「なんかイヤな予感が・・・」

わ、私も・・・。

『チュミミーン（OK ご主人！！）』

あっ嘘、何張り切ってたオクちゃん！！

『ビュルルッ！！』

「うひゃあ！！」

オクちゃんの足がお静の身体に巻き付く。

まさかさつき呟いた一言で命令と勘違いしちゃったのか！？

『キュポン！！』

「あ~~~~ッ！！」

やっぱり!!

お静の胸に吸盤をつけてるし。

『チュウウウウ!!!』

「!?!?」

そして吸ってるし!!

「ひあああっ……とっ、とねちゃいます~~~~~!?!」

と、とれるのか!?!?

やっヤバイ。

「助けないとツ!!! オクちゃ」

「待ってナナさん!!!」

へっ？

「ちよつ美柑なんだよ早く、お静を」

「ナナちゃん、午前中のこと覚えてる？」

春菜まで、そりゃついさっきのことだし、あんな目にあっただし覚えてるけど、こんな時に何を？

「お静ちゃんには、いいクスリだよ」

「そうだよ、ねっナナさん」

・・・うん、確かにそうだな。

さつきはお静に、好き勝手やられたし。

「オクちゃん、続行！！」

グツと親指を立てながらオクちゃんに命令。

『チユミミン（任務了解 続行する！！）』

「はわわ~~~~薄情です~~~~あっ、やっ、ホントにとねちゃっ~~~~  
~~~~!~!」

聞こえない

ふっふっん、スツゴい楽しい!!

暫くの間放置。

お静のタマシイ? ってヤツが身体から抜け出た辺りでオクちゃんを送り返した。

「うう~~~~ヒドイ目にあいました・・・と、とれてませんよね?  
とれてませんよね!~?」

「とれてないって」

とれてたら怖いことになるからっ!~!

それこそホラーに。

っってお静って元々が幽霊ってヤツだからホラーなんだっけ？

漫画とか映画とかと違って全然怖くないけど。

「アハハ・・・まあとりあえずさナナちゃん胸の話はゆっくり頑張るっ」

「うん春菜さんの言う通り地味に頑張るのが一番だよ」

「だな、これ以上やってもロクなことにならなそうだし」

「あう・・・それじゃ結局、私は吸われ損で・・・ン、アレ？」

「どうしたんだよ、お静？」

途中で言葉止めて。

「いえ、あの、なんか胸元がさっきよりキツくなってるような？」

「「「えっ!?!?」「」」

やっやっば効果あったんだアレ!!!

どろどろじやじや？

もう一度オクちゃんを……。でも、あんな目にあいたくないし……。

でも、ぶるんぶるんになりたし……。

「あぁ~~~~もう、どうしよう~~~~」

頭を抱えながら床にゴロゴロと転がり私に……。

「うう~~~~大きくなりたいたいけど~~~~」

美柑に。

「す、吸われるのは~~~~」

春菜の三人で姉上達が帰ってくるまでの間ずっと転がり続け。

その理由を聞かれて、危うくお静が話とこだったけど慌てて止めた。

その後のモモの勝ち誇ったような顔がスゲー腹が立った。

クソーーーー!!

きつと、びるんびるんになって見返してやるからな!!

第六十七話っぽい感じ！（後書き）

後書き

頑張れヒンヌー同盟の話でした。

今後も隙を見てこんな感じの集まりを開かせたいか思ったり。

ではまた次回！！

感想などありましたら是非！！



第六十八話っぽい感じ！（前書き）

前書き

前回の裏話的な感じの話です。

久々にあのキャラ登場+あの人も。

では何時ものようにクスリを持ってどうぞ！！

第六十八話っぽい感じ！

『カランコロン』

「マスター来たぜえ」

「まさか、助かる直ぐに裏に回ってくれ皿が貯まってる」

「あいよー!!」

マスターに指示されたようにカウンターの裏に回る。

「うおっ!?! マジで貯まってやがんなオイ」

そこにはマスターの言った通り、どっちやり積まれた皿の山。

いやあ洗いがいがあるそうだし。

っと、一応は状況説明な？

前回、掛かってきた電話は知り合いの喫茶店やってるマスター。

大手のファミレスみたくデカクはねえたあいえ、それなりに客も来るこの店。

本来なら三人くれえのバイト君がいるんだが今日に限っては三人が三人とも休みらしく、困ったマスターが目をつけたんが俺ってワケ。

はい状況説明終わり。

と状況説明してる間にエプロン着用。

さて、ちゃっっちゃっと洗うべ。

積み上げられた皿を割らなんようにしながらもハイスピードで洗う。

『ガチャーン!!』

あつ今のは皿を割った音じゃねえぞ？

乾燥機にかけた音。

で乾燥機から溢れた皿やらコップやらは手動で拭く。

溢れた方が多いんだがそこは長年培ってきたハンドスピードでサ  
クツと終わせます。

で拭いた皿やらコップやらを種別ごとにししまい皿洗い終了。

「つか本気でギリギリだったんでやんの」

棚に残ってた皿、残り数枚だったし。

さて次は……。

『ガチャ』

冷蔵庫を開けて仕込みがされてる食材の確認。

ふむ……。

「マスター、トマトとレタスやつとくか？」

「たのむ、コッチも手が離せん」

「あいよ」

マスターに確認取った上でサクサク仕込み。

あっ一応言つとくが手はキッチリ消毒用ので洗らつてつからな。

っと仕込み、仕込み。

「終わったら表に回ってくれ」

「あいよ」

こんな感じで忙しくランチタイムを乗り越え、お客さんが疎らになつたくらいでようやく一息。

「悪いなマサ急に」

「よかよか、ヒマだったしな」

つか仲間外れにされてたしな。

「そうか、で悪いついででなんなんだが・・・」

「ん？」

「暫く店任せて良いか？」

ふむ・・・マジで言ってるのかこのヒゲは？

あつマスターはマンガとか映画とかでよく見る喫茶店のマスター  
よろしく口ヒゲなのだ。

「この後どうしても外せん用事があってな、本来なら店を閉めるん  
だがオマエがいるから良いだろうとな？」

「用事なあ、つか良いんか？ 店の名前が変わっちまうぜ？」

『カフェ・スプーキーズ』2号店に。

ちなみに本来の名前は彩南の彩の部分を取って『彩』いろはな。

ン？在り来たりとか言うなっ！！

いっぱいいっぱいだから、もうホントそこは温い目でお願ひします。

マサさんからのお願い。

「……って聞いているかマサ」

「あん？ すまんマスター聞いてなかった」

「やっぱりか、名前を変えるのは勘弁してくれと言っただ」

「でしようね。」

「つか、そらそっただわ。」

「とにかく頼む」

「まあ良いけどよ何時頃に帰ってくるんかさ？」

夜までは手伝う予定だったけど、そりゃマスターが居る前提だしな。

「そうだな・・・日付が回るまでには帰って来る」

「ちよいと待ったれや、つうこたあこつから先は完全に俺任せかい？」

いやさ、そりゃ学校とかで喫茶店のマネ事みてえなんしてっけど。

「まあオマエなら大丈夫だろ客によっちゃオマエのコーヒーの好みの人だって居るくらいだしな」

今更だが俺ココで手伝いすんなあ初めてじゃないッス。

つかそれなりの回数やってます。

「ってわけで頼んだぞマサ、俺はそろそろ出ないといかん、あつ閉



店した後の戸締まりはヨロシクな」

「しょーんなか、わあったよ、カギはどうする？」

「スペア渡しとくから次来た時に返してくれ」

「はいよ」

スペアキーを受け取りつつ返事。

それを聞いたマスターは奥へと引っ込み出掛ける準備。

「じゃ頼んだぞ、客にケンカ吹っ掛けるなよ？」

「約束は出来んと言っておく」

実は二丁三回程、あんましにもアレな客が居たもんでやらかします。

「ハア〜じゃ店は壊すなよ」

マスターその辺りは諦め気味らしい。

「前向きに検討すると言っておく」

政治家的な発言。

でも壊しても直しますんで勘弁してね。

「やっぱりマズったか・・・」

『カランコロン』

若干不安気な声を残して店から出て

『ビィィィィ』

愛車のベスパに股がり去っていくマスターを行ってらっさいと手を振って見送り。

さあ〜て頼まれたからには頑張りますかねえ。

チラリとお客さんの数を確認。

常連さんが二人だけ。

「こりゃ結構のんびり出来そうだな。」

そう思いながらもコップを拭いたり手は動かす。

「しゅちゅちゅさま」

「はい、どうもありがとうございます」

その常連さんも帰り店には俺だけが残る。

食器を下げて皿洗い。

その後はお客さんが居ない間に軽く床に掃除。

つむ完璧。

『カランコロン』

おっとお客さんだ。

「はい、いらっしやいませ」

「あん？ マサ、おめえ何してんだ？」

「マスター代理」

入って来たお客さんはヤマさんでした。

いつぞやの妹カフェだったか？

の時に出て来たダメなオッサン刑事な」

「誰がダメなオッサン刑事だクソガキ」

どつやら声に出てたらしい。

が、しかしそこは。

「今日も今日とて競馬新聞を握りしめて離さんヤマさん」

とハッキリ言っときます。

「あのなクソガキ、それは、おめえアレだ俺はそうやって常に勝負に身を置くことで刑事としての勘を鈍らせねえよつにだな」

「でコーヒーか？ ブラック？」

なんかコチャコチャ言ってた気がせんこともないがスルーしつつ。

ヤマさんを席に誘導カウンターに回り注文を聞く。

「聞けやツ！ チツまあいい、ブラックじゃなくて砂糖とミルクはドッサリ入れる」

はあゝ。。。。

「この前、血糖値がシャレになってねえ、つってたから氣い使ったつこのに」

「良いんだよ、俺あ糖と上手に付き合ってたから」

上手に付き合っていていけてねえーから血糖値がシャレになってねえんだろっし。

「ほらよ」

『カチッ』

その思いっしつコーヒーを出す。

「おう・・・ッ！！ にげえ！！ クソガキ、砂糖はどうした砂糖は！！」

「ガマンしろい品切れだ」

ホントはまだあつけど。

ちなみにスプーン一杯分は入ってる。

「チツ・・・おめえは俺の女房かつつうの」

「ヤマさんみたいなダメなオッサンの女房なんてごめんこつむる」

心の底から。

「チツ本気で口減らねえな、このガキは、まあいい俺はおめえみてえなガキの相手よりも大事なことがあるだ、さて・・・次のレースはつと」

「仕事せいよ」

「つせえ、コレも人生という名の舞台を彩る為には必要な仕事なんだよ」

壮大なスケールでダメなことってんなこのオッサンは・・・。

「・・・よしっ！！ やっぱ大穴2ー5だな、一応保険で1ー4も行っとかか？ カツカ力完璧だ」

アレから約三十分、悩みに悩んで結論が出たらしい。

「おらマサ勘定」

「あいよ」

コーヒー代を受け取りヤマさんの見送り。

「さあ〜て、待ってるよ万馬券カツカカ」

『カランコロソ』

意気揚々と出て行ったヤマさんの背中を見ながら思うこと。

「まっどうせダメだろうな」

です。

ヤマさんが競馬で当てたって話聞いたことねえーし。



とりあえず、そつと手を合わせといた。

さて気を取り直して仕事、仕事。

つってもカップ洗うぐれえだけど。

あつ夜の仕込みもあつたか？

つってもココ、昼はお客さん入るけど

夜はあんまし入んねえんだよな。

それもあつからマスターは俺に店任せたんだろっけど。

・  
・  
・  
・

「ヒマだねえ・・・」

いやホント、ヤマさんが帰ってから暫くたつが来たお客さんは一人だけ。

そのお客さんもコーヒ一杯飲んだら直ぐに帰ってしまい完全に手持ちぶさたな状態です。

一応は掃除とかして時間は使ってたけど。

誰かお客さん来てくれんもんかねえ。

知り合いだったら、なお良し。

まっ知り合いじゃなくても全然良いけど。

『カランコロソソ』

おっ！？

噂をすればってか？

「いびつしゃいませ〜」

「あっ、どろろ……えっ？ マサナリさん？」

「およ？ 晴先生？」

やって来た、お客さんは見事に知り合い晴先生でした。

あつ一応は晴先生ってなあ美柑の担任の先生な。

「アレ？ 晴子知り合い？」

「えっ、あつ、うん私のクラスの生徒さんの・・・保護者さん？」

晴先生の後ろから聞こえるもう一人の声。

どうやら連れが居るらしい。

つか・・・。

「保護者ってのたあまた別物のような気がすっけど、っと席にどづぞ」

「あっはい」

カウンター側の方に座る晴先生。

続いてお連れさんも……っってお連れさんなんかジーツと俺のツラを見てるんだが……はて？

「ん~~~~」

ふむ……やはりコレはメンツ切られてると判断してしかるべきか？

「あ、秋穂どうしたの？ ジーツとマサナリさんの顔見てるけど？」

「ちょっと待って晴子、もう少し、もう少しで思い出しそう、えっとえっと……」

思い出す……ねえ？

会ったことがあんのか？

ん、そついや……アツ！？

「思い出したキミ、あの時の……」

「豆腐屋の娘さん!!」

。。。。

「うん、とりあえずは言っておくね、豆腐屋の娘じゃないわよ?」

違ったらしい。

「えっと・・・秋穂?」

「あっゴメン晴子、ちょっとした恩人に再会したもんだから」

恩人とな!?

「誰が?」

「キ・ミ」

「ミィ?」

「ユー」

ふむ・・・はて？

むむっ・・・どっいっごっちや？

「ねえ秋穂、マサナリさんが恩人っどっいっごっちや？」

ナイス晴先生。

それは俺も知りたいところだ。

「うん前にちよつと夕子の悪いナンパされちゃってね、困ってたなら、彼がササーッと来てパーッと助けてくれたんだけど・・・キミ覚えてなかったの？」

ほっほっ、なるほど。

「ちなみに去り際のセリフは、ムシヤクシヤしてやった！！ 反省も後悔もしていない！！ だっただけだ？」

ふむ……。

覚えてねえーッス。

日常茶飯事的に似たようなことをしてる気がするし。

「覚えて……ないか？」

「いや覚えてますよ？ ホント文房具屋の」

「覚えてないよね、それ」

クツ……見抜かれた。

中々にやるじゃねえか。

「まっいいや、とにかくあの時は助かったわ、遅くなっただけ、ありがとう」

ペコリと頭を下げられた。

つか頭下げられてもなあ。

イライラしてて八つ当たりが出来る相手を探してたら偶々って可能性もなきにしもあらずだしな……。

つつわけで。

「ムシャクシャしてやった反省も後悔もしていない!!」

と返しといた。

実際多分そんな感じだっただろうし。

「まっ、その話題は一旦、置いていってご注文は?」

「あっ、そうね、私はブレンドと後はチーズケーキね晴子はどつする?」

「えっ、あっ、えっと……うーんと、えーと……うーんと……



「

軽くメニューを見てサクッと決めた晴先生の連れさん。

それに対してメニューを開いてにらめっこ状態の晴先生。

「うーんと、コレも美味しそうだし・・・でもコレも気になるし・・・あつす、すいません、私、優柔不断で」

「いやさ別に謝ることちゃんえーですけど、何だったら先に飲み物を注文します?」

「あっはい、それじゃあ秋穂と同じブレンドを」

俺の提案にメニューとのにらめっこを一時中断してブレンドを注文する晴先生。

「あいあい」

とりあえずブレンド二つにチーズケーキな。

メニューとのにらめっこを再開した晴先生を横目に見つつサクサクと注文の品を用意します。

ちなみにケーキ系は昼に幾つか作ったのを冷蔵庫に置いてあります。

「あいよブレンドにチーズケーキでござあす」

『カチャ、カチャ』

用意出来たんをそれぞれ提供。

「ありがとう、って晴子まだ決まらないの？」

「えっ、だって、どれも美味しそうだから・・・あっチーズケーキ美味しそう」

「一口上げるから早く決めちゃいなさい」

「う、うん、えっとそれじゃあ・・・モンブランを」

「あいよ」

晴先生、連れさんに急かされた感じながらも注文はモンブランに決めたようです。

これまたサクッと用意して提供。

その間にコーヒーを一口。

「あつ・・・美味しい」

「ホント・・・」

まあ伊達にマスター代理じゃねえですからな。

学校でもやってるし。

「あつ、そういえば自己紹介してなかったわね、ずっと晴子が名前と言ってたけど私は秋穂ね」

「秋穂・・・な、って晴先生と同じ年だとしたら年上になるんか・・・」

・アキさんが良いかねえ」

ずっと晴先生とタメ口だったし、多分同い年だと思う。

違ってての精々一つか二つってところだろう。

「秋穂で良いわよ、それでキミはマサナリ君で良かった？」

秋穂で良いらしい。

「うい俺もそれで、おけ」

「わかったわ、よろしくね」

「ヨロシクどうぞ」

うむうむ新たな友人ゲットの兆しだな。

「あっ、そういえばマサナリさん、いまさらですけど、この喫茶店ではアルバイトしてるんですか？」

「半分当たりで半分外れにですな、正確には代理マスターです」

マスター代理でも可。

「代理マスター？」

「代理マスター・・・ね、確かにマサナリ君以外に従業員がいないわね、完全に任されてるの？」

「はい秋穂さん正解」

正確には半分くれえ押し付けられたっばいけど。

「ほえ〜マサナリさんってマンガ以外にも色々こなすんですね〜コーヒーもケーキも美味しいですし」

「一家に一台、鬼島 政成ですからな」

色々こなしますぜえ。

ってなんか久々にコレやった気がするよつな気がする。

「マンガ？ えっマサナリ君って漫画家なの？」

「いんえ学生ですマンガは手伝つとるだけッスよ」

「学生・・・大学生？」

「あつまサナリ君は高校生ですよ、今は・・・二年生になったんですよね？」

おっ晴先生覚えてたんだ。

「ギリギリだったッスけどねえマジで危うく同級生に先輩って言われるところでしたわ」

いやホント唯先生に感謝。

「高校生！！ あつでも確かにそう言われてみれば高校生に見えるかも」

「まだまだティーンでござえますからな」

しかも半ばちょい過ぎくらい。

「マサナリ君、それはティーンじゃない私達が若くないってこと？」

「むっ、そうなんですか？」

「んなこたあ一言も言っとりやせんですがな」

つか二人も十分に若えだるうに。

多分まだ二十代前半だろ。

「うんうん、それなら良いけど、もうクビを縦に振ってたらお姉さんシヨックでフォークを投げつけてしまってたわ」

「怖えなオイ」

まっ避けるし効かんけど。

「あっ私はしませんよ流石に」

「変わりにメガネを飛ばすんですね、わかります」

そおーい!!

とメガネを飛ばす晴先生を想像したら結構面白い映像えになった。

「ブツ!!」

どうやら秋穂もその映像が浮かんだらしく、思っくそコーヒー吹き出しました。

久々に見たな虹。

「飛ばしませんよ」

飛ばさないらしい残念。

ちょっと見てみたかったのに。

ゴホゴホしてる秋穂の背中をサスサスしながら苦笑いする晴先生でした。



「はぁ・・・はぁ・・・マサナリ君、油断出来ないわ、まさかほぼ初対面の人の前でコーヒー吹き出すことになるなんて思わなかったわ」

「お褒めにあずかり恐悦至極」

「いや褒めてないと思いますけど」

わあってますよ。

ジト目で見られとるし。

「うん、とりあえずこの心のキズを癒すには後一つケーキを所望するわ、勿論マサナリ君持ちで」

「何というクレーマー、しかしどこぞの訴訟大国の如く訴訟を起こされて店を潰されては敵わんで涙を飲むしかない」

そうならマスターに、あわせる顔がねえ・・・。

「アレ？何故か私の方が悪い感じに聞こえるわ」

いや、まあ元を辿れば俺が悪いような気がせんことも……ン？  
待てよ……。

「実の所、悪いのは晴先生では？ 正確には晴先生のメガネ」

それ見てつい口走ってもうたワケだし。

「あつ、それじゃ晴子におごってもらおうかな？」

「えっ？ ちょっ、なんで！？ 完全に飛び火！！」

オロオロする晴先生です。

そのオロオロ姿はかなり様になってます。

年期入ってますねえ〜。

っと、とりあえず晴先生で遊ぶのはコレくらいにして。

「まっ別にケーキの一つや二つくれえ全然良いけどねえ〜つうわけで追加注文受付中、晴先生も追加良いぜえ」

意外と稼いでるからね。

ケーキの一つや二つで面白リアクションが見れるんなら安いもんです。

「えっ、ホントに良いの？ 冗談のつもりだったんだけど・・・」

「私も良いんですか？」

「要らないんなら要らないで良いけど」

「ん〜ん〜、じゃ折角だしご馳走してもらおう」

「わ、私も」

「あいあい」

つてわけで二人共ケーキ追加。

今度は逆パターンで晴先生がチーズケーキ、秋穂がモンブランでした。

二人にケーキを出した後、他のお客さんも来たんでそちらの対応

をしつつ店を回す。

二人は閉店（PM9：00）近くまで粘ったんで晚メシもコッチで食いました。

ちなみに食ったのはパスタ。

コチラも中々に好評だった。

そして店を閉めて帰る途中。

「・・・」

と真っ白に燃え尽きたヤマさんを見掛けたがスルーした。

やっぱりダメだったんだなヤマさん。

・  
・  
・  
・

秋穂 視点

「たっただいま〜春菜」

「お姉ちゃんお帰り」

家に入るとカワイイ妹の出迎え。

「食べて来たんだっけ？」

「まあね、結構美味しかったわ、あの喫茶店」

それに恩人さんにも会えたし。

ププツ結構面白い子だったわ。

「どうしたのお姉ちゃん急に笑い出して」

「うん、ちょっとね〜」

「？ 変なお姉ちゃん」

失礼ね妹よ。

『グニ~~~~!!』

「いひゃい、いひゃい、ふあなひて〜」

春菜のほっぺはよく伸びるわ〜。

あっ、そういえばマサナリ君って春菜と同じで高ニって言ったっけ？

知ってるか春菜に聞いてみようかな？

ン~~~~まっいつか。

なんかまた会いそうな気がするし。

今は……。

「ほれほれ」

「いひゃいひゃいひゃいひゃ」

春菜の頬つぺた伸ばしっぺいっぺい至高の遊びに集中しよっ！！

・  
・  
・  
・

晴子 視点

「美味しかったな」

今日、秋穂と寄った喫茶店。

そこで出されたコーヒーやケーキ、パスタの事を思い出しながら  
呟く。

マサナリさんってやっぱり、お料理が上手なのかな？

前にご馳走してもらったすき焼きも手際がよかつたし・・・。

ハッ！？

そ、そういうえば私、マサナリさんにご馳走してもらったのってコ  
レで二回目だわ！！

正確にはちょっと違うかもしれないけど、でも似たようなモノよ  
ね、うん。

愛読してる少女マンガにあったけど。

に、二回目までは偶然だけど三回目があったなら・・・。

「運命？」

キヤーーキヤーー！！

そうなのかしら？

運命なの？



運命の出会い？

『ボフツ、パタパタパタ』

クッションに顔を埋めて足をパタパタ。

三回目・・・あるのかな？

ちょっと期待してたり・・・って。

「もう！！ キャーキャー！！！」

『パタパタパタ・・・』

深夜過ぎまでパタパタしてたせいで次の日筋肉痛になった私だった。

第六十八話っばい感じ！（後書き）

後書き

というわけで晴先生と秋穂さん（春菜姉）の登場でした。

つつか勝手に二人を友達にしてみたよ・・・。

そして例によってフラグ的なアレ・・・。

あっホント石は石は~~~~。

感想などありまし、あっ石は~~~~！！

第六十九話っぽい感じ！（前書き）

前書き

何時ものようにクスリを持ってどうぞー！！

## 第六十九話っばい感じ！

「そろそろビームを習得しようと思うっ！..」

「はっ？ ビーム？」

「うむ、全漢の夢たる手からビーム！..」

最悪、目及び口からでも構わんが、この辺りは妥協しよう。

「いや、だから...」

むむリト君、反応が悪いな。

漢なら反応し共感してしかるべきだろ漢なら！！

と思っただがちょっと急すぎたやもしれんな。

「えと、マサまた例の思い付きつてのはわかるけど、なんでまた急に？」

ぬっ？ 例のって、リト。

まあ確かにこのシリーズやんの三回目くれエだけど。

ってシリーズってなんだ？ シリーズって？

いやさ、まあそれはアツチに、そぉーい！ して。

やはり急すぎたのがアレだったらしい。  
ならば……。

「今夜は俺、鬼島 政成が何故にそういう考えに至ったかを語ろう」

「今夜って今は昼っていうかただの放課後だから」

そこはアレだ、なんかそう言った方がカッケエかなあと思ったか  
ら。

ちなみに今はリトの言った通り放課後ね。

っとイカン、イカン何故にそういう考えに思い至ったかだったな。

「そうそれは・・・遡ること約三年前のこと」

「あっ回想入りそう」

そう三年前だ、以前にも話したが俺が中二の時にクソジジイがブツ放なったビームだ。

あの青白い光が目の前に迫った時に俺は思ったね。

あつやべつ死ぬかも!?

ってな?

まあ死にはしなかったわけだがその後、助かった俺はこう思ったのさ・・・。

俺もアレを撃てるようになりクソジジイにブツ放してやるうと・・・。

アレから俺も色々と修行を積み数々の秘技を使えるまでになった。

NINJAしかり。

アツチ向いてそぉーい！しかり。

ノリッコミしかり。

だからこそ・・・。

「だからこそ、そろそろビームを習得する時期だろ！！」

熱き思いを瞳に込めてリトにそう伝える！！

そうこの熱き思い漢なら反応しねえわけがね・・・。

「チュー、あっ回想おわり？」

「って豆乳飲んどるー！ー！！」

えっ？

ちよ！？

「リ、リト君や何故に豆乳を飲んでらっしやるんでござえますか？」

「ああなんか長くなりそうだし豆乳美味しいじゃん」

「そういつのママさんでしょうか？ って思うぞコンナローー！..」

人の話をちゃんと聞かないとは！..！

仮に仮に飲んでるのがミ ミ だったら仕方がないが。

いや豆乳は豆乳で好きだけでも。

「いやそう言っけどさ、ママも大体こんな感じだぜ？」

「えっ・・・マジで？」

「コクリ」

マジらしい。

ぬう・・・確かに思い返してみれば思い当たること山の如し・・・



。 人の振り見て我が振り直せとは良く言ったもんだぜ……。 コレから少しは気をつけてみようと思つたがホントにチラツとだけだった。

過去を振り返らないこと風の如しなんだぜ！！

後は火と林か……。。

それさえ揃えば風林火山の完成なんだが。

よし！！

「なんやかんやで林の如し！！」

無理矢理捻り出してみた。

「はい？ えっえつと……。意味がわからんこと火の如く？」

わからないと言っておきながらも咄嗟に合わせてくれたリトに今

日も今日とてキュンとなった。

これで風林火山の完成だぜ！！

順番はちょっとズレてっけど。

つつかアレ？ 寧ろ話の軸がズレてね？

なんで風林火山を完成させることに躍起になってんの？

たまに自分で自分の思考の跳び具合に不安を感じる。

大丈夫なのか俺？

とチラッと思っただが今更だと開き直った。

ってイカンイカンまたもやズレ始めとる。

「とにかく俺はビームを習得したいのだよ！！」

「えっと、まあ言いたいことは何となくわかった……ような？」

ニュアンスが伝われば良し。

「あつちなみに回想の決意の部分は半分くれえネタだから」

「そこは何となくわかってるって、そういうの関係なくマサだったらビーム撃ちたい、とかそういう思考に行きそうだし？」

流石は親友ガッツリ見破られてたツス。

「でマサ今回はまず何をするのか決めてるのか？」

ぬっ？　今回は、って。

確かに前回の紳士を目指す企画ではハンカチのことをハンケチーフと呼ぶくらいしか決めてなかったが。

しかし今回は一応は考えてはいる。

「とりあえずは経験値つつか熟練度か？そんな感じのを稼ぐー！」

某ドラゴンなRPGの六作目、及び七作目のように。

もしくは終わらない最後の夢なRPGのジブとかアリティポイント。

他にも色々あったろうけど、とりあえずはそんな感じ。

「色々としつこいものはあるけど……どうやってっ」

「決まってらい戦闘をしまくるのだ!!」

稼いで稼いで稼ぎまくるのだ!!

なにかしらのポイント……うむ、このさいビームポイントと名付けよう。

なんかその言い方だとビームを撃つ場所みたいな感じに聞こえなくもねえけど。

ビーム経験値と書いてるビームポイントということだ。

そのビームポイントを稼ぐのだ!!

そして何れは手からビーム!!

「つつわけで早速稼いでくる!!」

計ったようなタイミングでエテ山が歩いてるし。

「ちよつ待てマサ!! 流石にそれは!!」

聞こえねえ。

「そおーい!!」

『ゴリキッ!!』

「おぶっ!!」

『トサリ』

「遅かった・・・マサ流石にやり過ぎだ!! 猿山別に何もしてないだろ!!」

ぬっ？

リト君、怒っとなるな。

が、しかしリトよ……。

「エテ山の手にあるモノを見ている」

「手にあるモノ？ あっ 双眼鏡」

「うむ 双眼鏡だ、エテ山に 双眼鏡、放課後とは言え今から部活の人  
らもいるわなあ？ とココまで言えばわかるよな？」

「まさか……猿山のやつ覗きか？」

「うむちいとあるスジからタレコミがあつてな？」

なにやらエテ山が良からぬことを考えてるとのな。

「つつわけで現行犯……ではねえけど未然に防いでみた、いや良

かった良かった」

「猿山、何考えてんだよ・・・まあそれなら仕方ないな自業自得だし」

「うむ、まあぶっちゃけ、んな理由がなくても、そおーい！　したけど」

「するなよ！！　猿山は校長ほどタフじゃないんだから！！」

アレはタフとかそう次元じゃねえです。

俺が知る限りアレよりしぶといのは見たことねえ。

ジジイ含めて。

そう考えると意外とスゴいと思わなくもないが・・・あんなもんになりたくはないツス。

つと校長（変態）のこたあ置いておき、　　戦闘結果だな。

ふむ・・・。

「ダメだコイツじゃポイントたまんねえーわ」

微塵たりともポイントが稼げねえ。

「チツ、マジでダメだなこのサルは」

「マサってホント猿山にヒドイよな」

「だって俺、エテ山のことあんま好きじゃねえし」

好きか嫌いかで聞かれたらやっぱり嫌いと答えるね。

つと、とりあえずこのダメザルのこたあ放置してつと……。

「このポイント方式はどうも微妙な気がしてきた」

つかポイントが溜まるかも謎だし。

「つつわけで次の一手だ!!」



「あつ次があるんだ？」

「うむ、次の一手は撃てるヤツに伝授してもらおうのだー!!」

「撃つヤツって・・・あつー!! ララか？」

うむ、ララはビームが撃てるからな手からではねえーけど。

「つつわけでララを探しに行くぞー!!」

「あつああ・・・っていうか先にそれをやってれば猿山が犠牲にならずにすんだんじゃ・・・まあ自業自得だけどさ」

そついうことですよい。

まあスッキリしなかったと言えば嘘になるが。

つかめっさスッキリしたけど。

ふむ、そついう意味では意外と役に立ったなエテ山。

安らかに眠れ。

明日の朝くらいまで  
「

「起こさないのかよー!」

どつちやら口に出てたらしい。

「まっ起こさねえけど、つか今起こして双眼鏡使われたら二度手間  
だろうに」

その分、またスッキリすっだろうけど。

「ああ・・・じゃ帰りに起こすか?」

「起こさねえよ? 明日の朝まで放置じゃい」

「ゴッシ!」

いやさ妥当だろ?

つか温い方だろ? 今回は吊るさねえーでやるんだから。

っと、イカンイカンこのままエテ山に構ってるヒマはねえな。

けどもこのままだと通行する人の邪魔になるし。

『ガシッ!!--』

起こさないくらいに加減した蹴りで端っこに寄せた上で。

『へタッ』

【さわるな危険!!--】

の張り紙。

うみうむコレでよし!--!!

「じゃララを探しに行くぞ!--!!」

「あっああ  
「.....」

そんなエテ山にそつと手を合わせるリト君を引きずりつつララを  
探す旅に出て……。

「マサどつしたの？」

あっちゅう間に発見。

「なになにマサ君、何か面白いことやってるの？」

「私にも教えてほしいな」

恭子とルンも一緒でした。

「うむ実はなかくかくシカジカ」

「コレまでの経緯をザッと説明。

「つつわけでララいやさ師匠、俺にビームを伝授してくれ……！」

ララに向かってグッと頭を下げる。

「師匠？」

「ウツス、自分、厳しい修行も乗り越えてみせますんで是非ビームをっ!!！」

今こそ・・・今こそビームを。

「師匠があゝ、じゃあマサは私の弟子なんだね!!！」

「ウツス師匠!!！」

「エへへマサが私の弟子かゝえっとねそれじゃあまずはゝ」

ぬっ、早速修行か。

「ちよくと待ったマサ君!!！」

ぬっ、恭子？

今から厳しい修行が始まるつつうのに割り込みとは。

「なんぞ恭子よ？」

「どうせだったら私に弟子入りしてみない？」

あん？

「なんでさね？」

「それは師匠の立場を利用してマサ君を好き放題でき・・・ゲフンゲフン、違うよ？ 今のホント違うよ？」

いやさ違うってオマエ・・・。

なんかスнгеエ不穏なことを言いくさってやがるんだが？

「その手があったか！？ マサナリ君、どうかな私の弟子に？」

それにルンが便乗しようとしてやがるんですけど。

「ダメだよルンちゃんキョーコちゃんマサは私の弟子だもん！！」

だってマサビームしたいんでしょ？ね？マサ？」

「うむ、ビームを習得するための弟子入りだからな」

「ええ、ほらマサ君ほらカッコイイよコレ、ほらっ！！」

『ボツ！！』

そう言いながらお得意の発火する恭子。

ふむ・・・確かに、それはそれでちょっとカッコイイような気がする。

新・必殺技の一つとして習得してもいいかしらん。

「ぬぬ〜リトはどこちがよいと思うかね？」

「ココで俺に振るのかよ、えっと・・・どっちもやれば良いんじゃないか？ どうせまたやらなかった方をいつかやりたいとか言い出しそっだし」

ふむ・・・確かにそんな気がする。

「ならば恭子からも教えてもらおう!! だがしかしあくまで主目的はビームの習得だ!!」

そうあくまでビーム!!

漢の夢だ!!

「つつわけでララ師匠!!」

「えっ? つつつん、わかったキョーコちゃんも一緒にマサに教えるんだよね? よし頑張るー!!」

「ウツス!!」

さあ修行の始ま・・・あつ、ルン。

「ふう・・・私、レンと、くしゃみで入れ替わるしかないし・・・マサナリ君? 覚える?」



ふむ……。

「遠慮するわ、つかそれ頑張っても習得出来ん気がする」

それはルンとレンの二人がおらんなら無理だと思う。

二人ならではだろうし。

「だよね〜わかった私、応援してるから頑張つてマサナリ君!!」

どうやらルンの中でそういう結論が出たらしい。

「うむ漢・政成なればビームと火をボツつてする技を習得してみせ  
ようー!!」

よしよし、なんか主人公っぽいぞ俺。

「じゃ俺も応援してるから」

「えっ？ リトは参加せんのか？」

「いや俺は、ほら、ふらっとやって来て発破をかける感じのポジションで」

おっ？

ふむ・・・確かにそのポジションおいしいな。

「じゃリトはそれで」

「ああ・・・ホッ・・・」

なんでホッとしてやがるのか小一時間程問いただしたい気がせんこともないが、とりあえずは修行開始だ。

つつわけで。

「ララ師匠、ビームってどうやって撃つんだ？」

まずはコレ聞いとかねえーと、このまま闇雲に修行しても流石に手探りすぎる。

「えっ？ えっとね、まずはね、エイッてシッポに力を込めね」

ふむふむ・・・シッポに力をか・・・。

シッポに力を・・・シッポに・・・。

「ララ師匠、俺、シッポねえーんですけど」

「あっ・・・そういえばマサって地球人だったね」

「ええバグってますけど一応は地球出身なんスよ俺」

それで大和の国の出なんスよ。

「うう〜どうしよう、私シッポからしか撃てないし・・・」

あっアカン、初っぱなから大分躓いてるぞコレ。

「ぬぬう・・・流星はビーム一筋縄でイカンか」

数々の漢達が夢見、そして成し遂げることが出来なかったという  
技だからな。

フツ……しかし、諦めるな。

諦めたら以下略ってホワイトデルからホワイトブタになった  
監督も言ってただろ。

頑張れば感動ってどっかの誰かも言ってただろ！！

頑張れ俺、負けんな俺、敗北は己の中にあると思え！！

「よし、ならば恭子師匠、あの火のヤツを教えてくんろ！！ それ  
切っ掛けで何かしら掴めるやもしらん！！」

どっちも不思議パワーだしな。

どちらかの扉を開ければそれが突破口になるはずだ多分！！

『あつ、だったらコッチの扉を開けみる？ 世界が広がるよ』

何故か脳内で日和がアホなことをほざいた気がしたが全力でスル  
ーした。

『はあはあ……く、クセになる』

全力でスル・・・。

『ならばコチラの扉はどうだ？ 悪くないぞ政成』

オメーは出てくんなっつうの凜！！

変わって出てきた凜にメンツきつといた。

『ぞくぞく・・・もっと睨んで良いんだぞ？』

なんかもうめんどくさくなっただんでスルーした。

「あのマサ君どうしたの、なんか百面相してるけど？」

ハッ！？

「すまぬ、ちょっくら脳内で色々とあって」

ホントあの二人は本格的にどうにかせんといけないと思っつ。

つとイカンイカン、またもや色々とズレてきた。

「でだ恭子師匠、その火出すヤツはどうやんの？」

軌道修正つと。

「ん〜〜気合い？ じぶんとじゃあつて」

なるほどな。

気合いか・・・ふむ・・・。

最後は常に気力つて言うからね、うん。

やり方は習った、なんか色々アレな気がするが実行フェイズだ  
！！

まずはやってみるのが大事なのだ。

「そおいやアアア！！」

気合いを込めてやってみた。

・・・。

反応なし。

ぬう？ 何が悪かったんだ？ 込めて気合い量か？

結構気合い込めたのに。

「やっぱりムリかあ〜マサ君、地球人だもんね〜」

「やっぱり！？ やっぱりってどういうことっちゃん！！」

「だってほら、私ハーフだし？ マサ君、純粋な地球人でしょ？」

ぬぬう・・・しかしクソジジイは撃てたぞビームとかその他色々。

まあアレは例外つか埒外だけでも。

「チクソウ俺には不思議パワーは使えないと言っのか・・・」

思わずガクリとヒザをつく。

そんな俺の肩をポンと叩く人物。

リト君です。

「マサはビームとか撃てなくても十分ぶっ飛んでるから」

励ましの言葉・・・なのか？ コレ？

「うんうんまともにパパと喧嘩して勝ったのってマサだけだよ？」

続いてララがそう言ってくる。

「クレーン車を片手で持ち上げちゃっしね」

「そのままでもマサナリ君は十分ステキだと思う」



恭子……ルン……。

みんな……。

そうだな、別にビームなんて撃てなくて良いじゃねえーか。

そう言ってくれるダチがいるんだから……。

「なあーんて思うわけねえーだろオオオ!!! 撃ちたい撃ちたいビームが撃ちたいんだよ俺は!!! 不思議パワーを使いたいんだよオオ!!!」

『ジタバタ』

「うわっ駄々こね始めた」

うるさいリト、駄々の一つや二つこねるだろ!!!

ビームが撃ちたいんだよ!!!

ビームが!!!

「そうりゃアアアマサナリ・ビーム!」

出ない!!

「マサナリ・ファイヤー!」

チクシヨ―出ねえー!!

「マサナリ・ダイナミックウウ!」 全く反応しねえー!!

何故だチクシヨ―。

「まっマサ、落ち着けて、なっ?」

うっせえい。

立ち止まってなるものかあ。

「ちょっとララ達も止めるって!」

「え〜もうちよっと思てたಿದ್ದってカワイイんだもん」

「うんなんか見てて和む」

「うんうん」

和まれとる!?

修行姿が和まれるとはコレいかに!!

つかカワイイのララ達だつつうに。

ええーい!!!

このまま和まれっぱなしでいられるか。

「こうなったらばやはり戦闘回数をしまくってビームポイントを稼ぐ方法に移行してやるっ!」

「えっ!?! マサ、それは」

目のついた気に入らないヤツを端から弾いてやるわマアア。

「フハハハ！」

『ズダダダダッ！！』

・  
・  
・  
・

リト視点

「行っちゃったし・・・マサ無茶苦茶しそつだ・・・」

さ、流石にヒドイことはしないとと思うけど。

「マサ何処行っちゃったんだろ？」

「っていつかやっぱ止めた方が良かったかな？」

それで止まらないのがマサだからな。

「夕飯の時間には帰ってくるだろ？ 帰ろつぜ」

「うっ、うっ」

「あっそれじゃ私達も帰ろっかルン」

「そっしょっかキヨー」

とりあえずマサのことは置いて帰宅。

案の定、夕方のニュースで。

『 ビルの一部が破壊されるという事件がおきました、このビルは組事務所として使用されており敵対する組織との抗争だと思われる目撃者によりますとビル内よりウルトラビームなど奇声が聞こえ・

『・

』プシン

そこまですでテレビの電源を落とした。

第六十九話っぽい感じ！（後書き）

後書き

やってみようシリーズ第三段でした。

前書きと後書き・・・やはり何を書けばよいやら・・・。

あっ感想などありましたら是非。

**番外編っぽい感じ！その14（前書き）**

前書き

活動報告でやったネタ+おさまりきらなかった部分のネタです。

このパターン二度目！！

例によってアレがそれですのでクスリを持ってどうぞ。

番外編っぽい感じ！その14

「もしもH×H世界だったら」

その1

「ステーキ定食」

『ピクッ！！』

「焼き方は？」

「弱火でじっくり・・・」

「えっ？ ハンゾー君、俺、今日は強火でガツて感じなんだけど？  
つか寧ろカツ定が食いたいんスけど？」

「ちよっおまつ、ナビゲーターの話聞いてなかったのか！？」

「あん？ ナビゲーターの話？ あっアレかよ」



「それだそれ」

「たしか、娘さんが産まれたんだってな？　めでてえこった試験終わったら遊びに行く約束してんだよ」

「そこじゃねえーよっ！？　つかもつと大事な部分があっただろ！　ってというか遊びに行く話、俺は聞いてねえーぞ！！」

「安心しれ、むろんハンゾーも一緒に行くことになってるから」

「ならいいぜ、てっきり仲間外れになったかと思っ……」

「お客さん……結局注文はどうするんだ？」

「「あっ！？」」

というわけでH×H編。

ハンゾーさんとハンター試験に挑むようです。

理由は身分証の代わり……という建前で本音は面白そうだから。

・ ・ ・  
その2

『ガチャン!!』

「まったくオマエのせいで危うく試験受けそこねるところだったろ」

「まあまあいいがな、こうして受けられんだからよ？」

「反省の色が全然見えねえのが腹立つなオイ」

「オイオイ、ハンゾー君、こうみえてもマサさんは反省してるんだぞ、その証拠にほらコレやるよ」

「あん？」

『強力毛生え薬、生える毛根!!』

「いるかアアア！！　つか俺の毛根は自然消滅じゃなくて剃ってんだ！！！」

「知ってるけど？　でも、ほら隣の家に住むミヨがハゲはキライって言ってたぞ？」

「・・・まあアレだな、折角の好意をムゲにしたらジャポン魂が疑われるからな、ありがたく貰っとくわ」

「うむ」

「あつ、ちよつ俺トイレ行ってくるから」

『スタスタ』

「ウオオオ、生える俺の毛根！！！」

『チャプチャプ！！』

「頑張れハンゾー（の毛根）！！！」

ハンゾーさん隣の家のミヨちゃんにホれています。

あつー応は原作にミヨちゃんはいませんのであしからず。

・  
・  
・  
・

その3

『スタスタ』

「ふう〜〜出た出た、まるで里の滝並みだったぜ」

「そつだな出てたな滝のように（毛生え薬が）」

「おう、スッキリしたぜ」

「ああスッキリしてるな（アタマが）」

「ってマサ、言葉の後の妙な空白はなんだ？」

「気にすんな」

「？相変わらず変なヤツだ」

「自覚はあるっつうの」

『スタスタ』

「二人ともルーキーか？」

「あん？　なんだオッサン？」

「ああ俺か、俺はトンパって言うんだ、もうかれこれこの試験を受けて37回のベテランさ」

「37回となっ！？」

「そりやまた逆の意味でスゲエな、あつ俺はハンゾー、でコッチがマサだ俺らはジャポンから来たんだけどなペラペラペラペラ」

(こ、コイツ喋りだしたら止まらねえタイプか？　ククッまあいい、

コイツなら簡単に騙せるな、連れのヤツも単純そうだし

「なあハンゾー君、そんなに喋ったら喉が渴くだろ？ どうだお近づきの印に？」

『スッ』

「結構・・・悪いが他人から出されたモノは喉に通らない性分なんだ」

『ゾクリ』

「あっ、ああ・・・そ、そうか」

(や、ヤベエ、なんだあの変わり様、コイツ絶対プロだ)

「そ、それじゃあそっちの兄さんはどつだ？」

「俺か飲む飲む」

『パシッ』

「おうグッとやってくれ」

（よっしゃバカが引つかかったらケケケ、良い鳴き声を上げるよ、その強力下剤入りジュースでな！！）

「んっんっん・・・ぷはあ〜と飲み終わった所で空き缶をドーンッ！！」

『メキヤッ！！』

「へび〜〜っ！！」

『コロコロコロ』

「なんだマサヤっぱ盛られてたか？」

「うむ、ハンゾー飲まなくて正解、ハンゾーならギリ大丈夫だったかもしらんけどな？」

「あっ？ 俺は毒の類の耐性はあるま鍛えてないぞ？」

「何、言ってるんの鍛えられてるだろ？ ミヨの料理で」

「オイ、なんてこと言いやがんだ！！ ミヨの料理はジャポンーだぞー！！ 一口食べただけで極楽にイケるって里のヤツら口を揃えて言ってるだろうがー！！」

「そうだな、うん・・・そうだな・・・クツ・・・ハンゾー頑張れよ」

「・・・何故泣く？」

トンプアさん空き缶を顔面にドーンされました。

そしてハンゾーさん信頼してる人が出したのなら食べます。

たとえそれがポイズンの類でも。

頑張れハンゾー！！

・  
・  
・  
・



その4

『ガチャン!!』

「うわあ〜スゴい人」

「こ、コレが全員受験者か？」

「ん？ およ？ アレ？ なあんなかアイツら見たことあるような気が・・・はて？」

「なんだマサ、あの今、入ってきたヤツら知り合いか？」

「いんにゃ、なんか見覚えがあるような気がしただけ、やっぱり思い出せねえーけど」

「だったら話しかければ良いじゃねえーか」

「それもそうな、じゃ行くべえ」

「応!!」

『スタスタ』

「よっ、その三人衆」

「えっ？」

「むっ？」

「あん？ なんだオマエら？」

「ああ、俺は鬼島 政成つてんだ、あつコツチじゃ逆だったか？  
マサナリ・キジマが正解か？ まったりあえずはマサかマサナリで  
ヨロシク、でコツチが」

「ハンゾーだ」

「マサとハンゾーだね、それで俺達に何かようなの？」

「ん？ いやな、なんつうかオマエさんら三人に見覚えがあるよう  
な気がしてな？ 気になったもんでよ？」

「私はキミとは面識はないが」

「俺もないと思うよ」

「俺もだな、オマエなんか怪しいな？」

「いやいやいやマサさんはそんな怪しいもんじゃねえーって、つか怪しいつつうのは、あの301番みてえのを怪しいつつうんだ」

『カタカタカタ』

「「「確かに!!」」」

受験番号301番イコール、ギタラクル（イルミ）さんです。

思わず頷く三人組です。

あつ三人組の正体は勿論。

「俺はゴン、ゴン・フリークスだよ」

「私はクラピカだ」

「俺はレオリオな」

の主人公組でした。

そしてマサはようやく主人公つてことに気づきます。

しかし、やはり、あつ主人公じゃん！！  
くらいのうっすい知識です。

・ ・ ・ ・

その5

「私は一次〜二次試験の試験官を勤めさせていただきましたサトツと申します、それでは早速ですがコレより二次試験の会場へと移動させていただきます」

『スタスタ』

「二次試験の会場？ 一次試験は！！！」

「フツ・・・レオリオ君や、甘いな、きつとアレだ、書類選考とかの類いがあってそれが一次試験だったのだよ」

『ササツ！！』

「いえ違います、二次試験への会場に向かうこと、いわばコレが一次試験です」

「なっ？」

「全力で間違えてるのに何故ドヤ顔してるんだマサナリは？」

「まあこついうヤツなんだよコイツは」

「フツ寝めてもアメちゃんとミミしか出ないぜ？」

「寝めてねえーって」

「あつ俺、飲みたい！！」

「うむ、ほれ」

『ガアーー……!!』

「あっ、ミ ミ じゃん」

「ン、なんだスケボー少年？ 欲しいのかね？」

「くねんの？」

「うむ良いぞ、ほれ」

「サンキュー……!!」

「はぁ……はぁ……っていつかガキそれズルいだろ……!!」

「むっ？ レオリオ君や、そんなに飲みたいならユーにも上げるぞ？」

「はぁ……はぁ……そ、そこじゃねえよ、そのスケボーだスケボー」

「なにオッサン？」「レのこと？」

「オッサン！！俺はまだ19だぞ！！」

「」「えっ！？」「」

「ってオイなんだそのリアクションはっ！！」「ゴンまで一緒になっ  
て！！」

「だって・・・なあ？」

「うん」

「だよなあ？」

「ちよっオマエら、そこに直れ！！」

『ギャーギャー』

「ちよっと離れよっ」

ミミはコッチにもあったようです。

後、ひそかにハンゾーさんは先に行きました。

・  
・  
・  
・

「ほうほうキルアな」

「俺と同じ年なんだね」

「そつみだいな・・・よっ!!」

『ガッパシッ!!』

「おお〜カッコイイ!!」

「やるなキルア少年、つかそれ使わんの？」

「俺も普通に走りたくなっただよ」



「なるほろ、うむうむ良い心掛けだ若い内から楽しちゃイカンしな、足腰が弱くなっちまうし、つつわけで、それ借してくんろ？」

「言ってることが微妙におかしいけど別に良いぜ？」

『パシッ』

「あつズルイ！！俺も借りたい！！」

「残念、俺が先です」

「むう、俺の方が先だよ！！マサは年上でしょ、こついつ時は年下に譲るべきだよ！！」

「いやさ何言ってるのゴン君？早い者勝ちに決まってるべが！！」

『グイッ』

「俺だよー！！」

『グイツ！！』

「俺だっつうのー！！」

『グイツ！！』

「俺！！」

『グツメキメキメキ・・・バキヤ！！』

「「あつ！？」」

「ああ～～俺のスケボー！！」

「いやスマン、キルア弁償するわ」

「い、ごめん俺も半分出すよ」

「まっ別に良いけど、ってん？ いつの間にか先頭になってるじゃん」

「おっ？ 言われてみりゃそうな？」

「ホントだ」

アホなことをしてる間に先頭になったようです。

その後マサはレオリオを

「頑張れ頑張れ〜なんで、そこで諦めるんの！！ オマエならまだやれるよー！！」

「うるせ〜〜っていつかオマエが俺の何を知ってんじゃーい！！」

「・・・老け顔つつうこと？」

「またそれに触れるかテメエ！！ もうカンベンならねえー！！」

「あら怖い、見ました奥さんなんてガラが悪いのかしら」

「マサナリも人のことは言えないだろ？」

「まあな！！　っといけね、ほれほれレオリオ〜鬼さんコチラ〜」

「待てやコラアアアア！！」

「ふう〜全く普通に励ませば良いものを、いやレオリオにはアレが  
丁度良いか？」

とこんな感じでクラピカと共に励ましつつ一次試験を突破です。

ちなみにクラピカさんはテンプレ的に女の子設定。

と、とりあえずは以上です。

番外編っぽい感じ！その14（後書き）

後書き

番外でした。

もう番外も14回目・・・。

多分、またちょこちょこやってみようが・・・。

次回は本編の予定、そちらも是非ヨロシクお願いします。

感想などありましたら是非に！！

番外編っぽい感じ！ その15（前書き）

前書き

久々の更新、本編の予定と言っておきながらの番外です。

何時ものようにクスリを持ってどうぞ！！

番外編つばい感じ！ その15

くもしも、リリカル世界だったら・6く

その1

「まあ私はパパの会社を継ぐ予定だしね、すずかは？」

「うん、私は機械いじりとか好きだから将来は工学関係かな？」

「そう、なのは、はやっぱり翠屋を継ぐんでしょ？」

「うん、それも一つの将来のビジョンだと思うんだけど・・・」

『ガヤガヤ』

「なあ、美由希さんや・・・」

「何かなマサちゃん」

「アイツらマジで小学生？ 何？ 将来のビジョンって？小学生のしかも低学年が使う言葉じゃねえーだろ？」

「う、うん・・・私も、ちょっと驚いてるっていつか」

「オマエ俺なんてアレだぞ、あんくらいの年はデカイカブトムシとかクワガタとかにはしゃぎ回ってた時期だぞ!？」

「あつ男の子はそうなんだ私はアレかな？ 新しく本とかに夢中だったかな？」

「マンガ？」

「普通の本もあつたけどマンガもあつたよ流石にまだ将来のビジョンとかは・・・」

「だよな〜コレも時代か・・・フェイトとかアリシアとかもあんな感じなのか・・・」

「帰ってから聞いてみればいいんじゃない」

「まあそうなんだけども・・・あんな感じに将来のビジョンうんぬん言われたらよお」



「だよね〜もしかしたら、なのは達、私やマサちゃんより将来のこ  
と考えてたりして・・・ああ〜私、お姉ちゃんなのに・・・」

三人娘の話の内容に驚きを隠せないマサ&美由希さんです。

あっ時期がズレてるとかのアレは例によってアレでお願いします。

場所は翠屋です。

ちなみにフェイト&アリシアは・・・。

「お嫁さ〜ん!〜!」

「わ、私も・・・お嫁さん・・・」

「ヤベエ・・・何？ この二人、シャレにならねえくらいカワイイ  
んですけど」

だったようです。

そして、はやては・・・。

「お嫁さんやな、あつでも愛人でも全然かまへ」

「指導ッ!！」

『ガスッ!！」』

「あイタッ!?! 何するんやマサ兄!！」

「小学生で愛人とか言っちゃいけません!! つかやっぱ昼ドラの見すぎだこのチビダヌキッ!！」

「ええやん、あのドロドロした感じがやめられへん止まらなへんのやッ!！」

「こんな感じでした。

あつ、ちなみにマサ、カブトムシやクワガタと戯れるつつも、ガッシリ、クマやらサメやらビートルマンやらとやり合ったりもします。

・ ・ ・ ・ ・

その2

「土郎さん、恭也、ザフ・・・明日は朝から決戦だぞ、いや寧ろ朝だからこそ決戦だ」

「ああわかつてるよ政成君、コレでもボクだって何年もこの戦いを勝ち抜いてきたベテランだからね」

「ああ俺だつて父さんには及ばないとはいえそれなりに戦いを勝ち抜いてきたんだ負けないさ」

「それは頼もしい俺は初めてだからご指導をお願いしたいところだ」

「フツ・・・まあこのメンツに勝てるヤツらはそうそう居ねえーわな、ならば明日・・・朝は5時」

「むっ？ マサナリ早すぎるのではないか？」

「ザフィーラ君、この戦いは初手で全てが決まると言っても過言じゃないんだよ早いと言っても早すぎるといっことはない」

「な・・・なるほど浅はかでした土郎殿」

「いやザフィーラ君は初めてだからね仕方ないよ、それじゃあ政成君」

「ああ明日5時・・・場所は・・・」

「・・・聖祥小学校校門前ッ！」「」「」

「明日の聖祥小学生大運動会！！ 最高の場所を確保するぞオオオ  
！！」

「」「オオオオ！」「」

はい、というわけで男四人の話合いの内容は運動会の場所取りの話でした

実際アレは戦場らしいです。

ちなみに女性陣は・・・。

「明日のお弁当は張り切って作らないと、えとスタミナがつく料理は・・・」

「肉だよ肉！！ プレシア肉！！」

「それはアルフが食べたい物でしょ！！ ああ〜もう、やっぱりマサナリに渡されたレシピに頼ろうかしら？」

「に〜くっ！！ 肉だってば！！」

「ああ〜煩い！！ アナタは向こうでホネ コをかじってなさい！！」

テストロツサ家はこんな感じ

「うん、コレで良いかしら後は明日ね」

【KEEP OUT 美由希】

「ひ、ヒドイ・・・なんにも立ち入り禁止テープ貼らなくても・・・」

高町家はこんな感じで。

美由希さんガツクリです。

・ ・ ・ ・

「ほっホントに大丈夫なんかシャマル？ やっぱり私がやったほうが」

「何言ってるの、はやてちゃん、明日ははやてちゃんが運動会出るのよ？ シツカリ寝て、明日に備えないと」

「せやけど・・・不安が大きなりすぎで逆に寝られへんのやけど」

「だよな〜シャマル、はやてじゃダメだったらマサにでも頼んだ方が良いんじゃないかねえーか？」

「もう、ヴィータまで！！ ホントに大丈夫だから、ほらマサナリさんがレシピもあるし！！」

「ううん・・・せやけどシヤマルやし・・・」

「ああシヤマルだもんな」

「主、安心して下さい、もしシヤマルが余計なアレンジなど加えようとしたらマサナリから貰ったコレで修正しますので」

『ブンッ！！』

「えっ？ シ、シグナムそれ・・・」

「ハリセンか？」

「うむ、鋼鉄で作った特注品だと言っていた、余計なことしたら遠慮なく振れとも」

「なら安心やな」

「だな」

「えっと・・・私が安心出来ないんだけど？　っていうか私ってそんなに信用ない？・・・グスン」

「っていうか・・・私はまた空気になりそうなの・・・」

八神家はこんな感じ。

シヤマルさんの腕前はレシピ通りに作れば出来るようにはなりませんでした

アホなアレンジをしなければ。

そしてやはり空気なリインさんです。

・  
・  
・  
・

その3



『パン、パンパンッ!!』

「ううう等々来ちゃったの、あの悪魔の日が・・・」

「なのは、悪魔の日って・・・今日は楽しい日ってマサお兄さんが  
言ってたけど?」

「全然楽しくないのっ!! うううなんで今日、雨降らなかったの  
うう、あんなに逆さてる坊主下げたのにうう」

「逆さてる坊主? なのはうそれって何?」

「アリシアちゃん、えっと、雨が降るようにするおまじないかな?」

「全く、なのはいくら運動神経が切れてるからってそこまでしなく  
ても良いでしょ? まあちゃんと晴れたけど」

「うううアリサちゃん切れてるって言わないでよううもっなんで晴  
れちゃうのう」

・ ・ ・ ・

「うむバツチリと場所は確保出来ましたな」

「ああやはりスタートが肝心だったね」

「ああ早くても早すぎるという意味が良くわかった、我々の他にも既に二組程来ていたからな」

「それだけ過酷ということだ、しかし今日は晴れて良かったな」

「だな、まあなんか知らんけど、昔っから晴れてほしい日は大概晴れるからな！！ 最悪、雨雲出てても巨大団扇風神丸2で吹き飛ばしてやるしな」

「それはまた豪快だね政成君」

「ナツハハハ運動会の邪魔はさせませんともナツハハハ！！」

なのはさんの望みはある意味マサによって絶たれたようです。

マサは基本は晴れ男。

雨もキライじゃないですけどね。

・  
・  
・  
・

その4

『続きまして三年生によりますパン食い競争です』

「ぬっ！？ パン食いかアリシアの定番だな」

「そうね、マサナリちゃんとカメラは回してるの？」

「当たり前エだったのっ！ー！ おっ出たぞ」

「アリシア〜頑張るんだよ〜」

『ブンブン』

「よ……い……」

『パンツ！！』

『ダダダダッ！！』

「おっスタートで頭取ったな、アリシア気合いだ行けエエエ！！」

「ほら頑張ってアリシアー！！」

・  
・  
・  
・

『パンパンツ！！』

「オツシャアアア！！ 1位イイイ！！」

「やったやったわっ！！」

『ブンブン』

「エへへお母さ〜ん、マサお兄さ〜ん、アルフ〜やったよ〜!!」

「おっつ!! 良くやったぞアリシア!!」

「偉いわよー!!」

「あっ、マサナリ、プレシア、このパン食い競争の後はフェイトが100メートルに出るみたいだよ」

「ぬっ!?! 了解したバッテリーの補充もとかねエとな」

「お願いねマサナリ、あっほら次は、なのはちゃんが出るわよ」

「おう? ホンマじゃって、なのっ子、なんか死んだ魚の目をしてんなオイ」

「そ、そうね・・・ハイライトが消えてるわね・・・」

「ハハ・・・なのは、は運動が少し苦手だからね」

「士郎さん、まあそりやまあ知ってっけどよ・・・あれはもう完全に負け犬の目だぞ？ ふむ・・・よしや！！！」

「なのはアアア！！ 気合い入れろオオ！！ 負けることは考えんじゃねエ、気持ちで負けんな！！ 自分に負けんな！！ 気合いだ気合いイイ！！！」

「・・・にこり」

「うつ・・・ものすごくひきつった笑い方ね・・・」

「だあああ！！ 既に負けとるがなアレ！！！」

「うーん、あの子、ビリになっちゃったらクラスの子達に迷惑をかけると思っっちゃってるのかしら？」

「迷惑ねえ・・・ったく、迷惑の二つや二つくれえ良いと思っけんだな、持ちつ持たれつだろうに？ 俺なんざあ二つや二つじゃすまんくれえにかけまくってんぞ？」

「それでも堂々としてるのがマサナリのスゴいところだよな」

「よせやい照ねらあ」

「誉めてないって」

『パンパン』

「っつてもたいつの間にか終わっとするし!?　なのは、は!?!」

『どよ〜ん・・・』

「アハハ・・・」

「ダメだったみてえな・・・めっさダークな空気背負っとするし」

アリシア一着、なのはさんは残念な結果になってしまいました。

落ち込んでましたが

「なのっ子、負けちまったんはしょうがねえわ、負けることもあらア、運動苦手なんだしよオ?　俺だってジジイにも負けっぱなしだ

しよ、でも何時かはぶっ飛ばしてやるうとだな」

「マサさん喧嘩とコレとは違うような？」

「いや同じだろ体を動かすという点においては！！ まあアレだつまり俺が言いたいのはアレだ、うんアレ、負けても、ナニクソ次は見てやがれっつう気持ちが必要なのよ」

「う、うん・・・なんとなくわかったような」

「うむうむ、ならよし！！」

「っていうかマサちゃんの場合、勉強でも負けっぱなしだよねこの前フェイトちゃん達の宿題がわからなくて泣きついてきたし？」

「いつの間に来やがった美由希！！ つか、それを言うなやっ！！ チーズケーキ三つで手を打っただろ！！」

「ゴメンね〜マサちゃんついつい」

「ふえっ？ 宿題？」

「なのは君、今キミは何も聞かなかった！！ 宿題とかそんな話は



「一切聞いてない！！ 良いな！！」

「ふえ！？ うっうん」

「うむ・・・良い子だ後で何か好きな物を作ってやろう」

「うっ、うん」

「ただし美由希、テメエはダメだ！！ なんか期待したツラしてやがるけどツ！！」

「ええ~~~~」

「ええ〜、じゃねえつうの！！」

「あゝあ、仕方ないな〜」

「後・・・」

「何かなマサちゃん？」

「明日の手合わせ・・・楽しみにしてるよ美由希イイイ」

『ニタリ』

『スタスタ・・・』

「ヤバイ・・・私かなりヤバイ・・・もう完全にヤバイ、下手したら関節の一本や二本持ってたかっちゃう！！」

「お姉ちゃん」

『ポン』

「な、なのは助けて、なのはならマサちゃんを止められるはずっ！」

「無理なの、それに自業自得なの！！」

『ニタリ』

「ステキな笑顔で妹に死刑宣告された――！！」

なんとか立ち直ったっぽいです。

そして何故かやはり美由希さんオチ

完全にオチ要員になりつつあります。

ホント何故こうなった？

っといつたところで半端ですがとりあえずは以上です。

番外編っぽい感じ！ その15（後書き）

後書き

サボりまくってました

そして実に半端！！

運動会編、はまた何時か続きをやるかも？

そして次回は流石に本編！！

だと思えます・・・多分・・・。

と、とにかくどちらに転ぶにせよ頑張っていきたいと思えます。

感想などありましたら是非！！

第七十話っぱい感じ！（前書き）

前書き

なんやかんやで七十です。

けど少し短め。

いつものようにクスリを持ってどうぞー！！

## 第七十話つばい感じ！

モモ 視点

「困ったわね・・・」

アゴに手を当てて呟く。

うーんホントに困ったわ。

えっ？ 何に困ってるかですか？

それは単純なコト。

「私の出番が全然ないっ！！」

というコトです。

そしてマサナリさんとも余り接近できてませんし。

折角一つ屋根の下に住んでるっていうのに思いの外、コトが上手く運んでいない。

それでも少しは仲良くはなってるはいるんだけど・・・どうも男と女の関係っていうトコにはいかない。

マサナリさん手強い方だと思っていただけどココまで手強いとは予想外だったわね。

とはいえ、なんとかココで一気に接近して・・・出来れば出番も増やしたい所。

あつ別に私は正妻じゃなくて愛人のポジションでも全然構わないんですけど。

同じくらい愛してもらえば。

フフ・・・。

ンッン、とりあえずなんとか距離を縮めたいわ。

よし、今日はマサナリさんと二人っきりで出掛けてみよう。

少しは意識してもらえる・・・といいわね。

うん、まずはこの前買った服に、後一応は下着もカワイイのを・・・よし！！

それじゃ早速マサナリさんの部屋へ。

『コンコン』

「マサナリさん少し良いですか？」

一応はノック、ホントならいきなり空けて着替え中とかに遭遇したいけど今は我慢。

「ぬっ？ モモが良いぜい」

『ガチャ』

「マサナリさ・・・ん？」

扉を空けて固まってしまった。

っていうかマサナリさん、そんな無理な体勢でポーズをとりつつけるのかしら？

しかも

「バーンッッ！！」



いや違うなコレは

ドギヤーンッッ！！だな」

ポーズごとに効果音をつけてるんだけど……。

えと……何がどう違うのかしら？

それより……。

「あ、あのマサナリさん何をなさって？」

「ジ ジ 立ちの研究」

「はい？」

ジ ……ジ 立ち？

「健全な精神は芸術的なジ ジ 立ちにこそ宿ると言うからな、どうだやるかモモも？」

「いえ私は遠慮します、あの頑張っして下さいね……」

「さよか残念ナリ」

折角の誘いだけど断って扉を閉じた。

「ギャーンッッ！！ デイモールルッ、実にデイモールル  
ト……」

扉の向こうから聞こえるマサナリさんの声といつか、もはや奇声・  
……。

「思ってた以上に距離が遠かった。」

なんて手強い……。

少しの時間を置いてマサナリさんをデートに誘う為に再びマサナ  
リさんの部屋の前。

アレから直ぐに誘ってもよかったんだけど流石に気持ち折れて  
たし……。

それに時間を置いたからマサナリさんがやってた……ジジ  
立ち？

の研究とやらも終わってはず。

「フウ・・・よしっ」

『コンコン』

「マサナリさん、少し良ろしいですか？」

扉をノックして声を掛ける。

「おつ良いぜい」

マサナリさんの返事の聞いてから扉を開け部屋へと入った。

すると・・・。

「バアーンッ！... どうだバカナリ？ こんな感じだろ？」

「うっむ・・・もうちょい指の角度を、こつクニヤとだな」

増えてた、しかも私の双子の姉だった・・・。

「こつつか？ バアーンッ！..」

「ディモータールト!?!」

「よっしゃ!?!」

よっしゃって・・・なんで指導されてるのナナ?

そしてなんで喜んでるの?

「っと悪いモモ、どした何か用か? あっもしかしたらやっぱやりたくなっただか?」

「そうだぜモモもやってみろよ、結構奥が深いぜコレ」

「あっいえ結構です、どうぞごゆっくり」

『ボタン』

二度目のお誘いだっただけど丁重にお断りして扉を閉じた。

ナナ・・・私にとってそれは奥が深いっていうより海底よ・・・。

本当、なんて手強い……。

・  
・  
・  
・

「よしっ、今度こそっ!!」

なんとか気持ちを立て直して三回目の挑戦。

『コンコン』

「あの〜マサナリさん？ 今、大丈夫ですか？」

大丈夫の部分には色んな意味が含まれてる。

「おう!？ モモまたかい？ 大丈夫っちゃ大丈夫だぜ」

ホントに大丈夫なのかって不安になるけど……。

大丈夫よね、流石に三回目だし。

三度も続くはずがないものね。

そう自分に言い聞かせて扉を開ける。

『ドドドドドドッ!』

な、何かしら扉を開けた瞬間、何か効果音が……。

「三度も続くはずがないイイ？  
狙い撃ちだッッ!」

そんな心はなアアッッ!？」

『バーンッッ!』

半身になりながら腕を組み指をビシリと私に向け妙に濃い顔で笑  
うマサナリさん……。

流石にヒザから崩れ落ちてしまった。

「な、なんて手強い……」

・  
・  
・  
・

約30分の間床にヒザと手をついてガックリとうなだれていたけど  
またなんとか気持ちの立て直しに成功。

結構、私ってタフなのかも知れないって思いました。

こんな形で知りたいとは思わないですけど。

「んで、モモなんか用があるんじゃないかねえの？」

あつと、いけないマサナリさんをほったらかしでしたね。

「やはりジ・・・」

「それは違いますよ」

「ぬう・・・最後まで言わしてくれても罰はあたらんと思うわけだ  
が」

確かにそうですけどまた色々と脱線し過ぎて今日の目的を達成出来なくなっちゃいますもの。

というわけで今日の目的

「あのマサナリさん今日、私と二人で出掛けませんか？」

二人での部分を少し強調。

そう言わないと次々と他の人を誘いそうだし

それにホントはデートって言いたいけど、その部分で変に引っ掛かられて、拗れちゃった無しになっちゃうものね。

そこまで慎重にならなくてもいい気がするけど念には念をね。

「二人でか？　そーいや前に植物園に行くつう話してたなあ？　よしや行くべか！！」

あつ覚えてくれてたんだ・・・。

私はマサナリさんに言われて思い出したのに。

「ってモモ君やどしたよ？　アレか？　実は植物園に行くとかじゃ



なかったとか？」

「あっ、いえ、行きましよう」

「うむ！！」

と言つコトで植物園に行くコトに決まりました。

最初はショッピングぐらいの予定だったんですけどね。

二人でお家を出てテクテクと歩きまらずは駅を目指します。

植物園は隣町にあるみたいなので。

正直マサナリさんなら電車より全然早く移動出来そうなんですけどこの移動する時間もデートの楽しみの一つですしね。

それにマサナリさんとお話しながら歩くのも楽しいですし。

それに……。

「あつ、マサナリちゃん、この前は屋根ありがとうね〜」

「おつ吉田の婆ちゃん、気にしなさんな困った時はだしな、一応はちゃんとやったけどアレから雨漏りはしてねえーか？」

「大丈夫だよホントにありがとうね〜」

という具合にマサナリさんの町での様子がわかりますし。

変わっていますけどやっぱり優しい人ですよね。

そう言つと照れて否定しますけど。

まあ、道を歩いていた見るからにガラが悪そうな方々がマサナリさんを見て慌てて脇道に入っていかれてたりとかもありましたけど。

そういう部分もまた魅力的だったりして・・・ポツ。

「予定変更して病院に行くべきか否か・・・」

「否でお願いします」

断固、否です。

危ないところでした。

そんなコトがありながらも駅へと到着して電車に乗ります。

そして目的地の植物園へと到着しました。

「フフ、ここの植物さん達はとても大切にされてるみたいですね」

園内に入ってまず思ったコトはそれです。

「そうなん？」

あつそう言えば以前マサナリさんセリーヌさんが言ってるコトと  
かは分かるけど

喋ったり鳴いたりとかしないと分からないって言ってましたね。

「ええ、ココの植物さん達は大切に育ててくれた園の人達にとっても感謝していて少しでも立派に、或いは綺麗に、ってそうなさってます」

「ほう、そう言われてみりゃあのサボテン君とか、かけえ気がしてきた」

「でしょっ?」

ホント、ここは素敵な場所だね。

一気にお気に入りになりました。

またちよくちよく足を運ぼう。

出来ればマサナリさんと一緒に良いですけど。

フフツ、それにしてもホントにこの植物園は素敵な場所。

思わず子供みたいにはしゃいでしまった。

けど、そんな私にマサナリさんは嬉しそうな顔。

何時もは子供っぽいような感じのマサナリさんだけど

「こういう時は妙に大人っぽい・・・というか、それを通り越して保護者目線というか。」

少し複雑。

「すみません子供みたいに」

そういう気持ちもあってマサナリさんにそう言つと

「楽しんでんだから良いべよ子供で？ ホントは楽しいくせに楽しくないふりするくれえならよ？」

確かにそうかもって思った。

「そうですね、じゃあ今日は目一杯楽しみます、ほらマサナリさんあちらの熱帯植物さんがいるコーナーに行きましょう」

「あいあい」

マサナリさんの手を引いて走りだすくらいの勢いで熱帯植物さんがいるコーナーに。

あっ、そういえば自然と手を繋げたわ。

抱き着こうとしたらかわされるのに……。

手を繋ぐとかはセーフってコトかしら？

新たな発見。

そんな発見もあつたりしながら、植物園を目一杯楽しんでいたら

フと気になって。

「マサナリさんってどのような植物が好きなんですか？」

そうマサナリさんに聞くと直ぐに。

「ヒマワリだな、自分で育てたコトもあるぜい」

ヒマワリ、あの太陽みたいなお花ですよね。

確かにあのお花は元気な感じがしてマサナリさんのイメージにもあってる気がする。

私がそう言ったらマサナリさんは一瞬だけ嬉しそうな顔をしたけど直ぐにしかめっ面になって。

「いやいやいや、それだと俺とあのパーが似てるというコトに……」  
「らきっついに」

と何やらブツブツ。

そして

「やっぱり変更、チェンジ、好きなのはヒマワリじゃなくて桜で……！  
日本男児なら桜やろう……！」

チェンジって、まあ桜も確かに好きなのでしょうけど。

「マサナリさんはヒマワリな感じなんだけど」

小さな声だったけど聞こえてたみたいで。

「いやホント、アレと似てるとかマジ勘弁、ホントマジでっ!！」

凄い必死な顔だった。

なんであんなに必死だったのかしら？

新しい発見もあったけど新しい謎も増えたわね。

それからも植物園を二人で回り時間は過ぎて夕方になる少し前くらい。

「そろそろ帰りましょうか？」

ホントはもう少し回りたい気持ちもあったけど、夕食の支度がありませんしね。

実際作るのはマサナリさんと美柑さんなんですけど。

「ン？ もうちょい良いんじゃない？ 今日食材の買い出し、美柑とヤミが行ってくれるっつってたし」



あっ、そうなんだ。

心の中でお二人に感謝して。

「それじゃあ、もう少しだけ」

デートを楽しむことに。

今度お二人に協力しなきゃね。

えっ？ なんですか？

ライバルじゃないのかですか？

フフッ最初に言ったじゃないですか。

私は愛人のポジションでも良いって。

元々お父様もお姉様に私にナナの三人纏めてって言ってましたし。

この際、もっと一気にハーレムでも良いかなって？

確率も上がりますしね。

まあそれ以前にマサナリをいかに攻略するかが大問題なんですけど。

まっ、その問題を解決するのはスゴく長くなりそうだし。

今はデートの延長戦を楽しみましょうと。

・ ・ ・ ・

あっ、後少し続きますよ。

デートを終えてお家へと帰って来た後

何時ものようにマサナリさんと美柑さんが作った夕食を食べた後  
部屋でナナとのんびりする。

相変わらずお二人が作る料理はとても美味しいです。

ただ美味し過ぎて少し食べ過ぎちゃったりしますけど。

こつこつ時お姉様とナナの食べても太りにくい体質が羨ましくなったりする。

お姉様は以前に食べ過ぎて少しだけ失敗したって聞いたけど。

でもナナは本当に全然、太らない。

今日だって私の二倍くらい食べてたのに・・・。

まっ、でも一部、太って、というより膨らんで欲しい部分も全然膨らんでないけど。

「その目はなんだ、その目は」

「あら失礼」

ついつい。

「ムカつく~~~~!! 今に見てるよ~~~~」

『ウィーン』

あら出ていっちゃった。

「美柑——！！ ヤミ——今日もやるぞ大作戦つ——！！」

「ええっ！！ き、今日もなのナナさんっ——！！」

「今週だけで既に三回目ですが？」

「やるんだよっ——！！ ばいんばいん、になるんだっ——！！」

「ちよっ声大きっ——！！」

部屋の外から聞こえるナナに美柑さんにヤミさんの声。

そう言えばあのお二人も失礼だけど……フッフ。

「……ナナさん、やるうっ——！！ 今直ぐに——！！」

「そうですね、直ぐに始めましょう」

「おっやる気になったな、よしっ目指せ、ばいんばいんだあー」  
「!」

フフ・・・頑張ってください。。。

『スタスタ・・・』

「頑張るんは良いけど、近所迷惑だから、ばいんばいんとか騒ぐなよ」

「「「ツツーーーーー!?!?!」」」

『スタスタ・・・』

固まってると思われる三人を思いホロリと涙が出ました。

本当に頑張ってくださいね。

・  
・  
・

ちよこつと春菜

「うんしょ、うんしょ」

いつもやってるんバストアップ体操。

何故だかわからないけど今日は特にやらないといけない気がする、いつもの三倍くらい頑張ってる。

こつこつ毎日の積み重ねがきつと大切なんだよね。

頑張れ私〜!!

ワンカップアップ〜〜。

『ガチャ』

「春菜、今面白いテレビやってるよ〜」

「お、お姉ちゃん!! ノックくらいして!!」

「良いじゃない姉妹なんだし？ それに春菜がバストアップ体操してるの何度も見てるわよ？」

うっ……た、確かに何度も見られてるけど。

「まっ、そのわりには」

『プニッ』

「ひゃうっ!!」

「あんまり成長してないな」

うっ……。

「お姉ちゃんのイジワル……!!」

今日もお姉ちゃんはスゴくイジワルだった。

うっ……、絶対にワンカップは上げてみせるんだからっ!!





第七十話っぽい感じ！（後書き）

後書き

そんなこんなで七十話でした。

えと感想などありましたれば是非！！

第七十一話っぽい感じ！（前書き）

前書き

七十一話…！

いつものようにクスリを持ってどうぞ…！

第七十一話 っぱい感じ！

「ウィーッス保健さん」

「うーす、です」

「来たわねガクラン君、ヤミさん、じゃガクラン君はいつものお願いね」

「私もお願いします」

「あいよ」

もはや完全にいつもので通じるレベルな恒例行事。

用務作業後の余りを保健さんトコで過ごそうなコーナーです。

サクッとコーヒーとホットケーキを用意してテーブルへ。

でもっさもっさも食べつつ雑談タイム。

あつ、いつぞやの時みてえに目を離れたすきにキヤトられたりはしねえーです。

「そういえばガクラン君、明日からでしょ？」

ン？

「明日からって何さね？　なんかあるん？」

はて？　特に思い当たるような行事はなかったような気がするんだが。

「衣替えよ、確か明日からじゃなかったかしら？」

「そつなんヤミっ子？」

「私に聞かれても困ります」

ですよね。

そりゃヤミっ子は知らんわな。

「今朝、職員室でそんな話が出てたわよ？」

ほうほう、そついや思い出してみつと去年も、こんくらいん時だ  
ったわなあ。

「いや、光陰矢のごとしつつうけど早えもんですなあ」

ホントあっちゅう間だわ。

「そうですね、私も地球に来てから一年以上ですから」

「おおっ！！ そついやヤミっ子がコツチに来たんもこん時期くら  
いだったな」

タイヤキ屋台の前で食いたそうにしてたんだよなあ。

「まあさか俺ん命取り<sup>タマ</sup>に来てるとは思わんかったけど」

「一応、今も狙っていますか？」

「一応だろ？」

「一応です」

そういう意味では朝の日課なアレも続行中だしな。

まっ

「取られてはやらんけど」

「むっ・・・まあそう簡単にいくとは思っていませんが」

当然でござえますよい。

「フフ、今は別の意味で別のコトを狙ってるかもしれないけど」

「!?! ド、ドクター・ミカドっ、な、何を!!」

おっ? ヤミっ子なんか慌てとるし?

そして赤いッス。

つか別のコトって・・・

ふむ・・・。

ハッ、もしやっ！！

「ちよい前に手に入れたレアアイテムかっ！！ イカン、アレはやらんぞっ！！ 一週間という苦行の末に手に入れた血と汗と涙の結晶だぞっ！！」

ホントかなり苦労したからなアレ。

協力してくれたリト&リコのカもかなりデカイけど。

めっさ感謝してますホント。

入手した時、何故か妙に温い目で見られた気がしたのが気にならんでもないが。

「・・・複雑です」

「複雑よね」

フツいくらそう言われてもやらんもんはやらん。

今度、一緒にやっときに見せつけてくれるわ

フハハハハっ!!

「・・・マサナリ」

「ん〜、なんだね？ 言っとくがやらんぞ」

羨ましがれ羨ましがれ

ナツハハハ!!

「そのレアアイテム私は一度で手に入れましたが？ 性能が悪いので一度も使用してませんが」

ハハ・・・はあ!?

「マジで?」

「マジです、大体あのアイテムはそこまで入手が困難ではないです、さらには地雷です」



「バカ・・・な」

だからか、生温い目で見られてたんは・・・。

「結局、俺みてえなもんがいくら頑張っても意味がねえってことか  
フツ・・・とんだ道化役者だぜ、俺あよ・・・。」

チクソウ・・・。

「かなり落ち込んでますね」

「浮き沈みが激しい子ねえ」

・ ・ ・ ・

例によって気持ちの立て直しに使用したミミ二本。

ガッツリ立て直しも完了したんで雑談再開。

「髪型変えよつかねえ？」

「あら？ 少し前に同じ口ト言っただけかしら？」

「そうですね、結局変えないと決めたはずでは？」

「いやさ、まあ確かにあん時はそう決めただけんども。」

「今回は切らない方向で考えとるわけよ？ したらばいつでも今の戻せっし」

今の髪型も気に入ってはいるからね。

「私は今の髪型が似合ってると思いますが」

「でも他の髪型も気になると言えば気になるかしら？ 切りはしないんですよ？」

保健さんの言葉に、うむりと頷いて答えます。

「よしっ、今日の放課後辺りにでん色々と試してみよう」

「フフ、少し楽しみかしら？」

「そうですね、私は今の髪型が似合ってると思いますが」

ヤミっ子は今の髪型押しらしいな。

いや今の髪型も気に入ってますけどね。

まっとりあえず今日の放課後は髪型チェンジタイムになりそうです。

まっ気持ちが悪えてなけりゃだけどなっ！！

・  
・  
・  
・

「萎えてませんでしたっ！！」

「なんのっ！！」

髪型チェンジタイムのです。

あつ参加者は今ツッコミ入れたリト君を始めララ、リコ、唯、で保健さんにヤミっ子に静。

春菜とかは例によって部活やらアイドル稼業で不参加です。

と説明を終えたトコで早速。

「髪型をチェンジしてみようっ!!」

「ええ〜マサはその髪型が良いよ〜」

「私もプリンセスに同意します」

ぬう、ヤミに続いてララもか・・・。

いや何度も言うけど俺もこの髪型は気に入ってるっちゃ気に入ってるし。

じゃなかったら二年近くも同じ髪型で通してないからね。

とはいえ、やらなかったらやらなかったでこの企画は完全に終わってまうし。

それに……。

「あくまで遊びの一環的な軽い感じだから本格的には変えんよ？  
よっぽど気に入ったヤツがない限りは」

あつ前にも何度か言った気がすつけど一応は今の髪型は

長さは肩にかかるかかからないかくれえの長さで頭の中程でチョンマゲして後は降ろしてる感じな。

「うーん、ってコトは切ったりはしないんだろ？ だったら少しくらい見てみたいかな私は」

「そうなのマサ？ 切っちゃったりしない？」

「うむ今んとこは切る予定はない、遊びの一環だ」

具体的には……

あつアレだっ!!

「ノリとしてはアレだ風呂ん時にシャンプーとか使ってるアムとかあんな感じのノリ!!」

誰もが一度はやったコトあると思っ。

アレな。

「ああ、アレか俺も昔やったコトあるよ

やはりリトもやったコトあるようだな。

「？ ア ムってなんですか？」

「お静ちゃんそれは後でね」

クビを捻る静にそう言う保健さん。

ナイス保健さんです。

「というか少し変えるだけでわざわざなんで私達を集めたのかしら？  
来た私も私だけど」

ぬっ！！

唯、実にもっともな意見ナリ。

でもな。

「ほらマサさんは生粋のエンターテイナーじゃん？ こつこつコトもコツコツと企画にしないでエンターテイナーとして？」

「エンターテイナーって、まっ確かにそつこつのが好きそつだけど

「それだったらマサもルンちゃんやキョーコちゃんみたいになろうよ！！ 私、応援するよ！！」

いやいやララさんや。

「そりゃ無理だべえビジュアル的に、つか別に顔も知らん大多数を楽しませてもなあ〜」

別にそつこつ職業やってる人んコトを否定してるわけじゃねえけど。

実際キョーコとルンも頑張ってるし

俺も応援はしてるしな。

時代劇と番組が重なったら時代劇を優先してるけど。

「まっアレだな大多数の人を楽しませるよか気心しれたヤツらと楽しみたいわけですなあマサさんとしては」

「まっそれがガクラン君よね？　ところでそれを個人に向けて言つと、どんな感じになるのかしら？」

個人に向けてか・・・。

スツと保健さんの頬に手を添えつつ。

「オマエだけを楽しませていたいんだ」

「ッ!!!??」

「「「「なっ!!!!!!」」」」

「こ、コレは効くわね・・・」

何に？　頭痛とか胸焼け？



つか……。

「ついノリでやってまったが似合わねえーコト、この上ねえー」

やって後悔。

いつだったか前にも似たような後悔の仕方があったな。

その時に習い。

「コレは封印だな封印、気持ち悪いったらねえーわ」

「むう……勿体無いわね、もう一度くらいサービスしてくれても良いんじゃない?」

「マサ!ー! マーサッ!ー! 私~~~~、私も~~~~!ー!」

「やらんっしっしっしっ!ー!」

似合わねえーコト山の如しだからッ!ー!

「マサナリ、それでもエンターテイナーですか？ 先程言っていた  
気心が知れたの件は嘘だと？」

ぬっ、ヤミっ子！！

そこを突いてくるとは……。

いやさ、それとコレとは別問題だしなっ。

「それともさ……私らってマサにとって気心が知れないってコト  
なのか？」

ハハ……それだったら淋しいよな」

ちよっおまつりコ！！

「ンなこたあねえーわっ！！ 腕の二、三本なんざ惜しくもねえー  
わっ！！！」

命までは流石にアレだけどっ！！

ってコレも結構言ってるな。

「それだったらマサ君」

「いやさ唯それだったらってなんだ、それだったらって!! やらんもんはやらんっ!!」

「ふう……そうよね……マサ君にとっては」

「だぁーもっ!!」

「わあった、こうなったらやってやらアアア!」

結局、さっきと似たような感じのコートを二周くらいさせられました。

リトを含めて……。

で四週目に差し掛かる直前で。

「って企画が丸々変わっとなるがなっ!!  いつの間にかマサさんの髪型を変えようから」

マサさんを使って遊ぼうに変わっとなるがなっ!!」

「あら？ 気付いた？」

「確信犯かいつ！！」

流石は保健さん油断ならぬっ！！

「ええ〜い、とりあえずはアレはやはり封印！！ もっちらんっ！！」

二度目の封印宣言。

さっきみたくやいやい言われたがそこは。

「それはそれ、これはこれ！！」

と必殺奥義を繰り出して乗りきった。

つかアレをさした間、唯とかヤミとかリコとか真っ赤になってやがったクセに。

ララも珍しく赤なっただけ。

つか赤くなりたかったのは俺だっつうの 似合わねえー上に、こっ恥ずかしいコトをさせおってからに……。

いつかこの憂さは晴らすと決めました。

まっ憂さを晴らしのこたゑー一旦は置いておき、とりあえずは髪型子  
エンジ。

「まずは定番、とりあえず髪の色を変えてみよ」

「ダメよ!!」

言い切る前に唯先生にコラッてされた。

流石は委員長、そっいうんは見逃さねえーです。

でも一応は。

「今ただぞ? 今だけ限定?」

と軽く抵抗を試みる。

「ダメ!!」

ダメでした……。

流石は委員長だ、そんな唯にマサさんもたじたじだぜ。

まっぶっちゃけ。

「黒髪のが好きだから染めるんは候補外だったんだけどな」

「なら良いわ」

とりあえず言ってみただけだし。

じゃ次は髪を染める以外で何か……。

「ねえねえマサ」

「どしたララ？　なんか良さげなんがあるん？」

「うっん違くて、えとね、今、黒い髪が好きって言ったよね？」

「言ったな」

「じゃあね私も髪の毛、黒いほうが良い？」

ぬっ？ ララの黒髪か……。

「マサナリ、私も黒くしましょうか？ トランスを使えば容易ですが？」

「私も黒に染めようかな……」

ヤミにリコもか？

ふむ……。

「いや今マサが止められたばかりだろ？」

「」「むう……」「」

リトの最もなツッコミに唸るつつ黒髪な唯と保健さん静を見るララ、ヤミ、リコの三人。

その視線の影響か意外にも唯が

「まっまあ、い、今だけだったら別に」

と若干折れ気味に。

「ホント！ーわあーいありがとう唯ー、それじゃパパッと髪の色を変えるメカを作るねっ！ーリコとヤミちゃんも使う？」

「ああ頼むララ」

「私はトランスがありますから」

こんな感じで盛り上がる非黒髪組。

しかしそこで待ったをかける人物がっ！！

そう。。。。

「ちよい待ったれや、なして俺はダメでララ達は良いんさ鼻肩だ鼻肩っ！！」

俺ですっ！！！

そりゃ引っかかるだろ！！



いやさ、引つかからいでかつ!!

「マサ君は元から髪の色を変える気はなかったんでしょ？」

「むっ」

「なら良いじゃない」

いやいやいや。

「そう言われりゃそうなんだが、なんか引つかかるのだよ唯君!!」

「まあまあガクラン君、男の子でしょ？ 細かいコトは気にしないの」

食い下がる俺に保健さんの一言。

「むっそう言われりゃ仕方あるまいマサさん漢だからねっ!! 見逃してやらあ」

マサさん漢だからっ!!

「マサナリさんって、もしかして結構単純な方なんですかね？」

いや静よ、結構複雑な構成になってると思いますよ？

多分、きっと、メイビー。

そんな感じでコチャコチャしてる間にも、ララの髪色を変えるメカとやらが出来たようです。

「じゃーん、ふるふる、からふる君！！」

つつ名前らしいッス。

わかりやすくて実に良し。

あっ単純とかそんなんは言わない方向でお願いします。

恒例のお願いをしてる間にも髪の色を黒くしたララ、ヤミ、リコ。

「どひっ？ どひっ？」

「どつでしようか？」

「マサどうかな？」

「正直微妙」

俺の感想にガツクリ手をつく三人です。

いやね、似合っていないことはないたあ思うが普段の色のが似合っています。

「やっぱアレだな、うん、自然なんが一番だな、元々そいつ自身の色なんだし、やっぱそれがいっちゃん似合うように出来てんだろっねえ」

ホントよくできたもんで。

まっ色を変えたのが似合ったりする人もいっただろっけど。

「うん、そうなのかなあ？ わかった、じゃあ元の色に戻そっつー！ リコも」

「わかった」

ララとリコは、ふるふるからふるふる君とやらで

ヤミは再びトランスってそれぞれ元の色に戻します。

うむうむ。

「やっぱ、そっちのが落ち着くわ」

見慣れてるってのもあるだろうけど。

「そうね、さっきのはやっぱり少し違和感があったし」

「だな」

「です、あつでもでも、さっきの髪の色が変わる妖術はスゴく面白いかったですよ！！」

唯にリトも似たような感想らしい。

静はなんか微妙にズレてるけど。

つか妖術ちゃいますよ？

ヤミのは似たようなもんやも知らんけど」

「トランスです」

「こりゃ失敬」

どつやら声に出てたらしいッス。

「あっ、そうだ!! ねえねえ唯、唯もからふる君使ってみない？  
あっミカド先生にお静ちゃんもっ!!」

「おっ!! ララよそれは中々に面白ろそうだな、よし髪色チェン  
ジだ!!」

似合う似合わないは別にして実に面白ろそうだ。

特に唯と静は染めたコトとかはないだろうし  
保健さんはあっかも知れねえーけど。

「そうね〜たまには良いかしら？」

「えっ？ わ、私は別にいいわよ」

「ええ〜唯さん面白ろそうですよ〜やってみましょ〜」

ノリ気味な保健さん&静、それと違ってやはり後ろ向き気味な唯

君です。

やはり風紀とか委員長の血が反応を示してるんだろう。

しかし俺は知っている。

「チェーンジ！！ チェーンジツ！！ 見たーい！！ 見たーい！！  
「！」

俺のチェンジ&見たいコール！！

そう唯は……。

「わ、わかったわよ、す、少しだけよ」

かなり押しに弱いんです。

押すと結構な割合で折れます。

でガッツリ折れて唯に静に保健さん、髪の色チェンジ。

唯はララと同じでピンクに

静はヤミっ子と同じ金髪。

保健さんはリコと同じな？

で正直……。

「に、似合わねえー!!--」

これは似合わんっ!!--

予想を遥かに上回る似合わなさだわ。

つか、なんか寧ろ笑える。

「ま、マサ君がやれって言ったんでしょ!!--」

「ククツ……スツスマン、なんかホント、スマン、ククク……」

「笑わないで下さいよ」

「わ、悪い、クククツ……」

「そんなに似合っていないかしら？」

「ざ、残念ながら、ククク」

ボディーパーローの如くじわじわと効いてくる面白さだ。

ダメージが中々抜けん。

「このままではなぶり殺しや……」。

お、恐るべし髪色チェンジ。

「はあ〜マサ……もうちょっとくらい気を使ってやれよ」  
ため息混じりのリトに「ラッてされました。」

流石はお気遣いの紳士リト。

その言葉に流石のマサさんも軽く反省です。

そんなこんなで反省後。



流れるに俺とリトも髪色をチェンジするコトに。

あっ唯達は既に元の色に戻っとります。

まずはリトからチェンジ。

色は赤。

「おっ？ 結構似合ってるくせえ」

「そっか？ うん、やっぱり違和感あるけどな」

鏡を見ながらそう言っリト。

まっ確かに似合ってはいつけどいつものがシックリくるわな。

「なんでリトだけ、似合ってるってさあ、私だってさ」

そんな感じで会話する俺とリトを見つつリコが微妙にやさぐれてました。

まっ多分、色の問題だろ？

リトと同じで赤とかだったら似合っただだろっし。

でも、やっぱりいつものがシックリくったるんですけど。

で、リトは髪の色を元に戻し続いて俺。

定番の……。

「金髪にするでござるー!!」

定番だからね、多分、誰もが一回くらいはやったことあると思う。

『クイクイ』

って何やら袖を引かれてとるし。

「お揃いです」

微妙に嬉しそうな顔のヤミっ子です。

ホントお揃いが好きな子です。

いやカワイイッスわ。

とりあえず撫でといた。

何故なら撫で王は以下略。

それから、なでなでを一周しようやく髪色チェンジ。

結果はやはりつつかなんつつか……。

「ガラ悪いなオイ」

ガラの悪さ急上昇。

元から結構ガラ悪いつつのに更に拍車がかかるとる。

「た、確かにコレはかなり……」

「え、ええ、そうね似合ってる似合っていない以前の問題っていうか……」

□元ひきつらせるリトと唯。

静なんざ軽く涙で保健さんの後ろに隠れとるし……。

「お揃いではなくるのは残念ですがやはりいつもの方がよいです」

「そっかなあ？ 私は好きだよ」

「私はヤミに賛成だな、流石にちょっと」

「そうねガ克蘭君、元に戻しなさい、そのままだとお静ちゃんが泣いちゃうわ」

と金髪反対多数により即効で元に戻すってこと。

が、その前に。

『ササッ』

と髪型をアメリカンタイプのリーズントにし

「ロツケンローラー!!」

「「「ブッ!!」」」

「プッ!!」

一ネタ挟んで置きました。

リト、リコ、唯には結構受けた。

保健さんも軽くプツときてたッス

ヤミはリアクションが微妙だったけど

ちなみにララは、わぁーいってなっていました。

ララさんは実に無邪気さんです。

静？ 静は相変わらず涙目でしたよ？

そんな感じでわいわいしつつ今日の放課後は過ぎていったのでした。

とっぴんぱらりのぷ〜。

第七十一話っぽい感じ！（後書き）

後書き

七十一話でした。

感想などありましたら是非！！

**番外編っぽい感じ！その16（前書き）**

前書き

にっちもさっちもな番外編です

例によってアレがそれですのでクスリを持ってどうぞ！！

## 番外編つばい感じ！その16

くもしもGS世界だったら

その1

「今日も今日とて、だ〜れも来ねえーなあ、パリポリ」

「そうですね〜、昔でしたらもう少し修行を受けに来る方はいたんですけど」

「そうなん竜姫たつき?つか昔つてどんくらい前なん？」

「ほんの百年程のです」

「百年は、ほんのとは言わなくね?」

「あつ、そういえば政成さんは人間でしたね、人間からしたら百年はやはり長いですか?」



「百年どころか十年も長えって、十年ありゃ赤子が十歳になるからな」

「それは普通です」

「ですよね、っとそついやサル爺は？ 朝から見ねえーけど？」

「ハヌマン老師は神界です、なんでも同窓会があるとかで」

「同窓会ね、やっぱアレか？ カツパとブタ？」

「ええ、そう言ってましたよ、後ついでに修行もしてくるから遅くなるとも？ 流石に年単位ではないですが」

「修行とな？」

「政成さんに負けたことが悔しかったみたいです」

「ほづほづ、ってこたあ帰ってきたらリベンジマッチが控えとるわけか？ 残念ながら負けてはやらんがな」

「はあ、それにしても・・・」

「なにさね？」

「今更ですが老師に勝つことが出来るなんて・・・政成さんホントに人間ですか？」

「多分ね、まっバグキャラですから」

「武神をしてる私にしてみれば理不尽以外の何者でもないですよ・・・はあく私ですら子供扱いですし・・・はあく～～～～～～～～」

「あっイカン、落ち込みモードに入った」

妙神山スタート

妙神山にて居候中。

ちなみにハヌマンさんに勝利してやがったりしています。

あと小竜姫の口トを竜姫たじきと呼んでいます

あっちなみに小竜姫さんどら焼きとかまんじゅう(マサ作)で立ち直りました。

軽く餌付けされています。

・ ・ ・

その2

「結局、今日も閑古鳥だったなあ」

「そうですね、全く最近の霊能者は軟弱でいけませんね」

「それに関しては俺はわからんが、来ねえーもんは、しゃーねえわ、つと、じゃ今日も今日とて温泉タイム・・・といきてえところなんだが」

「なんです？ の、覗いたりなんて不埒なまねはしませんよ？」

「いや、正直その言葉もかなり嘘クサイっっちゃ嘘クサイんだが、今週一回やられてるし？」

「あ、あれはたまたま忘れ物を」

「はいはい、まっその時に指導はしたんでそこはもう良いとして、ホントは良くねえーけど」

「だ、大丈夫です今日は我慢しますから今日は!!!」

「明日以降は不透明なんかいつ!!  
って話が進まん、とりあえず聞け」

「な、なんでしょ?」

「問題はアイツだアイツ!!」

『ビシッ!!!』

「えっ・・・アイツって・・・え〜っと、アレは、あっ!! ヒ、  
ヒヤクメ!!」

「そうあのアホの子のヒヤクメだ、あんアホは毎回毎回、眠らせね  
えー限り覗いきにかかりやがる!! 流石にそろそろめんどくさく  
なってきた」

「あ、あの子は・・・」

「つつわけで俺が温泉タイムを満喫してる間、あのアホの子を見張

っといてくれ」

「わかりました」

「うむ、では頼んだぞ竜姫君」

『スタスタスタ』

「ヒャクメー！ー！！」

『チャキ』

「ちよっ、ちよっど待つのおね小竜姫！！ マサナリさんを覗いてる点では小竜姫も同じ穴のムジナなのね」

「今日は我慢してます！！」

「スゴい開き直りなのねっ  
って待つのおね見逃してくれたら小竜姫も一緒に見せてあげるの  
ね」

「……？ どうしてとびとびです？」

「フフフ、ようやく話を聞く気になったのね

小竜姫、私はヒヤクメなのね!!

少しくらい距離が離れていても

例え障害物があったとしても

そんなのこのヒヤクメにはなんの問題もないのね〜!!

「ハッ!! と、ということは

「そういうことなのね〜

というわけで小竜姫、これからも小竜姫は私を見張るといっ役をするのね〜

そしたらノーリスクで見放題!! な〜のね〜

「クツ・・・し、しかし私は政成さんに頼まれ」

「あつ、それじゃ私だけで楽しんでじゃうのね〜

「見ます!! 見ます〜!!

「素直が一番なのね、それじゃあこのゴーグルを右目につけるのね」

「こじつ? ですか?」

「そつそつ、それじゃいぢ」

『ガシッ!!--』

「いざ・・・なんなんだろうなあ？ ヒヤ〜ク〜メ〜、竜姫イイ!  
「!」

『ビクンッ!!--』

「ま、政成さんに?」

「き、聞いて・・・っていうか小竜姫!! 武神なのに背後を取られるまで気付かないなんてなにしてるのね!!」

「そついうヒヤクメだってヒヤクメのクセに!!」

「クツクツク、言い合いするなあ結構だがなあ、その前に少し俺と・・・」

「「い」」「い」」「い」」

「遊ぼうぜ」

『ニタリ』

「「い、イヤー（なのねー）！ー！」」

「最近慣れてきたな右の？」

「何にだ左の？」

「小竜姫さまとヒヤクメさまの叫び声だ」

「そうだな・・・」

毎度お馴染み覗き攻防戦です。

ヒヤクメさん相変わらず残念な子

つられて小竜姫さんまで残念です。

ひっそり鬼門の二人？ 二鬼？ 慣れてきます。



・  
・  
・

その3

「で、ヒヤクメよ？ 今日もまた晩メシ食ってくんか？」

「食べるのね、あつ出来ればデザートはブルーベリーを使ったデザートが良いのね」

「あいよ、じゃ作るべし、か竜姫？」

「・・・・・・・・」

「って聞いてんのか竜姫？」

「聞こえてないのね、さっきのダメージがまだ抜けてないみたいなのね」

「マジかい？ つかオマエはもう復活してんのに何故に竜姫はまだやねん」

「フッフフ、伊達に今までお仕置きはされてきてないのね」

「胸張って言うことちゃんか？ いやしてんの俺だけでも」

「そう思うなら手加減してほしいのね」

「してるつつつに、ガチでやったらヒヤクメの頭あ今ごろ胴体に埋まってるぞ？」

「お、恐ろしいのね！！」

「そう思うならちったら控えろ！！　そしてゆっくり温泉を堪能させろっ！！」

「ヒヤクメにも出来るコトと出来ないコトがあるのね・・・ヒヤクメの悲しいサガなのね・・・」

「微妙にシリアスな空気出して何アホなコト言ってんの？　だからオマエはアホの子と言われるんだ」

「言ってるのはマサナリさんだけなのね！！」

「言ってるのはな、思ってるのは数知れず」

「そこは目を背けていたいのねー！ー！！」

ヒヤクメ、目を背けたいコトでした。

あつヒヤクメさんとマサも結構仲良いっぽいです。

マサ心読まれようが特に気にしないです

ちなみに小竜姫さんは夕食完成後に復活。

・  
・  
・  
・

その4

「っと、そだった、竜姫、ゴレとカトのメシってまだだったよな？」

「剛練武と蝸刀羅守のですか？ ええ、まだですね、今から与えに行きます？」

「おう、腹空かせてんだろし、ほれ、その駄女神、オマエも手伝

え」

「駄女神じゃないのね〜、けぶっ」

「メシを食い散らかしたあげく片付けも手伝わすゴロゴロと横になるヤツは駄女神と言っただよ、おら起きろ」

『ゲシッ』

「け、蹴らないで〜出ちゃうのね〜」

「全くヒヤクメ、だらしないですよ!! それにはしたない」

「小竜姫もマサナリさんも堅いのね〜」

「あのな、俺も小竜姫もオマエの為に言っただぞ? そのうち役立たずとか言われるようになるぞ? つか今現在既に役立たずだけだ」

「それはイヤなのね〜!! 手伝う手伝うのね!!」

「はい、それじゃあヒヤクメは向こうから剛練武用のエサを取ってきて下さい、私と政成さんは蝸刀羅守用のエサを用意しますので」

「わかったのね」

『タツタタ』

「うむうむ、じゃ、ちやちやっと用意しますか」

「はい」

「わきゃー崩れたのねー」

『ドザアアア』

「マサナリさ〜ん、助けてー、なのねー」

「・・・本格的にアカン子やアイツ、しょーんなか、チクツと行ってくるわ」

「はい、もうそのままジャクメを手伝って下さい、多分一人でやらせるとまた同じコトが」

「だろっよ……」

ヒヤクメさん、かなり残念なポジションを担当しています。

ちなみに剛練武君のエサは霊力が籠った砂とか？

蝸刀羅守君は葉っぱかなあ？

かなり曖昧。

とりあえずは以上です。

次回があつたら主役が出る……かも。

・ ・ ・ ・

くもしもワンピース世界だったらく

その1

「ホント、スンマセン、ゲンさん、うちのナミっ子が、ってコラッ、ナミ、オマエ何ふて腐れてんだオマエも頭を下げんかいっ!!」

「ぶ〜〜わかったわよマサ兄〜、ごめんねゲンさん、おわびは、か・ら・だ・で」

『ガスンツ!!』

「ツ〜〜〜!! いったあーい、マサ兄、いたーい!!」

「痛い俺ん頭じゃポケット!! ホント、スンマセン、ゲンさん!!」

「もうええわい、フハハ、しかし、そうして見ると兄弟みたいだわ」

「っすか?」

「ああ、あつ本の代金はワシが払ったから持ってた良い、面白いもんを見せてもらった駄賃だ」

「マジっすか? つか金そこそこあるツスよ? この前、なんかコッチに近付いて来てたギザギザ鼻の海賊漬してゴツソリ賞金貰った

から  
「

「ほう、また退治してくれたのか、助かる」

「いえいえお構い無く」

『クイクイ』

「あん？ ってなんじゃいナニ？」

「いくら？ いくら？」

『キラキラ』

「まあ輝く笑顔とはこのコトね？ つか目がベリーってんぞ？」

「いいから教えてマサ兄！！」

「はいはい、確か二千いかにいくれえーだったか？」



「なんだ〜二千かあ〜ちえっ!〜!」

「露骨に舌打ちすんなっつうの、ったく帰るぞ」

「うん、じゃ〜ね〜ゲンさん」

「ああ、じゃーの、マサ、ナミもつ悪化するんじやないぞ」

「デヘっ」

「笑ってごまかすなっつーのっ!〜!」

『ガスンツ!〜!』

「いたっ!〜!」

はい、という感じでワンピース

ココヤシ、ナミ幼少期スタート。

バツキリ、アロンさんの鼻とベルメールさんの死亡フラグをへし折りました。

アーロンさんにも色々あったとかは考えない方向でっ!!

あっちなみに二千は約二千万ベリーというコトです。

・  
・  
・  
・

その2

「「ただいま」」

「はい、おかえりナミ、マサ」

「おかえりナミ、マサ兄」

「あっノジ」

「今日は家にいたのな？」

「うん、フフ、ナミ、ゲンさんに捕まったんだって？」

「うん、てんちよーに見つかっちゃった」

「バカね〜、私だったら絶対気付かれないわよ」

「むう〜次は上手くやるわよ!!」

「…………ベルメール」

「オーライ」

『ガスンツ!! ガスンツ!!』

「「いったーいっ!!」」

「「やるなこのバカタレがっ!!」」

「「うう〜今日、コレで三回目…………」

「「っせえい、後5〜6発いかれたいか、こんアホタレが」

「いーいーやー!」

「全く、ナミ、あんたなんで本なんて盗もつとしたの？」

「だって欲しい航海書が・・・」

「そんなくられえなら買ってやるつつに、別に悪いモンでも無えーんだし」

「マサ兄、うちの財政じゃ厳しいよ」

「ノジコ、遣り繰り上手なベルメールさんをナメるなよ、そのくらい余裕はあるの、それに・・・ね？ ほら、うちには稼ぎ頭がいるんだから」

「えっ？ マサ兄？」

「そっそっ、この前なんて二千万ベリー近い大物仕留めて来たんだから」

「に、二千万ベリー!!!」

「うむ、まっ大物って程手応えはなかったけど、つかノジコのリアクションはまあ良いとしてなんでナミっ子までそんなリアクションよ?

オマエにはさっき言ったろ?

「二千万って言ったただけだもん!!! っていうかマサ兄、結婚しよう!!!」

「断る!!! つか目がベリーっとなるわナミ!!!」

「マサ兄、愛してる!!!」

「オマエが愛してるのは確実にベリーだろっ!!! オマエもベリーっとなるノジコ!!!」

「おお、モテるね、うちの稼ぎ頭は、そだ、私なんかもどう?」

「いえ結構です」

「つてオイイイ、なんで私だけそんな薄いリアクションなんじゃー  
ー！！！」

「気付け」

「そつだよベルメールさん、ベルメールさんには足りないものがあるよ」

「足りすぎてるものもね」

「お肌のハリかー！！！！  
それとも年かー！！！！」

「どつちもー！！！！」

『プチン！！！！』

「このガキ共ー！！！！  
今日の夕飯のメニューはアンタ達よー！！！！」

「わあ〜ベルメールさんが怒った〜、逃げるわよナニ」

「わかってるノジコ!!」

『タツタタタタ!!』

「待たんかー！ーガキ共！ー！！」

『ズダダダダ』

「ココヤシは今日もとっても平和です」

「ってコラッ、マサ最初に余計なコト言ったのアンタでしょ!!  
謝るか嫁にするか」

「マジ、ホント、スイマセンでした」

「ノータイムで謝られたっ!!」

「プツアハハ、ベルメールさんフラれた」

「残る念!!」

「もうこんならみんな纏めてミカンソースで味付けしてやる」

「――!!」

「おっ、やべっ、俺にも矛先が」

「逃げる逃げる」

「キャハハハ!!」

ココヤシではこんな感じでホームコメディが繰り広げられてるようです。

ちなみに原作合流は例によってマサ、穴落ちで時代をジャンプする感じです。

ゴムな人風に言うなら

不思議穴に落ちたらナニ達がでかくなってた!!

みたいな感じになるかなあ？

っと、とりあえずは以上です。



コチラも次回があったら主役が出る・・・か？

番外編っぽい感じ！その16（後書き）

後書き

今回も大分アレな番外でした。

次回は本編・・・の予定。

か、感想などありましたれば是非！！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3640k/>

---

来る世界（とこ）間違えてね？

2011年10月18日13時01分発行